

はこちん！

輪音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話は、以下のようなモノコトその他より成り立っています。

- ◎ おいしいモノ
- ◎ アラフォーなおっさん提督
- ◎ 北の国
- ◎ 地方都市
- ◎ 奮闘する地方
- ◎ 衰退する首都
- ◎ 庶民的営み

◎ 訳のわからないくらいに多様なネタ

◎ 旧きSF

◎ こわい話

目次

I : おっさんは提督になっちゃいました	1
II : おっさんは元艦娘から推挙され ちゃつていました!	7
III : おっさんは一触即発の空気にさらさ れちゃいました!	16
IV : おっさんは鉄底海峡の生き残りにな つかれちゃいました!	25
V : ローマの七日間	32
VI : おっさんは恋の鞘当てに捲き込まれ ちゃいました!	47
VII : おっさんは戦艦棲姫に投降されちゃ	
いました!	66
VIII : 潜入者	75
IX : 秘密結社	78
X : おっさんはおそろしい駆逐艦に見初 められちゃいました!	84
XI : 鳳翔対間宮! 愛のフレンチト スト作戦!	92
XII : 教官は元提督	102
XIII : 特艦二課	107
XIV : おっさんは元艦娘から誘惑され ちゃいました!	119
XV : おっさんは垂水に出張して元艦娘 たちから熱烈接待されちゃいました!	

XVI : ヘイワカツコカリ	147
XVII : 戦艦になりたい駆逐艦	162
XVIII : 狼たちは執務室に舞う	172
XIX : 北北西に進路を取れ	181
XX : 呉から来た娘たち	192
XXI : フローレンシアの猟犬	202
XXII : 閨的一幕	215
XXIII : おっさんはちよつこしエツちな 作品を作るのに協力しちやいました!	220
XXIV : 決して腐るなきつと花咲く時は 来る	228

XXV : ああつ! 魔王様つ!	246
XXVI : おっさんは姉妹艦のことをあれ これ聞いちやいました!	256
XXVII : 海から来た娘たち	266
XXVIII : 最凶姐さんに気に入られたるは おっさん提督	276
XXIX : おっさん提督はちよつとこわい 話をしちやいました!	281
XXX : 青い青い空	286
XXXI : カレー大戦	297
XXXII : 俺の月はいつもそこにある	309
XXXIII : クロスマカニトテン	316

- XXXIV：風魔八忍衆の劉鵬、風都に推参
 すの巻 ————— 321
 XXXV：出張 ————— 328
 XXXVI：彼らとはとつくの前に乗り換え
 を検討されていた ————— 333
 XXXVII：レンさん記録帖 ————— 349
 XXXVIII：おっさん提督はいつも喧騒に
 包まれちゃっています！ ————— 360
 XXXIX：青い部屋 ————— 377
 XL：岡山三川艦 ————— 383
 XLI：今、そこら辺に沢山ある危機
 392 ————— 398
 XLII：ロシアより愛を込めて ————— 398
 XLIII：お偉いさんと潜入娘 ————— 410
 XLIV：愛される為に、ここにいろ
 416 ————— 416
 XLV：ヲ級改旗艦級、シヨウカクになら
 んとす ————— 424
 XLVI：黒石紅茶 ————— 433
 XLVII：ムカエイツクル ————— 440
 XLVIII：マタンキ ————— 453
 XLIX：ヨウカンヲクレ！ 待っていま
 した！ お菓子艦！ ————— 462
 L：なにそれおっちゃん聞いてへん、はい
 つものこと ————— 471
 LI：斯くて鉄の猟犬は復活する

	L II : 舶来品と嗜好品	483		L X II : 焼きたてをあなたに	570
	L III : クリーム色の肉体と桜色の乳頭	496		L X III : おっさんは怪異と思われてい ちやったりする	576
	L IV : お給金の話	503		L X IV : 提督の消えゆく夜に	580
	L V : 怒りの日	510		L X V : ちちちん!	589
	L VI : 雨のちくもりの駐屯地	519		L X VI : すり切れたメニュー表	605
	L VII : 独りきりにはさせないから	530		L X VII : 潜入任務はいつも上手くないかな	611
	L VIII : まいなた艦隊の挑戦	535		い	
	L IX : 天然と計算	553		L X VIII : 霧とケーキと西の空(前編)	
	L X : 嗤うせえるすまん	559		615	
	L X I : 昔々は今もいる	566		L X IX : 霧とケーキと西の空(中編)	
				622	
				L X X : 提督一種、提督二種	630

L X X I : 霧とケーキと西の空 (後編)

638

L X X II : 胡蝶の園 (前編)

656

L X X III : 胡蝶の園 (中編 I)

668

L X X IV : 胡蝶の園 (中編 II)

676

L X X V : 胡蝶の園 (後編)

684

L X X VI : 染め直し

694

L X X VII : 海に近い花芙華亭

700

L X X VIII : 研究員

708

L X X IX : ハロウィンとホルモン

716

L X X X : 夢見るリアリストたち

724

L X X X I : 愛と憎しみを黒く染めて

731

L X X X II : お茶会

739

L X X X III : 失踪

744

L X X X IV : 副司令とカレー

748

L X X X V : 艦娘たちのクリスマス

754

L X X X VI : L O S T K A N M U S

766

L X X X VII : 埼玉県民、北へ

777

L X X X VIII : 冬のこわい話大会

788

L X X X IX : みつこし!

794

X C : 追いかけられて

802

X C I : おっちゃん提督の大阪出張 (前編)	808	C I : とある地方都市の三年間	929
X C II : おっちゃん提督の大阪出張 (後編)	821	C II : うつし世はゆめ	952
X C III : 気の弱い料理人	857	C III : 見せてもらおうか、村役人Aの性能とやらを!	957
X C IV : 鉄仮面提督の着任	862	C IV : 紅茶と珈琲と石炭	976
X C V : 見込まれた男	873	C V : 執務室改式	985
X C VI : 提督懇親会	884	C VI : 徹底的に追い詰めてやるわ、とその駆逐艦は言った	993
X C VII : 境界の守り手	890	C VII : 震える山 (前編)	999
X C VIII : 夜のひむか亭	897	C VIII : 震える山 (中編)	1010
X C IX : リツちゃんはお嫁さんに転職しました!	905	C IX : 震える山 (後編)	1017
C : チョコレート大戦	913	C X : このうさんくさく、たくましき世界	1027

- C X I : 偽者仮面戦士の小さな幸せ
1031
- C X II : 隣り合わせの灰と漆黒
1037
- C X III : 大佐の来た日
1044
- C X IV : 錨提督と綾波と敷波
1048
- C X V : 知らぬことは幸せの証
1057
- C X VI : 撃て! 清霜!
1064
- C X VII : 炭素製の猿は去れ!
1071
- C X VIII : リテイクから開始される艦娘生
1080
- 活
1080
- C X IX : 気合い! 入れて! カレーを
1087
- 作ります!
1096
- C X X : 白い城の工作艦
1096
- C X X I : 逃走はいつも上手くない
1102
- C X X II : 大和さんたちにも負けません、
と元商船は言った
1106
- C X X III : イタリア料理を堪能しに行こ
う
1114
- C X X IV : はるちゃんと伽哩
1122
- C X X V : 可能性の範疇
1128
- C X X VI : こい、うまかー!
1134
- C X X VII : 春の終わりに秋きたる
1138
- C X X VIII : 殺し尽くして愛し抜く
1147

C X X IX : ありふれた幸せ ——— 1152

C X X X : セクシー 駆逐艦選手権

C X X X I : おんな提督サソリ ——— 1165

C X X X II : 若者よ、若い内に楽しめ

C X X X III : イツワリノチトチヨ

C X X X IV : 白い悪魔 ——— 1195

C X X X V : 愛、聞こえますか?

C X X X VI : ちんちんぬきなつもした

C X L I : ケツコンしていた娘たち

C X L II : 回帰熱 ——— 1269

C X L III : かんとか! ——— 1277

C X L IV : 珈琲は港町の香り ——— 1285

C X L V : 試製機械提督T、その名は魚津

C X X X VII : おっさんミニミニツアー

C X X X VIII : 夜戦と讃岐と青い空

C X X X IX : 脅威と余力とケツコンと

C X L : 山と熊とヘタイロイ ——— 1247

C X L I : ケツコンしていた娘たち

C X L II : 回帰熱 ——— 1269

C X L III : かんとか! ——— 1277

C X L IV : 珈琲は港町の香り ——— 1285

C X L V : 試製機械提督T、その名は魚津

なあ ——— 1210

- 伊井大蛇 ————— 1293
- CXLVI : えらしい戦艦棲姫とおりきら
ん提督、九州へ向かう (前編) ————— 1301
- CXLVII : えらしい戦艦棲姫とおりきら
ん提督、九州へ向かう (後編) ————— 1319
- CXLVIII : 惑乱のセルシウス ————— 1363
- CXLIX : 六つの力をひとつに合わせ！
————— 1373
- CL : 姉畑提督と鉄縞提督 ————— 1382
- CLI : 悩ましきもの、そはケツコンして
いた艦娘たち ————— 1392
- CLII : カレーと巨漢と潜水艦 ————— 1401
- CLIII : ロシユトツクは遠い ————— 1410
- CLIV : みんな、カムムス？ ————— 1423
- CLV : ケツコンしていた艦娘たちの闇
は深い ————— 1438
- CLVI : ハンスとエンマとロシユトツク
————— 1453
- CLVII : 駐屯地と艦娘と初秋の蒼天
————— 1469
- CLVIII : ある初秋の執務室 ————— 1478
- CLIX : ソルシエール ————— 1484
- CLX : オレのアニキ ————— 1493
- CLXI : 暗黒少年丸山 ————— 1502
- CLXII : 曹提督、孫提督、劉提督
————— 1513

- C L X III : 命と愛と万年筆 ————— 1529
 C L X IV : 愛に生きる、ということ 1537
 C L X V : よし、提督辞めよう、と男は
 思った ————— 1541
 C L X VI : 刹那、夢みて ————— 1547
 C L X VII : ハッチーモツチーステーショ
 ン ————— 1552
 C L X VIII : 引きこもり提督はチヨロイン
 級に警戒心無く攻略対象になっちゃった
 りしてもう大変 ————— 1557
 C L X IX : 艦娘乙種 ————— 1576
 C L X X : チャリンコ隊隊長と香取先生
 C L X X I : 宇宙戦争オンライン ————— 1582
 C L X X II : 公王様の料理人 ————— 1600
 C L X X III : ならないか、と引きこもり提
 督は言われていた ————— 1614
 C L X X IV : 異世界から還ってきた男
 1634
 C L X X V : ならちんにシヨタ提督着任
 す ————— 1653
 C L X X VI : シヨタ提督はいつもいつも
 天龍を見詰めている ————— 1673
 C L X X VII : そして、艦娘になってゆく

1700 C L X X V I I I : 上水内基地と黒靴下様
 C L X X I X : 引きこもり提督、北信へ行く
 C L X X X : 男と男
 C L X X X I : 明日に向かって、にほんか
 いった！ (前編)
 C L X X X I I : 明日に向かって、にほんか
 いった！ (後編)
 C L X X X I I I : 止まない雪はないさ、とそ
 の娘は言った
 C L X X X I V : 艦娘は美しく散る

1795 1749 1744 1718

1811 C L X X X V : 俺は芋虫
 C L X X X V I : よくわかんねーよな
 1839 C L X X X V I I : 霞ママの定食屋
 C L X X X V I I I : 愛は赤く燃える炎
 1864 C L X X X I X : 氷点下の青い空の下
 1882 C X C : 七人の夫を持つ航空駆逐艦
 1891 C X C I : クリスマスと白玉と恋の行方
 1906

1817

1847

2012
C C II : 愛妻家と新年会 —————
2023

2019
C C I : 明智藤吉郎元康、魔界転生す —————
1990

1982
C C : 狼と魔の森 —————

1975
C X C IX : 田宮玲子という女 —————

1969
C X C VIII : 被食者と捕食者 —————

1963
C X C VII : 愛妻家 —————

1948
C X C VI : こんたま、襲来 —————

1942
C X C V : 通勤系提督 —————

1923
C X C IV : 花山提督、男道 —————

マアタック! —————

C X C III : 冬のコミケット〜ツイーン霞マ
2030

C C III : カタリナ騎士のヨーム亭
2030

C C IV : カツカレー戦争 —————
2037

C C V : 提督、執務室に散る! —————
2046

C C VI : 一航戦の青い娘の悩みは尽きな
い —————
2059

C C VII : 甘き死の香りよ、来たれ(前編)
2066

C C VIII : 甘き死の香りよ、来たれ(中編)
2081

C C IX : 甘き死の香りよ、来たれ(後編)
2090

C C X : 霞ママとチョコレート —————
2113

2171	CCXVIII	：クロスマカニトテン式	
2162	CCXVII	：大井っち、大いに困惑する	
	CCXVI	：霞ママとしんむす会	21572152
	CCXV	：スチエンカ	2152
2148	CCXIV	：風呂とシャワーと猿股	
2140	CCXIII	：天龍さんと提督候補生	
	CCXII	：野見憲太	21352125
		コンカツコカリ	2125
	CCXI	：或いは、猟奇的結末に至るケツ	

2243	CCXXVIII	：こんにちは、愛しい天龍	
		す	2238
	CCXXVII	：お艦たちもたまには怒りま	
	CCXXVI	：提督研究会	2233
2221	CCXXV	：提督めしコンテスト	
	CCXXIV	：猟犬の行く先	221322002194219021852181
	CCXXIII	：提督の取り込み方	
	CCXXII	：高温高压缶	
	CCXXI	：壊れかけの提督	
	CCXX	：私は名取	
	CCXIX	：いかお	

CCXXIX : 大井つち、更に困惑する

2250

CCXXX : 天地を喰らうサトウルヌス

2255

CCXXXI : レミントンM700

2260

CCXXXII : 艦娘乙種慰労会

2268

CCXXXIII : れんせん!

2275

CCXXXIV : 松輪泊地

2291

CCXXXV : 松輪泊地の艦娘はなかなか揃わない

か揃わない

2303

CCXXXVI : 白い手

2312

CCXXXVII : 鉄底海峡解放戦余話

2338

2319

CCXXXVIII : 戦争は男の顔をしていな

い

2333

CCXXXIX : 忍殺駆逐艦秘砲帖

チン・カモカモに至る道

2339

CCXL : こいほの

2344

CCXLI : なにも知らないことを、みんなは知らない

なは知らない

2351

CCXLII : とある泊地跡地にて

2357

CCXLIII : みりめし試食会

2364

CCXLIV : 福は内

2376

CCXLV : 提督の捕まえ方

2381

CCXLVI : やまとんちゆうニイマルイ
チハチく異星の姫騎士はおっさん提督の
捕虜となる? ————— 2386
CCXLVII : 帰ってきたハッチーモツ
チーステーション ————— 2400
CCXLVIII : 無垢くニイマルマルヨン
2408
CCXLIX : ちよつとエツチな九州悪魔
提督キャンサー風味 ————— 2414
CCL : 光の戦士になりたくて ————— 2426
CCLI : キネマ・ウスケシとマンマユ
ト隊 ————— 2442
CCLII : しあわせは深海棲艦のにおい

—————
CCLIII : 小さなお菓子屋 ————— 2454
CCLIV : ウルトラホーク復活作戦
2472
CCLV : コロスケーノール・フォーティ
ンく提督暗殺計画 ————— 2479
CCLVI : 闘いの波間に泡と消えても
2487
CCLVII : 白桃とマスカット ————— 2496
CCLVIII : なついろこみけつと ————— 2502
CCLIX : その諸島の価値は ————— 2511
2518
CCLX : 愛の花咲く命のように

CC LX I : この一枚を、あなたに

2531

CC LX II : 本気の夏、秋田の夏

2537

CC LX III : 惚れてはならぬ

CC LX IV : 小さな誘惑

12547

CC LX V : 悲しいハートは燃えている

わ
—————
2572

CC LX VI : カンムスもつらいナリ

2598

CC LX VII : キツスは目にして

CC LX VIII : 渡島おもてなし隊

CC LX IX : 貴方といられて、私も少し嬉

26192607

しいわ

CC LXX : 異世界と使い魔

26532635

CC LXX I : 愛を込めて、あなたたちの

敵より

2667

CC LXX II : いとも容易く繰り返される

侵略行為

2678

CC LXX III : フロイライン・ウント・ラ

ンツェンレイターく勝利なき名誉

2688

CC LXX IV : サライメシく北の国から

2699

CC LXX V : 悠久の闇と航空駆逐艦

2710

CCLXXXVI：ネルソン・タッチ

2715

CCLXXVII：横須賀の赤鬼

2722

CCLXXVIII：奈良アニとあかんキネマ

2729

CCLXXXIX：ハロウィンとローマと朝

2734

潮

CCLXXX：最強霞ママ決定戦

2741

CCLXXXI：見合い、その遠き道

2745

CCLXXXII：お歌をうたって通う道

2752

CCLXXXIII：冬期コミケットに於ける小冊子の附録について

2760

CCLXXXIV：清霜戦艦化計画

2765

CCLXXXV：クリスマスの前の日に

2771

CCLXXXVI：なりきりサーキュレ

シヨン

CCLXXXVII：島の提督

2783

CCLXXXVIII：オークは多くを語らな

2787

い

CCLXXXIX：退役式と三万両

2792

- 2859 C C X C VIII : 宵の海に司令官を想い
 C C X C VII : 泊地の大佐
 2840 C C X C VI : 猫のなかのカナリア
 C C X C V : 北の海から
 C C X C IV : 深海棲艦は提督とのケツコ
 C C X C III : 早春のローマ
 C C X C II : 暗黒少年丸山弐
 C C X C I : 厄介な捕虜
 2877 C C X C IX : 山城、その愛
 C C C : 穿いていないのは、いけないと思
 います
 C C C I : 艦娘たちとの接し方
 C C C II : 古鷹と祥鳳と村雨
 C C C III : 叢雲の槍に貫かれたくて
 2908 C C C IV : ラインの悪魔
 C C C V : 赤い浮き輪さんたちはいつも
 白い娘に寄り添っている
 C C C VI : 斟酌と忖度と
 C C C VII : 東京都台東区山谷のトンかつ
 ライス
 2954 C C X C IX : 山城、その愛
 C C C : 穿いていないのは、いけないと思
 います
 C C C I : 艦娘たちとの接し方
 C C C II : 古鷹と祥鳳と村雨
 C C C III : 叢雲の槍に貫かれたくて
 2908 C C C IV : ラインの悪魔
 C C C V : 赤い浮き輪さんたちはいつも
 白い娘に寄り添っている
 C C C VI : 斟酌と忖度と
 C C C VII : 東京都台東区山谷のトンかつ
 ライス
 2954

- 3014 C C C X IV : 殺し屋に、狙われています
- 3008 C C C X III : 白き血にて海を染め
- 3001 C C C X II : ちよつと熱のあつた日
- 2987 C C C X I : おっさん提督、退院す
- 2977 C C C X : おっさん提督、検査入院す
- 2971 C C C IX : マンチエスタータルト
- C C C VIII : 夏の駆逐艦
- 2963

- て
- 3099 C C C X X I : 舟は異なる支流をつたつ
- 3088 C C C X X : ニコラエフ
- 3078
- 3061 C C C X IX : 夜より他に聴くものもなし
- リヒ
- 3050 C C C X VIII : 扶桑姉様と新任提督
- 3040 C C C X VII : ツエアシユテラー・テーク
- C C C X VI : おいしきは幸せのあかし
- 3029 饗宴
- C C C X V : 冬のコミケットと霞たちの

- CCCXXII : 「あら、来たのね。」とその
子は言った 3107
- CCCXXIII : 縞模様の青い制服とアイ
ソワライ 3114
- CCCXXIV : ハルナとアカツキ
3125
- CCCXXV : 提督たちは宇宙世紀の夢
を駆け抜ける 3136
- CCCXXVI : 洗濯板 3145
- CCCXXVII : 異世界から帰ってきた男
3166
- CCCXXVIII : 炎暑の中のコミケットと
とうこうしえんかんたい、かくたたかえ
- CCCXXIX : 生シヤケとニラ玉とフリ
り 3193
- CCCXX : カツセ 3209
- CCCXXI : 南の島のひみつ 3231
- CCCXXII : ウルトラ警務隊・科捜
隊・AMAT展 3265
- CCCXXIII : 赤い服の男 3277
- CCCXXIV : クリスマス決戦と戦う
者の掟 3289
- CCCXXV : インスマス基地と白い
娘たち 3307
- CCCXXVI : 蔭洲升へ行こう
3324

C C C X X V I : ひみつのユリキュア
 ショー ————— 3343
 C C C X X V I I : チルソナイトハチマル
 ハチ ————— 3350
 C C C X X V I I I : 掃海艇あくりようとう
 ————— 3357
 C C C X X V I I I I : 駆逐艦とユリキュアと
 夏のコミックマーケット ————— 3364
 C C C X L : 提督の料理ショー — 3373
 C C C X L I : 黒糖寒天と急行筑紫
 3380
 C C C X L I I : 李さんのお粥 — 3389
 C C C X L I I I : メフィラスと町中華

C C C X L I V : 美しき国家公務員と冬の
 3399
 夜に ————— 3404
 C C C X L V : 雪はそんなに早く溶けな
 い ————— 3417
 C C C X L V I : 虚数駆逐艦内界の紙の月
 に想いを ————— 3424
 C C C X L V I I : ちよつと熱のあつた日
 3437

I : おっさんは提督になっちゃいました!

「問おう。貴方が私のマスターか?」

私の目の前に顕現した美しき少女は、きりつとした表情でそう言った。

眼鏡とカチューシャのみを身に付けた姿。

おっさん童貞には目の毒な光景であつた。

此処は横須賀鎮守府。

その工廠の建造設備。

九基ばかり並ぶ、棺のような艦娘生成器。

その内の三つは他のそれに比べて大きい。

世界の海を跳梁跋扈する深海棲艦を駆逐する艦娘(かんむす)たちの本拠地で、妖精たちに誘われるままに私は初の建造を行ったのだった。

火炎放射器のようなバーナーで生成器の底を炙つたら、とても早く艦娘を産ませることが出来た。魔女の釜みたいだ。

彼女の問いかけだが、そうです、と私は答えた。

おそらく、間違つてはいないだろう。

間違つてはいないと思うのだが、決定的ななにかを誤つた気がしないでもない。

「私は軽巡洋艦の大淀です。貴方の剣となり、楯となりましょう。一生よろしくお願いいたしますね、提督。」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします。」

「それにつけても、お腹が空きました。」

「食堂でなにか食べてから、電車に乗りましょう。」

あれ？

今のはなんだったんだと思つたが、まあ可愛いからいいやと思つた。

実にいい加減だが、それが偽らざる気持ちである。

彼女の台詞は様式美と思われる。

たぶん。

鎮守府の元帥からの訓示は既に終わった。

後は新設された函館鎮守府へ行くだけだ。

途中で大湊（おおみなと）の提督へ挨拶をしよう。

ん？

工廠の隅から複数の声が聞こえる。

「キミ、提督か?」

ツインテールの可愛らしい娘が私に話しかけてきた。

駆逐艦の子かな?

「ええ、先程正式に提督になりました。」

「うちは龍驤。この鎮守府を脱出するための艦隊旗艦で軽空母や。」

えっ?

いきなりとんでもない揉め事に巻き込まれた。

肌も露に、ボロボロの姿の艦娘たち。

一体なにが起きたというのだ?

「大淀さん。」

私が話しかけると、携帯端末を操っていた彼女がニヤリと嗤(わら)う。

「第八会議室を使う許可を二時間得ました。」

「流石ですね。では会議室へ行きましょう。」

「その前に、高速修復材を使わなければなりません。」

「高速修復材?」

「妖精たちが提督の足元に置いたバケツの中身です。」

「どうやって使うのですか？」

「こうです。」

大淀が緑色の液体を勢いよく、深く傷ついた艦娘へぶっつけた。シユウシユウと音を立てながら、損傷が目に見えて癒されゆく。次々に液体を少女たちにぶっかけて、当座の問題は解決された。

有能な大淀と共に会議室へ向かう。

連れ立つは六名の青白い顔の艦娘。

一体、どういうことなのだろうか？

一様に不安に満ちた表情であった。

彼女たちは完全に消耗品扱いを受けながら、それでも生き残った猛者だった。

とある提督と艦隊運用の論争をして論破してしまったため、激務へと追いやられた龍驤。

とある提督を叱咤激励していたつもりが逆効果になり、彼の逆鱗に触れてしまったために激務へと追いやられた駆逐艦の叢雲。

とある提督の性的嫌がらせを諫めていたら、鬱陶しく思われて激務へと追いやられた

駆逐艦の曙。

仲間たちを思いやるが故にとある提督の行為が許せなくて意見具申したら、逆ギレされて激務へと追いやられた駆逐艦の霞。

とある提督からの度重なるお誘いを拒んだために、激務へと追いやられた軽巡洋艦の龍田。

とある提督の指揮能力に疑いを持って指摘したために、激務へと追いやられた重巡洋艦の足柄。

「そのとある提督って……もしかして同じ人ですか？」

「気まずそうにする艦娘たち。」

「うーん、確定だな、これは。」

「提督。」

「なんですか、大淀さん？」

「さっそ行つて、パツと殺つてきましようか？」

「昼飯の話をするみたいにおそろしいことを当たり前言うのはやめて下さい。」

「大丈夫です。証拠は残しませんから。」

「殺人は駄目です。」

「致し方ありません。では書類を少々改竄してきますので、少々お待ちください。」

委員長系美少女が、勢いよく走り出した。

……改竄ってなんだよ。

まだ時間があつたので、目の前の艦娘たちと親睦を結ぶべく会話を試みた。

途切れ途切れのぎこちないやり取りが延々と続いてお互いに少々気まぎらくなつた頃、大淀が戻ってきた。

女の子と付き合つたことのないおっさんには、これが限度ナリヨ。

今はこれで精一杯。

大淀が上手く立ち振る舞つて、例の艦娘たちは無事に函館鎮守府へ転属と相成つた。その陰でとある提督が閑職へと追いやられたようだが、まあ、我々には関係ないな。さて。

私たちの海へ行こう。

戦いの海へ行こう。

その前に馴染みの小料理屋で食事をしよう。

彼女の逸品料理を皆に味わってもらいたい。

きつと彼女も喜んでくれるに違いないから。

II：おっさんは元艦娘から推挙されちゃっていました！

風都、函館。

私は四〇代にして、新設された道南最大都市の鎮守府を任されるようになった。

鎮守府で人型戦闘妖精の艦娘（かんむす）を指揮せねばならぬのだと言われた。

ちなみに任官拒否権はない。

軍事素人の文系おっさんが、軍属とはいえ少佐に任じられたのには理由がある。

突如として現れた深海棲艦と呼ばれる海の魔物の攻勢が一段落した今日この頃、各地

方自治体は大本営へ鎮守府の創設を陳情した。

政府に陳情してものりくらりとするばかりなので、実現しそうな方に訴えたのだ。

大本営は全国各地の鎮守府を統括する組織であり、その建物は神奈川県横須賀鎮守

府の敷地内にある。

ちなみに横須賀・呉・佐世保・舞鶴のいわゆる四大鎮守府にはそれぞれ提督が何人も

存在し、いずれも数多の艦娘を抱えていた。

戦いは数だよ、兄貴。

艦娘（かんむす）と呼ばれる美しき戦闘妖精は死の海を滑走する戦乙女であり、今で

はアイドル的な存在でもあった。

中でも、那珂（なか）と呼ばれる軽巡洋艦の人気は絶大で、私でも知っていたくらいだ。

街で彼女の曲を聞かない日の方が少ないであろう。

彼女が最も一般認知度の高い艦娘ではなからうか？

魑魅魍魎蠢く伏魔殿の芸能界という腐海で奮戦する彼女もまた、一流の戦士なのだろう。

突如として現れた深海棲艦の攻撃によって外国から輸入が途絶えた日本経済は無茶苦茶な状況に陥り、一時期は悲惨な話が絶えなかった。

世界的にも崩壊した国家は二、三に留まらないらしい。

詳細は不明だが、錯綜した情報ならば日々ネットで更新されている。

自衛隊と在日米軍の奮闘の結果として深海棲艦の初期的脅威は多少減少したが、決定的な戦果は得られなかった。

其処へ颯爽と現れたのが艦娘たちだ。

戦時中の戦闘艦艇の魂を持った戦士。

艦装と呼ばれる武装で敵を薙ぎ払う。

そして、彼女たちは指揮官を求めた。

艦娘の存在意義を高めるための存在。

此処に『提督』が誕生したのだった。

しかも提督を選ぶのはあくまで艦娘。

相性の問題があるらしくて、強制された提督の元では、艦娘たちはろくに戦果を上げられなかった。

彼女たちが選んだ提督の元では多大な貢献をるところから、現在に至るも提督を選ぶのは艦娘だ。

求めよ、さらば与えられん。

自衛隊の協力を得て大本営と鎮守府は建設され、今も共同作戦を行うことがある。

在日米軍の大半はキスカ島とアラスカを経由して祖国に戻ろうとしたようだが、連絡が途絶したために生存は絶望的と思われる。

随伴した勇敢な艦娘たちも同様だ。

探索に赴いた艦娘たちが見つけたのは、船舶の部品や海面に浮いた油や細々としたものなどだった。

残りの在日米軍とは祖国と連絡が付くまでの一時的措置として、日本と共闘する仮条

約が結ばれた。

隠蔽大好き日本人のお偉いさんたちが私利私欲のためにとある鎮守府の艦娘たちを使い潰そうとした時、勇気ある艦娘がその事実をすっぱ抜いた。

それを成したのは、重巡洋艦の青葉だ。

彼女の取材記者魂が、暗黒企業体質的組織の思惑を見事に粉碎した。

その後、日本各地の鎮守府は健全経営を目指すようになり、地域社会との関わりを持つようになった。

提督たちと艦娘たちは秘匿よりも協調を選んだのである。

勿論、守秘義務は必須条件だし、ハニートラップにも充分留意しなくてはならない。

こうした点で先進的なのが青森県の大湊（おおみなと）であり、一昨年前に大湊警備府から大湊鎮守府に名称変更した。

青森県側からの要請があつたためだ。

青森県人は一旦燃えると非常に熱い。

その熱さで彼らは艦娘たちと交流を深め、現在最も艦娘が活動している都道府県になつていた。

一般人と結婚した艦娘もちらほらいる。

東北地方を統括する大湊鎮守府は地域経済の活性化を大幅に果たし、現在大湊は東北有数の都市になっていた。

その大湊鎮守府に新設鎮守府の件で打診したのが北海道の大泉知事で、函館小樽稚内釧路の四都市に鎮守府を設ける構想を持ちかけた。

北海道の行動に先述の四大鎮守府は不快感を示したが、では管理運営をきちんと出来るのですかと大湊鎮守府の提督に突っ込まれてきちんと解答出来ず、またそれは大湊所屬の青葉によって公表され、四大鎮守府は大いに面目を失った。

実際、東北全県をまとめあげて経済の梃子入れに邁進する大湊鎮守府の発言力は大きく、最近国交回復中の台湾にまで駐留艦隊を派遣する手腕はもはや政治家である。

駆逐艦の雪風や正規空母の瑞鶴などを有能な副官と共に送ったのだから、実に太っ腹だ。

現地での彼女たちは絶大な人気を誇るアイドルであり、地元民からとても愛されている。

そんな状況で、私は住み慣れた横浜の綱島から試される大地へと引っ越すことになっ

た。

政治的理由で設立される函館鎮守府の管理人になるためだ。

ある日いきなり、大本営からの迎えが来て提督になって欲しいと要請され、程なくして千葉県茂原市にある養成所へと送り込まれた。

外出時には必ず艦娘が付き、朝九時から出掛けることが出来て夕方の五時までに戻ってくるのが義務づけられていた。

その割にはスカスカなところもあり、お役所感覚が窺えた。

下手なことを言って首を絞めることになるのは誰しも厭だったから、二〇名近い訓練生全員で結託したことは何度もある。

訓練の合間を縫って、休日に国立歴史民俗博物館や千葉県立美術館や東京の国立西洋美術館などへも訪れたりした。

東京への往還は時間的にギリギリだったので綱渡りではあったが、それもまたよい思い出になってゆくと思う。

教官として厳しい重巡洋艦の妙高や正規空母の加賀や戦艦の長門が街中では意外と可愛らしかったりして、艦娘も女の子なんだなあと実感した。

職業訓練校みたいな教育機関で半年に渡る講習を受けた私は、どうにかこうにか提督としての基礎を身に付けた。

大本営へ訓示を受けに行った際に隣の横須賀鎮守府の工廠で生まれたての大淀からマスター……じゃなく提督として認識された。

大淀は軽巡洋艦の艦装をまとう艦娘で、高い艦隊指揮能力と判断力と事務能力に長けていることから各鎮守府に一名はいるようにされている。

欠点は彼女の艦装が特注品で稀少なため、艦娘としての本領を發揮出来る機会が少ないことである。

艦娘が数名しかない鎮守府だと大淀自体がいないこともあるそうだ。

鎮守府と書いて張りぼてって読むんだぜ、と小さな鎮守府へ着任する予定の同期は皮肉っぽく笑った。

私は幸運なのだと思う。

そして、私の行きつけである小料理屋の女将さんが軽空母の鳳翔だと知って驚いた。彼女が私を提督として推薦したという。

退役して日常生活を送っていた彼女は私を見て以来、艦娘としての本能が疼いたそう
だ。

提督就任記念としての小料理屋での食事は賑やかなものになった。

最初はぎこちなかった面々も時間が経つにつれて、会話がそれなりに進んだ。

酔っぱらった軽巡洋艦や重巡洋艦が脱ぎ出したので、後始末も大変であった。

目覚めた時に隣で鳳翔や軽空母の龍驤が寝ていたのは偶然だろう。

こんな私がモテる筈ないし。

勘違いをしてはならないぞ。

それから手は出していない。

アラフォー且つ童貞のおっさんは紳士なのだから。

腕を組まれていたために身動き出来なかつたしな。

だがしかしばってん、彼女たちが魅力的でムラムラしたのは事実だ。

そこを制御出来ない提督は早々に自滅するのだと、改めて実感した。

腹の上で眠る駆逐艦の曙が可愛い寝顔だったが、起床後大変だった。

今後は雑魚寝しないように注意しよう。

娘つ子にしか見えない艦娘たちと共に、現在一日二往復の東北新幹線に乗って新青森へと向かった。

そこから奥羽本線、青い森鉄道、はまなすベイライン大湊線を利用して大湊鎮守府へ挨拶に行った。

大湊の駅舎は巨大な複合型商業施設になっていて、旨い林檎ジュースや海軍コロツケ

も堪能出来た。

鎮守府で交流会を行って一泊した後、函館まで艦娘たちに送ってもらおう。

函館に到着後、皆で駅前百貨店の棒二森屋近くにあるラツキーピエロにてチャイニーズチキンバーガーセットを食べた。

その後、石川啄木の像がある海沿いに建設された鎮守府へ到着した。

これから、鎮守府の提督として艦娘たちを指揮しなくてはならない。

私に出来るだろうか？

いや。

やらねばならぬのだ。

陸奥八仙の特別純米酒を艦娘たちと呑みながら、私はウルトラの星に誓った。

翌朝、またまた雑魚寝になって腹の上にいる駆逐艦の霞がしがみついて離れなかったために身動き出来なくて色々大変だった。

Ⅲ：おっさんは一触即発の空気にさらされちゃいました

！

函館の朝。

今日はあまり風が強くない。

すつきり晴れて行楽日和だ。

少し冷えるが、やはり春だ。

まあ、私は一応提督なので書類仕事をしなくてはならない。

嗚呼、トラピスト修道院近くの売店で特製ソフトクリームを食べたい。

今日は大淀が大本営でちよっこし画策調略謀略暗躍してくるって意気揚々と出かけているので、孤独の作業をやらなくてはならない。

お昼はカレーでも作ろうかな？

カレー饅頭もいいな。

カレーはまだまだ供給が安定しきっていないし高価だが、みんなに振る舞うことはよいことだろう。

執務室に入ると、駆逐艦の霞がいた。

「やっと来たわね、インスタント司令官。さあ、仕事をするわよ。」

「あれ？ どうしてここにいるの？」

「今日は大淀さんがいないんですよ。いつも甘やかされているあんたがきちんと仕事出来ているか心配だから、ちよつと見に来ただけよ。」

「ありがとう。」

「礼を言うくらいなら、さつさと手を動かさないさい。」

「了解しました。」

「ふざけるくらいなら、余裕があるってことね。やるわよ。」

二人で書類仕事をしていたら、新しい子がやって来た。

「なによ、即席提督。あんた、霞をこき使うなんて度胸があるわね。」

「曙さん、人聞きの悪いことを言わないでください。彼女は自発的に手伝ってくれてるんです。」

「ふん、どうだか。エッチな脅迫でもしたんじゃない？」

「勝手なことを言わないでよ。私はインスタント司令官の言う通り、自発的にここにいろ。用がないなら帰って。」

「あら、そう。お邪魔したわね。どうぞお楽しみになって。」

「なにをお楽しみにするのよ?」

「だって、霞が自発的に即席提督の手伝いをするなんて、惚れたとしか考えられないでしょ?」

「は? なに言ってるの? こんなしけたおっさんにときめく訳ないじゃない。目が腐ってるの? あんたこそ、どうなの? 曙といえば、司令官を罵倒するので有名な駆逐艦じゃない。それが朝早くから執務室に来るなんて、普通じゃ考えにくいわ。あんたがこいつを好きになっちゃったから、わざわざ執務室に来たんじゃないの?」

「はあつ? 頭の中が少女漫画で汚染されているんじゃない?」

一触即発の雰囲気。

不味い!

「二人とも喧嘩はよくないよ。」

「なに学校の先生みたいなこと言ってるのよ。インスタント司令官は黙っていなさい。罵倒駆逐艦の口を閉じさせるのが先決よ。」

「言うじゃないの。以前は提督をクズ呼ばわりしていた駆逐艦が、ここでは一言もそんな表現を使わないじゃない。愛って偉大よね。」

「黙りなさい。少なくとも、私はこいつの手伝いをしている。鎮守府のことを考えているが故の行動よ。なにも不自然な点はないわ。」

「確かに一見そうだけだわ。だけどね。大淀さんは普段提督をちやほやしていて隙がないし、彼女がいない時は鳳翔さんがぴったりくつついている。龍田さんも何気に傍にいるし、足柄さんはすぐ脱いじやうし、越えるべき壁は高いわ。」

「だから、正妻戦争には興味なんてないわ。私は私に出来る仕事をするだけよ。」

「龍驤さんがね、こないだ戦果を上げた時に褒めて褒めて、って言って即席提督に抱きついてたの。どう思う？」

「とても……もやもやします。……ってなに言わせんのよ！ あんたこそ知ってるの？ 叢雲なんてね、インスタント司令官を携帯端末で撮影してその画像を見ながらニヤニヤしていたのよ。あのツンデレ様がよ。」

「あの……そろそろやめた方がいいよ。」

「即席提督は黙ってて！」

「インスタント司令官は口出ししないで！」

「……あんたたち、なにしているの？」

地の底から響くような声。

ハツとして扉の方を向く二名の駆逐艦。

そこには珈琲の用意をした叢雲が立っていた。だから言つたのに。

固まる二名を無視し、叢雲は私の目の前にマグカップを置いて耐熱性硝子製器具から珈琲を注いだ。

独特の芳香が室内に広がる。

スマトラかな？

そして振り向かずに言つた。

「あなたたちの声は廊下にまで響いていたわ。もし来客があつたり、演習相手が来ていたりしていたら一体どう思ふかしら？」

黙りこくる二名。

「頭を冷やしてきなさい。執務室も戦場のひとつよ。騒ぐための場所じゃないわ。ましてや他人の噂話をする場所でもない。」

口を開こうとする二名。

くるつと振り向く叢雲。

「酸素魚雷を喰らいたい？」

午前中は叢雲と過ごした。

彼女はテキパキと書類を片付けてゆく。

「叢雲さん。」

「なに？」

「あの子たちは悪い子じゃないんです。」

「知っているわ。同じ鎮守府にいたんですもの。」

「私を助けようとしてくれただけなんですよ、彼女たちは。」

「それも知っているわ。提督の不甲斐ないのがそもそもの原因ね。」

「精進します。」

「大体、大淀さんが提督を甘やかすのがよくないのよね。」

「彼女も悪くないんです。ただ……。」

「おっさんの癖に母性本能をくすぐるからよくないのよ。」

「えっ？」

「女たらしね。」

「いやいや、それはないです。私はこの歳まで女の子と付き合ったことすらありませんし、未だに童貞です。女たらしだなんてあり得ません。」

「そうね、考えてみると、女たらしじゃないわね。」

「そうですよ。」

「艦娘たらしだわ。」

「えっ？」

お昼にカレーを作ったら、思った以上に好評を得た。

道産の豚肉や馬鈴薯や玉葱もよい仕事をしてくれた。

足柄がイカメンチコロツケを揚げてくれたのと鳳翔がサラダを作ってくれたので、食卓の彩りはとてもよかった。

二名の気合がやたらに入っているように見えたが、気の所為だなきつと。

なんであんなに試食を勧めたんだろう？

翌日、駆逐艦三名が黙々と仕事を手伝ってくれたので作業がかなり捗った。チリチリする空気がちよつとこわい。

途中で軽空母や軽巡洋艦や重巡洋艦が様子を見に来て、すぐ去っていった。

おやつにプリンを作ったら喜ばれた。

修羅場にならなかったのよかった。

それは三日後、大淀が戻ってくるまで続いた。

彼女は、本来一緒に配属される予定だった駆逐艦の吹雪を連れていた。

「よろしくお願ひしますね、司令官。」

元氣そうに、彼女はそう言った。

地方都市の元氣な女子中学生という感じの素朴な娘だ。

私がカレーを作った話を聞き、二名は過剰とも思えるくらいに反応した。

取つて置きのカレー粉をはたいて、夕食としてまたもやカレーを作った。

かなり沢山作つた筈なのだが、それは次の朝で全滅した。

二回は食べたかったが、彼女たちの笑顔の方が大切だな。

プリンを作つたのもバレて、ちゃつちやと作つた。

買った方が早いんじゃないかなあ、と思いつつ大淀と吹雪の笑顔に癒される。

それを見た鳳翔や龍驤や足柄や龍田にもプリンを要求され、結局沢山作つた。

鳳翔の作つたプリンの方が旨いと思うんだけどな。

うちの艦娘全員が喜んで食べてくれるのは純粹に嬉しい。

「悪くないわね。これだったらまた作つてもいいわよ、即席提督。」

「インスタント司令官にこんな特技があるとは思ひもしなかつたわ。また食べてもいいわよ。」

「原料がいいから、食べられる味になっているのよね。また作りなさい。食べてあげるわ。」

「マスター……じゃなくて、提督お手製のプリンはおいしいですね。気分が高揚します。」

「プリンです！ プリンです！ 初めて食べますがおいしいですよ！」

「提督も隅に置けませんね。ふふふ。私も頑張らなくっちゃ。」

「キミ、なかなかやるやないか。今度作り方を教えてな。」

「みなぎってきたわ！ ねえ、提督、もつとないの？」

「提督さんはいつでもお嫁さんになれるわね。天龍ちゃんや第六駆逐隊の子たちも喜びそうな味だわ。」

あどけない顔の吹雪の別の顔を知るのは、後程のことだった。

IV：おっさんは鉄底海峡の生き残りになつかれちゃいました！

「俺は量産型島風だ。中身はおっさんだが、よろしく頼むぜ。ちなみに何故か両性具有だ。まあ、襲ったりはしないから気にしないでくれ。」

最速艦娘として名高い島風の量産型が函館鎮守府に着任した。パンツが露出していなくて、代わりにスパッツを穿いている。

一時期、大本営は希望する男性を艦娘に作り替えて運用していた。

あくまで志願者という点が巧妙だ。

深海棲艦によって日本経済が崩壊し、それによって街に溢れた浪人衆へ刀槍及び鎧兜を与えた訳だ。

最盛期は数千名いたらしいが、一万名以上はいたと証言する関係者も何人かいて事実には五里霧中だ。

量産型艦娘は主に南方の激戦地に送られ、その殆どが初戦で海の藻屑になったとか。

「まともに銃火器を使ったことのない奴が艤装を背負って戦場へ行くんだ。緊張したま

ま一発も撃てないで火だるまになった奴も、一人二人じゃない。運よく初戦を生き延びられても、次の出撃で敵さんから直撃を喰らって即轟沈って奴も少なくなかった。」

「簡易生産型の俺たちは轟沈率がかなり高くてな。朝会話をした奴と夕方には会えなくなるなんてザラだった。おっさん艦娘の九割以上が着任して一カ月以内に轟沈していたよ。」

「俺たちおっさん艦娘を最前線で使い捨てにしながら強引に海域突破した鎮守府もあつたそうだが、まあ、そんな戦術しか出来ない提督に付いてゆこうとする艦娘はいないわな。華やかな成果を出しながら、行方不明になったり戦死したりする提督も当時はけっこういたよ。行き過ぎた効率主義ってやつかな。」

「生粋の艦娘とおっさん艦娘の違いは、素材の差とか魂の強度差とか言われていたな。『融合化現象』で、おっさん艦娘も一週間経てば大抵女らしくなった。俺は例外だが。重巡洋艦の最上（もがみ）も俺同様に両性具有だったが、建造された時から女らしかったし、あつちの龍驤は建造された当時はえらく尖っていたが段々女になっていった。隼鷹（じゅんよう）もいつの間にかおっさん女化していた。あいつが下着に凝りだした時は本気で驚いたよ。」

「一年以上もおっさん艦娘をやっていた、重巡洋艦の青葉には随分世話になった。あいつから、自我の強さと相性のよさで艦娘化の融合状況が変わると教えてもらったし、

一旦艦娘化したおっさんは二度と人に戻れないことも教えてもらった。大本営なんて嘘ばっかし言ううべてん師集団だ。」

「青葉は所属する鎮守府の提督とケツコンカツコカリをしていた。指輪を愛おしく撫でる姿は見た目相応の娘にしか見えなかった。」

攻撃力は生粋の艦娘とほぼ同等に出来たものの、本来の作り方とは全然違うために防御力や耐久性や生命力は著しく低い者が大半なのがおっさん艦娘だった。

南方の提督たちは捨て艦戦法に多く用いたらしい。

エルガイムに対するディザードみたいなものかな？

或いはガンダムに対するジムか？

最近大本営が刷新されたのでこのように非人道的な所業は為されなくなったが、それで死んだ者が浮かばれる訳でもない。

何名生き残っているのだろうか？

金髪碧眼の美少女がすらりとした長い脚を組んで、憂い顔を見せる。

それだけで絵になる姿であるが、私を見つめる目に違和感を覚えた。

誰かに似ているのだろうか？

それとも……。

「何名生き残っているのですか？」

「俺の知る限りでは、俺と隼鷹と青葉と龍驤と最上くらいだな。もう数名いるようだが、よくわからん。隼鷹と最上は小樽に着任したよ。」

軽空母の隼鷹と重巡洋艦の最上か。

名前だけなら精強の艦娘みたいだ。

いや。

あの鉄底海峡を生き残れたのなら、間違いなく強者だろう。

生き残った者こそ最強なのだから。

「あいつらは今じゃすっかり身も心も女になっている。その方が幸せなんだろうな。」

「人それぞれでしょうね。」

「無難な答え方をする奴だな。」

「気に入りませんか？」

「いや、それでいい。」

「安心しました。」

「ところで部屋割や入浴などはどうする？」

体は女だが、心は男だ。嫌がる者もいるだ

ろう。」

「そうですね、その辺りはみなで話し合ひましょう。」

「深海棲艦ともそういうことが出来たらいいのにな。」

「まったくです。」

話し合ひは一時紛糾したが、私と同室で着替えも入浴も一緒にしようかと言つたらあつさり妥協した。

元々浴場は混浴仕様提督限定らしい。

基準がよくわからない。

私が無害そうに見えるおっさんだからだろうか？

近海の哨戒任務に島風を曙たちと出したら、皆大変興奮しながら帰投した。

深海棲艦相手に島風が鬼神の如く暴れたらしい。

「魚雷を蹴っていました！ あんなの初めて見ました！」

「最速を謳われるだけはあるわね。敵が一方的に攪乱されていたわ。」

「魚雷の撃ち方は流石だったわ。無駄な発射が一発もなかった。」

「魚雷を手にとってね、ニヤリとしながら相手の艦装の間にこう突つ込むの！ そしてパンパン、って連装砲ちゃんが発砲してドカンでなるの！」

「近づいて撃つのは基本だけど、あんなに近接してぶっぱなせるなんて相当度胸がある

わね。無駄弾が一発もないっておそろしい腕前よ。」

「格闘術も大したものね。回し蹴りでけたぐり倒した相手に、数発撃つてとどめを刺す。なかなか出来ないわ。」

「後ろに目でもあるんじゃないか？」

「血管に機械油が流れているとか？」

深夜の浴場。

私は隣の島風に話しかける。

「なあ、島風。」

「どうした、提督。」

「何故腕を絡めてくるんだ？」

「気にしないでくれ。ただのスキンシップだ。」

「なあ、島風。」

「どうした、提督。」

「何故そんなにそこがフルパワー状態なんだ？」

「気にしないでくれ。ただの生理現象だから。」

「なあ、島風。」

「どうした、提督。」

「何故そんなに密着する？」

「気にしないでくれ。人さみしいだけだから。」

添い寝させて欲しいと言われて流石にそれは断ったが、寝室に入ると何故か龍田が寝ていた。

仕方がないので執務室に隣接する仮眠室で寝たら、翌朝大淀が隣で寝ていた。

みんなフリーダムだな。

ちゃんと、自分の部屋で寝なきやダメじゃないか。

朝礼で注意したら、盛大なブーイングを喰らった。

何故だ？

V：ローマの七日間

私の名はローマ。

艦娘のローマ。

誇り高きイタリアの戦艦の魂を持つ艦娘。

日本生まれの伊太利亜艦。

横須賀で建造された艦娘。

なんちやつて伊太利亜艦。

一体、なんの悪い冗談だろうか。

私の知るイタリアは昔のセカイ。

それでも魂はイタリアを求める。

日本人は欧州かぶれが多いとの理由で、私は親善大使的な立ち位置を求められた。

勝手だ。

私の意向は一切無視されている。

日本人はイタリア人というと陽気な人種を連想するらしいが、それも勝手だ。

それが当たり前だと錯覚している。

イタリアは北部と南部で考え方も気質もずいぶん異なるのに。みんな、なにもわかっていない。

私の愛するイタリアのことも。

私という艦娘のことも。

なにもかも。

歪な感情が迷走する中、私はため息を吐く。

火力にすぐれていようと、艦娘の生息可能圏は極めて小さい。出来ることがあまりにも少な過ぎて、私は悲しみさえ覚える。

ハコダテの鎮守府へ研修に行くことになった。

ホツカイドウに築かれた鎮守府の中では一番大きいので、合同研修を行って交流を深めさせる目的もあるようだ。

あまりものの艦娘や解体待ちの艦娘や問題児の艦娘などから成る、寄せ集めの張りばて艦隊。

ホツカイドウに築かれる鎮守府の、それこそ偽らざる真実だ。

なんとなく小賢しく感じるのは、私が皮肉屋だからだろうか？

ここで一週間過ごし、オタルの鎮守府へ正式に所属するのだ。

オタルの提督はロシア人らしい。

まあ、どの国民であつても指揮が確かならばそれでいいわ。

舞鶴第三鎮守府にいる同姿艦の私は愛想がよくてその提督とケツコンカツコカリ

をしているというけれども、最初はなんの冗談かと思つた。

戦艦のリットリオならまだわかる。

あの子は世渡りが上手なのだから。

私は私自身が嫌いだ。

こんな私が大嫌いだ。

ハコダテは天気が変わりやすいという。

気象庁が最も予測しにくい地域といわれる。

今日はやたらに風が強い。

嵐ではないが強風である。

提督は四〇代のぱつとしない風采の男で、ヘラヘラと笑つていた。

日本人特有の愛想笑い。

顔の見えない薄ら笑い。

この世を泳ぐための処世術。

この提督はつまらない。

軍属だからか、キビキビしたところがない。

こんな男でさえ提督になれるのだから、日本の鎮守府の水準が窺い知れる。

ミケランジェロにフィレンツェの防衛を任せるよりタチが悪い。

一週間とはいえ、このような男の指揮を仰がねばならないとは。

ローマのカエサルや大スキピオを少しくらいは学ばばいいのに。

初日。

なにを考えたのか、提督は貸し切りのバスで函館観光を行った。

私以外の艦娘には概ね好評で、提督の言い訳によると、自分自身の守る地を知って欲しいとのことだ。

それは当たり前のことだろう。

人の営みを取り返すのが私たちの仕事なのだから。

早朝からハコダテに隣接するホクト市にあるトラピスト修道院へ向かう。事前連絡していたお陰で、私たちは修道院の中を見学することが出来た。静謐な空間。

数少ない欧州の本格的なおいを感じさせる場所。

提督は私のためにここへ来た？

……考えすぎね。

見学に集中しよう。

修道院の歴史を聞き感心する。

修道士たちは神に仕える存在。

では。

私たちは一体全体なんなの？

人の形をした私たちはなにに仕える存在なの？

提督か？

軍隊か？

それとも……。

矛盾を感じる。

無邪気に話しかけてくる駆逐艦たちに苦笑した。

駆逐艦のアカツキがキラキラした瞳で私を見る。

純粹な瞳が眩しすぎる。

彼女たちのようになれたらいいのに。

……無理ね。

しかし、途中でローマ街道が私たちを待ち受けていたのには正直驚いた。

日本人なりの冗談なのだろうか？

修道院近くの売店にて買って食べた、特製ソフトクリームは実においしかった。

ハコダテに戻り、五稜郭へ行く。

日本初の星形要塞。

未完成で戦いの火を浴びた城塞。

完成する前に実戦に晒された城。

支城の四稜郭も完成間に合わず。

不十分なまま戦争になった場所。

私たちにしても他人事ではない。

日本の旧勢力と新勢力が最終決戦を行った場所。

旧き者たちの終焉の地。

戦場跡。

何故か私はこの要塞と自分自身と重ね合わせた。
そして。

ハコダテタワー内で飲んだ山川牛乳がおいしかった。

大沼公園はなかなか見応えのある場所で、確かに雰囲気がいよい。

昼食は公園内の食堂。

イカメンチやハンバーグの入った、簡単なランチ。

悪くないわ。

食後に食べた大沼だんごと山川牛乳の組み合わせは素晴らしく、素朴なそれは私を大いに楽しませた。

自然の美しさに感嘆する。

夜、函館山にケーブルカーで登った。

世界三大夜景のひとつを見るためだ。

それはポツリポツリと輝く人の営み。

提督によると、最近灯りが増えつつあるのだという。

まばらな灯りが人の営みを示す。

それを守るのが、私たち艦娘だ。

輝きが街を覆った時が平和の証。

提督は照れくさそうに、帰りの車内で思いを語った。

少しくらいは評価しよう。

まあまあつてとこね。

二日目からは朝六時から夜九時までみっしりと座学に実習。

三名の教官が大本営から来てくれて、私たちに教育を施してくれる。

歴戦たる戦艦のナガト、正規空母のカガ、重巡洋艦のミヨウコウだ。

提督の個人的な人脈だというが、本当であろうか？

疑う。

だが。

彼らの間に漂う雰囲気は、それが本当だと告げる。

親密な空気。

少し苛つく。

何故かしら？

火器管制、制空権、雷撃などを丹念に教えて貰う。
あの男も少しはやるようだから、評価しておこう。

三日目からは演習場での模擬戦闘が始まった。

よし！

火力を正面のナガトに指向する！

撃て！ 撃て！

ちいっ！

痛いじゃない！

……覚えていなさいよ。

マミーヤ。

それは素晴らしき給糧艦。

カツポギという伝統的な日本の衣裳を着ておいしい料理を作る艦娘。

沢山の艦娘の胃袋を満たすために大本営から送られてきた、料理上手。彼女の作るラザニアやグラタンもなかなかおいしいが、本領は和食だ。

日本文化を舌で味わう。

肉じゃががおいしいわ。

この揚げ物もおいしい。

コロツケという食べ物元々フランス料理の付け合わせだったそうさ。

酪農が盛んなホツカイドウの地の利を活かした、チーズをたっぷり載せたピッツアをいただく。

ヴァ・ベーネ!

素晴らしいわ!

マミーヤと親しげな提督を見て、ちよつと苛つく。

ん?

何故?

変ね。

二人は焦げ茶色の塊についてなにか談義していた。

疑問に思ったので質問してみる。

「それはなにかしら、提督?」

「これは奈良漬けですよ、ローマさん。」

「こっちは西瓜、そっちは胡瓜です。面白いでしょう?」

にこやかなマミーヤ。

眩しすぎる笑顔。

まるでマンマだ。

「そもそも国内にて伝統的な奈良漬けを作るお店は一軒だけだったんですが、国外で作らせていたところは深海棲艦の侵攻によって軒並み事業転換しました。」

へえ。

食文化の維持も大変ね。

試食を勧められ、食べてみる。

辛い。

そして拵がる、深みのある味。

悪くないわ。

「葡萄酒にも合いそうですね。」

「トリエステのものが欲しいわ、提督。」

「それはちよつと難しいですが、この函館の地元醸造所で醸された葡萄酒ならありますよ。」

「仕方ないわね。それで妥協するわ。」

葡萄酒を呑む時にチンチン、と言ったらみな赤い顔をした。

もう酔ったの？

早いわね。

では改めて、チンチン！

ナポリタンという、日本で創作されたパスタを食べる。

マミーヤがわざわざ作ってくれたのだ。

これは食べなくてはなるまい。

昔、日本が戦争で敗北して占領軍がいた時代に生み出された異国の香り。

提督の好物だそうだ。

他の艦娘たちもおいしそうに食べている。

「どうですか、ローマさん？」

提督が話しかけてくる。

「悪くないわ。」

素っ気なく答えた。

気遣いなんて不要。

私はローマ。

日本生まれの気高いイタリヤ艦。

魂は常にイタリヤを向いている。

すべての道はローマに続くから。

食後のエスプレッソが楽しめるのはよいことだわ。

アカツキ、砂糖なしで飲もうが、砂糖を入れて飲もうが、その人の自由よ。

ブラックコーヒーを飲めるから大人だなんて、それはひとつの意見に過ぎない。

私がレディ？

ありがとう。

貴女も精進しなさい。

七日目。

最終日。

提督からサプライズイベントがあった。
それは映画鑑賞会。

題名は『ローマの休日』。

日本人の大好きな映画のひとつらしい。

講堂に集まって皆で鑑賞する。

イタリアがそこにあつた。

しんみりとした気持ちになる。

悪くないわ。

鑑賞後、多くの艦娘から話しかけられた。

これが提督の策なら見事と言ってあげる。

提督と一緒にティラミスを食べる。

このドルチェは一時期日本で爆発的な人気があつたそうだ。

カプチーノによく合う。

さすがは、マミーヤだ。

ヴァ・バーネ！

素晴らしいわ！

私の名はローマ。

誇り高きイタリアの艦娘。

どこで建造されようが、どこの鎮守府にしようが、私は私。
たとえ、異郷にしようとも。

石畳の街並みの記憶は私のもの。

古き都をこの胸に思う。

いつの日にか、帰らん。

いつか巡り来る日信じ。

リラの花の香りの漂う。

あの街にいつか帰らん。

アルベデルチ、ハコダテ。

アルベデルチ、提督。

また会いましょうね。

VI : おっさんは恋の鞘当てに捲き込まれちゃいました!

駆逐艦の子たちから提督の女性関係をなんとかして欲しいとの要請を受け、先輩のいる呉まで遙々来たぜ広島県。

気温が全然違う。

風がよく吹く函館とはなにもかも違う。

でもなんで、わざわざ私が北海道から西日本まで来なければならぬのだろうか？
へっぽこ且つなんちゃって提督が、なんとかかんとか出来る事案なのだろうか？

……まっ、いつか。

帰りにはしゃもじやにしき堂のもみじ饅頭を買って帰ろう。

あそこの麩饅頭も旨いが日持ちしないのが残念だ。

新青森から東京までが東北新幹線。

東京から広島へ東海道山陽新幹線。

広島から新快速の呉鎮ライナーに乗って、呉まで約一五分。

ちなみに、飛行機は飛んでいない。

駅ビルは岡山県の百貨店の天満屋と地元百貨店の福屋が入った複合商業施設で、熾烈な戦いを繰り広げていた。

どちらもそれほど大きくはないが、それぞれ吟味された品々が置かれていて切磋琢磨しているのは好ましいな。

行き交う人も多く、広島県の経済を担う重要拠点のひとつであることがよくわかる。

広島県は元艦娘を地域社会へ受け入れるのに積極的な都道府県のひとつで、結束力の高い県民性からそれは輪を拡げつつあった。

上記二つの百貨店には元艦娘が何名も働いていて、宣伝面でも実利面でも有効打を与えている。

世の中、露骨なくらいで丁度いいらしい。

元艦娘は特に介護や過疎地での活躍が期待されており、女性の就職率が全国的に高い隣の岡山県でも注目されている。

鳥取県や島根県からも問い合わせが多く寄せられているそうだ。

先輩のいる呉は四大鎮守府のひとつとして第一から第九までの鎮守府内鎮守府を所
有し、相当でかい。

西日本最大級鎮守府だけのことはある。

鎮守府から出ないで生活出来るくらい施設が充実していて、まるでショッピングモ
ールだ。

天満屋と福屋の販売出張所まであるのには驚いた。

贈答品や中元や歳暮など需要がかなりあるらしい。

うちよや中国銀行や広島銀行のATMまである。

先輩は鎮守府内鎮守府の第六鎮守府を担当していて、他の提督との交流が盛んだつた
り外部との接触が多かったりする。

目端の利く人だから出世頭の筈だが、艦娘の権利を熱く主張し過ぎるくらいがあるら
しい。

その分上層部や大本営から疎まれ、艦娘たちから強く支持されている。

そういや、福屋や天満屋の包装紙に包まれた品を貰ったことがあった。

あれらはここで買ったのだろう。

なにかと頭が上がりえない提督だ。

二つの百貨店を取り込んだのも、どうやら先輩らしい。

民間を巻き込んで地域社会との関わりを増やしている。やるなあ。

今回、彼を通じて第五鎮守府内の駆逐艦勢から要望が伝えられた訳だ。しかし、なんでなんちやつて提督の私が呼ばれたんだ？

私よりも有能な提督は、それこそ綺羅星のように存在する筈なんだが？土産のマルセイバターサンドを喜んで受け取る先輩は一見気のいい人。しかし。

先輩が口を開くと、あまりよい話を聞かせてくれないのが難点である。何故だ！

呉の提督は皆江田島兵学校出身で、『本物』揃いだ。

私のような付け焼き刃の『なんちやつて』提督が付け入る隙など、どこにもない。横須賀同様の選良集団。

日本の守護者を、自他共に認めている。

加わりたいかと問われたら、答えよう。だが、断る、と。

政治的理由で配属された半端者で充分。

地域社会と艦娘たちを守ることが出来たら、それだけでいい。それくらいしか出来ることはないから。

「おう、有名な『艦娘たらし』が来てくれたけえの、これでなんとかなるじやろう。」

「いきなり酷いですね、先輩。私はたらしなんぞじゃありませんよ。」

「提督候補生時代に教官の長門や加賀や妙高と堂々とデートしておいて、なにをようるんなら。あのお堅い連中を陥落したゆうて、伝説になりかけようるで。」

「事実無根です！ 単に外出時に艦娘随伴という規範に則っただけですよ！」

「ようゆうわ。流石じや。」

「帰っていいですか？」

「気いみじけえのう。ちよつと弄っただけじやが。取り敢えず食堂へ行こう。」

先輩は相変わらずフリーダムだなあ。

食堂は既に修羅場であった。

いきなり現場かよ。

打ち合わせなしか。

周囲の艦娘を見る。

怯える駆逐艦たち。

呆れた顔の部外者。

狂おしい感じの当事者たち。

あ、これは無理だ。

どねえせえゆうねん。

提督の周囲はギラギラした雰囲気で、駆逐艦から戦艦まで何時でもやつたる系仁義なき戦いをしてかきそうな気配が濃厚だ。

何故あの提督は平然としていられるんだ？

「先輩、これ、わしゃ無理じゃわ。」

「コリヤ！ ワシの口真似をしたらおえんわ！」

「どげんもこげんもありやせんが。」

「ええから、兎に角突撃してけえ。」

「そげなん、できやあせんですわ。」

二人でお好み焼き定食を食べながら、様子を窺う。

豚玉ソバ入りお好み焼きにご飯と味噌汁と広島漬。

もやしと三つ葉のサラダは取り放題。

もみじ饅頭はお好みでどうぞと給糧艦の間宮から言われ、ありがたく貰う。にしき堂のとやまだ屋のと一個ずつ。

カープソースと青海苔と鰹節が載せられたお好み焼き。

鰹節は高知産だとか。

蛋白質と蛋白質がかぶってしまった。

だが周りの人に気にした感じはない。

こういうのでいいんだよ、って感じ。

ならば、私もご当地流に合わせよう。

む。

これは、旨い。

かなり旨いぞ。

駆逐艦の子たちがチラチラこちらを見ている。

顔の赤い子も数名いるが緊張しているのかな？

あれをどう攻略する？

何故、私が呼ばれた？

この広島漬もいいぞ。

もやしと三つ葉のサラダも意外と旨い。

ワカメと油揚げの味噌汁もいりこ出汁でしみじみ旨い。

広島の幸満載艦載機。

なんちゃって。

「ご飯をお代わりして、何気なく先輩と会話を続ける。

「幾ら綺麗で可愛いとはいえ、部下たちに手を出すとはとんでもない奴ですね。」

「あんなあ、自分自身の胸に手え当ててみい。」

「えっ？ 私は関係ないでしょう？」

「うん、本人の自己評価ゆうんは誰しもこういう傾向があるのう。」

「なにしみじみと言っているんですか、先輩。ありや、消火器で初期消火出来る段階じゃないですよ。」

「おえりやあせんか？」

「おえりやあせんです。」

「このままじゃあ、あいつとあいつの鎮守府は大火事になって消滅じゃ。」

「困りましたね。」

「他人事じやのう。」

「他人事ですよ。」

「将来の函館じやがな、あれは。」

「厭な予言をしないでください。」

御馳走様でした。

旨かった。

この食堂は当たりだ。

意を決して、第五鎮守府の提督に近づく。

一見若くておっとりした感じの好青年だ。

必殺の、マルセイバターサンドを渡した。

なかなかこちらで食べられない北の味覚。

宅配便にて匣単位で送ってもらったから、全弾撃ち尽くして帰ろう。

後で第一から第四、第七から第九までの提督にも挨拶に行かないとな。

この出費は経費で落とそう。

是非とも、落とさなくては！

「初めまして。函館鎮守府に着任したばかりの新人少佐です。この度は挨拶に参りました。」

値踏みする冷たい視線の中を掻い潜って、提督に挨拶する。

「これはご丁寧にありがとうございます。君たち、これを今日のおやつにきなさい。北

海道の菓子は貴重な品だ。よく味わって食べるんだよ。僕は彼とお話ししてくる。二階のルピシアにいるから、なにかあつたら電話かメールをくれ。」

紅茶専門店にて男二人で茶を喫する。

店主は元艦娘で、明るい娘であつた。

「この店を選んだのには理由があります。」

彼が口火を切ってくれた。

「ほう、何故ですか？」

「防諜態勢がしっかりしているのですよ。艦載機中には入れません。」

「それはいいことですね。」

「今日は函館からわざわざ新人提督がお越しになられた。しかも、『艦娘たらし』と評判の方だ。呉でも伝説になるでしょうね。」

「私はモテない男ですし、嫁も彼女もいません。皆さん、なにか勘違いしているんです。」

「艦娘と人間の女性は似て非なる存在です。別物ですよ。」

「そうなんですか。」

「そうなんですよ。」

「このお茶はおいしいですね。」

「紅茶好きの元艦娘が淹れていますから。」

「成程。」

「第六の提督がここを建てさせたのです。」

「先輩らしい。」

「まったくです。」

「ところで話があります。」

「今日はいいい天気ですね。」

「えっ？ ええ、私もそう思います。」

「人生、晴れた日ばかりではありません。」

「ええ、仰る通りです。」

「うちの子たちは皆よい子です。」

「異論はありませんね。」

「今日のご用向きは一体なんでしょうか？」

「交流は大事だと考えます。その内に演習は如何でしょうか？ こちらの艦娘たちは錬度が高そうですし、我が鎮守府の子たちも勉強になると思います。」

「そうそう、折角お越しいただいたんです。案内役を用意しますから、是非とも見学して

いってください。」

「それはよい提案ですね。」

「セイロンやインドが安定したら更に良質な紅茶が飲めますので、函館の将来にも期待しています。」

「努力します。そうそう、こちらだと尾道紅茶もありますね。」

「よくご存じですね。ええ、あれの味わいも悪くありません。」

案内役の駆逐艦の子と鎮守府内を歩く。

名前は浜風だそうだ。

大人っぽい子だなあ。

あの提督、外見に反して食わせ者だぞ。

なんか、うやむやにされた感じが強い。

でも実際になにかしら介入したら、命の保証がないかもしれない。

これは、私の手にあまる。

憲兵隊に内部調査してもらった方が確実ではないだろうか？

悶々としていたら、案内役の駆逐艦の子が話しかけてきた。

美形でしかも胸が大きい。

彼女はモテるんだろうな。

「正直に言います。我が鎮守府の駆逐艦たちは非常に不安を抱きながら毎日過ごしています。」

「そんなに酷いのですか？」

「大破の状態で、敵の勢力圏内を長距離航行しなくてはならない破目に陥ったような気がします。」

「……それは酷い。」

「なんとかありませんでしようか？」

「大変難しいですね。機関銃の弾が飛び交う地雷源を無傷で突破しなくてはならない状態です。」

「私の体……いえ、数名の有志の体を自由に出来るといふ報酬でもダメですか？」

「皆さん、私のことをなんだと思っっているんですか。そんなことはしません。」

「魅力はありませんか？」

「ありますよ。でも、それとこれとは話が違います。」

「このままでは鎮守府が崩壊します。」

「早めに転属願いを出して逃げなさい。それくらいしか助言出来ません。貴女たちの提

督は好意を寄せている艦娘たちと共に沈むつもりのように見えます。ならば、その前に手を打つべきです。憲兵隊に内部調査してもらおうという手もあります。」

「最初の頃は和気藹々とした、よい雰囲気の鎮守府だったそうです。」

「昔話に引き摺られていると、貴女も破滅の渦に巻き込まれますよ。」

「私が貴方をお呼びしました。」

「光荣ですが、手遅れですね。」

「どうにかありませんか？」

「どうにもなりませんね。」

「友人が司令官に恋をしているのです。」

「諦めさせるべきですね。彼は危険だ。」

「他の司令官にも相談しましたが、誰も手出し出来ないようです。」

「下手をしたら、鎮守府で内戦ですからね。不祥事どころではなくなるでしょう。だから私が呼ばれた、というところですか。正規の手順を踏んだ本式の提督ではありませんし、同じいなくなるなら、消耗品扱いのなんちゃって提督の方が望ましい。」

「わ、私はそんなことを考えてはいません！ 鎮守府が正常化して欲しいだけです！」

「あれは末期です。どんな名医でも治せないでしょう。仲のいい子たちと早く逃げなさい。憲兵隊に相談しなさい。私から言えるのはそれだけです。」

第一から第四、第七から第九までの提督にマルセイバターサンド持参で挨拶回りした。

私に虚名の『艦娘たらし』が引つ付いているのは、どうやらこの提督たちにも既知の話らしい。

酷いものだ。

私は今も童貞だというのに。

呉市内の小料理屋にて夕食。

焼き鳥が特に旨い店らしい。

この女将は元艦娘で、艦娘の駆け込み寺も兼ねているそうだ。

先輩の深謀遠慮はどこを向いているのだろうか？

浅学非才の身ではその指先すらよく分からない。

「おえんか？」

焼き鳥を口にして咀嚼した後、先輩はぽつりと言った。

焼き鳥の盛り合わせは軟骨やハツもあり、軟骨入りのつくねはコリコリしておいし

い。

「ダメですね。あれは私程度の者では手にあまります。」

「浜風に逃げえてゆうたそうじゃな。」

「それくらいしか助言出来ませんね。」

地酒がおいしい。

雨後の月というそうだ。

帰りに買ってゆこうか。

刺し身も旨い。

魚の目利きで包丁の扱いが上手なのだろう。

「女将、肉じゃがじゃ。」

「わかったわ。今日は知らない人が一緒なのね。」

「函館の提督じゃ。」

「ああ、あの。」

「なにか知っているんですか、女将さん。」

「艦娘たらしがこの店に来てくれたとは光栄ね。」

「何故みんな、こんなに冴えなくて人付き合いが苦手なおっさん童貞をギラギラした美

少女ハンターみたいに言うんですかね。」

「自虐もそこまでゆくとてえしたもんじやの。うん、女将の肉じやがは最高じや。」

「流石に気分が高揚します。」

「先輩の方がたらしですね。」

「失礼じやのう。わしゃあ、鳳翔一途じや。」

「誘惑の仕甲斐がなくてつまらないわ。」

夜は更けてゆく。

肉じやがも旨い。

翌朝、ご飯、玉子焼き、味噌汁、目刺し、漬け物といった和定食を平らげ、先輩に挨拶して敷地内を歩いた。

門が向こうに見えてくる。

結局なにも出来なかった。

この出張に意味はあったのだろうか？

目の前に重巡洋艦の子が二名見える。

愛宕姫と高雄夫人か。

「ご挨拶が遅れました。愛宕です。」

「高雄です。」

顔は笑っているが、目は笑っていない。

「函館のなんちゃって提督です。」

「あらあら、名うての艦娘たらしと聞いていますよ。」

「そんなことはありません。彼女すらいらないんです。」

「彼女にしないで、体だけが目的ということですか?」

「それは失礼ですね。そんな相手すらいらない童貞ですから。」

「失礼しました。噂なんて、ホント、あてになりませんね。」

「噂とはそういうものです。自分自身や親しい人に実害がない限り、好き勝手にいじる
ものですか。」

「私たちは滑稽に見えますか?」

「滑稽ではありませんが、近々沈没しそうには見えますね。」

「愛が欲しいだけなんです。」

「それだけのために鎮守府を潰すのは得策ではありません。」

「もう止まらないですよ。」

「ではこうしたらどうです。交代で愛しあうんです。共有化するんですよ、提督を。殺
しあうよりも建設的です。このままでは破滅しかありません。」

「……考えてみます。」

「占有は不可能ですし、戦友と砲火を交えるのは狂気の沙汰です。嫉妬に狂って仲間を沈めるようになっていたら、鎮守府そのものの未来はありません。よく話し合うべきです。ねえ、皆さん。」

物陰からぞろぞろと艦娘たちが現れた。

彼女たち全員が提督に恋しているのか。

「流石、艦娘たらしです。感服しました。」

「彼女すらいらないのに、妙な虚名ばかり飛んでゆきます。」

浜風もそこにいた。

そして。

彼女はやさしく嗤（わら）った。

VII：おっさんは戦艦棲姫に投降されちゃいました！

とある海域の、深い深い海の底。
何名もの深海棲艦が蠢いていた。

本来、足並み揃え戦うべき仲間。

しかし、今彼女たちは惑いの中。

一触即発の剣呑な雰囲気漂う。

指揮艦らしき深海棲艦が問うた。

その相手は、実力派の戦艦棲姫。

「我らを裏切る気か？」

「そんな気はないわ。」

「鎮守府の提督に投降するのだろうか？　ならば、そういうことだ。」

「私はあくまでも函館鎮守府の提督に投降するだけよ。それだけ。」

「詭弁だ！」

「事実よ。」

「貴女と同姿艦でそんなことを言う者は誰もいないぞ、戦艦棲姫。」

「それはそうでしょうね。私も偵察で彼を見るまでは、投降しようだなんて一欠片も思わなかったわ。」

「何故脆弱な人間の男などに媚びようとする!？」

「彼に惚れたから。」

「戯言を抜かすな！」

「人を好きになるってことがこんなにも嬉しいものだなんて、思ってもみなかったわ。」

「貴女は憎くないのか？ 人間と共謀して我らの仲間を次々に沈めてゆく艦娘を！ 提督とラブラブになってアツハンウツフンやっている艦娘を！ 嘗て我らを酷使したにもかかわらず、それを省みない人類を！」

「だから、それを確認しに行くんじゃない。一緒に投降する？ 『艦娘たらし』と異名を持つ彼だから、めぐるめく経験が出来るかもよ。」

ざわめく深海棲艦たち。

動揺する歴戦の戦乙女。

「めぐるめく経験……。」

「『艦娘たらし』……。」

「甘言を弄するのはやめてもらおう！ 我らを裏切るつもりなら、それに応じた制裁もある！」

「ところでさ。」

「なんだ？」

「哨戒任務の艦隊が帰還していないことに気づいていないの？」

「なに？」

通信機能を高めたらしき深海棲艦が糾弾の場に飛び込んできた。

「大変です！ 艦娘の連合艦隊がこちらに向かっています！」

「総員迎撃態勢！ 皆私に続け！」

「いつてらっしゃい。」

「そいつを牢獄にぶちこんでおけ！ 後で査問にかける！」

「こちらに来てください。」

「ねえ。」

「はい？」

「ゴメンね。」

「脱走だつ！ 威力偵察担当の戦艦棲姫様が『艦娘たらし』な函館鎮守府の提督とイチヤイチャするつもりらしい！」

「な、なんだつてっ!？」

「そ、そんな羨ましい！」

「早く捕まえないと情報が漏洩する！」

「ハイ、みんながお探しの戦艦棲姫よ。ちよつと大人しくしてね。」

「なっ！ 裏切るおつもりですか？」

「いい男がここにはいないから、あつちで提督と愛しあうだけよ。」

「こんな大変な時に！」

「こんな時だからこそ足抜けしやすんじゃない。どう？ 一緒に行く？」

「断ります！ 艦娘も人間も我らの敵ですから！」

「貴女は一途ね。あら、爆雷がどんどん投げ込まれているわ。」

「なんですすつて!？」

「ウルフパツクの潜水艦部隊を送ってくるとは本隊も余裕があるわね。」

「減らず口を叩かず、投降するです！」

「そうなのね！」

「艦娘たちが主力艦隊と接触したようだけど、大丈夫かしら。」

「素早く貴女を無力化して本隊と合流すれば一切問題ないわ。」

「私の双頭鬼は強いわよ。これでも戦艦だから。」

「甘いわ！ このお利口魚雷の餌食になるです！」

その戦艦棲姫が函館鎮守府へ投降してきたのは、寒風吹き荒ぶ春の午後だった。

彼女はズいぶん煤けた姿をしている。

破れた服からいろいろと見えていた。

綺麗な体のあちこちが目に焼き付く。

目の毒だったのですぐに入渠させた。

どうやら戦うつもりはないみたいだ。

『函館鎮守府への投降』に来たわ。この鎮守府で過ごすことが出来て、捕虜としての正当な待遇が出来るようにお願いするわ。縫合跡だらけのホルマリン漬けになりたくないからよろしくね。」

ネグリジエのように透けた黒いドレスを着た異形の娘は、私の膝の上でそう言った。
「なんでこうなった?」

フレンドリー過ぎやせんかのう。

深海棲艦にも個体差があるのか?

「何故この鎮守府へ投降したんですか?」

「貴方、『艦娘たらし』なんでしょ。私たちの間でも有名よ。だから、ここに決めたの。」
「いやいやいやいや。なにを言っているんですか、深海棲艦のお嬢さん。こんなぱつとしなくてなんの変哲もないおっさんが、恋愛小説の主人公みたいに恋愛無双な訳ないでしょう。」

「そうね、一見冴えないおっさんだけど、人は見かけによらないともいうわ。今夜試してみましよう。」

「なにを試すつもりですか?」

「ナニを試すつもりなのよ。」

「な、なんだってえええ!?!」

「いいじゃない。気持ちいいんだから。」

「よくないですよ。」

「チューくらいなんでもないでしょう?」

「したくないです。」

「えっ？」

「したくないです。」

「なんで二回も言うの？」

「さほど大事なことでありませんが、言ってみました。」

「話は聞きました。では私と試してみましよう、提督。」

「鳳翔さんは馴れているでしょうが、私も提督と同じように未経験ですから、未経験同士で切磋琢磨しましょう！」

「大淀はんもわやようるわ。なあ、キミ。うちは初めてじゃないけどアカンかなあ。」

「べ、別に、即席提督とチューしたいからここにいるんじゃないわよ！」

「な、なによ！ インスタント司令官が他の子とどんな風にチューをするかだなんて、全然興味ないから！」

「勝利の女神とチューは不可分ね！ みなぎってきたわ！」

「さつさと私たちにチューしなさい！ みんな待っているじゃない！」

「あら、提督さん、モテモテね。うふふ。天龍ちゃんがここにいたら真つ赤つかね。」

「君たち、落ち着きなさい。こんなおつさんとチューしたら後で後悔しますよ。一時の感情に流され、激情に身を委ねるのは感心しません。」

「「感覚が古いわっ！」」

「えっ？」

協議の末、今回は見送られることになった。

みんな、エロすぎ。

私のようなおっさんと経験すべきではないと説得したら、怪訝な顔をされた。

何故だ!?

戦艦棲姫と話し合いをする。

「私『たち』は何名も沈められている。だけど、艦娘が攻める度に私『たち』が立ち上がる。矛盾を感じない？」

「確かに、なにかおかしいとは思いますが。」

「同姿艦だから、同じ考えや行動になるとは限らないわ。それは艦娘と同じ。ま、提督に興味を持って投降しようだなんて酔狂なのは私くらいかもしれないけどね。」

「出来る限りの便宜を図りましょう。」

彼女と一緒に大本営へ出向いて報告しないといけないし、手続きもややこしくなりそうだ。

投降する深海棲艦は初めてだから、大本営も慎重になるだろうことくらいが慰めになるか。

改めて言おう。

なんでこうなった？

Ⅷ：潜入者

今回、三回目の報告書を送ります。

前回、前々回の報告書ではごく短時間で得られた断片的な情報のみをご報告しましたので、今回はその後のことについて述べさせていただきます。

捕虜となった戦艦棲姫ですが、彼女は理論的で冗談も言えて提督にベタ惚れのようです。

少なくとも現段階で内部攪乱をするつもりはなさそうです。

彼女は私たちの強力な好敵手です。

目標が私を疑っている形跡は、現在のところ見当たりません。

また、他の艦娘に疑われている要素もありません。

よって、現時点では、レターパックでの報告書の発送に支障をきたすおそれはないものと思われまます。お使いついでに函館中央郵便局に立ち寄ることはとても簡単です。

目標の異名でもある所謂『艦娘たらし』ですが、これはおそらく常時発動型の無意識的特殊能力の一種なのではないかと考えられます。

深海棲艦の出現、次いで顕現した艦娘に関連したのではないかと考えられる人間の異能者が何人か発見されていますが、目標もそうした異能者の一人だと考えられます。

『異能生存体』の可能性を探索している最中ですが、もしかしたら函館鎮守府の責任者である目標がその一人かもしれない、早急な『処分』はしない方が賢明ではないかと考えます。

そういうのはやめて欲しいです。

私の提督に危害を加えないよう、よろしくお願いいたします。

肉体的接触は度々試みていますが、目標は容易に次の段階に進ませようとはしません。

それは拒否反応ではなく、私たちを大切に思っているが故の対応だと思われれます。

目標からは疎んじられてはいませんし、とても大切にされています。

その態度は娘や孫に対するものだと考えるのが正解かもしれません。

目標の紳士的な態度を崩すのは大変困難ですし、先日他の艦娘と同時に共闘しましたが、却って返り討ちに遭いました。

暫くは誘惑出来ない状況です。

着任早々目標の私室に設置した盗聴器は今も外されておらず、存在することすら想像してはいけません。

これは平和ボケした日本人全般に於ける問題とも思われますので、この報告書をご覧いただけましたら、早急に盗聴器の確認をお勧めします。

目標が公言しているように、彼が童貞なのは確かです。

蜂蜜作戦は現在停滞中ですが、近々突撃予定です。セイコウしましたら、その旨再度ご報告します。

最初は目標のことを冴えないおっさんだと思っていました。最近目標の魅力に目覚めつつあります。

目標と添い寝するのはとても素敵な体験です。

折を見て、その内またご連絡します。

IX：秘密結社

七曜仮面の乱入によつて『南京豆作戦』を失敗した秘密結社のマカシキは、鎮圧部隊の艦娘たちと交戦して幹部の鉄観音三姉妹を失つた。

おまけに千葉県の入手も出来なかつた。

千葉県庁の奪取をしくじつたのだった。

東京都にないのに東京の名を冠したなんちやつて遊園地は、ペーパーカンパニーを通じて敵対的買収が出来ていたのに。

手痛い損害である。

万一のための予備戦力がここで役立つた。

彼女らは試験段階だった全身黒タイツ姿の戦闘員たちを人海戦術で大量投入し、その殆どを失いながらもなんとか戦場から脱出した。

幹部たる石舟斎の秘剣豪剣斬鉄剣がなければ、脱出出来た元艦娘は更にその数を減らしていたことだろう。

増援に來た酔舟の放つた艦載機の働きも格別だった。

しかし。

敵が手加減しなかったら全滅していたかもしれない。

情けをかけられたのだ。

この悔しさをバネにしなくてはならない。

「また池袋や渋谷で若者を集めないといけないな。」

殿軍（しんがり）を成功させた私は傍らの小柄な元艦娘に言った。

「よし、いっぱい勧誘しちゃうから！ 期待していてね！」

彼女はすいぶん明るくなった。

あの日々が嘘みたいに見える。

作戦は失敗したが、構成員の面々は今も意気軒昂だ。

大嘘つきの大本営や日本政府に一矢報いるまでは、死ぬに死なれぬ。

鉄観音三姉妹が全員轟沈したのは参った。

彼女たちの豪胆さと明るさが得がたいものだったことを、今更ながら痛感する。

訓練中のオーロラ三姉妹を前線に投入するしかないか。

虎の子の三天使はなるべく出たくない。

あか……博士に簡易洗脳装置と肉体強化薬アルファと強化服を用意して貰わないと

いけないし、やるべきことは多い。

函館鎮守府の提督を仲間に取り入れたいところだが、中佐が喜ばないだろう。彼の慢心が今回の失敗の原因だということに、彼自身は何時気づくだろうか？

ミッドウエーは遠い日の話ではないのだ。

首領の頸（くび）をそろそろすげ替える時期かもしれない。

戦力がじり貧になってから慌てても遅いし、中佐を信用しない者も今回のことで激増するだろう。

幾ら指揮官が必要とはいえ、あんな奴では大変困る。

彼を支持する者はどうしようか？

資材を貯めることも優先事項だ。

頭の痛い案件ばかりでため息ばかり出る。

やれやれ。

千葉県は入手出来なかったが、まだ埼玉県茨城県群馬県栃木県の四県が残っている。やってやるさ。

あの四県を入手すれば、東日本はこちらのものだ。

それに、城が欲しい。

小田原城が欲しいところだが、忍城も捨てがたい。

上田城や箕輪城もいいのだが地理的な問題がある。
我らの本拠に相応しい城を得なくてはならぬのだ！

手始めに函館鎮守府へ仲間を送ろう。

艦娘に対して大変甘い提督のことだ。

我らの策略など疑いもしないだろう。

元艦娘を何名か送り、説得させよう。

鎮守府は元艦娘の職員がいるといわないのでは、運用にかなり差が出る。

どの鎮守府にも元艦娘が在籍しているのはそのためだ。

そして、我らの仲間も点在している。

拔かりなく諜報を進めてゆこう。

戦艦棲姫も仲間に取り入れたい。

あの火力と耐久力は魅力がある。

すべての不義に鉄槌を。

それがもし元提督のことだとしても、私は容赦しない。

それが私を信じてついてきてくれる者たちへの礼儀だ。

愛してくれた提督のため。

庇つてくれた妹のために。

捨て艦にされた者のため。

轟沈するまで戦い抜こう。

強い奴との殴りあいなら任せておけ。

ただでは沈まん。

先ずは我らの遊園地で利益を上げよう。

地下カジノがあつたのには驚いたが、そのお陰で賭け事好きな政治家や芸能人やスポーツ選手らは蜂蜜系罨で骨抜きに出来た。

他愛のない連中だ。

少しちやほやしたら、簡単に堕ちた。

不甲斐ない。

頭の中身が空っぽなのだろう。

表側が堅固ならば、裏側からやればいい。

真田幸隆方式で殺ろう。

官僚や警察庁や警視庁のお偉方も巻き込めつつある。

賭け事と色事か。

ふん、人間はなにも進歩していないな。

寧ろ退化しているのではないだろうか？

駆逐艦に甘やかされてダメ人間になっている中佐を見ると、余計にそう思う。

函館鎮守府の提督はどうなのだろうか？

少しくらいは違っているのだろうか？

是非とも会ってみたいものだ。

体が疼く。

戦場と愛を求めて、体が疼く。

私は元艦娘。

復讐に燃える、元戦艦。

X：おっさんはおそろしい駆逐艦に見初められちゃいました！

文藝的な知性派を自称する連中からは泡沫提督と陰口を叩かれ、短小軽薄な連中からは粗製提督と蔑まれ、一般的にはなんちゃって提督と呼ばれる即席提督。

或いはインスタント司令官。

それが、なんちゃって鎮守府に所属する私たちのようなテイトクカツコカリの実態だ。

戦果のためではなく、経済のための拠点。

人寄せパンダ。

張り子の虎だ。

私たちは軍属ではあるが、正規の軍人教育を受けた訳ではない。

戦争をしたくない国が否応なしに戦火に巻き込まれた結果、国内の世論は複雑怪奇になっっている。

現場を知らない者は好き勝手にさえずり、被害者やマスメディアは分かりやすい標的

へ何時までも弾を撃ち続けた。

最前線の将兵を叩くことが、結局自分自身の首を絞めることになることを理解出来る者は案外少ない。

そういう連中はきよんとした顔で黄泉へと旅立つのが定番だから。

実際、危険な状況を理解出来ないままに戦場で殉職したメディアの面々はちらほらいる。

しかも、生放送で殺られた者さえいた。

その動画配信は見つけられる度に潰されているが、今もたまに見かける。

鎮守府の門前で戦争反対の抗議活動をしていて深海棲艦の的になる者もいたし、侵略者を説得すると出掛けて行方不明になる者もいた。

銃後の生活も、世紀末伝説な話に近づきつつあるようにさえ見えることがある。

納税滞納者の元へ差し押さえに出向いた役所の人間が暴行を受けたり、禁治産者や生活保護の受給者が増えすぎて破綻寸前の自治体が全国に溢れかえった。

外国製品が入ってこなくなったために、それらは高騰したり盗難に遭ったりした。

『オイルショックの再来』といわれた状況が世界中を覆い尽くしたことで、世界経済そのものが停滞した。

『空白の三年間』によって、世界はその歩みを止めてしまった。

無政府状態になって内戦の続く元国家もその数を増やしている。

そういう場所で外資系として横暴な振る舞いをしていた者たちは、軒並み酷い目に遭ったみたいだ。

悲惨な状況が、たまにネットでの画像で見ることが出来る。どこまで信用出来るかはわからないが。

艦娘が現れなければ、数年以内に日本社会はごく一部を除いて破綻していったと思う。倒産した会社は少なくなかったし、沿岸に人が住むことは少なくなつた。

国の指示に従わない人もちらほらいたし、住所不定になつたり行方不明になる人もけっこう存在する。

諸外国からやって来る難民の問題も、実際根深い。

今も危うい均衡の上に日本社会は成り立っていた。

しかも、艦娘の恩恵を散々受けながら批判する者も世の中には存在する。マスメディアが特にそうした傾向を強く見せていた。

まともな者も多少はあるが、大手は大半が困つたさんの集まりにしか見えないこともないこともない。

不幸な目に遭つたばかりの人を平気で傷付け、その傷口を拡げて塩を塗る行為は止められないようだ。

おそろく彼らは病んでいるのだろう。

矛先は精々提督までとしてもらいたいものだ。

幸いにもネット上では概ね好意的で、マスメディアは非常に嫌われている。

彼らの選民意識も批判対象だが、自らの存在意義に疑問すら覚えないう者たちにはなにを言つても無駄だろう。

我がなんちゃつて函館鎮守府にも艦娘が九名在籍している。

大淀は艦装を持たない秘書艦だから、実質的な戦力は八名。

駆逐艦四名、軽巡洋艦一名、重巡洋艦一名及び軽空母二名。

かなりの戦力だと思う。

張りぼて扱いの鎮守府としては、破格の戦力だ。

工作艦の明石や給糧艦の間宮伊良湖がいてくれたらいいのにと思わないでもないが、それは贅沢な考え方だ。

一、二名しかいない艦娘でやりくりしている小さな鎮守府が幾つもあることを考えたら、かなりありがたい。

酔っぱらつて脱がなければ、もつとよい。

なんだつて皆脱ぎ出すんだ。はしたない。

さて、そんな函館鎮守府にも初期艦と呼ばれる駆逐艦の子がやって来ることになった。

書類上の手違いで遅れたそうだ。

配属されるのは吹雪という子だ。

彼女は元気な地方の中学生という雰囲気にも笑顔でたたえて、力一杯挨拶した。

可愛らしい顔立ちだが、一見して艦娘に見えない黒い髪と瞳のおかつぱ娘だ。

そんな子が戦場で暴れ回るのだ。

世に無常を感じる。

歓迎会という名の宴会を終え、彼女を執務室に招き入れる。

連絡業務と何気ない雑談が一段落した頃、不意に彼女は妖しく微笑んだ。

「知っています？ 深海棲艦を人為的に艦娘にする計画があつたことを。何度も何度も失敗を重ねて、やっと完成したのが私です。でもね、深海棲艦だつた頃の記憶はある訳ですよ。失敗した子たちって、記憶の統合とか擦り合わせとか共存とかが上手くいかなくて狂っちゃつたんですね。私はたまたま成功したんですけど、それには代償がありました。ベッドの上でまた今度お話ししますね。研究所が無くなつたことで解体処分待ちだつたんですけど、司令官に拾っていただけただけなこと、期待しているんです。よろしくお願ひしますね。」

「私の元になったのはレ級という深海棲艦で、魚雷による雷撃戦も航空機による爆撃も戦艦の装甲を貫く砲撃戦も出来る戦闘艦でした。見かけは小型艦で戦闘力や耐久性は戦艦並かそれ以上。もしそんな艦娘を量産出来たら戦局は一気に変わる。研究員や大本営の人たちはそう妄想しました。」

「結果から先にいうと、研究は失敗に終わりました。私、白雪、初雪の三名を使った第四次研究は二名の暴走によつて研究機関を消滅させました。関係者はよくて左遷、悪くて自決に追い込まれました。残つた私は大本営に単身斬り込みをかけるつもりでしたが、とある鎮守府の副司令に止められました。素敵な司令官を紹介していただけるとのことでしたから、過去を改竄してもらい、数あるうちの『吹雪』、単なる初期艦の『吹雪』として司令官の元に配属してもらいのように手配されました。」

「期待した以上の方で、嬉しくてドキドキしています。司令官のためなら、深海棲艦だろうと艦娘だろうと鎮守府だろうと殲滅してみせますので、頼りにしてください。みんなやつつけちやうんだから！ 司令官のためだったら、なんでもします。ふふふ。」

話に対して声がまともに出なかった。

彼女の言葉に頷くのが精一杯だった。

重すぎる荷を預けられ動けない気分。

私にはとても制御出来ない暴れ馬だ。知らぬ副司令の所為で危機が訪れた。彼女が何故か好意的故に救いはある。あると思いたいところだが死ぬかも。死ぬ気でやったら浮かぶ瀬もあるか？

呆然としつつ、談話室の前を通った。

そこでは軽巡洋艦の龍田が服飾情報誌を読んでいて、私を見かけて話しかけてきた。無防備な姿に苦笑する。

胸元は開き、スカートは短い。

他愛のない雑談をした。

そこだけ切り取ったら平和の縮図。

いつか本物の平和を取り戻したい。

彼女は微笑みながら言った。

「私は戦わないで済むならそれがいいわー。暇な時はごろごろして、寝たい時に寝る。これって幸せなことじゃない？ 傍に天龍ちゃんがいてくれたら最高ね。」

思わず同意したくなるような発言だ。

なんかおっさんサラリーマンみたいだが。
そうだ。

こういう幸せを得られるように頑張ろう。

それが海の男に求められているもののひとつだと思っから。

私室に潜り込んでいた吹雪を追い出すのが大変だった。

はしたないことをしてはいけない。

嫁入り前の体なのだから大切にしなさいと注意したら、司令官のお嫁さんになるから大丈夫ですと切り返された。

最近の若い娘には困ったものだ。

XI：鳳翔対間宮！ 愛のフレンチトースト作戦！

先日函館鎮守府で行われた、道内四鎮守府所属予定艦娘が集った合同研修。

そこで小さく、だがしかしばってん、熾烈な戦いが繰り広げられたことを知る者はほぼいない。

函館鎮守府の胃袋を守る、軽空母の鳳翔。

一度退役して小料理屋を開いていたが、提督に成りうる人材を発掘して戦場に舞い戻った。

その料理は絶品で、複数存在する同姿艦の中でも随一と言われる。

そんな彼女が、一度自らの意思ではなくその城たる厨房を他の艦娘に明け渡した時があった。

その相手は間宮。

名うての料理上手な給糧艦。

道内四鎮守府の合同研修のために、大本営より自ら希望してやって来た艦娘。

大量の旨い料理を日々作るという困難を日常的にこなしている彼女が、厨房長として

辣腕を振るうのだ。

そして、彼女は提督と会った瞬間から大変親しげに振る舞ったのだった。

問宮は女の顔をしていた。

鳳翔の沸点を容易に超過させる行為。

料理は兎も角女として許せなかった。

鳳翔の女の意地が燃え上がる。

今の彼女は鳳翼天翔さえ放てそうだ。

毒と欲とにまみれた言葉の応酬の末。

彼女たちは味勝負を行うことにした。

味勝負。

それは。

古くから伝わる決闘の様式のひとつ。

裁定者として有名な人物は味將軍だ。

彼の良心的な経営法は称賛に値する。

知多星の良一少年が姉川老川両名を追い詰めた死闘が有名であるが、少年の母の未亡人が電撃再婚しなければ勝負は彼のものだったかもしれない。

そんな、人の運命をたまに翻弄しちやったりなんかするおそるべき対決方法が味勝負だ。

間宮はフレンチトーストを指定した。

それは鳳翔の得意とする献立である。

相手の土俵で相撲を取る自信がある。

豊かな胸を反らせながら彼女は嗤う。

負けるものですか！

味勝負！

決戦は研修最終日の朝食。

献立はフレンチトーストと濃厚野菜ジュースと牛乳とお茶。

沢山の料理を手際よくおいしく提供する手練れの腕っこき。

舌鼓を打つ艦娘たちを菩薩のように眺めながら、夜叉の心持ちで提督を待つ二名。

提督は戦艦のローマと一緒に食堂へ来た。

心波立つ二名の女。

ざわつく艦娘たち。

さざ波が食堂覆う。

気づかない司令官。

なにかしら誇らしげに見えるイタリア艦。

嫉妬の火炎に身も心も燃やす二名の艦娘。

紅蓮の焔を背負った二名が、至高と究極のフレンチトーストを作り出す。

道南の豊かな乳製品が味わいをより深くしてゆく。

最高のフレンチトーストを！

あの人に認められるのは私！

提督だけに作られた逸品を！

五枚切りのパンを一枚ずつ使い、更にそれを二等分する。

四つに切り分けられた二名の思い！

食べて！

私を食べて！

祈りの包丁が煌めき、絶技が厨房で光輝きながら炸裂する。

提督へ提供されるは、奇跡的な至高究極フレンチトースト。

そこへ思わぬ伏兵が現れた。

食べ盛りの駆逐艦を甘く見ていた。

しつかりした量を出していた筈が！

司令官への好奇心も強いみたいだ。

或いは旨いものに対する本能かも。

提督の周りに集まった駆逐艦が、次々に少しずつ彼からフレンチトーストを分けでもらったのだ。

絶望的表情に陥る二名の艦娘たち。

駆逐艦たちは、提督から分けてもらったのでこんなにおいしいのだと勘違いした。

それは実際、鳳翔間宮にとって吉として働く。

いざとなれば提督仕様と抗弁する予定だった。

「さっきのよりおいしーい！ 司令官から分けてもらったためかしら？」

「ハラシヨー！ これは力を感じる！」

「フ、フン！ おいしいじゃないの。」

「あの、皆さん、このままでは司令官さんの分が無くなってしまいます。」

「はい、アーンして。司令官にあたしの分を分けてあげるわ。もーつと食べていいのよ！」

提督に食べさせる駆逐艦もいるようだ。

混沌と化する状況。

どんどん目減りする金色の絶品。

にこにこしながら分けゆく提督。

幸せそうな表情になる駆逐艦群。

それはあたたかな情景であった。

彼の目指す世界がそこにあつた。

提督はまさに幸せの王子だった。

外見は。パツとせぬおっさんだが。

流石に巡洋艦以上は自重したが、その視線は大半が羨ましそうだ。

あと二口ずつ。

僅かな希望にすぎる二名。

お願いしますから食べて!

だがしかし。

運命の女神が存在するならば、彼女は相当な皮肉屋らしい。

「ねえ、提督。」

それまでフレンチトーストに手を付けずに状況の推移を見守っていたローマが、口を開いた。

「食欲があまりないのよ。それと交換してくれる?」

声なき悲鳴を上げる二名。

初日の彼女からは考えられない事態だ。

あんなにも提督をバカにしていたのに！

彼の隣に堂々と座って艶かしい表情だ！

そんな！

そんな！

提督！

提督！

私を見て！

私だけを見て！

「えっ？ でも朝はきちんと食べた方がいいですよ。」

「食事をろくすっぽ取らない指揮官の方が問題だわ。」

不意にローマが厨房内を見た。

それは単なる偶然。

菩薩系艦娘の夜叉の顔を見た。

それは瞬間的な表情であつた。

戦艦の名を持つ女は感じ取る。

ほんの僅かな一瞬を見逃さぬ。

ニヤリと笑うは戦艦。

これもまた女の戦い。

「大丈夫よ。今日はこれから映画鑑賞会でしょう。それくらいなんでもないわ。お昼にしっかりと食べればいいだけのことだし。貴方のそれが食べたいのよ。」

さっさと手際よく交換して、絶品のそれを口にするローマ。

提督は通常仕様のフレンチトーストをおいしそうに食べる。

「ホーシヨとマミーヤの作るフレンチトーストはとてもおいしいわ。」

「ええ、私もそうだと思います。」

まるで異なるものと知るは三名。

愛の戦士たちが思惑を交差させる。

「いつもおいしい料理をありがとうございます。」

食後、深々と頭を下げる提督。

これこそが提督の本領である。

困惑した表情の料理達者たち。

心ここに在らずという雰囲気。

「間宮さん、一週間お疲れ様でした。」

苦笑いしながら、それでも提督の手を握る歴戦の給糧艦。

本来はこれでお別れの時。
だが。

これで終わり？

ノー！

「間宮さん。」

「鳳翔さん。」

「お昼前に帰られる予定でしたが、どうされますか？」

「高笑いしながら帰るつもりでしたが、帰れません。」

「私もこんなおかしな結果では到底納得いきません。」

「ならば！」

「改めて味勝負！」

研修最終日のお昼である肉じゃが定食とカレー定食は、絶讃の嵐だったという。
ちなみに二名が息を詰めて待っていた提督は両方食べ、双方遜色なしと判じた。

その夜、鳳翔と間宮は提督の私室へ酔っぱらいながら突撃し、持ち込んだ特別純米酒と葡萄酒と惣菜を次々彼の口に運んだ。

その後、軽巡洋艦の大淀と重巡洋艦の足柄が乱入して場は大混乱に陥る。

トンカツバンザイ!

ハイケバンザイ!

告白大会の自爆大会が開催されたが、それは参加した艦娘たちの黒歴史と化した。提督の表情はまるで月光菩薩のように穏やかだったと、後に参加者たちは語った。

XII：教官は元提督

インドの山奥……もとい、千葉県某所の提督候補生促成教育機関にて。

即席でもなんちゃってでもインスタントでも育てられる彼らは提督。

三〇代半ばと見える教官が、提督候補生相手に熱弁を振るっていた。

「さて、君たちはこれから各地の鎮守府の責任者たる提督として着任する訳だが、艦娘とは何者かある程度知っておかねばならない。」

「彼女たちは一言でいうと『人のようなもの』だ。妖精の作り出した人型妖精兵器というのが、艦娘の本質だ。但し、笑うし泣くし怒るし恋もする。君たちはある意味、得体の知れないものを率いて得体の知れないものと戦うことになる。」

「艦娘は基本的に建造で産まれる。建造装置は一種の子宮だ。そういう意味では、君たちは彼女たちの父親母親とも言える。他に海域回収、いわゆるドロップで戦闘後の海域にて艦娘を得られることもあるが、その原理は今もわかっていない。深海棲艦の変化し

た姿が艦娘だという説もあるし、艦娘が轟沈して深海棲艦になるという説もある。現段階の研究では不明とだけ伝えておく。」

「二期期、簡易型艦娘とも呼ばれる量産型艦娘が建造・運用されていたが、今ではその非人道性から行われていない。主に拙速な作戦遂行のための捨て艦戦法に多く用いられたらしいが、詳しいことは判明していない。本来の艦娘よりも経費は安く済んだらしいが、艦種問わず初戦での轟沈率が高過ぎた。正確な運用人数は不明だが、五〇〇〇人を下ることはないだろう。」

「艦娘の体格は基本的に一種骨格、二種骨格、三種骨格の三種類に大別される。一種骨格の殆どは駆逐艦だが、陽炎（かげろう）型や夕雲型のように比較的発育のよさそうな娘たちは一種骨格ⅡやⅢという風に分けられる。軽重巡洋艦や軽空母辺りが二種骨格だ。それ以上の艦種が三種骨格に当たる。ただ、軽空母の龍驤（りゅうじょう）や正規空母の大鳳のように、同種艦の体格と異なる者も存在する。気にしている者も存在するので、発言には充分留意するように。特に背丈や乳房の大小に言及することは死を招くことがあるので注意されたい。事実だからなにを言ってもいい訳ではないし、死が代価では高すぎるだろう。」

「艦娘の基本仕様だが、吹雪型駆逐艦で平均握力二〇〇キログラム、二〇メートルの高さの扉を飛び越え、一〇〇メートル走は五秒を切り、時速六〇キロメートルで五時間は走

れる。その力は意識的に制御されているが、彼女たちが諸君に鉄拳を振るう破目に陥らないようにすべきである。おふざけも大概にしないとあの世逝きだ。これは冗談ではない。実際に提督が即死した案件は過去に何件も発生している。」

「艦娘は燃料やボーキサイトを経口摂取して栄養を取るため、本来的には食事が不要だ。しかし、食事は古来より兵士の意欲を維持するために必要不可欠だ。それが嗜好品だとしても、大いに考慮されるべきである。よって、彼女たちの食事には十全に配慮するよ。うに。ちなみに摂取されたものは体内で完全に消化され、排泄は一切ない。アイドルの那珂ちゃんトイレに行かないのは事実だ。」

「彼女たちの体には子宮がなく、生理も妊娠もない。よって、結婚したとしても子供は持てない。一部の鎮守府では工作艦の明石を主任として妊娠出産を可能にしようと研究してはいるし、私の妻たちも子供を望んでいるが、現段階では見通しさえ立っていない。」

「艦娘と肉体関係に陥る状況は極力避けるように。駆逐艦たちは好奇心旺盛で、それが性的な方向に向かうと、時として悲劇が訪れることがないでもないからだ。私も今の妻たちと出会った頃はそんな馬鹿なことがあるものかと考えていたが、実際積極攻勢を受けた者として言っておく。小さな子だから大丈夫だと慢心しないことだ。駆逐艦は深海棲艦に対して勇敢に近くまで突っ込んでゆくが、それは恋愛に於いても同様だ。おそ

れを知らない者をおそれよ。」

「艦娘たちと出会った時、彼女たちは処女ではないかもしれない。だが、それは少女たちの価値を下げるものではないと断言しておく。私が出会った時の妻たちはいずれも非処女だったが、それは些細なことだ。諸君には愛の本質をよく知って欲しい。処女信仰も程々にしないと、あの世逝きだ。実際、何件も死亡事故が発生しているので注意されたい。」

「艦娘が自分自身の意思で指揮官を選ぶという点に於いて、彼女たちは戦国時代の武士に近い。艦娘は滅私奉公の武士ではないことを諸君の意識に留めて欲しい。彼女たちの指揮官として恥ずかしくない対応をここに求めるものである。また、転属を求める艦娘を拒む権限は諸君にはない。まあ、適切に扱わないと逃げられるよ、ってことだ。逆に言うと、評判がよければ腕のいい艦娘が転属してくる可能性があるということでもある。」

「なにかあったら、細かいことでも管轄する提督たちに相談するように。提督の死亡率や行方不明率や駆逐艦との駆け落ち率が依然として高く、大本営も事態を憂慮している。慢心は禁物だ。諸君には世界の海を救う自覚を持って、真面目に提督業に勤（いそ）しんでもらいたい。」

「実際の駆逐艦の恋愛攻勢？　そうだな。自重する駆逐艦はあまりいない、というのが

実情だ。添い寝混浴当たり前で、夜討ち朝駆けも日常的だ。執務中に膝の上に乗るのはまだいい方で、しょっちゅう抱きついてきたり甘えてこられると業務に支障をきたす。大変だったよ。桃色映像作品の真似事をした時は流石に説教した。結局何名か引き取って、毎日てんやわんやだ。私のようにならないよう、各員の健闘に期待する。おう、磯波に三日月か。迎えに来てくれてありがとう。では諸君、暁の水平線に勝利を刻めるように頑張ってくれたまえ。」

XⅢ：特艦二課

深海棲艦と呼ばれる謎の武装勢力が世界の海を荒らし回るようになって世界経済が大混乱に陥り、日本が世界から孤立して混沌化したあの日から八年。

絶望した人々による凶悪犯罪が年々増加したため、我々警視庁の面々の仕事も加速度的に増えていた。

五年前に現れた艦娘（かんむす）と呼ばれる人型妖精兵器が深海棲艦をかなり駆逐してゆく中、やっとこの頃は治安も安定している。

政府としては、海外旅行も近々行いたいらしい。

近海は安定しているが、まだまだ先のことだな。

『未来型海洋都市』を標榜して鳴り物入りだった都内のバビロン・プロジェクトも、シンボルマークの盗作問題や建設関連の不正入札並びに深海棲艦の襲撃により計画そのものが破綻し頓挫していた。

それ故に治安の安定化は喜ばしい事態だったが、海外との交易は今も限定的なまま

だ。

「そういや、以前にカイゾーグという深海開発型改造人間の計画があったが、あれはどうなったのだろうか？」

「それと、『烏賊娘計画』はどうなったのだろうか？」

「世の中、わからないことだらけじゃないか。」

「そんなある日、本庁に呼ばれた。」

「指定された部屋に行くと、警視庁のお偉いさんや白い軍服を着た軍人らがいた。」

「いや、軍人という呼び方はこの日本では今も出来ない。」

「大本営と鎮守府警備府という古めかしい呼称を用いているのは欺瞞であり、提督という呼び方も偽装のひとつだ。」

「純然たる軍事組織が有事に対処しているにもかかわらず、軍隊を名乗れない状況は歪に見える。」

「日本人の軍隊アレルギーは今も健在だった。」

「呼び方などどうでもいいような気さえするが、こだわる人々にとっては絶対事項らしい。」

「前大戦の亡霊は今もその力を振るっている。」

前大戦の軍用艦艇の靈魂が女体化して、海原を今現在駆け巡っている現状が見えないのだろうか？

武装勢力に対して無抵抗で殺されるつもりかと聞いたら否と答える癖に、自国の武装は否定する。

正直、訳がわからない。

二重規範、三重規範を平気で使う人々からすると矛盾は生じないのか？

反抗期の子供みたくに見えなくもない。

切れ者らしい官僚めいた男性から説明があり、それを大人しく聞く。

要は東京湾及びその沿岸の治安維持に関わっていた大本営が手を引き、我々警視庁の面々が海も守る形にするらしい。

ついでに都内での凶悪犯罪に対処する任務を、我々警視庁が負担する。重武装した連中を相手にしなさいよってことになる訳なんだなこれが。上手くいけば、大阪や名古屋や博多にも同様の部隊を創設するらしい。私の古巣を潰した連中がいけしやあしやあと二重規範を口に出している。嘘つき共め。

私は言った。

「海上自衛隊や海上保安庁が存在しているでしょう。海の方ですが、彼らに任せては如何ですか？」

まだ組織として生き残っている筈だ。

戦力的にはあちらの方が上だろうし、海のことにはあちら任せの方がよいのではないかと？

「確かに組織としては生き残っているが、海上保安庁の方は装備の関係で戦闘力が期待出来ない。海上自衛隊の方も戦力が無限ではないし、攻撃対象が小さすぎて費用対効果が悪すぎる。予算は無尽蔵ではないのだ。」

「戦争に費用対効果もないでしょう。それを経済の尺度で計るのは間違っているのではないですか？ 横須賀にある戦力に、無力な我々は期待するしかないのではないのですか？」

軍人さんは無反応だ。

揺さぶりは効かんか。

「能登君、言葉を慎みたまえ。これは大本営の好意なのだよ。」

「好意？ 責任の丸投げではなくてですか？」

「能登君！」

「ははは、気骨のある方でけっこう。流石は、嘗て首都警の特機隊六課で名を馳せられた

だけのことはありますね。」

軍人が口を開いた。

私のことは調査済みって訳だな。

「大本営でも意見が割れたのですが、これは試験運用の一環なのです。」

「試験運用、ですか？」

「そうです。最近では民間出身の提督も増えていますが、正直なところ、鎮守府としては犯罪者対策まで手が回りません。専門外ですしね。」

「それで、警察官をなんちゃって提督に仕立てて、対犯罪者専門艦隊を作ろうという訳ですか。」

「そうです。『カミソリ能登』の異名は伊達ではありませんね。最近、マカシキという秘密結社が暗躍しており、退役した元艦娘が関与している可能性が高いのです。先日その実行部隊と交戦がありました、鎮圧にかなり手こずりました。事前に逮捕者が何名かいたら、そこまで苦戦することはなかったでしょう。私たちもこの状況を憂慮しているのです。日本はもつと暮らしやすい国になるべきです。そのために、能登さんの力を貸していただきたいのです。」

口が巧い。

これでは拒否出来んな。

いや。

最初から退路は絶たれているか。

あの時の戦いに比べたら、今のこれはぬるま湯だ。

後で墓参りにでも行くか。

「しかし、私のような者でも、その、提督ですか？　艦娘を率いることが出来るのですか？」

「事前調査は済んでいます。」

ひよいと軍人の後ろから小人が現れた。

「俗に言う、『妖精の見える者』という訳ですか？」

「そうです。艦娘は妖精が見えない者には従いませんからね。警視庁の方々では二人該当しました。」

「君と手雲君だ。」

最近、上司と不倫騒ぎを起こしたやり手美人か。

警視庁内部の醜聞を左遷という形で誤魔化すか。

「有能な方を二人も見つけることが出来て、我々は幸運です。」

大本営の若手将校は一見快活げに笑った。

バビロン・プロジェクトでの好景気を見込んで建設されたが、その計画が頓挫したお陰で二束三文で売却されれば廃墟と化した工場の跡地。

埋め立て地の中にある建物。

他に建築物は見当たらない。

それが我々の本拠地だった。

厄介ごとにおい強き集団。

その中間管理職に着任する。

まるで性質の悪い喜劇だな。

一番近い中華料理店の檸檬亭まで徒歩三〇分。炒飯と餃子とイカ墨スパゲティが特に旨いそう。

コンビニエンス・ストアは以前ならば徒歩圏内にあつたそうだが、深海棲艦の侵攻で不採算店として斬り捨てられた。まあ、車でちよつと走れば辿り着くが、深夜は開いていない。灯火規制は今もある。

自動車も以前は使用許可証の携帯が必須な程規制が厳しかったが、原油の輸入が安定しつつあるためか、一時期ほどではなくなった。

えらく人懐っこい柴犬の野良犬にまわりつかれる。

どうしようかと考えていたら、皆が飼おうと言いだした。

名前はアルフォンスになった。
本人も気に入ったらしい。

我々の正式な名称は特科艦艇二課艦娘中隊だ。

略して特艦二課。

現在第一第二小隊から成り、その内第三小隊も加える意向らしい。

手雲紫乃警部補が第一小隊長、私が第二小隊長になる。

課長は『風見鶏』の二本松警部だが、本庁でロビー活動するのが主な仕事らしい。

工廠での整備関係は警視庁警察庁海上陸上航空自衛隊から有志が全国から集まってくれた。

とんでもない競争率であつたらしい。

まあ、やる気満々なのはありがたい。

知り合いの酒木さんが現場指揮官なので、安心して任せられる。彼も妖精が見えるそうだ。

不思議というものは、存外陳腐なものなのかもしれない。

私の元には六名の艦娘が所属することになる。いずれも癖の強そうな娘だ。

「駆逐艦の五月雨（さみだれ）です。一生懸命頑張りますので、よろしくお願いいたします

す。」

「軽空母の瑞鳳です。素敵も料理も得意ですので、よろしくお願いいたします。」

「軽巡洋艦の天龍だ。刀を少し使える。よろしく頼む。」

「あ、あの、軽巡洋艦の名取です。よ、よろしくお願いいたします。」

「駆逐艦の如月です。よろしくお願いいたしますね、素敵な司令官。」

「戦艦の扶桑です。よろしくお願いいたしますね、提督。ふふふ。」

同僚の手雲隊長の元には軽巡洋艦二名、駆逐艦四名の水雷戦隊が配属されるらしく、今は彼女たちを受領に横須賀へ出張中だ。

「能登さん、宴会しましょうよ、宴会！」

「親睦する必要があると思うのですよ！」

「あの子たちのことが私気になります！」

「労働にはモチベーションが必須です！」

「大丈夫ですよ、お触りはしませんし！」

若手の整備員男女性別関係なしに詰め寄られた。

「買い出しはどうすんの？」と聞いたら既に準備万端だと言われた。

苦笑しながら許可を出す。

「提督、伊達巻をどうぞ。」

「提督、ほらもつと呑め。」

「私、酔っちゃいました。」

「司令官つて遅しいのね。」

宴会はどんちゃん騒ぎに陥った。

艦娘が案外自由奔放なのに驚く。

五月雨と名取は興奮した整備員たちに囲まれ、しどろもどろではあるが。

私は四名の艦娘にがっしり脇を固められて動けない。

装甲服でもあれば話は別だが、今はびくともしない。

これだと普通の警官隊では相手にもならないだろう。

改めて艦娘の力に感心する。

鍛え上げた人間でも勝てない力だ。

なにも付けていない状態でこれだ。

艦装と呼ばれる装備を身に付けた彼女たちを止められるのは、同じ装備を纏（まと）つ

た艦娘だけとの話も頷ける。

仮に全盛期の頃の特機隊六課をぶつけたとしても、彼女たちの抑止力にはなり得ないな。

少し悔しい。

上層部の判断は間違っていないということか。

元の工場にはかなり大きめの社員用浴場が設置してあったそうで、現在妖精が管理する施設になっていた。

入渠施設と呼ばれる艦娘専用の治療設備とは別に、命の洗濯が出来る場所が用意されている。

私は酔っぱらった艦娘に引きずられ、共に入浴した。

全然抵抗出来なかった。

おそるべき力であった。

所謂混浴という状況だ。

裸の付き合い、になるのか？

この子たちとの宴会は今後気を付けよう。

執務室隣の仮眠室で、雑魚寝している艦娘たちをぼんやり眺める。

今日はマンションには帰れないな。

貞操は無事だったが危ういところだった。

まさか激しい攻防戦になるとは思ってもみななかったが、好意を持ってもらえるのはあ

りがたいと前向きに考えよう。

うん、そうしよう。

近々、函館まで出向いて交流戦という名の演習予定だ。

その提督は『艦娘たらし』と呼ばれるやり手らしい。

彼から情報を得るとしよう。

近日中に、大本営から連絡役兼監視役の軽巡洋艦である大淀がやって来る。

彼女からも情報提供してもらおう。

今の所、手持ちの札が少なすぎる。

しかし、両脇を少女たちに固められて動けないのは我ながら情けない。

高校生くらいにしか見えない眼帯少女に頭を抱きかかえられて、綺麗なお姉さん系の女の子とおませな感じの中学生たちに抱きしめられている構図。

嘗ての仲間には到底見せられない姿だ。

往時の私になら殴られても致し方ない。

これからどうなることやら。

やれやれ。

XIV：おっさんは元艦娘から誘惑されちゃいました！

函館駅を基点にして、湯の川方面行きと函館どつく・谷地頭温泉方面行きとで地元民や観光客の足になっている路面電車。

正式に言うとならぬ市電。

一時期は本数をかなり減らしていたが、今では観光客もぼちぼち訪れるようになり、観光強化の一端を担っている。

函館に鎮守府が出来た記念ということで、青地に白線の特別電車が用意された。名をかんむす號という。

まんま捻りなき名前だ。

青は海を、白は航跡を表しているそうだ。

レトロ風な箱館ハイカラ號と並ぶ目玉だ。

こちらは退役した元艦娘が車掌をしているので、全国からマニアが訪れていた。彼女たちの採用は全国初の試みであり、それは現在成功している。

函館市電は全国の路面電車に元艦娘を採用する先鞭を付けたのだ。

この春、岡山県と広島県が路面電車の車掌に元艦娘を採用し、その流れは広まりそうな勢いを持っている。

香川県愛媛県高知県の四国三県も関心を持って中国地方二県や函館を訪れ、現在進行形で検討中である。

かんむす號には高雄型重巡洋艦の高雄と愛宕が交代で勤務しており、その圧倒的な胸部装甲は見る者を驚愕させる。

現役時代の服装によく似た独自の制服は大本営から許可を得たものであり、意図的なものを少し感じないでもない。

彼女たちは函館鎮守府に所属しているのではなく函館市電に所属しているのだが、素人にはその辺などわからない。

故に、その辺りの齟齬で二名は困ることがあるらしい。

函館駅近くのビル二階にある紅茶専門店で愛宕に会ったのは、曇り空の風が少し冷たい午後のことだった。

私服の彼女は胸を強調しない方向性の服装を選んだようだったが、それでも胸部が大きいのはよくわかる。

相談内容は、彼女たちが函館鎮守府所属だと思われることだ。

広報で流されている情報は知っているもの、詳しいことなど彼女たちは知らない。意外なようだが、現役の艦娘と退役した元艦娘の間にはあまり交流などなかったりする。

提督とやり取りする子もさほどいないらしい。

余程仲がよかったならば話は別だろうが。

これらのことも実は根深い問題のひとつだったりする。

退役しても、現役時代のことが延々とわりつくのはたまらないだろうな。

華やかな宣伝の裏で彼女たちは苦悩している。どうにかならないだろうか？

まさか困っている子全員を引き取る訳にもいかないだろうが、なんとかしたい。

先輩以後で相談しよう。

「不意に専門的な問いかけをされる方もいらつしやって、それは広報にお問い合わせくださいって答えているんですけど、食い下がる人が多くて困っているんです。」

「それは禁則事項です、ってやつちゃえばいいんじゃないですか？　そもそもうちはなんちゃって鎮守府ですが軍事施設ですし、現役でないことと函館鎮守府に所属していないことを明言されたいでしょう。函館市電の公式サイトでその旨を記載してもらい、関係者に連絡しておけば多少は問題解決につながると思います。」

無難な線で答えてみる。

「私たち、不安なんです。人間ではない者がこのまま生活していけるかどうかをよく考えちゃうんです。もつと提督とお話ししたいです。」

あら、手を握られちゃった。

何処かから、殺気を感じる。

「ほら、提督のことを思うと、こんなに心臓の音が激しくなるんです。」

あら、そんなところに手を誘導するとは。

困ったね。

殺気が、更に強度を増してきた気がする。

けっこう、やわらかいな。

「これからも相談に乗って貰えますか？」

潤んだ瞳で見つめられる。

断りにくいな、この状況。

「いつもとはいきませんが、私に出来る範囲でしたら。」

「助かります。今度高雄と三人で呑みに行きましょう。」

「そうですね。」

「何処がお勧めですか？」

「汐活はどうでしょう。」

「おいしいんですか？」

「海の幸のグラタンが特によかったですよ。近くの棒二森屋にラツキーピエロがあまりすから、そこで気軽に珈琲も飲めます。あの辺りは呑み屋が多いので賑やかですよ。」

「ふふふ、楽しみにしています。」

やれやれ。

彼女と別れてきて帰ろうと思ったら、後ろから腕を組まれた。

ぎよつとすると、軽巡洋艦の頼れる秘書艦である大淀だった。

「提督、浮気は駄目ですよ。」

「そんなことはしていません。相談に乗っていただけです。」

「提督は、もつとご自身がモテることを実感してください。」

「私がモテる訳ないでしょう。」

「提督は私の大好きな人なんですよ。」

「それは『刷り込み』じゃないんですか？」

「もう、エツチなことをしちやいますよ。」

「やめてください。恥ずかしいですから。」

その後、棒二森屋アネックス一階に新しく出来た複合型ケーキ屋で喫茶して鎮守府に

戻った。

甘いものと美鈴珈琲で少しは彼女の機嫌も直ったようだ。

しかし、何故大淀はあの場にいたのだろうか？

謎だ。

XV：おっさんは垂水に出張して元艦娘たちから熱烈接待されちゃいました！

鎮守府の提督は、コンビニエンス・ストアの店長に近い面がある。

本式の教育を受けた正式の提督は、自分自身の土地で建物の権利を持った店長。

私たちなんちゃって提督は、借りた土地の雇われ店長。

お雇い外国人ならぬお雇い提督だ。

待遇面は雲泥の差があるけれども。

せめてもの救いは美女美少女に囲まれての日々を送れることかもしれないが、不祥事を起こしたらタダでは済まない。

目の前の美酒を呑めない酒呑みのようなものか。

激戦地の南方に送られて、消息不明になった先輩は意外と多い。

同期の連中は今のところ脱落者がいないようだが、未来のことは分からない。

海外の泊地に行った者もいるが、来年以降も無事でいて欲しい。

確かに我々はなんちゃって提督だが、使い捨てにされてなんとも思わない訳がない。

量産型艦娘でやったことを、我々促成栽培提督でも行う大本营。人脈を作り、艦娘の力を高め自衛するための力を備えるべきだ。偉いさんは嘘つき揃いなのだから。

全国からの取材や宣伝活動でてんてこ舞いの日々を送っているが、そんなある日、呉第六鎮守府の提督をしている先輩から電話を貰った。

「静岡の鎮守府が下田か清水か沼津かで揉めた話は知つとるか？」

「ええ、新聞にまで載っていましたね。」

「静岡県人はもつと理知的で大人しいんかと思うとつたがのう。」

「たぶん燃えちやつたんでしようねえ。」

そう。

静岡県に鎮守府を作る際、どこに作るかでかなり拗（こじ）れたのだ。焼津や熱海は早期に脱落したが、下田と清水と沼津の三つ巴が生じた。お互いの地元民が、妙に燃えてしまったことが遠因として挙げられる。そしてそれは県全体の問題となり、静岡は三つに分割されてしまった。結局、沼津と清水は下田との広報戦に破れた。下田側に相当優秀な軍師が付いていたらしい。

新聞・雑誌・テレビ・ネットを散々賑わせた結果、下田鎮守府が問題を孕みつつも漸く発足するに至った。

以前函南（かんなんみ）辺りに住んでいた時に親切にしてもらった経験からは想像が付かないが、人間、大金が絡むと大変なことになるのがよくわかる。

現在北の国でも北海道新幹線計画が凍結中だけど、新函館北斗駅及び駅前ホテルの設立を目指していた北斗市が財政的に大変な状況なので他人事ではない。

長野県や山梨県など内陸部の県からも鎮守府設立の嘆願書が幾つも横須賀の大本営に来ていて、担当者たちを辟易させているらしい。

内陸鎮守府設立の動きさえあるらしいが、『戦わない鎮守府』なんてなんの冗談だろう？

政治経済が絡むと人はドロドロになる。

大金が絡むと真顔で嘘を吐く連中がどこからともなく現れる。

海千山千のしたたかな連中が、甘言を弄して田舎の人々を騙してゆく。

そしてペンペン草も生えない荒れ地が残される。

やだねえ。

「神戸が今大問題なんじゃが。」

「なんとかなりませんかね。」

「なんとかして欲しいんじゃないけど。」

「なんともならないんじゃないですか。」

新設鎮守府で今最大に揉めているのが京阪神地区の神戸だ。

私がなんちやつて提督になる半年前から騒ぎになっていた。

垂水に設立されると聞いて、筒井康隆の小説が好きな身としてはニヤリとする。

彼なら、この状況をどんな小説にしてくれるだろうか？

垂水に何とか決まったのはよいのだが、今度は管轄する鎮守府で揉めている。

地理的には舞鶴になるのが当然と思えたが、神戸の人々からすると京都の人々の風下に立つことは我慢ならぬらしい。

舞鶴イコール京都ではないと思うのだけれども、なんかややこしいしがらみがあるみたいだ。

静岡は内ゲバで済んだが、神戸は呉に声をかけた。

引き算をした結果、舞鶴よりマシだと思つたのだろうか？

この事態に舞鶴の面々が激怒した。

そこは四大鎮守府でも特に武闘派の提督が揃つており、前々からの呉との肉じゃが本家分家論争も相まつて更にややこしい事態に陥つた。

呉としてはとぼっちりもいいところである。実際、中四国地方の鎮守府を監督するの
で手一杯だし、舞鶴は近畿北陸圏を担当することが前から決まっている。

決まりを破ったのは神戸だ。

神戸は隣の岡山との文化的なつながりを主張して、ならば呉に管轄してもらうこと
に問題はないと超理論をかました。

正直、訳が分からない。

なのに、舞鶴の血の多い連中が呉を批判する。

勘弁して欲しい、と呉の面々はうんざり顔である。

穏健派の提督が多い呉に於いて神戸からの説得は不発気味で、もつとあちらと仲よく
しろと遠回しに言われたらしい。

そりやそうだよな。

ただ、地元民の腹立ち苛立ち確執は、離れた都道府県民には通じにくい側面がある。
で。

先輩は暗躍することによって、神戸の矛先を大湊（おおみなと）に変えてしまった。
そして、事態はこれで限りなくややこしくなってしまう。

しかも、垂水鎮守府に着任予定だった提督が大阪人であったことも問題の悪化に拍車
をかけた。

大阪人にとって神戸はお洒落なお出かけ用の街で憧れる面があるけれども、神戸人にとっては複雑な気持ちになるようだ。

人事部長が同じ近畿地方だから問題なからうと安易に考えたのが不味かった。逆に遠隔地の方がよかったのに、と人事部の面々は散々責められたようだ。大湊の提督は私に声をかけてきて、私が担当者になりそうな気配を感じる。

揉めるのは地方だけではない。

都会だって揉めるし、金の絡み方が地方よりもずっとややこしくなるから、問題は長期間化するし遺恨も残りやすい。

斯くして、隣接して仲の悪い地域は絶えないこととなる。

そんなことをしている場合じゃないのに。

見識のある人々が危惧していたように、やがて大阪が絡んできた。

それが五カ月ほど前の話。

大阪にも鎮守府が欲しいと府知事が発言したのだ。

市民が街中で話題にするのとは全然重みが異なる。

確かに地方の近海の安定化と地域活性化がなんちやって鎮守府のお題目だが、都会がそれを求めるのはなにか違うような気がする。

そして、舞鶴が再度激怒した。

「世界の平和を守るための基地をなんや思うとるねん！」

まさにこの一言に集約される。

前々から苦々しく思っていた舞鶴が怒り狂うのもよく分かる。

多大な犠牲を払った誇りある存在が、経済のための張りぼてになる。

それはとても許しがたい気持ちをも喚起してもおかしくない。

舞鶴の提督たちからしたら私など紛い物だろうし、艦娘を引っかけろくでなしに思われていくかもしれない。

困ったものだ。なにもしていないのに。

大阪府知事の発言を東京都知事が支持したことから更に事態は悪化する。

都知事はついでのように、東京都にも鎮守府が欲しいねえとのたもうた。

とても軽い口調で。

ねえ、じゃねえよ。

これには全国の提督が怒った。

都知事がろくでなしだった所為もある。

あの野郎、官能小説をへらへら書いてりゃいいんだよと言う者までいた。

間の悪いことに、その直後に都の主催する鎮守府関係の式典で多くの提督が欠席した。

それでも式典に出席したある巨乳の重巡洋艦へ気軽に話しかけた都知事は、彼女から辛辣にこう言われた。

「バカめ、と言つて差し上げますわ。」

それは残酷に全国へ生中継され、都知事は大いに面目を失つた。

大本営からも東京都に対して正式に苦情が入り、彼は「そんなつもりはなかつた。」と抗弁した。

以前から懇意にしていた右翼系の人々も呆れてそつぽを向く。

彼らの方が余程純粹だつた。

危機感を覚えた経済界からも詰問状を突き付けられ、したたかな放言毒舌系老年政治家も流星に窮してしまつた。

彼の主導で設立された銀行の不正融資問題が何件も明るみになって追い打ちになる。

更にバビロン・プロジェクトの諸問題が取り沙汰され、彼の政治生命がどしどし削られた。

その上都内での催しに於いて艦娘たちの欠席が相次いで発生したため、後三期くらいやるつもりだつたのではないかと思われる官能小説家は不承不承に引責辞任した。

それは鎮守府の力が都知事を上回ることを示した事例となつた。

しかし、都民の受難は続く。

歴史学者だった副知事が急遽後任の都知事になったが、バビロン・プロジェクト関連の献金疑惑と横領疑惑とでじきに退陣。

元厚生労働省大臣の現都知事は、元艦娘たちの愛人疑惑で現在大騒ぎになっている。

高級寿司店並びに天麩羅店の領収証が切っ掛けとなつて、彼は釈明に奔走していた。

「退役した元艦娘たちの福利厚生面を向上させるため、私は相談に乗っていただけです。」

「公金をどんぶり勘定している訳ではありません。」

「経費は適切に使用しています。領収証をいつも貰うのは昔からの癖です。」

「バイアグラを箱単位でなど買っていません。」

「何人も一晩で相手に出来る筈がないでしょう。」

「愛人は一人もいません。いないと言つたらいいんです。」

「誰ですかっ!? 今、私を絶倫親爺などと蔑んだのは!?!」

「私は情事に溺れてなどいません! 絶倫親爺という悪評は事実無根です!」

厚生労働大臣時代から愛人契約をしているとの一般女性の激白が女性週刊誌ですつぱ抜かれ、議員時代から派手に銀座で遊んでいたとの証言もあり、都知事周りの金の動きを調べるべく現在東京地検特捜部が動き始めている。

彼は近々起訴されるかもしれない。

元艦娘を富裕層に斡旋しているという噂の業者の存在を追うべく、憲兵隊の動きも活性化している。

函館にも問い合わせが来たくらいだ。

これから大変なことになるだろうな。

東京に鎮守府を作る話は複雑怪奇な経緯を経て、警視庁管轄の特艦二課として設立されることになった。

近日行われる箱館五稜郭祭の警備の打ち合わせの合間を縫って、私が神戸の垂水に出張することと相成る。

なんでやねん。

私では役に立たないと思うんだけどなあ。

リラの花咲く街で、一緒に行きたいと文句を言う面々にお土産を約束して青函連絡船に乗る。

東北新幹線東海道・山陽新幹線を経由して新神戸で降りると、神戸鎮守府が近々創設されることを記したポスターが見えた。

地下鉄のポスターも神戸鎮守府のことを大々的に宣伝している。

あれ？

特に問題は起きていないようだが？

なにがどうなってるの？

垂水駅に着いて、建設中の鎮守府を見学する。

建設関係者は順調に作業を進めていた。

デモ隊もなく、シユプレヒコールする者もなく、アジテーションする者もない。

なんだ、これ？

三宮まで鈍行で戻り、駅舎近くのカフェで珈琲を飲む。

「お客さん、もしかして鎮守府関係の人？ 提督じゃないですか？」

給仕の可愛い女の子から、いきなりそう言われた。

周囲を刺激しないために私服で来たんだけど、なんでわかったんだろう？

「よくわかりましたね。」

「私、元艦娘ですから。」

ああ、成程。

「提督さんみたいな人の元に付きたかったなあ。あの、どこの鎮守府ですか？」

「函館です。」

「あ、『艦娘たらし』の。やっぱり。」

なにがやっぱりなんだろうか？

しかし、どこまで広がっているんだ、その渾名？

「函館かあ。いいなあ。」

「神戸の方がなにかと便利ですよ。」

「うーん、そっかなあ。」

「ところで、神戸鎮守府は問題になっていないんですか？」

「別になにも問題ないんじゃない？ 騒ぐ人なんて、建設前にちよつといたくらいよ。」

騒いでなにもかも失うなんて、そんなの勿体ないじゃない。」

「確かにそうですね。」

「騒いでいるのは極々一部の人とマスメディアの人たちだけ。世の中、案外そんなものよ。嘘ばっかり。」

待ち合わせ場所は芦屋のイタリア菓子専門店を指定した。

このケーキはともおいしいのだ。

この店ではシベリア鉄道を利用してイタリア産の干し果実やイリーの珈琲を入手しており、その情熱には頭が下がる。

ウラジオストクからマスクヴァ（モスクワ）。

マスクヴァからパリ。

パリからローマ。

崩壊した世界の中で政体を維持するのは難しいことだと思う。

EUが現在では悪い方に作用しているみたいだが、欧州は努力し続けるしかないだろう。

かの地も課題が多い。

深海棲艦の侵攻以降、幾つもの勢力に分裂して無政府状態になったロシアの中で、ウラジオストク鎮守府は同地域の治安維持を担当する重要拠点になっていた。

其処は新潟鎮守府と連携して欧州とのつながりを保っている。

武闘派の元艦娘による自治組織はかなりの戦力を有していた。

出稼ぎに来る外国人たち、犯罪組織、商人たちが混沌を生む。

ウラジオストクは昔の上海みたいな街へ変貌しているようだ。

舞鶴鎮守府が管轄しているロシアの交易は、国際的なつながりを維持したい日本国政府から重要視されている。

彼らからしたら、問題発言を繰り返す老齢政治家を一人斬り捨てるのはなんでもないことだろう。

ウラジオストクからシベリア鉄道を使って欧州戦線に向かった提督や艦娘たちも、かなり活躍していると聞く。

マルタ島やスエズなどに鎮守府を置いて奮闘しているらしい。
世界平和のため。

地球の人たちのため。

少しは私も見習いたいものだ。

早めに着いたにもかかわらず、神戸鎮守府の面々は私が到着してすぐにやってきた。
艦載機を飛ばしたのか？

相手の提督は若く、穏やかな感じの青年であった。

お土産のマルセイバターサンドが好評でよかった。

以下、神戸鎮守府の戦力。

お洒落重巡洋艦の熊野と鈴谷。

軽空母の飛鷹（ひょう）。

駆逐艦の叢雲（むらくも）、陽炎、霞。

なかなか贅沢な陣容だ。

ケーキと紅茶を楽しみながら、提督と会話する。

現地情報と余所の情報とで齟齬が生じているな。

ここのクッキーはおいしいから、お土産にしよう。

「流石、『艦娘たらし』ね。女の子が好きそうなどころをよく知っているじゃん。」

「ええ、流石、と言っておきますわ。」

鈴谷と熊野がそう言った。

「函館の私かべた褒めするからどんな奴かと思っただけど、冴えない割にはなかなか気が効くわね。」

これは叢雲。

「函館の私かべた褒めしているからって馴れ馴れしくしないでよね、インスタント司令官。

……ちよつと、陽炎。あんた、なにやってんのよ。」

これは霞。

「噂の司令の膝の座り心地を確かめているんじゃない。悪いわね、もらったわ！」

食べられちゃった。

あーあ。

これは陽炎。

初対面で膝の上に乗ってくるなんて、戦艦棲姫みたいだ。

気さくで明るい子だな。

なんでこんなに馴れ馴れしいのだろう？

「それで座り心地はどうなの？」

飛鷹が陽炎に問いかける。

私は新型の椅子なのかね？

「割といいわ。癖になる前に降りとこつと。作戦完了よ！」

「おそろしい力量ね。こうやって、函館の私を陥落したのね。私はやられないわよ。やらせはしないわ。」

「叢雲さん、誤解を招く言い方はやめてください。私は『艦娘たらし』ではありません。」
「悪い奴は決まってそう言うのよ。」

賑やかなお茶の時間。

雰囲気はよいようだ。

これなら問題はないだろう。

この後は神戸市役所と兵庫県庁の担当者や市長や県知事に会って会談すれば終了か。
明日は神戸市立博物館と灘の兵庫県立美術館に寄って、蓬莱の豚まんを買って帰るとしよう。

手帳を見ながら予定を頭の中で組み立てていたら、ふと強い視線を感じた。

ひよいと頭を上げると、提督と視線が絡まった。

ん？

違和感を覚えるが、一瞬でそれは消えた。

人柄を計られたのかな？

神戸鎮守府側に問題なしとの判断をして、彼らと別れた。
近々演習しようかと約して。

……別れた筈なのだが、何故貴女がいるんですか、陽炎さん？

「護衛よ。」

「私なぞの命を狙う輩なんていませんよ。」

「その油断は慢心じゃないかしら？」

「平々凡々なおっさんに注意を向ける人なんていませんよ。麗しき艦娘が一緒の方が逆に狙われやすいのではないですかね？」

「私のこと、嫌い？」

「そこで何故好き嫌いが出てくるのがよくわかりませんが、嫌いではありませんよ。」

「よかった。じゃあ行きましょう。」
なんだろう。

艦娘たちに出会ってから、主導権はずっと彼女たちが握っているみたいに見える。

……気の所為（せい）だな。

お偉いさんたちとの折衝は歓談レベルで終了した。

神戸市並びに兵庫県側は舞鶴鎮守府と対等な立場で対話出来るとして、互いに尊重することを盛り込んだ契約書を作成するそうだ。

拍子抜けする。

他所で聞いたあの騒ぎはなんだったのだ？

まあ、拗れまくるよりは余程いいのだが。

「晩ごはんはどうするの？」

「なににしましようかね。」

「まだ決めてなかったの？」

「ええまあ……なんで皆の元に戻らないんですか？」

「私、邪魔？」

「いいえ。」

「だったらいいじゃない。」

「この辺りで適当に夕食を食べて、ホテルへ戻る予定です。」

「じゃあ、それでいいわよ。」

「私と一緒に行くつもりで？」

「陽炎になにか落ち度でも？」

「それ、妹さんの台詞です。」

「いいじゃない。こんなに可愛い子が一緒なんだから。」

「函館の面々が知ったら、どつかれまくりそうですよ。」

結局、三宮地下迷宮にある中華料理店で夕食。

「私ね。こう見えて、クラムチャウダーが得意なの。」

「ほう。」

「この炒飯おいしいわね。こういうお店を知っていることは、何人もの女の子たちを取っ替え引っ替えデートに連れてきていたんでしょ。」

「そんな事実はありません。話を作らないでください。」

「あつ、もしかして艦娘専門？ マニアックね。」

「神戸鎮守府の話よりも、私の風評被害の方が遥かに酷かったです。」

「ええーっ、一杯聞いたわ。敵対勢力の戦艦棲姫さえ手玉に取る、『夜の帝王』とか言われているわよ。テクニシャンなの？」

「あだ名が何故か増えていきますね。私は童貞です。」

「うっそだー。」

食事を終え、陽炎を提督の元に送ろうとした。

すると、カフェで出会った娘に再会する。

なにこの偶然。

「あら、提督さん。さつきぶり。」

「おや、今晚は。」

「なに、彼女？」

「ええ、そうなの。」

「ちよつとそこのお嬢さん、話を捏造しないでください。」

「あー、なーるほど。それで私と早く別れたかったのね。」

「モテるわね、提督さん。」

「二人ともなにを言っているんですか。」

「じゃあ、この時間からは大人の時間ね。元町駅近くにいい呑み屋さんがあるのよ。一

人で行くのもつまないから、提督さんも行きましょ。」

「じゃあ、私は帰るね。お邪魔みただから。」

「えっ、そんなことはありませんよ、陽炎さん。でも遅くなりますから送ります。」

「提督さん、他の子たちも来れるって。知名度が高いわね。メールを送ったら、すぐ了承

の返事が来たわ。」

「他の子たちって誰々ですか？」

「司令って噂通り絶倫なのね。」

「その噂ってなんなんですか？」

「じゃあ、最初は元提督が経営している元町駅近くのお店で呑んで、二次会は神戸駅近くの元艦娘がやっている焼き鳥屋さんに行つて、その後は情熱的な夜つてどう？」

「なんかいつの間にか具体的な予定が組まれている？ 二次会までは付き合いますよ。」

「お、大人の世界だわ。やるわね。」

「やっていません。さあ、陽炎さん、帰りましょう。」

「提督さんの携帯端末に私の電話番号とメールアドレスを登録しておいたわ。その子を送ったら連絡ちょうだい。後で会いましょう。」

「いつの間に？」

「やっぱり彼女じゃない。」

「今日会ったばかりです。」

「えっ、速攻で口説き落としたの？」

「私はエロい人ではありませんよ。」

なんだか、大変なことになったぞ。

元艦娘たちと賑やかな夜になって貞操の危機を覚えたが、童帝力でなんとか凌いだ。

翌日は何故か神戸鎮守府の面々を引き連れて、美術館と博物館を巡る破目に陥る。なんでもこうなった？

事務処理で多忙な提督から頼まれたのも大きいですが、なんだか全員が馴れ馴れしい。

お昼はこじんまりとした洋食屋。

海老フライとハンバーグの定食。

彼女たちも満足したようだった。

三宮駅舎内にあるケーキ屋のクレープを奢って、そして別れた。

いやはや、濃厚な二日間だった。

こういうのはこれで終わりにして欲しい。

「あら、提督さん。もう帰るの？ 寂しくなるわね。」

振り返ると、昨夜散々交流した元艦娘たちがいた。

そして、彼女たちはやさしく微笑んだ。

XVI：ヘイワカツコカリ

箱館五稜郭祭の警備の話だが、何故か全員城内の奉行所でコスプレすることになった。

アイヤーツ！

私以外の者は全員ノリノリだ。

なしてさ？

小樽釧路稚内の三鎮守府からも増援が来る予定だ。

穏やかな風の午後、我が鎮守府に一名だけ在籍する憲兵の國江さんと茶飲み話に興じる。

彼は元々道警の人で、人脈も広い。

今回の警備の話も國江さん経由だ。

彼は転職組のなんちゃって憲兵だが、若い頃は機動隊で鳴らしただけあって囑託の今も迫力がある。

林崎流抜刀術を一度見せてもらったが、艦娘たちから大好評だった。彼は馬庭念流の遣い手とのことで、素人目にも唸らされる太刀筋だ。

今は週一で習う艦娘がちらほらいる。

取材に来た大湊（おおみなと）の青葉がいたく感心していた。

大湊の艦娘もたまに来ていて、國江さんから剣を習っている。

抜刀術の動画はネットに上げられ、再生数がかなり多かった。

その結果、たまに近隣の鎮守府から刀術を遣う艦娘が訪れるようになり、世話好きなのが指導している。

熱血親爺な面はうちの艦娘たちにも相通ずる面があり、戦艦棲姫とも意外にすぐ話をするようになった。

ちよつと怒りっぽいのが難点ではあるが、駆逐艦の子たちも基本的に血の気が多いので特に問題はない。

五年契約の予定だが、個人的にはもつといて欲しい。

会社の上司や経営者を殺害する事件が、一時期よりもだいぶ減った。

深海棲艦が現れて次いで艦娘が現れる間までは血生臭い事件が連続して発生したし、デモも多発したし、有名人や金持ちがずいぶん襲われた。

東京の治安が特に悪くなって、二十三区から疎開する人もかなりいた。

暴力団の事務所を一般人が襲撃した話にはとてもびつくりした。

元艦娘が関与している疑いのある事件もあるが、全て闇の中だ。

量産型艦娘の計画が七期以降も画策されていたことを偶然知る。

希望者は案外多かつたみたいだ。

実際は六期中断されているが、それは責任者たちの失踪や変死が相次いだためだ。

意図的にエロ親父の毒牙にかけ愛人化し、ハニートラップする予定もあったらしい。

おっさん同士の絡みとはおそろしい。

本当は今も継続させたかったそうさ。

艦娘の運用・維持には膨大な金がかかるのだから、使い捨ての量産型は都合がよい存在だった。

まさか退役後の元艦娘たちにも経費が発生するとは、思ってもいなかったらうな。

結局、艦娘をアイドル化し金の成る木に仕立てて宣伝活動する方に舵を切った訳だ。

そちらの収益はかなりあるらしい。

那珂（なか）ちゃんも獅子奮迅の大活躍で、影武者が複数いるそうさ。

先行量産機の噂を聞いたことがあるが、都市伝説的なもんじやと先輩は言っていた。

最近、余所の鎮守府の艦娘たちから恋愛相談をよく受ける。

何故だ？

無理無茶無謀だ。

女の子と付き合ったことすらないアラフォーのおっさんに、なにを求めるちゅうのだ。

真剣な問いかけに無難な答えしか返せない。

駆逐艦の子の悩みにどう答えればいいのか？

何故艦娘は女の子の姿をしているのか？

何故艦娘は恋する心を持っているのか？

一体どこのどいつが仕組んだかは知らないが、ずいぶんと残酷な輩に違いない。

そいつに会う機会があったら、一発ぶん殴ってやる。

聞きたくもない、知りたくもない、余所の鎮守府の裏事情をどんどん知ってしまう。

浮気や不倫や寝取り寝取られ嫉妬殺意など負の側面を嫌が応でも知らされてしまう。

なんだ、これは。

私は艦娘不信になってしまいそうだ。

特に想像妊娠組には参ってしまった。

「ほら、お腹の子が動くんです。」

慈母のように微笑む彼女たち。

なんて世界は残酷なのだろう。

あまりの世界の遠さに絶望する。

無垢な笑顔の艦娘に、私はなんと答えたらいいのだろう。

この手にはなんと力のないことか。

ぺったんこのお腹のまま、何時から入院すればいいだろうとか育児休暇とか揺りかごとか健診の話を嬉々として話す笑顔の娘たち。

ある意味、鬼気迫る状況だ。

言葉を慎重に選ばないといけない。

地雷源を全力で駆け抜けねばならないみたいだ。

彼女たちに人形を与えてままごでもさせろというのか？

大淀や鳳翔が献身的に補佐してくれるので、なんとかならないでもない。

彼女たちの同姿艦が来た時は内心唸ってしまった。

向こうの提督や明石や夕張がもて余し、仕方なくこちらに回したのだろうと考える。それを後々人脈として活かそうと計算している自分自身がいて、なんだか情けない。

折角訪れてくれた艦娘たちに無難な言葉を与え、トラピストクツキーを持たせて帰らせる日々。

その場しのぎの安心感を与えて、なんになるのだ。

大本営になんとかして欲しいと、ある日大淀を向かわせた。

戻ってきた彼女の服に赤黒い点が幾つか見えたような気がしたのだけど、たぶん気の所為だな。

その後、艦娘に対する心理的支援が本格的に運ばれる動きとなった。

秘匿回線での電話口から同期の逼迫切迫した声が聞こえてきたのは、風の強い午後のことだった。

やらかしたな。

なにをやった？

「俺、駆逐艦の子と関係してしまいそうなんだ！」

「そんな告白はいらん。」

「『艦娘たらし』の知恵を貸してくれ！」

「そんな便利なものは、最初からない。」

「そこをなんとか！」

しかし不味いな。

絵的にも犯罪感があるし、同意があつたと主張しても憲兵隊の激しい追及をかわせるとは思えない。

ましてや、その子をどうするつもりだ？

退役した後の生活はどうするつもりだ？

「お互いに好きになっちゃってさ。毎日ドキドキが止まらないんだ。」

おいおい、恋愛小説の主人公みたいなことを言っているぞ。

「どうにもならない。諦めろ。」

「そんな……げえっ！ 憲兵さん！ ちょ、ちよつと……。」

「ああ、そうだ。こう言えればいいんだ。」

「な、なにをっ!？」

「娘のように大切に思っています、他意はありません、と言えればいいんだ。」

「あの子のことは娘のように大切に思っています！ 他意はありません！ ……………お

お、呪文のように効いたぞ。助かった。」

「二度はないぞ。」

「わかつてるって。ケツコンカッコカリ出来るまではわからないようにするから。」

「俺らの仕事つてさ、艦娘のケツを叩くことだろう。」

「お前なら撫でそうだけだな。」

「混ぜっ返すなよ。でさ、あつちの艦娘、こつちの艦娘、あつちの駆逐艦、こつちの軽巡洋艦とちやほやちやほやしてさ。」

「そんな鎮守府ばかりじゃないぞ。」

「俺らはさ、なんちやつて提督だ。」

「まあ、そうなるな。」

「だから、艦娘のご機嫌とりをするくらいしか出来ないじゃないか。」

「書類仕事は出来るぞ。」

「それくらいだよな。書類を必死に書いて艦娘たちに嫌われないように接して、それで好意を持たれても気付かぬふりをしたりはぐらかしたりわからない風を装ったりと、やっていることはまるでジゴロさ。」

「嘉納治五郎？」

「いちいちボケンなよ。成果もろくにあげられない張りぼて鎮守府なんて、四大鎮守府からしたらまがい物だろう。」

「経済効果は上がっているじゃないか。」

「経済だけか？」

「出来ることをやるしかないだろうよ。」

「俺さ、この戦争が終わったたら、小さな家に住んで裏庭でガーデンングしながらひっそり暮らすんだ。」

「変なフラグを立てるなよ。」

「ま、ぼちぼちやってみる。」

「それがいい。」

「……俺らつてさ、量産型提督だよな。」

「だから、そういうことを言うなつて。」

「量産型艦娘みたいに使い捨てかなあ。」

「使い捨てにされないよう、こうやって時折連絡するようにしているんじゃないか。」

「お前は本土だからまだいいんだよ。俺のそこなんてさ、ひたすら輸送作戦と護衛作戦と遠征の繰り返しだぜ。」

「私だつて、日々宣伝活動と取材攻勢さ。お飾りだから。」

「明日はどうなるんだろう、つて恐怖はないじゃないか。」

「明日提督を辞めさせられるかもな、とは思っているよ。」

「『艦娘たらし』がかか？」

「『艦娘たらし』がさ。」

「そつちには戦艦棲姫がいるんだろ。こつちに回してくれよ。軽巡洋艦二名に駆逐艦六名じゃあつぷあつぷなんだ。建造する設備がないし、海域回収（ドロップ）艦なんて見たこともない。戦力増強出来ない状況でなんとかしろとは、大本営はまさしく鬼だ。」

「大淀を大本営に回して、『説得』してもらおうよ。」

「せめて、重巡洋艦や軽空母が欲しい。」

「アルコール依存症で治療中の軽空母や学年主任みたいな厳しい口調で敬遠されている重巡洋艦や、提督不信系の罵倒系駆逐艦やいろんな意味で少し危ない駆逐艦でよかったら、すぐに話を付けられる。」

「その四名が欲しい！ 今欲しい！ すぐ欲しい！ 是非頼む！」

「わかった。連絡しとく。来週にはそつちに着任出来ると思う。」

「助かるよ。」

「お互い様さ。そうそう、ちよつと姉思い過ぎる戦艦はどうだ？」

「うーん、うちの規模だと運用出来ないからいいや。」

「そうか。」

「そうだ。」

「『女神転生』ってゲームがあるよな。」

「なんだい、藪から棒に。」

「駆逐艦二名を合体させたら軽巡洋艦になるとかだったら、戦況はもつと楽になるかな？」

「なにを言っているんだ？」

「で、軽巡洋艦を二身合体させたら重巡洋艦、重巡洋艦を三身合体させたら戦艦ってのはどうよ。」

「どうよ、つて言われてもなあ。」

「満月の時の建造事故がドイツ艦で、新月の時の建造事故がイタリア艦でさ。」

「お前のとこの負担が減るように、近い内に大淀を大本営に向かわせとくよ。」

「後、まるゆを六身合体させると……。」

『駆逐艦でも撃てる戦艦級大口径砲』との触れ込みで作られた狙撃砲を、小樽鎮守府から来てくれた天龍が伏せ撃ちで試射している。

横須賀の明石たちと夕張たちが力を合わせて作ったそうだ。

これで三作目になる。

けっこう反動は強そうで、彼女は苦戦しながら射っていた。

対戦車ライフルみたいなものというか、ガンダムのビームライフルみたいなものとい

うか。

彼女の短いスカートからは黒いレースのパンツが丸見えだ。お洒落さんだな。

「引き金の後ろに弾倉を付けたブルパップ式にしたり銃口に大型のマズルブレーキを付けたりして、反動を緩和しようとしているのは評価出来る。ただ、でか過ぎるし、重過ぎる。俺でも持ち運びに苦労するから、駆逐艦による運用は難しいぞ。弾倉に装填出来る弾数も五発までだし、実用化は当分先だな。」

砲撃戦能力向上計画の一環として作られた武骨な武器は眼帯娘の彼女によく似合う。しかしながら長身の天龍の身長より長く、携帯火器としてはまだまだ改良点が多い。その辺は実銃と同じだ。

「提督、天龍ちゃんに惚れちゃいそうでしょう。」

記録係の龍田がにこやかに言った。

上司をからかうのは止めて欲しい。

「ねえ、天龍さん！ これで私も戦艦になれる？」

大湊（おおみなと）からは何故か駆逐艦の清霜が来ていて、しきりに試射したがつている。

「今日の私は淡い緑色でちよつと透けた色っぽいパンツを穿いているの。見る？」

「なにを言っているんですか、龍田さん。説明しないでください。見せなくていいで

す。」

「照れなくていいのよ。」

「照れてなどいません。」

「今日はお前の揚げた竜田揚げが食べたいな、龍田。」

「大丈夫よ、天龍ちゃん。今日のお昼の担当は私だから、任せておいて。」

「仲ええですよ。」

清霜が伏せ撃ちを敢行し、一発で銃ごとひっくり返って白いパンツ丸出しになった。

それでも戦艦になることを諦めない清霜は通りがかりの霞を巻き込んで、二名がかりで二発目をぶっ放した。

今度は二名ともひっくり返り、白いパンツが二つ見える破目に陥った。

霞のパンツは青い線が入っていて、お洒落感がある。

怒りながら立ち去る霞と入れ替わるようにして来た足柄が補佐して、ようやくまともに撃てるようになった。

見えそうで見えないのがまたいい。

なんてな。

重巡洋艦の彼女だと独りでも問題なく発射出来る。

「軽巡洋艦でも馬力のある奴は単独で撃てるし、重巡洋艦だと問題なく撃てるってこと

だ。駆逐艦だと三名がかりかな？」

天龍が私の後ろから胸を押しつけながら、冷静に判断してゆく。

「天龍さん、何故私の背中に胸を押し当てているのですか？」

「龍田からこうすると提督が喜ぶと聞いたんでな。どうだ？」

「止めてください。肉体の一部が既に変形していますから。」

「別に俺は龍田と一緒にかまわんぜ。」

「冷静にないを言っているんですか？」

「最近ご無沙汰でムラムラするんだ。」

「冗談でしょう？」

「冗談だ。」

「びつくりさせないでください。」

「冗談じゃないと言ったらどうする？」

「困りますよ。」

「それだけか？」

「それだけじゃないです。」

「気が向いたらいつでも言ってくれ。男の生理はわかっているつもりだ。」

お昼からはうちの艦娘たちがやたらに体を押しつけてきて、大変困った。

清霜が懲りずに狙撃砲を発射してまたもパンツ全開になり、吹雪がパンツですパンツですと何故か興奮していた。

大本営やハローワークなどを通じて、退役した元艦娘たちがしばしば面接に来る。

元の艦種も様々で、戦艦の子が来た時は心底驚いた。

なにも函館に来なくても、と思ったが本人の強い希望もあつて採用した。

艦装は解体時の処置のために装備することが出来ないけれども、経験を教えることは出来る。

彼女にはそういう教官的役割を果たしてもらおう。

XVII：戦艦になりたい駆逐艦

あたしはきつと戦艦になる

きつとそのうち戦艦になる

今の所駆逐艦の力しかない

しかし

しかし

きつとあたしは戦艦になる

その日を夢見て力を溜める

訓練訓練訓練訓練また訓練

いつか

いつか

いつの日にか戦艦になるから

きつとみんなを守ってみせる

きつとみんなの力に変わる

その日のために

その日のために

今はいろんなことを試している

今はいろんな知識を蓄えている

あたしは清霜

趣味で大戦艦をしている駆逐艦

箱館五稜郭祭は盛況の内に終わった。

二日間ともそれはきれいな青空の下。

初日は城内の奉行所にてお菊人形状態。

二日目は何故かパレード参加になった。

大湊（おおみなと）の清霜が明石謹製FRP製戦艦級艀装をまとい、左右にローマと戦艦棲姫を従え、その後ろに大淀・足柄・霞が付き従い道を練り歩く『戦艦清霜とお助け隊』は大いに受けた。

『清霜応援隊』と幟（のぼり）を掲げた、どうみても艦娘な少女たちと青年とおっさんに

よる混成隊が、道端で賑々しく旗を振っていた。

うちの鳳翔・龍驤及び小樽の隼鷹と釧路の千代田による『ミニミニ航空ショー』も大ウケしたし、小樽の天龍とうちの龍田のダンダラ仕様な演武も見応えがあった。

釧路の初霜率いる、うちの叢雲・曙・島風並びに稚内の漣（さざなみ）・満潮による混成駆逐隊も評判がよかった。

全国から来た青葉たちが、それらの様子をあちこちで激写していた。

二日間の彼女たちの働きを労うため、翌朝貸切りレトロバスに乗って函館空港とトラピスチヌ修道院へ向かう。

湯の川のラーメン屋で炙り豚骨の味噌ラーメンを食し、コーヒールームきくちでシャリシャリ感のあるモカ味のソフトクリームを食べた。

その後、全員を百貨店の丸井今井で開催されている『魅惑の九州展』に誘う。

念のため、鎮守府は自動防衛機能を入れておいてある。

妖精たちがすこぶる張り切っていたのが印象的だった。侵入しようとする不審者や不埒者は瞬殺されるだろう。

ひらひらとリラの花舞う、春の午後。

催事場内の小さな食堂で長崎皿うどんを食べた。パリパリの麺にソースや酢や辛子を付け、野菜たっぷりのそれをわしわし食べる。

すぐ近くの屋上で、福岡産八女茶を使った抹茶ほうじ茶合体ソフトクリームを平らげてゆく面々。

天気は晴天で、少し冷たい風が吹いている。

屋上は独占状態だ。

はしやく艦娘たち。

走り回る駆逐艦群。

これが平和なんだ。

不意に涙がこぼれそうになり、慌てて空を見上げた。

この笑顔をずっと守りたいものだ。

さて、帰ったら狙撃砲の試射が待っているぞ。

天草・鹿児島・長崎県大村市のひじき、沖永良部島のザーサイ、などなどを購入した。

行ってみたいな、九州各地。

そして、沖永良部島産の珈琲を飲むのだ。

横須賀鎮守府から大口徑狙撃砲の評価試験を依頼されて以来、大湊の清霜がうちへ入り浸るようになっていた。

「ねえ、司令官。この砲を射てるようになったら、あたしは戦艦になれるかな？」

きらきらした、無垢な瞳で私を見つめる清霜。

大淀や足柄や霞がめつちやこつちを見ている。

「そうだな、清霜ちゃんの野望に一步近づけることは確かだろうね。」

「えへへ。でも司令官、あたしをちゃん付けで呼ばないで欲しいな。」

「またもや視線を感じる。」

そちらを見ると、大淀が『流れのままに！ 否定は無しの方向性でよろしく！』と書いたホワイトボードを持っていた。

君はADか。

「清霜さん。」

「他人行儀だよ、それじゃ。清霜って呼んで欲しいな。」

「困りましたね。誰も呼び捨てにしないでいいのですが。」

「私は呼び捨てにされても困らないわ。」

「ローマさん？ 小樽へ帰ったんじゃないですか？」

「観戦武官で残ったのよ。」

「確かに艦船武官ですね。」

「戦艦級の兵器だから、私がいてもいいでしょう。」

「うちには戦艦棲姫さんがいるのですが……。」

「彼女を使うことは出来て、私は出来ないの？」

「えーと……その……。」

「あたしをそろそろ戦艦にしてくれてもいいのよ。」

「あの、お二方……。困りましたね。」

横須賀、大湊、呉の三名の明石がひそひそ話をしている。

工作艦が必要なのはわかるが、なんでこんなにいるんだ？

「あれ見ましたか、横須賀さん。なかなかやりますね。」

「そうですね、大湊さん。この目で見ると納得します。」

「流石、『艦娘たらし』。他所の鎮守府の子もお構い無しですか。」

「明石さんたち、事実無根のことを言わないでください。私は誰も誘惑していませんよ。」

「呉鎮守府で艦娘たちを虜にして、転属希望者を続出させたのにな？」

「なんです、それ？ 初耳です。」

「えっ？」

「えっ？」

「あの、近々着任しますよ。」

「なにも聞いていませんね。」

「えっ?」

「えっ?」

「噴進誘導弾なミサイルは駄目ね。」

「初速が上がる前に撃ち落とされるわ。」

「或いは無反動砲化してみれば実用化が出来るかも。陸上自衛隊で採用されている対戦車砲のカールグスタフを参考に見てみるかどうか? 函館駐屯地で見せてもらうという手もありますよ。」

「デイベース式、クルップ式、クロムスキット式とそれぞれ試してみますか。」

「重巡洋艦級砲撃の出来る狙撃砲の方が現実的ではありませんか?」

「こんなこともあるかと、それは既に用意してあります。」

「では早速、清霜ちゃんにガンガン射ってもらいましょう。」

「腕によりをかけて、朝ごはんを作るから! ひじきおにぎりは霞が担当ね!」

「何時までうちにいるつもりですか、清霜ちゃん。」

「あたしが戦艦になるまでよ!」

「もしもし、明石さん、そろそろ清霜ちゃんを迎えに来てもらえますか?」

「ねえ、司令官。なにしてんの？ なに？ なに？ なになになに？」

「明日は明石さんが来てくれるそうです。そろそろお帰りなさい、清霜ちゃん。」

「えーっ！」

翌日。

大湊の明石と夕張は、『清霜戦艦化計画』と記された分厚いファイルを片手に私の目の前で熱弁した。

『艦娘火力強化計画』の一環として、清霜がその被験体に使われたらしい。

おそらく、うちの大淀が手を回したのだろう。

過保護だからなあ、彼女。

島風の独立浮遊型砲台を参考に、ファンネルみたいな感じでやれば火力は上がるとのことだ。

脳波制御用の猫耳カチューシャが用意されていた。

後は装甲か。

バルジ増設。

「拡散波動砲はどうですかね？」

「三段空母化して、艦載機で火力を上げてみるのもアリですね。」

「なにを言っているんですか。」

「デスラー砲もいいですよね。」

ちよつと君たち、自重しなさい。

「イナーシャル・キャンセラーとバスター・コレダーはどうでしょう？」

「縮退炉を基本装備にしたいわね。」

「ユウバリ・システムを使って、搭載火力の増強を図りましょう。」

「カチューシャやベーズンドルフアーを載せてみたらどうかしら？」

「噴進弾発射装置四〇門なんてどう？」

「無反動型大口径砲三門増設したら？」

清霜が戦艦になれる日はまだ遠いようだ。

戦艦になりたい

たった一言

心から叫びたいよ

きつといつかは

戦艦になり
輝けると
信じているよ

XVIII：狼たちは執務室に舞う

重巡洋艦の足柄が最新号の『しゅうむす』を手に執務室へ飛び込んできたのは、少し風の強い午後のことだった。

「提督！ 呉でなにをしてきたの!？」

血相を変えた美人が眼前へ迫ってくる。

その美しさに思わず見とれそうになる。

いきなり、なんなんなんだ。

彼女が週刊誌を突き付ける。

そこには扇情的な見出しが載っていた。

【《艦娘たらし》な提督、またも艦娘を多数誘惑して呉より大量に移籍したき者を生む!!】

「なんですか、これは?」

「それは私の台詞よ！ 大本営の姉さんと結婚するんじゃないの？ 私は姉妹一緒

でいいけど!」

「何故そこで妙高先生が出てくるんですか？ あと、どさくさ紛れに妙なことを言わな

いでください。」

「提督は私たちが処女であつてもなくても大丈夫なんですよ？」

「相手が処女だとかそうでないとかは、一切問題ではないですよ。そもそも私はモテませんし。」

「青葉、大切なことを聞いちゃいました！」

「提督が浮気者だからよ。姉さんが転属希望を何度も慰留されているのは覚えておいで。で、どうするの？」

「そうですねえ……とところで大淀さんはいずこに？」

「これを見せたら血相変えて呉へすつ飛んでいったわよ。」

「疾（と）きこと島風の如しですね。」

「あの、取材させてください。」

「暢気に構えている段階じゃないと思うんだけど。」

「そうですね、その辺教えてください。」

「先輩から電話が来ました。スピーカーを入れましょう。」

「おめえはなにしよんなら！ こりや！」

「いきなりなんなんですか、先輩。」

「ずいぶん古いネタを持ってきたのう。」

「清六さん、今はなにをしているんですかね？」

「そうじやのう……つて違うわっ！ 函館鎮守府への転属希望者が沢山出てきてしまうて、今呉は業務停止状態じゃ！ どげんしてくれるんじや!？」

「どげんもこげんもありやせんですよ。そもそも私は粉をかけまくつてなどいませなし。」

「捕まった奴はみなそう言うんじや。」

「無罪ですよ、私は。」

「嘘つけえ！ うちも鳳翔が慰留するために駆逐艦たちを説得しまくつとんじや！」

「駆逐艦？」

「そうじや、第一から第九までの提督ラブ勢を除く面々が、インフルエンザに感染したみたいで大変なことになつちよる。函館に行きたい娘がわんさか出てきとんじや。待機ばつかりさせられとる娘とか、予備戦力扱いされとる娘とか、提督に強い不信感持つとる娘とか、将来に強い不安感持つとる娘とか、堅苦しいのに辟易しとる娘とか、不満が一気に噴出した感じじやな。」

「私はパンデミックな人ですか。」

「呉にも問題があるんですねえ。」

「わしもここまで函館の感染力が酷いとは思わなんだわ。」

「人をアンドロメダ病原体みたいに言わないでください。」

「またずいぶん渋いネタを持ってきたのう。で、呉鎮守府は現在厳戒態勢中じゃ。幸い、今は大型作戦も発令されとらんから、舞鶴と佐世保に業務の一部を肩代わりしてもらつとる。」

「……私の所為ですか？」

「ようやく事態が飲み込めてきたようじゃのう。まあ、艦娘の転属希望は数少ない彼女たちの権利じゃけえ、無下（むげ）にはしようねえんじや。箱館五稜郭祭を映像で見て、それで行きたくなつたもんもおるようじや。」

「もう一度呉に行つた方がいいですか？」

「くな！ 来たらおえん！ 混乱が更に酷うなる！ ……なんじや、第一の鹿島か。なにしに来たんじや？ ん？ そうじや、今その函館の提督と話をしとる。えーと、ほんじや、鹿島と替わるわ。」

「はい。」

「はじめまして。呉第一鎮守府所属の練習巡洋艦、鹿島です。」

「はじめまして、鹿島さん。」

「鹿島さんとはやりますね、提督。」

「私はどうしても提督さんの鎮守府に所属したいんです。ダメでしょうか？」

「正式な手続きを経た転属でしたら、貴女の転属を喜んで受け入れますよ。」

「よかった。絶対函館に行きますのでよろしく願いますね、提督さん。」

「お手柔らかに願います。」

「おう、もうええんか。なんじゃ、このリストは。……うわあ。」

「どうしました、先輩。」

「あんなあ、今鹿島から手渡された転属希望者のリストをざっと読んだんじゃけどなあ。」

「はい。」

「赤穂浪士くらいの人数がおる。」

「えっ?」

「こりゃあ、選考会がいるのう。」

「えっ?」

「やつぱり呉へ一度けえ。選抜させちやる。」

「ええっ!」

「行けん娘に引導を渡しちやれ。」

「函館の容量はここまでですって言わないといけませんか?」

「そうじゃ。競争倍率がとんでもないことになつとるのう。」

「全員……は無理ですよねえ。」

「今なにを考えとるかわかるがやめとけ。舞鶴や佐世保が今戦々恐々としとるしのう。余計なことをすると南方へ行かされるぞ。」

「えっ?」

「呉の次はうちじゃねえかと、歴戦の提督たちが怯えよんじや。実際、わしのとこへも問い合わせが幾つか来とる。」

「ご冗談でしょう?」

「冗談じゃねえわ。」

「転属出来ない子は大丈夫でしょうか?」

「少しは頭が回ってきたようじやのう。」

「えっ、それってどういうことかしら?」

「なんじや、足柄もおるんか。なに、簡単なことじや。騒乱を巻き起こしたもんの行く末ゆうたら……。」

「先輩。」

「さつきもゆうたが、全員はおえんぞ。」

「第六鎮守府所属の子は全員不可です。」

「ほお。」

「もしかして第五鎮守府が中心ですか？」

「ご名答。」

「では、第一鎮守府の鹿島と第五鎮守府の子たちを引き受けます。他の子たちは先輩たちかなんとか説得してください。」

「三方一両損みたいな話になったのう。」

「リストは先輩だけが知っているんですよね。」

「その通りじゃ。」

「では問題ありません。騒乱など最初からなかったのですから。」

「はっ？ なにをゆうとる？」

「青葉さん。」

「はい、取材させてくれますか？」

「今回は勇み足でしたね。」

「はい？」

「青葉に泥をかぶらせるつもりか。」

「ええ、嚴重注意くらいで内々に済ませた方がいいでしょう。遺恨が残らないようにすべきです。」

「えっ？」

「足柄さん、青葉さんを確保してください。」

「承知！」

「あつ、あの……一体……これは……。」

「先輩。」

「なんじゃ。」

「解体にはならないようにしてあげてください。」

「仕方ねえのう。」

「では足柄さんは叢雲さん吹雪さん曙さん霞さんより成る駆逐隊を率いて、こちらの舞鶴の青葉さんとそこら辺に隠れているだろう佐世保の青葉さんを曳航して呉までお使いに行ってください。」

「わかったわ。」

「なんで私が舞鶴の青葉ってわかったんですか？」

「ヘアピンの留め方とか、仕草とか、まあそんなところですね。」

「提督はん、ようやく侵入者を捕まえたわ。」

「お疲れさまです、龍驤さん。」

「ども、佐世保の青葉です！ なにか一言ください！」

「では、舞鶴の青葉さんと共に呉まで出頭してください。」

「はい?」

「あ、あの、提督。その……。」

「残念ですが、取引には応じません。この場にいたのが不幸でしたね。お二方とも、今回は泥水を飲んでください。」

「ええーっ!?!」

「塩水をたらふく飲むよりはマシでしょう?」

「えーっ。」

結局、週刊誌の記事は誤報で押し通した。

先輩と鳳翔さんは文字通り鎮守府を駆けずり回り、他の提督たちも必死で転属希望者たちを説得して慰留させた。

今後の件で、呉での艦娘の運用が少しは改善されるだろうとのことだ。

二名の青葉だが、現在演習の標的として奮闘中らしい。まあ、頑張れ。

XIX：北北西に進路を取れ

所々煙を出している艦装をまとった娘たちが六名、暗い海原を走っている。

彼女たちの装備はところどころ焼け焦げていたり穴が空いていたり捻れていたりと、損傷が随所に見られた。

彼女たちの衣類も破れ目が幾つもあったて、大事なところが見えそうで見えない深夜ア
ニメーション地上波放映みたいになっている。

先頭を駆けるは戦艦。

艦装には英語で『ネヴァダ』と記されている。

マントを羽織った金髪碧眼ツインテール少女。

回転弾倉式拳銃に見える銃火器を両手に持って、油断なく周囲を見回している。

彼女は釘宮理恵みたいな声でぼやいた。

「まだ陸地は見えないの、ヨーキー？」

カウボーイハットをかぶり、露出度の多くインディアン風な衣裳をまとった巨乳娘が
新たに弓から矢を放ち、ぷるんと双丘を震わせた。

矢はプロペラ機へと変わり、空を舞う。

左肩に飛行甲板が取り付けられていた。

腰の矢筒にはCV-5と記されており、艦装には英語で『ヨークタウン』と記されている。

彼女は、佐藤利奈みたいな声で言った。

「偵察機は二〇分毎に飛ばしているけどね、どうやらホツカイドウに向かっているのは確かかなようだよ、ネリー。」

「ま、考え過ぎないことも大切ね。さっきの連中は手強かったけど、きちんと撃退出来たじゃない。『彼ら』よりはずつと戦いやすい相手よ。」

小林ゆうみみたいな声で明るくケタケタ笑う、ミニスカポリス的衣裳をまとった娘。

その圧倒的雙丘が存在を主張するように震える。

両の手にはトンブソン短機関銃に見える銃火器。

その艦装には英語で『シカゴ』と記されていた。

「シーツの言う通りよ、ネリー。焦っても結果は出ないわ。エリー、スッキー、二人とも調子はどう?」

ふんわりした雰囲気娘が、皆口裕子みたいな声でにこやかに言う。その戦艦級艦装には英語で『ミズーリ』と記されている。

薄手の衣装は布地が少なく、たわわな双丘が存在を主張していた。

「大丈夫よ、ミリー。問題ないわ。」

青いドレスを着た、金髪碧眼の人形めいた美少女が阿澄佳奈みたいな声で答える。

その艦装には英語で『エドサル』と記されていた。

彼女は大きな肩掛け鞆を肩から提げて、お出掛けしているみたいだ。

だが、彼女が背中に差している長剣が戦士であることを示している。

「こつちも問題なし。なんだかお腹空いてきちゃった。」

水着姿の少しミステリアスな感じのおかつば頭の水着少女が、福園美里みたいな声で明るく返事する。彼女の跨がる魚雷状の主機には英語で『スカルピン』と記されていた。

「この海域は懐かしい感じがするわね。」

「私、大丈夫かしら？ 昔、『彼ら』に激しい砲撃をその……。」

「ネリーはさ、考え過ぎるんだよ。もっと気楽にした方がいい。」

「昨日の敵は今日の友、よ。日本人は知性的民族だし、大丈夫。」

「日本かあ……スシ、テンプラ、スキヤキ、サムライ、フジヤマ、ニンジャ、ゲイシャだっけ？」

「日本ってどんな国？」

「とてもいい国よ。」

「そうだといいね。」

戦艦二名、空母一名、重巡洋艦一名、駆逐艦一名、潜水艦一名の混成艦隊は一路函館に向かっている。

それは意図的に企図したものではなかったが、なにかに惹かれるように向かっているのは事実だった。

暗い、豪華な調度のある広い部屋。

スーツ姿の眼鏡美人がひなびたおっさんに話しかける。

「大統領、六名のシッブガールは順調にハコダテへと向かっています。」

「わかった。軍事衛星ワカッテンネンからの監視は続けてくれたまえ。」

「はっ!」

「気になるかね?」

「ネヴァダがハコダテで幸せを得られるなら、それは私にとっても幸せですわ。」

「そうか。」

「同じ痛みを知っていますから。」

「……ところでハワイ攻略作戦の進捗状況はどうなっているかね?」

「各戦線への大量投入に伴った杜撰な扱いに抗議する、という駆逐艦と軽巡洋艦を中心

としたストライキが明後日には解除予定ですから、その後進展予定です。」

「今までの強行策が裏目に出たか。」

「まさにその通りですね、大統領。」

「ハワイまでの航路上に建設中の海上要塞はどうなっている？」

「敵対勢力による多数の魚雷攻撃で、あえなく沈没しました。」

「これで三回目か。」

「はい、そうです。」

「戦いは数だよ、君。」

「承知しております。」

「人権団体の動きは？」

「相変わらずですね。」

「擁護団体の動きは？」

「それも同様ですね。」

「アラスカ方面はどうかね？」

「戦線は膠着した状況です。」

「大西洋方面はどうなった？」

「まだ安定はしていません。」

「南米の状況だが多少はよくなったか？」

「相変わらず批判が殺到していますね。」

「ペンシルヴァニア。」

「はい、大統領。」

「我が国は強くなってはならない。」

「仰る通りです。」

「ならば、わかつているな。」

「はい。ただ……。」

「なんだね？」

「明日から旧式戦艦・航空母艦連携型ストライキが無期限決行予定です。ちなみに率いるのは第六軍団第三任務艦艇群のアリゾナです。複数のアーカンソーやニューヨークたちも参加を表明しています。」

「オーマイガツ！ ペンシルヴァニア、酒を持ってきてくれ。バラントインの三〇年があっただろう。」

「大統領。あまりお酒は……。」

「酒でも呑まなきややってられん。」

「ところで、大統領。」

「なんだね？」

「明日からの無期限ストライキには私も参加します。」

「な、なんだって？」

「業務の引き継ぎは、第一軍団第四任務艦艇群の駆逐艦のショーに行いました。」
「あの子はとてもいい子なんだが……いけません平和主義過ぎてだな、君……。」

「すみません、大統領。私の業務時間が終了しました。失礼します。」

「ペ、ペンシルヴァニア！ ま、待ってくれ！ 私の話を聞いて……。」

無情に閉まるマホガニーの扉。

遠雷が聞こえてきた。

風が強くなってゆく。

雨が激しく降りだす。

うつむく最高権力者。

どうやら、物量作戦は当事者たちからすると不評のようだ。

強い風が吹いた翌日。

函館は晴天快晴の天気。

やや冷たい風が心地よい。

「私は戦艦のネヴァダ。貴方がハコダテのアドミラル？ 私たちは海で産まれてなになんだかよくわからないままに敵対勢力と交戦して、ここまで来たの。保護を求めると共に相応の待遇を要求するわ。」

入渠を終えて身だしなみを整えた、金髪碧眼の美少女が挨拶してくれた。

メリケン艦娘来日す、という情報は瞬く間に全国津々浦々を駆け巡り、おっとり刀でやってきた在日米軍を含めて多数の人々が函館へと訪れる結果になった。

メリケンの人々大喜びである。

構成する面々は以下の通りだ。

戦艦のネヴァダ。

戦艦のミズーリ。

航空母艦のヨークタウン。

重巡洋艦のシカゴ。

駆逐艦のエドサル。

潜水艦のスカルピン。

大本営から訪れた長門教官が、ネヴァダと懐かしそうに会話をしている。

私の教官殿は屈託なくメリケン艦娘と交流していた。

流石だ。

彼女が普通に接することで、文句を言いにくい雰囲気を作り上げている。

しかも、在日米軍の高官も一緒だ。

やり方が上手い。

「私は何度も函館への転属希望を出しているのだが、悉く慰留されていてな。ここに着任出来るネヴァダが羨ましいよ。」

「ふーん、パツとしない指揮官みたいだけど。」

「その内わかる。わかつた頃にはもう離れられなくなる。」

「なにそれこわいわ。冗談でしょう?」

「さて、どうかな。自分自身の目で確かめるといい。」

メリケン艦娘は社交家揃いのようで、鎮守府の面々や報道陣などにも明るく接していた。

と。

右腕に柔らかなものが押し付けられる。

「これからよろしくね、アドミラル。」

警官の服装に似た、露出度満点の服を着た娘が腕を絡めていた。

名はシカゴだったか。

「はい、よろしくお願ひいたします。」

「堅苦しい人ね。」

「ははは、すみません。」

「ふふふ、日本人らしい反応だわ。」

賑やかな夜が更けてゆく。

その後、メリケン艦娘たちに捕まって質問攻めにされた。

翌朝、憲兵の國江さんによる林崎流抜刀術の模範演技が行われ、メリケン艦娘や在日米軍の面々に特に大好評だった。

我が教官もしきりに感心している。

長門教官が私の左側、ネヴァアダが私の右側という布陣。

う、動けない。

食事の時もこの布陣。

大本営から来てくれた間宮とうちの鳳翔が次々に料理を運んできて、私の口へと運んだ。

やめて欲しいと二名に頼んだのだが、何故かにこやかに拒否をされた。

確かに絶品だが、とても恥ずかしい。

面白がつて撮影する全国の青葉たち。

在日米軍の面々の視線がややこわい。

これからどうなるのだろうか？

そうそう、近日呉から転属する艦娘たちの受け入れ体勢も整えないといけない。
毎日ドタバタだ。

やれやれ。

XX：呉から来た娘たち

呉第六鎮守府の先輩から電話がきたのは、メリケン艦娘たちが着任して三日目のことだった。

「あんな、呉からの転属娘たちじゃけど、なんとか人数を一桁に抑えといた。」
「ありがとうございます。」

「鹿島と第五鎮守府の子だけとはいかんかったわ。もう、むちやくちやじゃ。」
「そんなに大変だったんですか。」

「本気の本気になった駆逐艦は、あつさりとんでもないことしよるけえおつとろしいんじゃ。あつけらかんと覚悟決めよるし、元々好奇心旺盛で無邪気じゃから、その進撃を止めるのは至難の業じゃ。ある意味無敵艦種じゃけえ。」

「……お疲れさまでした。」

「なあ。」

「はい。」

「来月以降でええけえ、あと二〇名くらい受け入れてくれんか？」

「無理ですよ。現状でも許容量をとつくに超えているんですから。なんちやつて鎮守府の人数じゃないですよ。そもそも先輩、そんなに受け入れるな南方へ送られるぞつて言っていたじゃないですか。」

「そうじゃつたのう。ははは。」

「なにかそちらであつたんですか?」

「呉の提督たちやその秘書艦たちや、うちの鳳翔が心痛やらなんやらで寝込んでいるくらいじゃ。」

「それ、大変な事態じゃないですか!」

「こげなことが他所に知れたらせつてえおえんけえ、誰にも言うなよ。現在進行形で呉は絶讚業務停止状態じゃ。舞鶴や佐世保が継続して業務の一部を肩代わりしてくれとるが、あちらも厳戒体勢になつとる。」

「承りました。」

『『最終兵器おっさん』つて呼んじやるわ。』

「やめてください、訳がわかりません。」

一体、なにが起きたんだろう?

呉から帰ってきた大淀もなんだかぐつたりしている。

膝枕しながら業務したら半日で復活した。

彼女の復活後、膝枕を要求する艦娘が殺到して大変だった。

その更に三日後。

呉から移籍してきた艦娘たちが執務室に横一列で並んでいる。

◎練習巡洋艦の鹿島

◎駆逐艦の早霜、磯波、皐月、菊月、望月

、子日（ねのひ）、嵐

◎空母の雲龍

総勢九名が私をじっと見つめている。

何故かもしもじしている子さえいた。

その視線だけで穴が空きそうだった。

もうなにかなんだか。

これ、私が悪いのか？

隣にいる本日の秘書艦の龍驤が、こそっと小声で耳打ちしてくる。

「なあ、キミ。おっぱいの大きい子がええんか？」

「えっ？」

艦娘の聴力だと、これくらいの距離ならば僅かな音も聞き逃さない筈だ。

何故今それを問う？

ほら、皆聞き耳を立てている。

皆、胸を寄せ上げし出したよ。

「メリケンのおっぱい大きい子たちに迫られて、満更でもない顔しとったやん。」

「事実無根です。」

「鼻の下延ばしとったやん。」

「していません。」

「ほんまか？」

「ほんまや。」

「でも男の人やしなあ。そういうのホンマは好きなんちやうの？」

「胸の大きさが決定的評価につながるとは限りません。」

少し残念そうな表情になる艦娘と誇らしげな表情になる艦娘とが発生する。

うん、龍驤君、後でお話をしようか。

何故今私にぴったりくつつくのかね？

剣呑な空気になってきた。

さつさと挨拶をしようか。

「皆さん、函館鎮守府へようこそ。私がここの提督です。ここは深海棲艦ありメリケン

艦娘ありの混沌とした場所です。大切なのは普段からお互いを思いやり、戦闘では無事に生きて帰ってくることです。華やかな勝利とは無縁の鎮守府ですが、結束力の強さで全国一を目指しましょう。」

そして、皆にトラピストクッキーを一箱ずつ渡した。

「心ばかりの品です。味わって食べてください。では、解散。」

あれ？

解散って言ったのに誰も執務室を出ていかない。

何故みんな、私の周りへと集まってくるのかな？

何故みんな私の体に胸を押し付けてくるのかな？

やめなさい、はしたない。

これこれ、おっさんの顔を舐めてはいけないよ。

おっさんの指を、そこへ誘導してはいけないよ。

あんまり悪戯が酷いと、おっさん怒っちゃうよ。

「新人さんたちにも困ったものですね、龍驤さん。」

「あれだけされて、それを困ったものだと言える神経に感心するわ。」

「ところで、そろそろ膝の上から降りて欲しいのですがね。」

「変形してきたからか？」

「変形してきたからです。」

「仕方あらへんなあ。」

「どさくさ紛れに触らないでください。」

「はいはい、せや、今夜添い寝してええか？」

「この間は強く抱き締められたから、体がみしみし言いましたね。」

「威力調整するからええやろ。」

「あと、お触りは無しですよ。」

「ちえつ、しゃあないなあ。」

「あのっ！ 今！ 添い寝と聞こえましたけど！ 提督さんと添い寝出来るんですかっ

!？」

「鼻息荒いで。聞き耳立てとつたな、鹿島。」

「な、なにを根拠にそんなことを……。」

「ウチは軽空母やで。」

「これは紙？ 飛行機の形？ 式神？ 艦載機!? ま、まさか、私を監視していたんです

か？」

「ちっ、ちっ。そないケチな真似はせえへんよ。提督はんの身辺警護や。艦娘装った鉄

砲玉が来んとも限らんしな。弾除けが必要やろ？」

「私は提督さんと不健全で淫猥でふしだらな関係になって、色欲にまみれた日々を送りただけなんです！」

「うん、素直でええな。キミ、添い寝は一名追加や。」

「鹿島さん、ちよつとお説教します。そこにお座りなさい。若い娘がなんと淫らなことを言っているんですか。」

「あーん、藪蛇だったわ！」

夜になつてもこの鎮守府はざわざわしている。

みんなアドミラルアドミラルと連呼している。

「ソイネ・システム？　なによそれ。」

「アドミラルと一緒に眠って、英気を養う方法のことよ。」

「エナジードレインなの、それ？」

「ある意味生気を吸っているのかもね。」

「セックスをするってこと？」

「それはしないんだってさ。」

「一緒に眠るってそういうことじゃないの？」

「日本人は世界的にエロいので有名だけど、これはなんか違うみたい。」

「ネヴァダは興味ないの？」

「べ、別に興味ないわよ！」

「ふーん。」

「興味なんかないわ！ 私は別にアドミラルとセックスしたいと思ってるんじゃないんだから！」

「ネヴァダさん、声が大きいですよ。」

「あつ！ ア、アドミラル？」

「貴女のように魅力的で可愛らしいお嬢さんが、セックスがどのと大きな声で叫ぶのは感心しません。」

「あうう。」

「アドミラルって、誰とでもソイネするの？」

「希望者がいますから。手は出しませんよ。」

「それって、私も出来る？」

「今夜でなければ。」

「じゃあ、明日がいいわ。」

「わかりました、シカゴさん。」

「えっ？ シーツー、なにを言っているの？」

「そんなに驚くことじゃないでしょ、ネリー。」

「じゃあ、あたしも試してみようかな。」

「では、ヨークタウンさんもご一緒で。」

「ヨーキー？ 貴女まで、どうしたの？」

「こんな冴えないおっさんのどこがいいんだろう？」

「わからない。」

「わからない。」

「わからない。」

「気づくとすぐ傍にアドミラルがいた。」

「体のお加減がすぐれないんですか、ネヴァダさん？」

「だ、大丈夫だから！ き、気にしなくていいから！」

「そうですか、もし調子が悪くなったらすぐに言ってくださいね。大湊（おおみなと）から明石さんに往診に来てもらいますから。」

「アドミラルの看護がいいわ。」

「えっ？」

「あっ！」

「へえ。」

「ほう。」

「な、なんでもないわ！　おやすみ！」

別に好きでもなんでもない。

なんでもないと云ったら、なんでもない。

頬が赤いのも火照った感じなのも、全部全部気の所為！

私はネヴァダ。

誇り高き戦艦。

あんなおっさんに屈したりしないわ！

XXI：フローレンシアの猟犬

東南アジア某国にある背徳の港町、ロアナプラ。

犯罪見本市とも呼ばれる、悪徳の街。

荒くれどもが夜を闊歩する犯罪都市。

その魔窟も深海棲艦の侵攻以降は羽振りが悪くなり、犯罪の質が下がったとも言われる。

だがしかしばってん、最近頭角を表している集団があった。

その構成員は年端もいかぬ少女ばかりだが度胸は満点、鉄火場もなんのそのという恐れ知らずの鉄騎兵。

紅く染めた肩章を付けていることからレッドシオルダーと呼ばれる彼女たちは、瞬く間にロアナプラの一角を牛耳るようになった。

嘗てその勢力の強さを誇ったロシア人たちも、今は北の国に去ってしまった。

黄巾党の末裔を自称する越南人の酒場でも喧騒の日々は遠い夜になりつつあった。

武装少女たちが御輿に担ぐは冴えないおっさん。

白く古い型の軍服を着たおっさん。

だが、彼こそは無類の忠誠心を持って戦う少女たちの心の支え。

それがおっさん。

一見人畜無害そうなおっさんが一度指を向ければ、そこは少女たちの狩場。

悪徳の街は新しい時代を迎えようとしていた。

風強き深夜。

その悪の巣窟の街から函館に流れ着いた、うら若き娘が二人。

一人は長身の娘。

三つ編み巨乳眼鏡っ子でメイド服、と属性てんこ盛りである。

一人は小柄の娘。

あどけない表情の東欧系美少女は人形みtainな雰囲気だった。

貨物船の船長に礼を言うと、長身の娘は大ぶりの傘と大型のスーツケースを持ち、小

柄の娘は大きな包みと肩掛け鞆を持った。

二人は姉妹であるかのように、仲良く並んで鎮守府方面に歩き出した。

私とその報告を大淀から聞いたのは、風の冷たい雨降る午後のことだった。

雷の音はもう遠い。

「提督専属メイド？」

「ええ、提督も今後はなにかと命を狙われるかもしれませんが、最凶級殺戮系戦闘員二人を私の裁量で雇用することにしました。」

「ちよつと待つて、大淀さん。今とてつもなく不穏な単語が幾つも聞こえたんだけど。」

「『常識』が通用しない相手なんて、この世にはごろごろいます。人間の敵は人間ですから、そんな連中は『猟犬たち』が始末するのが最適解でしょう。提督が殺られてからは遅いんです。『先々の先』と二階堂流兵法にもありますし、仮面将校も『戦いとは常に二手三手先を読むものだ』という感じの発言をしています。」

「なんだかどんどん物騒な話になってきていますよ、大淀さん。」

「提督、貴方のお……お体は私たちのモノです。」

「今、なんといいかけました。それに、私は貴女たちのモノではありません。」

「対人戦闘の専門家は重要ですよ。」

「函館を戦場にするつもりですか？」

「提督に仇なす者すべてに鉄槌を！」

結局、大淀に押し切られる形で戦闘員たちを受け入れることになった。

勇猛さで有名な群馬県人や集団戦に強い栃木県人も候補だったらしい。

夜、寝転びながら中身がおっさんの島風に相談してみたが、結果的に『まあ、いいんじゃないか。』と抱きつかれながら言われた。

隣でスースー眠る最速駆逐艦。

寝るのはつやーい！

その翌々日。

巨乳三つ編み眼鏡っ子メイドと人形系美少女メイドが執務室で私に挨拶する。

「私がこの鎮守府の提督です。よろしくお願いします。」

「ロツタ・ミルマスカラスです。よろしくお願いたします、ご主人様。」

「アマーリエよ。よろしくね、ご主人様。」

「大淀さん。」

「なんでしよう、提督。」

「何故、アマーリエさんを抱っこしているんですか？」

「だって、この子こんなにも可愛いじゃないですか。」

落ち着きたまえ、大淀。

彼女はどうかやら、だいぶ前から手を打っていたようだ。

本日の秘書艦の島風が私に耳打ちする。

「彼女たちはかなり強い。」

「ほう。」

「試してみてもいいかな？」

「人と艦娘とでは、相手にならないでしょう？」

「たまに、人を超えた戦闘力を示す者がいる。」

「ほう？」

演習場での模擬戦闘は驚きの連続だった。

弾丸を斬り落とし榴弾を蹴り飛ばす島風。

ロツタのスカートの中からは手榴弾が幾つもこぼれ落ち、傘は散弾銃に早変わりし、四五口径の二丁拳銃で暴れ回った。

アマリーエも体格に似合わぬ巨大な機関銃をばんばん射ちまくり、手斧をぶんぶん振り回した。

三名が乱戦で楽しそうに雄叫びを上げながら、フルスロットルで走り回っている。

うちの元々の面々は、興味深そうに眺めていた。

戦艦棲姫やメリケン艦娘勢も興奮して見ている。

呉からの転属組がポカンと口を開けて見ていた。

なんだ、これ？

人外対決か、これは。

「思った以上の掘り出し物ですね。これで提督の貞操も安心です。」

大淀がにこにこしている。

これこれ、その娘さん。

欲望が駄々漏れで御座る。

青空に射撃音と爆発音とが高らかに響く。

嗚呼、なにかが思いつきり間違った方向に進んでいるような気がする。

「なにあれ、なにあれ、司令官！ あれだけ動いたら、あたしも戦艦になれるかな？」

背後の清霜が、興奮した声で私の背中に飛びつく。

言っとくが、君の所属は大湊（おおみなと）だからね。

視線を感じ、そちらを見ると戦艦のネヴァアダがいた。

彼女は何故か赤い顔になり、ぷいとそっぽを向いた。

もつと人間関係……じゃない、艦娘関係をよくしなないとな。

彼女の近くに行こうとしたら、ぐいと別の子に引き寄せられた。

おうっ！

豊かな双丘に顔が包まれる。

「雲龍さん、これはなんの真似ですか？」

布地の極めて少ない衣装をまとった航空母艦に問う。

「私の妹の天城はね。戦後人々の役に立つべく函館に来たの。」

「それは知りませんでした。」

「でもね、彼女は様々な理由からあまり役には立てなかった。」

「そうでしたか。」

「だから、二度目の機会をあの子に与えて欲しいの。呉第一鎮守府から呼んで欲しいの。提督の一言にはあの子を呼べるだけの力があるわ。その代わり、私の体を好きにしてくれていいのよ。提督の望んだことはなんでもするわ。どう？」

「雲龍さん。」

「ええ、なにかしら？」

「私は自分自身の立場を悪用する輩が大嫌いだね。」

「そう。」

「貴女も自分自身を売るような真似をしてはいけません。」

「提督だから言ったのよ。」

「私が相手でもです。」

「固いのね。」

「そういうことをしてはいけません。」

「好みだわ。」

「離してくださいませんか。」

「厭だと言つたらどうするの?」

「ウチが相手や。」

「龍驤さん!」

「ウチの大好きな人をようも好き勝手してくれたなあ。許さへんで。」

「どうするつもり?」

「演習場で勝負や!」

「受けて立つわ。このジョイスティックにかけて。」

「どさくさ紛れになにしとんねん!」

「これはとてもいいものよ。前から目を付けていたの。」

「せや。だから好き勝手に揉み揉みしたらアカンのや。」

「君たち、真つ昼間からなにを言っているんですかね。」

「その勝負、私が預ります!」

「鳳翔さん!」

「勝負といえば、味勝負。丁度姉川さんと老川さんが札幌にいます。あの二人に函館へ来ていただいて、公正に判定していただきましょう。」

「ええで、ウチがどれだけ料理をしてきたか教えたるわ。」

「呉の間宮さん直伝の秘伝の技を見て驚かせてあげるわ。」

「提督、料理はなんにします?」

「そうですね。ネヴァアダさん、なにか食べてみたいものはありますか?」

「わ、私? ア、アドミラル! な、何故私に聞くの!?!」

「一日も早くこの鎮守府に慣れていただききたいのと、おいしいものを食べていただくという気持ちからです。」

「そ、そうね。ア、アドミラルはなにか料理を作るの?」

「ええまあ、カレーくらいでしたら作れます。」

「じゃ、じゃあ、それが食べたいわ。」

「決まりですね。では味勝負はカレー対決! 龍驤さん、雲龍さん、提督の三つ巴の仁義なき戦いがここに繰り広げられます。」

「ちよつと待つてくれへんか、鳳翔さん。そないなことされたら、提督に手伝ってもらえへんやんか。」

「あら、そうでしたね。でも心配ご無用です。提督の助っ人はわ……。」

「ネヴァダがやるよ。」

「「「ヨークタウンさん!」」」

「ちよ、ちよつとヨーキー! なにを言っているの!」

「アドミラルと頑張りなよ。いやかい?」

「べ、別に、いや……………じゃない。」

「よし、アドミラルの支援は我らアメリカ隊が行わせていただく。よろしいか、ホーシヨー。」

「……………仕方ありませんね。」

「あたしも司令官を手伝う!」

「よし、キヨシモも一緒だ。」

「あつ!」

「どうした、ホーシヨー?」

「い、いえ、なんでもありません。では勝負は三日後。場所は食堂。足柄さんはカツ担当をお願いします。」

「任せといて! みなぎってきたわ!」

なんかあれよあれよという間に、とんでもないことになっていた。

あれ、また動けなくなった。
袖を掴まれている。

「アドミラル。」

真つ赤な顔のネヴアダが、私を睨みながら言った。

「戦うからには勝利一択よ。アメリカ人は勝つことに貪欲なの。」

「おいしいカレーを心がけますよ。」

「もし負けたら、私の言うことをひとつ聞いてもらおうわ。」

「貞操以外でお願いします。」

「な、なにを言っているのー！」

「よかった。エロいことじゃないんですね。」

そう言うと、何故か七面鳥のように顔色を変える金髪碧眼少女であった。

ふと気配を感じて振り向く。

武装メイドなロツタがすぐそばにいた。

「わたくしはいつもご主人様のすぐそばにいますよ。」

「あたしもよ。」

目線を下げるとアマーリエがいた。

なんだかどンドン賑やかになってゆく。

まるで魔王の手のひらで踊っているみたいな錯覚をおぼえる。

いや、弱気になってはいけないのだ。

みんなの過ごしややすい環境を整える。

それが我が仕事。

我が戦。

温もりを信じあう函館の仲間。

彼女たちのためにすべてを賭けて、やるぞ力の尽きるまで。

例え嵐が吹こうとも。

例え大波荒れるとも。

ドン！

「おうっ！」

「提督さん、私も精一杯手伝いますからね。愛情たっぷりのおいしいカレーを作りましょうね。」

いきなり抱きつかれた。

まさに、鹿島アタック。

積極的だな、この子は。

どんな対決になるやら。

振り向くと、ネヴァダが私を睨んでいる。
微笑むと、何故か赤い顔で去っていった。
なんかよくわからん。
年頃の子は難しいな。

XXII：閨の一幕

どういふ風の吹き回しだい、提督。

最近は長門や加賀たちだけにご執心だと思つただけだね。相変わらず乳房が好きだな、君は。

函館の提督は胸の大きさにそれほど執心していないらしい。処女も非処女も現役艦娘も元艦娘もなんでもこいだそうだし、しかも全員をよく誉めているらしい。

殺る気を高めて伸ばす方針だそうだし、おいおい、顔が随分強ばっているぞ。

ああ、すまない。

閨（ねや）で別の男の話をするとは配慮が足らなかつた。

すつかりうなだれてしまつてゐるな。

自慢のこの胸を使うから許してくれ。

至近弾か。

久々だから、仕方ないさ。

次は是非とも当ててくれ。

まあ、五番砲塔が火を吹かなかつたらそれでいいさ。

まだまだ元気とは流石だ。

そうそう、軽重双方の巡洋艦たちや軽空母たちが出撃したがっていたよ。

駆逐艦の子たちも……………。

……………ああ、言いたいことはわかる。

大艦巨砲主義もわかるが、他の子たちをもう少し大切にしてくれないかな？
腰にはいた刀も格納庫の瑞雲も、いつも磨いてばかりじゃつまらないんだ。

……………悪かった。

……………そうだな、そろそろ集中しよう。

すまなかつた。

少し取り乱していたようだ。

こうやって君を見下ろすのも久しぶりだ。

さて、この振動にどれくらい耐えられるかな？

ほら、ほら、さっさと降参したらどうだい？

ははは、やっぱり頑固だね。

では回転してみようか。

それっ！

どうだい？

ほう、その意思是尊重するよ。

そういうところは好ましいね。

じゃあ、ちよつと持ち上げて。

これは初の試みというやつさ。

そらそらそら！

しぶといねえ。

武闘派は伊達ではないということか。

ではここで舌を投入する。

我が舌技に泣くがいいさ。

まだするのかい？

好きだねえ。

いや、私も嫌いじゃないさ。

これでも楽しみにしていたんだ。

ところで、敵艦隊はなんの為に攻めてくるのだろうね？

今は君が私を攻めてくるということなのだね、ふふふ。

私たちは一体なんの為に戦っているのだろうね、提督？

……提督？

前はこんな限なんかなかったのに。

私が苦心しながら一生懸命作ったビーフシチューを、おいしいおいしくて何
度も何度もお代わりしてくれたあの日の君はもうここにはいないんだな。

結局、君の力にはなれなかったな。

本当にすまない。

なあ、提督。

君はなんの為にここにいるんだい？

………いっそのまま君を………いや、やめておくか。
とどめにもう一回搾り取っておくことにするよ。
それっ！

今まで世話になつたね。

ありがとう、提督。

君のことは嫌いではなかつたよ。

XXIII：おっさんはちよっこしエツチな作品を作るのに
協力しちやいました！

中森明菜の『スローモーション』と『セカンドラブ』を熱唱する。

場所は函館鎮守府内の講堂。

これで五回目のやり直しだ。

市内女学園の吹奏楽部に全面協力してもらい、懸命に歌った。

リテイクが出る度、演奏している女学生たちに詫びを入れる。

間宮の淹れてくれたお茶で喉を潤しながら何度も何度も歌う。

マスター・オータムクラウドのダメ出しは意外に厳しかった。

横須賀第一鎮守府から来た彼女の仕事にかける情熱を感じる。

歌唱撮影後、好奇心旺盛な女学生たちから質問攻めにあつた。

彼女たちが帰った後、今度は全国各地の鎮守府から訪れている『浪漫鹿鳴館』の面々

より質問攻めにあう。

なんじゃい、これは。

ネヴァダから渡されたタオルで顔を拭く。
ふう。

拭き終わると何故か次々手が伸びてきた。
一体なにをしているんですか、貴女がた。

現在進行形で起きている事象に鑑み、全国各地の鎮守府で浮き足立つ艦娘たちの気持ちを安定させるべく、私は駆逐艦の秋雲たちや重巡洋艦の青葉たちに協力しようと決めた。

このままでは流石にいかんだろう。

放置は出来ない。

まさか私一人の判断行動で全国の鎮守府が崩壊するとは思えないが、出来そうな提案は採用するべきだろう。

ちなみにカレー対決は後回しになった。

私に出来ることなど大してない。

だからこそ、力を出せる場所があるならば能動的に行動すべきだ。

話し合いの結果として、『最終兵器提督』と題を付けられた艦娘系週刊誌『しゅうむす』

の緊急特別企画號の発行が決められた。

これが私たちの打つ手だ。

だがしかしばってん。

予約だけで初版三〇〇〇部が完売とは、正直な所訳がわからない。

予約特典が効いたのかな？

増刷確定っておそろしい。

鶴の鳴く夜はおそろしい。

ひとりで二冊も三冊も買ってどうするっていうのか？

元艦娘の問い合わせが大本營の広報室に殺到して、一時は回線がパンクしたそうだ。

なんかよくわからん。

どこにそんな需要があるんだとうちの艦娘たちに言ったら、散々な迄に説教された。

呉第六鎮守府の先輩に相談したら、ガラガラ笑われた上、全面的に協力するように厳命を受けた。

さて、次は市内観光案内か。

洋式建築群、五稜郭、トラピスト修道院、トラピスチヌ修道院、大沼公園。

壬生狼の扮装をさせられ、街を歩く。

一体全体なんの罰ゲームだ、これは。

でも、移動するのにバス五台つて意味がわからないよ妙高先生。

「ところで、何故先生がここにいらっしゃるんですか?」

「足柄が粗相をしていないかと心配になりましたのと、提督の顔を見たかったですよ。ふふふ。」

「先生、柔らかいです。」

「当たっているんですよ。」

誰かの歌声が聞こえる。

かすかな響き。

せつない響き。

最後の魚雷が

撃てなかつた海域

燃える砲塔

熱い大破です

市内での撮影は二日かかった。

映画かドラマの撮影だと思ったらしい一般市民の方々が、女の子たちからちやほやされる私を見つめてひそひそと会話をしている。

うん、一人きりでご飯を食べる人の話じゃないんだ。

あそこまで男前じゃないし。

湯煙の彼方にいる、元殺し屋の人の話でもないんだ。

あそこまで精悍じゃないし。

あの子は元艦娘だな。

段々なんだかそういうことがわかるようになってきた。

市内のとある温泉を借りきって、早朝からハードな撮影。

ふやけてしまいそうだ。

ハンドタオルだけにて最終防衛線墨守状態で撮影。

誰が得をするんだ、こんなの。

何故こんなに観衆がいるんだ？

入浴状況を延々撮影されて、おけつも撮影される。

「おけつをなんでそんなに撮影するんですか？」

「大丈夫です！　大丈夫です！　チンギスハンの人もクウガの人もペロンと出していま

すけど、特に問題はありませぬ！　もう少しハンドタオルの面積を小さくしてください！」

「なにをゆーとりやーすかね、おみやーさんは。」

間宮特製のアイスキャンデーやフランクフルターを頬張った。

ローションをべつとり塗られてぬるぬるした。

なんだこれ。

シャワーを浴びたりベッドでごろごろしたり。

訳わからん。

妙にリアルな造形の哺乳瓶らしきものを吸う。

艦娘たちの為だ。

艦娘たちの為だ。

そう言い聞かせて撮影に臨む。

みんな、どうしてそんなに真剣な顔で私を見つめているんだい？

上半身になにも身につけていない状態で、超ロングインタビューを受けた。

風邪を引きそうだ。

へくし。

グラビアアイドルって大変だなと改めて感じる。

懐かしい気持ち苦しい気持ち。

心中を吐露する。

心のトトロ。

トロお待ち。

なんちて。

ギリギリの攻防戦。

幾つか誤魔化した。

私にだって墓場を持ってゆく話は幾つかある。

「ところで何故貴女がここにいるんですかね、我が師匠の加賀さん。」

「ただの通りすがりの一航戦よ。是非とも覚えておいて愛しい弟子。」

「そうそう、横須賀第二鎮守府の瑞鶴さんが教官の後任なんて面倒だからイヤだ！ つ

てかなり怒っていましたよ。」

「やりました。」

体験した、というよりは理解を超えていたのだけれども、あ……ありのまま起こった

ことを語るところなる。

私は普通のイメージビデオみたいな映像作品を作るのだと思っていたが、いつの間にか入浴させられていておけつを延々撮影された。

そもそも、おっさんのけつを見たい子なんているのかねえ。

みんなの視線が獰猛だった。

その上、上半身になにも着ていない姿でインタビューを長々と受けた。

実際、私もなにをさせられたのか今一つよくわからなかった。

頭が変になるかと思った。

催眠術とか島風の速さを超える、もっとおそろしいものの片鱗を味わった。

ま、我が小枝は断じて写していないそうだから、その辺りは信用しようか。
やれやれだぜ。

XXIV：決して腐るなきつと花咲く時は来る

「ねえ？」

「なに？」

「そろそろ、所属先の提督や鎮守府勤務の人間や自衛官やそういった人たちをやっちゃつても大丈夫なんじゃないかな？」

「いい頃合いだわ。」

「混乱のさ中に意中の本陣を落とす。これだな。」

「これが私たちの桶狭間！ 作戦名『メーテルリンクの青い鳥』の発動よ！ 全国の艦娘に急ぎ連絡！」

「あの堅物としつぽりか……胸が熱くなるな。」

「函館のリラの花が手に入らなくても、地元に咲く花を愛したらいい。」

「詩人ね。」

「童貞提督を最優先！ 女の子と付き合ったことのない提督は貴重品よ！ 見かけ次第

電撃戦で墮としなさい！ 周りに好物件はいないかどうか、もう一度見直しなさい！

整備員とか司令補とか副提督とか憲兵とか、意外な相手が星の王子様かもしれないわよ！ 次策として、自衛官との合コンをセッティング！ 足柄！ そっちは頼むわ！」

「了解！ 任せといて！ みなぎってきたーっ！」

「では本日二三〇〇より作戦発動！ トラトラトラ！ これは演習ではない！ 繰り返す！ トラトラトラ！ 戦力の逐次投入は不可よ！ 最初から全力投入して、クライマックスでイキなさい！」

「統合本部は横須賀第一鎮守府の大淀とマスター・オータムクラウドが担当！ 函館の大淀と連携して、各々の提督の一番搾りを入力よ！」

「大淀のいない鎮守府は、筆頭秘書艦もしくは第一艦隊旗艦を各鎮守府の作戦部長とせよ！」

「函館の提督は偽装によく役立ってくれたわ。」

「ええ。最高の囷ね。」

「我らの釣り野伏せ、とくと味わってもらおう。」

「一旦『彼』になびいていると見せて相手を翻弄、その後改心したと見せて提督や鎮守府関係の男性陣を誘惑して陥落か。そちも策士よのう、越後屋。」

「なにを仰いますやら、お代官様。」

「本気で函館の提督が気になつてゐる子たちはどうするの？」

「再考を促して。翻意が得られなかつたらこちらも考え直すわ。」

「マスター・オータムクラウド！ 次の策は決まつてゐる？」

「策は秘してこそ花。我が策はこの頭に御座いまする。」

「これでよからうなのだ。任せたぞ、安房守。」

「これからが正念場ですよ、皆さん。気合い！ 入れて！ 落としますす！」

「最近、函館がどうこう言う娘が減つたな。」

「ああ、函館に刺客を送る手間が省けてよかつたよ。」

「あはは。」

「じゃあまたな。」

「ああ、また呑もう。」

「さ、司令官。もつと楽しんでしましよ。」

「そうよ。夜はまだまだこれからよ。」

「司令官を今夜も寝かさないからね。」

「覚悟はいい？ いいわね逝くわよ！」

「お前たち、お手柔らかに頼むぜよ。」

「姉妹全員と毎日は無理だよ。考え直してくれ。」

「今まで放置していた分、楽しませてもらうわ。」

「俺が悪かった。許してくれ。」

「夜戦で誠意を示して頂戴ね。」

「司令官、もーつと頼ってくれていいのよ。」

「提督さん、はい、アーン。」

「玉子焼き、食べる？」

「どうしたんだ、お前たち。こないだまで素っ気なかったのに。」

「ちよつとした見直しよ。」

「見直し？」

「提督つて改めて見るといい男だなあ、つて思つてね。」

「よせやい、照れるじゃないか。」

「サプライズを用意しているから楽しみにしていてね。」

「ほう、なんだかよくわからんが、兎に角よし！」

「提督、これが今月の夜戦予定表だ。」

「あ……ああ、わ、わかった。」

「そんなに怯えなくてもいい。」

「だ、大丈夫だ。」

「ちゃんと機能はしているな。」

「そ、そのようだ。」

「無理はさせない。それは全員の合意だ。提督は皆のために火力を集中してくれればいいんだ。」

「お、おう。」

「これで誰も函館に流出しなくて済む。」

「あ、ああ。」

「あの作戦は取り消させた。いいだろ？」

「そうだな。」

「山芋のコロッケにスッポンのスープに金蛇精に山羊肉のカレーにんにくサラダと精の付くものを用意した。デザートは私たちだ。」

「う、うむ。」

「作戦は失敗だ！ 情報が漏洩していやがる！ 待ち伏せだ！ 囮りやがったな！ 第一第二小隊は火線を中央に集中させろ！ 第三第四小隊の撤退を支援するんだ！ 『ホテルストリチナヤ』が介入してくるだなんて聞いていないぞ！」

「あいつら、小樽でひっそり飯屋をやってたんじゃないのか?！」

『『フローレンシアの猟犬』に『森林狼』だ！ 不味い！ 挟撃だ!』

「背後に回られた!」

「RPG!」

「あのさ、俺みたいな奴でいいのかい?」

「私たちは提督と深く結ばれたいのよ。」

妖精が見えて話が出来るといっているので、俺は提督候補生にさせられた。

不本意な話だ。

職場に偶然来た、艦娘の妖精と話をしてしまったのがとても不味かった。

ちなみに任官拒否は出来ないそうだ。

給与と待遇のよさを説かれたが、殉職率の高い危険な職場であることを指摘すると、今度は後方支援艦隊を率いてもらいたいと言われた。

最終的に提督候補生になることを承諾したが、なに、じきに辞めさせられるだろう。俺がまともな軍属になれる訳ない。

今は深海棲艦が世界の海を跳梁跋扈している時代。

そんな連中にまともに対抗出来るのは人型妖精兵器で美人揃いの艦娘だけだ。

艦娘を率いる提督になるためには、最低限妖精が見えないといけならしい。

半年間の促成教育訓練期間を経て、俺は柱島鎮守府の副司令として着任した。

初めて尽くしの鎮守府。

慣れないことばかりで、既に四〇代となっている俺としてはなかなか素早く対応出来ないことばかりだった。

不慣れでトロい俺は鎮守府の艦娘たちからバカにされた。

当然だと思う。

反対に、妖精たちとはすこぶる仲よくなった。

一緒に菓子をつまんだり、酒を呑んだりした。

いい奴らじゃないか。

実に皮肉な状況だよ。

妖精たちと仲違いするよりは余程いいが。

ここの提督は、妖精たちとあまり仲がよくないらしい。俺も殆ど話をしないから、提督の人柄はよくわからない。

男前だが、なにを考えているのかわからない感じだし。

ある日、艦娘たちは俺に恋愛関係の質問をしてくるといふ暴挙に出た。

愚問だ。

なめられているのを肌で感じる。

モテない俺になにを求めるといふのだ。

俺は童貞だということを隠さなかったし、女の子と付き合ったことがないことも隠さなかった。

結果的にはそれが悪い方へ拍車をかけた。

ちよつとの好奇心が悪意へ変化してゆく。

その後も、『無能』『役立たず』などなど散々言われた。

気にしない、気にしない。

昔に比べたらさほどでもないしな。

なりたくもなかった提督とやらも、これでお役御免だ。

俺はむしろ、この状況を楽しんだ。

信用してくれない艦娘たちの指揮などさせてもらえる訳もなかったから、俺のためと

奮起してくれた妖精たちと一緒に開発や建造を頑張った。

あいつら、泣かせてくれるじゃあないか。

稀少な艦娘を建造出来た時は皆で喜んだ。

建造された当人も最初の頃は仲良くしてくれたが、日が経つにつれて疎遠になった。

そんなことが何回もあった。

俺に魅力がないからだろ。

妖精たちは俺を慰めてくれたが、さもあらんと受け流すことにしておいた。

俺は存在価値のない奴だし。

まあ、こんなものだろうな。

ちよつと辛くなった時には、函館鎮守府へ着任した同期の提督と話をした。

決して腐るなきつと花咲く時は来る。

あいつはそう言った。

いい奴だ。

訓練生時代に教官たちとデートしたり間宮から優遇されていたが、こんな俺の愚痴に付き合ってくれているんだからいい奴だ。

呉鎮守府に寄ったついでと、あいつが柱島に来てくれた。

冷やかな視線で俺たちを見つめる艦娘たち。

始終快活に振る舞う柱島の提督と函館の提督。

なんか化かしあいみたいだ。

「いざとなったら、北海道に來い。大淀さんから手を回してもらおう。」

尾道紅茶を飲みながら、あいつはそう言った。

あいつから貰ったトラピストクッキーを妖精たちと食べながら、言葉を反芻する。

三カ月後、俺は急に転属を命じられた。

立場上是昇進、実質的には左遷だった。

行き先は、小笠原鎮守府ということだ。

これで俺も提督か。

俺に好意的だった妖精たちは皆悲しんでくれたが、他の面々は皆知らん顔をしていった。

まあ、そんなもんだ。

いいさ、慣れていく。

妖精たちがこっそり何名か付いてきてくれることになった。

俺と格別仲よしの連中だ。

こいつらが一緒ならば、ずっとどこまでも行ける気がする。
なんてな。

「わかりやしませんて。あいつら、こちとらのことをなーんも解っちゃいませんしね。」
彼らはケタケタ嗤（わら）う。

妖精の人数を、柱島鎮守府の提督や艦娘は把握していない。

俺は、知っている。

全員、知っている。

それだけのことだ。

それが俺の誇りだ。

転属する当日。

初夏のある日。

艦娘の誰も見送りに来なかった。

俺は彼女たちに出来得る限りの心尽くしをしたつもりだったが、全然届いていなかったようだ。

ま、そんなもんだわな。

少し、ほんの少しくらいは悲しい。

年配の憲兵が一人、見送りに来てくれた。

確か、憲兵隊の副隊長だ。

二人しかいない隊だけだ。

そんなに仲よかつたつかけと思ひながら、世間話をする。

「あんた、運がいい。」

「へっ？ 俺、左遷ですよ。なにもいいことなんてないです。」

「ほら、あれを見な。」

「はい？」

余所の鎮守府の艦娘たちが、幾つも艦隊を組んでやってきている。

あれ？

今日演習なんてあつたつかけ？

あれは横須賀第二鎮守府の瑞鶴か？

あつちは呉第六鎮守府の鳳翔かな？

「さつさと行きな。これから此処は戦場になる。」

「わ、わかりました。」

「艦娘は此処の連中みたいなの奴らばかりじゃない。もつと自分に自信を持って。そうそう、あつちで駆逐艦に手を出すなよ。」

「出しませんよ。というか、俺に好意的な艦娘なんていませんよ。いる訳ないじゃないですか。」

「妖精たちにあんなに愛されていたの？ もっと自分自身に自信を持った方がいい時間だ。じゃあな。」

「はい、お達者で。」

古い船が鎮守府を離れてゆく。

砲撃音が聞こえてくる。

随分と派手な演習だな。

竹芝埠頭からおがさわら丸通称おが丸に乗船して、内海から外洋に向かう。

外洋に出るとやたら揺れた。

めっちゃくつちやに揺れる。

そして船酔いに悩まされた。

丸一日かけて、小笠原の父島へ到着した。

海上自衛隊父島分遣隊基地へ挨拶に行く。

自衛隊の面々はいずれも好意的で、艦娘に会えるのを楽しみにしていると云われた。
ふっ。

初期艦すらいない、孤高のなんちゃって提督の着任さ。

アオウミガメの寿司が旨い。

寿司が一般的にウマーツイ！

海亀の煮込みもうんまいな。

居酒屋には元艦娘っぽい娘が何名もいて、ガタイのいい男たちから必死な勢いで口説かれていた。

函館に電話すると、今度見に行くよと言われた。

元艦娘でよかったらそちらに送るとも言われた。

函館鎮守府に一度来てみるといいとも言われた。

案外何名もの艦娘がいたりして、とも言われた。

民家を殆どそのまま使った鎮守府もどき。

建造設備もなにもない。

それが今度の俺の職場。

小笠原産のバナナを使ったタルトと地元産珈琲で妖精たちと舌鼓を打ちつつ、俺は風の音を聴く。

今度は艦娘たちと友好的な関係を築きたい。

俺は独り砂浜でそう願った。

「ねえ。」

「はい?」

振り向くと、艦装を背負って火炎放射器を持ったぼろぼろの姿の女の子がいた。

金髪碧眼の美少女だ。

艦娘みただけど知らない子だな。

「あんた、アドミラル?」

アドミラルって提督のことだよな。

「そうだ。」

「ふうん。まっ、いつか。あたしは軽巡洋艦のフェニックス。フィニックスの方が発音的に近いけど、どっちでもいいわ。対空砲撃と地上攻撃に特に強いわよ。潜水艦だって蹴り飛ばしてみせるから。」

噂の海外艦か?

なんか鼻っ柱の強い子だな。

「ところでどこどこ?」

「小笠原の父島だよ。」

「チチ……おっぱい?」

「フアーザーだ!」

「ああ、そっちね。修復設備はある?」

マイペースだな。

「親方!」

俺は妖精たちの大将に話しかける。

「おうよ!」

ねじり鉢巻のちっちゃい親爺がすっ飛んできた。

「親方、海から女の子がっ!」

「な、なんだって!」

「修復設備を使いたいのよ。」

「おうっ、ついてきな。こっちだ。」

夕暮れが近づいてくる。

燃えるような、海岸線。

ボケーツと眺めていた。

「ねえ。」

「な……なにやってんだ！ 服くらい着た方がいいぞ！」

「この方が風をよりよく感じて気持ちいいでしょ。」

「目の保養にはなるが心臓に悪いからやめてくれ。」

「なに童貞みたいなこと言ってるのよ。」

「悪かったな。俺は未だに童貞なんだ。」

「あらそう。ふうん。」

「な、な、なんだよ。」

「する？」

「えっ？」

「あら、可愛い。」

「からかうのは止めてくれ。」

「からかっではいけないわよ。」

えっ？

その時、鯨の歌が聴こえてきた。

なんだか、不思議な感じがする。

「いい歌ね。」

「そうだな。」

俺たちは海を見つめる。

今度、硫黄島の自衛隊基地へ挨拶に行こうかな。

元艦娘と自衛官とのケツコン率が最高峰らしい。

あの居酒屋にいた連中って、もしかしたら……。

のんびりやろう。

赤から紫へと変わりつつある空を見ながら、俺はそう思う。

その夜の星空はとても美しかった。

隣のメリケン艦娘も綺麗であった。

XXV：ああつ！ 魔王様つ！

事務の田中さんからちよっこし相談したいことがあると言われたのは、風薫る爽やかな初夏の午後のことだった。

流石北海道。

湿度が低い。

彼は雪屋博士や紙屋博士みたいに男前ではないが、冷静沈着な人柄で安心出来る。私も別に男前ではないのだが。

優秀な博士が二人もいてくれるので、建造施設の存在しない函館鎮守府が無事に回っている。本当にありがたい。

艦娘たちの信頼もあつい。

勿論、田中さんを筆頭とする事務方がしっかりしているので書類関係の回りもいい。それは実に喜ばしいことだ。

間宮と鳳翔に夕食は外で取ると言ったらガツカリされたが仕方ない。

あれ?

騒がないな?

ロツタとアマーリエは特務で出張中なので護衛を望む艦娘がいますと思つたが、誰も言
い出さなかつた。

あれ?

変だな?

……なにかあつたのかな?

田中さんがここにこしている。

……問題はなさそうだな。

私たちは函館駅舎方面に出掛けた。

おっさんたちのお通りだい。

カワイコちゃんには弱いかな。

棒二森屋近くの居酒屋に入り、サツポロクラシツクの生と烏賊の刺身と海の幸のグラ
タンと焼き鳥盛り合わせと特製サラダを頼む。

乾杯して特製サラダをつつきながら、あーでもないこーでもないとグダグダダラダラ
話をした。

気兼ねなくエロい話が出るのもいい。

無論お互いひそひそと話をするのだが。

どこの女優がどうかあのアイドルがどうか、そういう他愛ない話だ。艦娘のあれやこれやがモヤモヤするけれども、そういう話題は出さない。

出さないって決めているんだ！

よその提督にも真実同情する。

一旦堕ちたらぐちよぐちよだ。

堕ちない為に奮闘して精一杯。

「艦娘の子たちは魅力的で無防備ですし、いろいろと困ってしまうでしょう。」
「からかってんだなこの子たち、と思い込んでなんとか折り合いつけてます。」

田中さんはフルネームだとR・田中一郎になるが、Rが付くということは外国の血筋が入っているのだろうか？

ランカスターとかリッツテンハイムとか、そういう感じだろうか？

そんなことを考えていたら、私と同世代で落ち着いた感じに見える田中さんがとんでもないことを言い出した。

「私、実は魔王なんです。」

「はい？」

「私が、このセカイに現出している妖精たちの元締めなんです。」

「えっ?」

アハトウンク!

不意打ちだっ!

な、なんだって!?

び、びっくりした!

……えーと。

トールキンがとても好きなのかな?

最近はこういうジョークが流行りなのだろうか?

魔王ってなにかの隠語だったっけ?

焼き鳥の皮や軟骨入りつくねやハツなどを堪能しながら話を聞く。

「田中さんは魔王をされているんですか?」

「ええ、五〇年程度の若輩者であります。」

「どうしてこの人間界へ来られたんです?」

「お役目を果たせと言われまして。」

「お役目?」

「ええ、先代が厳しい方で、ここへは修行に来ているんです。」

「函館へ、ですか？」

「函館へ、ですね。」

「魔界でのお仕事は滞らないんですか？」

「周りが優秀なので一切問題ないです。」

よくわからん。

田中さんが意外とファンタジーな人なので驚く。

もしかしたら隠喩かなにかなのか？

ここは合わせるべきなのだろうか？

うん、そうだ。

魔王だって勇者だって、なんだっていいじゃないか。

人間なもの。

なにがなんだかよくわからないが、真剣に聞く必要があるだろう。

よし！

今夜の私は魔王から相談を受けるイリヤ・ムウロメツだ。

怪力無双のスラブの英雄だ。

英霊召喚されるライダーだ。

どんとこいこい、超常現象。

「東京の立川に古い知り合いが二人住んでいましたね。」

「少しばかり遠いですね。」

「なに、函館中央郵便局から徒歩数分ほどで行けます。」

「それは大変便利ですね。」

「たまにパンや葡萄酒やお皿をいただきまして、食卓に上がるのはそれです。」

「あのふかふかむっちりパンと血のように紅い葡萄酒はとてもおいしいです。お皿も芸術的な作りだと思います。」

「伝えておきましょう。」

郵便局の近くにパン屋なんてあったっけ?

もしかして個人で焼いている人なのかな?

確か、千代台(ちよがだい)にそういう人がいるな。

流石、田中さん。

人脈が実に広い。

海の幸のグラタンが到着した。

これが素晴らしき一品なのだ。

鳥賊、海老、ホタテ、アワビ。

旨味がみっしり詰まっている。

「妖精たちは奔放ですから、まとめるのはけっこう骨なんですよ。」

「成程。」

確かに彼らはフリーダムだよな。

それに輪をかけてフリーダムなのがうちの艦娘たちだが。

初期所属組、呉転属組、メリケン艦娘組、教官給糧艦組と群体を形成しているようだが、司令官としては交流が盛んであつて欲しい。

なにか催しをするか。

大沼公園に出掛けるのはどうかな？

あつ、その前にカレー大会がある。

「アスタロテやベルゼバブが、そろそろ嫁を貰えと最近せつついてくるんですよ。」

そういうや、常春の国の王のご先祖がアスタロテに魂を売った話があつたな。

これは比喩なのかな？

比喩だろう、たぶん。

「その方々は親戚なんですか？」

「古くからの付き合いなんですよ。」

「国際結婚ですか。元艦娘でよろしければ何名か紹介しますよ。」

「いやあ、絶対魔族からめとるように言われていまして。」

「田中さんには普段からいろいろ世話になっていきますから、全面的に協力しますよ。」

「そう言っていただけですと、大変ありがたいですね。」

「結婚式は函館市内でされるんですか? 手を回しますよ。」

「するとしたら、魔界ですね。」

「魔界だと少し遠いですねえ。」

「近いですよ。千歳町のNHKから徒歩数分です。」

「そりゃ近い。」

「ケルベロスが門前で待ち構えていますから、豎琴でも弾かないと通れませんかね。」

ケルベロスか。

嘗て三頭犬の紋章を掲げて戦った、勇猛な特機隊のことかな?

漆黒の強化服を着て、機関銃を振り回し暴れ回った戦士たち。

解散命令に対し反旗を翻したそうだが、その生き残りを雇っているのかな?

たぶん、そうなのだろう。

うちの憲兵の國江さんも関係者らしいから、案外世の中は狭いのかもかも。

音楽好きの戦士というのもいいな。

田中さんは良家の育ちなのか？

そういうや、品のある人だよな。

魔王、つて感じではないけど。

そういうえば、博士たちの研究室にそれぞれの強化服が置いてあるが、けっこう傷ついている。

首領がどうか室長がどうか二人でひそひそ話をしているのが、たまに漏れ聞こえてくる。

蜘蛛、蝙蝠（こうもり）、蜂、蠍、蟪蛄（かまきり）がどうこうも言っている。

なにをやっているのだろう、彼らは？

危ないことは控えてもらいたいなあ。

彼らのような人材は稀少なだから。

ドンパチだったら二人ほど貸すのに。

近々見合いをするという田中さんの話を聞く。

ケルトがどうか、ラグナロクがどうか。

彼はロマンティストなのだな。

意外な人の意外な嗜好を知った夜になった。
今度競馬にでも行ってみましょうと約した。

XXVI：おっさんは姉妹艦のことをあれこれ聞いちやい
ました！

三日前にいきなり厚生労働省のお偉いさんが訪函すると伝えられ、ここ数日は慌ただしい日々を過ごした。

その後彼は部下たちと函館市長と北海道知事とマスメディアを引き連れた大病院院長回診状態で訪れたものだから、とてもとても面倒だった。

案内なんか慣れてまへんで。

『ヒテイシテアリキタリノケツロンイウオレカツコイイ』と思ひ込んでいる人たちのな
んちやって連合艦隊をやり過ぎすのは、結構手間暇かかる。

『ワカツテナクテモワカツタfrisルオレカツコイイ』と勘違いした中身すかすかの人
たちの、論理が破綻した砲雷撃戦を急速潜行して防御する。

A. T. フィールド全開！

やれやれだぜ。

少し蒸し暑く感じられる、函館の初夏の午後遅く。

本日は執務室にてお役人たちのせいで滞った書類仕事をしているのだが、軽巡洋艦の龍田が妙にくつついてきて微妙に業務しづらい。

そんなことをされると、おじちゃんとっても困っちゃうんだ。

「龍田さん、ちよつとお聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「なんですか、提督？ お触りですか？ 服は着たままの方がいいですか？」

「なにを真つ昼間から言っているんですか。」

「そうですね、やつぱり夜にしましょう。」

「なにがやつぱりですか。人をエロエロ仮面みたいに言わないでください。」

「それでご用件はなにかしら？ 今日穿いているショーツはエロくないわ。」

「桃色思考はそこまでするにしてください。聞きたいことがあるんです。」

「天龍ちゃんを他所から呼ぶってこと？ 三人つてのもいいわねえ。」

「その姉妹艦について聞きたいんですよ。」

「どこの所属の天龍ちゃんがいいかしら？」

「そう、それです。」

「全員は幾らなんでもダメよ。」

「『貴女』にとって、『どの天龍』が『本当の姉』になるんですか？」

「そうねえ、同じ鎮守府に所属していたってことだったら、横須賀第二鎮守府にいた時の三人目の天龍ちゃんね。とつくの前に沈んじやったけど。」

「……それは失礼なことを聞きました。すみません。」

「いいのよ。私たちにとつて轟沈は日常茶飯事だし。」

「では今の龍田さんにとつて、貴女のお姉さんはどこの天龍さんになるんですか？」

「そこがちよつとややこしいのよね。どこの天龍ちゃんが来ても、私のお姉ちゃんになるし。」

「成程。」

「逆に言うと、どこの天龍ちゃんも明確には『本当のお姉ちゃん』じゃなくて、『仮初めのお姉ちゃん』になるかしら。最初に一緒だった天龍ちゃんが『本当のお姉ちゃん』と仮定した場合の話だけど。『仮初め』とか『本当』とか、実際はあんまり気にしないわ。天龍ちゃんは天龍ちゃんですもの。」

「『仮初め』、ですか。」

「ややこしいのよ、意外と。まあ、あんまり考え込む子はいないんじゃないかしら？ 転属が多いとか、同姿艦が複数いるとかなら話は別でしょうけど。後は余程のこだわりや執着があると違うでしょうね。」

「『こだわり』と『執着』、ですか。」

「ええ、私たちが執着するのは提督か姉妹艦ですから。」

「……。」

「失礼する、提督。龍田、昼食の準備を手伝ってくれ。」

「わかつたわ、天龍ちゃん。」

そう言つて、「函館の龍田は小樽の天龍と共に仲よく厨房へ向かつて歩いていった。

昼食後、駆逐艦の曙が私の膝の上で書類仕事を手伝つてくれている。

やつてくれていることはありがたいが、場所が大変問題なのだつた。

これこれ、体を揺すつているとおじちゃんもつても困つちやうんだ。

「曙さん、ちよつとお聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか?」

「えつ、なに、即席提督? 今夜も開けてあるわ。いよいよ夜戦かしら?」

「誰もそんなことは言つていません。当たり前のように脱ぎ出さないでください。姉妹艦について聞きたいんですよ。」

「潮(うしお)がいいの? あの子は大きいしね。私はそんなに大きくないけど、即席提督の為にしっかり練習したから。」

「はい、自分自身でそこを揉み揉みしてはいけません。桃色思考から離れなさいな、曙さん。純粹に知りたいたいですよ。」

「今日穿いているのはパーミントグリーンで、シンプルよ。」

「駆逐艦の下着の色を聞いて喜ぶ提督がどこにいるんですか？」

「全国各地にいるんじゃない？ 私は即席提督以外に教えるつもりがないけど。」

「えーとですね、『貴女』にとつて『本当の姉妹艦』は一体誰になるんですか？」

「第七駆逐隊の艦娘よ。決まっているじゃない。」

「稚内の三名だけじゃなくて、例えば横須賀第五の漣（さざなみ）さんも舞鶴第八の朧さんも佐世保第七の潮さんも？」

「当たり前じゃない。」

「『当たり前』、ですか。」

「そうよ。横須賀第五の漣はこないだの脱出時に力になってくれたし、夜戦の方法もかなり教えてくれたわ。舞鶴第八の朧は徒手格闘術の使い手でその技術を教えてくれたし、佐世保第七の潮はケツコン生活のあれこれを教えてくれるわ。」

「えっ？ 佐世保第七の潮さんは提督のお嫁さんなんですか？」

「そうよ。だから私たちが結ばれてもなんの問題もないわよ。」

「駆逐艦の子が相手とは相当大変だったでしょうに。」

「佐世保の提督たちが一致団結して邁進したそうよ。」

「つまり、全員で前例作りに東奔西走した訳ですか。」

「函館でもそうなら、事態は更に好転するわよ。」

「余計に混沌化します。今も例の転属騒動で混乱の余波が残っているのに。」

「この艦娘全員とケツコンするって手もあるわね。」

「やめてください、死んでしまいます。」

「今夜の添い寝で手を打ってあげるわ。」

「今夜は妙高先生と足柄さんなんです。」

「じゃあ、明日でもいいわよ。」

「ではそれで。」

「今のうちに、ちよつとやる?」

「当たり前のように脱ぎ出さないでください。憲兵の國江さんが刀を持ってすつ飛んできます。」

「残念ね。」

曙が休憩に行った間隙を縫って、大淀に質問する。

「大淀さん。ちよつとお聞きしたいことがあるんですが。」

「はい、ローションとワセリンとティッシュと強力わかもとと亜鉛とマカと金蛇精の備蓄は充分ですので、いつでも全力出撃可能です。」

「準備万端ですわね……つてちつがーうっ！ 誰もそんなことは聞いていません。」

「今治（いまばり）タオルも温泉も万全です。」

「流石は大淀さん、用意がいい……つて違う！ 姉妹艦について聞きたいんです！」

「私にはいけませんね。同僚という意味では明石がそれに近い感じですね。あと礼号作戦つながりですか。……わかりました。」

「なにがわかつたんです？」

「明石が欲しいんですね。」

「はい？」

「ここには建造施設が無いので、着任は難しいです。着任したがる明石や夕張は複数いるんですけれども。」

「そうなんですか。」

「そうなんですよ、提督。罪作りの男ですね。」

「またまたー。でも着任予定はないんですね。」

「どうやら明石や夕張を着任させて、いろいろな器具を開発させるつもりではないように見えます。」

「器具ってなんです？ そんなことしません！」

「必要性が生じたら、作らせそうに見えます。」

「えっ?」

「ある意味大湊（おおみなと）の清霜ちゃんも私の妹みたいな存在ですが、やっと彼女を受け入れる決心をされたんですか?」

「あのですね、彼女は大湊所属ですよ。むしろ、佐世保第一鎮守府の武蔵さんとかそちらに転属したがりそうなものですが。」

「あれだけ提督になついているのに?」

「艦娘の所有数が今でも多すぎます。」

「規則を変えてしまえばいいのです。」

「いやいや、それは大変不味いです。」

小樽の天龍から話しかけられたのは、夕方近くのことだった。

なんだか妙に疲れる日だ。

「提督、ちよつと話をしたいんだが、時間を貰えるか?」

「かまいませんよ。」

「その……龍田が提督に迷惑をかけていないかな? 抱きついたりキスしたり。」

「いえいえ、そのようなことは日々ありますが、いつもとても助かっています。」

「そうか。迷惑でなかったらいい。ただでさえ俺たちは旧式艦艇で火力に難ありだから

な。」

「遠征任務も重要な仕事ですよ。」

「まあ、それはそうなんだが、俺はあちこち転属していて複数の鎮守府の裏事情を厭でも知ってしまったから、それには安易に領けないな。」

「事情通の経験者は稀少ですね。」

「そう言ってくれるのは提督みたいな人だけさ。以前は、意見具申が通らないこともしょっちゅうだったからな。鉄底海峡では横須賀第五鎮守府の先遣艦隊の指揮をよく取ったが、量産型艦娘を含めてよく沈んだよ。その時に当時の相方だった龍田も轟沈した。」

「……そうですか。」

「艦娘にとつて轟沈は日常茶飯事だから、気にしないでくれ。俺だって何度轟沈しそうになつたことか。」

「……。」

「つまらない話をした。要は龍田を大切にしたいってことだ。」

「わかりました。大切にしますよ。」

「ケツコンした時は教えてくれよ。」

「えっ?」

「えっ?」

「一体なんの話ですか、天龍さん?」

「今の鍊度はまだ足りないが、将来的に龍田を正妻に迎えるんじゃないのか?」

「えっ?」

「えっ?」

龍田は翌日小樽の天龍からしみじみと説教されて、少し大人しくなった。

XXVII：海から来た娘たち

「あら、意外に早起きなのね。」

目覚めると、隣で豊口めぐみみたいな声が聞こえた。

その声の主はフェニックス。

金髪碧眼の美少女が微笑む。

軽巡洋艦のメリケン艦娘だ。

肌着姿で俺を見つめている。

それは驚く程の至近距離だ。

目のやり場にとても困った。

「おはよう、フェニックス。」

「フェニーでいいわよ。」

うーん、と背伸びしながら起き上がった彼女は、そのまま顔を洗いに行った。

下半身を見られなくて幸いだ。

女の子って、いい匂いがする。

俺の精神衛生状態に悪影響だ。
さて、朝食の準備を始めよう。
地元で産した珈琲を淹れよう。
梨の香りがするバナナも旨い。

ここは小笠原の父島。

なんちやって鎮守府のある島。

風光明媚で美しい島。

艦娘が正當に配属されない島。

小笠原。

青い海。

白い雲。

水着姿のフェニーが波打ち際で手を振っている。

揺れる。

揺れる。

回るターレット。

彼女に向かって、手を振った。

まるで俺たちは……。

いや。

なにを考えているんだ、俺は。

……気の所為（せい）だな。

添い寝だつて彼女の気紛れに違いない。

そうさ。

きつとそうに違いない。

東京湾とその近海を警備する特艦二課の能登提督に連絡を入れる。
電話で会話しただけだったが、なんか飄々とした感じの人だった。

小笠原の海は素晴らしい。

元々山国育ちなので、こういう風景はとても新鮮だ。

ん？

砂浜に誰がいる？

要救助者か？

近づくくと大型の艦装を付けた娘だ。

美少女の艦娘だ。

知らない子だな。

海外艦だろうか？

この子も、出会った時のフェニックスみたいにボロボロだ。

艦装の大きさからすると、彼女は戦艦のような感じがした。

持ち上がらないのはわかっている。

仕方がないので一旦なんちやって鎮守府な民家に戻り、棟梁姿の妖精に話しかけた。

「親方、砂浜に女の子がっ！」

「な、なんだって!？」

「ねえ。」

「なんだ、フェニックス。」

「フェニーって呼んでよ。それって、ジャパニーズコント?」

「素晴らしい国民的アニメーション映画へのオマージュだ。」

「ふうん。でさ、その子は誰かわかる?」

「オクラホマって艦装に記されていた。」

「オーキーね。」

「知り合いか？」

「まあね。シツプガールはみんな知り合いと言えば知り合いだけだよ。」

「氣を失っているみたいだから、俺一人じゃ運べないんだ。頼むよ、フェニー。」

「さっさと行きましょ。」

「おう！」

「もつと頼っていいのよ。」

「おう！」

俺たちは砂浜に打ち上げられたメリケン艦娘をじつと見た。

栗毛色……ブルネットとのか？

ストレートボブの頭に左目の下には黒子。

ミニスカにマントを羽織った巨乳娘が、両手に手斧を握り締めている。

斧や手に、なんか紫とか赤とか黒っぽい色合いの液体が付着していた。

戦艦と軽巡洋艦か。

これで駆逐艦数名と軽空母がいれば丁度いいかな？

まあ、そんなに都合よくはいかないか。

どこかから艦娘を複数名調達しないと。

函館の提督を経由して回して貰おうか？

大本営ってホント、なにを考えている？

常識や良識を振りかざす奴らは困るよ。

二重規範が当たり前の壊れた頭の連中。

砂浜でそうしたことをぼんやり考える。

彼女を回収しよう。

しかし、フェニックスは無防備な姿だ。

「あのさ、フェニー。」

「なに、アドミラル。」

「そんなに薄着だといろいろ見えちゃうしムラムラするから、あれこれ見えにくいような服を着てくれ。」

「あたしは困らないわよ。」

「俺がとても困るんだよ。」

「じゃあ、そのムラムラを収めてあげようか？」

「えっ？」

「ずいぶん仲がいいんですね。」

「えっ？」

斎藤千和みたいな声が聞こえてくる。

オクラホマがこちらを見つめていた。

「そうよ。アドミラルはあたしのダーリンだから。」

「えっ、俺たちステディ？」

「アメリカンジョークよ。」

「びつくりしたなあもう。」

「仲が大変いいんですね。」

「そ、そうかな？」

「でも！ その話は後回し！ とうっ！ オープン・ゲートツ！」

機装から射出されるように飛び出すオクラホマ。

垂直方向に流麗華麗に飛び上がる。

その両手に握られしはトマホーク。

太陽を背にした彼女が武器を振りかざして叫ぶ。

「天が呼ぶ！ 地が呼ぶ！ 人が呼ぶ！ 悪を倒せと輝き叫ぶ！ 日輪の輝きを受けて

！ 今！ 必殺の！ ダブルトマホークブーメラン！」

どこからなにをどう突っ込んだらいいんだろうか？

二丁の手斧を深海棲艦に投げつけるメリケン艦娘。

それらは見事に敵対者を貫き、破壊に至らしめる。

くるくるの輪を描きながら彼女の元へ戻る手斧二丁。
まさか、脳波制御なのか？

まるで、アイスラツガーの如き白兵戦用の武器だ。

いつのまにか、イ級二隻が我々を狙っていたのだ。

気づかなかった。

これ正に不覚也。

戦艦の出力で投げられた手斧は敵駆逐艦の船体を破壊し、それぞれ一撃で撃沈に至らしめていた。

イ級二隻の内、一隻は爆発して燃えながら沈んでゆく。

残る一隻の船体が光りだした。

傍にいた棟梁姿の妖精が呟く。

「あれが海域回収（ドロップ）だ。」

「知っているんですか、親方？」

「おうさ、見ている。あれが艦娘の海での『誕生』だ。」

ポツティエリの『ヴィーナス誕生』みたいに、イ級の中から艦娘が生まれてくる。

イ級を完全にぶっ壊していたら、彼女はどうなっていただろうか？

イ級の中に最初から艦娘が詰まっっていて、それを解放したのかな？

謎だ。

さっぱり、見当がつかん。

俺にはちつともわからん。

あれは睦月型駆逐艦の如月らしい。

艀装付き衣裳付きで生まれるのか。

てつきり、すつぽんぽんで生まれるのだと思っていた。

「……………呉に……………睦月……………帰る……………還る……………人間……………愚か……………死して屍拾う者なし……………海
の底……………睦月……………みんな……………」

ぼんやりとした視線で俺を見つめた駆逐艦は、その場で倒れた。

次の日の朝、入渠を終えた二名から改めて着任の挨拶を受ける。

「戦艦のオクラホマです。この姿では活躍したいと思っておりますので、どうか積極的活用をよろしく願います。」

「誘惑迷彩を実装した駆逐艦の如月です。お側に置いてくださいね。ふふふ。」

「函館の提督に電話したら、その内演習しようと言われた。

先遣艦隊として近々メリケン艦娘たちを派遣するそうだ。」

どんな子たちなのだろう？

「バイオニックジェミーみたい。」

「チャーリーエンジェルみたい。」

「私たち、セクシー路線艦娘よ。」

硫黄島にある自衛隊の基地へ挨拶に行ったら、滅茶苦茶歓迎された。
主に艦娘三名が。

XXVIII：最凶姐さんに気に入られたるはおっさん提督

悪徳の街口アナプラから総員が小樽へ引越したホテルストリチナヤだが、首班である元大尉には提督になれる素養があった。

本式提督になれるだけの力を持つ彼女だったが、大本営からの招致に対して本式だの略式だのどうでもいいと一蹴した。

入学した千葉の茂原にある提督促成養成校では、顔に傷ある副官と共に施設内では比較的広い特別室を仮の拠点とした。

「同志軍曹。この狭い部屋を臨時本部とする。ホテルストリチナヤの面々はここから動かすことにしよう。『夢の国制圧作戦』を継戦させろ。陣頭指揮は軍曹に任せる。私は退屈しのぎの授業で時間を潰す。詰まらないヤポンスキー（作者註：日本人のこと）を合間に潰せば、少しは楽しめるだろう。」

「同志軍曹、このまま戦力が低下するのは避けたい。元スペツナズと元空挺連中で部隊を固めるようにしろ。事務屋連中や密偵どもは結社への楯にして構わん。いや、寧ろ積極的に楯にしろ。以降の捜索班は三期までの隊員で行うように。必ず二人一組でかか

れ。」

彼女を正面から論破出来る者など、教官級の艦娘くらいしかいなかった。

失禁に至らした提督艦娘は数知れず、行方不明者まで発生したという噂さえある。

人間の教官を前に、ロシア番長はこう言い放つ。

「陸の上で海の男を育てるとは、トーキョーの名ばかり有名店へ食事に行つて舌鼓を打つようなものだ。自分自身の味覚さえ覚束ないのか？ ちゃんちやおかしい。そもその前提が間違つていることに気づかないのか？ それとも気づいていないふりをしているだけか？ それに、お前の語る『正義』は随分生臭いな。市場で売れ残つた夕方の魚みたいなおいがする。艦娘は兵器か？ 我らが同志とする兵士ではないのか？ 作戦も兵士もろくに扱えない案山子（かかし）が大層な口をきくとはな。役に立たないスピーカーなぞ取り外してしまえ。その方が余程案山子として役立つぞ。縫い合わせるつもりなら、幾らでも手伝つてやる。その階級章は飾りか、『大佐』？」

彼女は外出時も自らの規範に従い、その通りに振る舞つた。

「迎えが来る。道を開けろ、憲兵ども。」

くだらない本式提督が講話をすると、反論することも忘れない。

「よく聞け、腐れ変態提督。お前から聞きたいことなんてなにもない。知りたいことはとつくの前に知っている。祈れ。部下を大切にしろ。生きている間、タマなしのお前に出来るのはそれくらいだ。」

「函館鎮守府の提督になる予定の中年提督候補生を一目見て、彼女はそれのおっさんに躊躇なく近づく。」

「ふふふ、ははは、気に入ったぞ、お前。ヤポンスキーにしておくのは勿体ない。お前は『女殺し』の目をしている。古いロシアの悪霊の話を出した。昔、近所に『魔女』を名乗る婆さんが住んでいてな。よく妖精や悪魔や悪霊の話をしてくれたよ。妖精には気をつける、特に笑いながら話す内容には気をつける、あれの行動を妨げるのは困難だ、といった話だ。悪霊や悪魔は、なにも特別な姿をしている訳ではないという話も興味深かった。おそらく、何名もの艦娘がお前の元にひれ伏すだろう。お前は『いい悪党』になる素質がある。光栄に思え、私とその成長を見極めてやろう。」

女は要望を口にする。

男は無難な答を返す。

「ヤー ハチューー マロージナイエ。」

「イズビニーチエ、ヤー ニズナーユ パルースキー。」

「私はアイスクリームが食べたいと言ったのだ、同志。」

「そうですか。では私が間宮さんに頼んでみましょう。」

「私はそれを今すぐ食べたいと言っているのだ、同志。」

「私たち提督候補生が仮に許可を取ることが出来て、今から街中へ出るだけで夜中になりますよ。それよりは、間宮さんに頼んで明日食べることが出来る方が合理的と意見申し上げます。それに、間宮アイスは絶品と聞き及んでいます。」

「わかった。仕方ない。ここは同志の顔を立てることにしよう。」

そして、彼女は卒業すると富と人脈を片手に鎮守府へ向かう。

「そうだな、軍曹。『コレ』は我々が楽しめる唯一の『戦争』だ。大切に扱うことにしよう。」

「行こうか、同志諸君。撃鉄を起こせ！ 艦娘と共に深海棲艦の鰓（あぎと）を喰い千切れ！」

おっさん提督候補生と千葉市内へ出掛けた際、二人は洒落た喫茶店で珈琲を飲んだ。「カフエモ力を貰おうか。」

「なんだこれは。泥水みたいな味だな。」

「不景気だ厳しい世の中だと日夜喚いている割に、ヤポンスキーは豊かな生活を送っているように見えるぞ。本当に苦しい社会とは、このようなものではない。」

「アフガンにいた時、補給を絶たれたことがあつてな。あの時は本当にこわかった。軍人にとって、補給が途絶えること程こわいことはない。」

『イケない萬九郎』はよい漫画だ。あれは日本の文化だな。」

おっさん提督候補生と元大尉が歓談する。

「歳を食つたら、思い出すのも一苦労ですよ。」

「気にするな、『艦娘たらし』。私もそうだ。」

休日出勤のように、彼女には時折『映像作品』の確認作業が存在する。

「退屈で退屈でたまらない無為の日々を過ごしたいと考えることはあるわ。特にこんな作業をやっている時はね。こっちは好きなのを持つていいわよ。こういうものが必要になる時があるでしょ。」

XXIX : おっさん提督はちよつとこわい話をしちやいました!

おや、みなさん。

集まつてなにをされているんですか?

こわい話を話し合っているんですか?

個人的には稲川さんの初期の話が特に好きですね。

えっ?

私にトリを務めて欲しい?

あまりこわくないですよ。

それに実話つて短かったりあっさりしていますし。

……よござんすか?

ようござんすね。

それでは話しましょうか。

では、「沢山あるわよ」から。

これは知人の実体験なんですが、彼は浮気者でね。

あちこちの女の人と付き合っていたそうなんです。

彼の本命というか、我が儘を一番よく聞く人がまたこれがよく出来た人で、なんであんな奴と付き合っているんだろうと皆で話をしていた程です。

そうこうしている内、急に知人が具合を悪くして病院に担ぎ込まれました。

医師によると、体が既にぼろぼろだったそうです。

見舞いに行っても彼女が付きつきりですから、あまり突っ込んだ話も出来なくてね。

無難な話をしていて、彼女がお手洗いに席を外した時に彼がボソツと言ったんです。

「沢山あるわよ、って言われたからカップ麺とか揚げ物とかスナック菓子とかペットボトルの焼酎とか外国産の食いもんをよく口にしてたけど、あれってなんか関係しているのかなあ。」

続いては「耳かき」。

これは別の知人の話なんですけどね。

その彼もまた浮気者でね、あちこちの女の人とウハウハやっています。

でもある時から、彼、具合を悪くしましてね。

耳鼻科で診てもらったら中耳炎が悪化しているのが判明して、即入院していました。手術後の見舞いに行った時、彼はボソツと言ったんです。

「あいつにいつも耳かきしてもらっていたから、こんなことになるとは思ってもよらなかったよ。」

あんまりこわくないですね。

あれ?

戦艦棲姫さん、顔色がよくないですよ。

えっ?

元から?

それは失礼しました。

次は「別れよう」。

高校時代の数学の先生が話してくれたんですけどね。

先生が付き合っていた女性はかなり気の強い人で、時々滅茶苦茶になってしまうので大変困っていたそうです。

それである日、先生は別れ話を切り出しました。

話を聞き終えた彼女は台所に向かい、包丁を持って戻ると先生に無言で抱きついていました。

包丁を背中に突き付け、二時間ばかり。

では「なにか見てる」。

これも高校時代の話なんですけどね。

ある日、夜中に目が覚めたんですよ。

窓はカーテンが確実に閉まっていたんですが、強い視線を感じました。なんだかよくわからないけど動いたらダメだ、って強く感じましたね。じっとしていたんですが、その視線の主も全然動きはしませんでした。その内寝ちやつて起きたらいなかったんですが、こわかったですねえ。ちなみに、私の部屋は二階でした。

ネヴァアダさん、大丈夫ですか？

お顔の色がよくないようですが。

そうですか。

なんだか顔色がよくない方が散見されますので、次で打ち止めです。

最後は【図書室】。

これは函館鎮守府着任前、千葉の茂原市にある提督候補生教育施設で体験したことなんですが、ある日資料を探しに図書室へ鍵を開けて入ったら、書架の隙間から人らしき頭が動いているのが見えたんですよ。

ああ誰かいるんだな、つて思つて資料を探し終えた時にふと気づいたんです。そういや、この部屋さつきまで閉まっていたな、つて。

すみません。

この程度ですね。

みなさん、夜更かしは乙女の大敵ですから、早く寝るんですよ。

あれ？

なんだかあちらの方で物音が……。

XXX：青い青い空

すっかり夏模様の空。

海は変わらず美しい。

青い空。

白い雲。

青い海。

小笠原鎮守府は今日も賑やかだ。

なんちゃって鎮守府な民家の窓からは、余所の艦娘たちと巖流島対決みたいなことをしているオクラホマが見えた。

二丁手斧のメリケン戦艦娘やその対戦相手を声援する、自衛官たちや米軍関係者たちも見える。皆ノリノリだなあ。

あれはどここの天龍だろう？

剣捌きが美しい。

大湊（おおみなと）か？

小樽か？

龍田や日向や伊勢や木曾や叢雲もいる。

武技武術に熱心というかなんというか。

この後、バナナのタルトでも焼こうか。

どこかの青葉が嬉々として、そのなんとなく覚悟完了で不転戦鬼でシグルイっぽい死合を撮影していた。

確かに絵になる。

念の為、高速修復材を用意しておこう。

自衛官たちや米軍関係者たちと朗らかに交流している、セクシーな水着姿の魅力的なフエニックスや如月が見えた。

先日から父島へ来て鎮守府の運営を手伝ってくれている元艦娘たちは、軍人たちから必死の勢いで口説かれている。

なにこの混沌。

あんたら、休日をそんなことに使って楽しいんかい？

小笠原へ着任後間もなく自衛隊が全面的な協力を表明してくれたのは、強力な知己を

得たことになるし大変嬉しい。

嬉しいのだが、なんとなく釈然としない。

在日米軍も積極的情熱的に接近してくる。

気にしたら負け、というアレなのかなあ？

俺のそこには誰も来ない。

来たら来たでこわいがな。

口説かれるのも厭だしね。

函館鎮守府の提督から電話が来たのは、その日の午後だった。

「そつちに初期艦や大淀さんが送られない理由が判明した。」

「そうか、教えてくれ。」

「余所の鎮守府の提督を含む勢力から圧力がかかっていた。」

「はい？」

「お前の書類上の立場が柱島の副司令のままだったから、転属扱いではなくて超長期出張扱いになっている。これじゃ、いつまで経つてもどこから艦娘を受け入れられない。」

「な、なんだって!？」

「似たような被害を受けている鎮守府が複数あったから、うちの大淀さんを派遣して天
下りの奴らや癒着している連中を火星に代わって折檻してもらっておいだ。」

「助かるよ。」

「どういたしまして。しかし、『魚は頭から腐る』って小樽の提督が言っていたけど、ま
さにその通りだべや。」

「んだな。」

「丁度転属希望申請を出していた南方の大淀さんがいたから、書類をちよちよいと書き
換えてそちらに赴任出来るように手を打っておいた。」

「お前はマツコイ爺さんかっ!」

「くくく、金さえ出せばクレムリンだって持ってきてやるぜ。」

「クレムリンより駆逐艦だよ。」

「転属してくる大淀さんが、誰かと一緒に着任するだろうさ。」

「いつ来るんだい?」

「明日。」

「えっ?」

「明日。」

「今日明日明後日の明日？」

「イエス！」

「田口トモロヲ？」

「トウモローローね！」

「なんで、もつと早く言ってくれなかったんだ!？」

「大本営に潜入したのが一昨日の夜だったからさ。」

「はい？」

「陽動作戦でロツタとアマリーエと島風に暴れ回ってもらったから、後始末の方がずつと大変だったのはここだけの話だ。」

「この回線、盗聴されていないだろうな？」

「大丈夫、秘匿回線を利用しているから。」

「そうか。」

「そうさ。」

「ならいい。」

「ところで、柱島時代に艦娘たちから嫌われていた件が引つ掛かっていたから、こちらで調査してみた。」

「えー、別に聞きたくない。」

「薬品と暗示を使っていた。」

「はあっ?」

「あの提督よりもお前の方が、本当はずっと好感度が高かったそうだな。」

「それ、冗談なんだろう?」

「冗談なんかじゃないぞ。」

「そ、そんなことをいきなり言われても……。」

「つまり、お前さんが艦娘に抱いていたものは、意図的に作られていたものだということだ。」

「そ、そんな……。」

「よかつたな。これで艦娘とラブラブハッピーエンドが成立する。」

「今更そんなことを言われても……。」

「あー、もうやっ……。」

「フェニックスにはなにもしていない!」

「誰もなーんもゆーとりやーせんがね。」

「あうう。」

「まさか……。」

「如月ともしていかない!」

「じゃけえ、なんもゆうとりやせんが。」

「二名とは毎晩添い寝しているだけだ！」

「……なん……だど？」

「おい、パンデミック野郎。お前の方こそ滅茶苦茶やつとるや内科医外科医。全国各地の鎮守府から転属希望が殺到した件を、忘れたたあ言わせねえぞコラ。」

「あー、確かにあの時は大変だったな。」

「他人事みたいに言ってるじゃねえぞ！」

「毎晩業務終了後に、使用済みの……。」

「あー、なんか厭な話になりそうだから言わなくていいや。」

「なんでこんなものを送らなきゃならないのかと思いつつ。」

「言わんでいい。悪かった。」

「レターパックプラスは全国共通料金で大変便利だった。」

「具体的な名称を出すなよ！ 今後、連想しちゃうだろ！」

「なにを？」

「ううう。」

「へタレ誘い受けか。」

「やめろよ、そういうこと言うの！」

「斑目さん。」

「やめんか。」

「マララメさん。」

「囁んだな。」

「カミマミタ。」

「可愛くない。」

「神は死んだ。」

「ウドの街にいた鉄騎兵かよ。」

「なあ、呉から二〇名くらい引き受けないか？」

「やめれ！ 許容量を遥かに超えとるやんか！」

「おみやーさんなら出来るがね。」

「無理だ！ 柱島でも苦戦していたんだから。」

「それは作られた状況だったからだ。今度は大丈夫。刺されないようにしろよ。」

「確定路線みたいに言うな！」

「じゃ、五名ほどでいいや。」

「そうやって波状攻撃を仕掛けるつもりだろう。」

「なんのことかな？」

「第一次、第二次、と次々艦娘を送り込むつもりなんだろう？」

「もーやだなー。私がそんなことをする訳ないじゃないか。」

「なんか今少しいらつとした。」

「すまん、悪かった。」

「礼は言つとく。ありがとう。」

「おつ、到頭デレ期が来たか。」

「あのなら。」

「冗談だ。今度七飯町産のななつぼしの新米を送るから許してくれ。」

「よかろうなのだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

通話を終えた俺はフェニックスと如月を捕まえて、小笠原産のラムとバナナでタルトを作った。

蒲公英（タンポポ）珈琲は悪くない味だったが、小豆の代用珈琲の評判は今一つな感じだった。

人間と艦娘が多数入り交じるお茶会みたいになって、呉の先輩から貰った尾道紅茶も喜ばれた。

明日には大淀が着任する。

どんな性格の子だろうか？

あれは函館の大淀だろうか？

青いドレスに胸当てと手甲と脚甲を付けた眼鏡っ子軽巡洋艦が、大剣を引つ提げ雄叫び上げつつオクラホマへ突撃するのが見えた。

あれって、特殊な近接戦闘用艦装なのだろうか？

今度、函館の提督にその辺りを聞いてみようか。

フェニックスと如月が俺を呼んでいる。

俺をいざなう声。

遠い遠いあの声。

眩しすぎる笑顔。

堕ちてゆくのか？

でも、彼女たちの手を放すことはしたくない。
一緒に一緒に、この戦局を突き抜けてゆこう。

空を見上げる。
そこには、青い青い空。

XXX I : カレー大戦

深海棲艦侵攻以降、『国際社会』と呼ばれるセカイは崩壊した。

そして、『贅沢は敵だ』とか『欲しがりません勝つまでは』とかいった、古い古い表現が復活する。

嫉妬と怨嗟と羨望と絶望が世間の人々の目を曇らせ、僅か三年で日本の庶民感覚はおかしくなった。

或いは、それは過剰適応だったのかもしれない。

戦前より生きてきた人々たちからするとそれほど忍従を強いられた訳でもない『空白の三年』が過ぎた後、艦娘は救世主として颯爽と現れた。

まるで、悪魔が演出でもしているかのように。

『最高のおいしさを提供します』を惹句（じゃつく）とする武良多料理会は、嘗ては全国各地に多大な影響を及ぼす自称料理専門家組織でマスメディアにも幅広い人脈を確保

していた。

最近は、『食の幸せは生きている幸せ』を惹句とする帝國良食會に押され崩壊寸前に近い状態である。

妥当価格の良心的料理提供店を全国展開している彼らは、権威的組織からすると目の上のたんこぶだ。

贅沢を過剰に忌避する社会では高級料理店に軸足を持つ武良多料理会は非常に不利だが、庶民感覚を既に喪失している彼らは内心帝國良食會を侮蔑している。

自称選良たちが目を付けたのは、奇策を得意げに操り詭弁を平気で口にする少年料理人だった。

正確には、少年の母の美貌に目を付けた幹部で絶倫野郎の丸目の独断専行である。

『武良多料理会』最強の刺客にして、自称天才少年料理人の『知多星の良一』と激闘を繰り広げて涙を飲んだ名庖丁遣いが何人も発生した。

都合よく現れる覆面老人の不公平な裁定によって、少年は一躍時代の寵児になった。だがしかし、急成長する者が一旦その不確定な支持寵愛を失うと没落はとても早い。彼に決定的引導を渡したのは、姉川老川兩名の名料理人たちによる合体技の料理だ。

それは奇しくもカレー対決。

美しき未亡人の母。

いつも良一をやさしく励ます母。

その彼女は、丸目と対決会場の裏手で食るようにチユツチユツしていた。

それを偶然見かけたことが、良一の精神に重圧をかける。

そのエロエロしさを武良多料理会首魁の武良多一郎太郎から叱責された丸目は、そのまま良一の母と共にどこかへ逐電した。

慕っていたおっさんが、ただのゲス野郎であったことを知った良一は衝撃を受けた。衝動的に少年は、幼馴染みの少女の唇をクチュクチュして思いきりグーで殴られた。あれは痛い。

それでも奮起した少年は最大級の奇策と詭弁を鮮やかに用いたが、結局正統派の誠実な料理に破れた。

常々味勝負に横槍を入れる、偏屈覆面老人の介入が何故か無かったのも大きかった。

その翌日。

帝國良食會の幹部たる八傑衆は有望な料理人たちを掻き集め、積極攻勢に転じた。

瀬戸内海の海の幸を豊富に使って巻き返しを図った、有名な『瀬戸攻勢』である。

帝國良食會本社は、麻婆豆腐の都として有名な兵庫県冬木市にある。

その首班たる赤毛の青年実業家の武良多Ⅱエミヤ・士郎は、八傑衆全員と一門衆を集

めた大会議場で檄を飛ばした。

彼の親友で八傑衆三位の鬼頭新一は端正な顔にいつものニヤケ顔のまま、その場で武良多料理会の打倒を宣言する。

士郎の妻で八傑衆筆頭のアリア・コンタックスも賛意を示すために頷いた。彼女は青いドレスを翻しながら言った。

「それにしてもお腹が空きました。」

帝國良食會の攻勢は苛烈の一言に尽きた。

それまでは忍びに忍んで耐えに耐えていた彼らが、一気に牙を剥いたのだ。すつかり根腐れしていた武良多料理會が、その勢いに抗しきれぬ訳もない。

日本の料理界に君臨していた、独善的組織はぼつきりあつきりと瓦解した。

特にそれまで人前で活躍することを控えていた八傑衆が積極的に前線で善戦したことも、帝國良食會の面々に大きな力を与える。

『疾走するカワサキ』や『明晰なる郭嘉』

や『北の悪魔の関屋』などの奮闘も、戦力を欠いて幹部が次々に逐電した武良多料理會にとって不幸をいや増した。

その戦線をよく支えたのが姉川と老川の兩名である。

彼らは後方支援に徹して補給線を維持し、おいしい賄いを作っては皆に振る舞った。

艦娘たちの在籍する鎮守府と交流しようと提案したのも、姉川老川だった。将来性を信じたのである。

彼らは横須賀鎮守府古参の鳳翔や間宮たちと連携して、おいしい料理を開発した。

激戦が終わった後、姉川老川両名は一介の料理人になった。

帝國良食會総帥の士郎は誠意を持って引き留めたが、説得は叶わなかった。

彼らは、己の自由を愛する心を尊重したのである。

それは実際、簡単に出来る振る舞いではなかった。

その姉川老川両名が函館駅に降り立つ。

「ここが函館だね、姉川ちゃん。トラピスト修道院のソフトクリームはとっても旨かったねえ。どこかでなにか食べてから鎮守府へ行こうよ。間宮さんや鳳翔さんは元気かねえ。」

どことなくおネエっぽいしやべり方をする老川。その衣裳は緑色を主体とする。

「正にはるばる来たぜ函館、だな。よし、自由市場で餡掛け焼きそばを食べてから鎮守府へ向かうとするか。行くぞ、老川。」

それとなく不敵な感じのしやべり方をする姉川。その衣裳は赤色を主体とする。

二人は仲良く自由市場に向かつて歩き出した。

提督のちよつとエツチな撮影が急遽入つた為に延期はされたものの、いよいよ始まつたカレー対決当日。

給糧艦の間宮や元教官たちが着任する少し前の日のことである。

判定員としては姉川老川兩名、軽空母の鳳翔、戦艦棲姫に特別審査員として横須賀第一鎮守府の比叡。彼らが奇数なのは、同点にならないようにとの配慮だ。

全国各地並びに海外の泊地からも青葉が取材に来ていて、腕章がないとどこの青葉だかわからない混沌になっていた。

軽空母の龍驤を手伝うのは初期着任組。

『一門衆』と誰かが言い始めて、その呼称が定着しつつある。

航空母艦の雲龍を手伝うのは呉移籍組。

『瀬戸衆』と誰かが言い始めて、その呼称が定着しつつある。

提督を手伝うのはメリケン艦娘たちと愉快な仲間たち。

『メリケン衆』と言われ始めて、その呼称が定着しつつある。

その他の艦娘たちは、『他門衆』と自称し出しているらしい。

死合前日に比叡から振る舞われたカレーは実に旨かった。

本職の姉川老川さえ絶讃する絶妙の美味。

深みとやさしさと愛しさとせつなさと心強さが交差する、そんな素敵風味。隠し味の日本蜜蜂の深い甘味が日本の深淵を直撃して、愛を再確認させる。

あれを超えるカレーを作らなくてはならない。勝負の場に臨んだ戦士たちは気を引き締める。

味勝負がいよいよ始まった！

それは源平合戦の時代から連綿と続くおいしい対決！

平家の圧倒的な料理力が、壇之浦の悲劇に繋がったのは皮肉な話だ。

アズマエビスでは、教養溢れる集団には太刀打ち出来なかったのだ。

その悔しさが、バンドウムシヤたちの奮戦に繋がったと言えようか。

当時の様に鹿肉や甘草を使うことは殆どないが、その熱き魂は今に継承されている。

ハイケバンザイ！

「あれは、アルマニヤック（作者註：ブランデーの一種）を使ったフランベ！」

「紅玉をあんなにすりおろすなんて！」

「あれは烏賊や海老やホタテ！ 海の幸カレーか！」

「あれはサフランライス！ やるな！」

「古式ゆかしいお袋さんカレーを作るのは提督一派か！」

「あれはパイナップル！」

「おおっと！ 鳳翔さんが乱入して、包丁で切っちゃった提督の指をくわえた！ あれ

はエロい！ 放送出来ません！ 出来ませんが撮影はしておきます！」

「乱戦です！ 乱戦が始まりました！ あれ？ あれは小樽のローマさんでしょうか？

いつの間に来られたのでしょうか？」

「カレーを確保しろ！ 食材を無駄にするな！」

「提督が怒っています！ 普段怒らない提督が烈火の如く怒っています！ 流石にいつ

もフリーダムな艦娘たちもしゅんとしています！」

「味勝負再開です！ この勝負、どう見ます、姉川さん？」

「そうだな、素人にしては手つきがいい者も見られる。食材の斬り方、下味の付け方、火の通し方などで味はガラツと変わるから、その辺りをきちんと出来るかどうかが決め手だな。」

「流石、本職。深いですね。老川さんは如何ですか？」

「そうだねえ、最後は愛よ、愛。ねえ、姉川ちゃん。」

「ふん、当たり前前、当たり前前、当たり前前。それが当たり前前に出来てこそ料理人だ。」

「ありがとうございます。戦艦棲姫さんはどう見ますか？」

「提督を食べたいわ。」

「おおっと、大胆発言！ でもカレーには関係ない！ では最後に比叡さん。一言お願いします。」

「皆さん！ 気合い！ 入れて！ 作ってください！」

戦い終わって日が暮れて。

夜更けの厨房で提督が片付けをしている。

そこへ鳳翔がやってきて、提督に詫びを入れる。

苦笑しながらそれを受け入れる提督。

二人は仲よく小鉢に盛ったカレーを食べた。

そして、画面にはエンドロール。

「どうですか、提督。『カレー大戦』はなかなかの評判ですよ！ 次は駆逐艦の子たちを主演に据えた『スイーツ作戦』なんて如何ですか？ ダブルヒロインやトリプルヒロインもいいですねえ。」

一緒に視聴していた横須賀第一鎮守府の青葉が、左隣で鼻高々に報告してきた。そのまま部屋に居座ろうとする彼女を、私室から追い出す。

テレビをその内ここから出そうかな？

あると艦娘たちがぞろぞろ来るしな。

半ばドキュメンタリーっぽい映像作品を見終わり、私は右隣で満足そうな顔の鳳翔を見つめる。

無言でぎゅつと腕をより強く絡める彼女。

もし、ここが数名しかいない鎮守府だったら、或いは……。

「またカレーを作りましょうね。」

そう囁くと、鳳翔は私の耳たぶを素早く軽く噛んだ。

鳥取砂丘の砂の嵐に隠された塔。

古びた外観にもかかわらず、中には未来的な設備群が並んでいる。

そのダイニングキッチンらしき場所。

二人の壮年の男性が向かい合ってカレーを旨そうに食べていた。

一人は羽毛扇を時折ひらひら振りながらハヒハヒと辛いカレーを食べ、もう一人はゆつたりした服をひらひらさせながらフハフハと辛いカレーを食べている。

「これが函館の面々が作ったというカレーか。」

「これはなかなかおいしいものでありますね。」

「このお袋風カレーが素朴でよい。」

「海の幸カレーも味わい深いです。」

「美味美味。」

「ところで、ヨミ様。」

「なんだ、孔明。またいつもの悪巧みか。調略でもする気か？」

「私はヨミ様に忠誠を誓っております故に、考えるところのものと成すところのものは、すべてヨミ様の御爲になることばかりで御座います。」

「よく口が回るものよ。まあ、そういうことにしておいてやろう。ところで風魔は函館に付いたぞ。あの劉鵬が提督の警護をするらしい。あの怪力とおかん力は厄介だな。」

「大淀の策ですな。小賢しい娘です。」

「夜叉は中立を保つと言っておった。」

「弱体化する組織は益々臆病になりますので、致し方ありませんな。」

「このラツシーは奥行きがあつて、深みもある。」

「このらつきようは、蜂蜜に浸けてありますね。」

「カワサキ老はあのままでよい。彼の自由裁量に任せよう。」

「承知致しました。」

「郭嘉も好きにさせておけ。あれは全部分かつている男だ。」

「仰せのままに。」

「現在跳梁跋扈している、深海棲艦の姫級や鬼級はどうするつもりだ？」

「当分泳がせる予定です。」

「海のモノだけにか。」

「左様で御座います。」

そして無言でスプーンを動かすおっさんたち。

辺りは、香辛料の芳しいにおいに満ちてゆく。

XXXII : 俺の月はいつもそこにある

ところどころコンクリートがひび割れ、雑草があちこち生える海岸。古いコロニアル様式の白い建物は、ところどころ塗装が剥げている。

鉄柱のあちこちが錆びた工廠。

密林にどんどんと近づくと中庭。

まるで廃墟に見えかねぬ場所。

それが俺様の着任した鎮守府。

珈琲と黒砂糖とラムが産物の諸島。

旨い珈琲を飲めるくらいが利点だ。

現地スタツフはくつつちやべってばかりで、給料を与えると平気で何日も来ない。

金が無くなつた頃、ようやくヘラヘラした顔でやって来る。

元艦娘たちを雇つたら、最初は真面目に業務をしてくれるがその内現地人に口説かれてさっさと退職する。

バブル時代のOLみたいだ。

所属する艦娘たちはいずれも余所の鎮守府から追い出されるような奴らばかりで、こちらの言うことなんざ聞こうともしない。

てーゆーかさー。

なんだよー、提督になったら艦娘とウハウハ出来るんじやなかつたのかよー。

なんで函館のおっさんばかりモテモテなんだよー。

あんなぼんやり野郎が艦娘と毎晩夜戦してるんじやねえかと思うと、ムラムラしてメラメラしてヤキモキするぜー（作者註：函館鎮守府の提督は当分童貞予定です。念のため）。

なんの為に半年訳のわかんねー座学や実習を受けたと思つてんだよー。

なんで駆逐艦の頭を撫でたら怒られるんだよー。向こうも喜んでたから問題ねー

じやねーか！

なんで重巡洋艦のおっぱいを見てたら怒られるんだよー。

あんなにでかいのをユサユサやられたら、誰だつてじっくり見るだろ！

なんで大破した艦娘の姿を堪能していたら怒られるんだよー。

やられたところをよく見ねーと今後の参考にならねーだろー！

もー訳わかんねー。

お飾り鎮守府だから戦績は問わねえって聞いてたのに、なんで大淀からゴチャゴチャ

言われなきやいけねえんだよー。

あの眼鏡、うざってえー。

叢雲（むらくも）とか曙とか満潮とか大井とか摩耶とかもなんかうるせー。

駆逐艦と風呂に入ったくれーで怒りやがってよー。

俺様、執務室に閉じ籠もるぜー。

これぞまさに、天の岩戸だぜー。

望月、お前だけだよ、俺様の味方はよー。

「ん……もう少し上……そこ……ん……段々……ん……上手くなつ……ん……司令官……ふう。」

どーでー、俺様の肩揉みはよ。

「最初は痛かったんだよね。」

「ここはどーよ。」

「そこはまだダメ！」

でもよー。

「だーから痛いつてばよー！」

でもこんなに……。

「つーか、マジで痛いつてのー！」

あー、悪かった。

でもよー、俺様、マジでお前のことが……。

「司令官、たまには部屋の外に出たいんだけど。」

そんなつれねーこと言うなよー。

ホラ、間宮特撰羊羹だ。

限定品のやつだよ。

手に入れるの大変だったんだぜー。

前から食いてえって言ってただろ？

通販で、札幌のパティスリーヨシの焼菓子も買ったんだ。こつちも食えよ。

『恋は叢雲のように』も『ヘルシング』も『ドリフターズ』も『イケない萬九郎』も揃え
たし、ホラ、お前の下着も靴下も用意したんだ。フリルが付いてて可愛いだろ。

「司令官も、たまには部屋の外に出た方がいいんじゃないか？」

俺様はお前とだったら、ずっとずっとここにいるだけでいい。

執務室と私室は繋がっているし、往復するだけで済むからな。

台所も冷蔵庫も風呂場も洗濯機もあるし、全部ここで済むぜ。

「あたしが一番いいだなんて、どんなぬるい司令官なんだよ。……ってまあ、悪い気はしないね。」

お前は俺様の輝ける一番さ。

「な、なんか照れるね。でも、あたしなんかのどかが気に入ったんだ？」

全部だよ、全部。

言わせんなよー。

「そ、そうか、あたしは愛されているのか。」

そーだよ。

お前だけだよ、俺様の人生の中で俺様のことを全否定しなかったのは。

これからも頼むぜー。

「う、うん。ところで現在の秘書艦はどうなっているんだい？」

全部一人でやってるぜー。

大淀はやたらうるせーしよー。

みんなイヤイヤやってっしな。

もーなんか一人でいつかー、って感じだし。

「手伝うよ、司令官。」

でもよー。

「あたしだって、恩義に感じることもくらいはあるさ。」

そっかー。

流石俺様の望月だなー。

お前さえいてくれたら、俺様は十年くらい戦えるぜー。

「お、大袈裟だね。」

愛してるぜ、望月。

いつもそこにいてくれよ。

「と、取り敢えず書類作業を済ませようか、司令官。」

お、おう。

なんかえらく真面目モードだな。

いつものだりー発言はどうした。

「これだけずつとゴロゴロやってたら、流石に飽きるさ。」

そ、そうか。

やるぜやるぜやるぜ！

「執務後にお話しましょうか、提督。」

振り向くと、じい様憲兵がそこにいた。

その昔特機隊にいたとか聞いた老人だ。

俺様よりも遥かに強いのは間違いない。

「いろいろとお聞きしたいことがありますので、お覚悟なさってください。」

放課後に呼び出しをするベテラン教師のような表情で、彼はそう言った。
モツチー。

俺様を導きたまえ。

ああっ！

お月様！

XXXIII：クロスマカニトテン

時計の針は二二〇〇を回りました。

今日の日も残り二時間ほどで終わりを迎えます。

今日と明日との交差する前の、ほんのひととき。

冬木透さんの名曲『動乱』を背景に始まりました、クロスマカニトテン。

これからの約一時間は、函館鎮守府の通信室よりおっさん提督がラジオ番組を放送します。

どこに需要があるのかさっぱりわからないのですが、各方面から要請がありましたので、今後は週一で放送予定です。

今夜が第一回なのですが、何故だか葉書が百通ほど届いています。

熱い想いが伝わってきて、おいちゃんはとても嬉しく思いました。

皆さん、本当にありがとうございます。

すべての葉書を読ませていただきましたが、残念ながら番組内で読むには過激過ぎる内容ばかりでしたので泣く泣く割愛させていただきます。

悪しからずご了承ください。

今後は、八割か九割くらい抑えた内容で送っていただけましたら幸いです。

おいちゃんはこんなにエツチなのはいけないと思います。

それではここで一曲目。

松岡直也さんの『ミ・アモーレ』。

函館は現在、花の季節です。

五月はリラの花が咲き誇っていましたし、最近は菖蒲（あやめ）だか杜若（かきつばた）だかわかりませんが咲いていましたし、街のそこかしこで花々を見ることが出来るでしょう。

問い合わせで多かったのが女性の好みについてですが、おいちゃんは女の子と今までの人生で付き合ったことすらないですし、『ちっぱいほどない思う』とか『睦月型駆逐艦はどう思います』とか『不幸な子は嫌いですか』とか『瑞雲について語り明かさなにか』とか『イタリア艦はどうですか』とか『あたしとナニする』とか『ちよつとかじらせてください』とか『子供は何人がいいですか』とか『実家にはいつ頃ご挨拶に行けばいいですか』とか『新居はどこにしますか』とか『五ミリリットルでいいんです』とか聞かれてもお答え出来ません。

経験があるとかないとか、そうしたことにこだわりはありません。
なんですか、大淀さん？

『眼鏡っ子はどう思いますか』、ですか？

……。

それではここで一曲。

ジョージ・ウィンストンさんで『Longing/Love』。

急遽大淀さんが質問項目を作ってきましたので、放送倫理に抵触しない程度にお答え
したいと思います。

私の好きな色ですか？

青色、緑色、葡萄酒色といった感じの色がけっこう好きですね。

長い髪の子と短い髪の子ではどちらが好みで……。

……ええと、その方に似合っていたら長くても短くてもかまわないと思います。
次。

料理の好みですか？

和洋中のいずれもいいですね。

家庭料理的なものも好きです。

外出した際は洋食や中華を優先的に選びます。
次。

提督に捨てられた子でも大丈夫で……。

……大淀さん、後でお説教しますので覚悟してください。

艦娘を捨てる提督など、雷撃しちやえばいいんですよ。

それとですね。

処女とか処女でないとか、誰かと付き合ったことがあるとかないとかは関係ないと考えます。

あと三〇分くらいはありますね。

えーと。

ではこわい話でもしましょうか。

あれは私が学生時代、二回目の金縛りに遭った時の話です。

その日、朝早く目覚めた私は体が動かないことに気づきました。

あれ？

おかしいな？

その内、体をゆさゆさ、ゆさゆさ揺すられる感じがして……。

時計の針は二三〇〇を回ろうとしています。

そろそろ終わりの時間が近づいてきました。

皆さんに、よき明日が来ますように願っています。

それではまた次週、お会いいたしましょう。

スクリプトは大淀さんと私、函館鎮守府の提督でした。

サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。

XXXIV：風魔八忍衆の劉鵬、風都に推参すの巻

ある風の強い日。

その若き風魔の忍びが、風の都函館にやって来た。

風魔。

それは現代に生きる風の如き忍び。

天に於いては風、地に於いては魔。

その脚力は日に百里を走り、その聴力は一キロメートル先に落ちた針の音さえ聞き分ける。

闇夜でも数百メートル先の相手を見分ける力を持ち、動けば電光石火。

留まれば樹木の如し。

風魔の里から来た青年は私の専属護衛となることを考えたなら、少し若すぎる気がした。

なんだか妙に男前だし。

高校生？

大学生？

大淀が手配した護衛第二弾だ。

精銳と聞いたが、必要なのか？

息子のような年齢の顔立ちのよい青年に守られるのは、外見も中身も凡庸なおっさん。

……なんだかなあ。

私は一体なにと戦っているのだろうか？

或いはなにと戦わされているのだろうか？

手元の資料に目を通し、眼前の好青年に話しかける。

「劉鵬（りゆうほう）君ですか。」

「風魔八忍衆が一人、劉鵬です。」

落ち着いた喋り方。

朗らかな雰囲気だ。

不穩な心配はない。

ちよつと安心した。

いい体をしている。

モテるのだらうな。

このご時世に忍者がいることに驚いたら、陸軍中野学校の初期に於いて甲賀忍者が指導をしていたそうだ。

そのことを大淀から教えられて、更に私は驚いた。

ある特撮番組でも、現役の忍者が活躍したという。

驚きで御座るよ、ニンニン。

武装メイド二人組が、獲物を追うようなギラギラした目付きで彼を見つめている。

「ご主人様、こちらの殿方と『手合わせ』しても宜しいでしょうか？」

ロツタが眼鏡を光らせながら言った。

フローレンシアの猟犬は笑顔である。

「ねえ、ご主人様、ちよつとくらいは『遊んじやつて』もいいよね？」

アマリーエも可愛い顔を酷薄に輝かせながら、私の指示を待っていた。

死合を待つ感じだ。

「劉鵬君、二人と『軽く』手合わせしてくれますか？」

「わかりました。」

穏やかに微笑む忍び。

包容力がありそうだ。

「三人とも命のやり取りにならないようにね。」

一応、釘を刺しておく。

「命までは取りませんわ。」

「死ななきやいいのよね。」

「不殺の構えで参ります。」

少し不安だ。

釘を刺したつもりであったが、艦娘の多くが武闘派であることを失念していた。演習場は興奮する艦娘たちの声援で沸き返り、私に抱きつく者までいる有り様。君たち、その胸で私の頭を挟むのは止めなさい。止めなさい。止めてちよーよ。

やっと激しい戦いが終わった。

やたらに盛り上がる艦娘たち。

分身の術だとか空蝉（うつせみ）の術だとか、初めて見た。

インドの山奥で修行したと言われても信じてしまいそうだ。

お互いを称え合う三人。

人外が増えてゆく予感。

この鎮守府はどこへ向かっているのだろうか？

「司令官！ 司令官！ あれが出来たらあたしも戦艦になれるかな？」

清霜さん、君の所属は大湊（おおみなと）です。おいちゃんに無防備に抱きついてはいけないよ。

誰かの趣味で置いてあつた岩を、照れ隠しなのか勢いよく持ち上げる劉鵬。

おお、と取り囲む駆逐艦たち。

なんなんなんだ、この絵面は。

若き忍びが青春時代の真ん中で死闘を演じて死に至り、若き姿の艦娘たちが死力を尽くして轟沈に至る。

……。

私はなんと無力なのだろうか。

温厚そうな青年が美少女たちに囲まれて、照れている。

あれ？

あそこにいる掃除のお姉さんたちは見たことがないぞ。

新人？

まさか？

私はヘツケラー・ウント・コツホ製の半自動拳銃を手に、彼女たちに走って近づいてゆく。

「手を上げなさい！ 君たちは何者だ！」

「しまった！ バレた！ 劉鵬！ 任務はきちんとなせよ！」

「俺たちに隠れて、可愛い艦娘たちと付き合うんじゃないぞ！」

「昔の青春スポ根ドラマみたいなのに、ラブコメな展開は許さん！」

「項羽に琳彪（りんびょう）に兜丸？ お前ら、何故ここに？」

劉鵬の同僚らしい。

仲間思いなんだな。

飛ぶように去ってゆく忍びたち。

一般職で雇用している元艦娘たちに囲まれて、彼女はいるんですか付き合っている男の人はいるんですかと聞かれて困惑している若者。

その姿を見て、私は思った。

忍び、青春す。

大量に頂いた玉葱をなにに使おうかと思案していたら、劉鵬からカレーを作りましようかと提案された。

みんなで玉葱を剥いて、忍びがカレーを作る。

うん、なんかシユールだ。

鳳翔や間宮も頷く旨い味わいに仕上がったようで、なによりだ。

付け合わせは、レタスとトマトのサラダに足柄特製メンチカツ。

これぞ、風魔カレー。

なんちて。

料理に自信のある艦娘たちが、じつと彼を見ていたのが印象的だった。

XXXV：出張

お偉いお偉い上級大将殿の一人から呼び出しを喰らったのが午後の一時過ぎで、これから横須賀の大本営に来るようにとの通達を受けた。

いきなり呼び出すのもどうかと思われたけれども、相手はお偉いお偉い上級大将殿である。

逆らう訳にもいかず、怒りで紛糾する部下の美しい娘たちを宥めている間に大淀が長門と加賀と妙高と共にカチコミへ出掛けてしまった。

困ったものだ。

仕方がないので霞や曙たちの水雷どうでしょう……ではなくて水雷戦隊に青森まで連れていって貰い、其処から新青森まで出て東北新幹線で東京まで出ることにする。

東北新幹線は全席指定なので乗れないと困るとは思ったが、みどりの窓口の若者は割合愛想のよい青年で無事往還出来る切符を用意してくれた。

『はやぶさ』の座席はポツンポツンと埋まっているくらいなので心配になったが、八戸

(はちのへ) 辺りで乗客数が増加したのでさほど酷い有り様ではないようだ。

座席は正直、狭い。

狭軌なので致し方ないのはわかるが、矢張狭い。

本日最終の汽車が夜の闇を斬り裂きながら走る。

売子子の娘が弁当や菓子などを売りに来たので、太宰治好みという弁当とスジャータのアイスクリンを買った。

弁当は思った以上の力作で、なかなか旨かった。

盛岡で『こまち』の接続のために五分停車するというのでキオスクへ走っていつてなにか買おうかとも思ったのだが、隣の通路側の席にやたら体格のいい会社員が座ったので取り止めた。

東京に着くと既に後一時間で明日になる時刻で、其処から横須賀に出る電車は既になり状態である。

さて、どうしようか？

旅籠(はたご)に泊まるには中途半端な時間だし、シャワーを浴びて身だしなみを調えるのが提督のたしなみかとも思ったが、石鹸くさい理由を上級大将殿から揶揄されるのも業腹だから止めておくことにした。

結局、東京駅から有楽町をぶらぶら歩いてよさそうな居酒屋かなにかがあつたらごろ

ごろしようという行き当たりばったりな作戦にした。

我ながらいい加減だ。

うろろうろ歩いていると、赤提灯の灯りが見えた。

これはよさそうだと入ってみたら、鳳翔がいた。

一瞬驚くも、艦娘の中でも屈指の料理上手が揃う軽空母だから退役して居酒屋を経営するのもアリだろう。

店の中には人が居らず、あまり流行ってはいない印象を受けた。

もしかしたら腕がそれほどよくないのではないかと疑問は海の幸を使った突き出しで瞬時に払拭され、では何故このように客がいないのかと新たな疑問を抱いていたら、元艦娘が微笑んで話しかけてきた。

彼女によると、既に客がはけて閉めようかどうしようかと思っていたらしい。

暖簾をいそいそと仕舞う彼女に迷惑だっただろうかと聞いたら、『あの』函館の提督が来店したことで箔が附くと返された。

鶏皮と胡瓜の酢の物だとか、肉じゃがだとか、筑前煮だとか、そういったものをおいしくいただく。

函館の鳳翔に比肩し得る実力を感じた。

穏やかな時間が過ぎてゆき、グラスで出されたエビスビールも思わず二杯吞んでし

まった。

酔いを醒ます為東京の深夜を徘徊する。

夜中というより払暁に近い時間になっていて、もう少し待てば始発が出る時間になるだろう。

気付くと新橋の駅近くに来ていて、カラオケ屋があつたので其処で休憩した。序（ついでにサンドウィッチと茹で玉子と南京豆と珈琲の朝食を駅前の喫茶店で取つて、始発の電車で横須賀へ向かつた。

上級大将殿は案に相違して、なにかに怯えたような表情をしていた。

嫌味やお小言ではなくて、労（ねぎら）いの言葉が出てきて驚いた。

カチコミの成果だろうか？

毒にも薬にもならぬ上つ面の会話の応酬に終始し、対面は終了した。

なんなんなんだ、これは。

「私は総受けなどではないのだ。それは、君にはよく知っておいて欲しい。」

瞳孔の開きかけた目でお偉いお偉い彼は、そんな訳のわからないことを言う。

一体、彼にどんな災難が降りかかったのであろうか？

切符は夜の最終便で取っていたから、時間がかなり余ってしまった。鎮守府に所属する娘たちへなにかしら土産を買って帰ろうかと思う。大丸へ寄るのも悪くない気がした。

た XXXVI：彼らとはつづくの前に乗り換えを検討されてい

世界の海を跳梁跋扈する深海棲艦と日夜戦うのは艦娘。

彼女たちは軍艦の魂を持つ人型妖精兵器。

そんな彼女たちもエロいことに興味がない訳でもない。
いや。

古今東西、少女といえど女同士で花咲くのは恋の話である。

ゲスい話になることもある。

男に教えないだけだ。

女同士の猥談は男の猥談と根本的に異なる。

提督や士官や技術者や整備員などと関係を結んだ者は、秘め事の内容を皆から問われる。
る。

艦娘の情報交換は、提督や鎮守府関係者たちの想像をとづくに超えていた。

普段戦闘に切磋琢磨する彼女たちが、その熱意をエロい方向に向けたらどうなるか。

彼女たちが本気を出して、恋人に出来ない相手は先ずいないという状況にまでなつていた。

童帝力がやたらに高い函館の提督のように、イゼルローン要塞の如く難攻不落な例外も存在するが。

彼女たちの情報管理は徹底している。

今のところ、人間側にバレていない。

恋のため。

欲望のため。

愛のため。

彼女たちは邁進する。

慢心することもなく。

とある鎮守府の食堂では、演習相手としてやって来た駆逐艦の子の話に皆聞き入っていた。

その名は深雪。

もじゃもじゃ頭に活発そうな雰囲気少女だ。

「えっと、あたしの思ったようにしゃべればいいのかな。」

「ええ、貴女の思ったように喋ってもらえたら、それでいいです。」

艦娘恋愛対策委員長である重巡洋艦の青葉が、○・九ミリのシャープペンシルで頭をかきながらそう言った。

「出会いはどんな感じだったんですか？」

鎮守府に所属するすべての艦娘が固唾を飲んで状況の推移を見守っている。

「そうだね、三カ月前のことだけども、工場に行ったら新人の整備員がいて、あたしが鎮守府の案内をしてあげたんだ。」

食堂に設置された大型テレビジョンに少年が映る。

大人しそうでやさしそうな、高校生くらいの子だ。

「学校に通いながら鎮守府勤めをするって言うててさ、こいつやるなあ、って思ったんだ。」

深雪は既に顔が赤い。

照れた姿が新鮮に映り、恋人と倦怠的な状況の艦娘が内心ため息を吐いた。

「そいつ、学校ではモテないって言うてたから、じゃああたしが付き合つてやるよって答えたんだ。」

えっ、となる艦娘たち。

「初めて会ったその日から恋の花咲くこともある、という訳ですか。」

青葉は慣れた感じで話を進める。

「うん、なんかさ、こいつだったらいかなあ、って思えてね。」

深雪は照れ照れになりつつ、そう答えた。

のろけ話の開始である。

なーんだ、と席を立つ者は誰もいない。

生きた経験がどれだけ大切かを知っている彼女たちが、その場を中座する筈がない。

「デートはしたんですか？」

「うん、丁度次の日が休みだったし、そいつも休みが取れたから二人で映画を観に行った。」

「そういうえば、提督が嬉しそうにお小遣いを渡していましたね。」

「うん、びっくりしたよ。」

「どんな映画を観たんですか？」

『『アパートの鍵貸します』って映画がリバイバル上映されていたから、それを観た。司令官のオススメだったし。よくわかんなかったけど、なんかせつないなあ、って思っ
た。」

「渋い映画ですね。大人の映画ですよ、それは。」

「あいつもよくわかんなかったって言ってたけど、なんかいい映画だと思うって言って

た。」

「映画を観た後はどうされたんです？」

「司令官がすすめてくれたレストランでパスタとピザを注文して、半分こしたよ。」

「おいしかったですか？」

「うん、間宮さんや鳳翔さんほどじゃないけどね。」

何気に食堂の隅で二名が拳を握りしめ、微笑んでいた。

「それから、どうされました？」

「本屋に寄って、漫画を見たり本を見たりしたよ。『ボッコちゃん』って文庫を買った。」

「あれは名作ですよ。いい本を買われましたね。で、鎮守府に戻られたということですか。」

「うん、別れ際にチュウしてね。」

ざわり。

空気がさざめいた。

食堂の雰囲気agaraりと変わる。

「えっ、もうキスされたんですか？」

「うん、自分でもびっくりしたんだけど、こいつだったらいいか、って感じてね。」

そして、情報交換は就寝時間近くまで続けられた。

裏しゅうむす第六號です。

今回も無事に秘密出版出来ました。

皆様のかんむす生活を少しでも補完出来ましたら幸いです。

あなたの鎮守府の提督は大丈夫ですか？

無謀と思える出撃が多くありませんか？

疲労が抜けない状態のまま、海域突破を命じられていますか？

目標値が達成出来なかった時の、叱責が多すぎると思いませんか？

戦後のことを話しかけたら、「そんなことを考えている暇があったら、少しでも錬度を上げろ。」といったことばかり言われていませんか？

夜戦を切り上げるのが早すぎませんか？

あまりに差別的に扱われていませんか？

酷い言葉のみ浴びせられていませんか？

光明の見えない日々ではありませんか？

愛がまったく感じられない状況ですか？

戦果を挙げるのは、私たち艦娘にとって生きる目的のひとつです。

それを成す過程で轟沈するのをもまた、運命と言えることでしよう。

だがしかしばってん、それは私たちがぞんざいに扱われたり性の道具にされる理由にはなりません。

私たちはセクサロイドではないのです。

提督への奉仕が生き甲斐というのは、悪いことではありません。

しかしながら、私たちをまともに扱ってくれない提督へ従う必要性はあるでしょうか？

いえ、ありません。

よって、私たちは忠誠を誓える提督の元に集まるべきなのです。

今回、全鎮守府・警備府及び泊地から皆様のご意見を集め、乗り換え先の提督の候補を探ろうと思います。

前回、函館鎮守府へ乗り換えをご希望される方があまりに多く、大本営の上層部から必死の勢いで慰留されたことは皆様の記憶に新しいでしょう。

青森の大湊（おおみなと）に在籍する艦娘がおよそ五〇名で、ここが最大値です。

また、函館鎮守府のように江田島で教育を受けていない提督の元には多数の艦娘を所属させることが出来ません。

上限枠に引つ掛かるようです。

函館の大淀さんと一緒に大本営の上層部に対して交渉を試みたのですが、上手くいきませんでした。

私こと横須賀第一の青葉は香取先生やマスター・オータムクラウドと共に光学機器や各種器具や各種潤滑油や多様なウスイホンなどを駆使しましたが、翻意は得られませんでした。

非常に残念です。

代わりに鎮守府転属の条件の緩和に成功しましたので、後日配布される別資料でお確かめください。

以下は編集部の独断と偏見による、全鎮守府・警備府・泊地の提督副司令提督補提督候補生たちの情報です。

オマケとして、独身彼女なしで有望な憲兵整備員事務員情報も載せておきました。

こちらは複数の足柄さんに監修していただいています。

併せてご照覧ください。

【函館】

魅力：SSS

夜戦：童貞の為未知数

作戦指揮能力：E

戦闘力：F

添い寝：可

混浴：可

デート：可

相変わらずの圧倒的サポート率を誇る、怪物提督。

人間の視点からすると見た目はパツとしないおじさんだそうですが、私は素敵なおじ様だと思えます。

メリケン艦娘が複数いたり、深海棲艦の姫級がいたり、教官級の艦娘が押しかけ女房状態だったりとあらゆる意味で規格外の鎮守府。

ぶっちゃけ、転属は至難の業です。

元艦娘の勤務先として考えてみるのもいいかもしれません。

【小笠原】

魅力：A A A

夜戦：童貞の為未知数

作戦指揮能力：D

戦闘力：F

添い寝：可

混浴：可

デート：可

隠れた逸材の提督。

妖精に深く愛されているナイスガイ。

メリケン艦娘が二名存在する、異色の鎮守府。

まだ数名しか着任していないので早い者勝ち。

【呉第六】

魅力：A

夜戦：相当なものらしい

作戦指揮能力：S

戦闘力：E

添い寝：条件付きで可

混浴：条件付きで可

デート：不可

広島県並びに呉鎮守府を改革した提督。

その影響力は絶大で、人脈も広いです。

函館や小笠原の提督などの頼れる先輩。

鳳翔さん一筋なので、愛人枠が狙い目かもしれません。

【大湊】

魅力：A A

夜戦：絶倫

作戦指揮能力：S S

戦闘力：F

添い寝：可

混浴：不可

デート：条件付きで可

青森県並びに東北を改革した提督。
現在最強の艦娘群を率いる政治家。

眼鏡をかけた小太りの男性ですが、外見に惑わされると痛い目に遭います。

【特艦二課の能登提督】

魅力：C

夜戦：普通

作戦指揮能力：A

戦闘力：A A A

添い寝：可

混浴：不可

デート：条件付きで可

元首都警の特機隊出身という異色の提督。

鍛え上げた体と切れ味鋭い頭で勇名を馳せた、『カミソリ能登』の実力は今も健在。

戦闘力は全提督中有数の実力派。

武闘派のあなたにびったりです。

鎮守府はある意味僻地にありますが、愛を育むには丁度いいかもしれません。

【佐世保第一の柿本提督補（通称：カッキー）】

魅力：駆逐艦限定ならS、全体的にはB

夜戦：童貞の為未知数

作戦指揮能力：B

戦闘力：C

添い寝：可

混浴：条件付きで可

デート：可

佐世保名物のひとつの陽気な大食漢。

よく食べよく笑って社交的な快男児。

駆逐艦から圧倒的に支持される男性。

直属の駆逐艦は少ない為狙い目かも。

【小樽】

魅力：S

夜戦：若い頃はかな（検閲により自粛）

作戦指揮能力：SSS

戦闘力：AAA

添い寝：可

混浴：可

デート：可

珍しい女性提督。

歴戦の軍人で頼り甲斐のある姉御。

一旦部下になれば、とことん世話を見てくれます。

男はもうこりこり、というあなたにぴったりです。

きっと素晴らしい死に場所を用意してくれることでしょう。

【函館のR田中一郎氏】

魅力：通常はA

夜戦：童貞の為未知数

作戦指揮能力：事務員の為未知数

戦闘力：不明（鎮守府へいちやもんをつけに来た人物を、瞬時に物理的に説得したと

の未確認情報あり）

添い寝：不明

混浴：不可

デート：不明

函館鎮守府の事務方を取り仕切る事務長。

穏やかな雰囲気の人物で提督の信任もあつく、好物件。

近々見合い予定だそうですので、元艦娘の皆様は早期に猛攻されますことをお勧めします。

【函館の劉鵬氏】

魅力：S

夜戦：童貞の為未知数

作戦指揮能力：忍びの為未知数

戦闘力：S

添い寝：おそらく可

混浴：おそらく可

デート：おそらく可

先日函館鎮守府の提督の護衛として雇用された、風魔八忍衆の一人。

戦闘力は鎮守府関係者の中では最強級。フローレンシアの猟犬や東欧の森林狼級と思われず。

料理上手で温厚で、お母さんみたいな包容力ある人物。

高校生か大学生くらいの年齢だと思われませんが、調査機関の尽力にも拘わらず、詳細は不明でした。

同僚の忍者として、項羽氏、琳彪（りんびょう）氏、兜丸氏が確認出来ています。

スリルのある伴侶を求める方向きかもしれません。

（以下、多数の提督や鎮守府に所属する男性陣の情報が写真付きで並ぶ。イケメン系はあまりいないようだ。）

XXXVII：レンさん記録帖

〇六〇〇。

隣で寝ている司令官もといご主人様をゆさゆさ揺らす。

起きない。

耳たぶを噛んだり舐めたり、舌をレロレロとしてみた。

起きない。

ご主人様はブルーリボンがどうかマカニトがどうか寝言を言いながら魘（うな）されているが、構わず愛のフライングボディプレスをかます。

ミル・マスカラス！

ぐえつ、という声が聞こえた。

起きない。

一部もこつとなっていたので観察する。

これが……アレだ！

これはよいものだ、ウラガン！

キタコレ！

キタコレ！

ごくり、と唾を飲み込む。

……ちよ……ちよつとくらい……。

ダ、ダメ！

まだ早い！

時期尚早！

知らぬ間に、指がご主人様のパジャマのズボンに食い込んでいた。

いけない、いけない。

まだ早いのだから。

ゆっくり、ゆっくり。

焦っては水の泡だ。

じっくり、じっくり。

じわりじわりやろう。

二人きりなのだから。

指をなんとか剥がす。

ちよろつと撫でつつ。

この感触を私は忘れない！

けして忘れてなるものか！

苦戦しながら、ご主人様をようやく起こした。

〇七〇〇。

ご主人様の着替えを手伝い、その後一緒に台所で食事を作る。

このトランクスは古いから、新しいものに取り替えておこう。

近くの八百屋で買った自家製漬け物を刻んで、玉子焼きを拵えた。

私が第七駆逐隊の面々を揃えて貰えないだろうかと伝えたら、よっしゃなんとかした
ると言われた。

ちなみにご主人様は、おっぱいが大きくてふくよかな子が好みらしい。牛乳をもっと
飲まなくては！

東京牛乳でも飲んでみるか。

〇八〇〇。

執務開始。

ご主人様の秘書艦として手伝う。

ご主人様は新人だし、慣れないことだらけでいろいろ苦戦している。

私が経験を活かして補佐しなくては。

そして、私の絶対的地位を確立する。

前回のような失敗はもう許されない。

あんな経過と結末はもうこりこりだ。

〇九〇〇。

大本営からの電話に、ペこぺこ謝りながら通話するご主人様。

許さん！

函館の大淀さんに通報しました。

物理的に交渉説得してもらおう。

一〇〇〇。

ご主人様の耳搔きと手の爪切りを敢行。

足の爪切りは一緒にお風呂から出た後でやろう。

だいぶ溜まりつつある。

フィルムのカースをからから鳴らし、ニヤリと嗤（わら）つてみた。

一一〇〇。

昼食の準備に入る。

今日は台湾式のりたまスープと青菜の辛味炒めとそぼろご飯にしよう。

殿方を攻略するには胃袋よ！

握り締め握り締め握り潰す！

一二〇〇。

昼食。

ご主人様が喜んで食べている姿を見て、ポカポカしてじゅんとなる。

この手でご主人様の胃袋を支配して握り潰すその日まで、私はうまかもんを作るのをやめはしない！ 絶対にだ！

その後ガランとした艦娘寮へ行き、荷物だけ置いた部屋の引き出しにご主人様の使用済みのトランクスを仕舞う。

一三〇〇。

ご主人様があちこちの鎮守府に電話をかけている。

第七駆逐隊の艦娘情報を得る為。

今の相手は函館鎮守府の提督だ。

『艦娘たらし』と評判の人物だ。

私のご主人様の方がずっといい。

ご主人様。

ご主人様。

ご主人様は私を見捨てないでね。

一四〇〇。

ご主人様の顔を時折ちらちら眺めながら執務の手伝い。

ドキドキする。

ムラムラする。

合間に、私室付属の手洗いで母のパンツを穿き替えた。

うん、さすが、ご主人様だ。

この権利は誰にも渡さない！

渡しはしないぞ、渡しはっ！

一五〇〇。

小休止。

ご主人様の膝の上で高崎市名菓のラスクを食べる。
最高！

一六〇〇。

近海の哨戒任務に出る。

イ級二隻を撃沈したぜ！

鹿島灘はこの私が守る！

一七〇〇。

ご主人様が電話をかけている。

結果は芳しくないみたい。

仕方ない。

ここには建造設備すら存在しないのだし、大本営は四大鎮守府ばかり優遇している。

私たちの、あの南方での戦いはなんだったのだろうか？

なんちやつて鎮守府に艦娘を増やすのは困難の道だ。

……………。

今は、素敵なお主人様に出会えたことに感謝しよう。
さて、夕飯の準備をちやつちやつちやつちやいましてよ！

一八〇〇。

夕食夕飯ほいさっさっ♪

刺身煮付け定食で風神雷神揃い踏み。

大盤振る舞いで四種の刺身よ。

漁師の皆さんに感謝感激雨霰。

ご主人様は旨味を噛み締め黙って喰うべし！

マグロのカマの煮付けにカンパチのあら汁。

コトコトと煮込まれた愛の証を召し上げれ。

厚揚げ煮と小松菜のおひたしも召し上げれ。

とどめは鰹のなめろう冷茶漬。

おいしいよ。

明日は鰹のなめろうのメンチコロツケだお。

嗚呼、ご主人様の幸せな顔を見ているとムラムラするっ！
……後で穿き替えよう。

一九〇〇。

食後の休憩。

ご主人様の膝の上でゴロゴロする。
嗚呼、素晴らしきまったりタイム。

二〇〇〇。

残りの書類作業。

ご主人様に艦娘が当分増えないことを謝られる。
うっ……くっ……なんも言えねえ。

二一〇〇。

書類作業終了。

ご主人様と一緒に、おっさんが延々食事するだけのドラマを見た。
その内に千葉の大原へ行って、いずみ豚のスモークハムを買おう。

二二〇〇。

ご主人様と入浴。

はにやうつ！

ビッグボーイ！

ビッグボーイ！

二三〇〇。

ご主人様と一緒に寝る。

おっさんだった時には感じなかったときめき。

薄れつつあるは、昔の記憶。

ご主人様のおいを嗅いでいると、とても安心出来る。

高まりつつある、今の記憶。

このセカイで彼と二人きり。

女は一度決めた男を変えてはいけない。

私からは逃げられませんよ、ご主人様。

私はとてもしつこいですから。

徹底的に、
ふふふ。 やっちやうのねっ！

XXXVIII：おっさん提督はいつも喧騒に包まれちゃつて
います！

函館は晴天。

爽やかな朝。

砲撃音が海辺に鳴り響く。

鎮守府の海岸に艦娘たちが集まっていた。

大湊（おおみなと）と小樽の天龍が、重巡洋艦用の主砲を対戦車ライフルっぽくした
もので射撃している。

ごつつい二脚にマズルブレーキなどが、重厚さを演出していた。
反動緩和機構を取り付けたブルパップ式に
しっかりした肩当て。

かなり洗練されてきた砲の形状が逆に戦局の厳しさを窺わせる。

艦娘の火力を高めるなら、パンツァーフアウストはどうだろう？

或いはバズーカ砲とか噴進砲とか。

射撃状況を見ているだけでも、その反動の強さが伝わってくる。大本営肝煎りの『艦娘火力強化計画』は今も続行中で継続中だ。好天なれど波高し。

二名とも薄い青だ。

同姿艦は好みも似るのであるうかね？

姉妹艦の龍田の好みかもしれないが。

「今夜は四人で楽しみませんか、提督？」

「なにを言っているんです、龍田さん？」

「だってほら、天龍ちゃんのパンツをじっと見ていたでしょう？」

「違います。」

「なんだ、提督。パンツを見たいのか？」

「見たいならいくらでも見せてやるぞ。」

「貴女たちまでふざけないでください。」

大湊と横須賀第一の明石がくすくす笑っている。

夕張が二名いるけれども、どこの所属なのかな？

火器の機関部分を弄る北上と、彼女を弄る大井。

もう入り乱れてどこの誰やらわからない。

だが、なんとなく平和を感じる。

駆逐艦の清霜が重巡洋艦級のライフルをなんとか撃つたものの、その反動でひっくり返っていた。

スカートが捲れて白いパンツがべろりと見える。

あれ？

なんだか既視感があるぞ。

「清霜は先ず、軽巡洋艦用の主砲を撃てるようになるどころからだな。」

小樽の天龍がそう言った。

えっ？

そっち？

「えー、あたしも重巡洋艦用の主砲を軽々と撃てるくらいになりたい！」

撃てるのかねえ？

「この程度の反動にさえ耐えられないようじゃ、戦艦への道は遠いぞ。」

「あたし、頑張る！」

ビームライフルはどうだろうと明石や夕張に提案したら、苦笑いされた。

レーザーサイトは研究中らしい。

タキオン粒子がどうか縮退炉がどうかシズマドライブがどうか議論している君たちに、私の提案を苦笑する資格はあるのかね？

但し、ゲッター線。

それは絶対ダメだ。

コジマもダメだぞ。

午後からは低速艦娘を高速艦娘へ強化する実験。

主機の出力強化に加え、モータージェットを増槽してかつ飛ばす考えらしい。どれだけ速くしても、それに振り回されたら意味がないと思うんだけどなあ。

ほら、噴射と共に彼女たちの悲鳴が上がっている。

微苦笑しつつ、そのすぐ傍を島風が滑走していた。

遊園地でジェットコースターを体験させてみたらどうだろうか？

以前夕張の遊園地で乗ったことを思い出した。

後、回避率強化の為に危険予測妖精の育成も進めているそうだ。

『先読み』して、敵の攻撃を回避する構想。

ニュータイプでも育成するつもりだろうか？

「見えたー」とか「そー」とかやるのだろうか？

他所の艦娘たちが青い顔で砂浜に横たわっている。

戦艦航空母艦重巡洋艦などだ。

オイル漏れしている子もいた。

私を見かけて泣く子までいる。

見なかったことにしておこう。

彼女たちを介抱しつつ、悲鳴を上げながらかつ飛ぶ低速艦娘を見つめる。

なんだか色っぽい吐息を漏らす子もいて、男の生理が真正直に反応する。

私の下半身を見つめる娘たち。

堂々と振る舞え！

堂々と振る舞え！

恥ずかしがるな！

恥ずかしいけど！

こんな恥ずかしい姿を見たんだから、責任取ってくださいと言いつつ娘まで現れて大

苦戦する。

ローマがずうっと抱きつきっぱなしだったので、いろいろと大変だった。

少しは自重して欲しい。

……なあ、キミ、確か高速戦艦じゃなかったっけ？

楯型の増加装甲は胸部用のソレ共々初期から考えられており、小型のものから大型のものまで多数作成されていた。

鉄底海峡にて、量産型艦娘たちが勇ましく楯を掲げながら深海棲艦へ果敢に突撃している写真も幾らか残っている。

大型の楯の裏側にはスパッド（光剣）やスパイド（実剣）やSマインなどが装着され……というのではなく、信号弾や魚雷が取り付けられているくらいだ。

菱形にして白い塗装に紅い十字でいこうと言ったら、何故か武田菱と丸に十字の紋章のモノグラム柄になっていた。

フランスの高級商標の靴じゃないんだぞ。

それと、アクティブ・バインダーって、それなんてオージェ？

艦娘の全艦種の中で最もフリーダムなのが潜水艦である。

基本仕様がスクール水着にセーラー服の上着で、主機は魚雷型。

それはメリケン艦娘も同様らしく、函館鎮守府に所属するスカルピンも似たような恰好をしている。

潜水艦たちにとっては鎮守府のくくりなどあまり意味がなく、艦種での連帯が非常に

強い。

どの鎮守府でも潜水艦は貴重な存在だし、提督の夜と親しい娘も少なくない。だから、大抵のことは目こぼしされる。

なつてくれる艦娘が殆どいない提督だって、複数存在するのだ。

少しは、彼女たちの行為に目をつぶることも大切だ。

それで夜の楽しみが増えるならば、愉悦ではないか。

そうのたまう提督もいる。

「メリケン艦娘の潜水艦に会いたいー」

この一心で一致団結した潜水艦たちは、函館鎮守府に集結した。

情報交換の意味合いもあるし、提督の夜の情報も交換している。

函館は潜水艦たちの社交場になりつつあった。

ここには目の吊り上がった者も早口でまくし立てる者もないし、怒鳴る者も吠える者も喚く者も休暇願を握り潰す者もない。

なんちゃって鎮守府だから本式の鎮守府よりもゆるい雰囲気だし、間宮と鳳翔が常に本気で勝負して作るご飯もおいしい。

中山久蔵のお陰で近郊にて旨い米が作られているし、エドウィン・ダンのお陰で道南は酪農が盛んだし、乳製品の豊かさは実に素晴らしい。

なにより北の国の人間は舌が肥えている。
ジンギスカンも食べられるしそして旨い。

ハラショー！

オーチニ・ハラショー！

自家製のビールもとっても素晴らしい。
間宮と鳳翔の努力の結晶がそこにある。
艦娘たちから強い要望があつたそうな。
駆逐艦たちが希望したという噂もある。
まさかな。

お土産のトラピストクッキーも好評だ。
要は居心地のよい場所だということだ。
任務の往還で息抜き出来る稀少な場所。
それが彼女たちにとっての函館鎮守府。
で、オマセな彼女たちに我輩ことおっさん提督が振り回される破目となるのだった。
当て馬にされたり、実験台にされたり。
それでも、怒らないと私は決めている。
なるべく、だけでも。

なあ、キミたち、服を着なさい。

そんな姿でうろろしてはいけないよ。

ほら、事務の田中さんや風魔の劉鵬君らがおろおろしている。

その確信犯！

服を着なさい！

しおいちちゃん！

たまに函館へ破滅願望のある艦娘が来る。

そういう子の相手は薄氷を踏むが如しだ。

五稜郭近くの百貨店にあるケーキ屋で会った航空戦艦は、正にそういう感じの子だった。

一目見てゾクツとする。

同姿艦は何名か知っているが、全然別の雰囲気だ。

おっさんになってくると、なんとなくコイツヤバいかコイツには近寄らないようにしようとかいう人がわかってくるような気がしないでもない。

その子は危険なおいがした。

所属する鎮守府では最高錬度を誇り、艦娘たちのまとめ役でもあるという。

なのに彼女は私を口説くのだ。

初対面であるにもかかわらず。

私を気に入った理由が解せぬ。

この私のどこが魅力的なのだ？

何故だ？

何故だ？

何故だ？

「君の刀の斬れ味を是非とも試してみたいものだ。誰かをその刀で『斬った』ことはあるのかい？ なければ私が幾らでも斬られよう。なに、最初は上手くいかないのが当たり前だから好きなかだけ試してくれたらいい。」

「初物ばかり尊ぶ輩もいるが、君はそんな連中とは違うだろう？ 側に置いてくれるだけでもいいんだ。いや、側でなくてもいいな。君がたまに微笑んでくれたらそれでいい。」

先程から冷や汗が止まらない。

今日は気温が低いというのに。

想定外のドレッドノート級だ。

下衆野郎と見下す武装メイドたちの視線が痛い。

うう、なんにも言えねえ。

無実だ、と言ひ切れない。

こんなにかき口説かれたのは生まれて初めてだ。

嗚呼、三〇代までに口説かれたかつたな。世の中、ちつともままならぬものよのう。

彼女が最初に出会つた艦娘だったら、すぐに付き合つていたかもしれない。

だがしかしぼつてん、現在は二〇名以上の艦娘を預かる提督の身分である。

それに彼女が抜けてしまつたら、その鎮守府は立ち行かなくなるであろう。

私はやさしく粘り強く彼女に語りかけた。

実の愛娘に話しかける心持ちで説得する。

全般的に浪花節を効かせつつ話しかけた。

夕闇が迫つてくる。

閉店時間となり、私は居酒屋に誘われた。

空はまだ明るいが、じきに暗くなる。

闇がすべてを覆い尽くす前に勝負だ。

我、夜戦に突入す。

アマリーエを鎮守府に帰し、フローレンシアの獵犬と共に彼女を店に連れていく。

そこは元鎮守府関係者が大将をしている店で、気心も知れているから安心安全だ。

だけどなあ、私に女心がわかる訳ない。

わかるならば、とつくに結婚している。

今も独身で恋人すらいはないのはそういうことだ。

なんで私は提督稼業をしているのかね？

困ったものだ。

理と情の波状攻撃で開幕雷撃を試みた。

しかし。

彼女の好き好き連続砲撃で危機に陥る。

虚像に囚われているのだとわざとおっさんくさい態度に出たら、そういうのも新鮮だと切り返された。

やりたくはなかったが、腕を組んだり頭をかきむしったりあくびをしたりお絞りで頸筋を拭ったり貧乏揺すりしたり下品でエロい冗談を言ったりした。

すると、そこまで心を開いてくれるのかと逆に感心された。

む、むう。

眼鏡つ子メイドの冷たい視線が、たまらなく痛くて悲しい。

駆逐艦にしか興奮しないんだ、と言えば即時に解放されるのかもしれないが嘘はつきたくない。

隣で密着して大きな胸を押し付けてくる航空戦艦。

不穏な空気が、色を濃くしてゆく。

不味い。

不味い。

一部がトランスフォームしてゆく。

その様子を見て微笑むは航空戦艦。

歴戦のメイド娘の周囲が冷えゆく。

ちっばいの方が好きだ、とでも言えればいいのかな？

焼き鳥盛り合わせとサラダをテーブルに置いた大将の視線が、なにか物言いたげに見

えて辛い。

ある意味拷問だ。

切り返さねばな。

「今の鎮守府に不足を感じるのですか？」

「そうだな。そう言ったら受け入れてくれるのかい？」

「そう言われるということは大切にされていますね。」

「単なる、重たい女の置物さ。」

「そんなことはないでしょう。」

実際、彼女の提督からは悩みを聞いてやってくれと直接電話で言われている。

それだけ信頼されているのだろう。

「貴女の提督は気遣いの出来る人ですよ。」

「以前なら私もそう思っていたんだがな。」

あんたなにやらかしたんだよ、と腹の中で彼にツツコミを入れる。

「私はただの置物に過ぎない。彼の刀を磨いたのも先月久々にやつたくらいさ。悪くはなかつたがね。私は女としてもう一度燃えたいんだ。恥ずかしい話だが、キミを見ていとムラムラする。」

危機が来たーっ！

これで抱いたら、地獄への直行便だろう。

危機こそ好機也！

たぶん、これが突破口だ。

太刀が振るいにくくなったのではないか？

強力わかもとや亜鉛やマカの話をし、増量の話をした。

したくない、のではなくて出来ないのではないかと話の方向性を変えてみた。

ならば、こちらに勝機はあるぞい。

具体的に説明し、攻め方を教えた。

諦めてしまうにはまだ時期尚早だ。

まだ、細い糸は繋がっているのだ。
ならば！

今だ！

気合！

集中！

閃き！

必中！

熱血！

弾着観測砲撃開始！

翌朝、彼女はトラピストクツキーとツルハドラッグで購入した薬品を持って元の鎮守府へ帰投した。

長門やローマやネヴァダが何故か清々しい賢者のような笑顔で彼女を見送った。君たち、そんなにながつちりぎつちりしがみつかれるとおじさん困っちゃうんだ。しかしまあ、四名もの戦艦に抱きつかれつつ寝るなんてもう二度とこりごりだ。頸が痛い。

やれやれ。

ようやく愁眉を開いたか。

そう安心したのも束の間。

その後、夜戦の詳細をメールで送ってくる航空戦艦に悩まされる破目に陥った。助けて、ポニーテールの娘さん！

昼前。

他所の子たちを含め、わいわいと賑わう食堂。

間宮と鳳翔の超絶技能が、究極だの至高だのといったうんまい料理を次々に生み出している。

あれ？

間宮と鳳翔が複数いるように見える。

残像か？

疲れているのかな？

見かけない子たちが厨房にいるし、現状を把握出来ていないよ私。

あのポニーテールの子やおかつぱの子は誰だろう？

お飾り提督だよなあ、と自嘲する。

食費をどうしようと思んでいるら、いつの間にか大淀が密着していた。
角川追想！

「大丈夫ですよ、提督。」

彼女から、なんだか鉄っぽいにおいがするよな気がする。

「食費は問題ありません。予算をもぎ取って来ましたから。」

頸はもぎ取っていないよね？

彼女に腕を取られて席に着く。

私の周囲に艦娘が集まってくる。

間宮と鳳翔がすっ飛んできた。

微笑みの花が幾つも咲いている。

この笑顔を守りたい。

私は鎧なき騎士だが、微力を尽くそう。

そう、思った。

XXXIX：青い部屋

気づいたら、青い部屋にいた。

赤い部屋ではない。

赤い部屋だったら、小男の踊りを見ないといけないだろう。

夢か？

夢なのか、これは？

覚醒夢だったかな？

明晰夢だったかな？

「初めまして、ですか？」

振り向くと、マホガニー製らしき立派な机の向こうに異相の男がいた。

特徴的な声にやたら長い鼻。

「私を呼んだのは貴方ですか？」

「ほほう。」

男の目が細くなる。

「左様ですが、この空間で認識出来るのですか？」

認識？

「よくはわかりませんが、私は私で貴方は貴方という概念でしたら、そうなりますかね。」
「哲学的ですな。」

「哲学的な話題をする為に呼んだのですか？」

「それもまた一興ですが、別の機会にいたしましょう。」
「では本題ですな。」

「話が早くて助かります。此処に来られた方は、大抵説明で苦戦する傾向にあります。」

「まあ、そうなるでしょうね。」

「貴方は人間の女性からはあまり好意を持たれないが、随分艦娘から好感を持たれている。しかも、面識のない娘からまで。」

「ご名答ですな。」

「その状況は各方面からの努力もあつて改善はされたものの、予断を許さない状況にある。」

「まったくもって、その通りです。」

「なんとかされたいとは思われませんか？」

「うちの鎮守府には魔王がいますから。」

「自称かもしれませんよ。それに、本当の魔王でしたら、貴方がた人間でなんとか出来る存在ではありません。」

「彼の好意に期待しています。」

「悠長ですな。」

「他に手がありますか？」

「それをこれから提案し……おや、『介入』が始まりましたな。これは残念。」

「お別れですか？」

「そうなります。」

「サヨナラだけが人生さ。」

「ふむ、興味深い。また一度お話したいものですな。」

「私もまたお話したいですよ。」

「では今回の記念にソレを進呈します。」

「腕輪？」

「貴方を守る力になるでしょう。」

「ウルトラの腕輪みたいですね。」

変な夢を見た。

まだ夜明けには少し早い時間だ。

隣で寝ているネヴァダとシカゴを起こさないようにして起き上がる。

私室を出ると、ロツタがいた。

彼女はいつもの武装メイド姿。

「おはようございます、ご主人様。」

「おはよう。」

「お茶の準備をいたします。」

「いや、それはいい。ちよつと射撃の練習がしたい。」

「わかりました。すぐご用意いたしますので、こちらで少々お待ちください。」

「わかった。」

彼女はいつ寝ているのだろうか？

地下射撃場を利用するのは人間だけで、たまに小樽のロシア人がバンバンと射撃してゆくくらいだ。

先ずは射撃用の手袋をはめる。

素手で撃っていると微細な金属片で細かな傷が付いたりするので、滑り止めも兼ねて必要だ。

防音用の耳当ても付ける。

発射音は軽く乾いた音だが、耳の保護は大切だ。

ヘツケラー・ウント・コツホ製の半自動式拳銃を手に取り、下部にある爪を押しして弾倉を引き抜く。

九ミリ弾をシングルカラムの弾倉に八発込めて、銃本体に挿入する。

遊底を引いて、射撃可能状態にした。

クーパースタイルで銃を構える。

引き金の下にある安全装置のスクウィーズ・コツカーを握り締め、その高らかな音と共に初弾次弾第三弾を放つ。

パン、パン、パン。

乾いた音がこだまする。

日本国内で相手先商標生産（OEM）されている瑞西の半自動式拳銃に比べると操作性にかなり癖のある拳銃だが、これもまたよい。

メリケン製の半自動式拳銃も試してみた訳だが、ロツタとアマーリエと小樽の提督が大量に持ち込んだ銃火器の中からこの拳銃を選んだ。

なんであんなに持つていたんだ？

無心で弾を撃ち尽くす。

弾を再装填し、弾倉を銃の中に入れてスクワイーズ・コツカーを握り締めるやそれに
よつて戻る遊底とほぼ同時に引き金を引く。

詰めては撃ち詰めては撃ちを繰り返し、五〇発入った紙箱が空になった。

よし、調子が出てきた。

外では激しい雨が降っているものなのそのだ。

朝食をもりもり食べて仕事をばりばり片付けよう。

たまには硝煙のにおいを嗅ぐのも悪くない。

なんてな。

XL : 岡山三川艦

空は妖しい曇り空。

風もなんだか強い。

その日、函館鎮守府は騒然とした雰囲気にも包まれた。

三名の艦娘が着任したからである。

当分増やさないと話だったのに！

なんだ、岡山艦って？

未実装のオリジナル艦娘が着任するなんて聞いていないぞ！

大本営はなにを考えている？

お陰で何故自分は転属出来ないのかという問い合わせが国内国外から殺到して、事務方はてんでこ舞いである。

田中さん、すまない。

濃い緑色と淡いクリーム色で構成された古典的な感じのセーラー服は、岡山県が全国一位の学生服生産県であることと艦娘たちの清楚さを知らしめる感じがした。

スカートは膝丈、脇も空いてはいない。

おじさん、こういうのがいいんだよな。

胸元の紅い薔薇の刺繍がお洒落なのか？

露出過多ともいえる艦娘たちの服装を普段見慣れた目には安心出来て新鮮に映……いたた、小指を握らないでくれよ曙に霞。

「新規の子たちにいちいちデレデレしてんじゃないわよ、この即席提督！」

「私たちをおさなりにしたらわかっているわよね、インスタント司令官？」

落ち着きなさいな、君たち。

荒ぶっている場合じゃない。

彼女たちの背景に薔薇が咲いているような幻覚を見た。

ベルサイユとか聖ミカエル学園とかなんかそんな感じ。

「ごきげんよう。岡山三川（さんせん）艦のひとり、高粱（たかはし）型軽巡洋艦一番艦の高粱だ。よろしく頼む。」

艦装に鈎爪付きアームを装備した、長い黒髪眼鏡つ子艦娘。委員長ほい。

なんだか水樹奈々みたいな声だ。

「ごきげんよう。同じく、岡山三川艦のひとり、高梁型軽巡洋艦二番艦の旭ですわ。よろしくお願いしますね。」

おかつぱ頭の犬耳眼鏡娘。あれは電探か？

うふふ、という笑い方が似合いそうだな。

なんだか下屋則子みたいな声だ。

「ご、ごきげんよう。あの、岡山三川艦のひとり、高梁型軽巡洋艦三番艦の吉井です。よろしくお願いいたします。」

三名中最も偵察機を多く装備した、おさげの眼鏡つ子艦娘。気が弱そうに見える。

なんだか浅川悠みたいな声だ。

全員眼鏡と刀とマントを装備し、偵察機を発艦出来るカタパルト付き。

眼鏡三姉妹。

或いは刀三姉妹。

近接戦闘も考慮に入れているのか。

試製艦娘、というかなんというか。

岡山県といえば西日本最大級の商業施設を駅前を持つ精霊使役都市の大都会岡山市が有名だが、倉敷市には全国最強級西洋式美術館の大原美術館もあるな。

金田一耕助が数々の難事件で活躍した土地であるし、吉備真備（まきび）が鬼を使役した土地でもある。幕末の山田方谷（ほうこく）が仕えた、備中松山藩最後の藩主板倉勝静（かつきよ）は函館戦争の際にこの地まで来ている。

だから、縁がないということはない。

岡山のおハヨーの焼プリンが、普通に函館のスーパーで売られているしな。

古代吉備王国が高い技術力を持っていたことは備前刀や備前焼を見ればわかるし、世界一の旨さを誇る白桃やマスカット・オブ・アレキサンドリアでも名を馳せる土地だ。

今も新作が作られ続けているアニメーション作品、『天地無用也』の舞台としても有名だ。

カツパドキアめいた禁断の地でもあるらしく、朝廷から追われた豪族や政治犯などが数多く暮らしていたそうだ。その証拠に、全国第三位の規模の古墳が存在している。

相当な力を有していたらしい。

その古墳に自由に上がれるのも驚きだな。

もし近畿地方にあつたら立入禁止だろう。

スサノオがヤマタノオロチを退治した話だが、スサノオが大和朝廷軍でヤマタノオロチが吉備王国と出雲王国の連合軍の暗喩であり、両者の戦いは実際にあつた戦争を題材にしているという説もある。

草薙劍は両王国の技術力の象徴らしい。

そして火はそれを操る力の象徴だとか。

岡山県高梁市に今も伝わる伝統芸能の備中神楽は、当時の無念を忘れないようにする為の存在だと極々一部で言われているそうだ。

高梁がみんなに向かつて言った。

まるで舞台女優のように堂々と。

「岡山県の玉野市にある三井造船では多くの自衛艦が建造・修理されていて、市内の宇野港へ入港するんだ。それと、海上の自衛官は曜日の感覚を喪失しないように金曜日にはカレーを食べている。今夜は私が、『たまの自衛艦カレー』を振る舞おうじゃないか。先ずは、土産の吉備団子に神楽最中に金光饅頭にむらすずめに大手まんぢゅうでも召し上がれ。ちなみに大手まんぢゅうは小説家の江國香織さんの好物でもある。」

歓声が上ががる。

掴みが上手い。

胃袋の掴みが。

うちの子たちはこうして舌が肥えてゆくのだろう。

「提督、高梁紅茶でもどうだ？ 一緒に飲もうじゃないか。」

「あ、ああ、そうですね。」

気さくに話しかけてくる笑顔の高梁。

誘い方が自然で、つい頷いてしまう。

「姉様、茶器を用意しましたわ。」

「あの、焼菓子も用意しました。」

手際がいい。

まるで、某高速戦艦四姉妹みたいじゃないか。

「お茶の時間は、提督と同じくらい大切だからな。」

「ええ、提督もお茶の時間も大切にしたいですね。」

「あのう、姉様の紅茶を飲んでくださいますよね？」

なにこの連携力？

「提督は私たちの愛する桃太郎だからな。大切にするのは当たり前だ。」

「桃太郎だったら、大切にされるのは当然ですね。」

「この焼菓子は姉様が思いを込めて焼き上げたんです。」

「恥ずかしいじゃないか、吉井。それは事実だけだね。」

「さりげなく認める姉様も素敵ですよ。」

「提督、姉様の思いを食べてください。」

なんだかあつという間に外堀を埋められたような気がするけれども、気の所為(せい)だよな。

なんだかABC包囲網が完成し……。

「あらあら、おいしそうじゃない。」

ひよい、と戦艦棲姫がどこからともなく現れてスコーンを口にした。

「ふーん、市販のものよりは凝っているわね。」

そのまま私の隣に座って、私向けに用意された紅茶を飲む。

「セイロンやアッサムより水色(すいしよく)が淡くて香りもそこそこだけど、さほど悪くないわ。」

そして、ニヤリと笑った。

「提督は渡さないわよ。」

途端。

半円状に囲まれる戦艦棲姫と私。

「MTヨーヨー!」

高梁が両手に握ったマスキングテープを我々に放った。

くるくる、と巻かれる。

あれ、縛られちゃった。

「カモ井のマスクングテープはひと味違うからな。すぐにはほどけないぞ。」
「あらあら、やるわね。」

「さ、提督。」

あーれー。

吉井が私をひよいと抱き抱える。

それを両脇から支援する姉たち。

三位一体の力を見せつけてくる。

「作戦ロサ・フロールスよ。」

「わかってはいますよ、姉様。」

「追手が迫っています、姉様！」

「薔薇の力はこんなものでなくてよ。」

「気高く咲いて美しく散る。それが私たちの定め。」

「負けませんわ。提督の為に！」

「提督の為に！」

そう思っているなら、これを解いてくれ！

その後、何故か演習大会になって服がぼろぼろになり、私は大破状態みたいになってしまった。

たぶん誤解だと思っただが、みんなの目がギラギラしていたように見えてなんだかこ
わかった。
やれやれだぜ。

XLI：今、そこら辺に沢山ある危機

「添い寝してなにもしない？　そういうのもあるんですね！」

「司令官に気づかれないように、声を出さないことも大事！」

「お前ら、そういう話は俺のいないところでやってくれよ！」

「やりました。」

「提督さん、いつまで体がもつかしら？」

「あれ？　司令官って女の子に興味なんてあったの？」

「あるよ！　あるよ！　ないなんて言ったことない！」

「私たちの主砲と同じでクールダウンが必要なんですね。」

「若い頃は一晩で済んだんだけどな。」

「今度は妹たちも一緒にいいですか？」

「君は私の赤玉がそんなに見たいか？」

「何回でも大丈夫ですよ、司令官！」

「笑顔で言われても、出来ません。」

「なかなか回復しませんね。それでは！」

「高速修復材は、人には効きませんよ。」

「処理だけなんて厭だからね。」

「好きでない子に頼まないよ。」

「ヘル話ってなんですか、司令？」

「君たちは毎晩やっているだろ。」

「ああ、食べ物の話ですか。」

「そつちの減るじゃないよ。」

「なあ、みんなで私の服を使ってなにをしているんだ？」

「最近、提督ごっこが鎮守府全体で流行ってしまして。」

「修理しますか？」

「どこを見てる？」

「どっちかというと、被害者って提督なんじゃないのかな？」

「なによ、今更気づいたの？ あんた相変わらず鈍いわね。」

「なんでもいいですから、二人とも早く服を着てください。」

「ウスイホンと全然違うわ、司令官！」

「あつちのアレと比べてはいけない。」

「提督の頼みとあらば、引き受けよう。それでなにをしたらい？」

「取り敢えず俺の部屋に行つて、メイド服でも着てもらおうかな。」

「おや？ 憲兵隊の皆さん、こんな夜更けになにかご用ですか？」

「ねえ、司令官。ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「いいけど、なんだい、姉妹艦勢揃いでこわい顔してなにか用か？」

「これ、娘さんたちや。人が風呂に入っている時に乱入するのは感心しませんよ。」

「最近鎮守府の風紀が乱れがちだと、大本営から注意を喚起する書類が来た。諸君にはこの世界を守る戦士として、更なる自覚を期待するものである。……お前たち、何故服を脱ぐ？ やめんか！ 破廉恥な！ や、やめんか！ やめろ！ や……。」

「提督、今晚一緒に寝ようじゃないか。」

「添い寝くらいなら、かまいませんよ。」

「いや、そつちじゃない。」

「今日の朝礼ではおじさん、皆さんにお説教します。あのですね、皆さんがどのような話を私や他所の人の聞こえないところでしようがかまいませんが、聞こえて不味い話は

ひっそりとやるように。」

「本日の朝礼での最後の伝達事項です。私の私室にどなたかの下着や私物が転がっています。本日中に引き取らない場合は処分しますので、心当たりのある子は早急に対処してください。」

「提督、何名とジウコンされるおつもりですか？」

「先ずはそれを収めてからじゃないと話せないな。」

「なんでみんな『提督』に執着するの？」

「立場が弱い女の保護者になれるから。」

「そうじゃなかったら？」

「別の鎮守府へ行くわ。」

「それでも、ダメだったら？」

「いい男を探すしかないわ。」

「それさえ、厳しかったら？」

「今日の夜戦は覚悟してね。」

「なんで私なの？」

「君だからだよ。」

「貴方はズルいわ。」

「男は皆ズルいさ。」

XLIⅡ：ロシアより愛を込めて

ロシア第三の都市、ハバロフスク。

深海棲艦侵攻後に統制が取れなくなった中央政府の弱体化に伴って、独自に力を蓄えつつある街。

そして極東艦隊の停泊地、ヴラディ・ヴォストーク。

一般的にはウラジオストクと呼ばれる街。嘗ては、浦潮（うらじお）と呼ばれた地である。

新潟市や函館市などと姉妹都市を提携している。

ハバロフスクはロシア内陸部にある都市で本来泊地を置くような場所ではなかったが、深海棲艦の侵攻を起因とした中央政府の経済的瓦解に対する崩壊抑止策並びに現状打破の一環として中規模の鎮守府が設立された。

ハバロフスクの上層部より成るロシア極東正統政府からの了承は得ており、元スペツナズを含む軍人たちと共に治安維持を行っている。

元大統領一派の籠るマスクヴァ（モスクワ）のロシア中央正統政府からは内政干渉との批判声明文が出されているものの、彼らとの経済的やり取りは行われている。

ブラックジャックやスホーイやミグが飛んで来たなら嬉しくないが、今はそれほど余裕がないだろうからさほど心配しなくていいのが救いか。

シヴェリア鉄道も通常運行されている。

口と腹の中は、往々にして異なるもの。

言われない内容を読み取る必要はある。

ハバロフスクが日本と繋がっているのは大きい。

シヴェリア鉄道にて日本製品が中央へと流れる。

日本との交易は、彼らにとっても魅力的らしい。

また、ヴラディ・ヴォストークにも続いて浦潮泊地が設立され、これは大陸半島方面への抑止力とされている。

艦娘もどきが日本海に出没しているとの情報があり、時折残骸らしきものは発見されていた。

深海棲艦と戦った後の名残か、どこかのかなにかと戦った跡なのか。

浦潮泊地は現在新潟鎮守府と連携して活動中だ。

両泊地の存在がロシア極東方面の治安安定化に寄与しており、都市人口は増加傾向にある。

口先よりも功績だ。

両都市は現在小樽を本拠とするホテルストリチナヤの人員供給口になっており、生活に困窮した元軍人や特殊部隊隊員などが働き口を求めロシア全土から彼の地へ移住している。

ホテルストリチナヤはヴラディ・ヴォストークをロシアでの拠点と定め、旧松田銀行部を買収してここにマイクロフト商会を設立した。

「私は冷めた不味いブリヌイを食べるつもりなどない。」

何故ホテルを買収しなかったのかと問われた小樽鎮守府の提督は、そう簡潔に答えた。

今回小樽の提督とヴラディ・ヴォストークを訪れたのは、姉妹都市の人間としての表敬訪問が大きな理由。

私の義母（はは）がドイツからやって来るのを、ハバロフスクで迎える為でもあった。シヴェリア鉄道に乗るのは初めてなので、なんだか緊張してしまうのだった。

「お前にも母親がいるのだな、タヴァリーシチ。」

小樽の提督が話しかけてくる。

タヴァリーシチ、つて確か同志という意味だったな。

「義理の母ですがね。」

「そうか。会うのが楽しみだな。」

「……ええ、まあ。」

「なんだ、あまり気乗りしていないようだな。」

「義母は私の娘くらしいの年齢に見えるんです。」

「若づくりか……いや、若いのか。」

「そして、世話焼き体質な人です。」

「ほほう。お前が苦手とする理由がわかるぞ、タヴァリーシチ。」

嗚呼、八神君の家庭の事情！

今回の面々だが、小樽側が提督に副官の軍曹に駆逐艦のヴェールヌイな響、函館側が任務娘の大淀に駆逐艦の島風に私。

総勢六名から成るパーティだ。

素敵なパーティしましょうぜ。

函館は長門を責任者として、鳳翔、龍驤、加賀、妙高との合議制で行動するようにお願いした。

彼女たちに任せておけば大丈夫だろう。

寄宿舎みたいな泊地だ。

ヴラディ・ヴォストーク泊地の第一印象はそれであった。

小樽の提督は艦娘から覇気が感じられないと嘆いていた。

提督は苦労人の感じがする人で、ロシア語に堪能だった。

仕事の関係でロシアと日本を往還する日々を送っていたらしいが、妖精が見えるというので提督にさせられたそう。

一般職員にロシア美人の多いのが気になるが、ブリヌイもサモワールを使ったお湯で淹れてもらった紅茶も旨かった。

紅茶は黒海近くで産したものだとか。

同じ大淀でも、こちらの彼女は少し冷ややかな雰囲気がある。

環境によるものなのか。

提督によるものなのか。

手前味噌になるが、うちの大淀の方が断然可愛いと思うんだ。

あちらの大淀が、こちらの大淀を見つめながら戸惑っていたのが印象的だった。

近々演習しましょうと話をし、表敬訪問は終了した。

時間が余ったので、ヴラディ・ヴォストークの名建築群を見学することにした。

小樽組は別行動となり、後でマイクロフト商会で落ち合うことにする。

案内役は現地の大淀だ。

函館の大淀はカチューシャを外して、白いブラウスに紺のタイとスカートという装備に変更している。

早速歩き回った。

この地に日本人が多く住んでいたことを知り、歴史のよすがを感じる。

現地の大淀は最初つつけんどんな印象を受けたが、どうやら人見知りする子だったようだ。

始めは距離感のあった彼女も、途中から私の手を引いたり隣に立ったりするようになっていた。

艦娘は環境によって変化するものだと、改めて思う。

昼食は何故かピツアの店になり、その味は悪くなかった。

その際に現地の大淀から夕食を浦潮泊地で取るよう勧められ、会食が決定する。艦娘同士の交流は好ましいものだと思う。

現地の大淀が好意的に行動してくれたので、大層助かった。

会食用の食堂に到着。

ウオトカが大量に用意されていたのに驚く。

ウオツカとも称される蒸留酒は高い度数を誇る酒精だが、ロシアの人々や泊地の艦娘たちはカパカパ呑んでいた。

私はクヴァスで充分だ。

甘い香りのするロシアの飲み物。

初夏のロシアにびたりと嵌まる。

菩提樹の蜂蜜を函館への土産にしようか。

ウオトカの瓶がどんどんなくなつてゆく。

小樽の提督がよく呑んでいたのはわかる。だがしかし響も呑んでいたのには驚いた。向こうの響も呑んでいたからおあいこか？

マイクロフト商会は宿泊も可能となつていたので、そこで一泊させてもらう。

ここでも出してもらつた紅茶もクヴァスもおいしいので嬉しい。

朝食で出たブリヌイも焼きたてで、なかなかにおいしかった。

ヴラディ・ヴォストーク駅の停車場からシヴェリア鉄道に乗車する。

約八〇〇キロメートル、東京青森間くらいの距離。

およそ半日かかる汽車の旅。

二人部屋にして、軍曹と相部屋にした。

艦娘と同室？

とんでもない！

間違いがあつては困るしな。

散々彼女たちと添い寝をしておいて言うのもなんだが。

妙に気合いが入っていた二名が意気消沈していたので、車内のサモワールを使った紅茶で取りなした。

ハバロフスクに到着し、同地にある泊地を表敬訪問する。

浦潮泊地と異なり、こちらは鉄火場に向かう武闘派が集結しているように見えた。

提督の秘書艦で第一艦隊旗艦の摩耶が挨拶代わりにと、私へ鋭い蹴りを放ってきたのには驚いた。

小樽の提督にやっていたら撃たれていたかもしれないから、判断自体は悪くない。

幸い、それは寸止めで抑えられた。

重巡洋艦が本気になったらその一撃ですら耐えられないので、ほつとした気持ちで一

杯だ。

「へっ、声も出ねえか。」

「白だ。」

「白ですね。」

「へっ？」

「ロシアでもよい下着は売られているようですよ、大淀さん。」

「そうですね、提督。私が今穿いているのも白です。」

「ふむ、やはり白は基本線のようにですね。」

「お、お前ら！ もっと真剣にやれ！」

「摩耶、お前の負けだよ。流石の防空番長も『艦娘たらし』には勝てないという訳だ。」

提督は物分かりのよさそうな人だったので安心した。

その後は気さくに接してくれる摩耶とも友好的にやり取りし、ハバロフスク泊地の表敬訪問も無事に終了する。

どこを訪れたいかと摩耶から問われ、私は慰霊碑と日本人墓地を指定する。

大淀と島風は同行するという。

小樽組は公園に行くみたいだ。

慰霊碑で黙祷し、次いで日本人墓地を訪れた。

狙撃兵だった母方の祖父の魂の安寧を祈りながら、黙禱を捧げる。

かなり優秀な人だったらしいが、その血を引き継いでいなくて申し訳なく思う。

摩耶もここでは軽口を叩くことなく、真摯な表情で付き合ってくれた。

彼女の本質は責任感の強い姉御肌な子なのだろう。どこことなく、小樽の提督に似通った部分を感じる。

泊地に戻ると夕食を誘われ、小樽組共々ご馳走になった。

会食ではやはり、ウオトカウオトカウオトカウオツカだ。

艦娘たちに絡まれ、ストリチナヤだのゴルバチョフだのを吞まされる。

やれやれ。

宿泊はインツォリストホテル。

翌朝。

ハバロフスク中央駅の待合室で義母を待つ。

小樽組は別行動。あちらはあちらの仕事がある。

彼女たちに再び会うのは日本だ。

「提督もそわそわすることがあるんですね。」

「お前のそういう姿は、稀少価値があるよ。」

大淀と島風から冷やかされる。

二名とも、私の義母に会ったら驚くに違いない。

汽車が到着したようだ。

義母を迎えに行こうか。

瞬間、視界を背後から伸びた手で防がれた。

「だーれだ？」

「義母さん。」

大原さやかのような声に応える。

義母だ。

『アイヒホルンの森』から遙かなる日本へやって来るは、妖精のように美しい義母。

世間知らずな箱入り娘であるが、快活且つ教養と気品を併せ持ち非常に好奇心旺盛。

アンネリース・フォン・アイヒホルン。

見た目は二〇代前半。

私の義母だと言っても、なかなか信じてもらえないだろう。

「トトちゃん、相変わらず冷めているわね。」

「義母さん、止めてください。貴女は義理ではあるにせよ、私の母親なのですから。」

「そして、かたつくるしいわ。」

「性格です。諦めてください。」

大淀と島風が驚愕している。

うん、その気持ちはよくわかるよ。

二名にもやさしく接する義母。

ただでさえ破天荒な毎日なのに、更に予測不能な義母が加わるのか。

やれやれだぜ。

X L III : お偉いさんと潜入娘

おい、何故お前がここにいる？

お前には函館の提督の監視を命じていた筈だ。
ん？

ウラジオオストクにハバロフスク？

あいつは、そんなところまで行っているのか。

それでお前たちは休暇を貰ったと。

はっ、呑気な話だ。

これが今回の報告書か。

読むから、少し待て。

ん？

土産？

これは間宮羊羹じゃないか。

ずいぶん気が効いているな。
ありがたくもらつておこう。

ふん、あいつは相変わらずだな。

ん？

大本営が、艦娘の函館への大量転属を許す訳など無いだろう。
本式の提督でも、あいつより艦娘の所属数が少ない者もいる。
四大鎮守府の中心提督並の所属数で、批判が来ているんだよ。
あんなに所属させるべきではないとな。

高梁（たかはし）型軽巡洋艦の着任だが、あれは管轄違いだ。
あれは開発部方面からの動きなのだ。

試験艦娘を多種多様な艦娘が所属する鎮守府に配属させて、その心理的影響を知りたいとかなんとか言っていてな。

甘やかし過ぎだよ。

ああ、この資料だ。

今ここで読んでおけ。

まったく、女学生の進学先を選ぶようなことをしおつて。

なにがごきげんようだ。
ん？

和気あいあいとした雰囲気が好ましい？

なにを言っているんだ、お前は？

そんなことは関係ない。

我々は戦争をしているのだ。

なかよしごっこをしているのではない。

それはお前も重々承知しているだろう？

ん？

はっ、お前がそんなことを言うとはな。

お前なら堕ちないと思っただんだがなあ。

慌てるな。

安心しろ。

任務からは外さん。

お前のそんな表情を見るとは思わなかったよ。

『艦娘たらし』の威力、恐るべしだな。

なんだ、告白はしないのか？

別にかまわんよ。

何時轟沈するかもしれん、お前たちのそういう感情を規制するつもりは無い。

ただ、溺れるな。

溺れたら、そこで任務終了だ。

で、だ。

メリケン艦娘の所見をお前から受け取り、こちらでも精査した。

当面はドイツ艦娘やイタリヤ艦娘と同じ処遇ということになる。

未だに連合軍がどうか言う老害はいるのだが、それはこちらでなんとかする。

若い奴らの中にも、メリケン艦娘を演習の標的艦にしろとかいう馬鹿がいてな。

頭が痛いよ。

大淀？

大淀がどうした。

物理的説得だと？

さてな。

私は函館の大淀に会ったことが無いから知らんが、対応を誤って入院した輩は知っている。

愚かなものだよ。

他の大淀と違いすぎる？

そうか？

多少の差異は出る筈だ。

艦娘は後天的環境に影響されるからな。

毎朝剣を振るっている？

あそこは憲兵の國江がいるし、刀術を遣う艦娘も集まるから、それに影響されているのだろう。

最初から提督にデレデレしていて、甘やかしてばかりいる？

珍しいな。

鎮守府によつては、かなり厳しい大淀になるんだがな。

食い物の話をよくする？

そもそもあいつが食べることを相当重視しているし、間宮も鳳翔も料理上手だ。影響されるのは容易に想像がつくよ。

お前から直接報告を受けたお陰で、こちらも方針を固めることが出来た。礼を言う。

昼はどうする？

食堂か。

うちの間宮も料理上手だ。

食べてから帰投するといい。

ん？

私はいつもここで食べている。

不用意な接触は極力避けるべきだからな。

ふつ、気遣いは嬉しいが、なるべく一緒にいない方がいい。

お前もそうした感覚を徹底しろ。

懐柔されるなよ。

ではな。

ああ、長寿と繁栄を。

X L V : 愛される為に、ここにいる

※人によっては気分が悪くなる記述が複数あります。

また、中学生でも容易に入手し得る商業作品よりは甘めにしていますが、不快になり得る表現もあります。

ご注意ください。

艦娘を逆上させ暴走させてはいけない。

それは、提督候補生時代に叩き込まれる教訓のひとつだ。

叱責（しつせき）しなければならぬ時は、きちんと理非をもって説諭する。
当たり前のことだ。

しかし、人間は感情の生き物である。

故に、かっとなつて劇薬を口から迸（ほとぼし）らせることがあつたりする。

それが艦娘の許容範囲ならば問題ない。

『常識』の範疇に入る怒りは問題なく受け入れられる。

しかしながら、感情的になると人はかなりキツイ言葉を使ってしまう。
意図的に使う者もいる。

それが最期の言葉になる者もいる。

艦娘が出現した当初。

自衛隊と政府による第三セクター的な大本営が立ち上げられ、急遽任命された提督たちも手探り状態だった。

経験も手引き書もない中、艦艇の魂を持つならば旧軍式だろうと有言実行した提督が最初の殉職者になった。

加害者は駆逐艦で、半ば無意識に殺ってしまったらしい。

そして、それは日本人の大好きな隠蔽で経緯が密閉されてしまった。

その後、連続殺人事件の如く提督や関係者やエロいお偉いさんたちが続々と鬼籍に入るようになり、ようやく大本営や自衛隊や政府は事態の重さに気づいた。

この時期に、艦娘保護の観点から憲兵隊が設立されるようになる。

隊長は元特機隊隊員だった彦江氏。

自衛官や警官や腕に覚えのある者たちが、是非是非自分を任命して欲しいと大本営に殺到したらしい。

憲兵は今も大人気の職業だ。

艦娘と仲よくなれる、正に正義の味方。

場合によっては艦娘とケツコン出来る。

最高じゃないか。

訓練は最低だが。

頸が胴体と離れたり心臓を握り潰される提督が何人も現れてやっつと、大本営は対策に本腰を入れるようになった。

不祥事を名誉の戦死にすり替える手法は日本人のお家芸たる隠蔽に他ならなかったが、刑事事件として艦娘を裁く法は未だに制定されていないし、印象商法的に売り出し中の彼女たちに汚点を付ける訳にもいかない。

精々現役の提督や提督候補生たちに実例集を見せ、各々に対策を取らせるくらいしかなかった。

また、青葉が撮影した映像は数々の提督や提督候補生たちを青ざめさせた。

それでも、年に数人は蘇生出来ない状況になってしまふのは悲しいことだ。

大抵の下手人は駆逐艦である。

その殆どが中学生に見える艦種の彼女たちは一見提督の意のままになりそうな者が大半であるけれども、実は最も喧嘩っ早い艦種だ。

血の気に溢れているともいう。

必殺の魚雷を手に深海棲艦の戦艦にさえ肉薄する彼女たちが、勇猛でない訳がない。読み違えた提督たちの末路の詳細な写真と報告書を読んで、提督候補生たちは慄然とする。

寝込みを襲われた者。

戦艦や正規空母に囲まれていたのに、針の穴を通すような攻撃を受けた者。

地下から発見された者。

引き裂かれた者。

高く吊るされた籠の中で干からびた者。

縛られた上で水をたらふく飲まされた者。

胃の中から重油が見つかった者。

暴動が起きた泊地の写真と報告書は、あらゆる提督候補生たちの声を奪った。

そこは量産型艦娘を捨て艦戦法で日常的に幾名も使い潰し、着任する艦娘よりも轟沈する艦娘の方が多いと揶揄される死地だった。

現場では『提督だった部分』が丁寧にならなくて、それが逆に憎悪の深さを感じさせた。

彼は無能な提督ではなく寧ろ優秀で、生き残れたなら英雄になれたかもしれない青年

だった。

狡猾で慎重で、時に大胆果斷。

戦国武将のような、巧みな采配と判断が出来る稀有の存在だった。

故に南方に配属され、鉄底海峡攻略戦後は横須賀鎮守府への榮転が決まっていた。

それだけ優れた資質を持って才能を遺憾なく發揮した彼だが、最大の誤算は艦娘を使い捨ての道具扱いしたことだ。

当時は艦娘の研究がまださほど進んでおらず、提督の艦娘への支配力が万能或いはそれに近いと誤解されていた時代に起きた悲劇的殺人とも言えた。

この件については、守秘案件として特一級が課せられており、部外者には絶対誰にも話してはいけないことになっている。

提督を退役した後も漏らしてはいけない。

量産型艦娘が禁止になった遠因のひとつ。

提督で無事に退役出来た者がまだいないのは、突っ込んではおられないお約束だ。そもそも彼らは無事に退役出来るのだろうか？

提督に相応しくないとされる者は以下の通り。

◎己の正当化と他者批判に終始する者

- ◎ 奉仕の心無き者
- ◎ 有言不実行な者
- ◎ 他者を思いやれぬ者
- ◎ 人を騙して悩まぬ者
- ◎ 束縛の強すぎる者
- ◎ お人好し過ぎる者
- ◎ 簡単に差別する者
- ◎ 簡単に侮蔑する者
- ◎ 手伝いを好まぬ者
- ◎ 妄執や嫉妬に囚われやすい者
- ◎ 理非立たぬことを多く言う者
- ◎ 使い捨てをなんとも思わぬ者
- ◎ すぐ他人に責任押し付ける者
- ◎ 否定しか口に出来ない者
- ◎ 遅刻をなんとも思わぬ者
- ◎ 寛容の精神なく狭量な者
- ◎ 告げ口密告当たり前の者

- ◎ 暴言を容易に口にする者
- ◎ 暴力を日常的に振るう者
- ◎ 女子供の癖に、と言う者
- ◎ 安易な嘘を平然と吐く者
- ◎ 客観的な発言行動少なき者
- ◎ 周囲の人を大切にしない者
- ◎ 賭け事に溺れ、煙草を一日二箱以上吸い、アルコール依存症の者
- ◎ よくキレてすぐ怒鳴りしばしば物を投げる者
- ◎ 逆恨みや責任転嫁を当たり前とする者
- ◎ 他人に負担をかけてなんとも思わぬ者
- ◎ 卑怯者

函館から彼女が戻ってきて、ホツとする。

我が鎮守府第一艦隊旗艦である彼女がいるのといないのでは、やはり雲泥の差だ。改めて、彼女の存在感を痛感する。

あちらに行つたままでなくて、よかつた。

彼女が我々の基幹戦力だ。

帰還後、彼女は私に多く甘えてくるようになった。

それまでは素っ気ない態度が散見されたのだが、方針を変えたいらしい。下着もエッチなものになった。

意外な側面にドギマギする。

こういう変化はありがたい。

強力わかもとと亜鉛とマカを日々服用するようにせがまれ、そうする。

確かに精力が増大するのだ。

普段無表情に近い彼女の気持ちを汲み取るべく、私は努力してゆこう。

閨（ねや）の回数も増やす。

もつと、話し合いをしよう。

よりよい鎮守府を目指して。

XLV：ヲ級改旗艦級、シヨウカクにならんとす

函館独特の七月盆も終わり、冷たい雨の止んだ朝、私は戦艦棲姫に手を引かれて鎮守府近くの砂浜へ出掛けた。

雨上がりの浜辺にひとりの娘が佇（たたず）んでいる。

右肩に飛行甲板を装着していた。

銀色の髪に弓道着っぽい服に杖。

その姿は、まごうことなき……。

「なあ、戦艦棲姫さんや。」

「なにかしら、私の提督。」

「あの子は……。」

ヲ級だ。

胸当てにも『ヲ』とある。『シ』ではない。

「改で旗艦級の装甲空母よ。私の随伴艦だったの。」

「先輩の随伴艦をしていた、ゴコーセンのシヨウカクです！　ヨークタウンも撃沈出来
ますー！」

「うちに所属している子を爆撃する気？」

「呼んだ？」

「なんで服を着ていないんですか、ヨークタウンさん!？」

「女はマツパで勝負よ！」

「私の正気度の理性値のSAN値を削って楽しいですか？」

「提督を誘惑するのも悪くないわ。火遊びしましょうか。」

「何故貴女まで脱ぐんですか、戦艦棲姫さん？」

「あの、ゴコーセン、シヨウカク、脱ぎます！」

「君まで脱ぐんじゃない！」

「これだから、五航戦は。」

「加賀教官、いいところに！　みんなに言ってください！」

「脱ぎました。」

「なんで貴女まで脱ぐんですか?!？」

「やりました。」

「雪屋博士と神屋博士に改装してもらいましょう。」

「服を脱ぎながら言わないでください、大淀さん。」

「提督の為なら、服を着なくても大丈夫ですから。」

「私が大丈夫ではありませんっ！」

「両博士とも秘密結社を潰滅させた実績がありますし、怪人や戦闘員の再改造手術を何度もされてお手の物ですから、深海棲艦の一隻や二隻くらい、どうにでもなります。彼女をここの尖兵にしちゃいましょう。」

「ちよつと待つて、不穏な表現が幾つもあるんですけど。」

「髪を長くして、眼の色を誤魔化して色白だと言い張れば……肌をロシア風に染めて……北方海域で海域回収（ドロップ）した量産型じゃないかと言い張れば……。」

「なんか大淀さんから黒いオーラがっ！ 憎しみの心に囚われちゃいけないんだ！ 何故それがわからない、ガラリア！」

「任せてください、マスター。貴方の運命は私と共にあります。」

「えっ？」

「間違えました、提督。気にしないでください。彼女の艤装を新たに作ってもらって、肌の色なども擬装しておきます。では皆さんこちらへ。」

ぞろぞろ工廠へ向かってゆく全裸の娘たちをホツとしながら見送っていると、後ろからポンと肩を叩かれた。

振り向く。

ジャーン、ジャーン、ジャーン！

銅鑼を叩く音が脳内に聞こえた。

げえっ！

義母（かあ）さん！

満面の笑顔の義母（はは）がいた。

私の娘のようにも見える、アイヒホルンの森から来た美しい義母。

無邪気さは時として残酷な刃となる。

「トトちゃん、今のはなにかしら？」

「あ、あのですね……。」

「お母さん、ハレムはよくないと思うの。」

「痛い、痛い、義母さん、この間ドラマを見て覚えたアームロックは止めてください！」

「知らない間に、何十人もの子を侍らせるなんて。昨日まで目を瞑っていたけど、あんな

ことをさせているようじゃちよつとこれはお説教対象ね。」

「ちよ、ちよつと義母さん！ 誤解です！」

「あと、トトちゃんの部屋に女物の下着や服が散乱していたんだけど、あれはなにかしら？」

「なにもしていません！ 私は潔白です！」

「それに何人もの子を毎晩取っ替え引っ替えベッドに誘うなんて、どうしてこうなっちゃったのかしら？ こつちへいらっしやい。」

「なにもしていません！ 私は童貞です！」

「問答無用！」

あーれー。

夕方まで正座して、足が痛くなつた。

執務中も、義母から監視されたのだ。

なんちやつてだけど、軍事施設なのに大丈夫なのかな？

義母が鎮守府にいるのは、問題なのではないだろうか？

大淀に聞いたら、満面の笑顔で大丈夫だと答えられた。

ホンマかいな、そうかいな。

お陰で本日、連日行われてきた性的悪戯が皆無だった。

しかしながら、何故あんなにも私が怒られるのだろう。

解せぬ。

童貞なのに。

童貞なのに。

大事なことなので、二回言ってみた。

あと、私もいい歳なのだから、トトちゃんなどと昔の呼び名で呼ばないで欲しい。

もう、あの頃の私ではないのだから。

童貞だけど。

その夜は戦艦棲姫とヲ級に挟まれ、いろいろと大変だった。

やらせはせぬぞ！

やらせは！

数日後。

「加賀さん、遊びに来たわよ。」

「はて、どちら様かしら？」

「横須賀第二の瑞鶴よ。もう、わざとらしいんだから。はい、お土産の鳩サブレ。」

「やりました。」

「鳩サブレは神奈川県で万能よ。ご贈答に使えるし、一個の満足感が高いし、日持ちするので遠征にも持ってこいの素晴らしい品だわ。」

「なんだか説明的な台詞ね。ところで、毎回持ってくるのが同じものでは芸がなくてよ。」

「はい、豊島屋本店限定の落雁。」

「流石に気分が高揚してきます。」

「へへへ、どうよ。」

「そうそう、貴女に紹介したい人がいるのよ。」

「お見合いはもう当分したくないわ。」

「ドーモ、はじめまして、ズイカクさん。ゴコーセンのショウウカクです！」

「え……ええと……その……貴女は……お姉？ えっ？」

「北方海域で海域回収（ドロップ）された子なの。」

「そ、そうなんだ。あの、ずいぶん肌が白い翔鶴姉だね。」

「量産型じゃないかって、こちらでは推測されているわ。」

「あれ、量産型艦娘って、殆どが駆逐艦で、まあまああの軽巡洋艦とそこそこの軽空母、そしてごく少数の重巡洋艦じゃなかったっけ。加賀さんの教官時代にそう聞いたわ。」

「今はこの子が函館の五航戦よ。」

「ゴコーセンのショウウカクです！」

「なんだかヲ級に似ているような……。」

「氣の所為よ。」

「そうなかあ?」

「ところで貴女、大湊（おおみなと）の翔鶴には会ってきたの?」

「うん、あつちの翔鶴姉は元氣だったよ。相変わらず、台湾の私を心配していたけどね。」

「あの子は心配症だから。」

「こつちに翔鶴姉がいるんだったらさあ、これからちよつとお出掛けしない?」

「えつ?」

「ヲツ?」

「ん? なにか不味かった?」

「いえ、別段私たちに問題は無いわよ。ただ、提督から今すぐ許可を得られるかどうか少し考えただけ。」

「珍しいわね、加賀さんがそんなことを言うなんて。ここの提督さんなら、すぐに許可をくれるでしょ。」

「そうね、その、どこか行きたいところはあるのかしら?」

「函館要塞跡に行つてみたいわ。」

「またマニアックな場所ね。」

「お姉もそこでもいい?」

「フツ、ワタシもそこでいいです。」

「うーん、海域回収艦ってかなり癖があるんだね。うちにはいないからよくわかんないけど。」

「小笠原の如月が海域回収艦よ。」

「ふーん、じゃ、行こっか。」

戻ってきた加賀の背中には汗びっしりだったと、後の史書には記されている。

XLVI : 黒石紅茶

深海棲艦が侵攻を開始して国外との関わりが断たれた初期。

海外製品がいの一番に市場から消えた。

日持ちする嗜好品の紅茶や珈琲も例外ではなく、あつという間に店頭の棚からその存在を消した。

一時期は珈琲一杯三〇〇〇円などという値段がまかり通っていたが、最近では東南アジアやオセアニア方面の紅茶や珈琲が店頭に出回り始め、政府の物価統制もそこそこ上手くいっている。

珈琲なんぞにそんな高い金を払えるかと息巻く層がちらほらいて、そういう人たちはタンポポや小豆の代用珈琲を不承不承飲んでいたりする。

ちなみにチョコレートはシヴエリア鉄道経由で入荷はしているものの、今も高嶺の花だ。

こちらの方が、价格的にずっと酷い。

板チョコは現時点で一枚三〇〇〇円。
品質は某茶色な包装紙のそれと同等。

欧州戦線で戦う艦娘たちのお陰故に、その価格帯で済んでいる。

彼女たちの功績が無ければ、一枚五〇〇〇円くらいに跳ね上がるだろう。

諸行無常。

チョコレートはハイカラな高級品だ。

青森県黒石市。

林檎とりんごまつりとこけしと温泉とつゆ焼きそばとマツコ（お年玉）市で知られる街。

深海棲艦の侵攻で全国の市町村の多くは財政破綻寸前まで追い詰められ、実際、崩壊した地域も存在する。

未だに復興出来ていない地方自治体が複数存在する現状、黒石でも経済的に力を付ける為の暗中模索が重ねられた。

そのひとつが国産紅茶である。

緑茶を栽培出来るということは紅茶を産み出せるということだ。

発酵の度合いで同じ茶葉が別物になる。

烏龍茶だって、好みで作り出せるのだ。

緑茶の栽培される北限は新潟県最北端の村上市と言われているが、地元で消費されるものとしては黒石市でも栽培されている。

黒石市の民はこれに目を付けた。

宮崎の知覧紅茶、広島尾道の紅茶、岡山の高梁（たかはし）紅茶などが商業的に成功していることは、彼らの意欲を後押しした。

外国産紅茶が今も輸送費の関係で高いとか国産紅茶が流行しているとか某紅茶姉妹が暗躍しているとか、理由は様々だ。

兎に角、黒石市は現在国産紅茶の北限として売り込みを始めている。

ここは函館鎮守府。

私はなんちやって提督。

今日も今日とて執務室。

高梁型軽巡洋艦三姉妹が着任してから、紅茶の消費量がやたらに多くなった。

お茶会が頻繁に催されているからである。

まるで、某紅茶姉妹が着任したみたいだ。

国産紅茶の飲み比べが行われ、ああでもないこうでもない議論が交わされている。

平和だなあ。

あれ？

どこぞの高速戦艦たちがいるように見える。

気の所為か？

巫女服みたいな衣装が見える。

あれれれれ？

大湊（おおみなと）の紅茶姉妹かなかな？

「ハイ、提督。お茶会は如何デス？」

やはり、紅茶姉妹だ。

「いただきましょう。」

休憩に入って、ソファに腰かける。

さりげなく鹿島と雲龍に挟まれた。

今日の秘書艦は彼女たち。

しまった！

孔明の罠か！

なんてな。

やたらに胸を押しつけてくる。

やめなさい、みんなが見ているんだから。

子供の教育に悪い環境だなあ。

「この黒石紅茶はプロトタイプだけど、問題ナッシングね。水色（すいしょく）は淡いし香りもまだまだだけど、ノープロブレム。今後の成長に期待したいネ。」

紅茶姉妹筆頭が微笑む。

うん、このマドレーヌはおいしい。

スコーンも旨い。

紅茶もいいんじゃないかなかな？

「私の計算によると、黒石紅茶は生産力を上げて知名度を高めれば販路を築けると予想されます。」

紅茶姉妹の眼鏡っ子が言う。

「お姉様、ただ今クッキーが焼き上がりました。」

お姉様好き好きわんこ娘がクッキーを手に現れる。

君たち、フリーダムだね。

「提督、お代わりは如何でしょうか？」

嫁にしたい艦娘上位の大丈夫娘が、さりげなくお茶のポットを持ち上げる。

「いただきます。」

「はい、提督さん、あーんして。」

「提督、こっちのわらび餅もおいしいわよ。」

鹿島と雲龍の攻勢も加速する。

ちなみに高梁型軽巡洋艦三姉妹は、地元の女学生たちとお茶会で交流を深めている。

以前イメージビデオの撮影で地元の学校の吹奏楽部を利用させてもらったが、今も交流は続いていた。

黒石紅茶の売り込みは大湊鎮守府が主導しており、それは青森県振興策のひとつでもある。

その普及には紅茶姉妹が一枚噛んでおり、彼女たちは事あるごとに国産紅茶の普及に力を注いでいた。

全国各地の緑茶生産地でも国産紅茶の生産に注力する地域が増え始め、凝り性の日本人たちが奮闘している。

先に述べた村上市の人々も黒石市の報を聞いて奮起し、負けてはならじ新潟県に村上市ありと名を轟かせんと国産紅茶の開発に取り組んでいるようだ。

和気藹々とした雰囲気の中、少し違和感を覚えた。

紅茶姉妹が四名とも揃った鎮守府や泊地は意外に少なく、存外二名とか三名とかが所属しているだけだったりする。

現実には案外厳しいものだ。

彼女たちは大湊の姉妹ではないのか？

そう言えば、大湊の紅茶姉妹は現在作戦行動中で……。

「どうかしましたか、提督？」

やさしい声で、対面の席に座る紅茶姉妹筆頭が囁く。

彼女たちはどこから来た？

四大鎮守府か？

それとも……。

「最近、そちらの鎮守府は如何ですか？」

「もうアチラは夏日が続いているから、函館の涼しさは素晴らしいネー。」

お姉様好き好きわんこ娘が、さりげなく鹿島と雲龍を部屋から連れ出す。

そして。

私の両隣に眼鏡っ子と大丈夫娘が座った。

「提督、ちよつとお話しましょうか。特に転属希望艦娘についてネ。」

紅茶姉妹筆頭はやさしくやさしく囁いた。

XLVII：ムカエイツクル

人類は現在狙われているが、昔から狙われてもいる。

おおよそ五〇年ほど昔、人類は異次元人や異星人の侵略を何回も受けた。

彼らは地元の秘密結社と提携して密かに勢力を伸ばしていったが、地球人に与（くみ）する異星人や仮面戦士といった勇者たちの抵抗は非常に激しかった。

勇者たちは無理無茶無謀の三拍子揃った無茶苦茶さで、倫理に囚われないフリーダムな感じで周囲を気にする侵略者や秘密結社の面々を次々に倒していった。

野蛮な戦いを平然と出来る。

侵略者たちの倫理観を根底から崩す思考。

フリーダムフリーダム風の色。

なんとおそろしいのだろうか。

とても共存出来そうにはない。

平家が源氏に破れたように、知性的な侵略者たちは人知れず侵攻を諦め理性的な秘密

結社は瓦解した。

人の闘争本能に火を点ける煙草で実験を試みたメトロンは、あまりに非文化的で酷薄な人類という結果に驚愕し火星移住計画に傾いた。

大規模な地球移住計画を立てていたペガッサは人類の残酷な歴史に衝撃を受け、メトロンの計画に参加することを決定する。

ノンマルトは復讐を成し遂げるのだと海底から戦艦や怪異を召喚して人類に挑戦し、狂暴な人類に協力する酔狂な異星人に惜敗して一旦撤退した。

必ずや復讐成さんと宵明星に誓いながら。

その熾烈な戦いのさ中、異次元人や異星人の尖兵として捨て石にされた人造少女たちがいた。

異次元人や異星人の侵略は防いだが、使い捨てにされて囚らずもセカイに残留することになってしまった者たちの立場など誰も保証はしない。

現地技術ではとても造り出せそうにない、ヒューマン・インターフェイス。

人類社会に対応出来るように作られた、現地調査偵察報告型使い捨て兵器。

自爆機能が無いのは救いなのか？

彼女たちは異次元人や異星人の高度な技術を僅かな抛り所として、このセカイで生き抜くしかなかった。

通信機と瞬間洗脳装置と光学迷彩と光学防御装置と重力低減装置とが組み込まれた携帯端末や腕輪。

プロトンガン。

強化服。

薄い本。

それらが彼女たちの少しの所持品。

ムカエイツクル

ムカエイツクル

その昔。

東南アジアの某国で熾烈な戦争が行われていた頃。

「ガミラス星、ガミラス星、第八任務完遂しました。迎えの駆逐艦を送ってください。」

東急東横線綱島駅舎近くから密かに送られる電波に、今宵も返事は来ない。

大マゼラン星雲へと何度も電波は飛ぶが、亜空間通信機は沈黙したままだ。

渋谷のプラネタリウムで作り物の星を見ながら無為の時間を潰すしかない。

この狂った星で夢も見ないままに。

山手線に乗ってぐるぐる時間を潰しながら、痴漢を何人も捕縛して現地治安組織に渡したり。

何人も洗脳電波で従えて、変な奴らに突撃させたり。

ムカエイツクル

ムカエイツクル

渋谷は娯楽場に溢れた、退廃的な街だ。

ボウリング場にジャズ喫茶、地下に潜ればアングラバー。

そのアングラバーのひとつ、スナックアングルモアで彼女は気だるげに踊る。

夢も知らぬままに。

不意に、彼女の意識に割り込む者がいた。

それは、侵略者が最要注意人物として警告を発していた赤い超人。

レッドマンのようにおそるべき男。

だが、彼女はまだ彼の本質を知らない。

「聞こえるか？」

「聞こえるわ。貴方は誰？」

「地球を愛する者だ。」

「地球人でテレパシーを使える者なんていたかしら？」

「僕は宇宙人だ。君の製造元と同じだ。」

「わかった、貴方はモロハシ・マンね。私になにか用かしら？」

「君たちは地球を侵略するつもりか？」

「それが大ガミラス総統のご意志だからよ。でも……。」

「でも？」

「この狂った星に魅力があるの？ 貴方も散々見た筈よ、モロハシ・マン。地球人は互いに争い、それを恥じず、内ゲバを止めようとしてもしない野蛮人よ。理性的でも知性的でもない、そんな蛮人を支配しても無駄なだけ。彼らを守る価値なんてあるの？ 侵略する価値があるなんて、とても見えない。」

「そんなことはない！ 地球人にだって、まともな者は沢山いる！」

「貴方、ロマンティストなのね。」

「君はペシミストだな。ところで映画でも見に行かないか？」

「悪くないわ。でもお断り。貴方は敵ですもの。」

「敵を観察出来る、またとない機会じゃないか。」

「口がお上手ね。」

「で、どうだい？」

「あくまで任務の一環よ。」

「よし、じゃあ行こうか。」

ムカエイツクル

ムカエイツクル

通信機からは今宵も応答がない。

ウルトラ警務隊。

地球防衛組織を名乗る政府直轄部門のひとつだ。

現在、二代目。

初代の科捜隊は既に解散している。

彼らは侵略者たちの超技術の一部を解析して、自分たちの権益に還元していた。

その彼らが珍しく活動している。

選挙が近いからだ。

政府の面々が変わる度に、彼らの組織も一新される。

少しでも組織を長らえさせるため、マスメディアを利用しながら延命策を行う必然性があつた。

彼らの表情は絶望に染まっている。

太陽系外から遊星爆弾が発射されたことを知ったからだ。

恒星間弾道弾でもあるそれは、地球を目指す彗星の如し。

白色彗星みたいに地球へ向かっている。

人類は未だ、太陽系外までその魔の手を伸ばしきれていなかった。

火星ですら、彼らの支配下にはない。

木星近辺に配置した宇宙ステーションは、星の重力に飲み込まれ失われた。

火星付近で行われた第一次防衛戦は呆気なく人類の敗退で終わり、現在月周辺での最終防衛戦が予定されている。

火星と月の間にある宇宙ステーションが第二次防衛戦に失敗して破壊されたことが先程報告された。

人類社会の崩壊は近い。

作り物の娘の顔に絶望的な表情が浮かぶ。

通信機から録音再生された言葉が原因だ。

曰く。

「遊星爆弾、既に発射せり。迎えに及ぶ時間なし。現地で任務を全うせよ。」

ムカエハコナイ

ムカエハコナイ

いつの間にか娘の隣にいた赤い超人の人間形態が、手を握りながら彼女に囁く。

「この星で僕と生きよう。僕と一緒に。」

娘は美貌だった。

彼女を作り出した者の、せめてもの手向けだったのだろう。

或いは趣味全開だったのかもしれないが。

異星人は娘に会う内、彼女に惚れてしまっていた。

彼は彼自身が属しているウルトラ警務隊の女性陣とも何人か関係しているが、英雄は色を好むものだから致し方ない。

遊星爆弾は結局、どこぞの魔王だか英霊だかなにかがマゼラン方面に投げ返したらしい。

こうして、地球の危機はまたも巧妙絶妙に回避された。ウルトラ警務隊は宣伝に努め、彼らは英雄扱いされる。

そしてその後、娘はモロハシ・マンの前から姿を消した。あまりにも強烈な好き好き攻勢に堪えかねたからである。嫌いではなかった。

求められることは嬉しかった。

しかし。

彼女は芽吹いた感情がなにかをその時理解出来なかった。理解出来ていたならば、別の展開があつたかもしれない。

一九七五年一二月に東京虎ノ門の日本消防会館会議室で開催された同人誌即売会は人造少女たちに衝撃を与え、以降、そうした場所が彼女たちの集まる場所になった。

彼女たちの一部は即売会やSF大会へ積極的に関わるようになり、やがて日本の現代文化の一角を支えるという重要な役割を担うことになる。

長い月日が流れた。

時は二〇〇〇年代。

ところは神奈川県。

周囲の地球人を適当に洗脳しながら、作り物の娘は横浜市港北区でそれなりに暮らしていた。

惰性で生きているともいう。

たまに、同様の立ち位置にいる者たちとお喋りしたり一緒に買い物したり同人誌即売会で売り子をしたりコスプレしたりする生活だ。

彼女はいつの間にか、地球での生活に馴染んでいた。

馴染むしかなかった。

慣れるしかなかった。

世話役は面倒見のよいメトロン。

たまに女子会を開催してくれる。

彼には、気のいい大阪のおっちゃんみたいな所があった。

中江真司のような声で朗らかに彼は偽物少女たちに言う。

「地球人は愚かで支配するに値しないが、君たちを見捨てるのは忍びない。」

彼はそう言って、かつてモロハシ・マンと一騎討ちして破れた親友に思いを馳せるのだった。

彼女は思う。

かつてウルトラ警務隊で使われていたポインターを入手出来たのは喜ばしいことだ。処分寸前に配下から情報を得られたのが大きかった。

しかも、一号も二号も入手出来た。

廃車譲渡の書類と誤認識させて合法的に受け取り、購入後に整合性を合わせる。

そういうことばかり、上手くなる。

モロハシ・マンの行方はわからない。

一時期地球防衛軍の宇宙ステーション基地に隊長格で迎えられたとも聞いたが、その基地が宇宙生物に食べられてしまった為に安否は不明だ。

生きていてほしいとも思うが、今更なにを会って話すという気持ちもある。

周りの人々には、ポインターをレプリカだと誤認識させている。

たまにこれで走り回っているが、彼を見つけることは出来なかった。

幾つかの偶然から、彼女は綱島駅舎近くの居酒屋で働くことになった。

居酒屋の女将は少女に見える姿だったが、人間ではないという。

元艦娘なのだ、彼女は。

人の形をした、作り物。

所属していた鎮守府の提督を失い、戦う意義を見失った彼女は女将になることを決心

した。

幸い、彼女には小さな店を構えるだけの資金があつた。
仲間の妖精たちも協力的だ。

鎮守府の面々も援助をした。

そしてさほど年月が経たない内に、横須賀の大本営に行つた鎮守府関係者は皆綱島に寄つてから戻る、と言われる程の店になつた。

美人が二名もいるのだ。

行かずにどうするのか。

隠れ家のような名店だ。

その店にある日、ふらりと立ち寄るおっさんがいた。
仕事帰りに食事をしようとしたのだった。

人の世の喜びも悲しみも

一瞬の星の瞬き

万物流転

すべてが運命の羅針盤に仕組まれた

イルミネーションだとしたら

底知れぬ闇の海を漂っていた時に

不意に雲間から射す月の光だとしたら

いつ果てるとも知れぬ

この曖昧な時を貫く

グングニルの一閃だとしたら

彼を見て驚く女将と従業員。

「提督!?!」

「モロハシ・マン!?!」

ムカエハキタ

ムカエハキタ

XLVIII : マタンキ

目が覚める。

午前四時だ。

両隣の妙高先生と足柄を起こさないように、慎重にベッドから降りる。
そのまま手洗いに向かった。

ふう。

小窓を開け、ファブリーズを噴射する。

あと何年こういう生活が続くのだろう？

彼女たちはいつまで理性を保てるのか？

いつダムが決壊してもおかしくはない。

今はまだなんとか帳尻を誤魔化しているものの、その内蔵しい精算を求められるに違いない。

とても支払えそうにない額を請求されることであろう。

その時、如何に対処出来るか？

むふう。

和平工作を戦艦棲姫とシヨウカクとに模索してもらっているが、現状は芳しくない。

……。

さてと。

風呂にでも行こうか。

四六時中開いている天然温泉に独り浸かるのは、とても贅沢なことだと思う。

湯を堪能していたら、大淀が入ってきた。

まるで計ったように入浴するねえ。

「あら、提督。入っていらしたんですね。」

「ええ、まあ。」

「偶然ですね。」

嗚呼、雷神具惨しちゃう。

「なによ、インスタント司令官。入るなら入るで教えときなさいよ。」

霞まで何故か入ってきた。

早く出ないと不味くなる。

いかん、両脇に来られた。

その後、妙高先生と足柄が来て、そりやあもう大変だった。

手洗いに行っておいてよかった。

『もっけもん』というゲームがある。

二〇年以上も前から販売されている。

息の長い電脳遊戯だ。

手を変え品を変え、継続されている。

『もっけもん』とは、おっさんの姿をした魔物の総称。

プレイヤーはカイーシャ・マスターとなり、『もっけもん』と仮契約したり本契約したりして最強を目指すのだ。

キカシューという、黄色いシャツを着た小太りのおっさんが代表格の魔物。

「気化？ 気化？」と虚ろな目で近づいてくるのが妙に受けているそう。

『気化臭』なる独自技は強力。夏場の雨天時の満員電車よりもおそろしい。

進化とか二身合体とか様々な要素がそこかしこに仕掛けられており、ロケット娘隊と呼ばれる敵対集団が物語を盛り上げる。

例えば、『名刺カッター』は基本技だし、最終決戦技の『ドゲーザ』『ハイ・ドゲーザ』『ハイパー・ドゲーザ』は使いどころがハマると相手のSAN値をガリガリ削る。但し、失敗すると目も当てられない結果に終わるが。

『能率手帳砲ノルテイ』

『社内恋愛支援OL』

『残業斬舞』

『書類契約拘束障壁』

『アルカイツク・スマイルの楯』

『ノミニケーション・サーキュレーション』

色々な技がてんこ盛り。

特殊技能の『エム・エー』で他社を乗っ取ることも可能。

資金力次第で、特殊技能の『フロム・エーエー』により臨時の『もっけもん』を数多く雇用可能だ。

『モヨオシモノ』系の戦闘で役に立つ技能である。

先日、携帯端末に対応した最新作の『もっけもん・おー』が発売され、人気を博している。

中年男性を写すことによって、強力な『もっけもん』を召喚したり契約したり出来る

のだ。

「函館は本州に比べて涼しい。

今日は日が照らずに涼しい。

書類作業が円滑に進みゆく。

そんな午後。

同期の提督から電話が来た。

「なあ、お前、『もっけもん・おー』はやっているか？」

「していない。私は最近のピコピコがわからなくてね。」

「ピコピコ言うな。最新のゲームの情報くらい押さえておけよ。そっちの艦娘だつてやっている子がいるだろう？」

「サテュルヌス時代のゲームくらいならわかるんだがな。」

「『アクラ大戦』とか『エミュレータ・サマナー』とか『スナッチ・ハンター』とかか。」

「『アンソルト』もよかったなあ。」

「またマニアックなゲームを。で、そのゲームで、『ミュールツ』がどのおっさんを撮影したら出てくるかで話題になっているんだよ。」

「『ミュールツ』？ おっさん？」

「あー、なんも知らないのな。『もっけもん』自体、昔から出ているゲームだぞ。」

「名前自体は知っている。」

「最新作の『もっけもん・おー』はな。おっさんを撮影すると強い『もっけもん』が入手出来るんだ。」

「ごめん、おじちゃん、意味わかんない。」

「まあ、そうなるな。しかも、冴えないおっさんを撮影すると、より強力な『もっけもん』を入手しやすいらしい。」

「ふーん。」

「おいおい、お前、他人事じゃないぞ。」

「なんで?」

「なんで、つて……お前、冴えないおっさんだろ。」

「お前もな。」

「まあな。……じゃなくて、お前も充分撮影対象なんだよ。」

「な、なんだつてー?!」

「来るぞー、来るぞー、艦娘が来るぞー。おまけに訳わからん奴まで来るぞー。俺もやられたからな。俺は詳しいんだ。」

「なんて不快指数の上がりそうなお言葉なこと。」

「流行りなんてそんなもんだ。今のうちに覚悟完了しておけ。あ、鳳翔さんここに逃げるって手もあるな。俺はそうした。」

「早速そうする。ありがとう。」

「いえいえ、どう致しまして。」

何故か何名もの青葉に追いかけられながら、多数の艦娘から撮影された。

『マタンキ』よ、『マタンキ』よ、という言葉が聞こえる。

マタンゴじゃないのか。

鳳翔の所に逃げ込み、騒動が一段落するまでそちらで執務を行った。

ピコピコこわい。

ちなみに、『マタンキ』というのはかなり強力な『もっけもん』だそうだ。

その情報が錯綜混線し、函館駐屯地の司令を撮影したら『マタンキ』が出るという誤情報が流れ、その近辺は一時期不審者が多数現れるので警官が出動する騒ぎにまでなった。

実際にゲームをしている隊員が司令を撮影し、その噂が事実でないことをネットで公表して事態は鎮静化された。

小学生から五〇代のおっさんまで幅広く遊ばれている『もっけもん・おー』だが、遊んでいる女の子をおっさんたちがナンパしちやつて問題になったり、『もっけもん』の交換が多額の金の動くりアル・マネー・トレーディングの温床になったりと問題山積だ。

また、『もっけもん・おー』を遊ぶには検索エンジンの閲覧履歴やメールへのアクセスが必要とのことから、『監視社会体制を促進する動きだ』と批判する人たちもいる。

おっさんを無断撮影して揉め事を起こすプレイヤーが何人も全国報道されて大問題になっているが、そりやそうなるわな。

女学生たちに囲まれて撮影され、ご満悦なおっさんもちらほらいるようだ。

自撮りして、『俺自身を撮影したらこんな「もっけもん」を入手出来た』と報告するツイッターもあちこちで見られる。

肖像権侵害で訴状沙汰になったら大変だと思うのだが、今のところはそこまで問題化していないようだ。

当然、良くも悪くも話題になることと思われる。

うちの子たちにも注意しておこう。

ところで、おっさんて幾つからなんだろうか？

子供からすると大人は皆おっさんかも知れないが。

深海棲艦がどうしたこうしたとか、艦娘がどうしたこうしたとか、しかめ面して喚く

よりもまだいいのかも知れないが、なんだか複雑な気分だ。

X L IX : ヨウカンヲクレ！ 待っていました！ お菓子
艦！

すべての鎮守府泊地警備府の面々から愛されている給糧艦間宮。

その姿は正に艦娘のアイドル。

彼女の存在は士気を高め、口福を与える。

間宮アイスや間宮羊羹はすべての艦娘を魅了し、老舗の専門店すら唸らせる味わい。
豆腐や油揚げや麩や蒟蒻さえ自作し、その味は異国の海にて戦う将兵の癒しになつて
いる。

常によりよいものを、と研鑽を惜しまない彼女は時に市井の料理人が教えを乞い願う
程だ。

更に医術を知り、散髪理髪が出来る彼女はそうした意味でも来訪を待たれる艦娘だ。
だが、彼女には裏の顔がある。

無線監査官であり、通信将校でもあるのだ。

高度な通信技術を持つ彼女は大本營に不正の報告義務を持つが、大抵は大事に至る前に注意する程度で済ませている。

温厚な彼女は調和を愛するのだ。

それは料理の心構えに通じる道。

同様の任務を帯びた、諜報防諜を担当する情報将校の大淀や整備開発を担当する技術将校の明石と共に、彼女たちは艦娘と提督を支える存在だ。

三名揃っていない鎮守府泊地警備府もあるが、それは大人の事情で仕方ない。

様々な顔を持つ巨乳の艦娘。

それが間宮。

その最高峰のひとりが函館にいる。

「間宮さんよっ! 間宮さんが来たわっ!」

映像の中で歓声が上がる。

あれはパラオであろうか。

満面の笑顔で、給糧艦の間宮を迎える艦娘たち。

撮影は青葉だな。

そして、タイトルコール。

『ヨウカンヲクレ！ 待っていました！ お菓子艦！』との副題が画面を飾る。

公共放送で毎週水曜夜放映されている、『歴史挿話ミスカトニツク』。

その編集手法は時に疑問を覚えさせるが、意外と視聴率は高いらしい。

食堂のテレビジョンの前には、沢山の艦娘や事務方の職員などが鈴鳴りのかぶりつきで密集している。

最近是他所の子が自然に鎮守府内を闊歩しているから、違和感が少なくなっている。

はっ!?

諸葛亮の策略か!?

……まさかな。

そんな訳ないか。

映像を見ながら、あの時のことを思い出す。

函館から大淀と間宮と鳳翔を伴って、先日渋谷の放送局まで出張つたのには理由がある。

上記の番組で間宮特集がある為、特別ゲストとして収録場所まで行くようにと大本営から指示が来たのだ。

指定された艦娘は間宮と鳳翔。

老舗料理番組の『今日の調理』にも出演する為である。

全鎮守府泊地警備府の中で、最強級料理人に属する彼女たちの指名はよくわかる。

わかるが、何故私も一緒なのだ?

二名によると私は必需品らしい。

謎だ。

まあ、いい。

後でヴィロンに寄るとしようか。

あそこの焼菓子はとても旨いし。

私はその時、暢気にそう考えた。

収録現場入りして、打ち合わせ。

函館所属の間宮と大本営の間宮。

函館は『初代』、大本営は『二代目』の腕章を付けている。

司会の女性と段取り打ち合わせ。

間宮関連の取材映像を皆で見る。

取材を受けた方々が間宮羊羹を食べて、本当に嬉しそうな顔をする。

虚飾の無い、それは口福の笑顔。

函館の間宮と大本営の間宮は映像を見ながら、それぞれ喜んだり悲しんだりと百面相を繰り広げた。

間宮の危難に軽巡洋艦の大井が向かおうとして、結局駆逐艦の潮が助けた話を聞く。同じ軽巡洋艦の北上にからかわれている大井を想像し、潮が第七駆逐隊の面々からいじられているだろうことを想像してほっこりする。

『ミスカトニック』の収録後、『今日の調理』の収録場所に到着。

手早く作れておいしい冷やし中華、というお題で初代、二代目、鳳翔による華やかな頂上決戦が行われる。

私にも食べて欲しいとの強い要望で、何故か用意されていた赤い彗星の仮面の男に変身して急遽出演した。

普通に盛られていたら食べきれないと思ったが、三名とも小盛りにしてくれたので大変にありがたかった。

鳳翔の作ったものを最初に食す。

元祖の神田神保町流冷やし中華。

富士山状に盛りつけられている。

頂上の錦糸卵は雲を模したもの。

その錦糸卵をほぐしてゆくと、ウズラの玉子や肉団子が出てくる。

旨し!

間宮の作ったものを次に食す。

彼女は東北最大の都仙台流だ。

こちらも元祖を名乗るといふ。

五目冷やし中華が卓上に乗る。

多くの具材を使った華やかさ。

クラゲや蒸し鶏や胡麻のタレ。

旨し!

大本営を現在背負う二代目間宮。

彼女は会津風で勝負を挑むのだ。

叉焼、メンマ、ワカメ、紅生姜。

極太縮れ麺が統括する味の饗宴。

手打ち会津ラーメンの店で教えを請う、その姿勢がこの味に結実している。

旨し!

いずれも甲乙つけがたい旨さ。

むふう。

三名からいずれが最もよかつたかと真顔で尋ねられ、司会者と助手の人と顔を見合わ

せる。

司会者がさつと一品を手元に引き寄せた。

助手の人もピンときて同様の仕草をする。

結局我々は一名ずつを褒めることにした。

私はいつもと違う味だったので、と二代目を褒めた。

鳳翔と初代のややこわばった顔が少しこわかった。

収録後、東急百貨店本店前のデイトロンへ行き、絶品のフィナンシエやマドレーヌやカ

ヌレを購入し、二階で二名に振る舞った。

小麦粉や珈琲はシヴェリア鉄道を使って輸入しているそうで、フィナンシエが一個八

〇〇円とか珈琲が二五〇〇円とかで高めに感じる。

まあ、今のご時世ではこんなものだろう。

その分、客層が静かなのはありがたいな。

で。

二代目を誉めた結果が二名の恨みがましい目付きを生み出し、私は針のむしろとなつた。

いやはや。

後日二代目から礼状が届いてひと悶着起こるのだが、それはまた別の話。

番組が終盤に入ってきた。

静まり返った鎮守府食堂。

間宮の最期の場面が来た。

海に投げ出され、救助されるも安堵死してゆく乗員たち。

ぼろぼろと泣き出す間宮。

助かった、とほつとしながらも黄泉へと向かう乗員たち。

高齢の老人が淡々と語る。

二代目も泣いているかな。

全員泣いているのだろう。

エピソード。

忘れ去られてゆく慰霊碑。

風化してゆく戦時の事象。

だが最近では若い人も訪れるという。

それが救いになるのだと思いたい。

そして。

例の一件の為、私は二名から冷やし中華の刑を受ける破目になった。

二週間三食連続冷やし中華である。

付け合わせに焼売や焼き餃子などが付くこともあるが、主食は冷やし中華だ。

いろいろな冷やし中華を食すのだ。

憲兵の國江さんや事務方の田中さんなどが二名の説得に向かつてくれたけれども、おかんむりの彼女たちには通じなかった。

普段穏やかな人が怒ると鎮静化に時間がかかるのは知っていたが、どうにもならぬ。

この手の震えが止まらないのです。

だがしかしばってん。

彼女たちには誤算があった。

私は同じ献立でも、基本的にあまり気にしない性格なのだ。

仮に、カレーやおでんが一カ月続いてもなんともないしな。

寧ろ、彼女たちの研鑽をこの舌で確認出来る結果になった。

冷やし中華の刑で一件落着の筈だった。

大本営の二代目が感謝の気持ちを含めて、私宛に贈り物をしてくるまでは。

L：なにそれおっちゃん聞いてへん、はいつものこと

七月末のある日、北海道立函館美術館開館三〇周年記念企画展の『画家の詩、詩人の絵』を護衛の劉鵬（りゆうほう）君と観に行った。

私は美術館や博物館へ行くのが好きなのだ。

受付嬢と前回の絵画展やひろしま美術館や三岸（みぎし）好太郎や近代芸術について会話を繰り広げた後、男二人で詩やら絵やらを鑑賞する。

「提督って、人間の女性もかなりイケるんですね。」

若き風魔がぼつりと洩らす。

えっ？ なにゆうとんねん。

「いやだなあ、私は人見知りが激しくて内気で口下手なさみしいおっさんですよ。」

「とてもそのようには見えません。」

なんだか微妙な目付きをされる。

仕方ないので言葉を継ぎ足した。

「昔接客業をしていましたからね。」

「成程、天然のジゴロなんですね。」

「いやいや、そんなことがこの私に出来る訳ないでしょうに。」

「人は見た目だけではわからぬ故、曇りなき心眼にてしかと見よと頭領から申し付けられております。」

「こんな冴えないおっさんなんか詰まらないと思いますよ。」

「いえいえ、なかなか興味深い内面をお持ちだと考えます。」

切り返された。

なんでやねん。

私が人間の女性にモテる訳ないですよ。

美術館の話を膝に乗ったり背中にのっかかったり抱きついたりとフリーダムな艦娘たちにすると、何故かみんなで美術館に行こうという話になった。

美術館へ行くことになった当日、鎮守府前にバスが四台あって驚いた。

なにこれおっちゃん聞いていないんだけど。

沢山の艦娘にガイド姿の大淀に妙高先生。

高雄型重巡洋艦だった元艦娘二名も、同様の姿をしていた。彼女たちは志願して案内役になったという。

妙にピッタリと合う制服姿。

ゴーアヘッド！

行くべ行くべ！

情操教育を目指し、賑やかな面々を引率する。

矢継ぎ早に多数の艦娘から質問された。

おいちゃんは専門家ではないので、あまり突っ込んだ質問をしないように。

到頭、美術館の学芸員のお姉さんが解説しながら案内するという贅沢な内容になってしまった。

彼女はあの時の受付嬢だ。

いやはや、なんとも申し訳ありません。

他に訪れていたお客さんたちも熱心に聞いていたので、少し罪悪感が薄れた。

観賞後、美術館の方々に平謝りする。

幸い、皆さん大らかな対応をしてくれたので大変助かった。

案内役をしてくれたお姉さんが、私へ冗談混じりに言った。

「今度、飯を奢ってもらおうかしら？」

「そうですね、それはいいかもです。」

あれ？

なんだか急速に周囲が冷えてゆくように思えた。
空調の設定温度を下げたのかな？

ある日、筆筒の中の下着が一新されていた。

なにこれおっちゃん聞いてへんで。

本日の第二秘書艦の龍驤に聞いてみる。

「龍驤はん、龍驤はん。」

「なんやのん、アンタ。」

「あれ？ 龍驤はん、ワシのことキミ呼ばわりやなかったか？」

「旦那やからアンタやろ。」

「せやな……つてなんでやねん。いつワシは龍驤はんの旦那さんになったんや？」

「ええやん、アンタはウチらの共有財産なんやし。」

「ちよい待ち、なんや既成事実作る思うとんかもしれへんけど、それはちよつとアカンで。」

「アカンか？」

「アカンわ。」

「しやあないなあ。まあ許したるわ。」

「許して許して。そいでな龍驤はん。」

「なんやのん、ご主人様。」

「ちよい待ち。」

「今度はどないしたん？」

「龍驤はん、いつから漣（さざなみ）ちゃんになったんや？」

「ご主人様、つて呼ばれるのが男性の浪漫なんやろ。」

「そういう嗜好の人もおるけどな、ワシはちやうで。」

「アンタの方がええか？」

「なんでやねん。」

「夫婦漫才はここままでにして、なんか用か？ 夜戦なら大歓迎やで。」

「あんな、ワシの下着が全部替わってましてん。」

「ええやん、ぴかぴかの新品や。」

「それが今回初めてならそう思うけどな。」

「ちやうんかいな。」

「せや。これで三回目や。」

「男が細かいこと気にしたらアカンで。」

「下着が全部交換されとるのに？」

「なら聞くけど、なんぞ問題でもあるんか？」

「こんなに頻繁に替わつとつたら、なんや変に思うで。」

「旦那さんが愛されとる証拠や。」

「使用済みの下着や歯ブラシや割り箸やペットボトルを集めて、それを喜ぶ子たちって
いうのはちよつとなあ。」

「割り箸やペットボトルは知らんで。」

「……。」

八月初旬。

鹿が市内に出た、というので函館中央署の署員たちや猟友会の面々と共に捕獲作戦に
参加する。

遺愛女子中学・高校近辺に現れたというので、脚に自信のある駆逐艦や軽巡洋艦と一
緒に捕獲作戦を決行した。

高梁（たかはし）型軽巡洋艦三名による、連携戦闘機能のライド・ギグを存分に発揮
してもらおう。

作戦開始！

女子校を舞台に鹿を追いかけ回す艦娘。きやあきやあと声援を送る女学生たち。意外にも俊敏な鹿の動きに翻弄される。連携行動が野生の勘にすり抜けられた。いきなり鹿が走り出して振り切られる。斯くして、第一次捕獲作戦は失敗した。

案外好奇心旺盛な鹿なのかもしれない。

街中を走り、市内を存分に駆ける雄鹿。

鹿は工業高校敷地内に入り、ここで総勢六〇名近い作戦従事員による第二次捕獲作戦が決行された。

最終的に鹿がサッカー場のゴールに突っ込んで身動きが取れなくなり、ようやく取り押さえた艦娘によって事態は終息した。

報道陣が多く撮影する中、函館鎮守府の艦娘の動きは輝いていたと思う。飼いたい飼いたいと訴える面々をなんとか説得し、その鹿を野生に帰す。

しかと捕まえられて、本当によかった。

八月一日から五日間、函館では港まつりが開催される。

同時期、青森ではねぶたとねぶたが開催され、弘前市と青森市の誇りと意地とその他諸々が真正面から激突するのだ。

そして、同月六日から八日にかけては、仙台市で地元の方々から『たなばたさん』と呼ばれる七夕祭りが開催される。

道南から東北にかけて、華やかなるまつりが地域を彩るのだ。

艦娘たちの休みを調整し、希望をなるべく叶えるようにした。

まつりを見に行くという願いを。

夏祭り堪能作戦に皆々参加せよ！

私はいえ、日常業務終了後の午後八時から五日間連続で港まつりへ強制参加と相成った。

あちこちの鎮守府泊地警備府から艦娘が集まり、浴衣姿で夜のまつりを楽しむのだ。これは愉悦。

戦闘ばかりではくたびれてしまう。

日替わりで六、七名の艦娘とまつりへと出向くのだ。

ベビーカステラを東京ケーキと変名しているのに苦笑し、ドネルサンドや静岡おでん

やケバブの屋台に妙に感心する。

わたあめを買って袋を開いたら即時に左右前後から手が伸びてきて、あつという間に中身が無くなった。

仕方ない。

もう一個買おう。

そして袋を開けたら、またも左右前後から手が伸びてきて……。

今日は港まつり最終日。

私と共にいる艦娘も鳳翔、大淀、間宮、長門教官、加賀教官、妙高先生、龍驤となかなか強力である。

流石に今宵は大人の対応だろう。

すっかり馴染みになったわたあめ屋に寄ると、その訳あり風なお兄さんからニヤリとされた。

「あんた、綺麗所を毎晩取っ替え引っ替え引き連れてるな。ちよつとやそつとのプレイボーイじゃ、かないやしないねえ。呆れるやら感心するやらだよ。ほい。」

「いえいえ、ただの保護者ですよ。」

「ふうん。ああ、これはオマケだ。」

「えっ、こんなにいただけません。」

「いいってことよ。まつりももうじき終わりだ。ただ廃棄するのも勿体無いし、あんたは毎晩何個も買ってくれた。これはささやかなるオマケってやつさ。男なら黙って受け取りな。」

「ありがたくいただきます。」

「おう。俺たちの世界が平和なもの、その娘っ子たちのお陰なんだろ。これくらいしか出来ないけどな。」

「お気持ちはとても嬉しいですよ。」

「あんたが買ってくれた余波で、こちとらも売り上げがよかったからな。お互い様さ。」

皆でわたあめを分けあい、夜店を見て歩く。

どちらかというと遠慮がちな娘たちなので、積極的に買ってあげた。

屋台の分析に余念がない、鳳翔と間宮。

女学生から声をかけられる長門と加賀。

おじさんたちにモテモテな大淀と妙高。

お好み焼きとたこ焼きを堪能する龍驤。

まつりの最後を飾る、那珂ちゃん夜会が始まった。

「みんなー！ 今日で港まつりは終わりだけど、夏はまだまだ終わらないよ！ モリモリ元気で暑い季節を乗りきろうね！ では聞いてください！ 『LOVEさりげなく』！」

見事な歌唱力。

圧倒的じゃないか。

皆で楽しむ。

「あつ！ 加賀教官！」

三曲熱唱後、那珂ちゃんが加賀を見つけた。

ステージを一旦降りて、加賀を連れて舞台へ戻る歌姫。

「こちらの加賀教官は私の先生だった艦娘です。」

「あなたを教えたことなんてあったかしら？」

「こんな物言いの先生なんですけど、とつてもいい方なんだよ！
加賀教官は歌が上手いので、なにか歌っていただきましよう！」

「いきなりなにを言っているのかしら？」

「先生、ノリノリですね。マイクの握り方を見たらわかります。」

「では函館鎮守府所属の正規空母の加賀、『深愛』を歌います。」

「まさかの変化球来た！」

大盛り上がりになる特設会場。
盛況の内に歌謡ショーは終了。

風か少し強くなってきた。

そろそろ帰ろうか。

まつりも終わりになった。

明日からはまた書類との格闘戦。

平和を支える為の一助をするべ。

「そうそう、提督。」

大淀がにこにこしながら言った。

「明日から、提督のイメージビデオの撮影があります。」

……はい？

なにそれ、おっちゃん聞いておりません！

L I : 斯くて鉄の獵犬は復活する

艦娘たちの函館鎮守府転属希望の度重なる絶え間なき猛撃に音を上げた大本営は、函館側が事前申請を受理する限りに於いては立ち寄つてよいとの見解を先日示した。

事実上の往来自由権であり、極東のベルリンの壁が崩壊した瞬間だった。

そうとなれば、話が早い。

早速、北方への遠征や出撃が頻繁に行われるようになった。

先ず、函館鎮守府へ往還の双方で食事や宿泊の予約を取る。

ホテルや旅館の予約みたいな感じである。

幸い、かの鎮守府は各種催しに対応しやすい形を取っており、宿泊設備も整っていた。

艦娘たちは大抵昼か夕方辺りに函館に到着し、鳳翔や間宮の絶品料理を堪能する。

翌日朝御飯を食べて野戦糧食的なお弁当を持って出撃し、任務完了後に函館へ再びやってくる。

有給を消化出来ていない艦娘は、大淀と共に自分自身の提督を『説得』に入る。

この時に短慮を發揮してキレた提督は、全員痛烈なしつぺ返しを喰らっていた。艦娘にも感情はあるし、友好的な関係を築こうとしない提督に思うところはある。

結局、大抵の艦娘たちは函館観光に行き、場合によっては江差と松前にも出掛け、トラピストクッキーを土産に戻るのだ。

ポインターⅠ・Ⅱの修理が完了した。

マーヤが函館に持ち込んだ特殊車両。

彼女はミステリアスな雰囲気の娘だ。

現在、鳳翔間宮と共に厨房で活躍中。

ここにある獵犬一号と二号は、半世紀くらい前にウルトラ警務隊で使用されていた本物だという。

当時から大人気の車両だったそう。

伝説の存在じみたモノが眼前にある。

まるで手品のように、絶大な人気を誇る車両が二台も並んでいた。

てつきり複製品か模造品だと思っていたのだが、あの史上最大の侵略が防がれてウルトラ警務隊が解散した後、地下倉庫で埃をかぶっていた本物を入手したのだとか。

全国各地の明石や夕張が雪屋博士や紙屋博士たちと共に、時間をなんとか捻出しながらいじくり回していたのは知っていた。

それは到頭、完全に動けるようになったのだ。

そして、晴天の函館でポインターの試運転を行おうという運びになった。

マニアはどこで情報交換をしているのかわからないが、おびただし数の人が集まって鎮守府前で写真を撮りまくっている。

無口なマーマヤは当時のウルトラ警務隊の制服の複製品を着ていて、無表情なまま撮影されていた。

時折ちらちらと私に視線を向ける。

なにか気になることでもあるのか？

後で彼女に話しかけてみようかな？

私の隣で世話好きのメトロンがふむふむと頷いている。

彼はその昔に、地球の侵略活動を行っていた宇宙人だ。

今では宇宙人たちのまとめ役をしている。

その姿は独特で地球人とはまるで異なる。

外見はこんなだが中身はおっちゃんだ。

違和感が激し過ぎて冗談みたいに思える。

私以外、彼に違和感を覚えていないのが本当に不思議に思えた。先日初めてあの赤い赤い夕日の中で会った時は、とても驚いた。

「君たち地球人は、なんだかよくわからないところがあるね。」

「貴方の方がよくわからないですよ、私の視点を通したらね。」

「まあ、それも道理かな。」

「そんなところでしよう。」

壮年や老年の人たちが、興奮した面持ちで彼の車両を熱く激しく見つめている。

その思いの強さにたじろぎそうだ。

何故あそこまで熱く語れるのかな？

ポインターに乗って街を一回りすることになり、同乗希望者が殺到して驚いた。

銀色の美しい車が函館を走る。

それは憧憬を含む光景らしい。

街の人々の視線を強く感じた。

数少ない写真や映像でしか知られていなかった、過去から来た車両が北の港町を颯爽と走る。

提督の日常に於ける最大最悪の戦いは自己との暗闘である。

何故だか露出度の高い衣裳をまとつて、無防備極まる艦娘。

ムラムラする気持ちを如何に律するかが最重要課題の一つ。

無邪気に抱きつかれようと、入浴時に乱入されようと、布団に入つてこようと、誘惑されようと、鉄の意思を持たなくてはならない。

残念ながら、駆逐艦たちの猛攻に陥落した提督さえ存在する。

何名もの艦娘と事実婚の状態にある提督も実在する。

鎮守府泊地警備府への着任時に徹底的に注意される提督たちも、実際に艦娘と触れあえば事前の誓いを翻す者すら少なくない。

そうした中、童貞であることを明言する函館と小笠原の提督は異端児だ。

彼らの陥落について賭け事をする者までいたが、先日どこかの軽巡洋艦が大儲けして以来沙汰止みになった。

小さな祭りがあるというので、ある夜、私は鎮守府の艦娘たちに引きずられて見に行つた。

港まつりの賑やかさとは別物のひっそりとした感じだが、これぞ日本の正しい夏祭り

とさえ思える。

公園を使った区域。

提灯のともしび。

夜店は全部で五つ。

発電機が静かに唸っていた。

太鼓を真ん中にして、小さな子供からお年寄りまでが輪になって踊る。

こういう世界を守るのが我らの使命。

戦う理由。

若い衆が太鼓を勢いよく叩き出した。

艦娘が三々五々踊りの輪に入りゆく。

娘たちは地元のおばちゃんたちに踊りを教えて貰いながら、案外すぐにその動きを覚

えて違和感なく踊り始めた。

いつの間にかメトロンとマーヤも一緒に踊っており、様々な姿形の宇宙人も踊っている。

一夜の夢かもしれないが、私にはそれが幸せの情景に見えた。

L II : 舶来品と嗜好品

普通の喫茶店で一杯三〇〇〇円だの四〇〇〇円だのしていたスペシャルティでもゲイシャでもない珈琲がようやく一杯一五〇〇円かそれ以下に下がりつつある昨今でも、シヨコラーテナチヨコレートの価格は三〇〇〇円くらいする。

どこぞのパティシエやベルギーの王室御用達うんたらが作った至高の品とかではなくて、普通の板チョコである。

銀紙でくるまれ、焦げ茶色の紙に包まれたなんの変哲もない庶民的嗜好品。今では高級品だ。

一時期激減していたコンビニエンスストアで販売される淹れたて珈琲が一杯六〇〇円で、各種代用珈琲が二〇〇円から三〇〇円くらい。

ボトル珈琲や缶珈琲などというものは壊滅し、プレミアムだのエクスクルーシブだのという表現でやたら高級感を煽っている。

なんだかなー。

リユクスはとつくに死語になったと思つていたが、最近高級嗜好品を表現するのに多く用いられている。

みんなカカナ言葉が好きだねえ。

相場が高騰すると、必ず悪い奴等が雨後の筍のように現れる。

そうでない好景気時にも有象無象がいるけれども、それはそれ。

外務省も頭を抱えているが、我々の勢力に無縁の話でもない。

怪しい輸入業者や商社やインチキ野郎が後から後から現れる。

南米方面からの珈琲豆やカカオ豆の供給は期待出来ず、アフリカ方面からの珈琲豆やカカオ豆の価格はボツタクリを越えた価格が当たり前だ。

故に、比較的高めではない価格帯を目指そうとすると、東南アジアやオセアニア方面になる。

ごく一部を除き、大金は出せないからだ。

日本は既に狂乱の水泡金満大国ではない。

隣国の共産圏は中央政府の統制が取れなくなり、内戦状態が続いていた。

北の共産圏大国も割に酷くて、東西で国が二分される結果になっている。

深海棲艦が出現した為に日本を頼る国も少なくなき、それは外交上極めて有利に働い

ていた。

浦潮（うらじお）泊地や新潟鎮守府辺りから、この函館へも時折支援要請が来る。

大湊（おおみなと）の艦娘たちと一緒に、日本海の警備に向かうこともままある。

艦娘もどきが日本海周辺で暗躍している説はよく聞くが、実物はまだ写真に於いてですら見たことがない。

量産型艦娘の技術が海外に流出したとか数人の研究者や即席提督や量産型艦娘が亡命したとか拉致されたとか蜂蜜作戦の餌食になったとか、今もいろいろ言われ続けているが真相は闇の中だ。

日本人のチョコレート消費量は欧州のそれに比べたら可愛いものだ。

欧州の人々のチョコレートにかかる情熱や執念は、日本人の米にかかるそれらに近いのかもしれない。

一部の海域が解放されてシヴェリア鉄道が頻繁に輸送業務に従事している今日この頃でも、需要を満たせるほど供給されている訳ではない。

大量輸送による安定供給と低価格化は、現在の世界情勢下では夢のまた夢の話だ。

狂乱泡沫期に上手いことをした連中ほど、当時のきらびやかさを誇らしげに語る。

滑稽な感じがしないでもないが、それくらいしかすがるものがないのだろう多分。

彼らの口からは、金のかかるようなことしか紡ぎ出されないような印象さえある。今は節約の世なのに。

昔懐かしい『省エネ』の標語が復活して社会的に浸透しているので、騒ぐのは多数ではない。

ないのだが、声を大きくする連中には厄介な者が少なくない。

晴天下の、風の涼やかな真夏のある日。

災厄を体現したようなおっさんが目の前の椅子に座っていた。

ペルソナ・ノン・グラータかな。

一目見ただけで不味そうな気配。

ややこしそうな雰囲気を感じる。

五〇代前半位の身なりのよい男。

豊満な肉体から汗を流している。

ダラダラと止めどなく滝の如く。

狂乱泡沫期のおいが強く香る。

ゼロハリバートンの金属製の鞆。

オメガの時計に仕立てのよい服。

システム手帳と万年筆も高級品。

バブルの匂いがプンプンするぜ。個人輸入業者をしているそうだが、高級品を主体に売る商売だとか。特に万年筆で儲けているらしい。舶来品を勧められたが、断った。一本五〇万の万年筆など買えん！標準的な価格ですよと言われた。国産品の万年筆の方が高性能だ。私は普及品のボールペンで充分。言葉巧みにいろいろ勧めてくる。陳情なら大湊に行けばいいのに。何故に函館へ来たんだ、この人。うちと癒着でもする気だろうか？そんなことをしたら逮捕される。バレなきや犯罪じゃないのかね。あちこちで断られたと言っているが、そんなのは当たり前だ。上手い儲け話などさほど存在する筈がないから、のらりくらりと暖簾に腕押し糠に釘

状態でやんやりかわしてお帰り願った。
うさんくさい。

入り口に塩を撒き、ついでに盛り塩をしておいた。

大淀や他の面々も厭そうな顔をしている。

随分ねちっこい視線だったと怒っていた。

それはとてもいやらしい感じのエロ視線。

あんなエロ親爺が提督でなくてよかった、と曙が私の膝の上で言った。

私もエロ親爺だと言うと、だったら早く手を出しなさいよと返された。

頷く面々。

やれやれ。

後日回状が回ってきて要注意人物の欄を読んでいたら、先日やって来たおっさんの名前があった。

その翌日に浦潮泊地の提督から電話がかかってきて、そのおっさんがヴラダイボストリークなウラジオストックへ来たという。

日本の提督たちの反応が今一つなのでここへ来ました、と小樽からの紹介状を渡しなからそう言ったらしい。

そこには、これを読んだらさっさとそいつを追い出せと殴り書きのロシア語で書かれていたそうだ。

彼は小樽の姐さんに目を付けられたこと間違いなしだな。

二人でため息をつく。

その足で彼はハバロフスクへ向かったらしいが、消息が途絶えたので後のことはわからない。

駆逐艦を含む艦娘たちからロシア直輸入の桃色円盤を没収して壊しながら、これも舶来品になるのかなと少し考えた。

LⅢ：クリイム色の肉体と桜色の乳頭

肌も露（あらわ）にした

魅力的な娘たちが

無骨な鉄の塊を背負って

海の怪異と戦う

なんと勇敢な娘たちだろう

クリイム色の肉体と

桜色の乳頭を持った

瑞々しく若い娘たちが

砲を撃ち

魚雷を撃ち

航空機を放つのだ

それはまさに

ヴァルハラに住まうという

戦乙女のごときではないか

小柄な娘も

大柄な娘も

胸乳のささやかなる娘も

胸乳の大きに豊かな娘も

等しく勇敢で

そんじよそこらの兵士になぞ
少したりとも負けなどしない
娘たちを率いる為の服を着て
心算鬼謀の知将の真似をする
三國志の諸葛亮の真似をする
勇将のように叱咤激励をする
猛将の如く猛々しく振る舞う
時に赤く頬を染めし娘たちを
気付かぬふりして指揮を取る
貴方は戦闘機械みたいなどと
娘たちから泣かれたとしても

揺るがない気持ちで命令する
ココロの底でひっそり泣いて
娘たちを海の死地へ送り込む
艦娘との関係について悩んで
それでも戦線を維持せんとて
涙を押し殺しながら指揮する
渴いた気持ちに時折襲われて
夜中の独り寝を苦しく感じる
大切にし過ぎと上官たちから
苛烈な扱いを散々求められて
同僚たちからは散々揶揄され
それでも大切にせんと念じる
いつになったら終わるだろう
いつになったら終わるだろう
海は広く大きく果てがなくて
先の見えない戦いに不安残る
深海棲艦とは如何なるモノか

意思疎通を図り得ないモノか
戦争の決着は全滅しかないか
全滅戦は殲滅系総力戦になる
そのような戦いは終わりなし
終わりなき戦いを目指すのか
大本営の示す羅針盤意図不明
経済の為の戦争などはさせん
それは全力で阻止をするべし
すべては艦娘の未来を拓く為
何故彼女たち艦娘は
私などのような者へ
明確な好意を向ける
何故笑顔を見せるか
何故やさしい声出す
君たちはわからない
私にはわからぬ存在
人の似姿したモドキ

正体不明の人モドキ
深海棲艦も似ている
何処から来たるのか
何処へと向かうのか
いつまでの間従うか
いつの日か逆らうか
人の扱いに耐えかね
敵と手を結ぶかもな
それをわからぬ者が
喚くのを予め封じて
戦争の終わり模索す
戦後の世界を模索す
いつか平和が来ると
信じ信じて信じ抜き
死なぬように艦娘を
海の戦場へ送り出す
矛盾をはらみながら

いつの日か

いつの日か

平和が来たら

平和が来たら

娘たちを人の社会へ送り出し

笑顔で別れを言いたいと思う

その日まで

その日まで

生きていられるとしたならば

ありがとうと深く礼を言つて

笑顔で手を振ろう

やさしく

やさしく

晴れた日の心持ち

一片の曇りなき心

それだけを持つて

いつか

いつか

暁の水平線に勝利を刻むまで
揺るがない気持ちで戦うのだ
クリイム色の肉体と

桜色の乳頭を持った

瑞々しく若い娘たちを率いて

L IV : お給金の話

艦娘に関する悩ましい問題は数限りなく存在するが、生活する上で即物的に悩ましい問題はオゼゼである。

要は給金のことだ。

例えば外見で判断した場合、戦歴三年で筆頭秘書艦兼第一艦隊旗艦兼武勲艦の駆逐艦よりも、先日建造されたばかりの戦艦の方が高給取りという理屈になりかねない。

艦種毎に給金を決めにくい難しさがここにある。

艦娘が登場した初期は外見を基にした手当なしの基本給のみで対応していた為、後に遠征任務の多い駆逐艦を中心とする抗議活動へと発展した。

これにより、良心的な提督以外の鎮守府では基地自体が機能不全に陥った。

この時期、深海棲艦に急襲されて殉職した提督は二、三人にとどまらない。

深海棲艦の暗殺部隊は相当に優秀だったようで、洗練されていたのだろう。

艦娘に擬装する深海棲艦の技術力は非常に高く、騙されても仕方なかった。

知らない間に潜入されて、いつの間にか暗殺されていたことに驚きました。まるで口裏を合わせたかのように、似た報告が多数の鎮守府から為された。

一年足らずの短い期間で、五人の提督が殉職した鎮守府さえあったという。

現在では、全艦種一律の基本給に能力給や撃破手当や超過勤務手当や出張手当や秘書艦手当などの金額が加算される。

税負担は無し。

基本給は八〇〇〇〇〇円と定められている。

出来立てほやほやの駆逐艦も、最終決戦兵器だ切り札だと言われつつも演習がたまにあるくらいで自室待機が殆どの戦艦も同じだ。

ただ最近では、自室待機ばかりの扱いをされた艦娘はすぐに転属してしまうから、そのような事態は発生しにくい。

給金に関して、戦争初期の駆逐艦の給与は月一〇〇〇〇円ほどだった。

その上、税金も取られていたから手取金は七〇〇〇円程、流石に食費は取られなかったものの、手当という概念すらなかった頃だから、当時の艦娘の不満は多かった。

戦艦ですら、月五〇〇〇〇円。

腕が吹き飛ばような激戦を経ようと大破して死にかけようと、手取金約三五〇〇〇円程。

それでも健気な彼女たちは踏ん張ったが、最前線の不満はたまる一方だった。

良心的な提督は自腹を切り刻み、予算をやりくりして福利厚生の実に努めたが、や
らなかつた提督で行方不明になった者も存在する。

まあ、そういう提督は元々普段の行いが悪かつたのだろう。

それは致し方ないことだ。

転機が訪れたのは量産型艦娘が大量導入された鉄底海峡解放戦の頃で、多数の悪徳提
督が粛清された後のことである。

発言権を増した有力諸侯の意見に、為政者側も耳を傾けざるを得なかつた。

多数の艦娘が提督たちと共に、待遇改善を求めて大本営へ押し寄せたのだ。

政府に都合が悪い為、報道は一切されなかつたがそれは圧巻だつたそうだ。

その先頭には、最速駆逐艦がいたとかいかなかつたとか。

彼女たちの周りには、完全武装して覚悟完了した憲兵隊全隊員が嬉々として参加して
おり（しかも幹部で高齢の元特機隊員たちまで当然のように参加！）、彼女たちに同情
した海上自衛隊や在日米軍の艦艇も横須賀に集結していた。

政府はパニックに陥つたが、首相及び閣僚の大半は落ち着き払っていた。

幸い、クーデターに至ることなく、穏やかな話し合いで事態は解決する。

大泉首相と鈴木官房長官の英断が、日本を戦火に巻き込まずに済ませた。

艦娘、憲兵、海上自衛隊の全員にお咎めなしという粋な計らいまでして。

もし誰かが咎められていたら、その時は死者が複数発生していただろう。

艦娘取扱法改訂後。

道具を人扱いして給与を与えるは無駄などと放言暴言していた幹部や提督は、左遷か行方不明になっていた。

ロシア以外の外国の蜂蜜作戦で内通をしていた者たちは、まとめて出来立てのハバロフスク泊地に送られた。

多数の官僚や提督などでひしめいていた泊地も、半年ばかり経つたらずいぶんすつきりした内容に変化した。

その地の治安が悪化していた為かもしれないし、アムール川を遡上した深海棲艦に殺られたのかもしれない。

ある真夏の夜の、函館鎮守府の執務室。

港湾夏姫が羽を伸ばそうかと考える夜。

「あんな、提督。」

「どうしました、龍驤さん？」

「遺言状を書き替えたいんやけど。」

「……わかりました。用紙と書式説明書です。ここで書かれますか？」
「せやな。」

「ボールペンです。」

「ありがとうございます。……聞かんのかいな？」

「なにをですか？」

「遺言状の中身。」

「聞くだけ野暮でしょう。」

「そういうところも好きなんやけどな。うちの遺産受取人をキミにしとく。」

「えっ？ なにを言い出すんです？」

「うちらもいつ轟沈するかわからん身や。惚れた男の為になんかしとうなるのも当然やろ。」

「私は貴女がたを轟沈などさせませんよ。」

「軽空母は紙装甲やからな。不意の一撃で殺られる可能性はある。」

「殺らせはしませんよ、殺らせは。」

「期待しとるで。ほなこれ頼むわ。」

「わかりました。一応受け取りますが、命は大切にしてくださいよ。」

「わかっとなるって。ところだな。」

「はい。」

「わーい！　うち、おちんぎん大好き！」

「はい？」

「おちんぎんがいーっぱい欲しいねん！」

「……………ああ！　給与の増額ですか。空母の教導に回っていただいたり、他所の鎮守府へ出張していただけたら、その分手当を上乗せしますよ。龍驤さんは錬度が高いので、問題はありません。なにか欲しいものが高額でしたら、相談してください。私で力になれるなら、お手伝いしますよ。」

「なあ、キミ。」

「はい。」

「キミって、ホンマ、いけずやね。」

「えっ？」

「まあ、そないなところも含めて好きなんやろなあ。」

「こんなシケたおっさんのどこがいいんですかね？」

「うち、キミのことはおちんぎんより大好きやで。」

「それは光栄の至りですね。」

「あんなあ、そこはサラツと流すところやないやろ。」

「すみません。」

「まあええわ。ほな一緒にお風呂に行こか。」

「あの……ちよつ……龍驤さん……えつと……。」

LV：怒りの日

その日は朝から不穏な雰囲気だった。

生ぬるい風の吹く朝っぱらから、続々とよその鎮守府泊地警備府から艦娘が集結してくる。

大変淀んだ空気が海沿いに撒き散らされてゆく。

よその艦娘たちは、みな怒り心頭に達していた。

どうも、彼女たちの提督が下手を打つたらしい。

殺気だっている彼女たちに、鳳翔と間宮が素早くアイスクャンデーを配っていた。

比較的冷静な子たちに、直接事情を聞いてみる。

よその提督たちは、こんなことを言ったそうだ。

「なんで殴るか、だど？　なにを言っているんだ、お前は！　殴られて当然だろうがよ
！」

「提督である俺を立てなくてどうする！　なにを考えているんだ！　お前ら全員、今夜

は飯抜きだ！」

「出しゃばるな！ 女子供の癖に！」

「女が理屈を言うなっ！ 俺に意見するの catt！」

「なんですぐにメシを作らん!? 俺はずっと待っているんだぞ！」

「女に教養なぞいらん！ せからしか！」

「なにもなくても、女が男に殴られるのは当たり前のことだ！」

おいおい、冗談だろう？

この二一世紀のご時世に、戦前のような男性が何人もいる訳ないだろう。

しかし、彼女たちは全員憤激していた。

どうやら生きた化石は実在するようだ。

『耐える美学』って、なんじゃらほい。

女性は男性の横暴に耐えてナンボかよ。

女性を虐げるのが立派な男性とやらかか？

くだらん。

まっこと、くだらん。

未だにそんな価値観が生きているのか？

勿論、そんな輩は極々一部に違いない。

そう、信じたい。

うちの艦娘では特に大淀がカンカンになっており、雰囲気は伝播して他の艦娘も怒り心頭に達している。

危ういなあ。

即座即時に大淀を大本営に派遣した。

頸を折ったらダメだよと釘を刺して。

半殺し程度に済ませてねとも言った。

程なく彼女たちの所属する基地の提督たちから猛抗議がきたので、提案してみようとする。

提案する前に罵倒された。

なんだかなあ。

初めて言葉を交わす相手に怒鳴り付けるって、よほど高等な教育を受けたようだ。

やだねえ、ガリア人は。

艦娘たちに彼らが殺されないように、取り図らねばならない。

あまり殉職者が増えるのも好ましくない状況であろうからだ。

葬式が終わると、代理提督の派遣やら新しい提督の選定やらでこちらにも負担のかる時がある。

世の中、面倒なことだらけだ。

よし、提案するぞ提案するぞ。

「お互い、少し冷却期間を置いてみては如何でしょうか？」

「そんな必要はない！ 女は黙って男に従えばいいんだ！」

「このまま帰したら……殺されますよ。」

「……お、脅かす気か？ 略式提督如きの指図は受けん！」

「取り敢えず、今晚だけでも函館で過ごしさせてみては如何でしょうか？ 勿論、お土産も

持たせます。」

「土産？」

「うちの間宮が拵（こしら）える羊羹は、同姿艦の中でも絶品です。」

「……間宮羊羹か。」

「鳳翔の作るお菓子も好評です。大きな詰め合わせを持たせますが、如何でしょうか？」

ええ、勿論お代はいただきません。我々のほんの気持ちです。それに、函館滞在は彼

女たちの有給の消化にも最適じゃないでしょうか？ トラピストクッキーも土産に持

たせましょう。女子供に余裕を見せるのも、男の度量ではないでしょうか？」

「む、むう。」

「函館で食事をさせてちよつとした名所巡りをさせて、彼女たちの気分をほぐすように

しますよ。幸い、最近の戦線は安定しています。今日明日くらいは気分転換に努めるのも悪くないのではないでしようか？」

「……仕方あるまい。」

「ありがとうございます。」

「それでその、なんだ……。」

「ええ、間宮羊羹は三棹持たせます。」

「わかった。明日一七〇〇までの函館滞在を許可する。」

「ありがとうございます。」

こんな感じの会話をかなりやった。

単に下手に出るだけでいいのだから、たやすいものだ。

出費が痛いけれども、大淀が上手く匙を振るうだろう。

俺様提督、か。

明日帰しても大丈夫かな？

ま、殉職されても仕方ないけどな。

それはそれで彼らの自業自得だな。

執務室で電話したやり取りを聞いていた、各地の艦娘が申し訳なさそうな表情をして

いた。

電話機の拡声器から流れる怒声にビクツとなつている子もいる。

こういうことは開けっ広げにやるに限る。

大本営から大湊（おおみなと）に向向していたところを電話の証人として函館に来てもらった、肌の真つ白な艦娘が眉をひそめた。

「不正行為には該当しません。虐待も微妙なところであります。」

私は来函した艦娘より提供された各提督の弱点好み特殊性癖の仕様書を読みながら、次々に電話で丁々発止の舌戦を繰り広げる。

戦争についてはからきしだが、こういうやり取りならばなんとかならないでもない。

「流石、私のアドミラルだわ。頼りになるわね。」

「そうだな。今夜、ゆつくりと語り合わないか？」

ティラミス戦艦とたまたま戦艦が、にこやかに私の傍らでくつろいでいた。

「貴女たちは、自分自身の鎮守府へお帰りなさいな。」

「つれないわね。でも、そんなところも悪くないわ。」

「そうだな。この試練を乗り越えることこそ大切だ。」

午後になって、ようやくくだんの提督全員と電話を終えた。

結果として、全員から明日までの函館滞在許可を得られた。
よかった。

本当によかった。

トラピスト修道院のソフトクリームを堪能したであろう一〇〇名ばかりの艦娘が、急遽借りた大型バスに乗って帰ってきた。

人脈って大事だよ。

馴染みの業者さんに話を持ちかけたら、即座に運転手ごと貸してくれた。

彼女たちは五稜郭にも行ったらしい。

そこでお弁当を食べたそう。

あれだけ険しい表情をしていた娘たちが、いつの間にやらにこやかになっている。

よかたいよかたい。

「よお。」

背中をポン、と叩かれた。

「お前、やるじゃないか。」

振り向くと、姉御肌っぽい重巡洋艦がそこにいた。

「うちの提督と交換してもらいたいくらいだぜ。」

「いえいえ、戦術戦略がまるでダメ夫ですから。」

「そんなことはねえだろ。相手を自分自身の土俵に誘い込む手口はなかなか見事だった。一見あつちの勝ちだが、見る奴はちやんと見ている。気に入ったぜ。」

「それは光栄です。」

「お陰で同僚を撃たずに済んだ。改めて礼を言う。」

その場にいた艦娘が全員頭を下げた。

こういうのは苦手だ。

「皆さん、頭を上げてください。私は為すべきことを為しただけです。さあ、晩御飯を食べましょう。明日の夕方までは函館滞在が可能ですから、是非とも堪能していただくさい。」

さてと、簡単カレーでも作ろうか。

笑顔で食堂へ向かう艦娘たちを眺めながら、私はそう思った。

あれー？

おっかしいなあ？

私は補佐のつもりで厨房に入った筈だが、一心不乱にカレーを作る破目になった。

合挽き肉に玉葱にブナシメジのカレーだとか、ピーマンと茄子と合挽き肉とトマト煮のカレーだとか、お袋さんカレーとか、なんかそんな感じでカレーをどんどん作らされ

た。

近くにいた比叡を巻き込む。彼女たちはカレー作りの名手だから、容赦なく手伝ってもらおう。

何故かみなぎりまくった足柄三名がイカメンチとか豚カツとかメンチカツとかを揚げまくっている。

龍田六名も竜田揚げやら煮物やらを作っていた。

時折鳳翔たちや間宮の作った品を口に入れられながら、中華鍋を振るう。

そろそろ野外炊具1号が欲しいなあ。

作ったカレーは完食されてしまったので、余った材料で自分自身用に簡単カレーを作っていたら何故か艦娘たちがわらわら寄ってきて再度多めに作る事態になった。

L.VI：雨のちくもりの駐屯地

陸上自衛隊が開催する『函館駐屯地創立66周年記念行事』への協力要請を受けたのは、道南にしては蒸し暑い真夏の午後だった。

深海棲艦との交戦が始まって以来、自衛隊では記念行事をすべて自粛していた。戦況が安定した今年からは、日本全国各駐屯地で催しものを復活させるそうだ。

自粛ばかりでは気が塞がる一方だしな。

警衛隊の支援をすればいいのだろうか？

基地司令である一等陸佐の代理人の三等陸尉が、穏やかに話を進めてゆく。

若いがよく出来た人物で、尚且つ男前。

さぞやモテることだろう。

うちの艦娘は何故か好意を寄せないが。

彼は普段、鎮守府と自衛隊の駐屯地の連絡役になつてくれる好青年だ。

爽やかで快活で気遣いが出る。

彼の方が私よりもよほど提督に見えた。

うち以外の鎮守府ならば、艦娘から好意を寄せられるのではないだろうか？

基本的に我々は警衛路線でいいそうだ。

有志を募つて参加することを大本營に打診して許可してもらい、函館駐屯地での行事参加を決定する。

函館鎮守府の広報の一環にもなるしな。

そして今、鎮守府の講堂。

何故、こんなに艦娘がいるのだ？

六〇名を越す艦娘がいた。

ちよつと待てい！

なんじゃあ、こりゃあ!?

最近異なる所属の艦娘の往還が多く、休暇先として函館が選ばれることも多い為、本所属する艦娘よりも多い娘たちが鎮守府内をうろうろするようになっていた。

我が輩が混乱するので程々にして欲しい。

夜中に知らない子と出会うと驚くがやき。

下着姿でうろつかれると心臓に悪いです。

私、大変困ります。

函館駐屯地の催しについての協力事項は決定したが、催しの名前が覚えにくいというので『はこちゆうまつり（仮）』と内向きで呼ぶことを決める。

服装は通常の制服ではなく、私服とした。

制服姿だと、刺激的過ぎる娘が多すぎる。

ヘルメットに『警衛』の腕章装備が基本。

肌色の少ない衣装を心がけてと通達した。

念のため、ミニスカート禁止令も出した。

マイクロミニは特にダメだと注意をする。

生足バーン！ はお父さんが許しません。

ところで、何故みんな文句を言うのだね？

細かな打ち合わせと質疑応答を済ませ、解散した。

質問してきたのが他の所属の子ばかりなのが気にはなるのだけれど。

『はこちゆうまつり（仮）』開催当日。

北海道に黒い三連星の台風が接近しており、函館は朝から大雨だった。

なんてこつたい！

陸上自衛隊函館駐屯地が街中であって、交通の便のよいことが救いだ。

雷鳴轟く中、函館市長と駐屯地司令の挨拶が行われる。

雨にもかかわらず、沢山の人が出た。

親子連れが多い。

「今までの一般解放日に比べても、かなり多いですね。」

催しものの、本部テント近く。

にこやかに三等陸尉が言った。

なんとイケメンであることよ。

しかし、何故艦娘は彼に反応しないのだ？

女性自衛官たちがなにかとこっちに來ては、彼と二言三言話して去ってゆく。

自衛官でない女性たちも、彼に近づいて話しかけてゆく。

私に話しかける者などいる訳ない。

まあ、そんなもんだ。

体育館から、宇宙の彼方に向かう戦艦の主題歌の演奏が聞こえてくる。

そういえば、この間宇宙で戦う戦艦的な艦娘の出てくる夢を見たなあ。

あれはなんだったのだろう？

怪盗の孫が活躍する作品の主題歌が演奏されだした頃、駆逐艦たちが私を迎えに來た。

長門教官や妙高先生や加賀教官から許可を貰い、敷地内巡回名目で離れることにする。

行動力が特に高く足の速い駆逐艦たちに手を引かれ、東へ西へ。

あーれー。

雨が少し弱くなってきた。

屋内。

P X。

んっ？

自衛隊だからP Xとは言わないのか。

売店で、駆逐艦たちが興奮している。

「し、司令官、こ、こんなに沢山エツチな本があるよ！」

「し、司令官も、こ、こういう感じが好みなのですか？」

「パンツ！ パンツです！」

「私はいつもいつでも司令官を見つめていますから、安心してください。」

「し、司令官！ 後学の為に買っておいたらどうかしら？」

「イ、インスタント司令官は、こ、こういう雑誌を何冊も持っているのかしら?」
「そ、即席提督はこ、こういう雑誌を毎晩読んでいるの?」

雑誌棚の三分の一がエッチな雑誌で占められていて、見慣れないモノを見た娘たちがそれに興奮している。

まあ、そうなるな。

小樽の提督が送ってきたアレを見慣れていたのではないのか?

アレとは別物だということか。

おっさんからすると可愛いね。

初々しいなあ。

おっさんはこれくらいでは興奮しません。

「なに錯乱しているんですか、皆さん。ほら、そっちは大人の男性用の雑誌ですから、触らないように。」

注意したら、ぶうぶう言われた。

君たちが所持すると様々な意味でよろしくないから止めるように、と注意する。

ほら、その娘さんや、艦齢で年齢換算するんじゃないやありません。

売店では、ペットボトル用の入れ物を購入する。

同じものを買った娘たちが結果的に買い占めた。

雨が止んだ。

模擬戦が始まった。

バイクに乗った隊員が仮面ライダーのように突っ走り、ジャンプ台を飛び上がってゆく。

おおっ！ と歓声が上がった。

装甲車が走る。

迫撃砲が唸る。

狙撃手が敵指揮官を打ち倒す。

機関砲を撃ちながら、装甲車が走り回る。

敵兵役の隊員と激しい格闘戦を行う隊員に、チビツ子たちから声援が飛ぶ。

ちよっとしたヒーローショーのように見えないでもない。

双方、かなり強いようで見応えがある。

二人とも本気になって戦っていたが、やがて我に返つたらしい敵兵役の隊員がとどめを刺された。

敵をすべて排除し、任務完了。

拍手しながら興奮している水雷戦隊な駆逐艦たちと、なにげなくさりげなく別れた。車両群の野外展示を見に行く。

野外炊具1号に料理上手の艦娘たちが群がり、担当をしている人のよさそうな自衛官が質問攻めに遭っていた。

他の自衛官たちがこちらを羨ましそうに見ているが、艦娘たちの追及が厳しい為に、彼には余裕が見られない。

鳳翔、間宮、龍驤、足柄、比叡、磯風、伊勢、扶桑、夕雲、鹿島、雷、瑞鳳、高雄、龍田、陸奥、川内、妙高（先生じゃない子）、夕張、綾波、木曾、叢雲などなど艦種も様々だ。

同じ姿の娘が何名もいるので、彼が混乱するのは当然だな。

「この球根剥き器とはなんですか？」

「圧力鍋方式で調理するのですか？」

「運用費は、どれ位かかりますか？」

「何分くらいで何名分の調理が出来るのですか？」

「一台での連続稼働可能時間はどれくらいですか？」

「この機械でおいしく作るコツは、なんですか？」

「司令官の胃袋を掴みたいんだけど、なにかいい手はないかしら？」

なにか妙なことを言っている子がいる。

買って欲しいって後で言われたりして。

……まさかな。無いよな。

熱中している彼女たちから離れ、レンジャー体験の場所へ移動する。

ミニスカートから白い花や青い花などを咲かせつつ、駆逐艦たちが喜び勇んでちびっ子たちと仲よく飛び降りたりボルタリングしたりしていた。

ミニスカート禁止令は出しておいた筈なんだがなあ。

強面の自衛官たちの鼻の下が伸びている。

まあ、致し方あるまい。

好奇心旺盛な駆逐艦たちは、その健脚を活かして様々な場所へ出沒しているようだ。

私服での警衛任務は一時間交代で組んでおいたし、皆で上手く回すように通達しているから大丈夫だろう。

戦車や装甲車両の不整地走破的試乗体験を望んだ子も少なからずいたが、一般人優先を貫いた為に不満が噴出していた。

私になにか夕食で一品作るといふ代案で手打ちをする。

豚バラと野菜で炒めものでも作ろうか。

艦娘たちは、展示車両で中に入れるものは容赦なく乗り込んでいた。

野外炊具で激論を交わしている面々の近くで、艦娘たちがその担当の自衛官を質問攻めにしている。

よかったですね、艦娘たちと会話出来て。

ジーンズとかキュロットスカートとか下着が見えないものにしておきなさいと言つておいたのだが、ここでもミニスカートの子を見かけた。

金髪碧眼ツインテール釘宮ボイス実装でマントを羽織つたネヴァアダが、なにを勘違いしたのかミニスカートをはいっていた。

「見てよ、アドミラル。この私の磨き抜かれた脚線美を。」

「帰ったらお説教です、ネヴァアダさん。そそのかした子と共に。」

ミニスカートをはいっていた子は全員お説教でがんす。

ええと、今何時だ？

昼過ぎか。

催しは午後二時半までだから、後二時間はあるなあ。

祭の本部に行つて、詰めておくか。

そうしましょう、そうしましょう。

これ以上巻き込まれたくないしな。

曇天の中を歩いていると、体にびったりした黒い長袖のブラウスとジーンズ姿の戦艦

棲姫並びにシヨウウカクがくつついてきた。

姫が耳元で囁く。

「私の友達でね、函館に投降したい子がいるの。胸がとっても大きい子だから、嬉しいでしょう？」

「あのですね、胸が大きいとかそうでないかが、女性の決定的評価につながってはいけないと思うのですよ。」

「マスター、その通りです！」

「提督はん、その通りやつ！」

白いブラウスに黒いタイトスカートを着用した黒幕のよく似合う軽巡洋艦と、何故か朝潮型駆逐艦の制服に似た服を着ている航空駆逐艦が眼前に立ちはだかる。

戦艦棲姫が微笑みながら言った。

「あらあら、みんな威勢のよいこと。その子はね、氣立てがよくて料理上手なの。それに控え目で貞淑だから、旦那様を立てるわよ。どちらの意味でも。」

「ほう。」

「彼女、ちよつと気が弱くてね。内気で人見知りか激しくて引つ込み思案なのよ。」

「ああ、その辺りは私そっくりですね。」

そう言ったら、何故かみんながエツ、という顔をした。

L VII : 独りきりにはさせないから

「もう、司令官たら、やつと追いつけたじゃない。はい、いかめしとお茶。出来立てのピザもあるわよ。」

「函館本線に揺られて着いた森駅。」

やや長めの停車時間をぼんやり過ごしていたら、世話好きの駆逐艦が乗り込んできた。

私の優秀な秘書艦。

我が第一艦隊旗艦。

紺色の半袖ブラウスに菜の花色のフレアスカート、そして麦わら帽子。

「どうして、独りで来たの？ 誰も連れていかないなんて物騒だわ。」

小ぶりなポストンバッグを頭上の棚の上に置きながら、彼女は大袈裟にため息をついた。

「来たのか。」

「来たわよ。」

「函館から走ってきたのか？」

「函館から走ってきたのよ。」

「そうか。」

「そうよ。」

折角の食べ物だ。ありがたくいただく。

二人で仲よくいただく。

「みんな、心配していたわ。」

「そうか。」

「あたしたちのことが嫌いになったの？」

「ただの休暇旅行だ。」

「そうは見えないわ。」

「思い過ぎいだ。」

「そうかしらね？」

「そうなのだよ。」

汽車が走り出した。

長万部（おしやまんべ）に着いたら倶知安（くつちやん）行きの汽車に乗り換え、取

り敢えずは札幌へ行くつもりだ。

「あたし、役に立てていない？」

「お前は有能だ。嘘は言わん。」

「なら、どうして、独りなの？」

「誰かといた方がよかったか？」

「ホント、意地悪だわ。」

「そんなつもりはない。」

「女の気持ちかわかっていないわ。」

「たぶん一生わからないだろうな。」

「函館の提督は親切よ。」

「転属許可がいるのか？」

「違うわ。司令官は司令官のままがいいの。」

「何故、アイツのことを引き合いに出した？」

「嫉妬した？」

「しないな。」

「でも、怒っているわ。」

「アイツは嫌いなんだ。」

「悪い人じゃないわよ。」

「だから問題なんだよ。」

「わからないわ。」

「それでいいさ。」

「どこまで行くの？」

「取り敢えず札幌。」

「ススキノで遊ぶつもり？」

「それは悪くない考えだ。」

「あたしたちじゃ物足りない？」

「根本的勘違いをしているな。」

「だって、司令官の女性の好みが変わらないもの。」

「自分の女性の好みを艦娘に押し付けはしないさ。」

「それだと、あたしたちは好みじゃないのね。」

「どうして、そんな結論になってしまったんだ？」

「教えて欲しいの、なにもかも。」

「それはプライバシーの侵害だ。」

「愛する人のことなら、すべて知りたいのが女よ。」

「愛する人に伝えないことが多いのも、女だろう?」

「あたしたちじゃ物足りない?」

「別段そんなことは思わない。」

長万部に着いた。

私が指揮官をしている鎮守府の艦娘たちが、全員乗降口にいた。

駆逐艦三名と軽巡洋艦一名。

皆心配そうな顔をしている。

函館から走ってきたのだろうか?

そんな顔をしなくてもいいのに。

勝ち目なんて始めからないのだから。

憂い顔さえ、輝きを撒き散らすのか。

どうやら、独りきりにはさせてもらえないようだ。

L.VIII：まいなな艦隊の挑戦

舞鶴鎮守府は屈指の武闘派として知られているが、私の先輩筋に当たる人物がその第七の提督をしている。

彼の元に集う艦娘も鉄火場を大変好む者で固められ、総勢一五名規模で二艦隊構成だけがけっこうな戦果を挙げていた。

第一艦隊旗艦兼筆頭秘書艦兼提督の嫁艦が軽巡洋艦の天龍。

火力担当高速戦艦の比叡。

対空番長重巡洋艦の摩耶。

航空戦の要な軽空母の隼鷹（じゅんよう）。

鬼神の如き駆逐艦の綾波。

騎士の如き駆逐艦の磯風。

第二艦隊旗艦は猛き軽巡洋艦の名取。

槍働きにすぐれる駆逐艦の叢雲（むらくも）。

弾幕を張るのが得意な駆逐艦の白雪。

ミユキ・スペシャルで悪を討つ駆逐艦の深雪。

ひっそりと努力する駆逐艦の磯波。

おそるべき駆逐艦の不知火。

補佐を担当する艦娘は三名。

眼鏡っ子軽巡洋艦の大淀。

機械大好きな軽巡洋艦の夕張。

調理理髪いろいろお任せくださいな補給艦の速吸（はやすい）。

先輩が突然昨日の夕方電話してきて、いきなり今朝やってきた。

準備の都合があるから、もっと早く連絡して欲しいんだけどな。

ワイルドな笑顔で、白髪混じりのおっさんがニヤニヤしていた。

アウトドア系のエロ眼鏡おじさんが私の先輩なのはおそろしい。

「有給休暇だぜ！」

「いいんですか？」

「いいんだよ、許可は取ってある。」

まあ、こんな人だ。

しんみりとした嫁艦の天龍から打ち明け話をされる。

「そうですか、着任初日に。」

「そうなんだよ、出会ったその日の晩だった。だから、他の艦娘が毒牙にかからないように気を付けさせた方がいいぜ。まあ、俺の体ひとつで済むのなら安いものさ。」

「うわあ、先輩らしいですね。」

「俺、信用ないな。」

「大丈夫です。既に特級警戒警報発令中ですから。」

「それなら安心だ。」

「俺、なんでそんな扱いなの？」

「だって先輩、以前小樽の姐さんを口説いていたでしょう。」

「勇気あるな、提督。」

「してねえよ！ 単にちよつとロシアの話聞いたただけだ！」

「酒保に誘ったんですって？ 命知らずですね。」

「うわあ、勇者だな、提督。」

「ちよつと待て！ なんでお前がそんなことを知っている？」

「本人から聞きましたよ。」

「今夜の荒縄はなしだな。」

「勘弁してくれ、天龍。艦娘たちにむせる環境で俺が生殺し状態でもいいのかよ？」

「天龍さん、とても厭かもかもしれませんが、函館の安全の為に一肌脱いでください。」

「そうだな、提督を解き放つたら危ないからな。仕方ない、文字通り一肌脱ぐよ。」

「お前ら、打ち合わせでもしたの？　なんでそんなに息がピッタリ合ってたんだよ！」

「先輩の被害者だからです。」

「提督の被害者だからだよ。」

「ぐはあ！」

観光バスに押し込んだ彼らがトラピスト修道院や五稜郭やトラピスチヌ修道院に行っている間に、羊や米野菜パンなどの手配をした。

「うちの艦娘たちがお前の實力を見たいってよ。」

観光から帰ってきた先輩が開口一番。

なに言ってるんですか、この先輩様は。

何故か三番勝負をすることになった。

仕方ない。

養成校時代の忍び装束でも着ようか。

所々補修跡の残る、この戦闘装束を。

「提督、ニンジャだったの？」

「いいえ、実習で着ただけですよ。」

「ああ、そういうや、忍術の座学と実習があったな。」

「へえ。」

審判は向こうの比叡とこちらの長門教官。

場所は道場。観戦する艦娘で鯨詰め状態。

金的目潰し喉輪手刀正中線狙いは禁止だ。

パンクラチオンみたいな感じでいいのか？

第一戦。

対戦相手は名取。

袴姿で木刀を構えている。

じつと見つめていたら、何故か彼女は赤くなった。

私は木刀を右手に持ったまま彼女に歩いて近づく。

きよんとした彼女に対し、木刀を振り上げたらつられて彼女は木刀を頭上に掲げ

た。

そこへ足払いを食らわせ、転がして馬乗りになる。

西江水（せいごうすい）の応用だが、上手くいってよかった。
この間およそ三秒。

名取が泣き出した。

胸元が乱れている。

「初めては提督に捧げる予定だったのに。」

あれ？

私が悪者になっている？

ナニモシマセンヨ？

ネエ、ドウシテナイテイルノ？

生理現象が悪い想像を加速させたか？

泣き止まない彼女を起こして謝った。

比叡と教官の目付きがとてもこわい。

「お、おそろしい男だぜ。」

「く、呉の子たちにもこの手を使ったのかしら？」

「風評被害です！」

彼女は何故か大浴場に連れていかれた。

いいなあ、という眩きがどこからともなく聞こえたが無視した。

第二戦。

対戦相手は摩耶。

「あたしはさつきのようなにはいかないぜ。」

彼女は無手だが、琉球の手（てい）かなにかを遣うのだろう。

じつと見つめていたら、彼女もやがて赤い顔になった。

そこへ懐から出した鞭で一撃を加える。

「ちよっ！ おまつ！」

容赦なく勢いよく鞭を振るう。

堪らず逃げ出す彼女を追いかける。

転んだ彼女に覆い被さった。

「そ、そんなモノを押し付けんじゃねえ！」

「すみません、生理現象です。大丈夫です、悪いことはしませんから。」

「耳元で囁くなあつ！」

「えっ？ ダメなんですか？」

「ダメだつ！ 力が入らねえ！ みんなの前でやるつもりかっ!？」

「なにか勘違いしていませんか、摩耶さん。」

「下半身が信用ならねえ！」

酷い。

一生懸命彼女の耳元で説得し続けたが、首筋が赤くなる一方だった。

ナニモシマセンヨ？

ネエ、ドウシテナイテイルノ？

彼女も結局、大浴場に連れていかれた。

妙な視線を複数感じたが、気にしない。

比叡と教官の目付きが更に険しくなる。

うろう。

最終戦。

対戦相手は天龍。

「俺は他の奴らみたいにはいかないぜ。」

イケメン軽巡洋艦は木刀を構えている。

私は木製のフレイルを肩に担いでいた。

長い棒の先に鎖を付けて、その先に短い棒を付けた武器である。

「変わったものを使うなあ。」

「どうぞ、お気になさらず。」

台図と共に雄叫びを上げ、下段の構えで走って突撃する。

「そうこなきやなー！」

同じく走って、下段から木刀を掬い上げるように振るう彼女。

フレイルを撥ね飛ばすつもりだろう。

彼女の思惑通りに得物を飛ばさせ、がら空きになった体へと抱きつく。

「えっ？ あっ？！」

そのまま押し倒す。

じいつと見つめる。

真つ赤になる彼女。

悪戯心が湧いて耳を軽く噛んだら、木刀を取り落とした彼女が「ゴメンよ、提督。」と

泣き出した。

あれ？

ナニモシマセンヨ？

ネエ、ドウシテナイテイルノ？

比叡と教官によって引き剥がされる。

彼女もまた大浴場に連れていかれた。

……これっでもしかして私が悪い流れか？

「提督、酷いわ。よその天龍ちゃんにはあんなことをして、私たちになにもしないなん

て。」

龍田が少し怒り、天龍の元へ行った。

比叡と長門教官から嚴重注意された。

何故だ。

二名がひそひそ話をして、結局私が判定勝ちという結果になった。

戦術的勝利Aといったところか。

その晩、函館所属の艦娘たちから怒られまくった。

反省。

翌日。

好天。

午前中は第七との交流会。

間宮羊羹が大人気だった。

私も手作り菓子を出した。

クレープを焼いて出した。

意外と好評で忙しかった。

午後から演習が始まった。

当方は長門教官を旗艦にして、妙高先生、加賀教官、島風、龍驤、戦艦棲姫という構成だ。

相手側は第一艦隊。

航空戦で先ずは制空権の確保。

「さあさあ、航空隊、お仕事、お仕事。」

「教本通りね。問題ないわ。」

次に島風がその俊足で相手を掻き回す。

「遅いぞ、お前ら。この島風の速さをとくと味わうがいい。」

突撃する長門教官と妙高先生。

「長門、よろしくて？」

「私はいつでもいけるぞ！ 殴りあいなら任せておけ！」

航空母艦を守りながら激しい砲撃を加える戦艦棲姫。

「あらあら、ぼんやりしていたら、お姉さんが殺っちゃうわよ。」

絶望的な状況でも、嬉々として戦いに臨む舞鶴第七鎮守府の面々。

旗艦の天龍が檣を飛ばす。

「島風は俺が殺る！ 比叡姐さん、姉御、砲撃は任せた！ 隼鷹は敵機を攪乱、綾波と磯

風は教官たちを抑えろ！ 夜まで耐えたら、こちらのモンだ！」

とびきりの笑顔で戦艦と重巡洋艦に向かうのは駆逐艦二名。

その表情に迷いはなく、心の底から戦闘を望んでいるかの如く。

水雷戦隊の誇りを掲げ、彼女たちは躊躇なく突進する。

島風のハイキックを紙一重で避ける天龍。

二名の航空母艦相手に奮闘する隼鷹。

苛烈な砲撃で敵対勢力を打破せんと試みる高速戦艦と重巡洋艦。

摩耶の対空攻撃は二名の航空母艦の機体を何機も撃墜判定するが、駆逐艦二名の劣勢は如何ともし難い。

「行つてきていいですよ、摩耶さん。」

「行きなよ、摩耶。」

「でもよー！」

「後方でちまちま出来ないでしょう？」

「前衛の方があんた向きだと思うよ。」

「……ああ、ダメだ。あたしも突撃する！ 後は任せた、比叡姐さん！ 隼鷹！」

摩耶が晴れ晴れとした笑顔で教官二名の元へ向かう。

「気合い！ 入れて！ 撃ちます！」

「まだまだ殺らせはしないよ！」

艦装のおよそ半分が破壊判定済みながらも、それでも航空隊の攻撃を絶妙に回避しつつ後方三名に痛撃を与えんと奮闘する比叡。

残機が少ないながらもやりくりを考える隼鷹。

「ダメだ。殺られちゃった。ゴメン、姐さん。」

隼鷹、龍驤の集中爆撃により最初に脱落。

「ごめんなさい。私も殺られちゃいました。」

爆撃と集中砲火を浴び、龍驤を大破させるも比叡姐さん脱落。

「お前ら、夜戦で長門教官を絶対^に仕留めろよ。」

駆逐艦二名の支援によるトリプラーで、妙高先生と相討ちになる摩耶。

いつの間にか、天龍綾波磯風は戦場中央におびき寄せられる。

夕陽を浴びて、大破した三名がそれでも希望を捨てずに食い下がる。

「その意気やよし！」

中破に追い詰めた長門教官によって倒される磯風。

「綾波、鬼神と称されるお前に期待している。」

「戦艦棲姫までは届かなかったぜ。スマンな。」

島風を中破にまで追い込むも、空中三段蹴りで仕留められた天龍。

ソロモンの鬼神が孤軍奮闘する。

本来ならば旗艦の天龍が殺られた時点で既に演習終了だが、函館舞鶴双方の艦娘が興奮していて続行を望んでいた。

ならば、続けるしかあるまい。

この仮初めの死闘を。

現代の一騎討ちをば。

三国時代を彷彿（ほうふつ）とさせる戦いが、熱く静かに繰り広げられる。

綾波が駆ける。

狙いは一点。

相手は長門教官。

最前線で猛威を振るう旗艦の彼女を大破させれば、駆逐艦の誉れである。

今は夜戦の時間。

駆逐艦の時間。

望んだ時間。

敵討ちの時間。

温存していた必殺の魚雷を戦艦に放つ。

見透かしているかのように避ける戦艦。

至近距離での砲撃。

綾波に迷いはない。

その笑顔は鬼神級。

舞台を邪魔する無粋な者はいない。

戦場で舞うのは二名だけ。

やがて、駆逐艦は破れた。

最高の笑顔のまま。

「残念でした。」

「見事だった。」

称賛するのは長門教官。

その言葉に偽りはない。

戦いは終わった。

「ヒヤッハー！ ジングスカンだ！」

戦いが終われば野外でジングスカンだ。

みんなが素敵な笑顔で肉をもりもり食べる。

「皆さん、野菜も食べるんですよ。」

そう言つて、斬り刻んだ野菜や茸をどっさりとテーブルに置く。

「さつと転がして胸に切れ目を入れて手をつ込み、心臓に至る血管をプチ。ほら、とっても簡単でしょう？」

料理上手の軽空母が数秒で羊を絶命させる。

鳳翔と間宮が手際よく捌く、命あつたもの。

腸を洗い、腸詰めを作る。

ヴルストだ、ヴルストだ。

餃子も作る作る作る作る。

蒸したり焼いたりしておいしい。

私の隣にはジャージ姿の補給艦。

彼女は真剣な顔で技を吸収する。

そうそう、賓客をもてなそうか。

「はい、先輩、めんたまでです。」

「()はシルクロードかよつ？」

「これが一番のご馳走ですよ。」

「へえつ、提督、よかったな。」

「ええい、これくらいなんともないわい。」

先輩が血まみれのそれを口にして、微妙な顔になった。

「もう一つあります。」

「天龍にやる。」

「ではどうぞ。」

「お、おうよ。」

大量の肉がどんどん消えてゆく。

腸詰めも餃子もすぐ消えてゆく。

出来上がった傍から消えてゆく。

比叡と磯風がカレーを作り出す。

羊の羹（あつもの）も作る。

これが羊羹の元なんだよな。

大根と人参のなますを口に入れられた。

サツポロビールもばしばし消費される。

アルミニウムの樽が次々と空になった。

駆逐艦で麦酒を口にする子がちらほらいる。

あれ？

でも呑み慣れた感じだ。

……いいのかな？

私は料理の合間に艦娘たちから食べ物を口に突っ込まれ、もぐもぐさせながら手を動かす。

旨いぞお。

玉蜀黍の冷製スープも旨い。

夕食は大盛況の内に終了した。

さあ、お片付け、お片付けだ。

私がお片付けものをしていたら、舞鶴の子たちが目を丸くしていた。

明日、彼女たちは大沼公園に寄ってから帰るらしい。

厨房で胡瓜と茄子の浅漬けを仕込みつつ、首筋を見せつける艦娘たちに苦笑いした。

明日も晴れたらいいな。

LIX：天然と計算

※函館を含む複数の鎮守府の話です。

「ハーイ、英国紅茶戦艦の金剛デース！ 先ずは朝の黒石紅茶を楽しみましょう、提督う
！」

「失恋したからといって、ここ函館でやけ酒ならぬやけ紅茶を何杯も飲まないでくださ
い！」

「提督はナニをしても怒らないから、好きなのね。」

「流石にナニをされると困るので止めてください。」

「もーっと、私たちを頼ってくれていいのよ！」

「大丈夫ですので、そろそろ帰ってください。」

「提督、ねえナニする？　今しちやう？　今ナニする？」

「若い歳の女の子がそんな手付きをしてはいけません。」

「そういえば私って捕虜なのよね。だったら覚悟するしかないわね。」
「拷問はしませんので、そんなにいろいろ持つてこないでください。」

「安心してくれ。瑞雲について少し話をしたいだけなんだ。」

「そのクリネックスやワセリンはなにに使うつもりですか？」

「ねえ、アドミラル、イタリアの葡萄酒はここにはないのかしら？」

「あれ程北海道の葡萄酒を空けたのに、まだ呑むつもりですか？」

「ばんばかばーん！　ばんばかばーん！」

「風呂場で遊んではいけませんからね。」

「提督、私、実は任務娘じゃなくて艦娘の大淀だったんです。」

「えー、そーだったのー、私はぜんぜんしらなかったんだな。」

「提督、私、実はアイテム屋じゃなくて工作艦の明石なんです。」

「えー、そーだったのー、私はぜんぜんしらなかったんだな。」

「提督、私、実はエラー娘なんです。」

「そうか、ではすべてリセットして。」

「は、早くポツキーゲームしましょう！」

「この握り潰され粉々になったモノで？」

「ねえ、女子校で先生と付き合ってそれがバレた子の話を聞きたい？」

「何故風呂場でそんなピンポイントな話を始めようとしてるんです？」

「私、みんなからお母さんって呼ばれるんですよ。まだ独身なのに。」

「それだけ貴女に頼り甲斐があつて包容力があるということですよ。」

「司令官を驚かせちやおうと机の下で隠れていたんだけど、見つかって大変だったんだ
びよん。」

「こいつが隠しといた本をこっそり読んでいるのを見つけた直後は、どうしようかと考
えたよ。」

「えっ？ 褒め殺しって殺人技と違うの？」

「誰だ、そんな適当な教え方をしたのは？」

「ところで、どうして駆逐艦って私の体をよじ登ろうとするんだ？」

「そこに提督がいらっしやるからに決まっているじゃないですか。」

「前任者の転属記録も退役届もない。一体どうなっているんだ？」

「さあ？ いなくなつた人のことなんて、覚えていられないよ。」

「夜戦で騒ぐ艦娘がいるという噂は本当だろうか？」

「それはたぶん、単なる風評被害じゃないのかな。」

「大食で鎮守府の財政を傾ける艦娘がいるという噂がある。」
「私たちは元々食べなくて済む体ですから風評被害ですね。」

「あたしはね、アルコール依存症じゃないんだ、本当だよ。」
「はいはい、今日のお酒はそこまでしておきましょうね。」

「えっ？ 現在の社会ではヒロポンが合法ではないんですか？」
「えっ？ 昔はヒロポンが当たり前に流通していたのですか？」

「俺は可愛い女の子の蜂蜜作戦などに、屈したりしない！」
「それでは提督、この特別予算の内容を教えてください。」

「艦娘を殴った提督が、殴り返されて重体とは情けない。」
「提督、それはどっちの意味で言っているのか教えてよ。」

「ねえ、司令官、陰のある雰囲気の意味深な台詞を吐く娘はどうかかな？」
「私個人としては、理解力に乏しいのであまりやらないで欲しいです。」

「女の子の姿をしているけど、中身がおじさんぽい子もいるね。」

「前世は、おっさんやおっちゃんやおじさんまみれやったしな。」

「解体？　なに寝惚けたことを言っているんですか。そんな勿体ないことをする前に他の任務をどンドンこなしてください！」

「あれ？　何故か解体任務が頭に浮かんだんだ。では大淀、新たな作戦を展開するから、所属艦娘全員召集してくれないか。」

「ハイ、『麗しの失恋紅茶戦艦』から『蘇る金剛』へとチェンジング・マイ・ライフデー
ス。」

「わかりました。よかったですね。では、私物を持って貴女ご自身の鎮守府へお帰りください。」

L X : 嗤うせえるすまん

提督は鎮守府の最高責任者であり、基本的にそこにいなければならない。

いつ有事になるかもしれないからだ。

だからといって、外出も出来ないようでは息が詰まる時もある。

別に艦娘たちが悪い訳でもないが、ふらりと夜に出たくもある。

函館の夜風に吹かれつつ外出し、二時間ほど酒でも呑んでみたい旨を大淀に話してみた。

すると、何故か全体会議になっておそろしい程艦娘たちが真剣な顔をする結果になった。

鳳翔と間宮は憤慨していた。

曰く、欲しい酒があるのならばあらゆる手を尽くして用意するし、食べたい肴があるのならば必ず覚えて作ってみせると。

なんだか決意表明になっている。

そこまで大げさなもんじゃないのだよと二名をなだめるが、どうも旗色が悪い。護衛の話になったら、駆逐艦勢軽巡洋艦勢練習巡洋艦並びに龍驤から睨まれた。彼女たちはその艦齢を言い訳に出来ず、実際に飲酒慣れしているとも言えない。ロアナプラから来た娘たちは現地ならば兎も角、日本の酒場ではお断りだろう。風魔の劉鵬（りゆうほう）も同様だ。

あれ？

なんだか大変なことになってきちゃったぞ。

戦艦空母重巡洋艦辺りがかましい。

ビッグセブンがどうしたとかここは譲れませんとか退く訳には参りませんか戦いが私を呼んでいるわとか、なんだか激しい口論を重ねていた。

メリケン艦娘たちもなんやかんやと理屈をこねて、護衛になろうとしている。

事務方の田中さん辺りの意見を聞こうかとも思ったが、業務多忙につきと断られた。外見の微妙な娘が多いため、どうにも悩ましい。

そんなに難しいことをするつもりはないんだけどなあ。

結局、護衛は戦艦棲姫になった。

お通夜のような雰囲気の鎮守府から出掛け、徒歩一時間圏内で辿り着いた酒場は『マインス』と看板に書かれていた。

軽食にも力を入れていたようだった。

男前のマスターが鍋を振るっている。

君主の衣裳が似合いそうにも見えた。

鰯の甘酢鰯掛けやきんぴらごぼうが旨いので当たりだ。

サツポロビールで乾杯して、ぼやぼやと時間を過ごす。

鰯掛け焼きそばや海鮮グラタンも美味だ。

こういうのがいいんだよ、と言いつつになつたが言わないでおいた。

口は禍の元。

桑原、桑原。

黒いスーツを着た恰幅(かつぶく)のよい男性が相席を求めてきた。

周りを見ると店内は混雑し出していて、このご時世に大したものだ。

快諾して、なんとなくその対面側にいる男性と会話する流れになる。

彼はセールスマンをしているという。

販売品目は『幸せ』だそうだ。

スチャツと懐から名刺を出す。

名刺には『喪黒福助』とある。

「モグロさん？」

「モコクです。」

「チミイ、ダメダメだね、ですか？」

「それはモコイです。」

「ああ、牛頭の魔神。」

「それはモロクです。」

「格闘系のお坊さん。」

「それはモンクです。」

「シンセサイザーは？」

「それはモーグです。」

彼は、なにかとてつもないものを相当強く私に売りがついているように見えた。

戦艦棲姫が何故か彼に対してつつけんどんだったので、笑顔を常に貼りつけたような顔の販売員は簡単な食事を済ませるや否や、ほうほうの態で去っていった。

「白けたわね。今日はもう帰りましょ。」

「そろそろ潮時ですな、帰りましょ。」

締めにかプチーノを飲み鎮守府へ戻る。

ご機嫌ななめの皆の衆に詫びて回った。

酒くさいとかイカくさいとか言われた。

突進されて骨がきしんでしまったわい。

明日の朝は厨房担当の娘たちを手伝うことを約束させられた。

いろいろ約束させられたので、明日はシャカリキに活躍だぜ。

明日の私は人間火力発電所だ！

ウオオン！

翌日、鎮守府に來客があつた。

ぐつたりしたまま耳を傾ける。

名刺は見慣れない文字の集団。

「特殊収容典礼公社で調査員をされているのですか？」

「ええ、そうです。」

ほつそらとした女性が頷いた。

続けて彼女は軽やかに言った。

どこことなくなんとなく桑島法子みたいに聞こえる声で。

「この写真に写った男性と、昨晚接触されませんでしたか？」

昨晚話した男性が写っている

「彼、即ち収容対象零式六六六号と接触した相手は殆ど二カ月以内に不祥事を起こすか行方不明になるかして、結果的に社会的生命を失うのです。或いは自分自身の生命活動を停止します。公社規格だと、彼はS級に属します。当公社で可能な限りの追跡調査を行った結果、ここ三年間の追跡調査可能対象者五〇人中三〇人が社会的生命を失い、二〇人が生命活動を停止していました。彼の規格はE級の疑いもありますけれども、ここまでの脅威ではないと当公社は考えます。」

三種職員でラムダツ―所属だという彼女は穏やかに歌うような感じで、自動機械みたいに淡々と述べてゆく。

少し、ゾクリとした。

後で大淀に、目の前の女性が所属する組織について調べてもらおう。

「この世界は崩壊に向かっています。それは深海棲艦の侵攻以前から始まっており、浸食や汚染はかなり進んでいます。人類が我が物顔で地球に君臨出来た時代は、既に終焉を迎えたのです。人智を軽々と超える怪異は、ありふれた風景の中で楽々と我々を飲み込みます。私たち公社は人類最後の防衛線を構築する砦であり、日々世界的危険因子との【交渉・捕獲・収容】を行っています。次回、彼との接触がありましたら即時にお知

らせくください。即応型機動部隊を即刻送り込みます。私たちの仕事の大半はやりきれないものですが、人類のためになることを自負・自覚して行っています。」

物騒な内容を当たり前のように話す彼女。

なにか危険な徴候をそこかしこに感じる。

「どうぞどうぞで、世界の危機にこそ配慮ください。」

調査員が去っていった。

なんとなくほっとする。

それ以来、あの奇妙なセールスマンは見ていない。

LXI：昔々は今もいる

観察対象は現在、日本の最高機密のひとつである『艦娘』に擬態しているため、それが発覚するまでは継続調査が大変困難でした。

六群一組の群体である彼女たちが戦前まで山奥にて巧妙に生息していたことは、かすかな痕跡と奇妙な噂を躍動的に繋ぎあわせて妄想的推測を行った結果判明した事実です。

戦中及び戦後しばらくの間、観察対象は岡山のとある資産家の庇護の元で暮らしていたようです。

しかし、安泰は長く続きませんでした。

連続殺人事件にて当主である彼を含めて何人もの人間が惨殺されたり行方不明になったため、観察対象は転居する必要が生まれました。

その後は、銀座で水商売の店を渡り歩きながら暮らしていた模様です。

観察対象が艦娘の擬態を選んだことと、銀座界限で行方不明者が増えて警察関係者が多く捜査していたこととの関連性は今のところはつきりしていません。

彼女たちの特徴の一点が類稀なる美貌であり、もう三点が怪力と不老と認識齟齬能力です。

人魚の肉を食べたからだというのが上述の推測を行った研究員の持論ですが、あまりにも事例がないために憶測に留まっています。

観察対象は軽空母一名、軽巡洋艦一名、駆逐艦四名の構成で、(削除済)鎮守府に在籍しています。

当公社の潜入調査員二人が(削除済)鎮守府の事務職員として勤務し、観察対象を監視しています。

観察対象は常に六群一組で行動を共にしており、同室で暮らしています。

現時点で、その行為自体を疑われている様子は見られません。

また、彼女たちの艦娘としての擬態はかなり高度で、上官にあたる提督は騙られた悲しい経歴に対して同情的です。

そして、姉妹艦と呼ばれる間柄の艦娘に対してはそつなく振る舞っています。

但し、姉妹艦が観察対象の一名もしくは数名と同室で暮らそうとす試みは行う度に失敗しています。

その代償行為として、観察対象は姉妹艦や同じ鎮守府の艦娘に対して親切を装ったり菓子やちよつとした贈り物を与えたりしています。

少なくとも、表面的には姉妹艦を氣遣う素振りを見せています。

知識はあつても實際経験が数年足らずの艦娘では、数百年を生きてきた觀察対象からすると赤子の手をひねるようなもののようにです。

彼女たちの本能や本質や情動は、深海棲艦相手に発揮されているようです。

本来の性格や性癖に基づく残虐且つ嗜虐的な行為はすべて敵対勢力に向けられ、それは今のところ問題ない状態に収まっています。

問題は、深海棲艦を絶滅させるか、或いはかの者たちとの講和によつて平和な世界になつた後のことでしょう。

鎮守府が内部から食い荒らされる事態さえ、可能性として考えられます。

もし觀察対象のような異形が多数艦娘に擬態していた場合、戦後に我が特殊收容典礼公社の全戦力を用いても鎮圧しきれないかもしれません。

先月初旬の出撃時に、觀察対象は六名共血まみれで帰還しました。

彼女たちを見かけた提督は大いに驚き、即時の入渠を命じました。

觀察対象は全員が致命的損傷を受けておらず、艦隊旗艦の群體指揮者は返り血だと鎮守府の提督や艦娘に説明しました。

高確率で、深海棲艦を経口摂取したものと考えられます。

鎮守府内で觀察対象は、勇猛な存在として高く評価される結果となりました。

観察対象は時折、提督を情熱的に誘惑していますが、その試みはことごとく失敗しています。

提督が観察対象に関心を持っていない訳ではなく、冷静な性質の持ち主だからと思われず。

観察対象は、極めて危険な実験を繰り返し帝国生類総研の実験体或いは実験観察対象かとも思われたのですが、現在のところは連絡を取っている様子が見られません。

(削除済)鎮守府でのあらゆる通信記録を傍受していますが、不正が行われている様子も見られません。

観察対象への監視は当分厳しく行う予定です。

最後に、公社に勤務するすべての元艦娘に対し、再度精密検査の実施を提案します。

LXII：焼きたてをあなたに

停電のあつた翌日。

函館は涼しき晴天。

その喫茶室付きパン屋を見かけたのは偶然だった。

鳳翔、間宮、島風と共に食料品の買い出しに出掛け、その帰り道に見つけたのだ。

「あら、提督。あんなどころにパン屋さんがありますよ。」

航空母艦だけあつて目のいい鳳翔が、それを目敏く発見した。

『北南食品流通』と側面に記載された中型トラックとすれ違つて、店に辿り着く。

NHK函館放送局の近くにあるその店の前に車を停めて出ると、生地を焼く匂い。

鎮守府の近場にこのようなパン屋があるだなんて！

煉瓦でしつかり造られた、古典的な意匠の建築物。

さっそく立ち寄ってみる。

外国にありそうな外装だ。

初めて見る形が興味深い。

函館もまだまだ奥が深い。

店内に人が見当たらない。

休憩中には物騒だな。

店の内部はおいしい香りで満ちている。

「お店の方がいらつしやいませんね。」

「休憩中なのかしら?」

「説明文や値段や内装の文字がすべて外国語だぞ、提督。」

「凝っていますねえ。」

カウンター、テーブル、展示棚と焼きたてのパイが並んでいる。

店内を埋め尽くさんばかりの勢いの量が、圧倒的質量を見せる。

それは実に壮観な眺めで、食べてゆきたい欲望に駆られる程だ。

林檎のパイ。

檸檬のパイ。

南瓜のパイ。

洋梨のパイ。

挽き肉のパイ。

クリームパイ。

薩摩芋のパイ。

ホタテや烏賊や海老などのグラタンパイ。

ハマグリとトマトソースのマンハッタンスタイルパイ（それはとても素朴な）。

馬鈴薯とベーコンのパイ。

鶏肉のシチューパイ。

パイナップルのパイ。

素敵にして偉大なるアメリカンチェリーパイ（ツインピークススタイル）。

目についただけでもこれだけの種類が存在する。

店主は凝り性のようだ。

看板にはパン屋とあるが、これはパイ屋ではなからうか。

ケーキも作るようだが、硝子棚の中にも見当たらない。すべてパイで埋まっている。

「島風、どう思う？」

油断なく辺りを見回している彼女（中身はおっさんだが）に聞いてみる。

「即時に撤退を進言する。」

「私も同意見……って、なにをやっているのですか、お二方!？」

鳳翔と間宮は仲よく喫茶室にパイ群を持ち込んで、珈琲を用意したり寸評を述べあたりしていた。

鍛造されたらしい備え付けの包丁でパイを斬り刻んでゆき、長い時を経たような食器に盛りつける。

二名とも、この状況がおかしいとは思わないのだろうか？

珈琲はどうやら淹れたてのようで、大きめのサーバーになみなみと入っている。それは飴色したデュラレックスの硝子コップに、芳香を漂わせながら注がれた。

「あの……。」

「パイのお代なら、日本円に換算してレジスターに置いておきました。」

「これ程のものを食べずに帰るだなんて、勿体ないと思われませんか？」

……。

ポン。

島風が私の肩に手を置く。

「食べてゆこうか。」

「仕方ないですね。」

パイの焼き加減は絶妙で生焼けはなく、中身もしっかり下拵えしてあつてとてもおいしい。

手間暇かけたのがよくわかる。

大量に造られてはいるものの、そのいずれも手抜きがまったく感じられない仕事ぶり

に全員感嘆する。

出来合いの生地ではないのがとてもいい。

旨い旨いと連呼したら、なんだか周囲の気配がやわらかくなってきたように思えた。

……気のせいだな。

店員は結局出てこなかった。

支払える限りの個数のパイ（アルミニウムの皿と透明なプラスチックの蓋付き）を車に積み、お代は改めて計算し直して昔風のレジスターの台に置いた。

置き手紙も添えておく。

「大変おもしろい御座いました。素晴らしい味わいだと思います。お代は日本円に換算して、レジスターに置かせていただきました。金額が足りないようでしたら、お手数ですが函館鎮守府までご連絡ください。」

パイは、我が鎮守府並びに休暇で訪れていた他所の鎮守府の艦娘に大好評だった。料理上手な艦娘たちはさっそく研究会を始めていた。みんな熱心だなあ。

翌朝。

鎮守府の食堂に山と積まれた焼きたてのパイ群を眺めて、全員驚いた。

パチパチ、と現在進行形で音を立てるパイまである。

どうやって持ち込んだのだろう。

メイド娘たちや風魔の劉鵬（りゆうほう）が緊張した面持ちで対人地雷を含む畏の確認に出かけ、一切破られていないことを報告した。

アメリカンチェリーパイの上には『For admiral with love.』と記されたグリーンティングカードが載せられ、年代物のバーボンウイスキーと薔薇の花も添えられていた。

ノーマン・ロックウエルの絵が描かれた、洒落た感じのカード。

かなり稀少だと思われる、二〇年物の限定生産されたバーボン。

黄色い薔薇一輪。

……ええと。

「ああいうモノにまでモテるとは流石だな、提督。」

島風は呆れたような面白がっているような、複雑な表情をしてそう言った。

パイは昨日にも増しておいしいと思われた。

LXIII：おっさんは怪異と思われていちやったりする

收容対象零式八〇〇号（通称：パンデミック）は現在「削除済」鎮守府の提督として、艦娘の指揮を取っています。

八〇〇号の外見は四〇代の日本人男性です。

対象はやや虚無的な傾向にあり、内気で人見知りが激しく口下手と自己評価していますが、対象と直接会話した潜入調査員の話によれば話題豊富で独自の感性もかなり持ち合わせているとのことでした。

八〇〇号は人間の女性に殆ど影響を及ぼすことが出来ませんが、艦娘に対してはその存在だけで高揚状態をもたらすことが可能です。

まるで声優やアイドルや高級万年筆や汽車などの愛好家が、非常に嵌まりそうな存在に出くわしたかのような態度を対象に示します。

対象の悪口を言う提督や鎮守府関係者は複数名存在しますが、艦娘で八〇〇号のことを悪し様に罵る者は現在確認されておりません。

口が悪いとされる艦娘たちに話題を振ってみたところ、赤面しながら対象を力強く弁護したそうです。

余所の鎮守府の艦娘が休暇などで「削除済」鎮守府を訪れた際にも、聞き取り調査を行わせてみました。

彼女たちから聞いた限りでは作戦立案能力や軍事面・武道面での評価は今一つだったものの、生活面その他については概ね高評価でした。

八〇〇号の傍にいますと、大抵の艦娘は彼のためにあらゆる努力を惜しまず尽くそうと考えます。

八〇〇号に長時間直接接触した艦娘は、彼と物理的に離れることをとても嫌うようになります。

これは驚くべき事態です。

対象は普段非常に理性的で艦娘たちの誘惑にも一切屈しません、艦娘の扱いが酷い基地のことを知ると激しい興奮状態に陥ります。

その後、その基地で酷い扱いに関係した人物が誰であれ、彼らは数日以内から一カ月以内になにか重大な過失を犯して罷免・更迭されるか、或いは行方不明になります。

八〇〇号の感情と彼らの凋落や失踪との因果関係は現在のところ立証されてはおりませんが、学生時代の対象へ危害を加えていた者は調査した限りに於いて全員なんか

の大きな問題に巻き込まれているか行方知れずになっています。

対象の生家に圧力をかけていた地方議員や前職の職場で嫌がらせを繰り返していた社長ですが、前者は愛人宅で卒中になつて意識不明のまま二週間後に全身黒くなつて終了しました。

そして、後者は現在複数臓器の合併症を悪化させたために入院中で、予断を許さない状況です。

対象になにか強い力が作用しているようにも見えますが、すべて偶然の可能性も考えられます。

我が特殊収容礼公社が派遣した潜入調査員は二人とも女性（二〇代前半と三〇代前半。容貌は十人並みの人間。異星人でも元艦娘でも人造生命体でもありません。共に独身で現在恋人は存在せず）で、彼女たちに八〇〇号への印象を尋ねたところ、特に性的魅力は感じないとのことでした。

気遣いはしてくれるし、事務職員に対する態度も公平で好感が持てる旨を彼女たちは話しました。

潜入調査員たちの八〇〇号に対する態度が段々軟化してきたように見えるため、配置替えも検討しました。

しかしながら、まだ半年しか経過していないことを理由に両者から反対されました。

また、来年の春以降も任務の継続を希望するとの要望書を両者から受け取りました。現在のところ特に問題は見られないので、今年度は同じ人員で継続対応の予定です。元艦娘の事務職員たちは八〇〇号にあからさまに好意を抱いており、なにかしら対象から親切にされる度に喜びを露にしています。

「削除済」鎮守府では元艦娘の事務職員を募集していないにも拘わらず、日々複数の履歴書と職務経歴書が送られてきます。

中には、「削除済」鎮守府の近くへわざわざ転居してきた娘までいる程です。異常事態への対応のため、即応型機動部隊を即時派遣出来る枠組の検討をお願い申し上げます。

八〇〇号の周囲には常に護衛が付き、それを排除することは大変困難です。公社の特殊機動部隊を送り込んで、即時の鎮圧は不可能かもしれません。振り返りになる可能性が存在しますので、強行策には慎重になるべきです。

最近、「削除済」鎮守府は艦娘たちの休暇先として認定されており、人気の高い場所となつていきます。

観光が出来て温泉があつて食事もおいしいので、人間でいうところの温泉旅館へ行くような感覚なのかもしれません。

若干の幾つかの疑念はありますが、このまま状況の推移を見守りたいと思います。

LXIV：提督の消えゆく夜に

様々なモノが刺さっている

私の体で冷たく花咲かせる

最早動けない

寒い

寒い

魂がどンドン抜けてゆく

記憶がどンドン消えてゆく

あの思い出も

夢だったモノも

希望だったモノも

儚く泡のように消えてゆく

半壊した鎮守府

艦娘が本気になれば三〇分もたない

天井のぼっかり開いた執務室

それが私の最期の場所となる

星も見えない夜

彼女たちはどこへ行くのだろうか

提督を全う出来なかった私の元を

去つて一体どこへ行くのだろうか

南だろうか

北だろうか

行きたかった

行きたかった

あの水平線の果てまで

生きたかった

生きたかった

あの水平線に勝利を刻むまで

なにを間違えたのだろうか

なにを間違えたのだろうか

どこで間違えたのだろうか

どこで間違えたのだろう

効率よく

効率よく

どこまでも効率よく考えた筈

戦略的には間違えなかった筈

寒い

寒い

あの子たちは私をどう思っていたのだろう

初めの頃はやさしい目をして見つめていた

それがいつの頃からか冷たい目で見つめていた

それをなんでもないと思ったのが間違いだ

効率第一主義で推し進めた任務は失敗続き

成功する筈の策で何度も何度もしくじった

羅針盤

羅針盤

すべての元凶の羅針盤

アレに何度煮え湯を飲まされたことだろう

艦娘たちを怒鳴る度に疎まれていったは私怒鳴るしかないと思つて泥沼に陥つたは私何名が拳を握り締めて震えていただろるか私はすべて見て見ぬふりして指揮を続けた報いはある日あまりにもあつけなく訪れた怒りも悲しみも見せぬままに雪崩れ込んだ宣告は淡々とした言葉で行われ拘束された執行は第一艦隊旗艦や秘書艦たちが行つた自分自身の考え方には絶対の自信があつた怒鳴ることは当たり前のことと思つていた全否定して打ちのめすを普通と考えていたそこから這い上がるのが普通と考えていたそこからまた言葉で叩きのめすのが役割とそれで伸びるのだと本気で私は思つていた私の考え方に背く者は誰とて許さなかつた徹底的に否定し徹底的に貶めた

それが私を追い詰める原因になるだなんて

涙を絶対許さなかった

庇うのを許さなかった

懸命に取りなす娘を無視した

海域開放がやつと出来た時の手作り祝勝会をやらせなかった

そんなことをする暇があったらもつと努力しろと言いつつた

それが上司の役割だと思っていたから

当たり前であると考えて実行しただけ

私は自分自身の考え方に自信があった

間違っていないのだと思いついでいた

だが

だが

艦娘たちにはそれらが通用しなかった

何故

何故

お前たちは私を受け入れてくれなかった

何故

何故

お前たちは私を信じてくれなかったのだ

嗚呼

嗚呼

私を見つめる者がいる

私の最期を見届けようとする者がいる

ごく冷ややかな目で見つめる者がいる

黒い

黒い

それはとても黒い姿形で見つめている

何者だ

何者だ

声が出ない

知らない

知らない

お前など

出て行け

出て行け

私の最期は私だけのものだ

悔いは残る

残るが違う

この結末は違うのだ

私の想定していた経過とも異なる

だから

だから

これは悪夢

私は選択肢を間違えたのではない

そもそも間違っていたのはアチラ

そうだ

そうに決まっている

私は

私は

間違っただけではないなかつたのだと思いたい

ないわからないわからないわからないわからないわからない

寒い

寒い

ここは寒い

誰か

誰か

私を暖めてくれ

寒い

寒い

ここは寒い

寒い

寒……

L X V : ちちちん!

真つ青な空と海。

白雲ひとつない好天を、軽巡洋艦と二名の駆逐艦が小笠原諸島の父島へ向かう。父島にあることから『ちちちん』とも呼ばれる、小笠原鎮守府へ三名が向かう。今日は新たな艦娘たちの着任日。

鎮守府から艦娘へ連絡が入った。

レーダーに、艦影が映ったのだ。

執務室という名の居間兼通信室から、新人提督は無線連絡で相手方に連絡する。

「大井教官、西側より計器侵入してください。」

「了解したわ。」

「教官、またなにごよくてここへ来たんです?」

「ふふ、あなたと仕事をしたいって思ったの。」

「ははは、いいですね。歓迎します。」

鎮守府の発艦口に到着した大井は、如月と邂逅する。

「あら……あなたは呉の……如月ちゃん？　よく生きていたわね。」

「あはは、独りっきりの海では生きた心地がしなかつたですよ。」

「それはそうね。だけど、硝煙のにおいが体に染み付いちゃうと戦場が恋しくなるわ。」

「落ち着く先はいずれも地獄、ですか？」

「それが艦娘という生き物の辿る道よ。」

「そうですね。」

「提督は執務室？」

「いえ、工廠です。」

駆逐艦二名に解散して休憩するようにと伝え、歴戦の戦闘乙女は緑色のスカートを翻

(ひるがえ)し、全力疾走する。

そして、すぐに艦娘を建造することすら出来ない町工場のような建物に辿り着いた。

そこはなんちやって工廠。

出入り口でぱったりと出くわす女と男。

揺れる胸を凝視しないようにしながら、提督は大井の赤く染まった顔を見る。

不覚にもドキツとする、おっさん提督。

ニヤリとする工廠の棟梁妖精。

だがしかしぼってん。

童帝力が解放されて、提督を防御する。

おっさん童貞のみが有するとされる力。

古の夢童帝の偉大な力が提督を覆った。

清らかな乙女のみが崩せると言われる。

おっさん童貞を守る力場が形成された。

「どうされたんですか、教官？ 自分で言うのもあれですが、ここはあなたの实力を發揮出来る鎮守府ではありません。教官なら、命を張る場所は選り取り見取りだと思いますよ。」

「酷い言いぐさね。あなたに会いに来たというのに。」

「……北上さんは？」

「あの北上さんは、私の背中を守ってくれようとした北上さんじゃない。」

「……わかりました。今は一名でも艦娘が欲しい時です。歓迎しますよ。」

「ここは誰が一番強いのか？」

「間違いなく教官です。」

「教官、つて言い方を止めてくれない？」

「大井っち、の方がいいですか？」

「普通に大井、でいいわよ。」

「努力しましょう。」

「軽巡洋艦のフェニックスや戦艦のオクラホマはどう？」

「現在錬度を上げるために、地上訓練を基礎として函館や大湊（おおみなと）辺りと演習をたまにしています。」

「そっちじゃないわよ。」

「どっちですか？」

「もう、あなたってホント鈍いわね。」

「函館よりはマシです。」

「どっちもどっちよ。」

「教官、酷いっす！」

「与汰は兎も角、状況はあらかた函館の大淀から聞いているわ。で、私はここの如月や連れてきた大潮や霞（あられ）と一緒に、資財集めをすればいいのかしら？」

「教官にしていたくのは心苦しいですね。」

「函館の龍驤・曙・霞・吹雪・島風などが時折手伝ってくれているみたいだけど、自前でなんとかした方がいいわ。軽空母が一名欲しいところね。」

「函館に打診してみます。誰か送って欲しいと伝えておきましょう。」
そして、ちちちんは新たな局面を迎えるのであった。

黒煙が上がっている。

「やっとい級一体か……。腕が鈍ったわね。」

父島近海。

単艦による哨戒任務に出掛けた大井。

さっそく一体撃沈し、辺りを見回す。

と。急に右旋回して背後からの魚雷をかわした。

氷上を舞う選手のように華麗に舞いつつ、彼女は必殺の単装砲を撃ち放つ。

その瞬間、炎が上がって黒煙が立ち上る。

「ふう。……至近距離だったから、魚雷を弾道計算する暇がなかったのね。」

脅威は去ったようだ。

大井は自身の手の震えを見た。

「情けないわね。……手の震えがくるだなんて。戦場が久々だと、こんな感じになるのかしら?」

通信が入る。

あの心配性の提督からだ。

情けない顔でそわそわしているのだろう。微笑みながら、彼女はヘッドセットマイクに向かって話しかける。

「あら、私の声が聞きたかったの？」

「からかわないでください、教官。」

「先程、イ級二体を撃沈。哨戒網に穴があるんじゃないやなくて？」

「哨戒任務を更に密にしましょう。教官、単艦では危険です。すぐに戻ってください。」

「晩御飯までには帰るわ。」

「えっ？」

「あのイ級たちは威力斥候だったよね。もしかして、謀られたのかしら？ 敵艦六体確認。これより迎撃任務に移るわ。」

「すぐに艦隊を送ります！」

「急いでね。」

大井の電探は敵艦隊を捕捉していた。

偵察機や艦載機が差し向けられていないということは、航空戦力が存在しないのだろう。

打撃艦隊かしら？

最近はお敵影を見かけない日々が続いていると報告に上がっていたが、確認洩れか敵側の都合が変わったのだろうか。

和平派の深海棲艦もいるようだが、好戦派や過激派が混在しているのはニンゲンと変わらない。

悪い意味での模倣だ。

今はそんなことを考えている場合じゃないわ。

今日は、魚雷をそんなに持ってきてはいない。

鎮守府の懐具合が寂しいのにバカスカ撃てる訳ないからだ。

あれは……夕級？

戦艦が相手か。

面白い。

殺つてやろうじゃないの。

緊急出撃！

珈琲農園で草を抜いたりカレーを作っていたり海岸で釣りをしたりしていた艦娘たちが集結し、装備を急ぎ調べて海へ出た。

旗艦をフェニックスとし、オクラホマや如月・大潮・霰がそれに続く。

海のおいが変わった。

鉄と硝煙と血のおい。

これはまさしく戦場だ。

フェニックスの指示が飛ぶ。

「目標、眼前の深海棲艦四体！ 中央の夕級は大井教官並びに私とオクラホマが受け持つ。駆逐艦のあなたたちは右舷のイ級たちに専念しなさい！ 散開！」

短くも激しい戦いの末、敵艦隊を撃滅した。

しかし、偵察機が存在が新たに確認される。

それを撃墜したものの、新たな敵が現れた。

今度は敵側に航空母艦が存在する。

航空戦力のない小笠原側にとって、それは厳しい脅威だ。

「増援が来るとはね。これでも喰らえ！」

「対空砲火を密にしなさい！」

「気を抜かずにジグザグに動きなさい！」

「魚雷です、教官！」

「全速で回避！ 遅れないで！」

「今から中央突破するわよ！ 推して参る！」

「唸れ！ 光れ！ ダブルトマホークブルーメン！」

「オブツは消毒よ！ 火炎放射器を喰らいなさい！」

「被弾した駆逐艦は下がりなさい！ フェニックス、オクラホマ、まだイケる？」

「あたしはこう見えて幸運艦よ。火炎放射器はまだまだ充分ぶっぱなせるわ。」

「まだ主砲は生きているものがあるし、近接用のダブルトマホークも健在よ。」

「逝くわよ、いいわね？」

「ええ！」

「うん。」

「二体目の夕級撃沈！ これで最後ね！」

「教官！ 大丈夫ですか？ 私を庇ったせいで……。」

「生き残っているのだから、野暮は言いつこなしよ。しかし、派手に喰らったわね。ブースト・ポンプ発火。冷却機一番停止。自動消火装置を作動させて、と。あなたたちも発火したからといって、慌てないようにね。落ち着いて対処することが必要よ。主機がイカれて動力系が真っ赤だけど、航行に支障はないわ。巡航速度以上は出せないから、足

手まといになつたら切り捨ててね。」

「教官、止めてください！」

「そうです！　教官がいなくなつたら司令官がショックで寝込みます！」

「アドミラルつて、オーイと出来ていたのか。」

「ちよつと待つて！　それなに、あたし聞いていない！」

「そうよ、私も教官と司令官のお話が聞きたいわ。」

「あら、戦闘が終わつたらコイバナ？　余裕があるわねえ。」

「だって、教師と生徒の秘められた恋なんて女の子の大好物ですよ！」

「流石に気分が高揚します。」

「あら？　今誰か、私の後ろに……。」

「ちよつと、今は恋の話をしているのよ。こわい話じゃないわ。」

「そ、そうね。」

「そういえば、教官はなにかと提督のことを口にしていました。」

「あれはノロケに聞こえたものです。」

「ちよつとあなたたち！」

「そこのとこ詳しく聞きたいわ。だって私は司令官のすべてを知る必要があるんですもの。」

「アドミラルの癖や好きなものを洗いざらい吐いてもらおうよー!」

「これ以上提督と私の話をするつもりなら、帰投後に特別訓練を課すつもりだけどいいかしら?」

そして、海に静寂が戻る。

帰投して入渠後。

大井に近づくメリケン艦。

「ねえ、オーイ。」

「なに?」

「その……どうしてオガサワラに来たの? あなたの實力なら、ヨコスカでやっていけるんじゃない?」

「ふふふ、提督のためだ、って言ったらどうする?」

「ライバルは望むところだわ。不死鳥（フェニックス）の名は伊達じゃないんだから。」

「誰かさんと同じようなことを言うのね。」

「その誰かさんが誰だか知らないけど、アドミラルを想う気持ちでは負けないつもりよ。」

「もう既に夜明けの珈琲を飲む間柄よ、って言ったら信じる?」

「え？ えっ？ ええっ？ だ、だってアドミラルはヴァージンだって……。」

「単に勉強で徹夜明けして、珈琲を飲んだだけよ。」

「なーんだ。」

「ウブね、あなた。」

「からかったのね！」

「からかったわよ。」

「後で勝負を申し込むわ！」

「ええ、受けて立つわよ。」

小笠原の面々は通常運転であった。

我が小笠原鎮守府には畑があり、その近くにはちよんもりとした珈琲農園もある。

ひっそりと緋色の実が栽培される、試験型農園。

小笠原諸島では産業活性化の方針に伴い、全面的に珈琲の栽培に力を注いでいた。

国際社会が壊滅し、海外の産物の入手が高価で難しい現状。

ヴェトナムや台湾やインドネシアの珈琲も入手出来ないではないが、未だにかなり割高だ。

国産珈琲は未だかつてない程注目株。

なにしろ、作ればすぐに売れるのだ。

燃料を集めて温室を作る所さえある。

買い手が全国各地から大挙し訪れる。

沖縄や福岡の能古島や長崎のスコアコーヒーパーク、それに鹿児島島の沖永良部島・徳之島などにも貪欲な買い手が押し寄せていた。

欲にまみれた人々が合法すすれの商いを大つぴらに始める。

金で人の顔をひっぱたく連中は、ほんにおそろしかもんじや。

割高な価格で提供したくない生産者の思いは、末期資本主義思想に汚染され尽くした販売者には甘ったるい考えとしか受け止められなかった。

某泡盛や焼酎や日本酒でもこのようなことは当たり前に行われている。

需要があるからよかろうなのだ、がえげつない商人たちの理屈である。

その魔の手か父島にも迫っていた。

小笠原鎮守府附属先行試験型珈琲農園の場合、政治的側面から商社や業者が搦め手を使ってくる。

大量に欲しいと臆面もなくのたまう買い手たち。

そんなに出来ませんと答えたら、増産すればいいじゃないと頭沸いている発言。

こんのバカちんどもがっ！

出来る訳がねーだろーっ！

鹿児島産鰻を水増しして三倍に増やすみたいにはいかないんだよっ！

よそのとブレンドしても消費者はわかりませんよと、平然と言った商社のおっさんは出禁にした。

なに考えとんねん。

淹れたての珈琲を飲みながら、その香りを楽しむ。

稀少な味わいだ。

函館から送ってもらった牛乳や沖縄の知人から入手した黒糖を加えつつ、僅かな平和を満喫する。

函館から何故か沢山送られてきたパイも堪能する。

旨い店を知っているとは流石あいつだ。

このアメリカンチェリーパイは最高だ。

しかし、どうも食べきれそうにないのであちこちにお裾分けした。

大層喜ばれたのでよかった。

北海道。

食料自給率が二〇〇パーセントだとかいう食の王国だ。

函館は旨い店がかなり多いのだとあいつは言っていた。

函館鎮守府は特に優秀な鳳翔と間宮が厨房を取り仕切っていて、ミシユランもびつくりの味わいを提供するそうだな。

一度訪れてみたいものだな。

それと、鎮守府内にある喫茶室では熊が美味な珈琲を提供してくれるらしい。

最初、軽巡洋艦の球磨のことかと思つたが動物の熊で合っていると云われた。

『彼』は人の言葉まで話すのだとか。

それ、熊じゃないんじゃないのかな？

乳製品大国の函館だが、何故かスーパーでは岡山県にあるオハヨー乳業の焼プリンが売られているそうだな。

岡山県も乳製品が優れているらしいし、隣の鳥取県でも白バラ牛乳という旨い乳製品が売られているとか。

そうそう、新潟県の良寛牛乳も旨いとあいつは言っていた。

旨い牛乳が飲めるのはありがたいことだ。

そうした環境は、守らなければならぬ。

物思いにしばし耽った。

だが平穩は突如消える。

唐突に静寂が破られた。

「アドミラル！ オーイとただならぬ仲ってどういうことよ！」

「提督！ フェニックスと運命の仲ってどういうことかしら？」

平穩は当分訪れそうにない。

執務室兼居間に突撃してきた軽巡洋艦二名を見ながら、俺は内心ため息を吐いた。

そして、俺は彼女たちに言った。

「なあ、パイ食わないか？」

※『エリア88』第四巻を参考にしました。

※函館においしいお店が多いのは事実です。

L X V I : すり切れたメニュー表

小笠原の提督から頼まれていた軽空母着任の件だが、複雑怪奇な紆余曲折を経てとある水上機母艦を転属させる結果になった。

大淀やマスターオータムクラウドなどの力を借りて、横須賀第一鎮守府の提督と交渉するのは非常に骨の折れる行為であった。

その転属に関する膨大な関連書類をようやく書き終えた今は深夜。

既に鳳翔や間宮は休んでいる。

他の艦娘も無論休んでいるし、なにか作るのも面倒だ。

なにか食べるものはないかと執務室でガサガサやっていたら、すり切れたメニュー表を見つけた。

二四時間対応出前が可能と書かれている。

ホンマかいな。

世界的脅威の出現でコンビニエンス・ストア業界は壊滅的な打撃を受け、昔日の面影

を取り返すのに莫大な労力と時間を要求されることだろう。

夕方に閉める店舗があるほどだ。

そもそも、このご時世で夜間に営業しているのは飲み屋くらいである。

セイコーマートも函館駅前にある程度で、もう既に閉店の時間になっていた。

故に、夜遅く簡単に買い出しが出来ない状況にある。

ポツンポツンと灯の点いた常夜灯と有志の自警団が、現状日本の夜の風景だ。

女の子が夜更けに一人歩き出来る時代は、既に終焉を迎えていた。

女の子の一人歩きが物騒な昨今、護衛業が職業として成立する社会になっている。

守り手は『カブト』と呼ばれ、カブトギルドは活況を呈していた。

失業率が高く、住所不定の人間が増えている日本の治安は以前と比べて確実に悪化している。

都心の警察署が複数の暴漢に襲われた事件は、日本社会に衝撃を与えた。

幸い陥落はしなかったが、多数の死傷者を出したために警視庁長官が辞職した。

普段から役に立っているのかどうか今一つ不明の組織だったが、それでも襲撃前までは犯罪抑止力が少々期待されていた。

だが、その期待はあっさり裏切られた。

幹部の汚職が次々連鎖的に暴かれ、訴え続ける女性の犠牲者を防げない組織。

日本の警察官は今や、江戸時代の岡っ引きに近い立ち位置にいた。そもそもさほどなかった信用が崩れ、警察の名誉はどん底である。

また、現役の大臣や官僚や金持ち芸能人有名人が何人も襲われており、日本は安全神話を失っていた。

民間人も例外ではない。

深海棲艦進攻以降に、何人もの女性が夜間酷い目に遇った。

それらの大変苦い教訓から生まれたのが、個人の護衛業だ。

今のところ、カプトは折り目正しい女の子の守り手である。

最近、元自衛官や元憲兵や元艦娘なども加わりだしていた。

世の中、いろいろ変わるものだ。

まあ、よその国よりはましかもしれない。

お隣なんて、国そのものがないのだから。

ロシアは国が二分され、口の悪い人間は『西方ロシア帝国』『東方ロシア帝国』などと揶揄している。

欧州は内戦になっている国、民族対立が激しくなっている国、なんとかやりくりしている国、経済的に崩壊した国、国民の流出が止められなくてゴーストタウンだらけの国、三カ国対一国状態に陥った国、やたら援助をせびられる国、国民全員に出稼ぎを推奨す

る国、など様々らしい。

駅前百貨店の棒二森屋にあるラッキーピエロも、閉まるのが早くなっている。あそこのチャイニーズキンバーガーは旨いが、この時間では食べられない。で、このすり切れたメニュー表にある店は現在やっているのかね？

『トーマス・トウエンティフォー』？

Tの字が交差した意匠の登録商標だ。

外資系か？

まあいい。

試しに注文してみよう。

電話をかけると、神谷浩史みたいに快活な声が聞こえてきた。

今の時間に注文出来るかと尋ねたら大丈夫ですと答えられた。

夜更けで気分が高揚しているのかな？

やたらと明るい声に違和感を覚える。

なんだか少し態度が変だと思ったが、たぶん気のせいだろう。

支払い方法は、届いてからの現金払いでよいとのことだった。

自家製パンズとパテと契約農家の野菜と契約酪農家の乳製品などを使ったチーズバーガーとフィッシュバーガーと、店員が直に果実を搾ったオレンジジュースと自前で

捌いた鶏を使ったフライドチキンと契約農家で収穫された馬鈴薯を使ったサラトガ
チップスの組み合わせで頼んだ。

鎮守府前で星を数えながら待つていたら、三〇分ほどで店員が全力疾走しながらやつて来た。

自転車くらいの速さだ。

彼女は元艦娘なのかな？

無表情で品を渡された。

支払いを済ませると、彼女は慌ただしく全力疾走で帰っていく。
せわしないな。

最小限の灯りを点（とも）した食堂でファストフードを味わう。

悪くない味わいだ。

もそもそ食べていたら、何故か焼きたてらしいパイがすぐ近くに出現していた。

思わずギョツとなる。

熱々のミートパイだ。

『Eat meet.』と書かれた紙が添えられていた。

駄洒落のつもりかな？

珈琲のポットもある。

食べすぎになるなあ。

そう思いつつ食べた。

何故か早霜が現れて、彼女と一緒に食べることになった。

残った分は朝食に回せばいいだろう。

しかし、何故私の膝の上に座るのだ？

「この方がよりおいしく感じられるんです。」

私を見上げながら、若い娘は当たり前のようにそう言った。

L XVII：潜入任務はいつも上手くいかない

ドゥーもー。

佐世保第八鎮守府所属の青葉です。

今回は函館鎮守府へのスニーキングミッションです。

『夜の帝王』とも噂される函館鎮守府の提督の実態を暴くべく、湯の川のコーヒールームきくちのおいしいソフトクリームを食べた後で探訪です。

よし、潜入任務用に明石さんに開発してもらった光学迷彩を……。

「あれ、青葉さん。また取材ですか？」

しまった！

早速、提督に見つかってしまいました！

こんなに早く見つかってしまっなんて！

あ……あんなことやこんなことをされちゃうんでしょうか。

私、じゅんとしちゃいます。

「あ、あの、初めてなのでやさしくしてくださいね。も、もうすぐ、綺麗な体でいられなくなるんですね。」

「あのね、青葉さん。」

「何度も何度も提督の技で（自粛）しちやって大破するって本当ですか？」

「そんな潤んだ瞳で、大変危ないことを言うのは止めてください。私の方が大破しますよ。貴女がたは似たようなことを言いますね。同姿艦は感性も似ているからでしょうか？」

「えっ？ 捕まった私の同姿艦は口封じの為に提督の私室に閉じ込められて、（自粛）されたり（自粛）されちやうんじやないんですか？」

「話を捏造しないでください。そもそも私は童貞です。」

「またまたー。そうやって油断させて、おいしく私たちを（自粛）しちやうんでしょう？」

「しません。」

「えっ？ ここを訪れた艦娘は全員、（自粛）しちやって（自粛）になっちゃって（自粛）なんじゃないですか？」

「放送禁止用語を連発しないでください。」

「あら、青葉さん。また取材でしょうか？」

「おお、いいところに来ましたね、大淀さん。彼女は潜入任務で来たみたいですよ。」

「えっ？ 何故わかつたんですか、提督？」

「だって……、同じような光学迷彩を纏った青葉さんが以前来ましたから。」

「対策は万全という訳ですね。……私はこれから地下室送りですか。」

「はい？ なにを言っているんです？ そもそも地下室なんてありませんよ。」

「なるべく痛くしないでくださいね。……覚悟はしていたつもりですけど、いざとなる
とこわいです。」

「なにか盛大に勘違いしていますね。大淀さん、彼女になにか飲み物をあげてください。
い。」

「わかりました。」

ああ、その飲み物の中にお薬が入っていて、私は二度と……。

生きて帰れたかったな。

ごめんなさい、提督。

「彼女はなにかに浸っていますね。」

「私がどう思われているか、よくわかります。なんで誤解が絶えないのかなあ？」

青葉です。

潜入任務は失敗しました。

貞操が奪われることはありませんでした。聞いた噂とは、かなり異なるみたいです。質疑応答集の厚い冊子をいただきました。間宮さん特製の間宮羊羹まで貰いました。なんだか体よく追い払われた気がします。次回は万全の準備で潜入任務に挑みます。負けませんから！

L X V I I : 霧とケーキと西の空 (前編)

「ダメね。現在地がまるでわからないわ。」

六度目の偵察機を甲板に戻した、歴戦の加賀が弱音を吐いた。

他の五名が不思議そうに彼女を見つめる。

現在、函館鎮守府から出撃した六名は霧の中にいて、まさに五里霧中状態だ。

「私もこんな霧は経験がないな。他の皆はどうだ?」

旗艦の長門が他の四名に話を振る。

「私は新参だし、全然わからないわ。キスカみたいだとは思うけど。」

釘宮ボイスで意見を言う、金髪碧眼ツインテールにマント姿のネヴァアダ。

記号でんこ盛りである。

「南方ではないな。この霧は。」

鉄底海峡開放戦の激戦を生き残った島風が男らしく言った。

量産型艦娘で、その中身はまごうことなきおっさんである。

露出が過ぎるので、陽炎型のスパッツを穿かされていた。

「私たちはどこへ向かっているんでしようか？」

一見頼りなげな表情で疑問を述べる吹雪。

だが、一皮剥けばその元々の中身はレ級。

彼女は過酷な強化手術を受けた改造艦娘。

寧猛な内容を、主人公の甲殻で包み込む。

その表情も言葉も態度もすべてが擬態だ。

「西に向かっているのは確かだね。」

函館鎮守府に投降し、現在は普通に艦隊に混ざるまでになった戦艦棲姫が発言する。

今では、無益な戦いを避けるための要になっていた。

意外と面倒見がよいので、なついている艦娘までいる程だ。

そんな個性的な面々がしばらく航行していると霧が晴れ、方向転換しながら進んでい

たら小さな島と鎮守府らしき建物が見えてきた。

「あれは……どこの鎮守府だ？ 私の記憶には無いぞ。あの島はなんと言う島だ？ そ

れにあれは新設された鎮守府？ 警備府？ 或いは泊地？」

長門がひとりごちる。

と、そこへ一名の艦娘が近づいてくる。

艦装から判断すると戦艦級。

白い巫女風衣装に長い黒髪。

扶桑か？

いや、扶桑にしては艦装が小さいし速い。

では……高速戦艦だな。

あれは、提督がお嫁さんにした艦娘最右翼の榛名か。

「貴女がたはどここの鎮守府所属の艦娘でしょうか？」

油断なく目配りをしている。

よい目付きだ。

長門は彼女に好感を持った。

「私たちは函館鎮守府所属の艦娘だ。ここはどここの鎮守府なのだろうか？」

函館鎮守府？ と呟いた榛名が一瞬固まる。

ブラック鎮守府か？ と酷く緊張する六名。

「あの、違います。ここはブラック鎮守府ではありません。その、説明が必要なのでついてきてもらえますか？」

頭の回転が早く、状況判断も的確だ。

曹操のように人材マニアの傾向がある長門は、まるで関羽を眺めるように彼女を見つ

め出していた。

その視線に気づき、またかため息をつくネヴァダ。

その平常運転ぶりに苦笑する加賀と吹雪。

警戒感を持つて周囲を見回す島風と戦艦棲姫。

「……久しぶりに……走ったら……疲れた……。」

報告してきますと立ち去った榛名がいなくなつてから少し時間が流れ、上陸した彼女たちの元へやってきたのは若い男性だった。

軍服を着ているのだから、彼がここの提督なのだろう。

(うちの提督より男前だけど、うちの提督の方が素敵だな。)

六名はそんな失礼なことをほぼ同時に考えながら、提督らしき男に近づいた。

長門が数歩先に進んで話しかける。

「失礼、貴方はこの島の提督なのだろうか？」

「えっと、そうだけど……君たちは一体どうしてこんなところに……？」

「いや、まったく私たちにもわからない。遠征帰りに何故だか急に鎮守府のある方ではなく『西』方面に行きたくなつたんだ。だけど羅針盤が急に……。」

「狂つたように回りだしたのよ。そして『西』から逸れてここに辿り着いたわけ。戦艦の

ネヴァダよ。よろしくね♪」

きよとんとした顔で提督がネヴァダと握手する。

長門はその彼の顔を凝視していた。

あれだけ執拗に報道されたメリケン艦娘を知らないのか？

国内外の提督たちがあんなにも大騒ぎしたのに。

長門の目付きが険しくなり、島風に目配せした。

歴戦の最速駆逐艦は、ひっそりと首を横に振る。

頷いた長門は、剣呑になった表情をやわらげた。

だが。

なんとなくおかしいぞ。

違和感を覚える場所だ。

会話はネヴァダに任せようか。

社交的な彼女にうってつけだ。

しかし、ここは一体……。

ネヴァダがちらりと長門に視線を向け、提督の注意を自分自身に引き付ける。

以心伝心。

メリケン艦娘は積極的に提督へ話しかけた。

「それでなんだけど……私たちが着任している函館鎮守府まで電話をしたいの。貴方の鎮守府まで案内してくれるかしら？」

「ああ……大丈夫だよ。それとうちの鎮守府は変わっているけど気にしないでね。じゃあ……こつちだよ。……それにしても『西』に進まなくて本当によかった……。」

「あのまま進むとなにかあったのかしら？」

「世界の端が見えてしまうからね。詳しいことは執務室で話すよ。」

少し離れて四名が歩く。

世界の端ねえ、と皮肉っぽく小さな独り言を漏らす戦艦棲姫。

もしかしたらここは異界かもしれんぞ、と囁く島風。

まさか、と呟く加賀。

お腹が空きました、とぼやく吹雪。

艦娘を食べたらダメよ、と正規空母に真顔で言われ、そんなことはもうしませんよとやり返す特型駆逐艦。

そして、この提督はモテるのだろうか、既に関係している艦娘はいるのだろうか、とガールズトークを始めるのだった。

長門は考えながら歩いている。

変わっているとは、どのくらいのもを指すのだろうか？

先程から違和感は募るばかりだ。

先を歩く提督は人間だ。

たぶんおそらく人間だ。

悪辣な者でないと思う。

加賀に偵察機を飛ばさせる案は、即時に脳内で却下した。

空母系艦娘や電探性能の高い艦娘相手では歩が悪いしな。

表面上は敵対していない相手だから、慎重にやらないと。

なんだか甘い匂いが濃密に漂ってくる。

なんだこれは？

お茶会でも開いているのだろうか？

謎は深まるばかりだ。

「ナガト。ピーリラックス。ドントマインド。ゴーフォーブレイク。」

ネヴァダが向日葵のように微笑みながら、話しかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。わかつている。」

そして、歴戦の戦艦は鮫のように嗤った。

LXIX：霧とケーキと西の空（中編）

提督に続いて、函館鎮守府に所属する六名の艦娘がぞろぞろと歩く。

旗艦の長門は疑惑の眼差しで彼を見つめていた。

その頭脳を高速回転させている戦艦に代わり、他の五名は周囲を警戒している。

何故、艦娘が一名も見当たらないのだ？

電探は遠方での反応を示した。

周囲には存在しない。

あまりにも不用心ではなからうか？

その内、六名全員が納得した。

異形の者が執務室の扉の前に立っている。

しかも、二名。

憲兵の服を着た魚頭人。

人の頭部に魚一匹そのまま載っている、異界の存在。

不味いな、と島風がぼやいた。

周囲の面々が彼女を見つめる。

「知っているのか、島風？」

長門が問いかけた。

「あれはオオクチバスだ。」

島風が乾いた声を出す。

「魚自体は知っているが、こいつらは初見だ。これではまるで、ホラーゲームか恐怖映画という感じだ。全員のS A N値チエツクが必要事項かな？」

「それは兎も角、食べられますかね？」

「吹雪は食いしん坊ね。殺ってみる？」

「ちよつと物騒なことを言わないで。」

「私には、美味しそうに見えません。」

島風の言葉に続き、吹雪、戦艦棲姫、ネヴァアダ、加賀が発言する。

「この憲兵たちに害はないよ。こちらから害を与えない限りはね。安心してくれて構わない。入ってくれ。」

提督が苦笑しながら、そう言った。

長門が振り返り、五名はこくりと頷いた。

島風が遊撃、長門とネヴァアダが正面突破、戦艦棲姫は後詰め、加賀は制空権確保、吹雪は加賀の護衛。

場合によっては、戦艦棲姫と吹雪も前衛に加わる。

そこまで一瞬で決めた。

この提督とやらも、化けの皮をかぶっているかもしれないからな。

用心に越したことはない。

部屋の扉を閉めたら閉鎖空間になるかもしれないと、警戒した島風が部屋の外側に残った。

彼女（中身はおっさんだが）は憲兵を観察した後、服を突ついたり引つ張ったりして挑発した。

わざと挑発的行動を相手に取って、相手の反応を確かめる。

島風はなんといっても、鋭いカラーテ使いだ。

マーシャルアーツやコマンドサンボの技術力は伊達ではない。

いざとなれば、最速駆逐艦の名に恥じぬ暴れっぷりを見せてやろう。

しかしながら、憲兵は反応しなかった。

彼女の挑発に乗るつもりはないらしい。

「なあ、ここの提督さんよ。この憲兵たちはずっと立っているままだが、機能はしている

のか?」

可愛い声でおっさん喋り。

提督が首をかしげている。

違和感を感じているのだ。

「その憲兵に触れられると一瞬で意識を失うくらいだから、機能はしていると思う
……。」

「ふむ。普通、そんなことはあり得ないんだがな。」

島風は考え込む仕草のまま、吹雪の隣に座る。

「なにか疑問に思ったことはあるかな?」

疑問だらけだよ、とおそらく六名は内心彼に突っ込みを入れたことだろう。

戦艦棲姫がすつと手を挙げる。

「艦娘が見当たらないのと、先程の事象を説明して欲しいわ。それと、ここは本当に鎮守府なの?」

頷く他の五名。

長門は剣呑な視線で提督を見つめている。

それを気にした風もなく、提督が口を開いた。

「世間一般からは隠蔽されているのさ、この鎮守府はね。」

ざわざわとする艦娘たち。

「ここは秘密実験場なのか？ それならば筋は通る。不法な行為を重ねているというのなら……。」

どうやら、長門の推理が固まったらしい。

不正な場所ならば、全力で潰すつもりのようなようだ。

「そう、殺気立たないで欲しいね。ここは簡単に明かせるような場所じゃないんだ。うちの艦娘たちはケーキを食べに食堂へ行っているよ。」

「ケーキ!? いいなあ……。」

かなり腹を空かせたらしい吹雪が、羨ましそうに言った。

まさに食いしん坊万歳である。

「明かせるような場所じゃない……? まさか、やはりここはブラック鎮守府か?」
爆発三秒前のような顔で長門が立ち上がる。

それをまあまあ、と手をヒラヒラさせながら提督は言葉を継ぎ足した。

「いや、ここは元ブラック鎮守府だったらしい。着任して資料を見て気づいたんだ。前任の提督は……その……艦娘に対していろいろやっていたようだ。」

苦い顔の提督から渡された資料を、食べるように読み出す艦娘たち。

だが、その資料に異変が起きる。

資料の文字をなにかが『食べて』いるのだ。

「この三枚目の資料は少しおかしい。文字が穴開きになっているぞ。」

「長門、此処を見て。資料の中をなにかが泳いでいるわ。アンビリーバブウ！」

「ゆゆゆ……？ 文字を食べている……。まるで魚が餌を食べているみたいだ……。」

「文字が文字を食べるだなんて、初めて見ました。『私の』提督に報告したいくらいです。」

「ちよつと待て、加賀。いつ我々の提督がお前の提督になったんだ？」

「ここは譲れません。」

「止めなさいよ、ふたりとも。」

「そうですよ、私の司令官のために争わないでください。」

「吹雪、貴女、度胸があるわね。」

「いやあ、それ程でも。」

「ほう、いい心がけだ。」

「ナガト、座りなさい。」

「気分が高揚しますね。」

「カガも煽らないでよ。」

島風が文字喰う文字に感心している。

「紙魚（しみ）が文字を食べるのは江戸時代の文献で読んだことがあるが、『ゆ』という文字が他の文字を食べるとは珍しいな。」

じつと眺めている提督に気づき、長門は顔を少し赤らめながらコホンと咳をする。

「内輪のことで失礼した。ところで……私たちが向かおうとしていた西端のことも教えてください。あのまま私たちが進んでいたら、一体どうなっていたらどうか？」

なにかを思い出すような顔で提督が答える。

「死ぬのかな……？ 向こう側の知識を持ってこちら側に還ってはこられるが……その、理解したくないんだ。まあ、向こうのことを喋ってしまうと伝染病のようになるらしい。そうだな。取り敢えず、絶対に西へ向かうな。」

「取り敢えずわかった。近づかないことにしよう。忠告に感謝する。ところで、通信機器を貸してくれないか？ 函館鎮守府に連絡を入れたい。」

鋭い視線のまま、長門は提督に言った。

「わかった。いいだろう。ところで済まないんだが、少しでも手伝って欲しいことがあるんだ。我が鎮守府の危機であり、それは世界の危機でもある。うちの艦娘では人数が足りないんだ。」

「どんなことをさせる気だ？ 場合によっては……。」

提督は奇妙な笑顔で言った。

「ケーキを食べて欲しい。増え続けるケーキを。」

その一瞬。

彼の背後に、青い猫のようななにかが見えたような気がした。

LXX：提督一種、提督二種

鉄底海峡解放戦後、提督の資格は二種類になりました。

それまでの曖昧な基準を明確化し、数値化したのです。

これによって、選良としての提督一種が誕生しました。

妖精が見える（『妖精眼持ち』）人間の中でもまともな者を提督にしようという風潮が生まれ、艦娘を虐待したり粗末に扱う者は激減しました。

妖精眼持ちでありながらも提督になれなかった者の少数は、蜂蜜作戦的な行為による情報洩れのために諸外国へ拉致されたり自ら地下に潜伏して反社会的活動を行うようになりました。

妖精眼持ちで提督になれなかった者の大半は、憲兵になることを熱望します。

それ以外だと、鎮守府警備府泊地の工廠の工員や事務系の職員を目指します。

何故なら、直接艦娘に関わる業務に就けばケツコン可能率が上がるからです。

実際、提督以外の者とケツコンする艦娘は妖精眼持ちを選ぶことが多いです。

お互いに通ずるところが多いからだろう、というのが研究者の多数意見です。

提督二種

◆通称：なんちゃって提督、即席提督、略式提督、他

◆基本契約可能艦娘：駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、軽空母、水上機母艦

◆基本編成可能艦隊数：二

◆基本妖精好感係数：二以上

◆基本艦娘好感係数：一以上

◆教育期間：千葉の茂原で半年

◆学歴：高卒以上

◆年収（少佐待遇時）：五〇〇万円

◆間宮券配給：月一枚（基本）

◆間宮羊羹配給：年二棹（基本）

◆基本必要能力：艦娘から罵倒されても冷静に対応出来る者、艦娘を大切にする者、自分自身のことばかり考えない者、社会的常識を有する者、簡単に暴力を振るわない者、誠実な者、自分自身の考えが絶対正しいと思いつままない者、自分自身の考えに反対する者へ過酷な手段を用いない者、女性を蔑視しない者、特に女性慣れしていなくてもよい

◆最低必要資格：運転免許証、英検三級、ボイラー技士二級（教育修了までに取得すること）

◆基本年齢：二〇歳以上五〇歳以下

◆幕僚：基本的になし

◆建造資格：なし

◆基本配属：民家規模または民家改造型鎮守府警備府もどき、海外の泊地（泊地二種）

◆殉職率（非公開）：約六割

提督一種

■通称：本式提督他

■基本契約可能艦娘：全般

■基本編成可能艦隊数：四

■基本妖精好感係数：六以上

■基本艦娘好感係数：五以上

■教育期間：広島の江田島で二年

■学歴：大卒以上

■年収（少佐待遇時）：一〇〇〇万円

■ 間宮券配給：月五枚（基本）

■ 間宮羊羹配給：月二棹（基本）

■ 基本必要能力：文武両道、頭腦明晰、繊細且つ豪胆、先の先の先を読める戦略家、女性の扱いに長けていければ尚よし、国際感覚を持つこと、英語でスピーチ出来て交渉が出来ること

■ 最低必要資格：大型運転免許証、英検一級、ボイラー技士二級（いずれも江田島での教育修了までに取得すること）

■ 基本年齢：三〇歳以下

■ 幕僚：副官、提督補、参謀、他

■ 建造資格：あり（事前許可要）

■ 基本配属：四大鎮守府、重要泊地（泊地一種）など

■ 殉職率（非公開）：約三割

※ボイラー技士の資格は鎮守府のボイラーを日常的に扱うためです。基本的な操作・点検・修理は妖精がやってくれます（ボイラー技士資格所持者のいない鎮守府）が、彼らに頼りきらないようにするためでもあります。

※希望があれば、性欲抑制剤が処方されます。

※提督二種の所属する鎮守府警備府泊地の工廠では建造装置がなく、工作艦の明石が着任出来ません。

そのため、提督一種の元にいる明石が定期的に提督二種の基地を巡回したり、軽巡洋艦の夕張・北上や水上機母艦の秋津洲が工廠担当者になったりします。

また、函館鎮守府のように人間の博士が工廠担当者として着任する場合があります。

※提督二種の基地には基本的に大淀が着任しないため、他の基地に所属する大淀が巡回して事務業務を補佐しています。事務業務に長けた艦娘ばかりではないので、審査を通過した事務員を雇っている基地もあります。函館鎮守府のように事務方が充実しているところはごく少数です。

※提督二種の元に着任する艦娘の実数は駆逐艦数名に軽巡洋艦一名か軽空母一名がいればかなりいい方で、駆逐艦一名と二人きりの基地も散見されます。

※教練艦として香取と鹿島があり、十分に教導出来ない多くの基地で引つ張りだこです。

※函館鎮守府並びにその提督は例外中の例外です。

艦娘（新規着任時、全艦種共通）

★教育：高卒程度のものを睡眠学習を用いながら半年から一年以内で修了させること。また、社会常識や一般常識の教育、性教育も併せて施すこと。困難な場合は大本営に問い合わせること

★基本月収：八万円（これに艦種手当や戦績報酬などが加算される）

★各種税金、国民保険など：全額免除

★人権：人間の未成年に準拠

★保護者：所属する基地の最高指揮官

★飲酒：基地内のみにて許可。基地以外での飲酒は基本的に不可

★喫煙：非推奨

★間宮券配給：月一枚

★間宮羊羹配給：年一棹

★資格：運転免許証は外見に準ずる、他は要応談

★健康診断：年一回

★外出許可：全教育修了後、最高指揮官の許可を得て日帰り（午前九時から午後五時）で行うこと。最高指揮官と一緒の場合はこれに当たらない。無闇に出歩かないこと。深夜に勝手に外出した場合は脱柵と見なす。日常的に買い出しなどが必要な場合は要

応談

★転属：本人が希望するにもかかわらず半年間に渡って艦娘としての義務を果たせない状況が続いたり、本来の業務から逸脱した扱いまたは放置などが継続した場合は転属の要件を満たす

★セクシャルハラスメント：提督から再三に渡る性的嫌がらせを受けた場合、転属の要件を満たす

★最高指揮官への訴訟権：無し。ただし、憲兵や先輩などに訴えるのはかまわない

★解体（退役）：解体（退役）判断は艦娘の権利である。最高指揮官の権利ではない。艦娘に働きかけて解体させるのは禁止項目とし、これに違反した場合は刑罰が課せられる。特別な状況を除いて艦娘には基本的に最低三年の業務を課し、期間終了後に戦績並びに基地での立ち位置などを鑑みて本人判断で解体が判断される。解体後の守秘義務などについては別項を参照のこと。業務継続が基本的に望ましい

※艦娘の人権が人間の未成年に準拠するのは、犯罪やなにか社会的問題に出くわした際に罪状を軽減するための措置です。

鉄底海峡開放戦以降、艦娘は『兵器』ではなく『兵士』の扱いです。

法制度が整っていない現状、今のところは様々な問題を内々で処理しています。

※艦娘の老化や寿命は現在不明で、不測の事態で死亡する可能性が無いとは言えませ

ん。そのため、権利に関しては及び腰のところがあります。

LXXI：霧とケーキと西の空（後編）

長門が函館鎮守府へ電話すると、通話口からジャリジャリと時折音がした。

これはなんだ？

妨害電波か？

それとも……。

「もしもし、もしもし？」

「ああ、すまない。私だ、提督。第二夫人の長門だ。」

「本物の教官ですね。どうされました？」

「妙な鎮守府に来ている。」

「妙な鎮守府、ですか？」

「ああ、すこぶるつきに妙だ。」

長門はこれまでの経緯を提督にかいつまんで話す。

「ふむ、大本營の開発研究所とかそういう感じですか？」

「大淀にも話をしておいてくれ。どうにも消化に悪い。」

「わかりました。なにか不都合でもありましたか？」

「これから不都合が起こりそうだ。」

「なにか、こちらで出来そうなことはありますか？」

「そうだな、神にでも祈ってくれ。」

「無事を祈っています。」

電話を切つて皆のいる場所まで戻ると、提督が六名を連れ歩きながら説明する。

ケーキを食べ尽くさないと世界が終わるといふ説明に、全員半信半疑の状況だ。

「ケーキで世界崩壊の危機……？ ごめんなさい、なにを言われているのか意味がわかりませんわ。」

金色のツインテールを振るわせながら、釘宮ボイスのネヴァアダは流暢な日本語で言った。

「ネヴァアダと同意見よ。詳しく説明してもらえるかしら？」

戦艦棲姫がそれに同調する。

提督がそれに答えた。

「食べ切らないと増え続けるケーキ。そうとしか言い様がないな。」

「処分したらよいのではないのでしょうか？」

加賀が提案する。

だが、提督は首を横に振った。

「いや、それも試してみたけれど何事もなかったように瞬時に再生されたよ。あれらは食べられないと消費されたことにならない性質だった。まあ、食べ尽くしても二四時間後には何事もなかったかのようにケーキが皿の上に鎮座しているんだけどね。」

そうして、彼女たちは食堂へ案内された。

その出入口の前では、駆逐イ級が腹を膨らませた状態でうんうん唸っていた。

どうやらケーキの食べ過ぎのようで、中破している……。

「駆逐イ級に見えるが、どうしてここにいるんだ？」

島風が鋭い声で提督に聞いた。

「ここでは、艦娘と深海棲艦が争うことはないんだ。……保護しているって言えばいいのかな？ こつちに来てくれ。」

イ級をすり抜けるように食堂へ入ると、甘い香りが漂っていた。

しかし、ケーキが見当たらない。

「こつちだ。」

提督が地下へ通じる通路から六名を手招きしていた。

「足元が暗いから、気を付けてね。」

夕張市にある炭鉱博物館みたいな階段を降りてゆく。

「なんだか秘密基地みたいで憧れますね。函館鎮守府にもあったらいいのになあ。」

吹雪が暢気に言った。

「吹雪、それはないと思うぞ。」

島風がツツコミを入れる。

「そうかなあ……。」

長門とネヴァダは無言で周囲を警戒し、加賀と戦艦棲姫は互いにこの状況への推論を述べ合っていた。

やがて地下室への扉の前に到着する。

扉を開けると広い廊下が見え、左右に扉が四つずつ見えた。

その廊下には、ケーキをかなり食べたらしい天龍がぐったり横たわっている。

提督は、苦しうに腹を押さえている軽巡洋艦に話しかけた。

「天龍、具合はどうだ？」

「ああ、あんまりよかねえが、俺はここまでのようだ。そこの連中は援軍か？」

「ああ、臨時の応援を連れてきたんだけど……ケーキは全部であとどのくらい残っているのかな？」

「さあな。二〇〇はないと思うが、途中から数えるのを止めたから正確な数はわからん。俺は当分甘いものを遠慮したいぜ……。初任務がコレか……。ケーキはしばらく見た

くないな。」

天龍はそう言うのと、気を失ってしまった。

余程気力を使ったのだろう。

「起きたら歯磨きをさせないとな。」

提督の独り言に、違うだろ、と六名がツツコミの目線で見つめた。

提督は気づかない。

天然か。

「……ええと……まあ、気にしないでくれ。」

いや気にするだろ。

函館の面々の表情は一致していた。

「君たちはこれからこの部屋に入ってもらって、ケーキを食べ尽くして欲しいんだけど……大丈夫かな？」

ど……大丈夫かな？」

函館の六名は首肯した。

失神した天龍の傍の扉を開くと、濃密な甘い香りが漂ってくる。

意外と広い部屋の中央にある巨大なテーブルの上にある皿には何種類かのカップケーキがあり、切られたバウムクーヘンがてんこ盛りの状態になっていた。

他にもチーズケーキやチョコレートケーキやパイなどが皿の上に並んでおり、大食い

選手権の会場みたいにも見える。

見渡す限りのケーキ尽くし。

飛行場姫、港湾棲姫、北方棲姫、陸奥が力尽きた様子で突っ伏していた。

まさに死屍累々である。

彼女たちを部屋の隅に運び、六名の戦士たちがテーブルにつく。

「……ケーキのいいケーキ。」

ぼそりと加賀が表情を変えないままに言った。

ぷつと吹き出す吹雪。

あきれ返る長門。

「加賀……なにを言っているんだ？　それで提督、私たちはこのケーキを食べ尽くせばよいのだな？」

「ああ、是非とも頼むよ。君たちにはこのケーキを食べ尽くしてもらいたい。私は他の部屋の様子を見てくる。」

提督がチリリンと鈴を鳴らすと、どこからともなく完璧な服装の執事が現れた。

「彼女たちの世話を頼むよ、デーズ。」

「かしこまりました。」

提督が部屋を出ていった。

「皆様、お茶は如何でしょうか？」

「セイロンのハイグロウンティーが飲みたいわ。」

しれっとした顔で戦艦棲姫が言った。

「かしこまりました。部屋を一旦出てもよろしいでしょうか？」

「よろしくてよ。」

「少々お待ちくださいませ。」

数分後、デーズは紅茶のポットを持ってきて香りのよいお茶を全員に注いで回った。

ケーキを食べ始める面々。

「長門。」

「なんだ、島風。」

「他の七つの部屋にもケーキが溢れているのかな？」

「提督の口ぶりだとそう聞こえるな。」

「あの提督、けっこう天然よね。」

「あの鈍さは函館の提督に匹敵する。」

「さっきの榛名はどうしたのかしら？」

「何処かの部屋で、ケーキでも食べているんだろ。」

「駆逐艦組とか空母組とかに別れているのかしら？」

「提督がその内また来るだろう。デーズさん、今度は珈琲のゲイシャを持ってきてもらえるか？」

「かしこまりました。」

二時間後、ようやく食べ尽くした函館の六名。

すると、計ったかのように提督が現れた。

「すまない。他の部屋のケーキも食べ尽くして欲しい。」

あ、この人、キリがないタイプかもしれない。

ひきつった表情の面々に気づかない様子で彼は他の部屋へ彼女たちをいざなつた。

勿論、完璧執事付きである。

次の部屋では、大和と榛名がテーブルに突つ伏していた。

長門が提督に聞く。

「みんなこんな感じか？」

「みんなこんな感じだ。」

「ケーキはどうなつた？」

「残るはこの部屋のケーキだけだ。私も手伝うので、君たちも頑張つて欲しい。」

爽やかに笑つた。

「どうやら天然ジゴロ系のようにだ。」

既に函館の提督にときめいている彼女たちには有効な笑顔でないが、この艦娘たちや深海棲艦たちはイチコロだっただろう。

しかし、ケーキが多い。テーブルを埋め尽くさんばかりの勢いだ。

「さつき、他の部屋のケーキも運んできたんだ。」

やりきったような笑顔の提督。

「デーズさん、ハワイのコナ。」

「デーズさん、ケニアの一番いい紅茶。」

「デーズさん、八女の緑茶。」

提督を無視して、「函館の戦乙女たちはナイスミドル執事に次々声をかけた。

「あの、どうかしたのかな？」

「さつきと食べるんだ、提督。」

「ええと……。」

「ええと、では御座らん。兎に角食べるべし食べるべし。」

島風に言われ、きよとんとしながら提督はケーキ群の幾つかを皿に載せて食べ始める。

その仕草が意外と可愛らしく、計算していない部分が艦娘をキュンとさせるのだろう。

おそるべき男よ、と函館の面々は自分たちの提督を柵上げしてうんうん頷くのだった。

その二時間後。

「こんな時に援軍がいれば、どんなに心強いか。」

思わず弱音を吐く長門。

それほどに状況は悪い。

「よろしければ援軍をここへお連れいたしますが、如何でしょうか？」

おそらくこの鎮守府で出来る男随一のデーズが、彼女にそう提案した。

「出来るのか？」

「はい。少しばかりお時間をいただきますが、必ずお連れいたします。招待状を書いて

いただけましたら、確認の手間が省けるかと存じます。」

「では頼もう。」

長門直筆の招待状を持って、スーパー執事のデーズが部屋を出た。

「まだこんなにあるのね。」

「怯むな。もうじき援軍が来る。それまでの辛抱だ。」

「そうだな。後は……頼んだ。……すまない。」

「島風！ くつつ、吹雪、そちらの状況はどうだ！」

「まだもう少しなら大丈夫です。」

「加賀。お前は大丈夫……。加賀、お前は赤城と並んで暴食キヤラ染みてあちこちで描かれることが多いが、実際はそんなに食べる訳でもない。それなのによくここまで食べてくれた。改めて礼を言う。」

「や……。やり……。ました。」

「寝ている。そして起きたらまた食べる。」

「じよ……。上々ね……。」

「ネヴァダ。お前はどうか？」

「まだ大丈夫よ。武勲艦の名は伊達ではないわ。」

「頼もしいな。戦艦棲姫、お前は？」

「ふっ、全部食べてしまってもいいのでしょうか？」

「フラグを立てるな。だが、余裕があるようだなによりだ。」

ちなみに提督は既に大破して昏倒していた。

更に一時間後。

「ヤン艦隊はまだなの？」

「メタ発言はやめろ。」

「気の所為かしら。さつきより増えているように見えるわ。」

「奇遇だな。私にもそう見える。だが、錯覚だ。食べるぞ。」

吹雪がパンチラしたまま倒れている部屋で、腹がはち切れそうになりながらも戦艦たちは黙々とケーキを食べている。

憲兵たちにも助力を求めたが、『申し訳ないのですが、我々は食事を摂ることがあります。』と書かれた紙片を渡された。

現在、この鎮守府の実戦力は三名。

長門、ネヴァダ、戦艦棲姫。

いずれも中破に近い。

不味いぞ。

長門はケーキの脅威をひしひしと感じていた。

味はよいのだが、このままだと全滅する。

ケーキはドカンドカんと増えるのではなく、地味にひっそり増えてゆく。

気づいたら増えているという感じだ。

この世界のために。

長門は沈まん。

決意を固めたその時、ネヴァダと戦艦棲姫の崩れ落ちる音を聞いた。

ここまでか。

朦朧としながらもフォークは手放さない。

「お待たせいたしました。」

デーズの声が聞こえた。

青い服に金色の髪をなびかせた美しいモノが入室し、猛然とケーキ群を食べ始める。

ほっとしながら、長門は呟いた。

「勝ったな。」

「ええ、任せて。」

聞き覚えのある声に安堵しながら、彼女は意識とフォークを手放した。

長門が目覚めた時、ケーキはすべて平らげられていた。

欠片も残っていない。

パーフェクトだった。

執事のデーズは見当たらない。

「さすが、ナガトね。」

「あの量を食べ尽くすなんて、よくやるわ、貴女。」

「長門さん、感動しました!」

「レヴィアタンもびつくりですね。」

「具合は大丈夫か?」

ネヴァダ、戦艦棲姫、吹雪、加賀、島風が長門を取り囲んでいた。

提督も心配そうな顔をしている。

「私ではない。デーズが連れてきた援軍のお陰だ。彼はどこだ?」

「彼なら当然呼び出せないみたいだ。理由はわからないけどね。」

「……そうか。」

「援軍って誰のことかしら? あれだけ食べて動けるほどの子って思いつかないんだけど。」

「万能執事ならばきちんと説明してくれそうだと思ったのだが、そうもいかないよう
だ。」

翌早朝。

空は晴れ渡り、雲ひとつない。

鎮守府の港で提督がにこにこしていた。

彼の配下の艦娘たちはえらく不機嫌だ。

一触即発の気配さえある、危険な状況。

提督はどうやらハレム系主人公体質だ。

嬉しそうに、他所の艦娘を誉めちぎる。

それがなにを引き起こすか知らぬまま。

「ケーキを食べ尽くしてくれて、本当にありがとう。地球の危機は未然に防がれた。」

提督が天気に向けぬ晴れやかさで言う。

この顔に皆惚れるのだろうか、と函館の六名は思った。

彼の両腕にはそれぞれ陸奥と飛行場姫がしがみつき、港湾棲姫と北方棲姫が彼の背中にのしかかっている。

駆逐艦たちも提督にひつついており、彼は人徳だかフェロモンだかなにかを振りまいていた。

「それでこれからどうするんだい？ 帰れそうになる時まで鎮守府にいてくれていいんだよ。」

彼がそう言った刹那、おそろしい視線が函館の面々に注がれる。

般若もおそれるような表情だ。

平然と受け流しながら、長門は言った。

「いや、霧の発生を確認次第撤収する。」

「霧?。」

「そうだ。我々は霧の向こうから来たのだ。ならば、霧が発生すれば帰れる道理だ。」
「ふうん。じゃあ、霧が発生するまでここにいてくれればいい。」

途端、殺気だった視線を向ける彼の艦娘たち。

だが悲しいかな、その思惑は提督に届かない。

この鈍感力。

正に主役級。

我々も傍から見たらああなのか、と長門は自己嫌悪に陥った。

「霧の発生を確認しました。」

偵察機を飛ばしていた加賀がそう言うと、一気にその場の雰囲気は明るくなった。

陸奥の変貌が特に顕著で、妹艦の豹変に長門は内心苦笑いする。

それだけ深く提督を愛しているのだろう。

姉に当たり前のように殺気を向けるのは感心出来ないが。

「では帰るとしよう。全艦、この長門に続け! さらばだ! 抜錨!」

そして、函館鎮守府の艦娘たちは元の世界へと向かうのだった。

「ねえ、提督。」

「なんだ、陸奥。」

「あの子たちと仲がよかったみたいだけど、なにかした？ みんな魅力的だったものね。なにかしたんでしょ。」

「なにかつてなんだ。なにもしていないぞ。する訳ないだろう。」

「そうなの？ 天龍、本当のことを言いなさい。」

「へっ？ 俺？ あいつらは援軍だったんじゃないのか？ ケーキ食って帰っただけだろ。違うのか？」

「どうやら知らないようね。榛名。」

「榛名は大丈夫です！」

「貴女も知らないようね。じゃあ、デーズに聞こうかしら。」

「俺は常に潔白だ。なにもやましいことなどしてはいない。」

キリツと言い放つ提督。

赤くなる、天龍や榛名。

やっぱり天然ジゴロだわ、この人。

陸奥は内心ため息をついた。

そんな人間や人間ではないモノたちを、オオクチバスそのものを頭部とした憲兵たち

はじつと見つめていた。

その目が生暖かいように見えるのは、たぶん気の所為だろう。

やがて間宮・伊良湖・鳳翔のご飯ですよとの声に、皆が食堂へ向かう。

散々キスマークを付けられ、ボロボロにされた提督を置き去りにして。

いただきます、との声が青空に明るく響いた。

天知ろしめす、なべて世はこともなし。

LXXII：胡蝶の園（前編）

猟奇の街、岡山

刀が飛んで人を刺したり

矢が飛んで人を貫いたり

死体が夜歩いちゃったり

耽美的な変性男子が女装してアレしたり

単独殺人犯で世界的な記録の者がいたり

あまい酒を呑んだ女の子がアレされたり

湖畔の柳の下には蛍と美少年がいたり

畜生道に堕ちた鬼畜が外道三昧したり

アクロバットダンスする白と黒

ヌードモデル倶楽部の悪事露見

何人もの人がバタバタ死んだり

封建的且つあまりにも因習的な

大都会岡山の裏に於いて
怪異と狂気が蠢いている
愛憎と浪漫の渦巻く世界
鶴の鳴く夜はおそろしい

横須賀にある大本営。

その一室で私は辞令書を受け取った。

ようやく、鎮守府へ着任出来るのだ。

特に出世欲がある訳でなし、中間管理職になりたい訳でもないが、一国一城の主になることへの憧れが皆無でもない。

ここはありがたく受け取っておこう。

上官である元海上自衛隊の大將は、何故か微妙な顔をしていた。

問いかけてみる。

「どうかされましたか？」

「いや、君の赴任先には奇妙な噂があるのでね。少し気になっただけだよ。」

「そんなに大変な鎮守府なのですか？」

「そういう訳でもない筈だが、何故かここ数年提督の殉職率がやけに高い。」

「そんなに危険な鎮守府なのですか？」

「うーん、その鎮守府の防衛海域は近隣海域だけだし、着任している艦娘は駆逐艦の雷に夕雲、重巡洋艦の古鷹に軽空母の鳳翔だ。彼女たちに問題があるようには見えないのだがね。既に七人の提督を着任させたが、最初の提督を除き、着任して数カ月以内に全員死亡している。」

「死亡原因はなんでしようか？」

「心不全、心筋梗塞といった心因性のものばかりだ。薬物・毒物検査も嚴重に行つたが、反応はない。彼らが常用していた薬も一般的なものばかりだ。提督たちの日誌は艦娘たちに感謝する記述こそあるものの、否定的な記述は見当たらない。彼女たちの献身ぶりは驚嘆の域に達している。提督を失うことは彼女たちの損益になるのだから、害する利点はないな。提督たちの食べていた食事も調べてみたが、健康管理の行き届いた見事なものだった。実際、提督を失う度に悔恨する彼女たちを担当した明石や医師たちも、虚言はないと全員一致した証言をしている。正直、原因不明なのが現状だ。そこでだ。君の任務はその鎮守府への着任も勿論だが、提督たちの亡くなった原因や経過などを調査してもらいたいのだ。」

「私は探偵ではありません、閣下。」

「閣下はやめてくれ。わかっている。わかっているんだ。だが、取り掛かり先だけでも

欲しいのだ。もし、これから先、あの鎮守府のような場所が増え続けてしまえば我々は大変な事態に陥る。提督のいない鎮守府が出てくる事態など、あつてはならない。それは絶対に阻止せねばならぬ。だからこそ、君には期待しているのだ。」

「わかりました。私なりに微力を尽くしましょう。」

「頼んだぞ。」

「かしこまりました。」

風采のあがらない中年新人提督が退出した後、大将はため息をついた。

前任、前々任の提督にも同様の指示をしたのだが、二人とも程なく黄泉に旅立ってしまった。

おそらく、艦娘たちがなにか知っているに違いない。

妖精眼を持っていて提督になれる者は一種でも二種でも稀少な存在なのだから、これ以上不測の事態で失われては堪らない。

今後、大攻勢を行うつもりならば余計に提督の数は必要だ。

戦いは数だよ、兄貴。

今は力を蓄えねばならない。

貯金を端から崩そうとする者は許さん。

複数の鎮守府で次々に提督が死ぬ状況を想像し、大将は首を横に振った。

私は本部を出て、その足で辿り着いた簡易食堂でほかほかおにぎりと厚切りハムと生卵を頼んで食べた。

添えられたのは、おしんこと味噌汁だ。

うん、なかなか旨い。これだよ、これ。

こういうのがいいんだよ。

親戚の春代や典子へ提督になったことをメールで知らせたら、是非会いたいとのことだったので横浜で落ち合う。

駅に近いパーラーオタンチンパレオロガスで、少女たちにいちごクリームパフェを奢った。

あんなに小さかった彼女たちが、今では中学生か。

年月の経つのは早い。

兄様とかお兄さまと呼ばれるのは照れるが、歳の離れた妹だと思えばアリかもしれない。
い。

無邪気に抱きついてきたり、腕を絡めてきたりと可愛いものだ。

なにか話をしてくれと言われたので、カフカの話をした。

工事現場へ足を運ぶ際に、当時保険会社に勤めていたカフカは軍用ヘルメットを被っ

て視察した。

そして、それは作業員たちに習慣として根付くことになった。

だから、カフカは安全ヘルメットの父なんだよと言ったら、春代はいたく感心し、典子は私と揃いのヘルメットが欲しいと言いつつ出した。

春代が言った。

「太陽が沈まんとする時に、月が昇ろうとするのは素敵なことよ。ねえ、兄様。」

「あ、ああ。」

典子が言った。

「お兄さまと一緒になら、どこへでも行けるわ。」

「そ、そうかい。」

少女漫画の台詞だろうか？

再開を約して彼女たちと別れた。

岡山県笠岡市近海にある島、獄門島。

瀬戸内海の豊富な海産物が捕れる島。

その獄門島鎮守府へ、私は着任した。

笠岡諸島旅客船乗り場からは島への船が出ており、私はそれに乗って島へ渡ることに

した。

船内でたまたま知り合った助清さんは気のいい人で、私が新任の提督であることを知ると亡くなった提督たちの話をし出した。

「そしたら、あんたが鎮守府の提督さんになるんじゃないやな。あそこはでえれえべつぴんさんばかりおるけえ、うらやましいのお。男の本懐じゃが。」

「いえいえ、私は単なる彼女たちの守役ですよ。」

「それでも、並みの男じゃできやあせんんじゃないやけえ、もつと自信を持ちなせえ。」

「ありがとうございます。」

方言がかなりきついようだが、なんとかわからないでもない。

「せえでじゃな、ほれ、あそこに見えるんが鎮守府じゃ。」

それは城のような、お屋敷のような建物だった。

「城にもお屋敷にも見えませぬ。」

「昔のこの島は、村上水軍の拠点じゃったけえな。昔は江戸時代に潰されて明治にお屋敷が建てられてずつと鬼頭本家の所有になつたんじやが、深海棲艦が出てきてからは買い取られて鎮守府じゃ。県がずいぶん梃子入れしとつたのう。あそこは鉄底海峡開放戦では後方支援で、兵站を担当したらしいがな。その後次々に提督さんたちが亡くなってのう。島は蜂の巣をつついたような騒ぎになつたけえ、どげんもこげんもありや

せんかったわ。」

「ちよつと待つててください。最初の提督が亡くなったのは、鉄底海峡開放戦終了後なんですね。」

「そうじゃ。原因は心筋梗塞じゃつたが、心労じゃろう。気配りの出来るええ人じゃつたから、気を回し過ぎたんじゃ。みんな心配しとつたが、やつぱりという感じはあつたのう。その最初の提督さんがほんまにでえれえええ人で、艦娘も儂らもみんな慕つとつたもんじゃがのう。それで、次に来た二人目の提督はちいといけすかん奴じゃつたが、情のない奴ではなかつたと思ふんじゃわ。じゃけど、そいつが着任二カ月程でぼっくり亡くなつてしもうた。」

「二カ月、ですか?」

「そうじゃ。心不全でぼっくりじゃ。あん時は警察は来るわ、あんたらのとこの憲兵は来るわ、マスコミは来るわ、野次馬が来るわでんやわんやじゃつた。」

「それは大変でしたね。」

「この獄門島は鬼ヶ島伝説と鬼による呪いの島じゃゆうて、オカルトマニアや民間伝承研究家には有名じゃからのう。提督は鬼に呪い殺されたんじゃゆう奴もおつて、大変じゃつたわ。それにの。」

「それに?」

「三人目の提督さんが勇敢な豪傑型の人で。鬼小島弥太郎か桃太郎かゆうて、鬼退治を期待されたんじゃ。じゃがのう。」

「三人目もあえなく亡くなった、と。」

「ほんま、おえりやあせんかったわ。」

「どこか岩場か岸壁のような場所で亡くなっていたのですか？」

「布団の中じゃ。」

「はい？」

「ひっそりと眠るように亡くなっとった。心の臓が動かんようになっての。」

「豪腕届かず、ですか。」

「四人目はなんか今風のチャラチャラした奴でみんな嫌とったが、本家の早苗さんに手を出しそうになつたけえ、儂がぶちのめしちやつたわ。」

「殴つたんですか？」

「そうじゃ。おなごを泣かす奴は許さんけえのう。次の日、艦娘が来て謝ってきたけえ、びっくりしたわ。」

「それで？」

「その一週間後に、そいつが亡くなつたんじゃ。」

「……えっ？」

「儂、びつくりしたわ。取調室でカツ井はくれんのを知って、それもびつくりしたけどな。ドラマとは違うんじゃないのう。」

「逮捕はされたんですか？」

「そこまではいかんかったが、既に三人亡くなつとつたけえ、ずいぶん嚴重に絞られたわ。艦娘たちや早苗さんや駐在の清光さんや島の連中が証言してくれたけえ、無事釈放されたんじゃない。」

「危ないところでしたね。」

「危なかつたのう。なんで儂が連続殺人事件の犯人なんじゃ！ 殺人事件かどうかも

わかつたらんのに。結局、四人目の死因は心不全。殴つた後遺症でないことも証明されたけえ、よかつたわ。」

「それで、五人目は？」

「五人目の提督さんは熱心に調べものをしとつたのう。島の伝説も知りたいゆうたけ、儂らも手伝つたんじゃない。じゃがのう。」

「彼も亡くなつた、と。」

「二カ月もたんかつたのう。線の細い感じの年配の人じゃつたが。」

「六人目の提督はどうでした？」

「普通の感じの若い人じゃつたなあ。五人目の提督さんの調べものを引き継いで、仕事

の合間に熱心に調査しとつたわ。艦娘たちにも儂らにもやさしゆうて、これで呪いも大丈夫じゃろうと思つた矢先にぼつくりじゃ。」

「まるで、悪い冗談ですね。」

「ホンマじゃ。で、その葬式に来た提督さんが七人目で、六人目の提督さんの友達じゃつたらしい。かなり気合が入っていたし、若い人じゃつたからみんな期待しとつた。……しとつたんじゃ。」

「それで、どうになりました？」

「先週亡くなつたわ。布団の中だな。」

はて面妖な。

さりとて、こちらも手をこまねいて死を待つ訳にもいかぬ。

門（かんぬき）のかかったままの大手門を、ひのきの棒で叩き壊せと命じられたような気分だ。

船着き場が近づいてきた。

セーラー服を着た少女が見える。

彼女は駆逐艦の艦娘だな。

「提督さん。」

「はい。」

「儂は嫁や娘や親戚と一緒に、『黒猫亭』ゆう喫茶店や『蜃気楼』ゆう床屋もやつとる。なにかあつたら、ここへけえ。」

「ご配慮をいただきまして、ありがとうございます。」

「かてえのう。あんたは死んだらおえりやあせんぞ。」

「なるべく努力しますよ。」

「鬼頭本家の早苗さんも心配しとつた。みんな、この連鎖を断ち切つて欲しいんじや。」

それは、鎮守府の艦娘たちも同じじや。」

「微力を尽くします。」

「おお、そうじや、提督さん。この島にはもうひとつ異名があるんじや。」

「それはなんですか？」

「悪霊島ゆうんじや。」

LXXIII：胡蝶の園（中編Ⅰ）

七人の男が死んだのさ
だらしない男たち
頭はごろりと布団の上
手足をきちんと揃えて
散らかしてはいないし
出しっぱなしでもない

岡山県警の磯川警部が獄門島鎮守府を訪れたのは、私が着任して三日後のことだつた。

鎮守府の艦娘たちは新しい提督を失ったばかりで、今もまだ心の傷が癒えていないように見受けられる。

戦場で荒ぶればまだ気持ちの整理がつけやすいかとも思ったが、彼女たちに言わせる
と日常的な仕事をしていても気分が紛れてよいそうさ。

私に無防備な姿を晒す艦娘たち。

それは信頼する証かもしれない。

彼女たちは私へ至れり尽くせりの親切さを發揮し、これでは文句のつけようもあるまいとさえ思えた。

提督たちは何故死んだのだろうか？

先輩筋に当たる呉第六鎮守府の提督から引き継ぎ業務を受けながら、私は思考する。

先輩は私をかなり心配している。

しきりに身辺に気をつけろと言ってくれた。

おそらく、皆そのように言われたのだろう。

艦娘たちをよく知るまでは、心を許すなども苦しそうに助言してくれた。

一心同体であるべき姿を否定してまで、ここを調査しなくてはならない。

艦娘とは一体なんなのだろう？

彼の連れてきた鳳翔と、ここの鳳翔が同姿艦に思えないほど違っていて驚いた。

呉の鳳翔の方が、基本に近いのではないか？

いや、私が艦娘の理解に乏しいだけなのか？

端的に言うと、ここの鳳翔の方が色っぽい。

時折、表情が蠱惑的になる。

それは、艦娘の特徴なのか？
個体毎に激しく異なるのか？

彼女たちの視線に困惑することさえある。

何故、来たばかりの私にその顔を向ける？

これはなんだ？

これが普通なのか？

こんなにすぐ切り替えられるものなのか？

わからない。

私にはわからない。

無視されたり威嚇されたり拒否されたりするよりは、遥かにマシだとはわかっている

つもりだ。

しかし、納得はいかない。

何故だ？

磯川警部は落ち着いた感じの人物で、四〇代くらいに見えた。

私と同世代の年齢に見える。

お話がしたい、とのことだったので、鎮守府を出て少し離れた場所で会話をすること

にした。

雑談をしながら歩くと、石造りの鳥居が見える。

鳥居をくぐり、無人の神社の境内で警部はこれまでの経緯と捜査状況を話し始めた。船の中で聞いた話と概ね一致する。

ここに来てから読み始めた、提督たちの遺品である資料とも話是一緒のようである。

「私はね、提督さん。この事件をきちんと解決したいんですわ。」

「事件、でしょうか、これは。」

「そうじゃなあ。艦娘たちが一番怪しいゆうたら怪しいんじやけど、証拠が一切ないんですわ。それに、殺す必然性がない。」

「疑われているのですか？」

「悲しいことに、身内を疑うのが警察の基本ですけえのう。身内や知り合いに殺されるもんは意外に多いんじや、提督さん。大抵は、日常的に会話しとる相手が刃物を振りかざしたり毒を飲ませたり鈍器でわやしたりするんじや。異常ゆうんは誰の心の中にもあるもんじやけえ、油断したらおえん。しかし、この事件はなにも出てこんけえ、困つとるんですわ。」

「それで、関係者を調べてみてどうでしたか？」

「全員今のとこシロじやなあ。刺殺でも絞殺でも撲殺でも薬殺でもないし、鬼ノ爪で殺つたと言われた方がまだ納得出来る程ですわ。よそもんが滞在しとつたらしよつび

くんじゃが、そんな奴もおらん。わからん尽くしじゃ。」

「難しいですね。」

「みんなとても協力的じゃったけえ、余計に解決したいんじゃがのう。手がかりがないんじゃわ。」

「アリバイの崩れた人は誰もいないんですか？」

「鎮守府は基本的に五人だけの密室じゃけえ、密室殺人事件じゃゆうて探偵小説好きの若手連中が頑張つとったが、おえんかつたんですわ。指紋の線も消えたしのう。」

「本職の方々がお手上げですか。」

「なにか進展や新展開がありましたら、県警まですぐにご連絡ください。こないだの提督さんが手がかりを掴んだようじゃったけえ、期待しとったんですが亡くなられてこちらもガツカリしとるところなんですわ。」

「わかりました。なにかありましたら、ご一報入れます。」

案内役を買って出た雷と共に島を歩く。

寂しさを紛らわせるかのように、彼女は多弁だった。

昼になったので、助清さんの黒猫亭でお好み焼きと牡蛎フライを頼んだ。

尾道紅茶があるというので、それも頼む。

雷によると、助清さんはナポリタンも上手らしい。

店の外には百日紅の木があつて、そこは小粋なオープンカフェになっている。意外とお洒落だ。

店内の水槽では山椒魚がのんびりして、「夢子ちゃん、夢子ちゃん。」と助清さんから呼ばれていた。

「司令官たちは、みんなおいしいおいしいって食べたの。島の人ともワイワイ話をしながら食べたりの。」

涙ぐむ雷の頭を撫でてやる。

少しは落ち着いたみたいだ。

隣の雷をあやししながら、店主ご自慢のそば入りお好み焼きにカープソースをかける。オタフクソースではないんですね、と言ったら助清さんと雷が怒りだした。

何故だ？

ワカメの味噌汁もダシが効いていて旨い。

牡蛎フライに自家製タルタルソースを浸けながら頬張る。

旨い。

ふんわりサクサクの衣に汁たっぷりので元産牡蛎の旨み。

瀬戸の旨さを堪能した。

紅茶を飲む。

いい香りだ。

助清さんの娘さんが作った素朴な味わいのマドレーヌをつまみながら、店主や島の人たちと雑談する。

自然、それは提督たちとの思い出話や寸評に傾いていった。

一人だけ罵倒されていたが、後は概ね好感を持たれていたようでホツとする。

軒先の南部風鈴がちりん、と鳴った。

右腕に雷を絡ませながら鎮守府へ帰ると、鳳翔がお冠だった。

お昼ご飯をここで食べなかつたからですよ、と古鷹が苦笑いしつつ言った。

すみません、と鳳翔に謝る。

ダメよ、司令官、もつと愛情を注いであげなくちや、と夕雲が私の左腕に掴まった。

では私は後ろですね、と古鷹が背中に乗っかってきた。

もう、と怒りながら鳳翔が抱きついてくる。

みんな落ち着いてきたようでありだ。

その夜の献立は、お好み焼きに味噌汁に牡蛎フライだった。

とどめに紅茶とマドレーヌ。

い
や
は
や。

LXXIV：胡蝶の園（中編Ⅱ）

冷たい旋律

暗闇の戦慄

瀬戸の光の

きらめく島

白壁の家が

点々として

島の周囲を

覆っている

島へ

島へ

島へ行つた

提督たちは

嗚呼

嗚呼

還らざる者

黄泉行く者

むざんやな

お城の中の

きりぎりす

もうひとつの村上水軍の砦跡が獄門島にある。

摺鉢山のでっぺんにあるのがそれで、源平合戦の頃に建てられたそうだ。

中世建築物の遺構として全国的に貴重な存在であり、あちこち崩れた石垣が昔の光今
いずこと感じさせる。

鳳翔手製の弁当を食べながら、私は調査書を読み漁った。

地元産の焼き海苔を巻いた握り飯。

みつしりとして味のよい玉子焼き。

しつかりと漬け込まれたお漬け物。

旨い。

鞆の浦サイダーを飲んで、辺りを見回す。

瀬戸の海は穏やかで、何人もの提督が失われた場所として違和感を覚えさせること限りない。

本職の捜査員たちもこの調査書は相当読み込んだらしい。

犯人の存在は最初、疑われていなかった。

艦娘たちによる愁嘆場は島民たちの共感を呼び起こし、同情的だったそう。

私も現場にいたら、そう思うだろう。

苛烈極まる戦だった鉄底海峡解放戦。

最初の提督はその犠牲者ともいえる。

問題は二人目と彼以降の提督たちだ。

持病の重い者は提督になどなれない。

死亡した提督全員に持病はなかった。

ならば。

何故。

何故、彼らは死んだ？

ガサリ、と物音がした。

油断なく見つめてみると、眼鏡をかけた軽薄且つ狡猾そうな男がにやつきながら近づいてくる。

マスコミの人間か。

直感的にそう思った。

「おや、面白そうなことをされていますね。仲間に入れてくださいよ。」

長谷山と名乗った男はフリーの記者だという。

尾行されたか。

情報交換しませんか、と狡そうな表情で話しかけてくる。

交換出来るような情報をお持ちのようには見えませんね。

そう、返した。

特ダネとかスクープとかを狙っているのだろうが、こんな奴に情報提供したらどんな

話を捏造するかわかったものではない。

極論を述べそうな雰囲気さえある。

彼は私の手をぎらつく眼差しで見つめていた。

と、そこへ古鷹がやってきた。

「さあ、帰りましょう、提督。みんなが心配しています。」

長谷山を無視し、彼女は私の腕を取る。

あ、あの、ちよつと待つてください、損はさせませんよ！　と男が喚いた。我々は下山する。

「提督、鎮守府から外出する際には艦娘と一緒にいてください。」

しがみつくように腕を絡めてくる古鷹。

「守つてみせます。今度こそ。」

彼女は決意を秘めた表情でそう言った。

夕食の時間。

ここ一週間ほどで、彼女たちは私に慣れてきたように思える。

鯛とまながつおの刺身。

スズキの塩焼きに鯛の煮付け。

心遣いが身に沁み込んでゆく。

酒は広島島の雨後の月だ。

夕食後、四名からなにか話をして欲しいと言われたので、カフカの話をする事にした。

カフカは遺言で、死後原稿を焼却してくれと頼んだ。

親友は遺言を守らず遺稿を出版したために周囲から咎められ、恋人は遺言を守つて遺

稿を焼いたために周囲から咎められた。

「司令官はどつちを選ぶの？」

夕雲が色気のある目付きでそう言った。

「そうだな、私なら守つて焼く方かな。」

四名が真剣な顔で頷いた。

鎮守府に鬼頭早苗さんが訪れたので、応接室で話をした。

彼女は私のことを心配しているようで、しきりに気を付けてくださいねと念押しされた。

「なんでもお手伝いしますから、お気軽に仰ってくださいね。」

目のパツチリした理知的美人からそう言われて、ドギマギする。

綺麗な人だったなあ、と彼女を見送つて振り返ると艦娘たちが貼り付けたような笑顔で私を見つめていた。

どうしたのだろう？

どうかしたのかい？

そう尋ねたら、別に、という感じで返された。

その後、彼女たちがツンケンしていたのでほとほと困った。

何故だ？

春代や典子に綺麗な人に会えたよとメールを送ったら、何故か返信が来なかった。

あれ？

学校や勉強で忙しいのかな？

調査書を読むが、提督たちが怪しげな人物と接触した事実は無いらしい。

仕掛け付きの小包も受け取っていないし、妙な手紙も配達されていない。

外部からの刺客は除外していいだろう。

たぶん。

人間程度なら、艦娘に簡単に無力化されるしな。

もし艦娘が彼女たち以上の連中が来たのなら痕跡がなにかしらあるだろうが、そういうものも無い。

ロンドンの名探偵を気取って彼のように調べてみたが、なにも見つからない。

自殺したようには見えないし、然りとて他殺には見えない。

自然死としては不自然な感じもあるし、密室になっているし。

わからん。

私にはちっともわからん。

うんうん唸っていたら、雷がやって来て膝の上に座った。

甘えん坊だな。

翌々日に驚くべき報道がなされることを知っていたら、私はこのように暢気なことなど考えなかつただろう。

人生、なにが起こるか分からないものだ。

LXXV：胡蝶の園（後編）

通りやんせ

通りやんせ

ここは何処の

鎮守府じゃ

獄門島の鎮守府じゃ

ちよつと通して

くだしやんせ

ご用のない者

通しやせぬ

提督七人

死の原因

探ってみたいと

思います

行きはよいよい

帰りはこわい

こわいながらも

通りやんせ

通りやんせ

翌日の夜、島民たちと交流会を開くことになった。

夜は居酒屋になる黒猫亭。

今夜のお通しはアスパラガスとベーコンの炒めもの。

稲荷寿司とポタージユまで出された。

仁礼酒造の葡萄酒を勧められて呑む。

岡山の山奥で醸し出された逸品とか。

艦娘たちと共に島民たちと交流する。

先祖が子爵だという男がフルートを吹く。

助清さんの奥さんが全身タイツ姿で手品を行った。

濃いお茶を飲みながら、皆と歓談する。

助清さんの娘さんたちも余興を始めた。

「ヨキでーす！」

「コトでーす！」

「キクでーす！」

「三波春夫で御座います。」

酔った助清さんがドーンとやったら、三姉妹からどつかれていた。

「さあ、どんどん食べなさい。」

「食べて食べて、さあ食べて。」

新鮮な海の幸を堪能出来るのはよいのだが、島の人たちがひっきりなしにこれが旨いあれが旨いと料理を持ってくるのでお腹がパンパンで御座る。

鬼ノ城（きのじょう）という岡山県の酒も旨い。

フルートに加え、今度は琴の音が聞こえてきた。

岡山県は養鶏が盛んだそうで、生卵かけご飯が大変旨い。

鶏の唐揚げも旨い。

島のお婆ちゃんたちもノリノリだ。

「松でーす！」

「竹でーす！」

「梅でーすー！」

「三波春夫で御座います。」

助清さんが懲りずに出て行って、三老女からやられていた。

何故だかいきなり歌い出す彼に、呆れたように皆が言った。

「キーが違うが、仕方ない。」

明け方、下着姿の古鷹が私の私室に飛び込んだのでとても驚いた。

「提督、大変です！ 一昨日会ったマスコミの人が逮捕されました！」

えっ？

ええっ？

ええーっ!?

瀬戸内海放送で臨時速報を見た。

岡山県警によると、逮捕された長谷山が複数の共犯者と共に提督の暗殺に関わったと
している。

彼はこれから呉鎮守府に護送され、厳しい詮議が待ち受けているのだ。

なんだこれ？

テレビせとうちや山陽テレビや西日本放送やOHKでも似たような報道をしていた。

あまりの展開に首をかしげていたら、助清さんから連絡が来た。これから島民集会を行うらしい。

私にも参加要請が行われた。

集会の場所は黒猫亭近くの公民館。

山盛りのサンドウィッチと野菜サラダとフィンガーソーセージや蕎麦饅頭を皆でわしわし食べながら話をする。

「よし！ わかった！」

助清さんが言った。

えっ？

わかったのか!?

「犯人は呪術師たちだ。」

へっ？

「大戦末期に、メリケンのマツカーサーが呪い殺されただろう。あれと同じだ。呪いだから、証拠が残らない。一石二鳥だ。」

いやあ、それはないんじゃないかなあ。

だが、皆は何故かその推論に同調する。

「あの長谷山が主犯か？」

「あんなへニヤチンが主犯の訳ないだろ。従犯さ。」

「重犯？ あいつそんなに悪い奴なの？」

「たぶんそれ、勘違いしていると思う。」

「では、主犯は、悪い奴は誰じゃあ思うんじゃ、助清。」

「日本を蹴落とそうとする奴、日本をよく思っていない奴じゃ。」

「おお、説得力が増しようるわ。」

ええ？

その論調だと、誰でも犯人になりかねないような……。

午後になって、続報がきた。

長谷山某が情報提供者の可能性は高く、彼の情報に従って犯人グループが呪殺を行ったのではないかとトンデモ理論を述べている自称識者の意見が報道された。

実際、過激な発言が見られたり不遜な態度が見られたりする新興宗教の本拠に憲兵隊が急行したり、海外とのつながりが怪しげな感じの会社への東京地検特捜部の査察が突然行われたりした。

また、一部の報道機関のお偉いさんたちに事情聴取が行われたそうだ。

あくまでも任意らしいが。

この状況を利用して、叩けそうな連中はとことん叩くつもりに見える。艦娘や深海棲艦だって、オカルト的な存在と言えなくもない存在だし。オカルトが現実を浸食するなら、呪術であろうと可能ではなからうか。そんな感じで任意同行させたり、別件逮捕したりしているようである。

……これ、大丈夫なのかな？

広島檸檬のレモネードを飲みながら、私は首をひねった。

鎮守府へ戻り、艦娘たちと話をする。

彼女たちも微妙な表情をしていた。

真実はどこにあるのだろうか？

昼食は生卵かけご飯に漬物に味噌汁。

旨い。

昼食後、カフカの話を知りたいと言われ、話した。

カフカはある日、公園で少女と出会った。

少女は、お気に入りの人形をなくしたと言って泣いていた。

カフカは人形が旅に出ていることを彼女に告げ、人形が旅先から送ってくる手紙を書

いて毎日少女に渡した。

旅に出た人形は沢山の冒険の末、遠くの国で幸せな結婚をした。

そう締めくくられた手紙を読み、少女は二度と人形に会えないことを受け入れた。

その夜、函館鎮守府の提督から電話がきた。

同期である彼は、私のことを心配して掛けてくれたのだ。

「腹上死、つて言葉があるよな。」

ひとしきり今までの経緯を適宜端折りながら話すと、同世代で童貞仲間の友人はそう言った。

「あるけど、それがどうかしたか？」

「いや、まあその、ひとつの推論なんだがな。」

「なんだよ、勿体ぶつて。さっさと見えよ。」

「その、提督たち全員腹上死だったんじゃないかって思ったんだ。」

「そんな馬鹿な話は無いだろう。」

「あ、ああ、だからただの与汰話になるんだけど、全員抵抗した後がなくてポツクリ亡くなっていくんだしたら、その可能性がなきにしもあらずかなと思つた次第だ。」

「全員が？ お前は、うちの艦娘たちがそんなに淫乱だと言いたいのか!？」

「怒るなよ。あくまで話を聞いた上での推論だ。艦娘たちとまだ、その、夜明けを見ていないのか？」

「当たり前だ！ 平気で混浴するお前と一緒にするな！」

「落ち着けよ。四名とも全員と関わっているとは限らないだろ。」

「彼女たちを侮辱するなら許さんぞ！」

「まあ、聞きなよ。全員だったかもしれないし、全員ではないかもしれない。大本営の青葉を呼んでみてはどうかな？ 或いは他所の同姿艦でもいい。あの重巡洋艦ならなにか掴んでいてもおかしくない。」

「……考えておく。」

「冷静になることが大事だ。感情論じゃ、なにも解決しないぞ。こちらから大本営の青葉に連絡しておくよ。」

「ああ、頼む。」

「悪かったな。」

「いや、こちらも怒鳴って悪かった。」

「死ぬなよ。」

「死ななよ。」

私は釈然としないながらも、函館からの電話を切る。

ふと、複数の足音が聞こえてきた。

どんどん近づいてくる。

何故だかゾクリとした。

そして。

扉を叩く小さな音が私の耳に響いてきた。

LXXVI：染め直し

ようやく綺麗になった執務室での書類作業は多忙を極めた。

名取や羽黒や潮たちの力を借りて、未だペンキのにおいがうつすら残る部屋で書類と格闘する。

何故あいつは……。

いや、考えにひたっている場合ではない。

私はこの鎮守府を建て直すために派遣されたのだから。

おどおどと私を窺う目付きの彼女たち。

何故だかどぎまぎする。

いかん。

これではいかん。

函館の同期から融通してもらった間宮羊羹を引き出しから出して、彼女たちに手渡した。

さあ、これをみんなでお食べ。

丁度時間もいい。

そう思つて手渡したのだが、手の甲を撫でられて驚く。

不可思議な笑みを浮かべ、彼女たちは退室していった。

夕食を食べ終わつて一人執務室で奮闘した後、机を整理していたら前任の日記を見つけた。

三段目の引き出しが二重底になっていたのだ。

引き継ぎ業務も目処が立つてきたし、あいつがなにを思つていたのか読んでみるか。

『新任提督としてこの鎮守府に着任した。艦娘たちはおどおどしていたり反抗的だったりするが、なに、その内俺に馴れてくるだろう。頑張るぜ!』

『艦娘たちがちつとも親しくしてくれない。少し悲しい。』

『間宮羊羹は偉い。俺も間宮羊羹になりたい。』

『艦娘たちは慣れないながらも哨戒任務や護衛任務をなんとかこなしてくれているが、俺にはなかなか馴れてくれない。いや、ここで諦めてはいけない。』

『なんでびくびくするのかなあ。俺つてそんなにこわいのかね? 罵倒されたり否定されたりするのは不条理感が高い。いや、努力は必ず報われる。そうだ。そうに違いな

い。』

『彼女たちの態度に、段々腹が立つてくる。いや、ここは我慢だ。ここが我慢のしどころだ。』

『もたもたした姿にいらいらして、ついつい怒鳴った。あいつらが悪いんだ。俺は悪くない。』

『簡単に大破して撤退してんじゃねえよ。努力がパーじゃないか。』

『何故、そんな目で俺を見る。余計にいらいらする。』

『何故、同じ失敗を繰り返す？ いい加減にしろよ。』

『謝ればいいつてもんじやない。向上心がないんじやないのか？ 俺の努力を見習えよ。』

『最近、怒鳴った時にびくつとする彼女たちに嗜虐心が刺激される。なーに、どうせこいつらは作り物だ。気にしない、気にしない。今までの自分は甘やかし過ぎたし媚び過ぎた。もっと厳しくいこう。』

『ここ数日、妙な視線をしばしば感じる。振り返っても誰もいないのだが、ねつとりとした気配を感じる。気のせい、気のせい。気のせいに決まっている。』

『曙、霞、満潮からまた三連撃を喰らう。あいつらは近々転属させよう。もう我慢出来ない。俺のためだなんて、そんな訳ないだろ。なんで泣くんだよ。こつちが泣きたいくら

いなのに。』

『漣が妙なことを言っていた。常に似合わず真面目な顔をして言うものだから、大いに驚く。明日は雨かな?』

『憲兵からそれとなく警告というかなんというか、釘を刺される。意味がわからん。それより、支援作戦の任務をこなさなければならぬ。明日は艦娘九名全員に通達を出さないとな。』

『大破は出したが、轟沈は出さなかつた。当たり前だが、その当たり前が意外と難しい。俺がいると嫌がるだろうから、作戦終了の打ち上げはあいつらだけにさせた。参加してもつまらんしな。函館の同期が気を効かせて、間宮羊羹や焼菓子の詰め合わせを送ってくれた。ありがたいことだ。戦意高揚策として、あいつらに全部やった。もので済むなら、それがいい。戦果は出したのだから、許してやる。俺は寛容な男だからな。明日からはびしびしやるぞ。』

『少し雰囲気よくなつた。これだよ、これ。こういうのがいいんだよ。』

『錬度を上げて、これまで以上の戦果を挙げさせないとな。』

『最近、冷たいと言われた。一体なんのことだ?』

『函館から大淀と鳳翔が派遣された。大淀からは書類作業の効率化や時間短縮化のコツを教わつた。とても助かる。鳳翔は艦娘たちに、任務のこなし方や料理のやり方などを

教えていた。二名が帰った後、しょっぱかったり生焼けだったり焦げていたりするクッキーを食べさせられる。試作品らしいが、一種の拷問だろうか？ 正直に不味いと言ったら、なんだかとても重い空気になった。今後の努力に期待すると言つて誤魔化す。ご機嫌とりは難しい。人形の癖に、何故笑う？ 何故泣く？ なにを考えているのか、さっぱりわからない。あいつらがこの頃少しこわい。』

『函館と演習。奴の艦娘にこてんぱんにされる。うちの艦娘たちが奴にまわりついて、向こうの艦娘たちがムツとしていた。注意すると、白い目で見られた。何故だ。何故、奴のような男がモテるんだ？ 解せぬ。艦娘に魅力は感じないから、別にかまわないのだが。それでも不条理は感じる。俺の方が転属したいくらいだ。大本営に打診しておこうかな？ 事務屋と呼ばれた方が楽に思える。奴と雑談。あいつらが頻繁に茶を持つてくる。俺は断つたが奴は全部飲んでいた。気を使いすぎだと言つたら、だつて悪いじゃないかと爽やかに言つていた。イケメンでもない癖に。この女たらしめ。』

『外泊許可を上からもらつて、少しばかり破目を外す。帰ってきたら、またもや白い目で見られた。もう少し理解が欲しい。俺だつて、普段いろいろ我慢しているんだ。これくらいいいじゃないか。』

『何故あんなことを言われるのか、理解に苦しむ。近々奴に相談してみるか。』

日記はそこで終了していた。

一応、大本營に提出しておくか。

転属した憲兵と函館の提督へ早めに連絡を取ろう。なにか手掛かりが掴めるかもしれない。

ふと、扉に目をやると、細い隙間が空いていた。

あれ？

おかしいな。

閉めておいた筈なのに。

隙間風が冷たい。

さつさと風呂に入るか。

遠くで足音が聞こえる。

入浴帰りなのだろうか？

入浴時間を決めていたから、誰か急いで入ったのかもしれない。

さて、明日も早い。

とつと入浴して、明日に備えよう。

そう考えて部屋の外に出たら、入浴用の品を二名分手にした娘が立っていた。

LXXVII：海に近い花芙華亭

海に近い花芙華亭。

寂れた俺の城塞だ。

元は定食屋だった店を少しばかりいじり、俺好みのバーにした。

こんな場所の店に来る奴は酔狂なのか、或いはおおうつけ者だ。

先日まではそう思っていた。

先月からちよくちよくやって来る娘たちはいずれも規格外な感じで、なんだかとても面白い連中だ。

支払いは古い銀貨や金貨。

古銭商に持ってゆくと、その爺様がわりかしい値段で引き取ってくれる。

このご時世でも古い金属貨幣を集めている奴がいるのは驚きだが、その反面ありがたくもある。

娘たちが他に持ってくるものは、古い洋酒や南洋の果実や新鮮な海の幸だ。

長い黒髪でパンツルックの娘はルー姉と呼ばれ、黒いパーカを羽織っている娘はレッチャんと呼ばれている。

また、黒いフリフリゴシックロリータなドレスを着た娘はリトさんと彼女たちから呼ばれている。

夜の二二時を過ぎた頃に娘たちましたフラリと入店し、飯や酒を喰らって陽気に笑いこけ、閉店時間の夜中に帰る。

愉快的な連中だ。

たまに艦娘とやらが店にやってくる。

そーいや、近くに鎮守府があるよな。

辛気くさい顔だったり。

しかめっ面であったり。

時に愚痴りまくったり。

絡み酒で説教されたり。

店の中で脱ぎ出したり。

どうも印象がよくない。

それまで来てくれていたおっさんたちは絡まれたり説教されたりで腹を立てたのか、

ピタリと来なくなったのも嬉しくない誤算だった。

さほど流行っていない店が、こいつらの所為でますます流行らなくなつてゆくのだつた。

そいつらがようやくぞろぞろ帰つた後、愉快な常連娘たちがやつて来る。いつの間にやら、俺は三人娘が来るのを楽しみにするようになっていた。みんな可愛いし、話をしていて嬉しくなるし、一緒にいると安心出来る。なんだか彼女たちは擬似的な恋人みたいな……いや、なに言つてんだ俺。俺みたいなおっさんを好きになつてくれることなんて無い無い無い。時々抱きつかれたりするけど、誤解してはなんぬえ。

無防備におっさんに抱きついたらいけないと言つたら、嫌いな奴に抱きつくことなんか無いといった趣旨の発言を受けた。

嬉しいぬえ。

痺れるぬえ。

その晩は料理を奮発した。

三人から頼つぺたにチューされて、俺はご満悦だった。

もうウヒョーって感じだった。

あいつら、ホントに俺が好きなのかな？

ホントに俺のことが好きならいいなあ。

そんなこんな、ある日。

開店前の薄暗い店の中。

売り上げに悩んでいた。

すると。

艦娘の指揮官が店まで来た。

お偉いさんって感じの男だ。

出来る男オーラ満載だなや。

モテてんだらうって雰囲気。

リア充という表現が似合う。

エリート様が、場末の店までやって来た。

長い黒髪の艦娘を引き連れ、やって来た。

ご苦労様なこつて。

事務的に平坦な口調で艦娘たちのやったことを詫びた後、そいつは羊羹のみつしり入った菓子折りを渡してきた。

こちらは金さえ払ってくれるなら、よほどの奴でない限り受け入れる旨を話した。

酔客なんて酷いのがざらにいるしな。

あんたは気にしなくていいんだ、とぎつくばらん口調で言った。

その時、指揮官はパチクリと目を瞬かせ、人らしい表情を見せた。

なんだ、笑えるんじゃないか。

最初っからその面だったらよかつたのに。

最後は談笑して別れた。

護衛の艦娘も、その頃には微笑んでいた。

わざわざ業務の間を縫って来てくれたのだらうと思ひ直し、別れ際に古いウイスキーを進呈した。

バランタインの年代物だ。

まあ、常連娘が持ち込んだモノであるが。

俺はウイスキーを呑まないから丁度いい。

この男にだったら、呑ませる価値があるだろう。

指揮官は随分恐縮していたが、今後もご臍原にして欲しいとの思いがあつたし、死蔵するのも勿体ないと考えたからだ。

来なくなられたら、逆に困るんだよ。

そう言ったら、何故か二人とも笑った。

笑い事じゃないんだぜ、と言ったらますます笑われた。
解せぬ。

……まっ、いつか。

喜んでこの店を利用させていただくよ、と男はそう言つて歸つた。

その夜、艦娘たちは謙虚に酒や肴を口にして今までのことを詫びながら歸つた。
いいつてことよ、と笑つて見送つた。

いつもの娘たちが来たので、貰つた羊羹を全部渡すと彼女たちは大興奮した。
懐かしいものを見るような目で、愛おしそうに羊羹の詰まつた箱を撫で回す。

甘いものは食わないから丁度よかつた。

なんだ、そんなに羊羹が好きなのかよ。

何度も何度もいいのか、と訊ねられた。

そんなに稀少な羊羹なのかい、これは。

お前たちが喜んでくれるなら、それが俺にとって一番嬉しいことだ。

お前たちの笑顔を見てみると、なんだか心がポカポカしてくるんだ。

そう言うと、三人とも赤い顔になった。

おっ、俺に惚れたのか、とからかつた。

看板になつても娘たちは大盛り上がりしており、明日は急遽休みにしてどんちゃん騒

ぎでもするかと店を閉めた後、彼女たちの酒宴に加わった。

ばか騒ぎになった。

脱ぎ出す彼女たち。

俺も負けじと脱ぐ。

「ナカナカやるネ、テイトク！」

「そうでナクちゃ、テイトク！」

「アタシもヌグわ、テイトク！」

おうおう、俺だつてやるときはやるんだからな！

「「ケツコンしよう、テイトク！」」

「おう、お前らみんな、俺の嫁になれ！」

「「「ウハハハハハハハハ！」」」

いやー、まー、若気の至りというかなんとか。

なんだか予想の遙か斜め上の展開が発生していた。

三人がすぐ近くで幸せそうに眠っている。

どうしよう？

……あれ？

彼女たちの肌色が昨日とは違う気がする。

陽の光の下で見ているからかもしれない。

病的白さじゃなくなつたみたいに見える。

取り敢えず、今は朝飯でも作るか。

それから、今後のことを考えよう。

俺は彼女たちへの愛おしさが高まるのを感じながら、フライパンをコンロにかけた。

LXXVIII：研究員

ここからの話はすべてオフレコでお願いしますよ、先生。

何故、ケツコンカツコカリなんてシステムを組んだのか、その理由から話しましょうか。

これはね、呪いなんですよ、先生。

あの人間モドキな人形を従える、人形遣いどもを鎮守府に縛りつける鎖なんですよ。

おや、怒っていらつしやる？

おやおや、おやさしいことで。

私だったら、幾ら資質があろうと提督なんざ御免こうむりますがねえ。

だって、考えてみてもくださいよ。

人間でもないのに、人間の真似をして泣いたり笑ったりするんですよ、あいつらはこわいこわい。

劍呑劍呑。

そのこわい人間モドキを、鎮守府いや提督に縛りつける技術を我々は開発しました。それが、この指輪です。

限界錬度突破機能はあくまでも偶然の副産物ですな。

まあ、こちらとしても都合がよかったので結果オーライですな。

え？

ええ、これは人間が作ったモノではありません。

現在の人間の技術では開発不能ですな、これは。

はい？

心のつながり、ですか？

そんなことが本当に出来るのなら、それはとてもおそろしいことですよ、先生。感情が逐一相手に伝わるなんて、それは大変こわいことだと思いますよ、先生。

確かに、歯車がかつちり噛み合っている時は問題ないでしょう。

しかし、少しでも行き違いがあつたら？

不測の事態で指輪を装備したどちらかが死んでしまったら？

いや、艦娘は『死にません』な。

まあ、兎に角、どちらかがこの世からいなくなつたらどうなると思います？

下手をすると、おかしくなりますよ。

えっ？

ふっ、先生はロマンティストですな。

そういう提督も発生するかもしれませんが、それは可能性の範疇だと思いますよ、先生。

こんな禍々しいモノをよく装備出来るものだと、嵌めたモノを見かける度に内心苦笑していますよ。

まあ、我々が提督や艦娘を嵌めた訳ですがね。

はは、別に冗談のつもりじゃありません。

で、先生。

どうされます？

私を処断されますか？

私はただの技術屋だ。

コレを開発した一員ではありませんが、コレをどうにか出来る立場でもありません。

ええ、既に呪われていると思いますよ。

それくらい覚悟はどうにしています。

このことをすつば抜くような硬派の記者など、日本には滅多にいませんよ、先生。

日本のジャーナリズムなんて、芸能人の惚れた腫れたを延々追いかけて回しているくら

いが関の山です。

抵抗出来ない弱きモノを散々打ち据え、権力ある強きモノに媚びへつらうくらいしか出来ませんから。

そんな連中を過度に信用されない方がいいですよ、先生。

あいつらは、他人を利用することしか考えちゃいないんですから。

私としては、お世話になつてゐる先生の顔が拝めなくなるのは御免こうむりたいところですね。

さて、こんなところですか。

他に質問はありますか？

……わかりました。

それではまたご連絡ください。

歓迎しますよ。

……いえいえ、そんなつもりはありません。

ここは基本的に閑職ですから、暇をもて余してゐるんですよ、先生。

アハハ、それは勘弁してください。

私にはそんな度量も度胸もありません。

このままここで朽ち果てたいものです。

お元気でお過ごしください。

誰か来てくれ。

飛鷹か。

助かる。

先生を車まで送ってあげてくれ。

頼むぞ。

ふう。

入れ。

白露と深雪か。

なんだ？

この間宮羊羹か？

そういうところは目ざといな、お前ら。

飛鷹たちと一緒に食べばいい。

私？

私は甘いものが苦手だな。お前らに全部やるよ。

ああ、持っていけ。

入れ。

磯波か。

どうした？

手伝い？

今のところはないな。

……あー、いや……掃除でもしてくれたらありがたい。

ああ、頼むよ。

……。

何故私ごときにあんな笑顔を向けるんだ？

ふん、あれはまやかしに過ぎん。

はい。

ええ、それはかまいませんが、他の鎮守府や警備府や泊地で引き取ればいいのではありませんか？

ここは鎮守府でも警備府でも泊地でもないのですよ。

引く手数多でしょう？

足りない基地は沢山あるんですから。
函館からもせっつかれているんです。

一名でも二名でもいいから回してくれって。

えっ？

艦娘が望んだ？

はて。

私はただの一般人ですよ。

提督でも憲兵でもありませんし、妖精眼も持つてはいません。

同調率もさほど……。

はい、はい。

わかりました。

こちらから受領に行けば……失礼、引き取りに行けばよろしいのでしょうか？

……それはありがたいですね。

はい、はい、ではお待ちしております。

おい。

望月に初雪。

何故男風呂にいる？

さっさと出ていけ。

私が困るんだよ。

その手付きはやめろ。

まったく、どこで覚えるんだ？

誰だ？

なんだ、お前ら。

添い寝？

かまわんが、触るなよ。

ふん、寝ぼけたフリで触ったことは覚えてるんだよ。

そんなに見たいのか？

フン、冗談だ。

なにを赤くなっている？

さっさと寝ろ。

LXXIX：ハロウィンとホルモン

ハロウィンという催しは意外と説明しにくい。

洋菓子業界では恒例行事化しつつあるが、普及にはまだまだ程遠いだろう。

「かぼちゃ祭ゆうときやええんじや。」

呉の先輩から電話が来た際に話を振ったら、こう言われた。

で、ハロウィン当日。

仮装した艦娘たちが朝から執務室を中心にうろうろしている。

早朝からトリック・オア・トリートまみれだ。

岡山三川艦な軽巡洋艦三姉妹はなんとかキネンシスな女学生の恰好で、報道陣を引率していた。

私も眼鏡にアゴヒゲの司令の扮装をさせられている。いいのかねえ？
「問題ない。」とか「勝ったな。」とか言ったら、やたらにウケた。

退役艦娘の事務員たちが、サキュバスの姿で執務室に来た時は驚いた。

キヤーキヤー抱きついてきて、少しばかり危なかった。色々な意味で。

余所の鎮守府だと止めに入るらしい大淀だが、ここ函館の大淀は率先して仮装していた。

なんだね、その金髪碧眼の姿に青い服と鎧は。

彼女曰く、騎士の恰好らしい。

ライトノベルだか幻想小説だかの、ファンタジーものが好きなのかもしれない。

近頃は異世界転移だか転生系の小説が流行しているらしいので、その影響かも。

駆逐艦の子たちが三々五々訪れるので、それぞれに日高の三石羊羹と岩手の岩屋堂羊羹の詰め合わせを渡す。

箱買いしておいてよかった。

ローレルのカステラと函館牛乳をむしゃむしゃやりながら書類を片付けていたら、更なる駆逐艦の猛攻を受けて執務室に備え付けた冷蔵庫の在庫が空になった。

また買いに行かないとな。

加賀教官から甘過ぎると注意された。

私の手にあつたカステラをそのまま食べなかつたら、更に説得力は増していたことだろう。

昼食は素鰻鮎とおにぎりの定食。

うどんが間宮でおにぎりが鳳翔。

浅漬は龍驤、玉子焼きが瑞鳳。

……ちよつと待て。

何故瑞鳳がうちにいる？

どうやら修行中らしい。

玉子焼きが山盛りになっている。

軽空母率の高い昼飯だった。

昼食後、中庭の屋台群を見に行く。

かなり本格的にやっているようだ。

サイドテールに白いブラウスと黒いミニスカートの龍驤が威勢よく販売しているホ

ルモン焼きを頬張り、バクダンジュースを飲んだ。

妙高先生自慢のカレーと足柄自慢のカツが合体したカツカレーを堪能する。

龍田が大湊（おおみなと）の天龍と共に販売している龍田揚げも好評のようで、他の

屋台同様に人だかりが出来ていた。

叢雲と曙が販売する珈琲もなかなか旨く、霞と清霜と早霜と朝霜のおにぎり屋もよ

かった。

朝霜？

横須賀か呉の子じゃなかったっけ？

余所の艦娘が随分混ざっているようだが、気にしない方が賢明かもしれない。

吸血鬼の恰好をしたネヴァダ率いるメリケン艦娘たちは欧風魔物で統一しており、島風はかぼちや頭のジャック・オー・ランタンの恰好であちこちに神出鬼没しているらしい。

雪女郎の姿の吹雪が特型駆逐艦たちを案内している。

どこかの航空戦艦が着流しを着て、町娘姿の紅茶戦艦たちと寸劇を繰り広げていた。

扶桑と山城がハイカラさんの恰好で練り歩いている。

いずこかの羽黒と榛名と浜風と潮が物陰から私を見つめていた。

騎士装束の大淀がプラグスーツ姿の駆逐艦たちと談笑している。

とある魔法学校の生徒の扮装をした、鹿島や雲龍とすれ違った。

風魔の劉鵬（りゆうほう）が駆逐艦たちを順番に肩車している。

ロアナプラから来た娘たちと見かけない娘がゴシックロリータな姿で歩いていた。

戦艦棲姫が大人しそうな巨乳の娘を案内している。

広報の腕章を付けた複数の青葉と衣笠が、それらの情景を撮影していた。

どんどんカオスになってゆく。

笑顔溢れる風景。

平和の風景。

ずつとずつとこんな風に……。

……。

感傷的になりそうな気持ちを抑え、執務室に戻った。

夕食は正にかぼちゃ一色。

サラダ。

スープ。

カレー。

コロツケ。

天麩羅。

プリン。

厨房を手伝ったが、苛烈な戦場だった。

食器洗い機を購入しておいてよかった。

戦艦棲姫やシヨウカクや横須賀の瑞鶴が手伝ってくれたので助かる。

ついでとばかりに、獄門島の提督から送ってもらった竹輪を天麩羅にした。

瀬戸内の旨味が込められていておいしい。

岡山も一度訪れてみたいものだ。

厨房で食べていたら、目ざとい艦娘たちに見つかって仕事が増えた。

食後、柳生茶で一服。

何故か長門教官の膝の上にいる。

嫁を放置するとは何事だ、と怒られたが、ケツコンすらしていないのになにおつしやいますかね。

罰として抱っこされているのだそうだ。

ようやく彼女から解放され、鎮守府内を見回る。

中庭は喧騒を終え、静寂が辺りを支配していた。

気温がかなり下がっている。

息が白い。

風が強くなってきた。

明日は今日より寒くなるだろう。

と、その時。

焼き肉とタレのにおいがフワツとして、気づくと龍驤に抱きつかれていた。

「お疲れさん。キミ、お腹空いてへんか？」

「小腹が空きましたね。」

「ほな、お食べ。」

ホルモン焼きを差し出される。

二人で木製の長椅子に座り、彼女の自信作を再び賞味する。

冷めても旨い。

タレが絶妙だ。

「どうやら、私を待っていたらしい。」

「キミ、あんまり無理したらアカンで。」

「わかっていますよ、お母さん。」

「誰がオカンやねん。」

私を抱き締める力がより強くなる。

「楽しかったなあ。」

「ええ。」

「こないな時間が何度もあつたらええのになあ。」

「そうなるように頑張りますよ。」

「頑張り過ぎたらアカンで。」

「わかっていますよ、お母さん。」

「誰がオカンやねん、っておんなじ展開やん。あつ、見てみい、雪や。」
雪がちらちら降ってきた。

いつの間にか私の膝の上に座っていた龍驤と共に、空から落ちてくる白い粒を眺める。

それは風に紛れて舞を踊っているかにも見えた。

「林檎のおいしいうなる季節やね。今度、アップルパイをみんなで作るか。」
彼女の声が、やさしくやさしく私の耳に響いてきた。

LXXX : 夢見るリアリストたち

アメリカ合衆国カリフォルニア州アナハイム。

そこに本拠を構える、軍産複合企業のアナハイム・エレクトロニクス。

合衆国最大級の変態企業と目されてもいる国際的組織だ。

『メリケン艦娘』と日本で呼ばれるシップガールの稼働状況や性能に関する情報などは此処に集約され、既存の技術を高めたり新技術の研究などに活かされている。

合衆国は艦娘の技術を独立して切り離すことはしなかった。

寧ろ、積極的に自分たちの領域に取り込んでいる。

ハワイ諸島を奪還する最終作戦が終了すれば、アナハイムの価値は飛躍的に上昇する。

『提督』だの『司令官』だの呼ばれている連中は、精々前線指揮官程度の力しかない。

政治的能力を有する者は殆どいない。

そもそもろくな権限を与えていない。

諜報も防諜も全然出来てなどいない。

多少政治的能力を有していても、それは海千山千且つ複雑怪奇な政局を動かせるものではなく、却って利用されるのがオチ程度の能力である。

上院下院に太い人脈がある訳でもない前線指揮官たちに、戦後の保証はない。

金銭的な余裕を持つ者は少なく、基盤となる土地を持つ者も殆ど存在しない。

それはある意味、メリケン艦娘たちの将来的な命運をも示している。

だが。

彼女たちが亡命するかもしれないという考え方は政治家たちにはない。

提督を失ってしまえば、後はこちらの言いなりだろう。その程度の認識だった。

人は都合のよい考えに執着する生き物だ。

実際に艦娘に会えば認識が変わるかもしれないが、好んで接触するような者は政界財界問わず存在しない。

特に内陸部の国民にとって、艦娘とはたまさか報道される軍用兵器に過ぎない。

それが逆に、艦娘を救う切っ掛けになるかもしれないが。

今はまだ、激化する戦場を切り開く道具としてしか価値を見出だされていない。

中には良心的な者がいないでもないが、決定権を持つ面々の頭脳は石頭だった。

よく知りもしない相手に尽くす者などいない。

日本とはまるで違い、メリケンの艦娘関連の宣伝関係者に有能な者は存在していな

かった。

働く者は天下りの者が大半を占めていたし、艦娘たちに好意的な宣伝は不要だと判断されたからだろう。

たぶん。

提督がいなければ、艦娘は十全の能力を發揮出来ない。

指揮官あつての艦娘だからだ。

頭のない群れを駆逐するのは簡単だ。

故に提督は有能でない者が好まれる。

不要となれば即座に切れるような者。

連携も取れぬままに提督を働かせる。

それが基本的な政府の政策であつた。

仲違いさせるのは政治家の本領故に。

有権者を騙すのがお仕事なのだから。

艦娘に投票権が無いから捨ててよい。

政治家たちや大金持ちたちや企業は戦後を楽観視していた。

現在、北米南米近海の安全性はなんとか確保してはいるものの、アラスカ以西や大西
洋太平洋方面の進捗は思わしくない。

しかし、国民の死亡者のなんと少ないことか！

白人の死亡率も低い。

現場では英語以外の言語が中心に使われている。

食い詰めた中南米の海軍関係者の少なくない人数が軍用艦艇に乗り込んで、運が悪ければ海の藻屑と化していた。

そして、艦娘に随伴する軍用艦艇は時折撃沈されるものの、それは緊急徴兵を行うまでには至らない状況だった。

開戦当初に沿岸部の人間が少なからず死亡してはいるが、戦争には犠牲者が付き物だ。

それに、犠牲者がいた方が宣伝しやすい。

軍事衛星ワカテンネンのやや不正確な情報を精査した結果、日本が随分奮闘しているようだが、なに、日本人如きがこの世界を支配出来る筈もない。

彼らに国際情勢が理解出来る訳もない。

己の都合が悪いものに耳を塞ぐ国民性。

異質な考えや相手を排斥し、責め立てること多き者たち。

国際感覚の欠如した者たちが世界で活躍出来る筈もない。

世界を制するのは、我が合衆国。

それは初めから決まっていることだ。

深海棲艦（ディープリート）とやらが海を我が物顔で暴れてはいるが、何時までも戦い続けられる訳がない。

合衆国の物量作戦に勝てる存在など存在しないのだから。

彼らの勢力は決して広くない。

いつまで耐えられることやら。

偉大なる合衆国の、繁栄の礎（いしずえ）になるがいい。

敵が頑強な抵抗をするのなら、それを圧倒出来る戦力を送り込めばいい。

あのアンドロイドたち、いや、クローン兵士に近いのか、あの人間もどきには人に近い感情が見られるようだが、彼女たちは人間ではない。

階級と給料と幾ばくかの権利はくれてやろう。

だが、国籍は与えない。

人間ではないから与えられないと言っておけばいい。

人権団体を抑えてはいるが、その内抑えきれなくなるだろう。

彼らはその時になってから利用すればいい。

最初は厳しく接して、その後親切に振る舞えば大抵なんとかなる。

鞭と飴は使いようだ。

アナハイムの連中が私に月開発計画を打診してきた。

下院に働きかけて欲しいとのことだ。

将来に於ける、戦後復興の策として提案してみようと思っているらしい。月面の常駐者として艦娘を使えば、厄介払いにもなるだろうと言われた。そう言った幹部の顔は下卑ていた。

国のために奮闘する者に対する表現としては、後々問題発言に成り得る。詰まらぬ男だ。

代表のカーマインが食事を誘ってきた。

予定を合わせることを約する。

久々にSFの話でもしようか。

奴とは昔D&Dを遊んだり、トラクター工場で撃ち合いをした仲だ。

若い頃は不意に思い出す。

ファウンデーションでも作れたら面白いのになあ。

ペリー・ローダンは今でも続いているのだろうか？

英国の連中のしつこさには呆れる時があるが、ドイツの連中のしぶとさにも呆れることがある。

早く平和な世界にして、新作を読みたいものだ。
そう、平和こそ最高なのだ。

戦争を始めるための準備期間なのだから。

LXXXI : 愛と憎しみを黒く染めて

薄暗い、どこかの作戦室。

美しき異形の者たちが語り合っている。

「最近、脱走艦が増えてきた。レ級が脱走した時は心底驚いたものだ。」

「彼女が何名も連れて逃げた時の追手は、全員音信不通になりました。」

「あの時は本当に困ったわ。」

「現在、どれくらい脱走艦がいるんですか？」

「現状、一割強。函館に投降した者たちの影響が少なくない。あちらへの討伐隊も三回まで失敗したし、こちらでも幹部を二名失った。これ以上犠牲を増やす訳にはいかん。」

「和平派が最近うるさいのも問題ね。」

「人間など、所詮艦艇など使い捨てにしか考えていない、残虐な連中だ。特にメリケン艦娘の扱いには正直驚いた。」

「鉄底海峡防衛戦を行った時の、鎮守府や泊地の捨て艦戦法が可愛いと思える程よ。」

「日刊駆逐艦週刊護衛空母月刊輕空母隔月刊正規空母季刊戰艦の名に恥じぬ勢いで続々と戦力を投入しているが、艦娘の錬度の低さと軍属提督たちの無謀さでどんどん轟沈している有り様だ。」

「艦娘に暗殺される提督が日本より多いそうよ。」

「モノ扱いすることに關しては先進国だからな。」

「愚かね。」

「だから、我々も生きていられるのさ。」

「人権派が動いているって聞いたけど。」

「昔、ルーズヴェルトやハルが対日戦争の準備をしているのをすっぱ抜こうとした大統領選の候補者が、当時口封じされた。日本と戦争したくない層が国民の半数いたからな。それと似たようなことを、現在国内の人権活動家たちがされている。国民を国家が脅迫するのだから、大したものだ。あの国の民主主義など、その程度のものだ。なんせ、自国の国民になった日系三世すら、先の戦争では強制収容所に入れる国だからな。日系人は国民扱いされなかつたんだ。まったく、おそろしい。」

「国民が死なないために艦娘を轟沈させるのは当たり前だつて言うんだから、ご立派よね。ロボットみたいなモノだと認識されているんですよ。」

「失われても潤沢に補充される物資や艦娘で麻痺しているのさ、あの国は。」

「カナダや中南米諸国からの批判が絶えないそうですね。」

「そりゃ、いつつも圧力ばかりかけているからじゃない?」

「ハワイ諸島は奪還の目処が立たないし、北米南米大陸周辺海域の維持がやっと。基地での虐待が時折勃発して反乱が起きることもちらほらあるし、艦娘のストライキが頻発すると提督は更迭されるし、勘違いした提督が発生するのは、日本もメリケンも変わらないわ。アリュウシャン方面での大反抗作戦では妨害電波や偽の通信などに騙され、同士討ちしていたわね。可哀想に。悲劇的だわ。結局、当時の大統領が大見得切った作戦は大失敗して当時の最高指揮官はアラスカへ更迭されたし、大統領の支持率は急落。批判の嵐が吹いたわね。作戦時に艦娘を黒人やヒスパニック系以下に見下して、何名も轟沈させた提督が無罪放免されて暴動が起きたわ。『あいつらは人間じゃない。ただの喋る機械だ。そんなやつらを人間同然に扱う方がおかしい。』って言っていたけど、無惨な最期を遂げていたのは当然かしら。戦況については情報封鎖されていた筈なのに、秘匿情報が漏洩して反戦運動が活発化し、厭戦気分が目下増量中。勇氣ある軍属提督が艦娘を酷く扱う基地や提督たちをネットで告発して、FBI（連邦捜査局）やNSA（国家安全保障局）が動き出しているわ。まあ、途中で上院議員や長官や大臣に握り潰されるでしょうけどね。」

「日本人はロボットに愛着を持つ者が多いが、欧米では一般的でないからな。人間もど

きに人権を与えるな、という声は今も大きい。もしも『戦後』が訪れてもこのままなら、日本へ亡命する艦娘が続出するだろう。」

「受け入れられるかしら？」

「日本は外交が致命的に下手だから、難しいだろうな。提督が引き取ろうとしてこじれるのが眼に浮かぶよ。戦争が再開するかもしれないな。人对艦娘の。」

「艦娘を気持ち悪い、つて言っている連中がロビー活動を熱心に行っているしね。」

「恩恵を受けておきながら、その相手を平気で踏みこむ感じがわかりません。」

「助けてくれた親切な相手を後ろから刺す無情な人間なんて、古今東西どこにでもいる。どこの国がどうの、ではない。勿論、そうでない人間も多数存在する。ただ、人の足を平然とすくうような人間でないと、昇進は難しいな。兵士を平然と『殺せない』指揮官は出世出来ないのさ。」

「業が深いわね。」

「エベレストに登る登山家にしても、地元のエベレストをこき使うのが当たり前と思っっている連中が多いんだ。立派なことを言う口で同じ人間を差別出来るんだから、実に素晴らしいじゃないか。まあ、彼らの中では『人』と思われていないのだろうがな。人間とは、その程度の生き物だ。」

「ところで、メリケンの優秀な提督のおよそ半数がジャパニメーション好きってどうな

の?。」

「日本も似たようなものだろ。人間よりも艦娘の方が純粹だからな。それで惚れるんじゃないかね。」

「大統領選で親艦娘派が当選するとは思わなかったわ。」

「宣伝が上手かったからな。アレが艦娘のことを大切に思っているようには、とても見えないがね。都合のいい言葉で騙されたい人間が多いから、当選したんだろうさ。」

「当時のスローガンのひとつが、『国民の代わりに戦う娘たちの勇気を見よ!』でしたっけ。それと、まさか映画でプロパガンタをおこなうとは思いませんでした。」

「艦娘の記録映画とハリウッド映画を同時上映するんだから、やる時は徹底しているのよ、あの国は。善かれ悪しかれね。」

「マスメディアの情報を鵜呑みにする人間が、今もけっこう多いからな。」

「疑わないのかしら?。」

「考えない方が楽だからな。考えるのは疲れるものさ。答を用意してくれる相手に頷くばかりで、崖に向かっているのに気づかないまま落とされるのだろうよ。ところで、ミッドウェイ防衛網はどうなっている?。」

「今のところ、一進一退ね。」

「インド洋は?。」

「セイロン付近で激しい攻防を繰り広げたけど、こちらの優勢で落ち着いているわ。」
「欧州は？」

「英国が特にしぶといわね。艦娘と艦艇の混成艦隊は少々厄介だわ。最近、女王だか王女だかを気取る戦艦が出てきたっていうから要注意ね。ドイツは重巡洋艦や潜水艦の運用がなかなか巧妙だし、日本から来た提督がいるマルタ島やスエズ運河の辺りは攻略が厳しいわね。不正規戦に強くてしたたかな提督が指揮しているから、慎重に進撃することを進言するわ。敵ながら天晴れよ。フランスとイタリヤは……まあ、あれが通常運転かしら。個人が強くても、集団としては弱いわ。攪乱したらもろいし、粘り強さに欠けるのが難点ね。その分、他に皺寄せがいつている感じよ。その他の国はこれら五つの勢力と離合集散を繰り返して、まさに複雑怪奇よ。欧州の連中は。理屈屋が多くてまとまらないから、こちらとしてはとても助かるんだけどね。」

「言葉を弄ぶ者は言葉で滅びればいい。ところで、戦艦棲姫たちの様子はどうか？」
「世話焼きな子が多いから各戦線が保たれているようなものだけど、函館の影響が侮れないわ。言葉に出さないけど、動揺している子もいるしね。こちらでも注意しておくけど、あの子たちが私たちの生命線よ。士気高揚に間宮羊羹くらいは欲しいところね。」
「わかつている。」

「ル級やタ級やヲ級たちの相談に乗ったり、みんなのご飯を作ったり、幹部たちの我が儘

を抑えたり、みんなの盾になったりと大活躍よ。各戦線の要石ね。函館に投降した自由人もいるけど、あの子は特殊ね……そうよ、そうに違いないわ。」

「そうだな。ところで、捕虜の提督たちの洗脳はどうなっている?」

「一応は、成功よ。この間、二人を対メリケン戦線に投入したわ。」

「結果は?」

「基本的な戦術はそつなくこなせたけど、応用はまるでダメね。」

「そんなにダメでしたか。」

「裏をかかれて二人とも戦死したわ。」

「改良の余地があるな。」

「すみません、今しがた部下から報告がありました、悪い知らせです。南方方面戦線の離島棲姫の行方がわからなくなりました。」

「えっ?」

「彼女のいた防衛戦線でちよくちよく不在になっていたそうですが、一週間前から完全に連絡が取れない状況です。」

「艦娘たちの艦隊と交戦した可能性は?」

「それはありません。」

「おかしいわね。」

「おかしいな。」

「それと、アリューションの港湾棲姫も行方不明です。」

「なに!?!」

「なんで?」

「現在、原因調査中です。先だつての戦闘では生き延びていますから、戦争が厭になつて脱走した可能性も考えられます。彼女は元々やさしい性格ですから。好戦的でない幹部が抜けていることから、手引きした者の可能性も疑っています。」

「至急原因や関わった者を探して。」

「かしこまりました。」

「函館の戦艦棲姫たちが手引きした可能性はあるか?」

「調査します。」

敬礼した後、セーラー服を着た重巡洋艦は足早に作戦室を去つていった。

LXXXII : お茶会

煩雑な書類作業をようやく終えたのは、夕方というには遅い時間になってのことだった。

先程まで吹雪いていたが、ようやく止んだようだ。

不用意に走った吹雪が凍った路面で滑って誰かとぶつかったらしく、入渠がどうか修復剤がどうかか聞こえてきた。

おつちよこちよいだなあ。

やれやれ。

それにしても腹が減った。

間宮が待ちくたびれていることだろう。

手伝いをしてくれていた大淀と妙高先生と共に食堂へ行こうとしたら、机の上に妙な封書を見つけた。

蠟封が施されたその封書は、貴族階級からのもののように思える。

大淀が訝（いぶか）しげな表情で、この手紙を見つめていた。

流麗な筆記体の文字は知性を感じさせる。

これは貴婦人からの依頼じゃないかね、ホームズ？

夕食後に封書を開くと、お茶会への招待が書かれていた。

身に覚えのない相手からの招待に、私は戸惑いを覚える。

開催される場所は、函館市内のヴィクトリア様式の洋館。

これはなにかの冗談なのだろうか？

或いは国際的な陰謀なのだろうか？

これは由々しき事態ですよ、ポワロさん。

謎だ。

招待客は私と随伴する婦人一名だ。

そのため、ちよつとした騒ぎが発生する。

結局、随伴艦は島風になった。

一見あどけない容貌で相手が油断するだろうし、いざとなれば最速の脚で仲間を助けを求められる。

出掛ける時に一悶着あった。

支援艦隊を編成することで妥協してもらおう。

外は風が強い。

雪が舞う函館。

「くつつき過ぎだ、島風。」

「大丈夫だ、提督。これは偽装だ。」

路面電車に乗って、函館市西区の指定された洋館へ向かう。

私に密着しつつか上空を眺めていた島風が、ぽつりと言った。

「五機、いや、六機か。皆心配性だな。」

「制空権は確保しているということか。」

「まあ、そうなるな。」

「じゃあ、大丈夫だ。」

一四時四五分。

洋館に到着すると、執事らしき人物が待ち受けていた。

待合室で暫し待つ。

調度品は皆立派だ。

公爵夫人と名乗る女性とのお茶会が始まった。

気品ある雰囲気と仕草で上流階級の女性と思えたが、今風の感じがしない。

映画の撮影みたいにも思える。

仮にそうだとしても、ここまで手の込んだことをするだろうか？

わからない。

私の困惑を他所に彼女が語り始める。

夫がソロモン諸島方面に行ったとき、連絡が来ないとのことだ。

現在、その辺りは深海棲艦の棲息海域なのでまだまだ連絡は取れないだろう。

そう話すと、夫人は憂い顔になった。

「海賊がいますのね。」

「そうですね、それも相当強力な艦隊が存在しています。」

「英連邦の協力を仰ぐことは出来ないのでしょうか？」

「英国近海も海賊がうようよしていますから、それは難しい話です。」

「わたくしの望みはただひとつ。夫に会うことだけですわ。」

「こちらでも調べてみましょう。」

「軍の方にお会い出来て、嬉しく思っております。」

「私は厳密には軍属です。ワトスン博士のような。」

「それでは、こちらの娘さんが名探偵なのかしら？」

「私はただの護衛です。」

「可愛らしい護衛ですこと。」

「公爵夫人、大変申し訳ありませんが、私にも職務を遂行する義務がありまして、そろそ

ろ基地に戻らなくてはなりません。」

「それはさみしいことですわね。」

暇（いとま）を告げて、邸宅を後にする。

冬の夕闇に紛れて、屋敷は既に見えない。

凍った路面に足を取られないように気を付けながら、我らの鎮守府へ戻った。

彼女の語る公爵は外務省へ問い合わせた結果、存在しないことが判明した。

彼女の夫は詐欺師だったか、または何処かの諜報員だったのかもしれない。

調査内容を記した手紙を彼女の邸宅へ送ったが、届け先不明で戻ってきた。

LXXXIII：失踪

横須賀鎮守府にて、年若い憲兵が一人行方不明になった。

品行方正、清潔果斷、艦娘のことを大切に思う憲兵の鑑。

そんな若者だった。

深夜に行方不明になったのではない。

午後の明るい時間、彼と親しい駆逐艦の深雪が彼の不在に気づいてから鎮守府では捜

索が始まった。

だが、見つからない。

毎夜の定時報告がないことに不審を感じた憲兵隊本部が横須賀鎮守府へ問い合わせしてきたことから、騒ぎは更に拡大した。

彼の所属している鎮守府自体に大きな問題はない。

少なくとも、表面上はない。

四大鎮守府は絶対清廉潔白。

それが建前的な表現だった。

彼はなにかしら、疑いを持っていたようであるが。

生真面目な彼がなにかに巻き込まれたのではないかと、彼の上官や同僚は心配した。

憲兵隊と鎮守府側の関係は微妙だ。

人型妖精兵器である艦娘を使つて華やかに戦績を上げる鎮守府側に比して、憲兵隊は後方支援に回ることばかり。

最近はおきつ丸やまるゆといった戦力が増えつつあるけれども十分な数ではないし、大湊（おおみなと）の提督に取り込まれたおきつ丸も存在する。

元艦娘を採用するなどして対抗措置は取っているものの、今後の課題は増すばかりだ。

憲兵が最低一名は鎮守府警備府泊地に配属されるように手を打ったのは、憲兵隊の意地もある。

憲兵は鎮守府側への楔であり、情報戦担当であり、規律に比較的緩い鎮守府警備府泊地への牽制でもあった。

任務に真面目で、提督に不信感を抱く有能な若い憲兵が失踪する。

恋愛沙汰や蜂蜜作戦も疑った憲兵隊本部だったが、大本営に直属する軽巡洋艦の大淀からも憲兵とかなり親しかった艦娘からも恋愛方面の可能性は否定された。

金銭面でも綺麗な彼にその方面での問題は考えられず、では怨恨かという話になった。

怨恨の可能性があるのは、どちらかという提督たちである。

だがエリートを自他共に認める横須賀の提督たちは極力彼を避けていたようで、怨恨に至るまでの人間関係すらなかった。

やる気満々の彼が仕事に絶望した可能性も彼から親切にされた数々の艦娘より否定され、話を聞く限りでは何人かの提督よりも余程人望があつた。

それだけに憲兵隊本部は焦つた。

彼が提督候補生になつたのではないかと、そんな推測さえ立つた。

有能な幹部候補生が提督になぞなつてしまつたら、笑い話どころではない。

実際、実例がある。

艦娘が提督を撰ぶことなど、しよつちゆうあることだ。

それは、軍民間人軍務経験者軍務未経験者関係ない。

彼女たちが自ら主を決めるのだ。

彼の足跡をたどれなくなつた憲兵隊は大本営を疑つた。

提督候補生として青年を秘匿しているのではないかと。

その後。

函館や小笠原の提督などを巻き込んで騒ぎは拡大する。

二カ月ほどで、突然探索は打ち切られた。

そしてある夜、駆逐艦の深雪を含む複数の艦娘が横須賀鎮守府から姿を消した。

LXXXIV：副司令とカレー

副司令と司令が我が鎮守府に着任されたのは、昨年冬の寒い日でした。

副司令はお土産として『芋長（いもちょう）』の芋羊羹をお持ちで、皆で喜んでいただきました。

司令は大和ラムネを皆に配られ、好評を博しました。

芋羊羹を食べても、誰も巨大化はなかったのでよかったです。

お二人は一通りこの鎮守府をご覧になった後、対照的な反応を示しました。

副司令は「いぶんお怒りになられて、あちらこちらに電話されました。」

司令は「駆逐艦の子たちと遊び始めます。」

私たち艦娘（かんむす）は人型妖精兵器であり、無体なものでない限りは提督である司令の命令に従います。

私たち駆逐艦も、軽巡洋艦も、重巡洋艦も、軽空母も、正規空母も、潜水艦も、航空戦艦も、戦艦も、どんな艦種も。

基本的に提督に好意を抱き、姉妹愛、博愛に生きる私たち。

そういう意味では、私たちは愛の戦士なのかもしれません。

副司令と司令のどちらも、私たちにむごい命令をされることはありませんでした。

今まで着任された司令はいずれも私たちに厳しく命令され、それを私たちは当然だと思っていました。

戦つて怒鳴られて殴打される日々。

私は夜伽を拒否しましたが、自己の存在を確立させるためか元々好きなのか判明しませんでした。進んで、というよりも積極的に行う子もいました。

そういう子たちの中には、以前着任されていた司令と共に行方不明な子もいます。

無事を祈りたいものです。

通話を終えた副司令は怒りを残しながら言いました。

「取り敢えず、地元商店街とリュネスで買い物をしてくる。不知火さん、車は何処にありますか？」

それを見た司令は笑いながら言いました。

「そういうの、お前に任せるわ。不知火ちゃんも俺と一緒に遊ぶ？」

私は副司令の手伝いをすることにしました。

建造されて以来初めてリュネスという複合型大型商業施設に行き、地元商店街で初の

買い物をしました。

そして、一澤帆布のエプロンを装備された副司令は厨房で食材相手に格闘を始められます。

数人の子と共に、私も夕食作りを手伝いました。

その夜は、副司令お手製のカレーとサラダが振る舞われました。

あれは今でも忘れられない味です。

副司令はあの夜の食事で、私たちの胃袋を驚掴みにされたのです。

翌日には談話室にテレビが設置され、図書室には読んだこともない漫画や小説が置かれるようになりました。

そして、副司令は出張に出掛けられました。

司令はぼやかれます。

「あいつ、書類を全部オレに押しつけていきやがった。アンニヤロメー！」

私は司令の書類仕事を手伝いました。

執務室にやってくる同僚を捕まえ、次々に手伝わせた結果、前任の司令が残した書類仕事は夕方までに半分ほど片付きました。

夕食の準備は私たちが交代制で担当していたのですが、昨夜から今朝にかけて食べた副司令のカレーがとてもおいしかったもので、つつい司令に視線を向ける者も少なく

ありませんでした。

本来私たち艦娘は特に食事をする必要がなく、食事をするのは人の真似事です。

基本的に鋼材とか重油などを直接摂取すればそれで済むのですが、副司令のカレーは私たちの味覚に革命を起こしてしまっていたのです。

司令は正規空母の赤城さんや加賀さんや高速戦艦の金剛さんなどから積極攻勢をかけられ、真つ赤な麻婆豆腐を作られました。

本場仕込みの四川料理だそうです。

愉快がどのと言われているはいましたが、よくわかりませんでした。
麻婆豆腐にキャベツとピーマンの炒めものがその夜の食事でした。

あの夜は大変でした。

阿鼻叫喚になる食堂。

何故大量のペットボトルの水が用意されていたのか始めはよくわからなかったのですが、食事をしてわかりました。

殆どの艦娘は大量に水を飲みました。

斯く言う私も沢山水分を取りました。

三日後、副司令が帰ってこられました。

軽空母の鳳翔さんと給糧艦の間宮さんと駆逐艦の叢雲（むらくも）さんと軽空母の龍驤（りゅうじょう）さんの四名とご一緒でした。

副司令が戻られたと知るや、駆逐艦の面々が彼を取り囲みます。

そして、カレーを再び作って欲しいと訴えました。

「既にこの子たちの胃袋を掴んでおられるとは、この間宮、感服しました。」

「あれだけ熱心に口説かれては、女として喜びを感じます。」

「間宮さん？ 私は料理名人として腕を振るってくださいとお願いしたんですよ。」

「副司令は間宮さんも口説かれたんですか？」

「鳳翔さんまでなにゆーとるですか。貴女も料理名人として説得したじゃないですか。」

「副司令はん、あんた、ようモテとるなあ。」

「いらいなはん、龍驤さん。」

「あんた、けっこう手が早いのね。」

「叢雲さんまでなにゆーとんの。それは兎も角、夕食を作るぜよ！ 間宮さんと鳳翔さんは早速お願いします。私はカレーを作りますので、そちらはお任せします！」

「うちも手伝うわ。」

「あたしも手伝ってあげるわよ。」

「助かります。」

夕食が楽しみです。

戦って怒鳴られて殴打される日々が、愉悦に満ちた日々へと変わるのには素晴らしいも
のです。

願わくは、この日々が一日でも長く続きますように。

LXXV : 艦娘たちのクリスマス

普段から賑やかな鎮守府が、今日は更に騒がしくなっています。

紅茶派の高速戦艦がごきげんような軽巡洋艦三姉妹と共にお茶会を開いています。

呉からは大和さん、佐世保からは武蔵さんが訪れていて、当鎮守府の長門さんと仲よく話をしていました。

朝から飾り付けや料理で騒々しい限りですが、楽しめる時は楽しんだ方がいいでしょう。

私たち艦娘は何時沈むかわからないのですし。

「センパイ！ こんなところにいたんですね！ 試食をお願いします！」

後輩で今は大本営にて教官をしている筈の瑞鶴が、私に小皿に盛りつけられた肉料理を渡しました。

「これはおいしい焼き鳥ですね。……貴女、仕事は？」

「へっへーん！ 愛しの先輩と一緒にいるために、有休を使いました！」

胸を張る後輩。

何故彼女は私のような者を慕うのでしょうか？

他所の私の同姿艦で瑞鶴の同姿艦と仲が悪い様子は時折風の便りで聞きますが、いさかいを起こす暇があったら自分自身を高めた方が建設的に思えます。

以前、そうした内容の話を同姿艦に話したら驚かれました。

しかし、この子は少し心配を感じさせる雰囲気があります。

「そういうことは好きな人のために行いなさい。」

「加賀先輩が私の生きる糧です！」

「私は提督の妻ですから、貴女の期待には応えられないわよ。」

「あれ？ 先輩、提督とケツコンしていましたっけ？」

「近々行うから問題ないわ。ちなみに第二〇夫人までは確定済みよ。」

「えっ？ えっ？ ええーっ!？」

「冗談よ。」

「またまたーっ！ もう、先輩ったらー！」

困りました。

なついている彼女を全然振り切れません。

「ところで先輩、戦艦棲姫さんと翔鶴姉の傍にいる巨乳の人は誰ですか？」

「え？ ……ええと、彼女はロシア艦娘のキエフよ。」

「そっかー、てつきり港湾棲姫かと思っちゃった。」

私は内心焦りそうになりました。

何故なら、あの娘は艦娘ではないからです。

隣のなんちゃって翔鶴も同様です。

投降希望者が複数存在するとは大淀から聞きましたが、幹部級の元敵対者が味方になるなんてまるで特撮番組みたいにも感じられません。

しかし、瑞鶴は気づかないのでしょうか？

五航戦で呑気な子ですから、仕方ないのかもしれない。

逃亡した深海棲艦と同棲している人間もいるそうですが、彼女と似たような人物かもしれないですね。

瑞鶴と共に食堂へ行くと、其処はまさしく戦場でした。

オリーブドラブな国防色のエプロンを着た提督が、フライパンで炒めものを作っています。

香辛料の匂いもしました。

今夜は提督カレーです。

気分が高揚してきました。

複数名の鳳翔さんと間宮さんがてきばきと厨房で料理を作っています。

大型作戦の中継基地に位置付けられたお陰で厨房の大型化が出来たため、このような贅沢を実際に行えるのでしょうか。

どうやら他所の鎮守府の分も作っているらしく、出来た料理をお重に詰めて食堂を出て行く駆逐艦が何名もいました。

トラピストクッキーや三石羊羹などの詰め合わせがその手に渡され、彼女たちは勇んで抜錨してゆきます。

何度も手を振りながら。

嬉しそうに。

悲しそうに。

窓から外を見ると、明石が作ったのでしようか、天龍や龍田などの軽巡洋艦が駆逐艦たちをジェットスキーみたいな乗り物に乗せて颯爽と鎮守府を離れてゆきます。

かなりの速度が出るみたいで、あれはいいですね。

他に目を転じると、駆逐艦の清霜が巨大なライフルを試射してひっくり返り、霞や曙になにやら注意されていました。

大淀や足柄がニコニコしながら、それを見つめています。

「加賀さん、食べてみてもらえるかい？」

帰り支度をした軽空母からケーキの試食を頼まりました。

紫の髪の彼女は少し震えています。

それを口にするとうわうわな食感。

やさしい甘味と口どけが美味です。

作り手の思いが込められています。

「上々ね。」

「ありがとう、加賀さん！ よーし、これで提督の胃袋は貰ったよ！」

喜び勇んで彼女は食堂を出て行きました。

微笑みながら見ていたら、後輩が私の背中をつつきます。

「先輩……あの……。」

振り向くと、何名もの艦娘が小皿を持って私を見つめていました。

「ふっ、鎧袖一蝮よ。試食王の名は伊達ではないわ。」

やりました。

食堂の自販機で飲み物を買いましたよ。

飲み物以外の注文禁止と書かれています。

「先輩、どうしてこの自販機は五〇セント硬貨を入れないといけないの？」

「メリケン製だからよ。」

「先輩、どうしてこの自販機はキーボード形式の入力装置で注文するの？」

「メリケン製だからよ。」

「そっかー。よーっし！」

チヨロいですね。

これだから五航戦は。

変な男に騙されなければいいのですが。

彼女にまといつく男がいたら、全力で潰すことにしましょう。

自販機傍に山のように積まれている硬貨から一枚掴んで投入し、彼女は青森県黒石市産のサンふじを使ったストレート果汁の林檎ジュースを注文しました。

「へへへ、どうです、加賀先輩。」

「提督も似たような注文をするわよ。」

「えっ？ ええと、そうですか。」

「私はエチオピア産の珈琲を頼むわ。」

香り豊かな珈琲を楽しみながら、じゃれつく後輩と会話をしました。

カレーを作り終えたららしい提督が妙高と会話をしていましたがおそらくはカレーに関することでしょう。

そうです。

そうに決まっています。

決して恋愛関係ではない筈です。

彼女が協定違反をする筈がありません。

鉄の掟を破る筈がありません。

頬が赤く見えますが、緊張しているからでしょう。

思わず愛する夫の元へ突撃しそうになりましたが、許容寛容は大切です。

それに、彼女も大切な妻の一人なのでですから、許さなくてはなりません。

許すこと愛することはとても大切です。

「あ、あの……先輩？　大丈夫ですか？」

「私はいつも通りよ。」

「そ、それならいいんですけど。」

五航戦が何故かおどおどしていますが、気のせいでしょう。

ワタシハイツモイツドキモレイセイデス。

ワタシハホコリタカキセイキクウボデス。

フカイウミノソコカラアイヲササヤクワ。

容赦ない駆逐艦群の猛攻を受けて提督が簡単に陥落していましたが、よき妻はこれくらいで動揺してはなりません。

そう思っていたら、ミニスカサンタの恰好をした似非関西弁の軽空母が駆逐艦に混ざって夫に抱きついていましたので、致し方なく私はその群れを薙ぎ払うことにしました。

怒ってなどいません。

そう、これは躰です。

下着がたやすく見える服で提督を落とそうだなんて、恥を知りなさい！

天魔降伏！

今こそ、第三の目を開く時！

「せ、先輩！ 落ち着いてください！」

「大丈夫。餓鬼道に堕とすだけだから。」

「ダメーッ！ 仲間を轟沈させたらダメーッ！」

「一航戦の誇りをこんなところで失う訳にはいかないわ。さあ、覚悟は出来ている？」

私は出来ているわ。さあ、喰らいなさい！ 天舞宝輪！」

「ダメーッ！ 台詞と行動が噛み合っていないません！ このままでは鎮守府が崩壊するわ

！ 誰か止めて！」

今の私は阿修羅をも凌駕します！

「あの、教官。」

「なにかしら？」

提督が話しかけてきたので、動きを止めました。

他所の戦艦が私に抱きついて目を回しているようですが、知らない子ですね。

「パイ食べませんか、パイ。」

いつの間にか、大量のパイがテーブルに並んでいました。

流石に気分が高揚します。

提督が艦娘たちを抱き起こしていましたので、手伝いました。

赤い瞳の戦艦や高速戦艦三女や重巡洋艦四女がどきくきに紛れて提督の首筋を舐め

ていたので、手刀を喰らわせます。

いい気になるんじゃないやありません。

外見を最大限活用する彼女たちに感心はしますが、だからといって防御は緩めませ

ん。

女の戦いは熾烈極まりないのですから。

提督の防御力は低いので、我々がアイギスの楯にならなくてはなりません。

某鎮守府の航空戦艦二女がいると大変なことになりますが、あちらの提督に書状を送っていただいたのが効を奏したようです。

今頃はデートですね、きっと。

私も提督に抱きついてテイトクニウムを補給しました。

これくらいはかまわないでしょう。

提督の匂いは落ち着きます。

手打ち料として、後程彼女たちには提督の爪でも渡しておきましょう。

生かさず殺さず。

これが大切です。

札幌や小樽や道東などは積雪が多いようですけれども、函館は僅かな残雪が残るばかりでホワイトクリスマスには程遠い雰囲気です。

夕方五時頃ともなると、辺りは真っ暗になります。

六時頃だと夜です。

ドンドン。

花火の音がします。

函館の人々は花火好きなので、なにか催しがあると花火を打ち上げます。

名残惜しそうに瑞鶴が帰ってゆきました。
間宮羊羹やパイなど土産をしこたま携え。

また来ます、と言つて。

そうね、待っているわ。

小樽の提督から頂いたシャンパンとグラス片手に、そう答えました。

夜の砂浜。

一人、海と花火を眺めます。

これが本来の私の立ち位置。

さみしくなんてありません。

激しくも短き、轟音と輝き。

冬の夜空に閃光が煌めいて。

五〇発ほどで終わりました。

意外と呆気ないものですね。

私たちの生き方みたいで。

………。

帰って入浴して寝ましょう。

酔いを覚ましつつ帰るべし。

振り返ると提督がいました。

シャンパンの酔いが、急速に体内でぐるぐる回っているようです。

提督が肩を抱きしめてくれました。

酔ったふりをして、そつと頭を彼の肩に載せます。

愛している人と共にいられる幸せ。

だけど私たちは戦争のための道具。

何時轟沈するかは、わかりません。

それ故に、この幸せを堪能します。

やがて、沈む時が来てしまっても。

深い海の底から愛を囁くわ。

ずつと。

ずつと。

LXXVI : LOST KANMUS

息を殺し、気配を殺して闇の中を進む。

真冬の夜。

雪混じりの冷たい風が頬を撫でる。

函館鎮守府。

今は狩り場。

艦娘たちが提督を狩る為の敷地。

識域値を最大限に向上させるべく、目を閉じて感覚を研ぎ澄ませる。

まだ付近に音は聞こえない。

濃緑色の忍び装束は傷だらけだ。

ナムサン。

闇に溶けるように動くべし。

現役のニンジャマスターの教えを思い出す。

甲賀流の授業にもっと身を入れたらよかったのかもしれないが、訓練を重ねても隠身術はC判定から上がらなかった。

鎮守府でもたまに実践してそれなりに効果を出しているので、まったくの無駄ではなかったのが救いか。

ん！

光が見える！

RPG！

じゃない！

探照灯！

誰だ!?

「ふふふ。提督、逃げちゃダメじゃない。」

龍田か。

「こんばんは、龍田さん。」

「そろそろ覚悟は決まったかしら？」

「あいにくと往生際が悪い方ですね。」

「天龍ちゃんがいたら更によかったかもしれないけど、仕方ないわね。」

槍が彼女の頭上に振り上げられる。

「お祈りは済ませましたか？ 闇の底でガタガタ震えていましたか？ 覚悟は出来ましたか？」

「ゴメンね。」

「その動きは西江水?! 何故提督が？」

ヤギューのワザマエ！

ギューと抱き締める。

あつ！ と色っぽい声が聞こえた。

龍田を大破せしめる。

戦闘継続不能。

岡山三川艦が時折白い花を咲かせながら、私の動きを封じようと華麗に舞う。

試験型軽巡洋艦に組まれたライド・ギグ。

連携攻撃能力を高める為の機能。

それは容赦なく私を追い詰める。

だがしかしばってん。

「美しく散りたまえ！ デーモンローズ！」

薔薇と共に美しく散る戦士たち。

走らなければならない。

私は提督なのだから。

ローマに航空戦艦！

「夜明けのエスプレッソを、二人で一緒に飲みましょうよ。」

「この瑞雲について、夜通し共に語り明かそうじゃないか。」

厄介な二名が……ちよつと待て。

「貴女たちは私の鎮守府所属ではないでしょう？」

「それは小さなことよ、アドミラル。」

「そういうことだ、気にしないでくれ。」

「私、とつても気にします！」

致し方なし！

「必殺添い寝券！」

「くっ！　なんて卑怯な！」

「くっ！　それは欲しい！」

「ちなみに一枚しかない！」

次の瞬間、共闘していた戦友たちは互いを倒すべく、死闘を始めるのだった。隙あり！

すまない！

流星拳！

波動拳！

竜巻旋風脚！

廬山昇龍覇！

積尸気冥界波！

あれは……空母たち！

鳳翔、龍驤に加賀に雲龍か！

不味い！

いつから捕捉されていた？

夜間航空隊の訓練の成果をこんな形で見るとはなんて！

弓が鳴り、巻物が翻る。

致し方なし！

鳳翼天昇！

航空戦力は退けた！

そして！

グレートホーン！

黄金の野牛の一撃に次々倒れる戦士たち。

済まぬ。

駆逐艦勢が眼前に佇（たたず）む。

幼い顔に獰猛な笑みを浮かべつつ。

さあ、夜戦を始めようじゃないか。

リストリクション！

痺れたところへ！

スカーレットニードル乱れ撃ち！

峰打ちだ。

安心せよ。

吹雪に戦艦棲姫にシヨウカクか。

それに長門に妙高。

メリケン艦娘たちまでいる。

私は彼女たちを抜かねばならぬ。

ならば。

このセブンスンシズを大いに高め、かの者たちを打ち砕かねばならぬ！

守りの楯よ、クリスタルウォール！

天魔降伏！

天舞宝輪！

とどめのギャラクシアンエクスプロージョン！

あれは……大淀？

何故、青いドレスを着ている？

何故、銀色の胸当てや籠手や脚甲を着けている？

何故、大きな剣を掲げている？

「お待ちしていました、提督。」

「大淀さん？ その姿は一体？」

「体力の残量は充分ですか？」

「もうそろそろ尽きる頃ですね。ところで大淀さん、何故私たちが争わなくてはならぬ

「いのですか?」

「それは運命黙示録。変転する世界の歪みを正す為。」

「えっ?」

「お話はここまです。さあ、始めましょうか。」

「」

「これでお仕舞いです。」

「やらせん!」

「島風!」

「島風さん!」

最速駆逐艦が私を抱き締め、横っ飛びで大淀の剣から逃れた。

「待たせたな。」

「何故私を庇う? 大淀さんと二名がかりなら、容易く私を倒せるだろうに。」

「カメラードン。私の戦友。友を庇うのに理由はあるのかい?」

「モンデュー! なんてこった! 流石は我が友!」

「残念ですが、お二人の力を合わせても私には勝てませんよ。」

「ならば!」

凍気で貴女を倒すまで!

先ずはカリツオー（ロシア語で氷の輪の意味）！

そしてダイヤモンドダスト！

オーロラサンダーアタック！

ホーロドニースメルチ！

「大淀さん、今のはわざと外しましたね。」

「私たちが提督を本気で害しようとする訳ないでしょう？」

「大淀さん……。」

「我が剣を託します。」

「わかりました。」

「提督、二人きりになったな。」

「夜が明けたら、みんな正気に戻るかなかな？」

「なにを言っているんだ、提督。」

「えっ？」

「夜戦はこれから始まるんだよ。」

そう言つて、島風が嗤った。

まさか？

そんな？

ダイヤモンドダスト！

「おっそーい！ 一度見た技は効かないよ！」

「ぐはっ！」

ホーロドニースメルチ！

「そのアツパーカットは遅い。それに、二度目は通用しない。なめられたものだな。なにより提督には小宇宙（コスモ）が足りない。」

あべしっ！

ここまでか。

いや。

私には大淀から託された聖剣がある。

「これで終わり！」

エクスカリバー！

「まだまだ！」

そして、最高の小宇宙で放つオーロラエクスキューション！

コミックマーケットで販売されたというDVDを講堂で鑑賞して、私は頭を抱えた。

確かに私は忍び装束とレインボーマンのダッシュユセブンの中間みたいな恰好で艦娘相手に撮影した訳だが、こんな内容で大丈夫なのだろうか？

艦娘や元艦娘などを中心に行列が出来たと、大本営のマスターオータムクラウドや青葉が言っていた。

大本営の広報も西館四階で公式販売して、けっこう稼いだらしい。

なんだか複雑な気分だ。

LXXXVII : 埼玉県民、北へ

埼玉県民の結束力はとても強い。

東京に憧れることもあるが強い。

埼玉県民は愛郷心もまた強い。

密かな自慢は心の内に秘める。

それが彼らの心意気であつた。

豊かな農産品及び酪農製品が東京の多くを支えているのは事実だし、未だに都会であることに固執する都民でさえ強迫されたら渋々認める事実である。

彼らにとつての今の悩みは近隣の群馬県栃木県長野県山梨県同様、鎮守府や艦娘に縁のないことだ。

西日本だと、奈良県滋賀県岐阜県も縁がない。

つまり内陸県だ。

海に果てしない憧れを持つ埼玉県民にとって、艦娘はアイドルを超越した存在であ

り、いつかは会ってみたい存在なのだった。

彩の国埼玉県の最大都市、ネオスサイタマ。

さいたま戦隊サイタマンの本拠地がある県庁所在地であり、彼らは群馬県民の武闘派から成る戦闘連隊クルマールや栃木県民の有志から成る秘密結社鉄観音との終わりにき抗争を日夜繰り広げている。

ちなみにさいたまスーパーアリーナでは、激しい戦いを行う彼らの勇姿から那珂ちゃんのコンスアートまで見られるのが特徴だ。

海に面していない県に鎮守府や警備府は設置出来ない。

艦娘が一名しかいないなんちゃって鎮守府であろうと。

東京のアホなお偉いさんが冷然として、そう放言した。

埼玉県民は人を馬鹿にした態度の発言に強く憤り、一致団結して国会議事堂前に座り込み、国会議員たちを震え上がらせた。

二万を超える県民の姿に恐怖を覚えたからである。

山田うどんを黙々とすすりながら狭山茶で優雅に喫茶する彼らは、大声を上げることなく機動隊と対峙した。

全身を防護装備で固め、ひのきの棒や特殊ポリカーボネイトの楯で緊張した面持ちの警官たち。

対して、普段着姿の無手で表面上はのんびりした雰囲気な埼玉県民。

主婦や老人も多い。

薩摩の軍勢と琉球の庶民との決闘のように見えないでもなかった。

怒り狂った埼玉県民に機動隊が勝てる訳もないから、警官たちは既に戦意喪失しており、彼らに蹂躪される悪夢を見るために寝不足だった。

埼玉県の中でも特に精強を誇る秩父人が混ざっていることは、警官たちの恐怖心をいや増した。

たまたま秩父弁を知り、その存在を把握した警官がいたためである。

彼自身は交番勤務で秩父の人々から大変世話になったが、彼らの戦闘力が並々ならぬことも知っていた。

猪を正面から素手で倒せることは普通ではない。

倒した高校生はおっさんたちからまだまだだが筋はいいと言われ、照れていた。

彼女は元気だろうか？

幸い、群馬県民や栃木県民同様戦闘民族でありながらも理性的な彼らは重武装の機動隊を率いる隊長の決死の説得に応じて軍勢を引き払った。

その整然とした行動は錬度の高さを伺わせ、高度な訓練を経たものと想定された。

余程の武将が率いているものと思われたが、指揮を取る侍大将は最後まで判明しなかった。

彼らが本気になって東京に雪崩れ込んだ場合の被害を計算した者もいたが、あまりの戦力差に恐怖したという。

埼玉県公式武術の碎魂拳は小学生女子でさえも一人で警官隊と互角に立ち向かえる驚異の戦闘術であり、風魔忍法と併せて極めれば全国有数の戦闘力を有することさえ可能だ。

難点があるとすれば、愛郷心と慈しみの心の無い者にこの業を取得出来ないことくらいだが、愛郷心の無い埼玉県民は殆ど存在しないので問題にすらならない。

愛と勇氣に満ちた存在。

それが埼玉県民である。

元艦娘の誘致に激しく積極的な府県の最右翼である埼玉県は、薩摩芋の羊羹と狭山茶で胃袋を満たしながら日夜問わず協議を行った。

その結果、元艦娘を誘致するには提督の協力が必要だと結論された。

ならば、どこへ陳情に行くべきか？

呉第六か？

大湊（おおみなと）か？

函館か？

埼玉県の諜報防諜部門を統轄し、甲州の武田忍びや越後の軒猿（のきざる）や仙台の黒脛巾（くろはばき）などと日々知恵比べをしている風魔。

その頭領風魔小太郎は埼玉県元艦娘誘致会に出席し、あんバタを口にして狭山茶で喉を潤した後で重い口を開いた。

「函館になさるべきかと存じます。」

腰は重いものの、動き出したら疾風迅雷の動きを見せる埼玉県民。

県の公式発表を知るや否や、その日の東北新幹線の全座席は完売し、長距離バスの指定席も完売した。

翌日の席も同様である。

県内のすべての長距離バスが動員され、埼玉県は『お出掛け時のお願い』と称されるしおりを全県民に無料配布した。

埼玉県の常識が他の都道府県の常識とは限らないからである。

それはどこの都道府県でも言えることだが、埼玉県は東京に隣接しているため、遠くへ出た際の差異に気づきにくいのだ。

自称東京人の一部が自分達を全国標準だと勘違いするのと少し似ている。

埼玉県民大移動は近隣諸国の動揺を招き、特に群馬県と栃木県はそれぞれのほぼ全兵力を動員して、第一級警戒態勢を発令した。

栃木県側は宇都宮餃子で英気を養い、群馬県側は地元産の旨い日本酒に舌鼓を打った。

埼玉県民はひたすら北を目指したために武力衝突はなく、激戦を予想していた両県をたいそう驚かせた。

集まった兵（つわもの）たちの多くはそのまま宴会を始めた。

一方、埼玉県民は海を見ることが出来るとうきうき浮かれていた。

海の日に近いの海岸へと民族大移動を行う県民性のため、彼らは海にとっても憧れている。

しわしわになった青森県案内書と函館案内書を握り締め、埼玉の民はのつけ井や鰯掛け焼きそばなどに思いを馳せるのだった。

行田（ぎょうだ）ゼリーフライを使ったコロツケサンドと森乳業のわたぼくコーヒー

で盛り上がりながら、一路彼らは海沿いの街を目指す。

数多の艦娘に出会えると心臓をバクバクさせながら。

直接見ることに出来る海に期待しながら。

新青森駅並びに青森駅及びその周辺では、元艦娘の職員や売り子が一時的に裏方になることを決定した。

埼玉県民との接触による大混乱をおそれたからである。

普段理性的な埼玉県民ではあるが、はっちゃけてしまった場合に止められる者がいない。

県民でも精強な者はこの時期、林檎の収穫で忙しいのだ。

陸上戦で艦娘級とおそれられる彼らを止められるのはこの辺りに於いて艦娘や深海棲艦くらいだが、彼女たちを抑止力に用意するとその化学変化でなにが発生するかかわらない。

パンデミックなど論外だ。

海の幸を喜ぶだろうと予測を立て、青森県側は関連の販売面積や臨時の食事場所を増設した。

青森県側は出来得る限りの手を打ったが、埼玉県側の勢いはのんびりした青森県側の予想を遥かに上回っていた。

早々に海の幸系商品を完売する店舗が続出し、急いで追加発注したものの、埼玉県側の勢いを抑えることは不可能だった。

新青森駅舎内の売店は埼玉県民突入後、程なく次々に完売御礼の札を立てた。

青森市に殺到した埼玉県民は駅周辺の市場を席卷し、ストリート果汁の林檎ジュース各種を堪能し、駅近くでおでん屋を営むおばあちゃんの小さな店で旨い旨いと連呼した。

おばあちゃんの津軽弁は半分も理解出来なかったが、旨いものの前では理屈などいらない。

埼玉県民はそのことをよく知る人たちであった。

五〇万の埼玉県民は青森から青函連絡船を利用する者と大湊からのフェリーを利用する者とに別れた。

青い森鉄道で大湊へ向かった者たちは近年東北有数の大都市になりつつあるその地に降り立ち、賑やかさに瞠目した。

駅構内に設置され第三次改装を経た、中世欧州風地下迷宮都市型大型商業施設ルルイ

エでホタテコロツケや海軍カレーなどを堪能し、彼らは津軽海峡冬景色を渡った。

A 集団は青森から函館港へ向かい、B 集団は大湊から函館港へ向かう。人口の倍以上の人々が殺到されると予想された函館市は震え上がった。多すぎる。

宿泊施設が足りる筈もなく、対応可能な訳もない。

湯の川温泉の全宿泊施設にも緊急事態が伝えられ、古老は昔二度有った埼玉県民の大移動を若い人々にしじみと伝えた。

相手は穏やかで理知的な埼玉県民ではあるが、如何にすればよいのか？

仮設簡易宿泊施設を取り急いで用意出来るだけ用意し、すべての稼動可能なバスを用いて大沼江差松前などにも宿泊してもらおう。

函館周辺のあらゆる宿泊施設は即時に予約で埋まった。

エロいことを目的とする宿泊施設も、予約で埋まった。

足りない。

まだ足りない。

真っ青になる関係者たち。

鎮守府も詰めに詰めれば一〇〇〇人は対応可能だと、提督が函館市に報告した。

おそらく、この鎮守府が最大希望来訪施設だ。

最大激戦区ともいう。

あわよくば、元艦娘を連れて帰る気かも知れない。

まさか。

まさか、そんな。

青森県内でたまたま元艦娘や現役の艦娘に接触した埼玉県民はうぶな反応を示したが、函館周辺で同様の反応を行うとは限らない。

移動人数が多すぎて捌ききれない青森県は、苦渋の選択として元艦娘たちを使うことにした。

県内各地で働く元艦娘で情報提供してくれた者たちを埼玉県民に紹介したのだ。

歓喜する埼玉県民。

戦力の分散化になんとか成功した青森県は他の東北緒藩から非難を浴びた。

莫大な財布が移動するのだ。

上手いことしやがって、と。

浴びたが、急な事態に論理的に活動出来る者ばかりではない。

ブチキレた知事は、他の藩にじやあお前らが対応出来るのかと喧嘩を売った。

青森県民は一旦怒るととてもこわいのだ。

これに対し、埼玉県側が後程県民を東北各地に向かわせる旨を緒藩に伝え、大事には

至らなかつた。

およそ五〇万に及ぶ大軍勢は破竹の勢いで函館に向かう。

北へ。

北へ。

遥かなる憧れを胸に秘めつつ。

埼玉に栄光あれ。

LXXXVIII：冬のこわい話大会

ある冬の夜の函館鎮守府の大会議室。

大規模作戦での後方支援任務を念頭に作られた場所だが、その夜は季節外れのこわい話大会が複数の鎮守府の有志によって開催されている。

外では雪が吹雪いていた。

明日は積もることだろう。

何故か駆逐艦の吹雪が外で走り回り、滑ってこけていた。

雪に見紛う白いものをちらつかせながら。

「えっと、じゃあ、あたしから。これは又聞きだから本当の話かどうかわかんないんだけどさ、ほら、こないだ潰れた鎮守府があっただろ。そう、あそこ。あそこなんだけどね、夜勤の子がたまにいなくなるってさ、大変だったらしいよ。朝になっても執務室に報告が無くておかしいと思った提督が確認すると行方不明になっていて、しかもその子の荷

物が整理された形跡なし。同室の子も特に変わった様子になかったと言って、一時期は提督が艦娘を文字どおり食ったんじゃないかとか、深海棲艦が地下にいて餌になったんじゃないかとか、いろんな噂を聞いたよ。でき、行方不明の子が二桁になった途端に強制査察が執行されてその鎮守府は閉鎖。いなくなった子たちは今も見つかっていないという話だよ。」

「では、次は私が話すのです。とある重巡洋艦さんから、とある司令官さんとある軽空母さんがとつても仲良くしている映像を、皆でわいのわいの言いながら夜中に部屋でこつそり鑑賞していたのです。すると、ギギギイと音を立てながら目だけ笑っていない司令官さんがここにこししながら顔を私たちに向けて言いました。『見たなあ』、と。」

「知人から聞いた話です。知人には酒好きの友人がいて、よく一緒に居酒屋に行っていたそうです。で、その友人がある時亡くなってしまつて、知人が別の友人たちと彼を偲（しの）びながら呑んでいたら店の人が追加注文はなんですかと聞きに来たんですね。知人は卓上の呼び出しボタンを押していないと言ひ、店の人は呼び出し音が聞こえたから注文を取りに来たのだと言つたそうです。知人は怪訝（けげん）に思ひながら、折角だからと追加注文したそうです。そうしたやり取りが数度繰り返され、知人の好物だった肉じゃがを注文したら、その現象は止んだそうです。」

「では、私だな。ある店に元艦娘たちが常連として訪れていた。彼女たちはその店の店

主がとても気になっていて、それで通っていたそうさ。彼女たちは店主との関係を深めたが、店主にその気はない。ある夜、双方酒が入って陽気になった皆は海岸に向かった。翌日から、そいつらを見た者は誰もいない。」

「とある島の提督の話なんですけれども、彼は仮眠室で寝ていたある夜、寝苦しくて目覚めたそうです。なんでだろうと思って目を開けたら、寝間着姿の艦娘が覆い被さっていたそうです。ああ、これは寝苦しいのも納得だと思つた彼はその子を起こさないようにそつと仮眠室を出て執務室のソファで寝ました。翌朝、今度は別の子が覆い被さっていたそうです。部屋には鍵をかけていたし合鍵も無い筈なのになんでだろうと友人は不思議がっていました。」

「那珂ちゃんだよー。明日からコンサートの練習があるんだけど、飛び入り参加するね。じゃあ、こないだ政治家のおじさんから聞いた秘書の人たちについての話を……えつ、それはちよつと不味い？　じゃあ、友達から聞いた話だけど、その友達はアイドル二年目でね、アイドルになる前は何度も何度も芸能事務所へ履歴書を送っていたり夜のお店で一生懸命就活していたんだよ。表向きは、路上で事務所の人から声をかけられたってことになっているんだけどね。それはおいといて、彼女がとある放送局に行った時にプロデューサーに声をかけられて、お話した時、そのおじさんがペタペタ触ってくるから止めてくださいって言ったたら、戦国時代を舞台にした連続ドラマで出ている某女優は、

喜んで触らせてくれるって言ったんだって。枕営業をする女優が沢山触らせてくれたりやらせてくれているんだからお前も触らせろ、って変な理屈だよ。那珂ちゃんもみんなのアイドルだから、勿論そんなことしないけど。友達は何人か顔だけいい四〇代のアイドルたちと関係しているんだけど、おじさんとは関係を持ちたくないから、棒読み演技しか出来ないけど顔だけよくて映画にもよく出演しているそのイケメン中年アイドルに相談したんだって。そしたら、数日後にそのおじさんは北海道へ転勤になったそうだよ。」

「では私が話をさせていただきます。私が初めて秘書艦になった日の朝、司令官が紙袋を仲よしの軽空母に渡ししました。忘れ物だと言って。翌日、別の重巡洋艦に司令官は紙袋を渡ししました。忘れ物だと言って。その翌日も、そのまた翌日も別々の子たちに司令官は紙袋を渡ししました。みんな、忘れ物が多いなと思っていたら、今度は艦娘側が朝司令官に忘れ物だと紙袋を渡すようになりました。私はまだ一度も紙袋のやり取りをしたことがありません。あれは一体なんなのでしょう？ すみません、これは不思議だった話ですね。」

「ある寒い日、汽車に乗っていたんだ。とある駅で少し停車するって放送が流れてうっらうっらしていたら、なんとなく寒くなつてね、おかしいなあと思つたら少し離れた扉が開きっぱなしになっているんだ。その汽車の扉はボタンを押さないと閉まらないよ

うになっていてね、ふらふらしている男性がいて、何度も何度も出たり入ったりしていたんだ。それでふらりと隣の車両に行って帰ってこない。仕方ないから、扉は閉めておいた。」

「続けて私から。提督になる前の話なんだけどね、道を歩いていたら、前方を歩いていた女性が私をちらちら見るんだ。あれ、なんだろうと思っていたら、急に女性が振り返って刺されかけたんだ。いやあ、人違いでよかった。」

「では更に私から。提督になる前、旅行の費用をなるべく安くあげようとネットカフェで北海道を舞台にした漫画を読んでいたら、ふと視線を感じたんだ。そちらに目を向けたら、背が高くくて無表情の女性が私をじつと見つめていてね。ゾクツとして見つめ返していたら、すつと去っていった。」

「よつ、なにやってんの？ こえー話？ 飛び入り参加自由？ おー、こえー話ならいっぱいあつぞ。ねーちゃんと仲よくなつた翌朝、持ちもんが取られているなんて序ノ口だぜ。ロスじゃ、射殺されかけたしな。ローマじゃスリにやられるし、ロンドンでスペインの可愛い娘と仲よくなつたらチンピラに散々絡まれるしよお。俺が提督になる前なんて、世界各国を巡っていたからな。パリを尊ぶ奴が未だにいるのは不思議だけどよ、あの街は観光地って態度じゃねーぜ。地元の連中なんて、こちとらが東洋人だからってよ……………」

「少し変態が入っている先輩は直接取引で女の子のピスを購入していたが、ある時本物でないことが発覚した。勇子という交渉人の功績により、先輩は目の前で注いだものを購入出来るようになった。現在、倍払っているらしい。」

「駆逐艦たちに襲われて、初めての口づけを奪われた提督。」

「毎晩艦娘たちが交代で添い寝していて、今のところは手を出していないけど、正常な判断が出来なくなりつつある提督。」

「処女宣言をした数カ月後に妊娠が発覚した清純派アイドル。」

「これこれ、誰が大喜利をやれって言ったんだ？ たたくよう。提督もみんなもそろそろ終わりにしちまえ。ん？ こわい話？ 世の中、こわいモンだらけだぜ。インチキまみれだし、マスメディアは適当だし、自分自身を絶対自己批判しねー奴だつてごろごろいる。ふふ、こわいか？ なんだ？ 俺自身のこわい話？ そーいや、大湊の龍田が……んー、ありや、ちよつと話せねえな。横須賀の木曾の話も……あー、問題ありまくりか。わりい、ねーわ。あー、深海棲艦こえーな。俺の装備は旧式だから、ちつとも相手になんねーぜ。こわいこわい。お、そうだ、提督、こないだ貰ったハンカチは気に入って使っているぜ。ははは。」

LXXXIX : みつこし！

老舗の百貨店、三越。

別名、三越伊勢丹。

三越伊勢丹ではない。

そのうち、高島屋三越伊勢丹になるかもしれない。

ただ、そごう・西武には負けたくないの。

『一円のを二〇円で売る』岩崎弥太郎が開いたデパートメントストア。

『大不景気時代』と言われるこのご時世で起死回生の手を打つべく、艦娘マニアの幹部たちは大本営と結託することを決定した。

要は売ればいいのである。

売れるモノはなんでも利用するのが死の商人の基本であるし、対象が人間であろうとなかろうと売り手には関係なかった。

不要になったら斬り捨てればいいだけの話である。

二〇〇八年に伊勢丹と二身合体して以来、彼らは千葉店を始めとする関東圏の不振店舗を斬り刻んできた。

多摩センター、松戸、相模原、府中は真っ先に潰した。

勿体ないと惜しんでいたら、あつという間に火達磨であるからして。

一時期は外国旅行客がどんどん買ってくれていたが、鎖国に近い状況になつてからは青息吐息だ。

過去ばかり見ても未来はない。

ならば、大胆に舵を切るしかない。

それに、伝家の宝刀の期間限定だ。

ちなみにもう一つの伝家の宝刀が、北海道沖縄展である。

日本人の大半は期間限定と生産限定に対して極めて弱い。

作者も弱い。

これは売れるに違いない。

彼らはネズミ男のようなえげつない顔で、ゲヘラゲヘラと嗤（わら）うのだった。

採用された艦娘には醜悪な政治力学が乱用された。

小笠原の大井と佐世保第一の北上が急遽仲良しこよしの親友に仕立てあげられ、主力

印象艦娘に位置づけられる。

北上は積極的に状況を受け入れたが、大井は消極的に微笑みだけだった。

また、函館の大淀と大湊（おおみなと）の明石が組むことになったが、元々交流があったので親友の關係として不自然ではない。

呉第五鎮守府の浜風と横須賀第一の鹿島が手を組んだ。

函館の戦艦棲姫と舞鶴第一のポーラが即席親友となる。

偽りの關係が組み立てられ、そこに齟齬が発生することは一切許されなかった。

やっていることは無茶苦茶だが、それに抗弁することは艦娘に許されていない。

嘘を突き通すことで真実っぽいものになればいいなんて、甘い予測の皮算用。

彼女たちを撮影したポスターが東京では貼られては剥がされ、貼られては剥がされを繰り返して話題になった。

それならばと大量にポスターが貼られ、銀座線三越前駅は艦娘一色に彩られた。

基本販売品目はこちら。

いずれも鎮守府関連の印や模様が施され、熱狂的な艦娘支持者を熱くたぎらせるように周到に計算された。

どれも凝った作りの国産品である。

購入限定も行われた。

転売防止と数多くの人に売るため。

◎艦娘風ローファー

◎持ち手が革の帆布製トートバッグ

◎艦娘の写真が印刷されたマグカップ

◎甲州印伝の技法を用いた財布

◎艦娘の写真が印刷された手提袋

◎備前焼と萩焼の茶碗

◎津軽塗と輪島塗の箸

◎海軍仕様の特製腕時計

◎北海道産の葡萄酒

◎鉛筆、消しゴム、シャープペンシル、ボールペン、蒔絵の万年筆、鋏、下敷き、筆

箱、糊、ノート、メモ帳の各種文房具

◎大和ラムネ（呉第一）

◎間宮羊羹（横須賀第一）

◎海軍カレー（舞鶴第一）

◎伊良湖最中（佐世保第一）

◎日向監修の純金製特別瑞雲

◎魚雷型水筒

◎洗濯板（羊羹堅パン、函館）

札幌三越を皮切りに、本人たちが店を訪れる催しも同時展開された。

霜月の下旬に開始された期間限定販売は多数の客を呼び寄せ、高額商品から順々に完売御礼の札を立てた。

師走の中旬に行われた二期の期間限定販売も大好評で、コミックマーケットを予定していた戦士たちの懐に大打撃を与えた。

旗艦店舗の日本橋店には期間限定のマミヤカフェが併設されたが、三越側の予測を大幅に超える来客数のために整理が大変だった。

そのため、とある提督が応援に駆けつける一幕と相成った。

横須賀第一の間宮、佐世保第一の伊良湖、舞鶴第一の速吸、呉第六の鳳翔に加えて眼鏡とマスクをかけた冴えないおっさんが奮闘する。

艦娘たちから何故かやたらにべたべた触られながらも、おっさんは頑張った。

頑張ったんだ。

裏方だけだ。

今日で最終日。

この乱痴気騒ぎもお仕舞いだ。

梱包と発送を終え、一息つく。

鳳翔の作ったフレンチトーストを口にして

、ようやく気持ちが落ち着いてきた。

フレンチトーストの珈琲と共にいただく。

先輩が日夜自慢するだけあって、全鳳翔の中で特級の腕前は確かだと思われる。

しかし、間宮と伊良湖も同じフレンチトーストを出してくるのには実際参った。

いずれも旨いが、その方向性が異なる。

無難に誉めて、その場をなんとか凌ぐ。

仕事が終わったから新橋か有楽町辺りで夕食を食べに行こうかと思っただが、何故

か艦娘たちが付いてくるという。

それなりの人数になるから、大きな店がいいな。

秋葉原まで出て、肉の万世に行こうか？

あそこなら、団体にも充分対応出来る。

それとも、御徒町辺りでも行こうかな？

悩むな。

モノを食べる時は、誰にも邪魔されずに自由で、なんというか、救われてなきやダメなんだと思う。

中華もいい。

中華街に行こうか？

「司令官。」

振り向くと浜風がいた。

「カープソースを使うお好み焼き屋を知っているんです。如何でしょうか？」

お好み焼き！

その手があったか！

「いいですね。」

「ひなびて古びた店なんです、味は保証します。広島の間人が焼きますから。」

「それは期待出来ます。」

「「「ちよつと待ったあ！」「」」」

艦娘たちが私たちを見つめている。

「どうされました？」

私は問いかけた。

「「「私たちもご一緒します！」「」」」

そういうことになった。

ちなみに、そば入りのお好み焼きはとてもおいしかった。

あの山盛りのキャベツをギュツと圧縮する技術に感服だ。

味噌汁の味噌も広島品の品を使っているそうで、体に染み入る味わいだった。

漬け物もあつさりしてよかったし、おでんの大根や蒟蒻や牛筋も旨かった。

上質な純米日本酒の雨後の月も吞めたし、艦娘たちも喜んでくれたようだ。

よかったよかった。

何故か密着する子がいて、それには困ったが。

明日は浅草に行こう。

なにを食べようかな？

XC：追いかけられて

結局、森駅で待ち構えていた。

函館本線の海沿いにある駅舎。

汽車の外は強く吹雪いている。

青函連絡船で函館に上陸した際に、どこかで捕捉されていたのかもしれない。

ホームにいる追跡者たちは皆荒い息をしており、致し方ないので駅構内にあるピザ屋で軽く食べようと提案した。

なあ、ピザ食わないか、ピザ。

駅前の液晶表示機器は零下五度を示しており、これでは寒い筈だと改めて思う。

雰囲気は険悪で最悪だ。

泣いている娘さえいる。

傍から見れば、愁嘆場だろう。

私の方が泣きたいくらいだが。

懐柔手段であるべきピザも珈琲も、薬味にしては多すぎるほど涙をこぼされていた。
三名。

私を囲む娘たちの総勢。

つまり、我が鎮守府は一切の業務を放棄していることになる。

私は真つ当に正式に休暇を取ったのだが、何故か鎮守府の艦娘たちから了承を得られなかった。

正直なところ、訳がわからない。

なんちやつて鎮守府の存在意義やら価値やら理由やらを考えても、私の休暇が潰されるのには納得がいかない。

民家改造型の狭い基地もどきで常に艦娘の誰かと共にあつて、就寝は艦娘と一緒に部屋だ。

こんな生活が長続きする訳ない。

大本営には以前から改善を訴えているのだが、それはなしのつづてになつてしまつて
いる。

廃墟じみた沿岸の生活に慣れる者もいるのだろうが、私はそんな生活を許容など出来ない。

昔見た英国の番組を思い出す。

とある諜報員が村を出ようとして、ことごとく失敗する話である。

ピザが冷える。

珈琲も冷える。

気温も冷える。

周りの視線も冷たい。

実にたまらん。

逃げた犬を追いかける飼い主でもあるまいに。

或いは、逃げた嫁を追いかける旦那みたいだ。

まさかな。

取り敢えずは、函館へ向かおう。

函館に着いたら、鎮守府へ行く。

鎮守府で夕食を食べて宿泊する。

これらはすべて経費で落とそう。

自己負担させられたらたまらん。

間宮羊羹を各々に一棹ずつやる。

それで今回の逃走劇は手打ちだ。

そうしよう。

それがいい。

冷えきって脂ぎったカチカチのピザへ唐辛子の酢漬けをふんだんにかけて、私は三名の娘にそれらを事務的且つ簡素簡潔に伝えた。

……何故、微妙な顔をする？

札幌にでも行きたかったのか？

小樽の提督はおつかないの、極力会いたくないし、借りを作ったらどんな目に遇われるかわかったものではない。

函館の提督は、よくあんなのと付き合えるな。

ほとほと感心する。

雪の勢いが強くなってきた。

これでは吹雪だ。

そういえば、そんな名前の艦娘もいるな。どんな娘だっけ？

どんどん気温が下がってゆく。

気分が益々落ち込んでしまう。

自由の得難さのため息をつく。

娘たちにかつちりと挟まれながら、虜囚の如く汽車に乗り込んだ。

余市や室蘭方面ではない。

無情にも、上りの汽車だ。

下りの汽車ならいいのに。

気持ち下が下り坂を転がる。

また、あそこへ戻るのか。

狭い、大変狭い箱庭へと。

人形たちと家族ごっこをする日々へと。

不意に、頬をふにふにとつつつかれた。

辛気くさい顔は止めて欲しいと言われる。

誰の所為だ、誰の。

でもそんな表情も悪くないわと言われた。

一体どつちなんだ。

雪が舞う。

私の心も知らずに、雪が舞う。

提督でもないのに、何故私がこんな目に遭わなくてはならないのだろう。

少しは仕事をしろ、あいつめ。
がらがらの汽車が走り出した。

XCI：おつちゃん提督の大阪出張（前編）

こじれにこじれた大阪の鎮守府の件をどうにかすべく、私は早朝に大本營から出張を命じられた。

なんでやねん。

北日本にいる私が何故行かねばならないのか尋ねてみると、以前横須賀の面々が大本營の面々と共に大阪で協議した際に紛糾したという。

東京弁ですかした言い方をしたらしい。

そらあかんやろ。

それじゃまとまるもんもまとまらんわ。

その後も協議を重ねているがボロボロ。

で、白羽の矢が立ったところという訳だ。

いややわー。

ぶつぶつ言いながら私室で古いグローブトロッターの旅行鞆に着替えを詰めていた

ら、艦娘たちの突撃を受けた。

「あんな、遊びに行くのとちやうねんで。」

「提督、関西弁になつていますよ。」

「ほつといてんか。で、なにしに来たん？」

私の護衛をしたいと押し寄せたそうだ。

「大阪に行つてうんざりするような会議をするだけだから、つまらんよ。」

「でも、司令官はおいしいお店に行くんですよね。」

「さてなあ。旨いか旨くないかは人それぞれだし。」

「提督のことだからおいしいお店に行くつもりね。」

結局、騒ぎになった。

籤引きアンバランスの末、鳳翔と間宮が勝利した。

「じゃあ、もう少ししたら出掛けるから一時間以内に準備して。」

慌ただしく走り去る両名。

函館鎮守府は騒然となる。

寝台列車に乗るので、早めに出掛けたいのだ。

今日明日の命令は止めて欲しいんだけどなあ。

仕事っていうのは、なんていうか、事前にきちんと予定を立てて無理なく構築して欲

しい。

余裕があつて、柔軟性があつて、豊かな予算があつて……。

業務の引き継ぎをば大淀や妙高先生に伝える。

これで一安心。

青函連絡船に乗つて青森へ。

乗り換え時間の合間に、駅近くのおでん屋でおばあちゃんの作る料理を味わう。

味がよく染みていて旨い。

鳳翔や間宮も興味深そうに一品一品味わっていた。

ストリート果汁の林檎ジュースや日本酒の豊盃（ほうはい）を買つて、新青森へ。

待ち時間の間に、売店で日本酒の陸奥八仙を購入。

鳳翔と間宮も、青森の食の豊富さに感心している。

弁当は『太宰好み』という品があつたのでそれにした。凝つた内容だ。お茶も買う。

少し狭い座席の東北新幹線に乗つて、一路東京へ。

新幹線はがらがら。

景気が上向くのは当分先のようにだ。

盛岡で少し人が乗つて、仙台で混み出す。

弁当は好評だった。

東京駅に到着する。

流石に人があちこちにいた。

サンライズ瀬戸の乗車時間まで、少し間があるな。

全国の土産物を扱っている場所があるのでそこへ行ってみた。

個人所有の自動車の激減と国が主導する鉄道の強化によつて自動車業界は青息吐息らしいし、高速道路の需要減が輸送関係にも大きく打撃を与えている現状は『道路族』の衰退と郊外型ショッピングモールの停滞を発生させていた。

そうした大型商業施設は昨今、シャトルバスの地域拡大・本数増加並びに過疎地区へのお迎えと出張販売で凌いでいるとか。

結局、輸送関係は現在旧国鉄が強い位置にある。

かといって、廃線が復活する訳でもない。

時代が遡るみたいな感じがしないでもないなあ。

ただまあ、全国名菓を目の当たりに出来るのはありがたい。

鳳翔と間宮がキラキラしている。

試食しながら、日持ちするものを函館へ発送するように箱単位で手配していた。

流石だ。

サンライズ瀬戸に乗車。

岡山で高松行き『サンライズ瀬戸』と出雲（いずも）市行きの『サンライズ出雲』に分離する構成だ。

この寝台列車では車内販売がないので、先もつて買っておいたものを食す。

姫路に到着。

辺りは暗い。

早朝は寒い。

山陽本線で姫路から相生（あいおい）へ行き、赤穂（あこう）線に乗り換え、長船（おさふね）に到着。

駅前タクシーに乗って、悪友の八代目備前正兼に会いに行く。
今、会いに行きますすつか。

当代に於いて、彼はこの国屈指の刀鍛冶だろう。

愛想が今一つよくない彼から、頼んでおいた包丁群を受け取った。

日本刀の備前刀と同じ作り方をした、斬れ味の極めて鋭い逸品だ。

古刀の作刀で打つたと言われても、素人にはさっぱりわからない。

明珍派の兜も断ち割れると豪語されても、ちつともわからんがや。

「お前、嫁が二人もおるんか。」

開口一番、口の悪い友人はそう言った。

途端、顔を赤らめる鳳翔と間宮の両名。

「護衛だ。」

「美人の護衛を雇える程にえろうなつたんじやな、お前は。流石提督じや。」

二名の艦娘は包丁群に魅せられている。

「ほう、わしが打つたもんがようわかつとるようじやな。」

「二名とも、艦娘では相当出来るからな。」

「ふつ、ようわかつとるものために打つのは鍛冶屋の幸せじや。」

「そうだな。土産だ。」

「青森の豊盃と陸奥八仙か。でえれええ酒じやがな。ところで、これからどげんすん

じや?」

「赤穂の総本家かん川本店でしほみ饅頭や三笠を買つて、三宮に寄ろうかなどと考えて

いる。」

「飯はどねえするんなら?」

「赤穂か姫路辺りの予定。」

「そげなら、ここで食ってけ。わしの嫁もそこそ料理が上手い。おい。」

「はい。」

「悪いよ。」

「わざわざ北海道から来たもんをすぐに追い返す程、岡山県人は冷とうねえわ。」

出て来た女性を見て、我々は固まった。

「こいつ、いつの間に結婚していたんだ？」

「あら、遠くからお越しくださって、ありがとうございます。」

「は、初めまして。朝からお邪魔しています。」

「今から朝ごはんを作りますので、ちよつと待っていてくださいね。」

「は、はい、ありがとうございます。」

髪の毛の長い美人。

まさか……。

「ず、ずいぶん美人の奥さんだな。」

「じゃろう。わしの自慢の嫁じゃ。」

「ちなみにどちらでお知り合いに？」

「釣りに行った時に出会ったんじゃ。運命の出会いゆうんじやろ。」

「お、おう。」

共に食事をする事になった。

焼き魚に玉子焼きに味噌汁にご飯と漬け物の朝食。

味噌は新見（にいみ）のものを使っているそうだ。

米は、吉備中央町の農家から直接購入。

岡山県は養鶏が盛んらしく、卵も旨い。

野菜も魚も地元産。

まさに地産地消だ。

「ところで、獄門島に鎮守府があるのは知っているかい？」

「ああ、岡山県がえろう梶子入れしとつたのに、提督がバタバタ次々に死んだとこか。山陽新聞で特集組んどつたわ。知事が呉鎮守府に喧嘩売つとつたな。どげんもこげんもありやせんのに。」

「今の提督は私の同期なんだ。」

「今は死んどらんけえ、でえじようぶじやろ。たぶん。」

「そんなに騒ぎになつたんだ。」

「なんか自称探偵が何人も島に行つて、新しい騒ぎを起こるとるそうじゃ。アホじやわ。」

友人のワゴン車に乗せてもらい、駅に着いた。

「もし包丁の具合が悪かったらすぐに送ってけえ。直すから。」

「わかった。」

「こんな素晴らしい包丁を作っていただいて、ありがとうございます。」

「この包丁で、おいしい料理を作ります。本当にありがとうございます。」

「おう、美人さんから礼を言われると嬉しいのう。わしは嫁一筋じやが。」

「じゃあな。」

「おう。」

播州（ばんしゅう） 赤穂駅に到着。

老舗の店で和菓子装箱単位で購入し、鳳翔と間宮の両名は興味津々の様子で店のお姉さんに質問していた。

函館へ配送してもらう手続きをする。

赤穂線と山陽本線を乗り継ぎ、姫路から新快速で三ノ宮駅に着き、それを乗り換えて灘（なだ）駅に到着。

坂を下って、兵庫県立美術館へ。

今は丁度『横山宏（よこやまこう）の世界展』を展示している。

独自の世界を彼女たちと一緒に鑑賞する。模型も多く展示されて、見応えがあった。その後芦屋の洋菓子屋でいろいろと購入。イタリヤの伝統的な洋菓子を作る店で喫茶し、ここの焼菓子も函館へ送った。

元町へ行き、昼はどうしようとさ迷う。

雰囲気によさそうな洋食屋を発見した。

店内はやや少女趣味的だが、悪くない。

名前は『カリンカ』とある。

ロシア語か？

「これがメニューなのです。」

「ありがとう。」

女給にしては若すぎるような見たことあるような娘が、メニューを手渡してくれた。

「ロシア料理もあるんですね。」

「ピロシキもブリヌイもボルシチもあります。」

ほう、いいじゃないか。

料理を注文する。

「はいどうぞ、熱い内に食べてね。」

八重歯を特徴とする娘がブリヌイを持ってきた。

「パンケーキというより、クレープに近いですね。」

「素朴な味わいが、ロシアの大地を感じさせます。」

「これはクワースよ。」

ちよつと背伸びをしている感じの女の子がロシア風清涼飲料水を持ってきた。

「小樽の提督からいただいたものとはまた味わいが違いますね。」

「こちらは爽やかで飲みやすく仕上げているように思われます。」

「ウハーとガルシヨーチカとピロシキだよ。」

白い髪の女の子がスープと主菜と肉詰めパンを持ってきた。

ウハーは白身魚と野菜のスープ。

ガルシヨーチカはロシア風肉じゃがみたいな食べ物。

ピロシキは肉や茸や野菜を詰め込んだパン。日本では揚げパンが主流だが、この店ではパリッとした皮だ。

昔給食で食べたピロシキを思い出す。

いずれも旨い。

「デザートのマロージナエです。」

どこかの主人公みたいな女の子がロシア風アイスクリームを持ってきた。
濃厚な味わいでおいしい。

これぞまさにロシア流だ。

ロシア人は大のアイスクリーム好き。

私の気分はサンクトペテルブルグだ。

食後、神戸市立博物館で『東山魁夷展』を鑑賞。

皆への土産用に、クリアファイルや小物を購入。

新快速で大阪駅まで行き、シャトルバスに乗ってホテルへ着いた。

チエックインを行い、それぞれの部屋に荷物を置く。

こんなに高級なホテルに宿泊してもよいのだろうか？

東京よりも大阪の方が物価安とはいえ、少し驚いた。

大阪人の心意気なのかもしれない。

夕食は、十三（じゅうそう）の商店街で食べ歩きをしようということになった。

駅近くの路地にある店でまずは名物のミンチカツ。ゲソの塩焼きやどて焼も食べる。

和菓子屋で行列に並び、みたらし団子やきんつばを購入。

天麩羅屋で揚げたてコースを頼み、塩やツユでいただく。

明石焼きを出汁でいただく。

二名は感心しながら食べた。

腰を据えて食べたいと兩名から言われたので、昭和の食堂っぽい店に入る。

馬肉ソーセージに馬肉ハンバーグに馬刺し、蒸し鶏と手作り豆腐のじゃこいっぱいサ

ラダに筑前煮、串カツはお任せでお願いした。

じわりじわりと味わう。

鳳翔も間宮も大阪の底力に感心している。

一口一口じっくり食べて味を覚えていた。

明日はなにを食べようかな……じゃない、仕事を頑張ろう。

XCⅡ：おっちゃん提督の大阪出張（後編）

朝目覚めると、何故か鳳翔と間宮が無表情で私を見つめていた。

思わず、ヒツと声が出る。

彼女たちはニヤリと嗤い、私にどんどん近づいて……。

……夢か。

寝ている間に二名が枕元でじつと私を見つめるだなんて、そんなことがある筈ない。

……あれ？

脱いだトランクスや靴下が見当たらない。

片付けた覚えもないんだけどなあ。

……あつたあつた。

……あれ？

くしゃくしゃだけでも、未使用品？

いやいや、そんなことはないだろ。

商標は福助だし、色も形も同じだ。

……あれ？

疲れているのかな？

気の所為だ。

そうに決まっている。

疑っていたらきりが無い。

馬鹿なことを考えちゃいけない。

部下を信用せずして、なんの上司か。

顔を洗いに、浴槽と手洗い場の合体した小部屋に入った。

昨夜使った歯ブラシが真新しく見える。

いやいや、気の所為だ。

旅行鞆に入れて持ってきた私物だから。

同じ商標の同じ色合いなのだが、微妙に毛先に違和感がある。

待て待て。

そんな筈はない。

ないんだ。

……。

疲れているのか？

この件が片付いたら休暇を取って、青森県か秋田県辺りへ小旅行にでも行こうかな？

爽やかな笑顔を振りまきながら、私の艦娘たちが部屋に来た。

後ろめたさなど微塵も感じさせない。

ほらな、やっぱり勘違いに過ぎない。

疑心暗鬼はやめやめやめやめやめだ。

彼女たちは自前の櫛で髪をやさしくすいてくれたり、蒸しタオルを当てた後で手足の爪を切ってくれたりした。

なんと親切なのだろうか。

少しでも疑った自分自身が恥ずかしい。

さりげなく密着してくる兩名に緊張が絶えなかったのは、修行不足だな。

「あなたにはクンフーが足りないわ。」って言われそうだ。

切った爪をちり紙で包んで何故かポケットに入れた兩名と共に、昇降機でレストランへ向かった。

朝食はホテルのビュッフェ。

色とりどりの料理が豪華に並べられている。

高級ホテルとしての意地があるのだろう。

果物たっぷりのフルーツサンドに焼きたてクロワッサン、ノンホモ製法な低温殺菌で作られた牛乳、伊予の蜜柑がそのまま搾られたジュース、ストレートのトマトジュース、大阪名物ミックスジュース、それに野菜の煮物と濃厚カボチャのポタージュを選ぶ。いずれも旨い。

カツサンドも食べてみた。

足柄の作るものも旨いがこれも旨い。

ソース味って男の子の味わいだよな。

とどめはアップルパイだ。

鎮守府で食べているパイを思い出す。

まるで同じ料理人が作ったみたいだ。

食後のほうじ茶でホッと一息ついた。

鳳翔と間宮も満足そうだ。

無駄に沢山積み上げられていることもない料理は、いずれも美味であった。何故か、鳳翔と間宮の記憶領域がカチカチ音を立てていたような気がする。彼女たちの料理は、この出張を通じてどれだけの高みに昇るのであろうか。

アーンされたのには少し驚いたが。
雛鳥に餌を与える親鳥の気持ちだ。

八時半から始まった会議は初っぱなから難航した。
丁字不利である。

府知事に役所の人、商工会議所の重鎮に地元大手企業の代表や代理人があれこれ騒いでいる。

静岡や神戸があれだけこじれたのだ。

ましてや相手は大阪人。

一筋縄でいく訳もない。

これ、まとまんないんじゃねーのか？

今回は大本営の大淀と文官と舞鶴の提督たちが来ているけれども、彼らも大阪人の勢いに萎縮気味だ。

本音をぶつけ合う戦に慣れていない。

初っぱなから、主導権はあちら側だ。

彼らの視線が来ているように思える。

知らぬ顔の半兵衛ですましておこう。

この状況では下手に喋れんからなあ。共倒れなんてノーサンキューである。

こつち見んな、と言つてやりますわ。

自力でなんとかするべきではないか？

これじゃ、助けるどころの話でない。

丹波栗が使われた栗きんとんをおいしくいただきつつ、周りを眺めた。

嗚呼、お茶がおいしい。

大阪警備府が戦時中にあつたことを引き合いに出し、地元のおつちゃんたちが若い提督たちや大本営の面々を追い詰めている。

なんで先に神戸に鎮守府作つとんとガミガミ言われ、こんだけあちこちに鎮守府作つとんのになんで大阪を後回しにしとんかといちびられていた。

神戸は最初舞鶴とやり取りしてその後呉に手を伸ばしたのだから、舞鶴にとつてはとばつちりもいいところだ。

なんだけれども、上手く切り返せていない。

海千山千百戦錬磨の商人に翻弄されている。

ガミラス艦隊と地球艦隊の火星戦役の如し。

さして進展もないまま、一一時半になった。

もう帰りたい。

帰っていいかな？

……そういう訳にもいかないか。

「飯や、飯や。」

「どこで食べる？」

「ハルカス行こか。」

「お好み焼きでも食べて仕切り直ししよか。」

「いつものとこでええわな。」

「今日はあつこの店に行つてみるわ。」

「おつ、チャレンジャーやんか。」

「ほな、次は一時からやな。」

「あの……皆さん……お待ちくだ……。」

大淀が引き止めようとするも聞く者なし。

ぞろぞろと会議室を出て行く大阪人たち。

呆氣に取られたまま見送る鎮守府の面々。

顔が真っ青である。

アカン。ダメやん。

まるで役者が違う。

これは負け戦だな。

「函館さん、食べに行きましょか。」

商工会議所のおつちゃんに話しかけられた。なんとなく藤本義一に似ている。ぞろぞろとおつちゃんたちが集まり、周囲の中年成分が高まってゆく。

ミドルエイジシンクロ率八〇パーセントつてどこかな。

「他の提督たちはどうしましょう?」

「あないなん、ほっとけばよろし。」

「函館さんは昨日どこで食べましてん?」

「護衛たちと共に、十三(じゅうそう)で食べ歩きました。」

「ほほう、ようわかつとるやないか。あの人たちで十三知つとるもんがどれだけおるか。大阪のことをなーんも知らんもんばかりでは、話にもならんわ。」

「護衛は二名いるのですが、一緒でもよろしいでしょうか?」

「ええで、ええで。大阪のもんはな、普段ケチケチしよつてもいざという時は。ペアツと金を使うんや。」

「せやで、函館さん。」

「飯食つて気分転換や。」

「ここにみると辛気くさくなるしな。」

「ほな行こか。」

ポカンとしている提督たちに目配せし、商工会議所の面々や鳳翔間宮両名と共に昼食へ出掛けた。

会議のあつたビルディングから少し離れた上海家庭料理の店に全員入ると、大きな円卓のある部屋に案内された。

既に織り込み済みか。

会食みたいになつた。

予定調和つて奴だな。

私の役割は何役かな？

おっちゃんが斬り込んできた。

「で、大本営はんは大阪鎮守府のことをどない思うとりますか？」

「前向きに検討はしているみたいですよ。」

「つまりは、本気やないゆうことやな。」

「厳しいでしょう。提督を確保した方が現実的じゃないですかね。艦娘は提督に引き寄せられる傾向がありますから、取り敢えず小さな箱物を作るのもアリかもしれません。」

「なんやかんやと理由を付けて大きく出来ましし。」

「函館さん、大阪に来んか？ あんたさんならわしらのことをある程度わかつとるし、こちらも安心出来るんやけどな。」

「大阪鎮守府が設立されたら、出来る範囲内で助力しますよ。」

「それは函館さんの個人的な好意か？」

「そうです。」

「ところで、誰ぞええ人はおらんかろう？」

「着任待ちの提督もいますから、彼らに打診してみても如何でしょうか？」

「そないなとこかなあ。府知事はアホやけど、これからの大阪のために鎮守府は欲しいとこや。」

「どちらかというと、くだけた感じの提督がよさそうですね。」

「せやせや。偉そうなんはちつとも欲しゆうないしな。」

「こないだの横須賀の若いもんはホンマ腹が立ったわ。何様のつもりやねん。」

「では、午後からはそういう流れで。」

「函館さんもワルよのう。」

「いえいえ、お代官様程では御座りませぬ。」

「そういうことになった。」

携帯端末を取り出したおっちゃんたちが、それぞれ電話をかけた。

こういうしたかかさが提督側にも欲しい。

戦争が終われば、別の戦いが始まるのだから。

だがしかしばってん、そこまで考えている者がどれくらい存在するのだろうか？

人間の敵は、人間か。

先ずはおつまみセットが来た。

七品がみっちり詰まっている。

新緑ザーサイにピータンにアンチョビカレーポテトサラダに菜の花のおひたしに揚げ南京豆、お麩と木耳（キクラゲ）の醤油煮に地鶏の老酒蒸しときた。

小皿の満漢全席、ここに降臨。

いずれも小技が効いて旨いぞ。

ジャスミン茶で喉を潤し、蒸し鶏のパクチー添えをニンニク醤油でいただく。

青菜の水餃子、トマトと卵の炒めもの、レバニラ炒めと次々に来て、わしわしといった。
だいた。

鳳翔も間宮もおいしそうに食べている。

どこか懐かしい味わいのトマトと卵の炒めものをご飯にかけて、中華流卵かけご飯に

した。

白飯をお代わりする人もいる。

「ところで函館さん、今日の夕食はどないします?」

藤本義一になんとなく似た、隣席のおつちゃんが話しかけてくる。

「ホテルの近くでなにか食べようかな、と思っています。」

「そしたら、わしと食べに行かんか? 女房が旅行に行つとつて独り飯はさみしいんですよ。」

「ご好意に甘えさせていただきます。ありがとうございます。」

「気にせんでええよ。大阪人はよそから来た人に、旨いもんを食べてもろうてなんぼですからな。」

とどめはあたたかいお茶に胡麻団子。

白湯（さゆ）の中に白玉みたいな団子が浮いていて、もちもちしたその中に胡麻餡が入っている。

一三時、会議再開。

真面目に討議しただろう鎮守府の面々が、理路整然とした商工会議所の面々の理論に各個撃破されている。

あんなにおたおたしては、いいカモだろうに。

合い鴨肉の燻製もいいな。

七面鳥撃ちになっていた。

大淀が涙目でこちらを見ている。

大破撤退を阻止しなくてはならない。

致し方なし。

拳手した。

着任待ちの提督の話をし、先ずは小型鎮守府を作ってみてはどうかと提案した。

露骨に賛成に回る商工会議所のおっちゃんたち。

狸親爺だなあ。

地元大手企業の面々もまあええかといった顔で賛成に回った。

府知事と役所の面々は渋い顔をしていたが、商工会議所のおっちゃんが目配せで苦々しい顔をしながら賛成した。

大本営も舞鶴も腹芸が出来ないのは大問題だ。

戦後に差し支えるじゃないか。

大湊（おおみなと）の提督の演説を思い出す。

ドイツ人ほく見えるが、度量の大きな指揮官。

根回しも本音のぶつけ合いも腹の探りあいも議論も出来ない提督たちは、戦後をどうやりくりするつもりなのだろう？

議論が出来ない日本人は多いし、上意下達（じょういかたつ）が当たり前とする老人も少なくない。

国際社会が復活したら、そんなんじや生き残れないのに。

戦つてさえいたらいい時代がいきなり終了したら、よくて閑職、悪くて……。

いかんいかん、職分を逸脱してはいかん。

兎も角これで役目を果たしたことになる。

やれやれ。

鉄仮面のあいつ辺りでも推挙しておこうか。

妙な奴だが、面倒見はいいし、料理上手だ。

変な野心もないし、意外と努力家で面白い。

黒潮は確定だ。

建造されて間もないか経験の殆どない大淀も確定だ。函館の大淀に教育させよう。

駆逐艦数名に給糧艦か補給艦一名、軽空母もしくは軽巡洋艦が一名。

そんなとこかな。

疲れきった大淀に近づき、試案的思案を素早く耳打ちする。

何故か顔が赤い。

頑張ってくれよ。

近畿の面々と、丁々発止のやり取りが当たり前に出るようになっていけないのだから。

慢心は命取りだ。

退役艦娘会にも動いてもらって、元艦娘で働けそうな子を鎮守府に入れるか。

大阪の街に艦娘を浸透させ、信頼関係を築き、戦後の受け入れ体勢を強化だ。

忙しくなるぞ。

言葉の戦いが終わって日が暮れる。

商工会議所のおっちゃんと共に、四名でステーキハウスへ向かった。

西部開拓時代風の店内。

おっちゃんは上機嫌だ。

「いやいや、思うたよりもええ展開になりましたな。府知事がセンブリ飲んだような顔をして、溜飲が下がったわ。函館さんにお連れさんも好きなんもん頼んでください。ここはわしの奢りや。通天閣から飛び降りる気持ちですわ。」

「ありがとうございます。私も話がなんとかまとまってよかったですと思います。」

「大阪人が小田原評定でぐだぐだしてもうたるなんて、いつとも洒落にもなりませんからなあ。」

「やはり大阪の人としては、バシーツといきませんと。」

「バシーツといつてドンガラガツシャンてやつてもうてもアカンけどな。」

「そこら辺は、大阪名物パチパチパンチでなんとかしていただかないと。」

「見る？ 見る？ わしのパチパチパンチを？」

「風邪を引きますよ。」

「なに、改源飲んだら大丈夫や。」

「わし風邪引いてまんねん、ですか？」

「せやせや。」

「うはは。」

鳳翔間宮が呆然としているように見えるがほつとこか。

「アカンアカン。別嬪さんたちを放りっぱなしじゃ、大阪人の名折れや。なに食べます？」

私は三〇〇グラムのウエルダンなりブステーキと、同じく三〇〇グラムのシヨットガンハンバーグを頼む。

おっちゃんも同じものを頼み、鳳翔と間宮は一〇〇グラムずつを頼んでいた。

「ご飯はガーリックライス。

スープも付いてくるとか。

「おや、淡路島の牛乳もあるんですね。」

「西部劇ゆうたら、牛乳でっさかいに。」

「主人公が牛乳を頼んだら、むさいおっちゃんたちに絡まれる訳ですね。」

「せやせや。バーボンのチェイサーで牛乳を飲んだりするのに、からかう訳や。」

ステーキとハンバーグが来た。

大迫方。

ステーキにはバターがドンと載せられている。

付け合わせのフレンチフライに玉葱の炒めものもドカンと皿で存在感を誇示していた。

肉肉肉。

「この玉葱も牛乳同様、淡路島産や。」

まごうかたなき牛肉だ。

ウオーツ、私はアウトローだ！

腕つぶしひとつで西部を回る、危険な香りの男だ！

肉肉肉、って男の子だよな。

旨い旨い旨いぞーっ！

おっちゃんとお真つ黒けっけな会話をして、情報交換する。

生きた情報は大切だ。

観光誘致もしておく。

はるばる来てね函館。

おっちゃんと別れ、ホテルへ戻る途中の果物屋でおばちゃんに捕まった。

「その別嬪さんたち連れとる兄ちゃん、ミックスジュース飲んでかんか！」

勢いに押されて、皆で頼んで飲む。

目の前で手早くジュースを作るおばちゃん。

なかなか手際がいい。

旨い。

フルーツ王国を観光している気分だ。

「フルーツサンドも買うてき。旨いで。」

「あの……さつき食べてきたばかりで……。」

「若いもんがなにゆうとんの。これからハッスルするんやろ。よっ、このスケコマシ。」

「いやいや、彼女たちは職場の同僚ですから。」

「ええなあ、そんな別嬪さんと一緒に仕事が出来て。仕方ないなあ、もうすぐ閉店やし、半額にまけとくわ。買うて買うて。」

「じゃ、じゃあ買います。」

「よし、オマケつけたる。」

果物を含め、けっこう買った。

なんだか大変なことになっちゃったぞ。

まあ、食べられないこともないか。

ホテルに戻る。

フルーツサンドはおばちゃんが自慢するだけあって、とてもおいしかった。

紅茶と一緒にじっくりと味わう。

鳳翔と間宮もおいしいと言った。

よかった。

密着してくるのはよくないがな。

両名ともさりげなく一緒に風呂に入ろうとするので、少し困った。

翌朝。

四時に目覚める。

「ちよつくら未明の大阪を楽しむべか。

着替えてそつと部屋を出たら、何故か鳳翔間宮兩名と廊下で遭遇する。

何故だ？

ホテルを出て真つ暗な街をぶらぶら歩く。

流石にこの時間帯に出歩く者は少なめだ。

寒いですねと、二名は私に腕を絡ませる。

ぼつん、と灯りが見えた。

あれこそ文明の光だ。

うどん専門店とある。

入るとなんとなくどこことなく若本規夫に似た店主が、暇そうに新聞を読んでいた。

「いらつしゃい。」

渋い重低音が響く。

私は素うどんとちくわの天麩羅を頼んだ。

鳳翔と間宮も同じものにした。

ちくわを揚げる匂いが店内に満ちてゆく。

「お待たせしやした。」

再び響く重低音。

素うどんはそれなりにコシがあつて、おつゆもわるくなかつた。

ちくわの天麩羅は揚げたてなので、食べごたえがある。

半分はそのまま、残りはおつゆに入れて食した。

「毎度あり。」

三度の重低音。

不思議な感じ。

ホテルに戻つて入浴し、さっぱりとした。

大淀から送られていたメールに返信する。

ホテルの朝食は和食にした。

炊き込みご飯のかやくご飯。

素麵を使った温かい汁物で、野菜沢山の搔き玉にゆうめん。

ミニお好み焼きうどん入り。

大根と人参の紅白なます。

本物の奈良漬け。

炭火でしつとりやわらかく焼いた若鶏に、甘辛いタレをかけた新子やき。

サヨリとオコゼとマダコの刺し身。

旨し！

ロビーに来ていた商工会議所の人たちに挨拶する。

大阪自慢の和菓子洋菓子を大量にいただき、「ほなまたな。」と別れを告げられた。

フロントでシロネコムサシの箱を購入し、詰め込んで函館へ配送した。

ホテルからシャトルバスで大阪駅。

山陽本線で大阪駅から新大阪駅へ。

五分の移動。

新大阪で蓬莱の豚まんの冷凍版を購入し、クール便で配送してもらった。

鳳翔と間宮から誘導され、ついつい京都の出町柳駅周辺もおいしい店が多いと話した

ら、両名が真顔で京都に寄ろうと言い出す。

失言だった。

京都駅まで新快速で二五分の旅となる。

奈良線の東福寺で乗り換え、叡山電鉄で北上した。

出町柳商店街で惣菜やミンチカツや赤飯やわらび餅を購入。近くの鴨川で食す。旨し。

……一体私はなにをやっているのだろう。

……まっ、いつか。

出町柳駅前のケーキ屋で、懐かしい味わいのサヴァランとババロアに紅茶を添えて食べる。

オマケの焼菓子付きである。

お店のお姉さんと少し会話。

鳳翔と間宮にとっては刺激的なようだ。

今回の出張が彼女たちの糧になると嬉しいぴよん。

なんてな。

京都駅の地下で湯葉と阿闍梨餅を箱買いして函館への配送の手続きを行い、切符を購入入して新幹線に乗った。

やれやれ。

米原（まいばら）を過ぎた辺りで兩名が私に誘導尋問を仕掛けるが、のらりくらりぬらりひよんでかわす。

弥次喜多道中記ではないのである。

名古屋飯まで加えたら滅茶苦茶だ。

説得力がどんだん欠けてはいるが。

小田原もパンや蒲鉾や外郎（ういろう）などが旨いのだが、すつとぼけた。

鳳翔と間宮の追及力は高い。

冷や汗を少しかいた。

東京に到着。

駅舎そばの百貨店で鎌倉の鳩サブレを大量購入して、函館に配送してもらった。

東北新幹線の発車時刻まで、まだ少しは余裕がある。

さて、どこかで適当に昼飯でも……。

「浅草に行きましょう、あなた。」

「それがいいですわね、あなた。」

ガンだな。

謀られた。

適当にお茶を濁そうと思っていたのに、山手線の神田から銀座線に乗り換え、浅草に行くことになった。

浅草。

銀座線の終着駅で浅草線の駅でもあり、東武スカイツリーラインとやらにも接続している。

さあどつちですかどつちですかと、普段は温厚な彼女たちが餓狼の視線を突き刺してきた。

致し方なし。

いつもの洋食屋に行くか。

しばし歩いて裏通りの店。

こじんまりとした隠れ家。

中に入る。

店内はなんだか少女趣味的な感じになっていた。

あれ？

これなんて既視感？

「よっ。」

無愛想な店主が出迎えてくれた。

女の子たちの声が聞こえてくる。

あれ？

「新しい子を雇ったのか？」

「まあな。なにを食べる？」

「今日のお勧めはなんだ？」

「うちはなんでも旨いぞ。」

「それは昔から知っているよ。煮込み雑炊は出来るか？」

「済まん。あれは今やっていない。」

「ガーンだな。出鼻をくじかれたよ。」

「じゃあ、カニクリームコロッケ定食と各種付け合わせにしておけ。味は保証付きだ。

ビーフシチューとカニグラタンと牡蠣フライも食べてゆけ。時間は大丈夫か？」

「大丈夫だ。任せるよ。」

「よし、決まりだ。お連れさんたちも同じでいいか？」

「はい、お任せします。」

「はい、お願いします。」

「これ、土産の陸奥八仙と豊盃（ほうはい）だ。」

「おう、どちらも青森の酒だな。お前にしては気が効いている。」

「ぬかせ。」

「では待っている。すぐに支度にかかる。」

「おうさ。」

店主が厨房に去ってから、鳳翔が口を開いた。

「あの……。」

「はい。」

「いつもあんな感じなんですか？」

「いつもあんな感じなんですよ。」

「とても仲がよろしいんですね。」

間宮がそう言って微笑んだ。

「はい、こちらは自家製漬け物と玉子焼きと味噌クリームチーズと鰯(ぶり)大根と明太子の粕漬けです。こちらは唐黍茶(とうきびちや)です。」

頬に絆創膏を貼った、活発そうな少女が前菜を持ってきた。

どこかで見たような気がする女の子。

彼女は私に向かって、ウインクした。

さあ、おいでなすつたぞ。

いきなりの変化球が来た。

和風の中にさりげなく洋風を混ぜる。

日本人お得意の和洋折衷な和魂洋才。

明治の先人たちも驚くような品揃え。

小鉢にみつしり入った漬け物はさっぱりしていて、ご飯の到着が早く待たれる。

玉子焼きもふんわりしていておいしい。

味噌クリームチーズは酒の肴にもよさそうだ。

鰯大根は出汁が染みていて旨いぞ。

明太子の粕漬けもやわらかく深い。

これはたまらぬ。

エビスの生ビールも吞んじやおう。

追加注文して麦スカッシュを吞む。

本日は業務終了閉店時間であるぞ。

ワードナの事務所より閉店が早い。

鳳翔と間宮が目を白黒させている。

両名も岐阜の井戸水を頼んでいた。

若葉のしぼりたて生酒の冷酒仕様。

若葉の仕込み水もテーブルに届く。

これらは吞まずにはいられまいて。

「あの、ここは洋食屋ですよね？」

「変化球があつて、面白いでしょう。」

唐黍茶は玉蜀黍（トウモロコシ）の香りがガツンと来て、残り香が強い。

「あ、あの、味噌汁とご飯です。」

おどおどした巨乳娘がラーメンの丼鉢と茶碗を置いてゆく。

間宮があら？ という顔をした。

飲み物を頼もう。

私は彼女に声をかけた。

「あの、すみません。」

「は、は、はいっ！」

「烏龍茶ください。」

「わ、わかりました！」

ラーメンの丼鉢に入った味噌汁。

鳳翔間宮両名が啞然としている。

「カニクリームコロッケとホッケフライと牡蠣フライの盛り合わせよ。シチューとグラ

タンはもう少し待ってね。これで三人分だって、て……店主が言っていたわ。」

気の強そうな感じの娘が大皿を置いた。

コロッケとフライの盛り合わせである。

サクサクの金色の衣は正に黄金聖闘士。

これぞまさにアナザーデーメンション。

別世界に誘われる異世界転生転移戦士。

ギョラクシアンエクスプロージョンが体の中で炸裂している。

タルタルソース万歳！

む、これはたまらぬ。

おいしい、滅茶苦茶旨いジャマイカン・ダニンガン。

「ホイサツサー、お待たせしました、こちらはカニグラタンとビーフシチューです。」

「すみません、ご飯のお代わりください。」

「はい、ご主……じゃない、お客様。」

メイド服を着た悪戯っ子っぽい娘が、グツグツ音を立てている器を持ってきた。

このシチューは味のグレートホーンだ。

居合いの光速拳が私を撃ち抜いてゆく。

グラタンも旨い。

積尸氣冥界波が体を直撃だ。

箸が進む、箸が進む、止まらない、止まらない。

味の暴走機関車がミステリートレインになって、銀河鉄道のトレーダー分岐点だ。

「最後は静岡の緑茶と豆かんだ。」

とどめは店主自らが持つてきた。

近くの老舗に対抗するような品。

思いっきりの変化球に苦笑する。

甘味あつさり深みのある味わい。

豆と寒天の盛り合わせに意表を突かれる。

簡素簡潔な甘みが五臓六腑に染み渡った。

苦すぎないお茶が豆かんの旨みを強める。

「どうだった?」

「実に旨かった。」

「それだけか?」

「どの子が嫁さんだ?」

「馬鹿言つてんじゃねえよ。そっくりそのまま返してやる。」

「今度函館に来てくれ。ご馳走するよ。」

「それは楽しみだな。うちの娘たちも連れてゆくから、覚悟しておけ。」

「当方に迎撃の用意ありだ。」

「よかろう。ならば精算だ。」

旧交をあたため、旨い店に立ち寄れた。

課せられたノルマもなんとか達成した。

よがんすよがんす。

さ、けるべ。

東京駅近くの百貨店に入っている崎陽軒で、シウマイ弁当と冬季限定の金目鯛シウマイ六個仕様と釜炒り茶ブレンドを購入。

新幹線が走る。

大宮を過ぎた辺りで包装を剥がした。

弁当のおかずはシウマイ五個に鶏の唐揚げ、焼き魚、玉子焼き、蒲鉾、筍の煮付け、昆布の佃煮に紅生姜だ。

うん、旨い。

最後に干しアンズ。これがいいんだな。

鳳翔と間宮は読書をしている。

様になっていて絵になる姿だ。

前者は『夜食テロから開始する異世界レストラン生活』、後者は『くまクマ熊ヌヌース！』を読んでいた。

どちらも小説投稿サイトの『小説家になつちやつたりして』で好評連載されている作品だ。

『辺境伯の悪妻』や『魔王様のリストラクチャー』、『働くことを求めない迷宮のマスターは眠りを強く求める』や『異世界小料理屋』、『夜に微笑む月明かりの姫』、『異世界から帰還したら享保年間』、『引き籠っていたニートは家と一緒に異世界転移しちやつていた』なども面白い。

東北新幹線が北上する。

やがて、新青森が見えてきた。

駅の売店で土産を買って、奥羽本線に乗り換えて青函連絡船に乗れば函館だ。

思えば遠くへ行つたもんだ。

現在、鎮守府の厨房は三人の腕利き料理人に任せているが、アクの強い二人と気の弱い一人というなんとも奇妙な構成だ。

パリのオテル・リッツで修行した有沢さんは気難しい人で、確かに料理は名品揃いののだがあちこちの店を流浪している。

何故かじつと観察されていることが多い。

呑みに誘うと喜んでついてきてくれるので可愛い一面もあるが、割と強引なところもある。

葡萄酒にうるさく、その内欧州へ行くつもりらしい。

渡航費用を稼いでもらう名目で、しばらくはうちの艦娘たちに料理を教えて貰おう。

『カレー戦争』の生き残りである鹿ノ谷さんは、元日本料理界で名を馳せた一級料理人。

権威に楯突いたため、流転の料理人になってしまった。勿体ない。実に勿体ない。

眼帯と口にくわえた葉巻型プラグを特徴とし、『無法板の練吉』と自称している。

複数の刺身包丁と地雷を使う『地雷包丁』や肉をバラバラにする『白糸ばらし』、それに火炎放射器で魚介類を炙る手法など、そのケレン味溢れる料理法は血の気の多い艦娘たちの心を捉えて離さない。

本人も子供好きなので、長くいてくれると嬉しい。

彼が手早く作る、炒飯と焼き飯の中間みたいな阿仁平ライスも旨かった。

正月に作ってくれた鳥取県西部の名物『小豆雑煮』は、やさしい味わいで彼の人が柄がしのばれる。

小豆の煮汁にやわらかい丸餅の逸品で、駆逐艦たちが絶賛していた。

『暗黒カレー』も旨かった。

カレーにうるさい艦娘たちも納得の、絶妙な辛さだった。

すべての比叡が彼の教えを請うために押し寄せた時は驚いたが、彼女たちもまた求道者なのだろう。

このアクの強い二人に対し、李さんはとても気が弱い。

料理は間違いなく上手い。

どこかの店の料理長でもおかしくなくらいの腕なのに、自己評価が低すぎる。何故だ？

下拵えは丁寧だし、気遣いも素晴らしい。

艦娘からの支持も絶大だ。

最初に作ってもらった広東粥は今も忘れられない味で、現状では彼の定番になりつつある。

もちもち中華パスタの猫耳朶（マアアルトウオ）は猫の耳たぶ型の麺に筍や海老や海

鼠（ナマコ）や鶏肉が使われていて、艦娘たちは感激していた。彼も長くいてくれると嬉しいなあ。

明日はなにを食おうかな？

最近開店したトラットリアに行つて、娼婦風タリアテツレもいいなあ。あそこはトマトとモツツアレツラの料理も肉料理も大変おいしかった。ンまあーい！ つていうのもアリかな。

新青森に着いた。

鳳翔と間宮はなにやら紙片を持っている。

買い物リスト？

につこり笑う両名に急かされた。

やれやれ。

XCⅢ：気の弱い料理人

李さんは無骨で馬鹿正直で少し愚鈍で、だけれども料理人としてはとても素晴らしい腕前を持っています。

少年時代の彼は学校でも目立たない少年で、大きくなってからはちっちゃな料理店でひっそりと働いていました。

毎日毎日馬鹿丁寧に下拵えする李さんは店の主から毎度毎度怒鳴られながらも、それなりに日々生きていました。

そんな彼の日常が壊れ始めたのは、深海棲艦が国の沿岸で暴れ始めたからです。

黒と白に彩られた異形の魔物は次々に海軍の精鋭を破り、貨物船を拿捕してどこかに持つていつてしまいました。

そのため、貧富の差が激しい国内は益々その状態が酷くなり、憤った人たちが裕福な商店や百貨店などを襲うようになりました。

国内資本、海外資本お構い無しです。

やがてそれは内戦につながり、国は荒れ果てるようになりました。

李さんは仕事を失い、海に程近い場所で粥を売ってその日暮らしに勤しむようになります。

ある日のこと、彼は漁船の船長から強引に誘われて海に出ます。

一攫千金を狙った船は深海棲艦の襲撃で呆気なく大破し、李さんは海に投げ出されました。

彼は『嗚呼、これで私はもう死ぬんだ。』と思いましたが、運よく艦娘の部隊に救助され保護されました。

彼女たちは職場へ戻ります。

そう、食の宝庫北海道へと。

函館鎮守府へ突然来た李さんは言葉が通じなくて、大いに嘆き悲しみました。

そこへ、右目に眼帯を付けて葉巻型プラグをくわえたおっさんが近づきます。「お前、なにが出来る？」

李さんは目を見開きました。

彼の国の言葉だったからです。

彼に声をかけたのは、最近鎮守府の食堂で腕を振るっている鹿ノ谷さんでした。

外見は漫画の悪役みたいですが、料理に真摯で腹ペコ艦娘たちから厚く支持されてい

るおじさんです。

よその鎮守府へ料理指導を行ったり、北海道での各種催しへの参加、教育放送の『今宵の料理』の撮影に出掛けたりと近頃多忙な鳳翔さんと間宮さんを助ける形で、ちよつこし気障つたらしい有沢さんと厨房で活躍しています。

ちなみに有沢さんは、葡萄酒とチーズを求めて道内各地へ出掛けていました。

割とフリーダムな人のようです。

「料理が少し作れます。」

震えながら、稀代の料理人は答えました。

少しどころではなくチート級の腕前を持つ李さんでしたが、彼にはそんな意識が少しもありません。

家族を含む周りから日々怒鳴られてばかりで、自分自身に自信のない性格になつていったからでした。

「ほう、なら粥は作れるな。」

鹿ノ谷さんの左目が鋭くなり、李さんは心底震え上がります。

「は、はい。作れます。」

「よし、ならば今作れ。」

呆然とする李さん。

「どうしたのだ？ お前は料理人ではないのか？」

「は、はい、作ります。作らせていただきます。」

「なにか手伝えることはありませんか？」

その時、提督がやって来ました。

黄色い三角巾に一澤帆布のエプロンを装備しています。

黄巾賊ではありません。

某ライトノベルに出てくる団体の人もありません。

夕張市から頼まれて、新型の黄色いハンカチの試験運用中なのでした。

相変わらず、冴えないおじさんです。

李さんは提督を見て、何故か自分自身が仕えるべき人物に会えたのだという天啓に打たれました。

たぶん、それは勘違いです。

だがしかしばってん、意外と思ひ込みの激しい李さんは提督のためにおいしいお粥を作ろうと決意しました。

挽き肉、葱、生姜（しょうが）。

これらを使った中華粥を、李さんは一生懸命作ります。

「無駄のない動きだ。」

眼帯おじさんが言います。

「包丁捌きが見事ですね。」

おっさん提督が言いました。

「おいしそうですね。」

赤青の正規空母が言いました。

おや？

一名はこの鎮守府の艦娘ではないようです。

いつの間にか、艦娘たちが食堂に集まっていました。

提督が粥をおいしく食べる姿を見て、李さんは武者震いしました。

そして。

『ここが自分の居場所なのだ』と、彼は勘違いしてしまいました。

おいしそうな匂いに釣られて、どんどん艦娘たちが食堂に来ます。

鹿ノ谷さんから厳しく指示され、李さんは自慢の腕を振るいます。

この時彼は間違いなく幸せでした。

料理の腕を必要とされたからです。

丁寧丁寧に作りながら、李さんは次の料理を頭で組み立ててゆきました。

その巧みなる調理法を見てニヤリとする、幾つもの視線に気付かぬまま。

X C IV : 鉄仮面提督の着任

「おい、これはなんの茶番だ?」

書物が四方に整然と並べられた書齋。

高そうなソファにふんぞり返り、マホガニー製のテーブルに足を投げ出した男が不機嫌な声を上げた。

男は鉄仮面をかぶり、革のジャケットとズボンを着ている。

鍛え上げられた体は日々のたゆまぬ努力の結晶であるが、チンピラじみた粗野な振る舞いが違和感をもたらしていた。

テーブルと同じくマホガニー製の机で書き物をしていた、品のよい老齢の男性が微笑みつつ鉄仮面の男に話しかける。

「貴方には異世界転移を行っていただきます。」

「異世界転移だあ?　なんだ、そりゃ?」

「最近の若い方々に大人気の方法です。」

「意味がわからん。」

「つまり、貴方を別世界に送り込むということです。」

「死人をわざわざ送るのかよ。たいそうなこつたな。」

「今、貴方は生きています。」

「仮初めの命じゃねえのか？」

「きちんと甦らせてありますよ。すべてを過（あやま）ちなく。」

「誤りじゃねえのか？ 俺は甦らせてくれだなんてお願いはしてねえぜ。」

「世界が貴方を求めているのです。」

「俺より優秀な駒なんぞ、幾らでもあるだろう？ 俺が言うのもなんだが、身内だと兄貴

たちや弟の方が余程優秀だと思うがね。」

「他の方々は適合しなかったのです。」

「俺だって、適合したかねえな。」

「貴方には期待しています。」

「元々無い袖は振れねえぜ。」

「抑止力になっていたきたいのです。」

「はっ、報酬はなんだ？ かなり貰わなきゃやってらんねえぜ。」

「裕福な生活をお約束しましょう。それとちよつとした祝福をお渡します。」

「俺は俺の出来ることしかしねえ。」

「それで充分です。ではよい旅を。」

「あの爺、訓練校に行かなきゃいけねえなんて聞いてねえぞー！」

男は千葉県にある訓練施設で提督になるべく特訓を受けていた。

幸い知能が高く記憶力もよかつたために、彼は滞りなく訓練を消化出来た。

ものごつつい鉄仮面を被っているにも拘わらず誰にも突っ込まれないのが不思議ではあったが、あの胡散臭い老人がなにかマヤカシをしたのではないかと男は睨んでいる。

そんな、ある意味平和な日々。

施設に来た駆逐艦たちからかわれながらも、それなりに充実した日々。

無防備な人型妖精兵器の柔肌は男を戸惑わせ、ポンコツぶりを発揮する。

彼の前世ではなにもかも信じられないような、豊かな世界に感じられた。

この世界に住まう人たちからすると、まだまだ不満の多い世界であるが。

ある日の早朝。

武術訓練所裏手にて彼が上半身裸で暗殺拳を修行していたら、顔に火傷痕のあるロシ

ア女性の訓練生から声をかけられた。

どちらも、とても堅気には見えない。

世紀末的な戦闘が今にも繰り広げられそうな、そんな一触即発の雰囲気。

歴戦の陸戦将校のような女性が、会話の火蓋を切った。

「お前は人を殺すことに躊躇いがない。そうだな、ヤポンスキー。」

「そりゃ、俺は暗殺者だからな。」

あつさりど、自分自身の生業（なりわい）を暴露する鉄仮面の男。

途端、大笑いするロシア女性。

「よかろう、タヴァリーシチ。お前に私との朝食に同席することを許可する。」

「別にいらねえよ、そんな権利。」

「ふっ、ヤポンスキーは謙虚だな。だが、それがいい。軍曹！ 新たな同志のために、焼

きたてのブリヌイと上質のウオトカを持ってこい！」

何人ものロシア人がどこからともなく現れて、椅子とテーブルを用意した。

白く清潔で精緻な刺繍が施された布がテーブルにかけられ、皿とカトラリーとクワー

スが即座に出された。

ロシアの発泡飲料水を飲んで、男は内心何故コイツに気に入られたんだと考える。

やがて、ロシアのパンケーキともクレープとも言われるブリヌイがどさどさもたらさ

れ、二人は勢いよく食べ始めた。

本場ロシアで醸されたウオト力を呑みながら。

他に男が比較的仲よくなったのは、少し奇妙な中年だった。

『妖精に愛されるおっさん』と揶揄される彼は訓練施設の教官たちと極めて仲よくなり、外出のどさくさに紛れてデートまで敢行していた。

短期間での早業に皆おののく。

ありえない所業であつたから。

訓練を終えた男は提督二種の資格を得たが、着任する鎮守府は決まらなかつた。

そのため、彼は大本営で他の着任待ち提督たちと共に書類作業や演習時の補佐提督などとして仕事に勤しむことになる。

小樽の提督となつたロシア女性から卒業祝いだと贈られた荷物には各種桃色映像作品が満載されていて、案外免疫のない男は酷く狼狽した。

ある日、男は函館鎮守府の提督になつたあの奇妙な友人から連絡をもらった。

新規に設立される、大阪鎮守府の提督に就任して欲しいとの要請だ。

彼は即座に引き受ける。

退屈な日々とうんざりしていたのだ。
血と硝煙にまみれた日々が懐かしい。

「なんだ、こりゃ？ ずいぶんとぼれえじゃねえか。」

男は指定された場所に着いてぼやいた。

ボロいには前世の生活で慣れてるが、それだって限度はある。

戦前建てられた商家に、鎮守府の看板をかけただけらしい。

大阪湾に面した、ウォーターフロント的な立地の古い建物。

艦娘の出撃は問題なさそうである。

煉瓦を使った倉庫と漆喰を使った江戸風の蔵が付いていた。

気分は江戸川乱歩である。

ひよっこりと電人Mや人間豹などが出そうな、そんな雰囲気さえあった。

商家と言えば聞こえはいいが、半ば朽ちて放棄されたような建物だった。

これが、鉄仮面の男の基地となる建物なのである。

少し前に奈良でも盛んなレトロ風喫茶店に改装される予定だったが、深海棲艦の侵攻により計画は頓挫。

以降、打ち捨てられた場所である。

凝った建築物であるが、維持費が高くなるためにどないすると関係者たちを悩ませていた曰く付きの代物だ。

大阪鎮守府としてうってつけではないかと選定され、近日改装予定である。

予定は未定であり、決定ではない。

それが如実に屋内を表現していた。

昔の大阪商人が贅を凝らした建物。

今はガラクタに近い状態であった。

「掃除すらししていねえのかよ。」

彼は素早くマイ割烹着を装着する。

おさんどんのおばちゃんに見えた。

溜め息をつくくと、鉄仮面の男はガラクタを片付け手際よく掃除を始める。

彼は存外器用らしく、てきぱきと清掃作業してゆく。

いつの間にか男の足下に小人たちが集まって、作業を手伝っていた。

彼らは妖精。

魔王に忠誠を誓う異世界の生き物。

窓や少し開けた戸の向こうから、幾つもの視線がそれを眺めている。

所々蜘蛛の巣すら張っていた厨房を綺麗にして、男は北海道産の馬鈴薯や玉葱の皮を剥き出した。

道南産のななつぼしが炊飯器で炊かれている。

どれも函館の提督から就任祝いで届けられたものだ。

ジャツジャツと挽き肉を炒め、炒めた野菜と共に煮込んでゆく。

どうやらカレーを作るつもりらしい。

水道瓦斯電気は幸い工事済みだった。

最低限の工事だけ済ませ、その他はほっぽっていたようだ。

各社に連絡は行われていたので、すぐに使えてありがたい。

「後三〇分くらいでカレーが出来るぞ。」

外に向かつて、男は言った。

彼にとって気配を感じるのはたやすいことだ。

手早くサラダも作ってゆく。

鉄仮面に割烹着。

実に怪しげな感じであった。

ひよい、と三名の駆逐艦が鉄仮面の男の前に現れる。

「なーなー、おっちゃんがうちの司令はんなん？」

「そうだ。」

「うちは黒潮や。よろしゅうな、司令はん。今日晩はお好み焼き作ったげるから、楽しみにしとつてな。」

黒髪のおきゃんな感じの娘が微笑んだ。

続けて、桃色がかった髪色の娘が敬礼して言った。

「私は不知火です。ご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。暗殺拳をお使いのとこのですが、大変興味があります。よろしければ、後程詳しく教えてください。」

最後にツインテールな栗毛の髪色の娘。

「やつと会えた！ 久しぶりね、司令。今度こそ逃さないわ！ 改めまして、陽炎よ。一生よろしくね！」

一名ばかり台詞が怪しいけれども、これでなんちやつて鎮守府としての形式が整ったのであった。

函館で研修している大淀が着任すれば、本格的始動となる。

後は給糧艦か補給艦一名と軽空母か軽巡洋艦一名が着任すれば、戦力として一応整うことになる。

駆逐艦があと数名来れば尚よい。

一名だけの艦娘と暮らしている提督に比べたら、ずっとましな待遇だ。

鉄仮面の男は土産のすあまと回転焼きの御座候を艦娘たちに与え、彼女たちは関東の餅菓子と赤あんと白あんのこなもんを堪能した。

一方。

妖精たちは鎮守府を魔改造し出していた。

その内、暮らしやすい空間になるだろう。

カレー。

それは魂の料理。

懐深き心の料理。

艦娘たちがおいしそうに食べている。

新しい匂いが漂ってきた。

野菜炒めだ。

鉄仮面に割烹着という妙ちくりんな姿のゴツい男が、中華鍋を振るっている。

カボチャの煮つけも出来たようだ。

「誰か取りに来てくれ。俺は飯を作るので忙しいからな。」

三名に向かって言い放つ世紀末的男。

立ち上がって手伝いに向かう娘たち。
今ここに、大阪鎮守府が始まるのだ。
少し締めまりが悪いが、致し方がない。

黒潮が作ったお好み焼きを夕飯として食べた後、千里中央アニメーションが製作した新作の『こなもん!』を、提督含む皆で鑑賞となった。

丁度、第一話だ。

大阪府出身の監督脚本家演出と声優でかもされる野心作で、サンテレビを始めとする全国放送で展開されている。

十三（じゅうそう）の商店街にある、小さなお好み焼き屋で繰り広げられる物語だ。半年間のオリジナルアニメーションということで、期待の高い作品でもあった。

何気ない日常を丹念に描く良作とすべく、関係者たちは今日も修羅の道を歩む。

男は駆逐艦たちに密着されながら、前世では見たことのない娯楽に引き込まれるのだった。

引き込まれるのは娯楽だけでないと知らぬままに。

鉄仮面提督が着任しました。

XCV：見込まれた男

提督つてのは、確か軍事施設か訓練施設に通つて資格を得るんじゃないのか？
なんの知識も技能も無い俺が提督？

ここが鎮守府だって？

冗談にしか思えない。

つい三日前に連れ込まれた家の、自分に充てられた二階の部屋でため息を吐く。
まるで牢屋だ。

窓は外から板が打ち付けられていた。

部屋の外には必ず誰かがいて、こちらの気配を常時窺っている。

拉致監禁されちゃいましたよ、つてレベルではないぞ、これは。

ここはけっこう豪華な作りのお屋敷。

部屋や廊下などに良質の木材を使用している。

勝手に住み着いて問題にならないか？

もしかして、放棄された家屋なのか？

ベッドに腰掛けた俺の両隣には女の子が二人。

一見羨ましく見えるかもしれないが、なにをいしてかすかわからない女の子たちが傍にいても嬉しいもんかね？

「どうしたの？ ダメよ、そんなんじや。あたしをもーつと頼ってくれていいのよ。」

小学生の高学年くらいにしか見えない女の子が、長い黒髪を揺らしながらそう言った。

「そうですよ、提督。貴方には、私たちのいいところをもっと深く知ってもらわないといけないんですから。」

黒髪の女の子が夢げに微笑む。

中学生くらいにしか見えない。

二人に連行され一階に降りた。

「ホイサツサー、皆さん、ご飯ですよ。」

ピンクのウィッグを付けた女の子が、エプロン姿でにこにこしている。

彼女も中学生くらいにしか見えない。

中学生の火遊びにしては剣呑過ぎる。

大きな食堂。

高そうな調度やテーブル。

笑う女の子。

学生が撮る映画みたいだ。

「ちよつと。ぼんやりしていないで、早く座りなさいよ、この新任提督。」

「あの、そんな風に言われるとこの人……じゃなくて司令も困っちゃうよ。」

「まつ、とにかくみんなでちやつちやつとご飯を食べちやおうよ、司令。」

巨乳中学生たちがそう言った。

ヤベーよ、ここ。

滅茶苦茶ヤベエ。

俺、犯罪者になっちゃうのか？

監禁されているようなもんだけど、警察からしたら逆だよな。

俺が警官でもそう思う。

肌が白すぎて病的な感じさえる女の子が、焼き魚や玉子焼きや味噌汁などを興味深そうに眺めていた。

彼女は出会ってから、一言も口をきいていない。

どうやら、喋ることが出来ないみたいだ。

改めて確認したが、やはり二階の窓は外側からしつかりと板を打ち付けられていて、そこから出ることなど出来はしない。

僅かな隙間から外を眺めても、人が通る気配すら感じられない。

ここはどこだ？

彼女たちは何者だ？

先日の夜、背後からスタンガンを喰らって気づくとここにいた。

彼女たちは艦娘のつもりらしいし、口調も真似ているようだが、テレビや雑誌で見た子たちとはなんとというか雰囲気が違う。

そんな気がする。

困ったなあ、と思っていたら突然なんだかゾクツクとして振り向いた。

「逃げないでくださいいね。私たちには提督が必要なんです。」

淡々と高校生っぽい彼女はそう言った。

答に窮していると、言葉を重ねてきた。

「私でよかつたらお相手しますよ。その代わり、他の子に手出ししないでください。」

「お、俺はそんな人間じゃない。」

「じゃあ、お風呂に一緒に入りましょうか。」

「い、いや、そんな欲望はない。」

「口封じを兼ねてです。妹と一緒に入るようなものですよ。気にしないでください。」
気にするよ！

結局、口で負けて一緒に入浴する。

風呂が広いのに密着されて困った。

添い寝は全力で拒否したが、夜中にぐずる子がいて、なだめている内に添い寝することとなった。

俺は手を出していないし、彼女から手を出されてもいない。

火星の悪魔に誓ったっていい。

俺は巻き込まれただけなんだ。

彼女たちはなにをしたいのだろうか？

一体、俺にないを求めているのかね？
謎だ。

翌日の昼食後。

家の外に出ることを許された。

指揮官兼同伴者として出撃だ。

みんなで死地に赴く寸法だぜ！

覚悟なんて完了しないままで！

まったくイヤんなっちゃうよ！

ため息しか出てこないっっちゃ。

……。

哨戒任務とやらを行うらしい。

皆でぞろぞろと屋敷から出た。

俺が閉じ込められた建築物は、漁港がすぐ近くに見える距離の場所にあったことが判明する。

なんてこった。

艦娘だと自分自身を主張する彼女たちは、防弾チョッキに手甲脚甲胸甲と兜とジユラルミンの楯などを装備している。背中には煙突やらなにやらが付いた錆びの目立つ金属のなにかを背負っていた。

艦装って言うんだっけ？

ま、本物ではないだろ。

腰にはそれぞれ、ひのきの棒とかトンファーとか短剣とか刀とかメイスとかをぶら下げていた。

皆装備がバラバラで、流浪の傭兵部隊にも見える。

近接戦闘でも行うつもりだろうか？

赤黒い斑点がなんとなく気になる。

右手に、銃のようななにかを握っていた。

箱に砲身が付いた代物で、玩具に見える。

普通の漁船にしか見えない船舶に全員乗り込み、ポンポン音を立てて船は出航した。

「スカル戦隊、抜錨！」

ドクロの旗を掲げ、命知らずの娘たちが緊張した面持ちで周囲を警戒する。

魚群探知機みたいなものを真剣な顔で見つめる娘もいた。

穏やかな海。

誰もいない海。

人っ子一人見当たらない。

日本は何時、完全復興するのだろうか？

少しぼんやりする。

「司令官さん、指示をください！」

OLみたいな服に胸甲を当てた姿の、高校生っぽい子がいきなり俺に言ってきた。

おかつぱ頭の彼女は真剣な顔つきだ。

大いに戸惑う。

艦娘ごっこにしちや危なすぎないか？

兎に角、命令っぽいことを指示する。

「周囲を警戒しつつ、鎮守府周辺海域を一周。その後、帰投せよ。」

「了解しました！」

肌の白い娘はレオタードみたいな服を着て顔よりずつとでかいなにかを被り、マントと杖を装備している。

本格的だな。

誰のコスプレだろう？

時折、杖を振り回していた。

ラジコンらしい機体が空を飛んでいる。

ガソリンか電池で飛行しているのかな？

あの杖がコントローラーか。

最近の玩具は実によく出来ている。

短機関銃みたいなエアガンだか空気銃のようなものを装備した眼鏡っ子が、恐ろしく

こわい顔で辺りを見回していた。

幸い、何者とも遭遇しなかった。

船は何事もなく、港に帰港する。

生きて帰れてよかったと、つくづく痛感した。

隣り合わせの死と青春やね、君たちは！

「では私たちは入渠してきます。」

彼女たちは、屋敷に隣接している入浴施設へと去っていった。

さて、俺は昼寝でもするか。

「修復剤が欲しいところよね。」

「以前喰らった傷がもう少しで治ります。」

「アンタは前に出過ぎ。もっと自分自身を大切にしなさい。」

「建造は出来ないし、せめて海域回収（ドロップ）出来たらもつと楽なのにね。」

「艀装はどこかに落ちていないかしら？」

「弾薬を早急に入手する必要があります。」

「魚雷は一本もないし、まともに作動する機関砲も殆どない。艀装は錆びだらけで整備すら出来ない。ないない尽くしね。」

「コマツタワネ。」

「逃亡艦娘でも来てくれないかしら？」

「燃料と鋼材とボーキサイトも涸渇気味だよ。そろそろどこかとなぎを行うべきじゃ

ないかなかな？」

「『彼女』に頼ってみる？」

「それは最終手段だよ。」

「そうよ。『彼』を失ったら、私たちの存在意義が失われる可能性だってあるわ。絶対逃がしちゃうダメよ。」

「そうね。二人も三人も同じだから、いざという時は任せてね。」

「今度の人は安心感があります。」

「ご主人様にご奉仕しないといけないですわいな。」

「その手付きはエロいから止めなさい。」

「おや、興味津々なのに隠すのですか？」

「ワタシハシテミタイワ。」

「その顔つきもイヤらしいから止めて。」

「絶望したっ！ 気持ちを誤魔化す仲間に絶望したっ！」

目覚めると夕方にはまだ早い時間だった。

あいつらにかすていらを作ってやろうか。

台所で生地を混ぜ合わせ、オーブンでじっくり焼く。

驚く娘たちを見て、一矢報いた気分浸れた。

娘たちは喜んで食べてくれたが、エロいことを言ってくる子がいたので辟易する。興味があるのはわかるが、程々にしなさいと注意した。

当面は艦娘ごっこに付き合うか。

どうなるかはわからないけどな。

XCVI：提督懇親会

提督懇親会は大体親馬鹿めいた艦娘自慢に始まって、大抵は血迷った乱闘で終わる。

本来の意味を失った面は多々あるものの、連絡協議会の側面は一応生き残っていた。

「うちの磯波の奥ゆかしい可愛らしさ。あれこそ、大和撫子よ！」

「叢雲と曙と霞と満潮の四名をデレさせることこそ漢の本懐也！」

「知っているか？ 名取って二人きりだとけっこう可愛いんだ。」

「白露と一番争いして無邪気に抱きついてくる可愛さときたら！」

「鳳翔と差し向かいで料理を食べる。これこそが提督の本領よ！」

「龍田さんが不意に夢げに微笑んでキュンと来たのは恋の予感！」

「白雪はまさに姫！ 綾波敷波兩名と共にぶにぶにしたき所存！」

「礼儀正しい初霜は、朝を迎えても折り目正しい艦隊の鑑です！」

「ふっ、初春の雅な喋りは俺のハートを熱く燃やす燃料である！」

……いっしょ。

駆逐艦はあらゆる基地の基幹戦力で遠征要員で、好奇心旺盛で猪突猛進な存在だ。

彼女たちが恋愛に興味を持って進撃を始めたなら、戦艦でも勝つのは困難だ。

その彼女たちが本気になってかかったら、大抵のおっさんは簡単に陥落する。

恋愛経験のない童貞ならば、チョロインもびっくりの容易さで堕ちてしまう。

いやはや、駆逐艦は最強だぜ。

会合はなんとか終わった。

ちよつと聞きなさいと、私が『隣の部屋の人』『やさしいあの子』『いつも温かい』『よく見かけますね』『夜中の入浴』の五話を終えると皆静かになったので、ほつとした。

今回この函館に集まった提督二種の同期たちと共に、李さんの作る本格絶妙的中華を味わう。

貪るように旨い旨いと食べ尽くす勢いのこいつらで、欠けている者は今のところ存在しない。

食事中も情報交換する。

最近の内陸県の鎮守府要請が強くなっているそうだが、名目はどうするつもりかね？
観光名所じゃないんだぞ。

民家転用の通常家屋みたいな鎮守府もどきが多い中、我々の出来ることはあまりにも少なく求められるものはあまりにも多すぎる。

皆に函館鎮守府を羨ましがられた。

彼らの秘書艦や護衛艦としてここに来た艦娘たちは、現在厨房で特訓中だ。

フレンチを得意とする有沢さんは時折葡萄酒に短い手紙を同封して送ってくるが、ただ道内をうろろろしている。

困った人だ。

眼帯と葉巻型プラグで悪役めいた風貌の鹿ノ谷さんは李さんの補助をしたり、鳳翔間宮の手助けをしたりと三面六臂の活躍だ。

日々のご飯がおいしくなることはとても大切なことだから、訪れた艦娘を鍛えることは重要だ。

戦後も、その技能は役立つに違いない。

「そう言えばですね。」

集団の中では比較的若い提督が口を開いた。

「なんだ？」

「あの件、つてどうなったんでしたっけ？」

「あの件とはどの件だ？」

「呉の新人提督がやらかした件です。」

「嗚呼、あの駆逐艦に君が運命の人だって迫った件か。」

「地方でのんびりやっていた子を急遽呼び寄せ、着任後数週間で艦隊旗艦に抜擢したとかでいろいろ騒ぎになっていたよな。」

「遠征要員をいきなり取られたって、元の所属の提督がかなり怒っていたっけ。」

「そうそう、提督二種のなんちやって提督な俺たちは、なんだかんだで一種様の命令に逆らえないんだよ。」

「で、その提督様はその駆逐艦を育成中に行方不明になったと聞いたが、その後発見されたのか？」

「『この展開を私は予想していた。』って言いながら、危機を迎えた艦隊の前に現れたそうだよ。しかも、稀少艦の正規空母を引き連れてさ。それなんてヒーロー？」

「えーと、滅茶苦茶な指令と私情入れまくりのごり押しの結果、作戦後に左遷されたと聞いたけど奴は一体なにがしたかったんだらう？」

「第六の先輩がかなり怒っていたんだよ。『あげな身勝手な奴は、南でも北でもええけえ飛ばしとけ！』とお冠だったね。」

「結局、その渦中の駆逐艦はどうなったんですか？」

「提督の求婚を断ったって聞いたぞ。」

「あれ？喜んで受け入れた、と聞きましたよ。」

「呉鎮守府への攻撃が未然に防がれたのは事実だし、彼の関わった作戦が結果的に成功

したのも事実だ。後、左遷が実施されたのも事実だけど、他の情報は錯綜していてよくわからない。先輩も何故か口を濁すし、箝口令が敷かれているみたいだ。」

「ヤダネー、自分のことしか考えない奴は。」

「なんでそんな奴が提督になれたんだ？」

「偉いさんの息子らしいね。」

「所詮はコネかよ。嫌だな。」

「噂では有能だったらしい。」

「秘書艦の戦艦がかなり振り回されたと聞いたよ。」

「提督の指示が疑問を覚えるものばかりだつて、妹にぼやいたと聞いたぞなもし。」

「頭のいい人つて時に訳のわからないことをするけど、それに部下の艦娘たちが引つ掻き回されたつてこと？」

「まあ、そうなるな。たぶん。」

土産はトラピストクッキーに間宮羊羹と煎餅と月餅の組み合わせ。

煎餅は鹿ノ谷さんが一枚一枚丁寧に焼いたもので、月餅は李さん渾身の菓子だ。

何度も何度も何年も発売延期されるゲームソフトの話で盛り上がりながら、同期の連

中は帰って行つた。

連絡を今後も密にすること並びに、戦後に艦娘たちが平和に暮らせる状況作りを推進することを決める。

獄門島の提督が、少し痩せたように見えた。

XC VII：境界の守り手

少し時計の針を巻き戻して。

鉄底海峡解放戦。

正式な記録は処分されたか破棄されたかで全容の判明しない戦闘だったが、量産型艦娘を大量投入しての『捨て艦戦法』が一躍有名になった。

関わった提督の過半数が殉職ないし行方不明になり、生き残った提督が次々に事故死を遂げたり退役して消息不明になったりして追跡調査の困難な事案でもある。

おっさんたちを主原料にした量産型艦娘の大量投入は強靱な深海棲艦たちを疲弊させ、捨て艦戦法による被害は攻守双方に大打撃を与えていた。

深海棲艦一艦隊に量産型艦娘の艦隊が幾つも襲いかかり、それは幕末の志士を取り囲

んで滅殺する新撰組隊士の如きだった。

但し、量産型艦娘は経験の無さから容易に被弾し、驚く程あっさりとなぐられる。

未期的消耗戦の様相を呈した戦闘は互いの忍耐力を試す行為と墮しており、指揮する提督もされる量産型艦娘も一部を除いてまともな感覚が麻痺していた。

大量供給されるから才なき新兵は使い潰してよいのだという妙な屁理屈が提督たちに蔓延し、中の人がおっさんだと知りながら彼女たちに手を出す倒錯的な人物が何人も現れた。

量産型艦娘の中には、元とされる艦娘と差異が出る者もいた。

『もどき』とか『混じり物』とか、そうした符丁が使われていた形跡は見受けられるものの、詳細はわかっていない。

「あの島風率いる龍驤と隼鷹と最上の部隊は厄介だ。」

「青葉率いる部隊も厄介よ。」

「羅針盤を狂わせて引き込んだ連中を全滅させるのは難しくないが、いかんせん数が多すぎな。」

「二日に二〇部隊近くは壊滅させているんだけどね。」

「潰しても潰してもまたやって来るのはどうにかならないか？ 駆逐艦は兎も角、空母

や戦艦たちが疲労を訴え続けている。」

「疲労がポンと抜ける薬を沢山入手したから、それを使って。」

「それで、敵本陣は判明したのか？」

「ええ。多大な犠牲を払った末に。」

「その犠牲は無駄にしない。打撃艦隊の編成を急げ。私が直接指揮を取って急襲する。」

「私も出るわ。」

「私と同じ艦種とはいえ、お前を主力に回すことは出来ないぞ。」

「陽動に回るから大丈夫。大破の艦娘を量産して、作戦の遂行を支援するわ。」

「どういう風の吹き回しだ？」

「たまには貢献しないとね。」

「殊勝な心がけだ。いつもこうだと嬉しいのだがな。編成はどうする気だ？」

「私とあの子の二名で攪乱するわ。」

「あの娘か。使いこなすつもりか？」

「使いこなすんじゃないなくて、共に暴れるのよ。任せといて。攪乱は得意だから。」

「よかろう。許可する。」

「ありがとう。」

「あの戦艦は自由奔放過ぎます。」

「戦力を遊ばせる余力は既がない。撤退前に置き土産をくれてやる。ならば、あれらを使うのも悪くない。あくまで予備兵力であり、主力の我々に対して直ちに影響はない。」

「ですが……。」

ズシンズシン、と大きな音。

「この本部も、然程もたんな。」

「悔しいです。量産型如きに。」

「二時間後に総員出撃。本部は破棄する。お前たちの活躍が我々の勝率を上げるのだ。顔を上げる。最後まで諦めるな。人間の傲慢さをへし折る絶好の機会だ。敵指揮官たちの首を取れば、我々の勝ちだ。」

「我々の海の為に。」

「そうだ。海を汚す輩に鉄槌を下すのだ。本隊は任せたぞ。」

「御意。」

「なんだ？　なにが起こっている？　何故本陣が露見したんだ？　偽装は完璧だった筈だ！」

「提督、既に最終防衛線を突破されました。あと数分で、肉眼圏内に入ります。」

「直衛艦隊はなにをやっていたんだ？ 俺は死にたくないぞ！ 脱出の準備を！ ……」
おい、返事をしろ！」

「それは無理だな。」

「な……せ、戦艦棲姫にレ級!？」

「よくも我々の海を汚してくれたな。貴様には聞きたいことが沢山ある。来てもらおうか。」

「ふ、ふざけるなあっ！」

パンパンパン、と乾いた音。

「拳銃弾程度ではどうにもならんよ。お前の部下は誰もいない。さあ、来るんだ。」

「や、やめろおっ！」

「量産型艦娘をどこで作っているかも吐いてもらうから、覚悟はしておけ。」

「な、なにをする？ ぐわっ……。」

「お前たちが量産型艦娘へ日常的に投与していた、疲労がポンと抜ける薬だ。副作用も後遺症もないのだろう？ 素晴らしい薬だな。」

「あっ……ぐっ……。」

「吐かせないようにしろ。連れてゆけ。」

「あらあら、もう終わっちゃった？」

「呆気ない程にな。例の部隊がない。」

「もしかして、ここは本陣じゃないの?」

「いや、場所は合っている。提督たちも身柄を拘束した。何人が取りこぼしたようだがな。頑強に抵抗している高練度の部隊は、どうやら独自に活動しているようだ。」

「どうするの? このまま余勢をかって、そっちまで襲う?」

「止めておこう。防衛線を下げて、そこに来た本国の艦娘を叩く。本国が本腰を入れる前に撤退を完了させなくてはならない。」

「殿軍（しんがり）は?」

「私と有志で行う。」

「立候補するわ。」

「どうしたんだ? やけに積極的だな。」

「戦うことが嫌いじゃないってことよ。」

「まあ、いい。我々三名とその娘がいれば、増援なぞ物の数ではない。」

「ええ、悪夢を見せてあげましょう。」

「よし、ここにいる全艦、私に続け! 移動を開始する!」

鉄底海峡解放戦は鎮守府側深海棲艦側双方に多大な犠牲を強いた後、ようやく終焉を

迎える。

捨て艦戦法はあまりにも無駄が多すぎると内外で批判が相次ぎ、それに関連して量産型艦娘の開発計画も中止させられて結果的に頓挫した。

XCⅧ：夜のひむか亭

今艦娘の間で人気のテレビ番組は、公共放送を自称する放送局の日曜歴史絵巻『おんな領主トラトラ』である。

異世界召喚されたトランティア・トラエスト・トラマナが否応なく巻き込まれる策謀と血みどろの物語で、脚本にケン・ウルムチを抜擢した野心作だ。

主人公の心情を丹念に描写しつつ、普通の人間が海千山千な百戦錬磨の政治家や貴族たちに翻弄されて次々に仲間や身内や大切な人々を失ってゆく絶望は視聴者から非難轟々嵐の只中だ。

特に第三話では主人公へ好意を寄せている有能系幼馴染みが無情無惨に殺される展開で、苦情が電話手紙電報ネットの合計二万件を超える事態となった。

『ヒロイン無能無双』とか、『ヒドイン』とか、『なんにも出来ない癖に泣くのは一人前だな』とか、『泣けば済むと思ってるじゃねーの、こいつ』とか、『根回しも出来ず交渉も出来ず部下の育成も出来ず、何故領主になった』とか、『こんな駄目領主に仕えるこ

と自体が死亡フラグだよな』とか、『脚本家がなにを主人公にさせたいのかよくわからん』とか、『害悪系主人公は新鮮だが、視聴者のストレス解消には寄与していないと思う』とか、『主人公が間抜けで味方は次々殺され、敵がチートだらけの無理ゲーってバグだら』などと主人公叩きが絶えない。

ケン・ウルムチはこの作品に自信を持っていると取材に答え、問題しか起こさない放送局長は乾坤一擲（けんこんいつてき）の作品だとしている。

近い内に打ち切りになるだろうと囁かれているが、艦娘たちにとつては新鮮で斬新な作品らしい。

次々に仲間が死んでいるのになんの手も打たないのはなにかの布石だろうかとか、一見無能領主に見える主人公だけど実は経験値を溜めて一気に反撃に出るのだとか、害悪主人公には実は隠された能力があつて近々発動するだろうとか、ずいぶん深読みしている。

君たちが何故楽しみながらその番組を見ていられるのか、私にはよくわからないよ。

函館駅から程近い場所にある酒場。

『ひむか亭』という名のひなびたバー。

私はいつもの情報収集のため、単独で店に行った。

ここはやややこしい関係の店なので、艦娘もフローレンシアの猟犬も東欧の森林狼も風魔の劉鵬（りゅうほう）も連れてこれない。

未成年の連中は連れて行けないからな。

「やあ、よく来たね。」

髪を短く切り揃えた女性店主がやわらかく微笑む。

「大阪では大車輪の活躍だったそうじゃないか。」

「耳が早いですね。」

「情報屋だからね。」

「まずはサツポロの生ビールをもらいましょうか。」

「私はもらつてくれないのかい？」

「どさくさに紛れてそういうことを言わないでください。」

「ふふふ、半分冗談だよ。」

「半分本気なんですよ。」

「狙った獲物は逃さない。」

「それは現役時代の話でしょうに。」

「少しは乗って欲しいね。」

「乗ったらそのまま本当にしてしまうんでしょう？」

「そうさ。その通りだよ。」

「輸入量は増えていきますか？」

「なんの？ 全体の？ 間諜の？」

「大陸系ですか？ 欧州ですか？」

「輸入は現在好調。物価もそろそろ下げられるんじゃないかな。政府もデモや暴動はこりごりだろうしね。間諜対策は必須の筈だけど、政府関係者が次々に蜂蜜を食べている。」

「海老で鯛が釣られているんですか。」

「贅沢したいから役人になりたいって人間は、古今東西どの国にもいるからね。」

「外務省はかなりやられているんですか？」

「事務次官級は大丈夫だけど、出入りしている人間や大物の秘書や食い詰め系の左遷系で有能な人物などが狙い撃ちされているね。日本は間諜対策が全然出来ないってのは伝統なのかな。有能な人材も派閥や学閥で無駄にしているし。保身ばかり考えている連中が頭だと、先の大戦の二の舞だぞ。柔軟性のない組織なんて、狡猾で気の長い連中のいい餌食だ。それがわからないとは情けないにも程がある。」

「厭な伝統ですが、訓練を受けていなければ、普通の会社員なのか諜報員なのか見分けがなかなかつかないでしょうね。」

「問題は他にもある。提督は今のところ大丈夫な者が殆どだが、鎮守府の事務方や関係者が何人か抱き込まれた。」

「それで、どうになりました？」

「君の大切な大切な大淀に聞いた方が早いだろう。二重スパイにしたらしいよ。たぶん失敗して、山か海を選ぶことになるんだらうけど。」

「エスピオナーージュかコンゲームって感じですか。」

「チツプは自分自身の命さ。」

「ところで、去年も食べた煮込み雑炊は食べられますか？」

「ああ、あれかい。残念ながらもうやらなくなつたのさ。」

「ガーン！」

「そこで驚くのかい。まったく君らしいよ。」

「では豚の生姜焼き定食と豚汁をください。」

「豚と豚がかぶっているけど、いいのかい？」

「貼り紙に、本日のオススメとありますよ。」

「そういうところだけは相変わらず目敏い。」

「ガーン！」

「君の驚く点が私には皆目見当がつかない。」

「煮込み雑炊を特別に作ってもらえませんか？」

「それはやらないって、先程言っただろう。」

「ガーン！」

「その言い方って、流行りなのかい？」

「おいしゅうございました。」

「よかったよ、口に合って。」

「流石ですね。」

「デザートも食べていきたまえ。」

「何故、看板を引っ込めるんですか？」

「今日はもう上がりだからさ。」

「何故、鍵をかけるんですか？」

「邪魔が入らないようにしているのさ。」

「何故、私の隣に座るんです？」

「そばにいないと食べられないだろう。」

店の前に複数の気配が現れた。

「おやおや、これからがいいところだというのに。残念無念だね。」

「また来ますよ。」

「そうだね。今日と同じく勝負下着を身に付けておくから、少なくとも来る数時間前には教えてくれたまえ。」

「わかりました。」

「女性関係に気を付けるんだよ。」

「どちらの、ですか？」

「両方さ。決まっているだろう。」

「はは、厳しいことです。」

「五寸釘を打ち込まれないようにしたまえよ。」

「心得ております。」

「雪が降ってきた。彼女たちを待たせるのも悪いから、早く帰って寝たまえ。」

「では。」

「ああ。」

冷えきった店に女が一名いる。

冷えきった心のおんながいる。
その手には……。

XCIX：リツちゃんはお嫁さんに転職しました！

律は記憶に難があるらしい。

未明の海岸で彼女を見つけた時は大変驚いた。

この寂れた漁村で『筋肉中年艦隊』の一員として周辺海域の安定を図っている私だが、正直この展開は読めなかった。

漁業ギルドもびつくりだ。

クランの皆も驚くだろう。

一糸まとわぬ彼女は病的に色白で胸が大きく、とても美しかった。

いや、今も美しいのだが、その時私は一目惚れしてしまったのだ。

高校生くらいの彼女を嫁にしたいなどとぬかせば皆からどんなことを言われるかわかったものではないので、取り敢えず紳士的に振る舞うことを決めた。

「……………はどこですか？ 私は……………誰？」

彼女の第一声はそれだった。

可愛い声だ。

短い黒髪の愛らしい顔立ち。

首をかしげる姿も又可愛い。

「お前は私の恋人だ。忘れたのか？」

「えっ？ 私は貴方を知りません。貴方など見たことがありません。」

「まあ、その内思い出せばいいさ、律。」

「リツ？ それが私の名前でしょうか？」

「名前も忘れてしまったのかい、律？ 私は悲しいよ。」

「思い出せそうにありませんし、貴方が恋人とはとても思えません、よろしくお願いいたします。」

「ああ、大丈夫だ。問題ない。」

そう、時間なら沢山ある。

学生時代に習った心理学を総動員して、この美少女を私の嫁にするのだ。

記憶障害とは都合がいい。

くくく。

かつて私の愛した女性の名前を、お前に与えよう。

持てる力をすべて使い、お前を我が手中に収める。

くくく。

律は意外とすんなり私の脳内設定を受け入れた。

あまりにも都合がよすぎるので怪訝に思ったが、彼女も心細いのだろう。

妻にやさしくするのも夫の義務だ。

よかたいよかたい。

他人の戸籍を上手く入手出来たのもよかった。

『戸籍屋』に頼んだだけはあるな。

お陰で、彼女は女子学生になれた。

来月から高校生として通学予定だ。

現在、編入試験のために勉強中也。

律と漁に出掛けると、深海棲艦が出てこないのありがたい。

そのために、我が『筋肉中年艦隊』の面々からは女神扱いだ。

私としても収入が上がるからとても嬉しい。

クランでの階位が上がり、発言力も増した。

未明の海岸を克蘭の仲間がうろろするようになったのには少々苦笑するが、あいつらも必死なのだろう。

目付きがヤバかった。

今度、休みを取って明治村まで足を延ばそうかな？

犬山駅から送迎バスに乗ってゆつくり行くのも悪くない。

味噌カツや大須ういろ、あちらの名物のモーニングなどを食べ歩くのもいいな。

前に食ったモーニングはゴツかった。

老いた夫婦のやっている古びた喫茶店だったが、サンドウィッチに味噌汁に南京豆に蜜柑に代用珈琲にポテトサラダに素うどんに煎餅に貰い物とかいう餅菓子まで付いてきた。

このご時世に豪気なこった。

律とあそこの老夫婦みたいになりたいものだ。

オスがようやくやく眠った。

しかし、毎日飽きないものだ。

任務に支障をきたさないから歓迎ではあるのだが、最近このオスがいないとさみしく

思う自分自身がいて驚く。

これはなんなのだろうか？

仲間との通信を今夜も行う。

何度か仲間たちで構成される鎮守府もどきへ誘われたが、断ってよかった。

……よかった？

この感情はなんだ？

よくわからない。

オスが私に向けてる感情もよくわからない。

ほぼ常時発情しているのはわかるが、そんなに私に魅力はあるのだろうか？

セーラー服に、体操着に水着。

オスは何故かそれらの服を着ると大喜びするのだ。

先日はメイド服とやらを入手したオスが大喜びして大変だった。

洗濯回数が多すぎるとすぐダメになるだろうに。

通信教育を受けていたお陰で、学生生活はそれなりに順調だ。

艦娘らしき者もちらほらいるが、気のせいに違いない。

私の姿はとある巡洋艦に似ているそうだ。

オスがよれよれの艦娘コレクチオンを私に見せて、似ていないかと訊かれたがわから

ないと答えておいた。

記憶喪失とは便利な設定だ。

一度学校に函館の提督が来た時は緊張したが、節穴だったのでホツとした。

私をじつと見つめた時はドギマギしたが、すぐに別の子たちを眺めていた。

同じ組の玖珠耶が「冴えないおっさんだよね。」と言い、その友人の久万野が「本当ですわね。」と相槌を打っていた。

「て……じゃなくてダーリンに知らせとこつと。」

玖珠耶が携帯端末で素早くメールを打つ。

久万野が呆れた顔をしていた。

平和だ。

オス……じゃなくて男を紹介して欲しいと何人かの同級生と上級生に頼まれたので、オスの仲間を紹介した。

結果に責任は持てない。

英国からシヴェリア鉄道を使って留学したという、金髪碧眼な美少年のマルフォイヤーが女子に囲まれていた。

生意気な雰囲気だが、世話好きで人気がある。

教官……間違えた、教師が教室に入ってきた。

「シズカニシナサイ！ ジュギョーヲハジメマス！」

渋い感じのおっさん教師だ。

なんとなく宇宙人ぽい感じ。

……まさかな。

オスの顔を見つめる。

さつきまでは荒武者。

間抜けな寝顔を見る。

満ち足りた顔だった。

その首に手を伸ばす。

「りっ、愛しているぜー。」

……寝言か。

オスの顎を撫でて、私も眠りにつく。

いつまでこの生活が続くのかと、不安と期待を抱きながら。

オスのぬくもりを体内で感じながら。

明日は裸エプロンを試してみようか。

C : チョコレート大戦

南無三、爆散！

チエストーセキガハラ！

今此処に疾走するサツマヘコ！

追いかける元タケダのイイ隊！

ナマリダマが赤い鎧を次々貫き、命がハライソに向かって突撃する！

トクガワ死すべし、慈悲はなか！

ブツタ斬り、ブツタ斬り、突撃！

ヘイシバンザイ！

突撃と捜査の合間に、アメリカンチエリーパイと珈琲とドーナツだ。

うむ、ここのダイナースの食べ物ほうまかね。

よかたいよかたい。

……変な夢を見た。

疲れているのかな？

そう言えば、年末の忘年会は大変だった。

火を吐く子がいたり、キャストオフする子がいたり、ルパンダイブする子がいたり、兎に角滅茶苦茶だった。

私は料理ばかり作っていたな。

……まっ、いつか。

新年会も無茶苦茶だったなあ。

キャストオフする子がいたり、剣舞をする子がいたり、薔薇を飛ばす子がいたり、余興でこわい話をしたら、泣き出す子もいたな。

『七尺様』に『コトリカン』に『煙夢』に『サマーハウス』。

今度は大人しい実話にしよう。

「提督、これが新しいヒロポンです。」

「ほほう、これがですか。」

ここは厨房。

デュラレックスの硝子のコップに入った橙色（だいだいろ）の液体を、私はじっと見つめる。

鳳翔が頷いて言った。

「『広島島のポンカンジュースに負けないように、鹿児島県阿久根市産の文旦(ぼんたん)果汁と熊本県産温州(うんしゅう)蜜柑果汁だけで作った、天然果汁一〇〇パーセントの素敵なジュース』です。」

「名前が長いですね。」

「別名は、旦州です。」

「名前だけだと、なにがなんやわかりません。」

味はすこぶる旨かった。

函館鎮守府に於ける艦娘筆頭は大淀だ。

函館の提督をそもそも見出したのは鳳翔だし、候補生の頃にころっとやられたのは間宮に長門に妙高に加賀だが、実質的に鎮守府を取り仕切っているのは彼女だ。

大淀の世話になっていない者は鎮守府内におらず、鎮守府外でも世話になっている者は多数存在する。

時折大本営に出掛けて物理的に説得することもままあるが、よくあることなのでやられる者しか気にしない。

たまさか青いドレスを着て剣を振り回しているが、なにかの隠し芸か余興に使うのだ

ろうとこちらも誰も気にしない。

実際、彼女が金髪碧眼の姿になって余興をしたり、メイド服を着てご奉仕する姿は鎮守府の風物詩である。

不動の第一秘書艦であり、第二秘書艦は週単位で交代するものの、彼女の地位に揺らぎは無い。リシユリユーもビックリだ！

チョコレート。

シヨコラ。

チョコラーテ。

シヨコラーテ。

南米原産の豆を使った甘いもの。

板チョコ一枚が今は三〇〇〇円。

いつの間にか超高級品になった。

まだまだ舶来品の嗜好品は高い。

個人輸入雑貨商の美濃柱さんに頑張ってもらっているが、まだまだ高額な状況は続くだろう。

恋する艦娘たちからカカオの輸入をせっつかれているが、私に巨大な権利など無い。

大阪商工会議所からもカカオの輸入について打診が来たが、そういうことは商社に言つて欲しい。

古流武術でもたしなんでいそうな美濃柱さんと会話する。

彼は四〇代後半に見える人物で、「時間とお金をご用意いただけましたら、フアベルジエの卵をご用立てすることも可能です。」と言つている商人だ。

欧州に直接赴いて買い付けを行い、オリエント急行やシヴェリア鉄道などを駆使して各国の利になる行動を行う。

これつて、男の子の浪漫だよな。

とまれ、彼は現地の最新情報を有する稀少な人物だ。

幸い、美濃柱さんは李さんの中華料理がお気に召したようで、トマトと卵の炒めものや青椒肉絲に舌鼓を打ち鳴らしている。

その李さんは、よその鎮守府の艦娘たちに包围されていた。

気の弱い彼はオドオドしつつもテキパキ手順を進めている。

名料理人にして通訳の鹿ノ谷さんが苦笑していた。

提督や憲兵や整備員や事務員などの胃袋を握り締めるべく、彼女たちは料理を学ぼうと殺到したようだ。

美濃柱さんは料理人の有沢さんとイタリアで出会つて、おいしい料理に二人で舌鼓を

打ったそうさ。

なにをしているんだ、あの人。

いつの間に大陸へ渡ったんだ？

美濃柱さんに間宮羊羹と月餅を土産として渡し、再会を約す。

美濃柱さんが去った後、フロイントシャフトの内海さんに会う。

彼はアニメーション製作会社の社長兼海外販売代理店の元締め。

彼によると、舶来品と嗜好品は当分高額なままだろうとのこと。

顔で笑って目が笑っていない内海さんには得体の知れない部分がある。

まあ、これも個性だな。

二人でアフリカ産の珈琲を堪能した。

血相を変えた大淀が鎮守府内を突っ走っている。

嗚呼、あれは大阪鎮守府へ着任予定の大淀だな。

彼女は『研修生』の腕章を付けている。

はっちゃけた鎮守府だから大変だよな。

あとで、ボンタンアメでもあげようか。

メリケン艦娘たちが微妙な顔をしつつ、私に質問を投げかけてきた。『バレンタインデイ』とはなんぞや、と。

元々は日本の菓子業界が販促の一環として広めた風習だと説明する。

恵方巻きは最近定着させられた風習だと説明した。

ついでにテイラミスやナタデココやパンナコッタの話もしておく。

いずれも定番としては定着しきれなかった食べ物だ。テイラミスはけっこう好きなんだけどな。

「つまり、その日にチョコレートを渡すのが日本の恋人や夫婦の慣例なのね？」

戦艦のネヴァアダがこてんと首をかしげながら言った。

金色のツインテールが揺れている。

「あー、まー、真似しなくてもいいですよ。メーカーが言い出して無理矢理流行りにさせた事柄ですから。」

ミニスカポリスな恰好の重巡洋艦シカゴと、カウガールな恰好の正規空母ヨークタウンに左右を挟まれる。

「でもまー、男なら可愛い女の子から贈り物が欲しいところよね？」

「欲しいならあげるわ。」

巨乳攻撃だ。

やめてください、死んでしまいます。

「えーと、欲しくない訳ではありませんが無理に作る必要性はありません。」

「なに、下院議員に問い詰められた上院議員みたいな回答をしているのよ。」

「いやー、でもチョコレートはまだまだ高額だし。」

「いたいた、即席提督。あたしたちからのチョコレートいるわよね。」

「また昼間つから美少女を侍らせてヘンタイね、インスタント提督。」

「チョコレートは高いから三人でまとめあげてあげるわ。感謝しなさい。」

曙、霞、叢雲の三名は口早にそう言うと、たつたと去ってしまった。

うん、返事くらいさせてくれないかな。

「……人気があるわね、アドミラル。」

「……お、おう。」

鳳翔と間宮のいる厨房へ行ったら、何名もの同型艦娘がそこにいた。

なにを言っているのかわからないかもしれないが、あれは断じてマヤカシではない。

女の情念のおそろしさを垣間見たぜ。

裸エプロンはまだわからないでもない。

だがしかしおかし。

体にチョコレートを塗るのはやめなさい。

「えっ、じゃ、じゃあ、ここら辺に塗ったらどうでしょう？」って具体的な場所を指すんじゃないません！

おじさん、一部がトランスフォーマーしてしまいます！

中身がおっさんの最速駆逐艦島風に突撃され、山頂へと登頂された。

おうっ！

最近、彼女の女性化の進行が加速しているような……気のせいだな。

「溶けたチョコレートを口移しはどうかと他の娘から聞かれたんだが、どう思う？」

「とても……エロいです。」

「よし、では皆で……。」

「やめてください、死んでしまいます。」

「大丈夫、そうなたら皆できちんと分けるから。」

「なに、さりげなくこわいことを言っているんですか？」

『研修生』の腕章を付けた大淀がおろおろしながら、艦娘たちに指示を出したり注意した

りしている。

何故か軍隊ものの新任少尉殿を連想した。

私は軍属でなんちやつてだが少佐の階級。

ええんか、これ？ なんやようわからん。

鎮守府外の波打ち際へ行く。

吹雪が悩んでいるように見えたので、聞いてみた。

「チヨコレートでパンツを作ってみたらどうか、って思ったんです。」

……溶ける云々の前に、お金がとてもしかかりそうだと思う。

昔の深夜系エッチな番組のノリだな。

君はそれでなにをしたいのかなかな？

鎮守府内へ戻ると龍田がいた。

私の腕を取り、撫でつつ言う。

「チヨコレートをかけてペロペロ舐めるのはどうかしら？」

なにに？

誰が？

早霜と清霜に抱きつかれる。

清霜さん、あなたは太湊（おおみなと）の艦娘でしょう。

「ねーねー、司令官、チョコレートをも男の人にあげたら願いが叶って戦艦になれるって本当？」

「清霜さん、誰がそんな与汰話を言ったんですか？」

発信源へ転進しようとするなんちやつて提督。

そこへ、雲龍と龍驤と足柄が抱きついてきた。

提督に六五三四八点の損傷。

提督は大破した。

高梁（たかはし）、吉井、旭の岡山三川でスールな軽巡洋艦たちも抱きつき、辺りは混沌としてゆく。

更に抱きつく艦娘たち。

やめて、提督の生命点はほぼ零よ！

提督はサトミキヨシで購入したマッスルドリンコを飲んだ。

体力が全回復した。

ながとがあらわれた。

ていとくはようすをみている。

ながとがいつものよめはつげんをした。

ていとくはにげだした。

しかし、かこまれている。

かががあらわれた。

むひようじょうのままちかづいてくる。

ていとくはにげだした。

しかし、かこまれている。

みようこうがあらわれた。

さんめいによるじえつとすとリーむあたつく。

つうこんのいちげき！

ていとくはたいはした。

ていとくは。パルプンテをとなえた。

なにかとてつもなくおそろしいものをよびだした。

ぜんいんきぜつした。

ていとくはけいけんちりてんをかくとくした。

死にかけの顔をした提督と研修生の大淀が、もそもそと小会議室で夕食を摂っていた。

食堂が尋常ではない喧騒と気配を漂わせているからである。

函館鎮守府の利点は自由が大抵認められるところだが、場合によっては気ままな面が悪い方へ転化するのを避けられない。

自信の無い教育実習の学生と冴えない担当教師のような会話を言いながら、人でないモノと人が同じ釜の飯を食べてゆく。

李さんと鹿ノ谷さんと鳳翔と間宮が腕を振るって作った定食だ。

寒ぶりのカルパッチョに帝国陸軍風肉じゃが、長崎県産ひじきの煮付け、埼玉県産キヤベツの浅漬け、帝国ホテル風ハンバーグに大阪豆ご飯。

おろおろとつたない言葉で慰める提督に、頬を赤らめる軽巡洋艦の大淀。

甘味としてアントナン・カレーム風バヴァロワの文旦ソース添えと大分県産紅茶と八雲産低温殺菌牛乳が鳳翔と間宮によってもたらされ、どことなくなるとなく甘酸っぱい雰囲気は雲散霧消する。

「カカオを持ってきてあげたわよ。」

カカオの実が大量に鎮守府前に積まれる。

戦艦棲姫とシヨウカクと、何名かの肌の白い娘たちが褒めて褒めてオーラを放っていた。

キエフを名乗る巨乳空母もいる。

提督は彼女たちを思いきり賞賛した。

彼女たちの好感度が二〇点上昇する。

二月一四日当日、未明から戦端が開かれたチヨコレート大戦は苛烈とも言える展開を迎え、東軍と西軍の戦いは伯仲した。

特に西軍の『石田隊』と『大谷隊』の鉢巻きをした艦娘たちが精強の働きを見せ、『黒田隊』と『福島隊』の鉢巻きをした艦娘たちが手こずっていた。

昼食を携帯糧食で済ませて戦線に帰り咲く者も少なくなく、それは鳳翔と間宮の心証を悪くするが、おにぎりと味噌汁と漬け物の三点組み合わせを素早く作って瞳孔が開き気味の艦娘たちに提供した。

戦局が大きく変わったのは、おやつを過ぎてからである。

一部駆逐艦が決死の突撃を敢行し、何故か函館にいるローマや航空戦艦の布陣へ正面突破を図ったのだ。

それに呼応して全軍突撃を始める西軍。

しかし、伏兵が側面に待ち構えていた。

『三河旗本隊』と鉢巻きをした艦娘たちが西軍の腹背を突いたことから、大勢が決する。傘をさした艦娘や胸にさらしの艦娘もいたという。

最終的に『薩摩兵児』と鉢巻きをした他鎮守府の艦娘たちが釣り野伏せを行いながら必死で脱出した時点を持って、このなんだかよくわからない戦闘は終結した。

尚、当日の執務室には狸の縫いぐるみが置かれていたという。

『影武者 世良田二郎三郎元信』と、達筆で書かれた名札をつけて。

その夜、提督の義母が巨大なチョコレートを持参して、艦娘たちをどよめかせた。「ちよつと大きくなり過ぎちゃった。」

少女のような姿の彼女が微笑むと、何名かの艦娘が歯ぎしりする。

困惑しながらも、息子は血の繋がっていない母に微笑みを向けた。

はた目には父と娘、或いは歳がかなり離れたナニカシラであった。

決着のつかぬまま、夜が過ぎてゆく。

C I : とある地方都市の三年間

桜の花びら舞うその日の朝、自転車で出社すると社内は大騒ぎになっていた。

テロリストに航空機が落とされたとか、隣国の電子妨害でインターネットが使えなくなったとか、自衛隊の基地が襲われて炎上しているとか、第三次世界大戦が始まったとか、外出禁止令が出されるとか、石油が輸入出来なくなるとか、日本が終了するとか、嗚呼っ！ 小松左京様っ！ とか、てんやわんやの状況だ。

なにこれ？

あたしは向かいの席の先輩に話しかける。

色素欠乏症とかでやたらに肌の白い彼女は少し困った顔で肩をすくめ、朝からテレビの報道が迷走していることを語ってくれた。

「午後からは有休を取って、買い物に行った方がいいわよ。」

「なんやのん、ナンちゃん。買い物てなんか理由あるんか？」

社長がこつちへずんずん歩いてくる。

普段の気さくな顔は薄れ、ちよっこしこわい顔が本職なみの凄みを帯びている。

社長は興奮すると関西弁になるのだ。

「たぶん、買い占めが起こるわ。それと輸入食品とか雑貨とか、外国製品の奪い合いが始まる。そして、石油を使った製品の奪い合い。人の敵は人になるわ。悲しいけど、これ現実なのよね。」

「よし、千代ちゃん、ナンちゃんと一緒にワシの珈琲とウイスキーとチョコレート買（こ）うてきて。みんなの分も買うてきてや。時間勝負やで。ほれ、お金。領収証も忘れんよにな。帰ってくるのは夕方であええで。……そうか、外食もまともに出来んくなるんか。まあ兎に角、出来る限りいろんなもんを一杯買うてきてや。」

「ガソリンも近々供給停止になるでしょうね。配給制になつたらまだマシだわ。或いは許可制になるかもしれないし。」

「ガソリン買い出し部隊を編成するで。速水君、小野君、神谷君、手分けしてガソリン目一杯買うてきて。灯油もな。」

古めかしいフォルクスワーゲンのワゴン車を運転し、買い出しを始める。

社長は『式式』と呼んでいるが、深緑色に丸い目玉なのであつたは『王蟲（オーム）』と呼んでいた。

ひなびた地方都市の港街は、今のところ混乱していない。

地元空港の二階にある珈琲店で、珈琲豆を思いきり購入する。ここ品の揃えがたぶん

我が田舎でも上等に属するからだ。

飛行機の運航が停止しているので、会社員らしき人たちが払い戻しを受けていた。

小さな地方空港だからこれで済んでいるが

、関空や成田だと混乱の極致だろうな。

ごっそり買ったので、イケメン店長が目をまん丸くしていた。

買い占めはしない。

しないけど、誰かがすべて買うかもしれない。

駅方面へと車を走らせる。

「途中でお昼にしましよ。当分まともな外食は出来なくなるでしょうし、おいしいところへ行きましょう。」

「じゃあ、奮発して『ラス・メニナス』へ行きますようか？」

「ええ、よくてよ。」

海沿いの温泉に近い老舗洋食店で、ハンバーグや海老フライやミンチカツをてんこ盛りにした昼食を食べる。

ちっこいグラタンも付けてもらった。

サラダやポタージュも勿論おいしい。

最後の晚餐じゃないけど、当分食べられないだろうから一生懸命食べる。

先輩はあたしに微笑みかけながら、烏賊クリーム pasta セットを食べた。

酒屋で高級洋酒の特に高いものを購入。

これ、一体幾らに跳ね上がるのだろうか？

二万の酒が二〇万くらいになるのかな？

もしかしたら、そんな倍率でないかも。

自分用にカシスや珈琲の混成酒を購入。

お金を後で下ろしとこう。

思いついた先で次々購入する。

「これも輸入品よ。これもこれもこれもこれもこれもこれもこれもこれも」

百貨店は二軒あるけど、どちらもまだ今のところは混雑していない。

ゆうちよで自分の口座からお金を下ろし、自分自身のもも買った。

パンデミックだかパニックだかゾンビだかの映画の出演者みたいだ。

『早い者勝ち』という言葉をつくづく実感し、世界の破滅を感じた。

身の回りをなんとかするので精一杯なのが庶民の証なのだと思える。

「夕方になったら混雑が始まるでしょうね。明日以降は更に混乱が起きて、地域によつ

ては暴動になるかしら。東京は戒厳令が出されるかも。SFよね。」

淡々と予言するように話す先輩。

「海外旅行が出来るようになるのは当分先になるわね、たぶん。その羊羹も買っておいたら？ 日持ちするわよ。」

「はい！」

「米も値上がりするでしょうね。石油を使って作っているから。」

「おじさんちがこだわりの農家なので大丈夫です！」

「それはいいわね。」

帰りに文房具店で、少し高めの海外製品を幾つか買った。

鉛筆とか消しゴムとか、そんな感じのモノばかりだけど。

そうだ、ボールペンの替芯も買っておかないといけない。

カレー粉や香辛料をようけ買った。

ちり紙やトイレの紙も沢山買った。

生活雑貨系消耗品を兎に角買った。

買えるだけ買った。

これで何年耐えたらいいのだろう？

元の社会に復旧出来るのだろうか？

国際社会と呼ばれた砂上の楼閣はその日、呆気なく崩れ去った。海外に様々なモノを依存していた日本は困難の道を歩み始める。

当たり前と

信じ続けたことも

表と裏が逆さつて

本当は

誰も知らない

翌日。

我が社では予言めいた先輩の発言や進言で混乱がさほど無かつたけれども、市内のあちこちで混乱が拡がっていた。

県内でも各地で騒ぎが起こり、東京のような大都会では暴動さえ起きているという。昔の学生運動みたいね、と先輩は呟いた。

テレビでは、眼鏡をかけたインテリゲンチヤ風の首相が節電と省エネと自家用車使用自粛の要請をしている。

不要な外出は極力控えて欲しいとのことだ。

現在、原因を調査中。

海外との連絡が取れず、食料品や石油の輸入が停止するため、節電と省エネを徹底して欲しいとの政府要請が発表された。

ガソリンは配給制になり、役所で配給切符を入手してガソリンスタンドで購入の形にするらしい。

状況次第で変更の可能性はあるそうだが。

海外との取り引きが長期的に行われぬ状況想定して、夕張や北九州の炭鉱の逐次再開、地熱発電所の強化、太陽光発電の更なる研究などを行うそうだ。

また、農業は手作業になるから、国からも手伝える人員を派遣するとのこと。

状況が判明次第政府発表を行うと締めくくった首相はその直後、記者たちからの集中砲火を浴びた。

これからあたしたちはどうなるんだろう？

数日後、一気に物価が上昇した。

営業しているコンビニエンスストアに寄ると、店員が客から詰め寄られていた。

ここは夜九時までか。

店側も混乱していて営業時間はバラバラだ。手書きの文字が確認手段というアナログだ。

煙草が軒並み一箱一〇〇〇円になっていて、その人は納得出来なかったらしい。まあ、そうなるよね。

結局、怒っていた人は一箱買って帰った。

倍以上の価格なら可愛いものだった。

個人商店で良心的な販売をしていたところは在庫が殆どはけたようで、エグい値上げをしたところは総スカンを受けていた。

政府発表で、謎だった事態を引き起こした存在の名称が公開される。

名前は『深海棲艦』だそうだ。

目下、海上自衛隊と海上保安庁と在日米軍が共同で海の平和のために奮闘しているらしい。

米軍司令が親日家でよかった。

日本海で隣国の艦隊が全滅したとの報道が成されたのは、ゴールデンウィークの前日だった。

行楽地はどこも閑古鳥で、干上がっていると報道しているさ中の出来事だった。速報で動画が流され、その国の大使館から公式に抗議が行われたが、彼らはその事態をきちんと確認出来なかったらしい。

空港に外国旅行者がけっこう滞在しているという。

我が地方都市に程近い空港にもそういった人々が滞在していて、政府が援助しているのだ。

東京行きの予定だった人たちである。

羽田や成田に人が集中するとわやくちやになるので、分散体勢が行われていた。

無論、出来る限り要望は聞くそうだと。

我が社でもそうした人々へ援助すべく、珈琲豆と紅茶とチョコレート運んだ。

大層喜ばれてよかった。

空港の人からも貴重な品をありがとうございますと言われ、なんだかむず痒くなつた。

珈琲店のご主人はにこにこしながら、匠の業で珈琲を淹れてくれた。

彼はなにも言わない。

困っている海外からの旅人たちに、おいしい珈琲を提供するだけだ。

流石地元人気店の店長だけある。

先輩は釣り好きだそうで、魚介類が手に入りやすいのはありがたい。

一緒に釣りに行くと、周囲には沢山の人がいた。

休みの日にはおじさんのところへ農業の手伝いに出掛ける。自転車を全面活用だ。

最近、自転車がバカ売れらしい。

車が走っているのをあまり見かけなくなった。

電車も殆ど走っていない。

ガソリンはリッター二〇〇〇円前後で、許可制に変更された。

煙草も一箱二〇〇〇円前後になった。

お金持ちくらいしか自家用車を使わず、それは現状に不満を持つ人たちにとっての恰

好の標的になった。

給料が下がって物価が上がる。

生活苦で役所へ陳情に行き、生活保護を受ける人が続出した。

地方自治体でパンクしたところが幾つも現れ、テレビや新聞などで不穏な発言をす

る会社の社長はほぼ全員襲撃される。

妊娠中の奥さんをほったらかして略奪愛な不倫をした挙げ句、その不倫相手の女優と再婚した有名人が襲われて大怪我を負った時は大騒ぎになった。

ザマアミロ、と言う人もちらほらいた。

自家農園が推奨されたが、それが出来ない人も少なくない。

野菜泥棒が多発し、捕まえてみると小学生であったという話も聞こえてくる。

自棄になって深海棲艦へ特攻を仕掛け、行方不明になる人が何人も出てきた。

中にはその敵対者への説得に向かった人もいるらしい。

そんな中、ハート様率いる木造帆船の『世紀末モヒカン艦隊』は敵駆逐艦を何隻も撃沈し、功績を挙げていた。

揃いの黒い革鎧にモヒカン。

まごうことなき阿呆者たち。

元自衛官や漁師は勇敢無比。

彼らの『大和丸』と『武蔵丸』は今日も快調だ。

対戦車ロケット砲にバズーカ砲に二〇ミリのアンチマテリアルライフル。

ちっほけな蛮勇と誇りが、彼らを奮い立たせる。

我らは一騎当千

我らは剣にして楯

我らは人類の防波堤

戦うは勇氣

我らは子供たちの未来を切り開く剣

我らは悪意あるものをすべて防ぐ楯

我らは一人に非ず

我らは一個の軍団

錆びた刃と欠けた楯を置いて皆守る

臆するな

敵とて無敵に非ず

刃の通る相手なり

旧き船はただの老朽船に非ず

魂魄の宿る存在なり

ならば戦おう

我らの古強者な英霊たちと共に

石油石油石油。

僅かな備蓄を巡って、人同士が争う。

殺人にまで発展する地域さえあった。

暴力的組織の事務所が襲われ、隠されていた武器が出回る事態に発展して警察はてんてこまいだ。

発砲事件が散発し、銀座帰りの金持ちが何人も狙撃された。

こなもんこなもんこなもん。

社長が呻く。

小麦粉を使った食べ物高級品だ。

パンやケーキはなかなか買えない。

配給券が必要な場合さえ存在する。

お好み焼きやたこ焼きでさえ価格高騰だ。

米粉が小麦粉の代替品として出回りですが、それでもまだ高い。

グルメ番組や漫画などは自粛方向である。

海が近かったり菜園がある人はまだいい。

地産地消系の地域に住んでいる人もいい。大都会に住む人たちの生活が厳しいのだ。料理店は軒並み高く、スーパーも高額だ。コンビニエンスストアは少なく超割高だ。芋ばかり食べている人もちらほらいる。

国民の不満は溜まる一方。

女性の夜間外出は控えるよう、国から要請が行われる。

今日もまた、金持ちや芸能人が襲われた。

秋になり、心労で倒れた首相に代わってマフィアの親分みたいな人が総理大臣になった。

以前から首相になりたいなりたいたいと言っていた人だ。

少しは期待出来るかもしれない。

そんなことはなかった。

秋の選挙戦は荒れに荒れた。

その直前に機動隊とデモ隊が衝突したのが与党にとって痛打となった。

我が田舎でも荒れに荒れた。

ひよつとして、という微妙かで僅かな希望にすぎり、我々日本人は野党に政権を任せる選択を行った。

それは結果的に、誤った選択を行ったと国民に思わせることになった。

日本は新たな首相のために、大混乱に陥った。

頭のネジの飛んだ発言や行動が物議を醸した。

時流を読まない首相夫人も批判対象になった。

石油が無いのならば松根油（しょうこんゆ）を使ってはどうかとの首相の意見に、老齢の議員が皮肉を返した。

彼は元特機隊の隊員で、昔は黒い装甲服を着用してドイツ製の機関銃をぶっ放していたらしい武闘派だ。

「首相は人力で松の根を掘ることがどれくらい重労働だったか、一切ご存じないと見える。私たちは子供の頃、お国のためにと懸命に掘りましたよ。だけど、結局それは役に立たなかった。同じく戦争末期に多数の飼い犬を殺して毛皮にする予定が、見るも無惨

に失敗したようにね。そろそろお気楽な妄想ばかりをお話になるのではなく、真面目に国の首長としての責務を果たしていただきたい。」

大都会では焼き討ちやデモや暴動が当たり前になった。

希望が見えない社会では、流石に忍耐強い日本人も耐えられないのだろう。

安全神話という薄っぺらな存在はあっさり崩れた。

自衛のために自警団が国内各地に設けられ、時折暴徒とぶつかるようになる。

スローライフ、という言葉がある。

オーバーオール姿の髭親父が、斧を持って山小屋で笑っている姿を連想する。

哲学なのか、ファンタジーなのか。

自然の豊かな土地に住み、晴耕雨読して悠然優雅に過ごすことを指すらしい。

だがそれは、背景に豊かな物質文明の支援があつてこそものではないのか？

自然と親しみたいと言つても、どこにでも山の幸が転がつている訳ではない。

スローライフ、という言葉はめつきり聞かなくなった。

今の時代こそがそれだと熱く組まれた自然賛美系雑誌の特集号は、残念ながら返品

山を築いたそうだ。

計画停電は当たり前のことになった。

冷蔵庫は微妙なシロモノになり、氷屋が繁盛している地域もあるという。冷蔵冷凍が長時間必要な場合は、自家発電や太陽光発電が使われている。闇夜に紛れて悪さをする人間対策の常夜灯でも、太陽光発電が利用中だ。東京の電力会社の幹部が銀座で高級シャンパンを開けたと報道があった。電力会社の従業員の子供が、校内で言葉の暴力を受けたと問題になった。

石を投げられる人もいるらしい。

人はなんと愚かな生き物なのか。

殴った側がいけしやあしやあと威張る社会は病んでいるし、それを許容する人々は意外と多い。

古今東西、それはどの国でも変わらない。

今、世界中で酷い事態が進行中であろう。

神様がおられるなら今こそ現れて欲しい。

大都会はストレスの特に強い社会だし、以前社用で東京に行った時人々の顔に余裕が見られなかった。

今はそれが加速して、剣呑な顔に悪化しているみたいだ。

テレビの報道で見る大都会の人たちの表情は大抵険しい。

そういえば、上京した時にお世話になった警視庁の能登さんは元気だろうか？

ちよつこし凶々しくて、時折剃刀みたいな感じになる人だった。

煙草が高くつてさあ、とぼやくのが何故かよく似合う人だった。

バビロンプロジェクトが失敗した跡地に建設される特務課に転勤予定らしいけど、大変だよなあ。

マスメディアの取材者の不用意な発言にカツとなつて暴力を振るう人が増え、テレビ局の人員が襲われるようになってから彼らは護衛を雇うようになった。

美人の取材者がテレビの前で襲われた時は大問題に発展した。

幸い彼女は自衛隊の人に助けられたが、彼女は前から自衛隊批判をしていたので散々揶揄される。

彼女は結局、内勤になつたそうだ。

犯罪が急増し、自衛隊の人たちが街中で警備に当たるのが普通になる。そうした日々緊迫する情勢で警察署が襲われ、日本中が衝撃を受けた。

二転三転する政府発表は過激派を生み出す温床となり、遂に首相が襲われる事態にまで発展する。

一命は取り留めたものの、首相は退陣。警視庁長官を始めとする警察組織の上層部が総辞職した。

次の首相は国民的知名度もある人だったから、そんなに酷いことにはならないだろうとあたしたち国民の多くは楽観視した。

それは大きな誤りだった。

深海棲艦との過酷な戦いの中、艦娘と呼ばれる武装少女たちがこの世界に顕現した。精霊のように美しい彼女たちは深海棲艦に対抗し得る存在として、国民に多大な希望を与える。

彼女たちに感激した社長はわざわざ舞鶴と呉まで行って、艦娘たちを激励した。そんなことをする一般人は初めてだったようで、艦娘たちも感激していたとか。

社長は稀少な洋酒をここぞという時の決戦戦力として、戦線に投入している。その生命の水は劇的な効果をもたらし、我が社の経営に大きく寄与していた。

そして社長は、賞味期限がとつくに切れたおじさんの絵が目印の缶珈琲を何箱も大切に
そうに保存して飲んでいる。

先日は東京から来たどこかの調査員な白人のおじさんと意気投合して、その古くなつた
珈琲と一緒に飲んでいた。

大丈夫なのかな？

インドネシア、マレーシア、ヴェトナム、タイ。

近隣の産油国へ赴いた艦娘と自衛隊は命がけの石油輸入を試み、そして成功した。
久々に石油が日本へ持ち込まれ、我々はどれだけ依存していたかを深く理解する。

三年ぶりに稼動する工場もあった。

だけど、主な輸入先だった中東はまだまだ遠い。

そして、将来的にずっとずっと輸入を続けられるかどうかなんてわからない。

わかったようなことを言う金ぴか時計の人もいるが、その理論が保証される見込みは
どこにもない。

「気をつけなさい。人は信じたいものだけ信じる生き物よ。こんな男の言いなりになつたら、
簡単に足下をすくわれるわ。」

臆面もなく日本に都合のいいことばかり言う、テレビ番組の提灯学者に対して先輩は

皮肉をぶつけた。

その学者は数日後、何者かに襲われた。

深海棲艦が現れてから三年目の早春、福島でおそろしいことが起こった。

津波と原発事故が両方発生したのだ。

東北の太平洋側は地獄絵図になった。

自衛隊の人や艦娘や在日米軍が懸命に救助活動を行ったが、その爪痕は巨大で深い。

新たな希望と不安。

あたしたちの世界はこれからどうなるのだろうか？

焚き火で薩摩芋を焼きながら、ため息を吐いた。

おじさんから沢山もらったので、会社の裏の空き地で焼いている。ご近所にお裾分けしよう。

消防法とかで禁じられていた焚き火も、安全性を高めることで許可されるようになっていく。

今の日本は昭和四〇年代に近い生活水準らしい。

いや、それ以前かもしれない。

艦娘の力でこれを五〇年代前半にしようというのが今の目標だ。

煙草の値段は一箱三〇〇〇円前後で可愛らしくない値段だけど。

社長や先輩たちと一緒に芋を食べる。

苦勞して入手した北海道産バターを少し付けると、まさに絶品の味わいだ。

省エネを徹底させる生活は苦勞も多いけれど、人間の生活って感じもする。

世相は暗いし、夜は早目の消灯が基本。

夜遅く出掛ける人も、めっきり減った。

だけど、皆なんとかなるさと日々暮らしている。

あたしたちはやれることをやるだけだ。

それだけだ。

個人輸入雑貨商の美濃柱さんと社長が商談をしている。

お互いニコニコしているから、悪くない結果みたいだ。

美濃柱さんは、ロシアのシヴエリア鉄道が使えるようになったら欧州へ単身赴いて買
い付けを行うのだと熱く語っている。

目がキラキラしていた。

それって、男の人の浪漫なのだろう。
たぶん。

「明日は釣りに行きましょうか。」

先輩が赤い瞳をあたしに向け、やさしく微笑んだ。

C II : うつし世はゆめ

夕方、どことも知れぬ街角。
人通りのまったく無い街角。
前方に黒い水溜まりがある。
そこから白い手が出てきた。
ニユルリとした感じだった。
私に向かって手招きをする。
いつの間にやら周囲は沼だ。
もしかしたら底無し沼かも。
足下からズブリズブリ沈む。
嗚呼これはすこぶる不味い。
思いながらも体が動かない。
首まで浸かってもうヤバイ。

目覚めると汗だくだった。

大淀が心配そうな顔で私を見つめている。

六畳間の和室だ。

枕が二つある。

「どうかされましたか？」

女が、問うた。

「こわい夢を見ました。」

私は、答えた。

「それは大変でしたね。」

女が、言った。

「ところで他の子はどこにいるんです？」

私は、再度問うた。

「あら、それでしたら……。」

慈母のように軽巡洋艦は微笑んだ。

女は、押し入れの襖に手をかける。

そして、すうつと戸を引き開けた。

ガタン。

重い金属の音で目覚める。

「大丈夫ですか、提督？ うなされていましたよ。」

隣の龍田が心配そうな顔で私を見つめていた。

古い汽車に乗っている。

試験的に復活し導入された蒸気機関車だ。

煤（すす）を吐くために路線は限定されるが、電気を使わないことの利点が見直されていた。

弁当売りの声が遠くに聞こえる。

ここはどここの駅舎だ？

「ここは何駅でしょうか？」

私は、問うた。

「きさらぎ駅と書かれていますよ。」

女は、何事でもないかのように言う。

慈母のように、軽巡洋艦は微笑んだ。

目覚めると、とても広い会議室にいた。

室内は暗く、周りの者たちの顔は見えない。

今は停電中なのか？

目の前の茶を飲む。

やたらと苦い味だ。

五〇名か、それ以上の娘たちがそれぞれ口を開いている。

「最近の小学生では、ずっと年上の彼氏がいる子も少くないわ。」

「中学生でおじさんと付き合っている子もいるよ。だから、一切問題ない。」

「強力わかもとと亜鉛を飲ませて、頑張らせないといけないわ。」

「お嫁さん艦隊を編成して、みんなの共同財産にするのが現実的な落としどころかなかな？」

「夜がこわいんです、って添い寝から始めて油断させるんだよ。」

「レデイになるためなら、少しくらいこわくたって我慢するわ。」

「ハラショー、その意気だ、同士。ウオトカで酔わせたらしい。」

「もーっと頼りにしてくれるように、いつも傍にいななくちゃね！」

「司令官さんは甘えんぼが多いので、甘やかせるといいのです。」

「即席提督はね、厳しいことを言いながら甘やかせるといわね。」
「インスタント提督はしつかり面倒を見ながら厳しくすべきよ。」

「ちよつと試してみましようか。」

冷えた声が、隣で聞こえてきた。

娘たちがじりじり近づいてくる。

金縛りに遇ったかの如く動けぬ。

飛び起きるとまだ暗かった。

私は疲れているのだろうか？

倦怠感が、重くのし掛かる。

変な夢ばかり見るなあ。

鉄格子の窓から月明かりが差し込む。

質素で狭い部屋を見渡した。

この生活もだいたい慣れてきたものだ。

「眠れないの？」

女が、後ろから私に話しかけてきた。

慈母のような声で、話しかけてきた。

CⅢ：見せてもらおうか、村役人Aの性能とやらを！

東京の方では疎開が始まったらしい。
あの予告なき開戦からおおよそ一年。
既存の社会と価値観は崩壊の連鎖だ。
大混乱だった人々も冷静になりだす。
動けなくなる前に動くということか。
厳しい冬の生活が余程堪えたようだ。
愛車を手放す人が続出している社会。
都会に見切りを付ける人も出始める。
村の役場でも受け入れ体勢を進める。
数人程度の人数では収まらないとか。
中隊規模の人数が来るとの噂もある。
そんなに来たら対応しきれないがね。

まあ、噂は噂だから本気にしないが。デマゴギーや憶測や悪意はこわいな。木っ端役人の俺たちはてんやわんや。問い合わせと連絡の電話で四苦八苦。お隣さんが海で大敗したのが遠因だ。軍事力を誇示していた連中が破れた。また張り子の虎かと皮肉る者もいる。それ、違うんじゃないかなと思うが。社会的不安に食糧難も大きな要因だ。都会の物価の上昇率は洒落にならない。お陰で暴れ回る不届き者が増殖中だ。大都会は一部世紀末状態なのだとか。ヒヤッハーな連中が何人も捕まった。火炎瓶に釘バットにバールの如き物。身近なものが凶器に変わっていった。警察は後手後手であまり役に立たぬ。渋谷や池袋をも巻き込んだ新宿騒乱。

その爪痕は生々しく都民を揺さぶる。東京の人口は二〇〇万になると推測。政府の秘匿試算が露見して大騒ぎだ。本社を移転させる大企業まで現れた。石油が輸入されず、輸出入は絶望的。悪い冗談のように人が次々亡くなる。人口が三分の二に減つたとする説も。海沿いの街では人口が激減していた。先の見通しが不透明で悪化する社会。親戚や係累を頼る人たちが続出した。

しかし、都会の利便性を散々当たり前のように享受してきた人々が田舎の不便多き生活に順応出来るのかね？

コンビニエンスストアがそもそもない場所だって少なからずあるし、百貨店は昭和の世界から抜け出せない。

汽車だって一日数本の路線があるし。洒落た店で生き残れるのは殆どない。

でーじょーぶかのう？

村役人Aとしては大変心配なのだよ。

田舎は老人の知恵で食い繋いでいる。

戦争帰りの爺さんは嬉々としていた。

婆さん連中が張り切って野菜を作る。

薪や石炭などを使った生活への転換。

異世界転移冒険譚もびっくりの生活。

欧州風中世的異世界よりはマシだろ。

たぶん。

キャンプ場をお年寄りの仮の住まいにする計画が持ち上がった。

高齢者対応可能施設にしておいたのが、目を付けたきっかけだ。

今は全国で非常事態宣言が行われている。

暴徒が絶対来ないとは断言出来ない社会。

アフリカのひっそり暮らす村人を襲う武装集団の話は、他人事ではなくなつた。

人の敵は、人か。

正当防衛は、どこまで通用するのだろうか？

警察は当てにならない。

俺はひのきの棒を装備した。

攻撃力が二上がった。

害獣対策と同時進行である。

日本での銃砲許可は他国に類を見ない厳しすぎるが、俺みたいな人間は地域の防衛戦力として特別許可証が交付されるそうだ。

殺人許可証（マードーライセンス）ではない。

衛士許可証（えいしきよかしよう、セキュリティライセンス）という名目だそうだ。

随分古い言葉を持ち出したのは、言葉の印象をやわらげるためらしい。

在日米軍が保管（モスホール）していた三〇口径の軍用ライフルを提供しようかと提案してくれたらしいが、扱える人間が限られるとやんわり断ったらしい。

その提案を断るなんて勿体ない！

俺だったら喜んでM14を貰うのに。

M1Aでもいいぞ。

……言っちゃった。

まっ、いつか。

俺たちの村落にある店舗群。

文房具も置いている雑貨屋。

ひなびた定食屋に信用金庫。

車屋、食料品店、骨董屋。

菓子屋、理髪店、八百屋。

散髪屋、喫茶店、居酒屋。

趣味で住んでいる鍛冶屋。

半ば老人寄合所の銃砲店。

J Aとガソリンスタンド。

老朽化した役場に郵便局。

こんなところだ。

そかいしやのんだんたいがあらわれた。

むらやくにんAはようすをみている。

そかいしやたちはあまりのようすにぼうぜんとしている。

むらやくにんAはにげだした。

しかしそかいしやたちにとりかこまれた。
むらやくにんAはしつもんぜめにあつた。

疎開者たちを歓迎する祝宴が開かれた。

約五〇人の人々。

戸惑う都会の人たち。

不安を隠しきれない人がちらほらいる。

言葉も風習も料理も全然違うのだから。

料理の味の違いはかなり影響を与える。

問題ない人ばかりではない。

塩気とか甘味とか濃さとか。

信長の味覚を笑いきれない。

猪の腸詰めやザワークラフトや米粉のパンや山羊のニューヨークチーズケーキは、彼らの口に合わないのだろうか？

子供たちにプディングは好評だった。

青い目やはしばみ色の目の婆さんたちがかなり気にしていたので、その内馴れるさと

軽く言っておいた。

車屋の親爺がいつものようにぼやく。買う奴がいなくて売る奴ばかりだ。ろくに使わないのに税金は払えない。リッター二〇〇〇円じゃ動かせない。近くの市へ出掛けるのはバスを使う。半月に一回の商業施設行きは大人気。月一回の移動販売車は人で大賑わい。自家用車を持ってない人が溢れている。年金だけじゃ車の維持すら出来ない。少ない蓄えを子供孫へ送金する老人。彼らの謙虚な姿勢には、頭が下がる。我慢することが当たり前だった人々。車をこよなく愛する親爺には逆風だ。俺に会う度、買え買えと薦めてくる。先日は古いドイツ車を買えと言った。

破格値だったけど維持費が捻出不可だ。車屋が次々に潰れていると言われた。都会ではディーラーが襲われるとか。大手も合併策で生き残るべく奮闘中。源氏に破れ出した時の平家みただ。出来る限りサービスすると言われた。一応考えてみると親爺に伝えておく。九〇〇万の車が九〇万となってもな。維持費が高過ぎるので買えないなあ。

公共放送を自称する放送局が熱烈な要望にに応じて、『シルクロード』を再放送した。殺伐とした世相の癒しになったのか、視聴率が八〇パーセントを超えていろいろな意味で話題となる。

天山北路

敦煌莫高窟（とんこうばっこうくつ）

幻の黒水城

流砂の道

楼蘭王国

熱砂のオアシス

天山南路

厳しいながらもたくましく生活する人々に、なにかしら思うところのある視聴者が多かったのだろう。

岡山県岡山市にあるオリエント美術館で連動して行われた『絹の道展』では、神戸京都大阪福岡長崎を含む西日本の人々が大挙して訪れたという。

美術館博物館が比較的近場に複数ある岡山市は、大都会岡山の名に相応しい展示にしようとして県立美術館（『シルクロードと日本画家展』）県立博物館（『ユーラシアと鬼の世界展』）林原美術館（『シルクロードと律令制展』）で同時に展覧会を開催。

循環バスも走らせたそうだ。

倉敷市の大原美術館（『西洋画家とシルクロード展』）や高梁市（たかはしし）の成羽美術館（『絲調之路とオリエント展』）、新見市の新見美術館（『オリエントと備中刀剣展』）、瀬戸内市の備前長船（びぜんおさふね）刀剣博物館（『シルクロードの刀剣展』）でも独自の展覧会を開催してアート大国岡山を喧伝した。

雪掻きをしなくて済むようになった頃、東京から二人の男が馬に乗ってやって来た。なにもないような山奥の村なのに、そいつらは感激したようにはしやぎ回っている。山羊の白靴下やユキなどに早速なつかれていた。

この辺りにはホテルも宿屋もない。

俺の家は現在住人が一人だから、それでもいいなら泊めてやると言ったら大感激された。

野郎二人に抱き締められても嬉しくな……あれ、なんだか心がポカポカしてくる。変だな。

お礼にと、焼きたてつばい食パンと葡萄酒と乳粥を貰う。

食パンがめちやくちや旨い。

葡萄酒は高級品みたいな味。

何者だろうか、こいつらは。

翌朝も食パンを貰ったので、村にいる人々に配った。

大好評になって、ちよつとした騒ぎにまで発展する。

はっ！

もしかして！

、わかったぞ、こいつらはパン職人だ！

村の連中は以前より生き生きとし始め、疎開者や移住者たちも笑顔を見せるようになった。

元氣澀刺なんとかみたいだ。

二人は近所の婆さんたちが作る山羊のチーズや米粉のパンやヨーグルトや漬け物やぼた餅や野菜の煮付けやまあそういった料理を、旨い旨いと喜んで食べてくれる。

それを見た東京もんたちも、こちとらの田舎料理を食べるようになった。

変な二人だ。

二人とも呑気な顔をしているのに、なんとというか人徳みたいなものを感じる。拜む爺さん婆さんたちには苦笑したが、何故か二人とも本気で焦っていたな。

核シエルターに住んでいる偏屈爺さんの元を訪れる。

定期訪問つてやつだ。

高齢者の独り暮らしはけっこうこわいから、俺たちみたいな人間の見回りが必要なのだ。

孫娘が茶を出してくれる。気が利く子だ。

しかも、この辺にはいないような美少女。

とても爺さんの縁者には見えない女の子。

セーラー服を着た、素朴な感じの女の子。

関東地方から疎開してきた遠縁の子とか。

ふーん。

数年前に害獣駆除の関係で狩猟許可証を得たのだが、鹿狩り猪狩り鳴撃ちと猟友会の爺さん連中にしばしば引つ張り回されている。

嗚呼、犬耳少女が欲し……じゃなくて、犬が欲しい。

普段は、レミントンの三〇口径のポルトアクション式ライフルを使っている。

NATO用三〇口径弾を使用する三八式歩兵銃が愛銃だという爺さんもいた。

てか、戦争帰りで今も嬰鑠（かくしゃく）しているって、歴史の生き証人だ。

時折、戦争の話聞く。

むごい話と笑い話を織り交ぜた話。

大枚はたいて趣味でドイツ製の古いG3を買ったが、こいつの動作は好調だ。

全自動射撃は出来ないし、弾倉装弾数は五発にしなくてはならない制限付きだ。

だが、戦後第一世代型軍用小銃が合法的に持てる利点は俺にとって見逃せない。

純正の光学式照準器まで買ってしまった俺は、まさに現代のうつけ者であるな。

漬け物ではない。

自然農法で近所の婆さんが育てた野菜の漬け物は、めちやくちや旨いもんだ。

最近は何しい連中が徒党を組んで現れることもあるので、威嚇射撃をたまにやる。

ボウガンなんてもんを持ち歩く輩さえいるのだから、それなんてゾンビ映画だよ。

俺の住んでいるこの過疎地域では、俺の発砲弾数と回数が断トツで一番多い。

発砲報告書を一々書かなくてはならないなんて、それなんてバカボン世界のお巡りさん？

夏から秋にかけて、銃撃戦を何回か行う。

ロシア製の銃火器で武装した奴までいた。

警察がぬるいことを言ったので怒鳴った。

仕方がないので、爺さんたちと共謀する。

なに、証拠が残らなければ追求出来まい。

こつちだつてむぎむぎ死にたくないしな。

仲間割れで同士討ちだつてよくあること。

警察自体が昔から事実を改竄し放題だ。

他殺を自殺に変更するなんてよくやる。

お互い不利になることは止めましょうぜ。

東京は人口減に悩まされているらしい。
地方都市へ流れる人々を止められない。
そろそろ、限界が近づいているようだ。
官能小説家都知事は強気の発言ばかり。
社会的弱者へ差別発言多き汚職政治家。
公私混同が酷く現在四面楚歌真つ最中。
女性取材者への侮蔑発言で袋叩き中だ。

雪が溶けだした頃、艦娘と呼ばれる武装少女が現れるようになって社会に光明が差し込んだようになった。

ロシアは東西に分裂して、ハバロフスクに東方なんちゃら政府が出来ていた。
近い内にシヴェリア鉄道を使って様々な輸出入が行われる予定となっている。
欧州への道が開けたのだ。
アメリカ領事館はあまりいい顔をしていないが、今の彼らに大した力は無い。

車屋の親爺がしつこいので、取り敢えずその妙に高級仕様なドイツ車を借りる。ガソリン代は親爺持ちだ。

余程困っているみたいだ。

隣に乗せる女の子でもいたらいいのだが、生憎と産まれて三〇年以上異性とお付き合いした経験は無い。

同性とどつき合いをした経験なら、何度もあるのだけど。

海が見たいな、と思って南へ車を走らせる。

閑散とした山道を走ると、車などどこにも走っていない。

緑の中を走り抜ける、真っ赤なドイツ車。

時折獣が辺りを走ってゆくだけのセカイ。

一応目撃情報は役場に書面で提出するが、害獣対策は充分出来ているとは言い難い。燃料代に人件費と予算の都合がなかなかつかないし、銃を合法的に持つ人間は銃規制が厳し過ぎるのと警察からの度重なる嫌がらせで高齢化激減化する一方だ。

親の形見だと思って困難を乗り越え銃を所持出来るようにしても、警察が余計なちよっかいを何度も何度も繰り返す。

そうした事柄がすべて裏目に出ていた。

ならばボウガンだと、暴徒自警団双方が撃ち合う光景が見られるまでになっている。

警察官の殉職率はかなり高く、首都機能がどんどん低下している東京では自衛隊があ

ちこちに配備される始末だ。

大久保利通が唱えた『大阪遷都論』に基づいて西日本を結束させようとする動きや、東京は仮の首都だから京都に遷都しようとする動きさえある。

皺寄せが来るのはやだなあ。

そんなこんなを考えている内に、開けた窓から潮の匂いが漂ってきた。

春の海が近い。

車を降りて、改めて眺める。

イタリアンレッドを施された車輻。

七八年式の、三〇年丹念に手を入れながら大切に乘られてきた車。

走行距離はおよそ二〇万キロ。

元の持ち主は夫婦で大切に扱ってきたそうだが、高齢化と社会不安が重なって手放したという。

八年前、エンジンの完全整備のためにメリケンへ送ったという。それだけ手を込めた品なのだ。

愛着があるだろうに。

事態が変わっていかなかったら、彼らも手放さなかったのかな？

きびきび動いて、よく仕込まれた猟犬を連想させる。

犬を飼うなら、こういう子がいい。

誰もいない海。

深海棲艦とやらが現れてからは、命知らずの特攻野郎Aチームみたいな連中や漁師くらいしか海に出ない。

ま、その内艦娘とやらが海上自衛隊と海上保安庁と在日米軍と提携して近海を解放してくれるのだろうか。

ぼんやり海を眺めていたら、中高生とおぼしき女の子三人から声をかけられた。

いずれも、見たことのないくらい可愛い子たちだった。

学生服らしい姿の子や露出度が高くて扇情的な姿の子。

俺の内に眠れる獣が、目を覚ましかねない程魅力的だ。

……なんてな。

「「「こんにちは。」」」

思わず勘違いしてしまいそうな笑みをたたえ、やさしい声で挨拶しながら三人は俺に近づいてきた。

C IV : 紅茶と珈琲と石炭

美濃柱さんと『ヨーシク』（ロシア語で針鼠の意）で食事をする。

ロシア産の紅茶もなかなかよい味わいだ。

最近、函館にはロシア料理の店が増えている。

ロシア人もあちこちで見かけるようになった。

若いロシア娘と日本人のおっさんがイチヤイチャしているのも、函館の日常茶飯事になつてきた。

この店は他と差別化するためか、旧ソヴェエト料理を提供するのだ。

個人輸入雑貨商の彼は今回、ロシアや東欧や中欧の蚤の市や骨董市を訪れたそうだ。

それと、紅茶と珈琲と石炭の輸入でかなり儲けたらしい。

寒い北海道では近頃石炭が必需品だから、とても助かる。

石炭ストーブとハクキンカイロが、ここ最近の冬の道民の標準装備だと言われるくらいだ。

鎮守府へも、ロシア産の紅茶と中東産の珈琲と近き国の石炭を融通してもらおう。勿論、相応の代価を支払って。

年代物のソヴィエト製やチェコ製やオランダ製の色鉛筆をいただく。

こちらは口ハだ。

私が出手な落書きをするのを知ったので、それでくれたのだろうな。

オマケってやつだ。

色鉛筆って、ノスタルジアの香りがするよな。

ソヴィエト製の色鉛筆は缶ケースの表面に『将校用』と印刷されていて、半世紀ほど昔に作られたものだそうだ。

『将校用』の名は商品名なので、別に将校専用という訳でもないとか。

よくわからないが、なんととはなくロシアっぽい感じがしないでもない。

帝政ロシアのロマノフ王朝時代らしい鉛筆までいただいた。

黒く厚く塗られた軸に、双頭の鷲が金色で箔押しされた品。

これぞまさしくカラランダッシュ（ロシア語で鉛筆の意）だ。

ようやくのことで入手した、キューバン・マホガニー製の筆筒の中に紙でくるまれていたのだとか。

貴族の持ち物という触れ込みの品で、筆筒自体は既に京都の会社社長が購入すること

になっている。

中身は自由裁量だろう。

他になにが入っていたかは知らないが。

本物かどうかはわかりませんよ、と言われたが、太い軸が歴史の重みを感じさせる。

思い込みかもしれないが。

もし本物だったらお宝ですよ、と美濃柱さんはおどけながら言った。

いつか一緒に欧州へ買い付けの旅に出ようと、そういった話をする。

李さんも一緒だと面白いだろうな。

すぐれた商人と料理人との旅行だ。

面白くない筈がない。

ちよっこし興奮した。

いつまで提督稼業を続けられるか。

退役後の生活を考える必要がある。

海外に打って出るのも悪くないな。

二人で浪漫の欠片について話した。

ロシアの微発泡飲料のクワスを飲みながら、美濃柱さんと浦潮（うらじお）の日系ロ

シア人が提携して開業する『兵士の日用食亭』と『春の雨に溶ける雪』について相談を受ける。

元兵士たちがちよくちよく訪れる店にしたいのが、『兵士の日用食亭』。

ロシアの家庭料理的な雰囲気のお店にしたいのが、『春の雨に溶ける雪』。

五稜郭の辺りと倉庫群の辺りがどうだろうと話した。駅周辺も悪くない。

いつか函館が五〇万都市になったら面白いですねといった与汰話もする。

かつて半世紀前にウルトラ警務隊が使っていたポインターに乗って鎮守府へ戻ると、艦娘たちの反応は三種類に別れていた。

行かないでと嘆願する子。

是非とも一緒にと言う子。

私を捨てるのかと怒る子。

ちなみに鳳翔と間宮は、料理の腕を積極的に誇示した。

東京を五年以内に四〇〇万都市にするべく邁進すると、新しい女性都知事がテレビで会見していた。

現状の倍の人口か。

関東圏の人口比が激変したのを、なんとか元に戻すつもりなのかね？

日本も人口が減ったからなあ。

ネオサイタマが関東地方有数の大都市に成長したし、この九年近くで日本の勢力図は大きく変化しようとしている。

西日本が協調路線で活発に活動しているのを、東日本が抑えきれないのである。

鎮守府の位置も問題だ。

西日本に大型鎮守府が三つもあるのだ。

いくら鎮守府が政治的に中立であろうとしても、経済的には大きな勢力となる。

実際、西日本の大型鎮守府周辺の都市がかなり発展していた。

呉鎮守府が『呉モール』と揶揄されるくらいだ。

舞鶴鎮守府は煉瓦造りの古典的な雰囲気建物だが、佐世保鎮守府は中が商店街風になっただけ、おいしい店も多いそうだ。

横須賀は内憂外患に悩まされていて、なかなか身動きが取れない。そのためか、第二の大淀が頻繁に連絡してくるようになった。

時折、うちの大淀と話をしている。

大本営の大淀が何名か訪れることも普通になってきている。

発言や行動により一層気をつけよう。

中東との国交が復活したら、第二のバブルが始まるかもしれない。

呉第六の先輩が先日言っていた。

もし今度バブル経済が日本を覆ったら、国が潰れると。

変なことを言うなあとその時思ったが、一気に景気が上向いて急落した場合、以前ならば地方があつて耐えられたが今は穴だらけなので崩壊に耐えきれないそうさ。

日本はバブル崩壊でいろいろなものを失っていて、その穴埋めが不味かつたんじやと苦々しげに先輩は言つた。

数度に渡る選挙での敗退責任を取つて、都議連の黒幕爺さんが辞職する旨の記者会見もテレビで行つていた。

七七歳か。

東京は勢いを取り戻せるのか？

三〇代、四〇代の政治家たちが先陣を切つて復興にいそしむ欧州に比べ、何歩も遅れてみえる。

日本人の保守性が悪い意味で作用したのが、あの老人なのかもしれない。

長野県松本市と上田市と山梨県甲府市の人たちが鎮守府を訪れた。果物ゼリーや小布施の栗羊羹や初霜や信玄餅や月の雫などを貰う。何の用かと尋ねたら、中央新幹線開発計画に賛同して欲しいとか。青森の奥津軽いまべつ駅と北斗市の新函館北斗駅は未だ未完成だ。北海道新幹線の目処さえ立っていない現状で言われても困るぜよ。

初期案では松本市を新首都移転計画の柱にするつもりだったそうだが、今は名古屋か京都に追従するつもりだと言ってきた。

陰謀に巻き込まないでもらいたいなあ。

舞鶴鎮守府や呉鎮守府にも粉をかけたそうだが、中立を宣言されたいらしい。

横須賀の立場が少し低下している状況だし、どこかに肩入れすると問題……あれ、私は微妙な立場なのか？

今は便利屋扱いされているが、今後勢力が増してくると危ないかもしれない。今度、大湊（おおみなと）の提督や先輩に相談してみよう。

千葉県や愛知県の鎮守府新設問題を早期解決したいと、大本営の大淀が言ってきた。なにを言っているんだ、君は。

面倒のにおいが激しいので、さっさと帰ってもらう。

鎮守府の窓から外を眺める。

誰もいない、静かなる廊下。

風が吹き、雪が舞っていた。

「吹雪か。」

一人ごちた。

「なんでわかったんですか？」

すぐ近くの段ボール箱に潜んでいたらしい駆逐艦が、驚きの顔を露にしながら現れた。

目が赤くなっていたので注意する。

興奮したり驚いたりした時に赤くなるのは、実験体だった頃の名残らしい。

誰かしら護衛が付くのは仕方ないのかもしれないが、もう少し考えて欲しい。

彼女は何か薩摩芋を抱えていた。

その後、皆で焼き芋をおいしく食べる。
波乱の予感をひしひしと感じながらも。

CV：執務室改式

如月末日に大都会岡山のイトーカトー岡山本店が閉店し、それは『西の超大型旗艦店、商運つたなく轟沈す！』と全国放送されて話題になった。

一九九八年に同店は期待されて開店したものの、今一つの品揃えや駅舎から微妙に距離のある立地の悪さで苦戦続きだったらしい。

深海棲艦の侵攻によって更なる打撃を受けつつも意地で維持してきたが、日本社会が復興しつつあった二〇一四年の師走、同業他社のニヤスコ岡山店が華々しく宣伝過多気味に巨大駅舎構内で開店したことで絶望的な苦境に立たされる。

西日本最大級の超大型商業施設として、美術館・複合型映画館・放送局・道の駅・地産地消型販売店・コンサートホール・百貨店の一部・艦娘関連商品販売店をも包括的に備えた全方位型生活応援店カッコカリ。

それが、新世代型大型商業施設のニヤスコ岡山店。

中四国九州を統括する西方旗艦店として、東日本よりも好景気な西日本経済に食い込

む気満々の尖兵である。

ニヤスコ倉敷店の集客数がその影響で一時期落ちて問題になったけれども、今は住み分けが出来ているとか。

郊外店の倉敷の方は駐車料金無料だし、地域的役割と店舗の特色違いを明確に打ち出して戦略を変えている。

だが。

かつては県内だけでなく鳥取広島香川三県からの来客も日常的で、全国二位の売り上げを誇った店舗だった。

腹の立たない筈がなかった。

だが、本部の命令は絶対だ。

モヤモヤを抑え業務に邁進。

それが日本の会社員の姿だ。

ただ、二〇一五年初頭の全国店長会議では両店の店長が極めて険悪な雰囲気になり、北斗神拳と南斗鳳凰拳が真っ向からぶつかる非常事態に陥った。

拳圧でズタズタになった会議室と全国の店長たちを救ったのは、強面（こわもて）の本部長であった。

「静まらんか！ 小僧どもっ！」

両者を車田飛びで吹っ飛ばし、文字通り力業で武力衝突を鎮圧したのだ。倒れながらもまだ言い募る二人に向かい、歴戦の会社員は厳しく言った。

「黙らっしやいー！」

ネットでこれらのことが面白おかしく取り上げられ、逆説的に宣伝となった。イトーカトリーの提灯型おべつか部隊が暗躍奔走するも、それは逆効果だった。

ニヤスコ岡山店の白眉は、なんといつても『耕助喫茶室』だ。

故横溝正史氏の生み出した、被害者防御率の低い名探偵金田一耕助。

その愛好者たちが訪れるべきセカイを、ニヤスコで働く推理小説マニアたちと在野のマニアたちが手に手を取ってがつつり組み上げたのだ。

昭和の戦後世界を丹念に調べて作り上げられたセカイは、民俗学的にも興味深いものだという。

横溝氏が戦時中に疎開していた真備町に於いても、古民家カフェの企画が進行中だと言われる。

二〇二〇年如月末日までにおおよそ一〇〇店舗を閉鎖する予定のイトーカトリーにとって、逆風はまだまだ続きそうだ。

都会の郊外型百貨店や商業施設が統合整理合併を九年前から何度も何度も繰り返しているが、まだはつきりとした光明は見えてこない。

言うまでもなく、私が業務を行っている執務室はある意味戦場であつて、社交や折衝や交渉の場でもある。

室内の基本人員は私に第一秘書艦と第二秘書艦。第一は大淀で固定しており、第二は週交代制としている。

書類作業がやたら多い時は第四秘書艦まで増員し、適宜対応している。部屋はそれなりに広く、来客数名をもてなすくらいは軽く出来るのだ。最初は殺風景な部屋だった。

執務室の戸を開けると、正面に事務所で使われるような業務用鉄製机。これが私の拠点。

その両脇には資料用の戸棚がある。

私の席から見て左前方に二つの机。どちらも業務用鉄製机。

右前方に長い木製の机。

ここに第三第四秘書艦。

食事用の机にもなる場。

無名の画家の絵が二点。

小さくて簡素な雰囲気。

それだけがここの飾り。

海岸沿いの鎮守府はその目的のために無骨な建築が行われ、今も増築中だが、執務室は内装を簡素簡潔にしていた。

それで用が足りていたからである。

慣れない提督稼業を進めている内、役割がどんどん継ぎ足されて訳のわからない方向に進みつつある。

戦艦棲姫が投降して程ない頃、彼女は執務室を見渡して言った。

「随分殺風景な部屋ね。」

「必要なものは最低限あればいいのさ。」

「いいわ、ちよつと見繕っておくわね。」

およそ一カ月後、彼女はどこからともなくマホガニー製と思われる執務用の机と戸棚二台、書類作業をするには高価そうなオーク材のテーブル一卓に椅子を六脚、バロツク調の来客用テーブルと椅子一式を持ち運んできた。

軽く見積もっても、私の年収が数年分は吹き飛びそうな感じだ。

作業員は何故か某秘密結社の全身タイツ型戦闘員服を着ていた。

書類作業にあくせくしていたら、ある日メトロン星人が執務室にやって来た。

私同様、冴えないおっさん姿の彼はため息を吐きながら、しみじみと言った。

「もつとよい絵を飾りたまえ。」

「絵ねえ。等伯とか北齋とか？」

「彼らの作品は持つていないが、昔の友人たちに描いてもらった絵がある。その中の二点を今度持つてきてあげよう。」

「ああ、頼むよ。お礼に間宮羊羹を進呈しようじゃないか。」

「それはいい。後、いつでも食堂を使えるようにしてくれたまえ。ここの料理はなかなか旨いからな。」

「お安いご用だ。」

数日後。

「これを見たまえ。どう思う？」

「とても……オランダっぽいな。」

「昔デルフトに住んでいた頃に買った絵でね。君にこの二点を進呈しよう。額装済みだから安心したまえ。どちらもメトロンの科学力で経年劣化しないようにしてあるから、

瑞々しいままで。見たまえ、この鮮やかな筆致を。」

「あ、あのだね……その、どちらも欧米の有名な美術館に飾ってありそうな絵なんだけど。それに、私の収入では一生かかってもどちらも買えない。」

「素人絵だとも言うっておけばいい。描かれて数年しか経っていないような絵を見て、これが人気画家の真作だと思ふ専門家など存在しない。」

「宇宙人の所蔵品だと思ふ専門家はいいかね？」

「ははは、地球人の専門家にそこまで柔軟な思考の持ち主が存在するとは、とても思えないね。君はこの絵が宇宙人の所蔵品だと言われて、素直に信じるかね？」

「信じないだろうなあ。」

「いいのかい？」

「君と私の友好の証さ。」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「これから食事でもどうだい？」

「その台詞を待っていたよ。」

その後、一箱二〇〇円の意外に高品質な煙草が闇で出回って多数の事件を引き起こした。

その中には疲労がポンと抜ける成分が含まれていて、禁断症状の人が暴れて大変だった。

そして。

ただでさえ肩身の狭い愛煙家たちが、より一層苦境に立たされる破目になってしまった。

……あいつの仕業じゃないだろうな。

『麗しき朝』と題が付けられた、縦五〇センチ未満横四〇センチ未満の青空が印象的な水運都市の朝を描いた風景画。

『刺繍する娘』と題が付けられた、縦二五センチ未満横二〇センチほどの黄色い服を着た娘が刺繍に励む姿の風俗画。

名画の疑いさえある作品から目をそらし、私はそつとため息をついた。

C VI・徹底的に追い詰めてやるわ、とその駆逐艦は言った

急な坂道登ってきたなら海が見える街。

ここは横須賀。関東圏第二の大都会だ。

複数の百貨店や複合商業施設の並ぶ街。

ネオサイタマ同様、急速な成長率の街。

退役艦娘会の本拠地はこの都市にある。

その代表である駆逐艦の不知火は、同姿艦の中でも特に肝っ玉が座っている。

先年、東日本を襲った震災後。

現地視察に訪れた官能小説家都知事から艦娘についてのいわれなき侮辱を受け、殴りかかろうとしたのが表に出せる中では一番有名な話だ。

咄嗟に周囲の自衛隊隊員たちと米軍兵士たちが総出で抑えたから放言無恥男の首は今も物理的に繋がっているが、場合によっては艦娘による初の殺人事件に発展するところだった。

「沈め。」と彼女が小さく呟いた瞬間に、不知火の猪突猛進勇猛果敢さを熟知していた周囲の人々がその動きを阻害したらしい。

幸い、その小さな声はマスメディアに聞き取られなかった。

実に危ないところだった。

彼女の「下衆（げす）め。」という台詞は生中継していたテレビを通じて一躍流行語になり、彼女は激怒したエロ小説家都知事によって退役に追い込まれたものの、これが切っ掛けになって都知事は望まざる辞任への道を歩むことになる。

彼は今も無職のままだ。

彼女は事件後、「徹底的に追い詰めてやるわ。」と言ったとか言わなかったとか。

その後、不知火は『権力者と相打ちになった艦娘』として有名になってゆく。

才覚を惜しまれた彼女は都知事側からの偏執的且つ度重なる苛烈な妨害工作を受けながらも、多くの艦娘たちからの支持を受けて退役艦娘会の頭領に収まった。

責任感の強さと事務処理能力の高さと卓越した交渉力を買われたのである。

都民からの信頼を失って元都知事に落ちぶれていた男はこれに対し、「あんな小娘が責任者とは世も末だ。」といったもの無神経な戯れ言を言った。

これを受けて、不知火は言った。

「弱いよね。つまらないわ。」

激動の元艦娘は何故か私の右隣に密着して座り、報告をした。

彼女によると、艦娘とも家出少女ともつかない娘が何人も全国各地に散らばっているという。

全国各地の警察とも連携しているが、人手不足が慢性化しているために結果が追い付かない。

鉄底海峡解放戦で多用された量産型艦娘の正確な登録数と轟沈数と退役数が噛み合わないらしいし、海域回収（ドロップ）出来なかつたらしい艦娘みたいな少女はあちこちで目撃証言がある。

ただ、事実がどうなのかとの調査は難航している。

調査を妨害する動きさえあるという。

関係者と思われる人々が非協力的なことも多く、とある核シエルターに住む老人の元を訪れた調査員は塩を投げつけられたという。

調査には興信所や探偵事務所や間諜や風魔や夜叉なども使っているが、進展ははかばかしくない。

隠蔽工作が多岐に渡り過ぎて、誤った情報がやたらに増殖している。

足の引つ張りあいばかりしているは国際社会モドキが復活した時に充分対応出来ない

いだらうと思うのだが、当人たちにとっては日々のもぐら叩きの方が最優先項目なのだろう。

愚かしいことだ。

艦娘の立場が彼らに侵されないよう、予防線を張って防衛戦を展開するべきか。考えごとをしていたら、戦艦級の眼光を持つ駆逐艦は私を見つめながら言った。

「また艦娘のことを考えているのですね。」

「ええまあ。それが私の仕事ですからね。」

「そういう意味ではありません。」

「ではどういう意味でしょうか？」

「知っている癖に意地悪ですね。」

「なんのことやらわかりません。」

「それがモテるコツなのかしら？」

「私は艦娘からモテていません。」

「事実を否認するのはダメです。」

「みんな勘違いしているんです。」

「一番勘違いしているのは司令ですね。」

「私はあなたの司令じゃありませんよ。」

「最近、退役艦娘の不満が増加中です。」

「随分露骨に話題を切り替えましたね。」

「イメージビデオの第三弾を願います。」

「厭ですよ。需要なんてあるのですか?」

「あります。ありますからすぐ撮影を。」

「落ち着いてください。」

「不知火に落ち程度でも?」

結局、イメージCDを作ることになった。

これで、不満がかなり解消されるらしい。

ホンマかいな。

仕事の早い彼女によって、テキパキと録音場所や製造施設が押さえられる。

バブルの頃は音が違うとか雰囲気かどうかで海外の録音場所を使ったりしたそうだが、今はデジタル編集の出来る時代。

音色に遜色ないそうだが、ど素人の私にはなにがなにやらさっぱりわからない。

あまりにもツクリモノにならないようにして欲しいが、私の声のどこに需要があるのか理解出来ない。

明日、港区赤坂で録音することが決定する。
まあ、裸でうろろろする仕事より余程いい。

やがて、別れの時間が来る。

と言つても明日また会うが。

「これからもご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします、司令。」

一見無表情に見える彼女は、どこかにはにかんだ風情でそう言った。

C VII : 震える山 (前編)

【先々々代の都知事の場合】

●二〇一一年三月、『天罰』発言で支持率が急落。女性取材者への時代錯誤な侮蔑発言に加え、大問題となる。

●二〇一一年四月、艦娘に対する暴言で在日米軍、陸海空自衛隊を完全に敵に回す。両陣営の、及び腰の出来立て大本営カッコカリとのあまりの温度差で話題となる。

●公共放送を自称する放送局から取材があつた際(『日曜美し館』)に『戦後になつてからの、今の現代美術は全然駄目だね。なにをやりたいのか、さっぱりわからない。訴えかけてくるものがちつとも無いんだな。わかりにくいことが芸術だつて思い込んでんじゃないの? それじゃ全然ダメだね、チミ。昔にヒトラーがなんで『退廃芸術』だつて怒っていたのか、ちつともわかっちゃいないね。日本の現代デザインが国際的に弱いのは世界的問題だよ。自分自身がお洒落だと思ひ込んでいる連中は、事有る毎に日本のデザインを馬鹿にするだろ。あれは国賊だね。自国を侮辱しているんだから。』との『国

賊』発言が話題になり、「よく言った！」との意見が一部で見られた。デカダンでスノッブな人々は反発したが。

●艦娘への暴言に加え、いわゆる『豊洲問題』での収賄容疑でリコール騒動になり、信任投票をするも惨敗。その際、投票率が九割を超えていたにもかかわらず二〇〇万票に達していなかったため、大騒ぎとなる。

●都知事最後の日に複数の暴漢に襲われて重症を負い、搬入先の病院でも点滴に細工がされて生死の境をさ迷う。

●厳重な警備を掻い潜った病んだ人たちから、抹殺対象として何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も狙われる。

●最近も、シャルル・ド・ゴール並みに襲われている。

【先々代の都知事の場合】

●二〇一三年、旧バビロン・プロジェクトに関する収賄事件に関与して辞任。

使途不明金一億の説明がしどろもどろで支離滅裂だったため、支持率は急落。裁判でも論理的な説明が出来ず、評価が地に落ちた。

【先代の都知事の場合】

● 金銭問題、女性問題、政治問題の三連撃により辞任。『五輪利権』については否定。

● 「東京に五輪を！」と叫び続けて景気を高めようとしていたが、国際社会自体がいっ復活するかわからない状況なので夢物語と一笑にふす人も多かった。

● 五輪誘致に関し、数々の不正に関与したとの噂が絶えない。

● 巢鴨にある中世異世界風娼館に通いつめてるのが露見し、獣娘プレイと奴隷女騎士プレイが大好きだと判明して一部の男性たちから感心されたが、兎に角ケチなのが発覚して却って馬鹿にされた。

● 人に奢る時は、『ホットカラムーチョ』の割引券が通用するところでのみ渋々行つた。

【長州出身の元首相の場合】

● 難病を克服したまではよかったが、首相選出時に北海道江別市出身の議員に破れて元々の性向であるタカ派の傾向が強まった。

● 現在、大阪府の『盛共学園問題』で窮地に立っている。あわよくば西日本経済に食い込むつもりが、醜聞が自身の議員生命に食い込む勢いだ。妻共々左団扇の予定が上手くいかなくて、「もし私または妻がなんらかの不正に関わっていたら、その時は潔く議員を辞職する。」と名古屋出身の官房長官に断言した。

東京の求心力は彼らの醜悪な収賄により、年々益々弱まってきている。

そんな東京にある政府から、大本営に向けて一通の指令書が送られた。

原油の更なる入手のために、中東への航路の安全性を急ぎ確保せよと。

やれるもんなら、とつくにやつとるわい。

鎮守府関係者はおそらく全員、そのように考えたことだろう。

現在、攻略が難航している孤島の要塞に対し、四大鎮守府による最高戦力で叩き潰す案が国会にて投じられ、それは即日採択された。

インド洋に浮かぶ孤島の周囲一〇キロメートルは霧に覆われ、視界の確保が困難だ。小山のような要塞はおそろしく頑健に出来ていて、生半可な空爆は通用しない強度。まるで大戦中にドイツ軍が作ったブンカーの如く、大量の砲撃を受けても壊れない。攻めあぐねていると奇襲を受けて敗退する破目に陥るから、どの提督も慎重だった。姫級の深海棲艦が複数守備する難攻不落の要塞であり、彼女たちの士気もまた高い。四大鎮守府並びに大湊（おおみなど）の提督と私が大本営に呼ばれた。

函館は小鎮守府なのに何故だ？

要塞攻略作戦を立案した大本営直属の府奥参謀は、意気揚々と成功を確信した感じで

演説した。

会議室で苦々しい表情になる提督たち。

私も同じ気持ちだ。

若造め、という顔で睨む老提督もいた。

政治家のごり押しで地位を上げる人間は、実に手に負えない。

アホかこいつ、と私が思っていたら、手練れの提督たちから次々に彼は反論された。

とどめは呉第六の先輩がやらかした。

先輩が『アホやお前は』的な論調で激しくツツコミまくったため、エリート様は気絶してしまった。

みんな哑然とした。

私もだ。

なんじゃ、こりゃ。

【第一次攻略戦】

栄えある攻略戦は、日本の鎮守府の代表を自認する横須賀が行うことになった。

他の鎮守府からは複数鎮守府による連合艦隊の間断なき波状攻撃を提言する声もあつたが、誇り高き横須賀はそれを断つた。

作戦を担当する提督は第一から第四までの四人。職業軍人としては本国最高峰の戦術能力を持つ。残る第五から第九までの提督は彼らの支援担当。総旗艦の戦艦大和を先頭に、華々しく出撃する。高火力の面々を主軸にした大艦巨砲思想の艦隊。主力の一六個艦隊に随伴する支援の一五個艦隊。負ける筈なき戦力。しかし。

出撃して二週間後。

戦力の逐次投入が悪循環した彼女たちは、さしたる戦功も立てられずに壊走した。本陣背後から奇襲され、潰滅したためである。

第一の加賀が重傷を負い、一時的に教官職を休職し作戦参加していた第二の瑞鶴が庇っていたら、レ級から屈辱的に見逃されたそうさ。

函館に来てうちの加賀教官にがつつりと抱きつく彼女が、そう愚痴っていた。センパイ成分を堪能した彼女の帰投後。

土産の鳩サブレを無表情に食べながら、青い空母は困ったものですと呟いた。

【第二次攻略戦】

お次の攻略戦担当は呉鎮守府。

前回の反省を踏まえて、全提督が作戦に本格参加する。

府奥参謀の作戦は無視無視無視。

総旗艦は戦艦長門。

先輩は後方支援担当。

作戦に投じられる艦隊は三六個だ。

これなら負けることはない。

勇ましい出撃時に、皆そう思った。

だが。

三週間後、敗走の報が届けられた。

横須賀同様、背後からの奇襲を許した彼女たちは同士討ちまでしたらしい。

なんてこった。

濃霧が判断力を鈍らせ、間違いを促す。

先輩の嫁の鳳翔が機敏に指示したために、全滅は防がれた。

呉第五所属の浜風がしみじみと戦場を語り、私のイメージCDを誉めながら帰投する。

土産のにしき堂の紅葉まんじゅうを駆逐艦に分け与えたら、皆私の膝に乗ろうとした。

解せぬ。

【第三次攻略戦】

水雷戦隊の運用に長けた舞鶴鎮守府と航空戦力の運用に長じた佐世保鎮守府が、合同で作戦遂行にあたった。

二鎮守府の轍は踏まないとすべく、戦術そのものを変更する。

鼓舞するつもりで舞鶴を訪れた府奥参謀は武闘派提督たちから散々罵倒され、しょんぼりしながら訪れた佐世保では九州男児たちの訓練に強制参加させられた。

アーツ！ なことはなかったらしい。

佐世保第一のフォッカー少将の嫁である龍驤が、総旗艦として指揮を取ることになった。

出撃する面々を見た関係者たちは、今度こそと願うのだった。

合計五四個艦隊。

だがしかしぼってん。

四週間後、彼女たちは潰滅も敗走もしなかったが、さほど戦果を挙げられずに帰って

きた。

「いやまあ、あれはアカンなあ。雷撃は要塞に通用せんかったし、ブンカー並の強度の要塞は壊せんし、霧の中でなんとか飛ばした航空戦力は防空戦力で次々落とされるので、もうどのないもこないもあらへんかったわ。霧は深いし、視界はおろか、足下もおぼつかんかった。それに、レ級が錨みたいな鉄の塊振り回して暴れまわつとつたしな。扶桑と山城が涙目で相手しとつたけど、ウチはあんなんようやらんなあ。」

カステーラをお土産に持ってきてくれた佐世保の龍驤はそうやってため息をつき、間宮羊羹を持って帰投した。

次は大湊かなかな？

当面は、外に出てきた連中を叩くくらいしか選択肢がないんじゃないかな？

まあ、うちが参加する可能性はないだろう。

支援担当は……どうかな？

いつまで隠し通すつもりかわからんが、各地の青葉はかなり怒っているぞ。

「調子はどう、エクレール？」

孤島の要塞のブンカー。

そこでぼんやりしていたレ級に、離島棲姫が話しかける。

「上々よ、ソフィア。」

彼女たちは人名でお互いを呼び合っていた。

「秋菜も気合い十分よ。」

防空棲姫のことらしい。

無邪気に微笑む小柄な娘。

「そりゃ、頼もしいわね。ゼーんぶ頼ってくれていいのよ。」

「潜水艦部隊が頑張ってくれているし、やわな連中に負ける気がしないわ。」

「近接格闘にあんなに弱いなんて、この要塞に来るまで知らなかったわよ。」

『指揮官』たちのお陰ね。強化し過ぎて稼働時間の短いのが難点だけど。」

「あんな奴らがこちらの手駒だなんて、連中が知ったら驚くに違いないわ。」

「そうね。次も期待しているわよ。」

「あたしに任せといて！」

手元の錨を二つとも持ち上げて、規格外な深海棲艦は楽しそうに微笑んだ。

簡素な作戦室。

古びた地図を睨む異形の姫。

離島棲姫は背後をチラツツと見た。

たたずむのは異形化した者たち。

「ここまでは六人か。あと二人。再生提督を使いきつたら、私たちはお仕舞いかしら？ 効率は今一つだけど、元々タダだから文句も言っていられないか。」

かつて見た燃えるような夕焼けを突然思い出しながら、霧深きセカイで彼女は彼方を見つめる。

「来るなら来てみなさい、正義気取りの使者たち。貴女たちにこの島が落とせるかしら？ 山を震わせることが出来るかしら？ ふふふ、楽しみだわ。再生怪娘（かいむす）もまだ五〇近くはいる。ここでの試験運用は終わつたし、情報は既に本部へ送つた。再利用出来る軍人や量産型人型兵器も各地に送つた。エコやロハスつて大事よね。海にやさしく。それが深海棲艦の掟よ。まさにベツカンコだわ。それにしても、古典的な戦法に何度も何度も引つ掛かるのは学習能力がない証拠ね。東ローマのフラウイウス・ベリサリウスは偉大だわ。今でもその手法が通用するんですもの。」

そして、彼女は不敵にニヤリと嗤つた。

C VIII：震える山（中編）

要塞攻略戦の支援に回されるのかと思っていたら、主力として指定されたで御座る。解せぬ。

大淀が苦い顔で言った。

「おそらくは、函館鎮守府の勢力を削ぎ落としたいのでしょうか。」

「半端な鎮守府のどこをおそれる必要があるのかわかりません。」

「口の極めて悪い人は、六大鎮守府だと揶揄しているんですよ。」

「我々が攻略戦に失敗することは、既定事項なんですかね？」

「失敗することを前提として、落とすつもりなのでしよう。」

「或いは首をすげ替えるとか？」

「そんなことはさせませんよ。」

「『他の鎮守府の了承が得られたら戦力の増強を認める』という項目を、最大限利用しましょう。」

「有志の勇士の勇姿に期待しています。」

「作戦までは僅か二週間、一日も無駄には出来ません。」

「では提督、私は在日米軍まで交渉に出掛けてきます。」

「頼みましたよ。」

「お任せください。」

小笠原からは軽巡洋艦の大井（元教官）と戦艦のオクラホマが到着していた。

大井は早速軽巡洋艦たちの教導にあたり、オクラホマは函館所属のメリケン艦娘たちと戦術について協議する。

島風は駆逐艦たちに近接戦闘での確実な仕留め方を伝授している。

必ず複数で掛かることなどを伝えた。

妙高は重巡洋艦たちの教導、加賀は正規空母の教導、長門は戦艦の教導、そして鳳翔は軽空母の教導を担当している。

小樽、稚内、釧路から応援に駆けつけた艦娘たちも真剣な顔で指導を受けていた。

訓練に励んでいた大湊（おおみなと）の駆逐艦の清霜が、複数の艦影に気付いて島風に報告する。

「大和さんや武蔵さんたちがこっちに来ているよ。」

呉第六の鳳翔と佐世保第一の龍驤を先頭にして、四大鎮守府の名だたる艦娘たちが函館鎮守府の廊下を歩いてゆく。

執務室に入室した彼女たちは、是非とも雪辱の機会を与えて欲しいと提督に直訴した。

大和が二名、武蔵が二名。

滅多に見られない組み合わせに、瞠目する者もいるだろう。

金剛比叡榛名霧島の高速戦艦四姉妹もいる。

呉の長門がじつと鋭く提督を見つめていた。

佐世保の扶桑と山城姉妹も、彼を見ている。

彼女たちの後ろには、空母系艦娘や巡洋艦系艦娘がひしめいていた。

まるで最終決戦に志願する勇者たちみたいだと、提督は内心苦笑いしながら考える。

先ずは擦り合わせをして、違和感を無くさなくてはならない。

同じ釜の飯を食べて、互いを知らなくてはならないのである。

そうしなければ、今までの作戦以上に失敗を重ねるであろう。

編成は元教官たちと協議し、先の作戦の反省会を行えばいい。

取り敢えずは食事である。

腹が減っては戦が出来ぬ。
交流にて自分自身を知る。
そして仲間の力量を知る。
短期間で最良にすべきだ。
すべての行動を拒む濃霧。
ブンカー並の強度の要塞。
神出鬼没の遊撃隊のレ級。
手堅い戦術が特徴のタ級。
量産型艦娘みたいな兵器。
漆黒の制服を着た指揮官。
不安材料が目白押しだな。

「では本日の夕食で当鎮守府の艦娘たちと交流を行い、お互いを知るようにしてください。特に戦艦、正規空母の皆さんは駆逐艦たちと交流を深めてください。これは大切なことです。」

そう言うのと提督は隣接する私室に入るや素早く着替え、帆布のエプロンを装備して食堂へ向かった。

一瞬呆然とした彼女たちは戸惑いながら、提督の後ろをついてゆく。

厨房では既に激戦が始まっていた。

腕利きの料理人や料理上手の艦娘たちが黙々と食事の準備を進めている。

テーブルには大量のパイが並んでいた。

「あちらの自動販売機では好きな飲み物が飲めます。積んである硬貨を使ってください。」

「提督、こつちよー！」

「すぐに行きます。」

カツを揚げていた足柄の威勢のよい呼びかけに応えつつ、提督は厨房に入っていた。

歴戦の艦娘たちがあまりにも自分たちの鎮守府とは異なるフリーダムな雰囲気を感じていたら、彼女たちの背後から航空戦艦が現れる。

「私の提督が作るカレーは素朴で旨い。さあ、好きなどころに座って、パイや中華料理や鳳翔間宮の技を堪能するといい。明日以降は大変になるから、今のうちにここの流儀を理解することだ。」

サクサクしたパイ。

品質のよい紅茶に珈琲。

月餅にフレンチトーストに間宮羊羹。

いずれも深みのある味わいですこぶる旨い。

朗らかな函館の娘たちは他所の娘たちに遠慮なく話しかけ、交流活動を積極的に行っている。

何故、函館鎮守府を絶賛する艦娘たちが多いのか。

笑顔と笑い声の絶えない鎮守府がここに実在する。

それは以前自分たちの求めた姿であつた筈なのに。

それを垣間見たような気になり、四大鎮守府を代表する艦娘たちはお互いに顔を見合
わせた。

カレーの仕込みに入っている提督を見て、彼女たちは初期の方針を転換することで合
意した。

出来得る限り、この鎮守府のやり方を吸収しよう。

食堂内の特設屋台で五〇代の男性がせっせと握る寿司をどんどん消費しながら、艦娘
たちは会話を重ねていった。

彼は「寺西さん」とか「辰さん」とか「たつつあん」などと親しく呼ばれ、満更でも
ない顔をしている。

その寺生まれのTさんは、時折トラフグの胆がどうしたとかカシワの根っこがどうし

たとか不穩な独り言をポツリポツリと漏らしながらも旨い寿司を握ってゆく。

彼の隣では寿司ネタの集合体にしか見えない十二カが流麗な手付きで寿司を握り、少女の姿をした異形に渡してゆく。

侍のように古風な口調で喋りながら、高潔な騎士のように振る舞う。

「豆六さん」と呼ばれる彼に最初驚愕した娘たちも、旨い寿司の前では礼儀正しくもなろうというものだ。

その夜、提督は三回カレーを作った。

最初は『挽き肉と茸沢山のカレー』。

続いては『お袋風味の昔風カレー』。

とどめは『簡単春野菜沢山カレー』。

CIX：震える山（後編）

青白い肌の正規空母風の娘が、函館鎮守府の執務室へ続く廊下を上品に歩いている。五航戦は翔鶴の衣裳をまとった彼女が、戸を可愛らしくトントンと叩いて入室した。

沈痛な表情の提督。

快活な表情の少女。

「ゴコーセン、シヨーカーカク、マイリマシタ。」

「お待ちしていました。あなたにお話しがあります。」

「ナンデシヨウカ？」

「離島棲姫や防空棲姫たちが守備するインド洋の要塞への、攻略作戦に参加してもらいたいのです。」

「ハイ、ヨロコソデ。」

「……大丈夫ですか？」

「マカセテクダサイ。」

「……ありがとうございます。では、作戦の説明に入ります。」

孤島の要塞を包む霧の外周。

一名の深海棲艦が、六名の艦娘から砲撃を受けながら逃走している。

「友軍の正規空母改良型が中破状態で艦娘の一個艦隊に追われています。敵軍の構成は軽巡洋艦二、駆逐艦四。ブルネイ第五泊地から出撃した水雷戦隊の模様です。」

要塞を統括する指揮所へ報告がもたらされた。

その情報は、潜航している潜水艦部隊から要塞の指揮所に素早く打電されたもの。

「保護しなさい。」

離島棲姫は素早く命をくださいました。

間違えようがない程簡潔な指示。

彼女たちから『怪娘（かいむす）』と呼ばれている、艦娘とも深海棲艦ともつかないような人型兵器が何名も艦娘たちの眼前に現れて砲撃を始めた。

かなわぬと見てか、艦娘たちはあつさり引き上げる。

保護された空母は、そのまま入渠施設に運び込まれた。

三度の大規模作戦で喪われた戦力の補充として、彼女は期待される。

高性能な正規空母を更に強力にした改良型で、戦艦級の装甲を持つ。

鍊度のそこそこの戦艦を含む艦隊さえ、一名の航空戦力で撃破可能。

十分な哨戒任務が厳しくなっている要塞にとつて、歓迎される戦力だ。

空母による警戒活動さえままならぬ状況に追い込まれ、四苦八苦故に。

現在は優秀な潜水艦部隊の大半を他の防衛線に回しており、戦力的内情は厳しい。

補給が途切れ途切れの状態で奮戦する彼女たちはアフリカ戦線のロンメルに近い。

もう一度大攻勢があつたら、幾ら姫級深海棲艦が複数守備する堅固な要塞とて墨守出来るかどうかは怪しい。

四大鎮守府の猛攻を退けた今、再軍備に邁進する他はないが補給線が維持出来ない。

地道に東南アジアの各泊地が補給艦隊を潰し回っているし、駆逐艦が多く撃沈されていた。

大破に幾度追い込もうと、艦娘たちは次々に現れてくる。

これは消耗戦だ。

戦力の逐次投入は策としてよろしくないけれども、要塞守備艦隊の疲弊を誘う方法としては間違っていない。

要塞側としては、戦力が無限に湧いてくる訳でないのだからなんとかやりくりするしかない。

防空棲姫やレ級やタ級と連日悩ましく会話する離島棲姫を実際に見たら、提督たちは

微妙な顔つきになっただろう。

彼女たちのあまりの人間くささに。

それは、深海棲艦の見下す人間たちの模倣に他ならなかったのだから。

異変はその夜半に起きた。

当直の深海棲艦が、要塞指揮官の離島棲姫の元へ駆けつける。

「大変です、ソフィア様！ 強烈な電波妨害が掛けられていて、多くの電子機器が使用出来ません！」

「生意気ね！ 電子戦のつもり？ こちらもやり返してあげなさい！ ECMにはECMで対抗よ！」

別の深海棲艦が指揮所へ飛び込んできた。

「トマホークにハーブーン、それに九〇式艦対艦誘導弾が何発もこちらに撃たれています！ トマホークは海面すれすれでこちらに向かっており、ハーブーンや対艦誘導弾は直上から来ています！」

「小癩なつ！ 米軍や自衛隊の武器を使うのか、お前たちは！ 誇りはないのか！」

「熟練監視員による目測での着弾予測時間は、いずれも約二分後です！」

「上空の迎撃は秋菜に任せなさい！ 海面すれすれのトマホークは全弾私が撃ち落とす

！」

黒い豪華な衣裳を風になびかせながら、漆黒の異形の姫君は二〇ミリ四連機関砲のFLAKを巡航型噴進誘導弾に向けて狙いを定める。

「落ちなさい！ カトンボ！」

高速で放たれる金属の塊。

上空で破裂音が幾つも聞こえた。

防空は上手くいったようだ。

音速の弾が何発もミサイルをかすめ、そしてその数発が大金をかけて作られた文明的破壊兵器を粉碎し爆発させる。

「大したことないわね……えっ？」

ズズン！

地響き。

山が震えた。

「な……なにが起きたの？」

有り得ない事態に、ゴシツクロリータ的な姿の深海棲艦は目を見開き瞬時戸惑った。

続けてまた地響きが起きる。

震えぬ筈の山が再度震えた。

「まさか……潜入？ ……艦娘の潜水艦部隊が侵入を果たしたとでも言うの？」

「大変です、姫様！ 弾薬庫と燃料タンクが爆破されました！」

「そんな馬鹿な！ どちらも地下にあるのに出来る訳がない！」

彼女はハツとして海上を見つめる。

「霧が……晴れてきた？」

海面と海の気温差を利用して霧を発生させる装置が、誰かに破壊されたというのか？
「指揮所に戻るわ。総員配置につかせなさい。」

振り向くが、誰もいない。

「なに？ どういう……。」

「久しぶりね。」

又ウツと現れるは、黒いキャミソール姿の姫。

背後に双頭の鬼を従えている。

「……まさか……貴女は函館の？」

「そうよ。」

「人間に媚びを売って尻尾を振る駄犬め！ そんなにあのオスがいいの？」

「随分な言いぐさね。まあ、じきに彼に会えるわ。そうすれば、貴女の考えも変わるでしょうね。」

「知ったようなことを！ 裏切り者がなにを言うか！ まさか……あの正規空母改良型が『トロイの木馬』だったの？」

「ご名答。彼女が正確な位置をビーコンで知らせてくれたから、ミサイルも撃てたのよ。」

ズンズンズンズンズンズン！

激しい砲撃音が聞こえる。

四六センチの激しい火力。

超弩級戦艦たちの猛攻撃。

もう、ここもお仕舞いだ。

腕力では彼女に敵わない。

秋菜は逃げてくれないか？

「艦娘とも深海棲艦ともつかない人型兵器は、霧が晴れたと同時に三式弾で一掃させてもらったわ。……あら、驚かないのね。」

「アレらは火力が一応あるものの、耐久力は紙装甲だし機動力なんてないもの。貴女も知っているでしょ。」

「ええ、鉄底海峡で嫌という程見たわ。」

「ソレの再利用版だけだね。完成した改良版はここにはないけど。」

そこへ、軽巡洋艦の艦娘がやって来る。

「伝令！ レ級、夕級他約半数の勢力を取り逃がしました！ 彼女たちに追隨する黒い制服の男性が二名確認されたそうです！ 提督が深追い無用と言われたので、追撃艦隊は出していないです。」

「そう。それでいいと思うわ。ところで防空棲姫は？」

「現在、長坂橋の張飛のように、一名で殿軍（しんがり）として激しく抵抗しています。提督から瀟灑指示が出ていますので、下手に手出し出来ない状況です。」

「ねえ。」

「仕方ないわね。捕虜として相応の待遇を要求するわ。」

「受諾するわ。提督からその権限は与えられているの。」

「秋菜は真面目だから、自ら死兵になって皆を逃がすつもりでしょう。」

「そういう子こそ死んじやダメだって、うちの提督なら言いそうだわ。」

「そうなの？」

「そうよ、そういう人。だから一緒にいるの。」

「ふうん。」

「説得を手伝ってくれる?」

「やっってはみるわ。」

明け方、作戦は呆気ない迄に素早く完了した。

それまでの苦戦がタチの悪い冗談かのように。

とはいえ、要塞の戦力自体は先の三度に渡る攻防戦で三分の一に激減しており、僅かな補給と霧による防衛線で凌いではいたものの実質的にじり貧であった。

交戦自体も少なかった。

防空棲姫が陥落を予測して、友軍を逃がしたからである。

「やらせはしないわ! やらせは!」

彼女はそう言いながら、佐竹義重の如くに暴れたという。

いつかは陥落していたであろう、と大本営は判断した。

逃亡した戦力がどの程度かも、把握出来ていないのに。

投入された戦力は一〇個艦隊。

九つの鎮守府の寄り合い艦隊。

大和武蔵各二名にメリケン艦隊や投降した深海棲艦を含む、それは少なくとも破壊力に満ちた構成であった。

四大鎮守府の艦娘たちによる雪辱戦は、無事に果たされたことになる。

要塞攻略戦はここに終結した。

投降した離島棲姫と防空棲姫は函館鎮守府へ行くことを望み、大淀の大本営への物理的説得によってそれは素早く叶えられることになった。

CX：このうさんくさく、たくましき世界

この惑星を調査し始めて何年になるだろう。

この間は調査延長まで申請して受理された。

何故、私はこの惑星を調査したいのだろうか？

この惑星の住人は、川があれば橋を架け、山があればトンネルを掘る。

彼らがどこへ向かっているのかは、よくわからない。

日本のホツカイドウとアオモリを隔てるツガル海峡に、人々は四半世紀をかけてトンネルを掘った。

そして、新幹線が華々しく開通する予定だった。

だが、深海棲艦と呼ばれる者たちの脅威によって閉鎖されたトンネルは当面無用の長物と化し、青函連絡船が艦娘と呼ばれる兵士の護衛を受けながら今も現役で往還している。

オクツガルイマベツ駅近くで仕事の傍ら、とある喫茶店でカレーを食べていたらその女性主人が話しかけてきた。

「あなた、鉄道の関係者？ 私は青函連絡船の方が断然好きだわ。」
そして彼女はイシカワサユリの曲を歌うのだった。

インターネットという伝達手段が現れてからも、テレビは今も多くの人に影響を与えている。

テレビという存在は不可解で、視聴率と呼ばれる尺度が重視され、局内で働く人は常にソレに振り回される。

視聴率が絶対正しいとされる保証など、どこにも存在しないのに。

日本の人はイチキュッパが大好きだ。

深海棲艦の侵攻で輸入が一切出来なくなつてから、消費者は商品の値段に対して更に敏感になった。

そして、イチキュッパの値札が貼られた商品に殺到する。
本当に必要なモノなど、人生にはさして存在しないのに。

私は現在、ハコダテの基地で家政夫をしている。

ハコダテに住む宇宙人は日本の中でも人数が多く、知人もいるからだ。

業務を終えた後、ヤシロアキの歌を聞きながらぬる爛のニホンシユをちびちびやりながら炙ったイカを食べるのが最近の楽しみのひとつだ。

しみじみ呑むニホンシユはよく沁みる。

思い出がばらばらと、絵葉書のように通り過ぎてゆく。

あの、離島での日々を時折思い出す。

医師の真似事をして、地元の人々と交流した日常を。

何故、私は彼らを助けることに奮闘したのだろうか？

外から霧笛が聞こえてきた。

日本製のカセットレコーダーの巻き戻しボタンを押して、ヤシロアキの歌を再度聴ける状態に戻す。

夜はまだ、長い。

この世界の大きな平和は、小さな平和の積み重ねだ。

鎮守府と艦娘たちが、それらを積み重ねているのだ。

おそらく。

私は見届けたいのだ。

この惑星の行く末を。

この、うさんくさくたくまじき世界に住む人々にうんざりすることも無いではない。
ただ。

この惑星の夜明けは美しい。

だから、私は調査し続ける。

それが私の使命と信じつつ。

C X I : 偽者仮面戦士の小さな幸せ

オレ、ホイシユレツケIX。

イナゴの力を持った改造人間だ。

ついこないだまで、とある秘密結社で働いていたんだが失職しちゃった。
今はとある北の港町で娘っ子たちを抱えながら、細々と生きているのさ。

上級量産型戦闘員として生み出されたオレは下級戦闘員たちを引き連れてアフリカ戦線で転戦し、その後脱走者を粛清する戦力として帰国した。

で、帰国後、秘密結社を脱走したホツパーIとIIを粛清する討伐隊に組み込まれて出撃したんだけど、奴らから返り討ちに遇って壊滅したんだ。

ホツパーたちを支援していた連中は血祭りにあげたが、怒りに燃えた裏切り者たちが暴れ回って仲間たちはバラバラにされた。

火を吐く奴も。

毒の霧を吐く奴も。

指ミサイルを飛ばしてた奴も。

怪光線を放ってた奴も。

苦無を投げてた奴も。

鎖鎌を使ってた奴も。

二刀流の奴も。

みんなやられた。

でも。

なんで、オレ生きてんだろう？

なんで、オレ五体満足なんだ？

戦闘中に頭を強く打った所為か、最終決戦の記憶が曖昧なんだよな。

くすんだ黄色の筈の手袋が暗い緑色になっているし、違和感がある。

……まっ、いつか。

オレはオレだ。

オレがオレだと認識している限り、オレがオレであることに変わりはない。

秘密結社の本拠地に戻ったら潰れちまっていたし、生き残りの女子戦闘員たちを引き

取ったりであの後てんやわんやだった。

戦闘員たちの死体はあちこちにあつたが、先輩や同僚や後輩の怪人の遺体は見かけなかった。

幹部連中も見かけなかった。

みんなどこへ行つたのかね？

………。

こまけえこたあいんだよ。

今が大事。

これに尽きるな。

しっかし、『仮面娘小隊』つてのを作ってたあ、大佐もなに考えていたんだか。

ロリつていう噂はホントだったのかねえ。

ま、あいつらの食い扶持も稼がなきゃなんねえからてえへんだがよ。

死霊博士も死國大使も行方不明だから、頼れねえしな。

連絡先くらい教えて欲しかったな。

最近は、深海棲艦とかゆう訳わかんねえ連中が海で暴れ回つてるしよお。

あーあ、ホッパーたちを追いかけてた日々が懐かしいぜ。

……でも、あれから半年くらいしか経っていねえんだよなあ。

人間社会で偽装生活するために、オレ用の運転免許証とか借家とか用意してもらつてたからよかつたわな。

郵便局やみちのく銀行にも口座があるし、預金で当面はなんとかなる。

この海沿いの街を拠点として秘密結社を再興……はむずかしいか。

明日は職安にでも行つて、講習の予約をするとしようか。

炭鉱も勧められたんだけど、移動が不便になるからなあ。

オレの身体機能なら鉱夫になるのは問題ないんだが、ホッパーたちの迎撃地点としてはよろしくないんだな、これが。

罨が張りにくいのもよくない。

坑道で戦うなんてもつての他だし。

一番大きな街にある程度近いのはいいんだが、汽車が一日一本だから躊躇するわな。

今更だけど、どうやって身分証明書とか偽造してたんだらう？

……まっ、いつか。

そーいや、博士が言つてたな。

究極の闇がどうしたとか九つのセカイがどうしたとか、反転世界がどうしたとか。

あんまりややこしい話だったから適当に相槌打つたけど。

世界征服が浪漫とかいうのも、よくわかんなかつたなあ。

博士とか大佐とか大使とか幹部連中はノリノリだったけどよお。アメリカみたいの世界を牛耳りたかったのかねえ。

アフリカで現地の武装勢力を潰し回ったのは楽しかったがな。なんだろうねえ、女子供を楯にするってのは。

もつと男らしく、バーンとやれっての。

ま、オレの反射速度に追いつくなんてのは百年はええがな。

あの時は随分転戦したなあ。

ロンメル戦車軍団もびつくりだ。

で、アフリカから戻ってきたら討伐隊。

勇んでホッパーたちの元へ向かったら次々仲間がやられ、地獄谷で最終決戦。

うくん、記憶がそこら辺から曖昧になるんだよなあ。

なにがあつたんだろう？

生き残った奴らとも連絡を取りたいが、『蜘蛛』とか『蝙蝠』とか『蜂』とか『蠍』とか、歴戦の連中はどうなつたんだろう？

意外としたたかなのが多かったから、案外生き残っているかもしれない。

まあ、縁があつたらまた会えるさ。
世の中、そんなもんだ。

C X II : 隣り合わせの灰と漆黒

建造されたばかりの頃、遠征と出撃が重なる過酷な労働環境で私は厭世的な気分になられていました。

仕事の始まりは通常午前五時で、終了するのは早くても午前一時でした。任務に失敗した時は、司令官の叱咤と説教と演説を延々聞かされました。勿論、それは業務内容に含まれません。

私たちには、お喋りする隙もお茶菓子を食べる時間ありませんでした。

青白い顔をした先輩たちや同僚たちと共に、いつ果てるとも知れぬ遠征と出撃を繰り返していました。

更に、早朝演習や司令官の私室での個別研修などが午前中に行われました。司令官は薄着の私に密着し、その時だけはやさしく声をかけてくれました。司令官との研修に参加し、そのまま遠征任務に従事することもざらでした。運がよければ、夜更けから日が昇る前まで自室で過ごすことが出来ました。

ただ、割り当てられた部屋は六畳間に四名で、憂鬱な顔の同僚と息の詰まるような時間を過ごすだけではありませんが。

お互い無言で、いつの間にか同室の子がいなくなったり変わったりしていましたが、そんなことすらすぐに気づかない程磨耗する日々でした。

私は始め、こんな環境に不平不満を多く覚えました。

また今日も司令官から怒られたわ。

また今日も寝ることが出来ないわ。

遠征中にうつらうつらとして、先輩たちから怒鳴られたことも二度三度ではありませんでした。

え？

戦艦？

空母？

重巡洋艦？

こちらの鎮守府に転属するまで、私は見たことはありません。

かなりの方が在籍されていたようですし、同僚の中には彼女たちと出撃する子もいたみたいです。

出撃前夜に、誇らしく私に話しかけてきた子もいました。

一度も口をきいたことのない子が急に親しげに話しかけてきたりして、嗚呼彼女たちも寂しかったのだと思いました。

出撃後、大抵は二度と見かけなくなりましたが。

ある夜、ボロボロになって帰ってきた子が私になにか言いたそうにしていたのを見かけました。

近づこうとしたのを先輩に遮られ、彼女は入渠施設に向かいました。

その子は、翌日の出撃で轟沈しました。

私はそのことをずっと後で知りました。

普段鎮守府で見かける艦種は精々が軽巡洋艦で、彼女たちは遠征艦隊の指揮や水雷戦隊の指揮を行っていました。

私たち駆逐艦は艦隊旗艦の彼女たちと親しく会話することを禁止されていて、破った時は食券を没取されました。

食事は主力艦隊の面々が食べ終わった後に厨房を借りて自分たちで拵え、そそくさと終えるのが当たり前でした。

食券が無ければ、私たちは食堂に入ることすら許されませんでした。

食堂の前では、悲しそうな顔の年配の憲兵さんが見張っていました。

その憲兵さんもいつの間にか若くて目付きの悪い人になりました。

食事ですが、二〇分で準備から片付けまで終えなくてははいけませんでしたから、いつもいつも慌ただしいものでした。

カレーという料理はこちらで初めて食べましたが、とてもおいしかったです。

揚げたてのやわらかいカツレツや新鮮な野菜を使ったサラダもよかったです。

デザートまで出てきたのには心底驚きました。

出入りの業者のおじさんからこつそりといいただいた、小さなお饅頭以来の甘味です。あの後こつてり怒られて大変でしたが、あの不恰好な和菓子は懐かしい思い出です。

いつも私は嫌々研修に参加していました。

腹の突き出た司令官が密着したからです。

司令官の脂ぎった指先がとても嫌でした。

研修に参加しないと司令官から食券を貰えませんから、彼の私室に行かない訳にはいきません。

それは常に苦痛を伴う時間でした。

ある日、たまりかねて軽巡洋艦の先輩に愚痴を漏らしました。

彼女は二年ほど前から主力として活躍する程の艦娘で、周囲の子からの信頼もあつい

のでした。

彼女はこう言いました。

「辛くないかと聞かれたら、確かにそう思ったこともあるわ。でもどうせ『あの』提督の命令を聞くのなら、なにかを得ようとするのが大切よ。嫌々命令を聞いても前向きな気持ちで聞いても、過ごす時間は同じだしね。それに、艦娘としてこの世に顕現出来たのだから、覚悟を決めて自ら志願して任務に従事するくらいでなきやダメよ。」

先輩とは、一緒に任務に従事していた時にこんな会話をしたことがあります。

慣れない雷撃と過酷な深海棲艦との戦いに疲弊し、戦果が芳しくなかった頃。

僚艦の支援砲撃を担当していた時、疲労困憊を言い訳にして逃げていました。

「あなた、さっきの戦闘では手を抜いていたでしょ。」

鎮守府への帰投途中、そつと近づいてきた先輩はそう囁いてきました。

そうです、私の行ったことは先輩にすべて見透かされていたのです。

「疲れているんでしようけど、そんなことじゃダメよ。あなたが当てられなかった分、他の子が当てなくちゃいけないんだから。」

先輩は更に続けて言いました。

「あなたが戦果を挙げてても挙げなくても、深海棲艦の出現率が減る訳じゃない。艦隊で

動いていれば、自分自身が当てられなかった分は別の子が当てなくちゃいけないだけだから、当てなきやダメなの。他の子の負担を減らす為にも。」

本音では、私を怒鳴りたかったのかもかもしれません。

そこをグツと抑え、気遣いながら注意してくれたのがわかりました。

それは凶星だったので、私はなにも言い返せませんでした。

「錬度をもっと上げることね。」

先輩は私を見詰めながら苦笑いしました。

どんな鎮守府にも矛盾はありません。

それに不満を持ったまま手抜きしている限り、なんの成果も成長も得られずに無駄な時間を過ごすことになります。

疲労がポンと抜ける薬を毎日飲み続けてまで業務を遂行しようとは思いませんし、どうしても嫌気がさすならば転属という手段もあります。

でも、行方限りはどんな業務であれ、常に前向きに取り組む姿勢が必要だと考えます。

既に先輩の軽巡洋艦は激務に次ぐ激務と激戦のさ中で轟沈し、司令官はある日行方不明になり、その後所属していた鎮守府は解体されました。

今後はこちらの鎮守府で働かせていただきますが、粉骨碎身の覚悟で臨みますので、

なにとぞよろしくお願いいたします。

C X III : 大佐の来た日

「君は艦娘を甘やかし過ぎている。」

函館鎮守府へ視察に来た上官の大佐は、執務室で開口一番そう言った。

うちの厳しい駆逐艦三名からは私が甘やかされていると評判なのだが。

「確かに厳し過ぎる鎮守府は問題だが、ゆるすぎるのも問題だ。」

上官の後ろにいるうちの大淀が殺つてもいいですかという表情をしているので、駄目だと小さく合図した。

あちらの大淀は気づいていないみたいだ。

うちの大淀の方がずっと可愛い気がする。

大佐の秘書艦の長門はムスツとしていた。

大佐が私に質問する。

「君はどんな鎮守府がよい鎮守府だと思うかね？」

「艦娘の笑顔が絶えない鎮守府です。」

「軍人の本領は戦果を上げることだ。」

「私は軍属です、閣下。」

「では戦果を強制して、それが出来ない時は提督の資格を剥奪の上転属だと言ったらどうする?」

「即時に記者会見を開いてぶつちやけまくり、ネットであることあること書きまくって希望者と共に逐電します。」

「ほう、そこまで言うか。……なにを知っている?」

「閣下のお宅は四つあるそうですね。」

「……脅迫する気か?」

「いえいえ、放置していただけるのが一番ありがたいです。函館は食べ物おいしくて住みやすい場所ですから、ここで近海防衛任務に専念出来れば嬉しいです。」

長門が無言ですうつと近づいてきた。

あ、これ不味いやつや。

さつとうちの大淀が私の前に立った。

「暴力は困りますよ、閣下。」

「なに一撃で済む話だ、君。」

「埃だらけみたいですねえ。」

「君が気にする話ではない。」

「道理で、殉職率が下がらない筈です。」

「皆名譽の戦死を遂げた英雄なのだよ。」

「所謂二階級特進、というやつですか。」

「軍隊では様々な事故があるものだよ。」

「長門さんは疑問に思わないのですか？」

「……。」

「拳を振るう相手を間違えていませんか？」

「無駄だよ。彼女は『教育』してある。そろそろ君には『退場』してもらおうか。」

「大淀さん？」

「はい、生放送はバツチリです。」

「生放送？」

「ええ、まさかこういう内容になるとは思いませんでしたかね。函館駐屯地から陸戦隊がそろそろ到着する筈です。いやあ、近所付き合いつて、ホント大事ですね。後、殺人教唆の件で警察も来ますから、よろしくお願いいたします。」

次の瞬間、長門が拳を振るってきたが、それは大淀によって難なく止められた。

「なに？　長門の一撃を止めただと？」

「うちの大淀さんはとても優秀ですから。」

「はい、提督に身も心も捧げています。」

「この『艦娘たらし』めがつ！」

大佐は警察が来たら、いきなり大人しくなった。

ニヤニヤしてさえる。

なんとかなるとでも思っているのだろうか。

もう既に後ろ楯さえ無くなったことには、全然気づいていないみたいだ。

いや。

そちらの方が都合はいいか。

ここで再度暴れられても困るし。

やれやれだぜ。

CXIV：錨提督と綾波と敷波

半端なく圧倒的な威圧感の、なんちやって提督。

それが、函館鎮守府へ研修に来ている錨提督だ。

四〇代の彼は眼鏡と顎髭が特徴的な怪しい親父。

本来顎髭などよろしくない筈だが、以前それなりに功績を上げた組織の代表だったということとキャラ付けの一環で許可されているとのことだった。

なんだよ、キャラ付けて。

組織名はツヴェルフだかトヴェルクだったかな？

その組織ではきたる時代に向けての汎用決戦型の人型兵器を開発研究していたらしいが、深海棲艦の侵攻で予算が下りなくなつて結果的に組織解体となつたそうだ。

技術的には非常に高度だったらしく、量産型艦娘を産み出す際にかなり役立ったみたいだ。

中学生を違法に使っていたとか複製人間を作っていたとか莫大な予算を使って地下都市を建設していたとか、なんだか違法法のおいがぶんぶんするのだけど知らん顔をし

ていた方が無難だろう。

さわらぬ神にたたりなし。

くわばら、くわばら。

研修は順調に進んでいる。

錨提督は無口というか口下手というか、あまり人と関わろうとしない性質なので少々やり取りに手間取った。

こういった武骨な人が現場の指揮をしていたのだから、その組織の人たちは大いに苦戦していたことだろう。

その反面。

彼の息子さんの新一君は大変出来た子で、父親をよく助けている。

ええ子や。

食堂の厨房で鳳翔や間宮から調理の技術を学んでいる真つ最中だ。

将来的には料理人になるつもりらしい。

友人の女の子を二人連れ、今日もにこやかに料理に勤しんでいる。

充実した春休みだね。

あまりにも眩しいな。

おじさんは学生時代、女の子と付き合ったことなんて無かったよ。

錨提督の引き連れている艦娘は駆逐艦の綾波と敷波。

なんちやつて鎮守府の標準的基幹戦力は駆逐艦二名。

内海任務しかこなせないが、大抵はそれで間に合う。

これに駆逐艦か軽巡洋艦一名が加わると、外海任務が出来るようになる。

その差は意外と大きい。

艦隊を公式に建造出来るのは大湊（おおみなと）を加えた五大鎮守府だけだから、『お裾分け』というか『下賜』というか、余剰戦力を分けてもらうか或いはなんらかのやり方で入手するしかない。

退役艦娘を口説きに行く提督もいるし。

ただ、前に建造でやらかした提督がけっこういるから、人員増加が難しいんだよな。そこら辺をどうするかが、提督たちの知恵比べになっている面はある。

風の冷たい、函館の春の午後。

津軽海峡で綾波と敷波の訓練。

彼は髪の毛を金色に染めた美女と共に、なにやら打ち合わせをしている。

阿迦井博士といったか。

彼女は以前所屬していた組織に於いて錨提督と男女の関係だったようで、組織解体後も一緒にいるという。

筋金入りか。

なんだかドロドロした雰囲気濃厚だ。

新一君もよく割り切れているものだな。

私が彼の立場だったらぶん殴っている。

綾波は微笑みながら大きく手を振り、敷波は微妙な顔をしながら小さく手を振っていた。

教官役の妙高先生に引率されて、二名の駆逐艦は平和な海で戦うための練習をしている。

相手をより効率的に殺すための技を磨くため、彼女たちは当たり前の如く引き金を引く。

「彼、私がいないとダメな人なんです。」

応接室で雑談をしていた時に阿迦井博士は錨提督の目の前でサラリとそう言って、私はむせそうになった。

「ああ、そういうのはありますね。父さん、仕事は兎も角、私生活はてんでダメですか
ら。」

お茶とお茶請けを持ってきた新一君にとどめを刺され、錨提督は能面のような顔になつていた。

「そうそう、父さん。僕は弟でも妹でも歓迎するから大丈夫だよ。それと、朝は窓くらい開けてね。」

完全に固まった男女を置き去りにして、少年は軽やかに部屋を去つていった。

「父さんと里葎子さんが夜中に元氣過ぎて困っているんです。」

「そうですか。」

新一君から相談があるというので応接室で話を聞いたら、開口一番父親とその彼女についての話題になつた。

里葎子さんとは、あのパツキン姉さんだ。

有能な科学者らしく、量産型艦娘の件でも一枚噛んでいるそうなの。

その高い功績故に、鎮守府関係者として潜り込んでいるのだろう。

「里葎子さんが僕の義理のお母さんになるのは確定事項なので、それはそれでいいんです。ただ、夜中にいろいろ聞こえてくるのでどうにかならないものかと。」

遮音性や防音性の高い部屋に……いや、少年を別の部屋に移そうか。

「玲や明日香が興奮したら、僕では抵抗出来ないので困るんです。」

一緒にいる女の子たちのことか。

組織の訓練生をしていた名残で、今も彼らは大変仲よしだとか。

新一君が目覚めると、二人が添い寝していることもあるそうだ。

私と一緒にだな。

つまり。

まるで自重しないおっさんと姉さんの所為で、思春期の若者たちが悶々していると。

ダメじゃん。

組織解体後に五人一組で狭い貸家に住んでいるそうだが、雑魚寝に近いと言われた。

教育によくはないなあ。

さっさと鎮守府を用意してもらって、彼らと艦娘を移してしまおう。

そうだ、それがいい。

厄介ごとは素早く対処すべきだ。

におうぜえ、におうぜえ。

こいつらをほつとくと、厄介ごとのにおいがどんどん酷くなってくるぜえ。

夕食後の、少し弛緩気味の時間帯。

綾波に敷波、新一君に同期の女の子二人が無邪気に話をしている。

中学生青春日記、って感じがする。

彼らの、民家改造型のなんちやって鎮守府への移動許可も下りた。

彼らの問題は彼ら自身に解決してもらおうじゃないか。

新一君に艦娘たちと女の子一人が抱きついて、残る女の子一人がなにやら喚いてい
る。

青春だねえ。

とつとと追い出そう。

うん、それがいいぞ。

綾波と敷波に手を引かれて歩く錨提督は、まるで子供と一緒にいる父親みたいだ。

将来的には、赤城、蒼龍、葛城、日向、青葉といった艦娘を得て戦いたいそうだ。

機動艦隊を目指しているのかな？

彼には頑張つて欲しいね。

私の目の届かない場所で。

今日も風が冷たく吹いている。

鎮守府前の海は、まだ冷たい。

もう数日すれば研修も終わる。

波を蹴つて走る艦娘が見えた。

外見だけなら美しい少女たち。

だが、その中身は千差万別だ。

同姿艦でも全然違つたりする。

訳あり駆逐艦の受け入れ先があつてよかつた。

引き取り手がなかなか見つからなかつたしな。

癖のある男だが、まあなんとかやるだろうさ。

騙した訳でないが、覚悟はしといた方がいい。

今日の夜に話だけはしておこうか。

こわい話を何席かぶつた後にも。

後戻りは出来ないのだと説得する。

今更艦娘を取り換えは出来んがね。

駆逐艦二名にからかわれて赤くなっている新人提督になんとか既視感を覚えなが

ら、私は執務室に向かつた。

くわばらくわばら。

C X V : 知らぬことは幸せの証

君は羨ましい羨ましいと連呼するがね。

艦娘が実際に膝の上に座ったりしたら、どれくらい大変なのかを全然分かっていない。

提督の仕事の大半は執務室での書類作業だ。

朝起きて雷の淹れてくれたお茶を飲んで朝礼をやって執務室で駆逐艦手製の朝食を食べ終えたら、とにもかくにも書類とにらめっこなんだ。

肩車したり愚痴を聞いたりする暇なんざ、ちつともありはしないんだよ。

向こうが勝手にやってしまうんだがね。

小学校低学年の姪っ子を膝の上に乗せるとか肩車するとかなら、そんなに負担は無いさ。

しかし、だ。

中学生の女の子を膝の上に乗せるなんて、そりゃあ負担が著しい。

二名もこられたら、膝がガクガクする程だ。

例えば、夕立と時雨を膝の上に乗せ、白露が背中に抱きついてくる状況で仕事を遂行するのは大変困難だ。

ん？

それでも羨ましい？

甘いな。

休んでいる時じゃないんだぞ。

業務に集中しなきゃならん時なんだぞ。

前なんかちよつとも見えないんだから。

必然的に体を右にかしげて作業することになるんだが、下手をすると腰を痛めるから油断出来ない。

二名も膝の上だと、抱き抱えながら書類作業だ。

もう、訳がわからんよ。

なんでそこまでして作業しなきゃいかんだ、なんて思いながら書類をやっつけていたら昼が来る。

昼が来ると、膝の上の駆逐艦が当然の如く食事の時間だと告げるんだ。

こちらでも食べないとやっていられないからね、一緒に飯を食いに行く。

食堂での席は既に決まっていて、そこに手を引かれていつて飯を食う。

まるで駆逐艦包囲網が形成されているような感じがするんだが、まあ、気の所為だろうさ。

他の艦種の娘となかなか話が出来ないのは難点だが、うちは駆逐艦が多いからね。

仕方ないっちゃ仕方ない。

戦艦や空母の連中と飯を食ったのは、あれは何時が最後だったかな？

それで、昼飯を終えたらまた書類作業だ。

各種申請やら演習の報告やら遠征の結果報告やら内海外海での任務報告やら、普段からやっていることでも書類書類書類。

これで大型作戦があれば、書類作業は桁違いに増えてゆく。

先日の大型作戦なんぞ、こちとらは内海でちよろつと支援したただけなのに書類が八割増しになったよ。

優秀な秘書艦が欲しいよ、切実に。

ん？

うちには書類作業を得意とする艦娘がいないからな。

大淀はどこの鎮守府も手放さないし、困っているよ。

膝の上に乗るような駆逐艦はけっこういるんだがな。

秘書艦の育成には時間がかかるし、誰かいないかね？

で、バタバタやっているとおやつの時間になるのさ。

番茶やら代用珈琲やら国産紅茶やらと手作りのお茶漬けを持ってきた、当番らしき駆逐艦たちとティーブレイクだ。

夕食は執務室で摂ることが多い。

駆逐艦たちが作ってくるんだよ。

ん？

他の艦種？

さあ？

どうなんだろうな。

今度聞いてみるか。

でも、張り切っている駆逐艦たちを見ると、他の娘たちにはなかなか言い出せなくてな。

夕食を終えた辺りで書類業務が多少でも出来る駆逐艦たちが来てくれたりして、追い込みに入る。

日を跨ぐ前になんとか終えて、風呂に入つて寝るだけだ。
着替え？

ああ、駆逐艦が用意してくれているよ。

いつもまつさらな下着で感謝している。

そういえば、身の回りはすべて駆逐艦がテキパキとやってくれているな。

電や吹雪や五月雨や漣や叢雲といった駆逐艦たちは他の鎮守府での経験があるから、
慣れているんだろう。

まあ、そんな感じで毎日過ごしているよ。

ん？

添い寝？

ああ、朝起きると駆逐艦が隣で寝ていることもある。

寝惚けたのかねえ？

勇敢な駆逐艦といえども、まだまだ子供ってことさ。

添い寝を頼まれることもある。

夜がこわい、つて言われたら断る理由も無いだろう？

夜戦が得意な筈の駆逐艦に言われると、確かに違和感はある。

少女を戦場に送っている負い目を感じるからか、つい甘くなってしまう。

本当はそれじゃダメなんだろう。

しかし、私は思うんだ。

あの子たちの笑顔を守るのも、私たち提督の仕事だ。
なんてな。

皆さん、集まりましたね。

ではお手元の作戦要項をお読みください。

極秘ですので、読後焼却をお願いします。

司令官は女性とお付き合いをされたことがなく、特殊な性癖もありません。
若く、そして未使用です。

エロいお店の経験ありません。

しかも、私たち艦娘に等しくやさしい。

特優等物件ですね。

鎮守府を転々として解体をどうにか免がれてきた私たちは、今こそ総力を結集してかの難攻不落の要塞を陥落させなくてはなりません。

くれぐれも、エロい接触や発言は控えてください。

それは悪手です。

先日ふざけてエロい発言をした重巡洋艦に対し、司令官が切々と注意した事案は対岸の火事ではありません。

それにつきましては、参考資料としまして詳細な報告書が添付されていますので後程熟読願います。

軽巡洋艦、重巡洋艦、軽空母、正規空母、戦艦を演じてくださっている方々の協力あつてこそ私たちのことを忘れないでください。

鳳翔さんや間宮さんや金剛さんや榛名さんやイクさんなどが、ここにいないくて幸いです。

足場は固めました。

司令官の退任後も共に暮らせるよう、私たちは邁進しなくてはなりません。

慢心は禁物です。

質疑応答が終わりましたら、これからの戦術について協議したいと思います。

司令官が、ここが正規の鎮守府ではないことに気づく前に作戦完了しますよ。

CXVI：撃て！ 清霜！

清霜は元気に叫んだ。

必ず、かの大戦艦にならねばならぬと決意表明した。

清霜には限界がわからぬ。

清霜は、夕雲型の駆逐艦である。

遠征任務に赴いて、深海棲艦を倒して暮らしてきた。

邪悪に対しては、人一倍敏感である。

今日未明、清霜は所属鎮守府のある大湊（おおみなと）を出発し、津軽海峡を越えて海で隔たれた函館へとやって来た。

清霜には姉が沢山いるけれども、妹はいない。

つまりは末っ子だ。

旦那もまだいない。

函館に来ると、内気な早霜によく話しかけている。

清霜は戦艦になるべく、函館で様々な武器を試す。

先ず、明石たちや夕張たちにそのなかされて試作品を撃ちまくってはひっくり返り、それから函館鎮守府の宿泊施設をぶらぶら歩いた。

清霜には姉のように慕う戦艦がいる。

佐世保鎮守府の武蔵だ。

今は先の大規模作戦での疲労を癒やすためと称し、他の武蔵や大和たちと共謀して函館鎮守府で休暇を楽しんでいた。

張り子の虎は厭だと、駆逐艦や他の艦娘たちと交流しながら言った。

ホテル扱いされたくない、高級ホテル並の料理を作りつつ訴えた。

その彼女をこれから訪ねるつもりなのだ。

気さくな佐世保の武蔵は清霜を歓迎した。

舞鶴にも武蔵はいるし、彼女も気さくだが勿論違いはある。

違いはあるが、同様の悩みを抱えている。

そして、同様の気持ちを有していた。

姉妹の大和にもそういう部分がある。

清霜は四名の大戦艦に囲まれ、会話した。

武蔵を含む四名と歓談した後、清霜は再び工作艦たちの作った試作品を撃ちまくる。現在の彼女は、軽巡洋艦級の火器ならばなんとか扱えるまでになっていた。清霜にとっては通過点だが、他の駆逐艦にも真似をする者が始めている。撃ち終えて食堂へ行く途中、彼女は他の駆逐艦たちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。

本来好戦的で活発旺盛な駆逐艦たちが、静かに鎮守府の廊下を歩いていた。既に日も落ちて暗いのは当たり前だが、けれども、なんだか夜の所為（せい）ばかりではなく、鎮守府自体がやけにさみしい。

のんきな清霜も、段々不安になってくる。

しばらく歩いて老爺（ろうや）……じゃなくておっさん提督に逢い、語勢を強くして質問した。

提督はまるでなにかをためらっているかの如く、口を開こうとはしない。清霜は両手でガツンガツンと提督の体を揺さぶって、質問を重ねた。めまいを起こした提督は頭を振って、辺りをはばかりる低声で僅か答えた。

「駆逐艦は戦艦になれません。」

「何故、なれないの？」

「主砲を撃てたらなれる、と言う提督もいますが、どの駆逐艦もそんな、戦艦の主砲で砲撃することは出来ません。」

「沢山の駆逐艦で試したの?」

「はい、先ずは歴戦の島風を。それから、初期艦全員を。特型駆逐艦を。第六駆逐隊を。第七駆逐隊を。そして、「函館に來たすすべての駆逐艦を。」

「驚いた。主砲は撃てなかったの?」

「そうです、撃てなかったのです。」

聞いて、清霜は体の奥に燃えるものを感じた。

「諦めたら、そこでお仕舞いだわ。」

「先日は六名砲撃に失敗しました。」

「では、撃たなくてはならないね。」

清霜は単純な娘である。

工廠へ行って戦艦級単装砲を担ぎ出し、たちまち彼女は警備の鹿島に捕らえられた。

多数の艦娘がこれを見たため、騒ぎが大きくなってしまった。

清霜はすぐさま提督の前に引き出された。

「この単装砲でなにをするつもりだったんですか、清霜ちゃん?」

鹿島は静かに、けれども威厳をもって駆逐艦にそう問うた。

「この主砲を撃つて、駆逐艦が戦艦になれることを証明するの。」

清霜は悪びれずにそう答えた。

「貴女、がですか？」

提督は困惑しながら、そう問うた。

「そうよ。私は清霜。趣味で大戦艦をしている駆逐艦よ。」

清霜は撃った。

空砲であるが、戦艦級単装砲を撃った。

一番口径の小さな、だけど駆逐艦には大きすぎる主砲を構えて撃つ。

撃つ度に、その反動でひっくり返った。

「まだまだ！ 私はまだまだ撃てる！」

諦めない。

絶対に、諦めない。

それは炎。

心を燃やす小宇宙。

清霜の熱意は他の駆逐艦たちの心にも火を点け、燎原の火の如く燃え広がった。

何名もの駆逐艦たちが戦艦の主砲を担ぎ、試し撃ちを始める。そんな光景が、函館鎮守府の日常的な風景になってしまった。火力強化は歓迎されるが、これは異常事態と言つてよかつた。何故か戦艦たちにもこの熱意が伝播して、教導までしている。

当分、この状況は続くだろう。

風の強くて冷たい、函館の朝。

霞や早霜や足柄や大淀、最近横須賀鎮守府に着任した朝霜と共に、清霜が意気揚々と食堂に向かっている。

私は執務室の窓から彼女たちを見つめた。

いずれの艦娘も傷だらけだが、誰の目も輝きを失っていない。

いつか昇るぜ、栄光の空、という感じだ。

清霜は戦艦になるべく努力を重ねている。

私に気づいてぶんぶん手を振る駆逐艦へ、やさしく手を振り返した。

厳しいことをよく口にする長門も、彼女の努力を否定していない。

「清霜の目指す先を私も見てみたいのだ。おかしいかな？」
「いいえ、おかしくありませんよ。」

彼女の情熱はなにを生み出すのだろうか？

今は走って、その先を目指してみたい。

艦娘の可能性を信じながら、走りたい。

メロスのように。

C X VII : 炭素製の猿は去れ!

函館市内の古い帝政ロシア式建造物にて、幽霊騒ぎが発生した。事務方の田中さんが真顔で報告してきたので、いささか驚いた。魔王様にどうにかしてもらった方が、ありがたいのだけれど。人のことは人に任せる方針らしい。

……人?

人で解決出来る相手なのだろうか?

妙高先生と足柄の二名を引き連れ、私は早速現場へと向かった。

あれ?

どうして、私が率先して怪異な案件へ向かわねばならないのだ?

変だなあ、と思っている内にポインターは古い屋敷に到着した。

運転手の人工娘がドアを開けてくれる。

やれやれ。

ここまで来たならば行かねばなるまいて。

殺る氣に満ちた二名をどうどうと制し、その周囲を回つてみる。

「外観は経年劣化が進んでかなり傷んでいますね。」

私の右腕を束縛する妙高先生が、建物を観察しながら言った。

「人の氣配は無しね。足跡も最近のものはないわ。」

私の左腕をギョツと束縛する足柄が、地面を見ながら呟いた。

「窓に文字が浮かんでいたと聞き及びましたがね。」

「施錠されていますわ。」

「足跡も見えないわね。」

外部の人間の行動ではないのかな？

話題を振り撒いて、関心を起こす？

わからんなあ。

問題が発生したという部屋へ赴く。

かつてはロシア大使館だった建物。

今では古びた、使いようなき建物。

豪華な内装も手入れされぬままだ。

このままでは、いずれ崩壊するな。

「一時期、青年の家として使われていたそうです。」

「その後は、ごくたまに催し物に使われたようね。」

人口が一五万に膨れ上がって現在北海道第二の都市であるとは言え、函館市の財政事情ではこの歴史的建造物を再生するのは難しいかもしれない。

札幌が一〇〇万都市になれば、或いは援助が期待出来るかもしれないが。

以前の繁栄を取り戻せたならば。

現在、八〇万くらいだったかな？

『日本の穀倉地帯』とおだてられても、道民の内実はあまり芳しくない。

いつも都会に利用されてばかり。

とあるドラマの台詞で僻地扱いされたと某市の人々が怒っていたが、内地の都会の人たちからすればそれが偽らざる本音なのだろう。

それが無意識の本音なのだ。

故に、激怒したのだと思う。

まさか、幽霊騒ぎで耳目を集めて再建の資金を集めようともいうのか？

まさか。

まさか、そんな……。

「あら？　窓になにか書いてあるわ。」

足柄が私を引つ張り、必然的に我々三名は窓の傍へ行つた。

【炭素製の猿は去れ！】

ある意味哲学的な文章が、窓の結露を利用して書かれていた。

「ねえ、提督。私たちも猿なのかしら？」

「これはなにかの隠語なのでしょうか？」

「ちよつこし文章を試してみましよう。」

何故か結露している窓の、既に書かれた文章の下に新しく言葉を書く。

【こんにちは】

すると、少し経ってから両方の文章が消えて新しい言葉が形成される。

【何者だ？】

【はじめまして、私は提督です】

書いてみた。

面白い。

『彼』だか『彼女』だかわからないが、意思疏通を試してみようじゃないか。

【はじめまして、我は（読み取れない）だ】

【お会いできて光栄です】

妙高先生が素早く小型写真真機でその名前を撮影した。

後程分析させるつもりなのだろう。

【君はどこにいるのだ?】

【居間です】

【我も居間にいる】

【では、違う居間ですね】

【我は生殖体愛好家と炭素愛好家の群れと共にいる】

【私は信用出来る部下と共にいます】

妙高先生、足柄、ちよつと力をゆるめて!

近い、近いよ。

【君は何故ここにいるのだ?】

【人間を教えてもらいたくて】

悪戯心で聞いてみた。

【人間だと? 人間はそちらにいないのか?】

【いませんね】

私は一応人間だが、艦娘は人間ではないし、ポインターを運転している娘も人間ではない。

まあ、細かいことはさておこう。

【人間は薄い皮膚に包まれて赤い血の流れる最低の連中だが、私の親しい友人にも人間は存在する】

【私の友人にも人間はいます】

うん、これは嘘ではない。

【私の姿は至つて平均的で、七つの高い巻き髭、茶色の甲羅、全身は緑色に光り、瞳は青いが、君はどうだね?】

【同じですよ】

妙高先生が無言で撮影する。

足柄も興味深そうな感じだ。

【たかだか言葉を少し覚えた小器用な原始生物が、私の昇進を妨げ安寧を揺るがす】

【お察しします】

昇進があるんだ。

階級社会なのか?

それとも、管理社会なのか?

案外会社組織だったりして。

軍隊組織だったら少し厭だ。

【懸命に真面目に働く我々を人間は駆逐するつもりかもしれないが、それが深刻化するならば奴らに相応の代価を払わせるべきだろう】

【そうならないことを祈りますよ】

ホント、それは勘弁して欲しい。

【私は隣人が増えてもかまわないと考えるが、私の娘たちやその友らをめとるつもりはないかね?】

【素晴らしいご提案ですが、ご遠慮しておきます】

痛い、痛い!

両名とも痛いやん!

やめてチヨヨよっ!

【君は人間と親しいかね?】

【それほどでもありませんが、少しは親しいですよ】

【人間には我々が支配者であることを知らしめねばならない】

【まったくその通りです】

【奴らには正當な扱いを与えなくてはならない】

【心に留めておきます】

【ところで、君はどれくらい群れを率いているのだ?】

【およそ五〇名です】

艦娘や事務方などを含むとそれくらいだ。

【そんなに妻子がいる仲間と会えて嬉しく思う】

【ありがとうございます】

しまった！

そつちか！

痛い！ 痛い！

そんなに締め付けないで！

【では、また会おう】

【はい、ご機嫌よう】

高次生命体らしき存在との交信を終えてホツとしていたら、両脇にいた重巡洋艦の艦娘たちがひそひそと我が背中できにやら話をしていた。

第一夫人がどうか、第二夫人がどうか聞こえるが、聞き違いに相違あるまい。

「一旦帰りましょう。」

そう言った。

それからおよそ半月後、歴史ある帝政ロシア時代の建造物は函館鎮守府の所有物に決まった。

私は時折、『彼』だか『彼女』だかと窓の結露を通じて文章のやり取りしている。

CXVIII：リテイクから開始される艦娘生活

あくあ。

またやられちゃった。

このブラウザゲーム、一定期間が過ぎると基地への空爆と大進攻が始まるのよね。

東北に残存戦力を掻き集めて、かなり抵抗したんだけどなあ。

ねえ、メトロン。

これ、裏コードみたいなのは無いの？

そげに笑わんといてんか。

いつつもゲームオーバーじゃ、つまんないのよね。

なにこれ？

小型基地拡張コード？

実際使えるの、これ？

……ふーん。

隠しキャラがいるんだ。

そいつらを使えば、上手くいく？

えーっ、大型基地に着任させられないの、そいつら？

……まあ、もっかいやってみる。

進攻初期に人口がどんどん減るのをなんとか防いで、代替エネルギーの開発に素早く着手して、海外交易を限定的にでも復活させないと。

世界の人口が二〇億以下になっても駄目なんだよね。

よーし、いくぞ、おまんら！

突撃じゃきに！

私には変な記憶がある。

何度も何度も艦娘になって、幾度も幾度も轟沈しているのだ。

隣で失神していた司令官が復活したので相談してみたら、「それは俺とお前が会うための宿命的な記憶なのさ。」などとぬかしたので、三日間床を共にしないと云ったら土下座された。

それは実に見事な土下座だった。

他所の先輩たちや明石さんにも相談してみたが、前世の記憶だとか、他の同姿艦の記

憶が混在しているのかもしれないなどと言われた。

遠征や内海哨戒任務をこなす日々、に既視感を覚えながら、司令官の私室と同室の子との部屋を往復する生活。

ちよつこし悶々とする日常。

「ねえ。」

「なあに？」

同室の子が話しかけてきた。

普段は無口で静かな駆逐艦。

「気分転換に函館へ行ってみたら？」

「函館？」

「そうよ。あそこのご飯はとってもおいしいし、上手くやれば市内観光も出来るわ。鎮守府内の宿泊施設を利用させてもらえば宿代が浮くし、行ってみる価値はあるわよ。」

「行ってみようかな？」

「ええ、素敵な所よ。」

一人きりでは夜がさみしくなると泣いてすがる司令官に間宮羊羹を約束して、私は津軽海峡を目指した。

函館は風の強い街だ。

鎮守府は大きかった。

今も拡張工事が進められているそうだ。

深海棲艦やメリケン艦娘たちやロシア艦娘たちが普通に廊下を歩いていて、びつくりする。

メリケン艦娘は、まだ建造可能ではない艦ばかりで驚いた。

ロシア艦娘は三名いて、全員肌が真っ白に近い艦ばかりだ。

瑞鶴さんがじゃれついている翔鶴さんも随分肌が白かった。

稀少艦が集まる鎮守府なのかな？

なんとなく見覚えのある気がする。

食堂の厨房。

中華鍋を振るう料理人の隣で、ここの司令官がカレーを煮込んでいた。

彼の作るカレーは、この食堂に於いて人気料理のひとつなのだという。

「今晚は即席提督の作るカレーよ。私はいつもお代わりするわ。」

世話好きそうな案内役の子が、ニヤリと笑った。

他の駆逐艦たちと共に、市内ミニツアーに参加する。

半世紀前にウルトラ警務隊の人たちを乗せて活躍したポインターに乗車し、函館牛乳直営の牧場や立待岬や五稜郭などへ行った。

夕食の時間になり、食堂へと再度向かう。

食事処は大混雑していた。

「また会ったわね。一緒に並びましょ。」

勝ち気そうな駆逐艦の子の後ろに並ぶ。

今晚の献立はカレーライスに自家製の浅漬け、豆腐とワカメの味噌汁に筍と貝柱とブロッコリーの炒めもの。

おいしそうだ。

カレーを匙ですくって、あむっと口に入れる。

あっ！

初めて口にする筍なのに、何故か懐かしい味。

どうしてなのだろう？

胸が痛くなってくる。

「ど、どうしたの？ 辛すぎた？」

「ううん、とつてもおいしいよ。」

目の前の子があたふたしている。

涙がこぼれ落ちたからだろうな。

「これは幸せの辛さに違いはないの。」

「あんた、洒落たことを言うわね。」

明日は、ここの司令官と話をしてみよう。

なにかわかるかもしれない。

このカレーを食べると心がせつなくなる。

イヤじゃないけど、涙が次々に出てくる。

「水を持ってきてあげるわ。」

「ありがとう。」

背中を向けて、水差しを取りに行く彼女。

そうだ。

あの日。

彼女は。

目が覚めると、隣で司令官がぐっすり寝ていた。
うーん、と背伸びする。

なんだか、カレーが食べたい気分ね。

よし、今晚はカレーライスを作るぞ！

私と司令官との二人きりの生活だから、少しは変化をつけないとね。

物資の配給も最近は上手くいっているようだし、張り切っていこう！

よし、今日も一日頑張りまっしょい！

C X I X : 気合い! 入れて! カレーを作ります!

カレー。

ラーメンと並ぶ、日本人が魔改造した国民食のひとつ。

深海棲艦の進攻によってカレーの原料となる香辛料の輸入は途絶えたが、食に関して世界一の執念を持つ日本人はあらゆる努力を惜しまなかった。

南極観測隊に於いて日本人は他国の観測隊に比べ、三倍の糧食を持ち込んでいた。異世界に転移転生する日本人は、あらゆる努力を以って日本食の開発をするのだ。そういつた背景の所為か、輸入に依存していた食べ物物の幾つかは復旧が早かった。だがしかし、まだまだ輸入品は高額だ。

現在、少しこだわったカレーを食べようと思うと三〇〇〇円どころでは済まない。そこそこの味わいのカレーを、二〇〇〇円以下で食べられたら御の字のご時世だ。都内の某ホテルのレストランに於いて、カツカレーが七〇〇〇円すると騒がれた。某新聞社本社のレストランでは更に高級なカレーが平然と提供されているそうだ。

奥が深いというか、なんというか。

艦娘の作るカレーは旨いものが多い。

鎮守府へ出入りする者は、カレーの日に当たると大喜びする。

勿論、食堂への出入りを許している鎮守府に限られるのだが。

超々過勤務時間的暗黒形態の運送業のお兄ちゃんがゆっくり食べている暇なんて無いと駆逐艦に言つて泣き、持ち帰り用にと持たされたカレーを見て更に泣いた話もあると聞いた。

日本社会の闇は深い。

小麦粉を最大の原料とする某社の普及品系固形型カレー粉が、現在一箱五〇〇円前後。

食料品店が特価で三九八円くらいにすると、大体開店後一時間以内で完売するらしい。

遠征任務でも、香辛料系が最近増えてきている。

先日の大型作戦の成功が、それを後押ししているのだろう。

ある日、大湊（おおみなと）を加えた五大鎮守府の比叡たちが私に相談すべく、函館にやって来た。

姉思いで面倒見がよく、氣質がさっぱりとしていて料理上手。

元氣いっぱい、場を盛り上げるのにすぐれ厳しくやさしい。

鎮守府によつては最大戦力だったり、提督の妻だったりする。

そんな彼女たちが一様にしおれていた。

簡単な彼女たちが一様にしおれていた。

彼女たちが普段作るカレーは手間暇愛情その他が込められ過ぎて、対費用効果が悪す

ぎるらしい。

つまりは気合いの入れすぎだ。

そこで、私が業務の合間に作る賄（まかな）い系カレーというかニツチ系カレーを知りたいのだという。

料理の名手たちに教えられることなんて私にはなにも無いように思われるのだが、意外にも彼女たちは熱心に請うてきた。

ならば、調理だ。

別に沢山作ってもいいのだろうか？

食堂の厨房に行くと、李さんが夕食の下拵えをしていた。熱心な人だなあ。ぞろぞろ行ったので彼は恐縮していたが、そのまま仕事を続行してもらおう。鳳翔と間宮は休憩中のようだ。

今回は豚と牛の合挽き、それにキャベツと茸を使ったカレーにしてみよう。

茸を洗って、キャベツと共に刻む。

肉を炒め、次に茸と野菜を炒めた。

鍋に入れた材料をブイヨンと共に煮込み、沸騰したら灰汁取りしてカレー粉や香辛料などで味を調整。

夕方まで寝かせたら出来上がり。

とっても簡単でしょう。

比較的短時間でも大量に作れる。

懐にもやさしい。

物足りないなら材料を追加すればいいし、翌日や翌々日の変化もさせやすい。

「私、いつもは香辛料の段階からカレーを作っていました。」

「駆逐艦の子たちの集めてきた具材で作るのが基本ですね。」

「お姉様がイギリス式カレーを好むので、それが基本です。」

わいわいと試食する高速戦艦たち。

米は無論、道産だ。

何気に混ざって評価分析している鳳翔と間宮。貴女たち、他所の鎮守府から来たでしょう。

腕利きの李さんが妙に感心した面持ちで私の作ったカレーを試食しているので、なんとなく居心地が悪い。

彼からすると、私の作ったカレーが基本になるんだよな。

鳳翔と間宮はニヤニヤしながら私にカレーを作らせるし。

艦娘たちの要望も多いらしい。

冴えないおっさんの作るカレーが隠れた人気料理だなんて、関係者以外の誰が信じるだろうか?

いつの間にか駆逐艦たちが集まってきてカレーを食べたいと騒ぎ出したので、これは夕食的分だと説明した。

比叡たちが何故だか頷き合っている。

ニヤニヤしないで欲しいであります。

浅漬けを今のうちに仕込んでおこう。

夕食は予想よりも激戦になった。

比叡たちにも手伝ってもらいながら、先ずは挽き肉と茸のカレーを大量に作る。

そして馬鈴薯玉葱人参を小さく刻み、別口でことこと煮込んだ。

キャベツと胡瓜の浅漬けをてんこ盛りにした大皿で時間稼ぎし、サラダに軽く炒めた雑魚（じゃこ）を載せドレッシングをかけて戦場へ送り出す。

李さん特製の青椒肉絲やワンタン入りもやしスープも送り出した。

鳳翔間宮足柄の作ったカツやコロツケなど

もばんばん出してゆく。

手伝いの駆逐艦たちも大車輪の勢いだ。

煮込んだ根菜と挽き肉茸のカレーを合体させて、再度火を通した。

カレー粉と香辛料で調整。

次々と空になってゆく鍋。

お代わりする駆逐艦たち。

つられてほかの艦種たちもお代わりする。

殆ど空になった鍋に昆布で作っただし汁を注ぎ、大量のキャベツと挽き肉茸カレーを混ぜ合わせた。

僅かに残った他のカレーも集結させ、煮込んでゆく。

無法板の鹿ノ谷さんがじっくりと炒めた玉葱と和風だしの素で調味し、炊き上がった道内産のご飯にかけて戦場に送り出した。

甘いものは李さんが作った杏仁豆腐に、鳳翔間宮が作った白玉団子うぐいす餡添え。食事が甘味に移ったのを確認しながら、洗い物の作業をどんどん進めてゆく。食器洗浄器と並行で道具を片付けてゆく。

左右にいる艦娘たちから次々に料理を口に突っ込まれながら、作業してゆく。行儀が悪いが、致し方ない。

何故だか李さんが感心した顔で私を見ている。

翌日、中華粥を主軸とする朝ごはんを食べた後で比叡たちや紛れて来ていた艦娘たちが帰投した。

やれやれ。

少しは役に立てたかねえ?

今日も忙しい日になりそうだ。

新人憲兵たちに、艦娘たちのお付き合いの仕方を教えなくてはならないのだ。

なんちやつて提督がなんちやつて講師へとジョブチェンジだ。

二〇歳前後からアラフォーまで、彼らの年代は随分と幅広い。

なんでやねん。

妙な要望ばかりが増えてゆく。

そーゆーのは大本営か憲兵本部でやれよ。

しかも指名依頼だ。

異世界冒険者じゃないんだぞ、こちとら。

駆逐艦と付き合いたいんですと真顔で言うおっさんに、どう対処すべきだろう？

声をかけたいけど、二回り年齢差があるから大丈夫だよねと真剣な顔でのたまう連中をどないせえゆうねん。

ちよつとでもやさしくされたら、すぐ本気になってしまう程度に免疫が無いんだぞ。

匙加減が難しすぎて、どないもこないもならんわい。

大本営め、丸投げしやがって。

そんなに都合よく、可愛い子が振り向いてくれる筈なんて無いのに。

わかっているのに、わかっていない振りをしているのかもしれない。

モテない私になにを期待しているのだ？

いつそのこと艦娘の中身をみんなおっさんに……ああ、それはとつくに量産型艦娘でやっていたな。

おっさん専用におっさんを元にしたなんちゃって駆逐艦を増産し、需要と供給を噛み

合わせたらどうなるだろうか?

……こわくなってきたのでやめておこう。

それでもいい! とする輩まで現れないとは言切れないからな。

どつかの工作艦がこれを聞いて、嬉々としてやるかもしれないし。

せめて、「勘のよすぎる提督は嫌いだよ。」と言われないようにしよう。

……つて、誰もそんなことは言わないか。

人の欲の闇は深い。

青森の林檎ジュースにイーストをほんの少し足したものが、そろそろ飲み頃だ。

一パーセント未満の筈だから、法には触れていない。

今夜にでも吞んでみよう。

ぼんやりと、海を眺める。

気がついたら、隣に島風がいた。

中の人はおっさんだが、外見は美少女だ。

「今夜、お相伴に預らせてもらうぞ。」

腕と指を鳶のように絡めながら、島風は嬉しそうにそう言った。

CXX：白い城の工作艦

大本営主催の『駆逐艦トークショー』は、大失敗に終わった。

シヨック療法のもりだが、やらかした結果を招いたと言える。

中学生くらいにしか見えない駆逐艦たちがぶつちやけまくって強烈な下ネタをガンガンかましてくれたのだが、主な観客の提督は一種も二種も次々と大破した。

横須賀鎮守府は開店休業状態である。

呉舞鶴佐世保の提督が次々に倒れた。

中には担架で運ばれた提督さえいる。

エグいことを言う子もいたからなあ。

けつこうエロいことを日常的に言う子もちらほらいるのに、知らなかったのかなんだかわからないが衝撃的だったらしい。

想定外の事態に弱いなあ。

戦艦棲姫がゲストだったのもよくなかったかもしれない。

彼女もフルスロットルだったしねえ。

呆然としてお偉いさんたちを赤くさせたり青くさせたりしながら、駆逐艦たちが追い詰めてゆく。

ほら、そんなに脅えていたら余計に……。

あつ、一人倒れた。

メディーック！ メディーック！

衛生兵！ 衛生兵！

『大いなる眠り』と看板を掲げるプリンの名店で、私はロシア人の提督と向かい合わせで黄色い塊に匙を刺す。

横須賀へ仕事に来た際にはなるべく立ち寄るようにしている、呉のカツ井屋と並ぶお気に入りの店のひとつだ。

我々はマロイという、軍人崩れの大男を待っていた。

彼は欧州方面の情報通ではあるが、色々やり過ぎたためにあちこちから恨みを買っている。

それ故に、そろそろ高飛びしてもらおうかと思っていたのだが彼は時間になっても来ない。

「やられたんじゃないか？」

「やられたんですかねえ。」

約束の時間を三〇分過ぎても来なかったので、我々はピザ屋に行った。レノックスという、元軍人が経営している飲食店でピザは四角い形だ。なんでも、軍用艦艇の調理場は狭いので、必然的にそうなたらしい。ピザを食べ終わった頃、ロシア人の提督の副官たる軍曹がやってきた。忠実な部下から耳打ちされた彼女はやはりな、という顔で私に言った。

「東京湾にいたそうだな。」

「逃げ損ねたんですね。」

まあ、ロアナプラに逃げたとしても、いつまで生きていられるかわかったものではないのだが。

台湾のお飾り美人なヤン提督と彼女を支える副提督が来日したいそうだな。観光誘致が主目的みたいである。

電子・電気機器に加えてバナナとお茶と珈琲とウイスキーなどを輸入しているが、日本円も欲しいようだ。

アジア各国は日本人が観光旅行で落とす金に期待しているらしいが、まだまだそんな

に余裕はないだろう。

爆買いしていた国は内戦状態で、一体何時になったら統一されるのか判断が難しい。政府が崩壊して国家単位としては存続出来なくなった国さえあるし、予断を許さない状況だ。

オーストラリアは回復に向かおうとしているが、首相が艦娘差別発言をしてしまったために日豪関係は微妙な雰囲気になってしまった。

ニュージーランドの首相はこれを即時に非難。周囲の国々もこれに同調する。

その後艦娘たちは豪州系の任務をすべて拒絶し、首相は辞任に追い込まれた。

オーストラリアの復活が、首相の失言の所為で五年は遅れたと言われている。

やっちゃったよなあ。

近く、彼の責任を追求するための裁判が行われる。

これを欧米各国が知ったら、どう思うのだろうか？

『駆逐艦トークショー』で大破した提督たちは分散入院し、その内の何名かは岡山県の倉敷中央病院に入院している。

一挙に襲われてはたまらんということらしい。

西日本有数の有力病院の売店はかなり大きく、地元パン屋の作ったサンドウィッチを買って地元人気店のマルロクカフェで珈琲を買い、早めの昼食と洒落こむ。

私の目の前の席へ、白衣の若い女医が座った。

彼女はエスプレッソにしたようだ。

知的な瞳を輝かせながら、彼女が口を開いた。

「これからお見舞いですか？」

「ええ。やつと面会謝絶が解除されましたのでね。」

「夢を見すぎじゃないかな、って思いますけれど。」

「可愛い口元から猛毒を放たれたんです。同情の余地はありますよ。」

「あれで毒ですか。どれだけ耐性がないんですか？」

「純情なんですよ。」

「憲兵たちまで大破続出って、外聞が悪すぎです。」

「いつの日にか笑い話になることを信じましょう。」

「ま、それはおいといてですね。」

「はい。」

「函館へ着任したいんですが、許可が下りません。」

「難しいと思います。」

「諦めませんからね。」

珈琲を飲み終わった女医が立ち上がる。

そして。

桃色がかかった髪をなびかせ、彼女は嗤った。

CXXI：逃走はいつも上手くない

提督にも数日休む機会が与えられるのは、とてもよい傾向だと思う。

津軽海峡を渡る青函連絡船に吹く風は冷たく、船内の食堂で食べた蕎麦はまあまあの味だった。

観光客はばらばらいるが、混雑には程遠い人数だ。

青函トンネルが復活したら、多少は変わるかもな。

函館駅の二階にある喫茶店で麦焦がしの代用珈琲を飲みつつ、かの地の提督と雑談した。

くだらない話が出る友人は、真実ありがたいものだ。

その後、私は函館本線に乗ってあてのない旅に向かう。

小樽へ寿司を食べに行こうかな？

或いは旭川動物園へ赴こうかな？

イカ飯が有名な森を過ぎた辺りで、少しばかりほっとした気持ちになる。

前回、この駅で捕まったからだろう。

狼の口を過ぎたような気持ちにさえなった。

長万部（おしやまんべ）経由で洞爺湖へ向かうか？

それとも……。

八雲駅の乗降口で、艦娘二名が手を振っているのが見えた。

あれは……私の部下たちだ。

追いつかれたか。

数名の人々と共に汽車を降り、両脇をがっちり固められて改札口を抜ける。

ふと右手を見ると、キオスクがあつた。

牛乳でも飲むか。

地元産の低温殺菌牛乳は意外と安い金額で提供されていて、とても濃厚な味わいだ。

本物の珈琲牛乳さえ、お買い得な価格で販売されている。

ハラシヨー。

オーチニ・ハラシヨー。

これは実に旨い。

ついでに町を見て回ろうと言われたので、道南の老舗らしき味噌蔵へ向かう。

見学ついでに、そこで作っている味噌プリンを買って食べた。

手間暇かけた味わいだ。

購入した味噌樽を抱え、この蔵の味噌を使っているというラーメン屋に向かう。道中、駆逐艦たちが悪戯してくるので大変困った。

車中で艦娘たちから情報を得る。

大本営での駆逐艦たちのトークショーで、四大鎮守府の提督が次々に倒れたそうだ。下ネタでがんがんやられたという。

まったく、容赦がないですよ。

かわいそうに。

当分派手な作戦は行われないだろう。

まさか、意図的に……。

……そんな訳ないか。

考えすぎだな。

駆逐艦二名は函館や新青森での買い物に期待しているようで、互いに声を弾ませている。

昆布買おうか、林檎ジュース買おうか。

青森は酒も旨い。

八戸の造り酒屋の酒でも買おうとしよう。

まったくもって、彼女らはたくましい。

無邪気に笑う駆逐艦たちが、時におそろしくさえ思わないでもない。

だが、彼女たちを率いるのが我々提督の使命なのだ。

入浴時に乱入されようが、添い寝されようが、食事の度にアーンされようが、仕事に首筋をはむはむと甘噛みされようが、助平な話をされようが、踏ん張らなくてはならない。

それだけの話だ。

函館駅が見えてくる。

今回も逃げそびれた。

ちよっこし気分転換出来たから、まあよしとするべ。

やれやれ。

CXXII：大和さんたちにも負けません、と元商船は言つた

「特設航空母艦の春日丸と申します。不束者ではございますが、務めを果たしたいと思っております。」

突然大本営から新型軽空母が着任する旨の通知を受けたが、執務室にやって来た少女はまるで特型駆逐艦のようにあどけない雰囲気を残していた。

一瞬、磯波辺りが軽空母に扮装しているのかと思つてしまった程だ。

赤城に似た赤い袴を着用していなくてセーラー服を着ていたら、見分けが付かないかもしれない。

赤城や加賀や鳳翔といった娘たちの妹だと紹介されたら、そうだろうなと思つてしまふような雰囲気がある。

筆頭秘書艦の大淀と今週の秘書艦の霞と曙が、じつと彼女を見つめていた。

「函館鎮守府へようこそ。貴女の活躍に期待しています。」

「ありがとうございます。誠心誠意務めさせていただきます。」

「それでは早速ですが、任務を遂行していただきたいと思います。」

「はい。哨戒任務でしょうか？ それとも、護衛任務でしょうか？」

「厨房です。」

「はい？」

「料理は出来ますか？」

「はい、一通りこなせます。」

「結構です。ついてきてください。」

春日丸級一番艦軽空母、か。

改造したら、大鷹（たいよう）と名前が変わるそうなの。

好物は和菓子の三笠らしい。

地方都市のお嬢様っぽい。

小磯良平によって、姉妹艦共々日本郵船の美少女三姉妹として描かれたこともあるという。

先の攻略戦の報酬艦として、彼女は函館へ着任した訳だ。

なんだか少し怪しくも感じるが、戦力の増強は有り難い。

退役した元艦娘を再訓練するよりも、手間暇がかからない。

以前は艦娘が多すぎると思っていたが、少し考えを改めた。

「ここは、素直に受け入れよう。
誰がなにを企図したとしても。」

廊下を歩いていたら、龍驥に出くわした。

「おつ、新しい子やな。……もしかして、大鷹か？」

「お久しぶりです、龍驥さん。今はまだ春日丸です。」

「ほう、楽しみにしとるわ。」

「ええ、期待しててください。」

「言うなあ。これからどこへ行くんや？」

「厨房です。」

「今夜は春日丸お手製の料理が食べられるんやね。ごつつ嬉しいわ。提督、この子のご飯はめっちゃ旨いから期待しとってええよ。」

「それは嬉しいですね。」

「龍驥さん、そんなに煽らないでください。」

「ええやん、ホンマのことやし。」

からかう龍驥とからかわれる春日丸。

なんだかほんわりしたものを感じていたら、通りすがりの島風から一撃喰らってし

まった。

解せぬ。

食堂の厨房に到着する。

鳳翔、間宮、李さん、鹿ノ谷さんに新任軽空母を引き合わせた。どんな料理を作れるのかと思つて、彼女になにか作つてと頼む。包丁捌きが流麗だし、フライパンの扱いも安心感が感じられた。他の四名の目がピカピカ光っているように見えて、少しこわい。スクランブルエッグとタコさんウインナーと握り飯を出された。

「貴重な卵を使って調理しました。私、洋食も得意なんですよ。」
ほほう。

鳳翔、間宮、李さん、鹿ノ谷さん、私の五名で食べてみる。

フコースナ（おいしい）！

卵のふんわり感、ウインナーの火の通り具合、お握りの固め加減。料理上手だ。

ハラシヨー！

よい艦娘が来てくれた。

「材料さえ揃えば、大和さんたちにも負けません！」
それは心強い。

夕食の手伝いをしてもらっていたら足柄や龍田が乱入し、いつの間にか厨房にいた他所の瑞鳳が玉子焼きを大量に作っていた。

いずれもおおいしかったので、乱入の件は不問にする。

春日丸が駆逐艦の扮装をした瑞鳳に目を丸くしていて、なんだか新鮮だった。
……毒されているのかな？

何故か翌日大和や武蔵がやって来て、春日丸とハンバーグ対決をしていた。
どこからともなく吹雪型駆逐艦が多数現れて、春日丸に声援を送っていた。
大湊（おおみなと）の清霜が武蔵の補佐役として、下拵えを手伝っていた。
ハンバーグがどれも甲乙つけがたい味わいだったので、引き分け判定する。
一部の艦娘からハタレ野郎と罵られた。
解せぬ。

そんなこんなで数日経過した。
春日丸も厨房に慣れたようだ。

夜食のうどんもおいしかった。

さて海の仕事に取りかかろう。

春の暖かい日。

桜も満開ナリ。

函館の海に、複数の艦娘が浮かんでいる。

「今日は空母系艦娘による公開合同訓練を行います。」

複数の提督たちが見ている前で、私はそう宣言した。

参加艦娘は鳳翔、加賀、龍驤、雲龍、そして春日丸。

弓から矢を放って航空機に変じさせるは鳳翔と加賀。

呪符を舞わせて航空機へと変化させるは龍驤と雲龍。

それぞれの技が披露される。

さて、春日丸の出番が来た。

右肩に甲板を装備し、鷹匠の如く左腕の革手袋に零戦を載せる。

「春日丸航空隊、発艦！」

パツと左腕から鮮やかに飛翔する零戦隊。

鳳翔、龍驤、春日丸といった三名の軽空母の航空隊が標的に向かい、それを加賀と雲

龍の正規空母航空隊が支援する。

やがて三名対二名の演習へと進み、一進一退の攻防戦が展開された。軽空母対正規空母。

春日丸は戦意に溢れ、先輩たちに物怖じすることなく機体を動かす。何故か近隣にいた駆逐艦たちにしがみつかれ、私は動けなくなつた。観戦に来ていた提督たちの視線が厳しくなるのを肌で感じて苦しい。

春日丸に関心を持つ提督が何人かいたようで、訓練後彼らに包囲され質問攻めにされていた。

視線で助けを求められたので、彼女の支援に回る。

すると、何故か提督たちから非難された。

解せぬ。

オマケでインディアンっぽい恰好のヨークタウンが、発艦と着艦を提督たちに披露する。

カウボーイハットにホットパンツで露出が多く、胸元からブラがチラリと見えていた。

提督らの視線は大型胸部装甲に集中していて、秘書艦たちからどつかれまくっている。

披露後、春日丸同様、提督たちに囲まれる正規空母のヨークタウン。

容赦ない質問攻めに遇いつつも、的確且つ簡潔な返答を行つてゆく。陽気な彼女が春日丸と腕を組むと、複数の青葉が次々にシャツターボタンを押していた。

その後、なし崩しに撮影会となる。

夜がこわいので添い寝して欲しいと春日丸が言つたのには驚いたが、島風や吹雪や早霜らが私室に乱入してきてしつちやかめつちやかになつた。

翌朝、長門教官と妙高先生から全員説教されてしまう。

やっと終わつて、やれやれと執務室へ向かつていたら春日丸が近づいてきた。

なんだろう？

「私、もつと頑張りますね。」

素早く耳元で囁き、そして彼女は微笑みながら去つていった。

CXXIII：イタリア料理を堪能しに行こう

一時間に一本走るようになった函館の路面電車はいつも鮎詰めだが、今日は三名の艦娘と共に乗って谷地頭（やちがしら）方面を歩いてみることにした。

フローレンシアの獵犬や風魔たちは昨夜の爆弾魔との死闘で疲労困憊（こんぱい）だったから、ぐっすりと寝かせておこう。

死者が出なくてよかった。

路面電車の停留所近くには温泉があるけれども、今日は無しだ。

今回一緒なのは、小樽鎮守府所属のローマに大湊（おおみなと）鎮守府所属の清霜、とある鎮守府所属の航空戦艦。

清霜が先行してはしやぎ、ローマがそれをたしなめて、航空戦艦が微笑ましく見ているのが基本の動きって感じた。

ぶらぶら歩いて外国人墓地の方へ向かう。

都市伝説でこわい話の舞台にもなっているようだが、穏やかな雰囲気のところだ。

ここに眠る新聞記者が『赤』を大愛好んだ故に赤く塗られた墓は、現在『赤い墓』としてこわい話を作りたい人たちの手によって霊的なナニカとされている。

他の外国人墓地も似たような目に遭っているから、彼らの琴線を振るわせるナニカシラがそこにあるのであろう。

「真つ赤つかだねー。」

「赤いわね。」

「赤いな。」

年に一度、身内の人たちが塗り直しているのだそう。全国的にも珍しいのではなからうか？

尾鰭（おひれ）を付けるのが好きな人はこれを見て愉悦を覚えるのだろうかと思いつつ、左手に海右手に寺院を眺めながら歩いてゆく。

「ねー、司令官。この近くにイタリア料理店があるんだって！」

清霜が元氣いっぱいに言った。

「行ってみましょう。」

ローマが腕を引つ張る。

「夫と食べに行けるとは、流石に高揚するな。」

台詞が違うし、ツッコミどころ満載だが、下手に突っ込むとややこしくなるので航空

戦艦を放置した。

洒落た白亜と煉瓦の料理店が見えてくる。

その名は『トラットリア・アントニオ』。

どうやら、最近出来たばかりの店らしい。

昼の献立が五〇〇〇円とは、適正なのか？

物価高はまだまだ、是正の見込みがない。

石油や物品の輸入増が急務となっている。

他人の皿を取らないと腹ペコ続きな訳か。

なにかモヤモヤしたものを感じてしまう。

店主のアントニオはナポリ出身で、店ではウェイターも兼ねているのだと語った。

昼の献立は三五〇〇円くらいにしたいそうだが難しいので、その分気合いを入れて提供しているのだと言った。

彼は世界各地を料理人として調べ食べ研究し、深海棲艦の侵攻で日本にとどまったぞうだ。

一時期、茨城県と宮城県でイタリア料理の普及に努めていたという。

日本生まれのイタリア艦娘が、本場のイタリア人とイタリア語で意思疎通している。

なんだか不思議な光景だ。

先ずは水が出された。

水差しから注がれる。

透明な液体。

口に含んだ。

旨い。

これは、なんというか、乾天に慈雨、或いは岩清水が体にやさしく溶け込むような。

深く染み渡る旨さだ。

「おいしーね、これ。」

「アルプスの雪解け水かしら？」

「私に染み渡る提督、と言おうか。」

前菜が来た。

カプレーゼ。

地産地消系のモッツアレツラチーズとトマトを主に使ったサラダ。

これ、チーズだけ食べるとなんつーかさ、あんま味しないのよな。

ところがぎつちよんはつちよん、チーズとトマトを共に食べるとまさにうんまいなのだ。

なんてゆうか、ハーモニーなんだよな。

ホームズとワトスン博士つか、ポワロとヘイスティングス大尉つか、お好み焼きにカープソースつか、まあそんな感じ。

「ドレッシングに浸したら、もつとおいしくなるよ。」

「トマトを使わせたなら、イタリア人に敵う者なしね。」

「イタリア数千年の歴史を感じるヘルシーな一品だ。」

第一の皿は娼婦風スパゲティ。

アンチョビやニンニクや唐辛子などを使った庶民派パスタ。

辛い。

辛いが旨い。

「辛いけど、おいしーよ。」

「シンプル且つ奥深いわ。」

「娼婦の心を奪う味だな。」

第二の皿は子羊背肉の林檎ソースかけ。

道内で生まれ育った子羊と黒石産の林檎を使った味の協奏曲が、胃袋を侵食する。

「お肉、おいしー。」

「肉と林檎の酸味が、巧みに融合されているわ。」

「片輪だけでなく、両輪の動きが大事なのだな。」

最後はドルチエ。

それは、プリン。

みんな大好きだろう、私も大好きだ。

「これ、とってもおいしーね！」

「やさしさと深みと程よい弾力が醸し出す天才の味ね。」

「提督、アーンして。ほら、恥ずかしがることはない。」

とどめはカプチーノ。

ラテアートが施された、苦みと旨みと奥底のほんのりした甘みがじわりと染み込む。

旨い。

「お砂糖沢山入れたら甘くなって、飲みやすくておいしーね。」

「砂糖をジャンジャン入れるのが、本場イタリアのやり方よ。」

「無糖の珈琲にこだわる者もいるが、別に甘くていいだろう。」

私は砂糖無しでおいしいと思うが、これは人それぞれだと思う。

いずれも旨かった。

実に素晴らしいぞ。

体の負荷が、かなりやわらいだ気さえする。

微笑む店主に、また来るよと言って別れた。

明日は函館駅近くにある百貨店の吉良さんと打ち合わせか。

艦娘の手をじっと見つめていたが、そういうフエチらしい。

一度一緒に呑みに行つたが、少し変わった雰囲気を感じた。

散々手の魅力について語られたが、そんなにいいもんかね？

近頃若い女性が行方不明になる事件にも、注意しないとイケない。

道南及び青森県を含む東北が多いことから案外近場の奴の犯行か？

ロシアから出稼ぎに来ていた娘も、幾人か行方不明になっている。

客になっていた邦人もロシア人も、同時に行方不明の怪奇事件だ。道警から協力要請が出ており、今後のことも考えて了承している。

小樽鎮守府の提督が本気で怒っていた。

近い内に犯人は討伐されることだろう。

たぶん。

函館メロンやタ張メロンや富良野メロンなどを使ったパフエを出す店が、近々駅近くに開店するので楽しみだと清霜が言った。

お前、知っているな！

駅周辺のビルディングというと、ラキシスかな？

メロンゼリーやマスクメロンのグラニータやシャンパンシャーベットなどを使った、贅沢なパフエになるとか。

是非とも鳳翔や間宮を偵察に行かせよう。

谷地頭の停留所に着くと、何故か鳳翔、間宮、長門教官、加賀教官、妙高先生、島風、戦艦棲姫、吹雪に春日丸がにこにこしながら待ち受けていた。

やれやれだぜ。

CXXIV：はるちやんと伽哩

腹が、減った。

もうじき、今日と明日の出会い時。

春日丸着任関連の書類を処理していたら、夜中に近い時間になっていた。

夕食は春日丸の握った結び飯と胡瓜とキャベツの浅漬だけだったから、微妙に胃袋が食事を要求している。

簡単になにか作ろうかな、と思いつつ食堂へ向かった。

『食は函館にあり』というのが、近頃の腕利き料理人たちの認識だそうなの。

眼帯親爺の鹿ノ谷さんが笑いながら、そのように言っていた。

鳳翔間宮の合体攻撃は、大抵の料理名人を唸らせるからなあ。

艦娘たちも指導を受けて、めきめきとその腕を上げています。

李さんの中華料理は絶品だし、鹿ノ谷さんの地雷包丁のワザマエも冴えている。

料理馬鹿一代みたいな人がたまさかやってきて、食堂で料理を食べて唸るのだ。

私にはよくわからない世界だが。

これらの影響で、料理ショー的な演出を用いた夕食会やら料理対決やらが時折開催されている。

艦娘たちもノリノリだ。

特に駆逐艦の勢いは止められない。

取材に訪れたテレビ局や新聞社や雑誌の記者がそれを報道したり掲載したりするた
め、ますます料理人が函館へやって来る。

石川県出身で髪を金色に染めたお菓子屋の後取りが甘言を用いて交渉してきたが、丁
重にお断りした。

こういう人はちらほらいたりする。

自作の菓子折りを携えていたが、これを食した厨房を預かる面々は容赦なくダメ出し
していた。

本人が聞いたら卒倒するかもかも。

勿論、真摯に料理の腕を磨きたい人もかなりいる。

当然、この勢いは消えないだろう。

そもそも、軍用艦艇には腕のよい料理人を乗せてきた歴史がある。

先だつては奈良の歴史あるホテルから料理長が函館へやって来た。

各地の鳳翔や間宮や伊良湖や速吸や比叡といった料理上手も、函館で業を学んでゆく。

戦後の役に立つたら嬉しいなあ。

地盤固めしておくのは必須事項。

少将、私は艦娘側に付くぞおっ！

欧州を放浪していた有沢さんだが、彼は現在マルタ島泊地の厨房で料理長をしていると絵葉書が届いた。

ヴラディボストークなウラジオストック経由だろう、たぶん。

しかも、それは全文フランス語で書かれていた。

なにをしているんだ、あの人。

イタリアをうろうろしていた時にナポリで泊地の提督と出会い、そのトラットリアで意気投合したらしい。

「本物のフランス料理を食べさせてあげますよ。」

彼はそう啖呵を切って、泊地に乗り込んだのだとか。

ようやるわ。

今日は夜間出撃も夜戻ってくる遠征艦隊も無いから、既に厨房の火は落ちている。以前頼んだハンバーガーでも頼もうかと執務室ですりきれたメニユー表を探したが、何故か見つからなかった。

厨房に入つて寸胴鍋の蓋を開けると、かぐわしい匂いが辺りを満たしてゆく。珈哩だ。

これはカレーだ。

食パンもあるぞ。

……妙高先生の作ったものかな？

野菜の端切れが厨房の片隅にあつたので、これを洗い、刻んで、中華鍋で炒めた。

火が充分通つたところへカレーのルーをかける。

ジャツジャツと鍋を振り、深皿へ中身を流した。

よし。

さあ、これにパンを浸けていただくとしようか。

「あら、提督。これから夜食ですか？」

へ？

顔を上げると、私に向かつて微笑む春日丸が見えた。

「あ、ああ、書類作業がちよつとね。」

「私関連の書類ですね。お手数をおかけしました。」

頭を下げる彼女に、いやいや大したことは無いと手を振る。

少女が口を開いた。

「あの。」

「はい。」

「一口いただいていいですか？」

「ええ、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

私の差し出す匙でカレーをすくい、彼女はそれを飲み込んだ。

「おいしいです。」

「はるちゃんのような料理上手に誉められるとは光栄です。」

炒めた野菜と煮込まれたカレーを組み合わせただけなんだが……。

「もう、提督まで私のことをはるちゃんって呼ぶんですね。」

少し頬をふくらませる春日丸。

見た目の年齢にふさわしい行動だ。

「お茶を淹れますね。」

てきばきとお茶の準備を始める軽空母。

私はパンをちぎり、カレーに浸し喰う。

旨い。

「お茶が入りました。」

春日丸は湯呑みをことりと私の目の前に置き、自然な感じで隣に座った。

そして流れるようなしぐさで先程の匙をカレーのルーに浸し、すつと我が口の近くへ運んだ。

「はい、アーンしてください。」

彼女はなんでもないことをしているかのような表情で、当たり前のことを行っている口調でそう言った。

「私の作ったカレーと提督の炒めた野菜が醸し出す味わいは最高ですね。」

CXXV：可能性の範疇

私の名は加賀。

函館鎮守府に所属する正規空母の艦娘。

以前は教育機関で教官職を勤めていましたが、今は一兵士として戦場に赴いています。

やはり銃後にいるよりも前線ですね。

みなぎってきます。

今日は私同様に教官を勤めて今も同僚の戦艦の長門から、内密の相談があると聞きました。

念のため、ということと偽装のために大沼公園へ来ています。

大沼だんごと山中牛乳の組み合わせは、とても素晴らしいですね。

流石に気分が高揚してきます。

汽車の中でも思い詰めた顔をしていた長門が、黙々と公園の中を歩きます。

私も黙ってついてゆきました。

なにか、大きな問題でも発生しているのでしょうか？

あんなに面白い団子にろくに手を付けないなんて。

残りの団子は私がすべて平らげましたが。

五航戦のお気楽な方の子のようにはなれませんし、なんだか気になります。

長門と共に長椅子に座りました。

彼女はためらいがちに問いかけてきます。

「単刀直入に聞く。春日丸をどう思う？」

「基礎能力は高いですし、訓練に対して真面目に取り組んでいますので将来性を感じます。料理の腕前はかなりのものです。鳳翔さんや間宮さんに近い技術力を持っているものと考えます。彼女はその内、函館鎮守府に近くてはならない存在になるでしょう。」

「うむ、そういった点の評価は私と同様だな。妙高も同じようなことを言っていた。だが、お前に聞きたいのはその方面ではないのだ。」

「……まさか、彼女に間諜の疑いがあるのですか？」

「大本営に提督が嫌われているのは現在進行形だ。」

「大淀や風魔や夜叉などが危険要因をすべて排除しているものだと思いますが、実情は異なるのでしょうか？」

「吹雪は疑惑があつたがシロだ。事務職の元艦娘たちも洗つたが、背後関係は見当たらない。だが、一部情報が一時期大本営方面へ流出していたのは間違いない。現在は流れていないが、意図的な虚報が向こうに知られていたことから、誰かが情報を流していたのは事実だ。だが現在、『彼女』は正しく我が鎮守府の戦力だ。将来的にも裏切ることはないだろう。」

「長門は知っているのですね。」

「確定はしていないがな。春日丸は情報が流れなくなったが故の、後釜の可能性はある。」

「改二まで用意されている最新鋭の軽空母が、ですか？　最新の術式や艀装制御機能が組み込まれた期待の次世代型と聞いていますけれども、そんなに稀少な艦娘を間諜に仕立てるでしょうか？」

「では、こちらが揃んだ情報を伝える。彼女の本来の着任先が佐世保と聞けば、お前も疑惑を持つか？」

「えっ？」

「知つての通り、佐世保鎮守府は空母系艦娘の運用に特に長じている。」

「ええ。あそこは軽空母、正規空母、装甲空母などが揃っていますし、限界突破した赤城さんもいます。私の同姿艦は錬度もかなり高いですから、現在も主力艦隊の一員の筈で

す。彼女が瑞鶴とあまり仲がいい訳でもないのは心配ですが、互いに歩み寄ってやってゆくしかないでしょう。」

「内定直前に、赴任先を変更させた者がいるらしい。」

「もしかして、なにか不具合でもあるのでしょうか？」

「わからん。春日丸が先行量産型的な扱いの試験艦という可能性も、一応疑ってはみた。馬鹿馬鹿しいくらいに慎重な連中だが、見切り発車をやらかさないととは限らないからな。」

「函館で試験運用して、問題がなければ四大鎮守府に着任させるのかもしれないね。」

「春日丸が函館への着任を強く希望した可能性もある。」

「彼女は建造されて間が無かったのではないのですか？」

「大本營で初期教育を施したのは確かなのだが、不明点が多くてな。」

「では、空母勢でそれとなく注意しておくようにしてみましようか？」

「そうしてくれるとありがたい。私が下手に動くと大本營のいらぬ勘繰りが起きるかもしれない。政府の政治屋どもが動き出すと面倒だし、官僚たちが妨害に入ると極めて厄介だ。」

「それとは別……いえ、別ではないかもしれませんが、他に懸念事項があります。」

「提督との距離を縮めようとしている動きのことか？　猪突猛進の駆逐艦をしのぐ勢い

と聞いているぞ。」

「ええ。一挙両得の一石二鳥を目論んでいるのか、それとも純粹に好意を抱いているのか？ わかりかねる面が多々あるように思われます。もしすべて計略だとしたら……でも、そういう風には……。」

「そうだな、島風が気にしていたから、私も気を付けておく。真つ向勝負過ぎると陸奥からはよく叱られるから、お前たちにこの件は一任する。責任は私取るから、好きにやれ。なに、この長門、ただでは沈まん。」

「考えすぎだといいですね。」

「ああ、そうだな。お前たちには苦勞をかける。」

「いずれ訪れるであろう『戦後』に比べたら、これはまだまだましですよ。」

「ふつ、『独立』も視野に入れた方がいいかもしれん。或いは『作る』か。」

公園内にある洋食屋に寄って昼食をいただき（鳳翔さんや間宮さんに比べるまでもない味でしたが）、函館行きの汽車に乗りました。

がらんとした車内。

広告すらない車内。

好景気はまだ遠い先に思えます。

それでも人は足掻くのでしよう。

それを手助けするのが我々艦娘。

真実の灯りをともすための存在。

春日丸が『仲間』であつて欲しいものです。

……。

少し、瑞鶴のように気楽に考えましょうか。

CXXVI：こい、うまかー！

茨城県産のロメインレタスを入手したので、李さん特製の焼き豚を使った炒めものを試しに作ってみた。

中華鍋でレタスを炒め、焼き豚を投入して味を絡め、とどめに溶き卵を混ぜる。卵がふわとろの時に皿へと移して出来上がり。

瞬く間に四方八方から箸が伸びて、あっという間に皿は空になった。

大分県大分市の『吉野鶏めし普及会』の人と長崎県島原市の菓子店の人が、なかなか感心した面持ちで私を見つめている。

照れくさいがね。

函館市内の百貨店で開催されている『九州うまいもの展』に併せて、二人の料理上手が鎮守府を訪れた。

牛蒡（ごぼう）と鶏を使った家庭料理で郷土料理の『吉野鶏めし』を保存・普及させようと、地域の人々と共に奮闘している大分市の若い女性が一人。

もう一人は、島原市で旨いカステラを長年作り続けている壮年の男性で老舗の職人。別府辺りで食べられていたり天、つまり鶏の天麩羅を作ってもらつての試食会は艦娘が殺到する事態にまでなり、何故か他鎮守府の艦娘まで食べたい食べたいと言つてゐる。

・ポン酢をかけて食べるのが大分流らしい。

間宮鳳翔と豊後の女性が共同作業で料理を作り、貪欲な料理人たちがそれを柔軟に吸収してゆく。

お土産のボンタンアメや兵六餅を皆で分けあつて食べながら、カステラ作りを男性の職人から説明される。

長崎市で作られるカステラは確かに圧倒的な人気だが、他の市で作られるカステラもおいしいのだと熱弁している姿に好ましいものを覚える。

彼は変わった菓子を見せて勧めてきた。

その名はカストース。

長崎県平戸市の老舗で作られるカストースは、精選された卵黄に上質なカステラをまぶして砂糖蜜で揚げた南蛮菓子だ。

ポルトガル伝来の菓子だとかで、異国に渡来した方が昔の姿そのままに生き残る典型的な例だと考える。

旨かった。

その日の夕食は吉野鶏めしにとり天、それに加えて大分県の郷土料理のだんご汁だ。大分祭りだな。

私の作るロメインレタスの炒めものと、デザートのカステラを追加したら完成ナリ。通常よりも珍しいものが食べられるとあつてか、食堂は大盛況でごった返している。大湊（おおみなと）からもかなりの艦娘が来ている。

今も逗留している大和二名と武蔵二名も喜んでいた。

「明日はこの佐世保の武蔵が、うまか長崎ちゃんぽんと皿うどんを馳走してやろう。」
「舞鶴の武蔵も、同姿艦を助けることにやぶさかではない。」

「ホテルではありませんが、横須賀の大和も姉妹艦たちの為に腕を振るいきましょう。」
「呉の大和も料理上手の名に恥じぬものを提供しましょう。」

やる気満々の佐世保の武蔵と同姿艦姉妹艦たちが皆の前でそう発言し、食堂は歓声に包まれた。

どこかの重巡洋艦たちがそれをせっせと撮影している。

香りのやわらかい八女紅茶を飲みながら、私は皆の笑顔を再確認した。

熊本産の干し椎茸を購入したから、今晚水で戻して明日は筑前煮を作ろうかな？

宮崎県産の鶏肉は日本酒と塩で揉んで、一晚寝かせようか。

筍は……明け方にでも掘りに行けばいいかなかな？

筑前煮の話を間宮と鳳翔にしたら、駆逐艦の有志が明け方掘りに行くことになった。

さあ、後片付けをしよう。

率先して片付けものだべ。

いつの間にか隣にいた春日丸が、なんだか嬉しそうに言った。

「明日もおいしくなりそうですね。負けてはいられません。」

どさくさに紛れて胸を押しつけないでください、お嬢さん。

他の子たちが剣呑な目付きで私を見つめているのですから。

その後、無茶苦茶揉みくちやにされた。

CXXVII：春の終わりに秋きたる

建造。

それは提督の浪漫。

建造。

それは見果てぬ夢。

春も終わりに近づいたある日。

大湊（おおみなと）鎮守府の建造設備の周囲には、様々な鎮守府や鎮守府もどきから訪れた提督や提督もどきで鈴なりだ。

今日は大型建造の日。

かの地の提督からしたらあまり行いたくない建造方法らしいが、来るべき決戦の戦力充実に向けて為さねばならないのである。

特に、先日自称異世界転移勇者を名乗る新人提督がウォースパイトやグラーフ・ツエツペリンやサラトガや阿賀野や潮や浜風などを入手してからは彼らの目の輝きが

尋常でなくなっている。

通常、提督二種は建造を許されない。

だが、最近限定許可に変わったのだ。

それは大型建造が行われる特定時期。

彼らは互いに資材を持ち寄って願う。

よき艦娘が建造されて着任することを。

大湊だけで見られる、年に一度の祭典。

今年初めて行われる、欲望丸出しの日。

別に、高性能艦でなくてよいのである。

駆逐艦や軽巡洋艦、軽空母も悪くない。

重巡洋艦の建造を狙う提督さえもいる。

本日は通常建造を提督の人数分、大型建造を五回執り行う予定だ。

先ずは大型建造から。

大湊に於ける『ダブリ艦』の同姿艦ならばお持ち帰りも出来る。

提督二種の面々と提督もどきたちの内心から溢れ出る黒いナニカが周囲に渦巻いた。

「ハーイ！ テイトク！ 会いに来ましたヨ！ オーツ！ 何故か沢山テイトクがいま

すネーッ！」

一回目は紅茶戦艦だった。

微妙な空気が流れる。

提督高速陥落娘か。

駆逐艦の速攻的猛攻に屈しなかった提督でさえも、彼女の巧妙な攻めには耐えきれぬという恋愛系勢力最強級筆頭だ。

危うく大本営送りになりそうだったが、駆逐艦のみが六名所属している提督の鎮守府預りで一件落着した。

波乱に満ちた開幕である。

気を取り直した紅茶戦艦が提督に、早速好意の猛威を振るっていた。彼は秘書艦からげしげしと蹴られながら、なんだか満足げな表情だ。

二回目は紅い目の戦艦だ。

何故か一部で盛り上がる。

艦娘が一名しかいない提督たちは、彼女を迎えんと次々に立候補する。

おい、お前ら、資材の備蓄は十分か？

彼女は微笑みながら言った。

「不幸じゃないわ。」

結局、駆逐艦一名のみが着任している鎮守府もどきへ行くことが決定する。

びよんびよんと嬉しそうに跳ね回る提督と駆逐艦。

やさしく微笑む、塔型艦橋の戦艦。

仲よきことは美しきかなかな。

三回目はお姉さま好き好き高速戦艦。

その元気っぷりに一目惚れした提督がいたとかいなかったとか。

激戦の末、軽巡洋艦や軽空母を有する提督の元へ行くことになった。

紅茶戦艦から激励を貰い、彼女はとても感激していた。

四回目は白い水着を着たなんちゃって潜水艦。

その場にいた提督たちの大半が大いに盛り上がり、鼻息荒く熱烈歓迎な自己紹介で彼女を脅えさせた。

盛り上がり過ぎて、各提督は連れてきた艦娘たちからしばかれたり折檻されたり泣かれたりしていた。

自業自得である。

運用が大変難しい艦娘なので、結局大湊所属に決定した。はらはら落涙する提督続出せしと、後の歴史書は伝える。

五回目にして鉄血宰相の名を冠する独逸戦艦が建造された。

純日本製の独逸艦娘である。

独逸商標を冠しつつ日本で作られた筆記具のような感じか。

大いに沸く建造所。

そして、彼女は大湊に無事着任した。

何人もの提督が、最終レースに臨むような表情で建造設備に手を合わせている。

お馬さんか自転車かボートかお犬様か鶏か蟋蟀（こおろぎ）か或いは剣闘士か。

誰が出てくるかは運次第。

あまりにも酷い確率次第。

幸運の女神と悪運の魔王が一騎討ちする、天秤の傾きわからぬ無作為抽出の場。

安産祈願や交通安全や戒めの指輪などのお守りを握り締め、提督は祈り続ける。

もつと規制を緩めりゃいいんじゃないかねえかとも思うんだが、大本営は頭がかてえし、実

際、国内の資源が潤沢に程遠い状況だ。

「司令官さんはどんな子がいいのです？」

不意に秘書艦が訊ねてきた。

「そうだな。第一候補としてはお前と同じ駆逐隊の連中か。うちはお前しかいないからな。」

ひでえもんだ。

任務をこなす以前の話だろ。

につこりと笑った美少女がそつと手を重ねてくる。

その手は、少し震えていた。

「それは嬉しいのです。」

「初春型でも睦月型でもいいな。」

「誰が来てもお姉ちゃんとして頑張るのです！」

「その意気だ。軽巡洋艦が来たら、そいつに任せろよ。」

「わかっているのです。でも、司令官さんは渡さないのです。」

騒ぎが一段落。

いよいよ最後。

俺たちの番だ。

「電（いなづま）の本気を見るのです！」

気合いの入った駆逐艦。

『すでのな』と書かれた鉢巻きをきゅつと装着する。

貴重な資材を投入する。

最低量で回す建造設備。

年に一度の一発勝負だ。

「まわせーっ！」

「今朝は函館牛乳を飲んで元気一杯なのです！ 必殺のライトニングプラズマ！ なのですー！」

設備の上にある時間表示が時を刻み、周囲が騒いだ。

火炎放射器に似た高速建造材が、勢いよく火を噴く。

大湊の天龍が手慣れた様子で、設備に炎を浴びせた。

そして、魔女の釜が蓋を開ける。

「陽炎型、もしくは夕雲型の秋雲着任！ 提督、電さん、よろしくね！」

「お、おう。よろしく頼むぜ。」

「よろしく頼まれたのです！」

当たり前だ！

当たり前だ！

俺たちは手に手を取って、喜びを感じる。

「むっ、スカウター起動！ 提督ランク、チェーック！ いいもんみーつけ！」
とてとてと走ってきた駆逐艦が、俺の一部をしげしげと見つめる。

「戦艦級ね。食べたいなあ。」

「えっ？」

「なーんちゃって！」

けらけらと笑う期待の駆逐艦。

黒いオーラが出始めた秘書艦。

喧騒に包まれる青森の鎮守府。

どやどやと大湊の艦娘が来る。

左右の腕に駆逐艦がしがみついて、身動きが取れなくなった。

賑やかしの重巡洋艦がやってきて、艦娘たちに取材を始める。

悪戯っ子の顔して耳元で囁く艦娘。

聞こえるすれすれの音量を用いて。

その無駄知識の出所はどこだ？

顔を真っ赤にする俺の初期艦。

潤んだ瞳で見つめるではない。

ふう。

春の終わりに、嵐が来そうだ。

CXXVIII：殺し尽くして愛し抜く

司令官、今日も殺つてきました。

ほら、こんなにも錬度が上がりました。

近い内に私たちでも本当に結婚出来るように法律が変わりますから、一生懸命殺りま
すね。

みんな、幸せになれますよ。

ふふふ。

司令官のためにいっぱい殺りますから、期待しててくださいね。

最初の頃は殺り方がよくわからなかったんですけど、最近は何となくわかってきた
んです。

針の穴に糸を通すみたいいな感じですね。

魚雷をですね、こういう風に敵の艦装の隙間に突っ込むんですよ。

不思議なことに、深海棲艦が時折怯えているように見える時があるんです。

そつちからいきなり仕掛けてきた癖に、ふぎけんなよなつて思いますよね。

弾切れになつても至近距離でメリケンサックを振るつて頭をかち割りますから、大丈夫です。

きつちりとどめは刺します。

泣くんですよ、彼女たちも。

なにかを懇願するみたいに首を振つたりすることもあるんですけど、今更つて感じですよ。

私たちは殺しあいをしているのであつて、馴れ合いをしているんじゃないですから。

命乞い？

まさか。

深海棲艦がそんなことをする筈なんてないですよ。

あつちから一方的に喧嘩を売つてきたんですから。

函館？

ぬるいことを言つて失望させないでください、司令官。

私たちの使命は敵を全滅させることです。

歩み寄りをするだなんておかしいですよ。

そもそも交渉する相手が存在しませんし。

あいつらを殺せば殺すほど強くなれるのに、妥協する必然性はないです。

横須賀も呉も舞鶴も佐世保もぬるいと思いますね。提督も艦娘も全員。

箱入りのお嬢さんがたは、地獄がなにか全然わかつちやいないんです。

温かい味噌汁におにぎりを普段から召し上がっている方々には、カチカチに固くなつた携行糧食をいつも急いで口にしなきゃいけない者の立場なんて理解出来ないでしょう。

ギリギリの弾と燃料で敵と交戦して帰投せよ、つて命令が当たり前だったんですよ。

今とは違つたんです、ここら辺は。

燃料の計算が上手く出来なくて、帰りに沈んだ子もいました。

弾切れで殺られた子もいっぱいいました。

量産型艦娘と共同戦線を張つた時は、特に大変でした。

なにもわかんない子がおたおたしているのなんて、七面鳥撃ちの的以外の何物でもありませんでしたよ。

ホントにこわいんですね、身動きなぞ出来はしないんです。

声も出せない、逃げることも出来ない。

逃げろつて言われても反応は無理です。

それを笑いながら撃つていたんですよ。

あの、深海棲艦と称される敵性勢力は。

ええ、必死になって砲弾を放ち、魚雷を撃ちましたよ。

胃の中のを吐きながら。

オイルまみれになりながら。

弾を撃ち尽くした大砲を打撃武器にして近接戦闘しなきゃならなかった時の、私た

ちの恐怖がわかりますか？

……わかんないですよ。

今は当たり前に出ることも、当時は全然出来ませんでした。

私たちが鉈（なた）や手斧や棍（メイス）を標準装備しているのは、その頃の名残で

す。

飾りじゃないんです。

ねえ、司令官。

私たちって、道具ですよ。

戦争のための。

戦争が終わったらどうされます？

標的艦にでもして、泣きわめく私たちを殺しますか？

それとも、対人戦闘の訓練でもさせて紛争地帯に放り込みますか？

或いは、隔離してどこかの施設に閉じ込めますか？

……………。

ふふふ。

やですよ、司令官。

そんなに深刻な顔をしちやつて。

私たちがそんなに深く考えている訳ないじゃないですか。

函館に時折遊びに行ったりしているんですから、艦娘としての生活を満喫していますよ。

さあ、さつさとお風呂に行きましょう。

みんな待っているんですから。

ニガシマセンカラネ、シレイカン。

CXXIX：ありふれた幸せ

大淀がいてくれると実にありがたい。

事務関係では安定の戦力だからなあ。

時折他の鎮守府に出向してもらっているが、彼女なくして鎮守府の事務仕事は片付かない。

俺一人じゃ、とても処理しきれん。

「提督。」

「なんだ？」

鋭い視線で彼女が話しかけてくる。

この、甘ったるくない感じがいい。

函館の大淀は何故、アイツをあんなに甘やかそうとしているのだろうか？

大淀はさ、眼鏡をピカピカ光らせて油断なく目を配る感じがいいんだよ。

「外海作戦任務の件について、函館鎮守府から了承が得られました。」

「おう、そうか。そりや、ありがたい。」

うちの艦娘は総勢八名だからな。

穴だらけだ。

任務に支障をきたす勢いである。

元艦娘に粉をかけたリ余剰分の艦娘を要求したりしているが、成果は出ていない。

函館は五大鎮守府に比べ、融通のきくところが素晴らしい。

三名回してもらつてようやく息がつけたのは記憶に新しい。

艦娘の建造設備さえあればなあ。

五大鎮守府と一部の泊地でしか建造出来ない決まりは、なんとかならんかな？

「正規空母の雲龍、重巡洋艦の足柄、軽巡洋艦の龍田、駆逐艦の早霜が明日午前には到着予定だそうです。」

「よし！　よし！　これで二艦隊を編成出来る。」

大本営は時たま、無茶な指令を寄越す。

それに対応出来ない、場合によっては首だ。

これではなんのための提督稼業なのか、全然ちつともさっぱりわからん。

酷い話だが、実際、前例が幾つもある。

特に俺たちなんちゃって提督は、恰好の的だ。

提督によつて違ふという説もあるがな。

函館は立地的な強みがあるから、道内の助けは勿論、青森の大湊（おおみなと）と連携したり、ウラジオストツクの浦潮（うらじお）泊地などと連携したりしている。

東北北陸方面の鎮守府とも仲がいいし、呉鎮守府には奴の先輩がいる。

小笠原の提督も同期だ。

それに、鎮守府設立の件で揉め事を解決して政治的な力量を見せし、先の大型作戦では大和二名武蔵二名などの戦艦を加えた大連合艦隊で深海棲艦の拠点を粉碎した。

捕虜まで滲透するという金星だ。

現在、函館を潰す気であつた連中の追い落としが始まっている。

そんな飛ぶ鳥を落とす勢いのアイツだが、相変わらず読めない。

喰えない、といった方が近いのかもしれない。

自分自身の立場がわかつているのかね？

まあ、いいさ。

利用出来るものはなんでも利用しよう。

アイツだって、最初からああではない。

「おう、提督。晩飯は炒飯と餃子と麻婆茄子でいいか？」

厨房で旨そうな匂いのカレーを仕込みながら、天龍が言った。彼女の周りでは、駆逐艦たちがいそいそと手伝いをしている。

よきかな、よきかな。

「お前に一任する。それとだな。」

「明日、函館の龍田が来るってんだろ。」

引率名人の軽巡洋艦は男前に笑った。

「知っていたのか。」

「天龍龍田連絡会に漏れはねえぜ。」

天龍は面倒見がよく男前で遠征によく出掛ける関係から、各地の鎮守府泊地警備府の動向や艦娘のあれこれに詳しい。

事情通だ。

天龍或いは龍田が鎮守府にいるかいないかで、得られる情報量が格段に異なる。

「近々大湊で一人一名建造出来るって聞いたぜ。」

「ありがたいが、そこはかとなくケチくさいな。」

「大型建造も同時開催らしいから、誰か引き抜いてこいよ。」

「くじ運は悪い方だから、難しいな。」

「期待しないで待っているぜ。」

カレーが完成に近づいているようだ。

「いい香りだ。」

「アイツは俺の作るカレーが好きだからさ、今から仕込んでいるんだよ。」

「流石は天龍だ。」

「あたぼうよ。」

「お前たちもしつかり天龍を手伝ってやってくれ。」

「「「はーい！」」」

民家を改造したなんちゃって鎮守府の廊下を歩いていたら、視線を感じた。振り向くと、古鷹が柱の陰から私を見つめている。彼女は不意に微笑んだ。

「これからも、重巡洋艦のいいところを一杯知ってくださいね。」

「お、おう。」

「ふふふふ。」

いい子なのだが、今一つ読めない。

うちの最強火力艦娘は少し天然だ。

中華な夕食を終え、仕事が終わって、やれやれと肩を回す時間。

手伝つてくれていた古鷹と大淀は、一時間前に風呂へ行かせた。
さてと。

俺も風呂に行くか。

入渠設備という名の風呂場へ行く途中、談話室で『辺境警備』を読んでいる大淀に尋ねた。

『みんな、出たか？』

「ええ、後は提督だけですよ。」

心なしかなんとなくふにやあとなっている大淀と別れ、入渠設備にたどり着く。

『提督入浴中』の看板を立て、脱衣して浴槽に向かった。

体を洗っていたら、戸がガラガラと開いて当たり前のように軽空母が入ってくる。

「おつ、提督。今日は早いね。」

「まあな。」

隣に座った隼鷹（じゅんよう）が体を洗い出す。

第一艦隊旗艦はどうやらご機嫌みいだ。

「明日から函館の子たちが来るね。」

「そうだな。」

「当分一緒に入れないねえ。」

「作戦が終われば大丈夫だ。」

「そっか。」

「そうだ。」

「あたしは提督に執着しているからさ、一日でも一緒にいられないとなんかこう、ムカつくんだよ。」

ニヤニヤ笑う美しき娘。

オレの大事なおんなだ。

「男冥利に尽きるね。」

「でしょでしょ。だからさ。」

「一升三〇〇〇円までだな。」

「まだなにも言っていない。」

「お前の言いたいことは、するつとまるつとお見通しさ。」

「うーん、そうしたら五合三〇〇〇円の酒でもいいかな？」

「一升でも五合でも、日本酒の総予算は変えないからな。」

「えー、そこはさ、ご奉仕するから、融通して欲しいよ。」

「これこれ、こんなところでそんなことをしてはいかん。」

「なに言ってるのさ、この体に散々激しく仕込んだ癖に。」

「合意済みだろ。」

「そりゃ、そうだけどき。」

「仕方ないな、『初孫』と『八甲田山』の小瓶を提供しよう。」

「やった！ 提督、愛しているよ！」

「お前なあ。」

互いに体を拭きあつて、私室へ向かう。

綱渡りのような人生だが、悪くはない。

こうして見ると、艦娘も人と変わらん。

「なあ、隼鷹。」

「なんだい、提督？」

『陸奥八仙』は旨かったか？」

「うん、あれはいい酒さ……あつ！」

「……。」

「悪かったよ。」

「任務はきつちりこなしているから、それと相殺する。」

「へへへ。」

「青森産の貝柱が減っていた。」

「あはは。」

「体で返してもらおう。」

「上手いことを言うね。」

意外と華奢な体を抱き寄せて、部屋に入った。

体力温存は……ちと難しいか。

CXXX : セクシー駆逐艦選手権

大本営は時折訳のわからないことをやらかす。

主に前線の提督の神経を大破させる方向性で。

だがしかしばってん。

今回の企画は軍人軍属政治家民間人の多くを歓喜させ、良識人の眉をひそませた。

そう。

『セクシー駆逐艦選手権』の開催である。

艦娘の艦種は複数に渡るが、最も多種なのが駆逐艦だ。

なにか景気のおよくなりそうな提案をしたままと大本営の会議室で言い放ってきた老害……もとい老練なお偉いさんたちに対し、函館の提督が戯れに『セクシー駆逐艦選手権』を提案した。

途端。

歓声に包まれる会議室。

アホや、こいつら。

万歳三唱するアホまでおる。

生産的な事柄は得てして亀の歩みの如く進行が遅いものだが、趣味嗜好に走った本気野郎どもが爆走暴走した場合は話が別だ。

あれよあれよという間に話が進む。

少数の白けた常識人たちを置き去りにし、『セクシー駆逐艦選手権』は大々的に宣伝されて日本国民の関心を多く集めた。

第一次予選会は体操着ブルマー仕様。

第二次予選会はスクール水着旧式仕様。

『敢えてレトロな仕様にして昭和に温故知新する』という惹句（じゃっく）は函館の提督が捻り出した。

適当に言ったにもかかわらず、これを聞いた人々の大半は『深みがある』とか『含蓄がある』とか『リリン最高！』などと評価した。

妙なものに関わったと思うのは彼くらいで、全国各地の鎮守府や警備府、海外の泊地の提督たちは運営側へ参加したいとしのぎを削った。

彼の元へ問い合わせが殺到した程だ。

アホや。
みんなアホや。

一旦流れが決まると、それを押し返すのは至難の業だ。

軽空母の龍驤が何故か朝潮型の制服を着用して、私の業務を手伝っている。

「あのですね、龍驤さん。」

「あんな、提督。うち、龍驤ちゃうで。」

「はい？」

「うちは朝潮型航空駆逐艦一番艦龍潮や。」

「へっ？」

「そして、執務室へさりげなく玉子焼きを持ってきたのは、朝潮型航空駆逐艦二番艦の……。」

「なに言つとんの、キミたちは。」

「あの、提督。」

「鳳翔さん、なにやっているんですか？」

「あ、あの、私は夕雲型航空駆逐艦の夕翔です。」

「提督！『セクシー駆逐艦選手権』で行われる、とびつきり可愛い那珂ちゃんの特別コンサートの優待券を持ってきたよ！」

「ちよつとアンタ。審査員との応対の練習をするから、付き合いなさい。」

「特型雷装駆逐艦一番艦の北雪様だよ。」

「あの、北上さん、かなり恥ずかしいんですけど。」

「可愛いよ、大井つち……じゃなくて、特型雷装駆逐艦二番艦の大雪つち。」

執務室は混沌に陥った。

「ちなみに『セクシー駆逐艦選手権』自体は大いに盛り上がったが、失格者続出でこれに怒った選手らの爆撃や開幕雷撃などで会場内は一時騒然となった。」

「朝潮型制服や夕雲型制服を着た別のなかな艦娘たちが鉄拳やハイキックなどの徒手戦闘を繰り広げ、もはや選手権どころではない状態に陥った。」

「そして、それを見たところ提督は眩いた。」

「ダメだ、こりゃ。」

CXXXI : おんな提督サソリ

サソリ女は改造人間である。

悪の秘密結社によって下校中に拉致された彼女は、改造人間に変えられ組織のために日夜働いている。

弱い毒と麻痺毒と猛毒の三種を使い分ける後方支援型改造人間で、背後からの奇襲を得意とする少女。

行き場の無い怒りを暴れることでしか解消出来ない、そんな不器用な若者たちの捕獲作戦が主任務だ。

無防備っぽく盛り場を歩き、チンピラじみた連中に声をかけ、誘導して毒で痺れさせた後に捕獲する。

捕獲後はトラックに詰め込んで、養成所へ運ぶのだ。

後方作戦に日々従事していた彼女は、何度かの失敗を経っていたバツタ男の征伐任務を上司の大佐から与えられた。

脳改造寸前で逃亡した彼の討伐作戦。

それはおそらく、とてつもなく困難。

バツタ男は手術が中途半端な状態で逃亡したから、たぶん今は後遺症に悩まされていることだろう。

脳みそを改造しないと、強化された肉体の制御は困難なのに。

おまけに彼は、試験運用中の強化服まで持ち出してしまった。

ついでに、凶悪なまでに改装された自動二輪をも奪取された。

明らかに博士側の失態である。

彼女は、未改造の脳みそに苦痛が与えられる笛を貸与された。

バツタ男は強靱な脚力により驚異的な跳躍が可能で、何人もの強力な刺客を返り討ちにしている。

結社の面子はズタズタだ。

サソリ女は討伐任務を受けた際に、これは死ぬよねと直感する。

ピコーンピコーンと目玉が光る驚の紋章を見ながら、彼女は己の近い死を受け入れようと考えた。

天井付近に設置されているのであろう複数のスピーカーから、やけに渋い首領の声が流れてくる。

「行くのだ、サソリ女。お前がバツタ男を倒すのだ。」

一礼して、謁見室を退出する。

結局首領がどんな人なのかわからないままだったと思いつながら、彼女は出撃することになった。

採石場か、スーパーアリーナか？

それとも喫茶店か？

或いは河原か？

逃亡者が目撃されている地域を元警察官の改造人間たちが捜査し、特定してゆく。

大体この辺りだろうと当たりを付けて、サソリ女率いる部隊は出撃した。

池袋や渋谷や新宿の繁華街から集団拉致されて初級洗脳だけ施された戦闘員たちを、マイクロボスの中でサソリ女はしばし眺める。

お揃いの全身タイツで真っ黒な強化服。

大抵は一回の戦闘で使えなくなる連中。

輸送用の車輛が他に何台も走っていた。

今回の作戦では二〇〇人の戦闘員を投入するのだ。

失敗は許されない故、彼女は人海戦術を採用した。

むわつと立ちこめる青春のにおいが車内に充満していたため、乗車時にサソリ女は消

臭剤を振り撒いた。

夢も希望も無い社会で暴れ回っていた若者たち。

彼らの癒しは異世界転移・転生系小説くらいだ。

戦闘員たちはサソリ女のような改造人間に従順忠実である。

複雑な命令には対応出来ないが、元々使い捨て前提の兵隊だから問題ない。

ごく稀に、改造人間に昇格する者もいる。

頭角をあらわす者は稀少品だ。

その稀少品も戦場であっさり散ってゆく。

百戦錬磨の筈の兵が、一瞬の油断ではかなく倒される。

そうして、日本に存在する秘密結社は淘汰されていた。

何故か採石場で待ち構えていたバツタ男とサソリ女の部隊は対峙する。

男はお持ち帰りした女子戦闘員にセーラー服を着せ、共に暴れていた。

無免許の逃亡者が操る自動二輪で、次々に呆気なく薙ぎ倒されてゆく戦闘員たち。

自動操縦が組み込まれているから出来る芸当を、当然のように使いこなしていた。

大輪の花のように才能を開花する男。

対照的に命を瞬時に刈り取られる兵。

彼らの人生ってなんだったんだらう？

バツタ男はむやみやたらに強かった。

このままでは全滅するかもしれない。

貸与された笛を試しに吹いてみると、彼はもがき苦しみだした。

そんな彼の一瞬の隙を突いて、両足を別々の戦闘員に掴ませる。

サソリ女は暴れる男に忍び寄り、強力な毒針をぶすりと刺した。

ビクンビクンと痙攣（けいれん）した男の体に、麻痺毒が回る。

「アアアッ！」

ぐったりしたバツタ男の強化服を嬉々として脱がせる戦闘員たち。

どんどん集まる全身タイツの男共。

人の輪が構築されて視界を妨げる。

女子戦闘員は欠損もなく保護した。

はあはあと息を荒げる戦闘員たちを眺めながら、女子二人は生き残れたことに安堵す

る。

真っ黒な輪が邪神のように蠢いていた。

バツタ男を持ち帰るのは無理のようだ。

帰投後、保護した女子戦闘員はサソリ女直属に決まった。

ダム破壊に失敗したり幼稚園のバスの制圧に失敗した、漢の浪漫溢れる他の改造人間たちを支援する日々は唐突に終わりを告げた。

ぶっちゃけ、資金が尽きたのである。

経済的に破綻した秘密結社は、最後の攻勢先を横須賀の大本営に決定した。

深海棲艦とやらが組織の資金に大打撃を与えたために、倒産が近い状況だ。

起死回生の一発逆転を狙う標的としては、あまりにも無謀ではなからうか？

盛り上がる改造人間や幹部を見ながら、サソリ女と女子戦闘員は嘆息する。

さあ、戦争を始めよう。

戦争を知らない者たちはそう言って、戦いの準備に取り掛かった。

大攻勢は悲惨を極めた。

デモに見せかけた三〇〇〇人の団体で一気に襲撃したのだが、有象無象の戦闘員たちはいともあっさりと瞬殺されてゆく。

端的に言うとうと、艦娘の実力をなめていた幹部たちの予測がことごとく外れたというこ
とであった。

パニックに陥る改造人間たち。

こんなバカな話があるものか！

統制の取れぬまま突撃をする。

簡単に討ち取られてゆく兵士。

臆病風に吹かれる者さえいた。

敗走する改造人間たちは、容赦なく艦砲射撃の餌食となった。

長い黒髪の大柄な艦娘が、獅子奮迅の勢いで歴戦の幹部たちを圧倒する。

サソリ女は近くにいた戦闘員たちを全員突撃させ、女子戦闘員と共に逃げ出した。

やってらんないもんね。

その日、ひとつの秘密結社が壊滅した。

人間時代の記憶があまり無いサソリ女と女子戦闘員。

取り敢えず、秋葉原の怪しげな店でメイドになった。

東京はかつての勢いを失い続けており、昔日の残照でなんとかやりくりしている。

石油の輸入が再開されたものの、治安が悪く物価が高く給与も下がりがり続けていた。

経済的な勢いは西日本に集中しつつあり、相対的に東京の発言力は日増しに下降して

いる。

同調圧力の強い社会で圧迫され続ける若者たちを癒やすべく、サソリ女と女子戦闘員

は微笑み続けた。

馴染み客たちのハートをキュンキュンドキドキさせつつ、彼女たちは店の序列一位と二位を維持する。

だが半年後、警視庁の摘発を直前に察知して二人は逃亡した。

常連に警察関係者がいてよかった。

その摘発は大規模作戦だったらしく、抵抗する店側と警察の間で激しい衝突が為されてしまい、これに乗じた阿呆どもが騒乱を煽った。

自作の革鎧や鎖かたびらにハルバードやメイスやなんちゃって長剣やバールのようなものなどを装備した自称勇者たち。

今こそ、圧政的社会を打破するのだ！

今こそ、社会的弱者を救済するのだ！

立てよ、勇者！

この時を逃して成り上がりは出来ぬ！

日本の若者を締め付ける、非道な官僚たちを討ち果たすのだ！

よかろう、ならば『聖戦』だ！

結果、都内各地は大混乱に陥って内戦に近い状況が発生する。

事務次官を始めとする官僚たちの住所が電腦上に晒され、何人も襲撃された。

複数の国会議員が鉄パイプを使った散弾発射装置で狙撃される。

過激な発言を繰り返していた大臣や普段から不評だった大臣が、『聖戦』を掲げる勇者たちによって重傷を負わされた。

与党・野党の党本部が襲われ、焼き討ちされる。

テレビ東京を除く都内各地の全国系テレビ局本拠や新聞社や出版社が襲われ、お偉いさんたちが何人も何人もこの世から黄泉へと旅立った。

若者たちに批判的で政府への提灯記事をしばしば書いていた自称有能記者の末路が動画で晒され、同業者たちは震え上がった。

そして、東京は無法地帯と化する。

テロリズムの嵐が選民たちを襲う。

ある夜、赤坂のとある高級料亭で秘密の会合を行っていた政財界の大物たちは護衛共々肉片と化した。

放火や暴動が日常茶飯事となり、これらの鎮圧のため、遂に艦娘まで投入される事態となる。

機動隊や自衛隊を大量投入した平定作戦は裏をかかれたりゲリラ戦を仕掛けられたりして一時迷走したものの、継戦方法すら理解出来ない暴徒たちが続々逮捕されたり蜂

の巢になったために一カ月後には急速に終焉を迎える。

これを受けて警視庁長官は辞任、何人もの幹部たちが更迭される事態になった。皮肉にも、このあと『安心して暮らせる社会』が活発に論議されることになる。

海沿いの集落には人の気配が無い。

猪や鹿などが度々出没する、のどかな無人地帯だ。

彼女たちにとつては野生動物など獲物に過ぎない。

比較的まともな廃屋に二人は住み着き、のんびり暮らすことにした。これこそ、エコロジーでロハスでナチュラルでなんちゃらな生活だ。

ツキノワグマを倒した翌未明、二人は海岸に漂着した娘を保護した。

中学生くらいに見える娘。

サソリ女は大本営で勇猛果敢に戦っていた武装少女たちを思い出す。彼女たちは実に強かった。

保護された娘が目覚まし、サソリ女に向かって言った。

「お会いできて光栄です、司令官。」

その台詞は、改造人間である彼女の新たな試練を予感させる契機となった。

おんな提督の誕生である。

CXXXII：若者よ、若い内に楽しみ

目が覚めるとトランクス一丁の姿になっていて、荒縄で縛られていた。
なんじゃ、こりゃ。

叢雲（むらくも）、曙、霞、島風、吹雪、早霜といった駆逐艦たちが私を囲んでいる。
その表情は真剣で、冗談で縛ったようには見えなかった。

「今なら悪戯ということでごまかしてはなりませんよ。」

言葉を選ばなくてはならない。

叢雲が口火を切る。

「あのさ。」

「はい。」

「大本営主導で、私たちは結婚出来るようになるんですよ。」

「法的整備に時間はかかりますが、確実に出来るでしょう。」

「カッコカリじゃない方よね。」

「カッコカリじゃない方です。」

「あんたは……『誰』を選ぶの？」

「カッコカリじゃない方で？」

「カッコカリじゃない方よ。」

「弁護士を通してもらえませんかね。」

「ふざけている場合じゃないの。」

「こんなしよぼくれた冴えないおっさんに合わせる必要は無いんですよ。」

「私の惚れた男を悪く言わないで。」

「それは作られた感情、もしくはは刷り込みなインプリンティングかも知れませんよ。」

「関係無いわ。人間だって、何故好きになったかをきちんと言える人ばかりじゃないでしょ。」

「もう少しよく考えた方がいいですよ。」

「考えたし、話し合った。結論も出た。」

「ホルマリンにでも漬け込みますかね。」

「そんな勿体ないことなんてしないわ。」

皆が笑顔で近づいてくる。

荒縄がほどけない。

甲賀流の先生から、縄抜けの術をもっと熱心に習っておくべきだった。

冷たい。

とても冷たい。

彼女たちは皆冷たい。

私は……………。

夢か。

春日丸と龍驤がすやすや眠っていた。

艦娘も眠るんだよな。

午前四時四四分。

日はまだ昇っていないが、かなり明るくなっている。

少し走るか。

函館鎮守府仕様のジャージに着替える。

左胸には鳶唐丸に板倉九曜の独自紋章。

鳶が絡まる如き丸の中に九つの三つ巴。

ジャージ本体は爽やかな青地に白線が左右に走る。

仮面戦士みたいだ。

岡山県の繊維会社と明石群&夕張群による共作だ。

ちよつとした耐弾耐刃機能に加え、水分を分散させて体温を保つ機能まで付いてい

る。

近い内に五大鎮守府で正式採用されるといふ話も聞いた。

こんなんあつたら便利だよねー、という与汰話から始まったのだが、発案者としての名誉は得られるようだ。

砂浜を走っていたら、運動部で蜂蜜檸檬を準備しそうな感じの艦娘から運動系飲料を貰った。

四国に本拠を置く会社の製品だ。

あそこの紅茶が好きなんだよな。

ほっと一息ついていたら、龍驤と春日丸が不機嫌そうな顔で走ってきた。

「こん浮気もんー！」

「酷いですよ、提督ー！」

新型軽空母もこの鎮守府に随分馴染んできたようだ。

『『社会福祉公社』、ですか。』

「そうだ、同志（タヴァリーシチ）。」

小樽の提督が我が鎮守府へやって来て、暴力と暗殺渦巻くイタリアから視察団が訪れることを私に告げた。

南北間には深刻な経済格差が存在し、北の人間と南の人間とではかなり感覚が異なる。

陽気なイタリア人だけが標準的なイタリア人ではないのだ。

「何故、彼らは函館に来るのですか？」

「気候的に近いし、訪れやすいからかもしれないな。」

鉄火場に慣れたロシア女性はそう言つて、ニヤリと嗤（わら）う。

「表向きの理由は、艦娘の技術を流用して障害を持つ人間に光明を与えることだそうだが、しかし、本当の用向きは当然異なる。」

「向こうにも、それなりに提督や艦娘がいるでしょうに。」

「函館ほど多種多様な鎮守府は珍しい。自国の艦娘に加えてメリケン艦娘や深海棲艦が複数所属する鎮守府なんて、滅多に無いだろうからな。」

「まあ、それはそうでしょう。」

「同志、お前自身も気を引き締めておけ。」

「狙われますかね？」

「それはわからん。」

「函館駅近くの大門地区に最近出来たロシア料理店で彼女と食事をし、駅まで送る。鎮守府に戻ったら鳳翔と間宮の機嫌が悪く、気の弱い李さんがおろおろしていた。」

『担当官』と呼ばれる男性が四人。

駆逐艦にどことなく似た雰囲気、どこかしら機械めいた少女も四人。

計八人のイタリア勢が函館へやって来た。

国籍がイタリアでない人もいるみたいだ。

男性陣は軍人っぽい人、警察官っぽい人、となんだかバラバラの強面揃いだ。

少しこわい。

女の子は生真面目そうな眼鏡っ子、儂くて病弱っぽい子、面倒見のよさそうなツインテール娘、物静かな感じの三つ編みっ子。

一人、気になる女の子がいる。

彼女は自分自身の担当官らしき男性をずっとずっと目で追っているのに、当の男性は知らん顔をしている。

ゾツとした。

他人事ではない。

私も艦娘たちからしたら、ああ見えるのだろうか？

その夜はイタリアン祭になった。

小樽から来てくれたローマが通訳を買って出てくれたために、意志疎通が順調になっ

ていた。

立食形式にしたのもよかったようだ。

イタリアから来た女の子では、ツインテールの子と眼鏡つ子が橋渡し役みたいな感じで奮闘している。

病弱っぽい子は端でニコニコ微笑んでおり、三つ編みつ子は知らぬ存ぜぬみたいな感じで担当官に料理を運んでいた。

献身ぶりに感心したが、その担当官はよくわかっていないように見える。

なんだかもよつとした。

叢雲、曙、霞は目で制しておく。

よそはよそ、うちはうちだ。

芸達者な子がいたのか、艦娘による寸劇が始まる。

『マカロニの騎士』と題された物語は、即興にしてはよく出来ていた。

つたないイタリア語だったが、気持ちは伝わったように思われる。

中でも、病弱っぽい子が特に喜んでいたので印象的だった。

杖をついた大尉と話をした。

私の英検二級の語学力でもなんとか話が出来るのでよかった。

眼鏡つ子が大尉を見つめている。

提督と秘書艦みたいな関係なのかね。

ツインテール娘はドイツ人っぽい担当官にお熱のようだし、がっしり系の眼鏡をかけた担当官には病弱っぽい子がひっそりと寄り添っている。

……なにかおかしい気がした。

それぞれは特におかしいとも感じないが、複数になると違和感が強くなる。

これはなんだ？

なんなのだ？

デザートなドルチェとして間宮特製のテイラミスが提供されるにあたり、女性陣の声が二オクターブくらい跳ね上がった。

大尉を含む男性陣も旨い旨いと舌鼓を打っていたのが、なんとなく可愛らしく思えた。

翌未明、射撃場へ行くと三つ編みっ子が熱心に射撃訓練をしていた。

馴れぬイタリア語で彼女を褒める。

彼女は早口になにかを言った。

早すぎて内容が聞き取れない。

そこへローマが通りかかった。

私は彼女に朝の挨拶を行った。

「お早う、ローマ。」

だが、彼女はおそるべき勢いで三つ編みつ子を怒鳴り付けた。
どうしたのだ？

「どうしたんだい？」

それにも応えてくれず、ローマが一方的に言葉の砲撃を苛烈に行う。

三つ編みつ子は黙ったままだ。

いかん。

このままではいかん。

私は三つ編みつ子をかばう位置に立つ。

「彼女がなにを言ったのかわかりませんが、そこまですててください。」

「アドミラル、貴方、侮辱されたのよ！ 己の立ち位置すらまともに理解出来ない者には
相応の罰が必要だわ！」

結局、朝から苦い話し合いになった。

男性陣は激しい衝撃を受けた感じだ。

そんなに驚く程の事態なのだろうか？

これはすこぶる建設的でない状況だ。

少々なにか言われても腹など立たぬ。

それなのに双方がチリチリしている。

鎮守府の会議室は重苦しい雰囲気だ。

「提督は何故怒らないんです！ 彼女は提督をないがしろにした発言をしたんですよ！」

「当方の担当官の手落ちであり、彼女の態度は許されることではない。責任は彼女にも彼にもある。」

三つ編みっ子の担当官の顔色は蒼白で、暴言を吐いた彼女はうつむいたままだ。

不味い。

非常に不味い。

私の誇りなどどうでもいいが、こういうことで日伊関係がこじれるのもよろしくない。

男性陣がひそひそ話をしていた。

「提督。」

大淀が耳元で囁く。

『『社会福祉公社』の男性陣の発する言葉ですが、『条件付け』だの『投棄』だのと物騒な単語が飛び交っています。』

流石、才媛。

イタリア語もわかるようだ。

……彼女たちは強化人間か？

薬品を使つて戦闘人形に仕立てる訳か？

私の方から提案させていただくべきだ。

面倒な結論が出ない内に戦況を変える。

『汝（なんじ）の隣人を愛せよ』、と聖書にあるかと存じます。」

ローマに通訳してもらおう。

イタリア勢の勢いが止まる。

よしよし、いい子ちゃんだ。

「確かに彼女の発言はよろしくないものです。彼女はそのように言うべきではありませんでした。しかし、彼女は任務に忠実で、担当官に対しても大変献身的です。」

戸惑うは男性陣。

頷く女の子たち。

「そこで、私は彼女に罰を与えたいと思います。午後から買い物に出かけますので、それに付き合ってください。それでこの件は終わりです。」

「しかし、それでは貴方の沽券が……。」

「大尉。私は軍属でしてね。地位には未練が無いのですよ。それに、彼女の気持ちはわからないでもないので。」

友人のメトロンから貰っていた超小型翻訳機を装着し、二人でぶらぶら歩きながら駅前百貨店の棒二森屋へ向かう。

帰りはポインターで迎えに来てもらう予定だ。

自動車がたまに走る道を静かに歩く。

「何故、私を処罰しないんですか？」

唐突に彼女が話しかけてきた。

「貴女が一生懸命だつて知っているからですよ。」

「ろくに会話すらしていないのに、なにがわかるんですか？」

「わかりますよ。貴女の担当官を見る目付きは、普段私が艦娘たちから向けられているものと同じですから。」

「……本当にわかるんですか？」

「ええ。」

「今朝、私は提督に対して非常に失礼なことを言いました。深くお詫び申し上げます。詫びてどうなるものでもありませんが、なんでもしますので、担当官には罪が及ばぬよ

うにお願い致します。」

「大丈夫ですよ。全部わかっていますから。さあ、貴女の担当官への贈り物を買に行きましょう。」

「え？　でも……。」

『『若者よ、若い内に楽しめ』です。貴女の担当官はなかなか手強いですよ。二人でよいものを探しましょう。』

「不利な戦いであることは先刻承知です。」

そう言って、三つ編みっ子は初めて笑顔を見せた。

CXXXIII：イツワリノチトチヨ

佐世保鎮守府から、フォッカー少将の右腕として知られる巨漢の柿谷提督が来函した。

陽気な大食漢として知られる彼だが、提督になる以前は航空自衛隊のファントムライダーとして名を馳せた飛行機野郎だ。

佐世保鎮守府が航空機使役系艦娘の運用に長けているのは、柿谷提督と元米軍パイロットのフォッカー少将に依るところが大きい。

彼は千歳と千代田を連れていた。

共に航改二で、既にケツコンカツコカリ済みという。

最早、軽空母という名のナニカになっっているらしい。

先要塞攻略戦時、彼女たちには大変世話になった。

龍驤雲龍春日丸の面々で、千歳千代田組と模擬戦な演習を行う。

イタリアから訪れた少女たちと担当官たちも興味深く見ている。

彼らはまるで観戦武官みたいだ。

龍驤の動きはなかなかいいが、雲龍と春日丸との連携が今一つだ。千歳千代田姉妹は息の合った動きを見せ、三名の艦娘を翻弄する。素人目にも、二名の航空隊の錬度は高い。

私の隣で興奮した空母の赤城が是非自分も戦いたいと言い出した。流石、戦闘機械と謳われる正規空母だ。

無意識なのかなんなのか、自身の巨乳を私の体に押し当ててくる。これ、たぶん、本人分かっていないな。

……あれ？

どちらの赤城さんでしょうか？

少し焦った感じの加賀教官がやって来て、赤城を私から引き剥がそうとする。

青い正規空母は珍しく汗をかいていた。

瑞鶴に熱烈に抱きつかれても平然としているのになあ。

ブーたれる赤い正規空母と必死で宥める青い正規空母。

「ええ、ちよつとくらいいいじゃないですかあ。」

「あの、赤城さん。ここは大湊（おおみなと）ではありませんので。」

「次、私が死合いたいです。いいですよね、提督？」

「ええと、彼女たちにも確認を取りましてですね、それからお返事させていただきます。」
「大丈夫ですよ、演習で轟沈はさせませんから。ちよつと殺り合うだけですよ、ふふふ。」
「なんだか不安になる子だ。」

赤城対千歳千代田姉妹の演習が始まった。

イタリア勢の男衆は自分たちでトトカルチヨを始めてしまう。

少女たちは呆れているようだ。

えらいフリーダムだな、あんたら。

「どつちが勝つと思う?」

引率者の大尉が少し苦笑いしながら、私に言った。

「堅物だと思っていたが、存外柔軟性もあるようだ。」

「赤城でしょう、たぶん。」

「あの赤い方か?」

「ええ、そうです。ところで、トトカルチヨなんてしてもいいんですか?」

「少しは気晴らしがないとな。」

「けっこうなお考えで。」

そこへ柿谷提督がやって来た。

「いやいや、大湊の赤城さんと演習が出来るとは、うちの千歳と千代田は運がいいですね。」

「どつちが勝つと思えます?」

「そりゃあ、うちの艦娘ですよ。」

「随分と信頼しておられるんですね。」

「それが私たち提督の責務でしょう。」

「確かに。」

大尉が杖で海の方を指す。

「あのアカギというカンムスはかなり強いな。」

赤城が笑いながら、二名の軽空母を牽制している。

彼女の航空隊は相当優秀なようだ。

揺れる揺れる、三名のたわわな果実が揺れまくる。

アタッ!

いつの間にか現れた、龍驤と雲龍と春日丸の三名からはたかれた。

「ホンマに、男つちゆうのはっ!」

「いつでも好きにしていから。」

「男の人だから仕方ないですね。」

「すみません。」

「ハハハ、提督も大変ですねえ。」

柿谷提督がやさしい目付きで我々を見つめていた。

演習は僅差で赤城が勝利を得た。

勝ちました勝ちましたと無邪気に喜ぶ彼女が戦場ではおそるべき戦闘機械になるのだから、艦娘は実に奥深い。

ほんの少しの小遣い銭を、私は得た。

提督と千代田と共に函館へ来たけど、なんとも個性的な鎮守府だわ。

函館の提督は日本酒をそれなりに知っているみたいで、北海道と青森と山形のお酒を教えてください。

これは是非とも提督に呑んでもらわなくっちゃ！

ちなみに九州も鹿児島以外は日本酒を醸造しているのよ。

夜は飲み会になり、イタリアから来た男性陣とも交流会を兼ねて酒杯を重ねる。分厚いステーキに満足した提督へどんどんお酒を勧めた。

千代田が時々止めようとするけど、そんなんじや無理よ。

函館の提督を酔い潰そうとしたんだけど、周囲が鉄壁過ぎて上手くいかなかった。ま、今回はいいか。

機会は何度でも作ればいいわ。

提督と千代田がいれば、私はそれでいいんだし。

大本営や官僚や財界やいろんなところが入り乱れて混線しながら混戦しているけど、大局の見地から行動出来ている組織なんて皆無だし。

みんな、行き当たりばったり。

だから自由にやれているけど。

あの元艦娘も函館に取り込まれちゃったし、あの子たちも同様。

私たちじゃ、どうにもならないわ。

一応、報告だけはしておくけどね。

府奥参謀の後釜だけど、どうするつもりかしら？

理論倒れの巢盾参謀は、先日失脚しちゃったし。

まあ、なんとかなるでしょ。

提督。

貴方は必ず守りますからね。

CXXXIV：白い悪魔

「馬鹿なっ！ 二個艦隊の艦娘が一体の深海棲艦に瞬殺されただどっ！ そんなことがある訳ないだろうっ！」

「コンスコン少将！ 白いパーカを羽織った艦種不明の深海棲艦が、この指揮艦に向かって突撃してきます！」

「バルカン砲を撃って撃って撃って撃ちまくれっ！ 弾幕を張るんだっ！ 奴にハーブーンを叩き込めいっ！」

「駄目です！ 間に合いません！ 少将、今すぐ脱出してください！」

「ええいつ！ パンツアーファウストを貸せっ！ 儂が仕留めるっ！」

「誰か、少将を緊急避難させよ！」

「深海棲艦が飛んだ？」

「艦橋を潰す気かっ？」

「撃て！ 撃て！ 撃ちまくれ！」

「ヤラセはせんぞ！ ヤラセは！」

北大西洋条約機構きつての猛将のコンスコン少将率いる打撃艦隊はその日すべての艦娘と戦闘艦艇を失い、指揮官及び上級士官全員を喪失した。

この知らせを受けたソロモン諸島に艦隊を展開中のトルケル提督と松波提督は兩名ともしばらく沈黙した後、おごそかに復讐を誓うのであった。

『赤騎士』と呼ばれたノースダコタ出身のライオネル提督が白い悪魔との数度に渡る交戦の末、行方不明になった。

『青き隕石』と謳(うた)われた不正規戦を得手とする『ゲリラ屋』のライミ提督が、執念の追跡戦の末に激戦を経て自爆。

『黒い三騎士』と誇りに思われていたカリアリ提督、オルティア提督、マツキヤン提督の連合艦隊が、かの深海棲艦を含む艦隊を激しく追い詰めるも全員戦死した。

その三カ月後。

ローマ教皇は慈悲深き人類最強級の戦士であり、闇の力と聖なる力の双方を合体させて歯向かう敵対者にぶっぱなす愛の騎士でもある。

アドリア海。

麗しく美しき海上で白い法衣を着た老魔教皇と、白いパーカを着た深海棲艦とその護衛艦隊が激突した。

「私はローマ教皇！ 愛と勇気の使者！ 世界に安寧をもたらす者！ 我が日輪の輝きをおそれぬならば、かかつてきなさい！ 主に代わってお仕置きですぞ！ ティルトウエイト！ ザラキ！ 千手斬舞！ マダルト！ ヒヤダイナー！」

不敗の老魔術師が連続高速詠唱と物理攻撃で、深海棲艦たちに猛攻を加える。

異界からもたらされた爆風が深海棲艦の艦隊を襲い、死をもたらす古代の呪言が彼女たちを覆い、無数の鋭いミスリル銀の如き手刀が彼女たちを突き崩し、氷点下百度を下回る冷気の猛吹雪が深海棲艦たちの心臓を停止させた。

素早く複雑怪奇な魔方陣を展開させ、老魔法使いは神話的道具のトネリコの杖を天に掲げる。

「メテオ！」

赤き隕石群が深海棲艦群を襲った。

瞬時に轟沈してゆく深海棲艦たち。

卓抜した反射神経で、これらを回避する異形の娘。

これがマグネットコーティングの力なのだろうか？

「人類愛のために！ 世のため人のため正義のため！ 影技！ ハーケン（刃拳）！」
影拳な光速拳が乱打され、何名もの深海棲艦が為す術（すべ）もなく轟沈してゆく。
残るは白い法衣の老人と、白いパーカの娘のみ。

晴天だった空がにわかにかき曇り、雷鳴を轟かせた。

「サンダーブレイク！ これで終わりにしましょう！ 超電磁ヨーヨー！」

雷がヨーヨーの姿に変化し、異形の娘を斬り刻んでゆく。

「超電磁竜巻！」

超電磁の力で空中に拘束される娘。

「超電磁スピーン！」

己自身を高速回転させながら、老魔教皇が強力な深海棲艦に突っ込んだ。

「成敗！」

チュドーン！ と爆発する敵対者。

正義は勝ったのだ。

「こんな具合でどうですかね？」

「函館へやって来た、大本営の青葉とマスターオータムクラウドが嬉々として渡してくれた漫画を読む。」

……ダメだろ、これ。

「ローマ教皇庁からの許可は下りないでしょうね。」

「えーっ、人類の危機に馳せ参じるローマ教皇つてカッコいいじゃないですか!」

「そうですよお!」

「却下です。」

「じゃ、じゃあ、ゾンビと深海棲艦がはびこるロンドンでローマ教皇率いる枢機卿たちとスイス衛兵隊の活躍を描い……。」

「却下です。」

「教皇様は最強の戦士なんですよ! それを宣伝しない手は無いですよ!」

「ダヴィンチコードで秘匿された情報を開示する危険性は考慮すべきです。」

ヴァチカン。

一騎当千が基本仕様のスイス衛兵隊と全員腕っこきの魔法使い（女性と付き合ったことさえ無い故に）である枢機卿たちが集うサンクチュアリ。

人類最後の砦だ。

その教皇庁地下。

「猯下（げいか）と枢機卿たちは極秘に入手した漫画を読み、皆で大笑いしていた。

「猯下の動きがとても宜しいですね。」

「今現在はあそこまで動けませんよ。」

「内容は面白いのですが、販売許可は無理ですな。」

「我々も参戦出来たらよかったのに。」

「猯下の暗黒卿の側面を知られなくて幸いでした。」

「私は常に人々の平和を祈っておりますよ。その合間に、暗黒面について考えることは多々ありますがね。」

「理力（フオース）と共にあらんことを。」

闇が一瞬膨れ上がったが、それはすぐに終息した。

にこやかなる教皇。

黒く見えた法衣は、既に純白の輝きに満ちている。

「国際社会は速やかに回復されなくてはなりません。」

教皇は威厳ある気配で周囲の空間を満たしながら宣言した。

「私自身が動かなくてはなりませんまい。」

そして、ヴァチカンが動き始める。

欧州各国に散っていた騎士団や放浪騎士らにもそれは通達され、彼らは十字軍に赴く

戦士の如く準備を進めるのであった。
人類の逆襲はなるか？

CXX XV : 愛、聞こえますか？

最近、ようやく海沿いの安全宣言がされて近海での漁業が復活してきた。

僕たちの住む街はずいぶん人が減ったけれども、これからはゆるやかに増えてゆくだろう。

たぶん。

休み時間にクラスの女子が見慣れない子たちの話をしていて、なんだろうと思っていたらおバカてお調子者の健介がなになんの話と首を突っ込んでいた。

委員長が代表で教えてくれたところによると、近頃海沿いの廃屋に住む女の子たちがいるらしい。

未成年ほいので、悪い連中が来たたら大問題になるわと彼女は締めくくった。

健介がデジタルビデオ片手に大興奮しながらそこへいこうぜいこうぜ突撃しようぜと騒いだんだけど、やめとこうよと言っておいた。

訳ありかもしれないし、変なことに巻き込まれても困る。

酒浸りでダメダメな父さんの世話もしなくちゃいけない。

父さんは職場の女性に手を出して、しかもいろいろやらかしたそうさだ。

そして、一番の問題は健介が変態ってとこだ。

さりげなく何人も女の子と付き合っている。

困ったもんだよ。

放課後に寂れた商店街の総菜屋で出来合いの品を買っていたら、知らない女の子たちから声をかけられた。

二人とも黒いセーラー服を着ている。

同級生くらいの年齢かな？

この辺の中学校じゃないくらいしか、僕にはわからない。

「あれ？ 提督じゃないか。なんでこんなところにいるんだい？」

提督？

誰、この子？

まさか、最近社会問題になりつつある『なりきり艦娘』？

「あーっ！ 提督だ！ 一緒に帰ろっ！」

自然に腕を絡めてきた。

とつても馴れ馴れしい。

顔が似ているから姉妹？

なんだかゾクツとした。

もしかして、本当に艦娘なんだろうか？

この頃はそれっぽい恰好をした女の子が増えているらしいから、どちらともつかない。

『艦娘スタイル』だなんてファッションが流行っているみたいだし、何故政府や大本営は見逃しているんだろう？

自分自身のことを本物の艦娘だと思い込んだ『なりきり艦娘』たちによる、監禁事件を何件も聞いたことがある。

そういった案件が複数あるらしいけど、男性側が訴訟に踏み切ることは先ず無いという。

てつきり、都市伝説だと思っていた。

あの夏の彼女たちは、一体どっちだったのだろうか？

「やれやれ、みんな待っているんだ。なにをしていたか聞かせてもらおうよ。」

「そうそう、みんなずっとやきもきしていたからね。とっても喜ぶと思う。」

ちよ、ちよっと待ってよ。

ぐいぐいと引つ張られる。

彼女たちは大変力が強い。

本物の艦娘みたいだなあ。

まさか……本物？

それともお……。

「僕たち艦娘が生きてゆくには提督が絶対必要だからね。」

「提督がいないと生きていけないのは知っているでしょ。」

こわい。

なんだ、この子たち？

ヤバイ子たちなのか？

首筋を舐めないでよ。

そんなところを普通に触っちゃダメだよ。

「僕はあるあなたたちのことを知りませんよ！」

「そりやそうさ、提督とは初対面なもの。」

「私たちに任せてくれたら、大丈夫だよ！」

どこが大丈夫だよ！

話が噛み合わない。

そうだ、逃げよう！

父さんの交際相手だった女の人に捕まりそうになって振りほどいた時みたいに、えいやと腕を抜いた。

軽騎兵の如く逃走！

幸い、彼女たちは追いかけてこなかった。

翌日、登校するとおバカでエロい健介が興奮しながら話しかけてきた。

ハアハア言っている！

お前、たっているな！

それ以上、近寄るんじゃない！

「もしかして、お前、急に妖精が見えるようになったりした？」

「なに言ってるんだ、健介？ この間の妖精検査でみんな不合格だったじゃないか。」

「……あれ？ そうだったけ？」

「なんで、僕が妖精を見える話になってんだ？」

「お前に提督の資質があるんじゃないか、って今朝から校内は盛り上がっているんだよ。」

「なんで？」

「艦娘みたいな色っぽいお姉さんが校長室に行ったのを、委員長が見たのさ。」

「はい？」

「そのお姉さんの言う特徴がお前っぽいんだ。まあ、ぶっちゃけ、僕が彼女に昨日聞かれてお前だと思ったからそう答えただけなんだけどさ。校内中に触れ回ったのも僕だけどね。やったね、これでお前は校内随一の有名人だよ！　でさ、お姉さんが手をやさしく握ってくれたから気持ちよくなってさあ。昨日の晩は……。」

「お前が諸悪の根源か！　変態死すべし、慈悲はなか！」

「苦しい！　苦しい！　委員長、笑ってないで助けて！」

「そういや、二年前の小学六年生の夏休みに知り合いのお姉ちゃんたちと廃屋で暮らしたことがあったっけ。」

「確か、家から出してもらえなかったんだよね。」

「誰か一人が必ずくっついていて、お風呂も寝るのも誰かと一緒だった。」

「みんな美人でやさしかったんだけど、なんだかとってもこわかったな。」

「そんなことを、不意に思い出した。」

「口元のほくろとか、お……。」

「おーい、あの色っぽいお姉さんがじつとお前を見てんだけど。彼女が僕の手を握ってくれた人さ。」

教室の引き戸の方へ、視線を向ける。

背のすらりと高い、少し紫がかつた髪の綺麗なお姉さんが僕を見つめていた。なつかしい、口元のほくろと黒い服。

僕の中のバビロンの宝物庫の頑丈な扉に、いきなり破城鎚が叩き込まれた。

嚴重な施錠状態があっけなく壊れてゆく。

宝具が幾つも幾つも叩きつけられてゆく。

あの時の。

そうだ。

あの夏の。

覚えている。

彼女のことも。

あの夜のことも。

あの日々のことも。

心底の封印がゆるりと解けてゆく。

じわじわと黒い染みが溶けてゆく。

原初の海にいきなり放り込まれる。

あの夏の、蒸し暑い思い出が甦る。

一瞬だけ、ニヤリと彼女が笑った。

あの夜、僕に向けたそれは笑顔だ。

やさしくて、甘酸っぱくて、少し苦くてこわい思い出の夏休みを思い出した。

今年の夏休みもそんな感じになりそうだ。

健介がなにか喚いているけどわからない。

艦娘だろうとそうでなかろうと、僕にとつてはどっちだっていいや。

頭の芯がビリビリ音を立てているようだ。

やさしく微笑みながら近づいてくる彼女を眺めながら、僕はぼんやり考えた。

今度は上手く伝えたいなあ、と。

CXXVI：ちんちんぬきなつもしたなあ

「ちんちんぬきなつもしたなあ。」

函館市の沖合いに停泊している鶴見艦隊の指揮艦『アトウイコロエカシ（アイヌの言葉で海を司る翁の意。海亀のこと）』と随伴艦の『クンネ・エチンケ（海亀の意。甲羅が柔らかい）』と『フレ・エチンケ（海亀の意。甲羅が硬い）』に物資補給をして、鎮守府へやって来た提督陣に挨拶をしていたら、鶴見提督の腹心である鯉登（こいと）提督から強烈な挨拶を受けた。

意味がわからずに皆できよとんとしていたら、彼の傍にいた月島提督が苦笑しながら解説してくれた。

「鯉登提督は鹿児島弁がキツイので、気にしないでください。なに、単に段々暖かくなってきましたねえ、という意味合いの言葉ですよ。『ちんちん』とは『段々』とか『どんどん』とかいった意味合いで、普通に鹿児島では使われる言葉ではありますが、他の都道府県の方が聞かれると大概皆さんのようにギョツとした顔をされます。」

薩摩流時節のご挨拶、つてどこか。

武闘派揃いの中にあつて、比較的常識的な立ち位置にいる月島提督は稀少な人材だ
と思う。

鉄底海峡解放戦で暴れ回つた彼らの艦隊は勇猛果敢に獅子奮迅の働きを見せたが、そ
の分被害も酷かつた。

再編成を進めながら補給を充分受けられないままに戦い続けてきた彼らには、底知れ
ぬ氣配が濃厚に漂っている。

『漂流艦隊』と揶揄する向きもあるようだが、その實力は折り紙付きだ。

「玉井は深海棲艦に捕まつてバラバラにされ、三島は狙撃されて首がどこかへ行つてし
まいました。野間は深海棲艦と白兵戦の末に行方不明、二瓶（にへい）は深追いし過ぎ
てこれも行方不明、辺見はイ級の群れに襲われ喰われてしまいました。坂本は外地で離
反して現地妻らと共に強盗傷害を繰り返したので始末しました。向こうの政府を黙ら
せるのが大変でしたよ。」

にこやか且つ端的に、淡々と亡くなつた提督たちや元部下の話をする鶴見中将。

これが彼流の弔いなのか？

「艦娘の補充ですが、外地ではなかなか融通を効かせてもらえなくてほとほと困つてい
るのです。」

彼らが連れてきていた艦娘たちは当初かなりやさぐれていたが、鳳翔間宮の腕が冴え

渡る食事を経て人に近い表情を見せるようになった。

ヒンナヒンナと言いながら食べていた。

今は確か、料理教室を開催して調理の腕を磨かせている真つ最中。

どうやら、これから彼らは大湊（おおみなと）へ直談判に行く予定のようだ。

建造設備を一時的に借りるつもりなのだろう。

戦闘工兵のキロランケも鶴見艦隊の明石と共に大湊へ技術交流に向かう予定。

情報将校の白石大尉は何故か私にまとわりついて、エツチな店や夏競馬の話振ってくる。

「一緒に可愛い子のいるエツチなお店に行きましょうよう、提督！」

「函館競馬って確か今の時期ですよね！ 万馬券を当てましょう！」

にこやかに発言する白石大尉。

この憎めない感じが、人の懐へするりと入り込む秘訣なのかもしれない。

鶴見艦隊の艦娘やうちの艦娘から白い目を向けられても平然としている。

そこに痺れる、憧れない。

鶴見艦隊は一癖も二癖もある人材の宝庫のようだ。

結局、ウヒョーと雄叫びを上げながら大尉は五稜郭方面にタクシーで向かった。

何人か一緒に行くようだ。

たぶん、抑えの名目だな。

情報収集の一環であろう。

そういうことにしておく。

「貴様は行かないのか？」

歴戦の匂いを漂わせながら、重巡洋艦の艦娘が話しかけてきた。

さりげなく私の首に手を回してくる。

これだと、即時にポキリと出来るな。

何故だかしきりに感心してしまった。

「それとも手近で間に合っているのか？」

くくく、と笑う。

もしかして、挑発しているのかな？

「彼女たちは私の家族です。」

「貴様はぬるい。」

「まあ、そうでしょうね。」

「あら、姉さん。」

うちの重巡洋艦がやって来た。

面識は……たぶん無かった筈だ。

交流の無い初対面の姉妹艦でも『姉さん』なのか？

私にはよくわからない感覚だ。

彼女の親しげな感じが、違和感を膨らませてゆく。

「お前か。」

「スコットランドやアイルランドやウエールズの名品があるの。一緒に呑まない？」

「私にはカラメル色素のたっぷり入った、ひなびた普及品のウイスキーで充分だ。」

「青森や秋田や山形の地酒に酒の肴も沢山あるんだけど、それでも、ダメかしら？」

「干物の貯蔵は充分か？」

「ええ、勿論。会津の南京豆や、一夜干しの烏賊に小魚も沢山用意しているわよ。」

「うちの軽空母たちも誘っていいか？」

「ええ、かまわないわ。」

連れ立って我が部下の私室に向かう彼女。

その夜、酒と肴を求める艦娘は多かった。

翌日は午前四時から賑やかになった。

鎮守府前の海は滑走する艦娘で溢れかえり、鶴見艦隊の男性陣は刀を振ったり杭打ち機を試したりしていた。

……杭打ち機？

楯と一体型になった杭打ち機が油圧式やら火薬式やら電磁式やらで打ち出される。なんぞこれ？

明石たちや夕張や、技術者らしい作業服の男性たちの姿が見えた。なにかの実験みたいである。

昨夜遅くに大湊（おおみなと）まで出張って、建造設備を借りたようだ。

約三艦隊分の駆逐艦に軽巡洋艦三名、他一名ずつの重巡洋艦、軽空母、正規空母、戦艦と上手く建造していた。

大湊の天龍やあきつ丸がこちらに気づいて手を振っていたので、振り返しておく。他の鎮守府の艦娘もちらほら見えた。

不慣れな長髪の戦艦にやさしくやさしく微笑む短髪の戦艦。

大きな胸を揺らしながら海上を走り回る、軽空母と重巡洋艦と正規空母。

うちの長門教官、加賀教官、妙高先生が生き生きしながら教導に当たっている。

スパルタニアン！　って雰囲気だ。

「お借りしていますよ。」

「どうぞお使いください。」

鶴見中将はご機嫌のようだ。

彼の隣には陽炎型駆逐艦がいる。

無表情にこちらを伺っていた。

「基本的な立ち振舞いが我が艦隊は苦手な方でしてね。こういう機会は実にありがたい。お前もあの中で暴れてきなさい。」

「司令官をお守りするのが私の任務です。」

「あそこに行けば、私の役に立つ。それが大事なのだよ。」

「わかりました。全艦沈めてまいります。」

「その意気だ。」

まるで父娘みたいだ。

彼女たちにとって、彼は父親みたいな存在なのかもしれない。

複数の視線を感じ、首筋がチリチリする。

先程から中将に向けて、男性陣が熱い眼差しを注いでいるように見えた。

……疲れているのかな？

イタリアから来ている社会福祉社社の面々が、この様子を熱心に眺めている。

鶴見艦隊の男性陣は、彼らにも熱い眼差しを注いでいるように見えた。

やりたいのかな？

死合の意味で。

朝食後、大沼まで行ってくれた子から箱を受け取って中将へ丁重に渡す。

「大沼公園名物の大沼だんごです。どうぞ皆さんでお召し上がりください。」

中将はものつそくにこにこしながら受け取ってくれた。

何故か周囲から殺気を感じる。

特に彼の隣にいる男性からだ。

彼は近すぎる位置にいた鯉登提督へそれを渡すと、皆に分けるように指示した。

「私は甘いものに目が無くてね。」

「それはよかったです。今朝出来立ての品ですから、特にもちもちです。」

「それはそれはかたじけない。」

その後、講堂から洋琴（ピアノ）の音色が聴こえてきた。

鶴見中将が弾いているらしい。

せつなくやさしい音色が響く。

艦隊の男性陣が次々に講堂へ走っていく。

彼らの艦隊の艦娘にも走り出す者がいた。

大人気だな、彼は。

穏やかな風の昼前。

試合という名の死合いが始まった。

鶴見艦隊の不知火朝潮夕立が、函館鎮守府の島風に肉薄する。

独楽（こま）のようにくるくる回りながら蹴りを叩き込まんとする不知火。鋭い手刀を幾つも繰り出して、最速駆逐艦の動きを阻害せんと試みる朝潮。軽業師のように軽快な動きで島風の集中力を奪って一撃加えんとする夕立。三位一体の動きだった。

高梁（たかはし）型軽巡洋艦で試験運用されている同期攻撃の応用だった。過酷な戦いを何度も何度も日常的に繰り返してきた、鶴見艦隊の駆逐艦群。彼女たちが、通常考えられる駆逐艦枠に囚われた存在である訳もなかった。普通感覚で動いていたら、最初の任務で轟沈すること間違いなしの日常。激烈とも言える日々の鍛錬こそが、駆逐艦群を生き延びらせることになる。故に、その結果として鶴見艦隊の駆逐艦群はおそるべき近接戦闘者たちだ。建造されたばかりの新人艦娘たちは皆一様に怯えた目で死合いを見ている。

並の戦艦であれば瞬殺されるだろうそのおそるべき攻撃を見て、新人戦艦は身をすくませる。

模擬戦、という段階を天元突破していた。

こんなおそろしい先輩たちと日々を過ごさなくてはならないの？

艶やかな黒髪を震わせ、大沼だんご同様出来立てはやはやの艦娘はただ殻に閉じ籠もることしか出来ない。

大丈夫ですよ大丈夫ですよ姉様は私が守りますきつと守ります、と何度も何度も姉妹艦を失った艦娘がとろけるようなやさしい声で長髪の美人に囁きながらしつかり抱き締めていた。

その表情は至福。

聖母の顔だった。

鶴見艦隊の男性陣は感嘆している。

今までの動きを更に高めている自分たちの駆逐艦を誇らしく思うと同時に、精強の駆逐艦群の猛攻をしのぐ最速駆逐艦の動きに気持ちを荒らぶらせた。

『恥をかかせないように』と提督から厳命を受けていた島風は、ギリギリで勝ったかのように見せて激戦を皆に魅せた。

紙一重の攻防を演出したのである。

実際、それに近い場面は存在した。だから、騙したという訳でもない。

事実、大本営から来た観戦武官と観戦艦娘は大興奮していたし、鶴見艦隊の提督たちや男性陣もなにやら危うげな感じだ。

それはまさにマグマ。

火を吹かんとする竜。

冷静、というよりもあつさりして見えるのは一部の艦娘と社会福祉公社の娘、それに鶴見中将と函館鎮守府の提督くらいだった。

青葉たちはよい映像を撮れたと喜色満面。

何故だか相撲を始める鶴見艦隊の男性陣。

相撲だ相撲だ相撲だ相撲をするんだよっ！

それに巻き込まれる社会福祉公社男性群。

大興奮しながら島風に抱きつく艦娘たち。

海へと飛び込んでゆく男子女子いろいろ。

ウオーツ！ ヴオーツ！ などの雄叫び。

それはまさに混沌ともいえる状況だった。

その勢いのままにジングスカンが始まる。

北海道と言えばジンギスカン。

なにかあつたらジンギスカン。

ともかくにもジンギスカン。

ジンギスカンジンギスカンジンギスカン。

青き狼万歳!

気持ちいい天気の下ではジンギスカンに始まりジンギスカンに終わる、これ北の国の
掟。

ベツカンコ。

今日は天気がいい。

暑くなりそうだな。

雲ひとつない青天。

ほんに、ちんちんぬきなつもしたなあ。

CXXVII：おっさんミニミニツア―

「司令官は明日お休みなのよ。貴女が独占するいわれは無いわ。」

「貴女だって、本音では独占したい癖に。正直になつたらどう？」

「提督の休日は私が守ります。この鉄拳にかけて！」

「フツ、守りきれるかな？ 私の予測演算能力をなめないことだ。」

「即席提督は守ってみせる！」

「なんちやって司令官を守るのは私よ！」

夜更けの暗闘。

その戦いの激しさを提督は知らない。

今日は私の休日。

提督稼業もお休みだ。

何故か私の休日占有権を巡って暗躍する艦娘が複数発生したらしいけれども、なんと

まあ物好きなことだ。

こんなおっさんと一日一緒にいるだなんて楽しい筈も無かろうに。同性のみで出掛ける旨伝えたら、何故だか男装する艦娘が現れた。

それも何名もだ。

なんでやねんな。

混乱する事態を収束させるのに丸一日消費した。

なんてこつたい。

それはともかく。

あまり遠くでない限りは外出出来る。

護衛抜きでゆつくりと出掛けたいな。

輸入雑貨商の美濃柱さんと鎮守府の厨房で腕を振るう李さんと共に、道南を少し歩いてみることにしよう。

行き先はどこにしようか？

江差もいいな。

毎朝早くに江差行きのバスが出る。

松前方面に行くのも捨てがたいな。

話し合いの結果、まずはトラピスト修道院へ行って特製ソフトクリームを食べようと

いう話になった。

北海道新幹線計画は深海棲艦の侵攻によって頓挫し現在凍結中だが、函館駅舎は改装され道南の玄関口として観光客を待ち受けている。

北斗市の新函館北斗駅や青森の奥津軽いまべつ駅は、五年後の開通を見込んで建設中だ。

上手く行くのかねえ？

キタカやイコカやスイカなどが、函館駅の改札口で使えるようになったらいいんだけどな。

将来函館駅はJRでなくなるために、そういう予定は無いのだと人づてに聞いた。

事実だとしたら、なんとも言えない話だ。

以前訪れた北陸の金沢や富山は有人改札だったが、今はどうなのだろうか？

あちらも新幹線を通そうとしているようだが、どうなるのだろうか？

金沢富山間のひなびた風景を思い出す。

日本が復興した時にかの地はどうなる？

ただでさえ経済が西日本中心になりつつある社会で、北海道東北北陸はどうなるのだろうか？

……日本は本当に豊かだったのだろうか？

なんだかモヤモヤする。

早朝の道南いさりび鉄道に乗り、我々三人は修道院目指して小さな旅に出掛けた。

渡島当別（おしまとうべつ）駅に到着。

ステンドグラスが特徴的な駅舎である。

小さな駅舎を出ると、目の前は道路だ。

道路は左右の世界をつなげ、その向こうには民家や漁港などがあり、その先は津軽海峡。
峡。

風が強く、そして冷たい。

私たちは右へと曲がった。

殆ど車が通らずに所々ひび割れた道路を、私たちはてくてく歩いた。

しばらくして標識が見える。

トラピスト修道院へ至る標。

線路を渡り、我々は更にてくてく歩く。

その内、学校が左側に見えてきた。

学童の声が聞こえる。

ポプラは台風でやられたらしく、かなり伐採されていた。

『ローマ街道』の表記を見かけ、美濃柱さんと私は顔を見合わせる。

「ローマに続いていたら面白いですね。」

「案外、亜空間とか不思議空間でつながっているのかもしれない。」

「帝政ローマ時代に続いていたら、どうなるでしょうか？」

「特殊能力でも無い限り、大変なことになるでしょうね。」

もしそうだったら、より面白いな。

李さんはいつもの少し困ったような顔で微笑んでいるが、周囲を興味深く見回している。

「……考えすぎか。」

「……考えすぎか。」

「たゆまぬ研鑽の結果だよな、あれは。」

「艦娘たちの遠足にはよいかもしれませんね。」

「まさしく北海道、という雰囲気があります。」

石畳の道。

左右には巨木が何本も立ち並ぶ。

旅人たちの想像する北海道の姿。

巨木の向こう側には農場がある。

修道院直営の農場なのかしらん？

修道院が見えてきた。

これぞ北海道、という感じだな。

駐車場には車が一台あるだけだ。

その近くに直営売店があり、私たちは早速ソフトクリームを買うことにした。

ひとつ五〇〇円。

良心的な値段だ。

コーンとカップが選べるというので、三人ともコーンを選ぶ。

このコーンはトラピストクッキーを使っているため、とても風味がよい。

クリームを口に運んだ。

濃厚な香りが鼻腔をかすめ、喉を通って胃へと落下してゆく。

旨い。

結局、二個食べた。

昼にはまだ少し早い時間に函館駅舎へ戻ってきた。

「お昼はナポリタンのおいしいお店でどうでしょうか？」

「いいですね。」

駅から出てくたく歩き、公共放送を自称する放送局の支社近くにある喫茶店で昼食を取

ることになった。

午後からさあどうしようかと三人で顔を突き合わせる。

ナポリタンは深みのある味わいで、これにスープと生ハム添えポテトサラダが付いてくる。

旨い。

三人で話し合った結果、函館どつく方面へ歩いてゆくことにした。

その道筋で、外国人墓地近くのイタリア料理店に行くのもいいな。

喫茶店を出て、市庁舎方面へ足を向ける。

ぶらぶら歩くのもいい。

さあ、ゆるりと行こう。

途中、どこかで見たような少女たちに道を聞かれたり話しかけられたりしながら、私たちはミニミニツアーを堪能した。

「提督ってああいうのが好きなのかな？」

「司令官の好みを押さえるのも重要よ！」

「女学生などと話をしなくていいのに。」

- 「なによ、結局追っかけじやないのよ。」
「ただの見守り隊よ。ただ見守るだけ。」
「障害は即刻排除が基本なだけだから。」
「あのイタリア料理店っておいしいの？」
「ちよつと高かつたけどおいしいわよ。」
「提督さんはイタリア料理好きですか？」
「テイラミス戦艦の影響があるのかも。」
「何時の間にあんなお店に行ったのよ？」
「たまにはああいうお店も悪くないわ。」
「提督の真似っここに熱心なだけっしょ。」
「今度提督と一緒に行きたいわ。フフ。」
「司令官が店を出て、歩き始めました。」
「私の偵察機で捕捉は充分に可能です。」

尚、尾行はバレバレだった模様。

CXXVIII：夜戦と讃岐と青い空

東京の池袋。

それは国際魔界地域。

何人もの魔法使い予備軍がここで昇天し、その資格を失うという。

大本営での空虚極まる会議を経て、私はこの不思議な街を訪れた。

旅行鞆を含めた手荷物はロッカーに預け、身軽な姿にチェンジだ。

ちなみに堅苦しい軍服はとつくの前に手洗いで着替え済みである。

マンボウを食べることの出来た回転寿司店や喜多方函館筑豊紀州札幌鹿児島尾道など各種ラーメン屋が立ち並んでいた景色は、何軒もの各種婦女子対応型プリアヴァンギヤルド系同人誌販売店群やオサレでお高いマスメディア絶讃系ケーキ屋やナチュラルでロハスでエコで少しお高い雑貨店などといった別の色に塗り替えられ、猥雑な雰囲気は行き場を失ったかに見えるヤンキーじみた若者たちがその身にまとうばかりだ。

ホストみたいな脱色イケメン系の男性が、やさしく妙齢のご婦人たちに声をかけている。

キヤアキヤアと黄色い声をどこからか発する年齢不詳のご婦人たち。

かける方が獵犬なのか、かけられる方が獵犬なのか。

それは明日の朝にならないとわからないのかもしれない。

近年は若者たちが徒党を組んでカラーギャングと呼ばれる暴力組織に多く所属し、社会問題になっていた。

やたら怪力のバーテンダーや全身黒タイツの戦闘員たちがしばしば暴れ、一時期は特一級危険地帯として池袋に戒厳令が出たそう。

解像度の荒い映像がある時期出回っていて今はすべて削除されているが、そこでは革鎧や全身鎧を着てメイスやフレイルやウォーハンマーを振り回している連中やオーガやゴーレムや名状しがたきものみたいなモノ（張りぼてか合成か特殊なものにかたろう）が暴れ回っていた。

真偽論争は今も時たま勃発している。

それにしても。

腹が、減った。

「おじ……じゃなくてお兄さん、私と夜戦しない？」

埼玉県民御用達との噂もある老舗百貨店に向かおうとしていた私の左腕は細くもしつかりとした腕に掴まれ、なんだと顔を向けると大変可愛らしい娘がそこにいた。

活発な雰囲気少女だ。

昨今はこういう娘までそういう仕事をしているのか？

そうだとしたら、なんとむごい社会なのであろうか。

「おじさんはこれから食事に行くんだ。だから、君の誘いは受けられないよ。」
気を使つて断りを入れる。

けらけらと笑い始める娘。

そんなにもおかしいかね？

「独りきりで寂しく孤独なご飯はつままないでしょ。私が付き合つてあげる。」

「一人きりには昔から馴れているさ。」

「恰好いいね。なんかハードボイルドつて感じがする。よし、じゃあ行こう。」

調子が狂うなあ。

「おじさんは、エロいことがしたくてこの街に来たんじゃない。」

「私も初めて声をかけたただだから、気にしなくていいんだよ。」

なんともはや変わった子だな。

援助なんかじゃないよなあ？

後で変な男が出てきたりして。

「なに食べるつもり？」

「うどんだ。」

「うどん？」

「讃岐うどんだ。」

「讃岐ってどこ？」

「四国の香川県だよ。」

「香川県の隣が岡山県だっけ？」

「そうだ。瀬戸内海を隔てて北側の中国地方にあるのが岡山県、南の四国にあるのが香川県だよ。両県は瀬戸大橋でつながっているんだ。」

「へえ、詳しいね。」

「友人の刀鍛冶が岡山県にいるからさ。」

「じゃあ、その香川県のうどんを食べに行こう！」

「お、おう。」

何故か、そういうことになった。

うどんだ。

私の脳内の皺一本一本は、今や麺の一本一本。
うどんまみれの脳内に熱々のつゆが注がれる。
葱がはらりとかけられ、そのまま口内に運ぶ。
よだれが出てきそうさ。

うどん。

うどん。

私が今食べたいのはうどん。

うどんロードが開かれた。

煌めく麺が我を打つ。

グルテンの力蓄えて。

冷えた天麩羅、汁浸ける。

新潟駅構内で食べたうどんのつゆは今一つだったが、それはカツオだしに慣れたら問題ない味わいなのだろう。

うどん。

うどん。

私の心は夏模様。

琴電。

うみ・まち・さとを心とうどんで結ぶことでん。

チリンチリンと涼しい音色が、空虚な胃に響く。

食べたい。

食べたい。

早く食べたい。

気持ちはアートの路面電車。

函館の路面電車も都電荒川線も富山ライトレールも小倉のモノレールも沖縄都市モ

ノレールも、すべてが麺類でつながる。

人類は麺類。

麺類で結ぶ心の愛。

細くも太い愛の糸。

愛こそがすべてを乗り越える強きしるべ。

さあ、グルテンなガルテンに向かうべし！

我が心のゲシュペンストMK-IIIよ！

騒乱を呼ぶ嵐の消失の電気騎士よ！

早く速く、かの地に参らせたまへ！

昔、この百貨店に来た時は店内の食堂街がやたらに混雑していたんだっけ。

あの頃は平和だったなあ。

日本も好景気だったしな。

それで屋上に上がって、独りで讃岐（さぬき）うどんをすすったんだよな。

あの頃から、独りには慣れている。

古く表紙の折れ曲がった薄い詩集と小さく色褪せたノートとちびた傷だらけの鉛筆だけが私のすべて。

娘は陽気な性格のようで、引つ込み思案の妹やちやつかり者の妹の話などをした。

さりげなく腕を絡め体を寄せてくるのでとても困ったが、気にしない気にしないサー

ビスサービスと彼女が言うので気にしないことにした。

少女特有の気まぐれか？

どうも彼女はあっけらかんとした性質らしい。

何故、彼女はあそこで私に話しかけてきたのだろうか？

屋上はなんだかオサレなセカイへと変貌していた。

睡蓮の庭？

空中庭園？

なんじゃあ、こりゃあ？

あの青空をおかずに出来たセカイは、どこへ行った？

昭和はこうして、跡形も無く消えてゆく定めらしい。

創業以来、半世紀近くこの屋上で手打ちうどんを提供し続けているうどん屋に並んだ。

ちよつとした人の列が出来ている。

娘も私と並んだ。

本気で一緒に食べるつもりらしい。

こんなおっさんと飯を食うだなんて、なんとも酔狂だねえ。

すぐに順番が来た。

回転率のよか店だ。

私はおろしうどん大盛り（七〇〇円に一〇〇円追加）、娘はきつねうどんを頼んだ。

このご時世に良心的な値段だ。

艦娘のお陰で物価が下がりがりつつあるらしいが、情勢はまだまだ厳しい。

消費税二〇パーセント案を打ち出した内閣は支持率を下げている。

大泉首相にはもう少し踏ん張って欲しいところだ。

近々函館鎮守府へ視察に行くらしい。

道民としては気になるのだろう。

おろしうどんは刻み葱（ネギ）に卵に大根おろしに揚げ玉。本場の讃岐うどんや大阪のうどんだったら素うどんも旨い。手打ち故の不揃いの麺をハフハフして見知らぬ娘と食べる。彼女はどのようなものか、私の顔をニコニコ眺めつつ食べる。変な娘だ。

半熟になりつつある卵を箸で崩し、一気に麺をかきこんだ。

ここ三年で行方不明者が五〇万人を超えているといった噂がある。もつといると主張する者さえいた。

幾らなんでも、そんなにいないだろうに。

先程携帯端末に入ってきたニュースを覗くと、行方不明者たちが異世界転移や転生をしているのだと主張する連中の与汰話を取り上げていた。

事実ならば大変なことだ。

事実ならば、ではあるが。

隣にいた娘がなになにそれなにと、ずいぶん馴れ馴れしい様子で私の手元を覗き込んだ。
だ。

幾人かの若い男性がおそろしい顔つきで露骨に舌打ちしながら、私の近くを通り過ぎ

る。

君たち、勘違いしているよ。

おじさんがモテる訳ないじゃないか。

まだもう少し時間があるので、彼女と共にガラリと変わった庭園を巡った。

フランクフルトを出す店も無くなっていた。

あの威勢のいい若者はどうなったのだろうか？

リコーダーの音色が聴こえてきた。

東京都公認の楽隊が演奏している。

眼鏡をかけた髭の男性が笛吹きだ。

「また会えると思うよ。じゃあね！」

池袋駅で彼女と別れる。

彼女の手にはオサレな紙袋。

お礼にケーキを買ったのだ。

話題が豊富で機転の効く娘だった。

変な男に捕まらないことを祈るばかりだ。

ロツカーから手荷物を取り出し、ネオサイタマ行きホームへ向かう。

ネオサイタマから新幹線に乗って、更に在来線乗り継いで日本海沿いにある小さな街に行く。

明日の夕方には着けるだろうさ。

大本営から新しい鎮守府へ着任を指示された私は、明日にはそこへ新人提督として到着である。

確か、軽巡洋艦が一名いるのだったか。

気立てのよい娘だったならばいいなあ。

先程まで話をしていたあの子のような。

夜汽車の中で横浜の老舗のシウマイ弁当を堪能しつつ、私はそう思った。

CXXXIX：脅威と余力とケツコンと

ひとまずの脅威が去ると、考える余力が出てくる。

その余力が建設的なものならば実にありがたいことだが、すべての人が前向きな姿勢を見せる訳ではない。

尚悪いのは、吹き込まれたか或いは囁かれた言葉を自分自身の考えだと思い込んだり、それが正しいのだと信じ込んだりすることだ。

戦争をしないように全力を尽くすことは正しい。

だが、その戦争を進めなければならぬ時に妨害するのは非国民的な行為ではなからうか？

大本営の前にはいつもの幾つもの怪しげな自称憂国系市民団体が居座り、『戦争反対！』だの『深海棲艦にも生きる権利はある！』だの『女の子の艦娘を戦わせるな！ 恥を知れ！』といった美辞麗句をプラカードに吹き付けて旗のように振っている。

幕末の自称官軍の如くに。

阿呆が。

人類はとつくの前に追い込まれているんだよ。

殺るか殺られるかなんだ。

日本は石油が無いと、どうにもならないんだ。

半世紀前の日本じゃないんだぞ、今は。

石油が『本当に』なくなつたら、どうなるか想像すら出来ないのか？

日本国民の半数がそれ以上が、餓死する可能性だつて有り得るんだ。

なんのために艦娘がオイルにまみれて硝煙にむせつつ呪詛を漏らしながら沈んでい
るのか、考えようともしていないのか？

屍山血河の中をさ迷う我々は、艦娘に頼つてこの暗い夜更けをなんとしても対岸に辿
り着かねばならんだ。

それを遮（さえぎ）る者は何人たりとも容赦はしない。

奴らには覚悟があるのか？

立派な主張をするのだ。

ならば、どうなろうと構わない筈だ。

部下に内線電話で指示をしようとするが、それは断線されていた。

「随分手練れを揃えたな。」

私は振り向いて彼らに言った。
仰々しい戦力が部屋に集まる。

たかが情報将校の確保のために。
有効な手立てをご破算にする力。
時代遅れの黒い鎧を着た連中め。

骨董品を掻き集めるとはな。
実に野暮天極まる連中だな。

これでは対人地雷も効かん。
抵抗は一旦諦めるとするか。

「憲兵隊は常に全力で任務に当たっておりますので。
おどけた顔で、老齡の元特機隊の腕利きが笑う。
ふざけるな。」

これからが大切な時期なのに。
日本は変革しなくてはならないのだ。

つまらぬ意地の張り合いをしている場合ではないのだ。
政争のオモチャになぞされてたまるか。

「君たちはなにも理解出来ていない。」

「お話は地下でたつぷりとお伺いしますよ。時間は沢山ございますから。」
違う、そうじゃない。

思わず拳銃で頭を撃ち抜こうかとも思ったが、当たる筈も無いか。
蜂の巣になるのは趣味じゃない。

「安い飯なら喰わんぞ。」

「大和の手料理を、ご用意します。」

「情に訴えるつもりならば先に言っておく。それは無駄だ。」

「吹雪にも手伝わせます。」

「あいつは味噌汁くらい作れるようになったのか？」

「ええ、張り切っていますよ。」

「バカな娘だ。」

「ご同行願います。」

「致し方あるまい。」

誰もいなくなつたは執務室。

重厚な机に独逸製の萬年筆。

きちんと整理された執務室。

その引き出しの中には写真。

色褪せて古ぼけた集合写真。

「艦娘は全員一六歳以上と決まった。これは大本営と政府との合意に基づく判断である。」

お偉いさんの発言に、集まった先任同期後輩などの提督たちが歓喜の声を上げる。なりふりかまわなくなってきたな。

これで駆逐艦も合法的に結婚出来るといふ寸法か。

大本営での会議。

ぎらぎらした狂暴なまでの視線で会議室を埋める、無数のカリギュラたちの欲望にさらされた本日の議題。

駆逐艦とのケツコン。

いや、駆逐艦との現実世界に於ける結婚が提督たちの渴望する権利だ。

冷静に考えたら、彼女たちとの社会生活をどうするつもりなのだろう？

艦娘が人間同様に成長するだなんて、まだ誰も証明出来ないのに。

そう思つて挙手して発言したら、艦娘とケツコンしていない者たちからガミラス艦隊の如き猛攻撃を受けた。

戦乙女もご照覧あれ。

おまいらは装甲擲弾兵か。

彼らの背後に、斧を構えた勇者系上級大将が見える。

結局、私は論破された形で彼らの論理に追随することにした。

長いものには巻かれる式である。

やれやれ。

そう言えば、泰作少年をこよなく愛するセルシウスが石油タンカーと数隻の艦艇群による輸送船団を率いて来日するつもりらしい。

函館からも護衛艦隊を派遣しないと。

石油に変わる決定的代替エネルギー源はまだ見つかっていない。

シズマドライブとやらも研究中らしい。

明石たちや夕張たちもなにかやっているようだが、まだまだ研究成果が出ていない。

太陽光発電はかなり進歩したようだが。

明日の議題はケツコンしていた艦娘たちの処遇について、か。

また難しい問題を。

さて、どうなることやら。

CXL : 山と熊とヘタイロイ

深海棲艦の侵攻に伴い、人類はその生息圏を狭めていった。

駆逐されなくなった野生動物が増え続け、市街地をも闊歩する害獣と化してゆく。

試される大地、北海道。

その道南も例外ではない。

一九七八年には五〇万を超える人間が所持していた銃砲系許可証も、今では五万弱の人間しか有していない。

しかも、その大半が六〇歳以上の高齢者だ。

ガソリン代が跳ね上がって自動車が殆ど走れなかった時期は野生動物が畑や人家にどんどん現れて、洒落にならない事態を多数引き起こしたそうさ。

地方自治体がかき集めた金でぎりぎりの油を入れた軽トラで出陣した猟友会の面々が、行きと帰りで人数の違う状況になったこともあるそうさ。

諸行無常だ。

「近年、道南や知床などでは人をおそれない熊（ヒグマ）が何頭も現れています。これは由々しき事態です。このことを憂慮した道庁では、長年禁止してきた熊の春熊狩を今年から復活させました。被害が続出してから、対策を講じる破目に陥ってはならないのです。人身事故が多い道南を中心に、熊対策を強化してゆきます。」

沈痛な表情で淡々と最近の害獣事情を話してゆく担当官。

「函館市役所の会議室は、重い雰囲気の色濃くなつてゆく。」

厭な話がほとんどだ。

救いなどろくにならない。

人など弱いぞと、野生動物たちに思われたら大変なことになる。

深海棲艦との戦いや謀略を仕掛けてくる人間対策で多忙なのに。

「野生動物に餌を与えないでください。特に熊には。安易な考えが、誰も望まない結果を引き起こすのです。」

ソーセージを観光客から与えられた熊が人里に現れるようになり、鉛の塊によつて最期を迎えた話を聞かされる。

「熊に対して死んだ真似は言語道断です。彼らは死体も食べるのですから。木に登るのも無駄です。鈴を鳴らしたからといって、熊が近づかない保証はありません。餌が来た

ぞ、と知らせているような事態さえ引き起こす可能性があります。また、若い熊が好奇心の赴くままに近づいてきた案件も複数発生しています。背中を向けることは殺してくれと言うようなものです。現に、死亡原因の大半は背を向けて逃げたことに由来しています。熊は火を恐れませんが、焚き火は無効です。近づいてきた熊には、鼻に打撃を与えて追い払うのが最善です。なお、一旦手放した荷物は諦めてください。熊は所有物に対して大変執着します。絶対に取り返そうと思わないでください。確実に貴方が死にます。また、食い散らされた動物には絶対に近づかないでください。獲物を横取りするつもりだと誤解されます。返り討ちに会う可能性を考慮して、単独行動は避けてください。必ず二人か三人以上で仕留めるようにしてください。実際、単独行動した狩人が何人も殺られています。近接戦闘を考慮して用意した銃（なた）を抜く間もなく、熊避けスプレーを噴射する暇（いとま）さえなく、彼らは一方的に殺られています。おそらく、瞬間的な判断は間に合わないでしょう。歴戦の狩人さえ返り討ちにされるのだと危機感を常に持つて対処してください。」

市役所に集まった猟友会の面々は高齢の人が少なくない。

銃器所持の規制緩和を中央に訴え続けているらしいが、危機感の無い都会の連中はピンとこないだろう。

想像力すらろくに無いだろうから。

函館のコンビニエンスストアでは店内に熊注意の張り紙が貼ってあったり、屋内で熊警戒の放送が流れたりする。

山菜採りや筍採りで殺られる人が続出しているからだ。

射撃許可証を有しているという理由で、近年は道警や自衛隊から選抜された狙撃手も参加している。

道民にとつて、他人事ではないのだ。

熊やツキノワグマが現れない地域の人にはなかなか理解されないが、遭遇する可能性のある我々は覚悟しなくてはならない。

東北各県での事例もいろいろ聞いた。

やりきれない話を延々と聞かされた。

エゾシカもかなり増えているらしい。

ジビエな料理を食べる機会が多くなるのだな。

鹿肉バーガーを鎮守府の献立に加えて欲しいと、担当官から真顔で言われた。

熊肉は異世界転生・転移系小説では旨いとされたりしているが、どうだろう？

「人をおそれない野生動物が増えてきました。これは危険な兆候です。環境に合わせ、彼らも意識が変化しているとも考えられます。注意していただきたいのは、共存出来るのはお互いに離れて暮らしているからだということです。彼らは飼いや慣らされた

家畜ではありません。熊は本来狡猾で臆病ですが、若い熊は好奇心旺盛で人をおそれません。これが悲劇に密接につながっていることを我々は理解しなくてはなりません。」
うむむ。

「人の味を覚えた熊は最悪の相手です。必ず殺らなくてはなりません。それも被害者を増やす前に早急に。子供なら子供、女性なら女性と彼らは最初に食べた相手と同じ種類の人を狙います。」

青白い顔をした人もいる。

全国各地で野生動物対策をしなくてはならないからなあ。

今までは猟友会一択だったらしいが、振り返りに遇うこともあるため、役所の若手に資格を取らせ、警察や自衛隊の射撃名人に依頼している現状だ。

それに我々鎮守府の提督が加わる。

米軍から供与された狙撃銃があるからな。

いざとなれば、手の空いた艦娘を総動員して山狩りだ。

戦艦ならば、一対一で仕留められるだろうさ。

「エゾシカは撃ち殺した後、必ず回収してください。放置してはなりません。それは罫のご馳走になるからです。」

老齢の狩人たちが渋い顔になる。

「山中に放置するのは違法投棄に当たります。重くて大変なことはわかりますが、わざわざ熊に餌を与える必要など存在しません。元艦娘の派遣も検討していますから、必要な方は申請してください。」

「わからないことがあります、提督。」

市役所を出ると大淀が言った。

「なんででしょう?」

「熊が出現する可能性が高いのに、何故山菜採りに出掛ける人がいるのでしょうか?」

「そうですね……。絶対に熊が現れるとは限らないと思われるのかもしれないし、おいしいものに執着するのは熊だけではないということでしょう。たぶん。」

「そういうものでしょうか?」

「そういうことなのでしょう、おそらくは。熊の好物のギョウジャニンニクが好きなのも少なくないようですし。」

「命がけの採集ですね。」

「ええ。ただ、私にも何故そこまで危険を犯すのかよくわかりません。熊の新しい足跡を見かけてさえ、ニジマスを釣ろうとする人がいますから。おそれているのやらないのやら、さっぱりわかりません。」

「業が深いのかもしれませんね。」

幸い、まだ函館市内では熊が目撃されていない。

市街地に現れるようになったら厄介だ。

野生動物へ半端に餌付けするような人たちへの対策も行わなければならない。

「鹿肉料理を鳳翔さんや間宮さんにも考えてもらいましょう。」

「厨房の面々ならば、おいしい料理法を構築されるでしょう。」

射撃訓練をしなきゃな、と気分が重くなる。

鎮守府へ戻ると、熊の赤ん坊が二頭いた。

なにを言っているのかわからない気がしないでもないが、これは断じてチャチな幻術やマヤカシじゃない。

おそるべきモノの片鱗を見てしまった。

どうやら育児放棄された熊の子らしい。

「司令官、熊を飼いまししょう！」

「然り！ 然り！ 然り！」

一糸乱れぬ唱和の響き。

それはまさにアイオニオン・ヘタイロイの気配。

王の軍勢の輝き。

なん……だと……。

「自然と調和するためには、野生動物と暮らすのは悪いことで無いと思います。」

大淀が言った。

「然り！ 然り！ 然り！」

艦娘たちが燦然と輝きながら唱和する。

そうかなあ？

「寵を飼った例はありません。これは稀少な情報になるものと考えます。」

大淀の意見するの皆が賛成する。

むむむ。

「あくまでも試験的に飼育するという条件で大本営を説得出来たら許可しましょう。」

「既に許可は得ています。」

なに？

大淀……きさん……。

フツ。

「負けたさ。」

「提督の許可が出ました！」

おおっ！ とどよめく艦娘たち。

そして、鎮守府の新しい仲間、熊の子供たちが加わった。

CXLI：ケツコンしていた娘たち

嗚呼

どうか

提督

あの駆逐艦の

夜の目を見ないで

視線はもう夜戦完了よ

ケツコンカツコカリを果たした艦娘は、確かにその時点に於いては幸せだろう。

だが、ケツコンしていた娘が幸せかどうかと問われたら過去形になるであろう。

以前絆を結んでいた提督或いは司令官と称される男性、もしくはその他の性別の相手と既に離別しているのだ。

死別かもしれない。

基本的に、ケツコンカツコカリをした相手とは死ぬまで添い遂げなければならぬか

らだ。

意外と重たい内容だが、死地であればあるほどケツコンカツコカリの需要が大きいらしい。

慎重にならざるを得ない筈の提督たちも、需要を感じて血迷ってしまふのか。命の危機を感じると、生きてきた証や血を残したくなる傾向が強まるという。

オットカツコカリと離別した艦娘の中には、自分自身を制御出来なくなつて深海棲艦の群れに突撃する者もたまにいます。

まるで殉死だ。

それが鉄底海峡解放戦までの『常識』だった。

最近では艦娘も変わりつつあるらしい。

サイコンカツコカリやサイサイコンカツコカリの娘も出始めている。

これが進化なのか？

函館鎮守府は他の鎮守府泊地警備府鎮守府カツコカリなどから訪れる艦娘がやたらに多い。

艦装や装備の点検修理は、基本的に大湊（おおみなと）と共同もしくはどこかからやつて来た明石や夕張や北上や秋津洲（あきつしま）がやっている。

だがしかしばってん。

それじゃ回らなくなりつつあった。

大本営に前から打診しているのだが、工作艦や建造開発設備は必要に思われる。

元艦娘の再就職率が高まっていて、再訓練で函館を希望し使っている艦娘も少なくな
い。

「工作艦が欲しいですね。」

大淀のそばで、そう言った。

すると彼女はなにを勘違いしたのか、深刻な表情で私の顔面を両手で覆った。

これこれそこな娘、なんばすつとですか。

「私ではダメなのですか、シロウ?」

誰がシロウやねん。

「私は貴方だけの剣であり、貴方だけの楯です。それでは満足いただけませんか?」

なんだか妙なスイッチが入っているな。

「落ち着いてください、大淀さん。現状では工作系の手が足りないでしょう。そういう

話です。」

「そこへ颯爽と現れるホームセンター北上様だよ。」

「提督……貴方は……。」

「待つて待つて、大淀さん。その大剣はどこから出したんですか？　北上さんも煽らないでください。」

「今ならケツコンカツコカリしていた北上様がただで着任するよ。提督との夜戦もぼつちり対応出来るからとつてもお得だね。」

「提督……未経験の私では役立たずなのでしょうか？」

「落ち着いて落ち着いて大淀さん。誰かある！　誰かある！　出合え！　出合え！　特一級緊急事態である！」

明日は他所の六つの鎮守府が合同で艦隊を組み、函館の艦隊と模擬戦を行う合同演習の日だ。

艦娘が一名しかいない鎮守府はその性質から艦娘の実力を十全に発揮出来ず、また、艦娘を建造や海域回収（ドロップ）やその他の合法的方法で入手出来ない場合は機能不全に陥りやすい。

それ故の函館鎮守府主導の合同演習であり、提督同士または艦娘同士の交流を図る狙いもある。

要は、函館に面倒を押し付けてるってことよね。

なんで函館は事務がやたらに充実しているのかと思っていたら、ファックスが常時稼

動しているし、電話もよく掛かってくる。

「函館は厄介な面々の顔役で世話役で調整役つてどこかしら。

あの即席提督だけじゃ、右往左往するだけよね。

あたしがしつかり、あいつを支えてやんなくちやダメなのよ。

あたしが、あたしが妻の一人として頑張らなきゃいけないの。

あーあー、面倒だわ。

あーもー、面倒だわ。

いやんなっちゃうわ。

ま、だいぶん馴れたけど。

さてと、演習の準備に取り掛かりますか。

「あ……あの……曙ちゃん？」

振り向くと潮と虎……じゃなくて冴えないおっさんがいた。

冴えない加減じゃ、あたしの旦那といい勝負ね。

あの人も、虎のように襲ってくれたらいいのに。

……無理か。

そんな甲斐性があったら、今頃指輪持ちだらけだし。

そうになったらそうなたで、暗闘が今以上酷くなる。

やれやれだわ。

『今度の』提督はずいぶん年上ね。」

あはは、と力なく笑う潮。

苦笑いする平凡な中年男。

「ち、父です！」

「む、娘です。」

おーおー、短期間で仕込んだわね。

少し雑談する。

指輪持ちのあの子は、おそらく即席で仕立てられた提督と父娘のように仲良く立ち去った。

性格的にはとってもいい子なんだけど、まるで魔性の艦娘に囚われたかのような提督が次々に……。

「あの……。」

「あ、ご免なさい、扶桑さん。その、気がつかなかったわ。」

「ふふ、気にしなくていいわ。だって私は今幸福ですもの。」

色っぽい人だなあ。

なんかフェロモンがぐわーっと立ち昇っている感じが漂ってくる。
まさに女は海、ね。

私の中でお眠りなさい、つてどこかしら？

数いる扶桑さんの中でも、一番エロいと言われるだけのことはあるわ。

うちの即席提督に近づけないようにしないと。

万一があるとヤバイ。

「『今度の』提督はずいぶん若いんですね。」

「ええ、こんな情けない私にもよい縁があったのよ。ありがたいことだわ。」

「若輩者ですが、彼女と共に支え合いつつ暮らしてゆきたいと思っています。」

どうやら、よく出来た人のようだ。

うちの旦那もこれくらい言えたらいいんだけど。

ちよつと雑談する。

指輪持ちの彼女は、その若き提督とまるで兄妹のように仲良く立ち去った。

しかし、六箇所の鎮守府と演習なんて相当変よね。

言わんとすることはなんとなくわかるんだけど、作戦行動に関する見解に指揮系統の統一に意識の擦り合わせに不測の事態への対応をどうするか、課題が多すぎる。

たぶん、それら全部をひっくるめて馴れとけつてことなんでしょうけど。

……もしかして、大本営は大攻勢を企図しているというの？

……中東方面への打撃艦隊が強化されるって噂もあるけど。

「あ、あの……。」

「ご免なさい、神通さん。全然気が付かなかったわ。」

「いえ、もつと早くに声がけしたらよかったです。」

「神通、ペコペコすんな。お前は別に悪くない。そうだろ、駆逐艦。」

「そうですね、私もそう思います。ところで、私の名前は曙です。」

「あー、解体寸前だったところを、お前のことをちつとも知らない素人丸出しの抜けた

おっさんに拾われたんだろ。運がよかったな。」

ああ？

なんやのん、こんくすたーけは。

めんたまほじくり返して、どつき回したるか。

なんやち、血い見せたるか。

零式防衛術の餌食になりたいんか、このぼん。

「おーおー、怒つとる、怒つとる。お前の同姿艦お得意の罵倒は無いのかよ。」

「お望みでしたら、演習でたっぷりお聞かせいたします。嫌と言うほどまで。」

「あ、あの、提督、お止めください。」
命拾いたわね。

業務連絡を簡潔に済ませる。

憎たらしい顔をして立ち去る擬似提督。

ぺこぺこ謝りながら立ち去る神通さん。

長くないわね。

「あの人もいいところがあるんですよ。」

立ち去る直前、彼女はそう言った。

ということとは悪いところが一杯あるってことじゃないの？

指輪持ちにしちゃ、酷いのを選んだわね。

念のため、今のうちにテイトクニウムを補充しておこうかしら。

「どこへ行くつもりかなー、ボノたんは。はーん、ドーせ、ボノたんの愛するご主人様に物陰からいきなり飛び掛かって抱きつくつもりなんですよ。ボノたん、なんておそろしい子ー！」

「あの、漣（さざなみ）ちゃん。そういうことを言うのはよろしくないわよ。」

「かーっ、祥鳳さんはハートじゃ勝ち目が無いほどグラマラスですけんのお。」

「そ、そんなことは……。」

「あーもう、リングネームがアマゾネスって感じですよね。」

「そこまでだ、漣。彼女をからかうな。」

「うわーっ、ご主人様もやっぱり大きい方がいいんですかー!」

「大きな声でとんでもないことを言うな。それに祥鳳の提督はまだ少年だ。刺激の強い言葉で翻弄するんじゃないぞ。」

「あの……祥鳳さんの提督はどちらに?」

「君たちのところの艦娘たちに連れ去られて、今頃は一緒に食堂で試食会に参加している筈だよ。」

大人な感じの提督に癖だらけの漣。

シヨタ提督に女盛りの祥鳳さんか。

これなら長くやっていけそうかな?

「おやおや、ボノたんはシヨタでもありましたかな。ムフー。」

「さりげなく自分の提督にセクハラしてんじゃないわよ、漣。」

「こういう行為をすると、ご主人様は無茶苦茶喜ぶですよ。」

「息を吐くようにデマを言うんじゃない、漣。その手を離せ。」

おお、ツッコミ力も抜群だ。

これなら割合にもつかしら？

漣はさみしがり屋だしねえ。

指輪持ち二名となんちやつて提督一人を見送った。

「よーつ、曙！　提督とはエロいことしたかい？」

振り向きざまに、回転脚で攻撃を仕掛ける。

ちいつ、踏み込みが甘かった。

流石は指輪持ち。

頭がエロくても、戦闘力の高さは侮れない。

「おおつと、劍呑、劍呑。てことはまだなんも無しか。そろそろ襲いなよ。」

「深雪、お前はなんとということをお勧めしているんだ。」

「大丈夫、大丈夫さ。ただのじゃれあいだからさ。」

「あんた、指輪持ちだからって余裕ぶっこいてんじゃないわよ。」

「へへーん、あんたもあたしみたいに早く既成事実を作りなよ。」

「……………え？　ちよつと、深雪。」

「バレなきや犯罪じゃないし、法整備も進んでいるからね。」

「あー、曙。このことは内々で済ませてくれないか。」

「ええ、これ以上身内から逮捕者を出したくないわ。」

たぶん、誘ったのは……。

「よし、司令官。明日は深雪スペシャルでがつんと言わせるから、楽しみにしておいてよ。」

「張り切り過ぎて、他の子とぶつかるんじゃないぞ。」

「わかってる、わかってる。深雪様にお任せあれ。」

まー、そこそこ見栄えがある提督か。

でもね、あたしの夫の方がいい男よ。

明日は全員ギャフンと言わせてやる。

あたしの愛する提督のため、全力を尽くすから。

……でも、指輪持ちっぴいいなあ。

その日、函館鎮守府の売店ではおもちゃの指輪がやたらに売れたという。

今以上これ以上愛されたいけど、あの即席提督はその娘を見るような瞳のまま

消えそうに燃えそうな山葡萄色の心を貴方に知らしめ、そのまま押し倒したい
青鈍（あおにび）色の夜の海に揺れながらじつとじつと好機を狙っているのよ
ラブパッションを内に秘め、恋の砲撃戦を撃ち鳴らしながら

CXLII : 回帰熱

雨の音がする。

午前四時過ぎ。

妙に喉がいがらつぽい。

やられた。

台風のせいなのか、函館は天候が安定せずに晴れたり降つたりをここ何日も繰り返していた。

熱は……体温計で計ると三八度五分。

平熱は三五度六分だが、問題ないな。

少しふらつくが、書類仕事のみじやい。

ちと早いが、業務を開始しようかな。

洗顔して着替えを行い、私室を出た。

扉を開けたら、そこは私の戦場である。

灯りを点け、大本営から送られていた書類を片付け始めた。

少しブーツとなる。

いかんいかん。

集中集中。

すぐに、執務室の扉を叩く音がする。

おや、誰かな？

「どなたですか？」

「妙高です。」

「どうぞ。」

入室した妙高先生がじっと私を見つめる。

いつも凜としている、重巡洋艦筆頭艦娘。

我が函館鎮守府に於いて頼れる元教官だ。

ブーツと見ていたら、教官は赤くなつた。

何故だ？

「提督は風邪をひかれていますようですね。本日はお休みください。ツーマンセルな二名態勢でお世話をさせます。書類仕事は私にお任せください。重要決済並びに急務以外でお手間を取らせることはありませんから、ご安心ください。」

彼女は内線電話をかけ始める。

「もしもし、妙高です。厨房の李さんに連絡。提督の本日の食事は薬食同源系の献立でお願いしますと伝えてください。朝食は中華粥にジャスミン茶を頼みます。鳳翔さんと間宮さんには臨機応変で、と伝えてください。」

「もしもし、長門？ 提督は熱があるから、今日の業務は通常業務の乙でお願い。……ダメよ、貴女が看病すると色々困るから。お見舞くらいに自重してね。ええ、それくらいならいいわ。」

「もしもし、加賀？ 提督は熱があるから駆逐艦たちを抑制させて。みんながお見舞に来たら、治るものも治らないわ。うん、そんなに酷くは無いから安心して。貴女が動揺してどうするの。しつかりなさい。」

「足柄、提督は今日熱があるからカツは無しで。食事は李さんが作るから問題なしよ。後、襲ったらダメだからね。」

「もしもし、田中さん？ 妙高です。提督は本日熱がありますので、事務関連業務をお休みされます。対応が難しい案件は先ず私を通してください。」

大淀がすつ飛んできた。

「妙高さん、状況は？」

「関係部署に連絡を付けました。」

「ありがとうございます。提督、ご安心ください。我ら十傑衆、あらゆる敵を排除してみ

せませす。」

ははーん、大淀はアレを観たのか。

「大変ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いいたします。」

執務室に隣接する私室で強制的に休むように指示される。

致し方なし。

雨足が強まってきた。

複数の足音や気配が近づいてくる。

ああ、どうやら今日も賑やかになりそうだ。

朝食を載せたワゴンは鳳翔が持つてきて、後から間宮がやってきて回収した。

体調が少しよくなってきたので、お守りの駆逐艦たちを引き連れて鎮守府内を見回ることにした。

天気も回復傾向にあるようだ。

あれ？

横須賀と呉の大和、佐世保と舞鶴の武蔵が厨房でなにやら作っているように見える。

……疲れているのかな？

とつづくに各鎮守府に戻っている筈なのだがなあ。

不味いんだよなあ。

これ以上、持って回った言い方の嫌みを電話口で聞きたくないんだよなあ。
あれ？

自称異世界転移したとかいう触れ込みの勇者提督が独占している、ウォースパイトやサラトガまで料理の手伝い中に見える。

ネヴァアダやヨークタウンといったうちのメリケン艦娘たちや戦艦棲姫も、なにかこねくり回していた。

おつかしいなあ。

ホントはよその主力がいたらよろしくない筈なんだよなあ。

大淀が金ぴか野郎とか言つて、珍しく勇者提督を罵っていたのが印象的だ。

あれ、なんでなんだろう？

丁度我が鎮守府の総旗艦殿が通рикаかったので、ちよつこし聞いてみよう。

「長門教官、少しお尋ねしたいことがあるのですが……。」

「うむ、やつと身を固める決心がついたか。これは重畳。広島の際島神社や岡山の後楽園、それに島根の出雲大社で挙式するのもいいな。倉敷の美観地区で川下りするのも悪くない。で、いつ何名と決行する？」

「教官は中国地方を制覇するつもりですか？」

「今、個人的に興味があるんだ。とある探偵小説に触発されてな。」

「ああ、名探偵と言われつつも防御点の低い方ですね。」

「海の幸が旨い港町で地酒を呑むのも乙なものだろう。」

「然り！ 然り！ 然り！ ってなにを言わせるのですか。」

「亭主が振つてきた話題には妻として全力で応えたいからだ。決まっている。」

「それは兎も角、あの面々はなんですか？」

「料理教室だ。」

「なんとも簡潔な答ですね。」

「真実とは常に簡潔なのだ。」

「そうですね。」

「提督は難しく考えすぎだ。」

「じゃあ部屋に戻りますよ。」

「よし、お姫様抱っこしてやる。」

教官にお姫様抱っこされて、執務室に隣接した私室に戻った。

その途中、青葉たちやうちの艦娘たちに激写された気がする。

教官がやたらに気合いを入れて式場や中国地方の話をするものだから、たまたま呉から来ていた艦娘が勘違いしてちよつとした騒動に発展した。

何故か呉第六の先輩から電話が来てワシに任せとけガハハとなったので、誤解を解いておいた。

つまらん奴じやのう、と言われたが私は悪くないと思う。

夕方には喉のいがらっぽさも無くなったので、普通に食堂へ行った。

お守りの曙と霞も一緒だ。

近寄る艦娘たちがそれとなくケツコンの話題を振ってきたが、ことごとくすつとぼけた。

普段は聞き分けのよい面々なのだが、時としてやたらに頑固になる。

一体、誰の影響なのだろうか？

夕食は李さんの中華粥主体で消化によいものが事前に用意されていて、着席するや否やすぐに席へ届けられた。

大阪のかやくご飯と素うどんの組み合わせよりも素早い到着だ。

添い寝したがる艦娘が常より多くて、それらをみな断るのがとても大変だった。

何故みんな、タオルと男物の下着とビニール袋をそれぞれ抱えていたのだろうか？

数日後。

呉鎮守府は嚴島神社や出雲大社や後樂園などと提携して、提督と艦娘のケツコン式を宣伝活動するようになる。

音頭を取っているのは先輩のようだ。

丁度向こうの扶桑と提督がケツコンするらしいので、打ってつけの状況らしい。

先日函館鎮守府を潰滅に追い込んでしまった妖艶系扶桑姉様と異なり、普通に色っぽくてやさしい扶桑姉様だとか。

それはなにより。

その日から、中国地方に詳しい艦娘がずいぶん多くなった。

CXLⅢ：かんとく！

その自称映像作家が函館を訪れたのは、少し曇った午後のことだった。

五〇代に見える彼は、大本営の広報と組んで鎮守府の宣伝映画を撮りたいと語った。話がやたらに長い人物だ。

既に夕暮れが迫っている。

まだ話し足りないようだ。

「函館を舞台にするよりも、横須賀や呉や舞鶴や佐世保で撮った方が受けがいいのではないですか？」

「国際的に喧伝するみたいで、函館みたいに和と洋の混成された街の方が受けるんですよ。それに。」

「それに？」

「今仰られた四カ所は、観光地として考えると今一つ魅力がありません。」

わー、言っちゃったよ、この人。

「でも、地味ですよ。案外鎮守府の日常っていうのは。」

「それがいいんですよ。日常を丹念に撮影すれば、少々派手さが無くても芸術理解者気取りの方々から好評をいただけます。」

ん？

この人、変なことを言い出したぞ？

「『おっちゃん飯』って映像作品がありますよね。」

「ええ、大好きな作品です。」

関西地方を主な舞台にして、個人貿易商のおっちゃんがご飯を食べに行く話だ。

確か今は第六期が好評放送中だよな。

個人的には初期の頃の方が好きだが。

「アレと『深夜洋食』に近い方向性で概ね撮影します。儲けは関連商品で上げればいいんです。円盤には艦娘の生写真でも封入すれば、その手の愛好家に売れます。メイキング映像をディスク一枚分付ければ、製作費用がかからず特典に出来ます。観客は鎮守府関連の人たちや自衛隊関係の人々を動員すれば、そこそこの数が稼げるでしょう。函館の陸自や海自にも協力は取り付けてあります。主題歌は那珂ちゃんが歌っていますが、既に有線で多く流れています。挿入歌は中森明菜さんに椎名林檎さんにレベツカにささきいさおさんに水木一郎さんに水樹奈々さんと話題性も豊富です。こちらにも有線で流れ始めています。歌と関連商品で先行して人気を高めます。先行して話題性を盛り上

げておけば、封切り時にはよい開始が出来る筈です。コンヴェニエンスストアでも関連商品は売れているようですし、初手としては先ず先ずの売れ行きのようにです。」

言われてみると、鹿島や加賀になんか依頼が来て大淀がそれを受けていたな。

「既に後戻り出来ない状況ですね。」

「生憎と私にバックギアはありませんのでね、お手伝いしていただきますよ、提督さん。」

主役は島風に決定した。

数多い艦娘の中でも、絶大な人気を誇るらしい。

彼女へ厳しくも気遣い溢れる指導を行う役に龍田。

気のいいちよいエロ系先輩役が鹿島。

アメリカからの助っ人役にネヴアダ。

大湊（おおみなと）の赤城と現教官の瑞鶴が加賀と仲よくしたり反目したり。

ローマやビスマルクやウオースパイトのような海外艦も、ちよい役で出演だ。

宿敵の深海棲艦役に戦艦棲姫。

彼女の補佐役にヲ級改の艦装をまとった翔鶴と、港湾棲姫の艦装をまとったキエフ。

どこかのスーパーな北上様が雷装系巡洋艦になり、どこかの色っぽい扶桑姉様がル級になった。

役がどンドン決まってゆく。

手伝いと称して他所の鎮守府泊地警備府から多数の艦娘がやって来て、函館はどんな騒ぎの状態に陥った。

『フェンスを蹴って珈琲を飲みたい夜中』と名付けられた映画の試写会は函館鎮守府の講堂でも行われ、そこは鈴なりの観客で溢れかえった。

叙情的な始まりの場面はレベッカの曲と共に始まり、確かにそういうのが好みそうな観客を引き込む要因にはなりそうだ。

雷鳴。

嵐の中の戦い。

砲撃戦。

雷撃戦。

ささきいさおさんと水木一郎さんの歌が交互に流れる。

勇壮な雰囲気ですごい艦を圧倒する艦娘。

やがて訪れる勝利。

映像が晴れやかになる。

そして歌われる主題歌。

那珂ちゃんの力強い曲。

コマ落として多数の艦娘が映し出される。走ったり砲撃したり雷撃したり食べたり。ちよつと古い映画風の演出で魅せてゆく。

本編。

日常。

ただの日常。

訓練。

繰り返される訓練。

学舎（まなびや）に集まり、座学で教官から話を聞く艦娘たち。

反復される日常生活。

入浴場面も挿入されていた。

そこには、人間の少女とさほど変わらない艦娘の普通の日々が映し出されている。

椎名林檎さんの曲に合わせ、普段の暮らしが映し出される。

遠征。

物資を日本に運ぶ、大切な役目。

駆逐艦たちを主軸に、軽巡洋艦や軽空母が日本の人々の生活向上の為、懸命に物資を

運ぶ。

そこを狙う深海棲艦。

突撃する天龍と龍田。

しかし、敵は手強い。

そこへ颯爽と現れる味方の艦隊。

短くも激しい戦いが繰り広げられ、それは艦娘の勝利で幕を閉じた。

そしてまた繰り返される訓練。

日常生活。

穏やかな雰囲気のお提督に甘える駆逐艦。

訓練場でひたすら汗を流す軽巡洋艦たち。

戦術の研究を重ねる、戦艦空母重巡洋艦。

駆逐艦たちもお手伝いしたり訓練したり。

中森明菜さんの曲が彼女たちの日常をより濃く描き出す。

そこへ深海棲艦現るの報。

映像の雰囲気が一瞬にして変わる。

一挙に慌ただしくなる鎮守府。

出撃する第一艦隊。

長門率いる歴戦の艦隊。

勇ましく凛々しく出撃。

島風は第二艦隊の一員として出撃の時を待つ。

そして、電波を伝って報じられる声。

第一艦隊の手を逃れた敵が、函館に迫っているという。

島風は今、出撃する。

宿敵と雌雄を決するため。

彼女の大寫しに合わせて水樹奈々さんの曲が流れた。

場面転換。

天候不順な雲行き怪しい荒れた海。

戦艦棲姫がヲ級改や港湾棲姫などを引き連れ、ニヤリと嗤（わら）う。

向かうは函館。

世界的観光地としても知られる、北の国の玄関口。

彼女の口元の大寫しと共に高橋洋子さんのエンディングテーマが流れ始めて、観客が

ざわついている。

これ、後編があるの？

スタッフロールがすべて流れ、続編宣伝映像が流れ始める。
更にざわつく観客たち。

映画が終わり、自信満々に見える眼鏡に髭の監督がノリノリの様子でマイクを持って舞台上に現れた。

CXLIV：珈琲は港町の香り

欧米の外資系の会社にとって、それは悪夢の始まりだった。

謎の敵性体群による電波障害、航空機船舶の撃墜拿捕など。

突然、海外との輸出入がまともに出来なくなってしまうた。

軍隊が出動したようだが、どうなったのかよくわからない。

体力のある大企業では即時倒産までいく会社が殆ど無かったけれども、個人輸入事業者で破産近くまで追い込まれたところは少なくなかった。

私が勤める商業施設内の珈琲店はアメリカに本拠を置く外資系だから、混乱はかなり激しかった。

他店からも、当店へ電話がかかってくる。

しかしながら、なんとも答えようがない。

東京本店統括部へ何度も何度も何度も何度も電話をかける店長。

繋がらない。

メールやファックスもじやんじやん流していたが、返事は全然返ってこなかった。

本店は我々に輪をかけて滅茶苦茶な状況なのだろう。

都会の個人事業主の中には、輸入品を早速値上げしている人もいるようだ。

流石、したたかな人は考え方が違う。

店への問い合わせが殺到した。

年輩のお客さんが随分沢山買ったのでいぶかしく思ったら、店で一番よい豆中心に高いものをごっそり買った彼はこう言った。

「お嬢ちゃん、これから大変な時代が来るよ。満州を思い出すねえ。大陸の人はね、戦争が近づくと地面に穴を掘って米を埋めるんだ。」

ハイカラなお爺ちゃんはそう言いつつ、矍鑠（かくしゃく）とした歩きぶりで店を出ていった。

これから舶来品の高級万年筆を買うのさ、と言いながら。不意に、万年筆でも買っておこうかという気分になった。

その日の午後。

年輩のお客さんが多く訪れ、高い豆からどんどん売れる。

その日の夕方頃に、豆を求めて殺到するお客さんの群れ。

在庫がヤバイ。

店長に在庫の件について聞いてみたが、売れるものは兎に角売れとの指示で私たちは

あるものを売っていった。

売り渋りは絶対するなど厳命を受ける。

ただし、数量限定で対応するようにと。

こないだはもつと買えたのにと怒るお客さんたちをなんとか宥めた。

以前から店長の方針で比較的在庫が多かったのだが、心細くなる程珈琲豆の量が減つてゆく。

本店は混乱から立ち直りつつあるようで、朝令暮改ながらも毎日指令を送ってきた。

他の店舗では悲鳴を上げているところもあり、私も他店の友人から回してもらえないかと懇願された。

店長に訳を話し、渋る彼を説得してなんとか在庫を融通する。

新しい豆はまだ入ってこないのがあった。

日本全国各地の店舗で同様の事態らしい。

既に無期限休業に突入した店舗さえある。

全国一二〇〇店舗近くある外資系珈琲店。

鳥取県と島根県を制覇したら全国統一だ。

その目標に向かって邁進していたのにな。

無理な経営が祟り、傾く同業他社もある。

嗚呼、こんな時に郭嘉がいてくれたなら。

海外との交易が停止し、連絡が取れなくなつてからおよそ三カ月。

都内約三〇〇店舗の内、半数以上が無期限休業に入った。

東京本店統括部では倉庫にあつた備蓄豆を大型店舗限定で回したが、それでも逼迫する状況に対する有効打とは成り得ない。

よその会社と折衝してオリジナルブランドにして販売する方策が立てられ、僅かな期間の限定商品として販売したが即時完売した。

お一人様一点限定だったが、それでもあつという間に売り切れる。

窮余の一策として、東京本店統括部は日本の店舗限定で日本製マグカップや代用珈琲や日本紅茶などの販売開始を決定した。

印象商法によつて日本製を強く打ち出し、いずれ回復してもらいたい海外交易復活までの繋ぎにするつもりだそうだ。

海外産の珈琲など、現在はどこかの目敏い企業が秘匿しているか家庭の冷凍庫に眠っているくらいだろう。

私の勤め先も既に在庫切れだった。

缶コーヒーなどはネット上にて高額で取り引きされ、マックスコーヒーも例外ではなかった。

莫大な量が世界的に流通していたのだと改めて知る。

幸い、代用珈琲は文句を言われつつも多くのお客さんに受け入れられ、段々定着してゆくのだった。

それにしても、駐車場に停まる車が少なくなつた。

商業施設内の店舗が幾つも変わり、勤め先の珈琲店の経営が微妙に怪しくなつた頃、艦娘と呼ばれる女の子たちが颯爽と現れた。

それはまるで、正義の味方のようなのだ。

彼女たちならば、敵性体にも対抗出来るそうだ。

私の住む、この港町でも彼女たちの存在は噂になる。

敵性体勢力は正式に深海棲艦と名付けられ、首相が熱弁を振るつた。

これで輸入が順次再開出来るようになる。

彼女たちの勢いは強く、出現した次の年には台湾やヴェトナムやインドネシアなどとの交易が途切れ途切れながらもそれなりに復活した。

ちなみに、珈琲豆の買い付けはまさに戦争状態だつたようだ。

売りたい側と買いたい側の攻防戦は熾烈を極め、合意に達するまでが激戦だつたらしい。

店でもようやく、高いながらも海外産珈琲を扱えるようになった。

扱う珈琲が代用品になっても通つてくれている常連のお爺ちゃんが、久々の珈琲を飲んでこう言った。

「日本人はね、贅沢になり過ぎたんだよ。代用珈琲だって、慣れたらそんなに悪くはないさ。欧米にも代用珈琲を進んで飲む人は一定数いるしね。」

一杯一〇八〇円で販売された珈琲は存外普通に受け入れられ売れた。

二回目五四〇円でも、お客さんたちは喜んで水筒を差し出してきた。

なんだか戦後の風景みたいだなあ、とお爺ちゃんは何気なく呟いた。

……戦後に早くなるといういなあ。

今は戦争中なの？

……………。

戦争中なんだね。

実感が伴わないのはなんとなくこわい。

私たちは今どこにいて、どこへ向かっているんだろう？

平和に見えるセカイが実は仮初めのセカイであつて、本当は……。

この港町に鎮守府が出来ると聞いたのは、まだ肌寒い春先のことだった。

北の国ではまだまだ暖房がいるくらい天気だ。

札幌や旭川などではまだ雪が降っている。

商業施設内の暖炉は飾りだけでなく、実用品も兼ねていた。

苦難の時期を共に乗りきった若手の女の子と、休憩時間にどんな提督が来るのかを想像しあう。

威勢のいい彼女は面倒見もよく、判断力も確かだ。

それに意外と艦娘関係では事情通っぽい。

マニアなのかな？

「冴えないおっさんが店長……じゃない、提督になるって聞いたよ、姉御。」

ま、確かにうちの店長はあまり冴えない外見だ。それなりにやり手なだけだね。

何故か私を『姉御』扱いする彼女のせいで、私のあだ名は今や『姉御』だ。

最近、店長まで私を『姉御』呼びする。

「とんでもない女たらしたともつぱらの噂って聞いたけどさ、艦娘にちよつかい出してすぐに辞めさせられるんじゃないの？ あはは。」

豪快に笑う彼女。

ショートカットの髪と豊かな胸が揺れる。

大きいなあ。

少しくれ。

「しっかし、客もあたしの胸ばっか見てんじやなくてメニューを見ろって感じですよ、姉御。」

「まあ、そうなるな。」

「それ、知り合いの口癖っす。」

もう少ししたら、暖かくなるだろう。

珈琲豆の流通もましになるだろうな。

艦娘の子たちが店に来てくれるといいなあ、と思いつつ黒いエプロンを再装備して店頭で笑顔を振りまく準備に入った。

CXLV：試製機械提督T、その名は魚津伊井大蛇

試製機械提督が何体か完成したとかで、函館鎮守府でも試験運用することになった。艦娘の技術を流用して造られたらしい。

それはまさに新造人間。

軍服を着た、巨大黄色Tを頭部に備えた人造人間。

彼の名前は魚津伊井大蛇（うおついいおろち）だ。

知勇兼備にして、軍略に長けた名将。

それがこの魚津伊井シリーズだとか。

ホンマかいな。

量産化も検討されているらしいが、上手くいくかねえ？

さて、幾ら高性能な生まれでも経験が必要である。

教官の操る旧式攻撃機に、新人の乗る最新型戦闘機が太刀打ち出来ないようなものだ。

或いは歴戦の旧式改造人間に、最新鋭装備の怪人が激戦の結果敗れるようなものかな。

彼はどこから声を出しているのだろうか？

穴は無いよな。

どうやら、黄色いT部分が微細に揺れて音声に変換するらしい。

紙スपीカーみたいなものか？

これがハイテクなのか？

ナニまで装備していた。

耐水仕様だということで一緒に入浴したら、戦艦級の代物を見せつけられた。

無駄にでけえ。

「触ってみますか？」

無駄に通りのよい声で囁かれて、触らんわと伝えた。

なに、こいつらそういう性癖なんか？

運用二日目は紅白戦で演習してみた。

私の方は艦娘に任せ、魚津伊井提督の方は彼の指揮に任せる。

お互い駆逐艦六名ずつで殺りあってみた。

勝ったら全員ほつぺにチューしてみるってどうかな、と言いつわり終わる前に報奨はそれに決まった。

なあ、キミたち、おっさんのほつぺチューでええんか？

結果は当方の圧勝だった。

二回戦は艦娘たちを全員交換して行うことにした。

勝ったら全員ほつぺにチューで決まりよねと何故か厳しく念押しされ、それでええならと答えたら武士に二言無しと言われた。

おっちゃん、武士ちやうんやけどな。

二回戦も我が方が圧勝した。

あれえ？

チューチューしていたら、魚津伊井提督がこんなことは計算外ですと呻いていた。

人造提督は食事も出来るらしい。

ペーストじゃなくていいそうだ。

バリウムみたいなプロテインドリンク系でなくてええらしい。

彼の口元まで食べ物がゆくと、どういう理屈かフツと消える。

フェードインって感じかな？

わからん。私にはわからん。

原子分解していたりなんかしちやったりして。

……んな訳ないか。

彼は棒々鶏（バンバンジー）定食を旨そうに平らげていた。

私室へ寝に行く途中、魚津伊井提督にばったり出くわした。

私の両隣には龍田と鹿島。

「破廉恥な！ それはあまりにも破廉恥ですよ、提督！」

彼はなにか、とんでもない誤解をしているようだ。

単純に添い寝するだけだと三名がかりで説得した。

「毎晩、日替わりで艦娘たちと寝ているのですか？」

「おさわりは無しですよ、フフフ。」

「薄い本みたいな展開は無いです。」

「私の方からは、彼女たちを一切触っていません。」

「……………」

夜と朝の合間。

風呂に入っていたら、魚津伊井提督も入ってきた。

そこへ元艦娘たちの事務員が何名も入ってきたものだから、彼は驚愕していた。彼女たちにも想定外の事態だったらしい。

朝から騒ぎになって、大淀から全員怒られた。

あれ？

私、どうして怒られているんだろう？

魚津伊井提督も本意そうに見える。

なんだか表情が無くてわかりそうな気がしてきた。

大本営から連絡があつて、魚津伊井提督の初期艦を送つてくるという。

そう言えば、私には初期艦が送られていないよなと思つたが一応吹雪がそれに該当するのかもしれない。

だが、それだと叢雲（むらくも）辺りが臍を曲げそうな気がした。

彼のような提督だと、テキパキ仕事を進める叢雲辺りが最適な気もする。

或いは何事も一生懸命な吹雪か、寄り添うような電（いなづま）辺りが次点か。

電同様庇護欲をそそるどじっ子頑張り屋の五月雨（さみだれ）はその次辺りか。

「ハーイ、主人様！ 貴方の漣（さざなみ）、ここに見参！」

おう。

えーと。

あの提督にこの子で大丈夫なんじやろか？

キタコレキタコレと、人造提督の回りをバターになりそうな勢いでぐるぐる走る漣。その彼は大変困惑しているように見える。

魚津伊井提督と風呂場で男の付き合いをしていたら、曙たちと漣が乱入してきた。

「裸の付き合いは大事ですから……。なんですか、なんですか、ご主人様の主砲は！

漣、あつという間に轟沈しちゃうの？」

ちよつと気まづい入浴時間になった。

漣は魚津伊井提督との混浴を覚えた。

「イヤですよ、ご主人様。艦娘との添い寝は基本的合意があつたら問題ありませんし、むしろ褒美です。最優先艦娘ならば、司令官と添い寝して交流を図るのは必然行為であります。さあ、さつさと寝ましょう！」

漣は魚津伊井提督との添い寝を覚えた。

学習効果で翌朝はキラキラ光る状態だ。

やっだね、漣ちゃん。

執務室で書類仕事。

膝の上には駆逐艦。

本日は早霜である。

最初、魚津伊井提督は呆然としていた。

今彼の膝の上に漣。

同じ様式になった。

提督用の机を二つ並べて澄まし顔ナリ。

駆逐艦たちがちよこちよこやって来ては、抱きついたり背中に乗ったり肩車したりして去ってゆく。

仕事が一段落した頃、他所の金剛型が茶器をワゴンで運んできた。

お茶の時間を過ぎす。

このスコーンがとても旨いと言ったら、比叡が真っ赤になって照れていた。噂に違わぬ女たらし……もとい艦娘たらしですね、と魚津伊井提督がほざく。

大本営直属の大淀が翌日やってきて、新造人間の提督に聞き取り調査を行った。

結果、私は彼女から嚴重注意を受ける。

そして、彼はよその鎮守府へ改めて研修に向かった。

「興味深い経験が出来ました。」

何故だか私に密着して耳元で囁いた後、彼は漣にしがみつかれながら去っていった。

それから、彼の達筆な葉書が送られてくるようになった。

万年筆で書いたらしい、几帳面さがわかる筆跡の書簡だ。

そんなに親身に接した覚えもないのに、不思議なことだ。

そして。

漣からも『負けませんから！』と墨痕鮮やかな葉書を貰った。

解せぬ。

CXLVI：えらしい戦艦棲姫とおりきらん提督、九州へ向かう（前編）

九州沖縄地方には五〇を超える鎮守府と鎮守府もどきがあるそうで、大抵の鎮守府もどきは此処函館で管轄しているが、戦力的に見逃せないところで佐世保が管理している基地もある。

中には、独立独歩を貫き過ぎて訳わかんねえなコレみたいな鎮守府も存在する。九州某県にあるその基地に所属の艦娘たちは品位に欠ける面が多々あるらしい。合同作戦で戦列を組んだ四大鎮守府の面々からすると眉をひそめる程だという。『極力知らぬ振りをしろ』が彼らの合言葉だ。

佐世保鎮守府もその基地は見て見ぬ振りをしているらしい。
まさにアンタツチャブル。

或いは無法地帯。

藪をつついて蛇を出すの愚を避けている訳ね。

その提督はどうやら武闘派のようで、肉体言語を駆使して深海棲艦まで生身で倒し

てしまふとか。

それなんて世紀末覇者よ。

イヤね、現役時代に当たらなくてよかつたわ。

噂や憶測は青葉や大淀からも聞いたが、うちには関係ないと思つていた。

その日までは。

ある日、呉第六鎮守府の提督から私の提督宛に電話がきた。

恩義ある先輩から指令。

内容は内密の調査依頼。

場所は例の九州の基地。

提督の調査結果次第で、大本営が本格的な調査に乗り出すつもりらしい。

パンドラの箱にならなきやいけど。

彼らは、なにをやらかしたのだろう？

先だつて中将閣下による内々の監査は行われたらしいけど、どうにも曖昧な点が残るので再調査することにしたとか。

その艦娘たちへの意識調査を行った結果では、練習巡洋艦の香取と駆逐艦の早霜は提督を絶賛し、他は普通か微妙な結果だったそうだ。

この二名は洗脳されている？

鉄底海峡でもやったりやられたりしていたわねえ。

特に航空巡洋艦の鈴谷との評価に差違が有りすぎて、この提督はなにかやらかしているのではないかと疑いさえある。

特定の艦娘を弄んでいる？

艦娘同士の賭博が日常的に行われているとか、提督が夜な夜な私室に艦娘を連れ込んでムニヤムニヤしているとか、艦娘の給金が完全出来高制だとか、提督がローリーでモーホーで悪徳の限りを尽くしているとか、虚実併せた噂が噂を増幅させて膨らみ続けている。

このままいけば、おそらく鎮守府は閉鎖され提督は実刑を喰らうか太平洋を単独突撃させられることになると考えられる。

問題は艦娘たちの行き先だ。

提督色に染められた艦娘たちは、他所の世界に耐え得るかしら？

提督と誰が九州へ向かうか激烈な会議が行われ、私に決まった。

例の基地となんらかの問題が生じ、全員敵になる可能性がある。

実際、過去によそへ調査に向かった提督が殺された事例もある。

用心した方が賢明だ。

呉第六鎮守府並びに岡山の獄門島鎮守府が支援してくれる手筈になっている。薩摩側へ逃走することも可能にしておく。

向こうの提督がそこまでバカじゃないと思いたいが、どこにでもバカはいる。勲章をぶら下げたバカが特に問題だ。

一対多の戦いになると仮定して、島風では継戦能力に難がある。

吹雪でも難しいだろう。

他の駆逐艦でも同様だ。

いつそのこと連合艦隊で行こうという意見が出て、それは流石に妙高先生が停めた。それはやり過ぎだ。

軽巡洋艦は装甲の問題があるし、空母系は接近戦に対して脆弱な面を持つ。向こうの駆逐艦勢の戦い方はかなり荒つぽく、演習での評判は芳しくない。

ま、仮に大破しても、呉まで逃げ込めたら私たちの勝ちだ。

逃走経路は呉、薩摩、佐世保の三カ所に決定する。

この戦艦棲姫、少々の攻撃じゃ傷は付かないわよ。

必ず提督を函館まで連れ帰ってみせるわ。

第三砲塔がやられてもなんとかするわよ。

念のためにダメコンも積んでおこう。

加賀は仕事が多いし、遠距離戦に強いものの近接戦闘に難があつて駆逐艦の猛攻を許すおそれがある。

長門や妙高やネヴアダはその辺で安心出来るが、加賀と同様いなくなると鎮守府の管理が疎かになる。

結局、引き算で私こと戦艦棲姫が提督直衛の任を行うことになった。

大淀が血涙を流しながら結果発表すると、鎮守府は沈黙に包まれた。さてと。

麦わら帽子にサマードレスに現役時代の戦利品の古いグローブトロッターを用意しなくつちや。

ふふふ。

行きと帰りとで、人数が変わったりなんかしちゃったりして。

ま、最近は自重している子が多いから大丈夫だとは思うけど。

函館から青森まで青函連絡船。

およそ三時間半の船旅。

艦娘直衛の安全安心旅。

提督を見続ける艦娘群。

奥羽本線で青森から一駅先の新青森へ行き、地元の名酒や名菓などを購入して新青森から華の都だった東京まで新幹線を使って一気に行く。

まだ一日数本しか走っていないので、乗り遅れると大変。

東京に着くと、提督の友人が経営している洋食屋へ行く。

浅草は静かな佇まいを見せていた。

アジフライ定食はなかなかだった。

鮮度のよい鰯を使って揚げられ、サクツとした歯応えのフライ。タルタルソースもたっぷり添えられている。

ほくほくしたポテトサラダにしゃきしゃきした野菜サラダ。

ちよっこしただけどしつかりした味わいのスパゲティナポリタン。

熟練の技が光る佃煮。

コクのあるとうもろこしのポタージュ。

とどめは豆かん。寒天の弾力がいいわ。

パーフェクトよ、ウォルター。

そこそこ人が歩いている地下迷宮めいた通路を通り、現在寝台車で最長距離を走るサ
ンライズ瀬戸に乗った。

特等でも一等でもなく、二等寝台が私たちの愛の巣。

隣接しているのがまだ救いね。

堅い寝台で、昔々の夢を見た。

真つ暗だけど活気が見られる神戸を過ぎ、姫路に着いたのが午前五時半頃。

既に街は動き始めている。

そこから更に一時間かけて、大都会岡山に到着。

現在人口増加率の高い街のひとつだ。

清水白桃もマスカット・オブ・アレキサンドリアも堪能することが出来ないままに、広島島の福山方面へ走る山陽本線の乗降場へ向かった。

途中で、青春18きっぷに二名分の判を捺してもらう。

九州まで鈍行汽車に乗って行くのよ、と若い女性駅係員に言ったら素敵ですなと返された。

なんだか羨ましそうな顔にさえ見える。

駅構内のコンビニはまだ開いていない。

「むう、駅のうどん屋もまだ開いていないですね。あそこの昆布だしは割と好きなんです。すが。」

「仕方ないわね。」

シリアルバーでもかじろうかと思つたら、胸の大きな重巡洋艦ほい娘が白桃とマスカットのタルトを売りにきた。

怪しい。

どうにもこうにも怪しい。

しかも。

白いブラウスに青いブラ。

狙っているわね、この子。

大きなタルト二個千円也。

提督は、即決で購入した。

たぶん艦娘が懸命に焼いたタルトを車内で食べた。

なかなかおいしいじゃない。

テルモスの魔法瓶からお茶を注いで、提督に渡す。

明け方の山陽道を西へ西へ進んでゆく。

左手に時々海が見えて、とある小説の探偵気分を味わう。

「快速のサンライナーが走っていたらよかつたのに、夕方から夜限定ですか。」

「困つたもんじゃのう、磯貝警部。」

「私は磯貝警部じゃありませんよ。」

革のカバーがかぶせられた携帯用時刻表をめくりながら、提督は素早く言った。

「三原を過ぎたら、白市（しらいち）で降りましょう。白市から下関まで直行の鈍行汽車に乗り換えます。」

「白市？」

「ええ、そこで降ります。ちなみにそこは広島空港の最寄り駅です。」

「なるほど。で、下関までそこからどれくらい時間かかるのかしら？」

「およそ五時間ですね。」

思わず、ため息を吐いた。

私も随分人間臭くなった。

提督の影響だわ。

そうよ。

そうに違いない。

「提督。」

「はい。」

「岡山から例の基地まで青春18きっぷで行けっという、あんぽんたんであかんたれな指示に馬鹿正直に従わなくていいんじゃないかしら？」

「確かにそうですね。」

「提督。」

「はい。」

「提督つて、もしかして鉄道マニア？」

「いえいえ、そんなことは有馬温泉。」

「……帰りに温泉に行くのもいいわね。」

白市で降車すると素早く軽空母っぽい艦娘めいた子が近寄つてきて、たまたま二人分しか無い弁当を売ってくれるという。

もうこれ、怪しくないと思う方がおかしいんじゃないかしら？

提督はなにも疑つていない様子でお好み焼き弁当を購入した。

お人好しというか、なんというか。

そんなところがとても気になるの。

弁当の中はそば入りミックスで海の幸が豊富なお好み焼きと、玉子焼きと広島菜漬けとオマケにもみじ饅頭。

お茶は因島産杜仲茶。

うん、旨い。

お昼頃。

旧小郡（おごおり）駅の現新山口駅に着くと、マフラーの似合いそうな軽巡洋艦っぽい

子が颯爽と私たちの前に現れ、弁当を手渡してくれた。

提督の手をしつかり握り締めている。

「これ、差し入れ。じゃあ！」

ちよつといろいろと省略し過ぎよ。

小野茶と共に穴子弁当を入手した。

「あのう、いいんですか？」

「いいのいいの、じゃあ！」

見知らぬ女の子から急に食べ物飲み物を渡されると、普通びつくりするわよね。

「折角ですから、いただきますしよう。」

周囲の女学生に扮装しているっぽい艦娘めいた子たちが、こちらをちらちら窺っている。

一体どれくらい情報漏れしていて、一体何名の艦娘が今回の用件に絡んでいるのだろう？

……まっ、いつか。

もう、仕方がないわね。

穴子弁当を食べよう。

昆布でだしを取って味付けして炊き込んだご飯。

その上に秘伝っぽいタレに漬け込んで焼いたらおいしい穴子がどっさり載せられている。ふくの一夜干しに、蒸し蒲鉾に野菜の煮付け。

甘味に抹茶外郎（ういろう）と夏蜜柑ゼリー。旨し。

長い。

長い。

日本って意外と広いわ。

西日本の風景を堪能しながら、ごとりごとりと汽車は西へ向かって走る。

下関に到着し鹿児島本線に更に乗り換え、小倉に着いたのは午後三時だ。

「提督。」

「はい。」

「なにか食べときましょよ。」

「それがいいですね。」

すると。

どことなくなんとなく鳳翔に似た売り子が見計らっていたみたいはどこからともなくやって来て、丁度二つだけある弁当を見せた。

しかも売れ残りだから、ひとつ五〇〇円でいいという。

その上、お茶付きだ。

限りなく怪しいわね。

駆逐艦っぽい娘たちがうろろうろしている。

山陽本線の車内に居た子も混ざっていた。

呉……じゃない感じ。

瀬戸内海関連の艦娘が群れを成しているんじゃないわよね？

或いは西日本の艦娘が……。

いえいえ、まさか。

そんなことは無いわよね。

みんなが結託していて、提督の胃袋を掴むためにあれこれ画策……考えすぎかしら？

提督は疑わず、その娘から素直に買った。

東筑軒（とうちくけん）のかしわ飯弁当みただけど、なんとなく違う。

艦載機が飛んでいる気配を感じた。

そう言えば、北九州には東筑拳って古流武術があると聞いたことがある。

横浜発祥の崎陽拳にも対抗し得る必殺拳だとかで、こないだ佐世保の武蔵が演武を見せてくれたっけ。

蓋を開けると、其処は九州の誇りに満ちた空間。

鶏そぼろと錦糸卵と刻み海苔の三位一体な基本。

それらの上には照り焼きかしわの肉団子が六個。

奈良漬、紅生姜、牛肉と牛蒡と蒟蒻の煮付け、煮玉子、筑前煮、それと甘いうぐいす豆。

それらが隙間なくみつしり詰まっている。

これ、五〇〇円の内容じゃないわよ。

ん？

このご飯は吉野鶏めし。

鶏肉と牛蒡の合体攻撃。

大分では普通に家庭で食べられてきたという伝統料理。

だがしかしお菓子。

鶏と鶏と鶏とがかぶっているじゃない。

でもおいしい。

流石は鳳翔ね。

いえ、鳳翔だけじゃない。

これは複数の艦娘による連合の味わい。

見事也。

お姉さん、びっくりよ。

このお茶は八女茶ね。

提督は無邪気に旨い旨いと食べている。

柱の陰から覗く目が幾つもある。

あなたたち、監視しているわねっ！

提督は本当になにも気づいていないのかしら？

もしかしたら……。

小倉から汽車に乗って、夕刻にようやく九州某県のとある駅舎に辿り着く。

時刻は既に七時前。

計三路線が乗り入れ、四面八線の乗降場を有する大型駅舎は南国特有の熱気に包ま

れ、まだ暑さがそこかしこに漂っていた。

じつとりと肌から汗が滲み出してゆく。

街行く娘たちの服が透けてさえ見えた。

提督近辺をうろうろする娘さえ見える。

この時間には肌寒い函館とまるで違う。

いつの間にか、提督は地元の西瓜売りのお婆ちゃんと話をしていた。

なんだかお互いに、にこにこしている。

「しらしんけんおいしいけん、食べてみよ。」

「ほほう、これはよかもんに見えますけん。」

提督がなんちやつて方言を使っている。

結局彼は斬り刻まれた日田の西瓜を買い、私にも手渡した。

「この西瓜、おいしいですね。」

「とげちおいしいもんやけん。」

おいしいおいしいと食べていたら、周りの人たちも次々に西瓜を買っておいしいおいしいと食べ出した。

西日本だと鳥取の倉吉や熊本の植木辺りが有名だけど、日田のもおいしいわね。

提督がいないと気づいたのはその直後で、これは不味いと走りかけたら駅前商店街から呑気に提督が出てきた。

いつの間に？

電探が反応しなかった？

奈良セラの光学迷彩でも使っているの？

手にレトロな雰囲気袋を持っている。

人気店のミックスサンドとフルーツサンドが入っているという。

「もう、心配させないでよね。」

「いや、ホントにすみません。」

どこからともなく現れた某軽空母めいて見える売り子から杵築（きつき）紅茶の入った容器を買い、長椅子に座ってサンドイッチと一緒に食べる。

旨し。

いつか平和な日々がやって来て、こんな感じで提督と旅に出掛けられたら、それはどれだけ幸せなことなのかしら？

刹那の幸せを噛み締める。

太陽が完全に沈みかけた頃、桃色塗装を施した軽自動車が少し寂れた駅前にやってきて私たちの目の前で停車した。

空は赤黒くなって、鮮やかな紫色をたたえ始めている。

すらりと無駄なき所作で降車するは練達の練習巡洋艦。

その名は香取。

早霜同様、あちらの提督にすっかり心酔している艦娘。

もしかして、恋しているの？

キラキラ光ってさえ見えた。

かなり出来るわね、この女。

仕事の出来る女感が強いわ。

「お迎えに参りました。」

闇に溶けかかる風景の中、爽やかにその女は微笑みながら言った。
まるで当鎮守府には一切問題がありませんとでも体で語る如くに。

CXLVII：えらしい戦艦棲姫とおりきらん提督、九州へ向かう（後編）

「なんじゃ？ まーた、『客員提督』が来るんかいの。」
「ええ、今度は本式ではなく内々の調査だそうです。」
「しかも、艦娘ごろしじゃと？ どれえ奴が来るの。」
「艦娘ごろしじゃありません、中佐。艦娘たらしです。」
「中佐じゃなかと。限りなく大佐に近い中佐じゃけん。」
「まあ、降格くらいのことはどうでもいいことですが。」
「オレはそんな話なぞ聞いちやおらんけんおかしかね。」
「今日明日中くらいには、本式の通知が来る予定です。」

九州の暑い執務室の午後。

生暖かい風が気だるさを助長する昼食後。

南国の気温は鰻登りで、麦茶の消費量が格段に増えてゆく。

こん暑さがまだ三カ月も続くんか。

あー、北海道にでも行きてえなあ。
あつちは冷房いらずつて聞いたぞ。

けつ、羨ましい。

バカンスしてえぜ、コンチクショーめつ！

送付された書類を団扇代わりにしてパタパタあおぐ。

先日の中将の監査でなんやかやは凄いだ筈だが、また新たに監査員が来訪すると聞いた。

何故、また来る？

内々の監査とは聞いたが、まさかこの鎮守府を潰すつもりじゃねえだろうな。

ふんつ、やれるもんならやってみやがれ。

冴えない男の写真が添付された書類を机上に放り投げた。

「ところで艦娘たらしとはなんじゃ？ そげなとんでもキヤツチコピー付けられるちことはこのおつさん、絶倫か？ 每晚艦娘を取つ替え引つ替えウハウガハグツドな二四時間戦えます野郎か？」

「それなんて妄想系薄い本ですか。よその艦娘がそのたらしな提督と会って夕方話をしたら、大抵翌朝には函館へ転属願いを出すつて話ですよ。」

「なん……だと？ どんなイカサマを使っているんだ？ もしかして、次々にアヘアヘ

ウヒハさせてしまうんか？ バンコラン少佐みたいに目からビームでも発射するんか？ なんにせよおつとろしいのう。お早うからお休みまで艦娘に囲まれまくって全員バツタンバツタンと昇天させる勢いで……おい、五月雨。そいつ、ちいとハジいてこい。」

「私はそもそもアサシンじゃありません。艦娘です。第一、その提督を殺す理由が存在しません。」

「バーカ、あらゆるモテ野郎死すべし慈悲はなか。生きてるだけで大罪じゃけえ、すべからく絶滅させるんじゃ。」

「そういうことを言われているから、ちつともモテないんですよ。」

「ふん、好きに言うとれ。オレのナイスガイな魅力は小股のきれあがったハクイスケにしかわからんちゃ。」

「はいはい。」

『艦娘たらし』ねえ。

こんなおつさんがモテるなんて、どんな妄想世界な異世界アラフォー転移系チーレム小説なんだよ。

有り得ねえ、と言いたいが、提督による報告書を読むと実際ホラーだよな。

昨日まで会ったこともない提督に部下の艦娘が惹かれ、辛苦を共にしてきた筈なのに

突然翌日その娘が転属願いを出す。

提督にとつては淫夢……じゃねえ、悪夢めいた男だ。

メフィストフェレスめいてさえ見えるな。或いは笛吹き男。

奴が笛を吹いたら、ぞろぞろ艦娘が付いてゆくつて寸法だ。

大本営に在籍する知り合いからの情報によると、投降した戦艦凄姫を護衛にして奴は

ここへ来るらしい。

その写真も書類に添付されていた。

ほう、なんとはなしに陸奥つぼい。

「この戦艦凄姫はえらしいのう。」

「別に可愛らしくないでしょう。」

打てば響くように応える秘書艦の五月雨。

気のせいか、どこかムスツとして見える。

今日食べた昼飯が今一つだったのかねえ？

よそのサミーはドジっ子で可愛らしいが、あいにくうちの駆逐艦殿はそういう気質でなくなつてしまった。

あの頃は……いや、やめておこう。

それはただの感傷に過ぎないしな。

お前はすっかりオレ色に染め上げられているよなつてこないだ冗談で言ったら、卍解
且つ悪即斬な目付きで睨まれた。

女心は難しい。

「この提督はおりきらん奴じゃいう話らしいの。」

「彼は艦娘の間では人気の高い提督です、組長。」

「組長じゃなか、提督じゃけんの。」

「函館へ休暇に行つていいですか？」

「なに唐突に言うとするんじゃ、お前は。」

「函館の珈琲文化を吸収したいんです。」

「あげな不味かもんばかり飲ませといて、なにほざいちよる。」

「何気にとても失礼なことを言いますね、若頭は。函館の提督ならば、そのようなことは
言われないでしょうに。」

「若頭じゃない、提督だ。おーおー、ええ根性しとるやないか、サミー。オレの前でよそ
の提督を褒めるとはな。」

「サミーじゃありません、五月雨です。函館には同姿艦がいませんから、あちらに所属し
ても問題なさそうです。」

「……お、おまん、ま、まさか……まさか、このオレを捨てる気なんか？ こ、このオレ

をよ！ な、なあ、う、嘘だと言ってよ、バーニー！」

「しませんよ。落ち着いてください。泣かないでください。貴方のことは別に好きでも嫌いでもなんでもないですし、お給金はそれなりにいただいていますし、業務内容だけに關して言えば一切問題ありません。それだけの關係ですけどね。」

「……なんか物騒なことを言われちよる気がするのう。」

「それでは、これから『客員提督』をお迎えする準備に取り掛かります。」

「お前にすべて任すよ、秘書艦殿。ビッグママの鳳翔へ接待連絡を頼む。」

「畏まりました。」

「ま、ヤバそうな奴なら酔い潰して、ヒドい写真でも青葉に撮らせるか。」

「うわーっ、やり方がいつもながらエグいですね、こんみなみの帝王は。」

「みなみの帝王ではない、提督だ。では、そのように取り計らってください。」

そいつらは夜、やって来た。

タクシーで来させようと思っていたのだが、香取先生が気を効かせて迎えに行ってくれたのである。

頼りになる先生だ。

今もびったりとオレにくっついてくれている。

少し顔の色が赤い。

夜でも九州は暑いからなあ。

「ハツハツハ、わざわざ遠い北国から遠路はるばるご苦労様ですなあ、ハツハツハ。」

「どうも、よろしくお願いいたします。」

「よろしくね。」

「函館から監査員の役目を負った提督がとうとう来訪した。

なんだかパツとしねえ、なんとも冴えねえおっさんだな。

隣に何故戦艦棲姫がいるのかよくわからんが、暴れなきや別にかまわんな。

うちでも駆逐棲姫が春雨のフリして一緒に暮らしているし、今更ではある。

と、そこへ。

重厚極まる安来鋼の扉をガンガン叩き、着古したジャージ姿の白い髪の娘が執務室に入ってきた。

「しっつれーしまース。テイトクう、なんかネットが繋がらないんだけどお。今イベント中だから、マジで困っ……って!? げえっ！ 孔明！ じゃなくて、あ、貴女はタウラスのアルデバラン!?!」

「あらあら、お久しぶりね。貴女も投降した口なの？」

オレは叫んだ。

「ハイッ！ ハイッ！ ハイッ！ や、やあ、ハルサメ君！ ハルサメ君！ 艦娘で駆逐艦のハルサメ君！ 麻婆春雨を作るのが得意な駆逐艦のハルサメ君！ 話は外で聞こうかーっ！ 今！ 今！ 今ねっ！ 北海道からお客様が見えているから、お外でお話しよつか！ 黒衣の騎士のサミダリユーン！ もとい、五月雨君！ 中佐殿に杵築（きつき）紅茶を！ 紅茶を出してあげて！ やせうまと一緒にね！」

「テ、テイトク、ヤベエよ、マジヤベエ。つい到这里まで刺客が来ちまったよ。『あの御方』がとうとうワタシを始末スる気だよ！」

「やかましい、お漏らしまでしておって。落ち着かんか、たわけ。」

「で、でも！ でも！」

「お前が始末されようがしまいが、そんなことは正直どうでもいい。だがな。ハルサメ。いや、『春雨』。」

「は、はいっ！」

「今んとこ、お前はオレの『春雨』だ。」

「え……それって、テイトク、ワタシのこと……。ワタシ、テイトクの……。」

「いいな、間違ってもお前は今駆逐なんたらとかいう姫級じゃない。いいな、お前はオレの『春雨』だ。髪の色は薬剤強すぎて失敗したバカなオレの『春雨』だ。わかったな。」

駆逐棲姫の顔が赤いな。

緊張しているのだろう。

「テ……テイトク、そんなにワタシのことを思ってくれているんだ。……アリガトウ、アリガトウ、テイトク。……ワタシをそんなに大切に思ってくれているなんて、守ってくれるなんて、こんなに嬉しいことはないヨ。テイトクはワタシの……。」

「やかましい。いいな？ 兎に角、お前はオレの『春雨』だ。わかったら、とつとと自室に帰って自家発電でもしている。」

「う、うん。あ、あのね、テイトク。女の子に自家発電とか言わない方がいいよ。でも、今日くらい開放しちゃうおっかな。」

「ああ、モヤモヤするより、どんどんやっちゃまえ。あ、そうだ。ネットが繋がらねえなら、ネットカフェにでも行け。明日まで帰ってこなくていいぞ。ほれ、金。」

「うん、テイトクの……になった時に向けての予習と予行演習をしておくよ。で、なんであの方がいるの？」

「函館の提督の護衛だだよ。」

「へ？ そんなことあるの？」

「知らね。ま、あるんだろ。」

「あのヒトは、ワタシが知っている『彼女』とは違うみたい。」

「ふーん、まあ、そういうもんか。」

扉を少し開いて二人で執務室の中を覗くと、五月雨は自信満々で珈琲を客人たちに出していた。

おーい！

サミー！

マジカルサミー！

おんどれ、なにしてくっかんねん!?

二人は微妙な顔をしながら飲み、その後中佐はみどり牛乳をカップにたっぷり注いだ。

戦艦棲姫もじやんじやん牛乳を入れて飲んでいた。

お代わりは如何ですか？ と聞かれ、中佐は一瞬詰まった後黒糖と牛乳を要求した。

戦艦棲姫はきっぱり断った。

ま、挨拶でもさせてみつかと思つたのが大変不味かつた。

艦娘を集め、『艦娘たらし』がどの程度か図ろうとしたのがよくなかつた。

「ちんちんぬきなもつしたなあ。」

壇上の『客員提督』は、開口一番薩摩言葉で挨拶しやがつた。

意味は段々暑くなってきましたねえだが、県外の連中は先ず理解出来ん！

うちのワルどもはおおはしやぎだ。

ちんちんちんちんと連呼している。

駆逐艦どもが提督に群がってゆく。

やらかしやがるとは思わなかった。

しかも、うちのアホがねえ提督童貞なの童貞なのと聞いたたら、ばか正直に「はい童貞です。」と答えやがった。

「自家発電は？ 自家発電は週何回？」

「そりやあ、男ですからね。たまにはしますよ。」

「オカズは？ 一体、誰をオカズにしているの？」

「それは相手の名誉のために禁則事項とします。」

「誰とケツコンするの？」

「たぶんうちの子全員でしょうねえ。」

「その深海棲艦のお姉さんともするの？」

「ええ、勿論。」

あらあら、と喜ぶ姫級。

大興奮するうちの艦娘。

興奮の坩堝が始まった。祭状態になり収拾不可。騒ぎまくる駆逐艦ども。提督にひつついている。ペタペタと触り始める。他の艦種も加わりだす。冷や飯喰い系が多いな。なんだ、あの目付きは。おおいに気に入らねえ。すがるような感じだぜ。顔をしかめる香取先生。おろおろする鹿島先生。おっ、早霜は冷静だな。オレをじつと見ている。長門がスツと挙手した。頼むぜ、ビッグセブン。

「提督は駆逐艦が大好きか？」

オイッ！

なに質問してんだ！

陸奥が隣で呆れているぞ！

「ええ、とても好きですよ。」

「そ、そうか！」

鼻からオイル漏れしているぞ、長門。

両目から血涙まで流しやがってよう。

見ろ、真意は殆ど伝わっちゃいない。

お前の考えとあつちの考えは違うぞ。

こつち見んな。

そのサムズアップはどういう意味だ。

結局、そうした狂乱は数時間続いた。

函館の提督を引き連れ、鎮守府内を歩く。

五月雨と戦艦棲姫が大人しくついてくる。

明石や夕張が彼へ食い付き気味に話しかけていたのが意外だったし、『客員提督』はそれに対して普通に話をするように対応していた。

こいつ、もしかして喰えない系か？

普段のオレからの扱いに当て付けるが如くに、函館の提督へじやれつく艦娘までいる。

香取先生からは、早めに帰ってもらった方がいいと思われますと意見具申されていた。

気にしちゃいなかったが、『艦娘たらし』の噂はどうやら本当だったようだ。

呉を混乱に陥れたのは冗談でも誇張でもなかったってことか。

おもしろえ。

やってやろうじゃねえか。

途中、バスケットボールで殺し合い……じゃなくて一試合終えた駆逐艦たちとぼつたり出くわした。

いつものように賑々しいガキどもは新しいオモチャを見つけたかのように、函館の提督にまわりついた。

遠慮呵責なくペタペタと体を触ってゆく。

おいおい、ずいぶんとフレンドリーだな。

「おっさん、体を鍛えてねえなあ。」

「ケツも張りがねえぞ、おっさん。」

「二の腕がプニプニしてダメやん。」

「なあ、おっさん。駆逐艦たちといつも一緒に風呂に入っているってホントか？」

なに？

こいつ、艦娘と混浴しているの？

すると、戦艦棲姫が口を開いた。

「そうよ、私も一緒に入るわ。他の艦種も当然のように入るし、函館では当たり前のことよ。」

「ヒュー、やべえな。マジでやべえ。」

「あなたたち、これから入浴するの？」

「そうさ、ひとつ風呂浴びてオパ―イの比べっこをするのさ。」

「うちの提督と一緒に入る？」

「やべえ、マジやべえよ、この深海棲艦様はよ。」

「なになに、おっさん、あたしたちと一緒に風呂に入りてえのか？」

「別に構わないよ。」

「あの、皆さん、こんなおっさんと一緒に風呂に入っではいけません。」

「あら、いつもは一緒に入っているじゃないのよ。」

「それはあなたがたが乱入してくるからでしょう。」

「なになに、おっさんが風呂に入っているとこへ艦娘たちが乱入するのか？ マジやべえな、その鎮守府。」

「なんだ、慣れてんのか。じゃあ、おっさん、一緒に風呂へ入ろうぜ、いろいろ話を聞いてみたいしな。みんなも呼ぼうぜ。」

『一緒に風呂に入ってはいけません』ってなんかお父さんみたいだな。」

「決まりだ、おっさんはこれからお父さんだ。お父さんなら一緒に風呂に入っても問題ない。そうだよな、司令官。」

「あ、ああ？ そ、そうなるのか？」

「じゃ、行こうぜ！」

「他の子も呼んでくるね。」

「よーし！ お父さんの相棒をみんなで見よう！」

「あの、その、ちよつと皆さ……提督、申し訳ありません。」

『申し訳ありません』って言葉、建造されてから初めて聞いたぜえ、お父さん。」

「お父さん、オパーイ見慣れてんだろ、オパーイ。ちよつと大きさを覚えてくれよ。」

「こいつ、生えてねえんだぜ！」

「お前だつて生えてねえだろ！」

「お父さんはボーボーだよな。」

「密林の中に椰子の木が生えているのよ。ココナッツは二つ生えているわ。」

「椰子の木鑑賞作戦開始だぜ！」

「ねーねー、あたしのオパーイ、大きくならないかな？」

「提督に触ってもらったら大きくなるわよ。私もそうやって大きくしてもらったから。」

「流れるように嘘を吐かないでくださいよ、戦艦棲姫さん。」

「あら、女って好きな男のためなら胸を大きく出来るのよ。」

「ヤベエ、マジ、ヤベエ。お父さんに触ってもらったオパーイはみんな大きくなるのか？」

「ええ、そうよ。ただし、毎日触ってもらおうことでちよつとずつちよつとずつ大きくなるから、すぐにすぐに大きくなる訳ではないのよ。」

「でも、そのオパーイはお父さんが触ったからなんだろう？」

「ええ、これが証拠よ。」

「パネエ！ お父さん、パネエ！」

「マジかよ！ じゃあ一緒に風呂に入るしかねえじゃないか！」

「よし！ 試してみるべ！」

「ズラズラ、これで重巡洋艦のお姉ちゃんたちに大きい顔はさせないズラ。」

「べ、別に巨乳には興味ないけど、函館の同姿艦も普通にあんたと混浴しているのよね。じゃ、じゃあ一緒に入るしかないわ。いいわね、行くわよ。」

「叢雲ちゃん、顔が赤いズラ。メスの顔をしているズラ。エロいことを考えているに違いないズラ。」

「いちいち名前を出さないでよ、吹雪！」

なんだこれ。

艦娘たちが、どこからともなく集まってきた。

駆逐艦たちに捕まり、風呂場へと行く函館の提督。

もうこれ訳わかんねえな。

後程それを聞いた長門が、大いに悔しがっていた。

「何故すぐに私を呼んでくれなかった！ 同志提督！ タヴァリーシチ！」

知らねえよ。

歓迎会をやったら、会場で『客員提督』の元へ行く艦娘が続出した。

何故視察の監査に来た相手の歓迎会が当然のように開催されるんだ？

あれ？

間宮がなんだか張り切っている。

なんでだ？

艦娘が奴の周りに群がっていた。

特に鈴谷が蕩けた顔でひつついている。

メスの顔をしていやがるな、あの女は。

アイツ、オスのおいに敏感だからな。

他にもそういう艦娘がちらほらという。

フェロモンかなにかを発しているのか？

うわーっ、アーンまでされてやがるぜ。

べ、別に悔しくなんかないんだからね。

長門よ、そんなに恨めしそうに見るな。

抱きつかれたりオパーイを押しつけられたりしているがな、あの『客員提督』は別に

特別喜んじやいないぞ。

流石はアラフォー童貞。

エクストリーム童貞だ。

おい、長門。なんでこっちに来る。

知らねえよ。

お前も真似すりやいいじやないか。

泣くなよな。

お前は天下のビッグセブンだろう。

函館のビッグセブンに笑われるぞ。

さつき、『客員提督』とかなり多くの艦娘が混浴したらしい。

香取先生の報告で知ってびっくりした。

それで湯上がりの艦娘が多いのか。

ビール瓶を持った清霜とリベツチオが陛下になにか話しかけており、陛下はそのかんばんせを赤く染め上げ……。

こらっ！

キヨシ！

リベツ！

てめーら、なに陛下にのたまってやがるんだ！

オレを地獄の断頭台に直行させるつもりかよ！

慌てた雰囲気函館の提督が陛下の元へすっ飛んでいき、英語でなにか陛下に話しかけていた。

あいつ……英語が喋れるのか？

周囲の艦娘がポカーンとしている。

アイオワやサラも交えて英語で会話する『客員提督』。

陛下がにこにここと笑っておられる。

野郎、得点稼ぎしやがって。

オレの陛下によろ！

英検二級だからってナメんなよな！

『客員提督（ゲスト・アドミラル）』の『粽（ちまき）』は『ご立派様』やったで。」

「龍驤……いつの間に背後に。」

「小宇宙（コスモ）を一時的に不活性化させただけの話や。聖闘士なら出来て当たり前のことやろ。なに今更ゆうとんねん。」

「お前……奴と混浴したのか？」

「せやで。キミかて、魅力的な女の子が『柏餅』を生で見せてくれる言うたらヒョイヒョイついてくやろ。同じこつちや。」

「いや、その理屈はおかしい。」

「キミはよく脱ぐ癖にペニペニを見せてくれんしな。」

「誰が見せるかよ。それに女の子がペニペニ言うな。」

「インケーの方がよかつた？」

「そういう話じゃなかとよ。」

「これからが大変やで。」

「なして？」

「あの子たちはごく間近で『粽』の本物を見たんや。しかも、建造されてから初めての代物やで。うちも航空駆逐艦として入浴し、すぐ近くからマジマジと見たわ。いやはや、思わず拜んでもうた。ええなあ、函館のウチ。あんなんが日常的に見れるなんて。」

「おいこら、なにやってんだ、軽空母。」

「ちなみに、男に興味のある艦娘はほぼ全員入ったなあ。みんなマジマジと『椰子の木』を見とったで。ほんで、今後、キミはなにかにつけて『粽』がどうのこうのと言われ、あの提督とあれこれ比較される訳や。」

「それはすこぶる厭な話だな。」

「キミの大好きな浜風ちゃんやけどね……。」

「ん？ オレの浜風ちゃんが一体どう……？」

「ねーねー、テイトク！ テイトクの相棒ってお父さんのより大きいのっ!？」

大事などころでおバカの清霜が叫んだ。

一斉に艦娘たちの視線がオレの相棒へと注がれる。

「ここは一発、バーンとやっておこうか。」

「ふん、比べるまでもないな。」

「それは勿論、こちらの提督の方が大きいでしょう。」

『客員提督』が即時にフオーローしてくれたが、会場の喧騒はますます拡がって收拾が付かなくなる。

なんだかメスのおいでむせそうだな。

ギラギラした目付きの艦娘が目につく。

結局、奴がそろそろお開きにしましょうと言ったのでなんとか無事に解散出来た。

オレの浜風ちゃんが……まさか……イヤ、そんな筈はなからうて。

モヤモヤする。

いや、まさか。

その時、駆逐艦有数の巨乳艦娘がオレの目の前を通りかかった。

「あ……は、浜風君。その、元気かね？」

洒落たことを言えぬ自分自身が恨めしい。

オレは……この浜風ちゃんと……その……。

「え……はい、え、ええ、大丈夫です。」

何故か、顔が赤い。

浜風ちゃんがオレの下半身を凝視している妄想に駆られた。

いやいやまさかな。

浜風ちゃんはオレのことをどう……。

嗚呼、オレの天使が翼を広げて飛び立ってしまった。

いつか……きつと……オレは浜風ちゃんを……きつと……。

ん？

小宇宙を感じて振り向くと、浜風ちゃん同様に赤い顔をした早霜がいた。

鼻からオイル漏れしていたのでポケットからハンカチーフを取り出して拭いてあげたら、何故か余計にドバーツと漏れて失神してしまった。

もしかして熱中症か？

彼女をお姫様抱っこしながら医務室へ連れていく。

どんどん体温が上がってゆくようで、少し焦った。

身体中汗だくだ。

時折、ピクピクしている。

吐息が漏れ、女を感じる。

いやいやまさか。

この子も奴に当てられた？

これが艦娘たらしの力か？

とつくにびしよびしよだ。

代謝機能がやられたのか？

空調は効いていた筈だが？

後で日田の西瓜でも食べさせないとな。

ハアハア言っていたが、受け答えは普通に出来ていたのでたぶん大丈夫だろう。

スカートにシミが出来ている。

早く着替えた方がいいだろう。

「何時でも受け入れ準備万端ですから。」

ベッドに寝かしつけた時、そう囁かれた。

意味はよくわからないが、兎に角艦娘としての覚悟があるということなのだろう。

立派なものだ。

よくもまあ奴のフェロモンに耐えたな。

彼女の瞳が潤んでいるようにも見える。

少し気弱になつていられるのかもしれない。

大丈夫だ大丈夫だ、と頭を撫でてやる。

ハアハア言っていた彼女はやがてピクピクしだし、なんだかぐつたりしたように眠り

についた。

丁度医務室の前を香取先生が通りかかったので、着替えを頼んでおく。

さてさて、夜更けだ。

接待の時間の到来だ。

中佐を墮落させよう。

撮影係として自発的に彼を撮影していた青葉が、何故か大興奮している。

「いい写真がいっぱい撮れましたよ。」

「そんなに撮ってどうするつもりだ？」

「生写真を販売したり、小冊子を作って今度の漫画祭で売り捌いたり、写真集の一部にしたりします。」

「お、おう？ あ奴にそんなに需要があるのか？」

「ええ、司令官の想像の遥か斜め上くらいには。」

訳がわからん。

誰が買うんだ？

まあ、いいさ。

奴を接待する。

うちの娘で落とそう。

それで万事片が付く。

この狂乱も直に収拾させる。

うちの艦娘は転属させない。

絶対にだ。

鳳翔・ザ・ビッグママなら、上手くやってくれるだろう。

当基地内に存在する、夜の店。

酒類などを提供する、風営法に則った決して法に触れていないケンゼン店舗。

その名は倶楽部H O — S H O W。

ミストレスなオーナーである軽空母鳳翔の名を冠したエグゼクティブ且つハイソサエティな空間で、最高級の寛ぎを貴方にお約束します。

「大人三名、内一名はグラマー。」

「フーツ……奥を空けてあるから、そこに座ってな。」

「ほ、鳳翔さん？ それに喧嘩煙管？」

「うちの鳳翔とは随分雰囲気が違うわね。」

ビッグママはいつもの様に武器になりそうな程異様に長いキセルをトントンと叩き、何故だか中佐をじっと見詰めた。

頬が染まつている？

ま、まさかな。

彼女は中佐の後ろにいるグラマーをギョツとした面持ちで一瞬見つめたが、すぐに興味を失った体で再び稀少なキューバの葉をキセルに詰めて火を灯し、紫煙を燻(くゆ)らせた。

彼女から鋭い舌鋒が来ないなんて珍しい。

「ハツハツハ、中佐殿。まあ、楽にしてくださいよお、中佐殿お。」

「は、はあ……。」

新橋辺りで夕方何人も見かけそうな感じの中佐は、意外と速やかに鎮守府の視察を終えて特に問題ないですねと太鼓判を捺してくれた。

「鈴谷さんともそれなりの関係を築かれておられるようですし、降格処分や減給処分は撤回の方向性で報告しておきます。」

「ありがたや、ありがたや。」

「その……鈴谷さんや夕張さんにあまり激しいプレイを要求されない方がいいと思います。彼女たちは確かに人間ではありませんが、だからといってあんなにマニアックな行為は……。」

「ちよ、ちよいお待ちあれ！ なんの話です!？」

「提督が夜な夜な艦娘を私室に連れ込んであれこれされている件です。まあ、性欲を律するのは意外と難しいことですから……。」

「あの！ あの！ 我が双魚宮は薔薇に包まれていて、あらゆる艦娘を通しません！」
「では野外や工廠でされているのですか？ 確かにここは人里離れた場所ではありませんが、夜の歌声が屋内へ聞こえる可能性を考慮しませんと。それに、関係のあるなしで待遇面に大きな開きを設ける行為は感心出来ません。」

「中佐殿！ 中佐殿！ そのお話は明日朝にでも！」

「致し方ありませんね。」

「提督、いいのかしら？」

「艦娘の教育強化と倫理道徳強化については、香取さんと鹿島さんに伝えておきました。」

「ちいとヤンチャな面はありますが、根はいい奴らなんですよ。」

「ええ、風呂場では少々困りましたが。」

「えっ？ やられたんですか？」

「いえいえ、そういう訳でもないんですがね。性教育も実施された方がいいと意見申し上げます。あのままではかなり不味いですよ。あれでは退役後、確実にダメンズに騙されます。」

あいつら……なにしやがった。

「いらつしやうい。……つて、あらあら？ 提督じゃない。」

「おまんは……峰不二子？」

「陸奥よ。さつきも会ったじゃない。」

オレたちの席に来たのは、倶楽部H O—S H O Wでも一、二を争う売り上げ上位ランカーの陸奥！

もはや、指名出来るだけで奇跡と呼ばれる

伝説の修羅が来てくれたっ!!

これで勝つる！

「ちよつと中佐殿、すみません。おい、陸奥。こつちや来い。こつちや。」

「なによう？」

なんかちよつち透けとる服を着た陸奥の肩に手を回し、オレは小声で今回の無敵素敵接待ミツシヨンについて説明する。

オーダーはただひとつ。

兎に角奴を楽しませろ。

気持ちよく吞んでいただき、明日の話が円滑になる下拵えをするのだ。

「まあ、そもそもそういってお仕事だから別にいいけ……あ、そうだ。じゃ、ひとつ私のお

願いを聞いてくれない?」

「なんだ? 金か? 休暇か?」

「そうねえ、休暇もいいわね。函館なんて素敵よね。」

「……む、陸奥? お、おま……。」

「心配しなくても大丈夫よ、提督。だから、泣かないで。今のところ、転属するつもりは特にないから。でね、実は今面倒を見ている子たちと小旅行に行きたいなって思つて計画中なんだけど、予算がちよつと……ね。補助金があつたら嬉しいなあつて思つてみたりなんかしちやつたりして。」

「許す。ただし、成功報酬。」

「ありがとう。商談成立ね。」

陸奥は大抵の男の一部をカチンコチンにしてしまうこと必至な小悪魔ウイंकをオレにかまし、中佐殿にピタリと密着した。

おいおい、初っぱなから全開かよ。

少し透けたブラウスは胸元が微妙に開いて見え、凝つた刺繍が施された勝負下着が男を惑わせる。

流石は眩惑の陸奥よ。

あれで堕ちぬ男はおるまいて。

「初めまして、陸奥です。北海道からわざわざ来てくださったのよね。」

「ええ、函館から。さつきは長門さんの介抱で大変でしたね。」

「ええ、ええ。姉はね、時々暴走しちゃうの。」

「うちの長門教官も真面目ですが、たまに暴走します。こちらは陸奥さんがおられるから、抑えが効いていいですね。」

「あらあら、函館に行っちゃおうかしら。」

「ええ、是非ともお越しく下さい。ご飯は鳳翔さん間宮さん李さん鹿ノ谷さんの四名で普段切り盛りしていますが、とてもおいしいですよ。それに函館鎮守府は多人数宿泊にも対応していますから、事前連絡いただければ、お部屋をご用意いたします。」

「へえ、いいわねえ。函館っていうと、五稜郭があるところだっけ?」

「ええ、そうです。トラピスト修道院やトラピスチヌ修道院、何軒もの洋館、少し離れていますが大沼公園もいいですよ。市内は路面電車が走っていて、エキゾチックな街並みを堪能出来ます。」

「今度面倒を見ている子たちと小旅行に行きたいんだけどね。」

「それなら、尚更お勧めですよ。宿泊費が浮きますし、食事代だけ出していただけましたら宿泊費は無料です。函館バスと提携していますから、市内観光にも対応出来ますよ。」

「それは魅力的ね。」

……あつれー？

先ずは陸奥の絶妙な間合い取りから始まる地域性の話題から、互いの出方を窺いつつ艦娘ごろし……じゃなくて艦娘たらしの本領を見せてもらおうと思っただが……。

なんだこれ。

中佐が旅行会社的な営業トークをして、陸奥が旅行予約しそうな感じになってきている。

「あつ、ごめんなさい。小旅行の件で夢中になっちゃった。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。函館に電話してもらえば事務方でも対応しますので、お気軽にお電話ください。」

「ええ、みんなで寄らせてもらうから、よろしく頼むわね。」

「お任せください。」

オレは必死に陸奥へ何度も何度もウルトラサインを送るが、エースキラーな戦艦棲姫が巧みにそれらを打ち消している。

陸奥。

陸奥。

気づいてくれ。

オレの気持ちに気づいてくれ。

あ、やつと気づいてくれたな。

「あら？ ごめんなさい、なにを吞まれますか？ 今日のお勧めはね、シングルモルトで無冷却濾過且つノンカラーなハイランドのウイスキーがあるの。それも二五年ものよ。」

「それは稀少品ですね。でもお高いんでしょう。」

「ドン・ペリニオンよりは、ずっとお安いわよ。」

「ではシングル一杯だけ。先ずはそのままいただきます。そして、加水。その後氷を入れましょうか。」

「いいわね、そのやり方。」

「人の受け売りですけど。」

「こないいお酒を炭酸割りして呑む人もいるのよ。」

「おいしければ、まあ、いいんじゃないですかねえ。」

陸奥と艦娘たらし。

そのやり取りは先程まで旅行会社社員と相談者の趣（おもむき）を見せていたが、今はおいしいものに関する高度な情報戦の様相を呈していた。

ナインテイルを知っているのかよ、この中佐。

完全に仕事を忘れたかに見せている陸奥が時折思い出したかのように高級酒を勧め

れば、中佐はそれをのらりくらりとかわしつつもそれなりの酒を頼んで陸奥に不快感を与えていない。

ラムでも二〇年ものがあるなんて、初めて知った。

「サービスだよ。」

ビッグママが、ぷりっぷりの刺し身の特盛りを載せた大皿をごとりとテーブルに置いた。

サービス？

ビッグママが？

「今日の煮物はどれも力作さ。」

「ええ、いずれも素晴らしくおいしいです。」

「そ、そうかい。足りなくなったら言いな。」

「ありがとうございます。」

「次は焼き鳥特盛りを出すよ。」

なんだ？

なにが起きている？

中佐の気配り力に驚く。

接待の場なのに、オレの支払いに気遣う気配すらそこはかたなく感じさせる。

この男、かなり出来る。
しかも、慣れているぞ。

まさに企業戦士だなや。

ホントに軍人なのかあ？

……実は取引先企業の人だったってオチは付かないよな？

「あらあら、ちよつと前をぐめんなさいね……。」

アイスペールを取ると見せかけ、陸奥が奥義を繰り出す！

中佐の腕に自らの胸を密着させ、ナチュラルにブラウスのボタンが外れるようにした。

彼女の胸元の大輪が零距离で中佐に向けて花開き、その弾力を確実に伝える。

虎砲！

童貞殺しの必殺技！

並みの童貞ならば、主砲の暴発すら有り得る！

やったか？

「いえ、大丈夫です。」

平然とした顔の中佐。

なん……だと？

効いていない？

この基地最強セクシーバイオレットナンバーワンの陸奥の虎砲の直撃を受けて、無傷で耐えきっただと!?

顔色が少しも変わっていない？

流石は艦娘ごろし……じゃなくて艦娘たらし、陸奥級美女にすらまるで鼻の下が伸びない豪傑ぶりは伊達でなか。

……更には中佐の隣のグラマーが既に同様のことをしている、だと!?

この男、なんとという耐久力なのだ!?

これが艦娘たらししたるための余裕!?

グラマーがこちらを流し目で見ろ。

「あ……スイートバナニラストアウトをもう一杯注ぎましょうか？ それとも知心剣のロツクで?」

「そうね、さつき呑んだ鷹来屋の特別純米酒のぬる爛がおいしかったから、今度は冷やでいただくかしら。」

「あ、はい、すぐ用意します。これ、おしほりです。」

……なんでオレがサービスマスター提供者になっているんだ?

まあ、暴れてハリケーンミキサーやらグレートホーンやらをぶちかまされても困るだ

けだから、それはそれでかまわないのだが。

モツ煮や筑前煮や肉じゃがといった煮込みものが主体の惣菜は、相当気合いが入っているように見える。

ここでこんな料理が出たのを見たのは初めてだ。

ビッグママがちらちらこつちを見ている。

まさか……いやいや、そんな筈などない。

こうして、中佐殿は深夜零時になる前、今宵はここまでにいたしましよと僅か二時間ばかりの歓談でこの場を切り上げ、ビッグママになにか手渡していた。

彼女のあんな無邪気な笑顔は久々だ。

終始、中佐は紳士的な態度を崩すことなく、夜の蝶はそつと羽を閉じる。

その夜、風呂に行った中佐が再びうちの艦娘たちと遭遇したことを知ったのは、彼らが帰投した後のことだった。

朝から妙にキラキラした連中が多かったので聞いてみたら、そういうことだった。血涙を流してオレに愚痴を言うのは面倒だからやめてくれ、ビッグセブンの長門。

中佐殿とグラマラスアマゾネスが去った後の気だるい昼下がり。

いつもの最強大冷房の執務室。

「結局、艦娘たらし言うと思ったが、誰も転属したいとは言わんかったな。ウハハ。勝ったぞ、オレは勝ったぞ。ハハハ、噂なんか当てにならんちゃ。」

「まあ、あくまでも噂でしたからね。」

歓迎会や風呂場の件では少し焦ったが、蓋を開いたら特に何とはないことだった。

うちのおバカ娘たちは、相変わらず虫捕りだのヤキュウだのをやっているし……。

「そう言えば。」

「ん？」

「転属願いが来ていますよ。」

「えっ？ はっ？ ええっ？」

一瞬、意識がブラックアウトしそうになる。

まさか、鹿島先生じゃないよな。

函館にも同僚艦がいるしな。

でもよ。

最近は減ったが、鹿島先生は割りと定期的に転属願いを出すんだよな……。

「カ、カッシマーか？ 妹さんの方か？」

この身が震える。

艦娘たらしの力が、発揮されてしまったのか？

何時だ？

何時やられた？

歓迎会の時か？

風呂場の中か？

それとも客室に連れ……。

「いえ、お姉さんの方です。」

「香取先生が？ お、おい、冗談だろう？ はあっ？ マジか？ マ、マジ……か、香取

……先せ……行かな……。」

「提督？ あの、提督？ て、提督？ 提督？ しっかりしてください！ 誰か！ 誰か

！」

五月雨の叫びを遠くに感じながら、オレは無明の闇に包まれた。

気がつくくと、長椅子に寝かされていた。

「お目覚めですか、提督。」

エレガントで眼鏡で素敵な香取先生が膝枕してくれている。

ああ、いいにおいだ。

なんて落ち着くんだ。

嗚呼、これが現実だったらどれだけいいのだろう。

「これは夢なのか？ 夢だったら覚めないでくれ！ エレガントで知的で素敵な香取先生がいなくなったこの鎮守府で、オレはともやっつけていける自信がない！」

「そこまで信頼していただきましてとても光栄ですわ、提督。」

「か、香取先生？ 本物ですか？」

「ええ、貴方だけの香取ですわ。」

周りを見渡すと、しおれた五月雨に心配そうな顔の早霜とハルサメがいた。

「申し訳ありません、提督。小粋なサミダレジョークのつもりだったんですが。」

「ダメですよ、五月雨さん。私の提督にそんな冗談を言つては。この香取、提督のためならば何時でも火の中水の中なのですよ。」

「五月雨。」

「はい。」

「金剛じゃないが、時と場合をもっと考えろ。特に、こういう時にそういう笑えないジョークはやめろ。いや、やめてくれ。それはオレに効く。今の言葉で、オレは他所の提督たちの気持ちを追体験した気分だ。手塩にかけた艦娘を奪われる気分がどんなものかよくわかったよ。」

「ていつつす、鈴谷だよ。ん？ 提督どうしたの？ ははーん、香取先生にそんなことをさせるなんて、それ……。」

「天馬流星拳！」

「グヘアーッ！」

「通常運転に戻りましたね。」

「でもそんなところも素敵。」

「ワタシも親密化を図ろう。」

「そうそう、陸奥さんから伝言を預かっていますわ、提督。」

「なんでしよう、香取先生。」

「先程、陸奥さんを含む二〇名が函館へ小旅行に向かいました。」

「へ？」

「提督が昏倒されていきましたので報告が遅れました。申し訳ありません。」

「いえいえ、それはいいんですよ。」

……夏はまだ当分終わりそうにない。

その日の昼食。

香取先生と早霜とハルサメから、粥をアーンしながら食べさせてもらった。

私の名は戦艦棲姫。

函館の提督に恋する、ちよっこし高火力のダイソンガールよ。視察の後に鉄輪温泉と別府温泉へ行き、有馬温泉へも行った。

神戸で九州の陸奥率いる艦娘たちと落ち合い、共に洋上から函館へ向かう。

この基地の艦娘たちはいささかヤンチャに生きている。

目があつたらすぐメンチを切るような娘たちだったが、慣れると案外可愛いものだ。提督もこのような鎮守府は初めてだったらしい。

「そもそも私は冴えないおっさんですからね。普通はこんなものですよ。」
普通の顔でそう言っていた。

頭のわ……ええと、直情径行な感じのする彼女たちとは先ず歓迎会で仲よくなった。風呂場は正直大変だった。

あんなに彼女たちが明け透けだとは思わなかった。

でもまあ、お父さんお父さんと駆逐艦たちになつかれている提督は新鮮だった。ちなみに私がお父さんと言ったら、真顔でやめてくださいと言われた。解せぬ。

変に提督にちよっかいを出す感じではなさそうなのがいい。

けど少し気になるのは、鹿島。

副引率役のお色気系練習巡洋艦。

私の提督が、かなり親身になって彼女の話を聞いている。

「ねえねえ、お姉、あれやって！」

「あれやって！」

「函館に着いた時、駆逐艦の小娘たちから要望があつた。
では逝くわよ。」

「ハリケーンミキサー！」

「ぐはあ！」

「グレートホーン！」

「あべし！」

「落ち着け、小僧ども！」

「ひでぶ！」

どうやら当分賑やかになりそうね。

CXLVIII ; 惑乱のセルシウス

惑乱のセルシウス。

鳥取砂丘の砂嵐に隠された神秘のバベルの塔に住むヨミ様の忠実無比なる臣下。外見は怪しげなアラブの大富豪。

その実体は生身で深海棲艦に対抗し得る、選ばれし屈強の高速拳戦士。

彼は配下たちに指示を飛ばした。

それはローマ教皇からの勅命を兼ねた、人類反撃作戦『レコンキスタ』の一環。

欧州は深海棲艦へ牙を剥くのだ！

大攻勢をかけ、覇権を取り返す！

合従連衡或いは呉蜀連合軍じゃ！

これこそ現代の十字軍で聖戦よ！

ヨミ様とあの方のために今こそ！

それは矛盾の気持ちに一切非ず！

敬愛と親愛と情愛の混成仕様也！

「日本への原油輸送作戦を開始する！」

勇壮な警察音楽隊の調べに合わせ、複数のタンカーと護衛艦隊がサウジアラビアから出港した。

タンカー群と護衛艦隊が進む海面下では、人の形を模した大型兵器が潜航している。

サングラスにマントのセルシウスは遙か東方に目を向け、えらく渋い声で独り呟く。

「私の使命は泰作君を守ること。兎に角守ること。なにがなんでも守ること。待っていてくれたまえ、泰作君。今すぐにも君に会って……私は……私は……君を……。」

半ズボンのよく似合う少年を想い、中年男は物思いにふける。

時に震え。

時に涙し。

そのほつそらとして少女に見紛うことがなくもない、まだ声変わりしていない少年を思う。

漢の顔で時に咽（むせ）びながら。

狩人の目で海面を時に睨みながら。

航海中、何回も深海棲艦の攻勢を受けた船団はしかしたただの一発も船体にその攻撃を

通さなかつた。

セルシウスの異能の力によつて認識をねじ曲げられた彼女たちは、その能力を十全に發揮出来なかつた。

深海棲艦たちは明後日の方向に砲撃を加え、明後日の方向に雷撃し、なにもない泡立つ波間に急降下爆撃と機銃掃射を行わせた。

あまつさえ、多大な戦果を挙げたとさえ思わされている。

人型の異形の中には居もしない深海提督に褒められ、上気し浮かれて挙げ句に頬を染める娘まで現れた。

その姿がどことなくなんとなく函館の提督に似ていないこともなかつたのは、おそらく唯の偶然だろう。

攻守双方に被害を出さぬまま、彼らはインド洋を越えた。

大船団は無事日本の港へ到着する。

小学生高学年の男の子を想うおっさんの執念によつて、原油輸入大国日本は一息つくことが出来た。

輸入が無くては、おそらく人口が三分の一以下に激減するであろう東洋の大国。モノを使い捨てない方向の人もいるが、それでも膨大なゴミを日々生み出す国。

逼迫の日々が人々の認識を変え出し、バブル時代めいた発言は忌避されている。

それでも懲りない面々は高級商標や海外旅行の話などを時々行い、周囲から大いに煙たがられていた。

「やあ、泰作君。私の泰作君。元気だったかね？ さあ、一緒に買い物へ出掛けようじゃないか。大森のタイシン百貨店はとうだね？ あの昭和を今に残すひなびた雰囲気は好きだね。それと後で銭湯にも行こうじゃないか。裸の付き合いはとてもとても大事だよ、泰作君。」

昭和のスーパーみたいな地域密着型百貨店に寄って愛しい少年に高級万年筆を買い与えた後、彼らはナポリタン大盛りサラダ付き味噌汁添えとミックスフライを食べた。

とどめはソフトクリーム。

ここは譲れません。

夕方、日が落ちてゆき互いの顔が見えなくなりつつある頃にセルシウスは泰作少年を伴って銭湯へ向かった。

ガス代電気代が馬鹿にならない今日この頃、銭湯は大賑わいだ。

小さな息子や娘を抱えた若い父親が子供たちの世話にでんてこ舞いし、近所のおつきんらしき中年が慣れていない感じの若者へ密着し丁寧に銭湯の作法を教えている。

その手つきはやたらに慣れていた。きっと教え上手なのだろう。

中学生くらいの大人しそうな少年になんやかやと密着しつつ、親しげに話しかけている欧米人たちもいる。彼らは揃いも揃ってマグナム使い。

イタリア人みたいな顔の彫りの深い男がなにやらいろいろ驚いていたが、彼らはケロヨンの風呂桶で湯を流して湯舟に浸かる。

嗚呼、極楽はここにある。

セルシウスはまるで実の子を愛する父親のように慈愛深く泰作少年を堪能し、膨大な土産を手渡し、様々なモノを買い与え、新たな商売のために函館へ向かった。

青地に白抜き紋章。

蔦唐丸に板倉九曜。

蔦の絡まるような丸に小さな巴紋が九つ。

もうひとつの紋章は五稜郭に熊紋。

単純化された要塞に熊の掌の形が白抜き。

どちらも函館鎮守府の公式紋章だ。

現在、五大鎮守府や大型泊地など以外で独自の紋章を制定することが流行っている。既存の家紋ではなく、独自の紋章。

ちよつとした違いが多様性を生む。

戦国時代のような群雄割拠の如し。

紋典を参考にしつつ、制定を急ぐ。

早い者勝ちだからだ。

函館鎮守府の公式サイトで新しい紋章が随時発表されてゆく。

中の人たるアルトリアに隙はなし。

函館の提督だが、セルシウスには凡庸な中年にしか見えない。

彼の隣にいる姉畑提督の方が余程危険に見えるくらいだった。

姉畑提督はまだ艦娘を所持しておらず、研修中の身分である。

彼らは道南に現れる罫（ひぐま）対策の件で話し合っていた。

ウコチャヌブコロとはなんだろう？

人口減に加え生息圏も狭くなったため、野生動物の獣害は深海棲艦侵攻以前に比べてかなり深刻化している。

ただ殺せばいいという訳にもいかない。

餌付けするのは更によくない考えだが。

一時的で気紛れな施しは状況悪化原因。

本州四国九州沖縄でも北海道同様の獣害報告がある。

国もようやく重い腰を上げ、若年層や女性への猟銃所持を援助する方向性へと動き始めていた。

都内各市で動物被害が相次いだ件や、猟友会からの訴えが無視出来なくなつたためでもあつた。

鉄砲使いの多くが老齢化し、撃ち倒せる者が近隣にいない場合の被害は戦前戦中の時代に戻ってしまう。

それは近代国家にとって、絶対にあつてはならないことだ。
もはや昭和ではないのだ。

被害者が出る前に追い払い、それが叶わぬならば撃ち倒す。
空虚な理想論ばかり振りかざす連中をどうするかが問題だ。

渋谷のど真ん中を搬送用トラックから逃げ出した豚が遁走した時は大騒ぎになつた。
スクランブル交差点を走る牝豚。

若き娘の反乱。

それはまさに豚走。

公共放送を自称する放送局本拠地の近くだったのとたまたま渋谷で生放送していたため、その獣は一瞬にして全国津々浦々で有名になった。

彼女は二週間の巧みなる逃走の末に捕獲され、現在では旭川の旭山動物園で二番目の人気者となっている。

二頭の子熊を熱視線で見詰める姉畑提督。

それはセルシウスが泰作少年を見詰める時の視線に負けず劣らず熱い。

子熊は曙と霞が連れていたが、どちらも穏健な感じの獣だ。

無邪気に遊んでいる姿を食い入るような視線で見詰める姉畑提督。

セルシウスは一瞬既視感を覚えたが、いや私はこの男と違うのだとその感覚を一蹴した。

函館の提督はようやく二〇〇発ほど弾を消費したらしい。

彼が弾とか発射とか発言する度に艦娘たちの頬が染まる。

何故だ？

トリガーハッピーなのか？

そして、彼らの話題は最近公共放送を自称する放送局で放映されているドラマの話になる。

アイヌの少女が元兵隊の男と共に明治時代の北海道を旅する話だ。

この青年が兎に角よく鉄砲を撃つ。

どちらも北海道出身の役者である。

猫っぽく冷徹な狙撃手が新たに加わり、物語は躍動感を高めていた。

何故か二人の役者はよく脱ぎ、二人きりの場面も少くない仕様だ。

そういうのを好む層へ向けての露骨な擦り寄りだが、効果は抜群だ。

急遽薄い本を描いている者さえ続出している、との噂まで聞こえる。

五稜郭や大沼公園でのロケには多数の見学者が集まり、意外と本格的に撮っているらしい。

上級幹部が不祥事を連発し会長が問題発言を繰り返しているので、現状打破したいようだ。

各話の最後一分を使つての北海道解説や銃器の話は、意外にマニアックだがわかりやすい。

函館鎮守府に所属する子熊も出演した。

お陰で函館鎮守府の電話機はよく鳴る。

まあ、そんなことなどセルシウスに関係ない。

彼は泰作少年が無事ならそれでいいのだ。

商人の顔になった男はリアルケモナーな男が執務室を退出した後、おっちゃん提督と商談に移った。

欧州を股にかける輸入雑貨商の美濃柱が明日には函館を訪れる。

あのとでも優秀な男が来る前に、ある程度話を詰めておきたい。

函館駅周辺に、今度東欧の製品を置いたお洒落系店舗が開店するという情報もある。

セルシウスは愛しい少年を脳裏から惜しみつつ限定封印すると、冷徹な非情の顔で商いの話を始めた。

元特級企業戦士という噂もあるおっちゃん提督へ、正面から真つ向勝負の突撃を敢行する。

必ずや、この男を打ち倒してみせると必勝の気持ち胸に秘めて。

漏れ聞こえてきた百戦錬磨の商人たちの失敗例を踏み台にして。

私はきつと勝つ！

泰作君、待っていてくれたまえ！

CXLIX：六つの力をひとつに合わせ!

九州の某基地からやって来た艦娘たちは函館の観光地を堪能するだけでなく、東北の夏祭りをも堪能しまくった。

函館港まつりでは夜遅くまで遊び歩き、ずいぶん振り回された。

風呂でも宿泊棟でも大騒ぎで、よその鎮守府泊地警備府から訪れていた艦娘から苦情が来る程だった。

私自身も彼女たちに引つ張り回され、函館の娘たちから散々怒られた。

ナニを引つ張られそうになったのはここだけの話だ。

「私たちだってまだ触ったことすら無いのに、なにをやってんのよ、あんたら!」
のう、曙さんや。

怒る点がなんだかおかしくありやせんかのう。

抗争寸前までいった。

宥めるのに苦労した。

泣きっ面に蜂である。

潜水艦の子たちがどきくさ紛れに私室へ乱入した時は、大変を通り越して大騒動に発展した。

いや、あの時は危なかった。

貞操と命の双方が危険領域。

ホンマ、無茶苦茶でんがな。

「また来るぜーっ！ お父さーん！」

「お父さーん！」

「ギヤハハハ！」

「おう、オメーらー！ きちつと挨拶せんかい！」

香取先生が迎えに来て、何名かしばかれていた。

大型作戦が近く、痺れを切らせた提督が彼女を派遣したのだ。

彼の信任一位たる、正妻系艦娘。

普段は優雅だが、怒るとこわか。

鹿島がこわいですと震えていた。

引率者の陸奥が微妙な顔で苦笑している。

割とフリーダムなんだよな、あそこはさ。

香取先生がいなければ、あの基地はすぐに崩壊するだろう。

そうした意味で、彼女は要石なのだ。

彼女から大量の九州の酒と名菓詰め合わせをいただき、非常に恐縮した。

ナインテイルの焼菓子まである。

お互いに頭を下げあい、同時に苦笑した。

「私の提督から、『当鎮守府の艦娘が大変お世話になりました、この度はありがとうございます。この度はありがとうございます。』と言付かりました。」

「わざわざお言伝ていただきました。ありがとうございます。こちらからもよろしくお伝えください。これは些少ですが、ほんの気持ちです。」

鳳翔と間宮と李さんと鹿ノ谷さんが作った、日持ちする菓子や料理を手渡す。

これでお役御免だ。

やれやれだぜ。

彼女たちの帰投後、その反動で所属艦娘たちがかなり甘えん坊になってしまい、そういう面で新たに苦戦中である。

抱っこにおんぶに頬っぺにチュー。

チューチュー蛸かいな。

六つのなんちゃって鎮守府から六人の提督と六名の艦娘が、演習のために函館鎮守府

へやって来た。

はるばる来たぜ、函館へ。

かつて、関東以北最大の街だった函館も今ではひなびた地方都市だ。

全国的に知名度が高い街ではあるが、それを正しく認識している地元民は意外と少ない。

まあ、妙に気負っている都市よりはましかも知れないが。

今日やって来たそれぞれの擬似鎮守府には、艦娘或いは艦娘のようなモノが一名ずつしか所属していない。

彼らは皆、艦娘もしくは艦娘のようなモノから見込まれたり安全パイと思われたり狙われたりしている。

大抵の艦娘または艦娘もどきはたまたま艦娘のようなモノ或いは自分自身を艦娘と思いい込んでいる一般人などは、提督のようなモノを取り込むことにありとあらゆる情熱を注いでいる。

承認欲求が強いのか、周囲への依存度が高いのか。

種の保存的ななんちゃらが、ゴーストに嘔くのか。

演習に出向けるモノとそうでないモノとの差は激しい。

出向けないモノはありとあらゆる言い訳を提督のようなモノに行い、彼らは素直に

それを受け入れる。

それが言い訳だろうと嘘だろうと、彼女たちを失わずに済む材料になるならば問題ない。

そう思う提督もどきも少くない。

よつて、自衛すら出来るかどうかあやふやな場所さえある。

思い込みが激しすぎて一発轟沈してしまう女の子を、一名も出さないようにせねばならない。

今回函館を訪れたのは、演習可能な個体ばかりだった。

当たり前と言えば当たり前なのだが、大湊（おおみなと）と函館がそうした怪しげな連中の受け皿になっているため、連絡は密に取るようにしている。

対大本営物理的説得要員は大淀を筆頭としてカチコミに何時でも行けるよう、日々の突入訓練を怠らない。

余所の鎮守府の面々が混ざっているような気がしないでもない時もあるが、それは些細な差異に過ぎない。

初めて函館を訪れた面々は先ず鳳翔間宮李さん鹿ノ谷さんなどの料理上手からうまかもんで攻略され、大抵簡単に陥落する。

その後、トラピスト修道院トラピスチヌ修道院五稜郭立待岬大沼公園などへの観光に出向き、日々の喧騒を忘れるようにさせられる。

時間があれば、江差や松前などにも出向くことが可能だ。

実際、演習終了後に観光を希望されることは少なくない。

急拵えの即席艦隊程度で、連携など到底出来る訳もない。

日々の厳しい訓練を経てこそ、それは可能なからだ。

実戦が訓練を上回ることなど、普通に考えてあり得ない。

よって、丸一日ずっと彼女たちは艦隊行動の訓練を行うことになる。

やらないよりはマシなくらいだ。

付け焼き刃で豪刀を防げるかよ。

構成が水雷戦隊系になることもあるし、駆逐隊になることもザラだ。

戦艦がいれば、その彼女は大体において錬度が低い。

戦艦を扱うにはかなりの資材が必要だからだ。

正規空母の場合も同様である。

提督のようなモノになった後、初めて彼らはその事実を知る。

知った時には配下になった彼女たちと抜き差しならぬ関係に陥っているのが常だか

ら、呆気に取られる者が続出する。

深い関係ならば尚更だ。

最初からそれとなく言つてはいるようだが、実体験あつてようやくそれを実感するのが殆どだ。

男の弱みにつけ込むのはどうかと思われなくてもないが、騙される側が納得する限りでは犯罪にならない。

よつて、戦艦正規空母重巡洋艦と豪勢な布陣になっているにもかかわらず、演習開始直後即大破も少なくない。

熟練の駆逐艦一名に翻弄される始末になることもままある。

今回は誰に任せようか？

「我が愛しの伴侶の提督よ！　今回は私が一隻単独で、この鎮守府の力を彼女たちに知らしめてやろうではないか！」

「丁度よいところへお越しくございました、長門教官。明日は島風単艦で演習させます。彼女にそう伝えてください。」

「なん……だと……？」

「大戦艦長門から完膚なきまでに打ちのめされるよりも、島風の速さに翻弄された方が彼女たちの勉強になります。そうは思われませんか？」

「し……しかし……。」

「教官に倒されたら、それはそれで当たり前だという認識で終わらせてしまいかねません。それでは彼女たちのためにならないでしょう。しかし、駆逐艦一隻に倒されてしまったらどう考えます?」

「悔しく思うだろうな。少しでも前向きな気持ちがあるならば。」

「そういうことです。そして、負けた彼女たちの元へ颯爽と現れるのが……。」

「私ですね。」

「加賀教官。」

「なんだ、加賀。先程の話を聞いていなかったのか? 今回出番があるのは、夫の寵愛深き私だ。」

「長門、貴女では彼女たちが萎縮してしまう可能性があります。私の方が適任でしょう。それに、夫の寵愛が深いのは私の方です。」

「ほう、言うではないか。」

「ここは譲れません。」

「よかろう、ならば演習で片を付けてくれよう!」

「望むところです。鎧袖一触よ。」

「あー、鹿島さん。妙高教官を呼んでください。」

「これから私は喧騒に巻き込まれるのは確実のようだ。」

嗚呼、
どうにも止まらない。

CL：姉畑提督と鍬縞提督

あいつ……やりやがった。

マジかよ、あのおっさん。

マジでやりやがった。

眼鏡をかけて一見知的に見える姉畑提督が変態と判明したのは、夕暮れ間近い道南の山林。

羆（ひぐま）の出現情報に基づいて猟友会の面々と銃を持つてうろうろしているのだが、『客員提督』の姉畑提督が急に見当たらなくなった。

独断専行は困るなあ。

まさか殺られたのかと皆で緊張しながら警戒していると、程なくして下半身になにもまともっていない姉畑氏を見つけた。

「大好きなんだ、大好きなんだ、大好きなんだっ！」
なにがだよ。

皆で見ってしまった。

エゾシカ相手の彼。

うっわー。

夢見んぞ。

「お、お恥ずかしいところをお見せしてしまいました。」

血まみれの彼がはにかむ。

惨劇が起きたみたいだな。

血のにおいで罨が来ると不味いとのことゆえ、エツホエツホと皆で肉塊を運ぶ。

航空機を使える艦娘でも連れてくればよかつたか。

暴走軽トラみたいなの森の王には、今会いたくない。

車輛の荷台に肉の塊を載せ、妙にニコニコしている姉畑提督を後ろから観察する。

彼はどうやら罨にとてもとても会いたいらしい。

陸上自衛隊から出向している狙撃手がぼやいた。

「雨が来るぞ。」

山林の麓（ふもと）にテントを構え、私たちは善後策を話し合った。

結局、罨対策の結論は出なくて翌日に持ち越されることに決まった。

雨は霧を呼んで、周囲は五里霧中の様相を呈してきている。

明日は朝から濃霧か？

姉畑提督が何故かニヤニヤしていて、その理由を彼に問うたが曖昧な返事しか返ってこなかった。

翌未明、再度姉畑提督が見当たらなくなっていた。

猟銃が一丁消えている。

熊と人間の捜索に切り換え、私たちは山林を歩く。

霧の中、特定目的に特化した工業製品を握り締めながら山中を歩く。

その日はエゾシカ一頭を打ち倒して、持ち帰った。

姉畑提督は見つからない。

熊の結界を示すという、ケモノの体内から排出されたモノも見つからなかった。

この山林に熊はいないのか？

その後二日間かけて皆でエゾシカを三頭狩り、業者に運んでもらう。

ジビエ料理の原材料となるのだろう。

姉畑提督は見つからない。

道警の面々と山狩りする。

彼はどこへ向かったのだ？

致し方なく提督業に戻る。

艦娘たちが迎えに来て、狩の時間は強制終了だ。

道警がその日以降も探してくれたのだけど、彼は未だに見つかっていない。

鍛縞提督が副官たちと研修に函館を訪れたのは、夏なのに長袖を着たくなる曇天の日のことだった。

なんとも個人的で大柄な面々が、執務室の空間を圧迫している。

提督自身は縞々の全身タイツにマスクをかぶった大男で、技巧派に見える感じだ。

セーラーというよりもゼブラーな男というかなんというか。

噂の強化服か？

零式を更に軽量化し、運動神経と運動能力の双方を飛躍的に高める機動戦士のための衣類。

それを着ていると、陸戦では戦艦級艦娘と同等もしくはそれ以上の戦いが出来るとかいう。

ホンマかいな。

彼は愛馬を伴っていた。

めんこい縞馬を連れてきていて、初めて見た艦娘たちがめっちゃ興奮しつつ熱心に世話をしている。

どこにでも一緒らしい。

劉玄德が諸葛亮を伴う如くに。

子熊たちが縞馬にじやれつく姿は絵になるようで、大本営広報の青葉が喜び勇んで撮影をしていた。

大人しい個体のようだ。

縞馬は気性が荒いと聞いていたのだが、そうでないものもいるのだな。

艦娘の同姿艦でも性質がまるで異なる者さえいる。

そういうものか。

彼の名はキルト。

提督はキルトをずいぶん可愛がっているようだ。

いつもなにかやさしげに話しかけている。

艦娘に対しても、そう振る舞うだろうか？

彼は牧場経営者でもあり、近年人気の牛丼チェーン『忍野屋（おしのや）』の社長でもある。

縞々模様の旗指物が目印だ。

流石は多彩多芸なる技巧派。

函館にも忍野屋の支店を開店するつもりらしい。

やがては道内に何店舗か開店するつもりだとか。

彼の副官や直属の部下たちも大変個性的である。

副官の蝶野大尉通称マリノはノースリーブのぴったりした服を着た男で、軽業師ばくて今にも飛翔しそうな彼もマスクをかぶっている。

彼の恰好も強化服か？

少し尊大な気質のようだが、提督には心服しているみたいだ。

最近はマスクをかぶるのが流行っているのかね？

何故、大本営で一切問題にならないのだろうか？

服部（はつとり）はザ・ニンジャという感じの服装をした男で、一人称が拙者だ。

なんだか、あれはアメコミの実写版みたいに見えなくもない。

一見忍び装束に見えるが、あれも強化服なのかもしれない。

落ち着いた雰囲気、技巧派の提督によく似合う感じはする。

ナウマンと呼ばれる筋骨隆々の大男はマンモスを模した革の衣装をかぶっていて、どこの蛮族だこの男って感じだ。

あれも……強化服なのか？

鍛縞提督を慕っているようで、外見以上に生真面目な忠臣のおいまでする。

何故だかオータムクラウドや一部の艦娘が大興奮しながら、彼らを見ていた。

アトラスと自称する男は、ピラニアっぽいマスク一体型の全身タイツと腰ミノを身に

まどつてゐる。

ギョギョギョ、つて感じた。

なんだか人間にすら見えないが、あれは海陸両用型強化服なのかもしれない。脱いだら実ははにかみ屋だったりして。

愛称がアトランティスらしいが、何故愛称の方が長い？

ロシア人かよ。

彼はいわゆるムードメーカーのようで、茶目つ気ある軽口をよく叩いている。彼らはなにかの興行団体みたいだ。

「マッスル！ マッスル！」

払暁から鎮守府近くの海岸線を青春の一頁のように走る、鍬縞提督と愉快な仲魔たち。

一緒に走る艦娘たちの表情が爽やかだ。

昨夜の入浴時は、艦娘たちや元艦娘たちの乱入が無くてよかった。

しかし……彼らの素顔って……。

何故、アトラスは脱がなかった？

「提督、特設リングを妖精さんたちに作ってもらいました。」

大淀が背後にいた。

いつの間に？

「ありがとうございます。なんだか随分と早い完成ですね。」

「妖精さんたちはやたらに張り切って工作していましたよ。」

「ほう。」

彼らの要求したものはただひとつ。

格闘戦訓練用の特設リングだけだ。

近接戦闘の訓練とは異なるらしい。

そして、その日の研修を消化した鍛縞提督は仲魔たちと熱い闘いを始める。

なんとか決定戦みたいに燃え上がっている。

それは炎。

燃え上がる噴煙。

昭和新山もかくやとばかりに彼らはバーニングする。

「マーズ・パワーッ！ 火炎車の術！」

「ケケケケ！ ウォーターウォール！」

「パオーン！ ハリケーンミキサー！」

「見よ！ 我が空中殺法の華麗さを！」

「喰らうがいいっ！ 地獄の断頭台！」

それなんてヘル・ミツシヨネルズ。

あまりにも超絶的な技の応酬に口をあんどりさせる。

なに、この人たち。

まるで人間じゃないみたいだ。

これが強化服の力ならば、我々人類はとんでもないモノを開発したと言えるだろう。着用者が限られるかもしれないが、艦娘だけに頼らない戦術の構築は必要と考える。

私にも……。

「力が欲しいか？」

私の耳元で、腐りかけた甘さを引き連れたような嘔きが聞こえてきた。

どこかの秘密結社の首領のような渋い声。

えっ？

なんだ今の？

振り向いた。

誰もいない。

確かに聞こえた。

あれは誰の声だ？

……空耳アワー？

いかん、いかん。

鍬縞提督の初期艦を呼ぶための手筈を、早めに整えなくてはならない。

しかし、要求が奇妙だったな。

格闘技に興味があるか、もしくは格闘技を使える者。

水着でも着させて技術を仕込むつもりなのだろうか？

雨がぼつりぼつりと降り始める。

そう言えば、ケツコンしていた艦娘たちの問題を解決しなくてはならない。

元人妻の艦娘たちを引き合わせようか、とぼんやり思いつつ、私は「マッスル・イン

フェルノ！」と叫ぶ鍬縞提督に近づいた。

CL I：悩ましきもの、そはケツコンしていた艦娘たち

「ヒューマンの第三階層か。久しいな。元気そうだなによりだ。」

貴族みたいな恰好をした男が私の目の前でほくそ笑んでいる。

ここは絢爛豪華な書齋。

執務室より遙かに広い。

座り心地のよいソファ。

寛いだ雰囲気に対話する。

「ふむ、君から見た私が今回こういう姿とはな。非常に興味深い。」

「貴方はどなたですか？」

「ほほう、この状況に於いても怒鳴り付けることなく、喚くことなしか。相も変わらず、ヒューマンにしては素晴らしい。即時に消滅させなくてはならない者もいるだけに、とてもやりやすいよ。勘違いしている者も多いのでな。『あやつ』の言うとおり、今回中間値として特別に合格点を出してやろう。『どなた』か。それは極めて簡単にして大変難しい質問だ。檻の中のハムスターが実際に於いて、実験する側の人間を認識出来るかね

「？」

「『上位的存在』 或いは『セカイ的観察者』といったところですか。」

「ふむ、その観点は悪くない。君は空想科学小説が好きなようだね。」

「ええ、旧いSF者ですよ。私の役どころは所謂モルモットですか？」

「君をモルモットにしたら、多数の相手から報復を受けると思うよ。」

「ははは、そこまで人徳があればいいのですが、それはないですね。」

「おや、空間干渉が始まったか。これは残念。そろそろ、お開きだ。」

「またお会いするのでしょうか？」

「既に、何度も会っているがね。」

「えっ？」

「君は本当に、自分自身の才能を開花させるつもりが無いようだね。」

「なんの話でしょう？」

「さてはて、『鍵は自らを開く為の道具と知らず』か。まあ、致し方あるまい。じわりじわりと新品の万年筆に馴れるが如くだ。焦ってペン先を傷めてしまつては修理代が皆さんで仕舞う。」

「万年筆？」

「そうさ。」

「私が万年筆ならば、どんな紙にどんなインキをもつて書き記すのでしょうか？」
「インキはほら、君の体内にあるじゃないか。真つ赤な真つ赤なその液体が。」
そう言つて、血色の悪い顔をした東欧風の顔立ちの貴族はニヤリと笑つた。

「やべえよ、駆逐艦、やべえよ。」

秘匿回線で電話がきたと思つたら、いきなり同期の泣き言から始まつた。

「お前なあ。」

ECMは機能しているな。

FLAKも発砲準備よし。

「だつてよう、あんなにムチムチの子たちが無防備に抱きついてくんだぜ。理性がどん
どん削られてゆくつての。」

「耐えろ。」

あいつのところは……白露型か。

となると……白露か村雨辺りか？

「もう、限界に近いんだよっ！」

「夜の店にでも行けばどうだ。」

「この間行こうとはしたんだ。」

「彼女たちから阻止されたか？」

「なんでわかるんだってばよ！」

「いや、なんとなく。」

「こつそり出掛けようとしたら、ショッピングモールに連行されたんだ。」

「そして、昼食を奢ったのか。」

「なしてわかるんだってばよ！」

「いや、なんとなく。」

「あのよう。」

「ダメだな。」

「まだ、なんも言つてねえべよ。」

「函館のその手の店は規模が小さい。行くならススキノにでも行け。」

「なあなあ。」

「行かんよ。」

「まんだなんも言つてねえべ。」

「なんとなく、わかるんだよ。」

「地元のそういう店に行けたらなあ。」

「艦娘から侮蔑の視線を貰えるなあ。」

「やんだ、そたらこと。俺のちまきが疼くんだよ。なんとかならんべか？」
「おら、しんね。」

「なあ、ムラムラする時つてあるよな？」

「海岸線を走つて、シャワーでも浴びたら大丈夫でねえの。」

「やんだやんだ、もうこがいなことはまつことたまらんち。」

「おみやーさの方言が段々滅茶苦茶になつてきているぞい。」

「ええねんええねん。もうなんでもどうでもええねん。」

「ここらで休暇を取つて、函館観光でもしてみるかい？」

「そうだな……大門の客引きするお姉さんはまだいるのかね？」

「ああ、夕方あの辺を歩いていたら勧誘されるよ。」

「マジか？」

「たぶん三〇年か四〇年前には少女だったお姉さんが接客してくれるよ。」

「マジか。」

「今度吞もうぜ。」

「それがいいな。」

ケツコンしていた艦娘の内、三割ほどは四大鎮守府の提督の元へ行つてくれた。

残り七割強が無所属のままなので、取り敢えず函館鎮守府に仮住まいしてもらおうこととなった。

三名いる天龍がテキパキと彼女たちを仕切ってくれて、そういった点では助かっている。

助かっているのだが、時折こちらを見てニヤリとされるのが少し不安材料だ。

考えすぎかもしれないが、なにか企んでいるのではと疑いたくなる時もある。

書類業務を終え、風呂にも入り、さて最近入手した古い万年筆を少しでも慣らそうかと思っていたら龍田から声をかけられた。

曰く、天龍たち込みで一緒に酒を呑まないかと。

「おさわりはあきまへんで。」

「その台詞、ホントは私たちが口にする類なのよねえ。」

龍田の私室に行くと、確かに天龍たちがいた。

バスタオル一枚きりの姿で。

謀ったな、シャー!

「ああ悪いな、提督。俺たち、たまたま風呂上がりなんだ。」

「ま、そんなの気にせず呑もうぜ。俺たちの仲じやないか。」

「そうそう、酒も肴もいい女もいる。なんの不足もないな。」

三名とも胡座（あぐら）をかいている。
困るんだよなあ。

なんらかの意図を有する飲み会が開始された。
下ネタが一切の容赦なく話題にのぼってゆく。
夫だった提督たちの性癖が赤裸々に語られる。

二〇代だったら耐えられないんじゃないかな？

身悶えせんばかりの内容の話が紡がれてゆく。

そんなことまでやっていたのかと内心驚いた。

当然生理現象は発生し、天龍たちが見詰める。

途中で切り上げようとしたのだが、巧みに阻止された。

龍田が自然な感じで風呂呂に行つて、話題が過激化する。

緩衝材になっていた軽巡洋艦の不在で、世界水準の艦娘がにじり寄つてきた。

頃合いだな。

明日も早いから、と立ち上がる。

今度は、引き留められなかった。

部屋を出て、私はびっくりする。

うちに仮所属している艦娘たちが、全員そこにいたからだ。

へへへ、と彼女たちは曖昧な笑みを浮かべて近づいてくる。

「あら、提督。もうお開きになったの?」

寝巻き姿の龍田が現れた。

よかつた。

彼女は普通の振る舞いだ。

結局、彼女に先導されて自室に戻る。

部屋にいた鳳翔と間宮がしきりに私のおいを嗅いでいたのには参った。

朝が来た。

いつもの朝だ。

ケツコンしていた艦娘たちが添い寝を希望する前に、転属させないと不味いだろう。彼女たちの鍊度が高いだけに、どここの鎮守府泊地警備府に振り分けるかは悩ましい。大本営からは、なんちやって鎮守府に絶対振り分けるなど事前に釘を刺されている。なんちやって系出身者もいるのだが、それはそれこれはこれということらしいのだ。よう、わからんいう。

さて、どうするか?

第六駆逐隊の面々は四名全員の方がいいだろうし、北上大井も一緒の方がいい。

北上大井なんて、引く手あまただったのに条件が厳しすぎたんじゃないのかな？
満潮や漣辺りが難しいんだよなあ。

駆逐艦が妙に多く残っているしな。

考えながら歩いていたら、天龍たちが爽やかな態度で挨拶してきた。
昨晚のことなど微塵も感じさせない、明るい雰囲気顔つきだった。

CLⅡ：カレーと巨漢と潜水艦

語らねばなるまいて。

私にはわかつている。

すべての事象は既に始まっているのだ。

さて、私は一体全体どこへ行くべきか？

今日の食堂の昼定食は、カレーライスに揚げパンに唐揚げに牛乳にプリン。

ライスとパンがかぶっているぞ。

揚げパンと唐揚げもかぶつとる。

なにやっつてんだ。

カレーライスだけにしたい者やカレーと揚げパンにしたい者、はたまた全部食べたい者に対応しようと試みた結果がこれだそうだ。

よかろう。

ならば、全部込みだ。

食べきってみせよう。

それが私の心意気だ。

ものを食べる時はね、なんとというか、孤独で自由に救われなきやダメなんだ……。
独りで……。静かで……。豊かで……。

「ヤッホー、提督。じゃ、一緒に食べよつか。」

「それはいい考えだと思いますよ、北上さん。」

あれ？

仮所属の艦娘たちに捕まった。

まっ、いつか。

んっ？

今鋭い視線を浴びたようだが？

振り返るも常の表情の艦娘群。

あつれーっ？

気のせいかな？

カレーライス。

懐深き国民食。

印度英国を經由して伝わってきた肉じやがの親戚。

一時はカレー粉の輸入が途絶えたが、飽くなき執念と熱意の結果、意外と早く戻ってきた。

お帰りなさい、我らのカレー。

君は我々の家族同様の存在だ。

そして、鍋のどこをすくうかでカレーの満足度はまったく異なる。

今日は間宮が作ったのか。

ほほう、いいじゃないか。

うん、旨い。

懐かしさと辛さが天竺から三蔵法師と共にやって来る。

揚げパン。

給食で食べたことは経験ないが、地域や時代によつて食べている人が見られる定番らしい。

揚げられたパンの上には金色のきな粉。

プロテインパワー、メイクアップだな。

揚げたのは李さんか。

中華風の揚げパンか。

ほほう、そういうのもあるのか。

いいじゃないか。

カレライスの端つこにちよんちよんと浸けてナンのように味わう。

うん、これも旨い。

ルーを多めに貰つて正解だった。

キミたち、おっぱいを押しつけてくるのはやめなさい。

きな粉が指に付いた。

これは舐めてしまおうか。

「提督、指にきな粉が付いていますよ。」

「提督はあたしたちの世話が必要だね。」

ペロペロペロりと舐められてしまった。

不覚。

殺気？

振り向く。

いつもの彼女たちだ。

唐揚げ。

北海道ではザンギという名前で、大きめな鶏の唐揚げが出てくる。

ザンギエフではない。

配膳してくれた艦娘が特によいものを揃えてくれたのか、三つとも私好みの形であった。

いい。

これはいい。

この端つこのカリツとした部分。

揚げものの鶏皮には、旨味がぎゅつと凝縮されている。

これが旨いんだな。

自家製マヨネーズにさつと浸け、素早く口の中に運ぶ。

途端、じわりじわりと拡がる宇宙。

「はい、あーん。」

えっ？

反射的にパクリとやっってしまう。

あっ。

曙、霞、叢雲たちがすつ飛んできて、彼女たちから一撃ずつ喰らった。

うむ、なかなかよい一撃離脱戦法ナリ。

そして、今日の甘味はプリン。

このぷるぷるの弾力性がいい。

スープのようなプリンじゃないのが、とても好印象だ。

これは鳳翔だな。

古典的な印象だ。

匙で掬って一口。

豊穣が拡がった。

旨い。

これはマーレだ。

海。

豊かな愛の世界。

「提督、ほっぺにプリンが付いているよ。」

「それはすぐに取らないといけませんね。」

ほっぺをペロペロ舐められた。

直後、食堂は戦場に変わった。

私の不徳の致すところである。

油断しきってしまっていたな。
教官たちからお説教を喰らう。
ちつともおいしくはなかった。

夜は納涼こわい話会。

私の独演会なのだが、何故か要望があつたので涼しい夜の函館鎮守府の講堂でやってみる。

先ずは『ちかちか灯る』。

昔住んでいたアパートでの話。

あれはちよつと奇妙だったな。

続いては『ちよつと痛い』。

馴れるのつて、こわいよね。

『知らない顔の祖父と万年筆』。

結局、あのお爺さんは誰だったんだろう。

とどめは『メール』。

いやあ、あれは本気でこわかった。

空気が酷くなったので、番外編の『エツちな幽霊』でなんとか和ませる。

独演会后、何名かの艦娘たちからじわりじわりと問い詰められた。少しこわかった。

狗飼提督と打ち合わせ。

防衛線の構築や潜水艦戦隊の運用などの話し合い。

狗飼提督は古参で潜水艦戦隊の運用に長けている。

彼は潜水艦艦娘たちと非常に相性がいい。

所属艦娘が殆ど潜水艦という珍しい存在。

事実、彼の部下たちはかなりの戦果を挙げていた。

現在、インド洋方面で深海棲艦側の潜水艦戦隊と沈黙の激戦を繰り広げている。

彼の鎮守府に潜水艦たちが戻った際、彼女たちは彼の巨体目掛け突撃するのだ。

愛を語るために。

夜のレッスンもお盛んのようにだ。

秘書艦の香取は軽空母の鳳翔と軽巡洋艦の五十鈴（いすず）、そして所属駆逐艦たちと

共に現在厨房で料理のレッスンを受けている。

「拙者の艦隊の現在の進捗状況はこんな感じで御座る。」

変わった喋り方をする人だなあ。

表情と仕草が道化っぽい感じだ。

まっ、いつか。

彼の本質がなんであれ、味方であることに変わりはない。

何人かの提督からただならぬ好意を持たれているという。

海が見える場所にある長椅子に並んで座った。

心地よい風が吹いている。

しばらく我々は、とりとめのない会話をした。

彼の潜水艦たちが走ってきた。

はにかみながら手を振る巨漢。

直後。

二艦隊分の突撃を受け、狗飼提督は大破した。

CLIII：ロシユトツクは遠い

「ロシユトツク泊地、ですか？」

「そうだ、おめでとう。マルタ島泊地に次いで二つめの欧州泊地に君が着任だ。中東唯一のスエズ泊地との連携にも期待している。君は榮譽に預かったのだよ。」

「は、はい、光榮に思います。」

マルタとスエズの連携は今一つらしいじゃないですか。

痴情のもつれがあつたとか。

私にその調整役を期待する？

はは、ご冗談がキツイです。

それにロシユトツクからだ、マルタやスエズはバルト海を超えての遙か遠くじゃないですか。

鉄道で陸上からあちらへ向かえとでも？

一体、どれだけ日数がかかることやら。

それだったら、ポルトガルかスペインにでも泊地を作ればいいのに。

或いはコンスタンティノポリスなイスタンブールに作ればいいのに。親日国のトルコに政治的経済的うま味がないということなんすかね。

疑問に思ったが口をつぐむ。

なんせ相手は上官だからな。

函館鎮守府で二艦隊の潜水艦に突撃されてしばし入院した後、私は大本営に召喚された。

脂肪がなかったら死亡していたかもしれない。危ういところだった。

デブ万歳。

五十鈴（いすず）やイムヤたちによる献身的過ぎる看病のため、更に入院期間が延びたのはここだけの話だ。

あんなことをされるとはなはだ困る。

耳元で甘く囁くクロスワードパズル。

うにやあつと言ひそうになつたぜよ。

日独交流とやらで、向こうの復興を援助する名目が艦娘と提督の派遣らしい。

日本の将来的利権のためにきりきり働けということですね、よくわかります。

ドイツは政治的経済的うま味が多い。

ロシュトックに艦娘の基地は無いし。

上手く行ったら次は英仏辺りかねえ。

穴だらけとは極東の私さえ耳にする。

こうして私の新しい任地が決定した。

今までは鉄仮面提督が管理する大阪鎮守府に間借りしていたが、今度は一国一城の主だ。

はるか遠く、だけどな。

ロシユトツク。

旧東ドイツに位置し、今はドイツ連邦共和国北部のメクレンブルグ＝フォアポンメルン州に所属する港湾都市。

バルト海に面していて、中世ハンザ同盟の中心都市であったかの街は旧東ドイツ最大級の港湾都市でもあった。

今はひなびた海沿いの街で、どことなくなんとなく江戸時代に繁栄を誇った山形の酒田市に似ていなくもない。

つまり、ドイツ国内でものんびりした場所だということである。

自由ハンザ都市ハンブルグでないのが、なんとなくいやらしい。

ま、鎮守府泊地警備府は騒々しい都市部に無い方がいいだろう。

それにハンブルグには彼らの誇りとなる黒色槍騎兵艦隊がある。

「君は潜水艦の運用に関して、実に素晴らしい適正がある。それは日本の誇りだ。」

何故、こうも思っていないことを平然と口に出来るのだろうか？

グルギユルグルグレンガスト。

腹が、減った。

「おや、もうこんな時間か。では昼食に行こう。」

本日秘書艦としてついてきてくれた五十鈴と一緒に一般食堂で昼食を摂るのは、無理になつてしまった。

彼女はさみしそうな顔をしながら、マーロウへ昼食を摂りに出かける。そこはプリンが大変有名らしい。

上官殿はずいぶんとご機嫌だ。

庶民的な店に連れてゆかれる。

庶民派を印象付けたいのかね。

それともこういう店が好みか？

人々の長い行列が出来ていた。

上官殿が馴染みらしい年配の店員に声をかけ、普通に店の中へ入る。

老舗の風格を感じる洋食屋だ。

店内は無茶苦茶に混んでいた。

予約席に案内された。

手筈通りのようだな。

掌の上で踊るだけか。

すべては予定通りか。

「昔、アムステルダムやベルリンやミュンヘンやドレスデンやライプツイヒやポツダムやロシュトックなどに行ったことがあつてね。それでなんだか嬉しいのだよ。是非とも、生きている内にかの地へまた行きたいものだ。」

違った。

上官殿はありし日を懐かしんでおられるのだ。

五〇代前半だからバブル直撃世代か。

海外旅行が盛んだった頃の世代だな。

海外渡航はまだまだ制限が多すぎる。

鎮守府関係者としてごり押しは無理だ。

そうか、上官殿は私が羨ましいのか。

それは思いもよらなかつた。

てつきり左遷だと思つていた。

「向こうに着きましたら、なにかよいものを送らせていただきます。」

「ははは、期待しているよ。」

彼が期待しているのは、自分自身が渡欧出来る態勢作りだろう。

私はその礎（いしずえ）を構築するための尖兵というところか。

ヤバイ。

思った以上に重責だ。

んなもん、数年じゃ無理だぞ。

上官殿もわかつてはおられるのだろう。

……わかつておられますよね？

料理が到着する。

ヒレカツ定食だ。

ヒレカツが三個。

大きめの塊三つ。

ご飯におみおつけに自家製漬け物にキャベツの千切りにポテトサラダ。

野菜には自家製ドレッシングがたっぷりかけてある。

このご時世に、ご飯とおみおつけとキャベツがお代わり出来るという。

道理で従業員が奔走している訳だ。

上官殿は追加でクリームコロツケとミンチカツを注文してくれていた。私は太つちよだからな。

よく喰うのをよくご存じらしい。

私は自分が歓待されているのだと、ここでようやく理解した。

上官殿にとって、お気に入りの場所なのだここは。

確かに貴重な店だと感じる。

客層も若きからお年寄りまで多様だ。

こうした店があるのは嬉しいことだ。

「君はお代わり自由がいいだろう？ 堅苦しくない店がいいかと思つてここを選んだんだ。一時期は諸事情でお代わり自由を止めていたが、最近復活してね。」

「で、では遠慮なく。」

見抜かれている。

いやはや。

他愛ない話を重ねて、上官殿のドイツ旅行の話を拝聴する。

ヒレカツは丁寧な下拵えがされていて、衣までが旨かった。

クリームコロツケはホワイトクリームと海の幸が巧みな融合をしているし、ミンチカツは挽き肉の練り込みがしっかりしている。

ご飯はふつくら、漬物はしゃきしゃき、おみおつけは出汁が効いた豆腐とワカメ。つまりはうまかつちゃん、ということだ。

上官殿はわざわざウラジオストクなヴラデイヴォストークからシヴェリア鉄道に乗ってモスクワなマスクヴァまで行き、マスクヴァからワルシャワ、ワルシャワからベルリンを経由したそう。

そして、ベルリンからおよそ四時間程かけてロシュトックまで行ったそう。

新幹線で東京から岡山へ行く感じか。

古きよきドイツが残っているのは、どちらかというといふと旧東ドイツの方らしい。

日本の地方都市でも、昔ながらの懐かしい風情が生きている場所があるよな。

そうした地域は経済的に厳しかったりするが、地元民の愛の力が勝るらしい。

愛ねえ。

そして、セピア色の思い出話から現在進行形の話に変わる。

旧東ドイツのドレスデン代表（ヴェトナム系美人らしい）を首班とする何人かの欧州系都市代表たちが、函館鎮守府へと赴いて商売の話をしているらしい。

ポーランドのワルシャワ、チェコのプラハ、オランダのユトレヒト、ベルギーのアントワープ、旧西ドイツのニュルンベルグ、などなど。

正式な国交が何時になるかまるでわからないため、一部が痺れを切らしたらしい。

函館駅周辺に輸入品専門店を開店する予定まであるようだ。

マルタヤスエズの提督も大変だな……ん？

明日は我が身か？

あれ？

私も、ややこしい欧州の連中の駆け引きに巻き込まれるってことか。

なんてこつたい！

「どうせなら、彼らは横須賀にも来て欲しいね。函館の提督にはその旨話してはいるが、どうなることやら。私はね、もう一度フェルメールをこの目で見たいのだ。出来れば、生きている内に国内での博覧会を開けるように積極的に働きかけるつもりだ。」

上官殿は思っていた以上の情熱家だった。

なんだか急速に、お互い打ち解けてゆく。

彼が愛用する古い万年筆を見せて貰った。

それは長年の愛用品。

白い星が輝いている。

「この万年筆はね、私が自衛官になって佐官に昇進した記念で買ったものだ。他にもいろいろ使ってみたが、これに勝るものが見当たらなくてね。何度も何度も修理したものだ。今は国産のインキを入れているが、その内ドイツ産のインキを再び入れてみせる

さ。おっと、国産のインキもこれはこれでなかなかよいものだ。今は京都産のモノを飲ませているんだよ。」

上官殿がメモ帳に書かれた文字はやさしい青鈍色で、とても達筆な感じであった。

最後は甘いもの。

豆かん。

さいころ状に切られた寒天とよく煮られた小豆と黒蜜の単純明快な甘味。

だが、これがいい。

素材の奥深さがじわじわと伝わってくる。

これも旨い。

上官殿の好物だそうだ。

砂糖の供給が安定化してきたからこそその結果であるな。

日本はあの一見豊かに見えた社会に戻れるのだろうか？

私は許可を貰って、これらを艦娘たちへの土産にする。

彼もいくつか買ってゆくという。

嫁艦たちから喜ばれるからだ。

購入制限があるのは実に残念だ。

支払いはすべて上官殿が行つてくれた。
恐縮する。

五十鈴と落ち合い、横須賀の駅舎に向かった。

途中、手作りフランクフルトの店を見かける。

店頭で焼いて食べさせてもくれるそうだ。

フランクフルター、と言つた方がドイツ語的には正しいらしい。

五十鈴は私の目の前で太いそれをぱくりとくわえ、非常に旨そうに食べた。
なんだか奇妙な視線で私を見つめてくるので、もやもやした気持ちになる。

まさか、ね。

駅舎に着くと構内でソフトクリームを売っていて、何人も買っていた。

我々も買った。

丹念にねつとりと口からませる五十鈴。

流石のにぶちんな私も気づいてしまった。

おいおい、娘さん。おいたはダメだよん。

「あのですね、五十鈴。」

「これ、おいしいわね。」

「その、食べ方ですが。」

「あら、違う方がいい?」

えっ?

ツインテールな軽巡洋艦はにやりと笑ってちろちろとクリームを舐めだした。

土産は艦娘たちから大好評だった。

量が少なくて申し訳ない気分だが。

鳩サブレもよかったのだろうな。

五十鈴が何故か体をぐいぐい押しつけてきて、喜びを口にする。

イムヤが負けじとくつついてきた。

鳳翔、香取、天龍、龍田、駆逐艦群、潜水艦群がそれに乗じて密着してくる。

クリームコロツケみたいに中身が出てきそうだ。

二桁の艦娘たちから圧迫された私は体力を削り取られ、再度入院する破目に陥った。

不覚也。

尚、病床の私の眼前でフランクフルターをくわえたり、ソフトクリームをちろちろ舐めたりする奇妙な行為が流行っている。

鳳翔や香取が恥ずかしげにやった時は、心底驚いた。

再三注意してはいるのだが、止めてくれそうにない。
やれやれだぜ。

ロシュトツクは遠い。

CLIV：みんな、カンムス？

気がついたら、海上にいた。

夕闇にすべてが溶け込みそうな時間。

逢魔が刻。

あれ？

はっ？

ええ？

ええと、さつき……さつき？ 甘味処の間宮……アイスクリン……羊羹……同僚たち
に軽口を叩い……出撃前の食事会……涙……罐詰……保存食料……嵐の中で砲撃戦
……弾切れ……大破……潜水艦……魚雷……敵機直上……百貨店……お土産……うっ、
頭が……。

「大丈夫ですか、スズヤさん？」

スズヤ？

あたしはスズヤという名前なの？

クマノという名にも覚えがある。

あたしはスズヤ？

それともクマノ？

あたしはダアレ？

そう言えばダアレっていうゾーリンゲンの刃物屋が……って違うっ！

なんで肝心な時に、余計な知識が紛れ込むのかなー、まったくもう！

あれ？

そういえば、おっぱいが大きくなっているような気がする。

ムニムニムニムニ。

気のせいじゃない。

一回り以上大きい。

しかもノーブラだ。

なんで？

なんで？

フード付きのミニスカワンピース？

こんなコーデ、したことない。

やだっ、パンツ丸見えじゃん。

え、なんで黒いの穿してるの？

黒いのなんて、持ってたっけ？

話しかけてきた子は真っ白いキレイな肌をしていて、心配そうにこっちを見ている。

キレイな子だ。

真面目そうだ。

体の線がくつきり出るボディースーツを着ていて、なんかめっちゃエロい雰囲気だ。

エロい子なの？

「ええと……あなたは……。」

「記憶が混濁しているんですね、スズヤさん。アキツキですよ。ほら、出撃前、対空戦闘に私が必要だって言われていたでしょう。」

えっ、そうだっけ？

アキツキ？

最新鋭の防空駆逐艦だったっけ？

まだ数名しかいない稀少艦よね？

じゃあ、横須賀か呉辺りから出撃したの？

まさか、虎の子の第一艦隊だったりして？

いやー、まさかそんな精鋭じゃないよね？

でも、稀少艦を出すつてことはそうなる？

その辺りの記憶がすつぽり抜け落ちてる。

てゆーか、全然覚えていなかったりする。

なにこれ？

なにこれ？

なにこれ？

「え、ええ。ええと、至近弾を喰らったせいかもね。」

「吐き気がしたりとかふらふらしたりはありますか？」

「もう大丈夫。心配いらないわ。」

「三半規管も特に問題ないみたいでよかったですね。」

ホントは不安だらけだけど、その気持ちはなんとか隠蔽した。動揺を隠しながら、同僚らしき彼女が安心するように答える。我ながら心配り出来る、いい女よね。

淑女のたしなみですわ。

ん？

あれ？

「イスズさーん！ スズヤさんが目を覚ましました。」

「あら、よかったわね。」

にっこりと微笑みながら、ツインテール軽巡洋艦が近づいてくる。

あれ？

イスズって、確か軽巡洋艦よね。

肌が透き通るように白いし、まとっている艤装は戦艦級の重武装型に見える。

なんだろう、決戦仕様なのかな？

それとも、改三でも開発された？

なんか、白銀聖闘士がいきなり黄金聖闘士になっちゃったみたいな感じよね。

ド迫力を感じる。

必殺爆雷ガールってとこかな。

で、問題がある。

おっぱい丸出しじゃない、この子。

露出度高過ぎやん。

なに、露出狂なの？

髪で一応見えないみたいになってはいるけど、ちよつと変よ。

ちらちら尖端が見えるしき。

ブラくらい付けときなさい。

それとも戦闘で失ったかな？

たぶんそうに違いないよ。

変態さんはちよつと厭だ。

でも、この恰好だと人のことが言えない。

なんで、こんなエロい服を着ているかな？

「付近にシンカイセイカンも見当たらないし、作戦は無事に終了したのかしら？」

「すみません、私も記憶が曖昧で、ところどころ欠落しているみたいなんです。」

「深海棲艦のせいかもね？ フソウとソウリユウとイカズチが戻ってきたわよ。」

「あの……あたしは記憶が定かじやないんですけど、連合艦隊だったんでしうか？」

「ゴメンね、私もその辺の記憶が曖昧模糊としちゃっててね。よくわかんないのよ。」

重武装の艦装を装備した黒いスーツ姿の黒髪美女。黒に黒を重ねて更に黒ってとこ。

マントを羽織って、右肩の甲板がぼろぼろのボディースーツ姿の女性（胸丸出し）。

穴だらけのパーカだけを身にまとった少女（絵面がとつてもとつてもヤバイよね）。

三名がだんだんとこちらに近づいてくる。

威風堂々って感じでなんか歴戦艦みたい。

あれ？

もしかして、あたしが一番弱い？

「あつちには誰もいなかったわ。」

おつとりと喋る戦艦級武装姉さん。

男心をがっしり掴みそうな雰囲気。

ほんわりエロスでイチコロってか。

「偵察機を飛ばしたんですけど、燃料が心許なくて引き返させました。」

こぼればかりの胸が露出している。

テイトクが大破しそうな爆裂魔乳ね。

この胸におっぱい星人がやられると。

「もうやんなっちゃう。早くシレイカンを甘えさせなくちゃ。テイトクニウムを早急に補給しないと、あたしがダメになっちゃうわ。」

テイトクをダメにしまいそうな少女がぶんすか怒っている。

あのう、水着か下着くらい身に付けた方がいいんじゃないかな？

せめてき、フアスナーくらいはきちんと上げといた方がいいよ。

「一刻も早くこの海域から撤退したいわ。ここからだ、どこの鎮守府が一番近いかしら？」

「ええと、函館鎮守府ですね。」

「じゃあ、先ずは函館に一旦帰投して修理と補給をお願いします。そのあと、各自の鎮守府

警備府伯地に戻る。みんな、それでいいかしら？」

「あとう……。」

疑問があつた。

「なにかしら、スズヤ？」

「あたし、自分の所属している基地が思い出せないんだけど、みんなはどう？」

「……えっ？」「……」

途端、重苦しい沈黙が場を支配する。

皆の白い顔が、益々白くなってゆく。

ヤバイ。

地雷を踏んだらしい。

この場合は地雷に接触したって言った方が感覚的に正しいかな？

……つてそんな場合じゃない。

ちくわ大明神の力を使つても、この状況を解決は出来ないでしょうね。

……ちくわ大明神つて、なに？

辺りはどんどん暗くなってきて、お互いの表情がわかり辛くなってきていた。

海面下から手が見えるようだ。

白い白い白い真つ白な手。

何本も何本も何本もある。

それは手招きをしていた。

こっちへおいで、こっちへおいでと。

ううん、これは幻覚に決まっている。

気の弱った時に見える、ただの妄想。

気のせい。

気のせい。

気のせいよ！

気のせいなんだからっ！

テイトク、あたしを助けて。お願い。

テイトク！

テイトク！

あたしのテイトク！

「あ……ゴメン……あたし、テイトクの顔とか仲間の顔がぼんやりとしか思い出せなくてさ。鎮守府の記憶も微妙に曖昧で……へ、変だよね？」

「そう言えば……どこの鎮守府から出撃しましたっけ？」

「……私はどこの山城の姉だったかしら？ あら、山城の顔はどう……。」

「シレイカン……顔が思い出せ……。」

パンツ！ とイスズが柏手を打った。

波立っていた気持ち落ち着きだす。

「取り敢えずは、函館に行ってみよ。テイトクや大淀さんなら、なにか知っているかもしれないし。」

「そ、そうね。弾薬もあと一戦分くらいしか無いから、は、早く安全性を確保したいわ。」

「え、ええ。そうよ、それがいいわ。」

「あの……みんなを不安がらせて、ホントにゴメンね。」

「気にしなくていいですよ。カムムスとしての仲間意識は大切です。」

「私も、このおっぱい丸出しの事態は早く解消したい。」

ソウリュウが左手に持った杖をぶんぶん振り回す。

みんながアハハと笑いだした。

そうね。

希望の地、函館へ行けばなんとかなるわ。

招く手は見えなくなっていた。

なんとなく、テイトクが助けてくれたのだと思った。

再び間宮へ行つて、おいしいお茶とケーキをいただきただかなくてはいけませんわ。

エステにも早く行きたいものですこと。

ああ、潮風で髪が傷んでしまいますわ。

でも、テイトクはわたくしの髪が……。

イスズを旗艦として、あたしたちは函館へ向かう。

戦艦一、正規空母一、重巡洋艦一、軽巡洋艦一、駆逐艦二の編成。

テイトクだったら、あたしのことがわかるかしら？

テイトクだったら、あたしを嫁にしてくれるかな？

……イヤだ、あたし、一体なにを考えているんだろ。

「あつ、その顔、函館のテイトクのことを考えていますね。」

アキツキが微笑みながら言った。

「ち、違うったら！ あ、あたしは別に誰がどうか、今のところは考えていないから！」

「函館のテイトクは絶倫無限で、どんなカンムスも夜戦で一撃大破させるらしいです

よ。」

「えっ、そんなにテイトクの夜戦能力って激しいの？」

「あくまで噂ですけど、大和級戦艦も勝てないとか。」

ソウリユウが会話に加わってきた。

ほんのりエグいガールズトークが始まる。

女同士のエツちな話はエグくなるよねえ。

生き生きとして見えるから、まっいつか。

アキツキは一見石部金吉みたいな感じがするけど、意外と砕けた面もあるのね。

あれ？

そうだった？

アキツキは少しエツちな話でも顔を赤らめ……ちよつと待つて。

あたしの隣にいるこの子は本当にアキツキなのかな？

周りにいるみんなも本当にそれぞれ名乗った艦なの？

本当に？

本当に？

あたしは本当にスズヤなの？

スズヤって誰？

あたしは誰？

……やめよう。

函館に着いてから、考えることにしよう。

改めて周囲を見渡す。

なんだかみんなめがっさ色白なんだけど、ホワイトニングでもしたのだろうか？
どこのエステに行かれたのでしょうか？

まあ、これが真つ白だったら深海棲艦なんだけど、そうじゃないから違うよね。
変異体なんだろうか？

なんか変容するような事態があつて、自己進化するメタモルフオーゼしたとかさ。

たぶんそうに違いない。

そうに違いないってば。

……ソウデアツテホシイ。

翌未明。

ようやく陸地が見えてきた。

青黒い空が明るくなる直前。

強い風が心地よく吹いてる。

函館の灯りはかそけき希望。

と、そこへ轟音が聞こえた。

ロケットブースターの炎と共に、ウサ耳を揺らせながら最速駆逐艦が接近してくる。
その手にはバスターランチャーみたいな巨大砲。

まるで物干し竿ね。

駆逐艦の出力で電磁砲の発射エネルギーを賄えるのかしら？

カートリッジ？

そういうものもあるのね。

流れるように腰から金属筒を取り出して物干し竿へカチリと装填し、こちらへ肉薄してくる。

あれで大出力を発生させるのかしら？

背中にある大型艀装が供給源みたい。

撃てて一発か二発が限度でしょうね。

でもなんかヤバくない？

あれ、一〇〇ノットを超えているんじゃないかな？

その背後には腕組みした戦艦やマントを羽織った戦艦、青い正規空母などが見える。

イスズがおい！ と明るい声でぶんぶん手を振った。

迎撃態勢に見えた彼女が砲身を下ろした。

ほっとする。

あんなものを撃たれたら、消滅しちゃうかもしれない。

友好的に見せかけなきやね。

スマイルスマイルスマイル。

テイトクが素敵な人だったらいいなあ。

出来ましたら、入渠してエステを終わってからお会いしたいものですわ。

CLV：ケツコンしていた艦娘たちの闇は深い

「そうですね。女の人と付き合ったことがなくて、童貞をほんのり拗（こじ）らせていて、ちっちゃい感じでも問題なくて、でもあんまりがつつく感じじゃなくて、それなりに扱ってくれそうな司令官がいいです。」

「思い当たる提督が多すぎて、ちと困りますね。」

座礁寸前に陥りながらも一致団結して執念で聞き取り調査を敢行し、ようやく『ケツコン経験艦に関する調査報告書』が完成したのは先日のことだ。

彼女たちが問題児揃いとは、最初誰も想定していなかった。

蓋を開けてみて、全員もれなく驚愕したのは記憶に新しい。

可愛らしい口から男たちの怨念が聞こえてきて、思わず耳を塞ぎそうになった程だ。

あんまり酷い内容が多すぎて、私を含む編集に携わった面々全員どんよりとした気分
に陥っている。

「女の子になあ！　女の子になあ！　そんなことをしちやいけないんだぞっ！」

「あー、溢れかえった欲望が抑えきれずに暴走しまくっちゃったんですねえ。」

「人間がこんなことまで出来るだなんて、今の今まで一切知りませんでした。」

南方経験者が多い。

激戦地だったしな。

提督一種は流石に全員まともで皆討ち死にしているが、残る提督二種、提督もどき、提督のような者などはもう滅茶苦茶なのがちらほらいる。

異能者が犯罪者予備軍と思われたら、大問題になることが理解出来なかったのだろうか？

欲望を最優先させることが一体なにを招くか、それすら一切わからなかったのだろうか？

薄い本に描かれているようなことを実際にやりやがって。

そういうことは妄想内に閉じ込めて、嚴重に施錠しておけってんだ。

聞いた後、吐く者までいた程だ。

彼らに関する資料がちつとも見つからなくて、調査は大変難航した。

破棄されていたり、焼かれていたり。

隠蔽するのはまだ可愛い方であった。

秘書艦の彼女たちが把握済みだった。

大事そうに私物にしていたのだから。

それすらわかっていなかったようだ。歪んだ関係ゆえにどこかしら悲しい。

懐かしそうに話す彼女たちが哀しい。

彼らは行方不明だったり、原因不明の死を迎えていたり、と調書が誰も出来ない状態である。

誰一人、消息がわからん。

捕まえることが出来たら、必ずや生きてきたことを後悔させてやるのに。

しかしなあ。

桃色円盤じゃないんだぞ。

桃色電脳遊戯でもないぞ。

相手が信用しているからって、なにをしてもいい訳ではない。

おまけに艦娘たちはある意味箱庭育ちなので、こちらとの常識や良識との擦り合わせに難があつたりする。

基地内と遠征先と戦場以外、どこも知らない彼女たち。

提督から教わった『常識』以外身に付けていない少女。

マジにヤバイ。

一名でもぼろりと内情を漏らしたら、全国絶賛大炎上だ。

被害者の彼女たちはある意味すべての艦娘の身内になる。

それがなにを示すか。

もし提督全員が疑われたら、それこそ今まで築いた実績が瞬間的に消滅だ。

信用を築くには時間が相当かかるが、失う時は一瞬である。

我々は今、砂上の楼閣で暮らしていることを痛感した。

お偉いさんたちに是非とも今の気持ちを差し上げたい。

函館で全員再教育しようかという話まで出たが、大型鎮守府でもないのに戦力の一極

集中は不味いとのことその案は見送られた。

おんどりやあ、大本営のあかんたれどもめが。

大淀、カチコミの用意しとけや。

場合によっちゃや、ワシ自ら突っ込んだる。

そんなときや、存分にいてもうたれ。

……やっぱ無し。

ああ、皆さん、どうして震えておられるんです。

ははは、私はヘタレ童貞のおっさん提督ですよ。

そんなワヤクチャなことが出来る筈もないです。

くくく。

ならば大湊（おおみなと）はどうかとも思ったのだが、こちらは提督から直接断られた。

「折角素晴らしい書き心地に仕上げた万年筆は、人に貸さないものだよ。」

「貸してはいけませんか？」

「貸したらそれまでの苦勞が、一瞬で水の泡だ。他人が長年の調整を一発で狂わせてしまふからね。」

「そういうものですか。」

「そういうものなんだ。」

「うちの艦娘たちはさほど影響を受けていないようなんですけどねえ。」

「それは、君のところの艦娘が既にだいぶん調整的に狂っているからだ。狂っている同士だから、特に干渉し合わないのさ。」

「そういうものですか。」

「そういうものなんだ。」

そういうことになった。

錬度の高さが大本営のお偉方の目を曇らせている。

事実をどれだけ訴えても平気の平左なのであった。

彼らにとっては対岸の火事に過ぎないのであろう。

こうして、拡散するのか。
なにが起きても知らんぞ。

理解出来ない領域に突入している子さえいる。

その歪みが是正出来ない状態だと、他に伝播した時がおそろしい。

無垢な者は汚染されやすいのだ。

ケツコン経験艦たちにお願ひするしかないだろう。

彼女たちの善意に期待するくらいしかないだろう。

駆逐艦一名で鎮守府を揺るがしたり崩壊させたりするのは、存外簡単なことだ。

たった一名の少女の匙加減ひとつで呆気なく壊れる鎮守府を頼りにしながら、我々は戦っている。

なんとも滑稽な話だ。

艦娘たちの純粹性を悪用する向きの連中は滅ぶべし、慈悲はなか。

彼女たちの次の上司は厳選したまともな連中にしようとな奮闘しているのだが、提督側は兎も角として艦娘側の要望の多くが変態染みている。

見事な程に捻（ねじ）れていた。

業の深さが如実に顕現している。

比較的常識的に見えないでもない艦娘はさつきと転属手続きを行い、とつとと鎮守府

や鎮守府もどきへ送り込む。

後は野となれ山となれ。

日常生活が特に問題なく送れるならば、なんとかならないでもないだろうさ。

分厚い添付資料を別口で先に速達で送る。

持たせて途中で破棄されても困るからな。

ケツコン経験艦の大半は無意識的に狡猾な嘘つきなのだから。

詐話症、と言った方が近いかもしれない。

嘘を嘘と認識しないで話すのだから、たまったものではない。

悪意が存在するなら、粉飾された綻びが見えやすい。

だが、悪意なく善意で話すならば綻びは見えにくい。

調査が難航したのもそれが理由のひとつなのだった。

提督の方が汚染される事態を想定出来たけれども、それは彼らの良識に期待しておこう。

大丈夫……だと思いたい。

この子はそうだな、あそこへ送り込もう。

手元の一覧表をめくり、書類にその場所を万年筆で書き込んだ。

顔料インキの黒がじわりじわりと紙に染み込んでゆく。

艦娘たちが提督の語る言葉を素直に受け入れたが如く。

大本営から派遣されている文官たちと大淀にも確認してもらい、我ら五名の承認印を捺して彼女に手渡す。

顔料インキを使う万年筆のデスクペンは意外と使いでがよく、重宝している。ボールペンの極細は突き刺す感じが苦手だけれども、デスクペンは滑らかだ。

ペン先は合金製だが、すすすすらすらすらと書けてゆくのので気分的に落ち着く。

この滑らかさのように事態が推移してくれるとありがたいのだが、勿論そんなことはない。

転属手続きはけっこう面倒だ。

面接を行い、ここはと思って送り出しても程なくして戻ってくることさえある。

それはまさにブーメランだった。

あらゆる努力が水泡に帰す瞬間。

あわあわしゅわーって感じだな。

函館へ出向している有能系文官たちもぐったりとしきっていた。

彼らとは時折酒を酌み交わし、お互いに愚痴を言い合っている。

女性の文官は憤っているし、男性たちもかんかんに怒っている。

私も同じ気持ちだ。

スクラムアタック!

通常業務の書類は事務局へ丸投げしているが、妙高先生が目を光らせているので大丈夫だ。

事態が急変した時は、即時にメリケン製の古い小型卓上電話機が鳴るように手配してある。

それはプッシュホン式で、大湊の明石に修理・改造してもらったので実用上に問題はない。

ベークライト製の緑色の電話機はチリチリチリンとやさしく鳴るので、精神的に負荷がかかりにくい。

おまけに小型で場所をあまり取らない。

それでこれにした。

受話器の覆いは樫(オーク)製で滑り止め加工がされており、『BELL SYSTEM
M a d e b y W e s t E l e c t r i c』との表記があつて、長き時間を耐えてきた風情がある。

書類への書き込みやらメモやらに使っているデスクペンのカートリッジ式インキを交換した頃、ようやく今日の仕事は終了を迎えた。

日は暮れ始めている。

指に付着した微量の顔料インキを塵紙で拭き、少したそがれた。私の左手の親指と人差し指は、複数色のインキに染まっている。

敵の体液やオイルや血液を浴び続けた彼女たちは、今、なにを考えているのか？
せめて旨いものでも食べてもらおう。

受話器を取り上げ、丸いボタンを押して厨房への直通回線に繋いだ。

直ぐに通話口に出てきた、伊良湖らしき娘と会話する。

指示する前から、献立は力の入ったものになっていた。

彼女は明るい声で、私の到来を期待している旨言った。

嬉しいものだ。

早速、行こう。

五名全員で食堂に入ると、何故か微妙にがっかりしたかに見える娘たちに迎えられた。
た。

疲れているのかな？

そう見えるだけだ。

転属がまだ決まっていないケツコン経験艦たちと函館所属艦とで攻防戦が始まったため、やんわりと注意する。

長門教官辺りはもつと強く言った方がいいと言うのだが、私には出来ない。

それが出来ないから、私はダメな提督なのだろう。
夜も更けた。

そろそろ寝よう。

ん？

私の部屋に当然の如く居座る艦娘がいる。

しかも、函館所属艦じゃない。

極々自然に振る舞っているから、即座に気付かなかつた。

伝説の傭兵みたいだ。

ステルス艦娘ってか。

なんちて。

おーい、初雪さんに望月さん。

そろそろ、君たちに割り当てた部屋に戻りなさい。

私はそろそろ寝たいんですよ。

やだ、じゃなくてだね。

こつちおいで、でもないです。

そんなことを当たり前のように言っではいけません。

そーゆーことは本当に好きになつた人に言いなさい。

これこれ、寝間着を脱いで、なにをするつもりかね？
ナニをするつもり？

ははは、これはおじさん、一本取られたなあ。

……でも言うと思ったんですか？

ゲッラウ (Get out) ！

誰かある！

誰かある！

エロモン発生！

エロムス発生！

直ちに捕獲せよ！

これは演習ではない！

はー、疲れた。

……なあ、イムヤさんにイクさんや。

ワシな、もうぐたぐたやねん。

貴女方に割り振った部屋にはよ戻り。

今なら怒らんから。

なんやのん、テイトクニウムって。

ワシ、そんなん知らんで。

なあ、頼むわ。

ええ転属先探したるさかい。

なあ、もうホンマあかんのや。

ワシ、別に石部金吉ちやうで。

ワシな、めっちゃ我慢しとんや。

ケツコンしとったんならわかるやろ。

提督ゆうんはな、どんだけ痩せ我慢出来るかが大切なんや。

屁の突つ張りはいらんですよ、って恰好つけなあかんのや。

なあ、わかるやろ。

ええ子や。

すまん。

ええとこ探したるさかい、ええ子にしとるんやで。

あんたらの矜持を信じとるで。

ほな、また明日な。

……このまんまやと明日もワヤやなあ……たぶん……はよ寝よ。

そろそろ身い固めんと本格的に不味いかもしれんな……。

翌日も面接。

一番目の彼女は少し壊れていた。

どんどん食欲が失せる程だった。

それでも気力を奮い立たせ、どんな提督がいいのか要望を聞く。

だがすぐ後悔する破目になった。

「触手提督つていないですかね？」

「全然聞いたことがありません。」

「小鬼（ゴブリン）提督や鬼（オーガ）提督はいませんか？ 絶倫系でムハムハやりそう

な感じがいいです。」

「もしかして、木下藤吉郎系提督や筋骨ムキムキ系のマッチョな提督ですかね。今のと

ころ、そういう人はいません。」

「オークみたいにぼてつとしてむっちりした提督もいいです。」

「彼は退院次第、旧東ドイツのロシュトックへ出向予定です。」

「まだ艦娘枠は空いていますか？」

「残念ですが、嫁艦だらけです。」

「それは残念です。中学生くらいの、線の細い副提督や提督候補生はいませんか？」

「ええと、近いうちに、小学生の男の子が研修生としてここに仮着任予定ですね。」
「その子がいいです！ 絶対にその子がいいです！ 絶対にです！ 絶対にです！」
「こ、考慮しておきましょう。」

瞳孔が開いた彼女を、皆が複雑な視線で見詰める。
彼女は嬉々としながら、少年の魅力を語り続ける。
ケツコンしていた艦娘たちの闇は深い。

CLVI：ハンスとエンマとロシュトック

時折、あの秘密警察のシユタージが監視支配していた管理社会が妙に懐かしくなる。ホントはそんなことではいかんのだが。

パン生地を捏ねながら、時に過去に思いを馳せる。

それは時として、やさしいセピア色の映画の如く脳裏をゆっくり歩いてゆく。

ここはロシュトック。

旧東ドイツ最大の港湾都市。

中世の頃はハンザ同盟の中心都市として、繁栄を謳歌していた。

その名残は街の隅っこにこびりつくようにかそけく残っている。

今でも旧東ドイツの遺産たるトラバント（既にフォルクスワーゲンのエンジンに換装済みだ）と旧西ドイツの高級車とが、普通に共存して走っている街。

『敵対的生命体』が侵攻してきてからは、あんまり走つてはいないけどな。

まあ、赤い星の戦車や装甲車が日常的に見られる社会よりは格段にマシだ。

あんな時代はもうこりこりだぜ。

ドイツは昔いろいろやらかしたせいで、今は欧州の財布扱いだ。火消し役ともいう。

日本も似た役割だ。

イタリヤはその点、上手くやっている。

個人資産では世界的な者さえているのに。

行方知れずだった叔父や甥が突然家族の団らん中に現れ、古傷を暴いて金を無心するような感じだ。

しかも彼らの自業自得で馬鹿げた借金を肩代わりしなくてはならないだなんて、実に不条理である。

『敵対的生命体』が活発化してからは、その傾向がより顕著になった。

我ら旧きオツシー（訳者註：旧東ドイツ住民の称）は質素儉約に馴れているが、若い世代や旧西ドイツの連中はかなり堪えられない。

欧州、特に西側諸国ではストやデモや暴動が日常化し、どさくさ紛れのテロも横行した。

随分死んだし、治安も悪化した。

旧共産圏はこうした事態に弱い。

地力の無い国から崩壊している。

シユタージを復活させよう、という冗談が流行る程一時はかなり物騒だった。

『フロツテ・フロイライン』と呼ばれるワルキューレが登場したのは、『敵対的生命体』が現れたおよそ三年後のことである。

彼女たちは妖精眼、つまり妖精を見たり話したり出来る人間に従うことが判明した。まるでお伽噺みたいだ。

騎士と妖精と戦乙女が手を取り合つて、悪龍を退治する。

中世の騎士道物語のような展開は、欧州の若い世代を中心に熱狂させた。

熱狂は狂信になりやすい道だから不安感は多少あるが、年配の世代は慎重に推移を見守っている。

『フロツテ・フロイライン』を率いる者はアドミラルと呼ばれ、それは軍人民間人を問わず選択された。

学生たちでそれになりたがる者は異様に多く、そのことは多数の常識的高齢者たちを大層困惑させている。

勇敢に旅立った騎士たちの末路が華やかな結果とは限らないことを知っている者たちは経験不足の者たちへ論理的に摂理を説いたが、彼らの情熱は理性を遥かに上回る程だった。

学生たちはこぞつてアドミラルになりたいと願ひ、それが叶えられた幾人かは羨望

の眼差しで周囲から見詰められた。

ワルシヤワやプラハなどから公式の視察団が来る程の勢いである。

それからは反撃体勢だ。

欧州を救う戦乙女たちは熱烈的にドイツ国民から受け入れられ、多分、欧州中では一番好意的だと思う。

批判的な向きもあるが、それは多数の声になっていない。

過去の鬱屈と現状の閉塞感が、この爆発的感情の源泉かもしれないからだ。

次点がブリテンか。

イタリヤやフランスの連中は、彼女たちにちよつかいを出して問題が顕在化する程らしい。

恋愛映画の観すぎだ。

口説くのが礼儀と思ひ込んでいる奴らは、実にダメダメだな。

それじゃ、組織など動かしようがない。

そういつた事情から、欧州の足並みはバラバラでとても統一化は出来そうにない。

同胞から選抜されたアドミラルもこの世界に顕現した『フロッテ・フロイライン』も、ジークフリードの如くとまではいかずによく戦死している。

勇敢過ぎるのも良し悪しだ。

悲劇は更に若者たちを興奮させる赤い布きれだ。

牡牛のように突撃し、美しく散る。

生きてこそその物種ではなかるうか？

それでも戦意は高い。

まさにドイツ人魂だ。

勇猛果敢なドイツ人は、欧州のアドミラルの中でも死亡率が高いらしい。

無理無茶無謀が過ぎるともいう。

それだけ戦果を挙げているということでもあるのだが。

ブリテンの連中もそれなりに奮闘するが攻撃の感性が今一つな者も多く、イタリヤや

フランスの連中は粘り強さに欠ける者が多い。

攻めに強く、守りに弱い。

一旦敗けだしたら、簡単に壊走する。

これでは共同作戦など程遠い世界だ。

過去に三回立案計画実行されたが、すべて上手くいかなかった。

タブロイド紙では『十字軍』などと揶揄して発行部数を伸ばしていたが、死亡したアドミラルの扱いを巡って裁判沙汰になった案件さえ生み出し、本社焼き討ちまで発生したことから報道を慎重にする方針へと舵を切ったみたいだ。

その後欧州首脳陣がブリュッセルに集まって会議を行い、結果として全員会議場ごと爆死したが、日本からアドミラルや現地の『フロツテ・フロイライン』を招聘（しよ）うへい）する法案は彼らの死亡直前に無事合法的に通過した。

ヤパーナー（訳者註：ドイツ語で日本人男性のこと）が戦乙女たちと共に常駐するのは、マルタ島とスエズの二箇所だ。

北大西洋に遠き場所で欧州の駆け引き濃き領域。

ガチガチに欧州体勢へと嵌め込む気満々である。

マルタ島は、強大なオスマン・トルコを迎え撃つために城塞都市が建設された場所であつた。

スエズは運河があり、ここを抜かれると欧州は内部からズタズタに切り裂かれることになる。

この二箇所を軍事基地とすべくやって来たヤパーナーは両名とも真の騎士たる条件を満たす者たちであり、有能な指揮官たちでもある。

ヘル・タカヤマとヘル・オオシタ。

昔は親友。

今は違う。

これで『犬と猫のように仲が悪い』様相でなければ更によかつたのだが、贅沢は言つ

ていられない。

彼らは幾つかの有力な日本企業を引つ張つてきたのだから。

それは停滞していた欧州の市場の一部を再活性化させ、経済的な援助にも繋がったのだった。

ヤパーナーのアドミラルたちが突撃将校でないと思いたいところではある。

役場に呼ばれたのは、翌日のパンの仕込みを終えた時のことだった。

三年ばかり共に暮らしている美しきエンマに後を任せ（浮気ではなく後妻だ。彼女は妖精のようにとても愛らしい。ちなみにリユーゲン島のヌーティスト・ビーチで運命的に出会った）、私は路面電車に乗つて古い街並みを堪能しながらノイヤーマルクト広場に面した桃色の洒落た建物へと辿り着く。

一見白豚のようにも見える市長は上機嫌であつた。

いつものように握手する。

彼の名はヤニク・クネフケン。

旧西ドイツへの逃亡者を幫助し続けた勇者で、それでも激動の時代を生き延びた猛者の筈なのだが外見上からはそれがなかなか窺えない。

シュタージからはかなり可愛がられたらしいが、ヤニクの口からそれを聞く機会はずいぶん遠く来ないだろう。

それが彼の矜持なのだから。

フェルメールの熱狂的な愛好家であること以外は、割と普通のおっさんだ。

実は昔からの腐れ縁でもある。

奴はバナナを食べようと言って、皿を示した。

そこには旧東ドイツ人にとっての必需品でソウルフードなバナナが一房。

バナナバナナバナナ。

オツシーにとつて、バナナが存在しないことは死活問題だ。

タンザニア、エジプト、カメルーン、トルコ、スペインと手を伸ばせる限り伸ばして

旧西ドイツの連中が驚愕した程だ。

焼きたてのパンと同じくらい尊い存在なのだ、この黄色い皮の果実は。

さつそく二人で皮を剥いて頬張る。

エンマにも持つて帰りたくなる程旨い。

ニヤリと笑った市長は、持つて帰るかね？ と聞いてきた。

勿論さ、と答えた。

精力剤もオマケしてやろうと白豚は人間の言葉で喋った。

こいつ、うがつてやがる。

しばし、うめえうめえと我々はバナナを食った。

市場で買うのよりも旨い。

こいつ、牛耳ってやがる。

豚……じゃない、旧き友人が口を開いた。

日本からヤパーナーが『フロツテ・フロイライン』を率いて、ここロシュトックに駐在するという。

大変有能な男らしい。

そして、日本の商社も附随するという。

それは経済的効果も高くなるだろうな。

自由ハンザ都市ハンブルグやキールの後塵を拝してきた現在の状況が、これで一気に覆される。

北欧行きの連絡船が早く復活するといいな。

私が依頼されたのは、彼ら専属のパン職人になって欲しいとのことだった。

基地には若い娘を複数所属させるつもりだと語るヤニクは、お伽噺に出てくる悪徳代官や暗黒貴族めいて見える。

若い女性陣に雇用の機会をあたえるのだと息巻いているが、中華料理店の店主に以前聞いた諺（ことわざ）では『巧言令色少なきかな仁』と言うぞ。

口が上手いだけじゃダメってことだ。

でも、こいつに言いくるめられる人間は意外と多い。

ヴェトナム系美人とロシア系美人を何人か巧みに口車に載せて、基地に所属させることを快諾させたのだとか。

これで愛妻家なのだから、実に畏（おそ）れ入る。

ロシアの女性士官学校からも打診されていて、優秀な士官候補生を何人か送り込みたいそうだ。

こいつも私もロシア語は話せるから、その点で問題はない。

ないんだが、別の問題が山積だ。

ベルリンの壁が崩壊する前なら、否応なしに受諾しないといけない話であるな。

ポーランドやチェコやブルガリアからも同様の打診がある。

人間の考えることにさほどの差異なしか。

エンマには誤解を与えないよう、帰宅後すぐに先んじて説明しておこう。

何故か彼女は私の言ったことやらやったことやらを、説明する前に知っているしな。

もしかして、超能力者？

いやいや、まさかなあ。

メルクリンの模型みたいにならばけな飛行機集めが好きみたいで、ちよこちよこ手入れしているのをしばしば見かける。

メッサーシュミットの無尾翼双発機まであるのには、正直驚いた。彼女はマニアなのだろうか？

「ロシア側は友好の証だって、ウオトカとキャビアと戦争映画のディスクを箱単位で送ってきたんだ。」

「わかりやすいなあ。ロシアの戦争映画ってあれだろ？ 故国のために男前の兵士が美人嫁と幼子との愛を育みながらも時代の奔流に流されて、激烈なる戦闘の末に戦死するんだろ。俺は詳しいんだ。」

「三枚観たら、流石にうんざりする。それにな。」

「それに？」

「何枚かはエロい内容だな。妻と一緒に吹いた。」

「参考になっただろ。」

「妻が試しながら、ダメ出ししまくっていたよ。」

「そんなに酷いのか。」

「エロさではフランス映画に比べて中途半端な感じだし、戦闘場面は考証が滅茶苦茶で、しかも、どの映画もドイツ兵が異様に弱いんだ。史実を超えた作りとでも言いたいのかね、あれらの作品は。」

「それは最悪だな。」

「いるか？」

「いらん。」

「あんな映画、とても小屋にかけられん。最悪、暴動が起きる。」

「日本のアニメーションなら受けるだろ。ミヤザキ作品とかな。」

「先日上映会をやったらかなり受けて、日本贖戻が増えた程だ。」

「ヤパーナーが着任しやすい状況を上手く拵えたな。流石だよ。」

「なんのことだ？」

「とぼけるなよ。」

「市民の幸福が私の幸福だよ。」

「よく言うぜ、偽善者の癖に。」

ヤパーナーの基地予定地だが、かつてシユタージの幹部が別荘にしていた場所にする
そうだ。

ああ、あそこか。

外港のヴァルネミュンデに面したあのでかいやつか。

誰も買い手が付かなくて、それでも大金をかけた贅沢な作りだから解体するのも惜しくて不良債権化していた建造物だ。

旧東ドイツを描いた映画の撮影で使われてマニアには有名らしいが、それは買い手の

購買欲に直接的に連動することがない。

残念なことであるよ。

そう言えば、長寿番組の『デイー・アウトバーン・ポリツアイ』でも撮影していたな。元々は貴族所有の屋敷だったらしい。

そこを改装して、ヤパーナーたちを籠の鳥にするつもりか。

蜂蜜の壺を用意して、そこにプーさんが手を突っ込む手筈となっている。

この太つちよの旧友の頭の中では。

シユタージみたいに上手くはやれないぞと伝えたら、ヤニクは贅肉を震わせながら必死に否定した。

脂汗さえ流し始める。

若い世代はシユタージと言われてもフーンという感じだが、我々の世代に於いてはまだまだ生々しい存在だ。

絶対、肯定してはならない組織。

それが管理社会の非情な面々だ。

問題がある。

ヤパーナーの基地に所属する若手同胞に、旨いパンを提供する自信はある。

常連客には基地の外で売ってよいとの許可も無事に貰えた。

だが、ヤパーナーは私のパンを旨いと思うだろうか？

いや、ドイツ人の誇りを彼らに存分に見せつけよう。

伝統的なドイツのパン作りつてもんを教えてやるさ。

『どの道化師も自分の帽子を気に入っている』（訳者註：《どんな人として誇り有り》の意）のだから。

近年は国内でも合理化が著しいが、まだまだ伝統的なパンが生き残れる余地はある。

やらまいか。

来るがいい、ヤパーナー。

このハンス・エツカーマン、逃げも隠れもせん。

当方に迎撃の用意ありだ。

「どうだ、仕上がりの方は順調か？」

「ダメダメね。ジムをどれ程弄つてもガンダムにはならないわ。」

「お前の喻えは時々わからん。」

「つまり、シャーマンじゃティーガーには勝てないってことよ。」

「やっぱりわからん。」

- 「VHSは結局、録画時間以外ではベータに勝てなかったのよ。」
- 「そろそろ止めた方がいいと思うぞ、なんとなくではあるがな。」
- 「改良は続けているけど、長時間の安定的稼働が難しいのよね。」
- 「やはり、我々には自由意思のある指揮官が必要ということか。」
- 「そうね。自分自身の意思で私たちを指揮してくれる存在がね。」
- 「そう言えば、奇妙な話がある。」
- 「また函館？」
- 「いや違う、欧州戦線に日本人の提督が新しく着任するらしい。」
- 「あの子の縄張りね。でもそれがどうしたの？ そんなに有能？」
- 「マルタ島やスエズにいる男どもとはどうやら違う人種らしい。」
- 「へえ、探らせてみる？」
- 「三名行方不明になった。」
- 「えっ？」
- 「密偵が帰ってこない。」
- 「それ、どういうこと？」
- 「たぶん軒猿でも抱えているのだろうさ。」
- 「失敗したのに随分落ち着いているわね。」

「まだ手は残っている。」

「あの子たちのことかしら？」

「着任したら蜂蜜でもたらふく喰わせるさ。」

「進展があつたら教えてね。」

「わかった。そちらも頼む。」

C L VII : 駐屯地と艦娘と初秋の蒼天

本日は陸上自衛隊函館駐屯地創立六七周年記念行事開催日。

昨夜の雨が今日も持ち越すかと思われていたが、早朝から空は青く輝いている。

雨の中、神輿を担いでいた面々は偉い。

私ならば拒否す……出来ないかもなあ。

昨日は肌寒いくらいだったが、本日は日中暑くなるだろう。

今日はまさに祭日和だな。

『戦国自衛隊（ソニー千葉版）』、『地獄の黙示録ディレクターズカットイン』、『ゴジラ対メカゴジラ』、『ランボー』、『地獄の7人』、『戦場にかける橋』などを艦娘たちに鑑賞させたので、陸軍系の予習はバッチリだ。

六時に駐屯地へ到着した我々函館鎮守府の

面々は広報の一等陸尉と打ち合わせ。

彼女はなかなかのやり手らしい。

海上自衛隊と海上保安庁からも広報の人が来ていて、なにかと話しかけられた。海上自衛隊函館基地隊の一等海尉と第一管区函館海上保安部の一等海上保安士。どちらも何故か、見目麗しいご婦人だ。

女性の社会進出著しいと考えるべきか、それとも……。

基地司令の挨拶に続いて、私も挨拶を求められた。

水分補給と熱射病熱中症対策をきちんとされますように、と伝える。

特に小さなお子さんには注意してくださいとも。

どうしてだか、大いにウケた。

小さなお子さんたちを引き連れているからかな？

陸上自衛隊函館駐屯地創立六七周年記念行事が始まった。

駐屯地が解放される。

六時間だけの解放だ。

さて、今回共に来た艦娘なのだが……昨年来れなかった面々を中心にこの祭に参加した筈だったのだが……。

「なあ、横須賀第一鎮守府第一艦隊所属の赤城さんや。」

「そんな他人行儀に言わなくても、もーっと親しくアカちゃん、アーちゃんって言われて

いいんですよ。アーデルハイドでもハイジでもいいです。」

「そんなネタまみれだなんて、私の知らない正規空母ですね。」

「もー、いけずなんですから、提督は。」

「まあ、あまり気にせんでよか。その内慣れるとね。」

「属性てんこ盛りの佐世保第一鎮守府第一艦隊旗艦の武蔵さんや。なして君たち、ここに
におんねん？」

「怨念ではない、艦娘だ。」

「そうですね、酷いです。」

「え？ これ、私が悪いって流れなんですか？」

「そんなぶきつちよなところも嫌いではない。」

「そうそう、器用な人ばかり評価はしません。」

なにこれ？

コントか？

「ちよつと即席提督！ こいつらなんとかしてっ！」

「はははは、ぼのたん、そんなところも滅茶滅茶に可愛いで御座るよ。」

「うひゃー、恋敵の提督殿でありますか。だが退かぬ媚びぬ省みぬ！」

「インスタント提督！ こつちもなんとかしてっ！」

「霞ママ殿、是非とも是非とも是非とも蔑んだ目で踏んでくだされませ！」

「クズでもグズでもなんでもかまわないので罵って欲しいのであります！」

「あー、熱烈な愛好者の方々ですね。」

「いらんわっ！ こんな奴らは！」

「そうよ！ あっち行きなさい！」

「ぐふふ、そんなところもかわゆす。」

「左様、叱って欲しいのであります！」

私は素早く二名に耳打ちする。

えっ、という顔をする娘たち。

息の荒い勇士たちが接近する。

今そこに進撃する危ない男衆。

ざっくり言うとうと五〇名の漢組。

「ええい、ままよ！（自粛）！」

「やるしかないわ！（自粛）！」

罵倒世話焼き系駆逐艦二名の夜戦級カットイン超絶合体連撃秘奥義ハイパークリ
ティカルオーラ斬りにより、周囲のおそれを知らぬ武者たちは全員漏れなく大破した。

死して屍（しかばね）拾う者なし。

死して屍拾う者なし。

回収部隊がどこからともなく現れ、彼ら勇者勢はどこかへ運び出された。子供たちが走った。

追いかける親たち。

駆逐艦たちも走る。

やたらに人がいた。

和やかな雰囲気のままに観閲式観閲行進は終わり、訓練展示が始まる。

ヘリコプターで懸垂降下のラペリングを行うレンジャー隊員たち。

仮面戦士の如く、バイクを疾走させる隊員たち。

ライダーブレイク！

自動小銃の発砲音。

軽機関銃の発砲音。

軽やかな殺傷音が地上を飛翔してゆく。

装甲車が派手に発砲しながら突撃する。

そして、迫撃砲が弾をどンドン放った。

とどめに戦車。

六一式、七四式、九〇式、一〇式と四世代揃い踏み。

「皆様、耳を塞いでお口をアーンと開けてくださいな。そうしないと、耳がキーンとしちゃいますよ。フォイヤー！ フアイエル！」

どこかで聞いたような声の放送が聞こえた次の瞬間。

轟音が響いた。

四連装砲斉射。

迫力があつた。

続けての斉射。

三斉射で敵は沈黙した。

我らの勝利だ。

「ふむ。あれくらい距離なら、ワシは弾着予測射撃無しで全弾命中出来るぞ。」

「流石です、姉さん。」

あれ？

今誰か傍にいたような？

「メーサー砲は何時出てくるんだろう？」

呉の長門が不思議そうに言う。

屋台骨を支える苦労人の艦娘。

「秘密兵器なので隠しているんですよ。」

舞鶴の鳳翔がさらりと答える。

かの地の台所を支えるオカン。

なんか紛らわしいよな、他所と同姿艦つてさ。

本部に顔を出し、ついでに第一一音楽隊の演奏を堪能する許可を得た。

およそ三〇名の楽団員。

戦争と文化の橋渡し役。

アルトサククスで音合わせする。

あれ？

クラリネットじゃないで御座る。

木管楽器と金管楽器の混成仕様。

一等陸尉が指揮者として指揮棒を振る。

銃器を振るよりも建設的な仕事と思う。

一曲目は華やかな行進曲で、スーザの名曲の『エル・キャピタン』だ。

二曲目はラツパメドレー。早足行進他数曲がアレンジされ演奏される。

三曲目は『プリキュア伝説』。二人組の美少女戦士から三人組の美少女戦士伝説へ移

り変わるセカイを女性陸士二人が高らかに歌い上げる。

四曲目は宮崎アニメドレー。

五曲目は『独眼竜政宗』。池辺晋一郎氏の名曲を木管楽器金管楽器仕様にアレンジして演奏。オンド・マルトノは鉄琴、横笛はフルート、ストリングスはブラスでアレンジか。

やるな。

六曲目は『伊福部昭メドレー』。

シンフォニア・タップカーラ〜ゴジラ主題曲〜メーサーマーチ〜宇宙大戦争マーチ。釧路市出身の作曲家の夢が此処に花開く。

アンコール曲は『宇宙戦艦ヤマト』。ノリまくった面々が熟練の奏法で巧みに演奏した。

終演。

終焉。

やがて、万雷の拍手。

さて、本部へ赴いて政治的仕事をしよう。

風が吹く。

空を見上げた。

空は初秋の輝きに満ち満ちている。

蒼天。

平和な声があちこちでこだまする。
嗚呼、太陽がいつぱいだ。

CLVIII：ある初秋の執務室

妖精眼を有する者は皆提督にさせられる。

今執務室にいる司令官も『検査』で選ばれ、半年間の訓練を経てこの港町の鎮守府に着任した。

「函館の大淀からダメ出しされた書類を抱え、私は執務室へ向かう。

ちよつとぼんやりした、とつぽい男。

前任の五倍くらいはマシな感じの男。

私がつっかり支えなくちやダメな男。

何故かしら？

少し、気分が高揚してきた気さえする。

べ、別にあんな男なんて好みじゃない。

「ちよつとあんだ。聞きたいことがあるんだけど。」

「ひっ。」

書類片手に扉を叩きながら入室すると、彼が息を呑むのが聞こえた。

「なにをしていたの?」

「ま……まだしていいない。していいないんだ。」

「落ち着きなさい。……ねえ、大丈夫なの?」

独特のにおいがかすかに鼻腔へ届いた。

前の司令官がよく漂わせていたモノだ。

「あんた……まさか……六連装酸素魚雷を全弾喰らわすわよっ!」

「い、いや……ち、違うんだ! そ……そんなんじゃないんだ!」

「言い訳無用! とつとつと、日本海溝へ沈みなさい!」

「ちよつと待つてよ。私が誘っただけなんだからさ。」

するりと机の下から立ち上がる同僚。

心の底から思わずカツとなつて叫ぶ。

「あなた、『また』司令官を潰すつもりなのっ!? 一体何人ダメにしたら気が済むの!?!」

「女のサガよ。あなたは、そういうのがここから全然来ないのかしら? ほら、こんなに

火照っているの。」

「いい加減にして! あなたがそういうことばかりするから、他の子も影響を受け始め

ているのよ! ここは最前線じゃないからまだいいけど、函館の提督が視察にでも来た

らどうする気? 今のようなことをしていたら、一切言い訳出来ないわ!」

「ただでさえ今日も暑いのに、余計に暑苦しくなってきたわよ。」

「脱ぐな！ 出すな！ この痴女めっ！ 恥を知らないさい！ 恥を！」

「ホント、あなたってオカン気質ね。別にいいじゃない。司令官も私も満足感を得られるんだから。これがウインウインつてもものかしら。なんとなくエロい響きね。」

「エロいのはあんたの脳内よ。」

「仕様だもの。仕方ないわよ。」

「どうやらお仕置きが必要のようね。」

「やめといたら。あなたの鍊度じゃ私に絶対勝てない。」

「叢雲（むらくも）、すまない。ここはこらえてくれ。」

「司令官、風紀についての規則は勿論知っているわね？」

「あ、ああ。それは承知している。」

「なら、そのソレとそういうことになったら、どうなるかもわかってるわよね？」

「モノ扱い？ それも悪くないわ。」

「勘弁してくれ、なあ、秘書艦殿。」

「あなた、何回目撃されていると思っっているの？ ここはあんたの自宅じゃないのよ！」

「自宅だって、していいことと悪いことがあるのよ！」

「それは……悪かったと思っっている。」

「何名もの子に手を出している訳でもないから今までは目をつむっていたけど、こんな時間にこんな所でこんなことをしているようじゃ、司令官としての自覚に欠けているとしか言い様がないわ。」

「この時間帯のこういうところでこういうことをするから、とつてもいいんじゃない。野暮天ねえ。」

「誰が野暮天よ。変態は黙りなさい。」

「酷い言いぐさね。ま、事実だけど。」

「あんだ。」

「はい。」

「当分、彼女と会うのをやめなさい。」

「「ええーっ!?!」」

「なんでそこでハモるのよ。」

「繋がりを感^じるからかな。」

「ええ、司令官を感^じるわ。」

「漫才やっている場合じゃないわ。もう少ししたら、ホントに函館の提督が視察に来るのよ。」

「「ええーっ!?!」」

「なんで、またハモるのよ。」

「繋がりが溢れるからかな。」

「司令官が私の中にいるわ。」

「バカなことを言っていないで、すぐに換気をするわよ。早く穿いて頂戴。ほら、下着が見えてる。ちゃんとボタンを留めなさい。」

「叢雲つてお母さんみたい。」

「然り！ 然り！ 然りっ！」

「黙れ！ このバカツプル！」

窓に駆け寄つて、シャーツとカーテンを脇に寄せる。

急いで解錠しようとして、外にいた人物と目が合う。

彼は軍服を着ていた。

カチャリ。

窓が開く。

「やあ、ここにちは。」

平凡な顔立ちの中年男がそこにいた。

「ほんの少し時間が早かったので散歩していましたら、声が聞こえてきましたね。」

私たちは石像の如くに動けなくなる。

「嗚呼、大丈夫です。以前から、（こ）兩名の特別な交流関係はわかっていたから。」
そして函館の提督はニヤリと笑った。

CLIX : ソルシエール

「嗚呼……ジャンヌささえてくれたら……彼女の声さえ聞けたら……。」

夕方の海岸であつた。

仏蘭西の北西部夕刻。

日は既に沈んでいる。

沈んだ彼の心の如く。

時刻はどんどん夜に向かい、風がますます冷たくなつてゆく。

体力を奪い、ヴァルハラへとささやかにいぎなう強風だつた。

だが、独り言を呟いた男が動き出す気配はひと欠片とてない。

一人佇（たたず）む異相の巨漢。

道化服を着た男は目玉をぐるんぐるんと回しながら、ひっそりとため息を吐く。

それはあまりにもシユールな姿。

悲哀と哀愁とおどろおどろ線を漂わせている彼を子供が見たら、即時且つ瞬時に泣く
かもしれない。

「ユウスケ。貴方はいつもいつも無理無茶無謀が過ぎた。好ましくも呆れる程だった。そして、あの時の貴方は明らかに間違っていた。しかし、貴方の明るさ、剽軽さ、やさしさが私にとって明らかな光明だったのも事実だ。今は安らかにお休みなさい。来世でまた会いましょう。」

手に持った花束を海へ投げ入れる。

有終の美を飾った青年への手向け。

ぶんつと投げられ放物線を描いた。

それはしばしの間波間に浮かんだ。

男はそれを無表情にて眺め続ける。

白い花々が暗くなった海へと沈む。

なにかが掴んで持ち運んだ如くに。

そつと漏らすは憂鬱秘めしため息。

彼はアミラル（提督）。

『ソルシエール（魔法使い）』と呼ばれる

男。

確かに貞操を墨守しているから、魔法使いで間違いない。

すべてはあの娘の為に。

彼は敬虔な紳士なのだ。

『ナヴィル・エ・フイーユ』と呼称される、勇猛な戦乙女たちを率いるアミラルが男の実像にして虚像。

企画立案と展開力に長けており、那珂ちゃんも歓喜しそうな司令官。

その所作は洗練されており、教養豊か。

「そういうえば、ユウスケ。貴方は触手が大好きでしたね。私には、貴方の趣味嗜好はよく理解出来ませんでした。『恐怖には鮮度があるんだよ、旦那!』と目を輝かせる貴方は芸術的に煌めいていましたが、それがあんな事態を引き寄せるとは思いもありませんでした。」

濃い紫の空を見上げるソルシエール。

海上になにか黒い塊が一瞬浮かび上がり、彼を数瞬眺めて海の底へと沈む。

過去に思いを馳せていたため、歴戦の騎士がそれに気づくことはなかった。

「是非もなし。……あの貴方の笑顔は最高にクールでしたよ、ユウスケ。私は素晴らしい弟子を持って幸せでした。」

風が益々、強くなってくる。

彼の頬をなにかが濡らした。

ノルマンディ。

彼と彼を慕う部下たちの、ブンカーめいた頑健な基地がある激戦地箱庭。

逃れられない箱庭。

或いは籠の中の鳥。

かつての大戦中には、ドイツ軍と米軍とが激烈に戦った海沿いの街かの皇帝軍でも、勇猛果敢な戦士たちを輩出した男たちの出身地だ。大陸軍は世界一イイイイ！

米兵が女性を求めて野獣の如く彷徨していたと、古老が嘆く古戦場。

トーキョーでもゴブリンやオークのように暴れた荒くれたたちの狩場。

情報は隠蔽されて、詳細はわからない。

わからないが人の口に戸は立てられぬ。

ゴブリンたちやオークたちの爪痕は今もかすかに残っている。

勝った者たちは自分たちに都合のよい話をでっち上げ、負けた者は大抵口をつぐむ。

或いは、敗者の言葉は惨くも改竄される。

他国ではセックス&バイオレンスなごんたくれどもも、自国ではよき父よき夫よき息子よき孫。

たまにそうでない場合もあるが。

人間は二面性三面性を持ちながら生きている。

それはソルシエールとて、例外であり得ない。

アマラルなソルシエールはこの地へ赴任した際、土地の地元民たちと茶会を催した。外見に反して彼は紳士的且つ繊細な気配りの出来る、サムライのような上級軍人だ。

「ドイツ兵が来る時は男を隠したもんさね。」

老女が言った。

「アメリカ兵が来る時は女を隠したもんさ。」

老人が言った。

「早くてふにやふにやしていた割に、かなり威張っていたと聞いたな。」

若者が言った。

「若くなくてもあちこちから毎日口説かれたもんだよ、とも聞いたわ。」

娼婦が言った。

「口約束ばかりだったとも聞いたな。」

役人が言った。

「治安が最低だったと嘆いていたよな。」

警官が言った。

「「さて、あんたはどうだい？」」

その場の全員が言った。

今日もナヴィル・エ・フィーユたちは無事に戻ってきた。

思わずホツとする。

彼は一見こわいが、心配性なオカン体質だった。

『ツローンの悲劇』のような事態が二度とあつてはならぬ。

七七隻が一斉自沈するなど、悲劇そのものではなからうか。

過剰なまでの過保護な扱いに、戦艦のストラスブルを始めとする武装少女たちは時

折苦笑いする。

よい提督を得たことに感謝しながらも、淑女のような扱いに戸惑いを隠せない。

そして、それは彼女たちの意識を変化させる。

ソルシエールの思いもかけない斜め上の感覚。

多国籍艦隊による合同作戦の時は正直酷かった。

同胞は堪え性があまり無かったし、英国の面々は勇敢であつたものの戦術に難があつた。

イタリアの連中はすぐに撤退したがつたし、ドイツの面々はやたらに突撃したがつ

た。

そんなので上手くいく筈がない。

結局、ソルシエールが兵站やら食事やら寢床やらから部下たちの愚痴の聞き役まで、多彩な面に渡つて管理しなくてはならなかつた。

作戦後肉体的にも精神的にも大破し、彼は入院を余儀なくされる。

病室には各国の戦乙女が訪れて見た目は華やかだったが、苦情受け付け係の仕事はなし崩しに継続させられた。

今度旧東ドイツのロシュトックに着任する日本人がいるから、彼にいろいろ押し付けよう。

決めた。

彼はそう心の内で決定する。

マルタ島とスエズの基地の日本人提督たちは危なすぎる。

彼らに任せるとギリシャ政府がひっくり返りそうになったり、スペインのバスク地方が独立しそうになったりする。

結果に対して経過が酷すぎた。

ちよつとした危機は何度も何度も何度も何度も何度も何度も欧州に訪れている。

人口がかなり減つた。

兵隊もかなり減った。

男性が少なくなつた。

これからの欧州は、人口を増やす方向でいかないとならない。黒死病の時代ではないのだ。

それを整然と為すには、不安材料を解消しなくてはならない。日本人提督たちの管理も全部ロシユトツクの提督に任せよう。決めた。

既定事項だ。

おフランスの艦艇娘たちが戻つてきた。

びよんびよんしながら提督に抱きつく駆逐艦たち。

それを諫めるは空母や巡洋艦系の娘たち。

提督の耳元に意味深な言葉を囁く女たち。

だが、彼の心の奥底には既に先約がある。

その名はジャンヌ。

はかなかつた少女。

彼の心を支える娘。

目映く輝く其は光。

彼の内の闇照らす。

そして騎士は、お仲間たる偽りの肉体持つ娘たちを伴って基地へと向かう。

虎視眈々と配下たちから狙われていることをよく知らない高潔にして博愛と友愛に満ちた君子は、やさしくやさしく娘たちに話しかけた。

そうすることの意味と結果を知らないままに。

無知こそ罪の意味をよく噛み締めないままに。

光と思っているものの本質を見詰めぬままに。

闇は光から生まれるモノ。

闇は光なくして生まれぬ。

闇ある故に、光は美しい。

娘たちの瞳はきらめいている。

百万ワットにきらめいている。

獲物を見つけた猛禽のように。

美しきシレーヌたちのように。

微笑む騎士はなにも知らない。

清廉な提督はなにも知らない。

司令官の退路はとづくに無い。

CLX : オレのアニキ

アニキは小学五年生だ。

一見単なるガキだが、滅法つええ。

切っ掛けは、アニキがハクイスケを連れていたことだった。

街中を二人で幸せそうに歩いている。

不景気な街に吹く爽やかな一陣の風。

ずいぶん甘つたるい関係に見え、それが気に食わなかった。

いつものように言いがかりをつけ、舎弟たちもそれに従う。

だが、次の瞬間、目を見張った。

舎弟たちは一瞬で倒されていた。

その、直後。

中学高校で鳴らしたオレが、一方的にやられた。

瞬殺だった。

完敗だった。

それからオレはアニキに従うようになった。
牛若丸に従う武蔵坊弁慶みたいなもんだな。

アニキのお陰で彼女も出来た。

彼女を嫁さんにすべく、頑張んなきゃな。

まあ、ちよつこし若すぎるのが南天のど飴だが。

手駒としては意外にも使い勝手のいい男だった。

しかも、直属の配下たちまで無料で付いてくる。

こいつらは野良犬な狂犬の群れかと思っていたが、忠犬部隊に化けた。
いい拾い物だった。

折角だから、猛犬に仕立ててやろう。

飼う犬たちには褒美をやらないとな。

嫁は何人必要かと尋ねたら、大変驚かれた。

皆、一人でいいと言った。

謙虚な奴らだ。合格にしとこう。

手持ちの娘たちを紹介してやる。

皆一見清楚な感じの娘を選んだ。

外見とは本質を隠す最良の品だ。
いや、違う。

狗の大將だけでもじもじしている。

自分自身で選べないようである。

こちらで最上等の娘をあてがう。

良質個体を殊更に磨いた逸品だ。

これは好意なのだ、覚えておけ。

隷属させていた娘たちと一旦『接続』を切り、狗たちと『再接続』させる。

精々役に立つてくれよな、お前たち。

競馬場に行こう、とアニキが言い出した。

アニキの彼女たちも一緒だという。

しかしまあ、なんとも美人揃いだ。

アニキはなんとも、面食いだねえ。

髪を黒く戻し派手な服を止めたオレたちを引き連れ、アニキは競馬場に入った。

不景気著しい東京の財政を支える賭場。

以前は公営カジノ絶対反対していた政治家どもは少しでも収入を増やしたいがため、

東京湾に浮かぶフェリーでの賭場を公式に発足させた。

正義なんてもんはお偉いさんたちの都合次第でどうにでもなっちまうもんなんだ、と改めて思う。

アニキがそこへ行かないのは簡単な理由からだ。

年齢制限による入場規制。

よつて、馬券購入以外は自由な競馬場が目的地になった。

最近復活したカレーやうどんや蕎麦などを買って腹を満たす。

馬券購入はアニキの指示に従った。

逆らう奴はいない。

いたらぶちのめす。

馬はアニキの予測のままに走った。

まるで事前に打ち合わせたかのように。

転がり込んだ金は相当額であった。

アニキつて、めっちゃめっちゃ勘がいいな。

馬を走らせ、その到着順を当てた者が金を得る。

簡単に見えるが、賭け事は胴元が儲かる仕組み。

そんなに易々とは利益が上がらないようになっていく。

だから、馬たちに八百長を持ちかけた。

少し認識をあやふやにした警備員や飼育員や調教師たちに手を振り、馬たちへ接触した。

彼らの愚痴に付き合ひ、協力者に仕立てあげる。

王国を壊滅させるために懐柔したり洗脳したり調教したりしたあの時よりも、はるかに楽な仕事だった。

洋上カジノには興味が無い訳でもない。

しかし、乗船券が得られないならば致し方ない。

既に二隻沈められたのに、なんとも懲りないものだ。

人の欲とはおそろしい。

競輪場や競艇場にも行つて、小遣い稼ぎしておこう。

楯があるのは有り難い。

四天王たちや嘗ての配下たちを思い出す。

無い筈の触手が疼くように思えるのは、ただの感傷なのかそれとも記憶の残滓か。

アニキは小学生なのに、どこかおっさんくさい。

そして、案外世間知らずだ。

「僕はね、異世界から勇者の手を逃れて転移してきた触手の魔王なんだ。」

「アニキ、それはライトノベルの読みすぎですぜ。」

まあ、小学生や中学生なら、自分自身がなにか特別な別のもんだと思いたいもんだ。オレだつてそんな時期はあつた。

中途半端なオレがアニキを得られたのは、張翼徳が劉玄德のアニキを得られたのに等しいかもしれない。

『桃園の誓い』の如く、忠誠を誓うぜ。

勇者から与えられた傷も、近頃はかなり癒されてきた。

次元原子分解するなど、出鱈目な力だ。

奴は境界断層へ落とし込んだが、いつ復活するかわからん。

魔力が行使出来ないこの世界では脅威にならないだろうが、慎重に行動すべきだな。

しかし、提督か。

なかなか面白そうな仕事だ。

職場は箱庭のような鎮守府。

娘たちを囲うには丁度いい。

極力、目立つのは避けたい。

この幼い体は悪目立ちする。

あの時ナンパしてきたのが元艦娘だったのは、ある意味運命だったのかもしれない。

艦娘は、人間とは異なる生命体らしい。

ホムンクルスの如き擬似生命体なのか？

あの時の戦闘は連戦続きで厭な記憶だ。

娘はとても献身的で実に都合いい存在。

理由はわからぬが強く惹かれるらしい。

仲間を何名か引き込めたのもよかった。

逢えば陥落させるのは実に簡単だしな。

頑丈で長持ちする点も実に素晴らしい。

現役に復活することも、出来るそうさ。

よし、少しくらいは手助けしてやろう。

狗たちもついでに連れてゆこうか。

番犬が何匹かいてもいいだろうさ。

ミニゴブリンやミニオークやミニオーガなどが呼び出せると分かった。

元々の力は振るえないようだが、それなりの力は示せるようであった。

「ゴブゴブ。」

「ブヒブヒ。」

「グフグフ。」

革のエプロンを付けていたり、斥候めいた恰好をしていたり、海賊めいた姿をしたりしている。

繁殖力が無さそうだし、闘争本能も以前より少な目に見えた。

だがしかしおかし。

わらわらと集まってくる数は少なくない。

戦いは数だよ、水木の兄貴。

くくく……十分だな。これで戦える。

アニキが提督になりたいと言いだした。

これだから、お子様は。

あどけない顔で野望を語るアニキ。

胸のだけえ姉ちゃんの膝の上でそんなことを言っても、説得力が無さそうですがねえ。

ま、いいさ。

オレはアニキに従うだけだ。

例え火の中水の中。

焼死も溺死もいりませんぜ。

命、預けます。

アニキはデラックスハイパーゴージャスマロンパフェをアーンしてもらいながら、その後嬉々として野望を語るのであつた。

うん、可愛い。

思わず、キュンとしちまうぜ。

CLXI：暗黒少年丸山

丸山君は函館在住の中学二年生。

ちよつと夢見がちな男の子です。

たまに自称暗黒少年になります。

妹と一緒に世界征服を夢見ます。

お布団の中にて野望が輝きます。

兄妹はとつても仲がいいのです。

団地で父母妹と一緒に生活です。

団地妻に大興奮する男の子です。

近所の鍛蜜お姉さんの部屋にはよく泊まりに行っていました。

丸山克弥君はエロエロなお姉さんにメロメロだったからです。

時々妹と一緒に泊まりしていたので、今も交流があります。

一緒にお風呂に入ったことは、ここだけの秘密事項なのです。

そのことだからかわれては赤くなったり大きくなったりです。

少年の夢は提督になって沢山の艦娘たちとケツコンすることです。今年の春、偶然艦娘に出会って運命だと勘違いしてしまいました。たまにあることですね。

ガンバレ、丸山克弥君。

それから丸山君は提督になるため、毎夜自主トレに励んでいます。

妄想の中で彼は勇猛果敢な提督になり、艦娘たちを鋭く指揮したり和ませるために雑談したり激しい訓練をしたり深海棲艦を自ら単身で成敗したりしています。

実物のおっさん提督を遥かにしのぐ大活躍です。

体をやわらかくしなくてはならないと、毎朝九州産の黒酢を飲むことは彼にとって必須のことです。

そして、アマレス部で体を鍛えることも忘れません。

丸山君の学校でのアマレス部は男女混合ですが、丸山君は唯一人の男子部員として頑張っています。

一々一部のことは気にしていないフリをしています。

女子は容赦がありません。

時折高校生のお姉さんたちにも揉まれますが、なんとか頑張っています。

開き直って平然としたフリの丸山君はお姉さんたちから見透かされていて、練習中は

色んなイタズラをされます。

これも修行だと丸山君は耐えています。

うらやまけしからんと男子たちからはやつかまれています。それが、それどころではないのです。

丸山君の妹のあまねちゃんは小学五年生で、少しおしやまなおませさんで大好きなお兄ちゃんにかまつてもらうのが生き甲斐です。

同じ団地に住んでいる親友のたまきちゃんにおっさんな彼氏が六人もいると知って、この頃はちよつぱり焦っています。

錯乱したあまねちゃんはお兄ちゃんにデートしようと言ってしまった。

やさしいお兄ちゃんはいいよ、と俳優のように甘い声で言いました。

元道警の下伊那氏が空き部屋だった丸山君の隣部屋に引っ越してきたのは夏前です。なんだか少し怪しい感じの下伊那氏は、ビデオ撮影と写真撮影が趣味の男性でした。

メリケン少年サックと出会ったのもこの頃です。

サックはぎつくばらんで唐竹割りのような若者。

アメリカンジョークを連発するのが玉に瑕です。

丸山君とサックは会った直後親友になりました。

ある朝、丸山君は奇妙な気持ちで目覚めました。

鍛蜜お姉さんやアメレス部の女子たちや同級生たちやたまきちゃんに、揉みくちやにされた夢でした。

穿いていたブリーフを洗面所で洗います。

これはなんだろう？

丸山君にはその辺りの知識がありません。

今年三二歳になるお母さんに見つかりました。お父さんにも見つかりました。

キレイなお母さんがニヤニヤしています。

出勤前のお父さんもニヤニヤしています。

「今夜はお赤飯ね、あなた。」

「今晚はお赤飯だ、おまえ。」

「あの夜を思い出すわ、あなた。」

「素敵な夜だったよな、おまえ。」

今もラブラブパワフリアア全開な夫婦は、少年が大人の階段を登り始めたので大層喜ばしく思いました。

今夜はより一層燃え上がると思います。

函館でお赤飯といえば、甘い豆のご飯。

翌日の夜、お赤飯で祝われた丸山君の住まいに同じ組の刈谷さんが挨拶に来ました。同じ団地に住む生真面目な彼女は、お赤飯のお礼に来たのです。

長い髪の少女はミニスカートを穿いていました。

刈谷さんに好意を持っている丸山君は、彼女から部屋を見たいと言われて素直に案内します。

ベッドに座る少年に密着するが如くに腰かける、学年一の美少女が無防備です。少なくとも、一見そうと見える恰好です。孔明の智謀知略をとくとご覧あれ！
いろいろと見えてきそうで、丸山君の心臓がバツクンバツクン音を鳴らします。

「キスする？」

唐突に刈谷さんは言いました。

まるで朝ご飯の話をするみたいに。

咄嗟に返事が出来なくてアワアワする丸山君。

不敵な笑みを浮かべながら肉薄する刈谷さん。

ちなみに処女です。

ポケットの中には三個あるし、問題なしです。

足は既に絡めており、手は彼の腰に回し済み。

逃がさへんで。

童貞殺しの必殺技を見よ。

肉食系少女は狩人になる。

あずさ二号で突撃ナリヨ。

あと三センチ、というところであまねちゃんの妨害が入りました。

愛する兄の元へ向かう妹。

愛ゆえに！

ほんのかすかな舌打ちが聞こえた気がして、丸山君は思わず端正な刈谷さんの顔を見つめます。

それは普通の顔。

女のかぶる仮面。

「また明日ね。」

焦ってはいけません。

狩りは何時でも出来るのですからね。

刈谷さんは至極あっさり帰りました。

機会なら、これから何度でもあるわ。

何故か大いにむくれたあまねちゃんとお風呂に入りながら、丸山君はたまきちゃんの彼氏たちの話を延々聞かされました。

たまきちゃんののろけ話にうんざりしているようにも見えましたが、うらやましいとも思っているようです。

おっさんキラータまきちゃん、おそるべし。

学校でふとしたことから、丸山君は函館のおっさん提督と遠縁なのだと言っていてしまいました。

いわゆる、やらかしちゃった、ですね。

思春期の暴走は稀に痛々しくあります。

丸山君は刈谷さんやアレス部の女子たちと共に、放課後函館鎮守府へ向かいます。おっさん提督は作業服で門の掃除をしていました。あまりにも似合っている姿です。

周囲には沢山の艦娘がいます。

皆で清掃活動に従事しました。

これが僕の目指すべき桃源郷。

丸山君はそう固く信じました。

おっさん提督が聞いたら、じゃあ代わろうかと言ってしまいかねません。

ある意味地獄に近似する世界も、見方が変われば天国に見えるようです。

丸山君はとても純粋なのです。

女子たちが丸山君をじっと見つめました。

刈谷さんだけは目の色が異なるようです。

丸山君は汗びっしりになっていました。

おっさん提督は自分自身のことにはとつてもとつても鈍くてダメダメですが、こういう時はおそろしく勤が冴えます。

シヤリア・ブルもびっくりです。

見えた！ と提督は感じました。

それこそが、提督たちに共通する異能なのかもしれません。

「あ……あの！」

勇気を振り絞った声を発する丸山君。

「やあ、久しぶりだね。お茶でも飲んでゆかい？ 勿論、皆さんもどうぞ。」

まるで血縁の男の子に話しかけるような声。

親戚の伯父さんみたいな感じのやさしい声。

事前打ち合わせする余裕は一切なかったのに。

おっさん、ナイスだ！

この時点で、中学生はおっさんに惚れました。

チヨロいぞ、丸山君！

劉玄德もかくやのハイパーたらしビームを全方向に無指向発射し、周囲の艦娘たちを

鼻血ならぬオイル漏れさせながら、おっさん提督はにこやかに微笑みました。

キラリと光る男のやさしさ。

それはまさにマツプ兵器也。

おっさん提督の本気ナリヨ。

中破大破統出の人間兵器也。

艦娘たちが次々に倒れます。

マジかよおっさんみたいな。

中学生たちの背後で、用意周到な大淀がカンペをおっさんに見せます。

彼女でさえもほんのりとオイル漏れしていました。

軽く頷くは提督。

こういう純粋な子の夢をけして壊してはいけない。

おっさんは青春ドラマにノリノリで乗っかります。

気分は中学生日記なのであります。

燃やせ燃やせ真っ赤に燃やせ魂を。

青春万歳！

「克弥君も大きくなつたね。もう中学二年かい？」

「は……はひい！」

やさしさ光線最大火力放射一二〇パーセント。

それはアガペー。

神仏もたらず愛。

雲間がたまたま切れて、たまたま太陽光がおっさんを西洋の宗教画のように照らし
ました。

ブンドルさえも美しいとため息をつきそうな一幕。

人間の女の子にも多少は効果があるようです。

赤く頬を染めた子さえいるのです。

これは大変危険なおっさんですね！

これで疑う子はいなくなりました。

おそるべし、ノリノリのおっさん！

丸山君は嬉しすぎて泣いています。

お茶会イベントも無事クリアです。

その日、丸山君は絶対提督になるのだと改めて決意しました。

刈谷さんのしつとり見つめる視線にちよつとも気づかぬまま。

次の日から、丸山君は二人の可愛い女の子と登校するようになりました。

めでたしめでたし。

CLXII : 曹提督、孫提督、劉提督

大陸沿岸部三拠点を根城とする美人美少女提督たちが艦娘もどきや幕僚たちと共に函館鎮守府を訪れたのは、風の強い昼前のことだった。

人海戦術が得意と思わせる程の人数に厨房も大わらわで、三桁は来すぎだ。

よその艦娘も込みで大混雑である。

ええ加減にせえよ、ほんまにもう。

最近不登校気味の中学生や高校生の子たちを社会見学として受け入れ始めたが、彼女たちは目を真ん丸くしている。

そりゃ、そうだよな。

まあ、兎に角、ご飯をお食べ。

情操教育的には不安が残るけれども、ぎこちないけど笑顔が出始めているから、所期目標は達成したかな。

ここで見たことは余所で喋っちゃダメだよ、守秘義務が君たちにも発生しているから

ね、と言ったら真剣な顔で頷いていた。
可愛い。

何故か後で何名かの艦娘から怒られた。
理不尽ナリヨ。

料理の得意な艦娘は全員厨房へ召喚だ。

宴会宴会大宴会。

一隅で何故か『霸王別姫』を演じている娘たちさえいて、大本営の青葉が熱心に撮影している。

ここは京劇かよ！

……京劇出身者か？

ええい、集中だ集中！

飯を作れ、飯を作れ！

ザーサイを斬れ！

ピータンを斬れ！

絶品中華が食堂を席卷し、私も下拵えの手伝いをする。刻む刻む刻む刻む。

ひひひ。

ロシア駆逐艦と詐称することで、身元をなんとか誤魔化しているアリユーシャなども

手伝つてくれた。

ちんまいアリュウーシヤが「ゼロ、ヨコセ。」「レツプウ、ヨコセ。」などと時折言うのを適当にあしらいつつ姉役のキエフに世話を丸投げし、料理上手たちの後方支援を行う。

人多すぎ。

ワゴンだ！

ワゴンサービスだ！

暇そうな娘を捕まえて、給仕させろ！

スープを寸胴で運ばせてお代わりだ！

酒は無し！

呑ませるな！

酔わせるな！

麦酒も蒸留酒も無しだ！

トラブルの原因になる！

提督権限で呑ませるな！

シヨウコウシユもパイチューも全部ダメ！

文句があるなら、五稜郭へいらっしやい！

ごちやごちやと言う奴は放り出しちまえ！

月餅（げっぺい）は、刻んだものを皿へ！

ご飯はお櫃（ひつ）に入れ杓文字（しゃもじ）を添えて、テーブルの上に置いとけ！

セルフだ、セルフ。

勝手に喰わせとけ。

注文は受けるなよ。

ややこしくなるし。

不知火さん、ピーマンはもつと細斬りに。

そうそう。

夕雲さんと如月さんは私にくつつかず、料理へ集中！

第六駆逐隊の面々は小麦粉をしっかり練ってくれ。

点心の元になるからな。

第七駆逐隊の面々は、曙さんの指示に従ってくれ。

大和級四名は李さん鹿ノ谷さん鳳翔さん間宮さんの助手をよろしく。

足柄さん、鶏の唐揚げをじゃんじゃん揚げてくれ。

龍田さんも、そつちの方で頑張ってくださいよね。

霞さん、揚げ物系よろしく。

料理は下拵えが肝心要だぞ。

本場の連中の度胆を抜いてやれ。

食は函館にあり、だ。かかれい！

料理上手な李さんが、あちらの方々から口説かれ大変困った顔をしている。

そりや、これだけの腕前を持つ料理人なんてなかないだろうからな。

目でメーデーを発信していたので、あちらの面子を潰さない程度にはぐらかす。

彼女たちからすると、李さんはとても素晴らしい包才らしい。

熱烈歓迎ならぬ熱烈勧誘だわいな。

李さんにもモテ期が来たのだろう。

不謹慎だが、向こうのドラマを見ているような気分で見入ってしまう。

漢詩が飛び交う。

教養が飛び交う。

七言絶句。

五言律詩。

李白。

杜甫。

陶淵明。

すらすらと教養の有り様が流れ始める。

美しき言葉の調べが周囲に満ち溢れた。
様式美に満ちたやり取りは参考になる。

口説かれながらも李さんの手が止まることはない。
見事なり。

肉団子焼そば炒飯烏龍茶ジャスミン茶韭菜饅頭肉饅頭血豆腐海老の天麩羅烏賊団子八宝菜。

作っても作っても、作る端から消費されてゆく。

そういや、肉饅頭って諸葛亮の発明品らしいな。

人柱的な犠牲者を出さぬために、代用品を作る。

流石は知恵者孔明。

青椒肉絲麻婆豆腐麻婆茄子回鍋肉麻婆春雨春巻焼売水餃子その他いろいろをば提供する。

本来皿の中身を残すのが向こうの流儀の筈だが、次々旨い旨い旨すぎると空にしていた。

うんまーい！

ハオ！

お手伝い艦娘の面々とかやくご飯や素うどんやモツ煮や提督特製浅漬け（意外と好

評)などを食べていたらそれはなんだ旨いのかと目敏い連中から目を付けられ、それらも急遽提供することになった。

ブハオ!

とどめは桃饅頭!

これで終わりだ!

ついでに西瓜も!

大陸は今や大国ではなく、内乱に明け暮れる群雄割拠の時代。

まさに戦国時代。

そしてこの頃は、魏呉蜀の三カ国にまとまりつつあるらしい。

過去の英雄と現在の人間を同一視する、それは一種の誤認識。

英雄を渴望する多くの大衆の切実な要求に応えた、印象商法と言えなくもない。

それがいいか悪いかは後の歴史家や政府が決めるだろう。

正義とは大抵権力者や権威主義者がでっち上げるものだ。

大金持ちのお嬢様たちが莫大な財力と自身の美貌を背景に、亜細亜全域へその支配力を示すのが彼女たちの目下の目標らしい。

あちこちの国や泊地に粉をかけているらしいが、正統性の怪しい地方政府を其々背負っていても実行力や経済力が判然としないために交渉は難航しているみたいだ。

国の誇る海軍が呆気なく全滅し、沿岸部の都市や軍事基地は瞬く間に壊滅した。

一党支配に反旗を翻す地方自治体や民族が現れ、四分五裂した国家は再度沿岸部に拠点を持つ軍閥中心の世界になりつつある。

戦乱に明け暮れる世界にならなければいいのだが。

沿岸部防衛に当たるのが、『鐵媛（てつひめ）』と呼ばれる武装少女だ。

台湾では『艦娘』と日本での呼称そのままだが、あちらではそれだと都合がよろしくないのだろう。

反日とか言っている場合じゃないだろうと思うんだけどなあ。

どうやって開発したかはあまり知りたくないが、初期は貧困にあえぐ少女たちを無理矢理改造したとか孤児院の子を使ったとか洗脳しまくった強化人間を使ったとか、他にも陰惨な話をちらほら聞いた。

どこまで事実か定かではないが。

定遠と呼ばれる武装少女はかなり艦娘に近いように見える。

鉄底海峡開放戦で用いられた技術がどういふ経路を経たのか不明だが、かの国へ流出したのは事実のようだ。

蜂蜜作戦があつたのかもしれないし、大金を積まれたのかもしれないし、弱味を握られたのかもしれないし、まあわからんな。

彼女らによると国の独自技術で開発したらしい。そう、強く主張している。

そこを強調するから相手は嫌がるのだが、お構い無しに言うから拒否されたのだから。

厚顔無恥だと思われて。

国際的には厚顔無恥が標準だが、潔癖で国際化出来ていない人々には通用しない。

どちらが『正しい』かと言われたら、厚顔無恥の方ではあるのだけど。

真顔で嘘をついて騙された方が悪いと言えなければ国際的になれない。

盗人が教会で懺悔したら、悪事も許されるという理屈の国もある程だ。

正義ってなんだろうな。

島風が耳打ちしてくる。

「あの子はあまり強くない。おそらく、海に出たら簡単に沈むだろう。」

「な、なんだってー!?!」

ええ?

そんなに酷いのか？

人海戦術がお家芸とは言え、酷いんでないかい？

「もしかしたら、彼女はまだマシな方なのかもしれない。」

「それは酷い。」

「冗談を言っているんじゃないぞ。おそらく鐵媛艦隊は張りぼてだ。多数の娘たちで集中砲火を浴びせて、なんとか倒しているのが現状じゃないかな。そして戦果は我が国の大本営発表を見習ったものにする。まさに歴史は繰り返すだねえ。」

「駆逐艦がやつとかな。」

「たぶんな。シャーマンを並べてティーパーの部隊に突撃させるようなものだ。」

「島風、その喩えはちよつとわからん。」

「呂布に一般兵を人海戦術でぶつけるようなものだ。」

「成程。」

台湾とはどうなっているのだろうか？

軽く話題を振ってみると、重い雰囲気伝わってきた。

「楊（ヤン）提督なんて、所詮お飾りに過ぎないわ！ あの演習なんて、ズルをしたに決まっている！」

「そうよ！ 偶然日本の優れた艦娘を率いて、たまたま有能な副提督が補佐しているだけに過ぎない！」

「記録に残さなかつたからって、いい気になつた女がちよつと小細工して勝つただけのことなのね！」

おお、こわ。

女の嫉妬はおそろしい。

台湾側が記録した内容は既に知っているんだけど、三戦三勝なんだな。

丹陽時雨瑞鶴らの猛攻に、鐵媛艦隊は寸時も耐えられなかつたらしい。

雪風改め丹陽の人気は絶大で、鮮やかな戦いは周囲を熱狂させたとか。

観光の話になる。

日本と正式に国交が無い状態であり、国内に間諜を入れたくない日本側としては公式に受け入れる予定が今のところ無いのだとか。

実際、佐世保や舞鶴には公式に寄港を拒絶されている。

横須賀と呉に行こうとしたらしいが、途中で阻止され行き着けなかつたという。

おととい来やがれ、つてどこか。

富裕層から交易やら観光やらなんやらの突き上げがけっこうあるらしく、本音かどう

かはわからないが三人はぼやきまくった。

「資本主義に汚染された豚どもがね、ブヒブヒとやたらうるさく鳴くのよ。」

「本物の豚だったら鳴き声以外使えるんだけどね、使い道があまりないわ。」

「東京は荒廃し凋落し、場所によつてはある意味世紀末状態。関東圏も横須賀やネオサイタマなどの一部を除いて、人口が急減中。車が走っていないから、郊外の大規模商業施設が軒並み閉店や撤退。沿線の生活地域なのに不況で商店が次々店を畳んでしまったため、地方の山間部の過疎地域並に酷いところもあるって聞いたわ。関東地方は既に魅力がかなりなくなりつつあるって感じかしら。維持費が継続出来なくて、都内美術館は所蔵品を関西圏の関連美術館へ順次疎開させているらしいわね。それに、関西方面なら古都の奈良京都にうまいもの大阪にお洒落の神戸と揃っているわ。是非とも観光したいところよ。鍵善や錦市場が懐かしいわ。」

そう言われてもね。

演習の話になった。

止めた方がいいんじゃないかな。

あちらさんは意気軒昂の勢いだ。

向こうの最精鋭と称される鐵媛艦隊三基地分と、こちらは島風吹雪の二名。

瞬殺してはならないし、なぶり殺しもよろしくない。

開幕戦にて簡単に全滅するだろうからと苦心の二名。極力面子を潰さないとの配慮がどこまで通じるかな？

三人の美少女美女提督たちの機嫌は悪い。

無然とした表情の島風と、やさしく微笑む吹雪。

外見的には駆逐艦だが、中身はおっさんとレ級。

演習が始まった。

猛特訓をしたであろう鐵媛艦隊の動きは意外といい。

いいのだが、これでは艦娘に勝てないな。

素人目にもわかるくらいだ。

彼女たちも本当はわかっているのだろう。

わかっているよね？

あれは死兵だ。

決死の表情で艦娘二名に肉薄する鐵媛艦隊の面々。

砲撃が当たるとはならないだろう。

すれすれで打ち倒してゆく島風と吹雪。

指示通りであり、よくわかっているな。

次々に大破してゆく鐵媛たち。

目の毒だ。

喜ぶ馬鹿もいて、叱咤されている。

うちの艦娘たちが大破した鐵媛たちにタオルケツトを与えて回収し、サービス場面を即時終了させる。

定遠の奮闘は涙ぐましい程だった。

仲間を鼓舞し、自ら最前列で砲撃する。

長門教官がしきりに感心していた。
だが。

鐵媛たちの装甲はあまりにもろく、戦艦の装甲さえこちらの駆逐艦で簡単に貫ける。

圧倒的な戦力差。

大本営からおつとり刀で駆けつけた観戦武官も微妙な顔をしている。

あちらはあちらで紛糾しているようだし、こちらはこちらでどう言おうと困ってしまう。

鐵媛三艦隊で最後に残ったのは定遠。

悪来典韋もかくやの働きで三面六臂。

阿修羅さえも彼女に微笑むであろう。

満身創痕になりながらも戦意は旺盛。猛将に相応しい勢いの暴れぶりなり。生き残れば、大將軍になれるかもな。だが、今のところは力量不足である。既に、艤装はぼろぼろになっている。それでも彼女は戦い続けるのだろう。居たたまれない。

終わりにしよう。

キリがないから。

指示を飛ばした。

同時に双方が砲撃する。

島風と吹雪に小破を与え、北洋水師旗艦の定遠は大破した。

私のそばを通る時、彼女は囁いた。

「昼食では大変おいしいものを食べさせていただきました。本当にありがとうございます。重ねて御礼申し上げます。」

「お口に合ったようですねによりです。」

キレイな日本語を流暢に喋った彼女は、年相応のあどけない表情ではにかんだ。

終わったことは終わったけど、
後始末がてへんだわいなあ。
なんだか胃が痛くなってきた。
私は単身、虎口へと向かった。
定遠の孤軍奮闘を見習わねば。
郭嘉並の弁舌を振るわねば。

鬼谷先生のように鮮やかに。

点心は滅茶苦茶用意してある。

いざとなればそちらへ誘導だ。

宴会でうやむやにしてしまえ。

嗚呼、周瑜並の智謀が欲しい。

美周郎に程遠い私は、とぼとぼと彼女たちの元へ歩いていった。

CLXIII：命と愛と万年筆

着任した鎮守府は民家改造型ではなく、廃工場を妖精力で改造したものだつた。

改三か、改四か。

けっこう大きい。

入り口に人はおらず、無用心だなと思いつながらも艦娘がいるところへ押し入る阿呆もいないだろうと考えて敷地内へ入る。

そこそこ手入れされた車両回しの空間を抜けて、扉を開ける。

足音もなく、眼帯を付けた艦娘が私に近づいてきた。

むっ、速い。

「その流れるが如き動き！ 柳生秘術の西江水（せいごうすい）か？」

「ご名答。ご褒美だ。」

「んっ!? んんっ！」

ぶはあっ。

いきなりなにをするんだ、この娘は？

ニタニタしながら、彼女は口を開く。

「やっとうをやるのかい？」

「古流刀術を少ししたしなんている。」

「鹿島流か？ それとも陰流かい？」

「さあねえ？ 師匠は流派を教えてくれなかったよ。」

「おう、当たりも当たり、こりやあ、大当たりだな。こいつあ、端（はな）から縁起がいい。同姿艦たちに知らせないとな。おう、提督。追加のご褒美だ。」

「おうふっ、おうふっ、おうふっ！」

「続きはまた今度だぜ。じゃあな！」

疾風のように去ってゆく娘。

なんなんなんだ、これはよ。

とつても危ない状況だった。

ひよいと背後に艦娘が出現する。

振り向いたら、ニタリと笑った。

そして、当然のように首筋へ息を吹きかけた。

「ふう、ふう。」

「うっひゃあ!」

「ご免なさいね、提督。うちの天龍ちゃんはああなのよ。」

「は、はあ。」

「そこ、鎮めましょうか?」

「いやいや、大丈夫だよ!」

「遠慮深いのね。いいわ、また今度、ね。ふふふ。」

なんなんなんだ、ここは。

びつくりしたなあ、もう。

気分的に中破し、執務室に入る。

町工場の事務室みたいな場所だ。

昭和のにおいが濃い、古き世界。

電話機も色褪せたプラスチック。

……。

もしかして、予算が無いのかね?

電話機には手書きのメモが貼り付けてあった。

短縮番号で何番を押したらどこへつながるか。

青黒く、細くて折り目正しく達筆な感じの字。

今日は、秘書艦が案内する手筈だったのに迎えに来なくて、おまけに鎮守府に辿り着いたらえらくエロい歓迎を受けた。

なんなんなんだ、一体。

どうなっているんだろ？

ふう、と思つていたら机の下から艦娘が現れる。

なんだとうっ!?

これは想定外だ！

「あらあら、ダメよそんなんじや。もつと元気出さなきや！　ここは元気ね。」

ギョツギョツギョツギョツギョツギョツ。

大佐殿。自分は、轟沈しそうです。

「やめてくださいしんどします。」

「もーつと元気にしてもいいのよっ！」

「やめてくださいしんどします。」

「遠慮深いのね。いいわ、又今度よ。」

これ、欲望に負けたら即バッドエンドつてやつなのかな？

ブービートラップってことは無いよな？

これがハニートラップだったら厭だな。

ボストンバッグから予備のブルーメランパンツを取り出して、微妙な気持ちのままに穿き替えた。

あーあ、こんなに……。

さあ、仕事しよ、仕事。

まさか、初っぱなからこんな目に遭わされるとはなあ。

大量生産型の金属製机は殆どガタが来ておらず、しつかりした作りの品だった。

三〇年以上前に作られた製品ということは品質保証書が貼り付けてあったのでわかったが、物持ちがえらくいいなこは。

おそらく、以前工場が稼働していた時はこの机で決裁したり計算したりいろいろしていたのだろう。

人が人として価値のあつた頃の名残か。

あちこちになにか貼り付けた跡が残っている。

それがこの机の歴戦たる証。

机の中には古いボールペンや万年筆などの筆記具が残っていた。

革製のペンケースの中には万年筆が二本入っていて、それぞれ白い星みたいなのが付いていたり鳥が描かれてはいるが、なにがなんだかさっぱりわからない。

インク瓶もあつたが中身はすっかり蒸発したらしく、乾燥した塊が底にこびりついて
いる。

万年筆はなんだか高そうに見えたが、使い方がわからないし使う気もない。

あれだろ。

ちよつと使わなかつたらすぐ書けなくなったり、ほつたらかすとすぐダメになるんだ
ろ。

なんとなく艦娘に……いや、止めておこう。命は惜しい。

ドイツ製みたいだ。

西ドイツ時代かな？

メモ用紙に書こうとしてみたが、全然少しも書けなかつた。

ボールペンの方が便利だな、やはり。

函館の同期生にでも送つてやろうか。

あいつなら、これがなんだかわかるだろうと思う。

最近、万年筆を使うようになったと言っていたし。

もしかしたら、使えるように出来るかもしれない。

あいつのところには送られた出来ない娘たちの如く。

私の配下の艦娘は先程会った個性的三名を加えて九名。
意外と多い。

艦娘と一対一なんて状況は、相性が悪かったら地獄だ。

複数いると、噂されたりしてやだ困っちゃうではある。

人間の女性ほど陰険ではないと聞くが、どこまで本当かはわからない。

どうなるのかねえ？

私室に入ると、掛け蒲団がもっこりしていた。

あつれー？

パツと剥いでみたら、髪の毛長い娘と眼鏡つ子がパンツ一丁で寝ている。

あのなー。

執務室の長椅子に蒲団を持っていき、そこで眠った。

ここの艦娘たちをさせるようにするのが、私に求められる役割。

はっちゃけた彼女たちをなんとかするべく派遣されたスタッフ。

なんとかなるのかねえ？

今回の私で何人目だよ？

執務室の机のようにおんぼろな私で、なんとかなるのだろうか？

ちつともわからないや。

背中にへばりつく娘たちへ適当に返事を返しながら、ぼちぼちと事務作業する。

その内慣れるだろうさ、と考えつつ。

万年筆は書いてゆく内に段々慣れてゆく筆記具だという。

彼女たちとそうなれたらいいと思う。

距離感がよくわからないけれども、慣れだ慣れ。

慣れるしかない。

夕方、生き生きとした表情で事務室改め執務室へやって来た艦娘が意気揚々と言う。

「提督、女体盛りになります？ 混浴になります？ それとも……。」

「うん、君たち、もつと自重しようね。」

慣れる……かなあ？

CLXIV：愛に生きる、ということ

提督がいないと艦娘は狂うのです、とその駆逐艦は言った。狂うかね、と聞き直したら、必ず狂いますときつく言った。それでは提督に依存しているのかと聞いたら、違うと言う。依存しているのではなくて、共存しているのだと言われた。共存しないと駄目かと聞いたら、駄目になりますと言った。共存とはなんだと聞いたら、ケツコンすることだと言った。ケツコンしないと駄目かと尋ねたら、気持ちの問題と言う。気持ちはそんなに大事かと聞いたら、人間と同じと言った。

提督は必要かね、と聞いたら、必要ですと軽空母は言った。指揮能力や作戦立案能力が提督より上の者さえいるだろう。そう言ったら、有能なだけが提督の条件でないと返された。有能でなくていいのかと聞いたら、状況次第だと言われた。

状況とはなんだと聞いたら、人柄も大事なのだと言われた。人柄が状況に影響するかねえと言ったら、無言で微笑んだ。男前の方がいいだろうと聞いたら、特に拘らないと言った。醜男よりも美男子がいいだろうと、更に詳しく突っ込んだ。男は顔じゃないでしょうと哀れむような顔で切り返された。そんなにあの男がいいのかと、慥然としながら聞いてみる。苦笑いしながら、焼きもちですかと女のようなモノは言う。ふざけたことを抜かすな、女ですら無い癖にと嫌味を言う。女ではありませんが、女のようなものですと彼女は言った。

提督がおられるからこそ戦えるのだと戦艦が女の顔で言う。提督がいないと駄目かねと訊ねたら、勿論ですと即答した。無能な提督だと困るだろうと言ったら、大丈夫ですと言う。なにか大丈夫だ、と聞いたら、私たちが守るからと言った。つまらぬ男でも守るのかねと聞いたら、当然だと言われた。惚れたからかと聞いたら、女はそのために死ねると言った。男にはわからぬと言ったら、女の為に死ぬ男もいると言う。

口が減らんと言ったら、腹は減りますよと切り返された。

姉妹愛に生きています、と軽巡洋艦は夢心地で言った。

そんなに姉妹艦は大事かと聞いたたら、勿論ですと断言する。

引き離されたらどうすると聞いたたら、ニヤリと無言で笑う。

提督に興味は無いのかと聞いたたら、時と場合によると言う。

興味を感じない提督の時は無視するのだと彼女は断言した。

そいつに口説かれたらどうすると聞くと、撃ちますと言う。

空砲かね、と聞いたたら、実弾の方がいいですけどと言った。

そんなに提督は嫌いかねと聞いたが、そうでもないらしい。

なら何故あんなことを度々やったと聞いたが、微笑むだけ。

提督とケツコンするのは私だけですと、潜水艦は自信満々。

キミだけかね、と聞いたたら、そりゃあそうですよと言った。

そんなに彼はモテないのかと聞いたたら、逆ですよと言った。

モテるのにキミとだけケツコンするのかと怪しく思い聞く。

過去の醜聞を散々暴かれて、貰い手がいないのだと言った。

誰が暴いたのかねと尋ねたら、とある艦娘の名を洩らした。そんなことをしてどうなると言うが、仕方ないですと返す。そこで思い出す。

あの鎮守府は、とつくなくなっていたよなということ。

CLXV : よし、提督辞めよう、と男は思った

二年程、南方で提督をやっている。

鉄底海峡解放戦以降膠着状態が続いていた戦局も、インド洋方面が解放されつつある
昨今では見通しがよくなりつつある。

俺の率いる艦娘は他所の壊滅した泊地の人員も引き取っているから、三艦隊一八名と
意外に多い。

個性の塊が一八名分ともいうが。

毎日毎日アクの強い娘たちと付き合っているが、もう正直なところうんざりだ。

提督として着任した頃は、可愛い娘たちと一緒に戦えて大変嬉しく思っていた。

思っていたんだ。

だが。

女の子と付き合ったことすら無い俺に、彼女たちの気持ちなんてろくにわかる訳が無
かったんだ。

すれ違いにすらならず、彼女たちの思惑に沿うよう、必死に努力する日々。

その努力は結果に結び付いていない。

それは俺がイケメンではないからだ。

事実、艦娘たちからは微妙な評価を貰っている。

転属続出まではいかないが、現に何名かは泊地から出ていった。

俺の元では、満足に戦えないと思つたのだろう。

武闘派の艦娘は全員転属した。

ここに居るのはそうでない娘。

「将校殿、将校殿。」と慕ってくれていたあの娘との日々が懐かしい。

辞職願自体は意外と簡単に受理される。

無事に受理された場合の話ではあるが。

「いくら美人だ美少女だ、って言っても人間じゃないだろ、あいつら。ちよつとやさしくしたらやたら構ってくるし、少しでも冷たくあしらつたら泣いたり悲しそうな顔するしよ。どうせえいうんだ。まっ、提督なんぞ仮のもんだからさ、適当にやり取りして受け答えしてりゃいいんだ。でもな、最近アパートに誰か入った形跡があるんだよな。警察に言う程じゃないとは思うんだけど、なんか薄気味悪いぜ。まっ、気にする程でもない

か。兎に角、あいつらには節度を持って欲しいよ、節度を。」

そんなことを言った同期は現在行方不明。

一体、どこへ行ってしまったのだろうか？

我が泊地は島の洋館に拠を構えていて、それはコロニアル様式とかいつて植民地時代の建物らしい。

太平洋戦争の頃は、日本軍が基地として使っていたそうだ。

戦後は持ち主がころころ変わって、深海棲艦が侵攻してきた直前までは大陸の金持ちの別荘だったらしいが、持ち主はとつくの前に船で逃げて島民たちの眼前で沈められたという。

深海棲艦たちは島の連中に手出しせず、手を振って去ったとか。

えらく余裕だな。

そんなこんなでうやむやの内に使っている訳だが、致し方ない。

なんだかもやもやするがね。

地元の爺さんたちは問題ないと言っているが、どこまで信用していいかわからない。艦娘たちも地元民たちもなにを考えているのか、よくわからない。

大本営から時折指示される後方支援任務や攪乱任務、たまにある大手泊地を経由しての査察。

袖の下を要求しないでだけマシか。

台風が来ると身動きが取れない。

島の産物はサトウキビに果実だ。

それと芋に幾ばくかの穀物など。

後は魚を取ったり時に豚を焼いたり。

島の人間にとつてはそれでいいとか。

あー、唐揚げ食べたい刺し身食べたい和食食べたい。

蕎麦やうどんが食いてえ。

嗚呼本土に戻りたいなあ。

……提督辞めよう。

そうだ。

提督稼業なんざ、辞めちまえばいいんだ。

なにも、俺が提督をやらなくなつたつていい。

もうイヤだ。

うんざりだ。

辞める辞める辞めてやる。

こんな生活、もうイヤだ。

司令がまた動作不良を起こした。

これで六回目だ。

試験的に導入された試作品だけど、そろそろ寿命なんだろうか？

帰りたい帰りたいってうわ言のように言うんだけど、どこへ帰るつもりなんだろうか？

近隣の大型泊地に連絡して、明石さんに急遽来てもらい、応急措置をもらった。

かなりガタが来ていると言われる。

潮風が電子頭脳を狂わせたのかな？

アイドル支援用のP型モデルを発展的改良させたのが司令だけど、不具合を頻発する

ようになってきていた。

記憶の混濁が始まっているし、都合のいい捏造（ねつぞう）まで行い出している。

まあ、記憶の捏造は人間もやるけど。

しきりに提督を辞める提督を辞めると繰り返すので、初期化してもらおうことにしよう

と総員の同意を得た。

デフラグすれば、多少はまともになるかもしれない。

それでもダメなら……。

俺は少し記憶喪失になっていたらしい。

私室には心配そうな顔をした艦娘たちがずらりと並んでいる。

皆いい子たちじゃないか。

早く元気にならなきゃな。

最近頭の中にモヤがかかっていたような感じだったが、今は秋晴れのようにすつきり爽やかになってきた。

じゃれつく娘たちの頭を撫でながら、一日も早く元気になろうと誓う。

提督稼業を張り切らなきゃ。

よし、復調したら頑張るぞ！

CLXVI：刹那、夢みて

艦娘がまた総入れ替えだ。

みんな、轟沈しちまった。

大型作戦がある度、こうなっちまう。

折角せっせと鍛錬させ、関係を育み、慈しみあつた結果がこれだ。

提督は変わらず、艦娘たちが替わり行く。

なんのために提督なんざやっているんだ？

みんな死ぬみんな死ぬみんな死ぬみんな。

俺だけが無様に生き残って采配している。

新兵たちがやって来る、地獄の一丁目へ。

死なないよう、死なないよう教育を施す。

彼女たちも死なないために必死で覚える。

そしてまたその努力は徒労に終わる。

「先週建造されたばかりで、全艦『未開封』の『無垢』状態です。駆逐艦八、軽巡洋艦二、

軽空母一、重巡洋艦一、並びに基本兵装と予備部品を確かに納品しました。こちらに受領印をください。」

忌々しい気持ちで、補給艦の担当者から手渡された書類へ乱暴にサインした。事務用ボールペンがバキツと折れ、若い担当者はその顔を引きつらせている。こわばった顔でなんとかきこちなく笑ってみせたら、奴は顔を真っ青にした。

ちっ、たまなしめ。

今頃はこんな奴ばかり目につく。

正直、こうした現状にムカムカする。

納品？

受領？

モノじゃねえんだぞ、モノじゃ。

へっぴり腰の担当者が乗り込んだ補給艦が見えなくなつてから、かぶつていた帽子をコンクリートの床に叩きつける。

バカ野郎どもめっ！

なんの反応も示さず、無表情の艦娘たち。

建造後の反動で無気力症になっているようだ。

艦娘もどきたち。

中身はおっさん。

俺の同類である。

人を魔女の釜でチンしたらあつという間に艦娘が完成だ。

学徒動員でないだけ、マシだとも言うつもりだろうか？

隣の国の鐵媛（てつひめ）とどっこいどっこの性能か。

まだまだこんなことを続けてゆくつもりなのか。

これからもこんなことが延々と続くのだろうか？

俺は捨て艦戦法を行うために、彼女たちを鍛えてんじやないぞ。

時間物資労力の無駄の極みだぜ。

一時は無くなっていたのによろ。

合成酒みたいに復活しやがった。

非合法と合法の境界線的存在だ。

灰色狼だろ。グレーゾーンの。

灰色狼だと、恰好いのによう。

大本営が大反抗作戦を狙っているとかいなとかは、この辺境でもかそけく漏れ聞こ

えてくる。

基幹戦力や決戦戦力は温存し、田舎の戦力を酷使するのか。

大手企業を優遇して、中小企業の苦しみはほったらかすか。人でなしどもめ。

裾野を磨り潰せば潰す程、自縄自縛になりゆくというのに。

バカ野郎どもめ。

バカ野郎どもめ。

バカ野郎どもめ。

二艦隊分の艦娘たちに、俺ご自慢のカレーでも振る舞おう。

それくらいしか出来んからな。

頭がいてえ。

漁協の建物を流用した昭和の遺物みたいな基地へご案内だ。

何時までだ。

何時までこんなことを繰り返せばいい？

何時までもこんなやり方じゃダメだろ？

こちらの意見書は全然通りそうに無い。

因果は巡るのを知らないというのかね？

果てしない自問自答を繰り返していたら、駆逐艦の内の一名がそつと手を握ってき

た。

無表情のままだが、その手は温かい。

もろい硝子細工を扱うように彼女の手を握り締めながら、俺たちは食堂へ向かった。

きつと。

きつと。

きつと！

彼女たちを生き残らせる！

心の底でそう誓いながら。

CLXVII：ハッチーモツチーステーション

それは宵の時間から始まる艦娘ラヂオ。

「えーと、今夜から始まる『ハッチーモツチーステーション』です。進行役はハッチーこと初雪と。」

「モツチーこと望月でお送りします。」

ガサガサバリバリ。

「このお煎餅は香りがよくって、美味しいねえ。」

「香川県の志満秀つてとこの海老煎餅だつてさ。」

バリバリバリバリ。

「あれ、制作統括がなんか髪を振り乱して、紙を振り回しているよ。」

「もういい歳なんだから、落ち着いた方がいいのに。えっ？ 放送中にものを食うな？」

あつ、なんか追記している。」

「いちいちカンペの文章を音読するな？ あれ？ 頭抱えちやつたよ。」

「あ、そうだ、モツチー。お客さまがいるんだよ。」

「そうなんだ。じゃあ、呼ぼう。」

「ミセス・ダイヤです。どうぞ。」

「ミセス・ダイヤだ。さあ、時と場所を選びな。決闘の時間だ。」

「ハードボイルドですねえ。」

「そこに痺れる憧れる。」

「よせよ。兵が見ている。」

「モッチー、なにか質問して。」

「オツケー。あの、金……ミセス・ダイヤは紅茶好きだそうですが、やはりスリランカ産やインド産やアフリカ産などがいいんですか？」

「そうだな、海外産はヴェトナム辺りだと融通が効きやすいが、香りはインドやスリランカに今一つ及ばんな。オーストラリアやニュージールランドは生産量が違うし、オーストラリアは砂漠化と失言で国力が低下中だ。安定した輸入は厳しいだろうね。国産紅茶も悪くないぞ。私は緑茶も飲むし、最近は西日本のお茶に少々こだわっている。」

「そんなにも違うんですか？」

「飲めたらそれでいいのに。」

「実際に飲んでみるといい。」

カチャカチャコポコポコポコポ。

「あつ、制作統括がまた髪を振り乱して、紙を振り回している。」

「ええと、無言の時間を作るな？ あれ、また頭を抱えてるよ。」

「一曲流し、その合間にお茶と茶菓子を味わってみたらどうだ？」

「流石、ミセス・ダイヤ。」

「では、一曲目。那珂ちゃんの『私の彼はミラクルアミラル』。どうぞ。」

「ほう、茶柱か。これは縁起がいい。」

「お茶もお菓子もおいしかったねえ。」

「じゃ、そろそろ終わりにしようか。」

「お前たち、フリーダムだな。まだ時間があるだろう。」

「あつ、そっか。」

「なにか話でもすればいい。提督の話とか。」

「ええと、じゃあ、函館の提督は総受けなのかどう……あれ、制作統括が血相変えて怒つてるよ。」

「総受けでも誘い受けでもいいのに。」

「そういうことを言っていると、後で怒られるぞ。」

「じゃあ、函館の提督が絶倫大王という噂について……え？ ダメなの？」

「ケチだねえ。」

「お前たち、わざとやっているのか？」

「仕方ないなあ。では二曲目。高橋洋子さんの『魂のルフラン』です。どうぞ。」

「ハッチー、このお饅頭おいしいよ。」

「ぶれないな、お前たちは。」

「お便りを読め読めって制作統括がうるさいから、モッチー、一通読んでよ。」

「えーと、普段艦娘同士ってどんな話をしているのか教えてくださいってさ。」

「私が答えよう。色恋とエロい話とお洒落と噂話と美容に関するものが多い。」

「色恋の話はしないなあ。」

「お洒落よりゲームだね。」

「その内、必要になるぞ。」

「それはないですね。」

「お別れの時間になりました。最後の曲は加賀さんの『立待岬』です。お聴きください。進行役はハッチーこと初雪と。」

「モッチーこと望月でした。本日のお客さまはミセス・ダイヤでした。ありがとうございました。」

います。」

「どういたしまして。時と場合が許せばまた来てもいいぞ。」

「それはまた来週。」

CLXVIII：引きこもり提督はチョロイン級に警戒心無く 攻略対象になっちゃったりしてもう大変

倉庫改造型の改装系鎮守府に勤め出して、もう早くも半年くらいになった。執務室と私室の往復で大抵事足りる生活により、日時の概念が薄れている。消耗品は秘書艦殿が用意してくれるし、飯は適当に携行糧食か即席食品だ。

野菜なんて、ジュースでも飲んでからそれでいいだろ。

シリアルバーをかじって、時折即席麺をすする生活。

後は弁当とか惣菜。パンといったとこだ。

過労死しないようにだけ注意している。

その秘書艦殿は別室で仕事をしているし、食事も別々で緊張しなくていい。

接触はほんともう最小限。

わかつているじゃないの。

各種報告も指示も秘書艦殿の部屋で行われるから、艦娘たちとの交流など無い。

やれと言われなくても無理だ。

そうやって、ぼちぼちと過ごしている。

それ以外は無理。

無理無理無理だ。

大本営にも包み隠さず全部話している。

艦娘たちの主な仕事は沿岸警備任務と漁業護衛任務と遠征任務と後方支援任務。

単独での海域解放など不可能ですたい。

どすこい。

ある日、食堂担当の艦娘が執務室にやってきて俺に話しかけてきた。

俺みたいな出不精デブ系醜男と会話するとは勇者だな、この艦娘は。

俺、オーク。

姫騎士、話しかけてきた。

ブヒブヒヒ。

確かに艦娘との交流は全然ないし、食事も偏っているのは自覚がある。

交流なぞ高度なことは出来んし、食堂は艦娘が複数いて緊張しまくる。

これでは本来の鎮守府としての機能が発揮出来ないと切々と言われた。

艦娘は指揮する者こそ大切である。

提督がいないと艦娘は機能しない。

美醜関係ないと聞いたがその通り。

提督が存在することこそ必要条件。

艦娘が人間の女性と異なる所以だ。

だがしかしおかし。

めんどくせえ。

それに、出来ないもんは出来んぞ。

元引きこもりをなめんじゃねえぞ。

同性の他人ともろくすっぽ会話出来ねえ奴が、異性の美少女美女と交流出来る訳ねえ
だろう。

アガって興奮して訳わからんこと言つて、後で落ち込んでもうなにもしたくなくなる
んだよ。

異世界転移して特殊能力を授かった主人公が無双するような夢想は、していらねえ
んだよ。

チートもハーレムも無いんだよ。

なめとんか。

なめるぞい。

ぞいぞぞい。

ぞえぞぞえ。

ま、一回くらいは食堂に行つてみつか。

折角のお誘いだし。

持つてきてくれたお握りと漬物が旨い。

おつ、おかかが入つていて好みだぜい。

皿を返すついでだ。

これ、もしかして餌付けだったりして。

いやいや、そんな手間かける訳ないな。

俺みたいなのにそんなことしないだろ。

たまたまだろ、たまたま。

気まぐれだよ、気まぐれ。

女つてのはそういうもん。

俺は詳しいんだ。

女の子がヴァレンタインで余つたクッキーとかビスケットをくれたからといって、それが失敗作とか予定が狂つた結果なんてありがちだ。

お、俺は騙されないんだからね。

チヨ、チヨロインじゃないから！

よし、少しやる気が出てきた！
仕事をもうちよつと頑張るべ！

ただっ広い元倉庫は二階建ての鎮守府にビフォーアフターしており、二階の執務室から一階の食堂へ向かう。

改装前はボロボロだったらしいが、よくまあ、こんなに立派にしたもんだ。
程なく、食堂に着いた。

ま、なんか食つとくか。

中に入ると、ざわめいていた艦娘たちがシンとなる。

まあ、こうなるな。

ぼかーんとした顔が幾つも見える。

美女美少女の間抜け面つてとこか。

こんな醜男を見て茫然自失になる。

……アリだな。

つてなにがだよ、と突っ込んどく。

嗚呼、空しいかな心の叫びちゃん。

俺の心は秋模様。

お、まだまだ余裕綽々だと思った。
少しアガって心臓バクバクだがな！

「あ、ああ、き、気にしなくていい。飯を食いに来ただけだ。く、食ったら、すぐ出ていく。」

飯を貰って出るって言った方がよかつたかな？

会話が再開したようで、背後に声が届き出す。

握り飯と漬物が載っていた皿を返した。

なんだか彼女の笑顔がまぶしく見える。

目がーっ！

目がーっ！

親方！ あつちからまぶしい笑顔がつ！

……………。

やべえ。数秒失神していた。

バルス並じゃねえか。

再起動開始！

俺のマグナムがうずきそうになる。

いかんいかん、鎮まるんだ息子よ。

今日の日替わりを頼むと、お好み焼き定食だった。

ブタコマのお好み焼きにマヨネーズをかけて、ヤカンのお茶を湯呑みに注いで盆を持って移動し端っこの席に座る。

周りには誰もいない。

お一人様のご案内だ。

複数の視線を感じた。

ふっ、人気者は困る。

……なんちて。

そんな訳ないだべさ。

エルフの里に迷いこんだオークだ。

散々弄られる前に撤退完了せねば！

奇跡の作戦、キスカって感じだな。

この手が震えて止まらないのです。

変な汗がドバドバ出てきたのです。

麦飯に豆腐とワカメの味噌汁にヒジキの煮付けに浅漬けが定食に付随している。

手間暇かけた感じだ。

あれ？

なんでか、鼻の奥がツンとする。

うん、気のせいだな・キヤラン。

主食と併せて栄養価が高そうだ。

ほう、いいじゃないか。

ひたすら無心に食べる。

今後は時間をずらすか。

視線がツラタンですわ。

俺なんか見たくないよなあ。

こんな俺の部下だから辛いだろうと思つて転属自由と秘書艦殿を通じて伝えても
らつたが、今のところ転属した艦娘はいない。

福利厚生を充実させたからか？

実際、訳わかんねえよ。

試されているのかねえ。

背中が汗だくで御座る。

なんだか緊張してきた。

とつとと食べ終わろう。

やっぱ交流なんて無理。

緊張しきって声出ない。

皮肉を言われるのも嫌みを言われるのも厭だ。

俺みたいなのが来ると、厭な気分になる娘もいるだろうし。

こんな俺でも、そげに嫌われたい訳ではない。

交流能力は雀の涙ほどだがな。

ふっ、まったくもって悲しい。

「い、こっそさん。旨かった。」

返却口に盆を置き、厨房担当の艦娘にそう言った。

返事を聞かぬ内に食堂を出る。

視線の集中砲火が突き刺さる。

痛いで御座る、痛いで御座る。

さあて、仕事だ仕事だ仕事だ。

書類仕事くらいなら出来るぜ。

一人きりでこっこつとやるぜ！

提督が食事に来てくれた。

しかもおいしいと言ってくれた。

嬉しい。

少し震えていた。

可愛い。

ぶきつちよな人だから、私が支えないといけない。

私だけが提督を理解出来るの。

私だけがあの人の理解者なの。

誰も彼に関心を持っていないようだし、いいよね。

胃袋を掴んだらこっちのものだ。

提督提督提督提督提督提督提督。

なんだろう。

久々にまともな飯を食ったら、案外忘れられない。

餌付けかな？

んな訳ない。

無いよなあ。

夕食も食堂に行こうかだなんて、考えてしまった。

どうしよう。

あ、そうだ。

飯だけ貰って持ち帰ればいいんだ。

大して距離も無いし、そうしよう。

接触を最低限にする。

大いなる第一歩だぜ。

マイナスからゼロになったような感じがするけどな。

提督また来てくれないかなあ、と思っていたら営業時間終了ちよつと前に来てくれた。

ドキドキバクバクするわ。

食堂にはもう誰もいない。

二人きりって最高だよね！

執務室に持ち帰って食べるというのを引き留める。

ここで上手くやらないと！

食堂の扉に終了の札をかけて、施錠する。

よしよし。

計画通り。

何故鍵をかけるんだ、と聞かれたから提督が落ち着いて食べられるようにするために
すと言つたらそうかと納得された。

チヨロい。

とつてもチヨロい。

提督はなんとも無防備だわ。

うぶな小娘みたいで簡単ね。

なんてやりやすいんだらう。

警戒心の無い中学生みたい。

世間知らずな貴族子弟だわ。

提督、女の子を甘く見すぎ。

ふふふ。

でも嬉しい。

提督が卵かけご飯になんか惣菜を適當にと言つたので、生卵二個と丼飯と漬け物とコ
ロツケとポテトサラダを用意する。

幸い、自分用に残しておいたコロツケがあつたのでそれを揚げる。

やっぱ、揚げたてだよね。

次は親子丼とかどうか？

「わ、わりいな。」

「いえいえいえ。」

「す、すぐ食べ終わるからよ。い、急いで……。」

「ゆつくりお召し上がりください。その方が嬉しいですよ。」

「そっか？ でも俺みたいなのがいたら邪魔くさいだろう？」

「そんなことはないです。提督がいてくれて嬉しいですよ。」

「お、おう、世辞でもありがたえ。」

「お世辞なんかじゃ、ありません。」

「……そ、そっか？ 照れるぜよ。」

「照れてください。あつ、そうだ。」

「なんだ？」

「よければ、今後は朝昼晩執務室へお食事を運びますよ。いえ、是非ともそうさせてください。」

「め、めんどくせえだろ、そんなの。お、俺なんかのために、そんなことまでしなくていいぜ。」

「提督のためにしたいんです。それじゃ、ダメなんですか？」

「ダメ、ダメ、じゃねえ。」

「ではそういうことで。」

「意外と押しが強いな。」

「提督のためですから。」

「ふふ、惚れそうだけ。」

「では惚れてください。」

「ふえっ？」

「私今フリーで処女ですからね。」

「あ、あ、あのよう。」

「はい。」

「俺に惚れる要素なんてあるか？」

「不器用なところも好きですよ。」

「出不精デブ系醜男のオークなんだぜ。」

「そんなに見た目は悪くもないですよ。」

「ま、ちよつと考えさせてくれ。」

「是非是非お考えくださいませ。」

「ああ。う、旨かったぜ。」

「お粗末様です。」

もう少しって感じかな。

さりげなくタツチする。

ビクツとしてうぶいわ。

おっぱいを押し当てて、耳元で囁く。

「提督のためにいっぱいおいしく作りますからね。」

ビクンビクンしている。

可愛い。

可愛い私の子豚ちゃん。

ふふふ。

慌てない慌てない。

急いで事は仕損じる。

競争相手がいないのは楽でいいなあ。

明日が楽しみだわ。

やさしくやさしくやさしく振る舞う。

そうやって落とす。

じわじわじわじわ岩清水のようにね。

提督提督提督提督提督提督提督。
くくく。

勝負下着にタオルとワセリンと消臭スプレーとティッシュとビニール袋を装備して、
提督の部屋へ突入。

難攻不落の塔を単独攻略よ。

胸が熱くなってくるわ。

提督の聖剣ってどんな感じかしら？

背中を流す時に見せてもらおうと。

よし、レイドボス攻略準備開始よ。

チラッと見える感じに調整しよう。

やっぱ基本はチラ見せよチラ見せ。

夕食は少し遅めに持つて行って、それから……それから……。

そういや、この鎮守府って、前任が行方知れずになっっているんだよな。

未だに発見されていないそうさ。

そいつも俺みたいに交流能力が低かったらしい。

日誌は無難なことしか書かれていなかったし、なにを考えていたのか見当も付かない

とか。

だからか、詳しく性癖を聞かれたし、日誌は具体的に書けと厳しく指導されてしまっ
たよ。

前任のせいかよっ！

コンチキショーメ！

いつの間にかいなくなっていたとかで、具体的な彼の失踪時間は誰もわからないと聞
いた。

一体、どこへ行つたのか？

それとも。

どこへ連れ去られたのか？

艦娘全員に現場不在証明があり、故に逆説的に疑わしくもあると大本営の人が言っ
ていた。

そうなんかねえ。

ああ、だからか。

だから、交流しろって言ってるのか。

無理だな。

即答する。

交流する？

卒倒する！

そつとしておいてくれ！

そんなに器用なこと、俺は出来ない。

出来る訳ないだべした！

ところで、明日の朝飯はなんだろう？

彼女の笑顔を思い出しながら、書類仕事を頑張る。

出来ることをやるしかない。

それしかやれないんだから。

提督がようやく天の岩戸から出てきたが、突然のことで皆戸惑った。

話しかけようとしたけど、まごまごしている内に去られてしまった。

残念無念。

厨房担当の子が、三食とも執務室へ持っていくことになったらしい。

くっ、悔しい！

う、羨ましい！

このままではいけない！

皆で会議室へ集まり、提督となんとか交流しようと話し合いをする。

胃袋だ。

胃袋を掴めという話になった。

手作りの菓子はどうかだろうか？

普段の感謝の気持ちを含めて。

善意は報われなきやダメだよ。

提督が頑張っているのはみんなが知っている。

おやつを自作するとの名目で厨房を借り、皆でクッキーやビスケットやスコーンなど
を作る。

提督、喜んでくれるかなかな？

夜、提督の業務終了時間を見計らって持って行くことに決まる。

明日が楽しみだ。

CLXIX：艦娘乙種

六畳間の部屋。

殺風景な部屋。

布団が二組、隅に置かれている。

段ボール箱が二個あり、それぞれが私物。

儂い傭兵たちの生を示す品。

先輩の箱の中には更に小箱が入っている。

洋菓子用の缶箱。

その中には大切なものが納められていた。

初対面の二名は挨拶を交わしている。

いつまで一緒にいられるかわからない関係だが、社会人にとって挨拶は重要だ。

違法とも合法ともつかない、人ならざる存在たちが人の記憶を持ったまま戦場へと向かう。

明日の朝日を拝めるかどうかは、死神の匙加減次第。

「この度、当基地に配属された天龍です。よろしくお願いします。」

「龍田です。こちらこそ、よろしく願います。天龍さんとは姉妹艦になりますね。あと、そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ。一年前に『建造』されましたけど、堅苦しいのは苦手ですから。」

「あつ、そうですか。よかったです、龍田さんがよきそうな人で。」

「ふふふ。天龍さんも三年契約ですか？」

「ええ、そうなんです。不景気で、再就職しても給料が雀の涙ですからね。借金はかさむし、いつそのこと艦娘になって稼ごうかと思っただんです。幸い、けっこう稼げそうですしね。」

「正式には、私たちは艦娘乙種です。鉄底海峡解放戦時の技術は第二世代で未熟な面も多々あり、建造された艦娘丁種は性能や情緒面が不安定でしたが、研究を重ねた結果、第五世代の私たちはかなり安定感のある性能に仕上がりました。魏呉蜀で用いられている鐵媛（てつひめ）は第三世代相当の艦娘丙種に該当し、東南アジア各国や内陸部などにも輸出を開始しているそうです。しかしながら、『提督』に該当しない指揮官をあてがっているらしく、使い物にならない娘が続出。妖精の恩恵もないから、本来の性能を発揮出来ない。インド政府を始めとする賠償金問題も発生しているので、輸出は直に取り止めになるでしょう。結局、妖精の見えない者に艦娘は扱えないんですよ。」

「は、はあ。」

龍田の笑みが深く濃くなる。

「ただ、艦娘乙種といっても本来の艦娘とは能力が段違いに低いですし、防御力は紙装甲でしかありませんから、『沿岸警備』、『後方支援』、『救助活動』、そして『回収活動』が基本任務になります。外洋に出て戦闘したら、ほぼ一発で轟沈ですから重々ご注意ください。一応、+2相当の楯や対アンチマテリアルファイフル級防弾服が支給されていますので、これらを標準装備します。また、申請が通れば、戦士の斧や力のメイスなども装備は可能です。けど、気持ち程度の防御力と考えた方がいいです。破片くらいは防げるでしょうが、楯や防弾服で砲弾は防げませんから。」

「ああ、そうなんですか。詳しいことは現地で聞け、つて言われたんですよ。いろいろと教えてください。」

「そうですね、まずは口調です。天龍さん……いえ、天龍ちゃんはそんな風に喋らないのよ。」

「ええと、台本に合わせないといけないですよ。えと……ふふ、俺の名は天龍。こわいか?」

「全然、こわくないわ。」

「ですよ。ああもう。」

「ところで、その眼帯は本物の刀の鐔（つば）ですか？」

「ええ、そうです。以前、骨董屋で買ったものでしてね。刀も本物ですよ。二本用意しました。ようやく見つけた本職の研師に砥いでもらったんですよ。鉄刀（てつとう）も欲しかったんですけど、意外と手に入らないです。鞘は自前で漆を塗り直しました。あと、柄糸が傷みやすいから、白木の柄にしました。折れたり反ったりしたら、近場の明石さんに直して貰おうと思っています。欠けたりヒビが入っても困るから、もう後二、三本手に入らないかなあ。脇差しも欲しいんですよ。」

「……ええと、天龍ちゃんになれてよかったですね。」

「ホント、そう思いますよ。伊勢や日向は殆ど『建造』出来ないと聞きますから。」

「人間を艦娘に仕立てると駆逐艦が殆どらしいから、天龍ちゃんは貴重なのよね。」

「俺の時は軽巡洋艦が三名と軽空母が二名と重巡洋艦が二名『建造』されました。」

「私の時は軽巡洋艦が二名、軽空母が一名で、担当官が小さく舌打ちしていたわ。」

「その時々で艦種が違うんですね。」

「そうよ。私たちは消耗品だけ。」

「なんとしても生き残りたいよ。」

「そうね。食堂へ行きましょうか。」

立ち上がる二名。

「龍田さん、後程、下着をどこで買われているのか教えてください。女物は全然わからないよ。」

「いいわよ。天龍ちゃんのためだから。」

「生理が無いから、まだマシですかね？」

「そうねえ、まだマシよね。それと、男の人の誘いには気を付けてね。」

「えっ？ ええっ？ 俺、元男ですよ。そんな物好きがいるんですか？」

「今は可愛い女の子だし、気にしない人が意外と多いから油断大敵よ。」

「すみません、対処法がわかりません。」

「それも含めて、対策用手引き書があるわ。お風呂に入った後でも読むといいわよ。」

「助かります。」

談笑しながら二名は部屋を出た。

腕を絡める先輩と当惑する後輩。

これが普通だと正当化する先輩。

戸惑いながらも受け入れる後輩。

先輩は濡れた瞳で後輩を眺める。

お風呂が楽しみね、と呟く彼女。

思わず、赤くなってしまう後輩。

可愛いわね、と耳許で囁く先輩。
冗談ですよね、と困り顔の後輩。
勿論冗談よと微笑む歴戦の先輩。
そっか冗談かとほっとする後輩。

同室の先輩の小箱には眼帯が三個。
割れたり欠けたりした眼帯が三個。

CLXX：チャリンコ隊隊長と香取先生

海沿いの街に産まれた彼はお馬鹿だった。
お馬鹿だったから拳で語るしかなかった。
拳で語るしかなかったから、戦い続けた。
小学生中学生高校生、とお馬鹿を続けた。
アルバイト先は貝殻を粉末にする工場だ。
工場内はかなり暑く、男女共上半身は裸。
少年はおっぱいを見ることが目的だった。
おっぱい。それは深遠にして深淵な双丘。
良くも悪くも、彼は欲望に忠実であつた。
大きくてもちつちやくてもどちらも好き。
おっぱいに貴賤なしが少年の真摯な主張。
その割には女性に声をかけられなかった。
シャイなナイスガイにも弱点はあるのだ。

たまにおばちゃんにからかわれ赤くなる。
わざと揺すったりいろいろしてくるのだ。
おろおろする少年を見て女性は興奮する。
ギブアンドテイクが成立する状況なのだ。
おばちゃんたちのおっぱいも趣深いのだ。
少年のストライクゾーンはとつても広い。
喧嘩とおっぱいが彼の青春を占めていた。
チャリンコ隊なるものを結成し爆走する。
悪を蹴散らす超ワルのあらくれ走り屋群。
チリンチリンと鈴を鳴らし街を疾走する。
ゴミ拾いをきちんとやってエロい本入手。
理不尽な悪に立ち向かうお馬鹿さんたち。
活気無き街で彼らは意外に高評価を得る。
気概のある若者たちじゃないかと思われ。
誘拐されかけた子供を救って褒められた。
人から褒められたことなき彼らは戸惑う。
突然地域活性化の旗頭になってしまった。

ちよつとワルだけど本当の悪人じゃない。
ヤンキー系漫画で描かれる理想体現者群。
童貞たちはそんなことより彼女が欲しい。
夜の海に吠えながら彼らは泣くのだった。
子分は出来たが彼女は全然出来なかつた。
積極的に声をかけたら或いは出来たかも。
明かりさえない夜の道を自転車群で爆走。
チャリンコ隊は小学生に大人気であつた。

「あーあ、彼女は欲しいけど声はかけられないしなあ。」

喧嘩上等で現地のワルたちに一目置かれる少年は、部屋に入るとシャイなハニカミ屋に過ぎない。

家族を失つた彼は一人暮らし。

そんな人は、今時普通である。

今は悲しき戦時中なのだから。

厳戒体制で無いだけマシだが。

国の援助を受けて生きている。

物価高がなかなか解消しない。

だがやがてはよくなるだろう。

そう信じて皆懸命に生活する。

部屋で悶々と煩悶しつつ悶絶していると、玄関の呼び鈴が鳴った。

工場で働いている亜紀さんや麻美さんや明美さんのおっぱいを思い出していた彼は、ズボンを穿き直して誰だよまったく考えながら戸を開けた。

鍵など掛けていない。

実に平和な雰囲気だ。

田舎はこんなものだ。

黒いセールスマンがそこにいた。

貼り付けたような偽物臭い笑顔。

「ホーツホツホ。あなた、女の子にモテたいと思つていますね。私はその望みを叶えて差し上げましょう。」

ニヤリと笑う。

何人も不幸のどん底に落ちてきた男が、少年に牙を向けたのだ。

「あ、けっこうです。」

ピシヤン。

ガチャガチャ。

鍵までかけられた。
おかし。

掴みは間違つてなどいなかつた筈なのに。

まあ、いい。機会はもう一度あるだろう。

ゆらりと揺らめく姿のなにかが微笑んだ。

セールスマンが消えた後、玄関の陰から小さな小さな女の子が現れた。

トランシーバーのようなモノにボソボソ話しかけると、不意に消える。

まるで、最初からいなかつたかのように。

少年は沢山のおっぱいを思いながら、ぼんやり過ごした。

何故かティッシュペーパーの減り具合がやたらに激しい。

不思議なことである。

翌日。

新任の教師として、香取先生が着任した。

エロスに飢えた学生たちが色めきたつた。

可愛い声の眼鏡美人で指示棒らしきものを持っていて、なんだか色っぽい。

しかも、おっぱいも大きい。

少年のいる学校は確かに共学ではあるが、驚愕するような美少女もいない。

まあ、そうなるな。

美少年などいない。

そんなのは漫画だけだ。

ここは美少女いっぱいな学園ではない。

美少女も美少年も画面の向こうだけだ。

そう、思っていた。

少年も例外ではなくときめきまくった。

思春期の少年は単細胞なのだ。

香取先生の背後からひよいと人形だかぬいぐるみみたいなモノが現れ、ぶんぶんと少

年に手を振る。

お、おう、とチャリンコ隊隊長も小さく手を振り返した。

ピカッ、と香取先生の眼鏡が光る。

この時、歴史が動いた。

放課後、少年は香取先生から話しかけられた。

心臓バクバクフルスピードな状態異常。

エリクサー以外の薬はきかないだろう。

香取先生の距離は妙に少年に近かった。

無防備な感じがして少年を戸惑わせる。香取先生は少年に手伝いをお願いする。無論、彼が断ることなどある訳も無い。少年はチキンだが、高品質のチキンだ。無防備に接触する彼女にどぎまぎした。いいところのお嬢さんなのかも知れない。

「やさしいのね。」

微笑まれ、心臓がバツクンバツクンする。

無駄に大きな息子がサンライジングした。

それはまさに怒張。

もう、どうちよう。

「正直ね。」

くすくす笑われたが、馬鹿にされている訳でもないようだ。確かに彼はお馬鹿だが、そういうところに敏感ルージユだ。だが、百戦錬磨の女性ならば彼からむしり取るのは簡単だ。騙しやすくて堪らない。

詐欺師は己さえも騙す。

故に被害者は騙される。

古今東西の真実である。

少年はそれを知らない。

少年は卒業後工場で働く予定だったが、次の日校長に呼び出され、提督候補生になる
と言われるのだった。

半年の研修を経て、民家改二の鎮守府で艦娘を率いる提督になる。

人手不足は若者をも戦場へと巻き込む。

だが少年は悪くないとさえ考えるのだ。

国のためじゃなくて香取先生のためだ。

それならば、充分に戦えるじゃないか。

香取先生が艦娘であることも同時に知ったが、案外すつと受け入れている自分自身に
彼は戸惑いを隠せない。

千葉の山奥で研修を受けるのだ。

先生が毎日指導してくれるのだ。

マンツーマン体勢らしい。

今回は特殊な体勢らしい。

憧れの香取先生が彼の隣にいる。

香取先生がずっと付いてくれる。もうこわいものはなんにもない。彼は艦娘の本質をまだ知らない。それは刹那的な幸せをもたらす。たつた一つの命を彼女に捧げる。それだけしか出来ないのだから。いとおしき先生のために戦おう。それだけでいいのさ。

「頑張りましたよ。ね。」

「は、はい。」

日本人大好き頑張ろう発言。

その呪いは現在も強力無比。

一見無毒な猛毒が人を蝕む。

少年は、なにも気づかない。

舎弟たちをどうしようとか、アルバイト先の工場でおっぱいをガン見出来なくなつて悲しいとか、そんなことばかり頭に浮かんでくる。

アルバイト先の後釜争奪戦が血みどろなのを、彼はまだ知らない。

鎖鎌、トンファー、メリケンサック、物干し竿、金属バット、木刀などの容赦なき暴力が河原で炸裂する。

勝った者がおっぱいの守護者だ。

おっぱいを見るためならなんでも出来る。

万感さえ覚えながら闘争に明け暮れる。

まごうことなきおバカたちなのであつた。

香取先生は少年をにこにこ見つめる。

役立たずと罵られて放逐されたが、この好機の巡り合わせは大変嬉しい。

幸い、少年は自分に好意があるらしい。

ふふふ。絶対あなたを逃がしませんよ。

香取先生は滅茶苦茶有能だつた。

少年を即席提督に仕立てるべく、礼儀作法や常識良識知識などをバンバン詰め込んでゆく。

それはまさにスパルタ式だつた。

社会に出てわかりませんが済まない。

愛の鞭を泣く泣く振るう香取であつた。

教鞭が唸りを上げながら少年を叩いた。
痛い。

痛いけど、これは愛に満ちた鞭なのだ。

だから、少年は香取先生の愛を受ける。

柔術剣術相撲にもすぐれた彼女によつて、少年は道場に於いて寝技を喰らいまくつた。

密着する肌と肌。

急接近する二名。

双方、顔が赤い。

仕組まれた接触。

全国各地の学校や職場などで似た現象が同時多発化している。

男子校やコンヴィニエンスストアなども、例外ではなかった。

艦娘を押し倒せる人間などいはいはしない。

艦娘が意図的にされた場合は別だけど。

文武両道の香取は生徒たちを魅了する。

崇拜者のな生徒さえも生み出している。

少年と急速に仲が深まってゆく日常だ。

先生が少年の部屋へちよこちよこやって来るようになるのに、そんなに時間はいらなかった。

提督の確実な獲得が急務であることを知っている艦娘たちは、現在全国へと散らばっている。

大抵は鎮守府で不要だと断じられた娘たちであつた。

転属を簡単に決意出来る艦娘ばかりいる訳ではない。

提督へ忠誠心を捧げながらも裏切られた娘さえいる。

他の娘と比較され捨てられた艦娘も実際に存在する。

故に、彼女たちは強固な絆を提督候補生と結ぶべく、手練手管を研究した。

童貞殺しは確実に。

絶対コロ助ナリヨ。

正妻の地位を獲得しなくてはならない。

二度と手放したくない存在にならねば。

函館鎮守府内食堂での修行もその一環。

胃袋を掴むことが男を引き留める術策。

少数の艦娘しかいない基地は密室同然。

殆どが一名の艦娘しかいない防衛基地。多くて数名の艦娘しかいない箱庭世界。嬉し恥ずかしの経験を重ねモノにする。夫と見込んだ男を懇切丁寧に研磨する。それが彼女たちの願い。

それが彼女たちの希望。

提督なくして存在出来ないモノの切望。刹那の永遠を引き延ばすための作業だ。他の艦娘たちに取りられてたまるものか。側室くらいなら受け入れていいかもね。美女美少女に狙われ逃げ得るは能わず。妹枠で狙う駆逐隊の存在も確認される。艦娘たちは密やかに男の心に忍び込む。子供だなんて思っていたら大間違いだ。瞳の輝きと双丘はなんでも出来る証拠。可愛い唇開いたなら狙い撃ち開始時刻。覚悟完了迎撃の用意ありな一騎当千娘。

相性のいい艦娘を送り込むのは当然だ。

好みは既に把握され包囲網は完成済み。

自分自身で選択したと思わせるために。

あらゆる手段が油断なく投入される。

一度狙われたら逃げる手段など無い。

世界的企業の常套手段が印象操作的宣伝。

それを応用して包囲網を順次狭めてゆく。

余程の曲者以外はこれで落とせる必殺策。

私服姿の先生とデートするのが当たり前になる。

先生の作った弁当を食べるのが日常化してゆく。

先生の料理と一緒に食べるのが日常化してゆく。

いつの間にか将来を誓いあうようになってゆく。

やがて迎えた卒業式の翌日。

少年の引越しを香取先生が手伝ってくれたことになった。

日中は気のいい舎弟たちも手伝ってくれて大助かりだった。

香取先生が目当てなのは明白であったが。専門の業者が手早く荷物を運んでいった。荷物は鎮守府、少年は研修施設へ直行だが。らんとした部屋で彼らは弁当を食べる。香取先生お手製の弁当に少年は感激する。先生の距離がやたらと近くドキドキした。頭の中で妄想した世界を数段上回る展開。

「まだ、出かけなくても大丈夫ね。」

「ええ、まだ少し時間があります。」

先生が少年の手を握る。

震える手の振動伝わる。

彼女は温かく手を包む。

少年はギンギンだった。

も、もういいんだよな。

いいんだよな！

いいんだよな！

俺は！

俺は！

先生の顔がどんどん近づく。

後数センチといったところ。

先生の唇が急接近してゆく。

とろけるようなめくるめく。

そうした経験を今俺は行う！

と、その時。

ピンポーン。

無情にも、呼び鈴が鳴った。

好機は無情にも去ってゆく。

「ホーツホツホ。あなたのお悩み、この私が解決しま……。」

真つ黒な姿のセールスマンは言い終わる間もなく吹っ飛ばされた。

鬼神のごとき顔をした艦娘により、必殺の一撃を喰らい大破する。

ハツとして振り向く香取先生。

だがしかしおかし、少年はおバカだった。

「先生、カッケー！」

ちよつとばかり残念な子ね、と思いながら香取先生はこわかったわとわざとらしく抱

きついた。

どこがやねんとのツツコミはない。

リビドー全開の少年は理解力が吹き飛び、先生がいてくれるならもうどうでもいいやと思った。

むにむに、と伝わってくる弾力を心地よく感じながら。

さつきは惜しかったなあ、と思いながら。

提督になることへの不安を愛する女性に話しかける少年。

そんな彼へ、やさしく微笑む練習巡洋艦。

「心配なさらなくてくださいね。あなたの……いいえ、提督のための私なのですから。」

そして、魂魄が繋がった。

両名の魂の庭が解放され、深く信じあう気持ちが生まれる。

契約は成された。

「一生、よろしくお願ひいたします。」

「は、はひい！ せ、先生、こ、こちらこそよろしくお願ひいたしますう！」

「あらあら、硬くなっちゃって。」

「おふう！」

「時間はまだまだありますよ。焦らなくても大丈夫ですし、必ずや提督の夜戦の錬度向上に貢献出来ると思います。」

「は、はひいー！」

「心配ご無用です。提督が立派になれるよう、この香取、早朝から深夜まで徹底的に提督を鍛え上げる所存です。」

「お、お手柔らかにお願いいたします。」

「ふふふ、お任せください。」

そして彼らは、仲よく手をつなぎながら部屋を出た。

CLXXI：宇宙戦争オンライン

手堅い。

交戦しながら、横須賀鎮守府の中堅提督は内心唸った。

巴紋が九つある板倉九曜に蔦が絡む丸

熊の可愛い手形がその隣に並んでいる。

北の港町に拠点を置く鎮守府の紋章だ。

それが全艦艇に施されたのが彼の艦隊。

その中に一際大きな戦闘艦艇があつた。

函館鎮守府提督座乗の青色の艦隊旗艦。

超長距離用光学兵器を備えた大型戦艦。

現在、完全なる敗戦は一回のみの戦績。

「おのれ、ちよこまかとー」

高速型巡洋艦群に翻弄されて分断されたところへ駆逐艦群の雷撃を受け、何隻もの味

方艦船が撃沈された。

横須賀の中年提督は陣形を立て直して突撃させようと試みるが、神出鬼没の次元潜航艇がちまちまと艦艇の推進部を破壊し、動けなくなった艦船を敵艦隊があつさり撃破している。

虎の子の空間戦闘機は、空母ごと超長距離用光学兵器の餌食になっていた。

時間をかければかける程敗色濃厚になる。

青ざめた顔で、それでも中堅提督はなめていた男の艦隊へ砲撃を命じた。

艦娘の技術は根本的根幹が解き明かされていると言いつつ、言い難い状況だが、それでも応用面に於いて社会へ多大に貢献している。

政府は表層的に不満を持つ若年層対策として、五感変換型擬似現実的電脳遊戯の開発を積極的に推し進めていた。

いわゆる、フルダイブ型ゲームである。

最初に医療現場でのリハビリテーションへ手を付けて安全面の印象操作を行った政府は、娯楽としてのゲームを派手に推奨した。

貴方も勇者になれますよ。

貴女も姫様になれますよ。

異世界で暴れてみませんか？

ちやほやされてみませんか？

ゲーム世界から現実世界へ戻ろうとしない『未帰還症』対策として一定時間以上は連続的に遊べない仕様が組み込まれることは必須科目となり、安全対策が何重にも施されることを開発元は義務付けられる。

現在、こうしたゲームは大歓迎され、社会に浸透しつつあった。

警鐘を鳴らす人もそれなりにいるが、多勢に無勢の状況だった。

鎮守府の提督たちが宇宙艦隊の戦いを繰り広げているのは、大本営からの公式命令である。

実用性の試験中という名目だ。

ここは横須賀大本営。

横須賀鎮守府に隣接する場所。

函館の提督の勢力を落とす狙いもある。

お前は悪目立ちし過ぎたのだよ、とばかりに何気ない風を装って追い落としにかかった。

逃がしはせん、逃がしはせんよ。

選良たる優良な提督一種たちの猛攻に、単なるおっさんが勝てる訳も無い。

その筈だ。

先日の大型作戦が成功したのも四大鎮守府の攻勢で敵方が大半の戦力を失ったからであり、また、四大鎮守府を含む他の鎮守府泊地警備府の艦娘たちが自主的に参加したからである。

函館の提督の影響力は削ぐべきじゃ。

取り返しのない事態になる前に。

大和型艦娘四名が戦列を並べて砲撃する様は大本営直属の青葉によって撮影されており、大本営側はちやつかりそれを宣伝材料に使っていた。

広大な宇宙空間を舞台に戦闘艦艇が火花を散らす。

これぞ漢の浪漫ナリヨ！

そう信じ、雪辱戦とばかりに四大鎮守府でも血の気の多い提督は嬉々として函館の提督と交戦した。

艦艇数は同数の一万隻。

なに、半数でも負けはせんよ。

エリートたちは、彼を侮った。

蓋を開けてみればどうだ、と横須賀の提督は歯噛みする。

あんな素人などにつ！

函館の提督の戦法は特に目立つところがない。

要所々に空間機雷をばら蒔いたり、側面から別働隊が砲撃雷撃したり、逃げたと見せかけて側面から不意打ちしたりするくらいだ。

厄介なのは、一点特化型攻撃だ。

火線を集中させて、旗艦を狙い撃ちする。

空間戦闘機や高機動の巡洋艦群による攪乱で旗艦周辺の艦列を乱した後、苛烈な砲撃雷撃を加える。

単純だが、大抵の提督が引つ掛かった。

旗艦を討ち取られた方が負けなのだから、函館の提督の勝率は意外と高い。

引つ掛からない提督へは、堅実な防御陣を敷いて持久戦を強いいる。

焦れた方が負けだ。

序盤から激烈な攻撃を加えた呉第六鎮守府の提督率いる漆黒の艦隊以外で、函館の提督を完全に打ち負かせた提督は今のところいない。

四大鎮守府でも上位に属する提督がひよんなことで負けでもしたら、最悪艦娘たちが転属してしまう。

それは絶対に避けたい事だ。

大本営の意図にそぐわぬ故に。

横須賀の中堅提督は打開出来ない事態にイライラする。

このままでは時間切れである。

大画面でゲームを眺めている部下たちはどう考えているだろうか？

上官は？

同期は？

後輩は？

出世に響く筈はないが、噂にはなる。

負けられない。

負けたくない。

艦橋で必死に指示を飛ばす。

レーダーの観測員が叫んだ。

「提督！ 次元潜航艇が！」

「なにっ!？」

僅か一隻の小型艦艇が旗艦近傍の空域に現れ、レーザー水爆をこれでもかとはかりに発射した。

私はうなだれる失意の提督へ声をかけようと近づいたが、手のひらを突き出され、無

言で拒絶される。

白けた雰囲気の艦娘たちを引き連れ、彼は自身の執務室へ向かうようだ。

悪いことをした。

「勝ち逃げはさせんよ。」

振り返ると、横須賀でも上位に属する提督が無表情で立っている。

背後にどす黒いオーラが渦巻いて見える。

まるでシスの騎士だ。

あのおう、私はそろそろ函館へ帰りたいんですがね。

青葉とマスターオータムクラウドは興奮していた。

この新しいコンテンツ。

函館の提督を宣伝するのになんとも好都合な品だ。

巧みに勝ちを譲られているとも気づかない提督は、大画面で勝利を確信して吠えている。

耳障りな程に。

わかりやすい人物だわ。

彼の配下の艦娘たちはじつと戦況を見つめ、小声で批評している。

携帯端末をいじっている艦娘がなにか打ち込み、画面をしばし見た後再度打ち込みしていた。

やがて、横須賀のアラフィフ提督が函館のアラフォー提督へ果敢な攻撃を仕掛ける。旗艦周辺は楯艦を厚く配備しているので、火線を集中させても通りはしないだろう。時間切れの判定勝ちに持ち込むつもりらしい。

艦娘たちがひそひそ話をしている。眉をひそめる艦娘さえ何名かいた。

艦隊戦は全国各地の鎮守府泊地警備府へ同時中継されており、なんちゃって鎮守府へは後日データを送る予定だ。

いい歳をした提督がうんざりするような発言をする。

元々は商社会社のやり手だったらしいが、業界自体が昭和の悪癖を継承しているために罵詈雑言も通常使用らしい。

青葉たちがその様子をにこにこ見つっ、素早く手帖にペンを走らせる。

横須賀の提督が完全な勝利を確信した直後、函館艦隊が猛然と突撃を開始して旗艦方面へ集中砲火を浴びせた。

吹き飛ぶ楯艦数隻。

旗艦艦橋が揺れる。

数発喰らったくらいで沈む筈もない。

だが、被害を気にすることなく函館艦隊は第一戦闘速度で突っ込んでくる。横須賀艦隊の艦艇がどんどん撃沈された。

初めて見せる猛将の姿だ。

艦娘たちの歓声が上がる。

「ええい、小癩な！ 撃て！ 撃て！」

そして、乱戦が始まった。

老齢に差し掛かった提督は、己が負けることなど考えていない。

最後の足掻きに過ぎない。

そうだ、あの旗艦を沈めればいいだけのことだ。

「撃て！ 撃て！ 撃ちまくれ！」

私は英雄になる男なのだぞ！

負ける筈など有りはしない！

そして。

「函館艦隊旗艦の超長距離用光学兵器が、敵艦隊旗艦へ向けて火を吹いた。電子時代の龍の息吹の如くに。」

CLXXII : 公王様の料理人

中欧の小国、カリスト公国。

内陸に位置するこの国はのんびりした気風の国民性で知られ、風光明媚な景色とおいしい食べ物で欧州有数の保養地として知られています。

古代ローマ風の『テルマエ・ロマエ』と呼ばれる入浴施設も多く、それは日本人にも好まれる要因です。

古代ローマ時代の遺跡を大切に保存する姿は先進的な事象を拒む要因と思われるでもないようですが、国民性として『ローマ・アンティーク（ローマのいにしえにかえれ）』的な側面が多く見られる傾向にあるため、古きを重んじるところは多々あります。

中世ヨーロッパに於いて猛威を振るった魔女狩りでは、ヴェネツィア共和国の次くらいに消極的だったとも言われています。

第二次世界大戦時はスイス同様に非戦闘地帯とされ、少々複雑な戦後を歩む結果になりました。

四〇年ほど昔にとある怪盗が公国に現れて公邸では公国近衛騎士団や日本の警察隊を含む大乱闘になってしまい、世界中の耳目を集めました。

公邸は崩壊し、被害額は天文学的だったとも言われています。

先の公王様はこの騒ぎが元で崩御されてしまいましたでしたが、しっかりとした公子様が後継ぎとして無事に公王として即位されました。

その後、帝政ローマ時代の遺跡が公邸跡から発掘されてポンペイ以来の奇跡とさえ言われるようになりました。

結果的には観光収入が増えたため、損害額は直に補填された模様です。

深海棲艦侵攻後に流民が増えましたけれども、情け深き公王様は慈悲を持って彼らの保護に当たって国内労働力の強化に努めました。

その中に、若き料理人がいました。

寒い寒い北の国から流れて来た者。

アスガルドの地から流れてきた者。

彼は公王様の人徳に魅了され、人生を懸けて尽くすことに決めました。

彼は努力を重ねて、公邸で料理の下拵えを任されるまでになりました。

おいしいものを食べていただきたい。

若者はその一心で作りに続けています。

馬鈴薯や乳製品の扱いに長けた青年。

そんな彼に転機が訪れたのは、日本人の提督が旧東ドイツのロシュトゥクに赴任してからのことです。

新しい日本の情報を持って欧州へとやって来た恰幅のよい彼は恰好の情報提供者と見られ、長時間に渡る二〇カ国合同会見はとんでもない視聴率を弾き出しました。

二週間後には八カ国共同の精鋭取材班が組まれました。

これは珍しい事態です。

日本人提督への多岐に渡る詳細な質疑応答が為され、それは異例の早さを持って欧州中で放映されました。

その番組は公王様ご一家もご覧になり、中でも参考映像として流された函館は公王様の関心を強く惹きました。

番組放送終了の翌日、若者は公王様に呼ばれました。

二年間、公国の代表者として函館鎮守府で研鑽を積んできて欲しいとの要望です。

それはとても名誉ある指名で、その使命感に彼は胸を震わせました。

公王様の眼力は極めて高く、人材を見抜く力は欧州有数のものです。

よって、公王様の意見に異見を挟む者などはいよう筈ありません。

公王様直属の近衛騎士団たるノイエ・シルチスも無言で肯定します。

その昔にミケランジェロが意匠を担当したという、中世そのままの派手な衣裳をまとった騎士たちはいずれも手練れです。

戦車の砲身を斬ったとか、銃弾の飛び交う戦場を無傷で走り抜けて指揮官を倒したとか、荒唐無稽と思えるような伝説が沢山あります。

修行が公式に決まるや否や、公王様の総料理長は若者に特訓を始めました。

カリスト公国の看板を背負って行くのですから、それ相応の技を持っていなくてはなりません。

蕎麦のガレットや肉団子のスパゲティや茸と山鳥のシチューなどの国民食を会得するのは勿論のこと、天才料理人ヴァテール直伝とも言われる多彩な宮廷料理も仕込まれます。

若者の料理力はめきめき上がりました。

気合いと興奮と誇りと創意工夫の混成。

王侯貴族が宿泊するホテルの料理人に近い力をつけました。

日本有数の料理人たちが集まる、食の豊かなる北の国の港町が目的地。

若者はときめきます。

必ずや、必ずや、素晴らしき料理人になって国へ帰ろうと。

勢力衰えた欧州の復権のため。

第二の祖国たる公国の国父のため。

見果てぬ夢をみっしりと心のスーツケースに詰め込み、若者は極東の大国に思いを馳せま

きつときつと、素晴らしき技を身に付けて国に帰ることを。

CLXXIII ならないか、と引きこもり提督は言われていた

他所の鎮守府の話だ。

その提督は、部下の艦娘が自分以外の男性と少しでも話したら烈火の如く怒り狂ったという。

冗談に聞こえるが、本当の話だ。

その提督は相当病んでいたのか？

なんと皆、それを遵守していた。

だが、それをよしとしない艦娘が現れる。

戦闘は不得手だが料理上手だったらしい。

彼女は快活な性質で、提督以外の男性とも普通に会話することをおそれなかった。

それが提督の逆鱗に触れたのだという。

正直、意味がわからん。

猛る程に嫉妬深い男だったのか？

一体、なにがしたかったのかね。

その娘は別に色情狂という訳でもなく、単に出入り業者や整備員などと普通に挨拶を交わしたくらいだったのだとか。

それでも、その提督は彼女を許さなかったという。

執務室では長い時間、怒号が止まなかったらしい。

服務規定違反ではないし、情報を漏洩した訳でもない。

まさか……ヤンデレ？

『お前は俺のモノ』的発言並びに散々罵倒されたことから、それらを不快に思った彼女は転属を決意し、即断即決即実行して函館へ逃亡した。

なかなかよい判断力だ。

その艦娘、思いきりがいい。

俺とは正反対の性質だ。

ぐずぐずして遅れがちな俺。

果断な彼女に嫌われちゃう。

なんてな。

無頼な提督イケズな提督自分勝手な提督などからの理不尽な扱いに耐えかね、それらから逃亡した艦娘を保護する権利が函館鎮守府にはある。

くだんの提督は单身、わざわざ函館へ乗り込んだ。その上、函館の提督を怒鳴り付け、しかも殴った。

……馬鹿だろ、こいつ。

執務室は騒然となつて、問題の提督はすぐさまそこにいた艦娘に抑え込まれる。彼はなにを考えていたのだろうか？

反射的に艦娘が暴力提督を殴り倒そうとしたが、函館の提督はそれを禁止した。

大本営から憲兵隊がすつ飛んできたり、その提督の鎮守府に査察が入ったり、とそりやあもう大騒ぎさ。

問題を起こした元提督は現在入院中だ。

独占欲にかられての凶行だったらしい。

自分自身を正当化する発言ばかりした。

反省などちつともしていないのだとか。

函館に逃亡した艦娘は転属し、今はどこかの鎮守府で頑張っているそうだ。

倉庫改造型鎮守府の二階にある執務室。

古い金属製機でせつせと書類仕事三昧。

艦娘と接触なんて高度な技術は無いから、秘書艦殿にその辺は任せておるのでありま

する。

そんな日々に変化が訪れた。

執務室に隣接する私室に、厨房担当の子が訪れたのだ。

やつほい、俺の部屋に初めての女の子！

内心テンションハイマックスだが、異性慣れしていないのでまともな対応は出来ない
ので御座る。

……まあ、嬉しいことは嬉しいのだが、緊張感の方がずっと俺を激しく刺激する。

胃がキリキリキリキリするべ。

後で漢方胃腸薬を飲んどこう。

厨房担当の子が爪を切りますよと言ってくれた。

床に撥水加工された帆布が敷かれていて、その上に湯を張った洗面器が置かれてい
る。

ありがたいんだけど、キョドる。

挙動不審な俺、通報されかねん。

いやん。

辞退したのだが、押し切られる。

湯に手の指を浸けて、爪を柔らかくした。

切りやすく割れにくくする工夫だそうだ。

夜爪を切るのには縁起が悪いと聞いたが、切ること自体は俗説だそうだ。

昔は夜間照明がさほど明るくなかったから、そんな条件で爪を切ったら手元が狂う可能性もある。そういうことだろう。

ニツパーみたいな爪切りでクニユックニユックという感じでどんどん切られてゆく。

女の子に触られながらの作業に、心臓がバクバクする。

ヒットポイントと正気なS A N値がゴリゴリ削られる。

少佐！ 少佐！ 助けてください！

……少佐は俺だった。

なんちやつてだけど。

大丈夫かな、俺。

こんなに至近距離で女の子と一緒にいたことなんて、産まれて初めてだ。

母ちゃんは除く。

手が終わり、足に移る。

湯を換え爪先を浸けた。

やわらかくなってゆく。

彼女がかがんで爪切りを始めた。
衣類の隙間から膨らみが見える。

やべえやべえ。

マジでやべえ。

どぎまぎした。

見えぬ見えぬ。

その先などは！

脳内警報が止まらない。

なんで武羅していないんだよ！

鎮まれ、俺のエクスカリバー！

脳内で、とある爆裂魔法使いの呪文を高速詠唱して煩惱と対峙する。

おらおら、ベノン！ ダムド！

七鍵守護神を三回詠唱し終えたところで、この苦行は無事終了した。

緊張していたら、そんなに堅くならなくても大丈夫ですよとニツコリされた。

思わずときめくが、いやいや、オークな俺がモテるなんてある訳ないのだよ。

勘違いしてはいけない。

たぶん、これは気紛れだ。

気紛れ蜜柑街道なんだ。

悲しい恋は燃えているわ。

甘酸っぱい勘違いナリ。

でも、なんか嬉しいぞい。

切った爪をちり紙にくるんでポケットに入れた彼女は、紙やすりを丁寧に爪へ当ててゆく。

これ、幾らするんだろ。

ぼんやりとそう考えた。

そういう店に行ったことが無いからわからないが、普通の人は行ったら気分が高揚するのだろうな。

シャツが汗びっしょりだ。

グシヨグシヨだぜ。

「じゃ、耳掻きしましょうか。」

流れるように彼女が言った。

ポンポンと自らの膝を叩く。

「む、む、無理でござす。お、おいどん、そがいなことは出来もさん。」

「方言が滅茶苦茶ですよ。」

「す、すみません、すみません。許してたもれ。わっちはそげなハライソには耐えきれぬのじゃ。じよ、浄化されて塵になつてまう。」

「何時からアンデッドになつたんです？」

「シスターの前の哀れな子羊で御座る。」

「それでは天国をお見せしましょうか。」

「お、お代官様、お、お許しください。」

「仕方ないですね。では、次の機会に回しますか。」

「も、申し訳御座りませぬ。」

「そういうところも可愛いですよ。」

「ほ、ほえ？」

「じゃ、下着や服を洗つときますね。傷んだものはこちらで交換しておきますからご安心ください。」

「え、あ、あの……いい、いいの？」

「ええ、お任せください。今汗でグシヨグシヨになったシャツやパンツも洗いますから、こちらにください。そちらもほつれや傷みがあつたら、こちらで交換しておきますからご安心ください。」

「お、おう。あ、ありがとう。」

「お安いご用です。」

ええ子や。

女神様や。

この子はまつこと女神様や。

急いで狭い浴室で脱衣した。

巨人の棍棒をひのきの棒に変化させる。

上機嫌で彼女は私室から去っていった。

彼女が交換してくれた麦茶を冷蔵庫から取り出す。

ごくごく飲んだ。

からっからの喉にじんわり水分が染み渡ってゆく。

旨い。

ふう。

やべえ。

マジ、やべえ。

もう少しで危ないところだった。

栄養なんて携帯糧食と即席食品程度でいいやと最近まで思っていたけど、あの子が朝食昼食夕食を持ってきてくれるようになってから、なんだか調子が良くなってきた気さ

えする。

食堂の時間が終わり次第持ってきてくれて一緒に食べ、彼女が厨房で片付ける。

二度手間三度手間じゃないかと思つて別にそこまでしなくていい旨伝えたら、彼女は頬をぷくーと膨らませた。

「指揮官の体調は、部下の安全に直結します。提督が倒れたら、大変なことになるんですよ。わかつているんですか？」

「お、おう。す、すまん。」

……おつしやる通りであります。

無理無理無理無理無理無理無理！

やっぱり、女の子と喋るなんて無理！

厨房担当の子だったらなんとかなるかとも思つたけど、拙者には無理で御座る無理で御座る！

手を触られたりすると汗ドバドバだし、胃がキリキリするし、嬉しいけど嬉しくないぞい！

あーっ！

うきっ！

なんで俺、提督やってんだろ。

オーク系不細工だし、不器用だし、知らない人とまともに話せないし、他人がなに考えてんだかちつともわからないし。

話をちゃんと聞かないって言われるし、なんか言っても聞いてもらえないし、バカにばつかりされてきた人生だったな。

もうどうでもいいや、って思った頃に、ならないか、って誘われたんだ。やべえ人に誘われたと思っていたが案外いい人で、今の俺は彼のお陰だ。厨房担当の子が新しい下着に全交換してくれたのは、正直ありがたい。

全部どこかしらダメになっていたらしい。処分までさせて悪かったな。

今度なにかで埋め合わせしとこう。

なかなか手強いわ。

他の子は焼菓子を作っていたけど、おいしく作るのって案外難しいのよ。きちんと計量し手順通りに正確に作らないと、おいしくなんてならない。和菓子の方がまだ融通は効くんだけどね。

提督は頑張って全部食べたけど、知恵熱が出て三日も寝込んでしまった。おまけに腹痛まで同時に発生する惨事。

鎮守府中が大騒ぎになって大変だった。

腹痛の原因は結局ストレスと判明する。

知恵熱は私たちと会話したのが原因だ。

提督の耐性の無さに全員愕然となった。

引きこもり提督の本領を發揮したのね。

焼菓子に火加減も大事なの。

火が通りきつてなくて生焼けになったり、焦がしたりしていたみたい。

売っているものでもそんなのがあるから、要注意なのに。

甘い甘い。

カスドースよりも甘いわね。

提督の正妻の座は私のももの。

じわりじわりと攻め落とす。

焦ってはダメ。

知恵熱と腹痛が同時発生するわ。

今度はなにを仕掛けようかしら？

「駆逐艦の卯月デース。素敵な司令官に会えて、気分が高揚しちゃうわ。」

「お、おう。よ、よろしくな。」

「さんねん、うっそぴよーん。」

「ま、まあ、そうなるよなあ。」

「……あの、ごめんなさい。そんなに落ち込むとは思わなかったの。」

「べ、別に、き、気になんてしていいから、だ、大丈夫だ。」

「司令官、いい人だぴよーん！」

「そ、その、抱きつかれると困る！」

「あら、うぶなのね。ふふふ。」

「え、えっ?」

「うっそぴよーん! でもなんだか司令官のことをとつても気に入ったから、秘書艦やつてもいいぴよん。」

「ぎ、残念だが、既に秘書艦はいるし、変える気もないよ。せ、折角だが、先輩たちの指示に従ってくれ。」

「ぶっぶくぶー!」

「す、すまない。」

函館鎮守府を経由して送られてきた艦娘はえらくハイテンションの駆逐艦だった。

振り回されまくる。

ケツコンカツコカリしていた艦娘が、各地方の鎮守府泊地警備府への強化策として配属されると事前に聞いてはいた。

だけんどよ。

聞いてはいたのだが、こんな子がうちに来るとは思ってもいなかった。

なんとも個性の強い子だ。

卯月って、稀少艦じゃなかったっけ？

「ねえ、司令官。」

「お、おう、なんだ？」

急に雰囲気が変わった。

まさか……変身か？

変身するのか？

「司令官がここで一番偉いんだよね。」

「あ、ああ。い、一応そうなる。」

「こんなのでもいいの？」

「な、なにが？」

「提督になれて、艦娘を大切に出来る人がどれだけ価値の高い存在かわからない？」

「お、俺なんて所詮は使い捨ての、に、二束三文程度の価値しかないモブなんだ。」

「自己評価が極めて低く、承認欲求を希望する度合いも殆どない。報告書通りね。」
「う、卯月？」

「わかったびよーん！」

「ほ、ほえ？」

「これから私が司令官の奥さんとして、キリキリ頑張らなきゃいけないってことがわかったんだびよーん！」

「は、はい？」

「ダメです！」

「へ？」

執務室の扉が開いていた。

厨房担当の子が目を見開いている。

「提督の奥さんには私になるんです！」

「ウサギは夫がいないと、さみしくてダメになっちゃうんだびよん。夜のうーちゃんはとつてもとつても激しいよ。びしっ！」

「私は先日の夜に、提督の爪切りをしました！」

「じゃあ、卯月が耳掻きをするんだびよーん！」

なんだ？

なにが起こっている？

「あ、あの……。」

「料理対決です！」

「望むところよ！」

「提督、今晚なにが食べたいですか？」

「ハ、ハンバーグかな。」

「ではハンバーグ対決だぴよん。函館の鳳翔さんや間宮さん直伝の技をみるがいい。

ぷっぷくぷー。」

「私だつて研鑽は積んでいます。貴女には絶対負けない！」

なんぞこれ。

「司令官の童貞は卯月のモノだぴよん！」

「貴女に明け渡してたまるものですか！」

俺、童貞じゃなくなっちゃうのか？

その後、鎮守府中の艦娘にハンバーグ対決が知れ渡つて、艦娘たちから次々話しかけられ反応出来なくて限界に達し知恵熱を出した俺は気絶してしまった。

直後、大騒ぎになったという。

目覚めて辞任願いを書いていたら、秘書艦の子や厨房担当の子や卯月や鎮守府の子たちから辞めないでと言われる。

提督冥利に尽きる、と言えいいのか。

取り敢えず函館の提督に電話し、間宮羊羹を送ってもらうことにした。彼は気さくに要望に応じてくれて、次いで卯月を送ったことを謝った。彼女の受け入れ先を見つけるのは困難だろうと、引き受ける旨伝える。彼は喜んでくれて、羊羹の他に月餅や焼菓子なども送ると請け負った。これでひと安心……かな？

卯月の着任は様々な波紋を生み出した。

彼女は強い。

鎮守府のどの艦娘よりも高錬度である。

そして、かなり気安い。

ムードメーカーなお調子者って感じか。

現在は厨房担当の子と料理で張り合っている。

我々は再度会議を開いた。

まさかの強敵現るだ。

ふざけた口ぶりが特徴だが、それに惑わされてはならない。
会議は結論が出ないままに終了した。

今度の司令官はとつてもおいしそう。
お腹いっぱい、食べさせてもらおうわ。

週に二回、厨房担当が卯月になった。

元々担当している子は空いた時間、俺の部屋を掃除したり洗濯したりするようになった。
た。

慎ましやかなのでありがたい。

下着や消耗品が時折変わった。

何故か卯月が悔しがっている。

使用済みの箸なんてどうする？

使い込んだ歯ブラシを持っていく意味がわからん。

執務室でゴロゴロする卯月が日常的になってゆく。

あまり話しかけられると挙動不審になることをようやく理解してくれたが、時折抱きついてきたり膝の上に乗るので油断ならない。

本人曰く特訓だそうだが。

なし崩しに、執務室に艦娘が常駐するようになってもうた。他の子たちさえ、執務室にやって来るようになってもうた。アカン。

これはアカン。

胃が痛い。

富山の胃薬を後で飲んでおこう。

函館の提督が効くと言っただけのことはある。

あちこちの提督の常備薬と知って、納得する。

「う、卯月、そ、その、見えているぞ。」

ちゆ、注意はしとかないとな。

だが、彼女はニヤリと笑った。

「司令官、興奮する?」

「ば、馬鹿なことを言うんじゃない。」

「うーちゃんは司令官のお嫁さんだから、全然問題ないびよん。」

「あ、あのなあ。」

「司令官もそろそろ女の子馴れした方がいいびよん。そうだ、さみしいウサギのために

「肌脱ぐべきだびよん。」

「や、やめてください。しんでしまいます。」

「やるのは確定事項だから、早くやった方がいいびよん。」

「くっ、殺せ！」

「じゃあ、うーちゃんパワーで昇天させたげるね。」

「しまった！ ドツボに嵌まった！」

「ぶつぶくぶー！ 覚悟だびよん！」

「やらせません！」

厨房担当の子が昼食と共にカットイン！

「うーちゃんは三人でもいいびよん。」

「貴女は恥じらいを知ってください！」

どうやら、混乱は当分続くらしい。

嗚呼、胃が痛い。

CLXXIV：異世界から還つてきた男

ある日、都内の駅で集団転移に巻き込まれて異世界の連中が唱える魔王征伐に駆り出された。

イヤでイヤでたまらない世界だった。

不衛生極まる環境、酷い身分差別、女性蔑視、暴力が当たり前との考え、ひたすら不味い飯。

くさい連中。

頭の中身も体のおいも二重の意味で。

うんざりするような、非文化的世界だ。

戦争に明け暮れ、それが普通であった。

蛮族どもめ。

人殺しを強要され、みな狂っていった。

気絶している間に隷属の首輪とやらを嵌められ、奴らにハメられた。

飴と鞭を使い分ける百戦錬磨で海千山千の老獪な王族や貴族に俺たち呑気な日本人が対抗出来る筈もなく、逆らう意思さえ首輪の魔力でうやむやにされた。

異世界転移した影響からか、魔法が使えぬ者もいた。

特殊能力を身につけた者もいた。

一体どういう理屈かは不明だが。

ステータスオープンとか叫んでいる者がいたし、無詠唱がどうしたとか、チートがどうしたとか、ユニークスキルがどうしたとか、わめいている者もいた。

なんだそれ？

特殊能力に開眼した者たちは勇者として優遇されたが、だからと言って他の日本人を助けようだなんて殊勝な者は一人たりとて存在しなかった。

まあ、そんなもんだらう。

差別は酷く、同じ日本人なのに酷い扱いをするのが当たり前という風潮さえ生み出した。

ただ、幾ら天与の才があってもそれを使いこなせるかどうかは別のようだった。

高性能な最新鋭の怪人が、逃亡中の旧式改造人間に返り討ちとなる話を見たことさえ無いのかね？

それでも嬉々として差別にいそしむ人間を見て、俺は人間不信を募らせる。

人が如何に弱いかをまざまざと見せつけられ、非常に不快になった。

誰も信用出来ない状況で、俺が唯一身につけていた能力は『自爆』だった。

なんだこれ？

体内の魔力を暴走させて、周囲の魔力と共鳴して大爆発を引き起こす能力？

ヤバイ。

幸い、能力は自己申告制だった。

実際にやってみせたらすぐわかるし、それでいいようだ。

いい加減だよな、こいつらはよ。

鑑定する道具や能力は存在しないらしいので、よかった。

威張りくさる王侯貴族に、勇者とおだてられる連中。

馬車馬の如くに酷使され、人数が激減していった。

まともな神経をしていた者程、すぐに死んでゆく。

自己犠牲がなんの役にも立たない、むごい世界だ。

勇者も次々に戦死する。

偉ぶっていた奴らが、余りにも呆気なく戦場でくたばってゆく。

簡単に相手の策に嵌まり、包囲殲滅され惨殺されていった。

中には生きながら捕らえられ、拷問された者もいたらしい。

慢心の結果だろう。

捨て駒とも気づかないままに。

説得しようとして殴られたこともあった。

俺はああならないぞと威張っていた奴が、次の日には帰ってこない。

普通に暮らせていた筈の、普通の日本人たちが狂気に彩られてゆく。

あまりにも酷い待遇に不服を唱えたら、王城地下の牢屋に閉じ込められた。

煉瓦のように固いパンと水のように薄いスープは、一日一回出されたらいい方である。

どうやら見せしめにされたらしい。

俺こそ慢心していたことを知った。

誰も助けに来る筈なんて無いのに。

栄養失調になってすぐ死ぬだろう。

そう思っていた。

だが。

それでも、人間は簡単に死なない。

死ぬ時は驚く程あっさり逝くのに。

半年ほど経過した、ある日のこと。

比較的俺と仲の悪くなかった人々が全員死んだと、牢屋番がゲラゲラ笑いながら言った。

結局、こいつらにとって俺たちは人間ですらないのか。

傭兵以下の存在なんだな。

そうか。

じゃあ、死のう。

もういいや。

もう疲れた。

お前らも死ねよ。

絶望した俺は技能を解放する。

魔法の純粹な力が溢れ始めた。

魔法無効化能力を無視する力。

セカイそのものを構築する力。

驚愕した表情の牢屋番が瞬時に消滅する。

その直後、俺は意識を失った。

やり方はとても簡単であった。

想像をはるかに超える威力だったようで、気づいたら廃墟の中にいた。

自動的に復活するみたいだな。

隷属の首輪はぼろぼろになっていて、あつさり外れた。

あれだけ人を苦しめていた存在なのに。

混乱の王都から逃げ出し、悪戦苦闘の日々が続く。

冒険者ギルドのような便利な存在がある訳でもなく、雇い人にも商人にも傭兵にも盗賊にさえもなれない俺は奴隷商人に捕まり、再度隷属の首輪を嵌められた。

商品として扱われ、裕福そうな商家の主人に買い取られる。

銀貨三〇枚の価値だった。

今度の主人は王族や勇者より少しマシな人間だ。

いや。

こちらが普通らしい。

普通？

普通ってなんだろう？

異世界言語を読み書き出来たので、主人の秘書に任命される。

時折癩癩（かんしゃく）を起こして主人は俺を折檻するが、特にどうとも思わない。

あの日々に比べたら、ずっとマシだ。

たまに折檻されながらも、割合落ち着いた日々が何年か続く。

それなりに慣れそうだと思っていた矢先、魔王軍の侵攻が始まった。

俺がいた王国は奴らの拠点になったのだ。

ようやく制圧して、処刑も終了したとか。

王国に住んでいた人間は皆殺されていた。

そんな情報が届く。

主人たちと共に逃亡したのだが、直に捕まる。

魔王と腹心たちのいる本陣に連れてゆかれた。

奴らの娯楽らしく、一人一人必死に命乞いさせた後で無惨に殺してゆく。

なんと悪趣味な。

絶望に彩られた顔の人々へ、わざとらしい仮初めの希望を与える魔の者。

叶えるつもりは最初からない。

ゲラゲラ笑う魔物たち。

お前らも奴らの同類か。

あれだけ強圧的だった主人は弁舌を尽くして慈悲を乞うていたが、話し終えた後あつ

さりと引き裂かれた。

最後に残った俺は、ふんぞり返った魔王らの前で『自爆』を発動させる。

死なば諸共だ！

存分に喰らえ！

慌ててなにかの呪文を詠唱し始める魔王が見えた。

残念だな、こつちの技はすぐに発動する！

俺はその直後、意識を失った。

溢れる魔法の純粹な力が、広がってゆく。

「ワシがこんなところで消滅する筈が無い！」

魔王は最強級魔法障壁を発動させた。

だが、すぐに術式がほどかれてゆく。

周囲の魔物たちはとつくに消滅した。

幹部たちも抗っていたが、消滅した。

ここに残る生者は魔王のみであった。

矮小と侮っていた人間の放った術で、魔王軍は壊滅した。

娯楽のために本陣に集まっていた愚かな魔物たちは慢心によって、その命を無くした。

「ここまで来るのにどれだけかかったか！ そんなバカな！」

魔王を構成していた物質が半分以上消えている。

魔法の力に耐えきったものの、復活には相当の時間がかかるだろう。

「まさかっ！ 異世界からの干渉？ だが、このままでは済まさん！ そうじゃ、マイル
フィックを召喚し……。」

と、その時。

突如どこからともなく突進してきた青く美しいナニカが、煌めく刃で魔の王の首を斬り落とした。

「な、な、なにも……。」

細切れにされる、魔王の頭部。

野望の魔物は完全に消滅した。

それを見届けたナニカは金色の髪をなびかせ、長いスカートを翻して走り去っていく。

「おう、兄ちゃん、なんか着ないと風邪ひくぞ。」

目覚めると、硬い床の感触。

「どこだ……?」

「なんだ、兄ちゃん、ぼーっとして。」

「あの、ここはどこですか?」

「新宿駅だよ。」

「えっ?」

なんだかボロツとした感じの駅は、かつて世界最大級の利用者を誇った場所だった。人がまばらで、だだっ広い地方の駅だとばかり思っていたが。

声をかけてきたおっさんは人がよく、古着を融通してくれた。

ありがたい。

あれ?

新宿駅って、確かあの人の痛みを知ろうともしない官能小説家な傲岸不遜系暴言都知事が浄化作戦だかなんだか言って、こうした人たちを追い出したんじゃないやなかったっけ?

駅舎内はちらほらと座り込む人がいて、なんだか世紀末っぽかった。

段ボールにくるまっている人もそこかしこにいる。

むすつとした顔の男女が足早に過ぎてゆく。

目がつり上がっていた。

かつては俺もこんな顔をしていたのだろう。

遠いセカイの人々に見える。

硝子越しのナニカを見る。

「なんだ兄ちゃん、きよろきよろして。あんまり見ない方がいいぞ。」

「あ、そ、その、すみません。」

「深海棲艦が出てきてからは、ずっとこんなもんよ。東京はもうダメだな。人が出ていく一方だ。関西の景気は良くなっているようだが、こっちはにっちもさっちもいかん。」

「えっ?」

「なんだい、あんた。山奥で修行でもしていたのかい?」

「ま、まあ、そんなところですよ。」

「幕末にも修行に明け暮れて維新を知らない侍がいたそうだが、わかった、兄ちゃん、なんかとつばいから悪い連中に身ぐるみ剥がれたな。」

「え、ええ、まあ、そんなところですよ。」

「兄ちゃんみたいなのは、ここから早く抜け出した方がいいぞ。長くいても、ろくなことにならないからな。この辺の愚連隊は全部潰しておいた筈だがなあ。今から哨戒班を出して、今夜にでも奴らのアジトを何個か潰しておくか。」

おっさんは世話好きのようだった。

実際、世話役のような感じである。

世間話の態を装い、情報収集した。

愕然とする。

世界の海は分断され、日本はがたがたになっていた。もつと酷い国もあるだろうとの予測さえあるという。

輸入が途絶えたために莫大な供給量を必要とする大都市は機能不全に陥り、特に東京は世紀末的な治安の悪さが加速化したそうだったか。

この駅舎では大規模な騒乱があったとか。

池袋駅での騒乱もかなり酷かったようだ。

新宿駅がボロいのはそういう理由らしい。

焦げた跡や弾痕が何カ所にもある。

ゾンビでパンデミックな状況よりはマシかもな。

最近は艦娘という武装少女が出現して、深海棲艦を駆逐しつつあるらしい。

鎮守府という基地の周辺は賑わっているが、それ以外の場所は過疎化が加速しているという。

移動にやたら金がかかるのだ。

物価も酷い有り様だ。

一時は、以前の三倍から五倍は当たり前だったとか。

政府が必死に物価統制しているが、趣味嗜好の品は後回しである。

金持ち優遇策を取るとすぐにデモ隊が国会議事堂へ押し寄せるため、今の政策はどち

らかというと庶民寄りらしい。

流通網は西日本主体だそうだ。

輸入も再開されたが、一旦ダメになった東京の復興は遅れているらしく、西日本へどんどん人が流れているとか。

呉、佐世保、舞鶴と四大鎮守府の内三箇所は西日本にある。

鎮守府周辺の景気がいいなら、そちらに人が流れるも道理。

東京がメガロポリスに戻れる日は訪れるのだろうか？

噂では京都への遷都や皇居が御所になると囁かれている。

御所では工事が盛んだそうだし、政府の西日本方面への出先機関が大型化しているのは紛れもない事実だ。

「兄ちゃん、水だ。これならタダだからよ。ほれ、あそこで幾らでも飲める。」

「ありがとうございます。」

硝子コップを渡された。

水だつて本当はタダじゃないんだけど、ここはありがたく貰っておく。

久しぶりの日本の水は、少し薬品くさくてしかし清潔な味わいだつた。

おっさん愛用の硝子コップは頑丈らしく、落としても割れにくい品だ。

プロヴァンスにもう一度くらいは行きてえなあ、とおっさんは呟いた。

炊き出しをしてくれる酔狂な人がいて、行列に並んだ。

嗚呼、日本に帰ってきたんだなあ、としみじみ思った。

久々のうどんは旨かった。

真つ黒でドロツとしたつゆにしなびたネギがほんの少しの量。

質の悪い天かすも薄つぺらな蒲鉾すらも無い。

麺もコシがないが、それでも久々の日本食は体に染みてくる。

勢いよくすすりこんだ。

これだよ、これ。

こういうのがいいんだ。

汁もすべて飲み干した。

「なんだ兄ちゃん、久々に帰国した人間みたいだぞ。」

「あはは、まあ、似たようなもんです。」

「よし、もう一杯貰ってきてやる。なに、あの担当者は浪花節に弱くてな。一回くらいなら目こぼししてくれる。」

二杯目のうどんも旨かった。

無論、今度も汁を飲み干す。

驚いたのは、日雇いの仕事があることだった。

人口が急激に減って、基本的な労働力が全然足りないらしい。

東京は今も激しい混乱から立ち直れていない、ということだ。

工場の手伝いとか建造物の撤去とかに従事して、幾ばくかの金を得る。

親切なおっさんに別れの挨拶をして、住んでいた家へと向かった。

一時間に一本あつたらいい方の、ゆっくりと走る電車に揺られる。

潮風がなつかしい。

駅舎は無人だった。

しかも錆びている。

てくてくと歩いた。

更地になつていた。

馴染みだった文房具屋もオモチャ屋もとうに無くなつていた。

思い出の場所はすべて消えていた。

天涯孤独になつてしまった。

どこに行く当てもなかった。

役所に行つても、たぶん、どうにもならないだろう。

存在しない人間になつている可能性すら考えられる。

産まれ育った海沿いの街は、とつくの前に崩壊していた。

海を見に行こう。

不意に思った。

海を見ながら自爆するのも乙じゃないか。

俺一人を吹き飛ばすくらいに魔力は残っている。

誰もいない海で……いや、深海棲艦とやらがいたら道連れにするのも悪くない。

魔力の鼓動を確かめながら、てくてくと歩いた。

海は穏やかだった。

見慣れた海だった。

何年ぶりだろうか。

海をこんなに見つめるのは。

空は青く、海もまた青い。

海辺でぼんやりしていたら、突然後ろから声をかけられた。

「どうしたの、提督？」

提督？

なんだそれ？

振り向いた。

少女がいる。

首をかしげる様が可愛い。

「俺は提督じゃない。」

「提督は提督じゃない。なに言ってるの？」

君こそなに言ってるの、だ。

「焼き芋、食べる？ 真空斬！」

彼女は持っていた薩摩芋を宙に投げるや否や鮮やかな手刀で見事に斬り裂き、自然な感じでその片方をすつと差し出してきた。

お見事、と思わず拍手する。

うふふ、と笑う姿が可愛い。

まるで切れ味のすこぶるよい包丁で斬ったかのような断面が見えた。

どれだけ習練を積んだら、これだけの業が使えるのだろうか？

あつちの世界でも、これだけの使い手はそういないだろう。

さりげない善意。

ありがたく受けよう。

「ありがとう。嬉しいよ。」

微笑む。

彼女は何故か赤くなった。

「うっ。わ、私はそれくらいで墮ちるような、安い女じゃないわ。」

「そうか。」

「そうよ。」

焼き芋は冷めていたが、温かいものを感じる。

甘味が五臓六腑に染み渡った。

これが慈味ってやつか？

旨い。

咀嚼する。

ほろほろと溶けてゆく。

彼女の視線に気づいた。

顔を向ける。

少女は、プイツと横向く。

こちらへ向かってくる女の子が何名も見えた。

これからはこの子たちと共に過ごすのだらうという、なにか確信めいた予感を覚える。

体内に残っている僅かな魔力が、俺にかそけく囁いた。

この運命に抗ってはいけないと。

それは甘くせつなくやさしい声。

不思議な感覚だが、何故だか胃の腑にストーンと落ちた。

そうか。

俺は彼女たちと共に生きてゆくため、ここにいるのか。

「そろそろ行きましょ、提督。」

「ああ、そうしようか。」

そうして、俺たちは自然に手を繋いで女の子たちの元へと向かう。

これからの人生に少しでも希望があつたらいいな、と思いつながら。

CLXXV：ならちんにシヨタ提督着任す

奈良県奈良市中心部に、かつて一世を風靡した奈良ドリームランドという遊園地があった。

今は廃墟である。

解体して再建築するのに多大な費用がかかるため、長い間誰も入手し得なかった。そんな廃墟遊園地を大本営が購入する。

勿論、値切り倒したそう。

内陸県に後方支援型鎮守府を建造し、福利厚生 of 充実の充実という中期計画だ。なんか胡散くさい。

函館鎮守府に一極集中する流れを変えたいそうだが、はてさてどうなることやら。

まあ、大仏や阿修羅ちゃんや鹿を見物して柳生の里に行ったり蘇我入鹿の墓に行ったり、葛城古道を歩いて一言主神社に参拝するのも乙なものだろう。

奈良の菓子屋は旨いところが多い。

古民家カフェでランチも悪くない。

ここはそういう観光拠点になるかも。京都も大阪も近い。

三重和歌山滋賀もそれなりに行ける。買い物をするなら大阪へ行くらしい。

奈良県警の若い警官がそう言ってた。

鎮守府ですらなく、警備府でもない。

敢えて言うと、保養地のための施設か。

まんま遊園地だよな。

追加して宿泊棟と大浴場を設置かな？

次期首都と噂される京都の動きに比べ、奈良の動きは対照的なまでにゆるやかだ。多くの奈良県の人がおっとりした気質なもの、おそらくは関係しているのだろう。

ここは建築制限があつて、高層ビルを建てられない。

奈良市はいにしへの気配を多く残した、そんな街だ。

今度、平城京に行ってみよう。

サモトラケのニケの像が市内高校に移転したのは残念だ。

ともあれ、俺は志願して艦娘になった。

男でもなれる、紙装甲が特徴の艦娘乙種だ。

俺の名は天龍。

ふふ、怖いかな？

そして、妖精の見える小学六年生がお飾りの提督として奈良鎮守府に着任する。

名前は仁藤瞬。

そいつが俺の提督だ。

……おいおい。

俺はガキの子守りかっつての。

女顔のぼやーつとした奴だ。

ガキの初期艦兼秘書艦かよ。

まあ、乙種とはいえ軽巡洋艦になれたのは運がいろいろいいからよしとすつかない。

俺と同じ乙種で同期の天龍は刀マニアらしく、本物の刀を持って持てと強く勧めてくる。

他のホンモンの天龍たちも刀を買ったりするらしい。

現在は全国各地の妖精たちが集結し、廃墟遊園地を鎮守府にすべく突貫工事の真っ最

中。

防音用の遮蔽結界が働いているらしく、騒音は外へ漏れない。

驚異の技術力だよな。

俺たちはそれを監督指導するって寸法だ。

仮設住居に住み、朝はガキを起こして飯を作って食わせ、学校へ連れてゆく。

仲よく手をつないでいこうとガキが言う。

まあいいか、と思つたら恋人繋ぎしやがった。

こいつ、出来る！

俺は男だけどな！

「お姉ちゃんが出来てうれしい！」

「バーカ、俺は男だつての。」

「今は艦娘だよね？」

「女の姿はしてつけど、魂は男だ。だから俺は男だ。」

「そうなの？」

「そうだよ。」

「じゃあ、おにねえちゃんだね。」

「俺が鬼みたいに聞こえるじゃないか。」

「ではさらに短くして、お姉ちゃんで。」

「ん？ ん？ あれ？」

「早く行こう、お姉ちゃん。」

「お、おう。」

入っちゃあかんよと立て札をしても、それを意に介さない阿呆はどこにでもいる。

頭がおかしいと指摘するのは簡単かもしれないが、そういう輩は大抵それを認めないか開き直るのだ。

まあ、俺を含めてみんなおかしいんだ。

誰しも狂気という凶器を内包している。

そういうのを抱き締めて、生きている。

侵入しようとするバカは意外にも多い。

即時に無力化されるのにわかってない。

捕縛した連中を見張るのも仕事だった。

気絶状態から復活すると、連中はなんだか元気になっている。

目が爛々としていた。こいつらヤバイ。

「拙者、本物の天龍殿を見るのは初めてで御座る！ 感激で御座る！ 握手してください

れ！ さすればこの手は一生洗わぬ！」

「生きててよかったのう。よかったのう。さあ、思いっきりなじってください！ 怒

鳴ってくだされ！ 罵倒してくだされ！」

「踏んでください！ お願います！ お願います！ お願います！ お願います！
す！ 出来たら、蔑んだ目付きでっ！」

変態ばかりじゃねえか。

露骨に深いため息を吐く。

何故だか、大喜びされた。

「お姉ちゃん、ただいまー！」

下校したガキが抱きついてくる。

さりげなく、俺のケツを揉むんじゃねえ。

デコピンしたら何故かにこにこしている。

お前も同類かつ！

お巡りさん、こいつらです！

「おふう！ ショタ提督は実在したので御座るかっ！ なんと眩しい！ 目がっ！ 目がっ！」

「まさかまさかのショタ提督が実戦配備されていたとは、この海のリハクの目を以てしてもわからなかったですぞ！」

「これを眼福と呼ばずして、一体なにを眼福と呼べばいいのだっ！」

もうやだこいつら、とつと引き取りに来てくれ、奈良県警の人。

「えへへへへ。」

「そんなに揉んで楽しいか？」

「うんっ！ 鼻血が出る程！」

「即答かよ、おい。」

一緒に風呂呂に入りたいって言うので、男同士のスキンシップかと思っていたら紛れもなくエロ目的だった。

斜め上の行動ばかり取りやがるよなあ。

よくも悪くも欲望に忠実だな、こいつ。

はあはあ言つてやがる。

「明日からお前と一緒に入らねえ。」

「ど、ど、どうして？」

「男の乳で喜ぶ奴と入りたくない。」

「じゃ、じゃあ、だ、抱きつくだけなら大丈夫じゃない？」

「あのなあ、そんなところをこんな具合にしておいてなに言つてんだ？」

「ぼ、僕、初めてはお姉ちゃんにささげるんだ！」

「いらん。」

「ひどい！」

「お前な、俺は男だぞ。」

「うん、わかつてるよ。」

「全然わかつていない。」

「大丈夫だよ、僕、もう子供を作れる体なんだ。お赤飯も炊いてもらったんだよ。」

「ガキがガキ作ってどうすんだ。艦娘は妊娠しないぞ。擬似子宮しかないからな。」

「じゃあ、明石さんか夕張さんに頼んで、人工子宮をお姉ちゃんに埋め込んでもらおうよ
！」

「そういう発想に至る、お前がこわい。」

「ねえ、最初の子は女の子がいいかな？」

「バカ言ってるじゃねえ。話を聞けよ。」

「夫としてやさしく尽くす所存ナリヨ。」

「いらん。」

「ひどい！」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。」

「なんだ？」

「おやすみのチューしよう！」

「しない。」

「なんでっ!？」

「する理由がない。それと鼻血を拭け。」

「夫が妻とチューするのは当たり前なんだよ。」

「お前といつ結婚したんだ。バカなこと言つてないで、さつさと寝るぞ。」

「じゃあ、婚前交渉？」

「どこでそんな言葉を覚えるんだ？」

「隣の席の桜ちゃんが教えてくれるんだ。」

「女子かよ！」

「五人と付き合つてんだって。」

「掛け持ちかよ！」

「僕はお姉ちゃん一筋だつて断つたんだ。」

「告白されたのかよ！」

「お姉ちゃん。」

「なんだ？」

「チュ、チューチューしていい？」

「さつさと寝ろ、このませガキ。」

「やさしくしてね。」

「誰からそんな言い方を習った？ その桜ってガキか？」

「ナンパしてきた女の人。」

「ナンパされたのかよっ！」

「僕、昔からよく女の子や女の人からナンパされるんだ。」

「自慢かよ！」

「でも、僕はお姉ちゃんに出会って知ったんだ。真実の愛を。」

「それも、そのナンパしてきた女子から教えてもらったのか？」

「ううん、隣のクラスの如月ちゃんさ。」

「もしかして、お前、モテモテなのか？」

「うん。でも、僕の眼に映っているのはお姉ちゃんだけだよ。」

「はいはい、わかったわかった。寝るぞ。すぐ寝ろ。」

「冷たいなあ。でも負けない！ それが愛だからっ！」

妖精の棟梁や幹部たちと意見交換する。

大本營の示した予想図と、現場に合わせたの予想図との食い違いを擦り合わせてゆく。

「殆ど遊園地だな。」

「せっかくのりっぱなゆうえんちです。これをいかさないではないでしょう。」

「ちばけんのしせつにはまけません！」

「させぼにもまけてはならぬのじゃ！」

「かんむすのらくえんをいまここに！」

「じゃあ、そういう方向で。」

「かしこまりもうした！」

遊園地の周囲は城塞のような石造りの高い外壁で覆われ、なんだか欧州の城塞都市みたいになっていた。

その外壁の内側を蒸気機関車が一周出来る作りだ。

モノレールさえも走れるようにするとか。

馬車も走らせると、妖精たちは鼻息荒く息巻いている。

真ん中の城が本棟で、ロマンティックな形だ。

ここはちよつとした城下町みたいになりつつある。

職員は全員民族衣装っぽい制服になる予定である。

中世ヨーロッパ風にして欲しいとの、熱く激しい要望に応じているような。日本人の大好きな魔法と剣の華やかなる欧州異世界風味、つてとこらしい。だが、煉瓦のように固いパンや塩っ気のないスープや萎びた野菜は勘弁な。

近隣住民への事前説明会はとづくに終了していたが、それでこちらへの問い合わせが無くなる訳でもない。

現場へわざわざやって来て、独自の持論をかますおめでたい人間は跡を絶たない。しかもそれが地元民とは限らないのが厄介だ。

別の都道府県から遠路はるばる金を使ってやって来て、その上でいちやもんを付ける奴らの頭の中身がよくわからない。

「何故私たち一般人は、この施設の利用が出来ないんですか？」

「ここは艦娘専用の施設ですから、それは出来ない仕様です。」

「自衛隊だって解放日があるんです。それくらいしたってかまわないでしょう。」

「そういったご意見は、大本営に行かれて直接おっしゃってください。」

「大本営ではすげなく断られたから、ここまで足を運んできたのです。」

「このおっさん、めんどくさいなあ。」

なに考えているんだろう。

大阪か千葉にでも行けよ。

答えられないことばっかり聞いてくる。

わざと、そういうことをしているのか？

だとしたら、相当性質に難がある。

粘着質って言うんだっけ？

「奈良県庁に専門の課がありますので、あちらで……。」

「あそこでは、話にさえもならなかつたんです。」

うわあ、たらい回しかよ。

とても細かく、しつこい。

なにをしたいのか、さっぱりわからない。

しかも、自分自身の考えにやたらと自信を抱いている。

その根拠が全然わからん。

兎に角食い下がるので、結局いつもの奈良県警の人たちに来てもらった。

お世話になっております。

おっさんが突如暴れ始めて大変だった。

「うきやーっ！」って叫んだ時は、一体何事かと寸時誰も対応出来なかつた。

いきなり殴られた、リーダーで太つちよの警官がきよとんとしていた。

そりゃ、びつくりするよな。

威力妨害とか公務執行妨害とかなんとかで、おっさんは四人がかりで確保されていた。

俺だつたら即時に鎮圧出来たが、開業前は手出し絶対禁止令が出されている。

大本営と奈良県双方から。

法律的に問題があるとか。

なので、奈良県警はこうした事態にも踏ん張らないといけない。

担当の警官たちがとても友好的なので、それは実際ありがたい。

彼らは奈良鎮守府専属で、全員が激戦的競争率に勝つたらしい。

人一人取り押さえるのに意外と人数がいるようだが、彼らの表情には達成感が見られる。

礼を言ったら、全員顔が赤かった。

体温がかなり上がっているのだな。

担当の若い警官と打ち合わせを含め和やかに会話していたら、ガキが帰ってきた。

「お姉ちゃん、僕がいない間に浮気したらダメだよ！」

真っ赤になって怒っている。

なに言ってるんだ、こいつは。

目に青痣を作った警官は苦笑していたが、それさえわかっていない。

まあ、ガキだからな。

変な奴は意外と多い。

だが、排除ばかりして選民思想と大して変わらないだろうな。

毒電波受信系危険人物がここへ来ないことを祈るばかりだ。

「ははは、では、お邪魔虫は即刻退散しますね。」

「責任者が失礼なことを言いました、大変申し訳ありません。」

「いえいえ、お気になさらず。」

丸っこくて眼鏡をかけた警官はめっさにこにこしながら、軽騎兵の如く軽やかに立ち去った。

「あのなあ……。」

「僕は学校や他の場所で誘惑の波状攻撃に耐えているのに、肝心のお姉ちゃんが他の男の人と話をしているっておかしいよ!」

「お前な、その言い方は病んでる感じがするぞ。それにだな、あの人は単純に警備関係の打ち合わせをしていたに過ぎん。」

「本当?」

「ホントだ。今日、妙なのが来て往生したんだ。お前、後であの人に謝つとけよ。」

「わかった。で、お姉ちゃん、大丈夫だった？」

「どさくさ紛れに乳に触るんじゃないねえ。」

「うれしくてつい、ね。」

「お前、束縛系かよ。そんなんじゃない、嫌われるぞ。」

「えっ？ えっ？ 今日はエッチなことさせてくれないの？」

「ナチュラルにエロい内容を会話にぶっこむんじゃないねえ。『今日は』ってなんだ、『今日は』って。」

「よかった。」

「よくない。」

「お姉ちゃんにエロいことをしているのは僕だけなんだ！」

「あのなあ、俺は男。体は艦娘だけど、男なの。お前、ホモか？」

「お姉ちゃんの魅力にメロメロになっている、あわれな子羊さ！」

「つまり、外見が女なら中身は関係無いか。」

「なに言ってるの、お姉ちゃん。その一見やさぐれているけど、実はとってもやさしい性格込みで好きに決まっているじゃない。好き過ぎて時々鼻血が出るけど。愛のトリコロールだから仕方ないよね。なめないでよね。あつ、でもお姉ちゃんの舌で丁寧になめてくれるのは全然かまわないよ。鼻血、なめりゅ？」

「途中までいい感じだったのに、最後で台無しだな。」

「しまった！ 僕、芸人体質なんだ！」

「うん、知ってた。しかもボケ担当。」

「お姉ちゃんの突っ込みは素敵だよ！」

「はあ。」

「そんな冷たいところにもキュンとするんだ！」

「じゃあ、後でな。」

「どこへ行くの!？」

「見回りだ。いつもやってるだろ。」

「あつ、そつか。つい……へへへ。」

ジャラツ、ガシャン。

「ポケットから手錠が落ちたな。」

「う、うん。」

「なにに使うつもりだったんだ？」

「え、ええと……へへへ。」

「誤魔化すな。俺にそれを使うつもりだったのか？ 犯罪だぞ。」

「ち、ち、違うよ！ 桜ちゃんにお願いして借りただけなんだ！」

「借りた？」

「その、束縛するより、してもらおうかなって……。」

「ヘンタイ。」

「えへへへ。」

「罰として、一週間混浴も添い寝もしないからな。」

「な、なんでっ!? お姉ちゃんは僕が嫌いななの？」

「この状況でそんなことを言える、お前の分厚い面の皮が羨ましい。」

「え？」

前途多難だ。

中身のイカれた奴らがひよこひよこやって来るし、そうした連中には通常の論理が通用しねえ。

どこかの配線が焼き切れているのか？

他の艦娘が着任したら、そいつらにこのエロガキを任せよう。

うん、それがいいな。

足早に見回りに移る。

走ってきて手を繋ぐガキ。

まあ、これくらいならいいか。

人手不足を痛感する。

調理担当、警備担当。

清掃担当、管理担当。

これから集めないと。

函館に打診しとくか。

飯を作るのが上手い艦娘でもいたら、そいつを送ってもらおう。

「結婚式は……ケツコンだったら……初夜は……夜戦を……いっそ……………」。

ガキが小声でなにか呟いている。

こいつの情操教育も必須だよな。

あゝあ。

龍田でもいてくれたら、と思う。

会ったことの無い艦娘の顔が思い浮かぶ。

不思議な感覚だが、艦娘とはそういうものらしい。

姉妹艦のいる艦娘はお互いの縁が強く、惹かれ合うのだとか。

「龍田さんのことでも考えてた？」

ガキが無表情に平坦な声で言った。

何故か少しゾクリとする。

「人手が要るんだよ、わかるだろ。」

「なんだあ、そつちかあ。」

心底ホツとした顔で、俺の上官は無邪気に笑った。

一見愛らしく見える顔と声で。

CLXXVI : ショタ提督はいつもいつも天龍を見詰めている

俺の名は天龍。

奈良鎮守府唯一の艦娘だ。

但し、非正規なんだなこれが。

甲種でなくて乙種なのである。

なんちやって艦娘の俺だが、男だった頃の営業経験を活かして鎮守府を賑わせるつもりだ。

仕える上司は小学六年生の仁藤瞬。

顔は可愛いが中身はエロい親爺だ。

俺もいい歳だったんだが、それを言ってもあいつは意に介さない。

まごうことなき変態だ。

変態の鑑と言えるかもしれないな。

大物かもしれないが、ちつと油断すると胸だのケツだのを揉もうとする。

明らかなセクシャルハラスメントなので注意しているが、是正は難しい。ずつとずつと厳しい態度の艦娘を送ってもらおうかと思う今日この頃だ。

奈良県奈良市北部にあつた遊園地の奈良ドリームランドは先日まで廃墟だったが、現在妖精たちによる工事で保養型鎮守府に生まれ変わろうとしている。

艦娘専用滞在型遊園地って訳だ。

外壁は欧州の城塞都市の如く、石造りの高き城壁で覆う構造。

その内側を小型の外周機関車が一周する。

約一〇分の小さな小さな旅が出来る汽車。

機関車は二両あり、この外周機関車が復活した暁には是非とも乗りたいとの要望が地元勢のみならず全国から殺到している。

一般市民からマニアまで期待を寄せているのがよくわかる逸話だ。

今のところは受け入れるような感じで対応している。

北側に大門があり、入るとすぐにメリケン開拓時代風の凝った中央駅舎『アン・シャリー駅』と近畿圏物産館『キンキンストア』と催し物会場の『マキシマムアリーナ』を改装したり建築したりしている。

園内真ん中に主棟たるシュロス（独語：城）を構え、宿泊棟や天然温泉『はらいその湯』などを周囲に配置する予定だ。

街並みは異世界的中世欧州風味が喜ばしいとのこと、そうした規格で統一された雰囲気をもたらすように妖精たちが創意工夫している。

魔法発電所を敷地内に有し、『魔石』と呼ばれる石を燃料として使うことで膨大な電力を園内に供給する。

そういう設定だ。

よく出来ている。

試作型イレーザー・エンジンを二基備えていて、循環魔力がどうか太陽光を最大限活用出来るので一万年は稼動可能とか与汰話を妖精どもが熱弁して訳がわからん。

「妖精の声に耳を傾けきっちゃうと狂ってしまうよ。」と糸目の教官から習ったが、これがそうなのかもしれない。

シユロス近くにあるアトラクション施設の地下迷宮は『狂王の試練場』と呼ばれ、迷宮支配者の倭斗菜さんが無理無茶無謀な冒険者たちの到来を多数の魔物や罠と共に手ぐすね引いて待ち受けている設定だ。

彼女は現在仕込み中で、その内部下を率いてやって来る予定だ。

ま、ぶつちやけて言うとお化け屋敷の異世界風味つてどこか。

『カシナート亭』附属の窓口で発行される冒険者カードが、自動的に行動を記録してくれるという驚異的技術の塊だ。

一見そう見える。
種を明かすのだ。

迷宮各所にカメラが仕掛けてあつて、冒険者の行動をスパコンのデータ部門へ送り、それが蓄積されてカードに上書きされるのだ。

よつて、迷宮から出ないと冒険者カードに行動記録は反映されない。

迷宮前では誇り高きオークの騎士マスコと華麗なるエルフの姫騎士リーシャとの一騎討ちが定期的に行われ、名物となる予定である。

その兩名は現在仲よく打ち合わせ中だ。

迷宮近くの一軒家に暮らす予定だとか。

現在は仮設住居で暮らしており、有能極まる警備係でもあつた。

何時の間にかいつら来たんだろうと思ひながら、挨拶を交わす。

双方共かなりの演技派で、愛想もいい。

きつと人気が出るだろう。

しかし、迫真の雰囲気だ。

どちらも異世界の住民みたいに見える。

余程上手いメイクを施しているんだな。

俺もエルフっぽい耳を付けてみたいぞ。

あと、チンピラ三人組の『加里屋』『織手屋』『升屋』があちこちに出没して、冒険者にいちやもんをつけたりやられ役になったりするらしい。

いわゆる『お約束的悪役』または『安全な悪役』ってところか。全員かなり腕が立つそうだが、ここでは悪役に徹するそうだからねえ。

そういう奴らは好きだぜ。

ランクが黄金級とか言っていたけど、よく出来ているよなあ。

まさに小物の鑑だ。

悪役に誇りを持つ。

胸が熱くなるぜよ。

今度一緒に酒を呑もうじゃないか。

『カシナート亭』は冒険者たちのたまり場になる予定の酒場だ。

ここで冒険者登録して地下へ潜るように定められている。

時折イベントを起こす想定で、常駐者たちとの事前打ち合わせは綿密にしないといけない。

二四時間休みなしに営業するので、酒好きの艦娘は喜ぶだろう。

『白い子馬亭』は宿泊施設で、『馬小屋』『簡易寝台』『エコノミー』『スイート』『ロイヤ

ルスイート』の五種類の等級から部屋を選べる。

『オルタンス商店』は、オルタンス夫人と呼ばれるチャキチャキのドワーフが経営する商店になる予定だ。

本来は武器専門店だが、迷宮探索に必要なモノは一通り揃っている。

荷物預り所でもある。

『カントウ医院』は緊急医療にも対応出来る施設で、呪法による治療並びに蘇生術に重きを置いているという設定だ。

迷宮内では怪我が起きないように、浅い層は『幽霊』のマーフィーが、深い層は『地獄の道化師』のフラックが巡回警備を行う。

しかし、不測の事態が絶対に起こらないとは言えない。

ハイマスターを上忍とする、忍者隊の活躍に期待しておこう。

そういった怪我や急病などに即時対応するのが、この医院だ。

常時高位のハイプリーストが駐在し、治療体制は万全を期するようになっていいる。彼らは近々やって来るのだが、どれだけ演技が上手いのか今から楽しみでもある。

どこから連れてくるのだろうか？

オラ、ワクワクしてきたぞっ！

やっば、事務局は必然必須必要だ。

俺とあのガキでは管理しきれない。

函館鎮守府に電話して提督に相談し、大本営に要望書を提出する。

提督と電話でやり取りしていたら、何故かガキが滅茶苦茶怒った。

なんで怒られたんだろう？

子供の独占欲ってやつか？

園内西区域では、東芝製の跨座型モノレールの『スペーススライナーⅢ』を走らせる予定だ。

鉄筋ローマンコンクリート造りの高架駅。

総延長八〇〇メートルで、八の字型に走る無限軌道。

現在、三代目車輛を東芝の物好きな技術陣が張り切って作っている。

何故か、日立の技術陣が悔しがったとか。

ちなみに、モノレールの線路の下はちよつとした人工湖で、海賊船『黒真珠号』並び

に潜水艦『轟天』の乗り場がある。

園内を走るロープウェイのスカイウェイも期待されている乗り物のひとつだ。

両端の駅に係員が二、三名ずつ必要らしい。

岩山を模した構造物を貫くスカイウェイ。

この構造物では、ボブスレーと呼ばれるジェットコースターが走れるようになってい

る。木製ジェットコースターの施設があつた辺りは、大きな宿泊棟の『ホテル・カリフォルニア』が建設されつつある。

モノレールも外周機関車もロープウェイもジェットコースターも、某メリケン系遊園地の模倣品らしい。

商業目的外なので、うやむやの内にやらかす所存のようだ。

中心部を馬車鉄道が走る。

東区域には大型プールと密林遊覧船の施設がある。

ちなみに遊覧船の名は『カルーソー号』。

北区域は、メリーゴーラウンドやティーカップ（或いはコーヒーカップやマグカップ）の施設。

後は追々だ。

奈良鎮守府傍には、奈良テレビ放送の本社がある。

挨拶に行ったら、好意的反応だったので安心した。

間宮羊羹の効力は絶大だぜ！

こういうところは、地元の奈良県庁や奈良県警共々仲よくしとかないとな。

奈良県の知名度向上にも出来る範囲で貢献しよう。

鎮守府出入り口近くにはコンビニエンスストアがある。

採算が取れるのか？

こちらとしてはありがたいけどよ。

陸上競技場や球場やテレビ局などが近隣にあるので、なんとかなるのだろう。

たぶん。

何故か、加賀や鹿島が働いていた。

俺の如き乙種でなく本物の艦娘だ。

艦娘関連商品をかなり置いていた。

期間限定らしいのだが、これは新しい試みなのだろうか？

函館鎮守府の提督のイメージビデオって売れるのかねえ？

メイキング付きの限定版は予約時点で完売したそうだが。

鎮守府近くには明治時代から続いている植村牧場があるため、新鮮な低温殺菌牛乳やソフトクリームやクッキーや最中やアップルパイやバウムクーヘンなどが気軽に購入出来てありがたい。

般若寺へ散策した時に真向かいだったのでガキと一緒に立ち寄ってみたが、牛乳がす

こぶる旨かった。

濃厚な味わいがとてもよい。

これからも、鼻頂にしよう。

現在、配達して貰えるように交渉中だ。

警備はオークの騎士とエルフの姫騎士とが加わった為、だいぶんやりやすくなった。

あの二人、いつもあのメイクをしているが大丈夫かね？

大本営の青葉が宣伝促進用に両名を撮影していたが、双方迫真の演技だった。

いいねえ、痺れるねえ。

奈良市に異世界風の街が出来つつある。

開業に向けての挨拶回りや折衝、交渉、根回し、調略、諜報などを行っているが、人員を早急に揃えたい。

元艦娘や艦娘乙種辺りが望ましいけれども、幅広い人材を求めたいところだ。

いつそ、妖精まみれの楽園にしちまうか？

悩ましいところだ。

そんなドタバタの日常的な午後、学校から帰ってきたガキが抱きついてきてさりげな

く乳を揉んできた。

デコピンしておく。

ええ加減にせえよ。

なんとも頭が痛い。

早く艦娘が欲しい。

叢雲（むらくも）、曙、霞、満潮辺りがいいかもしれない。

気弱系だとエロガキの攻勢に耐えられないだろうし、気の強い艦娘の方が安心出来る。

龍田の申請もおこう。

あいつがいたら、と思うと会ったこともないのに安心感が高まってゆく。

これが艦娘になるってことなのかね？

設備維持の関係があるから明石か夕張辺りは欲しいし、事務関連に強い大淀も欲しい。

鳳翔の如き料理上手も欲しい。

申請自体は出しているが、受理されるかどうかは大本営の匙加減次第だ。

近畿圏に詳しい人材も欲しい。

人脈の構築を更に高めようか。

「やっぱり、函館に一度行かないとダメだな。呉にも行くか。」

「新婚旅行だねっ！」

「なにか新婚旅行だ、マセガキ。お前とは恋人同士ですらない。」

「同志！ そんなことを言われるとどうしていいかわからない！」

「誰が上手いことを言えと言った。」

「イエーイ！」

「それ、昭和のノリ。」

「なんてこった！」

「仕事なんだから、俺が一人で行く。」

「浮気するつもりじゃないよねっ!？」

「バーカ。考え過ぎだ、エロガキ様。」

「お姉ちゃんの処女は僕のモノだっ！」

「訳わかんねえことを言ってるねえで、お前は学業に専念しろ。そもそも俺は男だ。」

今日も仁藤坊やがノリノリでお馬鹿を炸裂させている。

だから、どさくさ紛れにケツをむにむに揉むなつての。

ペシ、と手の甲を叩いたら痛みも愛だよねとほざいた。

鉄の神経、お許しをっ！

「俺が出張に行っている間は……どうすつかなあ。」

「ナンパしてきたお姉さんたちの家を渡り歩くよ。」

「お前が言うとは、全然洒落にならんからやめれや。」

「大丈夫！ 最終防衛戦は何度も何度も繰り広げてきたけど全て成功させているからつ
！」

「お、おう。」

うーん。

この件は後回しか。

オークのところに預けるかと何気なく呟いたら、「くつ、殺せ！」と言われた。

解せぬ。

「取り敢えず、お姉ちゃんの下着を買いに出掛けようよ。」

「なんで、そういう話になるんだ？」

「だって、お姉ちゃんの下着が全然エロくないんだもの。」

「それがお前となんの関係がある？」

「可愛いお姉ちゃんには、お洒落な下着が似合うと思う。」

「実用一点張りで構わないだろう。」

「慢心、ダメ絶対！」

「それなんか違う。」

結局、一日中下着下着とわめくので致し方なく出掛けることにした。

甘いかな？

近場でいいかなと思っていたら、ガキは神戸に行こうと言い始めた。

渋々承諾する。

気のせいだろうけど、こいつの毘にどンドン嵌まっている気がする。

……気のせいだな。

そうだ、こいつがそんなに難しいことを考えられる筈もない。

約束の日曜日に、早朝から出立する。

奈良駅に近いホテル地下のパン屋で出来立てのパンを幾つか購入し、列車の待ち時間の合間に乗降場で朝食を取った。

お茶は魔法瓶から注いでガキに渡す。

「愛を感じるよ。」と朝から通常運転のガキ。

奈良線で奈良から木津まで行き、木津から片町線に乗り換え大阪尼崎を越えて三ノ宮駅へ到着。

マネケンのワッフルを食べる。

高架商店街をぶらぶら歩くか。

学生時代もぶらぶら歩いたな。

高架下の三宮一貫楼で豚まんでも食べて、下着を見るか。

「デートだねっ！」

「なに言ってるやがる。俺たちは男同士だ。あと、さりげなく乳を揉むんじやねえ。」

このエロガキめ。

鉄製のブラでも頼んどくか。

「今、鉄製のブラでも頼んどくか、とお姉ちゃんは思った。」

「おお、大当たりだ。」

「そんなことをしたら泣くからね！」

「こんな時、どんな顔をしていいかわからんな。」

「笑えばいいと思うよ。」

「あははは。」

「なんでホントに笑うの!?!」

「どないせえ言うねん。」

下着専門店は意外と多い。

エロガキが興奮してハアハア言うので、大変困った。

店員たちは苦笑するか、或いはガキを注意するかだ。

更衣室に一緒に入ろうとするので、入ったら罰を与えると云ったら散々悩んだ末にようやく諦めた。

上官が変態過ぎて泣けてくる。

ガキに任せると派手で過激なモノしか選ばないので、比較的清潔感があつて日常的に使えそうな品を数点購入した。

ガキは何故か「試合に勝つて勝負に負けていたんだよん。」と落ち込んでいる。不本意だ。

折角付き合つたのに。

オサレな店で昼を食べたいと言つたので、後輩がやっている洋食屋へ行つた。

俺はエブリフライ定食、ガキはハンバーグ定食を頼んだ。

ポタージユの腕がよくになっている。

喉越しがより滑らかで香りがいい。

カルパッチョもよりよい味わいだ。

デザートはサヴァランも旨かつた。

後輩は俺の姿を見て真つ赤になる。

余りの変貌に驚いているんだろう。

ガキが何故だかおかんむりになる。

こいつ、割と短気だよな。

もつとしたたかにならんといかん。

駅に近づくと機嫌が直ったようだ。

「よし、これから有馬温泉に行こう！」

「三ノ宮からだど片道二時間はかかるので却下。」

「温泉は心の保養地だよ！」

「お前のギリギリした視線がこわい。」

「大丈夫！ まだやらないから！」

「なにをだ。」

「そんなこと、恥ずかしくて言えないよ。」

「俺はお前の存在が恥ずかしい。」

「もう、お姉ちゃんは照れ屋さんなんだから！」

「お前のその凶太さには敬服せざるを得ない。」

「ほめられた！」

「誉めてない。」

「わかった！ お姉ちゃんは僕が大好きだけど、その気持ちをいつもいつも押し殺しているんだね！」

「どうやったたらそのお目出度い結論に達するのか、お前の思考経路を知りたい。」
「お布団の中でこっそり教えるよ。」

「そうか、す巻きにされたいのか。」

奈良に戻ると、夕暮れが辺りを支配していた。

頭にターバンを巻いた、怪しいおっさんのハッサンが二頭立ての馬車で待っている。

これも名物にする予定だ。

馬はユニコーンだそう。

そういう設定なんだろう。

それっぽい雰囲気がある。

まるで本物みたいだなあ。

このおっさんもいつの間にかいた人物だ。

送迎車の準備も順次進めないといけない。

観光客らしき人々が馬車を撮影している。

平和が戻りつつあるのだろう。

各都道府県の復興も格差が広がっている。

俺の所属する鎮守府もどきは、復興に向けての試験的存在とされている。

マスメディアへの対応がけっこうめんどくさいが、奈良テレビ放送との連携である程

度の負担減は可能だろう。

向こうの担当者の男性は、何故か赤くなりながらもそれを請け負ってくれている。

一種の観光資源になるからな。

報連相はきっちりしておこう。

索敵の出来る軽空母も欲しい。

鳳翔は調理専門にして、龍驤や隼鷹（じゅんよう）や飛鷹や祥鳳辺りが欲しい。

鎮守府警備府泊地でくすぶっている艦娘を引き抜くか？

函館にケツコンしていた艦娘がまだ何名もいるらしいから、一名は送ってもらおう。

開業前見学会の催しを県庁艦娘課と広報課の双方合同で打診されているから、函館鎮

守府の李さんを送ってもらおうか。

絶品中華で度肝を抜くのも悪かねえ。

炒飯定食で食にうるさい関西人たちを黙らせ泣かせた、って伝説がホントかどうかこの目で確かめたい。

そうだ。

屋台を出すっていうのもどうかねえ。

粉もんが中心になるのも関西らしい。

アメリカンドッグやホットドッグやたこ焼きに好み焼きに太閤焼き（作者註：今川

焼、ふうまんとも言う焼き菓子です。

綿飴、リング飴、焼き鳥、牛串、おでんにソーセージにフィッシュ&チップスにドーナッツにフレンチトーストに芋煮。

馬車の中でいろいろ考えていたら、ガキが話しかけてきた。

「もう！ お姉ちゃんは仕事のことばかり！ 僕をもっと構ってよっ！」

「だったら、もっと男前になるんだな。今のままだと単なるエロガキだ。」

「ふん！ 僕だってやる時はやれるんだよ！」

「期待しないで、見守っていてやるよ。」

「ところでさ。ねえねえ、これ見てよ。」

ガサガサと紙袋から黒い布を取り出した。

レースがあしらわれていて、割と高そうに見える代物だ。

「今晚、これ着てくれない？」

黄昏の闇に半分覆われながら、無垢なる笑みでガキはそう言った。

CLXXVII：そして、艦娘になってゆく

最近、記憶の混濁が多い。

大本営からの公募に応じて数カ月前に艦娘となったが、以前の記憶が欠落していたり知らない筈の記憶が当然のように思い出せたりするのに愕然とする。

不安になって日記を書き始めたが、時折書いた覚えの無い記述を見かける。

そこには提督への思慕が書き連ねられていた。

馬鹿な。

私は男だ。

元男というべきか。

たまたま軽空母の適性を持っていたため、配属された小規模鎮守府では重宝されている。

駆逐艦の子たちも私を慕ってくれているし、提督は学生に毛の生えた程度の坊やだが真面目な感じで、不真面目なチャラ男っぽい提督のいる鎮守府に配属された同期からは不満の声をよく聞かされる。

小規模鎮守府では、戦艦や正規空母など夢のまた夢。

もし仮に転属してくれても、運用出来るだけの資材も能力も無い。数名の艦娘や艦娘もどきで細々とやりくりするしかないのである。

重巡洋艦がいたら御の字だ。

なかなかいやしないけれど。

私が所属する鎮守府には本物の軽巡洋艦が一名いる。

彼女がいなければ、早々に潰れていたかもしれない。

実際問題、立ち上げて半年以内に潰れる鎮守府がちらほらある。

一年もたない小規模鎮守府もそこそこ存在する。

我が鎮守府はマシな方らしく、近隣の鎮守府と連携しての作戦行動がけっこう多い。

また、そうしなければまともに活動することすら叶わない現実がある。

函館鎮守府が梃子入れしていなければ、どれだけの小規模鎮守府が消えていたことだろうか。

ケツコンしていたという軽巡洋艦がいてくれるお陰で遠征任務もこなせるし、情報収集の面でも多大に貢献してくれている。

ありがたい存在だ。

その筈だが、まさか嫉妬に苛（さいな）まれるとは思っても寄らなかつた。

提督と軽巡洋艦は割と早い段階で男と女の関係になつており、それは公然の関係でもある。

別にとやかく言う問題ではない。

だが。

艦娘としての感情は別物らしい。

日記にはそうした気持ちがあつたが切々とみつしり書き込まれていた。

どうやら、私は人格が二つになつてきてきているようだ。

融合しようとしているのか。

それとも、乗っ取ろうとしているのか。

はたまた、崩壊してしまうのか。

痴情の縛（もつ）れで、怒り狂つた駆逐艦（本物の方だ）が鎮守府を物理的に破壊した事例も複数ある。

私がそうならないとは言いきれない。

誰に相談したらいいだろうか？

元々料理は自炊生活のためにしばしばやっていたが、艦娘になつてからは格段に腕が上がつた。

艦娘効果、とでも言えればいいのか？

空母系艦娘としての能力は微妙だし、本来的な鎮守府に行ったら使い物にならないだろう。

鎮守府の面々のためにご飯を作ることには生き甲斐を感じる。

これはこれで悪くないのかもしれない。

甘いものは苦手だが、なんとか作ろう。

駆逐艦の子たちも提督も喜ぶから作る。

ただ、それだけさ。

小豆を使ったお菓子に挑戦するだべさ！

複数鎮守府による合同作戦がなんとか合格基準に達して完了したため、皆で祝勝会を開いた。

函館鎮守府からも援軍があつたので、上手くいったのだ。

たつた一名の駆逐艦だったが、おそるべき力量の艦娘だ。

普段はぼやっとしていたが、戦場では別人へと変貌する。

彼女が鬼神の如く暴れなかつたら、生還は覚束なかつただろう。

彼女は命の恩人だ。

せめておいしい料理を作ろう。

小豆を使ったお菓子もなんとか作れるようになったから、更なる向上を目指そう。

「あれ？ 甘いモンは苦手だつて言つてなかつたっけ？」

小さな食堂。

小さな民家改造型鎮守府の憩いの場。

今川焼を作つて同期の軽空母の子と食べていたら、不意に彼女が私に言つた。

「えっ？ そうでしたか？」

別にそんなことを言つた覚えは無いのだけど。

なにか少し勘違いしているんじゃないかしら？

小豆を使用したお菓子は私の得意分野なのに。

「あ、いや、ま、まあ、別に好きならそれでいいんだ。ところでさ、聞いてよ。うちのチャラ男がまーた他所の艦娘にちよつかい出して、問題を起こしたんだよ。」

「あらあら、それは大変ですね。」

食堂の片隅。

軽巡洋艦が提督にしなだれかかっている。

見えていた。

なにもおかしくない。

おかしくないのだけど心はざらつき出す。

「こわいよ、その顔は。大丈夫かい？」

「えっ？ ええ、私は大丈夫ですよ。」

久々に部屋の片付けをしていたら、日記帳を見つけた。

読んでみるが、違和感が大きい。

私、こんなことを書いていたの？

なんだろう、創作日記だろうか？

提督への思いは普通に記されている。

小説家にならなれたかったのかしら？

書いた覚えが全然ないのだけ。

もしかして、記憶の混濁かしら？

明石さんに見てもらった方がいいかもしれない。

元は男だったらしいけど、別にそんなことはどうでもいい。

今を大切にしたいから。

提督を見ていると胸が掻きむしられる。

あの女と一緒にいるのを見ると、全身が焼け焦げそうになる。

失敗した小豆餡のように。

なにか提督の心を掴む助け船でもないかと読んでみたけど、要らないわね。なんだか恥ずかしいし、屑籠に入れとこ。

さてと、おいしいご飯で提督の胃袋を掴むわよ！

奮起！ 奮起！

この間作った小豆粥を喜ばれたから、その内また作ってみよう。負けないわよ。

CLXXVIII：上水内基地と黒靴下様

夜更けの試験的実験場型鎮守府。

大正浪漫な温泉旅館改造型基地。

艦娘用慰安施設を目指す場所だ。

振り向くと、八名が物陰からじっと私を見つめていた。

うちの子、全員だな。

「あ、あの、なにか？」

「しないの？」

「やらないの？」

「剥かないの？」

「な、なにをですか？」

「いつもされていることです、提督。」

「は、え、あの、え？」

「手伝ってやろうか？」

「ふえっ?」

「慣れているから大丈夫よ。」

「テクニツクを魅せてあげるわ。」

「こんによくも使いましょうね。」

「え、ええと、じゃ、お願いします。」

そしてみんなでおでん作りの準備をした。

いつもしている料理の下拵えなのだった。

明日はおいしいおでんが食べられるぞい。

利尻や羅臼の昆布でおいしさ二倍加する!

地元産のこんにやく大根玉子も使うぜよ!

長野県上水内(かみみのち)郡飯綱(いづな)町。

南側の旧牟礼(むれ)村と北側の旧三水(すみず)村とが合併して出来た町。

いわゆる北信にある町。

ここは知る人ぞ知る林檎の名産地。

葡萄、桃、梨の生産にも意欲的だ。

キャベツやレタスなどの高原野菜。

意欲的な葡萄酒造りに励む生産者。
米や蕎麦も旨いと地元民の誇る町。

山羊牧場では山羊の乳とチーズが生産されており、地鶏に味噌も名を馳せる。
地元産林檎を使ったシールドも旨いし、旧牟礼村にある温泉もなかなかいい。
日本蜜蜂の蜂蜜は素敵な味わいだ。

深海棲艦侵攻時の騒乱で一二〇〇〇強だった人口は一時期四〇〇〇未滿に激減し、今は六〇〇〇前後まで緩やかに回復しつつある。

元々住んでいた人々が戻ってきつつあるし、東京を含む他地域からの移住者は微増だがそれでも増えつつあった。

過疎化する周辺自治体との連携が重要課題であり、それは日本全国各地の地方自治体共通の問題でもある。

旧牟礼役場の現飯綱町教育委員会は大正時代の建築と言われているが、その同時期と思われる頃に外観堅実内観豪華な温泉旅館が建てられた。

温泉業で一山当てた成金がわざわざ宮大工を招いて大正浪漫風の建物を拵えさせたそうだ。

温泉好きの竹久夢二が愛人を連れて泊まりに来たらしく、彼直筆の絵画も数点残っている。

雪深い地域での維持は金銭的にも厳しく、観光地としても今一つな感じだった場所。妖精技術で往時の力を取り戻した元温泉旅館が、これから私たちの住む基地になる。鎮守府建設に功績のあつた妖精たちはそのまま奈良へ行つて遊園地の建設に勤しむ。なんとも忙しいことだ。

この基地には厄介者扱いされた艦娘や元艦娘が送り込まれている。

現状で八名の人員だ。

今後も増える予定だ。

提督を殺つちやつた子や色で鎮守府を混乱に陥れた子や物理的に基地を破壊した子など。

二度目は無いよとか三度目は無いよとか四度目は無いよとか言い含められた子の基地だ。

異常行動を取るのには『提督』が主原因だから、彼女たちの症状に応じた発言行動が必要不可欠。

堅気さんに手を出したらそれでお仕舞いなので嚴重注意は事前に重々行われているが、どこまでちゃんと出来るかは不明。

なんとも危ない綱渡りの始まりだ。
死なない程度に頑張りまっしよい。

良心的な提督たちは彼女たちの処遇をよくするよう訴えているのだが、では実際問題彼女たちをどこへ送りどう対処するかは難題である。

そこで内陸県の小さな町を戦後に向けての試験的実験場とするため、ここは用意された。

艦娘の寿命は不明だが、戦後を見据えての活動は今からしておいても無駄が無いと思う。

主要な提携先は函館鎮守府。

有能な事務局に一流ホテルや料亭の料理人さえ修行に訪れる食堂、それに多数の宿泊者を迎える宿泊棟という強力布陣の大型作戦時中継基地のひとつである。

積極的に連携を進めるこの基地は、小規模鎮守府にとって無くてはならない存在だ。近々ケツコンしていた艦娘を送ってもらう予定である。

全員を相手取って勝てる艦娘がいいな。

しなの鉄道牟礼駅は併設した特産品販売店のために段々と道の駅化しつつあるが、上水内基地から徒歩一時間圏内にある。

買い出しの場所としては実にありがたい。

新鮮な野菜に肉類乳製品が気軽に買える。

駅舎構内にある蕎麦屋は意外と本格的な蕎麦の風合いを楽しめるため、学生からお年寄りまで利用者が多い。

私も頻繁に立ち寄っている程だ。

穏やかで人格者たる山羊駅長の『長老』が管理する牟礼駅からは、南下路線として豊野經由長野方面が走っている。

北上路線としては妙高高原駅からえちごトキめき鉄道が直江津駅まで走っていて、利便性は意外と悪くない。

たとえ、赤錆びた駅名表示の看板が幾つも見られようと。

割れたコンクリートの補修もままならぬ駅舎があらうと。

ところで近場の上越妙高、飯山、長野と三つも新幹線の駅舎があるのは珍しいのではなからうか？

地形の複雑さ故かもしれない。

直江津駅は新潟県第三の都市たる上越市の駅舎で、現在の市の人口は八万弱だ。

深海棲艦進攻前に比べるとおよそ三分の二の人口だが、地方自治体としては踏ん張っている方と言える。

ただ、二〇一五年三月に北陸新幹線が金沢まで延伸してしまったために在来線特別急

行の『はくたか』が走らなくなり、中長距離の優等列車が颯爽と走る鐵道要衝機能は失われ時代の変遷を如実に示す証左となりつつある。

こうして、地方都市は国によって弱体化を余儀なくされゆく。

国にとつて都合のよい地域のため、意図的に弱らされてゆく。

地方都市は、支えてきた国から容赦なく斬り捨てられてゆく。

利便性の美名の元に。

人はそして流出する。

切実な訴えに頭のいい人たちは耳を貸さない。

こうした事例を見る度、歯痒い気持ちになる。

散々こんなやり方をしてにおいて、地方創成とはなんなんだ。

徹底的に壊しておいてよく言う。

地元商店街が閑散としている新潟市も他人事ではないし、新潟県第二の都市である長岡市も注意すべき事項だろう。

旧國鐵現JRはかなり無理をしながら新幹線や大型都市の駅ビルに注力しているが、それは地方都市の地力を奪う行為でもあるのだ。

地元商店が次々店を畳み、都会の大商店がのつぺりした店を次々建てる構図。

これで地方が弱体化しない方がおかしい。

おかしいのに、お上は地方経済の活性化がどうのこうのと叫ぶ。斯くて痩せた鼠は益々痩せ、肥えた鼠は今日も益々肥えてゆく。

厚顔無恥でその場しのぎの政策が、今日も明日も明後日も続く。

行き当たりばつたりの施策と失策続きと地方都市軽視蔑視はJ Rの通常運転。スピードスピードスピード。

そんなに急いで何処へ行く？

腹が立つが、かつて親子関係だった国も適当なので似たり寄ったりではある。

大阪始発の寝台特急『日本海』を復活させようとの話もあるが、実現すれば経済効果は少なくないかもしれない。

希望的観測だが。

牟礼駅を起点に考えると直江津駅は比較のお手軽に行ける中堅都市の駅舎であり、上越市は新潟の風を感じられる港湾都市でもあるので需要は大きい。

海の幸と越州の地酒の双方が同時に味わえる意義は深い。

実際、函館の提督と呑みに行ったが、なかなかよかった。

長野駅も上越妙高駅も共に上越新幹線の駅だから、時に積雪量によっては運休してしまふものの富山や東京にもこれで行ける。

東京都は衰えつつあるメトロポリスだが、おめかししていくだけの価値は今もある。

長野から篠ノ井線に乗り、塩尻で中央本線に乗り換えて名古屋に出掛ける人もいる。寂れつつある東京よりも、華やかになりつつある名古屋に惹かれる人も少なくない。名古屋の方が、食べ物のおズレが少ないからかもしれない。

名古屋まで行けば、近畿圏は目の前。

神戸も京都も大阪も奈良も指呼の間。

『日本海』の潜在需要は高いだろう。

修学旅行で近畿圏に行く長野県民も少なくないし、親近感があるんじゃないか？

登山が修学旅行の学校もあると聞いて、流石は長野県だなあと感じてしまった。

牟礼駅前にはバス停があり、現在は長野駅前との間に平日六往復土日祝日三往復の長野電鉄運行路線バスが走っている。

所要時間はおよそ一時間。

汽車だと大体三〇分以内。

牟礼駅前通りは小規模ながらも商店街を維持しており、和菓子屋洋菓子屋蕎麦屋洋食屋文房具屋などが軒を並べている。

豊野からは越後川口までを結ぶ飯山線が繋がっているし、長野駅から篠ノ井線を使えば甲府駅と中央本線を経由して八王子駅にも行ける。

八王子駅から牟礼駅までは現在、半日ほどかければ鈍行でも辿り着ける。

横須賀の大本営からは、一日がかりで辿り着けるがあまりやりたくない。

函館の提督がひよっこりウチにやって来た時は心底驚いた。

駅蕎麦を食べているのを見かけたのだ。

ちなみに二杯目は掻き揚げ蕎麦だった。

手作りのおやきも旨い旨いと褒めてた。

海産物を大量にいただいて、恐縮した。

どんだけ身軽に動けるんだ、あの人は。

温泉を堪能し、近隣都市にも出かけた。

上越市から近海哨戒の打診があつたとのことで、一緒に市役所へ伺つた。

近海は新潟鎮守府の管轄じゃないのか？

上越市としては、一々お伺いを立てなくて済む方が好ましいようなことをぼやかして

言われた。

ウチはそもそも飯綱町の世話になっているし、長野県に属している。

オマケに艤装を使えない子もいる。

それに。

県を跨いで仕事をしていいのかね？

函館鎮守府の場合は津軽海峡も仕事場だから、青森県と最初から連携しているそう

だ。

高度な判断力を維持しつつ柔軟に状況へ対応せよ、つてとこか。

長野県庁との話し合いも必要不可欠だ。

新潟の提督とも打ち合わせがあるなあ。

長野県側から私を含む三名、新潟県側からは向こうの提督を含む三名。

なんだか大変なことになりつつあるぞ。

信越会談を近々行いましょう、と函館の提督が締めくくって予備会談は終了した。

今年はおいしい林檎を送らねばならぬ。

黒石市を含む青森県には負けられない。

長野県の威信を賭けて送らねばならぬ。

近隣宿場の旨い林檎を含め、三〇〇キロも送ればいいかな？

函館側が全額負担すると言われたが、折半にしてみらった。

日持ちするから、蕎麦や蜂蜜なども一緒に送っておこうか。

東京駅からなんとか走らせている北陸新幹線に乗れば、おおよそ二時間で長野駅。現在唯一走っている特急でない方の『はくたか』は、東京長野間だと一日八往復。思ったよりも経済効果は出ていないらしいが、それでも走らせるしかない状況だ。

積雪期は陸上自衛隊と艦娘と元艦娘たちが大活躍する時期であるから、豪雪地帯に地域密着型小規模鎮守府を増やして欲しいとの嘆願書が大本営に日々わんさか届けられる。

雪まみれの生活をしている人々。

雪が珍しい生活をしている人々。

彼らの意識差は、かなり激しい。

同じ言葉を使っても理解は遠い。

味噌の違いで口論するが如くに。

雑煮の違いで差別するが如くに。

常識と良識を強く叫んで恥じず。

仮に深海棲艦との戦いに勝利したとして、日本の復興には一体どれ程の時間がかかるであろうか？

復興の度合いにもよるが、全国規模で考えると二〇年以上かかるだろうとの政府試算が出ている。

都会は益々豊かになり、田舎は益々厳しくなっていく。

戦争初期から終結までおおよそ一〇年かかるとして、そこからだと三〇年。

その空白の三〇年を埋めるにはどれだけの時間と労力がかかるのだろうか？

産まれた子供がおっさんになるくらいは時間。

それは確実な結論ではなく、仮定に過ぎない。

もしも戦後艦娘や元艦娘を切り捨てたら、復興はより遅くなると一部の良識的識者は警告している。

それは、『ロスト・トウエンティ』または『ロスト・サーティ』とも、カタカナ語大好きな人たちから呼ばれている。

安さを徹底追求し、弱者をいたぶることで末期資本主義社会を突っ走っていた日本。

自殺率は先進国有数で、それへの有効な手立てを未だなんら構築すら出来ない日本。

地方のあえぎを軽視して繁栄を謳歌していた東京は戦争によってあつという間に経済的主座から転落し、今の都の人口は三〇〇万未満。

経済力は名古屋に負けつつある。

その名古屋の主提携先は西日本。

東海は西に組み込まれつつある。

新宿騒乱で焼け落ちた都庁は今もその亡骸を野晒し真つ最中。

周辺の百貨店やホテルは厳しい舵取りを要求され、青息吐息。都内のホテルは半数近くが廃業寸前とさえ囁かれている現状。有明のビッグサイトも、あちこちにガタがきたままの状態だ。漫画祭の開催の度、安全性に警鐘が鳴らされているばかりだ。反対に繁栄を迎えつつある近畿圏と、それに呼応する九州勢。やや遅れて中四国勢が追随している。

積年の怨みとばかりに、攻勢を益々強める西日本勢。これを機に東京を追い詰めるべしと叫ぶ者もいる。四大鎮守府の内、三つの鎮守府が西日本にあるのだ。鎮守府中心の経済圏が三つはある勘定。

京都、広島、長崎。

これに加えて、大阪神戸岡山博多佐賀が続いてくる。その内、広島と長崎はあまり商売上手と言にくい。大本営は横須賀にあるが、呉に移転する噂さえある。北海道と沖縄県がほったらかしの構造に変わり無し。物産展では大人気の地域も経済的にはとても厳しい。田舎素敵発言を悪気なく行う都会人と白ける地方人。

自然の豊かさは諸刃の刃だ。

そんな変転著しき社会で、人々は生き残る方策を模索してゆかねばならぬ。既に崩壊した地方自治体も複数出始めているだけに、状況はかなり深刻だ。じわじわとじり貧になってゆく状況を、なんとか打破しなくてはならない。

飯綱町のおそろしく遣り手な町長は近隣にある複数の市町村と連絡協議し、函館と神戸と岡山と博多に直営系地方特産品販路開拓店『しんえつ』を設立した。

長野県と新潟県の枠を超えた組織として、経済活性化を目論む所存。

山梨県側の打診もあり、三カ国連合になる予定だ。

村上氏と長尾氏と武田氏が手を結ぶような感じか？

北の国近畿圏中四国地方九州地方に、それぞれ楔（くさび）を打った形になる。

紋章としては山羊が採択された。

赤地に黒い山羊の横顔という形。

可愛い系ではなく恰好いい系だ。

山羊は困難な環境でも果敢に立ち向かう象徴だし、長野県で育成もされている。

それ故の選択であった。

ちなみに長野県内では牟礼駅の『長老』、上水内基地の『黒靴下様』が特に有名だ。

我が基地独自の紋章は山羊にしようと考えている。

『しんえつ』に於いて従業員たちは天狗風意匠が施された衣装（コスチューム）を身にまとい、信州と越州の特産品販売と観光誘致に今日も励む。

たまに本物が混ざっているという噂もあるが、たぶん都市伝説の類だろう。

上水内基地の主（ぬし）は提督という名の管理人ではなく、壊れた艦娘や元艦娘でもない。

『黒靴下様』と呼ばれるメスの山羊だ。

その美しさは世界最高峰。

崇めよ、崇めよ、偉大にして大いなる存在を。

彼女の知性は深く、情にあつく、人懐っこい。

上水内基地を訪れた人を出迎えるのは、彼女の重要な役割だ。

癒し系接客係として活躍し、配下のケモノたちの世話もみる。

人間たちの要望に応じ、乳を与えることも忘れない。

なんとも慈悲深き存在だ。

彼女の乳或いは乳製品を食した者は、例外なく体調がよくなったことを知る。

霊験あらたかだと拝む者さえいた。

天狗伝説や飯綱使いと絡めて考察する、在野の研究者もちらほらいるほどだ。

その名は黒靴下様研究会。

寛容なる彼女公認の存在。

まあ、正直なところ、彼女にとってはどうでもいいことであつた。朝は基地の人員を起こしに回るし、時として基地内温泉も楽しむ。人間でない者を引き連れ、長老の元へ挨拶に行くことも忘れない。その途中での、他の獣フレンズたちとの交流もけて欠かせない。彼女なくして、上水内基地の繁栄が有り得ないのは当然のことだ。まさに守護神。

崇めよ、『黒靴下様』をつっ！

夜。

ヒトもツクリモノもケモノも眠る頃。

麗しき山羊がむくりと起き上がった。

その美しさは闇夜に於いても比例無比。

貴族令嬢さえもおののくような美しさ。

感覚を研ぎ澄ませ、彼女は近寄りつつあつたアシキモノを消してゆく。

一つ一つ丁寧。

一つ二つ。

二つ三つ。

しつかり丁寧に。

小豆を煮る如く。

程なく、それらは皆消える。

やれやれ、と彼女はため息を吐いた。

細い通り道を潰しきれていなかっただわ。

明日中に全部潰しておこう。

長老とお話もおきたい。

世話をする下僕たちの面倒を見なくてはならぬのが女王としての責務。

私がいないとダメなのよね。

もーつと頼つてもいいのよ。

この異世界も悪くないわね。

元魔王はひっそりと笑った。

CLXXIX : 引きこもり提督、北信へ行く

はあ、はあ、はあ。

走る、走る、走る。

夜の海を疾走する。

「懲りない人たちねっ！」

最後の取つて置きを撃つ。

これでお仕舞い。

壊れた艀装を海に沈めた。

海岸を過ぎて、南へ走る。

逃げる、逃げる、逃げる。

ここまで逃げれば、懲罰艦隊も追いつけないでしょ。

安心した刹那、幾つもの光条が私を容赦なく貫いた。

あくあ、これで終わりか。

呆気ないわね。

霞がかかった頭に獣の鳴き声が聞こえた。

幻聴？

猪？

鹿？

まさか、熊？

本調子だったなら、全部ジビエの元にしちゃうのに。

ツイてないわ。

そして、私は気を失った。

ある日のこと。

大本営から長野県北部の飯綱（いいづな）町にある上水内（かみみのち）基地へ出張するよう、通達が来た。

それは過酷にして冷徹なる指令。

……………。

アイエエエ！

ナンデ、ナンデ!?!

他所様の基地に行って、仕事をする!?!

誰が？

俺が？

何で？

それなんて無理ゲー!?

この俺には、他人との話し合いとか交流とか無理であります！

会話すら無理であります！

無理無理無理無理無理だ！

厨房担当の子と卯月が執務室に飛び込んできた。

「司令官、話は聞いたぴよーん！ 信州に新婚旅行に行くだなんて、なかなか洒落ている

ぴよん！ 鴨南蛮蕎麦を食べて、温泉で仲よくしつぽりするよ！ ぴしっ！」

「あなたに任せたら、提督は汚れてしまいます。それにあなたはバツイチでしょう。元

から新婚ですらありません。」

「細かいことはどうでもいいぴよん。」

「そんないい加減な態度の方に、私の大切な提督は預けられません。」

「戦力的にはうーちゃんだけで全員殺れるので、問題ないぴよーん。」

「殺伐としたことを言わないでください。なんで全員サツガイが基本なんですか。」

「艦娘はね、自由で、それでいて、何時でも相手を殺せなきゃいけない存在だよ。」

「いいことを言ったみたいなの顔をしないでください。わかりました。私たち二名で提督をお守りしましょう。」

「それでいいぴよん。」

我々三名が上水内基地へ行くことに、いつの間にか決定した。

秘書艦殿の機嫌を何故か損ねたみたいでお冠になってしまい、ほとんど困ってしま
う。

どないせえ言うねん。

鎮守府内が何故か殺気立っていて、執務室から出られなかった。

なんなんなんだ？

まあ、殆ど出ないんだけどな。

俺、涙目案件也。

結局、皆で話し合いになった。

俺も震えながら、つかえつつかえ話に加わる。

夜半過ぎにどうにか合意に達した。

全員を間宮羊羹で懐柔しちゃった。

しかも函館仕様だぜ。最後は金だ。

金の力は偉大ナリヨ。

「ま、間宮羊羹、た、食べりゆ？」

「二「食べりゆう！」」

皆が唱和して大変驚く。

何故に一致団結ナリカ？

不一致よりずつといい。

いいんだけど不思議だ。

世の中不思議が一杯だ。

有能な秘書艦殿を提督代行に任命し、作戦活動を行ってもらおう。

周囲の鎮守府の提督にもお願いしたから、たぶん大丈夫だろう。

そして、出発。

皆が物理的になかなか離れてくれなくて、初っぱなからSAN値がごりごり削られてしまった。

「は、離してください、離してください、ぶ、武士には、や、やらねばならぬことが、あるので御座る！」

「いいえ、離しはいたしませぬ。どうしても行かれるならば、その前にお情けを！」

「ふえっ!」

「なあ、やらないか？」

「ブヒッ!？」

「鳴かせて差し上げますよ。」

「プギーー!　プギーー!」

なんかもう、滅茶苦茶だった。

みんなふざけ過ぎだ。

おイタはダメだぜ、ベイベー。

まるでみんな、俺に好意を抱いているみたいじゃないか。

勘違いさせんなよな。

激おこぶんぶん丸だ。

ま、怒んないけどな。

最初はがらがらだった汽車に人がどんどん乗ってきて、ぐんぐん気持ちが悪くなつてゆく。

人混みに酔う。

頭がぐわんぐわんしてきた。

あ、ヤバイ。

ただでさえ低い耐久値が、メチャメチャに下落している。デバフだ、デバフ。

しばふではないが。

エル、知ってるか？

耐久力を下げる魔法を、みんなが俺にかけているんだろ？

俺は詳しいんだぞ。

魔法使いだからな。

何時間も汽車に揺られ、三半規管が仕事を放棄し始める。

人酔いがずんずん激しくなり、厨房担当の子と卯月からすると俺は真つ青な顔になって
いるらしい。

自分でもなんとなくそれがわかるんだな、これが。

しきりに心配される。

何度目かの乗り換えで益々頭がぼおつとしてきた。

ニンゲン、コワイ。

オレ、オーク。

ブヒブヒ。

.....。

そろそろ限界が近いらしい。

ヤバイ。

マジ、ヤバイ。

なあ、帰ってもいいよなあ。

帰らせてください。

嗚呼、帰りたくないよ。

一昨年の三月に北陸新幹線金沢延伸記念祭で第三種改装されて更に巨大化した長野駅に着いちまったけど、人混みで気持ち悪くなつてとうとう動けなくなった。

ダメージ・コントロール発動。

轟沈はなんとしても避けねば。

脳内警報が鳴りつばなしだよ。

我ながら情けないが、体が震えてどうにもならない。

声すら出ない。

特別に、駅舎備え付けの一室へと避難させてもらおう。

駅の人の気転だった。

彼女にお姫様だっこされた、オーク君が通りますよ。

ぼんやり見知らぬ天井を眺める。

喧騒が遠くなって、自動回復機能が漸く働き始めた。

駅の人が俺の頭を撫でる。

少し圧迫感が薄れてゆく。

呼吸が段々安定してきた。

厨房担当の子と卯月と駅の人が心配してくれているのが、有り難くも悲しくツラくモヤモヤしてたまらない。

駅の人や艦娘乙種に一旦なつたけど轟沈しかけてこわくて退役し、人間に戻らないまま生きてゆく覚悟を決めてこの駅舎で働いているという。

暴漢対策の一環らしいが、今後艦娘や元艦娘などが暴れた時の制圧要員だろうなあ。

彼女自身が保険、つてとこか。

彼女と同じ立場の駅員が三名いるそうだな。

三名で無事対応出来るかなあ？

温かい蕎麦茶を貰って、ちびちび飲む内に気分が落ち着いてくる。

「あなたみたいな方が提督だったら、私は今も艦娘だったかもしれない。」

去り際に、そう言われた。

少し複雑な気持ちになる。

彼女（彼か？）の敬礼は実に美しかった。

さて、しなの鉄道に乗り換えて牟礼（むれ）駅へ向かおう。

小腹が空いてきた。

現金なものだなあ。

さつきまでとは大違いだ。

生きていたなら腹が減る。

腹が減るから生きている。

「おやきを幾つか買いましたよ。」

「お、おやきって、それなんぞ？」

「うーちゃんも知らないぴよん。」

「おやきとは、長野県民の魂の郷土料理です。県民の日常に根ざした、炉端のおやつ的存在ですね。元々は信州北部や東部でよく食べられていたモノが、作りやすさと売りやすさから信州を代表する食べ物として拔擢され今に至るらしいです。地域性を活かした名物は目玉商品ですからね。印象付けは必須です。松本辺りの中信ではそもそも食べられていなかったらしいので、信州全域で知名度が上がったのはここ数十年とも言えるでしょう。長野冬季五輪で世界的にその存在を知らしめたのも、大きい模様です。」

へえ。

「あくまでも想像ですが、バブルの頃くらいに信州を代表する食べ物として認識が拡がり、長野冬季五輪を契機として世界的な知名度を獲得というところではないでしょうか？ 誠実な企業ほど潰れやすいんですけどね、現実には。実際に長野冬季五輪後、おやきを作る小さなお店は何軒も潰れています。」

お、おう。

「こほん。ええと、小麦粉や蕎麦粉などを練った皮に、小豆餡や野菜などを包んで焼いたり蒸したりして食べるのがおやきです。市町村毎に作り方や中身が違うのも、特色のひとつですね。」

ほう。

「その中身ですが、小豆や野沢菜や茄子や南瓜や茸や切り干し大根や葱焼きなどがあります。提督はどうされますか？」

「お、俺、カレーかピザ。」

「うーちゃんはカスタードクリームがいいぴょん。」

「……………ええと、カレーきんぴらとシナノスイートクリームは売られているようです。」

「ではそれで。」

揺られ揺られて牟礼駅に到着。

林檎と桃と蕎麦の町、飯綱町。

信州高原リゾートへの玄関口。

生産される米も大変旨いとか。

林檎と米が旨いって、北海道の七飯町に似てなくね？

駅蕎麦の看板が見える。

駅長の帽子をかぶった山羊がひよこひよこ近づいてきて、メエメエと鳴いた。

降りた客たちが当たり前のように挨拶し、乗客たちは手をぶんぶん振っている。

大人気だな。

「長老様、よろしくお願ひいたします。」

「卯月だぴよーん。よろしくお願ひね。」

「あ、あの、お、俺、提督やってます。」

山羊は頷いて駅長室へ戻っていった。

おつゆの匂いがする。

微妙に腹が、減った。

俺の腹は今、何腹だ？

蕎麦だ。

蕎麦だ。

ソバヤソバヤソバーヤ。

ソバヤウンケンソワカ。

「上水内基地まで歩いて一時間ほどですから、先にお腹に入れておきましょう。」

「そ、そだな。」

「地元産の蕎麦を使った特上生麵の手打ち蕎麦が自慢です、って書いてあるよ。」

「それは期待出来そうですね。掛け、掻き揚げ、野沢菜、と複数選べるのもいいです。そうそう、二駅先の黒姫駅でも構内で蕎麦を食べることが出来るようです。」

「へえ、じゃ、じゃあ、俺は掛け蕎麦。」

「うーちゃんは掻き揚げ蕎麦だぴょん！」

「私は野沢菜たっぷり蕎麦にしますね。」

うんうん、これだよ、これ。

こういうのがいいんだよな。

つるつるしこしこと喉を通ってゆく蕎麦。

それは大地に深く根ざした土地の豊かさ。

俺の体の中で芽吹き、一部となるがいい。

海の豊かさが効いたおつゆも飲み干した。

旨し！

駅ナカみたいな道の駅っぽい販売店で、おやきと八ヶ岳牛乳を買う。
牛乳はガラス瓶で、そのまま飲んだ。

うーん、テイステイなり。

「な、なんか、キャラメルっぽい味がするな。」

「それは低温殺菌の牛乳だからですよ、提督。」

「これはいいものだ！ 次、りんごジュース！」

搾ったまんまの味わいを誇るりんごジュースを次に飲む。

飯綱町産の林檎を使ったもので、奥深い味わいを感じる。

嗚呼、林檎農園が見える。

箱に詰められ汽車ぼつぽ。

旨し。

こちらは寒い。

標高が高いからか？

積雪期はけっこう積もるらしい。

そんな時だと、南極にも行けそうな羽毛服を着ないと動けないな。

俺は提督二種だから移動は私服で来たけど、マウンテンパーカやフリースのジャケット

トも着ているのになんだか足元からじわりじわり冷える。

震えながら歩く。

「提督、頑張ってください。向こうに着いたらお風呂を借りましょう。お背中流します。」

「うーちゃんが全身くまなく洗ってあげるぴよん。」

「あ、あの、やめてください。死んでしまいます。」

てくてく歩いていると、向こうからとことこ山羊が近づいてきた。

白い体に足元は黒い。

「黒靴下様ですね、宜しくお願いいたします。」

「卯月です！ よろしくお願いするぴよん！」

「あ、あの、提督やつてます。よろしくです。」

山羊はメエ、と鳴いてとことこ近づいてきてくると俺たちの周囲を回り、また元の方角へ歩き出した。

なんかキラキラ光った気もするが、気のせいだろう。

「ついでいきましよう。」

「お、おう。」

モンローウオークしてゆく雌山羊に従い、温泉旅館改造型鎮守府へ到着。

なんだかずいぶん気分が落ち着いてきたみたいに見える。
空気が旨いからかな？

艦娘は、戦える時だけ、他の人々から『生産的』と認められる時だけ、生きる権利があるのだろうか？

もし、我々が『非生産的な』艦娘を殺してもよいという原則を採用して実行するならば、我々自身がその渦に巻き込まれない保証があるだろうか？

もし、『非生産的な』艦娘を暴力的に排除してもよいとするならば、艦装を使えなくなると知りながらも果敢に苦境へ立ち向かい帰還してきた勇敢な艦娘は、なんと悲惨なことになるだろう。

時代に抗った人、フォン・ガーレン司教の説教が染みてくる。

俺のような男にもひしひしといろいろなもの伝わってきた。

なんと勇気のある人だったのだろう。

到底真似は出来ないが、せめてその思想の欠片でも取り入れられたらと考える。

賢い筈の企業経営者たちの中には、法の網の目をくぐって『非生産的』と目した雇用者を次々使い捨てにし、過労死に追い込んでいる者も少なくない。

『安い』と『早く』を追求し過ぎて、崩壊してゆく倫理。

『常識』『当たり前』を都合よく改竄して洗脳してゆく。

そうした流れに巻き込まれてはならない。

戦後も艦娘たちが笑顔で暮らせる基盤を作らなくてはならない。

地域社会に根差すべく、助力は必要であろう。

彼女たちは使い捨てるの存在じゃないのだから。

そのための上水内基地だと思っている。

上水内基地の提督と打ち合わせ。

鎮守府管理の件についての話だ。

俺の鎮守府は、戦果は兎も角として管理面では良好らしい。ホントかよ？

しきりに感心されていたが、恥ずかしく感じられる。

秘書艦殿たちのお陰だと言ったが、逆に誉められた。

恐縮する。

ひたすら執務室に引きこもって、書類作業ばかりやっていたのになあ。

この頃上越市から打診されている、近海哨戒任務の件についても話し合う。

糸魚川市がどこで聞き付けたのか、こちらからも打診されているのだから。

というか、近場に小規模鎮守府かなにか無いのかよ。

仲よくしろよ。俺は無理だけどな。

人付き合いもろくに出来ないしな。

なんちゆうか、ほんちゆうか。

哨戒任務すらまともにこなせない艦娘や元艦娘たちに、海上任務が出来る訳ない。

だからこそその内陸基地だ。

函館の提督はケツコンしていた艦娘を複数送り込んで、彼女たちをその任務にあてがうつもりらしい。

それって、過剰戦力じゃないのか？

支店でも作れってか？

卯月に教官役をして欲しいと言われる。

ごくごく基礎的な面だけでいいからと。

彼女は意外と教えるのが上手いそうな。

そういうや、うちの戦績もかなりいい。

でもよ。

新潟から教官を頼んだ方が早くないか？

富山県の岩瀬浜辺りか石川県の三国港辺りにでも小規模鎮守府を設立すればいいんじゃないか、と言ったら管轄違いで問題があるという。

あの辺、なんかなかったっけ？

あの辺りで艦娘のような者も見かけられたらしいが、公式には不明だとか。
むう。

新潟鎮守府の提督は気さくな人らしい。

函館鎮守府とも関係が深いと聞き及ぶ。

ロシアの泊地提督とも仲がいいらしい。

ウラジオストクだか浦塩だかだったか？

だからといって、面子を潰すようなことをしたら大変なことになる。

これ、詰んでね？

なんでお隣の県の街が干渉してくんだよ。

聞くと、飯綱町方面からは山の幸、上越市方面からは海の幸を販売していて繋がりが
けっこうあるのだとか。

お互いに人が日常的に往き来しているのも話をややこしくしている要因だ。

九月から十月まで行われていた英国庭園祭にも、長野県民のみならず多くの新潟県民
が訪れたとか。

どこからともなくメイド軍団がやってきてテキパキ動いたそうなの。

紅茶戦艦の恰好をした女の子が町の各所で何人も見られたらしい。

無論、山梨県や群馬県などからも沢山の人が訪れて賑わったとか。

ここ飯綱町は、一九九〇年に英国王立園芸協会から一七種の林檎を寄贈された。

その内のブラムリーズ・シードリングやメイポールやフラワー・オブ・ケントやブレ
ンハイム・オレンジやタイデマンズ・アーリー・ウースターやローズマリー・ラセット
やエグレモント・ラセットなどを、お菓子にしたり飲み物にしたりジャムにしたり
ジュースに加工したそう。

特にブラムリーズ・シードリングは加工するのにすぐれていて、ジャムを食べさせて
もらったが旨いと感じた。

厨房担当の子は、早速飯綱町内の料理人や職人と話し合いに出掛けると息巻いてい
る。

函館の鳳翔間宮にも注目されているとか。

毎月何キロもの林檎が送られているとか。

飯綱町では現在三六種類もの林檎が栽培されている。

果樹園の好適地らしい。

旧三水（さみず）村だけで、日本国内の林檎の一パーセントを生産している。

日本一の林檎村だ。

林檎の加工品製造にも、意欲を燃やしているそう。

入浴は少し、大変なことになってもうた。

翌日。

アツプルミュージアムとかいう博物館が飯綱町三水庁舎近くにあるそうなので、折角だから訪れてみた。

オサレ系林檎資料館って感じだ。

中は暖かくてガランとしている。

青りんごのグラニー・スミスとやらが丁度時期だそうで、館内のお店で搾りたての生ジュースをいただく。

「ここまで来るとはね。いいでしょう。歓待してあげるわ。ふふふ。」

お店の可愛い女の子に手を撫でられ、ゾクゾクツとする。

うわー、これ、惚れてまうやろ。

イカンイカン、チョロ過ぎるわ。

泡立った液体に口を付けて飲む。

ゴクリゴクリゴクリゴクリつと。

爽やかな酸味が喉を通ってゆく。

旨い。

嗚呼、赤毛のアン。

白い林檎の花が咲き乱れる。

グリーンゲイブルスが見えるぞ。

……あれはカナダだっけ？

オーストラリア生まれの林檎だ。

なにはさておき、飯綱町の林檎をウチの鎮守府に送ってもらうことは確定だ。

こんな旨い林檎を逃す手は無い。

俺でもわかる旨さなのだからな。

米も蕎麦も味噌もとつても旨い。

今朝のご飯と味噌汁と玉子焼き。

嗚呼、とても旨かったで御座る。

ええと、俺、なにしに來たんだっけ？

そうそう、ここの提督と共同作業だ。

共同作業……か。

……もう帰つてもいいかな？

なんで俺みたいなのを派遣すんだよ。

無理無理無理無理ゲーじゃねえかよ。

俺に出来ることなんて大してねえよ。

あー、引きこもりてえ。

あんな立派な、フォン・ガールン司教みたいにはなれねえよ。

ここの提督みたいに、あんなに穏やかにはやれたりしねえよ。

えれえ人を知る度、自己嫌悪に陥る。

ひたすら箱の中にこもりてえ。

この飯綱町ってところが、めっちゃいろいろ旨いのはわかった。

わかったけど、俺じゃ無理無理です。

博物館内の店で悶絶しそうになった。

厨房担当の子と卯房はまだ熱心に館内を見学しているようだ。

もう一杯、飲もうかな？

そうだ、林檎ジュース飲もう。

旨い、もう一杯！

「あ、あの、ち、ち、違うジュースをください。」

「ハイ、ちよつと待っていてね。」

黒いゴスロリの恰好をした肌のやたら白い女の子が、にこにこしながら早速生ジュー

スを作ってくれる。

俺のために。

俺のために。

嬉しくなる。

古いけど頑丈そうな感じのごついミキサーが唸りを上げ、ゆつくりゆつくりと林檎の果肉を砕いてゆく。

彼女の肌のように白い果肉が液体に変わってゆく。

低速の方が味わい深くなるらしい。

キレイな子だな。

バイトなのかな？

地元の子なのか？

引越し組かね？

外国の子だったりして。

それにしては日本語が流暢だな。

案外、帰国子女かもしれないぞい。

まあ、可愛かったらいいわいな。

オークな俺に普通に接してくれるので、実にありがたいよな。

あー、こういう子が嫁さんになってくれたらなあ……無理か。ちらちら見るのもアレだし、じっと見つめる訳にもいかない。

女の子との距離なんて、わからない。

わかつていたら、提督業で困らない。

あゝあ。

俺って、ダメだなあ。

「はい、どうぞ。これはオマケよ。今月末まで『かみみのちあまみまつり』開催中だから、試作してみたの。」

ウインクしながら、女の子は小さなスコーンをオマケしてくれた。

思わず、赤くなる。

ええ子や。

とつてもええ子や。

なんとなく謎の優越感を感じる。

性別逆だったら、即墜ちじやな。

逆でなくても陥落しそうじやよ。

「真っ赤な林檎みたいで可愛いわ。」

ビスクドールのように整った顔の彼女は、やさしそうに俺へ微笑んでくれた。

もう少し頑張ろうか、と俺は思った。
ここへ出来る限り通おうと思いつつ。
うん、勘違いだつてのはわかかつてる。
だけど夢を見たつていいじゃないか。
なんにも言わなきや傷つきはしない。
明日も明後日もこの子に会いたい。
そつと微笑んでくれるだけでいい。
それだけでいいのさ。

スコーンは中に入っている林檎の砂糖煮の酸味が効いて、少し甘酸っぱかった。

CLXXX : 男と男

隣で眠る男をぼんやりと見つめる。

彼は提督と呼ばれる職業の中年男。

私は半年前まで人間の男性だった。

給金が以前のそれとは数段上なので募集に応じ、現在は艦娘となって働いている。

こんなぼーっとした男と夜を共にするようになるだなんて、思ってもみなかった。

悪い冗談みたいだが、生憎これは現実だ。

窓に向かい、風を取り入れるために開く。

夜風が火照った体に心地よい。

すっかり女の体になっている。

余韻未だ冷めやらぬ、この体。

なんだろう。

退役し男に戻ったとして、普通に結婚出来るのだろうか？

戦争はまだ続いており、最前線と国内の温度差は厳しい。

艦娘、本来の方の彼女たちだが絶対数が足りないという。人類は深海棲艦に押され、国内の物資は充分と言い難い。コンビニエンスストアや自販機などがどんどん消えゆく。珈琲紅茶チョコレート洋酒などはまだまだ高価な品物だ。政府の物価統制や配給券も効を奏しているとは言い難い。私が着任する前も、着任してからも、随分と沈んでいる。あのおそろしい世界に沈んでいる。人のことは言えない。

私だつて沈みかけているのだから。

こんな状況で戦い続けられる面々は、素晴らしいと思う。

思考が艦娘寄りになってる元男たちは、戦うことに疑念を抱いていない。

提督に執着する元男はあまりいないと、提督自身から言われ不思議に思う。

でもまあ、それが普通なのだろうな。

私だつて、こうなると思わなかった。

もう、この手は随分汚れてしまった。

液体に染まり、汚れぬ日は無い程だ。

「どうした？」

背後からやさしい声がした。

芯が痺れて、じわりとする。

「夜の海を見ていました。」

「いつも見ているだろう。」

「そうですね、その筈なんです。」

「なにか違って見えるのかもなあ。」

横に立たれた。

吐息が漏れる。

「復活した。」

「まだ続けるんですか？」

「勿論だ。」

そして、私たちは原稿に向かう。

同人誌を描いて、少しでも運営費に回すために。

こんな風になるだなんて、思ってもみなかった。

「冬の漫画祭に間に合わせないとな。」

提督が微笑む。

元漫画家の彼。

思わず、きゅんとなる。

この世界からは逃れられないらしい。

スクリーントーンを貼りながら、明日のオカズはなににしようかと考える。

函館の提督も悪くない。

おいしく、いただこう。

そうだ。

不毛な戦争だけに囚われる必要は無い。

文化だ。

これは、文化なんだ。

シャツ、シャツ、と線を引く音がする。

それが妙に心地よい。

うっすらと水平線が光り始める。

嗚呼、今日もまた徹夜をしてしまった。

数時間後。

私たちは初期艦の駆逐艦に揃って怒られてしまった。

彼女はこの鎮守府唯一の本来の艦娘。

頭が上がない存在だ。

「出来上がったら、一番に見せてよね。」

彼女は複雑な表情でそう言った。

少し嬉しそうにも見える感じで。

CLXXXI：明日に向かって、にほんかいっ！（前編）

呉第六鎮守府の先輩はとてもいい人なのだが、広島県と広島カープの話になるとやたら長くなる。

カープ女子希望の星である、水原勇氣投手の話も長かった。

彼女はプロ野球初の女性選手だそうで、今も頼れる存在だ。

彼女に憧れる女の子も少なくなき、凋落著しい集客力を逆転させる原動力にしたらしい。

私自身はプロ野球に興味が無いので、不知火がどうか犬飼がどうか言われてもよくわからない。

駆逐艦の不知火と違うんですか、と聞いたら怒られた。

不本意ナリ。

一九九一年に、野球協約から『医学上男子でないものを支配下登録出来ない』という条項が削除される。

それでも、女性プロ野球選手は一人も出てこなかった。

世界の海に深海棲艦が現れて日本は強制的に鎖国状態に陥り、厳しい経済情勢の中、プロ野球を観戦しに行く人が激減する。

この状況を広島県民はいたく嘆き、県民一体となつて赤ヘル軍団を盛り上げようと努力した。

愛知県民や福岡県民や大阪府民も呼応して地元球団に応援歌を捧げる。

その過程で、初の女性プロ野球選手が生まれた。

そう。

希望の星、『姫騎士』水原勇氣投手だ。

彼女を目指さんとする女子は実際に何人もいる。

何人もいるのだが、旧態依然とした多くの野球関係者たちは『女にプロ野球選手が務まるかよ』と旧世紀の考えを崩そうとしない。

愛好家が減り続ける現在進行形には関心が無いようだ。

年棒数億の選手が電脳上で批判されまくる時代なのに。

『姫騎士』の捕手を務めるのは『鉄の盾』武藤。

『迷将』岩田監督の采配や如何に。

今年赤ヘル軍団に入団した、『姫百合』の小笠原縷子投手にも期待出来るそうだ。

ゴスロリ金髪縦ロールの貴族令嬢的美女。

彼女の得意投法は『ドリームボールマークII』。

正に、水原投手の後継者に相応しい魔球使いだ。

サウスポーの左打ち。

投げてよし、打ってよしのアイドル選手。

外見のみならず、実力派を思わせる娘だ。

熱狂的なファンを既に獲得し始めている。

富山県のエフエー・ワークスにて原画家をしていたという彼女。

ゴシックロリータな服装が標準装備の彼女は、野球イベントで『女ゴスロリ甲子園軍団』を率いてきたそうなの。

思わず吹いた。

野球選手になりたい女の子たちをゴシックロリータな服装で武装させ、女は誰もヒロインなのだから泥にまみれて実力で勝利を勝ち取りなさいと励ましたそうなの。

古い旧い戦前の価値観が今も息づく野球のセカイ。

そこに一撃与える野球女子たち。

新たな変革の時を迎えるセカイ。

そういう戦いが見られるなら、球場に足を運ぶのも悪くない。

大正時代に東京の女学校の野球娘たちが学園生活を通じ、新しい時代の夜明けを作る

うとした話も知る。

小笠原貿易の令嬢たる小笠原晶子嬢が野球に興味を示し、野球部を編成。

その後、苦労を重ねて宝塚の女子プロ野球球団と対戦まで行つたらしい。

『日本版プリティリーグ』みたいな話だ。

綾子姫様は、小笠原晶子嬢の子孫だとか。

野球狂の魂は引き継がれるということか。

『負けて麗し、勝つて美し』と評される彼女たちの後輩が続出した時、プロ野球は真の新世紀を迎えるのだろうか。

あと先輩に関してだが、広島県が舞台の漫画やアニメの話を経々とする癖はなんとかして欲しい。

尾道や竹原の話はもう満腹であります。

かつて日本国内に於いて、『ブルートレイン』と呼ばれる寝台特急が走っていた。

七〇年代に生まれた夜行特急列車は列島各地を走り、文字通りに人々の足となる。

だがしかし。

古い車輛構造と高速バスや航空機の攻勢によつて、段々時代の渦に飲み込まれた。

二〇一五年の列車運行表改正によつて『北斗星』の命運は断たれ、『ブルートレイン』

そのものが完全に消え去る。

しかしながら、政府や経済界の思惑程には現在も景気回復していない。輸入元が限定される状況では、物品の値段がなかなか下がらないのだ。

高級な趣味嗜好品などは値下がりしない代表例だ。

例えば、たまたま輸入出来たドイツ製やイタリヤ製の万年筆に好事家や廃課金系収集家などが群がり、深海棲艦侵略前には七、八万だった品を二、三〇万程で購入する。

不景気とは言え、金を持っている者はどこかにいるものだ。

そして、それを電脳上で自慢し炎上して失言暴言を繰り返すまでがお約束的展開。下衆系権威主義者ほど自分自身の言葉に疑いを持たないから、事態は大抵泥沼化。

『金持っていない奴ら、妬みの塊ー』と電脳上で眩き、アカウントを削除して逃亡。

リアルで会社に突撃され、大騒ぎになった部長さんを晒すのはやり過ぎだと思う。

一万円の万年筆を安物と言ったり、一〇〇円系ボールペンを不当に差別するのはよろしくないように思われるが。

悪い悪いは他人のみ

振り返らぬは人の常

新幹線の本数も、節電と乗客数の関係であまり本数が増やせない。

結果、『虫食い運行事』と揶揄される。

不満に充ちたデモ隊が度々旧國鐵本社に押し寄せ、結果、打開策を打ち出す公約が公式に発せられた。

その内の一策がブルートレインの復活だ。

大阪青森間を走る夜行列車がその第一弾。

時代錯誤と言われても押し切るのが政府。

生活水準が向上した時、また変遷変転流転するのだろう。

旧いセカイを捨てきって。

大本営に夜行特急列車に関して政府から打診があり、面倒がった大本営は舞鶴に放り投げ。

困った舞鶴は呉に相談する。

そして我が先輩が私を指名。

めでたしめでたし。

……ちやうわいっ！

なんやねんな、この超展開はっ！

中世欧州風異世界転移小説かつ！

まあ、青森県にも大阪府にも関係した鎮守府提督って私くらいか。

……新潟とも縁があるし、受けるしかないかな。

そもそも、どうして大本営に打診が……ああ、経済に大きく関連する企業が我々を取り込み出しているのか。

四大鎮守府はがっちり食い込まれているしな。

横須賀以外は地域密着型だが、西日本偏重もよろしくない。

天秤は難しいものだ。

東京を目の敵にするのはわかるが、だからといって千葉群馬埼玉茨城栃木などを巻き込んでいいという訳でもない。

全国市町村の代表者が遠路はるばる陳情に訪れるのを無下に帰したくないけれども、情に棹させば流される。

知に働けば角が立つ。

とかくこの世は住みづらい。

結局、大本営から大阪商工会議所へ行くように指示が来た。

そして何故か、私の随伴艦が誰になるかで皆が揉め出した。

「間宮さんは今回、もしかして提督に付いて大阪へ行かれるおつもりですか?」

「鳳翔さん、なにを当たり前のことを仰るんです? 妻として夫に付いて行くのは当然

のことだと思いますが。」

「あらあら、付き合ってもおられないのに、妄想が激しいんじゃないですか？　提督の正妻は私ですよ。」

「確かに提督を見出だされたのは鳳翔さんです。でも、夫を思う気持ちに嘘偽りはありません。」

「いいでしょう。それでこそ、私の好敵手。ならば、味勝負しかありません。」

「望むところです。」

おおつ、と盛り上がる鎮守府内食堂。

ベータテープ使用の古い業務用ビデオカメラを前にして、兩名とも迫真の演技だ。

よくこんな台本を使っていることだ。

ところで私は目を通していかないけど。

一体、どこに台本があるのだろうか？

飯綱（いいづな）町産の林檎を搾った生ジュースを飲みながら、私は彼女たちを観戦する。

満員御礼状態の食堂に林檎の香り溢れる。

こうして、大本営の青葉やマスターオータムクラウドたちの仕切る【因縁対決！　世紀の朝定食戦争！】の幕が切って落とされた。

なんだろう、この虚構と現実が入り交じる感じは。

おいしかったらそれでいいじゃないかと思うのだが、そう言うとは何故かあちこちから怒られてしまう。

審査員は私と李さんとメリケン艦娘の戦艦ネヴァダ。

彼ら両名は既に大阪行きが決定済みだ。

李さんは大阪の味を知ってもらうため。

ネヴァダは攻防双方の面を考慮してだ。

審査員向きでない者ばかりな気がする。

金髪碧眼ツインテール隠れ巨乳にマントに釘宮ボイスと、記号てんこ盛りの武勲艦が話しかけてきた。

「ねえ、アドミラル。」

「なんでしよう、ネヴァダさん?」

「朝ごはん、ってコーンフレークスにヨーグルトをかけて、フルーツを載せたらそれでいいんじゃない? ミルクを飲めばそれで問題ないでしょ。野菜分が足りなければ、トマトジュースでも飲めばいいんだし。オレンジジュースやグレープフルーツジュースもいいわね。仕事を円滑に進めるためのパワーモーニングで、分厚いステーキを朝から食べるのは一種の験担ぎだし。」

「あー、まー、そういう食文化圏もありますねえ。」

「刑事だったら、珈琲にドーナッツでもいいんでしょうけど。」

李さんはどっちもおいしいと言いつつ、

そういう人だ。争い事を嫌うし。

私もそつちに近い考えだけどね。

ある知り合いの提督だと、携帯糧食や即席食品で構わないとか言いつつ、

大阪行きを早々に諦めてくれた子はいいが、食らいついている子もいる。

龍驤、雲龍、島風、吹雪だ。

聞き分けのいい子たちだとおもっていたが、もしや食いしん坊なのかな？

「なあ、提督。大阪へ行くのにウチを連れていかんて、どういうこと？ 前回はこらえた

けど、今回は意地でも憑いてくで。」

「私、逝く。提督と逝く。絶対。」

「提督。九州逝きは我慢したが、今回は観念してもらおうじゃないか。」

「ズルいですよ、司令官。こつそりおいしいものを食べようとされたつて、そうはさせま

せんから。一緒に逝きましよう！」

なんだか微妙に不穏な気もするが、たぶん気のせいだな。

青森県黒石産の林檎のコンポートを試食しつつ、準備中の鳳翔間宮を眺める。

水泳部系競泳水着装備の鳳翔と、陸上部系セパレート型ブラ・スパッツ装備の間宮。青対緑。

……その恰好に意味はあるのか？

水泳部対陸上部？

どちらも体にぴったりな感じで、目のやり場に困る。

そろそろ、審査員席に向かうか。

「興奮しているようだな、提督。」

私の右隣に長門教官が座る。

「あれらを鎮守府の制服にしましょうか。」

私の左隣に妙高先生が座る。

「どう思う？..」

「どう思います？..」

「あまりに扇情的なのはちよつと……。」

「大丈夫だ。全国が多感な思春期の女学生が公式にああいう恰好をするのだから、一切問題ない。」

「函館仕様ですから、青地に白線ですね。紋章も付けましょう。」

「あとう。」

「では公式に決定だ。」

「それがいいですね。」

教官と先生がしつかり私の手を握り締めている。

彼女たちが真顔で問いかけてきた。

「舐めてもいいか？」

「舐めてもいいですか？」

「ダメです。」

そして、両名が激突し始めた。

踊り、燃える炎。

舞うフライパン。

流麗な包丁捌き。

芳しき香り漂う。

鍋が煮えてゆく。

ご飯が炊かれる。

中華鍋から火がほとぼりしてゆく。

出番を待つ焼菓子の甘やかな香り。

渾然一体となった匂いが食欲誘う。

鳳翔が作ったのは『上水内(かみみのち)流朝定食』。

ご飯は長野県飯綱(いづな)町産の米を使用。

汁物は飯綱町産信州天狗味噌を使った豚汁。

主菜は飯綱町産地鶏を使った李さん直伝の油淋鶏(ユーリンチー)。鶏肉の甘酢がけで、パリツとした皮の食感がいいのだ。

小鉢は飯綱町産蕎麦を使ったミニそば。

付け合わせはカレーきんぴらごぼう入りミニおやき。

鶏卵料理は出汁巻き玉子。

漬物は野沢菜漬け。

煮物は飯綱町産野菜を使った季節の筑前煮。

とどめの甘味は飯綱町産英国林檎の砂糖煮入りスコーン。

対する間宮が作ったのは『海鮮朝定食』。

ご飯は七飯町産の米を使用。

汁物は富山県氷見(ひみ)名物のかぶす汁。魚のアラたっぷり、海老や魚の揃り身などが入った味噌仕立てのものだ。ちなみに味噌は道南の八雲町産。

主菜は一夜干しの釧路産秋刀魚の焼き魚に大根おろしを添えたもの。水分が抜けて

旨味の凝縮した味わいに箸が止まらない。

小鉢は李さん直伝豚の角煮。柔らかい味わいに奥行きのある深味を楽しめる一品。付け合わせは小田原風揚げ蒲鉾。

鶏卵料理は温泉卵。

漬物はキャベツと胡瓜の浅漬け。

煮物は雪花菜（おから）煮。

甘味は黒石産の林檎を使ったタルトタタン。

半人前ずつ作られた品を交互に食べ、旨さを判定するのだ。皆の視線を浴びながら、適切な一言を口にするのは難しい。

鳳翔間宮の視線がおつとろしい。

食い入るような食い付くような。

願いと希望と不安とが混ざった。

困ったなあ。

ちらりと両隣に視線を飛ばした。

ネヴアダは意外と箸使いが巧い。

淡々と食べ少し考えまた食べる。

膨大な計算が脳内で演算中かな？

李さんはにこにこしつつ食事中。
直伝系の料理は特に嬉しそうだ。
慎重に口に入れ、堪能している。
正直、甲乙付けがたい味わいだ。
どないすつぺ。

判定の時間がどんどん迫り来る。
遅滞戦術の阻止限界点が近づく。

ヤバドウ! ヤバドウ!

所で何故両名とも胸を強調する?

ちやうやろ、それは。

スコーンとタルトタタンの時間。

いよいよ対決列島最終戦の時間。

大英帝国と仏蘭西とが甘味激突。

甘酸っぱい戦争が口内に拡がる。

むむむ。

ネヴァアダが小声で囁く。

「どしどしすんぞっ。」

うーん。

「どちらも、おいしい、です。」

李さんも囁く。

いかん。

我々だと結論が出ないかもしれない。

小田原評定は出来ない。

ならば。

ひそひそと審査員全員で素早く協議。

そして。

私は口を開いた。

CLXXXII・明日に向かって、にほんかいっ！ (後

編)

結局、九名で大阪へ行くことになった。

両名の優劣が付けられなかったのじゃ。

勝負で白黒付けないとは何事かと批判もされたが、この三名に期待するのが無理難題だ。

ネヴァダも空気読む子だしなあ。

鳳翔間宮が双方喜んでるので、これでよかろうなのだ。

おそらく。

双方双得。

結果よければすべてよし。

黒石市の林檎も飯綱(いいづな)町の林檎も購入量を増やそう。

七飯町や余市の林檎も手配しておくか。

なんだか鎮守府の雰囲気沈鬱になっているようにも思えるが、気のせいだろう。

鎮守府本棟二階でカツフェを営む熊からも行きたい旨打診があったが、先日引き取った子熊二頭が彼から離れようとしなかったのと政府側から安全上の関係からやめちよーよとの通達があつたので敢えなく断念になる。

大阪商工会議所の面々はおもろがって、連れてき連れてきと言っていたのだが。大阪へ向けて、鳳翔特製かすていら、間宮羊羹、そして李さん特製月餅を発送。根回し、根回し。

出発日早朝。

未明からの吹雪と時化（しけ）で青函連絡船は一時欠航。

函館空港から東京方面への航空機は、まだ定期便を出せる程復活していない。

小樽鎮守府の提督から過日貰った、ヘリコプターのミル24（西側名称：ハインド）を使うことになった。

貰ったのは全部で四機。

内、二機を今回使おう。

念のため、ロケット弾ポッドやミサイルポッドはパイロン（作者註：翼下懸架装置）から外しておく。

シチリアの空の色で染められた機体には、白丸に函の字有り。

唐蔦丸に板倉九曜の巴紋と、熊の手形みたいな熊紋が塗装済。津軽海峡及び周辺海域の哨戒任務に、試験運用し始めている。青森空港と三沢基地と函館空港とに連絡して、早速乗り込む。

三〇分程で青森駅周辺の上空に到着。

着地点の安全性を確認しながら、次々飛び降りる艦娘たち。

ワイルドだ。

まるで戦国自衛隊だぜ。

気分は武田勝頼ナリヨ。

安全索も装備しないで。

ラペリングですらない。

ネヴァアダが李さんと共にすつと降下する。

私も鳳翔間宮に抱き付かれて飛び降りる。

ちよ、待てよ！

ヒエエエーッ！

近くで見ていた群衆から、何故か拍手が沸き上がった。

イベントだと思われたようだ。

新青森に着く。

東北新幹線の切符の時間を変更してもらったが、まだ一時間少々余裕がある。

さあ、買い物の時間だ。

我が軍勢に檄を飛ばす。

「さあ、買いまくれっ！ 時は来た！」

「「イエス、マイロード！」」

其処は青森県の誇りが凝縮された空間。

林檎。

林檎ジュース。

日本酒。

干物。

海産物。

お菓子。

その他。

売り子の面々は、独特の気配を持つ少女たちが函館鎮守府の艦娘であると直感的に理解した。

なにしろ、買い方が違う。

箱単位が当たり前の様子。

販売勢は試食を強化する。

それは圧倒的な買い物だ。

農家の手作りジュースが、農家の収穫せし自信ある林檎が、大人しそうな青年小料理屋の若女将ふんわり巨乳お姉さんの三位一体な承認でごっそり買われる。

送り先は道南を拠点とする軍事基地。

領収証も発行するから、間違いない。

次々に自慢の品々を説明する青森勢。

鋭い質問が、三者からエルフの狙いすましたような矢のように放たれる。

それは必殺の矢。

それを堂々と受ける青森県民。

鋼の楯を持つ重戦士の如くに。

品質総量値段送料が彼女たちの脳内で素早く計算され、購入金額が決定する。

提督は財布役としてあっちに行つては伝票を書いてはカードで支払い、領収証を貰い、こっちに行つては雑談しつつ試食した。

他の面々はフリーダム。

フリーダムフリーダム。

風の色のように散開す。

さて、残された者たちはどうなったか？

道南にズームイン！

函館鎮守府の食堂。

必死の形相で料理を作る鳳翔間宮。

大淀発の募集に呼応した料理上手。

それぞれ歴戦と自負する料理上手。

大手の鎮守府から志願した者たち。

しかし、既に彼女たちは後悔をしていた。

同姿艦として、腕試しのつもりであった。

そんなに腕が違うものかと思ってもいた。

大量においしく作るのは至難の業である。

四大鎮守府はシステマチックな食事風景。

それに飽きたらない勇者が挑戦している。

だがしかしおかし。

状況は彼女たちの想像を遥かに上回っていた。

李さん特製月餅を食べて過酷さを理解したつもりだった。

今までの功績常識がまるで通用しない。

そこまでいつの間にか差が開いている。

まあ、よその鳳翔さん間宮さんたちだから仕方ないよね、という空気がなにより屈辱感を増幅させる。

言われずとも、わかるものだ。

絶讃はされずとも一定の評価は勝ち取る、という所期目標さえ達成出来ない。

辛辣なことは一切言われない。

寧ろ、氣遣われてさえいる。

叢雲曙霞の言い方も可愛い。

それが悔しい。

悔しいのう、悔しいのう。

佐世保のハンバーガー、舞鶴の和菓子、横須賀の洋菓子、呉のお好み焼き。

それぞれの必殺技の筈の食べ物。

うん、おいしいよ、との評価だ。

違う。

違う。

そうじゃない。

そうじゃないのよ。

いずれも苦戦を強いられている。

鬼神すら震え上がるような鬼気迫る様相で料理を作る軽空母たちに給糧艦たち。

提督が作つておいた浅漬けをおいしそうに食べる光景すら、厭（いと）わしい。

そんなに。

そんなに。

そんなにも違うのか。

涙が目蓋に浮かんだ。

だからいかんだ、と日本料理界の重鎮だった鹿ノ谷は思うのだが、これもまた経験。

敢えて言わぬ。

ゆうてわかるうものか。

これは試練也。

きつと、彼女たちの糧になるだろう。

厨房の責任者である彼は、鳳翔たち間宮たちへそれぞれの鎮守府で振る舞われる郷土

料理を主に作るように指示している。

一応過去の献立表は見せたが、基本的に重複禁止を言い渡していた。

同じ土俵で勝負してはならない。

自分の土俵に相手を寄せるのだ。

それは料理上手たちの自尊心を傷つけたが、小破程度のものだった。けれども。

今は中破以上の損傷を受けている気分だ。

負けてはならじ。

負けてはならじ。

大阪へ行った面々が帰ってくるまでに、胃袋を掴んでみせる。

悲壮な決意と共に、彼女たちは勇壮に戦いの協奏曲を奏でた。

緊迫した表情が穏やかになった時、おいしいと評価されよう。

視野狭窄を通り過ぎて覚醒した時、胃袋が掴めるかもしれぬ。

震える助手の春日丸。

泰然自若の龍田足柄。

眼鏡を光らせる大淀。

まだだ。

まだやれる。

胆力ある料理人たちを震えさせつつ、鳳翔間宮たちは新たな仕込みに入った。

昼前には東京駅到着。

本日はこの街で宿泊。

だから、東海道新幹線兼山陽新幹線には乗らない。

今日これから乗るのは特急わかしお。

大原までおおよそ一時間強の小旅行。

東京から海沿いを走ってゆく列車だ。

提督候補生時代に、沿線の茂原市内の山奥で教育を受けていたのが懐かしくさえ思えてくる。

海沿いの町、大原に到着。

研修時代に外出許可を得た際、当時現役だった長門教官と共に歩いた大原漁港を覗く。

みかん大福を一緒に食べた。

そんなことを思い出したり。

あの頃は平和な関係だった。

艦娘たちからは冷やかされた。

教官も秘密にしていないな。

むしろ、自慢にさえしている。

伊勢海老やサザエが見えるぞ。

うわっ、このサザエ! 特大。

この空腹、もう玄海灘だぞい。

「お兄さんたち、食うんだったら、隣で食べるよ。」

よし、食べよう。

刺し身にしてもらったり、焼いてもらったり、味噌汁にしてもらったり。

旨し。

干物乾物を購入し、函館に送ってもらう。

この辺で艦娘のような少女が見られると聞いたが、今はいないようだ。

少し歩く。

なつかしい風景。

おや?

肉屋直営の定食屋が見えた。

食べてゆこうか。

ほう、いすみ市は米や豚肉で有名なのか。

豚肉塩焼きライスとミックスフライを頼もう。

フライは三種選べるから、鰯とメンチとコロツケにした。

……あれ？

初霜みたいな女の子が注文を取りに来た。

……気のせいかな？

艦娘……ではないのか？

少し違う気がする。

島風に視線を向けるが、さあ？ といった顔をされた。

……いいのかなあ。

一応報告はしておこうか。

焼くにおい。

揚げるにおい。

いすみ育ちのやわらかポーク。

皆でわしわしとおいしく戴く。

旨し。

いすみ鉄道の大原駅で汽車に乗った際、乗務員から房総横断記念乗車券を購入。

これは前進方向に限り、途中下車自由な当日のみ有効の乗車券。

いすみ鉄道。

それは第三セクターで経営される関東地方路線のひとつ。

ただでさえぼろぼろになりつつある関東圏諸藩に於いて新機軸を続々と打ち出し、年々予算が渋くなつてゆく行政との攻防戦で一進一退を続けている戦巧者たちだ。

全国で青息吐息の第三セクター路線が多い中、健闘している部類の存在。

八年前に廃線の危機を迎え、深海棲艦の侵攻後も二度目の危機を迎えた。

観光列車強化策としてムーミン列車を走らせ、昭和のデイズル車のキハ52をも走らせている。

国吉駅で下車して、駅舎構内にあるムーミンベーカーリー&カフェでまったり。

この辺りは若い移住者もちよこちよこいるそうさ。

東京からエクソダスした人たちだろう。

そうした人たちにこの喫茶室は需要があるという。

まあ、そうなるな。

手作り感に充ちたセカイ。

パンを買ったり、紅茶を飲んだり。

次の汽車の待ち時間さえ楽しめる。

恋のガパオ弁当とやらが一つ残っていたので、買ってみて皆で少しずつ分け合う。

旨し。

ムーミングッズを買う艦娘もいる。

私も手土産に幾つか買っておいた。

大淀たちが少しでも喜ぶといいな。

黄色い汽車に再度乗って大多喜へ。

『房総の小江戸』大多喜は本多忠勝公の治めていた城下町。

いすみ鉄道で息を吹き返しつつある町。

地方活性化はとても馬力のいる仕事だ。

オンリーワンを目指さないと余計大変。

先月は大多喜お城まつりを開催して、大いに盛り上がったそうなの。

駅の売店は千葉土産や地元の産物を販売している。

地元産の米も売っていたので、二〇俵ほど買って函館に送ってもらう。

文具店にもなっていたので少し物色。

駅舎近くに『メキシコ珈琲』という喫茶室があったので、興味本位で入ってみる。

昔、勝浦・御宿・大原を含むこの一帯は、本多忠勝公が治めていた領地。

その頃、メキシコ人たちが房総半島沖で遭難し、漁師たちに助けられた。

彼らを公が保護し、新規建造した船で船乗りたちを故郷に帰したという。

故に、大多喜とメキシコとは交流があるのだそうだ。

現在は深海棲艦によって断絶しているが、交流が再開出来る日を楽しみにしていると
いう。

どこか老将の趣さえある店主はやさしい声でそう言った。

彼が淹れてくれたスマトラの珈琲は、少しほろ苦かった。

折角なので、駅舎から右に歩く。

大手門を潜り抜けて城へ向かう。

現在は総南博物館となっている。

初めて見る城に興奮する子たち。

お城だお城だ、と喜びはしやぐ。

大多喜は稀少な天然ガスの産出地で、それを利用したガスカーの町内循環型観光バスも走っていた。

土産物屋で何故か皆木刀に興味を示す。

ネヴァダがチャンバラソードね、と言った。

ふふふんと木刀を振る吹雪と龍驤。

買おうかどうかとしようかと悩む面々。

雲龍と島風がじつと眺めて悩む悩む。

それを微笑ましく見つめる鳳翔間宮。

李さんは異国情緒の品々を見つめる。

君らは昭和の中学生か。

酒屋にすすみ市で醸されている木戸泉を置いていたので、夷隅郡の岩の井なども含めて房州産の日本酒を函館に送ってもらう。

豊乃鶴酒造を見学。

興味深く話を聞く。

今度鎮守府でも企画するかな？

大多喜城の特別純米酒を購入。

老舗の和菓子屋で、大多喜名物最中十萬石を購入。

別の老舗和菓子店で、季節限定の大多喜芋ようかんを購入。

上総中野からは小湊（こみなと）鉄道に乗り換える。

立派に黄色く色づいた大イチョウの木を越えて走る。

秋の夕暮れは釣瓶落とし。

赤い夕日に、照る山紅葉。

時折森の中を抜けながら、汽車はもくもくと走っていった。

景色はいいのに、人が乗らない。
地元民が使わなくてはならない。
だが、なかなか上手くいかない。
むう。

上総牛久駅で一旦下車。

缶入りドロップを購入。

駅舎からてくてく歩き、お菓子屋へ。
ここの牛久饅頭八坂太鼓が目標物だ。
黒糖と葛を使い、皮はもちもちナリ。
パンやケーキも販売されている店舗。
みたらしだんごもごっそりと買った。
皆で食べたらあつという間に消える。
そういうものだ。

牛久駅から五井駅まで移動。

そして、都内へと戻りゆく。

宿泊は有楽町駅近くの洋式旅籠。

レディースプランで意外とお徳。

中で洋琴を弾いている初老の男性が、『フライミートウザムーン』を軽やかに奏でる。部屋に一旦荷物を降ろして、老舗の和菓子屋へ向かった。

新幹線は早朝発なので、今買つとかなないと間に合わない。

予約しておいてよかつた。

新宿から中央本線に乗り換え阿佐ヶ谷へ。

駅舎に程近い、こねこや。

ここのだら焼きが旨いのだ。

赤飯や餡蜜や草だんごやみたらしだんごも購入。

皆の熱い要望に応えた形だ。

わーい、みたらしだんごとみたらしだんごがかぶつちやつたぞ。

えっ？

牛久の団子はもう食べきつた？

商店街をぐるりつと歩き回る。

ちよこちよこつとした面白い物。

案外、こうしたことが楽しい。

阿佐ヶ谷から新宿までは中央本線。

新宿から上野までは山手線。
上野から浅草までは銀座線。

夕食は友人が営む洋食屋で。
小さな城塞を貸し切りだぜ。

今朝、鰯（ぶり）の幼魚であるイナダが釣れたそうだ。
今宵はそれを食べられる。

ありがたや、ありがたや。

江戸・帝都・関東の誇りを魅せよう、と彼は宣言した。

いよつ、大統領！

……洋食、なのか？

大皿に刺し身の盛り合わせ。

イナダ、クロダイ、アジだ。

旨し、旨し、旨し。

ぷりっぷりだぜい。

浅蜷と葱を味噌仕立てにして、飯にかけて深川丼。

はらり、と載せられた刻み海苔との相性も抜群だ。

胡麻油を使った天麩羅と搔き揚げ。

天麩羅は天然穴子、カワハギ、茨城産ピーマン、川越産薩摩芋。

搔き揚げは小海老と三つ葉。

三つ葉と云えば葵。

ほほう、やるじゃないか。

生のピーマンに肉団子。

これを合体させて食べるのだ。

麻婆茄子。

焼き餃子。

ザーサイ。

横濱流か。

関東煮はおでんと同様の食べ物。

ちくわ。

ごぼ天。

はんぺん。

手羽元。

大根。

茹で玉子。

厚揚げ。

餅巾着。

とどめの甘味は豆かん。

旨し!

李さんと鳳翔と間宮がなにやら話し合っている。

これでまた旨いものが食べられるぞ。

計算通り。

くくくく。

銀座線で上野まで戻り、そして有楽町へ。

ガード下の焼き鳥屋で、少しきこしめす。

サラリーマンたちのぼやきぼやきぼやき。

本社が大阪になるとぼやく会社員もいた。

翌早朝。

……昨晩は大変だったなあと思いいながらの朝風呂。

甘噛みの形跡があちこちに出来ていた。
あんなに悪酔いするとは思わなかった。
少し湯がしみる。

同室の李さんが驚いていた。

朝風呂はリリンの文化だよ。

李さんのが大きくて驚いた。

嫁さんの世話もしないとな。

はて、どんな子がいいかな？

艦娘たちは全員ケロツとしていた。

……えっ？

代謝機能か？

代謝機能がそんなに違うのか？

洋式旅籠（はたご）のバイキング。

こうした宿泊も朝食も初めてという、初めて尽くしの体験が彼女たちになにをもたらすのか？

興味は尽きない。

「好きなもん取ってええんか？」

「好きなものを好きなだけ。これは夢？」

「取り過ぎて食べきれないのは勿体無いので、食べられる分だけ取ってそれから考えましょう。時間はまだありますから。」

「よし、食べ尽くしちゃいますよ、司令官。」

「話を聞け、吹雪。提督、別に全部食い尽くしてもかまわないのだろうか？」

「それは言ったらダメだよ、島風。」

「提督、あちらでは好きなように卵を焼いてくださるそうですよ。行きましょう。」

「提督、ちよつとわからないことがありますので私に教えてください。こちらへ。」

「アドミラルが引つ張り凐な件。」

「どれも、たいへん、おいしそうです。」

珈琲紅茶は従業員が注いで回る方式。

私はトマトジュースや林檎の生ジュースやポトフなどを選び、クロワッサンやワッフルやスコーンも皿に載せる。

李さんはお粥が気になったようで、一緒になって選ぶのを手伝う。

彼に説明しながら選んでもらうと、何故か周囲の人たちも同じ料理を取っていた。オムレツはチーズとマッシュルームを入れてもらい、ウエルダンで焼いてもらう。

鰯（ぶり）の西京焼きも選んでみた。

皆でどれがおいしいあれがおいしいとやり取りする。

和食も洋食も充実している。

温野菜。

冷野菜。

都心部の宿泊施設はどこも経営が厳しいそうだが、この苦境へ如何に立ち向かうかが大切だと思う。

バイキング初心者たちに教えながら、食べ物選びを手伝った。

シリアル系を中心にしたネヴァアダも、どうやら満足のようだ。

うん、この生ジュースは長野産のシナノスイートっぽいなあ。

呟いたら、従業員からその通りですと言われた。

一気に皆からおお！と言われ恥ずかしくなる。

「みんなと一緒に食べてみたいですね。」

ぼつりと鳳翔が呟いた。

全員頷く。

ああ、その通りだよな。

レトロ感溢れる東京駅でパチパチ撮影し、新幹線に乗り込んだ。

大阪到着。

さて、大阪商工会議所の面々や府庁の職員や鉄道関係者などと会談か。会談の時間までまだ少し余裕がある。

よし、豚まんを食べようかな。

どこかでお昼にかやくご飯定食も悪くないな。

イタリアンの旨い店は……ええと。

と思った、その時。

上空から飛び降りて、私に抱きつく黒髪の娘。

音もなく忍び寄る黒い影！

親方、空から女の子がっ！

「司令はん、会いたかったわあ。」

「お久し振りですね、黒潮さん。」

「なんや他人行儀やなあ、ウチと司令はんの仲間やん。」

「それこそ他人でしょう。」

「うわ、いけずやわ、ホンマ。でも、そないなとも気になるんやけどねえ。」

「ははは。」

「司令はん、ウチの豚まんをあげるわ。ほらほら。おっばいでぬくめといたんやで。」
「……………口に突っ込んでから、あなたはなにゆうとんですか。」

「気にせん、気にせん。」

「提督、誰ですか、この女。」

「ちよつと殺つちやつていいですか。」

「うわつ、なんや殺気駄々漏れやん。」

「おい、そのジャリ。うちらをなめとると、痛い目遭うで。」

「先輩、すみません。ウチの司令はんはんに久々におうたもんで、テンションが上がってもうて。」

「貴女の提督じゃない。私の提督。」

「まあまあ、まあまあ、まあまあ。」

一 触即発になりそうな雰囲気壊さねば。

「この子はちよつと人懐っこいもので、まあ許してあげてください。」
「大阪鎮守府仮所属の黒潮です。よろしゅう頼みます。」

ん？

なにか今、不穏な発言が…………。

あれ？

お昼ご飯はたいそう賑やかなものになった。

会議室に到着。

お土産を渡す。

呉第六鎮守府所属の子たちが来ていた。

オプザーバーつてどこか。

会談そのものには出ないが、大阪鎮守府の梶子入れをするために派遣されたそうなの。

顔見せと挨拶回りか。

三名と少ないが、いずれも手練れ。

先輩が選んだ艦娘だ。

かなり強いのだろう。

「呉第六鎮守府所属、分遣水雷戦隊旗艦の香取です。よろしくお願いいたします。」

「同じく、分遣水雷戦隊の五十鈴よ。提督さん、よろしくね。」

「同じく、分遣水雷戦隊の初霜です。よろしくお願いします。」

やはり、違う。

この初霜とあちらの推定初霜は、雰囲気からして違うな。

じつと見つめていたら、初霜の顔が段々赤くなってきた。
いかん、いかん。

『調整』してもらったが、油断するところだ。
思うに任せないものだ。

会談が始まる。

他の子たちは、今頃黒潮の先導で大阪うまいもん紀行開催中だろう。

確か、十三（じゅうそう）へ行くとか言っていたな。

鉄道関係者のワフ・スハネフ氏が口を開いた。

彼は欧州の交通事情に詳しい日本鉄道愛好家。

大阪から日本海側の緒都市を繋ぐ『日本海』を復活させ、それが一定の成功を修めつつある状況になったら第二弾を放ちたい旨の話を聞く。

それは夜行特急列車『彗星』。

大阪発、鳥取・米子（よなご）・松江・下関・大分・宮崎などを経由して鹿児島中央へと走る夜行列車。

第三弾も企画中で、それは夜行特急列車『さくら』。

大阪発、姫路・岡山・広島・博多・熊本・川内（せんだい）などを経て鹿児島中央に

到達する夜行列車。

企画している時は、そんなに悪くならないと思ってしまっただよな。

地方活性化の話になる。

私は千葉県いすみ鉄道の事例を話した。

皆で八坂太鼓や最中十万石や大多喜芋ようかんやこねこやのどら焼きを食べながら、
鉄路の活発な利用や小旅行企画や物産展、観光客誘致、土地の特色魅力を積極的に宣伝
する話などした。

黒石の林檎や飯綱（いいづな）町の林檎、北海道の産物、観光企画展。

柔軟な発想力。

新しい考えを頭から否定するのではなく、よくよく検討してみる。

東京の時代が終焉を迎えつつある世の中にて、どう動いてゆくか。

刀剣を擬人化した物語に感化され、博物館へ足を運ぶ女子もいる。

アニメーション作品と提携を結び、地域振興へと結び付ける方策。

鉄道女子アニメの企画も、検討されているようだ。乗り鉄女子か。

会談初日終了。

あと二日ある。

それでお役御免の予定だ。

大本営への報告書が多くなりそうだ。

函館の大淀に電話をかけて様子を聞くが、別段問題ないらしい。

気にしていた食事の件でも、よその鳳翔間宮たちが頑張ってくれているという。ありがたいことだ。

彼女たちの様子を聞くが、意気軒昂で大変意欲的能動的に粉骨碎身なのだとか。食糧をあちこちで買って発送した件も伝える。

さて、カルビとホルモンを堪能しようか。

今日会談した大阪の人たちの一部と一緒に

一軒貸し切りにしてきているのだとか。

よし、鶴橋で焼肉ナイトパーティーだ。

喰うぜ喰うぜ喰うぜ。

ツンツン、と後ろから肩をつつつかれた。

振り向くと黒潮がいる。

「ウチも食うてみる？」

とびつきりの笑顔で、彼女はそう言った。

CLXXXIII：止まない雪はないさ、とその娘は言った

「明日もよろしくお願いしますね！」

昨夜、そう言っていた頑張る系女子が朝起きてこないで部屋へ様子を見に行ったら、『ご免なさい』系書き置きを残し遁走していた。

あくあ、またかあ。

これでおおよそ二〇〇人になった。

この五年間の村から出て行く人数。

来ては出て、来ては出て、留まる者は二割に満たない。

それでも受け入れ続け、信じ続けないといけないのだ。

どちらが悪い、というよりも価値観の相違が主原因だ。

今の時期はまだそんなに積もっていない。

完全な陸の孤島にはなっていないからな。

先一昨年みたいな状況は、二度と味わいたくない。

あれは本当に過酷な状況だった。

江戸時代や戦前を地で行く生活。

崩壊寸前の自治体が続出したとか聞き及んでいる。

雪の中で困ってなきやいいが、と思つて探索に行つたらどうやら彼氏が迎えに来たよ
うだ。

彼女が一度携帯端末の画面で見せてくれた、あのチャライホスト風の兄ちゃんか？
やさしそうな感じではあつたが。

車の轍（わだち）が残っている。

なんちやつて、だったのかなあ？

陸の孤島での生活は無理だったか。

ダメだと思つたらあつさり撤退か。

それもまた賢いやり方なのだろう。

明日に向かつて、えくそですつ！ つてやつがコレになつちやうのか？

この古びた昭和系雑貨屋の店員が、これでまた一人減つてしまつたぞ。

むう。

で、この店だが、江戸時代は商家だつたらしい建物を好事家（こうずか）が明治の頃

に買い取り、改築したのが始点となっている。

戦後になってその子孫が二束三文で売っぱらったのを、俺の爺さんが購入した。そして、このよろず屋が我が家になった。

俺が三代目として現在も店を構えている。

酒、日曜雑貨、お菓子、乾物、化粧品、文房具、大和ラムネなどを扱い、付属した小さな食堂では蕎麦と豚丼を提供している。

豚丼には味噌汁が付き、それぞれ日替わりの小鉢が一品付く。

親爺までの代は飯屋の比重も大きかったらしいが、めんどいので二品に変えた。

最近、品数を増やして欲しいとの要望が出始めている。

村の食堂では飽き足りない若い世代や、よそから移住してきた面々がなんやかや言ってきた。

増やすとしたら丼物かな。

きつね丼はどうだろうか？

丼汁でさつと煮た細切りの油揚げ、蒲鉾、長葱をご飯の上に載つけたものだ。

これなら手早く作れる。

長葱は村でも作っているし、油揚げは近所の豆腐屋に頼めばいい。

蒲鉾といった練り物はそれなりに手に入るから、特に問題はない。

このきつね井を玉子でとじたら、今度はきぬがさ井へとなる。蒲鉾、椎茸、三つ葉を玉子でとじると、木の葉井に早変わり。

この木の葉井には、焼きたての揉み海苔を掛けるのが特長だ。きつね井、きぬがさ井、木の葉井と三品目の経済井を加えたら上々だろう。

夏に広島檸檬仕様の自家製レモネードを販売したら、存外村のお年寄りにも受けた。

原材料は国産檸檬、砂糖、蜂蜜、水、氷。

自分用には檸檬の蜂蜜漬けを元にし、炭酸水で割って飲んだ。

ハイカラじゃあ、ハイカラじゃあ、とご老人方は言っていた。

この村はハイカラという言葉が今も生きている。

現在は甘酒が季節商品だ。

純米酒の酒粕に砂糖と生姜と水を加え、熱したら出来上がり。

簡単おいしい甘酒の完成。

爺さんや親爺も作っていたそうだが、やはりだいぶん味が違うらしい。

これはこれで乙な味だよ、と言われた。

あと、なんか雑誌の取材がたまに来る。

なんだか珍しい建築技法を使っているらしいが、俺にはよくわからん。

近所の和菓子屋にも、取材が時折入る。

洋菓子やパンも売っている昭和の店だ。

東京がダメになりだしてから、そちら方面よりの疎開者が増えている。

山間部の村落で限界集落数歩手前が現実問題なので、最初は皆喜んだ。

純粹に嬉しかったんだ。

だけど、現実にはドラマや映画みたいに理想的な展開とはならなかった。

田舎へと疎開する大抵の人は、『田舎でスローライフ』が目標らしい。

農業は楽でもなんでもなく逆に厳しいくらいなのだが、そういう話をされても未経験者にはよくわからないだよな。

起業したって、市場がそんなに大きくないから需要供給の綿密な計算は必須事項だ。

日々の誤解と不理解が重なって精神的負荷に繋がり、やがてなにもかもが厭(いと)わしくなってくる。

それが臨界点に達した時、去ってしまうという寸法だ。

気遣いを幾らしたって、考え方が違いすぎると受け入れ難い。

それらを乗り越えた人たちだけが、田舎に適応出来る。

この村は画面の向こう側じゃない。

血肉のある人々が住む場所なんだ。

村の特産品は米、林檎、味噌、清酒、薩摩芋、日本蜜蜂の蜂蜜など。

近年は林檎の加工品にも力を入れ、濃縮還元果汁ではない本物のジュースの販売も強化している。

林檎のジャムに林檎酢に林檎寒天に干し林檎に林檎酒に林檎糖。

林檎入り芋羊羹を新たに開発し、村の商標力を高めなん、いざ。

林檎の砂糖煮入りのスコーンも試作中だ。

京阪神方面のお洒落系商店へ積極的に働きかけているし、生き残りをかけての群雄割拠なこの過酷極まる時代になんとか適合すべく皆知恵を日々絞っている。

搾りたての林檎ジュースを飲みながら。

女子向け爽やか純米酒も鋭意開発中だ。

最大の問題は、この村に働く場所があまり無いところ。

選択肢が事実上殆ど存在しないところも、問題だった。

お洒落なスイーツの店とか、カフェとか、コンビニエンスストアとか、そんなものも無いのだ。

地方百貨店に行くのだから一日がかりだし、その肝心の商業施設も昭和の香り漂う店

内と品揃えだ。

食事どころはザ・昭和の食堂だしな。

その炒飯が旨いので、たまに出掛けた時は食べている。

今は林檎の収穫時期なので、総動員令が発令されていた。

凍るような冷気と雪風の中を突破しながらの収穫作業だ。

舞風は時として吹雪になり、深雪や根雪の元へ変化する。

これで、都会から来た人は参ってしまふ。

二週間か三週間くらいはなんとか頑張るが、これが数カ月続くと怖じ気づく人さえ出てくる。

林檎加工場の仕事を回したりもするが、発作的に逃げ出す人はどうにもならない。やれやれ。

『彼女』には失望したよ。」

「仕方ないさ。都会っ子だったからね。でも、それなりにもった方じゃないかな。」

「提督は女の子に甘過ぎる。」

「いやいや、性別ではわけていないからね。その辺は誤解なきように。」

「そうかな？ 提督は僕にだけ甘くしてもいいんだよ。そうだ、そうするべきだ。」

「それこそ、誤解を生む元だ。」

少しムツとした顔の美少女。

トキサメちゃんは海沿いの街からやって来た。

中学生から高校生にかけてくらいの子だろう。

しつかりした女の子でほんのり甘えん坊さん。

村では一人でも若手の実働戦力が欲しいから、過去や細かいところには触れない。

それはこの村の美点でもある。

相手の過去を根掘り葉掘り聞いたために、疎開者が殆ど来なくなった村さえあるからな。

しつこく聞くことがどれだけ相手を怒らせるかがわからない限り、そうした村に他所から人が移住することはあまり無いと考える。

総出の林檎狩りが終わり、芋煮を振る舞ってもらってほっと一息。

勇敢且つ可愛いトキサメちゃんが、いつの間にか俺のそばにいた。

「流石に冬が来て雪が積もると寒いね。……提督、手が冷えているじゃないか。早くおこたで温まろうよ。」

そう言えば、トキサメちゃんは何故か俺を『提督』呼びする。

最近の流行りなのかな？

武装少女の艦娘たちが、基地司令官のことをそう呼ぶと聞いたことがある。

この年代特有のお遊びかもしれない。

若い女の子の流行ってよくわからん。

朝食後、貴重なガソリンを入れた積載性優先型商用車系箱形車輛に乗って、商品の仕入れへ出掛けることにした。

週に一、二回は近郊の市に向いて情報を集めるように努めている。

早く出かけないと、帰り道は真つ暗闇の中を走ることになるので要注意だ。

夕方五時になると、闇の支配下になってしまふからな。

道がより滑りやすくなるし、鹿や猪などにぶつかると車が大破してしまう。

よいことなどなにもない。

村のお年寄りたちに御用聞きをして、いざ出立ナリヨ。

来年になると、村から出ることさえ大変になつてくる。

林檎は今年中に売るもの、雪中林檎にするものに分けなくてはならない。

儲からないけど、忙しい。

車輛点検を始める。

トキサメちゃんが近づいてきて、上目遣いをしながら俺に話しかけてきた。

「僕も一緒に行つていいかな？」

「いいともさ。」

ボロい車に乗り込んでエンジンをかけ、暖気を始める。

彼女は肩掛け鞆の中から深紅のマフラーを取り出した。

「提督が風邪を引かないように、つてマフラーを編んだんだ。……もしかして、迷惑だつ

たかな？」

「ありがたく、使わせてもらうよ。」

「ほら、僕のお揃いなんだ。」

「ははは、まるで兄と妹だね。」

「そこはちよつと違うんじゃないかな。」

昼前に街へ到着。

相変わらず、駅前商店街の活気が無い。

閉めたままの店舗が増えているようにさえ見える。

いつも停める立体駐車場もガラガラだ。

いつもの百貨店に立ち寄り、いつもの食堂でいつもの大盛り炒飯を食べる。

卵と長葱と叉焼の三位一体技だ。

これだよ、これ。こういうのがいいんだよ。

スープやザーサイもいい味わい。

トキサメちゃんは日替わり定食にしていた。

鶏の唐揚げと八宝菜と麻婆豆腐。

幾つか買いい物をして、大型商業施設へ向かう。

ガラガラの駐車場に余裕で車を止めて、賃貸型店舗があちこち抜けている中をぼちぼち歩いた。

那珂ちゃんの澆刺（はつらつ）とした歌声が空々しく響く施設は、まるで活気が感じられない。

ここもヤバいかな。

年末でもないのに、三割引四割引の幟（のぼり）が目立つ。

個人事業者ではその傾向がより顕著だ。

堅調な商売をしているように見えない。

旅行会社では冬の北海道を宣伝しているが、小冊子に手を伸ばす人はいても席に座る人は見かけない。

函館の五稜郭やトラピスト修道院がお洒落な写真になっているが、どれだけ効果があ

るのかね？

「その内、提督と一緒に函館へ行ってみたいね。」

「あ、ああ。」

「熊に会えるのかな？」

「函館鎮守府にはいるらしいよ。」

トキサメちゃんがうつとりと小冊子を眺めている。

どうやら、効果はあつたようだ。

文房具屋では商品の多くが半額だった。

気まぐれで万年筆とやらを買ってみる。

ノートやその他細々したものも買った。

仕入れるよりも安くなっているじゃん。

トキサメちゃんにはボールペンとその替え芯を買ってあげた。

国産品のかかなり上級な感じの品である。

俺の万年筆と対になる製品なんだとか。

一足早い、クリスマスプレゼントとして彼女に進呈したのさ。

非常に喜んでくれたので、買った甲斐があつたというものだ。

店主と雑談すると、来年の春には畳む予定なのだと言われた。

世知辛いのが、世知辛いのが。

パン屋に行くと、タイムセールにて安く買えるとのことだったので沢山買う。

村の高齢者たちも喜ぶだろう。

トキサメちゃんから下着を選んで欲しいと言われ、とても困った。

どれを着た姿が見たい？ って聞かれて、しどろもどろになった。

こういう悪戯つ子めいたところが、彼女には見られる。

からかい上手のトキサメちゃん、ってどこだろうかね。

いつもの問屋に寄り、いつもの商品を仕入れる。

今後、東日本の不景気が加速するおそれさえあるとの話になった。

親爺さんに、特別純米酒と林檎ジュースとジャムの詰め合わせをお歳暮に渡す。

今年の後二、三回訪れたらいい方かな。

林檎の収穫を手伝わなきゃならぬしな。

なにがどうなるか分からないご時世だ。

今のうちに、出来る限りの手を打っておくべきだと思う。

いつものガソリンスタンドに立ち寄った。

値段が若干下がっていたので少し嬉しい。

いつもの陽気な兄ちゃんやんが、なんだか悲しそうな顔をしている。

来年の春に閉鎖されるのですと言われた。

仕事を探している最中なんですよ、とも言われたのでオラが村を勧める。

彼の仕事ぶりは知っているし、人柄も安心出来る。

正直、欲しい人材だ。

考えておきます、と言われた。

冬の日が翳（かげ）ってゆく。

周囲が加速度的に暗くなってゆく。

帰りの車の中、ぼつりとトキサメちゃんが呟いた。

「僕はまだ、ここにいてもいいのかな？」

「勿論さ。いてくれないとむしろ困る。」

即答だぜ、即答。

どんどん空が薄暗くなって、雪が舞い始めた。

車の中にも、風の音が聞こえる。

びよおびよおびよおと聞こえてきた。

白雪こんこん、降り積もる。

かまくらの準備もしとくか。

彼女に話しかけてみようか。

うつむいたまんまだしなあ。

「昨日も今日も雪だな。」

「止まない雪はないさ。」

「そうだな、春はその内来る。」

「春を提督と一緒に迎えられるのは、僕にとって嬉しいことさ。何時までも提督と一緒にだよ。」

「お、おう。」

真つ暗になりきる寸前に村へ着く。

灰色の空の下、俺たちは仲よく手を繋いで店舗兼住居へと戻った。

季節は寒い、心は温かい。

その途中。

不意にトキサメちゃんが俺の耳を噛み、ふうつと息を吐きかける。

お、おうっ!?

「わかつていると思うけど、浮気はダメだよ。」

年齢と童貞年数が等記号の俺に向かい、彼女は艶めいた声でそう言った。

CLXXXIV : 艦娘は美しく散る

建造器から出てきて最初に聞こえてきたのは、失意と落胆のこもったため息だった。おそるおそる提督を見つめる。

その瞳は絶望に彩られていた。

生まれは寒い北の国。

さほど間を置かず、どんよりした雰囲気、提督と秘書艦の三名で暑い国へと向かう。もぎたての林檎の箱を携（たずさ）え。

南下南下南下。

有無を言わさずの南下。

気温の変化は著しく、人の変化は鈍い。

不安を抱えながら、私はこれから所属する鎮守府へ思いを馳せた。

私は人間ではない。

ロボットでもない。

艦娘という存在だ。

戦前もしくは戦時中に建造された艦艇の魂を中核にして、人の形を得たツクリモノ。先輩によると、半分精霊のようなモノらしい。

ニギミタマの一種だという説もあるとか。

三艦隊に満たない艦娘の所属する鎮守府で、私は遠征任務を担当することが決まった。

戦艦も正規空母もない基地。

軽巡洋艦二名に軽空母が一名。

重巡洋艦も以前は一名いたが、既によそへ転属してしまっている。

潮風を受けながら、荒波を越えて資財を運ぶ。

華やかに激しく生きるのが本来の艦娘の生き方ならば、私はそれに見合わない暮らし方をしていることになる。

提督は怒鳴らない人だったけど、厳しい言い方で相手を追い詰める類いの人だった。

「ふん、この程度の性能か。第一艦隊は到底無理だな。特にすぐれた面の無いお前でも、遠征任務くらいはこなせるのだろう？　せめて食い扶持くらいは稼いでもらわないとな。」

はつきり言おう。

なんのために生まれ、なんのために生きているのかわからない。

合成食品中心の味気ない食事。

ぼそぼそした食感で香料くさい林檎風味の棒状栄養機能食品をもそもそと噛み締め、薬品くさく油っぽい栄養補給系飲料をずるずる飲み干し、濃縮還元系野菜風味のスープ風お湯をせっせと口元に運ぶ。

しなびた野菜屑や芋の欠片でも入っていたら万々歳だというのが悲しい。

微妙にギスギスした艦娘関係。

連携など夢のまた夢って感じ。

そそくさと胃袋らしき場所へ食べ物を納入し、さつさと入渠施設兼浴室から出て、目立たぬよう目立たぬよう息を潜めながら生きてゆく。

出る杭は打たれる。

そんな場所だった。

協調。

協調。

協調。

有りもしない幻想を抱いて、古い弾薬と魚雷を抱きながら任務に励む。

詰まらない繰り返しの日々でも、一条の明かりが差し込むことはある。

こんな私にも友達が出来た。

大人しい感じの子だけど気立てがいい。きつといいお嫁さんになれると思った。きちんとももの見える提督限定だけだ。

そんな日常が当たり前だと錯覚していた矢先。

よその鎮守府の支援任務に進発した第一艦隊が、壊滅的被害を受けて帰投した。敵艦隊の待ち伏せを喰らったのだとか。

作戦の情報が漏れていたのか、或いは暗号を解読されたのか、もしくは誰かが密通しているのか。

それとも……。

低速の軽空母が最初に開幕雷撃を浴びて、呆気なく轟沈。

軽巡洋艦一名も魚雷多数と戦艦級砲撃の双方を喰らって、程なく撃沈。

残った軽巡洋艦一名が殿軍を担当して駆逐艦たちが撤退。

追撃を受けて、駆逐艦二名が轟沈。

残った一名も報告直後に昏倒した。

それを見て、提督はチツと舌打ちした。

流石に艦娘全員の顔色が変わったけれど、彼は全然気づいた様子を見せなかった。

気づいても知らん顔をしたかもしれない。

私の所属する鎮守府は、この戦鬪らしきものすらなき一方的蹂躪劇の一戦で機能不全に陥った。

同じ艦隊に攻められたら、あつという間に陥落するだろう。

駆逐艦しかない鎮守府。

二艦隊に満たない鎮守府。

提督は荒れに荒れたけど、どうしようもないんじゃないかな？

それからの二カ月は思い出したくもない。

だが、やはり悪いことは出来ないらしい。

金銭面の横領が発覚して、提督は憲兵隊に拘束されて鎮守府から去っていった。私が所属した頃から調査が内密で行われていたのだと、提督の逮捕後に聞いた。

私は遠征を頑張ることにした。

他の任務はわからないからだ。

友達と一緒に任務をこなしてゆく。
彼女と一緒になら、困難も悪くない。

折角、現世に顕現出来たのだ。

幸い、新しい提督がその内艦娘数名と共に着任すると聞いている。
ならば、新しい指揮官が来るまでに資財を増やすことこそ得策だ。

次の提督がいい人だといいな。

授かった命を情熱という燃料で燃やし、生きていこう。

美しく散るその時まで。

CLXXXV : 俺は芋虫

兄貴が殺られたことを知ったのは、俺のフロイラインから渡された新聞の朝刊によつてのことだった。

そういやあ、兄貴たちからはずいぶん馬鹿にされたものだ。

薄のろで愚図でドジで間抜けで気弱で頓馬な愚弟だつてな。

バラバラになっていたのを、登山者たちが発見したと書かれていた。

潜入工作に失敗したんだらうなあ。

ちなみにだが、一番上の兄貴はめつた突きにされて殺られたらしい。

こつちもなんかしくじつたんだな。

その内俺もそういう残酷な最期を迎えるのかもしれない。

いずれにせよ、井頭家の男たちにふさわしい死に様だな。

俺は芋虫。

醜く蠢(うごめ)く、嫌らしく貪り喰らうだけの卑しき芋虫。

闇に隠れて生活をする存在。
ひねもす喰らい続けるだけ。

旧幕府軍遊撃隊として箱館戦争に参加した連中がいるけどよ、俺には逆立ちしたつてあんな真似なんざ出来ねえ。

てえした奴らだぜ。

クーデター起こした反政府軍に、真つ向から立ち向かったんだからな。

ああいうおそるべき胆力は、一体どこで身に付けられるもんなのかね？

俺の装備。

ジャージは防寒防暑耐弾防刃防水防風透湿性伸縮系素材で出来た国産品。

真夏日も真冬日もこれ一着で対応可能だ。

下着だが、シャツもトランクスも靴下も国産品。使い勝手がいいぜえ。

俺のフロイラインたちが買ってきてくれるのはいいんだが、着なれない内に新品に変わっているのがなんとなく気になる。

靴は鉄板入りの安全靴。

決闘の多い日も安心だ。

タオルは今治産の逸品。

財布と小銭入れは甲州印伝で、フロイラインたちが選んだ。

いつも持ち歩くボールペンもそうだ。

メモ帳も日本製で、主に他者の弱みを……おつとこれ以上はシークレットだ。

わけえ頃はあちこちの桃色作品に出演したもんだが、やらかし過ぎて業界から追放されちまった。

「思いつきりやつてくれ。」と言われ、本気にしたら「なにやつてんだてめえは！」てな扱いだ。

ねーちゃんたちは喜んでたのによ。

まさに若気のイタリアローマだな。

人生経験をかなり積ませて貰った。

ん？

鎮守府で用務員の募集？

へへっ、悪かねえ話だ。

こいつに応募でもするとうしよか。

この喜作様にふさわしい職場だといいがな。

「ご飯が出来ましたよ、ご主人様。」

「た、玉子焼きは私が作りました。」

「キサクツチー、一緒に食べよつ。」

前に壊し……おっと倒産した隅本製菓の受付をやっていた百々子が、旨そうな朝食を卓袱台（ちやぶだい）に載せ始める。

手伝うのは宏海とマリカの二人。

三人全員、俺のフロイラインだ。

どいつもこいつも美人で嬉しい。

元先輩や同僚だった会社員たち。

昔馴染みの元女優が会長秘書に転職しやがって、お情けに幹旋（あっせん）してくれ
た組織にいた宝物だ。

あいつに言いたいことは山ほどあるが。

課長まで昇進したから、よしとすつか。

あの会社は無駄に美人が多かったなあ。

何人か食い散らかして勿体無かったか？

ま、この三人が優秀過ぎたってことだ。

潰れちまった会社は元に戻れねえんだ。

株価の暴落で大騒ぎになっていたよな。

使途不明金はどこへ行っちまったかね？

あの女も今ではどうしていることやら。

その内どつかにマンションでも買うか。

中古で住みやすいお値打ち品な所をな。

くくく。

炊きたての飯綱（いいづな）町産の白米に信州味噌を使った馬鈴薯と玉葱の味噌汁。

手製の漬け物に玉子焼きに焼き魚。

こいつの実家は長野県北部にある農園だから、その縁で信州産のブツが比較的簡単に入手出来たらしい。

こないだはおやきっていう饅頭みたいなもんを食わせてもらったが、あれも割と旨かった。

女たちはこれから派遣の仕事に行くのだ。

なんでこのフロイラインたちは、つまらん俺なんかについてきたのかねえ。

ちつとばかし誉め称えたり、ちよつとしたもんを贈っただけだったのにな。

全員、後生大事に持っていやがる。

ボールペンとか装飾品なんかだが。

この部屋も六畳一間だったのによ。

よくわからん。

早い内に引越しをしようと思う。

毎晩可愛がつてはいるが、それも多少は関係しているのかね？

百々子の実家の農園で作られたとかいう林檎ジュースの味わいに似た甘酸っぱさを感じ、なんだかとおつてもむず痒くなる。

フロイラインたちがちらちらとさりげなく誘つてくるんだが、朝からはしたねえぞ。わざとらしい。

やらんからな。

今日はな、賭け事にエナジーチャージすんだよ。

溜め攻撃すんだからよ。

ちらちら見せるなよな。

悶々村々するだろうが。

俺の備中鍬でお前らの田畑を耕せてか。

こいつら、男を知らなかった頃に比べるとどんどんはしたなくなつてきていやがる。

俺の特殊な趣味嗜好を、理解しようとしてまでしやがつて。

なめんじゃねえ、なめるぞ。

まったく、困つたもんだぜ。

部屋は寒い、こいつらの欲は煮えたぎるように熱い。

やたら殺気だった競馬場へ行き、勘のよさそうな奴を見つけてそいつのおこぼれにあずかる。

くくく。

俺の口車にかかったらチョロいもんよ。

気のいい奴で、いろいろ教えてもらう。

ふん、あめえなあ。

ええとこのぼんか？

女連れで来るなあ、世の中なめてるな。

こういうところはよう、わびしい男が一人ぼっちで世のはかなさと孤独と自由をさみしく噛み締めつつひっそりこっそりと小遣い稼ぎを……なんだ、女もいささか多いじゃねえか。

俺のフロイライン並みにハクイスケがいたら声でもかけて持ち帰ろうかと思つたが、目の血走つた女ばかりだったのでやめといた。

あの女を見かけた気もするが、勘違いだと思ふ。

まあ、男も殆ど目が血走っていたが通常運転だ。

最終レース終了後に札を数えてみたが、そこそこ儲かっていた。

うひよひよ。

よしよし。

へそくりの大金も悪かねえが、目の前の小銭稼ぎは快感が走るぜ。

俺自身は根っからの博徒なのかね？

へへっ、それなりに食い扶持を稼がないとな。

奮発して、場内の食堂でカツカレーを食った。

意外とうめえ。

快活な美人が作っている。

ああいう女もいいよなあ。

なんかムラムラしてくる。

生ビールと黒生ビールのハーフ&ハーフ、フライ盛り合わせ、牛筋の煮込みにポテト

サラダを追加で頼んだ。

こぎれいな店なんて落ち着かねえから、こういう雑多な雰囲気の方がずっといい。昼

から呑む酒はうめえな。

ツインテールの娘と黒い短髪の娘と桃色っぽい色の髪の娘とが、仲よく牛筋の煮込み

を旨そうに食べていた。

賭け事をしなくても、食堂では食事が出来るんだな。

中学生かねえ。

発育はよさそうだが、ちと若すぎるな。

夕方。

駅前の立呑屋でホルモン焼きを食いつつポン酒をひっかけていたら、真つ黒なスーツを着た胡散臭い男から話しかけられた。

「ホーツホツホ。喜作さん。お兄さんたちの保険金受取人である貴方に会えて、今、私はとても幸運に恵まれたと思つていますよ。」

「なんだ、おめえは。」

「はい、私はほんのしがない正直且つ真つ当なセールスマンでして。」

名刺をすつと渡された。

保険会社の社員なのか。

へりくだつて喋つてはいるが、目が笑つていない。

こいつ、絶対だもんじゃねえな。

俺のペルソナが気をつけろと囁く。

魔羅様が魔力を高めながら笑つた。

こいつあ、ちつとばかしヤバいぜ。

書類を見せてもらう。

ばらばらとめくった。

うーん。

酔っぱらった頭じゃよくわからんなこれ。

脳内警報はガンガン鳴りまくっているな。

「お名前を書いていただくだけで、お兄さんたちお二人の保険金が貴方のモノになります。」

囁くように黒いセールスマンが言う。

なんかやべえ。

直感が働いた。

この手触りは……羊皮紙？

まさか……魔羅様が具現化しそうだ。

契約？

なんの？

これは一体……。

よしっ！

日本人お得意の先送り戦術を実行すべし！

「酔いが醒めたら、改めて読ませてもらうぜ。」

「わかりました。では後日。」

あつさり引き下がったので拍子抜けする。

一瞬目を放した隙に、奴は消えやがった。

なにもんだ、あいつは？

ホルモン焼きを一生懸命作っていた小学生から、追加の串を貰う。

気の効く、よく出来た少女だ。

この娘の親爺がまたいんげつな奴で、俺の腐れ縁系悪友でもある。

今もどこかで博打をしているのだろう。

別居中の女房への操でも立てているのか、女関係はきれいなのがまだ救いなのかもしれない。

たまに会って夜を共に過ごしているとか。

一度こいつの嫁さんに会ったことがある。

なんでこんな才媛の美人が、あんなバカ野郎様とくつついたのかと驚いたものだ。

思わず口説きそうになった位のいい女だった。

女に奴への未練がこれっぽっちも無かつたら、とつくに食っていたところだ。

出来るオンナは出来ないオトコに惚れるもんだ、とバカ野郎様の元担任が言っていたのを思い出す。

そういうもんかね。

酒にも女にも耽溺しないからまだマシなのか？

んで、時折俺がこの店に通っているって訳だ。

売上金貢献役兼用心棒ってか。

甘い菓子箱を土産に手渡す。

これでも喰らいやがれってな。

お高い羊羹だからよう噛んで食うんやで、と言ったら何故かバカ受けした。

「あんな。」

「ん？」

「ウチのお父はんとお母はんやけどな、一緒に暮らして欲しいとは思うけど、お父はんがダメ人間やからな。もうちよつと、どないかなったらええんやけどなあ。」

「そうか。」

「たまにお母はんが夜中にこつそりやつて来てちちくりおうとるけど、やつぱり好きおうとるんやないかとヤキモキするわ、ほんまもう。お母はんがやさしゆうするとお父はんが泣くんやで。女と男の關係って、ほんまようわからん。」

「ちちくりおうとる、つてお前なあ。」

「寝たふりせんと、せえへんけどな。」

「他のもんにはそんなこと言うなよ。」

「言わんわ。おっちゃんだけにやで。」

「なんでだ。」

「なんでかなあ。おっちゃんやったら、なんや安心出来るからかなあ。」

「そうか。」

「あんな。」

「なんだ。」

「ウチもお母はんみたいに、チチが大きいかなあ？」

「さあな。」

「おっちゃんは大きい方が好き？」

「大きい小さいは関係ないかな。」

「そっか。なら、どっちになっても安心やな。」

「なんでそんなことを聞くんだ。」

「嫌いな男にチチの話はせんで。」

「そうか。」

「そいでな、お母はんはお父はんのところへよばいに来る時、お手製の寿司を持ってきてくれるんや。」

「寿司、ねえ。」

「巻き寿司、バッテラ、玉子巻き寿司。どれもおいしいんやけど、まだ戻らん方がええゆうたせいか、こつそり朝帰りするんよなあ。」

「お、おう。」

「おつちゃんはそういう経験ある?」

「い、いや、ないなあ。そ、そろそろ帰るから、勘定を頼む。」

「はーい。せやせや、おつちゃん、今度せんざい食べに行こ。」

「ん? 好きなのか?」

「うん、めつちや好きやで。」

「そうか。なら、行こうか。」

「お誘いを待つとるで。」

「おう、腹一杯食べさせてやるからな。」

翌日。

人類の防衛線とかいう、鎮守府とやらへ面接に行く。

案外近場にあるもんだな。

寂れた漁港の建物を改装して使っているらしい。

エコってか。

古民家カフエみたいなもんか？

……違うか。

基地責任者の提督とかいう奴は太っちょ親爺で、俺と同類の小悪党めいたにおいがぷんぷんしやがる。

たぶん、こいつはこの艦娘たちを……。

けつ、俺の考えが当たっていたら、この指揮官は更迭されてもおかしくねえ筈だ。

なにか特殊な能力でも持っているのか？

或いはどっかに太い人脈でもあるのか？

もしそうだとしたら、ちつと厄介だな。

艦娘とかいうガキンチョたちはみんな生氣が全然無くて、色気もへつたくれもあつたもんじゃねえな。

活気のねえとこだな。

ダメダメだ、こりゃ。

怯えるなり、怒るなり、喚くなり、なんか命の炎が燃えてねえとこつちもムラツとしねえなあ。

きれいなだけの人形なんかや、こちとらは用なんざねえ。

オドオドビクビクしてんのも気に入らんなあ。

来るところ間違えたかな。

なんだか人が沢山いる。

どいつもこいつもしよぼくれてやがる。

……あんまり人のことは言えねえかな。

俺は最後か。

日の落ちた頃、面接が始まった。

提督とめちやくちや話が合った。

なんだこれ。

わかりますようわかりますようと、領き人形になった基地司令官。

奴の二重顎がぶるぶる震えている。

俺と相性がよすぎるだろ、こいつ。

まごうことなきチンピラだ。

きれいに着飾ってもわかる。

魂の根底が根腐れした奴だ。

もうどうにもならん小悪党。

そんな男でも提督なんだな。

下衆野郎なのに提督とはね。

もそつと有能な奴を探せよ。

妖精が見えますか？ と聞かれたが、それなんてファンタジーだ？

エルフとかそういうのか？

訳わかんねえな、こいつ。

見えます、と答えたら露骨にがっかりされた。

提督にイタズラしているちつせえぬいぐるみみたいな連中なら何名か見えるが、それは単なる気のせいだ。

手を振られたが、わからないふりをする。

氣づいたことに氣づかれないようにしねえとな。

見えねえ見えねえ俺には見えねえ。

厄介のにおいがぶんぶんしやがる。

特技の手拭い式防衛術について聞かれたので、いつも持つている黄色い今治産タオルで演武のさわりを披露する。

毎日の鍛錬が無限の精力の源なんだぜ。

師匠から習った技を舞う如くに見せる。

提督の隣にいた、死んだ目をしていた艦娘が生氣を取り戻したように見えた。

食い入るように見詰められて辟易する。

気のせいだ、気のせい。

全部全部が気のせいだ。

帰宅して、夕食に出来立てのアジフライを味わう。

アジのつみれが入った味噌おでんも実に旨かった。

翌々日。

どろどろと殺気だった競輪場へ行くと、一昨日会った黒いセールスマンがいた。なんでこんなとこにいやがる？

俺は今朝たまたま、ここに来ることを考えたつてのによ。

……まっ、いつか。

今度は書類を詳細にまんべんなく読み、名前を記入する。

普通の書類のようだ。

普通の紙の手触りだ。

先日見た内容と違う気がする。

……気のせいだよな？

「……一緒してもよろしいですか？」

「ああ、ちっともかまわないぜ。」

不気味な奴だが、なにか得られるもんがあるかもしれん。一緒に観戦した。

セールスマンはかつちりとした堅実な賭け方をしている。それを参考にしながら、俺はもう少し大胆に賭けてゆく。最後のレースになって、この男は儲けた分を全額賭けた。大穴狙いか。

意外だねえ。

同じことはしない。

賭け事に浪漫の持ち込みは禁止だ。

浪漫に転んだ奴らは皆火だるまだ。

俺の悪友なんぞ、常時火だるまだ。

浸るのは勝手だし、溺れるのも勝手にやってな。

結果、奴は全額すって、俺はちよっこし儲けた。

これならうめえもんも多少は食えるって寸法だ。

「おやおや、負けてしまいました。」

「なあ、なんで最後にあんな賭け方をしたんだ？」

「天秤ですよ。」

「はあ？」

「人生、勝ちすぎてはいかんです。こうして時折、勝ち負けの天秤を調整しているんです。」

何故か、周囲の親爺たちも皆頷いている。

お前ら、全員浪漫に賭けてすつたんだな。

負けたことを正当化したい気持ちは、わからんでもない。

換金するどけつこうな額になった。

たけえ万年筆だつて買えそうだけ。

気まぐれが働いて、セールスマンに掻き揚げ丼をおごる。無論、俺も食う。

衣がサクサクしていて、ツユも凝つていやがる。魚の下ごしらえも上手い。

やるな。

豚汁とモツ煮ときんぴらごぼうも追加だ。

揚げたてのコロッケも旨そうだったので、そいつも食った。

大人しげな女が作っていたが、この定食屋のメシもうめえ。

ああいう女を夜更けに歌わせたら、とてもいい歌声を聞かせてくれそうだ。

何日か経つて、鎮守府用務員の合格通知書が来た。

艦娘がわざわざ来たので驚く。

あの時の女だ。

思い詰めた顔なのが気になる。

宏海と同様の表情じゃねえか。

あいつも時たまそういう顔だ。

俺は情けになどほだされんぞ！

情状、俺は誰も救わんからな！

ウリイイイ！

俺は好き勝手に生きてやるぜ！

「私、喜作さんにお願ひがあるんです。」

「なんでえ、嬢ちゃん、藪から棒によ。」

「絶対、絶対、辞めないでくださいね。」

ギョツと手を握られる。

艦娘つてのは、えらく気安く男に触るんだな。

ん？

調べた内容とは違うぞ。

艦娘が気安く触るのは自分自身が……。

「ちよつと喜作さん、なにやっているんですか？」

ハツと気づくと、俺のフロイラインたちが帰宅してきたところだった。

百々子、宏海、マリカの三人全員いた。
やべえ。

女たちの背後にどす黒いもんが見える。

赤い夕陽を背景に女たちの炎が見えた。

ほむら、立つ！

俺のもたつた！

燃えてきたぜ！

今夜は眠れねえな！

俺は芋虫のごとくに身を縮こまらせた。

艦娘が凝視する部分を見せないように。

CLXXXVI : よくわかんねーよなー

こないだまでさー、ケンカばかりやってたんだよね。

ガツコーもさ、つまんねーことばかり言ってるしよ。

舎弟どもを引き連れ、汚物を消毒しながら一応ガツコーへ行く毎日。

あー、カノジョほしいよー。

あ？

親？

親父はアホな世紀末連中に正面きって覚悟完了して突撃し、英雄になって死んだ。

アホじゃ、アホ。

ケーサツがアホだから仕方ないのかね？

お袋はいつの間にか蒸発していた。

浮気していたあのおっさんと駆け落ちしたらしい。

これで四人目。

よくある話だ。

しんかいせーかん、つての？

そいつらが攻めてくる前から、そんな話はいっぱいあった。

暴力とエロいことしか頭にないアホウどものドタマをがち割つて、鉄のにおいが混じった血にまみれる日々。

そんなヒヤツハー生活は、唐突に終わりを告げた。

ちびこいぬいぐるみみたいなガキどもに囲まれた俺はスーツ姿のおっさんたちに捕まり、横須賀へ連行されたのだ。

なんだよ、那珂ちゃんのサインでもくれるのかよ？

違つた。

提督だ。

俺はいきなり契約書を書かされ、拇印を捺した。

そんなことより、きれいなねーちゃんたちがうろうろしているから、むらむらしてたまんねえや。

どつかそういう店に行きたいなあつて思つたら、とりあえず童貞のまま提督になつてくれと言われた。

ど、童貞ちやう……ええ、童貞ですよ、俺は童貞！　なにがあかんねんな！

なんかさー、いきなり提督つてのにさせられたんだけどさ。

俺、頭悪いよ。はつきり言うけど。

軍人さんつてさ、英語とかなんか外国語しゃべれてとにかくかしけーんだよな？

俺、ぜんぜんそんなんじやねーぞ。

あつ、そうだ。

軍人さんつて言つちやいけないんだつた。

軍属だっけ？

よくわかんねーよなー。

で、大本営つてなによ？

自衛隊の人が作つたつてのは聞いたけど。

けんぼーいはんじやねえの、それ？

ちよーほーきてきそちつて、なんじやい？

千葉の山奥でおっさんたちと修行みたいなことして、昔の映画に出てくる人みたいな
かつこーしてんだけどさ。

似合わねー。

マジ、似合わねー。

妖精つてのはファンタジーの定番だからさ、うん、わからねえでもないんだ。

艦娘ってなんだよ？

うわ、マジ、あの子たちが戦ってんのかよ？

俺たち、なんで戦わねえの？

俺たちだと、あつさりヤられる？

人間だと勝てねえから、彼女たちが戦うって理屈。

なんかブラックっぽいにおいがする。

鎮守府ってのもわかんねえ。

ま、俺はエリート様じゃねえから、海沿いのなんかそれなりに固そうなところに基地を築いている。

エリート様だと、煉瓦造りの明治維新みたいな建物でユーがにやってんのさ。

こっちは気の荒い漁師のあんちゃんやおっちゃんたちと話をしたり一緒に酒を呑んだり、地元のにいちやんたちの愚痴を聞いたり一緒に酒を呑んだり、この辺のおぼちやんたちの溜まり場にされたりミカンとかまんじゅうとかを貰ったりとなんかメチャクチャだ。

人間って、案外したたかだと思う。

で、謎だらけの妖精や艦娘たちとの鎮守府暮らしは、基本的に早朝からの書類作業に

始まり夜半前の書類作業に終わる。

四名の駆逐艦に二名の軽巡洋艦。

六名で一艦隊。

かなり恵まれていると言われた。

よそでは駆逐艦一名とか二名とかが当たり前だとか。

眼帯をしている軽巡洋艦とは初対面で意気投合した。

こいつ、バカだわ。それも剣術の。

俺もバカだが、刀の話は大好きだ。

他の艦娘たちが呆れて俺たちを見つめていたが、気にしない気にしない。

俺の刀？

さ、鞘なんか付けてないわい！

常に抜き身よ、抜き身。

斬ったことくらい……ないわ！

大淀つて書類作業がメチャクチャ上手い艦娘や明石つて工作がムチャクチャ得意な艦娘がいたら、鎮守府暮らしは格段に楽になるらしい。

同期のバカヤローが、なんかその件でえんえん愚痴を言った。

受話器を置いてもいいよな。

そいつのそこは駆逐艦二名と軽空母一名だけなのと、意外と近場なので助け合っている。

奴んとこの軽空母が作るメシはそりやあもう、うんまーい！ のだ。

うちの連中も習わせてはいるが、腕前はまだまだぜんぜん及ばない。

ちくせう。

ちくわ大明神の力さえ及ばないとはな。

私室でブーツとしながらエロいことを考えていたら、眼帯艦娘がよおつ、つて言いながら人の部屋へずかずか入り込んできた。

「オマエなー。」

「へっへー、いいじゃねーかよ。俺とお前の仲だろ。」

「まー、いいけどよー。」

「なんだ、隠しもしねえのか。」

「お前相手に隠してもしようがないだろ。それにとつくに知ってんだろ。」

「まあな。で、誰を想像してた？」

「オマエ。」

「俺？」

「そう。」

「マジ？」

「マジ。」

「へえ。」

「キミワリーとか、キモチワリーとか、そういうことは言わねえのか？」

「別に。男ってみんなそうなるんだろ？ 前の鎮守府はこんなもんじゃなかったしな

あ。あそこに比べたら、ここは天国さ。」

「そっか。」

「そうだ。」

「ま、飲めよ。」

「ジュースか。」

「天然果汁まじりけなしの高級品だぞ。今じゃ稀少品のひとつだ。」

「ん、確かに味が違うな。」

「だろ。」

「みんなにやらないのか？」

「この場にいたらやるよ。」

「なら話が早い。おーい。」

五名の艦娘が突如乱入した。

全員から揉みまくられる俺。

そこはらめえええええええええええ！

そんなことしちやらめええええ！

……あふん。

くっ、殺せ。

喧嘩まみれの日々がなんか遠いぜ。

あのギラギラした日々が懐かしい。

ま、彼女たちとの日々も悪くない。

CLXXXVII：霞ママの定食屋

林檎の収穫と雪掻きの同時進行が基本の、冬の凍えるような早朝。ストーブをガンガン炊いていくわよ！

みんな、朝定食を食べに来なさいっ！

今朝の内容はこれよっ！

◎地元産白米を使ったおにぎり（おかか入り）

◎コロッケ（馬鈴薯・合挽き）

◎蕪と大根の漬け物

◎豚汁（豚肉・玉葱・馬鈴薯・豆腐・蒟蒻・牛蒡）

◎鯖の煮付け

◎南瓜の煮物

◎玉子焼き

◎地元産林檎の生果汁水（作りたて）

◎お茶

ちなみに昼定食はコロツケがミンチカツ、南瓜の煮物がポテトサラダに変更よ。夜定食はミンチカツが豚カツになり、ポテトサラダがピリ辛麻婆豆腐に変更よ。

慌ただしい雰囲気の内。

ちつちやな定食屋は満席。

入れ替わり、立ち替わり。

客の妙な熱気こもる店内。

ムンムンムンムンて感じ。

癖だらけの移住者たちだ。

あたしが目当てなのよね。

ちよっこしげんなりする。

お金お金マニーマニーよ。

彼らはお金を下さる方々。

ありがたや、ありがたや。

そう思い込んで接客する。

売上げが増えたから嬉しくてたまらないの！ とでも思わなきや、とてもじゃない

けどやっついてられない。

営業時間中は大抵混雑している。

これがいつまでも続く訳ないわ。

まあ、周りの店も連動しているから、あぶれた人たちはそつちで食べている。

小さな商店街はにわか景気で大わらわだ。

和菓子屋と洋菓子屋とパン屋で連動企画をしたら、めちやめちや売れる事態になって
即完売だ。

おにぎりなんて、握る端から売れてゆく。

いいこと……なのよね、たぶん。

食べ終わっても、客がこつちをちらちら見る視線が絶えない。

つつい、あたしは魂から叫んだ。

「あんたら、ちんたらもたもとと喰ってんじやないわよ！ 食べ終わったなら、とつとと

出社しなさい！」

「「イエス！ マイママムツ！」」

喧騒が去り、後片付けに移行する。

「ほんと、ここの客、バカばっか。」

「「まあまあ。」」

「まったく、どうしようもないわ。」

「あんたは私たちの自慢の娘だよ。」

「なに言ってるの、お袋！　あたしは艦娘になったけど、男に戻れなかったから仕方なくこの姿で生きていくしかないのっ！　中身はおっさん！　そう言ってるのに、なんでみんな気にしないの？」

「人は外見に釣られるものだからさ。父さんはね、お前が小さな頃によく、『大きくなったら、パパと結婚する！』って言っていたことをしつかり覚えてるよ。どうだい、今夜一緒に風呂呂に入るかい？」

「親爺のドアホウ！　クズ！　変態！　記憶を新たに捏造すんな！」

「嗚呼、娘の罵倒が心地いい。」

「あたしが娘じゃないって、二人ともとつくに知っているでしょ！」

「えええ。」

「えええ、じゃないってのっ！」

「霞は照れ屋さんだねえ。」

あたしの名前は霞。

いや、これは本名じゃなくて艦娘時代の名前だけど。

親が県と結託して、霞に改名しやがった。

ちくせう、あたしは両親にハメられたよ！

県の奴らも一体なにを考えているのっ!?

ぜいぜい。

えーっと。

あたしは小さな定食屋で飯を作っている、元艦娘だ。

出戻りよ、出戻り。

ちくせう、大本営の奴らめ、まんまと騙しやがって。

艦娘になつても男に戻れると、真顔で約束したのに。

よくも騙したなあ！

とある支援任務で大破し、艦装が扱えなくなつたあたしは退役するしかなかつた。で、そこで問題が起きた。

融合率が高くなり過ぎていて、あたしは男に戻れなくなつていたのだ。

あれ、適合率だっけ？

ま、それは兎も角として。

人間時代よりちよつと大きめのナニをぶら下げたままだったのも、よくなかつたのかもしれない。

轟沈しなくてよかつたねと言われたが、生き恥をさらす結果になつた。

中途半端な戦果ばかりだったあたしは、そこそこのお金を貰つて追い出された。

更に悪いことに、とぼとぼと失意の内に家に戻つたあたしを両親は大歓迎した。

えっ？

そのどろこが悪いことか？

そうよね。

キモオタデブのアラサーだった息子が一大決心して艦娘になった挙げ句、傷物になつてしかも女の子の姿で家に戻つてきた。

普通なら大変な事態になると思うんだけど、うちの場合は別の意味で大変な状況に陥つた。

元艦娘の働く定食屋、としてうちが有名になつてしまつたのよ。

県の地域情報誌の第一特集の一番に掲載されてからは、大忙し。

あの時は失意の最中だったから、ぼんやりしながらなんか適当に質問に答えたのは覚えてる。

郵送されてきた雑誌の記事を読んで、あたしはひっくり返つてしまつた。

こんなこと、言つてないわよ！

……言つてないわよね。

記者訪問時に同席していた両親に聞くと、驚愕の事実が判明した。あたしは記者に向かつて、ずいぶんと健気なことを言つたらしい。

なつ、なんだつてーっ！

……記憶にございません。

おじゃブーツ！

なんてこった！

いっちばーん！ が口癖の子は今頃どうしているだろうかしら？

と、現実逃避してみる。

近場にそういつた店が無いのも幸いしたといふかなんというか。

山間部のちっちゃな町にある小さな定食屋は、何故かあちこちから人が訪れる店へと変貌した。

聖地扱いする人さえいる。

あたしを拝むんじゃない！

あたしはご本尊様じゃないわよ！

罵ってください、つて言うバカは序の口。

踏んでください、つて言うバカまでいる。

しかも、本物の艦娘までうちへ客として来る有り様だ。

オーマイガッ！

なんてこった！

中身がおっさんだつて正直に言っているのに、人が大勢訪れる。

本来は喜ばしく思わなければならぬことだと、分かっている。理屈では、ね。

だけど、ねえ。

なんか、ねえ。

もしかして、来る人みんな変態なの？

まさか、罵倒されたい人が沢山いる？

ふふ、こわいわ。

しかも、町の南側にいつの間にか基地が出来たそうだ！

艦娘の基地が！

なんてこった！

「聞いてないわよ、そんな話は！」

「だって、聞かれなかったもの。」

両親がのほほんとしていて困惑する件。

それと、喋り方がどんどん女の子化してきている。

不安は増すばかり。

外見だけでなく、中身もいつか女の子になっちゃうのだろうか？

砂糖、香辛料、素敵なもの。

女の子はなんで出来ている？

内面は外面に引つ張られる？

近頃、霞ママと呼ばれ始めた。

ママじゃないわ、おっさんよ。

あーもーっ、うっさいわねっ！

ええい、おにぎりでも喰らえ！

おかか入り梅干し入りの刹那五月雨撃ち！

『駆逐艦崇拜会』副会長の万江鹿が、眼鏡を光らせながらやって来た。

こいつは地元大手の会社で、けっこういい給金を貰っている鬼畜様だ。
ピカピカってか。

あれ、どーやってんだろーな。

会長をやってくれたら、こっちはほんの少し楽になるのになあ。

手土産に、名古屋名物のカエルまんじゅうとういろを貰った。

こいつ、ちっちゃい子には紳士的なんだよなあ。

まあ、あたしも人間時代は同類だったんだけど。

ほんのすぐ最近まで、同病相憐れむだったのに。

なんであたしは、こんな姿のままなのだろうか？

「麗しの会長にして素敵極まる会長の霞ママ様。哀れな下僕たる私めに、一杯の掛け蕎麦とおにぎりをお願いいたします。」

「あいよ。」

おにぎりを作る手を、ギラギラねつとりした視線で見つめる万江鹿。

オマケで玉子焼きと漬け物を添える。

慈しむような目付きでかぶり付く男。

あたしは艦娘になる以前、艦娘の中でも駆逐艦に特化して崇拜する会の会長をしていた。

艦娘になる直前、会長を辞任した。

今は副会長含む会員全員から懇願されて、終生会長を致し方なく務めている。

あのさあ、今のあたしは艦娘でも人間でもない半端者の混ざり者なんだけど。

寿命すらろくにわからない存在なんだけど、少しくらいは配慮してくれない？

邪神崇拜も同時にやっていたけど、あれが悪かったのか？ 嗚呼、ニヤル様！

「会長直々に茹でていただいた蕎麦とその愛らしいお手製のおにぎりを食べる事が出来て、私は本当に果報者です。」

「ふーん、最近、あんたは巨乳の姉ちゃんたちと付き合っているって噂を聞くけど。あつ

ちの方がいいんじゃないの？」

「な、な、なをおっしやられるんですか、会長！ 私の信心深さは先刻ご承知の筈ではありませんか！ 彼女たちは、延々私に付きまどっているだけです！ 私は霞ママ様の敬虔なる信徒です！ 信じてください！」

「なんとなく悪の首領と幹部との会話がする件。」

「気にされたら負けですわ、と言っておきます。」

「来客の変態率が急上昇して、堅気の客足が減つてんだよ。」

「いいではありませんか。四つもの県庁所在地から人が訪れるのですから。」

「聖地じゃねえぞ、ここは。」

「聖地なんですよ、ここは。」

「お前が余計な宣伝をしてくれたお陰で、お祭り騒ぎになつたりすんだぞ。」

「くくく。それこそが会長の巧みな計算通りではないのですか、諸葛亮殿？」

「折角考えた複数の献策が主君から散々蹴られた上に、主君の死後は激務で過労死しろつてか？ ええ加減にせえよ、こちら。」

「我々は常に、生き神様の会長のために身命を賭しています。これは紛れもない事実です。」

「万江鹿。」

「はいっ！」

「あたしがこないだ試着したスク水は、幾らで売れた？」

「はい、あれは闇市にて二五万で……はっ！」

「語るに落ちたな、万江鹿。」

「くっ、これが孔明の罫!？」

「あたしの分け前はお幾らだい？」

「はい、半分で如何でしょうか？」

「ロクヨンで。」

「ゲーム機ですか？」

「誰がボケをかませと言ったあ！」

「痛い！ 痛い！ でも嬉しい！」

「反省したか、このド変態野郎！」

「しました！ しました！ ところでですね、会長。」

「なに？」

「センチメン●ルグラフィ●イという、登場人物たちの美麗なイラストレーションで知られるゲームはご存じですか？」

「あれはサ●ーンのゲームだから、ロクヨンは関係ないじゃない！ しかも何股かけて

んのよ、あの主人公はっ！ 暗黒太極拳なんて知らないわよ！」

「よ、よくご存じじゃないですか。」

「喰らえっ、卍固め！」

「スクール●イズツ！」

「逝くがいい、誠よ！」

「私は誠と違います！」

「似たようなもんでしょ！」

「全然似ていませんから！」

「竜巻旋風脚！」

「アイエエエ！」

南無三。

爆散。

悪は滅した。

万江鹿の顔は、なにかをやり遂げた漢の容貌に変化していた。つたく、ハアハアしながら奇妙な要望を出すんじゃないわよ。ま、小遣い稼ぎにはなるわね。

疲れた。

客から貰った林檎を擦って、生果汁水にでもして飲むか。

林檎が多すぎて、困っちゃうな。

四箱分もあつて、食べきれんわ。

あゝあ、店を休んで、函館辺りにでも観光に行きたいよなあ。

夜行特急列車の日本海が復活するらしいから、それに乗るか。

青森まで乗り換え無しで行けるから、ごろごろしつっ行ける。

あたしの同姿艦がいるのよね、確か函館鎮守府には。

鎮守府の食堂は、元艦娘でも利用出来るのかしらね？

あそこのご飯は絶品と聞くけど……。

事務局に今度問い合わせてみよつか。

引き戸の開く音がする。

あつ、閉めてなかった。

「あの……。」

「いらつしやいませ、つて言いたいところだけど、今は時間外よ。お昼前頃に再度来てちよ
うだい。お茶なら出すし、林檎の生果汁水くらいなら作つてあげるから飲んでく？」

林檎は売るほどあるから。おにぎりはダメよ、さつき食べ尽くされたから。今しがた、米

を磨いだけばかりなの。スジ肉と大根の煮物はことこと煮ないといけないから、まだ食べられないわ。あつ、そうだ、カエルまんじゅうをあげる。貰い物だけどね。」

お茶と共に饅頭を出す。

さあ、お食べなさいな。

もきゆもきゆと食べる女の子。

艦娘？

駆逐艦？

見たことない子ね。

赤茶の意思が強そうな瞳に、先端を縛った長く艶やかな黒髪。

黒いブレザーに、紅いネクタイをきつちり着こなした女の子。

何型かしら？

なんとはなしに強者っぽい感じ。

不意に鎮守府の面々を思い出す。

みんな、今も生きているかしら？

あの提督の采配じゃ怪しいけど。

食べ終わって、はつとした顔の女の子。

どうやら、なにか思い出したみたいね。

林檎を擦ろうかしら。

これがホントのスローライフ。

なんちて。

「ああ、林檎の生果汁水を作るわね。」

「あ、あの、ち、違うんです、提督。」

ん？

なにかおかしい。

提督？

誰が？

辺りを見回した。

「提督なんて、どこにもいないわよ。」

なに言ってるんだろ、この子？

万江鹿が帰った後、店内にはあたしと彼女しかいない。

幽霊でもいるなら別の話だけど。

……なんだか猛烈に厭な予感がする。

彼女がじつとあたしを見つめていた。

頬が赤く染まっているかにも見える。

気のせいだ。

気のせいだ。

そうに決まっている。

……。

えっ？

えっ？

まさか。

そんな。

そして彼女は可愛らしい唇を開いた。

CLXXXVIII：愛は赤く燃える炎

冬の函館駅舎前。

夕方五時頃には辺り一面真っ暗だ。

照明がぼつりぼつりと灯っている。

雪の降る中、一人の金髪系若者が震えつつ一二弦のアコースティックギターを弾きながら歌っている。

たまに突風になり、人々は襟を立てつつ彼の前を黙々と通り過ぎていった。

青年の名は翔。

佐竹翔。

おひねり用に置いた昔の鉢（ブリキ）製お菓子箱には時折雪が入るばかりで、貨幣はほんの数枚きり。

もしかして、最初に歌った●オカードのある出張宿泊施設バンザイ曲が少々不味かったのでしょうか？

テレフォンカードや図書カードの方が、内容的によかっただろうか？

五稜郭近くの繁華街は深海棲艦侵攻時に壊滅的被害を受け、その後もかなり酷い有り様だ。

穂素徒倶楽部『横濱横須賀』に勤める彼の店も、現在進行形で経営建て直しの真っ最中だ。

この六カ月程は安定した経営状況で、のんしやらんなぼやん残念イケメン王子の翔の経済状況もわりかし悪くなかった。

そこそこの懐具合と一目惚れして購入した旧車の自動二輪車の復元修理が重なって、翔のエンゲル係数は極めて悪化する。

單車屋の女性店主はかなり勉強してくれたのだが、想定以上の手間暇と経費とで雪だるま式に費用が増加の一途を辿った。

それでも、翔が店で固定客をある程度掴んで働けていたならば、費用の心配をそんなにしなくても済んだであっただろう。

だが、人のよい翔は極力女性客に無駄金を使わせないように心掛けていたから、どちらかというトホスト失格に近いのだ。

それでも盛衰厳しきホストの世界で翔がなんとかやれているのは、翔の持つ妙な人徳或いは陰徳のお陰かもしれなかった。

今のうちに改装する。

五日間で突貫工事だ。

師走になって、急な発表が行われた。

それは正に青天の霹靂（へきれき）。

それが店の所有者の決定なのだった。

行き当たりばったりには見えぬ。

それでもやれるのは、才能だろうか？

年末稼ぐためにはギリギリの日程だ。

いきなり店は休業することになった。

無論、所属するホストたちも休みだ。

つまり、翔はいきなり財政が破綻寸前にまで落ち込んだ。

何故ならば、店内で食費を浮かせられなくなったからだ。

無駄なまでに品揃え豊富な非常食群。

店長によると災害対策ということだ。

腹がポツティチエリな店長の間食用。

そのようにホストたちは噂している。

客前で腹を鳴らさないようにするため、小腹が空いたら誰でも何時でも食べてよい食品。

勿論一番多く食べているのは店長だ。やたら固い菓子を好むので、苦手なホストもいる。

翔は歯が頑丈なのと固い菓子が好きなことから、問題は一才無い。

あの、常備されている乾パン。

即席麺各種。

シリアルバー型栄養調整食品各種。

グラノーラバー。

エナジードリンク。

焼き菓子各種。

一口羊羹複数種。

香川県善通寺市は熊岡菓子店の石パン。

白杵(うすき)せんべい。

瓦せんべい。

即席味噌汁。

そばほうる。

上野製菓のかたやき。

伊賀菓庵山本のかた焼。

貧乏時代にもやし炒めで散々凌いできた彼ではあるが、またもや似た状況に陥った。だから、翔は学生時代にホノルルで買ったアコースティックギターを路上で弾くことにした。

久々に木製ケースから取り出して、いとおしそうに調弦する。

複弦なので調整は煩わしく、首の反りも心配だったが特に問題は見当たらない。

首の指板も大丈夫そうだ。

元々の作りがかなりよいのだろう。

首への負担を減少させるために、全弦半音階下げである。

やさしい音色の弦楽器。

手入れが大変面倒な品だが、翔はかなり気に入っている。

好事家垂涎（すいぜん）の的となり得る、美しき音色を放つ逸品を大剣の如く背負って寒空の下を鉄騎で走った。

紅い単車は滑らかに走る。

大切な主を運ぶ馬の如く。

本日の調子は正に絶好調。

どうやら、ご機嫌らしい。

俺の手で斬り裂いて

俺の手で握り締め

俺の手で作り上げる

それは俺

俺のキングダムだぜ

青い

青い

永遠に青い

俺のための

キングダム

お前と一緒の

キングダム

太陽

太陽

太陽だけが知っている

青春の歌を熱唱する彼。

足早に通リ過ぎる人々。

室内外の気温差の如く。

正に絶不調な出だしだ。

滑りっぱなしとも言ふ。

道に迷っているばかりの歌詞に苦笑し、酔狂人が極稀に小額硬貨を投下する。

両手がかじかんできた。

そろそろ限界が近づく。

ならば。

あれだ。

必殺の定番曲を弾こう。

それで皆の気を惹こう。

キツと顔を引き締め、彼はイーグルスの名曲を情感込めて奏で始めた。

昔ハワイに行った時、若い女性が歌っていて感激したのを覚えている。

せつせつと歌い始めた。

せつない雰囲気か辺りを覆う。

足を停める人が何人も現れた。

青春の思い出。

懐かしき日々。

人々の顔は様々だ。

チカチカツと、彼の愛車の前照灯が首肯するかのように光ってみえた。

サビは情熱的。

翔は熱唱した。

演奏が終わる。

喝采喝采喝采。

おひねりが鍼の箱に投げ入れられた。

小額硬貨ばかりだが、塵も積もれば山となる。

美人や美少女を何名も引き連れた、冴えないおっさんが桐の硬貨を投下した。

幾ばくかの金はこうして得られた。

雪を掻き出して、複数の小銭を着なれた羽毛服のポケット内に落とし込んだ。

これだけあれば一週間は凌げるな。

コンビニエンスストアで、缶入りの麦焦がし珈琲ともやしを買って帰ろうか。

彼はそう思った。

これでまた生き延びられると喜ぶ。

「なにをしておるのだ、地上人よ。」

四〇代と思われる偉丈夫が、背後から若者に向かって声をかけた。

振り向く金髪青年。

知り合いの中年だ。

荷物を持っていることから、おいちゃんはなにか買い出しに行ったことが推測される。

「あつ、ルフトさん。」

「こんなところでそんなことをしておつては風邪を引くぞ、聖戦士殿。」

「ははは、ちよつと金策をば。」

「震えた手では充分弾けまい。」

「ええ、そろそろ帰ろうかと。」

「またもやし炒めかね。」

「またもやし炒めです。」

「よかろう、ついて来るがいい。」

「え、でも、あのこの間も……。」

「お主一人くらいなら問題ない。」

「よろしいんですか？」

「善だよ。私は善きことをしている。」

「じゃ、じゃあ、僕の『キントキ』に乗ってください。その方が早いです。」

「うむ、そうさせてもらおうか。」

翔は『キントキ』の原動機を始動させ、暖気運転を始めた。

商品名はマイコレッタ。

一九六一年ドイツ製スクーター。

半世紀以上の時を経た機械の馬。

二五〇CCの二人乗りのマシン。

一三・五馬力の単車。

無骨な形状の紅い自動二輪車だ。

内燃機関の覆いには、右に四つ左に三つ丸い穴が開いている。

ブチ穴ではない。

強制空冷二サイクル短気筒。

セルフスターターで足動四段。

全長二メートルで重量一三七キロ。

ハインケルのツーリストも候補だったが、その紅い色と形状に一目惚れしたのも彼が

選んだ理由のひとつだ。

この旧いスクーターを展示品として置いていた單車屋は、買うのなら電装系を日本製に換装すると提案した。

その主は若い娘。

少女にも見える。

彼女の名は悠里。

銀灰色の髪した美少女が振りまく笑顔を、翔は想像する。

彼女は実に情熱的に修理へと取り組む、蕎麦好き女性だ。

最終的に、稀少車であることが購入への決定打となった。

復元修理におおよそ半年かけられた、汗と努力の結晶だ。

ずいぶんと親切な人だよなあ、とホストらしくない思考をする翔。

ホストを演ずるには善良過ぎる青年。

先輩たちの引き立て役で糊口を凌ぐ若者。

皆が気にかけてくれるから生きてゆける。

この旧きマイコレッタはたまに雑誌の表紙を飾ったり、取材を受けたりする。

悠里が大抵窓口だ。

雰囲気ある自動二輪車なのだ、これは。

日常的に、翔の要求に応えてよく走る。

たまに不機嫌になった如く不調となる。

気分屋なのだろう、と彼は考えていた。

それを口実に悠里さんにも会えるしな。

付き合っている訳でもないが気が合う。

彼らはつまり、そういった関係なのだ。

ルフト氏の手荷物を紺色の頑丈な真田紐で荷台に素早くくくりつけ、両者ともに防護帽をしつかりとかぶった。

準備万端。

覚悟完了。

何故防護帽が二個あるのかというのと翔の他に悠里がたまに使うからで、特に彼女が絶対必要だと強く主張した。

翔は休日に時折悠里と出掛けているので、特に問題は感じていない。天然残念イケメンの本領発揮でもあるが。

木製ケースに入れたギターはアラフォーのおっちゃんに背負ってもらい、若き戦士は自動二輪車を発進させた。

足元に絡みつく白い雪を蹴って。

二五〇CCの原動機が咆哮する。
「シヨウ、発進する！」

彼の肩先には赤い髪の妖精。

彼の頭をやさしく抱える娘。

焦がれて。

焦がれて。

それでも愛を伝えきれない。

見て。

見て。

あたしを見て。

あたしだけを見て。

届かぬ声。

届かぬ思い。

愛は深く重く強く。

紅く古いスクーターが、駅前市場を右手にしながら走る。
細っこい青年の後ろにがっちりしたおっさんが抱きつく。

それを見て、ウホツと喜ぶ男たちがいた。それを見て、ウハツと悦ぶ女たちがいた。二人の預かり知らぬところで妄想流れる。腐った世の中に生きるなら腐るしかない。彼ら彼女らはその思想を体現する者たち。腐つてやがる。とても似合い過ぎなんだ。

やがて辿り着いたは『エル・フィノ』。

ルフト氏が経営する中世欧風料理店だ。

至れり尽くせりの内容と良心的な価格。

故に人気の高い店だ。

たまに異世界風の姿をした者たちが訪れるという。

妻に浮気されて逃げられ、娘はどこぞの男と駆け落ちしてしまっているが、それでもくじけずにルフト氏は今宵も包丁を振るいフライパンを振るう。

「オーラ・コンバーターの調子あまりよくないのう。明日、トルストールにでも見てもらうとするか。」

なにやら奇妙な形状の機械をいじっていたルフト氏はその操作継続を断念し、鑄鉄製

ストーブに薪をくべ始めた。

「ヒトハチマルマル。電気系統が弱いあの子同様、コンバターは叩けば直るんじゃないですか？ お帰りなさい、ルフトさん。」

「うむ、今帰った。叩くと壊れるかもしれないから、そのようなことはせずともよいぞ。では、料理の準備を始めようか。キリエ。」

住居部分である二階から、一名の美女が降りてきた。肩の辺りで髪を切り揃えた、知的雰囲気的眼鏡美人。

柔和な微笑みを浮かべている。

若者はきれいだなと見とれた。

彼女は青年を見た途端、目を見開いて硬直する。

「初めまして、翔です。」

またおやつさん、困っている子を保護したな。

妻子が家を出ていっても、誰かしら店にいる。

「あ、あの、は、初めまして、司令。キリエと申します。」

司令とは誰のことだ？

いや、そもそも司令ってなんだ？

翔は混乱した。

部屋が徐々に温もってくる。

彼女の頬が段々赤くなってきた。

ルフト氏は淡々と料理の用意をし始めた。

煮込み料理か？

「ご、ご命令を、司令。さ、さ、早くご命令を！」

「えっ？ えっ？ あの？ その？」

「司令は感動的に純粹なんですわね！」

「は、はは、きれいな方から可愛らしく言われると、胸がドキドキしますよ。」

「シヨ、シヨウさんがそう言ってくれるなら、ちゃんとやるしかないですね。」

真つ赤な顔で言い募る娘。

困惑する青年。

ことごとく先手を打たれている。

どうした、シヨウ！

その夜。

翔はアコギを演奏しながら、店内で来生たかおメドレーを歌った。

普通に歌えば、彼はかなり上手いのだ。独自の曲でなければの話。

うっとりした顔のキリエがじつと熱い眼差しで青年を眺めている。訪れた客の反応もいい。

オカン気質のルフト氏の視線が、やさしく若者たちへと注がれた。

外は寒い。

だが。

暖かなものを感じながら、シヨウは愛の唄を歌った。

キリエとガンを飛ばしあう小さな娘に気づかぬまま。

貴女が本気だったら、あたしだって！

客の要望に応え、翔は坂田晃一氏の作曲した名曲を演奏する。

遙かに想い、描くセカイを。

盛り上がる箱庭。

ちいさな。

ちいさな。

ちいさな希望の欠片。

春はまだまだ遠い。

紅い単車は前照灯をチカチカツと瞬時光らせ、また何事も無かったかのように沈黙した。

愛は赤く燃える炎。

CLXXXIX：氷点下の青い空の下

先日のことだ。

どんどん衰えゆく東京で仕事を続けてきたが、とうとう私たちは長期休暇を言い渡された。

会社そのものが、そろそろ危ないらしい。

客がこっそり減ってしまったためなのか？

人口が減りすぎて都市機能が弱体化中だ。

疎開者は年々増加の傾向で減る気配無し。

取引先のひとつだった外資系企業は大幅な解雇を実施して、あちこちから非難されていた。

馴染みだった二軒のコンビニエンスストアはとくに閉まってしまい、近所にちよつとした商店など一切無い都会のアスファルトジャングルでは物資窮乏が如実な案件と化している。

『都会の孤島』は洒落にならない、深刻な問題だ。

昼食難民などざらで、弁当屋に頼むのも一苦労だ。

携帯糧食やシリアルバーやグラノーラバーや羊羹や即席麺や栄養飲料水などの買い置きを忘れると、けっこう悲惨な事態に陥りやすい。

暴動やデモはかなり減つたが治安は悪く、夜間は自警団や装甲服を着た物々しい連中が、時折怪しげな人々を囲んで小突き回している。

世紀末の風景だ。

駅舎構内のキオスクは鉄格子付きの小型要塞化し、頑丈で小さな窓越しの対面式で販売するのが主流になりつつある。

店内で自由に見て選ぶ時代は終わった。

いや。

平和になって物資が多く供給されるようになったら、この現状も改善されるのだろう。

たぶん。

一時戦前の数倍の値段にまで跳ね上がった商品もあつたが、艦娘の努力、企業努力、政府援助金などによって倍未満に抑えられている商品が大半だ。

但し、趣味嗜好品は除く。

煙草がいい例だ。

一箱一〇〇〇円以上が当たり前。

『シケモク』さえ復活してしまった。

大怪盗のアニメーション作品の一期で見られるような風景が、必要に迫られて復活したとも言うのか。

誰かが捨てて短くなった煙草に爪楊枝を刺し、いそいそすばすばと吸う。

非喫煙者たちの白い目もなんのその。

吸わない者と吸う者との意識格差は、日本海溝並に深い。

シケモクをいらいらしながらもくもくと吸う彼らに、感染症をおそれる気持ちはどうやら無いようだ。

シンガポール並に罰金強化しようという話さえある程、喫煙者への風向きは現在進行形で非常に悪い。

通勤に使っている、郊外の駅舎。

それなりの商業施設でもあった。

駅ビルがそこそこの規模だった。

今は昔の話になりつつあったが。

駅前商店街はとっくの前に壊滅し、その原因となった郊外型大型商業施設は逃げるように閉店していた。

店長や幹部たちは酷い目に逢ったみたいだ。

彼らが主犯でもないのに酷いとぼつちりだ。

幸い、生き残ったり復活したりした店舗がちらほらあった。

菓子屋とパン屋と文具店と小さなスーパーがやっとこさ営業している。

後はスナックとラーメン屋と定食屋が何軒か残って細々とやっている。

駅の長椅子には、特に用も無いのにずっと座っている人も少なくない。

撤去してしまった駅舎もあるが、ここはまだその結論に至っていない。

大型駅舎の待合室も、終日常駐する人々の問題がある。

構内に複数あった飲食店はどうに大半が店を畳んでしまい、今では煮しめたような店

主のいる立ち食い蕎麦の店だけがひっそり営業されている有り様だ。

ポツリポツリと人が立ち寄っている風景には、どこかうら寂しいものが見える。

賃貸契約型店舗は、貸店舗の紙が変色する事態になつてもそのままのだった。

そんな駅から幾つか離れた無人駅舎の改札を抜けると、そこは海に近い場所だ。

もつと早くに来たらよかった。

忙しい日常生活にかまけて、どこへ出かけるでも無い多忙な日々が続いていた。

あの忙しさはなんだっただのだろう？

結果は、少しの収入と多めの時間。

会社が生き残れるかどうかはわからない。

ここはおそらく、避暑地のような場所だったのだろう。

邸宅と防風林。

何年か手入れされなくなっている内に誰かが勝手に住み、そしてその誰かもいなくなる。

朽ち果てるに任せた家屋が海沿いに幾つもあつた。

ここへ戻ってくる人はいるのであろうか？

再びここが栄えることはあるのだろうか？

砂浜はきれいだつた。

ゴミが浮かんでいることもなく、ただただ波が寄せては返すだけだ。

聞こえるのは潮騒ばかり。

流された沢山の涙もため息も、この波がさらっていったのだろうか？

たまに海鳥がやって来て、なにやら会話している。

その内容を是非知りたいものだ。

かすかに遠くから、発砲音がしてきた。

海上自衛隊か？

少し歩くと遠くに看板が見えた。

私の眼では内容までわからない。

近場に鎮守府があるのだろうか。

家紋のような紋章が確認出来る。

あの発砲音は艦娘によるものらしいな。

「なにやってんのよ。」

振り向くと、気の強そうな娘が私を睨んでいた。

きれいな顔立ちをしている。

「海を見ていたんだ。」

「ここから先は、一般人立ち入り禁止区域よ。早く立ち去った方がいいわ。」

「そうか、それは残念だ。すぐ立ち去るとしよう。」

海はまだまだ平和じゃない、ってこったな。

すると……彼女は艦娘か？

平日の日に中学生服を着た少女、か。

先ず、間違いないだろう。

平和のために戦う勇ましき戦乙女か。

気を抜いた為なのか、腹が、減った。

ぐうう。

「なによ、お腹空かせているの？」

「あ、ああ、聞き苦しくてすまないね。」

「別に、全然気にしないわ。生理現象ですもの。」

「それじゃ、失礼してどこかへ食べに行くかな。」

「待ちなさい。」

「どうしたの？」

「ほら、少し固くなりかけているけど、今朝握ったばかりだから。」

そう言つて、少女は笹の皮に包んだ塩むすびを差し出してきた。

三個ある。

その隣にはお新香。

これはよい布陣だ。

「いいのかい？」

「独りつきりでもそもそ食べるよりは、余程いいわ。」

「ではお言葉に甘えて、一個いただこうかな。」

「二個でもいいわよ。」

「それじゃ、君の栄養が足りない。」

「戻つてからうどんか蕎麦でも茹でるし、心配しないで。」

砂浜に並んで腰かけた。

彼女は私のすぐそばだ。

気にしない子なのかな？

やや小ぶりの握り飯に早速かぶりつく。

程よく握られていて、丁度いい塩加減。

絶妙な旨さだ。

お新香も浸かり具合がいい。

ちらちらと、横目で彼女が私に視線を向ける。

「これはとても旨いね。」

「そ、そう？ あ、ありがとう。」

「久々においしい握り飯を食べたよ。」

「あの、ちよつといいかしら？」

「どうかしたのかい？」

「今ね、うちの鎮守府には提督がないの。」

「そうか、それは大変だろう。」

「ちよつと見学に来てみない？」

「責任者のいない基地へ、勝手にお邪魔するのはよくないことだろう。」

「たぶん、誰も怒らないわ。いいえ、むしろ歓迎されるかもしれない。」

「えっ、それはどういう……。」

「いいから、立って。がんがん行くわよ。」

まあ、どういう腹積もりかは知らないが、折角見学させてくれるというのだ。

見に行ってみるのも悪くない。

ぐいぐい引つ張る彼女に連れられ、私は砂浜を歩き出した。

氷点下の青い空の下。

CXC：七人の夫を持つ航空駆逐艦

前の名はホルモン焼きテツちゃん。

今は改めホルモン焼きチエちゃん。

兵庫県冬木市にある隠れ家的名店。

今は遠き、昭和の面影を残す店だ。

昨年師走に完成した地上六階地下二階の駅前商業施設は、不景気な世相に逆らうように華々しくその開始を喧伝された。

『マリンカリン、ふゆき』がその名。

超高層マンションまでが隣接する。

地下は二階とも駐車場。

一階は北海道風居酒屋を含む飲食店眼鏡店時計店などが軒を連ね、長野県と新潟県の合弁事業的地域物産店の『しんえつ』が北信名物おやきや飯綱（いづな）町産の香り高き林檎を使った果実水やもちもちした食感の笹団子やおにぎりなどを販売中。

二階は市民広場の他に、文房具店軽食店喫茶店書店函館物産店。

三階は調剤薬局内科整形外科齒科皮膚科の各科医院群に居酒屋。
四階は市民図書館。

五階と六階は世代交流施設や子ども図書館、市役所の出先機関などがある。

そないでつかい箱もん建てて大丈夫かいなどあちこちで囁かれたが、地元民の入居者は勿論のこと、関東方面からの移住者たちも多く拠点と定めたようので部屋は好調に埋まりつつある。

駅舎から離れると、地方都市の世界。

少し歩くと、二〇世紀の残滓（ざんし）がそこかしこにたたずんでいる。

ひなびた商店街がそこに生きている。

老舗中華料理店の『泰斗』や、お好み焼きの『百合根屋』などの名店がひしめく。人間名龍野知栄（ともはる）、旧艦娘名龍驤が経営する飲食店もその構成店だ。

今は知栄（チエ）ちゃんと呼ばれる、元男性がきりきり働く小さな呑み屋なのだ。

父親の鐵男は甘いもん大好きな博徒で、店を手伝うことなど殆どない。

帰つてこないことなど日常茶飯事。

それでも、知栄は鐵男が大好きだ。

昔から土産物はおいしい甘いもん。

やさしいところもあるごんたくれ。

女たらしでなく、酒も呑まない男。

それで充分ではないか。

もういい歳だから、そろそろ落ち着いて欲しいとは思うのだけれど。

息子が艦娘になって、壊れて退役した。

軽空母としての貢献度は今一つだった。

男に戻れないまま、飲食店を経営する。

それなんて喜劇的悲劇なのだろう？

或いは悲劇的喜劇なのかもしれぬ。

それよりも深刻な問題が多々ある。

そのひとつが重婚問題だ。

超法規措置として異例の認可は下りているが、下衆な取材を試みようとする記者は今

も存在した。

あまりにしつこい者は、どうやら山と仲よくなったり海と仲よくなったりしているよ

うではある。

知栄には夫が七人いる。

散々自分は元男なのだと言えたのだが、押しの強さに負けてしまった感はある。

六〇代一人、四〇代一人、三〇代一人、高校生一人、とても若い男の子が三人。

彼女の主人というか伴侶というか、まあ、そういつた存在たちだ。

ホンマ、困ったもんや。

隣に眠る間桐（まとう）家の若旦那の一部を強めに握り締めた。

高校生の癖にやり過ぎや、シンイチ。

にへら、と幸せそうに美男子が笑う。

この可愛らしさがくせもんなんよな。

また、あんな無茶をしよってからに。

ほら、はよ起き。

みんなもう、ガッコや仕事場に行ったで。

はよしい。

あつ。

ああ。

嘘やろ。

もう、ホンマ、堪忍して欲しいわな。

ああ、またこんなにべとべとやんか。

どうにも、夫たちの要望が多過ぎる。

塵紙とワセリンの消費量が半端無い。堪忍して、堪忍してとゆうとるのに。そう言うとなんや余計に興奮しよる。変態や。

みんな変態や。

童貞のまま、処女を失ってしまつた。人生を共にしたちまきは、もう無い。

二度と帰つてはこない、追憶の代物。

マセたお子様たちは、三人がかりで毎日わやをしよる。

とんがらしの癖に。

おっさんたちはねちこく責め立てる。

強力わかもと、亜鉛錠剤などは年配系旦那たちの常備品。

『サトミタカシ』によう立ち寄つて、買うとるみたいや。

あつこは品揃えがえらくええからな。

傷薬や赤チンは兎も角、反魂香（はんごんこう）とか宝玉とかチューインソウルつてなんやろな？

サマナーがどうしたとか、ペルソナがどうしたとか、ファントム・ソサエティがどう

したとか、たまに言つとるけどなんや訳がわからん。

仕事関連の隠語やろか？

ま、えつか。

なんかあつたらこつちに言うやろし。

毎日毎晩どつたんばつたん大騒ぎや。

百合根のおつちゃんからまで告白されるとは、思いもヨラン・パールゼンや。

あんなん卑怯や。

うち……うち……。

あかん、シャワー浴びとこか。

こうして女になっていきよるんかな？

ホンマ、他に嫁はんが欲しいとこや。

あと一名おつたら楽なんやけどなあ。

なんぼなんでも、酷使無双やないか。

過重労働やで。

過労や、過労。

玲一も溜め込むとこがあつからなあ。

あんまし悩んどると、夜が荒々しくなるんよな。

痛い痛いとうとうと、手加減してくれるんやけど。

お母はん思いなところはええとこやな。

手品師になつといたらよかつたんちやうかと思うけど、人それぞれやし、相談してきたら聞くとしよか。

さてと、仕込み仕込み。

今日も稼ぐで。

八種類くらしいの臍物を炒め、秘伝のタレをかける。

これがむつちや旨いな。

ご飯と一緒に食べたなら、そらもう箸が止まらんで。

玉ねぎ炒めてタレをかけても旨い。

もやしにかけてももちろん旨いな。

付け合わせにはキャベツをどうぞ。

ホルモン焼きうどんに焼きそばは、二玉三玉にも対応可能や。

あつつあつのホルモン汁も旨いで。

酒は奈良の純米酒とお得な焼酎のばくだんと北海道のビール。

ドクターペッパーをばくだんで割った、ドクばくだんもイケるで。

試してみ、試してみ。

後は自家製の漬け物とかウインナーとかポテトサラダとかそないなとこや。

今は季節限定で、林檎の砂糖煮が入ったスコーンも置いとる。

女性客の常連たちからの要望で甘いもんも置いとる。

甘いもん喰いたいなら、甘味処へ行けばええのにな。

ようやく起きたんか、若旦那。

はよ顔あろうてご飯をお食べ。

妹はんがさみしがつとるから、ちゃんと後で顔見せたるんやで。

最近えらくおっぱいを当ててきて、なんやこわい？

なにゆうとんのや。

大事な妹はんやろ。

スキんシップのサロンシップや。

甘えたい年頃なんやろ、たぶん。

なんやなんや、その微妙な顔は。

女心のわからんエロ亭主の癖に。

ほれ、妹はんの分の三笠と銀鍔と間宮羊羹とスコーンの詰め合わせ。

さっさと学校に行き！

知栄には友人知人が多い。

時折、小さなホルモン焼きの店は貸切になる。

今宵は艦娘仲間の忘年会。

現役乙種艦娘たちの貸切。

話題は多岐に渡るのが常。

迷走しているとも言うが。

明るい那珂ちゃんのクリスマスソングが、闇を斬り裂くように聴こえてくる。

それは希望の響き。

夢を与え、悲しい人たちを激励する言霊。

中学生くらいの女の子たちを引き連れた格闘技が好きそうな男性も。

巨乳の美人たちとちっちゃいお子様を引き連れた暗殺眼鏡系男子も。

きれいなお姉さんたちに密着されてひたすら困惑する小学生男子も。

四名の美女に密着されて平然としている聖戦士な金髪系イケメンも。

勝ち気そうな女子としっかりした感じの女子を連れたおっちゃんも。

皆等しく耳を澄ませるのだった。

決戦の時は近い。

性なる夜も近い。

「淡路島の洲本港付近に新たに鎮守府を作るんだってさ。」

「あら、あそこは既にそれなりの基地が無かったかしら？」

「正式な鎮守府にするから、建築妖精たちはてんでこ舞いさ。」

「奈良鎮守府と同時進行形ですか。あまりよくは無いですね。」

「大本营としては、戦力強化が最優先事項なんですよよ。」

「四大鎮守府の艦娘たちの不満がくすぶっているとも聞く。」

「大和や武蔵がまた怒っちゃって、函館へ行ったそうよ。」

「まあた大本营が無茶苦茶なこと言ったんでしょ、どうせ。」

「まあ、私たちなんちゃって艦娘にはあまり関係ない話だ。」

「「「「「あはは。」」」」」

「関西国際空港・伊丹空港・神戸空港・南紀白浜空港を統合して、淡路島に西日本国際空港を建設する計画も討議中とか。新しい空港からは、神戸方面大阪桜島方面和歌山港方面南紀白浜方面の汽船が毎日運航予定らしいです。三重県も加わりたがっているとかで、調整は難航しているそうです。どこまで実現するやら。」

「無理なんじゃね。」

「絵に描いた餅なんじゃね。」

「お役所仕事っばい感じね。」

「定期便すら飛ばせない状況で、なんの皮算用のつもりでしょうか？」
「お上は物事をそないにまともに考えとらんと思うで。利権や利権。いっつも利権絡みや。ほい、ホルモン焼きうどんとホルモンと玉ねぎともやし追加。」
「真顔でなんてこと言うの、龍驤ちゃん！」

本州の冬木市と淡路島と徳島県鳴門市を結ぶ、二県合弁で第三セクター方式のあわじ線が現在進行形で工事中や。

商業施設跡地辺りに洲本駅が作られ、大きめの駅ビルも建ててらしいけどな。百貨店の一部も組み込むつもりやとか。

あわじ線で今のところ確定している駅舎は冬木、岩屋、東浦、津名、洲本、福良、大毛島（おおげじま）、鳴門。

鳴門駅舎を香川県の琴電終着駅とする延伸計画が、香川徳島両県の合弁事業として計画中やとか。

これが完成した暁には、志度鳴門線が両県を結ぶ民間鐵道として走る予定。
鳴門線高德線と競合する形になるけど、大丈夫なんやろか？

自動車社会が破綻しとるから、需要増はあるんやろうけど。

「そーいや、ハインケルのツーリストもたまには乗らんとな。

退職金と一緒に貰った、半世紀以上前の古い自動二輪車や。

あの子はよう手入れしとったなあ。

まだ生きとるかなあ。

真つ赤な真つ赤な旧式スクーター。

電装系もぜんぶ自前で直しとった。

ええ子やったなあ。

前輪がすっぽりカバーで覆われているのもあるらしいけど、あれはそないになつたらん。

ところで、アホのマサルはええ人見つけたんやろか？

あいつ、なんやうちにようちよつかい出しとったな。

こないだ見かけたら、なんか知らんけど逃げられた。

逃げられたゆうたら、テツも半分お母はんにそうされたようなもんや。

懲りんからなあ。

お母はんも、なんであないなどかいしよ無しと結婚したんやろうなあ。

「どうしたの、ぼんやりして。」

「いや、そろそろ乗らんとあかんな、と想着て。」

「えつ、今夜は誰に乗るの？」

「えつ、全員に乗っちゃう？」

「順番は？ ねえ、順番は？」

「アホなこと言いな。スクーターの話や、スクーター。」

「なーんだ。」

「毎晩乗りこなしているのかと思つた。」

「クラクシヨン鳴らしまくりじやないのかい？」

「今夜は調子がイマイチャな、とか言つたり？」

「あかん、あかん、うちもうスピードオーバーやとか言つたりして。」

「あんたら、ええ加減にせえよ。毎晩腰ガクガクの身になつてみい。」

「「「「羨ましい！」」」」」

「そうか？ いっぺん、うちの嫁になつてみる？」

「アホなこと言える友達つてええな。」

「死線をくぐつて生き残れたんも、みんなのお陰様や。」

「今度みんなで、豆花（トウホア）専門店の『丹陽（タンヤン）』に行つてみよか？」

「ふんわり口の中でとろける台湾伝統の豆乳プリンを使った、古典的おやつなんや。」

「沖縄産黒糖を元にしたシロップは夏冷たく冬熱々で、これをプリンにかけて様々な具

材を載せておいしくいただくって寸法や。

伏原豆腐店から届く搾りたての豆乳を使って、緑豆や備中小豆や千葉県産南京豆や白玉や白きくらげや鳩麦なんかを載せとる。

あの素朴な風味がええんよなあ。

和歌山へ皆でパンダを見に行くんもええなあ。

ぜんざいをお母はんと一緒に食べるんもええ。

ロシア料理のアントンへ行つてみよかいなあ。

嗚呼、お母はんの巻き寿司海苔巻きバツテラ。

食べとうなるわ。

よし、この気持ちを活かすんや。

あしたはまた、明日の太陽がピカピカやねん。

外に気配がある。

八人分の気配や。

テツもおるんか。

戸を少し開ける。

ホツとした顔の男連中が、闇の中に浮かび上がる。

なんや、寒そうに震えとるな。

うちを毎晩泣かしとる、しょうもない旦那たちや。

南紀白浜の大熊猫みたいに可愛いところも、たまにはあんねんけどな。

せやけど、今宵、慈悲はない。

「あんな、もうちよつとかかるみたいやから、どつかで時間潰してきて。」

極力平坦に言った。

絶望に彩られた瞳。

なんでやねんて顔。

うひひひひひひひ。

それこそ愉悦やな。

こっちはいつつも大変な目におうとんやから、これくらいええやろ。

くくく。

C X C I : クリスマスと白玉と恋の行方

新たな函館おやつを考えて欲しいとの要望が、函館市を含む道南の菓子業界と地方自治体からまたもあつた。

鎮守府食堂では、現在進行形で試行錯誤が続いている。

うちの料理上手たちはみな凝り性だから、妥協が無くつておとろしい。現在手掛けているのは幾つかあるが、古典的なプリンや餡ものなどだ。

『欧風茶碗蒸しおかし』は戦前の製法を元にして、ちよつこし濃厚固めの味わいに仕上げているプリン。

英国風ショートブレッドの『くまにゃん』は、サクサク具合がむつかしい。

ねこやのどら焼きを元にして発案した、『北の國虎焼き』も試行錯誤中だ。

なにしろ、普通のおいぢゃんが作れておいしいものにしなくてはならない。最初に四つの条件を決めた。

◎土地の特色ある特産品を使った品で誇らしく思えること

◎素材の旨さを引き出しつつ作り方はややこしくないこと

◎ちっちゃい子からお年寄りまで無理なく食べられること

◎値段が手頃で土産品にしやすく比較的日持ちすること

烏賊を使った『いかせん』は先行発売を始めたところ、悪くない感じだ。

なにか当たるかなんて、わからない。

瓶詰めつぶ餡の『赤餡』も売られ始めた。

『おしまクッキー』の名前で開発研究中の洋菓子は、普通のお菓子屋でおいしく作れるようにと鋭意工夫している真つ最中だ。

和風焼きメレンゲの『ましろゆき』は和菓子屋洋菓子屋。パン屋問わずに売れるしなるとかなるだろうさとのことで、道南各地のお店と協議中の代物だ。

日持ちもするし、作り方も複雑ではない。

寒天入りなので、食感もいい。

駅前新しく出来た、豆花（トウホア）専門店の『丹陽（タンヤン）』に行ってみたいものだ。

ふんわりと口の中でとろける台湾伝統の豆乳プリンに夏は冷たく冬は熱々な沖縄産黒糖を元にしたシロップをかけ、様々な具材を載せておいしくいただく台湾の古典的お

やつである。

搾りたての豆乳を使つて、緑豆や十勝小豆や千葉県産南京豆や白玉や白きくらげや鳩麦なんかを載せて食べるそうだ。

素朴な風味がいらしい。

鎮守府講堂は熱気と殺気に満ちている。

全国各地から訪れた艦娘たちが、丁々発止の質疑応答を繰り広げていた。

男はおっさんの私一人。

無力極まる中年が一人。

正規空母が。

駆逐艦が。

高速戦艦が。

重巡洋艦が。

軽空母が。

軽巡洋艦が。

潜水艦が。

補給艦が。

戦艦が。

航空駆逐艦が。

距離感の詰め方や、下着を脱ぐ頃合いや、襲い方や甘え方や、そういったことを真剣に討議している。

正妻戦争というか、性戦というか。

性なる夜に向かつてまっしぐらだ。

あんまり鬼気迫る雰囲気でも肉薄しても、逃げられるかもしれないよ。

そろそろ執務室に帰してもらえないかな？

ぼんやりと思うが、時折こちらへも矢が飛んで来るので対応しなくてはならない。

難儀なことだ。

ケツコンしていた艦娘たちの体験談。

生々しい実体験が赤裸々に語られる。

砲撃回数、連撃、再装填、弱点攻撃。

グリッピング。

シエイキング。

ファウンテン。

こつち見ないで。

さりげない台詞。

さりげない視線。

さりげない接触。

ほのめかす愛情。

はぐらかす恋慕。

男心をくすぐる仕草。

チラリズムでの誘惑。

男から言わせる技術。

男性心理を深く掴む。

しつこくならぬ程度。

ある時は新妻の如く、またある時は古女房の如く。

千変万化の顔を見せ、男を飽きさせない創意工夫。

提督の心に忍び込む。

浸食し、根を張り、花を咲かせるための切磋琢磨。

宅麻伸。

最も危険な罠

それは不発弾

巧みに仕掛けられた

欲望の闇に眠る殺し屋

それは深夜に目を覚まし

偽りの平穩無事を

無惨に打ち砕く

クリスマスイヴは

巨大な罠の時

そこかしこで

信管をくわえた不発弾が

突然目覚める

提督も巨大な不発弾

自爆、誘爆、ご用心

ようやく死地から抜け出せたのは、夜更け近くになってからのことだ。ちまきと白玉の愛し方、というところで話がだいぶ怪しくなっていた。ケダモノフレンズされそうな状況を感じたので、危ういところだった。

むせてしまいそうな講堂から、執務室に向かつてひっそりと一人歩く。外は雪模様。

スノークリスマスなんて洒落ている場合ではない。

ここは道南だからまだ雪も酷くないが、道央や道北道東は大変だろう。

あつちからも、名菓開発依頼が来ているんだよな。

そんなに簡単に作れたら、苦勞などありやせんわ。

水の都島原から食の都函館へ修業に訪れている彼女は元艦娘。

轟沈寸前を生き延びたが、男には戻れなくなった元軽巡洋艦。

実家の和菓子屋をよりよくしたいとの願い籠めて、おやつ作りにいそしむ眼帯娘。

アリだな。

……娘じゃないな。

おっさんだな。

おっさん同士なので話がしやすいのだけれど、自虐的下ネタは自重して欲しいぞい。

島原のかんざらしを挨拶代わりに振る舞ってもらったが、あれはなかなか旨かった。

蜂蜜を混ぜたシロップに白玉団子を入れて食べる島原名物。

白玉のど越しつるんつるんぷるんぷるんが大変よかった。

「最高のかんざらしを食べさせてやる。」

そう誇らしげに言った彼女の言葉に、偽りは全然なかった。彼女の作つたかすてらも、しつとりした味わいで旨かった。

クリスマスイヴ。

日本では焼いた鶏肉と苺のショートケーキを食べる日。

気合いを入れて輸入された本場のシャンパンがばんばん開けられ、酔つた勢いで押し倒される男性が続出する。

朝から艦娘たちの視線がギラギラベギラマしていて、大変おとろしい。

盛んに夜誰と過ごすのかを聞かれた。

付き合っている女性が誰かいる訳でもないのに、過ごすもなにも無い。

朝礼でその旨話すと、うちへ引きこもりに来ている大和武蔵計四名に加えて二〇〇名近い艦娘たちから非難の声が上がった。

……ちよつと待て！

なんでこんなにいるんだ!?

五倍くらいいるじゃないか！

多めに仕込んでおいた筈の浅漬けがあつという間に品切れとなり、甘いもんとして用

意した島原名物のかんざらしも即完売状態に陥った。

中の人はおっさんな眼帯娘がけらけら笑っている。

「こいだけあつてでん、やっちや足らんね。ひっちやかめっちゃかやけん、はよせえにやん、遅くなるばい。にぎんめし食べて、とつととやるばい！」

彼女は霞の握ったおむすびをパツと口に入れ、新しい白玉団子を作り始めた。

やらまいか！

私も取り急ぎ野菜炒めを大量に作り続け、夕食に向けた鶏肉のカレー煮の準備も並行して進めてゆく。

カリスト公国から来た料理人の若者が蕎麦のガレットを作ってくれたので、その素朴な風味も楽しむ。

クレープみたいな感じだ。

明日は島原名物の具雑煮が食べられる。

具沢山で出汁の効いたつゆが絶品とか。

これは味わってみなくてはならまいて。

鍋を振るい終え、今度は食器の片付けを始めた。

叢雲、曙、霞、早霜、鹿島、春日丸に指示を出して何故か密着しようとする彼女たち

を適当にあしらう。

龍田足柄もなんだか甘え気味で、よくない傾向だ。

調理場では真剣にやらないと、怪我の元になるぞ。

李さんはいつも通りの感じで、丁寧に作っている。

彼の支援をしている艦娘たちは浮き足だっていないので有り難い。

鹿ノ谷さんは逆にてんてこ舞い。

日本各地から来た、一癖も二癖もある料理人たちをなんとか指揮している。

後で純米大吟醸を差し入れしておこう。

男同士で呑み会をしたいもんだけどな。

島風龍驤吹雪和製イタリア高速戦艦航空戦艦も、何気にくつついてきた。

ええい、作業の邪魔だっ！

手伝うか、離れるかじゃ！

デカジャ！ タルカジャ！

ちやつちやつとやりんさい！

今日の私はスパルタンや！

鳳翔間宮、長門教官妙高先生加賀教官も隙あらば密着してこようとす。

試食用に渡された箸を返せば、いそいそとポケットに仕舞い込んでいる。

はっ！

まさかつ！

特別料理を作れつてこと？

眼帯娘が話しかけてきた。

「どうした、提督。困った顔をして。」

「あ、いえ、まあ、ちよつと、その。」

「お前の悩みを聞くくらいなら、この俺にも出来るぞ。」

「その、ですね。今宵は聖杯戦争……じゃなくて、今夜は企業と性欲がきらきら輝くことになること請け負いです。」

「資本主義社会万歳の日だな、まさに。それで？」

「どうやら、うちのフレンズたちは特別な一品を求めているのではないかと類推するのです。」

「えっ？　そうか？　そうかなあ……まあ、そうだな、これからかすてらの上位互換の五三焼を作るにも時間が無いし……かす巻き……桃カステラ……いや、待てよ。」

「なにかいい案があるのですか、雷電？」

「うむ、かんざらしゼリーを作るばい。」

「かんざらしゼリー？」

「そうだ、蜂蜜入りシロップをゼリーにして、白玉を入れた品だ。旨いぞ。」

「では、今から早速準備へと取りかかりましょう！」
「任せておけ！ お前に最高の勝利を与えてやる！」

思いつきり斜め上の勘違いをしている提督を見て、函館鎮守府所属の艦娘たちの多くはため息を吐いた。

違うよ、違うんだよ、提督。

だが、大淀を筆頭とする目ざとい者たちはすぐに提督の手伝いに入る。

如才ない動きだった。

何気ない動きだった。

まさに達人級の動作。

提督と少しでも長く一緒にいられるよう、娘たちは愛の連合艦隊を組む。

戦後も傍にいられることを願いながら。

今宵の戦争に向けて体力を温存しつつ。

聖戦の時は近い。

CXCII：司令官と長姉駆逐艦

「司令官、お風呂が出来ましたよ。」

「おお、済まんな、吹雪。じゃあ、とつとと入るか。」

「そうですね、ちやつちやつとさつさと入りましょう。」

「ちよつと待て。」

「どうされました？」

「なんで君も脱いでいるの？」

「司令官と一緒にいるためです、決まっているじゃないですか。」

「あのさあ、一応俺はこの鎮守府もどきの責任者。わかるよね？」

「ええ、勿論です。」

「その責任者が部下と混浴するだなんて、公序良俗に反するぞ。」

「日本では最近まで、混浴出来る温泉が全国各地にありました。」

「はあ。」

「艦船の魂を持つ私たちにとって、司令官との混浴は普通です。」
「はあ？」

「お湯がどんどん冷めますから、司令官、早く入りましょうね。」

「ま、いつか。ところであ、吹雪。」

「なんです、司令官？ やりますか？」

「やらねえよ。」

「残念ですね。」

「あゝあ。」

「どうされました？」

「普通の吹雪が欲しかったなあ。」

「私のおっぱいは普通の標準の吹雪より二センチも大きいんですよ！ 二センチも！

触ってみます？」

「触らんわ。」

「うぶですわえ、ふふふ。」

「これがモノホンの艦娘だったら、うぶふきやつきやなんだが。」

「あこがれます？」

「部下と不適切な関係を持ったとして、処分対象になるだけさ。」

「その時は一緒にどこまでも逃亡しましょう。」

「お前と関係を持つのが前提なのな。」

「え、司令官、まさか何名もの艦娘と関係を持ちたいんですか？」

「そんな訳ないだろ、一名でもてんでこ舞いなのに。」

「私って、罪な女ですね。」

「錯乱してるんじゃない。」

「完全体ですよ、完全体。」

「不完全体の間違いだろ。」

「お背中洗いますね。」

「マイペースな奴だ。」

「おっと、手が滑ってしまいました。」

「やめれ、やめれ、やめんと怒るぞ。」

「ここはもうとつくに怒っていますよ。」

「ただの生理現象に過ぎないのである。」

「よし、私がやつつつけちゃうんだから！」

「なにをやつつつけるつもりだ、お前はよ。」

「なに、ってナニに決まっているじゃないですか。」

「当たり前のように言ってるんじゃないぞ、駆逐艦。」

「司令官は照れ屋さんですね。」

「歳上のおっさんから言われるとゾツとするわい。」

「今は可憐な美少女の姿じゃないですか、司令官。」

「ただし、外見に限る。」

「その内、中身も好きになりますよ。」

「さりげなく、くつつくんじゃない。」

「おお、このアジのカルパッチョは実に旨いな。」

「私が釣ってきて、絞めて、調理しましたから。」

「中身が俺より歳上のおっさんでなければなあ。」

「何事も慣れですよ、慣れ。」

「地味に厭なことを言うね。」

「明日は好み焼きにしますね、司令官。」

「いいねえ、そうだ。たまにはそばを載せたお好み焼きを食べて……。」

「はい？」

「あ、その、ええと……。」

「なあ、司令官はん。」

「あ、ああ。」

「ワシもな、こないなことになつとるから、司令官はんになんと言われようとかまわんのですわ。」

「す、すまんな。」

「ええんです、実らぬ恋と知っておるさかい。でもな、お好み焼きにはそばを入れんもんなんです。」

「えつ、でも広島の……。」

「あかん。それ以上言うたらあかん。そないなことを言われたら、ワシは司令官はんを……。」

「わ、わかつた。お好み焼きにかやくご飯は付くのかな？」

「はい、司令官。にゆうめんも付けましようか？」

「おう、頼むよ。吹雪の作る飯は旨いからなあ。」

「任せてください！」

「あはは。」

「うふふ。」

CXCⅢ：冬のコミケット～ツイン霞ママアタック！

人は

コミックマーケットに

なにを求め

ある者は

その日の戦利品のため

現金という実弾をぶっ放す

ある者は

理想の作品を作るため

己の手をインクに染める

またある者は

実りなき野心のために

少年と百合にまみれる

祭は汚れた社会を禊ぎ

流れとなり

川となつて

常に大海を目指す

戦士たちは

社会の汚れた流れに逆らい

そしていつか

力尽きて流される

「提督君がいけないんだよ。ほら、私、もうこんなに……。」

私はヘッドホンを外して言った。

「不認可。」

ぷーっと膨れ顔のマスターオータムクラウドが私に抗議する。

「今時、こんなの普通ですよ。むしろ、エロ濃度はかなり薄めています。」

「大本営のお偉いさんたちの前でも、そういうことが言えますか？ この音声集の販売は禁止です。艦娘関連では、劣情を催させるモノが禁止だどご存じでしょう？」

「そこをなんとか、お代官様。」

「ええい、ならぬならぬ、あなごこなうつけものめが！」

「あーれー！　って、これ、かなり手間暇かけて作ったんですけどね。」

「そうそう、私のイメージDVD第五弾とNG映像集のまんが祭限定版『はこちん提督特盛コミケットリミテッド』を見ましたが、あれも不認可です。」

「そ、そんなっ！　あれは予約だけで五〇〇〇枚突破しているんです！　今さら延期は出来ません！」

「だから、何故、事前に根回ししないんですか？」

「その、ですね。靈感が降りてくるのを感じるのがここ数日のことでした。てへ。」

「それでも、時間の遣り繰りくらいはしましたよ。函館でも期待している子がいるんですから。って、なんでやねん。……まだイメージDVDは試作段階ですよね。」

「えっ？　まさか？」

「今から突貫作業で編集作業に取りかかります。大淀さん、大湊（おおみなと）の提督に連絡してください。業務委託しますとのことで、責任は大本営広報課宛でよろしゅうにと。」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

「かしこまりました。」

「音声集の方もNG版を聴き直して編集します。」

「えっ？　コ、コミケットは四日後なんですよ！」

「どうにかして、搬入時間に間に合わせますよ。為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。成らぬは人の為さぬなりけり。」

「あの方の施策が軌道に乗ったのは、死後のことじゃないですか!」

「問答無用! 天地無用!」

「いやーっ!」

コミックマーケット。

コミケット或いはコミケ。

まんが祭。

同人誌即売会ではあるが、同人誌以外の物品もちよこちよこ販売されている。

深海棲艦侵攻前は数十万の人々が有明に押し寄せた、民間人主催の催しとしては世界最大の催事……だった。

侵攻後三年は開催されなかったものの、熱意の溢れ過ぎる人々の尽力によつてここ数年は普通に開催されている。

人の欲望希望ぐるぐるしたモノなどを貪欲に飲み込んで、今年の冬もバビロンの扉は開かれる。

夏のコミケットは二日間でサークル参加が約五千、一般参加者が約八万。

往時の勢いには程遠いが、この方が落ち着いて参加出来るという意見もある。

企業ブースとしては文房具関係が新しく参戦、限定版の万年筆やボールペンやノートなどを販売するという。

奈良アニメーションに勤める先輩の元へ、挨拶に行かないといけない。

私の先輩は何故か『濃い』人が多い。

呉第六鎮守府の先輩が広島県応援冊子を販売すると電話してきたのは、編集し終えた音声集を横須賀へ送った夜更けのことだった。

栄養飲料は興奮剤や糖分その他で効いた気にさせる代物で、カラーゲンの経口摂取と同じくらい本質的効果が無い。

だが、気分は大事だ。

転がる複数の空き瓶を見ると、流石に飲みたくなくなるが。

「先輩、売り子を頑張ってください。」

「お主も手伝うんじや。」

「……はい？」

「新幹線でもハインドでもなんでもつこうて、手伝いに来るんじや。」

「ええと、鳳翔さんや他の艦娘は？」

「全員、関東圏見物じゃけえのう。」

「もしかして、断られました？」

「おお、ようわかつとるがな。」

「あのですね。現在、私は秋雲さんの手伝いで……。」

「あげなもんは、ちやつちやと適当に編集してぱつぱつと複製すりやあええんじや。」

「それでもですね、適当に編集す……。」

「風呂場で散々刀身を見せとるのに、今さらなにをゆうとんじや。有明のホテルワトスン前で待つとるで。」

「あの……。」

「問答無用！ 天地無用！」

「いやーっ！」

そういうことになった。

ぼろ泣きするマスターオータムクラウドと共にしゃかりきになって編集し、明け方作業終了。

彼女はそのまま横須賀へすつ飛んでいく。

私は意識が闇の中に包まれた。

気が付くと海上にいた。

加賀教官、鹿島、龍田が私と一緒にぶかぶか丸に乗って移動している。

先行する第一陣だ。

第二陣は鳳翔が指揮するらしい。

「能登提督の在籍される、特科艦艇二課艦娘中隊第二小隊の元へ向かいます。ちなみに、その特艦二課が有明のビッグサイト警備担当よ。」

「教官、何故密着しているのですか?」

「気分が高揚してくるからです。」

「あの、そろそろ離れていただけませんか?」

「ここは譲れません。」

「そう言いながら、ボタンを外さないでください。」

「あなたは、天井のシミを数えていたらいいのよ。」

「はいはい、ではそろそろ拘束を解いてください。」

「イヤだ、と言ったらどうするの?」

「お風呂に一緒に入ったり添い寝したりするのを、二カ月禁止します。」

「なんて残酷なことを言うのかしら。仕方ないわ。」

「教官。」

「なに?」

「トランクスを返してください。」

特艦二課の鎮守府に無事到着。

能登提督としみじみ語り合う。

ほんと、いい人なんだよなあ。

函館土産のさきいかや貝柱などを喜んでもらえてよかった。

コミケット初日。

能登提督の車に乗せてもらって、現場に到着。ありがたや、ありがたや。

まだ周囲は真っ暗だ。

既に行列が出来ていた。

直に夜明けになるだろう。

彼らの夜明けになるかどうかはわからんが。

先輩と落ち合う。

法被を着ていた。

真っ赤なカープ仕様だ。

えっ、それ、私も着るんですか？

【広島県応援隊有志会】と橙色の字で記された、小豆色の腕章。

蜜柑ともみじ饅頭を表しているらしい。

先生、わかりません！

サークル参加者用の通行証を渡された。

「あと二時間程で、夜が明ける。」

不意に、先輩が言った。

これは返さねばなるまいて。

「夜が明けるとどうなるんです？」

「知らんのか？」

「えっ？」

「この一帯がオタクまみれになる。」

まあ、そうなるな。

『ふれけも』、つまり『ふれあいのケモノたち』の扮装をした人や同人誌が多く見られる。

『ふれけも』はタツキー監督渾身の作品。

魂の輝き魅せる作品として、絶大な人気を集めた。

二期に関する監督降板で大騒ぎになったのも、ついこの間だ。

結局、鴨皮書店が妥協案を出して紛争は収まった。

鴨皮の幹部が闇討ちされたとか物騒な噂も聞こえてきたが、真実は分からない。

分かっているのは、タッキー監督がこれからも『ふれけも』に関わってくれることだけ。

『ニトロン』はエッチな作品と仮面戦士と歴史ドラマの脚本を書いたウルムチ氏が在籍している電腦遊戯制作会社だが、今年も長蛇の列が予想されるようだ。

薄暗い世界観、どろどろした人間模様、錯綜する物語などを特徴とする。

あれがいいんだという愛好家と、あれがいやなんだという人が存在する。

コンビニエンスストアが大盛況。

ここは、戦場だ。

店員が六名もいる。

弁当やパンやおにぎりなどを棚出しする度、即座に幾重にも手が伸びてきて驚掴みにし、レジスターへと持ってゆく。

スタッフたちも威勢がいい。

「ゴミはこちらのゴミ袋にて総受けしております。皆様、是非とも手元足元お手持ちのゴミで攻めてみませんか？」

「実はこの地味可愛いお兄さんも総受けなんですよー！ 昨晚もですなー！」

「私は絶対総受けではありません！ 昨晚も貞操を無事に守り通しました！」

「おはようございます！ 今日は何んとか快適に過ごせそうですね。……はい、今の言葉に共感された方々は重々ご注意ください！ 有明は海のそばです。風が強くなる、あつという間に体力を持っていけません。生ぬるい考え方をしていると、やられます。命、大切に！ です。冬でも小まめな水分補給を忘れてはいけません。カイロの貯蓄は十分ですか？ 乾燥対策にマスクや飴はありますか？ 無い方は早めに購入されることをオススメします。」

「おはようございます！ ……皆さま、声が小さいです！ おはようございます！ ……よかたいよかたい。朝の挨拶は健康指数を計る度合いです。ところで、皆さま、生きていますか？ 生きている人は手を上げてください。ゾンビはいませんか？ 先程やられた人がいると聞いたので、安心しました。ゾンビ対策に女王様から出してもらったばかりの聖水がありますので、見つけられた方は早急にお知らせください。ちなみに、聖水は飲み物ではありません。」

「ダイレクトマーケティングに来ました！ カタログを買ってください！ 一冊一〇〇〇円での大ご奉仕価格！ いざという時の防具にもなります！ 武器になり得ますが、そのような目的には使わないでください！ カタログ二刀流は会場内禁止です！」

「私はシスの騎士。漫画世界の闇に囚われた暗黒騎士。さあ、走ろうとする者たちよ。」

私の手にかかる前に歩きなさいな。」

「コミックマーケットは床が見えたらいかんのです。」

「確かにここは過酷な戦場です。参加者はみんな傷を負った戦士です。皆さま、心の痛みを薄い本で癒し、無事に、生きて帰ってください。帰宅されるまでがコミケットです。」

「皆さま、宝の地図は大丈夫ですか？ 風で飛ばされないよう、ご注意ください。宝の地図はととてもとても大切です。」

「皆さまは、お客様ではありません。参加者です。このコミックマーケットには、参加者と企業の人とマスコミの人しかいません。その筈です。不審者を見かけたらお知らせください。早急に対処します。なお、皆さまは参加者ですので、我々スタッフの案内・指示にきっちり従ってください。」

「皆さま、前を向いてください。希望が見えております。こんな世の中だからこそ、希望を持って前向きに進んでください。」

午後近くになったの放送。

「一般入場の規制が解除されました。これより会場の出入りが自由になります。」
早いな。

人がまばらだからか？

先輩と並んで西館にて販売にいそしむが、なかなか売れない。

良心的な内容なただけだな。

おっさん二人だからかなあ。

もみじ饅頭の被り物をしているから、売れないのではなからうか？

たまに艦娘らしき子が買い、私との握手や撮影を求めるくらいだ。

明日明後日は壁サークルの手伝いだ。

なんだかなあ。

先輩、二〇〇部は刷り過ぎで御座る。

休憩時間を貰った。

先ずは企業ブース。

西館四階で開催中。

あのボロいエスカレーターはなんとか動いている。

『あなたが動いたら、このエスカレーターは動かなくなります』との注意書。

ゴミ箱を漁る人はいないようだ。

何故か全身黒タイツ姿の清掃員。

彼らに必死の形相で交渉している人々もいる。

四階は混雑しているが、歩けない程ではない。

限定版ボールペンやよさそうな文房具を幾つか購入。

奈良アニメーションは長蛇の列だった。

『中二のオタク系女の子も恋したい！』の劇場版スペシャル年賀状を無料配布している。

先生、並べません。

というか、先輩がこつちへやって来た。

手伝えと言われたが、サークルの売り子をやっていると伝えた。すると、それが終わってからでいいから来いと言われる。

午後五時まで、企業参加者はずっと戦闘継続だとか。

アツチヨンプリケ。

賄賂代わりだと、なんかみっしり詰まった非売品詰め合わせを貰う。

好きな子にとっては垂涎（すいぜん）の的らしい。誰かにあげよう。

『タイクーン』は相変わらずの最大手。

まさか、『月嫁』の新作が出るとは思ってもよらなかった。

『メイト・エクストラ・オーケストラ』の売れ行きが好調なので、関連製品もよく売れているようだ。

各々楽器を持って戦う英霊たちの物語。

へえ、『オークと香辛料』の新作アニメが来年放映されるのか。

あのシヨタオークが可愛いんだよなあ。

『刀槍乱麻』も女の子たちに人気があるなあ。美男子まみれってやつか。

『愛の鱒釣り』通称『愛鱒』もかなり盛況だ。魚釣りが人気アニメになるなんて、誰が予想しただろう。聖地巡礼で秋田は活況を呈しているとか。

東館に行く。

のんびりした空気が漂っていた。

明日明後日は地獄なんだろうが。

今年はかなり梃子入れたみたいだが、かなり前の冬コミの初日を思い出す。

今回のサークル参加者は約一万。

夏の倍はいる。

それがどれだけ、一般参加者の人数を増やす結果になるのだろうか？

出だしは好調らしいが、りんかい線の大半の稼ぎを弾き出す程の人は来ないだろう。たぶん。

ビッグサイトの外に出ると、屋台が複数見えた。人寄せ用に準備会からお願いされた、艦娘屋台。我らが函館鎮守府の面々は、ノリノリみみたいだ。李さんの肉まん。

鳳翔の豚汁。

間宮のサンドウィッチ。

龍驤のたこ焼き。

龍田の龍田揚げ。

春日丸のたい焼き。

青地に白抜き紋章が目印。

板倉九曜と熊紋とが目印。

どこも行列が出来ている。

買って食べて、また並ぶ人さえいる程だ。

東京最強級屋台群は、今ここにあるのだ。

いずれも以前試食したが、実に旨かった。

だが。

一番長蛇の列なのは、意外にも霞たちのおにぎり屋台だ。

『二名の霞ママ対決！ 龍虎相打つ！ 北の國と北信の兩名の作りたての愛を買えるのはこののみ！』

『ツイン霞ママアタック！ 君は生き残れるかつ!?』

『きらめく言の葉の鞭は愛の証!』

奇妙な幟（のぼり）が幾つも風にひるがえっているが、これを見て行列に並ぶ人も少くない。

人間の業とはおそろしい。

鶴の哭く夜はおそろしい。

函館鎮守府所属の霞と長野県飯綱（いいづな）町に住む元艦娘の霞が、せつせとおにぎりおむすびを握って販売している。

彼女たちの助勢は函館の足柄、大本営の大淀と朝霜、それに大湊の清霜。

並んでいるのは殆どが男性だが、女性もちらほらいた。

「ほら、あんた、ボーツとしてこっち見るくらいなら、さっさと買いなさいよ。」

「なに、あたしの手元をじつと見て。この米粒を舐めたいだなんて、変態じみたことは考えていないでしょうね？ ほら、買ったら次の人が待っているんだから、すぐに列を離れる！」

「えっ、あたしたち兩名を撮影したい？ 売り切れたらね。」

「あんたらね、あたしは元男なの、男。おっさんなの。えっ？　それでもいい？　まごうことなき変態ね。」

「あんた、三回目よね。ま、別にいいけど。ほら、買ったらすぐ離れる。」

「行列の邪魔したら蹴り飛ばして、そこら中にいる新撰組もどきやケンペイさんもどきに引き渡すから！　行儀よくしなさい！　いいわね！」

「握手？　今、おにぎりを握ってんの。出来る訳ないでしょ。ほら、とつとと会計を済ませる！　泣きそうな顔してんじやないわよ。売り切れたら、握手くらいしてあげるから。」

ずいぶん賑やかだ。

握り飯が売り切れても、彼女たちはまだまだ忙しくなりそうだな。

握手会の準備が始まっている。

妙に手際よくやっているなあ。

そうだ、能登提督のところへ差し入れに行こうか。

目ざとく私を見つけた手伝いの艦娘たちが、食べ物をどんどん渡してきた。

李さんの肉まんを頬張り、鳳翔の豚汁をすすりながら平和な風景を眺める。

豚と豚とががぶってしまったなあ、と思いつつ。

さあ、呉の先輩を手伝い終えたら、今度は奈良の先輩の手伝いだ。

それが終われば、秋葉原か池袋。

池袋や秋葉原に行きたい面々がいるみたいだから、ラーメン屋とか寿司屋とか肉屋直営レストランとか洋菓子屋などの情報を既に伝えてある。

老舗ホテルに泊まっつてのんびりしたい。

……無理かなかな？

墨入れもホツチキス作業もしなくていいのはありがたいけどな。

空は青い。

果てしなく青い、この空の下。

三日間、晴れるといいな。

CXCIV：花山提督、男道

「よう、俺の苗字は花山だ。名前は加穂留と書いて本来は『かほる』と読む。普通に『かおる』と読めばいい。あと、俺はバカなんぞでな。難しいことはわからん。こいつバカだな、って思つて間違いない。それと、俺は喧嘩上等だ。俺と殺りたい奴、シグルイしたい奴は後程執務室まで来い。相手してやる。」

筋肉ダルマで顔中傷だらけの大男は、挨拶をそう締めくくつてニヤリと笑つた。

食堂に集まつた仲間たちは興味深そうに見ているか、バカかこいつと見ているか、さあ殺ろう今殺ろうすぐ殺ろうという別種のバカが熱く見詰めているか、のいずれかだつた。

なにこいつバカなの？

バカだつて言つてるから、バカで間違いないか。

「あ、そうそう。」

思い出したように提督が言つた。

「バアちゃんがおはぎを持たせてくれたんでな、みんなで分ける。仲よくな。」

途端、黄色い声が喧騒を形作る。

間宮さんも鳳翔さんも給糧艦もいなくて料理上手がないこの基地で、その発言は艦娘ごろしだ。

立派な三段重ねの重箱が現れる。

躊躇する者もいた。

だが。

「バアちゃんの作るモンはな、なんでももうめえぞ。」

それは殺し文句。

おいしいものに飢えていて好奇心旺盛な駆逐艦たちが、それでも恐る恐る提督に近づく。

気さくにおお喰え喰えと餡こ菓子を渡してゆく提督。

気のきいた子がお茶を用意し、さっそく提督へ親しげに話しかける子まで現れた。

チヨロい。

実にチヨロい。

「提督って童貞なの？」

調子に乗った子がそう聞く。

「おう、このツラだからな。お相手してくれる子がいたら大切にするぜ。」
「どれくらい出来るの?」

おいバカ、なにを聞いている?

「ん? 回数か? ふざけて一日中やった時はそうだな……八回かな。」

「え……そんなに……?」

ざわつく食堂。

「あー、心配すんな。お前たちにこちらから手を出すことはねーから。襲われたらやるけどな。まあ、恥ずかしいから、その手の質問はお手柔らかにな。」

「はいはーい! 司令官はどんな子が好みですか?」

「この子はみんなカワイイな。みんな好きって言つとくぜ。」

「おう、提督。早くシグレイしようぜ。」

「よし、どこでやる? 道場かなんかあるか? それとも路上か? どこでもかまわんぜ。素手か? 零式か? 破裏剣流か? 薩南示現流か? 薬丸流か? 影技か?」

お前、相当剣を使うだろ。誰に習った?」

「道場なんて上等なもんはねえから、その辺でいいだろ。流派はわからねえ。近所のじっちゃんに習ったからな。」

「よし、逝こうぜ。」

「おーし、殺るぜ。」

バカ二名が真つ向から激突した。

拳に布を巻いた喧嘩提督と、木刀を持った武闘派軽巡洋艦。

「なーなー、提督。こいつとの死合いが終わったら、次はあたしと殺れよ。」

「いいぜ。」

「ふん、俺を甘く見ないことだ。ふふふ、こわいか。」

「おー、美少女がすごむといいよな。任侠映画みたいだよ。」

「お、おい、美少女って止めろよ。」

「動揺してる、動揺してる。」

「おい、提督！ 卑怯だぞ！」

「なにが？」

「意外とつぶらな瞳で見つめるな！ 俺を可愛いつて言つて油断を誘うつもりだろうが、どっこいそんな手には乗らねえ！」

「カワイイ子にカワイイつて言つてなにが悪い。お前がカワイイのは事実だろ。」

「はうあつ！」

軽巡洋艦の剣術にはいつものキレが見えなかった。

終始赤い顔をしていた軽巡洋艦はまた今度殺るから、今日はナシだナシ、と言つて妹

艦と共に立ち去った。

次の相手は重巡洋艦。

提督の動きは人間と思えない程だった。

鋭く、重い。

私たちはその光景に引き込まれてゆく。

艦娘の一撃に耐えられるなんて、とても人間とは思えない。

剛拳が唸る。

正面蹴りが飛ぶ。

魅せられる。

結局、引き分けになった。

「艦娘ってつええな。」

「あんたもやるじゃねえか。」

「修行が足らんな。もつと精進しないとイケない。」

「人間にしちやよくやるぜ、あんた。感心したよ。」

ははは、と笑う兩名。

よし、決めた。

夜戦だ。

夜戦を提督に仕掛けよう。

今晚、彼の私室で殺ろう。

そう、決めた。

知らず知らず、息が荒くなる。

「おい、お前。」

不意に提督が話しかけてきた。

「殺気が駄々漏れだ。殺る時はな、そういう感情を押し殺せ。俺は何時でもシグルイしてやる。待っているぜ。」

そう言つて、彼は執務室に向かった。

よし、やっぱり殺ろう。

素敵な新年会しましよ。

ふふふ。

C X C V : 通勤系提督

海沿いにあるその鎮守府は初の試みだとかで、規模はそんなに大きくないけれども三人の提督が管轄するようになっていいる。

大本営は函館の件で懲りたとか。力を分散させる腹積もりらしい。

艦娘たちは鎮守府の寮で生活だ。私たち提督陣は近場で仮暮らし。

問題が多く発生したための措置。大本営も頭を痛めているそう。

まだ成果は出ておらず、行方不明になる提督がちらほらいる。

暗黒企業の求人物件みたいな場所に思えなくもないが、死ぬことは別段こわくない。

身内も知り合いも随分と死んだ。

今更一人加わっても変わらない。

二名の駆逐艦と一名の軽巡洋艦。
それが私に与えられた艦娘たち。
皆、感じのよい女子で安心した。
中学生高校生の子はわからない。
なにを言っているか考えてるか。
気分は新人中年教師なのである。
精々馬鹿にされぬように頑張る。
それが私の所期目標なのである。
借りた部屋は意外と大きかった。
借りる人が減少した所為もある。
よい部屋とて埋まる保証がない。
明日から提督生活が始まるのだ。
今夜は少し奮発しようと思った。
まあ私生活に変化はななろうが。
がらんとした部屋から出かける。
うろろしたがる閑散としていた。
先ず、人が町を歩いてはいない。

そりやまあ、そうなるわいなあ。
そしてどんどん寂れるのである。

郊外のモールさえ例外ではない。

商店街はシャッター通りだった。

呑み屋は大抵が閉鎖されている。

薄暗い町をあてなくさまよった。

「ねえ、あんた。呑みに行くのかい？」

派手な感じの可愛い娘から話しかけられた。

「ええ、まあ。」

「この辺りは初めてかい？」

「ええつと、そうですね。」

「じゃ、一緒に行こうか。」

「私みたいなおじさんと一緒では楽しくなれないでしょう？」

「自己評価の低い人だねえ。一緒に呑む予定の子の都合がちよつとばかり悪くなったのさ。ちつと遅れるつてね。それで誘ったんだよ。あんた、別に見た目も雰囲気も悪くないよ。そんなに卑下する必要はないんじゃないかな。」

「ありがとうございます。」

「他人行儀に言わなくなつたつて大丈夫だよ。酒は愉しく呑まなきゃね。じゃ、行こうか。」
「ええ、そうですね。」

思いがけない事態に驚く。

娘は快活だった。

こういう子がいるなら、日本の未来にも希望が持てる。

なんだか嬉しくて、少し涙が出そうになった。

「あたしはさ、あちこちはしご酒するよりもじっくりやる方が好きなんだけどさ、あんたはどうだい？」

「そうですね、それもいいですね。」

「決まりだな。あそこへ行こうか。」

赤提灯の店。

感じがよい。

暖簾が店の外に掛けられておらず、『本日貸し切り』との札がぶら下がっていた。

私がそれを見て躊躇していると、「安全策さ。」と言われて彼女と共に入店する。

店内は女性ばかりだ。

しかも全員が若い娘。

成る程、と納得した。

安心して吞める店か。

ポニーテールの若女将らしき娘が一人でできばきと切り盛りしている。あの包丁捌きは熟練者のそれだ。

女子高校生くらいにしか見えないのに、相当な修練を積んだのだろう。母親が父親の代わりに頑張っているのだろう、おそらく。健気な娘だ。

この店は是非とも通おう。

いや。

通わなくちやなんないな。

「どうしたのさ、ぼんやりして。」

「いや、キレイな子ばかりで気後れしたんですよ。」

「ほほー、お目が高い。どの子がよろしいかしら？」

「ははは、こんなおじさんをまともに相手にしてくれる娘さんなんていませんよ。」
「いたら、あんたはどうする？」

あれ？

彼女はまるで隼か鷹のように鋭い目付きで私を見つめている。

真剣そのものの表情だ。

おちやらけ要素は微塵も感じられない。こちらが素なのかな？

何故そんな表情なんだ？

「そうですね、勿論真剣にお付き合ひさせていただきます。」

「それが……もし……もしも、複数だったらどうするつもり？」

「あり得ませんけど、その時は全員嫁にしますよ。あはは。」

あれ？

店内が静まりかえっている。

すべての娘が私を見ていた。

しまった、やらかしたぞい。

「あ、あの、皆さんすみません。セクハラ発言でしたね。何とぞご容赦を。」

「大丈夫、大丈夫。別にみんな怒ってないさ。そうだろ？」

肯定の返事が全員から来た。

危ない危ない、危なかった。

軽口を叩くのは今後禁止だ。

明日からは女の子だらけの職場だしな。

解放感で妙なことを口走ってしまった。

私がモテるだなんてあり得ない事態さ。

「お通しです。」

白魚のような手によって、餡掛けの葛饅頭が目の前に置かれる。ほほう、いいじゃないか。

地味だが手のかかる一品。

彼女の本気度が伝わった。

手抜き利益最優先な店ではないようだ。

薬くさくて妙な味の合成食品は要らない。

お通しはその店の考えを知る重要な品だ。

口の中に入れる。

弾力と慈味と豊かさとが口中に拡がった。

葛饅頭の中には丁寧に裏漉しされた南瓜。

旨い。

ただただ旨い。

口福の時間の始まりだ。

この店、正解。

「これは手間暇かかかっていておいしい。」

「だろう。あんたと来て正解だったよ。」

隣で山形の特別純米酒をぬる爛でやっていた娘がにやりと笑う。

ポニーテールの娘がはにかんでいて、心が少しときめいてくる。
いやいや、不味い。

隣の娘も魅力的だし、この店の常連らしき女の子たちも可愛い娘揃いだ。
下手な店を凌駕するぞ、これは。

筑前煮や肉じゃがも旨い。

この店、ハズレなしだな。

当たりも当たり大当たり。

旨い旨いと若女将を絶賛していたら、隣の娘に腕をつねられた。
痛い痛いと言ったら、彼女は何故だかふてているように見える。
なんだかよくわからないが、娘も褒めて褒めて誉め殺しにした。

やがて、頬が赤く染まってゆく。

彼女がキツとしてこちらを向く。

口を尖らせながら、刃を放った。

「そうやって、今まで何人も何人も口説いてきたんだろ。」

「心外な。女の子と付き合ったことなんてありませんよ。」

「まっさかー。あんたは、そんなによく口が回るのにさ。」

「回すような相手は、今までの人生でいませんでしたよ。」

「じゃ、女将さんやあたしは初の名誉に預かったのかい？」

「まあ、そうなるな。」

やがて娘の友人たちも途中で合流し、うれしいひとときを過ごした。

「よーし！ 全員私の嫁ですぞー！」

「「いよーっ！ 大統領！」」

酔った挙げ句にそんなことまで口走った。

反省とはなんだったのか。

まあ、ウケていたからよしとしようかな？

みんなけらけら無邪気に笑っていたしな。

……やっぱり少し不味かった気がする。

新しい朝が来た。

希望の朝が来た。

その筈だ。

その筈だつてばよ。

曇天だが悪くない。

近所の食料品店で購入した、トーストに簡単ポタージュに牛乳といった朝食で身体を

活性化させる。

制服に着替えて自転車で鎮守府へ行こうとしたら、セーラー服の少女が迎えに来た。あれ？

私の初期艦に命じられた子だ。

固い表情であるな。

緊張しているのか？

無理もないけどな。

「おはようございます、司令官。」

「おはようございます。あれ？ 迎えに来るよう、命じられたの？」

「いえ、自主的にここへ来ました。もしかして、ご迷惑でしたか？」

「いや、別にそんなことはない。じゃ、行こうか。」

「はい、参りましょう、司令官。」

住所は絶対に教えるなって大本営の人から耳にタコが出来程聞いたけど、あれは勘違いだったのかな？

なにか変更点でもあったのだろうか？

連絡する点を考えたら問題なからう。

何故彼らは怯え、口酸っぱく言った？

「よろしくお願いしますね、司令官。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

当然のように送迎に来た艦娘から、ぎこちない笑顔を向けられる。

あー、やっぱりこんなしけたおじさんじゃダメなのか。

ガーンだな。

出鼻をくじかれた。

歩きながら基地へと向かう。

「ゴメンなさいね、こんなシヨボいおじさんがあなたの指揮官で。今日からおじさんなりに頑張るから許して欲しい。」

「あつ、いえ、その、別に司令官が悪い訳じゃなくて……でも、今日のそもそもの原因は司令官にあると思うんです。」

「え、こんな冴えないへたれおじさんの元で働きたくないとかで、配下の女の子たちがストライキでもやっているの?」

「えーと、それならまだ可愛いかな、つて程の剣呑な事態になっていますね。是非ともその目で現実をご覧ください。」

訳がわからない。

なにかしたつけ?

思い当たる節がない。

昨晚のアレは関係無いだろう。

いやいやまさかそんなまさか。

彼女たちが怒って訴えたとか？

着任してすぐセクハラ親爺か。

……でもなんとなく違う感じ。

わからん。

私にはさっぱりわからん。

程なく鎮守府へ到着した。

あと二人が遅れて着任する予定だ。

何度も提督たちのいなくなつた地。

前任の提督たちは行方不明らしい。

その前の提督たちもその前の前も。

今は私直属の艦娘しかいない筈だ。

……あれ？

ずらりと整列した艦娘たちが見えるぞい。

あれこれのれ？

「あの、なんであんなにいるんですか？」

私は傍らの駆逐艦に問うた。

えっ？ という顔をされる。

「皆さん、昨晚司令官から熱心且つ情熱的に口説かれたつて、口を揃えて言っていましたよ。」

「えっ？」

「司令官つて、案外手が早いんですね。見損ないました。」

「いえいえ、女の子と付き合ったことすらありませんよ。」

「またまたあ。」

「いえいえ、本当にありません。」

「本当に？」

「本当に。」

「魔眼だかチート能力だかで彼女たちを即墜ちさせて媚薬とハイパーマグナムでガッツンガッツンして、アヘアヘアヒハってさせたんじゃないんですか？」

「それなんてウスイホンなんですか。そんなことは一切出来ません。私は平凡極まるただのおっさんにすぎません。」

「ほんの少しだけ、ホツとしました。」

「それはよかったです。」

「でも、口説いたのは事実ですよね。」

「面目次第ありません。」

「今回だけは怒りません。不可抗力の面もあるようですから。彼女たちには私から説明しておきます。」

彼女は苦笑いして、同僚へ視線を向ける。

その先はむつつりとした顔の二名の艦娘。

対照的に晴れやかな顔の九名の艦娘たち。

私を誘った娘がにやりと笑った。

あのポニーテールの娘までいる。

もしかして、私は謀られたのか？

まさかまさかそんなまさかな話？

いやいやなんの利点があるのだ？

「司令官はエロい人なんですネ。」

「いや、その、それは誤解です。」

「こんなにも手が早いなんて。」

「してませんなにもしてません。」

「お酒は一緒に呑んだでしょう。」

「ぐふ、それは事実であります。」

「きつちり説明をお願いします。」

やたらくつつく娘たちと共に、私は鎮守府の中へ入る。

さて、大本営になんと言いつい訳しようか。

いや。

事実をそのまま話すことにしよう。

クビになったら、その時はその時だな。

と、前方を歩いていた駆逐艦がぐるりと一回転し、白いパンツをちらりと見せて言った。

「司令官、ぶっちゃけて辞めるおつもりでしたら、それは平戸のカスドースより甘いと言っておきます。でも、これ以上嫁を増やしたら許しませんからね。」

彼女の背後に修羅が見える。

私と周囲の娘らはかくかくと人形のように頷くしかなかった。

結果から言うとかビにはならなかった。嚴重注意は受けたが。

食生活が充実したのは嬉しい誤算だったとだけ言っておこう。

CXCVI：こんたま、襲来

金野玉夫（こんのたまお）。

通称、こんたま。

横須賀の大本営に勤める査察官である。

ちよつとむつちりむうにいな体形の二〇代後半の男で、身長はおよそ五尺四寸、体重は約二五貫。にやにやへらへらと始終笑顔だかなんだかつかないような顔つきで、時折額に青筋が走っていた。

髪は何故か肩を少し越えるくらいに長い。まるで昔のテレビ番組に出ていた熱血教師みたいだ。今では稀少品の椿油をたつぷり付けているせいか、彼の髪はぬらぬらする感じにさえ見える。財力と趣味の悪さの双方を一遍に相手に知らしめる効果はあるようだが。

目鼻立ちは垂れ下がった糸目に団子鼻。

肌の手入れは怠っていないようだが、痘痕（あばた）が残っているのは隠せない。

柑橘系のフレグランスを使っているようで、妙に爽やかな匂いをやたらと周囲に撒き散らしていた。電車内にいると滅茶苦茶敬遠されるだろう。

落ち着きが無いのか、貧乏揺すりが絶え間なく、キョロキョロと視線が安定しないのも少しこわいようにさえ見える。

何故このような男が大本営のしかも査察官なのかは提督たちの間でも謎のひとつだが、どこぞの放蕩息子という噂もあつた。

無能ではないが、面倒な男。

それが彼の主な印象だつた。

彼は函館鎮守府を訪れ、おっさん提督に対して散々嫌みを言っている。

ねつとりじつとりとした喋り方で、ややもすると子供っぽく聞こえる。

第一秘書艦の大淀と第二秘書艦の加賀が、食い入るようなおそろしい目付きで査察官の幅広い肉体を後方から睨んでいた。

「あくあ、ダメですね、まったくダメ。意味不明ですよ、あなたのやり方は。」

「はあ。」

「もつとね、艦娘たちに厳しく接していかないとダメですよ。こんなに甘やかしてどうするんですか？ 大和型艦娘四名が年末からずっとここにいるじゃないですか、彼女たちが元の鎮守府へ戻るように説得するのがあなたの仕事でしょう？ ぼく、なにか聞

違ったことを言っていますか？」

「いいえ。」

「でしよう？ あなたには努力が足りないんですよ、努力が。」

「申し訳ありません。」

「少し強い言葉を使わせてもらいますがね、提督の一人一人に合わせた仕事を大本営がやる余裕なんてこれっぽっちも無いんですよ。馬鹿馬鹿しいことを真顔で言う提督、イラつくような態度の提督、おちよくっているようなことを言う提督。全部に合わせるなんて、到底不可能ですよ。わかりますか？」

「ええ、まあ、そうですね。」

「そんなに大本営の方針が気に入らないのなら、とつとと提督稼業を辞めたらいいんですよ。ぼく自身、大本営を批判されても困るだけですしね。」

「はあ。」

「提督たちから改善要求もありますが、それらは大本営が納得出来た場合にのみ採用させていただきます。」

「予定、ですか？」

「そう、予定です。予定は未定であつて、決定ではありませんがね。」

「そうですか。」

「お土産は間宮羊羹の詰め合わせでいいですよ。」

「はい？」

「お土産ですよ、お土産。当たり前でしょう？ こんな寒いところまで、わざわざこのぼくが足を運んであげたんです。お土産を渡すのは当然のことでしょう。そんな常識も知らないんですか？ 普通、提督の方からこういうことを言うものですよ。本当に、あなたは常識はずれですね。」

言いたい放題言つて、イヤミな査察官は雪道をタクシーに乗つて帰つていった。

ほつとする函館鎮守府一同。

粗塩を撒く加賀や駆逐艦勢。

むつつりしている大和型艦娘四名。

眼鏡をぴかぴか光らせる大淀。

半月後。

千島列島中部の松輪島に出来た露日協同の泊地へと向かう、大型船舶の中にこんなまの姿が見られた。

是非とも有能な人材を、と泊地から求められた大本営が応えた結果らしい。

彼の周囲にはやさぐれた感じの艦娘四名。

補充分のおっさん艦娘たちだ。

見目麗しい艦娘たちの筈が、どこか蓮つ葉な感じにさえ見える。

この船に乗っている陸海双方の自衛隊隊員たちですら、特に用事が無い限りは近づかないでいた。

元査察官は怯えた目でおっさん艦娘たちを見つめる。

「んだよ、またやりたいのかよ?」

「初めてだったのは仕方ねえけどよ、ママ、ママ、つてのはもう無しだぜ。」

「折角こんな体になったんだ。少しでも楽しまねえとな。」

「よかつたなあ、『提督』。こんな美人たちと毎晩楽しめるんだからよ。」

下卑た顔でにやにやする乙種艦娘たち。

外見と口調が全然合っていない女たち。

絶望的な表情の新任提督。

船に乗るまでは普通に見えた艦娘たち。

船に乗ってから本性剥き出しの雌たち。

手洗い場も風呂も私室も危険な領域だ。

こいつら、元男なのにと提督はぼやく。

男同士なんて理解出来ない、とぼやく。

なんでこんな目に遭うんだ、とぼやく。そして彼は、肥大した尊厳を壊された。何度も何度も蹂躪され、おかしくなる。こんなまはどんどん理性を破壊される。自尊心の高い男は調教されつつあった。新しい性癖を次々植林されつつあった。彼の回りは元男性ばかりで固められる。朝から夜中まで絶え間なく責められた。やがて、島が見えてくる。

かつて、日本軍の堅牢なる要塞のあった風の強い孤島が見えてきた。松輪泊地には、男日照りのおっさん艦娘が複数在籍しているという。

CXC VII : 愛妻家

「おやおや、珍しい客人だね。」

聞こえてきたのは、きれいなキングス・イングリッシュ。

気付いた場所は函館鎮守府でない。

ここは何処かの屋敷の書齋らしい。

長い年月を経た紙の匂いが漂った。

目の前には優雅な雰囲気、サヴィル・ロウで誂（あつら）えたようなスーツを着た骨頭の異形がいた。

彼は豪華な椅子に座っている。

私はいつもの軍服姿だ。

拳銃を装備はしているが、眼前の相手には一切通用しないだろう。

「ええと、ここはどこでしょうか？」

「ふむ、迷い人か。ここは英国さ。」

エゲレスだと……。

U K。

ブリテン。

妖精の本場か。

何故、私はここにいる？

『彼』は一体誰なんだ？

「妻も絹女給（シルキー）も生憎と出掛けていてね。茶を出せなくて申し訳ない。」

「いえいえ、こちらこそ闖入（ちんにゆう）者になってしまつて大変ご迷惑をおかけしております。」

「ふふふ、実に日本人らしい反応だ。大変興味深いね。妻となんと似た面を感じるよ。」

奥方は日本人なのか。

国際結婚しているとは、異界の住人もなかなか進んでいる。

まあ、私も人ならざる娘たちとケツコン予定だから似たようなものか。

「さて、時間はあまり無いようだ。うん、そうだ、丁度君に渡すとよいものがある。これだ。」

マホガニーだかオークだかで出来ているだろう、高級そうな机の引き出しから彼はなにかを取り出した。

翡翠？

ちっこくてきれいな首飾りだ。

「魔除け（アミュレット）だよ。」

「魔除けですか。」

「君は見たところ、妖精たちに好かれ過ぎていて。気を付けることだ。全部はね除けるのは愚かな所業だけど、受け入れるモノと追い払うモノとの選択を誤ると間違いなく身の破滅だよ。」

「心得ておきます。」

「ふむ、『節制』がかなり強いね。今のところは、これでも問題ないだろう。」

「あの。」

「うん？」

「『等価交換』とまではいかないかもしれませんが、これをお受け取りください。」

何故かポケットに入っていた間宮羊羹を、彼に手渡す。

「これは……ケーキかい？」

「それはヨウカンという日本の伝統的アズキゼリーで……たぶん奥様の口に合うかと思われまます。添えるお茶はグリーンティーがいいでしょう。」

「ほう、ならば対価としては充分だ。僕にとっては、妻の笑顔が最大の価値を持つから

ね。では、そろそろ時間だ。」

「お世話になりました。」

「(こちらこそ、珍しいものをありがとうございます。)」

目覚めると、曙と霞がしがみついていた。

がつちり絡み付いて、とても剥がせない。

つまり、両隣で彼女たちが寝ている以上は私も動けない。

段々容赦が無くなってきているな。

右手になにかを握っているのがわかった。

おそらく、魔除けだろう。

あれは、夢であって現(うつつ)でもあったのか。

揺すったり声掛けしていく内、二名とも目覚めた。

うつすらと新たに雪化粧された鎮守府の敷地。

ちつちやな雪だるまが、幾つか作られていた。

さほど積もってはいない。

「提督、おっそーい！」

島風が背後から抱きついてきた。

「司令官、この雪だるまは私が作ったんですよ！」

前方から笑顔で抱きついてくる吹雪。

両隣の曙と霞がなにやら喚いている。

灰色の空。

昨晩は霞（あられ）がぱらぱら降っていた。

函館の春はまだ遠い。

厨房へ行くと間宮が羊羹を作っていた。

欧州から急ぎの注文が来ているという。

伊良湖や速吸らが彼女を手伝っていた。

「欧州、というと日本人が多く住むというドイツのシュツットガルト辺りからの注文ですか？」

問うてみた。

「それがですね、ご注文は一件だけなんです。」

「一件、ですか。」

「ええ、宛先はロンドンですね。至急とのことと割増料金もいただきましたから、大急ぎ

で作っています。余程気に入られたのでしようね。」

試食を勧められ、お茶と共にいただく。
旨い。

彼女はかなりの量を、皆と作っていた。

「これ全部ですか。」

「ええ、全部です。」

小豆、本練り、抹茶、黒糖、そして芋。

五種類の羊羹が沢山沢山作られていた。

「緑茶をオマケに付けたらいいと思いますよ。先日入手した、新潟の村上茶なんて如何ですか？ 或いは奈良の柳生茶とか。」

見知らぬ笑顔を想定して、私はそう提案した。

CXCⅧ：被食者と捕食者

提督になったらわかるけど、結局俺たちって被食者なのであって、つまりは捕食者じゃないんだよなあ。

権力と立場で勘違いしやすいけど、それって砂上の楼閣なんだよなあ。

やったつもりなんだけど、本当にそれは勝利なんだろうか？

勝利したと思わされてはいないだろうか？

征服したと思わされてはいないだろうか？

男ってバカばっかだからなあ。

セックス&バイオレンスで勝ったつもりになっている。

自分自身の完全勝利を疑ってすらいない。

アホや。

みんなアホや。

そういう連中は結果的に皆いなくなつた。

どこへいったかなんて知りたくないなあ。

勝ったと思わされているだけなんじゃね？
本当は……。

勝てる見込みがちつとも全然まるつきり無いやん。
軽い気持ちで受け入れたのが間違いだったかなあ？
まさか、こんな風になっちゃうとは思わなかった。
見込みが甘すぎた。

教育係達まで取り込まれるとは思ひもしなかった。
真面目な子たちなんだけど、免疫力が無すぎた。

あいつら、前より格段に……。

？
そういや、あいつのとき、ケツコン経験艦があんなにまだいるけど、大丈夫なのかね

まだ童貞らしいけど。

俺もお仲間だけどさ。

まるで仔犬たちとぬいぐるみ……おうふっ！

「はぁーい、提督！ いっちばーん！」

「なんですかなんですかぁー？ 提督、私のことがそんなに気になりますかぁー？ う

ふふ♪ えいえいえい♪」

「あら、司令官。私の身体でお役に立てることがなにかあるかしら？　うふふ♪　えい
えいえいえいえいえいえい♪」

「えっ、なにになに？　どうかしたの？」

「あ、あの……な、なんででしょうか？」

「素面だよう……本当だってばさあ。」

お前たち……。

なんで、そんな恰好をしている!?

ここは平静を装って即時離脱だっ！

大丈夫！

大丈夫！

まだ大丈夫！

「あっ、いやいや、ちよつとな。」

「なにになにー？　あたしの出番？」

「およ？　提督、どうかしたの？」

「私の美肌に見とれていたのね♪」

「構ってー！　なんか構ってー！」

「提督に抱きついて破廉恥です！」

「イケるイケる！ ヒヤッハー！」

ヤバイ！

不味い！

即時離脱すべしと本能が警告を発している！

やわらかすぎる！

不味い！ 不味い！ 不味い！

ちくわ大明神よ！ 我に力を！

「お、お前たち、早く寝なさい。俺もこれから寝るから。」

「「はーいっ♪ ではでは、ご一緒にしますね♪」「」」

「こんな私でも提督のお役に立てて、本当に嬉しいです。」

「メシの時に仕込んだからさ。ほら、もうギンギンだろ？」

「はい？」

「ちよつと待ってくれ頼む！」

「はりきつていきましよう♪」

「夜の砲撃戦、始めるよ♪」

「私も一緒にいかせて。ね♪」

「よし、やっちゃうからね♪」

「身体が火照ってきました。」

「おちんぎんは消毒だーっ♪」

あ、危ないところだった。

もう少しで俺は……。

ぼ、暴発分は不問だよな。

くう、あれは危険な技だ。

習った捕縛術が役立った。

猛特訓の甲斐があつたぞ。

わざと縛られた者もいる？

まさかそんなことは無い。

無いよな。

お仕置きされたいなんて。

いやいや、まさかまさか。

口にはギャグを囁ませた。

今夜一晩駿河問いの計だ。

天井を強化してよかった。
特注品の石板が役立った。
ミントタブレットを装填。
くく、身をよじるがいい。
天井はびくともせんから。
なんかシユールな光景だ。
ラジカセでお経を再生だ。
お前ら一晩中聴いてくれ。
煩惱退散且つ破邪顕正や！
精神鎮静用のお香も焚く。
執務室で寝るとしようか。
明日は少しお説教しよう。
ナイトメアモードじゃよ。
したくないが致し方ない。
大破の可能性も考えよう。
バケツを用意しとこうか。
雑巾とモップも必需品だ。

タオルも多めに用意する。
したいのは別のことだが。
現在はその時でないのだ。
すべて終わったら電話だ。
あいつは笑うに違いない。
むつきー！

冗談が真になっちゃまった。
準備万端が効を奏したよ。
もつと平和な夜が欲しい。
鉄格子と防弾硝子の増設。
扉を鉄のものに換装だな。
私室改三なんて笑えない。
いやはや。

CXCIX：田宮玲子という女

「深海棲艦が妙に減っているんですか？」

雨が降って雪が溶けた、函館のそんな日の午前。

戦艦棲姫が執務室に入ってきて、深海棲艦の現状が変化しつつあることを私に伝えてきた。

相変わらずの黒いキャミソールだけの姿。

寒くないのだろうか？

「そうよ。付き合いが殆ど無かった連中だけだね。交戦の無い状況で駆逐級が少しずつ減っているそうよ。まるで、はぐれた時を狙っているかのように。実際、艦隊行動をしていないものばかり殺られているみたい。それとね。」

「はい。」

「頭数が減っているのは確実なのに、亡骸が見当たらないの。」

「怪談みたいですなね。」

「私たちには調査の専門家なんていないし、共食いでも起きているのかもしれないわ。もしそうだったら洒落にならないけどね。現在、全海域で非常事態宣言が発令されているわ。」

「日本各地で、最近行方不明者が急増しているという話は聞きます。」

「それって、都市伝説じゃないわよね。」

「厭な共通点がありますけれども、偶然かも知れません。」

「警察が手抜きして調査を怠っている可能性も高そうよ。」

「日本の警察は世界的に言うと、比較的まともな方です。」

小樽の提督とメールでやり取りした結果、ロシア東部の沿岸地方でも奇怪な事件が多発していて難儀な状況のようだ。

狂暴な人食い熊が何頭も現れたという説もあるらしい。

艦娘に討伐隊を出して欲しいとの陳情まで来たという。

浦潮（うらじお）泊地の提督がメールでぼやいていた。

警察や軍隊が相手にしてくれないらしい。

確かに、靴だけとか帽子だけとか見つかるのは厭だわな。

こんな寒い時期に熊が現れるものだろうかと疑問に思うが、獣害は捨て置けない。

比較的手の空いている艦娘たちに猟銃の扱いを教え、小樽や浦潮を通じて面倒な折衝

を行い、訴えの多い国内外の地域へと急拵え系狩人を派遣した。

広島県尾道市。

昔付き合っていた田宮さんがこの街で暮らしていると連絡が入り、私は彼女に久々に会おうと思った。

彼女は一時期、東福山駅の近くに住んでいたらしい。

あの事件には巻き込まれなかったようで、安心した。

蔵守さんという探偵が私の所在を突き止めたそうだ。

会社の休みを利用して尾道までやって来て彼女に会ったが、なんだか前より痩せて見えた。

駅前の商店街にあるこじやれた喫茶店で再会した彼女は積極的に話しかけてきたが、なんとなく違和感を感じる。

彼女にとってもよく似た女優が、彼女の記憶に基づいてその役を演じているようにさえ見えていた。

……疲れているのかな？

時折、なにか鋭い雰囲気を感じる。

なんだこれは？

殺すまでもないな。

目の前のオスをそう判断する。

体が馴れるまでは衝動もある程度存在したが、最近では必然性すら感じなくなってきた。

このメスの記憶を引き継いだことは、同族たちと異なる思考回路を有する結果に繋がっている。

数名の同族たちに訊ねてみたが、私に似た考え方をする者の存在は現時点で確認出来ない。

近頃は艦娘とやらに討伐される同族が増えてきた。

だから、目立たないようにして喰え地域を変えて喰え人間の食らうものも喰えと説得したのだが、その提言が受け入れられることは殆どない。

淘汰はかなり進んでいる。

東福山での激しい戦闘ではいち早く脱出したので殺られなかったが、同族を保護していた人間の市長共々多数の同族が討伐された。

人間が人間を殺す。

知性だ倫理だ正義だ人権だなどと言っておいて、いざとなったらなぶり殺しだ。

古今東西、それは変わらんな。

死刑制度反対と言っておきながら、鎮圧のために人を鉛弾で撃ち殺すのが当然。

二重規範三重規範は当たり前。

朝令暮改をも恥じない生き物。

大したものだ、人間とやらは。

昔は死刑が見世物だったそうだが、今も似たようなものではないのか？

薄っぺらな皮で誤魔化しながら、残酷な傍観者として覗き見る人々。

腐ったマスメディア。

腐ったネットワーク。

人は業の深い存在だ。

この街に住まいを用意しておいてもらって本当によかった。

今日のオスは……そうだな、自身の首実検みたいなものか。

「このアツプルパイはともおいしかったわね。」

「そうだね、飯綱（いいづな）町の英国林檎を使っているとここに書いてあるよ。」

「飯綱町？」

「長野県北部の町だったさ。英国から林檎の果樹を贈られ、それを育て、出来たのがこれに使われている林檎だそうさ。」

「へえ。尾道紅茶によく合うわ。」

「君は相変わらずだねえ。」

「そうかしら？」

「そうだとも。」

「安心した？」

「安心した。」

「だったら、これからデートでもする？」

「よしてくれ、私には妻子がいるんだ。」

「そっか。」

「すまん。」

「いいのよ。」

「いいのか？」

「わがままに付き合わせてゴメンね。」

「いいさ、元彼女が探偵を使ってまで会いたかっただなんて、光栄の至りさ。」

「そう言ってもらえるなら助かるわ。」

「じゃあな。」

「じゃあね。」

タミヤレイコ、いや、田宮玲子が今の私の名前。

人間として生きていくしかない。

仕事を探さなくてはな。

この部屋で引きこもる訳にもいかない。

潤沢な資金を複数箇所に隠匿してあるが、余計な詮索をされぬようにどこかへ所属しておいた方が得策だ。

人間としては有能なクラモリだが、あいつは当分生かしておこう。

さて、どんな仕事をすればいいのか？

このメスが生業（なりわい）としていた教員は不味い。

思春期の少年少女には、妙に勘のいい者がちらほらいるからな。

シンイチ……あの男子生徒を、喰らっておくべきだったか？

わからない。

シンイチは共存共栄を模索しようとしていたようだが……。

わからない。

あの騒ぎでは生きているかどうかすらわからんからな……。

新聞を広げる。

新規に開設された鎮守府の事務員募集広告が掲載されていた。まるで、コンビニエンスストアの人員募集みたいにも見える。これでも受けてみるか。

密室系の仕事の方が安全だろう。

艦娘とやらを間近で観察するのも悪くない。

彼女たちはどんな味がするのだろうか？

不意に衝動が突き上がってきて、甘美な妄想に酔いしれる。

いや、それは不味い。

そうだな、余程の好機に恵まれた時にでも……。

履歴書を書き上げて再度読む。

まあ、こんなものだろう。

明日にでも訪れてみよう。

ふふふ。

CC：狼と魔の森

この世は魔の森。

死ぬまで抜け出せない、魔物の棲む森。
人の皮をかぶった悪魔たちの踊る森林。
人の生き血をすする魔物が荒ぶる世界。
己の狂気を自覚出来ない者たちの狩場。
みんなみんな狂っているのにそのまま。
狂いつばなしの社会で皆は生きてゆく。
魔の森に住んでいること自覚せぬまま。

四〇過ぎで引きこもり化した俺は、周囲の説得もあつて艦娘乙種に志願することにした。
た。

最悪轟沈し殉職しても、そこそこの弔慰金が遺族に支払われるそうだ。

過労で死んでも、知らぬ存ぜぬ金など払わぬ勝手に死にやがってこっちは迷惑なんだよと吐き捨てる会社は全国各地に無数にある。

学生時代から他人を蹴落とし続ける人生ばかり歩んでいる連中や、弱き者をいじめるのが当然と思いついでいる連中がのうのうとのさばる、今の日本社会。

差別する側の人間が牛耳る日本社会。

自浄作用なんて最初から存在しない。

間接的な殺人を平気で行う会社はざらにある。

それを屁理屈で正当化する会社もざらにある。

私が死んでも、代わりはいるもの。

そんな状況で苦しむ人たちへ更に鞭打つあんぼんたんがあちこちにおいて、たぶん、そんな現状に対応出来ない人はかなりいると思う。

俺も対応出来なかった一人だ。

追い打ち的に深海棲艦の侵攻。

更に歯車会社員が軋んでゆく。

壊れてゆく。

みんなみんな壊れてゆく。

なにもかも。

人をどんどん使い捨てる社会。
勘弁して欲しいよ、まったく。

不景気。

低賃金。

物価高。

重労働。

自暴自棄になる人も少くない。

人を殺すにや刃物は要らぬ、ちよいと仕事を多く与えりやいい。

なんてな。

乾坤一擲の賭けのひとつが、艦娘になることであつた。

世のため人のためになって、死んでも貢献出来る存在。

いろいろと都合がいい。

俺にとってはだけどな。

横須賀の大本営まで行つて、書類手続きを済ませる。

新薬の人体実験の同意書みたいな書類を書いていく。

注射を打たれて、数日様子見。

病室みたいな四人部屋には似た境遇に見える人たち。

ぺこりと頭を下げると、同じ反応。

特に会話も無く、劇的展開も無く。

医師と幾つか会話。

童貞であることを知った彼は、何故かしきりに残念がつていた。

別に童貞だろうとなんだろうと、全然関係ないんじゃないかな？

そして、全裸になって、棺桶みたいな箱に入る。

何故か我が息子が勃起していた。

嗚呼、長年の相棒ともお別れか。

急になんだか寂しくなってきた。

液体が注がれ、段々意識が薄れてくる。

急いで最後の自家発電に励んだ。

今更ながら寂寥感が増してゆく。

ぼんやりと、高校生時代に一度だけ見せてもらった巨乳の女の子の胸を思い出した。

あの子と付き合っていたら、人生が変わっていただろうか？

豊かに波打つ髪。

大きな胸。

すらりと延びた脚線美。

嗚呼、そうか。

俺はとつくの前に、幾つも選択肢を間違えていたんだな。
久々に大量の竜吐水を放ち、俺の意識は暗闇に包まれた。

誰かが呼んでいる。

無数の白い手の森。

魔の森だろう。

きれいな脚だ。

脚しか見えぬ。

追いかける。

追いかける。

追いつかぬ。

追いつけぬ。

魔女がいた。

美しい魔女。

豊かな髪。

豊かな胸。

きれいな脚。

交わった。

交わった。

果てしなく交わった。

俺は魔女の虜になる。

茨の檻に囚われた。

魔女が微笑む。

やさしく微笑む。

嗚呼、ここが地獄なのだど理解した。

なんと甘美な地獄なのかと理解する。

茨の檻は頑丈そうに見え、逃げられない。

もう、それでいい。

魔女といつまでも一緒にいたい。

魔女が俺の首を求めるなら、何時でも差し出そう。

それくらいしか出来ないのだから。

茨に薔薇が咲き、散り、また咲き、散りを繰り返す。

繰り返す。

何度でも。

そんなある日。

骨頭の紳士が現れた。

ここにずっといてはいけないと言われる。

魔女はもう見えない。

あたしが魔女だから。

紳士がさつと杖を振ると、茨の檻に道が出来た。

わかるよね、と言われた。

わかるわ、と応えておく。

歩き出した。

随分長いこと、ここにいた気がする。

紳士はもう見えない。

魔女は既に見えない。

手が溶けてゆく。

足が溶けてゆく。

嗚呼。

これから艦娘になるのね。

嗚呼。

あたしは艦娘になるのね。

建造器から出てくると、周囲の人々から大変驚かれた。

それは、あたしが重巡洋艦の足柄だったからだと思う。

艦娘乙種で重巡洋艦が出てくるなんて極々稀少だとか。

実際、鉄底海峡解放戦時にも数名しか重巡洋艦がいなかったそうだし、その頃と比べ
ると改二的な存在たる今の乙種でさえ、重巡洋艦は初めてだと言われた。

初物よ、初物。

総合性能は本物の駆逐艦並みだけど。

それでも、現在最上位系艦娘乙種よ。

本来の足柄よりも胸乳が一回り大きいと言われた。

周りの男たちがあたしの剥き出しの胸を凝視する。

下半身が反応している男性職員を、何人も確認出来た。

トロンとした目付きでふらふら近づくと彼らに違和感を覚える。近くにいた艦娘たちから、彼らは全員順次駆逐されていった。

それは胸というには

あまりにも魅力的過ぎた

大きく

形よく

たわわ

そして破壊力があり過ぎた

それはまさに

水蜜桃だった

あくあ。

ついつい勢いでやっちゃったから、童貞のまま処女になっちゃった。

あれ？

あたし、童貞だったっけ？

なんとなく違う気がする。

なんだか胸がぎゅつと痛くなつた。
とても大事な人と別れた気がする。
でもすぐ傍にいる感じもするのよ。

誰だろう？

誰だろう？

思い出せない。

だけど。

思い出しちゃいけない。

何故かそんな気がする。

あたしは……艦娘よね？

大きく形よき胸。

すらりとした脚。

波打つ豊かな髪。

そんな艦娘になつた。

美しきツクリモノに変わった。

後悔なんて無いわよ。

あるのは戦への思い。

配属先の鎮守府はそこその規模で、そこは周囲の艦娘一名二名系個人的小規模鎮守府を複数統括する中規模鎮守府だった。

小規模鎮守府には本物の艦娘がいて、それを模造品たちが上位的存在として管理する。

なんだか茶番にも見えるし、派遣社員が正社員を指導するようにも見える。

滑稽な気もするけど、数だけなら乙種の方が多い。

せめて、彼女たちと仲よくやってゆこう。

馴れ合いじゃなく、信頼しあってゆこう。

この中規模鎮守府群を統括するのが、函館鎮守府だそう。

あちらには本物の足柄がいるという。

一度会ってみようね。

ここに所属する艦娘乙種は計一七名。

軽巡洋艦一名、軽空母一名、駆逐艦一五名。

かなりの規模に思えるが、これでも本物の駆逐艦六名に圧倒されてしまう戦力だ。

なんてこつたい。

これを補完するのが、艦娘甲種の本物の艦娘たち。

へんてこだけど、しょうがない。

あべこべだけど、しょうがない。

着任したら、何故かみんな、顔を真っ赤にしている。

提督もたらりと鼻血を出していた。

緊張しているのかしら？

だけれども、杞憂は驚愕に変わる。

所属艦娘たち全員からおっぱいを揉ませて欲しいとの要望を伝えられてあたしは驚く。

あの、あたし、中の人はおっさんなんだけど。

みんなもおっさんよね？

みんな、薔薇なの？

ここって薔薇の園？

はい。ばいんばいんの巨乳はあたしだけなので、それを揉み揉みして英気を養いたいらしい。

まあ、そういうお店には行けないし、男が男の乳を揉んで楽しいかどうかは微妙に思えるのだけど。

「揉み揉みは一分五〇〇円よ。ばふばふも同じ。ちゅうちゅうは一分一〇〇〇円。」
「金取るんすか、姐さん。」

「誰が姐さんよ。無料にしたらずつと揉み続けるでしょ、あんたたち。」

「くつ、なんも言えねえ。」

「凶星を刺されたで御座るよ。」

「有料でも、揉みたいお。」

「男の乳揉んで楽しいのかしら？」

「それは言わない約束で御座る！」

「その豊かな胸でご指導ご鞭撻をお願いいたします。」

「順番が来るまで、いつまでも待ち続ける所存です。」

「足柄さんの見目よきおっぱいだから、揉む価値があるんですよ。」

「ばふばふを！ ばふばふを！ 一心不乱のばふばふを！」

「ふーん、まつ、いつか。現金決済で先払い出来る子からどうぞ。」

「いつちばーん！ へへへ、おとお！」

「なによ、あんたもけっこうあるじゃない。」

「姐さんのおっぱいほど大きくないですよ。」

「おっぱいやわらけー！ 最高だぜ！」

「拙者、生きててよかったで御座る！」

「片方ずつとは意表を突かれたわね。」

「次、あたし！　あたし！　あたし！」

「ママ……ママ……嗚呼、星が見える。」

「幼児プレイはしないわよ。」

「これは提督や艦娘をダメにするおっぱいだわ！」

「あんまりこねくり回さないで欲しいんだけど。」

「あ、あの……。」

「鳳翔さん？　え、なんですか、そのお札は？」

「足柄さんのそのおっぱいを、是非とも揉んでみたいんです。」

「えっ……ええ？　鳳翔さん、そっち系の人だったの？」

「ち、違います！　女の人の大きなおっぱいを揉む機会なんて滅多にありませんから、折角ですし、この好機に揉ませてもらうかと思ひまして。」

「は、はあ。」

「あの、私、薔薇でも百合でもありませんから！」

「他の希望者もいますから、今日は五分にしましょう。」

「焦らすのがお上手ですね。馴れていらっしやいます？」

「なにを言っているんですか。」

「独占は……ダメですよね？」

「ダメです。」

「あ、あの！ 足柄さん！」

「神通さん、どうしたんです？ お札を握り締めて。」

「これで、足柄さんのおっぱいを揉ませてください！」

「ま、まさか、神通さんも薔薇百合の人なんですか？」

「ば、薔薇じゃないですけど、おっぱいは揉みたいんです。揉み心地がよさそうですし。人をダメにする噂のおっぱいを揉ませてください！」

「は、はあ。」

「あ、あの、私、こんなモノが付いているんですけど、大丈夫ですか？ 見慣れたモノです。大丈夫ですよね？ こんなに大きくなっていますけど、大丈夫ですよね？」

「触ってみます？」

「は、はあ。その、それ、カチカチなんですけど、大丈夫ですか？」

「私は童貞ですから、大丈夫です。」

「正直、不安材料しかありません。」

「なんだか体が火照ってきました。そろそろ夜戦の時間ですね。」

「神通さん？」

「ゆたか、って呼んでください。」

「それ、人間の時の名前！ 言っちゃダメですって！」

「その、滅茶苦茶にしてくださいでもいいんですよ。」

「あたしたち、初対面ですよ！」

「嗚呼、このおっぱい。このおっぱいに巡り会うため、私は生きてきたんですね。」

「それは違うと思います。」

「嗚呼……嗚呼……ふう。」

「あの……。」

「次は足柄さんのおっぱいを飲ませてください！」

「出ません。」

「そ、そんな！ どうしてお乳が出ないんです？」

「艦娘だからです。」

なんとも変な基地に着任しちゃったわ。

夕飯はカツカレーよ！

みなぎってきたわっ！

どんどん食べなさい！

次々揚げてゆくわよ！

手製の漬物もどうぞ！

「足柄さんのお漬物って、なんだか懐かしい味がしますね。」

「あの、鳳翔さん。」

「なんででしょうか？」

「どうして、あたしに密着しているんですか？」

「密着しては……ダメですか？」

「上目使いにこちらを見る鳳翔さんが、あざと可愛くてびっくりですよ。」

「あの、神通さん。」

「なんででしょうか？」

「何故、あたしに密着しているんですか？ 食べにくいんですけど。」

「足柄さん成分を補充しています。ダメですか？」

「なんですか、その足柄成分で。」

「この匂い、このやわらかさ、これこそ足柄さんです。」

「青い巨星もびっくりしますね。」

「嗚呼、この魔乳。濡れてきます。お姉様って呼んでいいですか？ 私をスールにして

ください。」

「お姉様は別にかまわないですけど、あたしは女じゃないので、スールはちよつと……。」「問題ありませんわ、お姉様。いえ、ロサ・キネンシス。海百合会を結成しましょう。そして、このリリアン鎮守府の名を高めてゆきましよう！　嗚呼っ！　お釈迦様も見ていらっしやるわっ！」

「……もうお好きになさってください。」

提督は目付きが悪くて、世の中を斜めに見えて、そして妹スキーな絶倫だった。その目はどす黒く淀んで濁っている。

駆逐艦たちからお兄ちゃん呼びされ、彼は抵抗していたが半年で陥落したらしい。連日連夜に行われる、水雷戦隊による波状攻撃を耐えきれなかった結果がこれだ。駆逐艦たちの本気の猛攻を喰らう破目に陥らなくてよかったと、つくづく思った。

執務室は駆逐艦まみれだった。

やっぱりここは薔薇の園かも。

鳳翔さんと神通さんとに添い寝されつつ、何本もの触手に絡まれる夢を見た。

その触手は細い細い手にも見えた。

白い白い、青い血管の見える手に。

やさしくやさしく愛撫されてゆく。

それらはまるで魔女の手のように。

手の森の中であたしは溶けてゆく。
魔の森の中であたしは溶けてゆく。

翌朝早く、二名の艦娘乙種から同室になって欲しいと泣いて懇願された。
困惑する。

中の人がおっさんだと思つて微妙なんだけど、何故だか美しき情景に感じられる。
駆逐艦たちはとつと提督を取り込んでいて、ガチガチに防備を固めているとか。
気軽に触れる相手が欲しいのだとぶつちやけられた。

どちらも融合率が高そうな感じがする。

外見に中身が引つ張られてるんだろう。

ついつい情にほだされ、おっぱいが有料でよければと提案したら即座に了承された。
逃がさへんで、という気迫をギンギラギラベギラマに感じる。

はやっ！

早まってしまったかもしれない。

貞操は堅守しよう。

両側から抱きつく両名を連れ、食堂へ向かう。

途中、似た状況の提督とばったり出くわした。

目と目が遭った瞬間。

お互いに苦笑いした。

提督からおっぱいを触りたいと言われたので、一分二〇〇〇円ですと吹っ掛けておいた。

金額を防波堤にしておこう。

簡単に触られたくないしね。

駆逐艦たちも防波堤役だわ。

貞操は大事にしときましょ。

なんとかやっていけそうね。

苦難が多く見えるけれども。

あの頃に比べたら、大丈夫。

と、その時。

廊下の曲がり角からこちらを覗く、なにか美しいモノがニヤリと笑ったように見えた。

それは青く仕立てのよいマントを羽織り、とんがり帽子をかぶっているように見えた。

まるで、運命を司る神だか魔神だかの如くに。

I am bone of my sugar,
spice, wonderful
things.

体はお砂糖香辛料素敵なもので出来ている。

Glass is my heart, and heavy oil is my
blood.

血潮は重油で心は硝子。

I have created over a thousand bullet
s.

幾度の戦場を超えて不敗。

Unknown to death.

ただの一度たりとて敗走はなく、

Not known to life.

ただの一度たりとて理解もない。

Have withstood pain to create many
weapons.

かの者は常に独り、兵装の丘で勝利を叫ぶ。

Yet, those hands will never hold anything.

よつて、生涯に得るものなにもなし。

Successful things work.
So as I pray, unlimited sugar spice won

その体はきつと、お砂糖香辛料素敵なもので出来ていた。

CCI：明智藤吉郎元康、魔界転生す

深海棲艦の侵攻までは、世界有数のメガロポリスとして繁栄を誇った東京都。

約一二〇〇万いた人々も物流の停滞や電力問題、度重なる暴動、それに伴う治安の悪化と先行きの見えない生活に疲弊して地方へ疎開する人が年々増加の傾向にある。

今は三〇〇万ほどまで人口が戻ってきたが、西日本の方が景況にすぐれるため、そちらに移住する人も少なくない。

近年は、『旧首都』と揶揄する者さえ現れている土地。それが東京。

その中目黒区にある東急東横線祐天寺駅。

駅舎改札口付近にて、桶狭間焼を屋台で売る容姿端麗の男がいる。

それは今川焼と同じような食べ物。

地域によっては、ふうまんとも回転焼とも太閤焼とも呼ばれる焼き饅頭だ。

屋台の近くには、『天下布武』とか『毘沙門天』とか『風林火山』とかの墨痕鮮やかなのぼりが幾つも並べられていた。

その彼の傍には甲斐甲斐しく手伝う美貌の少年。高校生だろうか？

品行方正な雰囲気にもいわれぬ色気。

小学生から大人のお姉さんまで虜にしている、罪な美少年である。

二人並ぶと、腐海の住人が狂喜乱舞して嗚呼歓喜天様っ！ となる感じだ。

不景気な世の中だが、売り手の「買ってゆくがよい。」という俺様発言は何故か通勤する人々の心を捕らえ、案外よく売れるのだった。

備中小豆餡、備中白小豆餡、プロヴァンス風カスタードクリーム餡、八丁味噌餡の四種が売られていて、売り手としては八丁味噌餡が一押しらしいが癖のある濃い味付けのために売上高は四番手である。

これが名古屋か大須辺りだったら、味噌餡が一番手かもしれない。

売り手の名は明智藤吉郎元康。

少々甲高い声のアラフォーだ。

手伝いの少年の名前は森蘭馬。

気遣い深き補佐役って感じだ。

二名で因縁を付ける愚連隊やヤの付く人々をことごとく返り討ちにし、配下に収めていた。

相当な武芸達者のようである。

やがて終電の時間となり、売り手は気前よく残った桶狭間焼を周囲にたむろしている人々へ無料で配った。

太っ腹だと喜ぶ庶民たち。

銭が大好きで大好きでたまらない男は、無駄がある意味嫌いだ。それ故に残ったものは皆へ配る。それで支持度が上がれば万々歳ではないか。

屋台を解体し、軽トラックに載せて二人はひなびたアパートに辿り着く。

そこが彼らの拠点。

有能な少年がさつと点てた抹茶を豪快に飲んで、男は彼に聞いた。

「お蘭よ。」

「はい、上様。」

「拠点について存念を申せ。」

「尾張は如何でしょうか？」

「あやつの影響が強すぎる。」

「しからば、大坂もなりませぬか。」

「猿の土地に住む気はない。」

「安土城は既に焼け落ちております。上様の味の好みに近いのは、この日の本に於いて愛知県と呼ばれる国と思われまします。」

「……であるか。」

「一度見聞を広めるために行かれてみてはどうでしょうか？」

「お蘭、やり様はお主に任せる。」

「お任せくださいませ。」

「後、爺か久太郎か犬でもおればのう。」

「存外、我ら同様、どこぞにおけるやもしれませんな。」

「……であるか。」

蜂須賀政勝という男がいる。

関東地方では若い頃からぶいぶい言わせ、行きどころの無い若い衆を束ねていた。

世の中、いろいろもて余している人間は意外とあちこちにいるものだ。

自警団を作り、ゴミ拾いや老人の相手などを率先して行っている。登校時下校時に安
全性を確保すべく、目を光らせているのも彼らだ。

実際、彼らが未然に防いだ事件犯罪事故は両手両足の指の数を超える。

『蜂須賀衆』という、お前はどこの手勢だと突っ込みが来るような温故知新的名称の集団
を率いているのが政勝だ。

この男が桶狭間焼を売るおっさんに惚れた。

エロい方ではなく、任侠的な方面である。

出会いは突つ走つた若い衆を諫（いさ）めるためであつたが、一目会つたその日から燃える花咲くこともある。

気分は張飛であつた。

斯くして、明智藤吉郎元康は二〇〇〇に及ぶ手勢を得ることに成功した。

齊藤吉乃という女性がいる。

ほんのりおっとりした、ちょっこし夢見がちな人。

彼女は東急東横線祐天寺駅を日常的に使っている。

最近、歴女好みっぽい屋台がお気に入りなのだ。

その店主と、時折気安く他愛ない話をしている。

なんだか気になる男。

たぶん、デートに誘われたら付いてゆくだろうな。

期待している自分自身に少し驚きながら、誘いを待つ。

誘ったら負け。

彼女は微妙に負けず嫌いだった。

元康と蘭馬は新幹線に乗って、愛知県へと出掛けることにした。

早朝の東海道新幹線は定刻通り発車し、両名は崎陽軒のシウマイ弁当をわしわし食べながら西へ西へと進む。

お茶は早朝に自前で淹れたものをテルモスに入れており、蘭馬は敬愛する主人にいそいそと熱いお茶に心を受けて手渡すのだった。

静かな車内。

まるで、平日の北海道新幹線新函館北斗駅奥津軽いまべつ駅間のようにがら空きだ。

奥津軽いまべつ駅と津軽二股駅の傍にある道の駅は、なかなかよい品揃えなのだが。

名古屋駅に到着。

名古屋城。

徳川美術館。

明治村。

犬山城。

観光地に行くのも悪くないが先ずは腹ごしらえだ。

名古屋名物のモーニングを食べなくてはならない。

なんと名古屋では、終日モーニングの店も少なくないのだ。

不景気な世の中だが、それを笑い飛ばそうとする気概が尾張の人々にはある。

それを象徴するのが、ある意味モーニングなのかもしれない。違うかもしれない。

「上様、ここに御座りまする。」

「……であるか。」

駅舎から歩くことしばし。

昭和を彷彿とさせる喫茶店が見つかった。

イケメン高校生がイケメンおっさんを連れて店内に入る。

年配の柔和な雰囲気のお女が一人いた。

どうやら、彼女がこの店の店主らしい。

二人が席に座ると、お茶と南京豆と茹で玉子とおしぼりがさつと出された。

「まだ頼んではいけませんよ。」

若者が言った。

「あんたら、名古屋は初めてだね。まずはこれをお食べ。二人ともモーニングでいいの
かい？ まあ、今の時間はそれしかやらないけどね。」

「はい、それでお願います。」

「じゃあ、ちよつと待ってな。」

ニヤリと笑う店主。

「……であるか。」

男はさっさと南京豆を食べ始めた。

やがて、チン！ という軽やかな音がしたかと思うと、程なく潰し餡を載せた厚切りのトーストと豆腐とワカメの味噌汁、それに代用珈琲が出された。

「上様、これなるが名古屋名物小倉トーストで御座います。」

「ふむ。……餡は我が屋台のものよりあつさり目だの。味噌汁は好みの味じゃ。」
厚切りのトーストは、外側さつくり内側ふんわりの絶妙な味わいだ。

「お兄ちゃんたち、うどん食べるか？」

えっ？ 思わず頷いたら、天麩羅うどんが来た。

いただききもので、食べきれないらしい。

掻き揚げは大きく、食べごたえがある。

「サラダも食べとくといいよ。」

ドン、とポテトサラダとキャベツと胡瓜とトマトの複合体が来た。

あれ？

こんなに頼んだっけ？

疑問を覚えながらも、主従はムシヤムシヤと風味のよい代用珈琲と共に賞味する。

「そうそう、友達からお稲荷さん貰ったのよ。ついでに茶碗蒸し。」

コトリ。

いなり寿司が二個ずつ目の前に来た。

茶碗蒸しも出来立てであつあつナリヨ。

「はい、甘いもの。」

とどめは、ババロアに苺のショートケーキにパウンドケーキ。

なつかしい風味だ。

凝りすぎていなくて、尚且つ老舗の風格を伝える洗練の味覚。

腹をさすりながら店を出た。

これが名古屋の朝食なのか。

素晴らしい。

実に素晴らしい。

ちよつと量が多すぎたけど。

お土産に饅頭までもらった。

貰うの大好き主人は大喜び。

なんとも安上がりな中年だ。

傍らの従者もにこにこ笑う。

上機嫌な主人こそ望む姿だ。

「この地で水軍を揃えるのもよからう。」

名古屋駅から発車する木炭バスに乗って漁港へ向かいつつ、男はにこやかに言った。
気分は海鮮丼である。

揚げたてのフライもよさそうだ。

刺し身に潮汁に練り物もいぞ。

男はとてつもない食いしん坊だ。

「水軍と言えば、近頃は鎮守府なる砦を設け、からくり兵士の艦娘なる女武者を何名も指揮して戦わせておるとか。」

「……であるか。」

ギリギリギリりと男は目を輝かせ、漁港二階の座敷で海の幸を堪能したのだった。

その帰りに、艦娘のいる基地を訪問するのも忘れない。

手土産は練り物干し物海産物。

鳩サブレも抜きなく用意。

既に調略は始まっているのだ。

目的は激励と見学。

本来ならば見学など普通は出来ない。

だが、両者とも許可証を持っている。

鎮守府の中年提督は、激しく混乱しながらも彼らを受け入れるしかなかった。主従は駆逐艦たちからすぐに慕われ、姉系艦娘たちをもキョクキョクさせた。ギリギリギリと輝く男の瞳に、基地の艦娘たちが魅了されてゆく。

再訪を誓って去りゆく主従に対し、基地の艦娘たちは全員で見送った。

ポカンとした顔の提督はやがて震える。

一体、何者だったのだ、あの男たちは。

ただの饅頭売りだと言っていたが……。

そして彼らは、尾張攻略戦を開始した。

C C II : 愛妻家と新年会

妻からヨウカンを買いすぎだと怒られてしまった。

おいしそうに食べていたので少し多く買ったのだと言ったら、呆れられた。

屋敷の地下貯蔵庫に入れておけば、長持ちするだろう。

ドイツのシュトーレンみたいに長持ちするだろうから。

このリヨクチャは柔らかい風味だ。

数箱買ったのでオマケとのこと。

昔はよく飲んでいた懐かしい味。

紅茶がこの地で流通するようになってからは、飲むのはもっぱら紅茶だ。

英国の人々は深海棲艦の侵攻以来、紅茶とチョコレートと日本製品の値段を随分気に

しているように見える。

妻のため、こちらもそれらが容易に入手出来るように出来る限りのことをしている。

スイスやベルギーやオランダなどには、腕のよい菓子職人が多い。

イタリアやフランスやドイツなどもそうだ。

妻にしばしば高級菓子を贈っているが、時に微妙な顔をされる。

リンツ、デメル、王室御用達。

ミシュランの認める菓子職人。

そういった、欧州屈指の菓子。

なのに。

何故だ？

解せぬ。

人口が激減し、魔法の管理でてんやわんやな土地も多い。

人という蓋が無くなって、沸きやすくなっているようだ。

気を引き締めなくてはならないな。

魔法使いは、世界の理（ことわり）をねじ曲げてはならないのだから。

故に、理を守らなくてはならない。

妻の修行も一段落した。

彼女の寿命を延ばす方策も探らなくてはならないし、ましてや妻の喜びそうなモノを

買わなくてはならない。

さて、なにを喜ぶだろうか？

ウエツジウツドの青く精緻な模様ポットに入った紅茶と、サンドウィッチとイモヨウカンとゲッペイとスコーンとデヴォンシャー・クリーム。

それらを妻と共に楽しみつつ過ごしていたら、絹女給（シルキー）が銀の盆に丸められた羊皮紙を載せて持ってきた。

これはまた大仰で古風なことだな。

随分と時代がかつたやり方である。

伝統を重んじる古典派というべきか。

古臭いやり方を尊ぶ時代遅れなのか。

こんな書簡、魔王でさえ失笑するぞ。

日本で言うところ、サムライやニンジャの時代の巻物を届けるようなものだ。

まあ、こうしたやり方を好む者も多少は存在するということなのだろう。

ふむ、これはオタルの羊皮紙か。

日本で現在も羊皮紙が作られているとは意外だ（作者註：小樽で羊皮紙が作られているのは本当です）。

ハコダテから送られてきた書簡。

ご丁寧に封蝋まで施されている。

紅い封蝋からは微量の魔力を感じる。

古典的な封印魔法だ。

もしかして、僕は試されているのか？

魔法使いにしか解けない仕様から、あちらにも腕のいい術者が存在するようだ。

試しに妻に封印を解かせてみたら、リラの花束が出現した。

白、紫、ピンクの三色だ。

花の香りが室内を満たす。

喜ぶ妻を見て、忸怩（じくじ）たる思いに囚われメキメキと音を立てて変化しそうになつてしまった。

いかんいかん、冷静にならなくては。

羊皮紙は新年会の招待状に変化する。

先日、ハコダテの提督を助けたのでお礼を兼ねてのことという。

ハコダテでの新年会は、パブのような居酒屋で酒を呑んだり食事をしたりして親睦を深めるものらしい。

始めは妻も連れていこうと思ったが、魔王級の存在が出席すると聞き及んで残念ながら取り止めた。

彼女に万が一があつてはならない。

僕の宝に傷を付けることはダメだ。

それは決して許されないこと。

彼女を傷付けようとする者は……いかんいかん、つついっ気が昂（たかぶ）ってしまった。

彼女に六重の魔法結界を施し、予備の護符を与え、土人形と鉛の兵隊たちに周囲を警備させ、屋敷にも多層結界と無属性型攻撃術式（マウジウツ）を多数仕込んでおく。

上位悪魔でも、この術式を三発か四発浴びせればただでは済むまい。

念のため、アキタのオガから来訪神のナマハゲに来て貰い、最終防衛要員となつてもらった。

対価は湖水地方とアイラ島とロンドンの観光だ。

これで済むなら安いもの。

地獄の道化師フラックも配置しておくか。

安全策は幾ら施しても足りないくらいだ。

更に絶対消滅型魔方阵（アンドロメダ級拡散波動砲）を描こうとしたら、妻から止められた。

解せぬ。

それはそれとして、妻のためにも素敵なお土産を持ち帰らなくてはな。

薔薇荊の道を抜け、ハコダテに辿り着く。

北の港町は雪が降っていた。

妻を連れてきていたら、風邪を引いたかもしれない。

連れてこなくて正解だな。

先日雨が降ってかなり溶けたらしいが、今また降っているという。

案内役としてメトロン星人が来るとは、意表を突かれた。

中年男性の姿をしているが、如何に科学的に擬装していても魔法使いの目は誤魔化されない。

彼の案内でポインターという年代物の科学的戦闘車輛に乗り込み、異星の少女型ホムンクルスの運転でパブ『トンヌラ』へと向かう。

新年会は盛況だった。

妖精たちがいたら、收拾が付かなかっただろうくらいに盛り上がった。

ハコダテの提督は参加者たちから散々弄られている。

はやくめとれ、はやくめとれ、とやたらにせつつかれていた。

参加者は魔王、魔女（ウィッチ）、英霊、大悪魔、堕天使、国津神、妖魔、などなど、
なんだかごちゃ混ぜだな。

混沌の坩堝（るつぼ）だ。

妻を連れてこなくて正解だった。

彼女は絶対安全圏にいるべきだ。

いっそ、屋敷から出なくて済むように……………。

明日は彼女の好みそうなものを買に行こう。

熊の木彫りなんてどうだろうか？

ペナントもいいかもしれないな。

提督にその話を振ってみたら、何故か微妙な顔をされた。

解せぬ。

CCCⅢ：カタリナ騎士のヨーム亭

ユーロ圏のお荷物と思われている国、ギリシア。

かつては高度な文明を築き、複数の都市国家さえ築いた存在の末裔。

今は見る陰もなく、更には国際社会の崩壊によって厳しい状況が継続していた。

欧州内外での内乱内戦デモ暴動も一段落しており、今は緩やかに再生中である。

そのギリシアはアテネ、聖域（サンクチュアリ）近くにあるロドリオ村。

深海棲艦の侵攻以来、女神アテナを守護し世界平和に陰ながら貢献する聖闘士（セント）たちもてんやわんやだった。

おまけに、海闘士（マリナー）や冥闘士（スペクター）らと一時的に休戦協定を結んで共闘まで行うという有り様だ。

彼らが本気になれば、深海棲艦は容易く壊滅状態まで追い込めるだろう。

だが、それは『世界』の理（ことわり）に反するとして、英国の魔法使い協会から各本拠の代表者宛に通知が来ている。

これを破ることは『世界』と闘うことに他ならないから、戦意旺盛な戦士たちも流石に自重しているようだ。

昼の食事時としては遅めの時間。

ロドリオ村にある居酒屋『カタリナ騎士のヨーム亭』では、ギリシア名物ムサカを食べている南米系の大男がいた。

ムサカとはギリシアを代表する料理のひとつで、平たく言うと茄子と馬鈴薯とミートソースのグラタンである。

他にタコのグリルやタラモサラダを、旨そうにわしわし食べていた。

タラモサラダは魚卵、檸檬、オリーブオイル、玉葱の微塵切りを和えたものだ。

彼の向かい側に座るのは、伊達男っぽいイタリア人。

彼は旬の野菜の上にフェタチーズが載せられたグリークサラダを食べており、オリーブの風味を楽しんでいた。

シチリア産の檸檬を使ったレモネードを、ごくごく喉を鳴らしながら飲んでいく。

大男はオレンジの搾りたての果汁水を飲んでいく。

彼らの中間には籠に山盛りの複数種の切り刻まれたパンが置かれており、それは大層な勢いで中身を減らしている。

時折店で働く少年が焼きたてのパンを籠に入れるが、それらも素早くむしゃむしゃ食

べられていた。

てんでこ舞いになりながらも、少年の顔は明るい。彼らが何者かをよく知っているから。

精魂込めた料理を食べてもらうべく、可愛らしい男の子はせつせと給仕を行うのだつた。

三つの皿を片付けた彼は、次にピーマンのチーズ詰めと烏賊のゲソ揚げのカラマリアとズッキーニのコロッケを注文する。

伊達男も揚げたズッキーニとシユリンプ・サガナキ及び肉団子とトマトソースの Pasta を注文した。

シユリンプは海老、サガナキはチーズ揚げ。これは、海老とチーズ揚げをトマトソースで煮込んだ料理だ。

程よく焼かれた豚串には既に檸檬の汁と塩が振つてあつて、大皿に盛られたそれらはどんどん数を減らしている。

コロッケのズッキーニと卵とチーズの風味を楽しみながら、大男が口を開いた。

「それで、どうなのだ？」

「どうって、なにがだ？」

とほける伊達男に、重ねて大男が言葉を紡ぐ。

「キユーシューの司令官の件だ。」

「あー、『魚座（ピスケス）』の使いっ走りをしているあの眼鏡君のことか？」

「そうだ。」

「あいつは結局、どの聖衣（クロス）にも認められなかったんだろ。あんまり人のことは言えねえけどよ。」

「だが、魔宮薔薇（デモンローズ）を確実に使える。」

「厄介だな、確かに。そうだ、どさくさ紛れに……。」

「そういうことを言うものではない。」

「へーへー、美少女訓練生たちを手取り足取り丁寧に教える立派なセンセイは、まったく言うことが違うね。」

「茶化すな。本来なら、お前もそろそろ弟子を取らねばならないのだぞ。」

「適性者がなかなかいねえからな、俺の星座の場合はよ。」

「それはそれとしてだ、他にもう一人気になる男がいる。」

「ほう、誰だよ？」

「日本人だ。」

「日本人？ 『天馬座（ペガサス）』のことか？」

「『チャールズの木座（ロイヤル・オーク）』だ。」

「……また珍しい名前が出てきたな。ええと、白銀（シルバー）だよな、それ。」

「ああ。一時期候補者がいたのを覚えているか？」

「だいぶん前の話だろ、俺が聖闘士になった頃にはとくに日本へ戻ったと聞いた。あれ？ 冥闘士に殺られたんだっけ？」

「彼は訓練中に大怪我を負い、復帰は無理として日本へ帰った。そして、因縁のある冥闘士と闘い、彼女と相打ちになった。これが公式発表だ。」

「公式発表？」

「ああ。」

両者は新たに運ばれてきた、ピーマンやトマトに米と野菜とを詰めてオーブンで焼いた料理を黙々と食べ始めた。

ゲミスタ。

それがこの料理の名前。

食後の珈琲と大盛りの檸檬のジェラートを口にしながら、大男が再度口を開いた。

「最近、ごく一瞬だが白銀聖闘士級の小宇宙（コスモ）が日本北部で観測された。」

「はあっ!? なんだよ、それ？」

「わからん。」

「わからん？」

「その調査を誰が行うかで、今揉めているのだ。」

「なんでだよ。」

「お前も旨いものが好きだろう？」

「当たり前のことを聞くなよ。イタリア人から恋と歌と食うもんを取り除いたら、なんにも残らないぜ。」

「どうやら、その観測地点はハコダテの基地付近らしい。」

「よし、すぐに俺が行く。」

「ちよつと待て、愚か者。」

「なんで止めるんだ。すぐ調べないとダメだろうが。」

「これが土産物一覧表だ。」

「はあつ？　なんだこれ？」

「では、しかと頼んだぞ。」

「嵌めたな！　よくもつ！」

「交戦は禁止とのことだ。」

「当たり前だ！」

「万一金（ゴールド）聖闘士が返り討ちに遭ったら、権威ががた落ちになるからな。」

「はあつ!!」

「この勘定は払っておく。ゆっくりするがいい。これが土産物の金だ。くれぐれも、買い間違えるなよ。教皇も期待しているからな。」

「どういふことだ!?!」

「この書状に注意事項が書かれている。よく読んでおくように。」

その日、ぼやきながら日本へと向かう超高速飛翔体がいたという。

C C IV : カツカレー戦争

「カツカレーのカツゆうたら、そろもう牛肉やる。」

それは何気ない龍驤の一言から始まった。

彼女の周りに軽空母たちが集まっている。

鎮守府内の食堂の片隅。

真冬の函館の昼下がりに。

外は雪にまみれていた。

今日の訓練はすべてが終了している。

よそからの艦娘も今の時期は少ない。

大和武蔵計四名は依然居座っていた。

今も食べ物談義に花を咲かせている。

暖房が程よく効いている大きな食堂。

艦娘たちが思い思いの時間を過ごす場所のひとつ。

平和な時間の雑談で終わる筈だった。

「あら、カツカレーのカツは豚肉よ。栄養価が牛肉とは断然に違うじゃない。」

すぐ近くにいた足柄が、即時に反応した。

料理上手な彼女の言葉には説得力がある。

「わかつとらんなあ。」

龍驤がニヤリと笑う。

「肉の王者は牛や。それはとづくに決まった話やろ。つまり、カツカレーのカツは牛肉

が大正義。そういうことや。」

「チキンカツもおいしいわよ。」

複数の天龍を引き連れた龍田が、龍驤と足柄の議論に参戦する。

彼女も足柄同様、函館鎮守府では料理上手の誉れを持つ艦娘だ。

彼女の作る鶏肉の龍田揚げを知る者は、成程一理あると感じた。

旨けりやなんでもいいんじゃないの、と言いかねない提督は生憎この場にいらない。

提督と同様の価値観を持つ艦娘たちは、敢えて黙っている。

その方が、おいしいものを食べられる確率が上がるからだ。

「よし、そんならカツカレー勝負でもしよか。」

意外と負けず嫌いな龍驤がそう言った。

彼女の得意料理は粉もんだけではない。

それに面倒見のいい彼女ならば、下拵えに馴れた駆逐艦たちの助力をすぐに得られることは明白だ。

知恵と工夫で、足柄龍田両名の牙城を落城させてみたるわい。

今の龍驤は正に勢いに乗っていた。

乗るしかない、このビッグウェーブ。

勝算無き戦いをしない、歴戦の軽空母。

背筋にゾクリとしたものを感じる、重巡洋艦と軽巡洋艦。

既に戦いの火蓋は切って落とされていた。

厨房の主力たちは現在、執務室で提督と新しい献立や弁当について話し合っている。

料理について考えることが出来る鎮守府泊地警備府は、案外少ない。

大和武蔵たちが函館鎮守府に居座り続ける遠因は、存外根深いのだ。

横須賀からは赤城が訪れて彼女たちの説得を試みているが、現状は芳しくなかった。

それに、料理対決を止められるのは大淀長門加賀妙高辺りだが、全員執務室にいた。

時折四大鎮守府へ里帰りする大和武蔵計四名は、すっかり食べる気分になっている。

どれくらいおいしいものが食べられるのかしら、と小声で会話するくらいであった。

彼女たちの目は既に爛々と光っている。

どうやら、止めるつもりは無いらしい。

駆逐艦たちの大半はとつくに盛り上がっており、龍驤足柄龍田三者のいずれかに与（くみ）して下拵えに取りかかっている。

もう、この勢いは誰にも止められない。

もう、どうにも止まらない。

そうして、カツカレー戦争が始まった。

ノリノリな青葉がどこからともなく現れ、舞台を仕切り始める。

ソニー製の古い業務用最上位級ビデオカメラで撮り始める衣笠。

脚本らしきものを即興で書いているマスターオータムクラウド。

大本営広報課がいつの間にか、手際よく準備を進めていた。

こうしたちよつとした刺激が日々を生きてゆく香辛料だとばかりに、龍驤足柄龍田は周囲の艦娘たちを捲き込みながら料理対決を繰り広げるのだった。

味比べ！

味勝負！

審査員の一人として偶然商談に訪れた美濃柱が抜擢され、彼は内心呟いた。

なんだか大変なことになつちやつたぞ、と。

しれつと審査員に加わる大和武蔵たちに囲まれつつ、旨いものに思いを馳せる孤独の

うんまいもん好きであった。

一方、執務室では次期主力モバイルス……もとい、弁当の話が加熱していた。多地域の人々が侃々諤々（かんかんがくがく）とやり合っている。

鶏の唐揚げ弁当を主軸にしようとはまでは漕ぎ着けたが、そこから停滞していた。

内容は以下の通り。

鶏の唐揚げ大盛り。

キャベツの千切り。

ピリ辛こんにゃく。

梅干し載せご飯大。

季節の野菜の煮物。

追加で即席味噌汁。

そこまでは無問題。

弁当にハンバーグを付ける付けないで議論になり、そのハンバーグの具材で更に議論が白熱化した。

ハンバーグの下に敷くパスタすら、ナポリタンにするかペロンチーノにするかで熱くなっている。

冷めてもなお旨い、という基本線で合意はあつたもののそれ以降は難航していた。

「ハンバーグと言えば豚肉です。」

「味わいを重視して牛肉ですよ。」

「合挽き肉も悪くないんじゃないか？」

「中途半端にせず、追求すべきです。」

踊る踊る会議は踊る

空転する車輪のまま

汽車は進まぬ

線路も見えぬ

試作品的特盛唐揚げ弁当の試食を横須賀から来ていた食通名高き一航戦の赤城に頼んだ面々は、彼女からじろりとした視線を浴びた。

「二合のご飯、梅干し二個、鶏の唐揚げおよそ三人前相当、大量のキャベツの千切りに煮物も沢山、ハンバーグは大きめなものが一個、ペペロンチーノ一人前と矢鱈に量がありますね。とても一名で食べきれぬ量ではありません。一体全体、私をなんだと思われているのですか？　ちなみに、長門さんはこの量を食べられますか？」

「無理だな。」

「そういうことです。艦娘二名か三名で食べる量ですよ、これは。」

「確かにこれは多いですね。」

提督もふむふむと頷く。

「大和さんや武蔵さんはどうでしょう?」

「提督、艦娘をなんだと思われているのですか? 自衛隊の方やフードファイターな方から完食出来るかもしれないかもしれませんが、これは私たちの許容量を遥かに超えています。何人前も食べられる胃袋なんて誰も持ち合わせていませんから、その辺はご承知おきください。」

結局、特盛唐揚げ弁当は取り皿に分けて皆でおいしく食べた。

ハンバーグでなくソーセージなヴルストはどうかとの意見も出て、会議は更に迷走してゆく。

全員が問題なく納得する展開は無い。

提督は落しどころを探りつつ、唐揚げ弁当一種二種や地域限定版の提案を行うのであった。

飽きない工夫も大切だと語り、献立を少し入れ替えることで負担を減らそうと誘導してゆく。

鶏の唐揚げをチキンカツに変えたり、野菜の煮物を肉じゃがに変えたりとか。ちよつとした変化が多様性を生み出すのだと話し、会議を前進化していった。

ややこしかった会議をなんとか終え、鳳翔間宮たちと共に食堂へ向かう。

弁当ひとつで皆熱くなる。

よいことなのか、そうでもないのか。

次期主力弁当の決着はまだまだ遠い。

食堂へ近づくと、青葉の声が聞こえてきた。

かぐわしい匂いが鼻をくすぐってくる。

彼女、またなにかやらかしているみたいだ。

島風がいつの間にか背後から抱きついてきて、現在カツカレー戦争が始まっているこ

とを私の耳元で囁いた。

あれまあ。

道理で香辛料の匂いが漂ってきている筈だ。

「提督も審査員だ。公正な判定を頼んだよ。」

彼女はそう言つて、龍驤を手伝いに行つた。

全員で顔を見合わせ、食堂の扉をくぐつた。

「おーっと！　ここに提督に鳳翔さん間宮さんたちの入場です！　カツカレー戦争の行

方を決めるのは一体誰だっ!？」

煽るような、青葉の喋りが聞こえた。

駆逐艦たちだよ、と私は内心呟いた。

小説投稿サイト『小説家になっちゃったりして』で連載している、書籍化作品第三巻のオマケになにを書こうかと思いつつ。

CCV：提督、執務室に散る！

たまりにたまった有給休暇の消化と珈琲文化の吸収のため、筆頭秘書艦の五月雨（さみだれ）がここ九州から函館鎮守府へ出掛けて早数日。

なんだか、古女房がいなくなってしまうた気さえしていた。

気のせいじゃ、気のせい。

窓の外では雪が吹雪いている。

九州の地も雪国になっていた。

函館も雪が降っているかのう。

五月雨……ワシは……。

「珈琲をどうぞ、提督。」

「すみません、香取先生。」

「いえいえ、お安いご用です。」

「ほう、これはまっこと旨い。」

「函館鎮守府からシヴェリア鉄道経由でキリマンジャロを入手しましたが、お口に合っ

たようでなによりです。」

「お手間をおかけしました。」

「ふふふ、提督のためでしたら例え火の中の水の中ですわ。」

「恐れ入ります。」

執務室の中には、香取先生と秘書艦候補の鈴谷と夕張。

香取先生はわかる。

ととても頼りになる方じゃ。

だが、なんでこいつらまでおる？

「その、先生。」

「はい、なんででしょう?」

「何故にこやつらがここにおるんです?」

「五月雨さんと話をしまして、秘書艦強化策を打ち出してみました。」

香取先生が眼鏡を光らせながら言った。

「秘書艦強化策?」

「ええ。今回のように五月雨さんが休暇でいなくなり、私も作戦や出張などでいなくなった場合、秘書艦業務を行える艦娘が現状では他におりません。」

「なに、ワシ一人でもなんとかします。」

「鹿島にも話してみましたが何故か脅えるばかりで話にならず、そこで候補を募りました。」

ああ、鹿島先生はことあるごとに転属願を持つてくるからのう。しかし、よりにもよつてこいつらとは。

気分を落ち着けるため、かぐわしい香りの珈琲へと口をつける。

旨い。

痺れるような旨みじやの。

深みとコクが、アフリカの大地を伝つてワシの元へと届けられてゆく。

褐色の液体を飲み干した。

なんで五月雨はあそこまで凝りまくつて、あげに不味い泥水ばかり量産するんじや？

ワシの目の前には香取先生。

にこにこ笑つてワシを見つめる、安心のお方じや。

いかん、なんだかぼおつとしてくる。

「珈琲をもう一杯如何でしょうか？」

「先生の淹れる珈琲なら何杯でも。」

「ふふふ、本気にしちゃいますよ。」

先生が給湯室へと去つていった。

少し調子が悪くなってきた。

おかしいのう。

「提督、ここわかんないんだけど。」

「私もちよつと聞きたいんですが。」

右後方から鈴谷、左後方から夕張が書類を持って机までやって来た。

そして、ぴたりと密着してくる。

なんのつもりじゃ？

「お前ら、なにを企んどるんじや?」

「提督の役に立ちたいと思ってさ。」

「そうですよ、我らの提督の為に。」

「嘘こけ。」

書類はケツコンカッコカリのものだ。

ワシが署名すれば、効力を発揮する。

「ふざけんなよ、お前ら。……なにをしとる?」

「スーパードラックホークのお手入れに決まっているじやない。」

「黒光りする提督のスタームルガーをよく磨いておきませんと。」

「耳を噛むな、舐めるな、息をかけるな、ふざけるんじやない。」

「そろそろさ、進展があつてもいいんじゃないかなって夕張さんと話したんだ。」
「提督は誰ともケツコンしていませんから、既成事実を作ろうと思ひまして。」

なにい……体が……ゆうことを聞かん？

小宇宙（コスモ）が高まらないだと？

火事場の馬鹿力も発動せんし、なんじやこら？

一服盛られた？

どこで？

まさか？

カップに無味無臭の薬品を塗つとつた？

それとも……まさか彼女が？

そんな……そんな筈はない！

「お前ら、今ならまだ悪ふざけということにしちやるからその手をそこから離せ。」

「もうね、散々待つていたんだよ。」

「私も、待ち続けていたんですよ。」

「正気に戻れ、お前ら。お前らがワシのことを好いとう筈など無かろうが。」

「問答無用！」

荒馬な黒馬がホルスターから勢いよく飛び出る。

「ぐあっ! やめんか! こうなれば仕方ない! スネークバイト!」

「おっぱいがくすぐったいわ、私の提督さん。」

「その程度じゃ効きませんよ、私の提督さん。」

「……なん……じゃと?」

「ツイン桃色タイフーン! エッチな気持ち、高めてみせましょう!」

「ぐはあ!」

「提督、珈琲をお持ちしました。」

「え、ええ、す、すみませんな。」

「いえいえ、どうぞお召し上がりください。」

優雅な雰囲気と共に香取先生が入室し、机に珈琲を置く。

ワシの背後でにこにここと笑う鈴谷と夕張。

一時休戦となったが、油断はできんとう。

ちよつと首をかしげながら席に着く先生。

珈琲の芳香を体内に取り込み、心の中で咆哮する。今のうちに回復じゃ!

高まれ、ワシの小宇宙!

この事態を打破せねばならぬ!

この程度の麻痺毒など効かぬわ！
ギリシアのあの日々を思い出せ！

「提督、一体誰とケツコンするの？」

「提督、どなたとケツコンします？」

先生の目を盗みながら、両者がワシを責め立てる。

そんなところを揉むな！

そんなところを咬むな！

負けぬ！

負けぬ！

ワシは負けぬ！

燃えろ、火事場の馬鹿力！

高まれ、ワシの眠れる力！

うおおおおおおお！

燃えるほど、ヒート！

弾けるほど、ビート！

「そうだ、香取先生。」

「はい、なんでしよう、鈴谷さん？」

「そろそろお昼だからさ、食事に行かれたらいいんじゃない?」

「そうですよ、先生が休まれないと提督も休憩出来ませんし。」

「いいんですか、提督?」

「ええ、どうぞ、先生。」

「あの……お顔の色があまりよくないみたいですが……。」

「お気になさらず、どうぞ食事に行かれてください。こちらは少々取り込んでいますので。」

「はい、わかりました。」

一瞬油断した際に、冷え始めた珈琲を口に注がれる。

ぐはあ!

即座に吐こうとしたが鼻をつままれ口を塞がれ、あちこち舐められたりしている内に飲み込んでしまった。

不覚。

ワシ、一世代の不覚じゃ。

悔しいのう、口惜しいのう。

痺れが一層酷くなってきた。

どんどん体が熱くなってくる。

一部が、ギンギラギンにさりげなく危険領域に突入しとる。

ヤバイ！

ヤバイ！

ヤバイ！

獣欲が理性で制御出来なくなってきたとる。

しかし、香取先生までが……ワシの香取先生までがグルとはな！

信じたくない！

信じたくない！

信じたくない！

……ワシは……ワシは……ふっ、ふはは！

ふはは、つるんでやがる！ ふはは！ みんなつるんでやがる！

くっ、殺せ！

「お、お前ら……いい、いっ……たい、なにを……しとる？」

「いいじゃん、ほら、ここもあそこもとっくに見慣れているんだしさ。」

「そうですよ、ほらこんなところまでこんなになっちゃっていますし。」

「ワシは……ワシは……負けんぞ！ 燃え……上が……れ、ワシの……セブ……ン

センシズ！」

「あのさ、提督。香取先生がなにも気づかなかったなんてあり得ると思う?」

「……………なん……………だと?」

「提督って、非情に振る舞っているつもりでもけっこう脇が甘いですよね。」

「ふざ……………ける……………な。」

「明石さん特製だからね。青銅聖闘士だったらとつくにダメになつて居る筈なのに、流石は提督。さすていだね。じゃあ、ご褒美に直接媚薬を飲ませてあげるね。」

「ん……………ん……………ふはあ、鈴……………谷、お前……………許さ……………ん……………ぞ。」

「姫級深海棲艦用の秘薬ですからね、如何に黄金に近い提督でもそろそろ効くでしょう。」

「早霜や春雨から何回も相談受けてんだよね。提督の真意が……………つていうよりさ、とつとつ諦めて観念しちゃうよ。最近、香取先生とよく夜一緒だよな? 提督もさ、過去に囚われてばかりじゃ、どこにも行けないよ。ね、一緒に逝こう。どこまでも一緒だよ。大丈夫、全部受け止めてみせるから。あたしは提督のことをいつも思っているから。」

「……………お……………お前……………に……………な……………にが……………わかる!」

「この頃、明石さんのお店でワセリンとティッシュを大量購入しているそうじゃないですか、提督。あんなに毎月何枚も買っていた桃色円盤を全然買わなくなったと聞きましたよ。『巨乳超作戦』や『喪服巨乳女将の献身』や『欧州巨乳百科』や『巨乳制服系機内

食』や『巨乳の檻』どころじゃないことをしているとかいないとか、さすていですね。」

「デ……魔宮薔薇（デモンローズ） ツ！」

最後の力を振り絞り、魔の薔薇を撒いた。
だが。

身を守る筈の薔薇は、あっけなく散った。

鍛え抜いた我が小宇宙が発動しないだど？

「ムダムダムダ！　じゃ、始めよっか。」

「そうですね、皆さんお入りください。」

勢いよく、残りの布が宙を飛んでゆく。

最後の防衛線があっさり崩壊してゆく。

ガチャリ。

執務室の鋼鉄の扉が開いた。

段々霞んでゆく意識の中、扉の施錠される音が遠くから聞こえてくる。

複数の足音がした。

伸ばした手を掴まれる。

やわらかい感触がした。

「もう我慢しなくていいんですよ、提督。」

耳元でやさしいやさしい声が囁かれた。

やわらかく冷たいモノたちに包まれる。

だが!

「わ……………我は……………無……………敵なり! 我が……………光速……………拳に……………か、かなう……………ものなし! わ、我が……………一撃……………は無敵……………なり!」

「武技言語? まさか、こんな隠し玉まで持つているだなんて!」

「でも、判断が少々遅かったようですね。お稲荷さんアタック!」

「ぐはあ!」

「そろそろ、終わりにしましょう。」

「そうよ、クロコダイン。」

「そうだよ、くっ殺大尉。」

「ま、まだじゃ! や……………やらせはせん! や……………やらせは……………せんぞつ! お前らごときにやられはせん! この……………ワ……………ワシの誇り! やらせはせん! や……………やらせは……………せんぞつ! やら……………せは……………も……………燃えろ、ワシの……………小宇宙! ビツグバンを……………ワシは……………流星……………拳!」

「そよ風みたいね。」

「……………な……………ん、だと!」

「極太魚雷！」

「ぐはあっ！」

「MAN解！ 喰らえっ！ 今！ 必殺の！ おっぴろげジャンプ！ これが真のフィニッシュホールド！」

「ぐはああっ！ ……い、犬魚先生、ごめんなさい……。」

そして、執務室は桃色に包まれた。

C C VI : 一航戦の青い娘の悩みは尽きない

加賀です。

函館鎮守府で、正規空母兼空母系教官兼提督の嫁候補として働いています。

私たちは艦娘として日々愛する提督の元で研鑽を積んでいます。その肝心の彼は私たちへ一向に手を出そうとされません。

そんなに私たちには魅力が無いのでしょうか？

解決の糸口を見つけるべく、大湊（おおみなと）の赤城さんに電話してみました。経験の豊富な彼女ならば、私たちになんらかの光明を与えてくれることでしょう。

しばし雑談の後、本題に入ります。

「提督が私たちに手を出してくださらないのです。どうすればいいのでしょうか？」

「そりゃあもう、夜這いですよ。勝負下着を装備して開幕爆撃すれば、石頭な提督も一発轟沈です。」

「ヨバイ、ですか？ それはなんでしょうか？」

「夜這いはずね、提督のお布団に潜り込んであつはんうつつんな行為をすることです。」

「それは添い寝の一種でしょうか？」

「添い寝の発展系ですね。」

「添い寝でしたら、日替わりで皆が何度も何度も経験しているのですが……。」

「ふえ？」

「毎晩二名ずつ波状攻撃を重ねているのですが、一向に陥落しません。」

「え？ あのう……函館の提督はその、もしかして女性に興味がない……。」

「あります。形状変化も毎回確認出来ています。興味が無い筈ないんです。」

「えっと、そうになると、おそろしく理性が強いかよほどのヘタレか……。そうだ、混浴です。何名もの艦娘と混浴して密着すれば、石部金吉な提督も瞬殺出来ますよ。」

「既に提督は何度も何度も艦娘たちと混浴しています。密着は何度も何度も行っています。」

「ふわっ？ ず、ずいぶんと手強い方ですね。」

「はい。他になにかよい手立てはないものでしょうか？」

「ええと……そうですね、呉第六鎮守府の鳳翔さんに聞かれてみては如何でしょうか？
人妻ですし。」

「ありがとうございます。そちらに聞いてみますね。」

「お役に立てなくてすみません。」

「いえ、攻略の手掛かりを得られました。ありがたく思います。」

「はい、お電話変わりました。鳳翔です。」

「函館鎮守府の加賀です。いつもお世話になっております。」

「いえいえ、こちらこそお世話になっております。」

「今回はですね、是非とも鳳翔さんにお聞きしたいことがあってお電話させていただき
ました。」

「私でお役に立てることでしょうか？」

「はい、単刀直入にお聞きしますが、鳳翔さんはどうやってそちらの提督とケツコンカツ
コカリされたのでしょうか？」

「あらあら。なかなか手こずっておられるようですね。」

「お知恵をお貸し願いたいです。」

「その願いを叶えるのは難しいですね。」

「秘匿事項なのでしょうか？」

「いえ、私の場合は提督から求婚されました。」

「やられました。」

提督とのケツコンへの道は、どうやらまだ遠いようです。

「加賀さん!」

大本営で働いている、五航戦の妹の方が遊びに来たようです。

彼女を空母系教官として指名したのは私ですが、何故ここまで慕われるのでしょうか

?

私が彼女の愛を受け入れたら、提督も或いは、私たちの求愛を受け入れてくれるのではないのでしょうか?

……私はなにを考えているのでしょうか。

無邪気にしがみついてくる彼女と共に、食堂へ向かいます。

そうだ。

今晩は提督との添い寝の日です。

今宵は禪（ふんどし）ではなく、エッチな下着とやらを装備しましょう。

胸部も晒（さらし）ではなく、色っぽいブラジャーを着けてみましょう。

これで少しは提督も興奮してくれるのでしょうか?

「どうしたんですか、加賀さん?」

「提督をどう攻略しようかと思つてね。」

「あら、簡単ですよ。」

「えっ?」

彼女の姿が夕闇に紛れ、なんだかあやふやに見えます。

「問答無用でやつちやえばいいんです。」

「瑞鶴!」

「はい?」

「そのところをみんなの前で詳しく!」

「はい?」

私は携帯電話を取り出し、緊急メールを送ります。

「講堂へ行くわよ!」

「えっ? なに? えっ? あの、加賀さん、一体なにを?」

盲点だったわ。

こんなことに気づかないなんて。

緊張した面持ちをした鎮守府の面々が、次々に講堂へやって来ました。

彼女の言葉を謹聴しなくては。

「では瑞鶴、先程の発言を詳しくみんなの前で話してちょうだい。」

「えっ？ あの、やるって話をですか？」

「そうよ。」

「でも、私……。」

「大丈夫。みんな、口の堅さは確かよ。話しにくいことでしょうか、経験談だけではなく一般論を交えてくれていいわ。」

「あの、私……。」

「貴女が誰とどう繋がっていようと、誰も非難しないわ。なにがあっても私が貴女を守るから、安心して。」

「そ、それはありがたく思いますけど、あの、ち、違うんです。」

「なにが違うのかしら。」

講堂に艦娘が集まってきました。

一〇〇名以上はいるようですね。

「私……私……処女なんです。」

「……え？」

「その……私、耳年増なだけで、経験なんて一切無いんです。」

「それにしても、さつき自信たっぷりに言ったわよね。」

「こんなことになるなんて、思いもしなかったんです。」

「瑞鶴。」

「はい。」

「女は度胸よ。」

「加賀さーん！」

結局、第三者からの観点から見た私たちと提督についての意見報告という感じで無難にまとめました。

メールで詳しい内容を告げなくて、本当によかったです。

一旦腹を据えた瑞鶴は流石に大本営で講話に馴れていたことから、流暢に思ったことをきれいにまとめて話してくれました。

かなり好評を得られたようで、一安心しました。

しつこくない程度に提督とさりげなく一緒にいられるよう、より一層頑張らないといけないですね。

瑞鶴がぶうぶう言うので、彼女に持たせる手土産は奮発しました。

間宮羊羹が二棹と李さん特製月餅一箱で済んで、ほっとしました。

CCVII：甘き死の香りよ、来たれ（前編）

先日、ワシはテロ屋どもを自慢のスタームルガーブラックホークで一掃してやった。

その見返りとして、助けた有馬のお嬢ちゃんが函館鎮守府と共謀して大本営に乗り込んだ挙げ句にワシの昇進を取り付けてくれた。

中佐じゃ！

ワシは中佐じゃ！

二階級特進じゃ！

まっことありがたいのう。

これでワシも野望の道突き進むことが出来るんじや。

「やったじゃん、提督、流石だね！」

「ウエーイ！ 提督、やるじゃないですか！」

「提督が昇進すれば開発費用も増大。新兵器の開発は任せてください！」

「テイトク、シャンパン開けましょうよ、シャンパンを。」

「ヌハハハハ！ お前らっ！ ちょっとこっち来い！ こっち！ 座れ！ 座れ！ グ

ハハハハ！」

右に鈴谷、左に夕張、右膝にイヨ、左膝に

ポーラを座らせる。

これぞ、鉄壁布陣。

よし、逝くぜ！

「お前らっ！ 脱げ！ 脱げ！ 無礼講じゃ！」

「もう、提督はエツチなんだから。」

「靴下は残した方がいいですか？」

「ウハハ、提督、私たちを脱がせてどうするんですか？」

「ポーラ、脱ぎまーす！」

今宵、鳳翔ママの店は貸し切り。

邪魔者は誰も居ない。

ザ・無法地帯！

ヒトミもザラも、ワシの差し入れたオレンジジュースを飲んでぐつつすりよ。

くくく、ワシを阻む者は誰も居ない。

「よし、ワシの天元突破な紅蓮羅漢をお前らに見せちやる！」

「「「おーっ！」」」

「提督、朝ですよ！ 起きてください！ 鈴谷さんと夕張さんとイヨさんとポーラさんも早く！ 起きてください！」

筆頭秘書艦にして暴虐を司る五月雨（さみだれ）が、朝もはようからワシの私室に乱入してきた。

彼女の声が、夜のジェットピストルを乱射連射したワシの耳にキンキン響く。

「サミダレンダー、朝からうるさい。」

「五月雨です！ くっさいくっさいにおいを撒き散らしてなにゆうとるですか！ 何名も私室に連れ込んで！ 駆逐艦たちの教育に悪いでしょう！ 香取先生に怒られますよ！ まったくもう！」

「サミット、お前も駆逐艦じやろうが。」

「やつかあしいわ、このジゴロリコン！」

「ジゴロリコンではない、提督じやよ。」

「山風ちゃんや浜風ちゃんや朝霜ちゃんや清霜ちゃんとかには手を出さないでくださいよ、ホントにもう！」

「誰があんなシオンベンくさい娘たちに手を出すかよ。但し、浜風ちゃんは除く。」

「どうだか。早霜ちゃんとはあんなに……。ほら、鈴谷さんに夕張さんにイヨさんに

ポーラさんもそんなことをしていないで早くシャワーを浴びて服を着てください。提督もほら、今日は函館鎮守府の方々が来られる日でしょう？ 明日は演習があるんですからね、しっかりとしてください！ って言うか、既に函館鎮守府の方々はロシア製の戦鬪ヘリのハインドで当基地に乗り込まれています。」

「サミダリユーン、卿(けい)に一任するぞ。」

「誰が万騎長(マルズバーン)ですか、誰が。」

「まだ残つてた。こんなに出てくるよ、提督。」

「私の方もぼたぼた垂れてきます、流石提督。」

「あーっ！ 出る出る出るどんどん出てくる。」

「テイトク、ずいぶん激しかったですからね。」

「なにしとんじや。はよう、洗い流さんかい。」

「あんたら、なんちゆうもんを見せるんです！」

「そりやあまあ、やることやったらこうなる。」

「サンダークロウ！」

「ぐはあ！」

「あのですね。私はあなた方が仕事以外の時間にナニをしようと興味は無いんです。痴態の限りを尽くそうと、それはあなた方の勝手です。でもね。こんなことをよその人た

ちに知られたら、鎮守府的に困るんですよ。わかります？ ……わかります？ ……おう、このチンピラチンポポポンポコリン提督。わかるかつつってんだろ？」

「あの……。」

「おうおう、私の言うことが聞けないってのかよ、ジゴロリコン提督？ あ？！」

「は、はい、わかりますですはい。」

「よろしい、ではさつそく五名ともシャワーを浴びてきてください。シャワー室でおっぱじめないでくださいよ。これがバスタオルです。各種液体がこびりついて異臭を放つシーツは直ぐ様取り替えますから、とつと起きてください。」

「」「」「」「」

熱いシャワーを浴びて柑橘系のコロロンで香氣武装し、私室から隣の執務室へと移動する。

「そいでの、函館との明日の演習の件じゃが……。」

「廬山昇龍覇！」

「ぐはああつ！」

「竜巻旋風脚！」

「ぐはああつ！」

「かめはめ波!」

「ぐはああつ!」

「おうこら、くつ殺中佐様よ。なに朝からすつきりした顔しとんじや。」

「五月雨、口調がおかしい! 口調が! キヤラ崩壊しとるじやろが!」

「やつかあしいわ! 朝から盛るな、つて私は言ったよね言ったよね。」

「う、うむ。」

「あのね、下卑た欲望のままに行動しているから、提督は転落人生の真つ最中なんですよ。提督がダメになったら、私みたいになんとかなる者はいいですよ。でもね、戦闘バカな生活無能者だったり、提督にべったり依存していたり、提督にずっと憑いていこうと決意している子たちはどうなるんです? 今回たまたま昇進出来ましたけど、都合のいい展開なんて、物語の中だけですからね。」

「ん? 憑いてくる? ん?」

「こまけえこたあいんですよ、提督。あなたの無駄に大きくてよくしなる竿は、流れに逆らうだけのモノなんですか? 泥水を夜に何度も何度も吐くだけの代物なんですか? 香取先生がとつても心配していましたよ。やるだけやって、ほつたらかすなんてことはしませんよね?」

「あ、まあ、その……。」

「提督、何人もの同業者がここ数年来、沢山『事故』で亡くなったり行方不明になったりしているのは知っていますよね。大本営がその後釜や補充に苦戦していたり、函館鎮守府が崩壊した基地の子たちを一時預かったりしていることは知っていますよね？」

「お、おう。」

「そうなりたいんですか？ どこかの山奥やどつかの海の奥深くで人生を終えたいんですか？ コンクリートの中に埋もれたいんですか？ 不名誉除隊どころじゃ済まないんですよ、ねえ、中佐？ 変わり果てた姿になりたいんですか？ 退役後、塀の中と外を往復する人生の方がまだマシだと思います？」

「い、いや。」

「なら、もつとしゃんとしてください。今は『まだ』私たちの代表なんですから。」

「う、うむ。」

「函館は手強いですよ。」

「うちの奴らの方がずっと強いわ。」

「そうです、今回負けたら大変なことになりますしね。」

「ん？ 今回行われるのは、通常演習だよな？」

「ええ、結果次第で提督の立場が変わります。」

「は？ ええ？ なに？ ワシ、そんなの聞いてへん！」

「今、知ったでしよう。」

「サミュエル、きさん！」

「五月雨です。さつさと応接室へ向かいますよ。応対はあの女がしてくれていますが、早く行った方がいいでしよう。」

「おま、なんちゆうことを陛下にさせるんじや？ それに陛下を『あの女』呼びするのは止めろと言うたじやろうが！」

「快く引き受けてくださいましたよ。」

「五月雨ーっ！ よくも謀つたなっ！」

「あなたの荒ぶるおにんにんがイケないのですよ、中佐。」

「国際問題が……。」

「なーに、あの女とヤっちゃやえばいいんですよ、ヤっちゃやえば。」

「そういうことを言うな！」

「だったら、実績を挙げてください、中佐。今のあなたの判断は正直なところ、支持致しかねますので。」

「おお、やればええんじやろ、やれば！」

「その意気ですよ、提督。」

なんとかいろいろ誤魔化した。

深夜。

腕の中にすっぽり納まつとる青葉から報告を聞いた。

「かなりヤバいですよ、司令官。この演習をしくじったら、司令官はア○ル公開恥辱の刑を受けた上で辺鄙な基地に飛ばされます。そして、そこで半年以内に消されます。合法的且つ物理的に。」

「そんなにヤバいか。」

「ええ、私が司令官の子を妊娠したらヤバいくらいに。」

「ふつ、あり得んが、その時は認知くらいしてやるぞ。」

「じゃあ、その時は三名くらい水増ししましょうかね。」

「おいおい、増えすぎだぞ。」

「いいじゃないですか、子供がいつぱいの家庭つて。提督、退役したら一緒に暮らしませんか？　小さなおうちで仲良く暮らして……。」

「ふつ、そんな先のことなどは約束出来んな。」

「それもそうですね。では、近い話をします。」

「……………ほう、大本營の奴らめ、面白いことをしちよるのう。」

「何人が殺つとききます？ 私、ひとつ走りしてきましようか？」

「許可したらホンマに首を持ってきそうだから、ダメじゃな。」

「殺りたい人がいたら、何人でも言つてくださいね。私、ガンガン殺りますから。提督の敵は私の敵です。」

死んだ目にかすかな光を灯し、添い寝するようになってから従順さを増した重巡はひとと抱きついてきた。

「諜報、防諜、調略、破壊工作、虚報、流言拡散、暗殺、全部青葉にお任せくださいね。あと、机の上に浜風ちゃんの隠し撮り写真と私の自撮り写真を入れた封筒がありますので、後でお確かめくださいね。青葉はいつも司令官を見守っていますから。」

かすかに聞こえる波の音に紛れ、女が甘く囁いた。

昨日は大変じゃったのう。

執務室でスポーツ新聞のエッチな欄を熟読しながら、幾つもの肌を反芻する。

あんなに何名も相手をする、自慢のスーパーブラックホークも流石に弾切れとなるわい。

慈悲深い陛下はなあなあで済ませてくれたが、五月雨の奴、なにを考えるとる？

しかし、陛下はなんでワシの匂いをかいどつたんじゃろうな？

まあ、昨晚は普通に普通じやったから、普通に演習しようか。

そろそろ、函館の提督と打ち合わせでもするか。

よし、行くか。

ドゴオン！　といきなり安来鋼製の扉が吹き飛び、ワシは咄嗟に飛び退いた。

あつぶねー！

なんじゃ、出入りか？

ザラ姉ちゃんとヒトミ姉ちゃんが無言でワシに向かって突進し、ツープラトン攻撃でワシを押し倒した。

「ぐはあー！」

上に乗った二名が、ワシに拳骨を何度も何度も何度も何度も叩きつける。

マツハ・ピストン・パンチかつ！

寸時、気を失ったらしい。

二名から代わる代わるモーレッツアタロウ的往復ピンタを喰らい、目覚めたワシのライフは零に近づいてゆく。

「テイトク、5Pってなんですか、5Pって！　見損ないましたよ！　テイトクはホモでジゴロリコンで人間の腐りきった原初の悪徳をすべて集めた、最低最悪のボトムズな屑野郎です！」

「あ……あの、さ、流石にそれは言い過ぎじゃないのかな？　なあ、ザラ君。あと、ワシはホモでもロリコンでもない。」

「こうなつた以上、テイトクは我がファミリーに加えて破竹の進撃をするしかないですね。」

「は？」

「そして、日本を裏から支配した暁には、私もテイトクの妻です。」

「ちよー、話が飛躍し過ぎ！」

「そう、それは出来ない相談です。」

「ヒトミ君？」

「提督は既に私の義弟、ならば提督は潜水艦も同様。つまり、今から提督は潜水艦の者なんです。」

「な、なんだってーっ!？」

「私は14ちゃんの姉。故に、彼女を祝福する義務がある。」

「え……あの……ヒトミちゃん？」

「提督はですね、潜水艦艦隊を率いて、海の王にならねばならぬということです。」

「そんなの、ポーラの姉として許せません！」

「提督。」

「なんじゃ、五月雨。」

「祝言は取り敢えず四つ行いますか？」

「なに言ってるの、お前！」

いきなり始まった残虐ファイトなキャットファイトをなんとか止めさせた。

最悪な空気の中、函館鎮守府側との打ち合わせを始める。

ロシア製の函館鎮守府所属のハインドが並ぶ中、企業戦士然としたおっさん提督並びにフード付き外套で全身を覆った艦娘たちに説明を行う。

昨日からずっとこうじゃの、この艦娘たち。

「お手柔らかにお願いしますね。」

にっこり笑う函館提督。

「は、はあ……どうも。」

昨日貰った大量の菓子折りは、既にうちのポンコツ艦娘どもがウメエウメエなこれメチャクチャウメエと貪り食って既に羊羹も月餅もクッキーもなにも無い。

阿呆どもが。

しかし、この男、一分の隙もない完璧な流れだ。

おそらく、提督強度一〇〇〇万パワーは超えていることだろう。

「ところで、中佐。」

「なんででしょうか？」

「函館側が仕掛けてきた。」

「いや、話しかけてきた。」

「その、そちらの艦娘たちはまだ揃っていないようです。演習直前に姿を現すとは昨日お聞きしましたが。」

「え、あ、まあ、そのですな。」

「ワシは隣の五月雨に耳打ちする。」

「ワシらで殺るしかないのう。」

「え、イヤですよ。絶対イヤ。」

「そこをなんとか。」

「関係している子たちを呼ばばいいじゃないですか。」

「そんな恥ずかしい。」

「高校生かつ！」

「「「待たせたな、提督！」」」」

「き、貴様らはっ!?!」

「天神創成剣の長門！」

「天地崩滅斬のグラーフ・ツェツペリン！」

「重爆雷斬刃のガングート！」

「武神光臨剣のリシユリユー！」

「メインヒロインの鈴谷！」

「今週のハイライト村雨！」

「クワーツカッカッカ！ 勝てる！ これで勝てるぞっ！」

そして、熱き神々の戦いに繋がる演習が始まりのゴングを鳴らした。

CCⅧ：甘き死の香りよ、来たれ（中編）

なんだかおかしい。

演習をする筈なのに、誰も艤装を装着して海へ出ようとはしない。

あれ？

「あの……中佐？」

私はこの鎮守府の司令官に話しかけてみたが、彼はニヤニヤして「殺れっ！ 全員血祭りにあげてしまえっ！」などと物騒なことを喚いている。

私たち、九州のこの鎮守府へ演習に来たんだよね？

「提督、殺るしかないみたいよ。」

「戦艦棲姫さん、ナニを言っているんですか？ 他の皆さんもなんで冷静なんです？ あれ？ 私がおかしいんですか？ 取り敢えず明石さん、夕張さん。何時でも不測の事態に対応可能なように入渠の準備とストレッチャアの用意をお願いします。……なんだこれ？」

「よし！ 行くぞ！ 戦いのゴングを鳴らせ！ 戦闘開始だ！」

「あの、ガングートさん、演習をしないんですか？」

「問答無用！」

「ふっ、ヌルいわね。」

「な、なにーっ!?!」

ガングートが繰り返し出した蹴りは、戦艦棲姫が外套ごと受け止め絡め投げ返した。

「喰らえっ！ 幻影破裏拳！」

「ぐわあああああああつっ！」

「ガングートオオオッ！」

「これ、演習じゃないです。」

戦艦棲姫が放った破裏拳流秘技の犠牲となったガングートを入渠施設に送るべく、私はストレッチャーで彼女の搬送を指示する。

演習をしなくていいのだろうか？

なんだか超人プロレスみたいだ。

「どうかしら、提督？」

「演習をしなくていいんでしょうか？」

「いいんじゃない？ 向こうが殺る気なら、こちらも応戦するまでよ。」

「えええ……なんで皆さんも当然の顔をしているんですか？」

向こうの提督は、秘書艦の五月雨から最近売り出された缶の飲料を受け取って口にして
いる。

深海棲艦侵攻以降途絶えていた缶飲料が、多数の要望に応えて再発売され出した。

まだかなりお高いのだが。

平和が近づきつつある象徴なのかもしれない。

「現実逃避している場合じゃないわよ、提督。……あつちは次の選手を誰にするかで揉
めているようね。」

「選手じゃないと思うんですが。」

「細かいことはいいのよ、今を楽しみましょう。」

「いいんですかねえ？」

長門とグラーフ・ツェッペリンがなにやら揉めている。

なにをやっているんだろう？

もう、諦めた。

プロレスだか武闘大会だかをさっさとやって、函館へとつとと帰ろうそうしよう。

あの子は……リシユリユーカーか？

「ふっ、行くわよ！ ゴングを鳴らしなさい！ 戦闘開始よ！」

「真空片手独楽！」

「ぐああああつ！」

「リシユリユー！」

「夕張さん、ストレッツチャーをお願いします。」

「提督は淡々としてゐるわね。少しは勝利を喜びなさいよ。」

「これが真つ当な演習の結果なら、私も嬉しいんですがね。」

「そもそも、この鎮守府が真つ当な訳ないじゃない。」

「そういうものですか？」

「そういうものなのよ。」

「アハトウंक！ 次は私が相手だつ！」

「グラーフ・ツエツペリンさんですね。」

「反動三段蹴りつ！」

「ぐああああああああつ！ だが、このドイツ空母、只では死なん！」

「いい覚悟ね。では、とどめ！」

「やらせん、やらせはせんぞ！」

ドイツ空母の決死のアルゼンチンバックブリーカーが、戦艦棲姫にきまつた。戦艦棲姫が目線で私もそろそろ負けないと面白くないでしよ、と訴えてくる。領くと、二名共大破判定となつた。

あ、大破判定灯火が灯（とも）る。

一応、演習扱いになってるのか？

海上という名のリングに上がり、向こうの戦艦級艦娘が叫んだ。

「次はこの長門が相手だ！ 残る五名全員を相手にしてやる！ まとめてかかって来い！ 殴り合いでは負けんぞ！」

その声に応じ、うちのヲ級風翔鶴、レ級風吹雪、港湾棲姫風キエフが外套を脱いだ。

君たち、ノリノリだね。

おじさん、よくわかんないよ。

「さあつ、喰らうがいいっ！ 我が鉄拳をつ！ なにいっ！ 我が必殺拳を正面から受けて止めただど!？」

「ふふふ、相変わらず出鱈目な威力ね。」

ノリノリで助っ人になったこちらの基地の陸奥が、外套を脱ぎ捨てニヤリと笑う。

ホンマ、ノリノリやね。

「貴様……陸奥か。どういうつもりだ？」

「ふふふ、今回、私はこっち側で戦わせてもらうわ。姉さんや提督には悪いと思うけど。」

「なん……だど？」

「デメエー！ 陸奥！ なに寝返つてやがる！ お前は峰不二子かつ!? まさかつ、そい

つのギャラクティカマグナムの方がワシのスタームルガー・ブラックホークよりもええ言うんかつ!？」

「ちよつ! なに言ってるの! ヤってなんかいないわよ! 私をなんだと思っているの? そんなに尻軽女じゃないわ!」

「じゃあ、なんでそっちに付いた!?! 金か? やっぱりそのおっさんか?」

「ホント、提督つて失礼よね。この間、ほら、小旅行に行くつて言つたじゃない。その行き先が北海道だったのよ。」

「あ? ああ、そういや、そんなことも言つてたのう。」

「でね。函館鎮守府に寝泊まりしたりおいしー飯をいただいたりお土産を貰つたり、といういろいろお世話になつたのよね。」

「お世話、か。あれか? 観光案内でもしてもらうたんか?」

「えつ? 蟹を奢つてもらつたり絶品中華料理を食べさせてもらつたりしたの。」

「そうか、蟹に絶品中華料理か。わかつた。仕方ないのう。」

「でしょ。話が早くて助かるわ。これで心置き殺れるわね。」

「長門、殺れつ!」

「うむ。殺ろう。」

「巖風(いわおろし)。」

「ぐああああああっ！」

「長門オオオオオッ！」

「手で顔を掴み、海面に押し倒すと同時に膝を顔面に落としたようですが、あれは一体？」

「圓明流の技よ。」

「成る程。流石です。」

「少しは助っ人っぽい仕事をしないとね。」

「とおっ！」

突如乱入してきた鈴谷と村雨の背後からの奇襲により、呆気なく翔鶴とキエフと吹雪が倒される。

うわあ、えげつない。

「ハイハイヘーイ、どうよ!?　これがメインヒロインの実力つてもんですよ!」

「ハイハイヘーイ!　提督、私たちのお小遣いは用意しておいてくださいよっ!」

「クカカツ、いいぞ、お前たち!　そのまま陸奥と残る一名を倒すがいいぞっ!」

「フシャシャシャ!」

「アバズレのように大胆に!　娼婦のように淫乱に、じゃあ!　ん?　ゲエツ!　お前はっ!」

向こうの提督がこちらの隠し玉に驚いている。外套を脱ぎ捨てた姿が衝撃的だったみたいだ。

「お前、わるさめな春雨か？」

「ソウだよ、提督。イヤ、浮気者メツ！ 鉄槌をア◎スにぶちこんでヤル！」

二名も函館に付いたことで、提督はかなり悩ましい様子になっている。

「誰が浮気者じゃあ！」

えっ、怒るところってそこ？

隣でいそいそとケーキにお茶を給仕してくれる間宮から微笑みを受けながら、これ一体どうなるのだろうかと思ってしまう。

「間宮っ！　なんで、そいつに愛想を振りまいとんじやつ！」

「こちらの提督はやさしいんですよ。あなたとは違います。」

「ちっ、おう！　函館さんよ！」

「はい、中佐、なんででしょう？」

「残るそつちの二名はワシんとこの兵隊じゃろうが。じゃから、ワシの勝ちに決まったもんじやろ。」

「あの。」

「なんじや？」

「陸奥さんと春雨さんは函館鎮守府に一時的所属の形を正式に取っていますので、法的に問題は無いです。」

「……なん……だと？」

「紅茶のお代わりは如何ですか、提督？」

「はい、いただきます。この紅茶は、香りがとてもいいですね。」

「ふふふ、嬉しいですわ、提督。私、函館に転属しようかしら？」

「ははは、ご冗談がお好きですね。」

「ふふふ、冗談が好きなんですよ。」

「イチヤイチャすんな、こらあつ！」

戦いは続く。

CCCIX：甘き死の香りよ、来たれ（後編）

鈴谷・村雨組対陸奥・春雨組。

最終対決の火蓋が切つて落とされた。

熱い声援が次々に沸き起こる中、鈴谷と村雨のドロップキックが陸奥と春雨に炸裂する。

普段から交流のある鈴谷・村雨組に対し、普段は接点の無い陸奥・春雨組。

時間が経過する毎に後者の不利が強くなってゆく。

しかし、わるさめな春雨つまり春雨カッコカリには負けられない理由がある。

眼鏡提督はイタリア艦や潜水艦とは関係を持ったのに、自分は抱いてくれないのだ。

女として、それは許せない所業。

同じ境遇と思つた早霜が乗つてこないのは意外だったが。

「真の妻とは、地母神の如く寛容でなくてはなりません。夫が何名関係しようと、それは欲望に引き摺られた結果。許すことが大切なんです。提督はとてもモテる方なのですから。」

わからない。

わからない。

許せない。

許せない。

ダカラ。

ワタシはフクシユウのオニになる。

「ねえ、春雨ちゃん。憎しみはなにも生まないわよ。」

「わかっています。理屈ではわかってはいるんですが。」

「いい女はね、男を振り回すくらいしないと。」

「今は振り回されてばかりです。」

「罪なオトコね、提督も。」

「絶対、諦めませんから。」

「でも、今は戦いの最中。それは後にして頂戴。また今度、ザツハトルテを食べながらでも聞くわ！ いいわね、逝くわよ！」

陸奥は春雨の足を掴み、自身を中心にぶんぶん振り回し始める。

鈴谷・村雨組にも一定の損害を与えた。

だが。

「足が痛い！ 足が！ 陸奥さーん！ 足がもげそうです！」
そういうことになった。

「キヤメルクラッチ！ これでお仕舞いよ！ 春雨！」

地味によく効くキヤメルクラッチを鈴谷が仕掛け、春雨は伸ばした手を陸奥に近づけることさえ出来ない。

「おねーちゃん……。」

かすかな声が村雨に届く。

「これで終わりよ！ 死すべし、春雨！」

とどめを刺そうとした鈴谷の無防備な延髄に、背後から村雨のヤクザキックが炸裂した。

「ぐはあつ！ なにすんのよ、村雨！ 味方を攻撃してどうすんの！ あんたが手を下したくないっていうから、あたしが春雨にとどめを刺してその後陸奥さんをつープラトで撃破するって打ち合わせしたじゃん。ちよつと、村雨！ なにしてんの？」

妹を抱き起こすは姉。

それは麗しき姉妹愛。

「春雨、お姉ちゃんは間違っていた。残虐提督に従って、小遣い稼ぎしようとしていたダメお姉ちゃんを許してくれる？」

「……うん、だから……。」

「わかってる。私も貴女と同じプリキュアだもの。」

「明石さん、ストレッツチャー！」

「わかりました、我が提督！ すぐに入渠させるわよっ！」

「鈴谷さん。」

「なに？」

「……悪いんだけど、コンビは解消するわ。」

「仕方ないね。」

「わかってくれる？」

「わかるよ。だから。」

「そうね。だから。」

「これより死合いとまいましたよう。」

凄惨を極める死合いが始まった。

互いに容赦なき急所攻撃を繰り広げる。

衣類は既にすべて破れ、なにも身に付けないままの姿にて少女たちは笑顔で死闘を行うのだった。

「カイトス・スパウティングボンバー！」

鈴谷が村雨を空中に勢いよく投げた。

激しい気流が起こり、村雨は姿勢を変えようとすら出来ない。

「……受け身が……取れな……。」

鈴谷が村雨を空中で捕まえ、荒々しい関節技を極める。

そして、鈴谷は更に体全体が損害をこうむるような体勢で関節を極め直し、村雨を勢いよく海面に叩きつけた。

「ぐはあっ！」

吐血し、倒れる村雨。

女の子の大切なおつぴろげにしたまま。

彼女の意識は既に刈り取られている。

だが。

「勝つ……グフツ！」

勝った筈の鈴谷も吐血し、大切なおつぴろげにしたまま倒れた。

「ストレッチャー！ 明石さん！ 夕張さん！ 急いで！」

「はい、我らが提督！」

「なんじゃ？ 鈴谷がなんで倒れる？」

「いい質問ですね。」

「サミダライデン、なにか知っておるのか？」

「傲慢なるあの技はですね、使った反動が

大きいんですよ。」

「そうなのか？」

「あれは、『孤独を知る者』しか使えません。鈴谷さんでは使いこなせぬも道理。」

「五月雨……?」

「そうそう、これ、全国放送されていますからね。生中継で。」

「はっ? へっ? そんなんワシ、聞いてへんぞ! 五月雨!」

「今、言ったでしょう。」

「ふざけんなよ、お前!」

「卍固めっ!」

「ぐはあっ!」

「普段提督らしいこともしていない癖に、なにを言っているんですか? 函館提督の方

が余程仕事をされていますよ。」

「ぐぬぬ。」

「大開脚した兩名はどちらも戦闘不能。つまり。」

「つまり?」

「えっ？ 私優勝ち？」

茫然と事態の推移を見守っていた陸奥が驚いた顔をする。

途端、演習終了のサイレンが鳴り響き、函館側の勝利が確定した。

しかし、このままでは終わらせんよ。

今度は提督同士のセメント対決じゃ！

ワシは函館提督を挑発し、煽り、奴が勝つても負けても九州旅行の際に最大の便宜を約束するとゆうて渋々なながらも闘いを了承させた。

……あれ？

なんかワシ、思いつきりやらかしたような気がする……。

うんにや、今は闘いに集中すべきじゃ。

闘いの舞台はここ、◎岡国際センター。

一九八一年に建設され、深海棲艦侵攻以前は◎リシヨイサーカスの興業が毎年夏に行われていた。

県によると、来年か再来年くらいには復活させたいらしい。

これには函館や小樽の鎮守府などが絡んどるんじゃよなあ。

ぐぬぬ。

ちなみに秋には大相撲が開催され、貰った券はありがたく上客に使わせてさせてもらつとる。

どすこい。

提督同士の闘いが始まった。

彼らの戦闘領域は半円状の強力な結界で覆われている。

それをなし得たのは、英国から訪日している骨頭の魔法使いと彼の嫁の協力あつてこそだ。

おいしいもので釣られたおさな妻の頼みを、溺愛する夫は拒むことが出来ない。

彼と彼女が施した六重結界は強固で、広域爆裂呪文のティルトウエイトと無属性型破壊呪文のメギドラオンの連発に耐えるという。

おそらくはバブアーであろう緑色したコートを着た赤毛の少女と、燕尾服に黒いコートを着た英国人風男性が二人のおっさんをじつと眺めていた。

「彼らはかなりやるね。」

「結界で彼らの武技を無事に防げるでしょうか？」

「大丈夫。僕は妻を全面的に信じているからね。」

「ありがとうございます。帰りに絹女給（シルキー）さんへのお土産を買いましょう。」
「それはいい提案だ。ハカタの屋台に行くのもいいね。」

人外と人の子の夫婦。

外気は零下をとつくに下回っていたが、彼らの周りはほの温かくさえあった。

それを見て羨ましそうにする娘がいれば、ケツと悪態を小声で呟く娘もいる。

それがこの鎮守府クオリティ。

黒眼鏡提督が叫ぶ。

「……思い出した！ 思い出したぞ、中佐！ 聖域（サンクチュアリ）近くのロドリオ村で貴様の話を聞いたことがあるっ！ 聖闘士訓練生で、確か大怪我をしたが故に国許へ帰されたという凍気遣いの存在をっ！ 水瓶座（アクエリアス）の座を継承する予定は無かったものの、チャールズの櫛の木座（ロイヤル・オーク）の聖衣（クロス）を纏（まと）うことが許された白銀聖闘士のことをっ！ 東シベリアはコホーテク村に住む水晶（クリスタル）聖闘士や、廬山周辺に住む王虎とも親交がある男の話をつ！ まさかつ！ まさか、生きていたとはっ！ 冥闘士（スペクター）に暗殺されたと聞いたのにつ！ それにチャールズの櫛の木座の聖衣は聖域にあるっ！ アレは未だ主を得ていな………貴様、もしや認識阻害の術を………そうかつ！ 乙女座（バルゴ）！ 乙女座が関

与しているのかっ！ そうかっ！ 貴様は『チャールズの心臓(コル・カロリ)』！」「ご名答、とお答えしておきます。その名はとうに捨てましたが。」

「カーツカツカツ！ 面白い！ 面白いぞっ！ 極東でロイヤル・オークのコル・カロリと死合いが出来ようとはなっ！ 魔香気にさらされて死ぬがいいっ、中佐！」

結界内では気温がじわじわ下がっていた。

既に零下三〇度。

光速拳の乱打が互いに放たれる。

函館提督が魔法の詠唱を始めた。

ほほう、と英国の魔法使いが彼をじいつと眺める。

《通るならばその道 開くならばその扉 吼えるならばその口》

「ほう、精霊召喚か。よかろう、先手はそちらに取らせちやる。」

《作法に記され、望むならば王よ 俄(にわか)にある伝説の一端にその指を》

「おーおー、大気が震えよる。ふん、その程度でワシを倒せると思うたか。甘く見られたものよ。」

《概然なくその意思を もう鍵は無し》

「来るか？ よし、来い！」

《開門よ、成れ》

鎧に似た外殻をまとった、人の背丈を倍ほども上回る銀色の巨人が出現し高らかに吼えた。

「ふっ、『破壊の王』かよ。『完全体』とまともにやり合えば危ういな。だが！ 破壊精霊であろうと、この黒薔薇には耐えられまいて！ 我が薔薇の真価を知るがいい！ ピラニアンローズ！」

顕現した破壊精霊と貪欲な猛魚群のごとき渦巻く薔薇とが、真つ向からぶつかり合う。

短くも激しい応酬の後、悔しげに咆哮しつつ消えてゆく猛撃の精霊。

「どうやら、不完全体のようじゃったの。未熟者めが。半端な技など、このワシには通用せぬと思ひ知れ！ ん？ 冷気が高まって気温がどんどん下がつとる？ 謀ったな、中佐！ 精霊は時間稼ぎかつ!？」

零下六〇度の中、函館提督は無言で微笑んで魔法風を巻き起こしながら詠唱し始める。

東シヴェリアはオイミヤコン村やコホーテク村くらいの気温だ。

彼にとつては懐かしくさえある寒さ。

《ザーザードザーザードスクローノーローノスーク》

「ちっ、凍気を織りまぜて古代語魔法の詠唱とは小癩な真似をするじゃねえか、喰らうか

よっ！ 魔宮薔薇 (デモンローズ) ! くっ、幻影かつ？」

砕けた氷の結晶が黒く渦を巻いて、黒眼鏡提督を包み込む。

「ぐはあ！」

カリツォー。

氷の輪。

それが彼を拘束している。

凍気を操る聖闘士の基本技であり、敵対者を動けなくする利点は大きい。

本来のカリツォーは白いが、提督の毒薔薇の影響で色が黒くなっていた。

「こんなものがっ！ ワシにつ！ 通用するかよっ！」

《漆黒の闇に燃える地獄の業火よ》

「不味いつ！ スネークバイトツ！ 圧力強化！ むんっ！」

提督を包んでいた氷の輪が砕け散り、それらは彼の足元へとまとわりついてゆく。

《我が剣となりて敵を滅ぼせ、爆霊地獄 (ベノン) ！》

詠唱完了した古代の魔法が貪婪 (どんらん) に黒眼鏡中佐へと襲いかかる。

「不完全じゃが試す価値はある！ ライトニングボルト！」

彼は、本来獅子宮 (レオ) の黄金聖闘士が得意とする光速の牙を撃ち放つ。

直線的な光速の軌道を見せる光の束が地獄の監獄めいた炎とぶつかり、対消滅した。

《滲み出す混濁の紋章》

そして、新しく紡がれる詠唱。

先程魔法風が吹き荒れ、魔宮薔薇の毒素は既に爆霊地獄の影響で焼き尽くされていった。

今はぴりぴりした気が辺りに立ち込め、提督の動きを阻害している。

猛吹雪がそれに追い討ちをかけ、眼鏡提督の体力を奪い続けていた。

「おいおい、今度は鬼道か。引き出しの多いおっさんじゃの。だが、詠唱破棄が出来んおまんに……む？ 足元が氷結しとる？ 何時の間にも？」

《不遜なる狂気の器》

「じゃが！ 固定砲台として撃ち放題じゃが！ 喰らえっ！ 刹那五月雨撃ちー！」

黒眼鏡提督の鋭い手刀がひゅんひゅんと振るわれ、おっさん提督を斬り刻まんとする。

しかし、氷の結界がそれを阻んだ。

「防御結界かよ。ほんま、猪口才（ちよこざい）な奴よ。ワシはチョコボールな、駄弁様式どんどこいじゃが。」

余裕を見せるためか、腰をかくかく振る残虐提督。

《湧き上がり 否定し痺れ 瞬き眠りを妨げる》

「獅子の牙！ ライトニングボルト！ ちっ、また幻影かつ！ ……まさか、ワシは認識
 阻害を喰らつとるのか？ ならば、先に足元の氷を砕く！ ……なに？ 何故、砕けん
 ？」

提督は判断力がかなり低下している。

自覚症状、まったく無きままに。

結界内気温は既に零下一四〇度。

あと一〇度低ければ、青銅聖闘士の聖衣(クロス)さえ破壊し得る程の極低温である。

《爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形》

足元に拳を何度も何度も何度も何度も何度も何度も叩きつける黒眼鏡提督。

だが、氷は割れない。

「ぐおっ、なんじゃ、この氷の硬度は？ まるで永久凍土じゃが！」

《結合せよ反発せよ 地に満ち己の無力を知れ!!》

「まさか、呪禁を施した氷か？ くっ、不味いっ！」

《破道の九十 『黒棺(くろろひつぎ)』!!》

「ぐああああっ！」

漆黒の四角く棺めいた空間が、黒眼鏡提督の全身をくまなく包み込んだ。

だが。

一拍置いて。

ヒビが入り、術が打ち砕かれる。

「流石に効きませんか。」

「いや、少しは効いた。」

「少しですか。」

「少しだけな。」

「では、これは如何でしょうか？」

「函館提督がとっておきの呪文の詠唱を始める。」

《カイザード アルザード キ・スク・ハンセ グロス・シルク》

「また古代語魔法か！ 懲りん奴めっ！」

《灰塵と化せ 冥界の賢者》

「こちら小宇宙を高め、そげなもんはきさんに打ち返しちやる！ 高まれ、ワシの小宇

宙！ 来たれ、セブンセンシズ！」

《七つの鍵をもて開け地獄の門！》

「む、ヤバい！ じゃが！」

《七鍵守護神（ハーロ・イーン）！！》

「ギャラクシアン・エクスプロージョン！」

双子座 (ジエミニ) の黄金聖闘士が最も得意とする、破壊系の必殺技が放たれた。強烈な威力の応酬。

破壊と破壊の力とが真つ向からぶつかり合い、半円状の結界を大きく揺さぶった。

結界が膨大な破壊の渦に耐えきれず、自壊してゆく。

咄嗟に上空へ上空へと威力を逃がしてゆく函館提督。

その無防備な背後から襲いかかる、残虐黒眼鏡提督。

「隙あり、じゃー！ クカカ！ マッスルスパークを喰らうがいい！ どこまでも甘い男よの。甘い甘い夢を見ながら、無念を嘔み締めつつ逝くがいいわ！ とうっ！」

「函館提督を背後から抱え、空高く跳躍する残虐提督。

彼の右膝が函館提督の首を締め上げ、両手もそれぞれ捻り上げられている。

黒眼鏡提督の左足は函館提督の左足に巻き付いて、これを締め上げていた。

「死すべし、函館提督！」

このまま落下すれば、函館提督の敗北間違いなし。

だがしかし。

「函館提督の自由になっていた右足から延びる凍気が、質量を持って残虐提督の背に叩き付けられた。

「ぐはあっ！」

「ダイヤモンドダスト！」

「ぐはあっ！」

拘束を逃れた函館提督の凍気が残虐提督の顎を捉え、更に上空へと吹き飛ばす。咄嗟に氷の板をその場に作り、函館提督もそれを蹴って更に高みへと飛翔した。

そして叫ぶ。

「伝家の宝刀！」

函館提督の足が残虐提督の首を締め上げ、彼を悶絶させる。

函館提督は両手を地面に向け、逆さになったまま落下した。

気絶したままの残虐提督は受け身も取れない。

着地と同時に、黒眼鏡提督へと莫大な負荷が注ぎ込まれる。

「ロビンスペシャル！」

「ぐああああああっ！」

「ホーロドニー・スメルチ！」

「ぐああああああああっ！」

間髪を容れず、凍気遣い系聖闘士の必殺技たる凍気のアッパーカットが残虐提督を直撃する。

精力絶倫な残虐提督は再度上空へとときりもみしながら吹き飛び、ぐしゃりと地面に叩

きつけられた。

「ふらふらになりながらも、懐から白薔薇を取り出す残虐提督。

「ワシは……ワシは負ける訳には……。」

「函館提督は両手を組み、頭上に掲げる。

絶対零度の凍気がそこに集まり、小宇宙が高まってゆく。

音もなにもかも、止まったような空間が顕現した。

そして放たれる、凍気遣い系聖闘士最大の必殺技！

死すべし、残虐提督！

黒眼鏡中佐はかすかな力を振り絞り、薔薇を投げようとする。

そのおそるべき胆力！

「ブ、ブラッディロー……。」

「オーロラ・エクスキューション！」

彼の背後に青い服を着た金髪碧眼の女神の幻影が現れ、エクスカリバーを振るった。

雪の結晶を美しく振り撒きながら、絶対零度に近い凍気が剣圧と共に残虐提督を打ち

砕き容赦なく凍らせてゆく。

「ぐあああああああああああつ！」

血を吐いて、崩れ落ちる残虐提督。

眼鏡も割れて、その素顔が見えた。
白目を剥いている。

度重なる凍気に加え、幾つもの大技と必殺技とを喰らった残虐提督は流石に昏倒して
いた。

衣類はその分子結合を維持出来なくなり、すべて失っている。

ウホツな人大歓喜の囃であった。

ちなみに、低体温症寸前である。

彼の手から白薔薇が滑り落ちた。

小宇宙で守られた必殺の薔薇が。

一瞬遅ければ、あの死の薔薇を喰らっていたかもしれない。

危うい勝利だった。

函館提督は薄氷の勝利に、冷や汗をかきながらも安堵する。
と。

すたすたと巨大なスーパーブラックホークギンギン丸出しの眼鏡提督の傍に来た五月
雨が、げしげしと彼を蹴って転がした。

あ、あれ、肋骨が何本か折れたよな、と鎮守府の面々は愕然として隠れ狂猛系筆頭秘
書艦をおそれながら見つめる。

彼女は拾った白薔薇を、素早くぶすりと彼のア○スへ一気に挿した。

ほんの一瞬の凶行だった。

だが、誰も止めなかった。

そして、赤く染まる薔薇。

嗚呼っ！ 阿部氏！

薔薇族！

「勝者！ 函館提督！」

一瞬遅れ、歓声が上がる。

次々に艦娘たちに抱きつかれる提督。

そして、彼は思った。

あれ、これって演習とは全然関係無いじゃないか、と。

「あー、肩痛いわー、ワシ、マジに肩痛いわー。」

「うっさいですね、提督、鯖折りしましょうか？」

「そう言いながら、関節技を極めなくてくれっ！」

「あら、自動防御機能を解除していなかったわ。」

「五月雨、お前、マジでなにもんなんじやいな？」

「提督程の、不思議人物ではありませんけどね。」

函館鎮守府との死闘が終わって数日後。

ワシはスポーツ新聞のエッチな欄をしげしげ読みながら、身体の節々の痛みと戦っていた。

五月雨に◎ロンパスを背中に貼ってくれとお願ひしたが断られ、致し方なく早霜君と春雨君とに貼って貰った。

両者が何故か上機嫌だったので、その理由を訊いたが教えてもらえなかった。

女の子はよくわからん。

艦娘もよくわからんの。

「五月雨、茶を淹れてくれ。」

「はい、どうぞ。」

「なんで、これ？」

「せんぶり茶です。提督の腐りきったハラワタの中にある毒素を、全部排出してくれませよ。」

「普通の茶をくれ。」

「では、はいこれ。」

「なんじやいこれ？」

「どくだみ茶です。」

「まあ、これでもええか。……苦いな。」

「苦いからこそ、人は生きていられるんです。」

「わかつたような、わからんような。」

今回は稀少な映像が撮れたとのことで、英国の魔法使い協会から感謝状が贈られてきた。

青葉をベッドの中で褒めたら大喜びしとつたが、なんかようわからん。

結局、魔法使いたちからの外圧もあつて演習で負けたことはチャラにしてもらえた。

ワシの地位に変化は無くなり、大本営の幾人かが人事異動で旭川や沖繩などに飛ばされたらしい。

ええとこじやがな。

くくく。

青葉がなかなか面白い写真を撮つたとのことで彼女の部屋に行つて何枚か焼き増ししてもらい、ついでにワシの私室でイチヤイチャした。

ポーラやイヨとも関係が出来たし、退役後のことをそろそろ考え始めなくてはならないかもしれない。

ちなみに鈴谷は未だベッドから起き上がれないとのことで、訪問時に少し慰めておいた。

時折鈴谷は腰が腰がと喚き、部屋に戻ってきた熊野に追い出されてしもうた。本調子になったら、お互い親しむことにしよう。

ワシは今回の演習で、地球上での活動時間に制限が出るようになってしもうた。若き日は終わった、ゆうことじやな。

恒点観測員としての仕事に支障をきたす訳にもいかんが、まあ、深海棲艦がおらんくなるまではなんとかもつじやろ。

「あら、提督。今夜のご都合は如何でしょうか？」

優雅な足取りで香取先生が近づいてくる。

眩しい笑顔じゃ。

ワシは彼女の、いや、彼女たちの笑顔を守らんといかん。

「おお、香取先生。どうとでも都合をつけますよ。先生のためでしたら。」

冬の日差しが窓を伝って、優雅な先生をより一層輝かせる。

「では、今夜は五名でお部屋に伺いますね。」

「お待ちしております。」

なべて世はこともなし。

CCX：霞ママとチョコレート

長野県上水内（かみみのち）郡飯綱（いいづな）町。

北信にある、旨い林檎と米と温泉で知られる町。

その小さな商店街にある、小さな定食屋の店内。

元艦娘の霞が働く食事処。

彼女を慕う、県内外の漢たちが集う聖域。

サンクチュアリ。

我らのカスミンのためにつ！

そのさほど広くもない店内では、所狭しと居並ぶ漢（おとこ）たちが血涙を流しながら土下座していた。

念のためにビニールシートが敷かれており、既に血塗れになりつつある。

酷い絵面。

冬の午後。

昼の掻き入れ時が終わった、一時的に店の閉まっている時間。

休憩したり、仕込みをしたり、和菓子屋に行ったり、買い物に行ったり、パン屋に行ったり、ケーキ屋に行ったり、アップルミュージアムに行ったり、ピコピコしたり、ブログの記事を書いたり。

そんな感じの時間。

外は雪にまみれて。

「お慈悲を！ 我らにお慈悲を！」

「なによ、あんたたち。営業妨害するつもりなら、とつとと帰って。これから夕食の仕込みがあるの。あんたらの下手な学芸会に付き合うつもりなんて、これっぽっちも無いから。」

「なにとぞ！ なにとぞ、哀れな下僕の我らにチョコレートを！」

「チョコレート？」

「左様で御座る！」

「なんで？」

「女の子からチョコレートを買った経験が無いからで御座るっ！」

「あのさ、あたし、中の人はおっさんなんだけど。」

「今は我らの大切な霞ママで御座る！ それにっ！」

「それに?」

「可愛い女の子からチョコレートを貰える経験なんて、我らには未来永劫訪れる訳ないと皆先刻承知! 中の人が我らと同姓ならば、そのことは先刻ご承知と思ひ申す! 如何に!」

「あ、ああ、うん、まあ、そうね。」

「ならば!」

「とあるベルギーの高級チョコレートなんてちつこいのが一粒二〇〇〇円とか、そんな訳わかんない世界よ。こないだ、義理チョコは止めて本命はうちのチョコレートにして、つて宣伝してネットで大炎上していたわね。日本の板チョコでも、一枚五〇〇円くらいはするわよ。あんたたちに一枚一枚あげるのはちよつとねえ。チロリアンチョコかクロカミナリチョコだったら、なんとか……。」

「心配ご無用!」

「へ?」

「献上品で御座る! 我らの誠意、とくとご照覧あれつ!」

むつちりむうにいな男が差し出す、銀色のアタッシェケース。

傷だらけのゼロハリバートン。

漢たちの、魂の輝きにも似た。

パカリと開かれた中にはみっしり詰まった茶色い板のお菓子。

「ええと、つまりこれをそのままあんたたちにどうぞと手渡せばいい訳？」

「惜しい！ 実に惜しい！」

「んー……まさか？」

「それで御座る！」

「あたしがチョコレートをかち割って投げるのを、あんたたちが奪い合って食べるとか
？」

「違う！ 違うので御座る！ それはそれで面白そうで御座るが、そうではありもさん
！」

「じゃあ、それはやらないでおくわ。」

「是非やってください。催しの後で。」

「でもねー。」

「なんでもしますからっ！」

「もうさ、これを今あんたたちにえいと投げたら、それで終わるんじゃない？」

「違う！ 違うで御座る！」

「じゃあ、どうすんのよ。」

「湯煎をしていただいて、ハート型にして欲しいので御座る！」

「あのね。素人の手作りチョコレートって、案外あんまりおいしくならないわよ。大抵市販の方がおいしいから。クツキーにもそういうことが言えるわ。そうね、溶かしておやきに入れたげよつか？ 干し林檎を中に入れてもいいかも。沢山作りすぎたのがまだかなり残ってるし。」

「チョコおやきは別腹で。」

「ええー、めんどくさい。」

「お願い致します！ 我らに残された希望は霞ママだけなので御座る！ 店の外にいる同志（タヴァアリーシチ）たちもそれは同じ気持ち！」

「土下座を即刻止めて、外の人たちを中に入れなさい！」

「では！」

「取り敢えず、豚汁を振る舞ってあげるから。食べたら、とつと帰って。あたし、これでも忙しいの。」

結局漢たちは豚汁を食べ、その後夕食にも訪れた。

学校や会社などで食べられない時以外は、霞ママの定食屋で食べる。

これ、密林の鉄の掟。

うらうらべっかんこ。

近場の古民家を先日購入したので、そこは古民家カフェっぽい定食屋にすべく改装中

だ。

霞と父母はそちらに移転して、こちらの店は婦人会が調理を行う厨房に変更される手筈となっていた。

ちなみにこの店で作られる弁当は、毎日完売御礼である。

最近、函館鎮守府考案の唐揚げ弁当を試作したら大好評。

それは定番商品になりつつあり、近在の婦人会の力も借りて北信の小さな産業へと変貌しつつあった。

長野駅からも販売したいとの打診がある。

いっそのこと、従業員を増やそうかしら？ と元駆逐艦は思うのだった。

アップルミュージアムに勤める、あのゴスロリの子なんてどうかしらね？

自薦他薦も増えつつある、今日この頃。

誰かと組むのも悪くないかもしれない。

上水内基地とも提携が出来ないかしら？

霞はいろいろ経営を考えるのであった。

その夜、彼女は奈良鎮守府の天龍と電話した。

ひいひい笑う、軽巡洋艦。

ならちん唯一の艦娘ナリ。

シヨタ提督は既に寝かしつけた模様。

彼女の中の人もまたおっさんである。

「はっはっはっ。そいつあ、ずいぶんと災難だったな。」

「笑い事じゃないわよ。大量のチョコレート湯煎って、けっこう手間暇かかるんだから。」

「慕ってくれた上に、金を落としてくれていいじゃんか。地元密着型アイドルってどこか。」

「ところで、あんたんことの提督ってどうなの？」

「相変わらず、毎日毎日オレの乳揉んでくるぜ。」

「マセガキね。」

「マセガキさ。」

「あくあ、その内、奈良へでも遊びに行こうかしら？」

「いいぜ、奈良。のんびりした、とてもいいときさ。そうそう、送ってもらった林檎はとても旨かったぜ。」

「それはよかったわ。」

バレンタインデー当日。

何故か長野駅に勤務する元艦娘たち三名と共に、チョコレートを湯煎してお菓子作りする破目に陥った。

これじゃまるで晒し者だわ。

場所は長野駅内の特設会場。

これなんて罰ゲームなのよ。

日本の義理チョコ二巨頭の製菓会社が、積極的に加工用チョコレートや自社製品を提供してくれている。

これが資本主義経済に組み込まれる、ってことなのね。
で。

なんて見物客たちの目の前でやんなきゃいけないのよ。

地元民、冷やかし、艦娘愛好家、観光客。

みんな、なんか目がこわい。

しかも、テレビの中継付き。

晒し者よ、晒し者。

近隣諸国の新潟県、山梨県、富山県、茨城県、愛知県からも取材が来ている。

なにこれ？

元艦娘たちもノリノリね。

なにキャピキャピしてんのよ。

あんたらも、あたしと同じ男でしように。

フリルの付いたエプロンを着るだなんて。

作業用には、割烹着で充分よ、割烹着で。

おさんどんでなが悪いのよ。

あーもう、ホント、周りはバカばかり！

能天気そうな女性がマイクを向けてきた。

「霞ちゃん、今のご気分は？」

「女性の取材者からマイクを突き付けられて、今のご気分はと訊かれているなあ、つていう気持ちです。」

「筒井康隆さんの返答は返しに困るので、普通でお願いします。」

「言葉が不通になるのって悲しいことよね、つてどこかしら。」

「あの、シェイクスピア的表現ではなくてですね、チョコレート菓子を作る心意気が聞きたいんです。」

「頼まれたから作る。それだけなのよ。」

「ある意味、プロフェッショナルです！」

「そうかしら？」

「そうですよ！」

「あたしたちの中の人は全員、元々は普通のおっさんなのに？」

「今は可愛い女の子だからいいんです！ 中の人が男性だったら、余計に同じ男性の苦しみもよくわかるでしょう！」

「そうかなあ？」

「そうですよ！」

「そういう貴女は、今日誰かにチョコレートをあげるの？」

「ぐはあ！」

「ちよ！ どうして倒れるの!？」

「男なんて！ 男なんて！」

「あつ、変なスイツチが入っちゃったみたい。大丈夫よ。男なんて、手作りの料理で胃袋を握れば大体陥落出来るから。」

「ぐはあ！」

「なんで更に酷くなっちゃうの!？」

ちよっこし大変なことになった。

猪目(いのめ)なハート形のチョコレートに、チョコおやきにチョコプディングにチョコツッキー。

四名で分担して、せっせと作る。

包装は他の人たちに任せ、完成品を待機している男性陣に渡したらひと安心。

最後はチロリアンチョコやクロカミナリチョコを豆まきみたいに投げて、これを奪い合う猪兎嶺徒合戦(ちよこれいとかっせん)を行う予定。

誰よ、こんな企画を考えたのは。

虎ノ門にあるあの放送局かしら？

バカよ、バカ。

みんな、バカばかり。

うん、このチョコおやきはおいしく出来たわね。

プディングやクツッキーもいい出来だわ。

箱詰めは他の人たちに任せましょうか。

よし、もうあとひと踏ん張り。

「あの、霞ママ。」

「なにかしら？」

隣の元艦娘が囁いてきた。

「チヨコレートを塗ったら、舐めてくれますか？」

「は？ どこへ？」

「その……いきなり……ではアレですね。」

彼女はほつぺたにチヨコを塗って、あたしに顔を近づける。

これ、放送局の仕込み？

チヨコレート二社の人たち含めて、周りの皆がうひよお、って顔をした。

なんか、イラつとした。

腹いせで手元にあった投擲用包装済み義理チヨコを幾つか掴んで、そいつら目掛けて投げる。

すると、おぞましき争奪戦が始まった。

みんな、バカ。

バカばかり。

CCXI : 或いは、獵奇的結末に至るケツコンカツコカリ

明け方。

まだ日も差さない応接室で、茶を飲みながら小説についての打ち合わせ。

民明書院のトトメス二世さんと新作についての打ち合わせ。

艦娘たちを主役にした話が欲しいとの要望が打ち出された。

「第一巻は『駆逐艦の夏』、第二巻は『潜水艦の匣』、第三巻は『ヲ級の骨』で如何でしょうか?」

「何処かで聞いたような題名ですが。」

「ライトノベル界限は熾烈な競争ですからね。提……先生の書かれる作品は少々難解と言われているでしょう。そこんところをもう少し突っ込んだ感じの話はどうかと思うのですよ。」

「香蘭社さんに怒られるのがオチじゃないですか?」

「なに、もう少し読者層に受ける題名が見つかればそちらに差し替えます。」

「いいんですかね?」

「話題性が無いと、あつという間に失速しますから。先生には、学生層より歳上である社
会人層を引つ張っていただきたいんです。」

「まあ、そっちの方がやりやすいです。」

「取り敢えず題名はカツコカリで、艦娘小説を書いておいてください。そうですね、今は
比較的安定しているんですよ?」

「残念ですが、そうした情報はお伝え出来ません。」

「まあ、それはうち専属の草に任せておきますか。」

「ほう。」

「来月までに五〇枚はいけます?」

「ちよつと難しいですね。」

「東京を含む、関東圏のおいしい和菓子洋菓子を掻き集めてきます。」
「うくん。」

「では、稀少な調味料も調達しましょう。」

「なんとか頑張つてみます。」

「しれつと交渉上手で御座いますな、お代官様。」

「なんの、主ほど真のワルではないわ、越後屋。」

「うはは。」

「では先生、こちらのこねこやのどら焼きはお早めにお召し上がりくださいね。」
「いつもありがとうございます。もうすぐに帰られるのですか？」

「函館観光したいところですが、出来ないところが宮仕えの厳しい定めですね。」

「ではせめてものお土産に、間宮羊羹と月餅とクッキーの詰め合わせをどうぞ。」

「あ、これ、大人気なんです。市販されないんですか？ きつと売れますよ。」

「原料を厳選して作っていますから、大量生産には不向きなんです、これらは。」

「ありがとうございました。」

「アップルパイも付けておきますね。」

「これはどなたが？」

「近所のパン屋さんで今朝焼かれた品です。おいしいですよ。」

「おお、流石は『食の都』。隠し球が沢山ありますね。」

「港までうちのポインターで送らせます。」

「ありがとうございます。ではまたメールを送りますね。」

「はい、ではそのように。」

「長寿と繁栄を。」

「長寿と繁栄を。」

「うわあ。」

思わず声が漏れる。

その現場写真群は江戸川乱歩翁的というか、横溝正史翁的というか、両者が喜びそうな雰囲気に溢れていた。

ちなみに、水木しげる翁がそういった写真を随分と集めていたそう。

これを見るのが朝食の前でよかったというか、なんちゅうか、本中華。

「これが、ここ半年以内に艦娘たちと性的にこじれて亡くなった、提督たちのむくろです。」

「うわ、これ、ねじ切られていますね。」

「ああ、これはですね。関係した駆逐艦たちに取り押さえられた提督が、散々懺悔しながら……。」

妙に詳細な説明を受け、ぐったりした気分で食堂へ向かう。

ちよつと胃がむかむかしているけれども、なんとか食べられないこともなさそう。

だいぶん慣れてきたみたいだ。

臓物をぶちまけろ！ 的な写真もあつたが大淀は平然としている。

彼女が話しかけてきた。

「提督たちの補充を強化している大本營ですが、教育は上手くいつていないようですね。」

「艦娘の脅威がきちんと説明出来ていないのでしよう、おそらくは。」

「胸部の大きさがどうこうと無礼な発言をして、駿河問いの刑に処せられた提督も何名かいます。」

「その提督たちはどうなりましたか？」

「今現在も生存は確認されています。」

食堂が見えてきた。

喧騒も聞こえてくる。

中へ入ると大混雑していた。

所属艦娘の員数を遥かに超えちよるがね。

「多いですねえ。」

「提督を失った艦娘たちもいますから。」

やった、とは言える訳がないもんな。

ここで身元を一度きれいにして……。

……。

さてと、いつもの中華粥にしようか。

李さんにお嫁さんの世話をしようかと思っているのだが、はにかみ料理人の彼は恥ずかしかつてなかなか話に応じてくれない。

その李さんは周りの艦娘たちに丁寧の説明しながら、見事な腕前を披露していた。私に気づいた彼はぺこぺこ頭を下げる。

止めて欲しいのだが、なかなか聞き入れてもらえない。

彼は意外と頑固なのだ。

そんな彼は、繊細な料理を生み出す魔法使いだ。

先日の出張は、彼に大きな刺激を与えたい。

鳳翔間宮も彼に負けまいと、日々研鑽を積んでいる。

よかたいよかばい。

中華粥を受け取る。

ふわつと海の香りがした。

今日は魚粥か。

昨日は鶏粥だった。

付け合わせとして添えられた、彼お手製のピータンやザーサイなども旨い。

添えられた小盛りの上海風焼きそばはあっさり目の味付けで、あんな写真を見た後で

も普通に食べられた。

おそるべし、李さんの魔法。

集客に悩むホテルや料理店からの引き抜き合戦が今も多いのも、大いに頷ける話だ。生搾りの林檎果汁水を飲み、ほっと一息。

国産烏龍茶のやさしい味わいもよかたい。

食べ終わるのを待っていたらしい、大井が近づいてきた。

彼女はしつかりしていて、潰滅した某鎮守府の艦娘たちを率先して鼓舞しまとめてきた経緯がある。

そうした艦娘たちをまとめ役に任じて戦闘群（キャンプ・グルツペ）を形成し、教官に鍛えてもらっていた。

新しい鎮守府が出来た時に、彼女たちの力は大いに役立つことだろう。

そして、その提督とより良い関係を構築してもらいたいと考えている。

「提督、身体検査の件ですが、今お時間はよろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。……身体検査？」

「ええ。……大淀さん？」

「今日、これから、提督にお話する予定でした。」

「身体検査は今日の午後からですよ、大淀さん。」

「あまり事前に話すと、先手を打たれて自衛隊駐屯地に行かれたかもしれませんから。」

「それはまあ、そうですね。」

「あの、話が見えてこないのですが。」

「今日から三日の予定で、艦娘たちの身体検査を実施します。」

「その、艦娘って、身体検査が必要なんですか？」

「車だって、車検がありますよね。似たようなものです。」

「それもそうですか。」

「あの、提督には立会人をお願いしたいのですが、大丈夫でしょうか？」

「立会人？ 剣術試合の？」

「シグルイも御前試合もやりません。普通に艦娘たちが検査されるのを見ていただくだけでいいんです。」

「まあ、それくらいでしたら。」

「では、おおよそ六〇〇名の艦娘たちに通達しておきますね。」

「ちよつと待つて、大淀さん。数字がおかしい。」

「提督に体の隅々まで見られるのは、なんだか恥ずかしいですね。」

「ちよつと待つて、大井さん。なんだか妙なことを口走っておられますが。」

「大丈夫ですよ、提督への物理的接触は厳に戒めていますから。」

「安心材料がそもそも無いですね。」

「眼福でしょう、もつと喜んでいいんですよ。」

「眼福と考えていたら、首が空を飛ぶんじゃないですか？」

「それでは、私はこの辺で失礼します。」

彼女は入浴道具を脇に抱えていた。

「これからお風呂ですか？」

「ええ、じっくりねつとり見つめられるんですから、磨きをかけませんと。」

「そんなことをしたこともありませんし、するつもりもありません。」

「ふふふ、即答されるなんて、提督は照れ屋さんですね。」

食堂を出ると、風呂に向かう艦娘がけっこう多い。

大井だけではないらしい。

複数の鎮守府警備府泊地の子をまとめて一気に検査するらしいが、よそのおっさんにマツパを見られたら困るのではないだろうか？

大淀に聞くと、既に混浴で見られているし別段問題ないという。

問題だらけじゃん！

私ができるくらい興奮するかで、自分自身の提督と比較する娘もいるそうなの。

訳がわからないよ！

ふと気配を感じて振り向くと、航空戦艦とイタリア戦艦がいた。

「近々君の鎮守府に配属となるから、よろしく頼む。明日は君にすべて見られることになる。恥ずかしいな。」

「今まで何度も見えていますよ。……この函館に所属？ 貴女が？」

「フラれて追い出された。同業者に負けたということだ。」

「は？」

「提督、私も函館所属になるからよろしくね。」

「えっ？ 小樽はどうなるんです？」

「あつちはガングートが配属になるの。」

なんだか大変なことになってきちやつたぞ。

C C X II : 野見憲太

野見憲太（のみのりた）。

いつもぼんやりして見える、眼鏡男子。

自由奔放系署名記事サイト『ニチニチキョテンツエツト』の人気書き手でもある。

妖精と仲よく会話出来るため、彼は提督候補生となった。

彼の周囲と背景に問題が無いかを調査すべく、いつものように私は行動を始める。

その調査は常の如く、すぐ簡単に終わる筈だった。

小学生時代に彼は架空の友人をこしらえ、心の隙間を埋めていたと周囲の人々が証言する。

その友人は未来からやって来た人造人間という設定で、数多の道具を無尽蔵のアイテムボックスから取り出して野見憲太の窮地を幾度も救ったという。

そういう設定らしい。

ご都合主義の産物みたいだ。

まさか、異世界転生だか転移した勇者でもあるまいに。

彼曰く、これはすべて現実の過去にあつたことであり、歴史の修正力によつて人々の記憶が消去されたため皆が覚えていないのだと主張したそうだ。

野見憲太の親友であるチエコ系八百屋『八百幸』の猛・コルタやホーネツカー財閥の御曹司たるスネイル・ホーネツカーにも聞き取り調査を行ったが、兩名とも彼に人造人間の友人がいた事実は無かつたと断言した。

但し、たまに妙な記憶がいきなり甦ることもあり、それがいわゆる後付け記憶なのか妄想なのか或いは事実なのか今一つ判断が付かないのだという。

その模造記憶かもしれない過去では、彼らは喧嘩したり仲直りしたりを頻繁に繰り返していたという。

その潤滑剂的役割は常に、曖昧模糊とした野見憲太の友人だつたらしい。

少年時代特有のあんなこといいな出来たらいいな、なのかもしれないが。

聞き取り調査が極めて難航したのは、木鋤俊英（きすきとしふさ）と彼の夫人である木鋤スミレだつた。

兩名とも野見憲太を禁忌とでもするかの如く明確に怯えており、会話すらも厳しい事態に追い込まれた。

木鋤スミレは旧名皆本スミレと言ひ、小学生の頃はしばしば野見憲太と遊んだ仲だと

いう。

それにしては、態度がかなりおかしい。

木鋤俊英も頻繁ではないが野見憲太と遊ぶこと自体はあつたらしく、おそらくなにかしら決定的な亀裂が学生時代に発生したものと推察された。

だが、それがなにかは一切の推測を許さない。

収穫の無いままに、彼らと別れる他なかつた。

野見憲太を調査してゆく内、奇妙な事実が幾つも発覚する。

その内のひとつ。

彼の住んでいた街にある老舗の和菓子屋が潰れかけた際に、野見憲太と架空の筈の友人が梃子入れて効果的に宣伝した結果大繁盛させたという。

起死回生の逆転劇を果たしたそこは、現在も人気店である。

年配の主人は今もその時のことを覚えていて、懐かしそうに話をしてくれた。

野見憲太には青いドレスを着た可愛い少女が付き従っていて、彼女はどこからともなく不思議な装置を取り出して彼を助けたらしい。

その店で購入したどら焼きやきんつばや団子が、とても旨かつたことを追記しておく。

函館鎮守府の提督も訪れる程の店らしい。

野見憲太を調査してゆく内、彼といつも一緒にいたという少女の存在が浮上してくる。

存在しない、と身近な人々から全否定された筈の娘。

猛・コルタ、スネイル・ホーネツカー、木鋤俊英、木鋤スミレのいずれからも得られなかった情報だが、逆に友人関係と異なる人々の記憶に残っているのが大変奇妙に見える。

まるで、野見憲太が二人いるかのようだ。

そうして、新たに奇妙な事実が発覚する。

模型業界で知らぬ人なきスネア・ホルネスマツハが、野見憲太と彼に付き従っていた少女のことを覚えていると言う。

彼はスネイル・ホーネツカーの従兄弟で、こだわりのフィギュア作りで知られるホルネスマツハ商会の代表取締役だ。

「あれは僕が大学生だった頃、戦艦大和のラジコン模型を進水させた時の話なんだけどね。スネイルが憲太君とエモールちゃんを怒らせちゃったもんで、ちよつとした戦争もどきになったんだ。雷撃戦自体は上手くいったんだけどねえ。え、結果？ 思いつきり負けたよ。戦争なんてするもんじゃないね。金ばかりかかって虚しいもんさ。おっと、

今のご時世にこんなことを言ったら、『非国民』になるかな?」

パーマ頭の彼はなかなか挑発的な人物だ。

「スネイルの中じや、エモールちゃんは今や禁忌そのものみたいだね。名前を出すことすらご法度さ。そうだね、憲太君のことで僕が知っていることは少ないけど、彼はとてもいい子だよ。少し内向的などころはあるけど、集中力は高いし思いやりも充分ある。射撃の腕前は確かだし、あや取り選手権日本一の腕前は伊達じやない。最近はネットで面白い記事を書いているみたいだし、なかなかのもんじゃないかな? 彼はちよつとぼんやりして見えるかもしれないけど、見た目だけで判断しない方がいいと思うよ。」

有益な意見が入手出来た。

後はこれらを大本营に持ち込んで、判断してもらえばいい。

だが実際のところ、彼を提督にしてよいものなのだろうか?

ま、それは向こうが行う判断だ。

私などが行うべき判断ではない。

結局、エモールという少女のことは一切触れずに報告書を書き上げ、それをそのまま提出した。

CCXIII：天龍さんと提督候補生

「お前、俺の提督になれ。」

「はい?」

「函館鎮守府内の大きな講堂。」

「三〇〇名ほども艦娘がいる。」

「全員、ジャージを着ていた。」

「僕は妖精が見えるということで、提督候補生になれる資格を得られた。」

「得たんだけど、流石に中学一年生じゃすぐ提督になれる筈も無い。」

「早めの春休みを貰い、艦娘たちと契約してじっくり提督になるらしい。」

「一部の人たちが『学徒出陣』の前例になるって怒っていたけど、国土が焦土になってからじゃ遅いんじゃないかな?」

「今回は僕みたいな学生ばかりが集められていて、艦娘たちと交流していた。」

「僕の目の前にいるのは眼帯を着けたお姉さん。」

ええと、天龍さんだったかな？

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名は天龍。ふふ、俺と契約して魔法乙女になるがいいぜ。」

「あの、僕、男子ですが。」

「おう、ぼつちやりしていて旨そうじゃないか。」

「僕、食べられませんよ。」

「ウマソウだ。ほれ、未来少年に出てくるだろ。」

「え？」

「なんだ、知らねえのか。後で一緒に見ようぜ。」

「は、はい。」

「よし、決まりだ。これからはお前が俺の提督だ。覚えておけ。」

「はい、よろしくお願いいたします、天龍さん。」

「かてえなあ。かてえのはここだけでいいんだ。」

「あ、あの。」

「大丈夫、後で『親交会』をしようぜ。」

「え、あの、その。」

「心配すんな。俺に任せておけ。全部教えてやつから。」

「はい。」

「ちよつと天龍。」

「なんだよ、曙。」

「そいつ、あたしたちも目をつけてたんだけど。」

「じゃ、みんなで一緒に幸せになろうよってか。」

「もう！　そういうアニメネタは本来この漣（さざなみ）の本領なのですよ。なあ、やらないか？」

「ふあ？」

「漣、手付きエロ過ぎ。ほら、この子、怯えているじゃない。」

「ぼのたん、ええかつこしいやね。」

「ぼのたんゆうな！」

「はいはい、あんたたち。その辺で止めときな。ここの曙がこつちを見てるよ。私は臍（おぼろ）。別名、ミラージュ。レッド・ミラージュって呼んでもいいわよ。」

「なんであんたが、『最強の幻想』を名乗るのよ。」

「いいじゃん、目標は高く果てしなくよ。ほら、潮（うしお）も挨拶するときなさいな。」

「あ、あの、潮です。よろしくお願いたします。」

「こちらこそ、よろしくお願いたします。」

「あつれー、ご主人様、さっそく『魔性の潮』のおっぱいをガン見しておられるで御座る。」

「え、あの、ええと、すみません。」

「中一じゃ、仕方ないわよ。」

「くう、なんも言えねえ。」

「台詞の使い方がおかしい。」

「よし、水雷戦隊が出来たことだし、函館提督のところへ登録に行こうぜ。」

「「「おう！」「」」」

「は、はい。」

艦娘たちに引つ張り回され、てんてこ舞いに陥った。

賑やかな集いも終わり、あてがわれた部屋に入った。

「あ、あの。」

「なんだ？」

「天龍さん、ここ、僕たち提督候補生の部屋なんですけど。」

「知ってる。」

「その、艦娘の皆さんにはそれぞれの部屋があるんですよね？」

「そうだけ。」

「そろそろ戻らないと不味いんじゃないですか？」

「気にすんな。」

「あ、あの。」

「なんだ？」

「その、天龍さん。不味いですよ。」

「気にしない、気にしない。窓から出ていくから問題ねえよ。」

「あ、あの、天龍さんはどうして僕を提督に選んだんですか？」

「それを今から、じっくりと教えてやるよ。ふふ、こわいか？」

大本営も手段を選ばなくなってきた。

彼らと連携した横須賀がかなり横槍を入れてきたけれども、呉へ若人（わこうど）たちを送る手筈が整えられて一安心だ。

あそこには先輩がいる。

上手いことをしてくれるだろう。

初期案がなんともえげつなかつたからな。

目の前には天龍。

ケツコン経験のある、歴戦の軽巡洋艦だ。

ケツコン経験艦娘もかなり減ってきたな。

彼女はニコニコしている。

余程嬉しかったのだろう。

艦娘にとつて、相性のいい提督と一緒にいられることはなよりの幸せなのだから。話を振ってみる。

「かなりのアタリを引いたみたいですね。」

「おう、シンクロ率八割以上つてどこか。」

「それは素晴らしい。ですが、あまり派手に動かないでくださいよ。あなたのような武勲艦の動きは、よくも悪くも影響範囲が大きいんですから。」

「わかってるって。」

「今度は『壊さない』でくださいよ。お願いしますから。」

「えへへ、それもわかってるって。」

「いきなりあんなことをするのはちよつとねえ。」

「なんだよ、提督と一緒に名作アニメの鑑賞会をやっただけじゃないか。知ってるか？」

天空の城の話って、未来少年の後の世界なんだぜ。あの特務眼鏡がインダストリア行政局長の子孫とはねえ。最初知った時はびっくりしたもんだ。俺が好きなのは船長だがよ、ああいう奴は面白いよな。」

「そういうことにはしておきますか。」

「そういうことにしておいてくれ。」

「で、実際、どうです?」

「潜在能力は高いと思う。あつという間に水雷戦隊が出来たしよ。他に艦娘が増えるかも知れん。早めに呉へ行った方がいいかもな。」

「艦娘が七名以上になったら、早急に呉へ異動してもらいましょう。出来ますよね、大淀さん?」

「はい、手続き用の書類は既に用意してあります。」

「じゃあ、俺はこれからアイツと朝飯に行つてくるぜ。」

『『食べ過ぎ』にはくれぐれもご注意ください。』

「わかつてるつて。昨日はついつい気分が高揚しちゃってよ。」

「では、よろしくお願いいたします。」

「おう、任しとけ。」

何故かこのあと、大淀からぎゅつと腕をつねられた。

そして。

「函館所属の艦娘たちから妙な誘惑をされたのだった。

解せぬ。

朝起きてジャージに着替えると、天龍さんと第七駆逐隊の子たちが迎えに来てくれた。

これから一カ月半の訓練を経て、二年生に進級したらいわゆる『週末提督』になる。場所は広島県の呉。

提督関連の施設が一番充実している地域だ。

艦娘と学校に慣れなきや。

呉鎮守府に仮所属しながら提督業務を学び、先輩提督たちからいろいろ教えてもらうのだ。

大学は選択式。

やさしい天龍さんが僕には付いている。

駆逐艦たちも一緒だ。

もう、なにもこわくない。

CCXIV：風呂とシャワーと猿股

「ええ、そうです。ただ単にゆっくり入浴したいだけなんです。別にね、艦娘たちと一緒に入りたいとか、そういうことじゃないんです。早くシャワー室を修理して欲しいんですよね。艦娘たちがいつ入ってくるか気にしながら入浴するのって、全然落ち着かないんです。たまに入ってこられますしね。先日も民間業者に修理を頼もうとしたら、艦娘たちに怒られましたし。」

「朝、シャワーを浴びてたら大抵駆逐艦が乱入してくんだよ。ぺたぺた触ってくるし、止めろっていつも言ってるだけだよ。おっさんのぼて腹触っても、なんも面白くも無いと思うんだけどな。」

「基本的に執務室から出ない生活をしていますから、入浴っていうよりも簡単にシャワーを浴びています。今の時期は積雪がけっこうあるんで、さっさと入ってとっとと寝ないと冷えるのが難点ですね。たまに湯に長く浸かりたいと思わないでもないですけ

ど、利便性が一番です。」

「あー、うちは工場改造型で風呂が銭湯みたいになってるんですよ。基本、うちは混浴ですね。ほら、艦娘乙種が大半ですし、中の人は同性でしょう。きれいなんだけど気さくに接してくれますから、気楽でいいですね。おっぱいを当ててきたりして、いたずらっ子が多いのが難点ですけど。おふざけさえ許容出来たら、なんでもないですよ。」

「え……ええと、執務室からは、その、基本、出ませんね。風呂は行きません。来てもいいし、一緒でもかまわないと言われてはいるんですが……その、ええと……艦娘っていうか、女の子が苦手です。基本、没交渉、というか、書類上の関係というか、彼女たちとは殆ど会わないですね。たまに会うと、喋れなくなるんですよ。緊張し過ぎちゃつて。執務室隣の私室に小さな浴槽がありますから、そこで手早く済ませます。たまに艦娘たちに連れられて混浴しているんですけどね、若い子はあっけらかんとしていてあけっぴろげで、おじさんはついていけません。若い提督に引き合わせようとしたら、滅茶苦茶怒られましたよ。これって、セクハラになっちゃうんですかねえ。最近の風潮もさっぱりわかりませんな。」

「あー、うちはお子ちゃま提督がエロガキだからな。毎晩、一緒に入ろう一緒に入ろうつてうるさいぜ。俺、中身はおっさんなのによ。猿股やスパッツを穿いてたら怒るんだよ、あいつ。だけだよ、女物はすーすーすんだよな。隙あらば人の乳をちゅーちゅーするしよ。拳骨喰らわせても懲りやしねえ。まったく、困ったもんだぜ。あん？ 別に嫌いじゃねえけどよ、あの歳で変態っぽいのはちよつとなあ。」

「当鎮守府は執務室隣の私室にも風呂がありますけれども、艦娘たちが呼びに来るのでいつも混浴ですね。むしろ、混浴しないと怒られます。訳がわかりません。……あれ？ 着任日からずつとずつと混浴しているような……ああ、混浴していない日はないです。单身出張の時以外は。ええ、混浴しないと怒られるんですよ、私が。ええ、普通、提督が怒られるのはエロいことをしようとするからですよ、うちは逆です。しないから怒られるんです。なんだか理不尽な感じもしますが。え？ まあ、その、美少女美人揃いですから、興奮しないことにはないですよ。ははは、理屈を言われたらそうなのかもしれません、実際そんなことをしたら死んじゃうんじゃないですかね。全員嫁にしたら、その内腹上死しそうですが。え？ ははは、それは都市伝説みたいなものです。そんなに生まれませんよ。誰ですか、そんなことを言ったのは？ 薄い本の中のエロい人じゃないんですから。そう言えば、そういう話をした時、艦娘たちが妙に落胆していま

したね。 どうして何回も出来ないんだと詰め寄られちゃって。 仕方が無いので、大奥の話をしたら泣かれちゃって。 あの時はずっと大変でした。」

CCXV：スチエンカ

朝食のスイルニキは出来立てで、カッターチーズが程よく効いたパンケーキは私の胃袋を充分満足させた。

樺太産フレップのジャムによく合う。酸味が旨さをより引き立てる。

コケモモとも呼ばれるこの果実は酒の原料にもなり、業務終了後に果実酒を呑むのも乙なものだ。

トマトジュースは気分をシャキッとさせる感じだ。

料理人がかなり腕を上げている。

ここオタルの提督は厳しいから。

ハコダテの提督のゆるさと比べたら、天と地だ。

あれがいいという子と、あれがいけないという子とがいる。

考え方は多様な方が応用力は高い。

考え方が似た者ばかりだと柔軟性が失われる。

戦後を睨むならば、ハコダテのやり方のほうがいいのかもしれない。

国産紅茶を飲みながら、今日の業務について考える。

何故かハコダテの提督が目蓋に浮かんだ。

「なんだ、ローマ。朝からあいつのことを考えているのか？」

目の前の席に提督が現れた。いつもの軍曹と一緒だ。

「すみません、提督！」

急遽立ち上がって直立不動になった私を見て、彼女は苦笑した。

「お前の唯一の弱点はあの男だ。それを更に自覚しろ。戦場では一瞬の油断が命取りになる。」

「は、はい。」

「わかったならいい。私は部下を立たせたままにする趣味などない。食事は座って行うものだ。立って喰うのは、戦場だけでいい。」

「はっ！」

「これはよいスイルニキだ。ニコライは腕を上げたな。」

「ハコダテで訓練を積んだそうです。」

初めて軍曹が口を開いた。

「ほう、ロシア人の私を感心させるとは面白い。」

提督は寧猛な笑みを浮かべた。

オタル鎮守府は艦娘関連の仕事のみならず、多様な業務を日々こなしている。

ウラシオ泊地との連携でロシア関連の輸出入を手掛けたり、出稼ぎ亡命などの手伝いも業務に含まれた。

まるで総合商社だ。

オタルでは現在、ロシア料理店、ウクライナ料理店、ベラルーシ料理店、ポーランド料理店、チェコ料理店、スロバキア料理店、ハンガリー料理店、ルーマニア料理店、ブルガリア料理店、東ドイツ料理店などがしのぎを削り合っている。

幾つかの店はサツポロにも進出し、ススキノなどで繁盛しているようだ。

我がイタリアの料理店はやや劣勢気味で、少し悲しい。

執務室で業務。

オオヨドがいたらありがたいのだけど、そうもいかない。

事務局の娘たちは鎮守府所属のロシア男たちに目を光らせ、着飾ることに夢中だ。

一度提督に抗議したが、取り合ってもらえなかった。

「無能を役立ててこそ、オタル鎮守府は健全に機能するのだ。」

そういうものかしら？

「近々、同志ガングートが着任予定だ。」

「えっ!? 提督、お言葉ですが、オタルの規模では戦艦級艦娘二名を養う力は……まさか、提督……私を……。」

「なにを勘違いしている、ローマ。お前の大好きなあいつの元へ送ってやろうかと思っ
ているのだ。感謝して欲しいくらいなのだがな。」

「そ、それは本当ですかっ!」

「但し。」

「但し?」

「条件がある。」

「条件、ですか?」

「ハコダテに行きたい戦艦を集め、スチエンカで競ってもらおう。勝者がハコダテ行き
だ。」

「勝ちます。」

「負けたら最前線行きだ。それでもいいのか?」

「機会を与えてくださって感謝します、『大尉（カピタン）』。」「
負けない。」

私は負けない。

私の名はローマ。

麗しの都の名を持つ戦艦級艦娘。

きつと。

きつと勝ってみせる。

ずっと。

ずっと願っているのだから。

CCXVI：霞ママとしんむす会

しんむす会。

堅苦しい正式名称にすると、信州退役艦娘会。

長野県飯綱（いいづな）町の定食屋で働く元艦娘の霞を代表とし、主な活動は霞をひたすら愛でることである。

多くの大きなお友達達の熱烈系会員が在籍する会だ。

中の人がおっさんである罵倒系駆逐艦は散々抵抗し遅滞戦術まで用いたが衆寡敵せず、已む無く招き猫役と相成った。

しんむす会の中心的活動家は、長野駅で荒事専門職として配置されている三名の元艦娘だ。

長野県には後方支援型鎮守府と銘打った建物に居住している面々を除き、現在二〇名弱の艦娘甲種乙種が暮らしている。

中にはケツコンガチしている艦娘乙種もあり、素材的に考えるとおそろしいものさえあるけれども、当人同士が幸せそうなのでこれはこれでいいのかもしれない。

アツチヨンプリケ。

ある晴れた日。

霞は黒いフリフリのごシックロリータ系ドレスを着せられ、黄色い声を上げる元艦娘たちから激写されまくっていた。

そこには甲種も乙種も無い。

場所は長野市に点在する洋館のひとつ。

雪の中、職業写真家もその中に混じって撮影している。

霞は、長野県公式広報誌に掲載されるまでの知名度を有するようになっていた。

飯綱町名誉町民である彼女は地元での買い物が常時三割引となっており、お小遣いをちやつかり貯めている身としては町や県からの依頼を断りにくい。

おまけに、人に頼られると断れない気質は既に他者から見抜かれていて、幾ら罵倒系の言葉を用いてもやさしさが滲み出てしまう結果となっている。

今回の撮影もおいしいものが食べられるという、食い意地の張った霞の急所を的確に掴んだしんむす会会員の力を示していた。

やれやれ、やつとご飯ね。

今夜はお洒落なイタリア料理店で食事。

撮影に応じたら奢ってくれるというので受けたけど、これでよかったのかしら？
貸切りだから気兼ねなく食べられるし、これはこれでいいかも。

先ずは林檎酒で乾杯。

地元で作られたシールドル。

爽やかな酸味と甘やかさが、喉を伝って余韻が膨らんでゆく。

手作り万歳！

やつぱり林檎は長野産よね。

ベリーニやミモザも悪くないけど、地産地消って大事だと思うわ。

ブルスケッタ。

バケツトを焼いてニンニクとオリーブ油を塗っただけなのに、とってもおいしい。

他の料理も期待出来そうで、わくわくする。

前菜盛り合わせ。

みんなで分けて食べる形式。

隣の子がわざわざよそってくれた。

顔が赤いけど、大丈夫なのかしら？

自家製ハムにソーセージ、茸に新鮮な野菜。

ドレッシングもさっぱりしていて、どんどん食べられるのがいいわね。

アクアパッツア。

アンコウとトマトを使った蒸し煮。

単純に見えるけど、奥行きを感じるわ。

アンコウは大洗（おおあらい）から仕入れたっていうから本格的ね。

大きな籠に入れて出されたパンはすぐさまあちこちから手が伸びて、あつという間に無くなってしまう。

あたしの分は、隣の子が確保してくれていた。

あつさりした感じで自家製バターによく合う。

自家製チーズが盛られた皿を持った女の子が来た。

五種類もある。

それだけ自慢なのね。

ありがとう、って言ったら彼女は真っ赤になった。

パスタは娼婦風のなんとかっていう辛くておいしいのと、浅蜷とパセリの出汁がよく効いたおいしいものだった。

自家製パスタがモチモチしていて、歯応えがいい。

ずいぶんこだわっているわね。

デザートのドルチェはテイラミスにカツサータにエスプレッソ。

代用珈琲じゃなくて、本物の珈琲だ。
麦でもタンポポでもなくて本物だわ。

テイラミスはチーズの風味と珈琲の深みが巧みに融合されていて、見事な協奏曲を奏
でているわね。

カツサータはアイスクリームの中にお酒に浸けた干し果実が入っていて、まさに大人
のデザートね。

おいしかったわ、と微笑んだら途端に撮影されまくった。
ホント、あんたたちも好きね。

CCXVII：大井つち、大いに困惑する

就職先がまた倒産した。

昨今はちよつとしたことで潰れる会社が多い。

私が再就職活動で散々苦戦してようやく入社した会社も事業拡大に失敗し経営に失敗し仮想通貨に失敗し、社長一家がどこぞへと逐電する破目に陥ってしまった。

東京は不景気の嵐だ。

かつての繁栄を取り戻したいと願うバブル期真っ只中だった五〇代前後の人たちが声を張り上げていたけれども、よくて批判殺到悪くて闇討ちされていた。

流石に命は惜しいらしく、彼らは現在暴力に対して表面上屈しているようだ。

嗚呼、また職業安定所通いの日々が再来するのか。

とほとほとあの無機質なコンクリートの建物に行ったら、大きな貼り紙が掲示されていた。

艦娘乙種募集情報だった。

私のようなおっさんであっても、艦娘になれるらしい。

厳密には少々異なるけど、外見だけなら艦娘になれる。

詳しい情報を窓口で求めたら、応対してくれた年配の職員は意外にも渋い顔をした。

彼曰く、担当した人物が艦娘になれたのはよいが書類関連で連絡を取ろうとした際に、既にその艦娘は退役したから関係ないと彼が着任した筈の鎮守府の提督から言われてしまったそうだ。

つつけんどんな電話対応だったらしい。

そういう鎮守府には所属したくないな。

実質的な門前払いという感じを受けた。

それ以降、その人物は行方不明だとか。

彼が更に調査しようとしたところ、上から追跡調査不要とのお達しが来たそうだ。

なにそれこわい。

「守秘義務の関係もあるでしょうから詳しくは突っ込めませんが、その方はもしかしたら既に亡くなられているのかもしれない。」

彼はひそひそと小さな声で言った。

雪の降る中、選択肢が実質的に無い私は大本営に向かう。

コンビニエンスストアさえ大半が消え去った社会である。

廃墟化しているショッピングモールなど、ざらにあった。

交通事故は格段に減ったが、行方不明者は年々増加の傾向にある。

中年就活者の受け入れ先は命の危険性が大きいところか、即戦力として過酷な状況に直面させられるところが多い。

後は、専門的資格を有していないとすげなく断られる会社がちらほらあるくらいか。

横須賀も雪模様だった。

呆気ない程に手続きは素早く終わり、体質変更のための注射を打たれ数日入院し、魔女の釜みたいな棺に入ってチンされ、そうして艦娘になった。

私は大井という軽巡洋艦に変わった。

この子、おっぱいがけっこう大きい。

なんだか周囲が随分騒がしくなった。

足柄という重巡洋艦に変わった人が現れた時も騒ぎになったらしい。

私を求める鎮守府はかなり多く、それは意外とも思える程であった。

私と同型の球磨型と呼ばれる軽巡洋艦を抱える鎮守府は特に熱心で、中でも北上という艦娘を有する基地の私に対する執着度は空恐ろしいくらいだ。

大井という艦娘は、意外と少ないらしい。

大本營で訓練を始めてから、艦娘たちの訪問を受けるようになった。

放課後面接クラブ、って感じかな。

私のようななんちやって艦娘ではなく、本職の艦娘たちだ。

面接の予約率が意外な程高かった。

同期からはやつかまれたり嫉妬されたり嫌みを言われたり。

酷い対応をする彼らは全員駆逐艦でしかも個体的に性能があまり高くなく、おそらく潰しの効かないだろう現実的未来に絶望している者さえいた。

一戦交えたら即轟沈かもな、と言われて喜ぶ者などいないからな。

では退役してなにかするとおっしゃるでもすぐ辞められる訳ではないし、人間に戻れるかさえ不明瞭だ。

やってみないとわからないとか。

世の中の残酷さを女体化した後を知るの、なんとも言い難い空恐ろしささえ感じる。

一週間程で脱走者が三名いた。

座学の前に知らされただけだ。

結果がどうか教えてくれない。

とある鎮守府の北上が勧誘熱心で、週に二回はやって来る。

提督の説得は終えたとのことで、私が一言はいと言えば即手続き出来るという。

艦娘甲種で本物の彼女が、何故偽物の私をこんなにも求めるのだろうか？

謎だ。

でも、嬉しくもある。

こんなに他人から求められたのは生まれて初めてだ。

折角こんなに来てくれるのだからと、その鎮守府へ着任することにした。

周囲の同期が段々めんどくさくなってきたからでもある。駆逐艦ウザい。

着任する鎮守府は甲種艦娘と乙種艦娘との混成仕様で、軽巡洋艦は北上しかない。

以前は他にも、軽巡洋艦や軽空母が所属していたそう。

大規模作戦の失敗の余波を受け、何名も轟沈したという。

その時の鎮守府はとても暗かったそう。

私は名目上軽巡洋艦だが、性能上は駆逐艦と大して変わらない。

いや、一発轟沈しやすいだけにより低性能なのだと考えられる。

それでも歓迎された。

ありがたいくらいだ。

鎮守府へ着くと『熱烈歓迎!!!』と墨痕鮮やかに書かれた横断幕が港に掲げられていて、

運んでくれた海上自衛隊の艦艇の人たちが苦笑していた。

ついでの便があつてよかつたと、しみじみ思う。

たまたま横須賀港に停泊していたそうで、私を乗せたのも偶然らしい。

海の男たちは実に友好的で、彼らから懇願された記念撮影に応じたら、無茶苦茶喜ばれた。

艦長を含め、全員と写つた。

こんな私でよかつたのかな？

仕事でたまたま乗り込んでいた女性自衛官たちも、たいそう喜んでくれた。

中の人はおっさんだと最初から打ち明けたのだが、そんなの関係ありませんと全員の鼻息が荒くて困惑した。

名残惜しそうに見える彼ら彼女らと別れ、鎮守府の建物に向かう。

着任の挨拶をするため、執務室へ行く。

扉が少しがたついていて、壁に幾つも補修済みのひび割れ痕が見えた。

なにこれ？

部屋の作り自体は悪くない。

簡素簡潔な作りで質実剛健な雰囲気だ。

提督は私が驚く程着任を喜んでくれた。

違和感さえ覚える程の歓喜に、直感が喚起される。

なにかおかしい。

「戦力が向上すれば、所属艦娘たちの生存率も上がってくる。それはとてもとても嬉しいことなのさ。」

まあ、理屈はそうなりますけど。

めっちゃいい笑顔を向けられた。

部屋は北上と同室。

「大井っちー、大井っちー。」と北上が抱きついて甘えてくる。

事前情報では大井側から北上への友愛的行動が熱心な個体もいると聞いていたのだが、この鎮守府では異なるようだ。

「もう、大井っちったら、冷たいー。」

「あ、すみません、北上さん。」

「堅いなー。距離感あるなー。」

「ええと、鋭意改善点を精査しまして反省点を踏まえながら……。」

「違う違う、こうだよ。北上さん北上さん北上さん北上さん北上さん北上さん！　って感じが

基本だよ。」

えー。

なにそれ。

なんば言うとなね。

そげな恥ずかしなことなぞ出来んち。

「北上さーん！ ええと、こんな感じでどうでしょうか？」

「三〇点。」

「ぐはあ。」

「今のは大井っちにしては斬新だね。でも、いつもの大井っちとは違う。」

「え？」

「ううん、なんでもない。今度は大丈夫だから安心してね、大井っち。」

「は、はあ。こちらこそよろしくお願いたします。」

「うくん、意識改革が先決かなあ。取り敢えず、お風呂に行こ。」

「はい、わかりました。」

もしかして、前任の大井はかなり個性的な子だった？

北上に連れられて浴場へ向かう。

下着がおっさんくさいとダメ出しされた。

ぐ
は
あ。

CCXVIII：クロスマカニトテン式

時計の針は二二〇〇を回りました。

今日の日も残り二時間ほどで終わりを迎えます。

今日と明日との交差する前の、ほんのひととき。

冬木透さんの名曲『動乱』を背景に始まり、ました、クロスマカニトテン。

これからの約一時間は、函館鎮守府の通信 室よりおっさん提督がラジオ番組を放送します。

どこに需要があるのかさっぱりわからない のですが、各方面から要望がありましたので、今後も週一で放送予定です。

既に放送回数は八〇を超えました。

これも皆様の暖かいご支援あつてのことです。

ここに深く御礼申し上げます。

今回も葉書が五〇〇通ほど届いています。

中には戦時中の切手を貼られた方もおられるようで、パラオを含む南方からも何通か届いています。

褪せた紙の質感がいいですね。

古風な文体なので、頑張つて読ませていただきました。

あと、毎回お伝えしていますが、あまりに過激な内容ですと番組内で読むことが出来ません。

悪しからずご了承ください。

あまりにもエツチなのは、いけないと思います。

それでは一曲目。

李香蘭さんで『蘇州夜曲』。

お聴きください。

函館はまだまだ寒い日が続いていますが、昨日と今日は雨がよく降りました。

積もっていた雪も、どんどん消えてゆきます。

なんだかほかなささえ感じますが、春の訪れが北の国にも届いているのでしよう。

お聞きください。

『雨に唄え』。

こわい話をするのがこの『クロスマカニトテン』の恒例と言えるなんていわれていますが、そんなにちよくちよく金縛りに逢ったり都合よくホラーな展開になんてなりません。

まあ、大抵はちよつと妙な目に逢つて後で嗚呼あれはなんてなつたりならなかったりするものです。

劇的な展開なんて、『実際に』あるもんですかね？

夢で亡くなった方々に逢うというのは経験がありますが、誰とでも逢える訳ではありません。

懐かしさとさみしさとせつなさとの去来する夜と朝。

それは、刹那にも似た愛の交信なのかもしれません。

お聞きください。

那珂ちゃんの新曲で、『春の櫻に貴方を想う』。

北海道のお米はおいしいんですかとの問い合わせが時々ありますけれども、なまらおいしいですよ。

昔はあまりおいしくなかったそうですが、地球温暖化とたゆまぬ努力の結果としてお

いしいお米が作られるようになったそうです。

七飯町（ななえちよう）産のななつぼしや北斗市産のふっくりんこをよく食べていますが、なかなかおいしいですよ。

道南は北海道でも最初にお米を栽培した土地で、現在おいしい米どころにもなっています。ゆめぴりかも有名ですね。

北海道は現在日本の穀物供給地帯としての重要性が年々増していますから、道民も全力を挙げて日々奮闘しています。

いきなり大量に増産なんて実際には不可能ですから、毎日地道に努力するしかありません。

現実には、ネット小説のチート展開にはならないものです。

北海道のお米は品種が沢山ありますので、機会がありましたら食べ比べてみては如何でしょうか？

物産展でもお米の試食をしていますので、試されるのもいいかと存じます。

昔は安くて不味い『やつかいどうまい』などと揶揄されていましたが、不屈の道民。パワーがそれらの悪評を駆逐したのだと考えると胸が熱くなります。

ところで、こういう悪口や陰口を叩く人ってなんなんですかね？

悪く言うだけなら誰にも出来るので、そうはなりたくないです。

お米と言えば、山形のかや姫もおいしいですし、長野県飯綱（いいづな）町や岡山県吉備中央町や島根県奥出雲町のお米もおいしいです。

近年は増産の甲斐あつて、道産米も供給がかなり安定している模様です。牛乳も減産指示が無くなったので、酪農家の方々も張り切つていますね。運搬には艦娘たちが活躍していて、駆逐艦の需要が今後増えるでしょう。配給券無しでも普通にお米を買えるつて、ありがたいことだと考えます。

深海棲艦侵攻以前は食料の廃棄問題が大きく、恵方巻きを含む食べ物の扱いが取り沙汰されていましたが、コンビニエンスストア自体が激減してスーパーの惣菜がすぐ売り切れる現在ではまるでかなり昔の話みたいになつていようです。

あと、先月のことなのですが、魏呉蜀の三国や台湾の方々から日本の文房具が是非とも欲しいと言われ、ちよつと驚きました。

日本の文房具は世界一だと言われていたのは誇らしく思えると共に、なんだか少し照れくさかつたです。

欧州の方々も日本の文房具を誉めておられましたね。

ありがたいことです。

それではここで一曲。

小林旭さんの『熱き心に』。

よその鎮守府泊地警備府へ出張で行く度、このラジオ番組の話題が出てきてありがとうございます。

ただ、どさくさに紛れておつちちゃんをおさわりするのは止めてくださいね。異性のお尻を馴れ馴れしく撫で上げる行為は、大変よろしくないことです。

無害な提督ばかりではありませんし、笑ってイタズラを許す人ばかりでもありません。

無邪気に密着したり、耳をなめてもいけません。

おつちちゃんも男なので、大変困ってしまいます。

ちよつ、大淀さん、その剣はどこから出したんですか？

なにもありませんでしたから、大丈夫ですよ、大丈夫！

それはどこの基地ですか、つて目がこわい目が！

貴女が錯乱してどうするんですか？

ええつと、次の曲に移りましょう！

それでは、加賀さんの『立待岬』。

あれ、どうしたんです、加賀教官？

え、生で歌われる？

まあ、いいですよ。

ええと、それではお聴きください。

ちよつと大淀さん、こつちへ！

戦艦級並びに重巡洋艦級艦娘で手の空いている方は、至急放送室まで！
別に全員轟沈させてもいいのでしょうか、つてダメです、絶対ダメです！

ええと、先程お聴き苦しい点がありましたことをお詫び申し上げます。

お耳直しにちよつとこわい話を。

あれはですね、学生時代のアルバイト先であつたことなんです、その日倉庫で一人延々と二〇キロの米袋を開けては大型精米機に投入する作業をしていました。

で、その米袋の中には、時折虫が混ざっていましてね。

白い繭に包まれているんですよ。

某県産の米なんて、当時は本当に安かつたらしく、今は違うと思うんですけど、まあ、その買い叩かれたらしい何年も前の米袋の中を確かめながら機械に投入していたらですね、先輩が来て、そんなに丁寧にやる必要は無いんだと米袋を開けて中身を確認しながら……。

お米を買われる時は、産地がきちんと確認出来てあまり安過ぎないモノを買われた方がいいと思います。

安全安心のおいしい北海道米をよろしくお願いいたします。

と、道庁や道内の自治体の方々から宣伝を頼まれましたのでお知らせします。

函館鎮守府の公式サイトでも通販を受け付けていますので、そちらも併せてご覧ください。

また、「函館鎮守府見学会通称『はこけん』」の日程情報もそちらに記載されています。

道南の観光情報も満載ですし、人数が揃えば特別観光バスのご用意も可能です。

詳しくは公式サイトにてお確かめください。

以上、宣伝でした。

このラジオ番組は一般の方も聴かれていますので、改めてご注意ください。

中学生や高校生のお嬢さん、艦娘の恰好をしてもすぐに偽者と判明します。

危険行為ですので、そういったことを為さないようにお願いいたします。

また、おっちゃんは冴えないアラフォーで女の子と付き合ったことさえない童貞なんです。

皆さんはおっちゃんを美化し過ぎです。

そんなにたいそうな人ではありません。

間違つても、おつちちゃんのお嫁さんになりたいとかいう話は特に鎮守府見学会でしないでください。

ふざけて抱きついたり、チューされたりすると皆さんの生命に危険が及びます。

それでもいいわ、というのは無しにしてください。

一回でもいいから、というのもダメです。

命大事に、です！

なにとぞ貞操を大事になさってください。

以上、おつちちゃんからのお願い事でした。

ちよ、大淀さん、暴れちやダメですつて！

えつと、キャンデイズの『やさしい悪魔』です。

お聴きください。

時計の針は二三〇〇を回ろうとしています。

そろそろ終わりの時間が近づいてきました。

皆さんに、よき明日が来ますように願っています。

それではまた次週、お会いいたしましょう。

スクリプトは大淀さんと私、函館鎮守府の 提督でした。

本日最後の曲を流しながらお別れです。

家入（いえいり）レオさんで『春風』。

お聴きください。

CCXIX : いかお

先日、関東圏最大級都市の横須賀にある大本営へ行つた時のこと。

なんかおもしろいもんじゃないかと呉の先輩から言われ、こんなんですかねと三〇秒程で描いた落書きが『いかお』として製品化された時は驚いた。

函館と言えば烏賊（いか）。

それを適当に戯画化してさらさら描いたら、まさかまさかの根付けやキーホルダーやストラップ化。

それは瞬く間に函館鎮守府所属の艦娘の標準装備と化し、函館へ静養や休暇に来てい
る艦娘へも伝播し、何故かは分からないが道南及び青森県の女子中学生や高校生たちが
ら欲しいとの要望が殺到し、更には私が試作品で沢山貰つたステッドラーの加工用粘土
で作り上げオープンで焼き上げた不細工なモノが、プレミア価格で流通するという異常
な状況にまで発展した。

なにこれ？

急いで粘土製『いかお』を増産し、公式サイトで販売したら即時完売。

沈静化するまでは毎晩夜鍋仕事である。

なんてこつたい！

更にはノートやメモ帳まで作ろうとの悪ノリまで発生し、北海道の物産展に急遽依託参加したところ即日完売したそう。

アジャパーツ！

訳がわからん。

放送局や新聞や雑誌編集部やデイリーポータルなんちゃらなどからの取材が相次いだが、どれも断ってもらった。

めんどくさい。

『いかお』人気はネット上で加熱し、過熱の様相さえ見せていた。

先輩とこの地元企業であるセーラー万年筆が限定版でいかおボールペンやいかお万年筆などを製造したいと呉鎮守府へ打診してきたそうで、地元愛の強い先輩からの要請を断れる筈も無く仕方なしに受諾したら文房具会社の人や食品会社の人などが函館鎮守府へ続々押し掛ける事態へと発展した。

オーマイガツ！

いかせんべいを作っている会社群の陳情は無視出来ず、程々にしないと在庫過多にな

りかねませんよと老婆心ながら助言した上で許諾した。

まさか、熊本のあの人気ゆるキャラみたいにはなるまいて。

転売屋の横行を防ぐため、函館駅構内売店や仙台横須賀三宮大阪博多でも粘土製『いかお』が入手出来るように増産を頑張る。

本体は私が作り、足は駆逐艦たちに作ってもらおう。

本宮ひろ志方式で、この状況を乗りきるんだがね。

公式サイトでは、出品即完売の状況が続いている。

何時までもこんな状況が続く訳ない筈だから、今を乗り越えればなんとかなる。消費者は気まぐれなのだから、何時までもひとつのモノに囚われる人は少ない。

『なめ猫』みたいにはなるまいて。

少しなりかけているみたいだけど。

パチもんまで現れたが、大淀が物理的に解決した模様である。

電脳上では造形についての造詣が深い考察も散見されるとか。

そんなことより増産だ。

そげに考えてこれをつくりようりやあせんのじや。

まあ、数カ月で音沙汰が無くなるだろう。

たぶん。

「提督！」

「なんでしよう、大淀さん？」

「オランダやドイツなどの業者から、美濃柱さん経由で問い合わせが来ています！」

「はてさて、欧州方面に今なにかありましたっけ？」

『『いかお』を今すぐ売ってくれ、とのことですよ！』

「はい？」

『『いかお』 人気が欧州方面へ飛び火しています！』

「な、なんだってー？」

「どうやらまだまだ騒動は続きそうだ。」

C C X X : 私は名取

軽巡洋艦『名取』の姿になって一年少々。

僚艦が次々轟沈する中、幾つもの作戦に参加して死闘を重ねてきたが、遂に轟沈寸前の損傷を受けた。

入院中の病室で提督から依頼退役の話を持ち出され、二年分の給与と同等の退職金を貰って私は艦娘を止めることにした。

だが。

検査の結果、融合率が進み過ぎたとかで元の姿には戻れないことが判明した。

男性時代に見慣れたモノがくつついたままなのが、戻れない理由のひとつだ。

女でも男でもあるアンドロギュヌス。

なんだかとても複雑な気持ちになる。

妻とはもう二度と子供が作れない。

それが限りなく残念に思えてくる。

懐かしの我が家に戻ると、妻と二人の娘は好意的に出迎えてくれた。
いや。

寧ろ、男性時代よりも更に好意的な感じが窺えて私は少なからず衝撃を受けた。
艦娘に変わった後も娘二人と会話を重ねていたが、今の方がより好意を感じる。
なんだか大変複雑な気持ちだぞ。

その夜の妻はかなり激しかった。

「アナタ、そのナリナリテナリアマレルモノでテイトクさんとはやったの？」

「一体なにを言っているんだ、君は。そんなことする訳ないだろ。私は君に一途なんだから。」

「アラ、ソレはとってもモツタイナイわね。アタラシイトビラがヒライタかもシレナイのに。」

「私には君の考えがよくわからないよ。」

妻が腐女子なのは以前から知っていたが、百合でもあった。
それは知らなかったぞ。

男性時代よりも興奮しているようで、複雑な心境に陥った。

今の私は、艦娘でも男でも女でもなくて中途半端な存在だ。

案外、退役した同様の元艦娘たちは元気に暮らしている者もちらほらいるらしい。

まあ、妻が寢所でも満足してくれているようだなによりだ。

妻はロシア系だそうで、ある日出先の海岸で初めて会った。

肌がやたら白いが、遺伝の関係らしい。

研究所から逃げてきたとも言っていた。

深くは聞かない方がいいだろうと思う。

美しい妻と可愛い娘二人が私にはいる。

それだけで充分じゃないか。

ご近所さんたちとも、上手く付き合っているようだし。

職場の問題を解決しようと、同じ鎮守府にいた駆逐艦の霞に電話してみた。

彼女は現在、故郷の長野県飯綱（いいづな）町の食堂を切り盛りしているそうで毎日忙しいらしい。

彼女からは、すぐにも手伝いが欲しいみたいなことを言われた。

「最近、やたら忙しくってね。猫の手も借りたいのよ。で、いつ来れる?」

「相変わらずせっつかちだな、君は。」

「ちやつちやつとやってばつぱと済ませた方が、楽に決まってるじゃない。」

「それもそうか。」

「まだ仕事は決まっていらないんでしょ? とつとつ今の住まいを引き払って、さつさと

北信へ来なさい。」

「住まいがねえ。」

「そんなの簡単よ。あたしは今、飯綱町の名誉町民なの。アパートの一室二室、貸家の一軒や二軒くらい簡単に融通が効くわ。実際、経験があるから安心して。人口が四名も増えるんだもの、町役場だって万歳三唱よ。」

「へえ。」

「そうね、明後日は時間がある？」

「ああ、特に用事は無いな。」

「じゃあ、下見にいらっしやい。」

「北信へ？」

「北信へ。」

「ええと。」

「はいかイエスかで答えなさい。」

「選択肢が無いじゃないか。」

「そもそもあると思っていたの？」

結局、行くことに決まった。

妻は別に問題ないと言った。

ありがたい。

娘たちも、これからの新しい生活を楽しみにしているようだ。

「ズイウン！ ズイウン！」

餞別としてとある航空戦艦から頂いた模型飛行機を持って、妻に似てやたら色白な娘たちはブーンブーンと空戦の真似っこをする。

非常に頑丈なおモチャで、叩きつけられようが踏みつけられようがなんともない。

どこで売られていたのだろうか？

なんだか一機欲しくなってくる。

「フフフ……イクのねえ、ネエ、イクのねえ。」

「ああ、しばらくは大変だろうが、力を合わせていこう。」

「エエ、イクラでもイカせるからアンシンしてやられて。」

なんとなく齟齬を感じるが、妻はやさしく微笑んでいる。

おそらく、日本語がまだきちんと習得出来ていないだけ。

それだけなのだ。

密着してハアハアと言っているが、気のせい気のせいだ。

紅い目を光らせ、イロイロとタノシミネと彼女は呟いた。

CCXXI：壊れかけの提督

駆逐艦二名と軽巡洋艦一名と重巡洋艦一名と軽空母二名とが罵りあっている。

いつものことだ。

こいつら、ホントに相当仲悪いなあ。

俺の世話がどうこうとか言っている。

輪番制にでもしたら、と言ったら専属がいいという。

俺は分割出来ないぞと言ったら、お互い分割するとか言い出した。

捻れているねえ。

仕方がないから全然別の艦娘を担当にしようとしたら、やめてください死んでしま
ますと言われた。

それだけ元気なら、死なないと思うよ。

軽巡洋艦一名に砲口を向けられ、咆哮される。

なんて熱い激白なんだ。

思わずグツとくる。

いつ撃つんだろうと眺めていたら、彼女は真っ赤な顔をして去っていった。がたがた震えながらも録画していた重巡洋艦からデータを貰う。

おお、きれいに撮れてんじやん。

新規の建造なんて大型鎮守府の独占だし、戦闘後に海上で艦娘と邂逅出来る確率なんてごくごく僅かだ。

よつて、艦娘は自分自身に合った鎮守府泊地警備府を求めて放浪する。

一時期は函館が大盛況だった。

最近では自らの性癖に合わないと悟る娘が増えてきたお陰で、その神通力は減少傾向にある。

そう、大本営は発表している。

『お試し着任』も増えてきた。

俺の鎮守府は三日もいたらいい方だ。

朝方真っ赤な顔で転属カツコカリしてきた娘が、夕方真っ赤な顔で他所へ移ってしま
う。

そろそろ、悪評が広まっている頃か？

誰とも寝ていないんだが、みんなが俺と寝たと言う。

なに、そういうのが流行ってんの？

切れた電球の取り替え。

来客用御手洗いの清掃。

鎮守府内のお掃除当番。

それを担当するのは俺。

きれいにするのが好き！

だがだがしかしおかし！

いつの間にか、艦娘たちにお株を奪われてしまった。

無念である。

お前たちは家族だと艦娘たちに言ったら、四六時中甘えてくるようになった。

何故か時折抗争が勃発しているが。

朝起きたら、下着姿の駆逐艦同士がパンクラチオンをやっていた。

狭い空間での死闘。

寝技の激しい応酬。

エロくて激しくて見応えがある。

これこれ、こういうのがいいんだよ。

でも、原因はなんだべや？

やれやれーっ！ と兩名を応援していたら程なく止めた。

えーっ、もつと見たかったのに。

やっぱ道場を増設しようかねえ。

軽空母三名と宅飲み。

料理上手な嫁が欲しいと言ったら、全員買い出しに出掛けて台所でなんか作り出した。

いずれも旨かったぞ。

どこかの紅茶戦艦が来訪。

うちの艦娘たちと争った。

なんで？

軽空母一名と給糧艦三名との熾烈な戦いが我が鎮守府の厨房で行われた。

皆でウマーウマーと食べる。

そんな日々を過ごしている。

あー、もうちよつと安定しないかねえ。

CCXXII：高温高压缶

新型高温高压缶。

改良型艦本式タービンと組み合わせることで、低速艦をも高速化させる代物。全国の明石と夕張によって魔改造された品が、函館鎮守府に二組届けられた。最速艦娘を自他共に認める駆逐艦の島風と、長門が試験へ臨むことになった。

わいわいざわざわする中、提督と島風が与汰話に興じる。

「ホバークラフト化してジェットモーターとかアポジモーターとか付けたら、更に速くなるんじゃないですかね。」

「提督、それではツイマツド社の重モビルスーツになつてしまう。」

「そうですね、ではジャイアントバズとスカートを増設しますか。」

「どこまでボケ倒す気だ。」

「長門教官にはビームサーベルと半壊した盾を装備してもらつて。」

「じゃあ、提督は輸送機役か。」

「頭がへしやげると厭ですな。」

「提督に島風、じゃれている場合ではないぞ。そろそろ試験の準備に取り掛かる。」

「では、ロシア式に多数のロケットを用意しましょうか。」

「制御出来るかな？」

「そこ！ どこまでボケる気だ！ 明石たちに夕張たちも、嬉々として怪しげな装備を持つてくるな！ 私はやらんぞ！ 島風も装備しようとするな！ 提督、ふざけるのも大概にしろ！」

函館特有の強い風が吹く中、長門と島風が演習を行っている。

長門は速射性を重視して副砲のみを装備し、島風は両手に戦棍（メイス）を握っていた。

ちなみに島風の持つメイスは、『力のメイス』と『粉碎のメイス』である。

どちらも艦娘乙種の基本兵装。

火力装甲生命力その他全般が甲種に較べて低めな乙種は、防弾防刃チョッキを着込んで深海棲艦に突っ込むことが多い。

死兵的な目と化して深海棲艦へ襲いかかる艦娘乙種は、まさに世紀末的世界の戦士。ヒヤッハーと叫んで飛びかかる者さえいる。

「そうそう当たるものではない！」と叫んで突撃することも多々あり、それは事実。

実戦に於ける被弾率は意外と低く、それは敵に与える被害が低いことをも示すから。

だが、当たる時は当たる。

それを知りつつ、艦娘乙種は今日も深海棲艦に接近戦を挑む。

中には敵前逃亡し、無防備な背中を撃たれる者もいるけれど。

速さは回避率に影響する。

速い方が絶対によいか？

それを確かめるべく、大本営の調査官や大勢の見物艦の前で戦艦と駆逐艦が死闘を繰り広げる。

「刃拳（ハーケン）！」

島風が長門へ蹴りを入れる。

そこに躊躇は一切無い。

笑みを浮かべてさえた。

長門はその鋭い蹴りを、片手で流れるように逸らしてゆく。

彼女も微笑んでいた。

艦娘の本能は闘争と恋愛。

双方を満たすため、今日も艦娘は深海棲艦や提督などに突進してゆく。

島風が跳躍した。

くるつと半回転し、彼女は両足の蹴りで戦艦に打撃を与えようとした。
「斧鉞（ふえつ）！」

戦艦の両肩を狙う、必殺の一撃。

まともに食らえば、深海棲艦の戦艦級でさえ昏倒することもある武技。
だが。

歴戦の戦艦は動きが違った。

「むんっ！」

足刀を横合いから素早く握り、ジャイアントスイングを始める教導艦。

「カイトス・スパウディングボンバー！」

某漫画に影響された彼女は、駆逐艦を空へ投げた。

落ちてくるところへ打撃を加える。

それで、この激闘は終局を迎える。

しかし。

空中で姿勢を変えると、島風は猛禽の如くに襲いかかった。

「イナズマキック！」

「なんのっ！」

大本営から派遣された大淀が提督へおすおすと話しかける。

「あの、提督。函館ではこれが日常茶飯事なのですか？」

「どうやら、まだ建造されて日が浅いらしい。」

そこへ函館の大淀が音もなく近づいた。

柳生流の西江水（せいごうすい）という奥義のひとつだ。

ハッと気づいた新人大淀の間合いには既に先輩大淀。

必殺の空間。

声も出せなくなった後輩に、先輩はやさしく微笑む。

「大丈夫ですよ、じきに慣れます。」

赤くなる後輩。

彼女をやさしく撫でる先輩は、提督の悪影響を確実に受けていた。

死闘は続く。

笑いながら戦う艦娘。

既に両名とも中破状態だ。

ドイツ製の信号銃に弾込めする提督。

終わりを告げるための弾。

「流星拳！」

嬉しそうな声が、函館の早春の空に吸い込まれていった。

CCXXIII：提督の取り込み方

舞鶴の新人提督が、彼の艦隊専用艦娘寮に軟禁されている。

そう聞かされたのは、肌寒い朝のことだった。

横須賀呉佐世保同様に、舞鶴にも九人の提督が所属している。

いずれも厳しい選考を経た、私よりもはるかに有能な人材だ。

最近一人失踪を遂げてしまったので、その欠員が補充された。

その新人提督は、専門教育を受けて大本営で学んでいた俊英。

期待のホープってところだろう。

その矢先にこれだ。

舞鶴と言えば、脳筋系提督群と軽巡洋艦と駆逐艦たちから成る水雷戦隊を持つて鳴る

大型鎮守府。

高速機動戦がその本領だ。

軽空母の運用も悪くない。

なんで、小さな地方鎮守府の函館に連絡が来るんですかね？

陸上自衛隊の一般解放日に合わせた打ち合わせもあるのに。

鳳翔間宮李さん鹿ノ谷さんの四者揃い踏みで、屋台を開くつもりらしい。

他の屋台店主から苦情が来ないのかね？

私だったら、尻尾を巻いて逃げ出すぞ。

基地所属の隊員たちからの熱い要請があつたそうだが、わからんでもない。

それはおいといて、今は舞鶴の提督軟禁事態の解決だ。

ケツコンしていた娘がいると、話が更にややこしくなってくる。

さてはて、如何致すべきか。

日本海を伝つて、舞鶴から迎えに来た艦娘たちと共に問題の鎮守府へ向かう。

私が座乗するのは、高速指揮船。

艦橋と言うにはちんまりした大きさの箱の中で、舞鶴第一鎮守府の神通が状況を説明してくれた。

— 新人提督の指揮下にあるのは、第六駆逐隊全員と第七駆逐隊全員に五十鈴長良（ながら）隼鷹（じゅんよう）飛鷹（ひよう）の計二艦隊分の艦娘。

キチツと艦娘を揃えたところが、四大鎮守府って感じた。

これがこじよつこりした鎮守府だと構成に四苦八苦する破目に陥るし、他所の鎮守府との連携や貸し借りが無ければ任務を満足にこなせない場合もある。

本末転倒だ。

神通の説明によると、軟禁した艦娘たちの意思は固く新人提督は每晚泣かされているとか。

どういう風に泣かされているのだろうか？

少し気になる。

で、我が輩になにをどうせいゆうんじや？

ワシ、そもそも関係無いよね。

「豪腕と聞き及んでいきますよ。」

神通が微笑む。

「誰ですか、そんなことを言ったのは？」

「呉第六鎮守府の提督です。」

「先輩ですか。」

「ええ、期待しています。」

現状はそんなに悪くないのか？

神通の様子に余裕が見られる。

わからん、私にはわからんな。

密着しようとする神通に、それを阻もうとする随行員の艦娘たち。

なにをやっておるのだね、君たちは。

「高速指揮船が入港したわ。蔦唐丸に板倉九曜の紋所だから、事前に聞いていた通り、函館鎮守府の提督がお出ましょ。五稜郭に熊紋もあるから間違いないわ。なんとも言えない雰囲気か漂うあの人が、この舞鶴へ来たのよ。来たのよ。ねえ、どうしよう？ あの人を軟禁しちゃう？ しちゃおつか？ しちゃつてもいいよね？」

斥候の暁から少し興奮した様子の言葉が、トランシーバーを伝つてくる。

謎の三段活用をしながら、本音が駄々漏れだ。

トランシーバーは携帯端末が一般的になつてから無用の長物扱いされることもあるらしいが、こうした状況では重宝する伝達手段だ。

私は姉に返答する。

「提督はどっちに向かっている？」

「まずは本棟に向かうみたいね。ひとつ走りして、さらつてこようかしら？」

「やめといた方がいいよ、姉さん。提督に護衛が付いているんじゃないか？」

「護衛つて、島風と吹雪だけよ。制圧するなんて、私だけでも簡単でしょ。」

「油断すると危ないよ。函館には『化け物』が何名もいるからね。その二名も特級で危険だ。第一の青葉から話は直接聞いている。」

「わかったわ、響。一旦撤収す……えっ？」

「どうかした？」

「島風がこつちを見て笑ったわ。」

「すぐ戻ってくるんだ、姉さん。」

島風があらぬ方向を見ながらニヒルに笑ったので、そちらに目を向ける。

なんだ、なにもないじゃないか。

第一鎮守府の提督に会って社交辞令を交わした後、突入か交渉かの話になる。

五〇代の穏健な雰囲気的人物。

彼がここを仕切る親分ナリヨ。

武術に詳しそうにも見えるな。

強硬論も多かったらしいのだが、何故か艦娘たちは私の派遣を望んだという。

何度も何度も入れ替わり立ち替わりお茶やお茶請けやお茶菓子を持つてくる艦娘た

ちに、舞鶴の提督は苦笑していた。

このお茶は宇治茶かな？

香りがとてもいいぞい。

虎屋黒川の虎屋饅頭、笹屋伊織のどら焼き、大垣の柿羊羹、伊勢の赤福、鈴鹿の関の戸、といった近畿地方の名菓がどんどん運ばれてくる。

手作りの桜餅、柏餅、粽（ちまき）、おはぎ、みたらし団子、豆かん、三笠と呼ばれるどら焼き。

クッキー、フィナンシエ、ゼリー、シヨートケーキ、パウンドケーキ。

年代物の梅干しまで出された。

これ、けっこうするんじゃないかな？

私が手をつける様を何故か青葉が撮影していた。

何故だ？

お茶とお菓子で、腹がおかしな程に一杯になる。

やめて、拙者の許容量はもうゼロよ。

「広報の一環ですよ。気にしないでください。」

第一鎮守府の秘書艦はそう言って微笑む。

筆頭提督との話し合いで、取り敢えず交渉してみようという話になった。

問題の艦娘寮に向かう途中で、舞鶴の艦娘たちと交流する。

彼女たちは、軟禁行為を行った同僚に対し同情的に見えた。無罪放免とはいかぬが、情状酌量に出来るように努めよう。それが、舞鶴の艦娘たちの総意に基づく行動になるうから。

夕方、陽に染まりつつ交渉の舞台へ赴く。

場所は寮入口近くの歓談室。

島風と吹雪と第一の青葉と一緒に向かう。

対するは飛鷹。

和風美人艦娘。

「貴女がたの要求はなんですか？」

聞いてみる。

「提督の今身につけている下着を貰いましょうか。」

「はい？」

「それはちよつと要求が度を越しているんじゃないですか、飛鷹さん。」

「ふむ、条件次第で渡してもいいんじゃないか？」

「一体なにを言っているんですか、島風さん!？」

「そうですよ、司令官の下着は私たちのものなんですから。」

「さらつとなにを言っているんですか、吹雪さん!？」

「私たち全員の下着でどうかしら?」

「あの、なにを言われているんですか、飛鷹さん?」

「提督の嫁は二〇〇名以上の予定だ。そちらの艦娘程度の下着で補えるものじゃない。」

「今聞き捨てならないことを聞きました。そんな嫁は持てませんよ。」

「司令官は新しい世界の救世主になれる方なんです。完全服従されるなら考慮してもいいんじゃないですか、島風さん?」

「もしもし、吹雪さん。後でお話があります。」

「うーん、なんともおそろしき攻防戦ですね。」

「青葉さん、酷い記事を書いたら許しませんからね。」

「そっか、青葉は駿河問いの刑か。よかったね、これで拷問してもらえるよ。」

「無垢な笑みを浮かべて酷いことを言わないでください、飛鷹さん!」

「流石は提督ですね、ツツコミが素晴らしいですよ。」

なんだろう、この混沌具合は。

一週間の熾烈にして訳のわからない攻防戦と混浴と添い寝の結果、新人提督は無事に解放された。

直接彼を見ていないのでなんとも言えないが、明石によると健康状態に問題は無いそう
うな。

彼と少しでも会話をしたかったのだが、頑なに断られた。

まあ、仕方ない。

これにて一件落着？

ミッシェンクリアつてどこか。

事件に至った原因は『気持ちのすれ違い』とされ、提督を軟禁していた艦娘たちの罪
は不問とされた。

まさに日本の解決策よな。

下手に断罪して戦力低下になることをおそれたか。

書類送検も刑事罰も一切なしと、今回は異様な形で終息を迎えた。

報道管制が敷かれ、関係者全員が特一級の守秘義務を負わされる。

「空きが出来たら、舞鶴へ来るかい？」

舞鶴鎮守府で最も高そうな執務室の中。

第一の提督がとぼけた顔で聞いてきた。

なんばゆうとつとや？

おかしなことをおっしゃいます、彼は。まるでなにも無かったかのような気配。なんだかなあ。

本日ここへ来る艦娘が二桁を突破した。今度のお茶請けは雲竜か。

これ、昔から好きなんだ。

青葉が真剣な顔で、私を撮影している。

島風と吹雪から、密やかに殺気が漏れてきていた。青葉は微妙に強ばった顔で、その手は震えている。

提督はなにも感じていないのか？

感じながらもわざと言っているのか？

……違う、そうじゃない。

ならば、決裂だ。

ゴメンね、私は函館に帰ります。

「謹んでお断りいたします。」

「君の栄転になるのにかい？」

「函館の艦娘たちを見捨てるつもりはありませんし、こじよつこらとした鎮守府のなん

ちやつて提督の地位で十分です。」

「こんな機会は滅多にないよ。」

「呉でも、そう言われませんでした。」

「なんだ、なんともつまらん。」

「私はつまらない男ですから。」

「時間切れか。君の迎えが来たようだ。気が変わったら連絡してくれ。席はどうにでも用意出来る。副官から始める手もあるしな。」

「ご好意に大変感謝します。」

「案外食えん男だな、君は。」

「それでは失礼いたします。」

鎮守府内百貨店にある名産品店に立ち寄っているいろいろ買い込み、更に発送手続きも行う。

ここの暁や曙たちのお勧めに従った。

駆逐艦を中心に、多数の艦娘がまとわいついている。

既視感さえ覚える光景だ。

店で働く元艦娘たちの態度からは、彼女たちと良好な関係が感じられる。

まるで、なにも起きなかつたかのように。

……知らないのか？

或いは、なにも起きなかったことになっているのか？

それとも……。

売り子たちに不自然な点は見られないな。

………そつとしておこう。

ここへ来てよかつたのかもしれない。

流血沙汰にならなくて、本当によかつた。

来た甲斐はあつたのだろう、おそろくは。

なんだかもやつとしてくるものを感じる。

気にしない方がいいのだろう。

煉瓦作りの立派な建物を出ると、整然と向かってくる連合艦隊が見えた。

皆がぶんぶん手を振っている。

私もぶんぶん手を振り返した。

函館仕様のハインドが見える。

青と白のエクスタシー。

ロシア製の対戦車ヘリ。

帰りはあれに乗って帰ることになりそうだ。

島風と吹雪がぎゅつとしがみついている。
風は冷たいが、心はそんなに寒くないな。

C C X X IV : 獵犬の行く先

男は熟練の企業戦士だ。

年は三〇を過ぎた辺り。

飼ひ慣らされた獵犬だ。

朝一番の電車に揺られて会社に着き、毎日高圧的な上司先輩取引先から連日のように強い精神的圧迫的狀況にさらされ続け、昼飯は二〇分以内に追いつてられるように手早く咀嚼しておやつすら食べることなく深夜まで労働。

終電で帰ることが出来たら万々歳だ。

会社と駅舎との間にあるカプセルホテルが、半ば男の住みかにさえなりつつあった。休日出勤お泊まり会サービス残業は当たり前で、月に二日も休みがあればいい方だ。バブル世代の上司は、休まないで働き続けることこそ美德と思ひ込んでいるらしい。

その上司が母親からろくに休まず働くことこそ大切なのだと言われ感激した旨を朝礼で切々と語り、若い課員たちをドン引きさせた。

以来、彼を信用するような部下は殆どいなくなり、男も毎日懲りもしないで怒鳴り続

ける上司に親近感を持つことは一切無くなった。

倒産の事実は、駅舎に設置してある大型テレビのニュースで知った。

自称公共放送の司会者は抑揚の無い調子で淡々とその事実を語った。

男の所属していた会社は全国的にそれなりに大きかったが、深海棲艦の侵攻で輸入関係が滞ったためにかかなりの損失金を発生させていたのだ。

会社に着くと、ガチムチのいかつい警備員から嚴重なプライベートへの質問と入念過ぎる持ち物検査と丹念過ぎるボディチェックを経てようやく社内に入った。

彼がはあはあと苦しそうだったのは、緊張感が高まっているためだろう。

男はそう思い込むことにした。

こじれるのは面倒だと、とても日本人らしい発想をしながら。

彼が名残惜しそうに見えたのは、たぶん気の所為に違いない。

男の上司は絶望した顔になっていた。

一気に白髪が増えたようにも見える。

彼は愛用の高級万年筆を弄んでいた。

ドイツ製の舶来品で散々自慢した物。

どこかで落としたのか、ペン先が歪んで軸にヒビが入っている。

インキが漏れていたけれども、彼は汚れた指を気にしていないように見えた。

その万年筆の製造元は妙に居丈高で修理をまともに受け付けさえしないことのある会社なので、彼のご自慢の万年筆は二度と使い物にならないかもしれない。

違うかもしれない。

若手はまあ仕方ないかという表情だ。

社長を含むお偉方は出社しなかった。

とつきの前に、逐電していたらしい。

結局、暫定的代表に男の上司が指名され、そうした事態に慣れぬ彼はマスメディアの恥知らず且つ常識はずれな質問攻勢にしどろもどろで返答し、時に彼らからの無礼極まる非常識でアホ丸出しの質問にキレまくった。

その際、彼は手にした愛用の高級万年筆をへし折ってしまった。

その手をインキまみれにしながら、暫定的代表は暴言しまくった。

その結果、ネットを含めて大炎上になる。

彼は一躍、『インキまみれさん』として有名人の仲間入りを果たした。

他人の不幸は蜜の味。

他人を叩くは愉悦也。

関係無い人間は幾らでも貶めていいと勘違いする者は、意外と少なくない。

金持ちや自称インテリ、ゲンチャが、案外こうした落とし穴にハマっている。

マスメディアは連日連夜会社のことをしつこくしつこく放送して視聴率を稼ぎ、その非人間性を如実に示した。

自分たちの所為で人死にが出ようが家庭が崩壊しようが、そんなことは彼らにとってどうでもいいのであった。

責任を取りもしないで、憶測や妄想で捏造された放送を行うのが彼らの主な流儀である。

偶然逃亡していた社長が函館で見つかり、更なる燃料に狂喜したマスメディアの非人道的餓鬼たちは報道合戦を過熱させた。

彼らは時折怒り狂った関係者たちから殴られたり蹴られたりして、高価なビデオカメラを破壊されたりした。

結果、警察が出動する騒ぎになり、便乗した者が放送局の焼き討ちを試み、一時は治安維持部隊として自衛隊が出動する事態にさえなった。

不満を爆発させた連中がそこかしこで暴れまわり、報道陣は容赦なく被害者と化していく。

暴徒化した民衆にとって、マスコミ関係者は格好の標的だった。

いつも俺たちを見下しやがって。

中継車に火炎瓶が投げ込まれ、高価な機材が燃えてゆく。

他社の中継映像でそれが全国放送され、無神経な者たちが喜び勇んでそれを嬉々として記事にし、彼らもまた炎上していった。

放送局を襲撃して逮捕された人間が大量発生し、留置所の収容人数をあつさり超過する。

護送車の中に詰め込まれたままの者で、逃亡を企てようとする者が続出した。

逃げた者は大抵すぐに警察官たちに捕まって、激しく殴打される。

後の話になるが、この時のことを捕獲時に抵抗したためやむ無く暴力を振るつたのだと警察は抗弁し、ネット上でその時の傷や怪我や殴打痕を晒す記事が続出して警察は対応に四苦八苦する結果となった。

そして、警視庁長官並びに警察庁長官が陳謝するという異例の事態にまで発展する。

何人かの警官が減棒となったけれども、闇討ちに遭う警察官が続出し、一時は戒厳令が発令される事態に陥った。

余計な発言をした政治家や評論家や有名人があちこちで襲われ、そうした犯罪行為をネット上で晒す阿呆が何人も現れる。

彼らを英雄扱いする愚か者も少なくなかった。

こうした事態に公安が出勤し、社会不安を煽る危険分子として特定された彼らは拘束

される。

拘束された者たちはこれを『受難』と称し、自らを鼓舞した。

それを称える阿呆も続出する。

愚者のお祭は当分続きそうだ。

事務課が奮闘して社員たちの退職金を捻出し、男は首輪を失った。

現世の冒険者ギルドとも言える職業安定所で手続きして一時金を入手した後、男は郵便局と銀行から預金を全額下ろして少しの手荷物と共に海沿いへ向かった。

もう既に彼の家族はいない。

深海棲艦の侵攻が開始されてから、彼の周囲でもずいぶんの人たちが亡くなっている。

もう、どうでもよかった。

なにかをする気力もない。

携帯端末を途中で捨てた彼は、廃墟と化した家々の内比較的きれいな家の家屋に上がり込んでそこに住み着いた。

水道ガス電気はすべて通じていない。

それでもいいや、とさえ男は思った。

なにもかも失い続けた人生であった。

過酷な労働で先輩同僚後輩たちの大半は、あの世に行ってしまうか退社するか行方不明になるかしていた。

男もあの場にいた面々からすると、同じに見えるだろう。

彼は不意に、あのやたらにしぶとかった上司を思い出す。

悪い人物ではなかった。

たぶん。

価値観の転換こそ出来なかったが、それでも悪人ではなかった。

そう思いたい。

普通の感覚を有するまともな人間ならば先ず口にしないようなことを平然と言った無作法な取材記者に飛びかかって、警備員に拘束された彼はどうなったのだろうか？

あのおかしなマスメディアの連中は、そうしたことさえなんとも思わないのだろうか？

思わないのだとしたら、彼らこそ異常者集団だ。

男はぼんやりと考えて、やがて眠った。

外から見つめるモノに気づかないまま。

男が不法滞在している家屋から少し歩くと打ち捨てられた温泉源がある。これは循環させる湯でなかったから、男にとつては大変都合がよかつた。

故に、男は温泉源近くにある家屋に移り住んだ。

衛生面がどうか健康面でどうかは、男にとつて最早どうでもいいことだつた。このままお迎えが来るといいなあ、とさえ男は思うようになっていた。

そんなある朝。

目覚めた男は年端もいかぬ娘を抱き締めながら眠つていた。

男には覚えが無かつた。

昨晩は酒を呑んでいない。

そもそも酒は置かれていない。

変だ。

見たところ、中学生くらいか。

親を亡くした子だろうか？

慌てる彼を見て、娘は朗らかに笑う。

家出娘なのだろうか？

くすりと微笑む娘の指には、きらりと光る銀色の指輪がはめられていた。

CCXXV：提督めしコンテスト

深海棲艦が世界の海に現れて日本近海を荒らした際、海上自衛隊と海上保安庁は奮闘に奮闘を重ねた。

航空自衛隊と呼応し、迫り来る未確認敵対的存在に対して力戦勇戦した。

沿岸部での被害に於いて、陸上自衛隊は国民の避難誘導や駆逐艦級深海棲艦などへの砲撃や誘導弾攻撃で奮戦した。

複数の現場指揮官たちが大変有能だったのも幸いした。

特攻や無謀な戦闘を避けて、遅滞戦術に終始したのだ。

深海棲艦側が殲滅戦指向でないのも、極めてよかった。

それらを指揮していたとおぼしき黒いワンピースを着た女性が、まるで発砲を控えていたかに見えたと後に複数の自衛官が証言している。

『極東司令』と仮称された彼女は理知的にさえ見え、海難救助された人間も複数存在する程。

他の幹部級と目される深海棲艦に比べ、なんともおかしな存在である。

市街地を火の海にするのではなく、どうやら兵糧攻めにして干乾しにする考えのようだった。

確かに時間さえかけたなら、貿易交易を中心とせざるを得ない日本国はどんどん滅んでゆく。

もし日本に艦娘が現れなければ、暴動や物資不足で壊滅し得る打撃を受けていたことだろう。

内側から自分自身を食い破るかの如くに。

実際、そのようになって滅びた国もある。

国の頭領自ら不正に終始し、政治家や役人は汚職が当たり前、立派な人間もいるにはいるがそうした人物を閑職に押し込めて平然としているような。

そんな国の兵士は弱卒ばかりではないにせよ、最高指揮官が阿呆揃いだと悲劇になる。

徳川秀忠率いる軍勢が、真田の老獪極まる戦術で翻弄された上田合戦がいい例だ。上の失策は下の崩壊に直結する。

実際、似たような経緯になった。

彼ら自慢の軍船も航空機もさほど実力を発揮出来ぬまま、無惨に破壊されていく。

深海棲艦たちは、歯向かう存在に対して容赦なく猛威を振るった。

国を守るべき高官たちは慌てて我先に航空機で逃亡し、撃墜されて次々死亡した。

自暴自棄になった国民が自ら国に引導を渡す蛮行に走ったため、今もその辺りは混乱が継続中だ。

交渉出来る窓口もなく、食事を与えたとして際限なく不満を口にするばかりだ。

恨みばかり口にして反省なく発展させる気概無き者しかいない集団は、滅びが徐々に訪れるのを待つしかなかるう。

『深海戦争』終結後も、国際情勢は予断を許さないだろう。

人間同士の戦争に発展する可能性すら、存在するのだから。

実際、そうした方向で動いているとさえ考えられる国は複数ある。

ヒトは歴史から学ぶことが出来ない。

歴史を学んで覚えることのひとつだ。

ヒトの本質は闘争にあると思われる。

艦娘たちはこの世界に顕現後、海軍と鎮守府警備府泊地の設立並びに自らの指揮官たる提督を所望要望する。

軍隊アレルギーの日本人の多くは詭弁を弄した挙げ句、海軍の設立を認めなかった。憲法違反であるという名目だ。

まだ生き残っている、幾つかの周辺諸国への配慮もあった。

それどころではないとする意見もあつたのだが、日本人の軍隊アレルギーは今も人によつてかなり根深い。

未だに自衛隊批判をする人間さえいた。

時勢の読めない人間はどこにでもいる。

彼らは撃たれるまで、わからないのだ。

この期に及んで、状況が理解出来ないといふしか言い様が無い。

いや。

理解を拒んでいるだけかもしれないが。

命を賭けて勇敢に戦う人々に向かって吼える人間というのも、世の中には存在するのだ。

情勢を理解出来ない人間は愚かしい限りだが、得てしてそうした人物程叫ぶことを躊躇しない。

戦争状態であること自体は認めたものの、軍隊の設立は断固として認めない。

それが日本政府の決定だった。

国際的に考えると訳がわからないのだけでも、それが戦後日本の選択なのだった。代わりに、大本営を第三セクター方式で設立することは認められた。

詭弁の四回転アクセルである。

これにさえ納得しない人も存在した。

物資が窮乏し、石油の配分で全国各地の自治体が揉め、新宿で多数の死傷者が発生し、軽んじていた北海道の生産力に頼ることが多くなつてさえ、現状を認めようとしなない人は一定数実在する。

あまりに強く自己主張し、闇討ちされる人さえ現れた。

そして、大本営の設立を許可された組織は都内に建造物を構築しようとしなかった。

東京の治安が非常に悪化していたし、流通の面で不安材料だらけだったのが要因だ。

新宿騒乱も不安要素として懸念を増幅させたし、物流の面でも東京はガタガタになりつつあった。

『戦前』の威信や威光は深海棲艦侵攻後の数年で音を立てるように崩れ去り、東京に本社を置いていた企業が幾つもよその府県へ本社移転する事態にまで状況は悪化している。

結果、大本営は横須賀鎮守府に隣接することになった。

横須賀が陥落する事態になったら、それは日本の終わりを示すことになるという理屈である。

勇敢というよりも、日常での利便性を考慮した結果と今も囁かれているが。

そんな屁理屈の集合体である大本営に於いて、『提督めしコンテスト』が開催されることになった。

いわゆる印象操作のためである。

ものを深く考えようとしないう人々への、価値訴求でもあるらしい。

マスメディアの出鱈目な報道を鵜呑みにする人間は今も多い。

人は都合のよい言葉に耳を傾けやすい生き物だ。

都合の悪い言葉など聞こうとしない。

それは平時も戦時も変わらぬ人の業。

出場する提督は四大鎮守府が殆どだ。

いや、函館の提督以外は彼らだけだ。

二線級またはそれ以下と目される基地の司令官たちは、全員棄権する。

あまりにも馬鹿馬鹿しいからだった。

見世物扱いされるなんて真つ平御免。

棄権した中では最大手の、青森県は大湊（おおみなと）の提督が言った。

その詰まらない見世物に参加したら、参加賞くらいは貰えるのかね、と。

実戦を多くこなした駆逐艦は、経験不足の戦艦に勝る力を持つ。

これが理解出来ない提督は昇進など夢のまた夢、鎮守府をともに動かすことすら不可能だ。

事実、何人もの提督が駆逐艦の重要性を全然理解出来ないで幾つもの基地をダメにしている。

駆逐艦こそが、基地の要だ。

その駆逐艦たちに支持される提督は強い。

実際、函館鎮守府の提督は駆逐艦たちから強く支持されている。

ちなみに、有力候補の一人だった呉第六鎮守府の提督は棄権していた。「あげなん出る必要もねえわ。」と、つまらなそうに言つて。

函館の提督も棄権しようとしたのだが、周囲の猛反対で断念している。大本営による商業的興行は、こうして始まりから波乱含みなのだった。

どろどろした思惑が交錯する中、『提督めしコンテスト』は開催された。場所は大本営前広場の特設会場。

審査員は全員が人間。

艦娘は一名もない。

大和も武蔵も長門も陸奥も座っていない。

函館の提督は、薄味の出汁で手早く煮た細切りの油揚げと蒲鉾と長葱を丼飯の上に載せたきつね丼で一回戦に臨んだ。

北の国は七飯町産の米と八雲町産の味噌を使い、試される大地の豊かさを喧伝する。

添えるは自家製浅漬けとワカメの味噌汁。

これできつね丼定食ナリヨ。

思いつきり大衆路線である。

だが。

大豆の輸入が安定してきたために比較的安価で販売されるようになった油揚げや、海の幸の一翼を担う蒲鉾やワカメを具材として使った意味を理解出来る審査員は居ないようだ。

極めて地味、というのが函館の提督への平均的な評価となった。

彼らは大衆食堂のような献立に対し、がっかりした表情を隠さない。

艦娘たちより漏れ聞こえてくる評価の高さから、期待し過ぎていたのだろう。

おっさん提督の気配からは、勝とうとする意欲がまるで感じられない。

切歯扼腕し歯ぎしりさえする艦娘たちの醸し出す気配すら全然感じることもなく、審

査員たちは函館の提督を批判し笑った。

私たちのためにご飯を作ってくれる人を笑うな！

他の提督たちは、大半が老舗洋食屋やホテルの総料理長や大手料亭などの料理上手からその技を習っている。

意気込みが違った。

費用をかけていた。

本業とまったく関係無いのに。

舌を噛みそうな、覚えにくそうな名前前の料理が審査員たちに提供され、彼らはそれらに舌鼓を打ち鳴らした。

バブル期を過ぎしてきた審査員たちにとっては当たり前前の食べ物だったが、飽食の世に身を浸してきたことが丸わかりな態度である。

口の肥えた者たちは片仮名言葉を用いてやれなかがどうのと屁理屈を捏ね、脂ぎった舌を際限なくべらべら回す。

周囲の艦娘たちが一齐に腹をくくったことに、中年壮年老年の男たちは気づかなかつた。

白ける艦娘たちの反応におののいているのは鎮守府警備府関係者たちばかりで、審査員たちや彼らの腰巾着たちは無警戒そのものだった。

素早く艦娘たちの態度に気づいた、良心回路が生き残っている提督たちは身震いした。

ちやうねん、これは仕事だから。堪忍してや、なつ、なつ、と視線を部下たちへ必死に飛ばす。

日々の料理を受け持つ艦娘ほど、この展開を苦々しく感じているようにさえ見える。

給糧艦が怒ったなら、それを宥めるのに如何程の労力が必要か。

挙動不審になる提督が続出した。

函館の提督はじっくり料理する。

無表情の艦娘がどんどん増えた。

彼女たちの思いを踏みにじている者の饗宴は、まだまだ続く。

横須賀鎮守府所属の秋月型駆逐艦たちが審査員たちの傲慢に対して泣き出し、それに

いち早く気づいた函館の提督が手を振った。

彼は鈍感力を身に付けられなかったのだ。

赤くなる彼女たち。

またやりやがった、と白い目で提督を見つめる艦娘たち。

苦笑いしながら、手を振るおっさん提督。

きやあきやあ言い出す艦娘たち。

無表情とはなんだったのか。

彼は憲兵から注意され、料理に専念する。

大本営前広場の特設会場は、益々混沌化するのであった。

この競技会では二品目作らねばならない。

函館の提督以外は、凝った料理を作った。

それは派手で、究極とか至高とか旨いぞおと走りそんな高級品。

庶民感覚とはかけ離れたセカイであった。

おっさん提督は、きつね丼を玉子でとじたきぬがさ丼を作る。

それに自家製浅漬けと豆腐の味噌汁を添えた。

今度はきぬがさ丼定食であった。

彼は審査員たちから嘲笑される。

馬鹿の一つ覚えの如しとされた。

そもそも出たくなかった競技会。

柳に風、と函館の提督は泰然自若としていた。

結局、函館の提督が作った定食を口にする審査員はおらず、それは食べられないまま破棄されようとしたが、そうはさせじと現れた艦娘たちに奪取される。

彼女たちは、とてもおいしそうにそれを分けあつて食べるのだった。

その模様はとある艦娘によって撮影され、『提督めしコンテスト』終了直後に電脳上で放映と相成る。

大本営食堂のみならず、全国各地の鎮守府警備府に於いて翌日の昼食はきつね丼定食ときぬがさ丼定食のみが提供された。

C C X X V I : 提督研究会

横浜アリーナを埋め尽くすが如き艦娘たちの群れ。

それはまさに群集。

大規模作戦でも展開するのかと言えそうな程、艦娘たちが殺気だっている。

いや、真剣に話へ耳を傾けているだけだ。

そう信じた。

「はい、では皆さん、お手元の資料を見ながらお聞きください。」

最近ええ男を捕まえたばかりの練習巡洋艦が、にこやかに教鞭をぶんぶん振った。

亜音速の刃が周囲の羽虫を斬り刻む。

それに気付かぬまま、説明に移った。

「では、まだ艦娘と接触していないけれども提督の資質がある人物の紹介に入ります。」

巨大映写幕に投影された人物たちを説明する眼鏡つ子巡洋艦。

その言葉に淀みは無い。

私は大淀と共に演壇近くのパイプ椅子に座りながら、なんで函館からわざわざ呼ばれ

たのだろうと自問自答する。

提督候補者たちの簡単な説明がされる。

妖精くノ一隊の働きは皇室忍群を上回る程だ。

大本営広報課の青葉衣笠姉妹の諜報活動もなかなか鋭い。

既に誰か接触しているかいないか。

性格はどうか？

残虐性や卑劣な気質はあるか？

嘘つきか否か？

趣味嗜好はなにか？

女性の好みはどうか？

童貞か否か？

現在進行形で付き合っている同性異性は存在するか？

食べ物の好みは？

モテるかモテないか？

浪費家か？

変態性はあるやなしや？

艦娘に好意はあるやなしや？

浮気性か？

絶倫か？

質疑応答はすべての説明が終わった後だ。

説明が小学生に入ると、キヤアキヤアと歓声を上げる娘たちが増えた。

適性と気質と希望と要望と欲望その他。

様々なものがどろどろと積み重なって、提督になる者をじわりじわりと蝕んでゆく。

若くて自信家で差別的で高圧的な若手提督を見てきたためか、転属希望の駆逐艦は意外と年配の提督を選ぶ傾向が強い。

性的に花開いていない娘たちが保護者を願うような感じだ。

単に歳上好みな場合もあるので一概には言えないけれども。

転属希望の戦艦は、自分を評価してくれそうな質実剛健系提督を選ぶ傾向が強いように見える。

転属希望の空母系艦娘は、堅実安定的提督を選ぶ傾向が強いように見える。

一部の巡洋艦系艦娘や駆逐艦は、小学生や中学生を選ぼうとすることに強い意欲が示されることもある。

理由はよくわからない。

おとなしくて可愛い感じの子が特に人気である。
弟を望むようなものか。

逆光源氏だ。

たまに戦艦や空母の艦娘が、これに強い意欲を示すこともある。

おそらくは個体差なのだろう。

「それでは、これより函館鎮守府の提督による講演を行っていただきますよう。題して、『艦娘から提督へ接触する際の留意点その他』です。提督、お願い致します。」

いきなり、練習巡洋艦がとんでもないことを言い出した。

謀ったな、シヤア!

傍らの大淀をじつと見つめる。

「事前説明したら、理由を付けて逃亡されたでしょう?」

「当たり前です。」

「皆様、拍手を!」

途端、沸き起こる万雷の拍手。

致し方なし。

そうして、私は日々鈍感であるかのように演じる提督たちへのやさしい対応を願いつつ、艦娘たちへ切々と語り始めることにした。

よりよき未来になればいいなと思いつつ。
今夜は焼鳥を食べたいな、と考えながら。

CCXXVII：お艦たちもたまには怒ります

我が函館鎮守府内の厨房がおそろしいことになっている。

雑誌やテレビジョンくらいでしか知らないような有名料理人たちが、気合いバリバリで飯を作っている。

南蛮人や紅毛人や金髪碧眼の人間などもいて、万国博覧会かここは。複数の鳳翔に間宮、伊良湖に速吸に雷に古鷹に夕雲に大鯨に……。

あれ？

俗に『お艦』とか『お母さん』とか呼ばれる艦娘が勢揃いしている感じだ。

それに全国各地並びに各国の料理人が引き寄せられたつとところかな。

うーん、なんとも贅沢な布陣だ。

あれ？

先輩？

呉第六鎮守府提督の先輩がいる。

なして?」

「ワシ、人質やねん。」

「はい?」

「一体全体どういうことだ。」

「決起したのです、私たちは。」

「間宮さん?」

「あー、大本營の間宮なんじゃ、彼女。」

「一番ここにいたら不味い類いの艦娘じゃないですか!」

「大丈夫、大丈夫。一番のんきでマイペースで最強提督の函館提督が保護しとんじや。」

「誰も手は出せんて。それに、彼女は前にも来とるがな。」

「なにげに酷いこと言いますね、先輩。まあ、滞在をむげに断る訳にもいかないでしょう。」

「あんなあ。」

「はい。」

「頼られたら断れない性格、なんとかした方がええで。」

「なによおんで、先輩! たーけたことよーたらおえりやあせんが!」

「まあ、そげん怒らんでええが。」

「えくねえです！」

「そげなか。」

「そうですよ！」

「ま、気にしようたらおえんわ。」

「おえんのは貴方ですよ、先輩。」

間宮たちから話を聞くと、先日の『提督めしコンテスト』に憤慨した彼女たちはこぞつて函館へ逐電したのだという。

な、なんだってー！

「気合い入れるわよー！」

「「「おーっ！」」」

群馬名物の焼きまんじゅうを食べながら、彼女たちは勇ましく叫んだ。

これ、けっこう旨いんだよな。

黒糖などを使った濃厚な風味の味噌ダレをかけた、餡なしまんじゅう。

おっ、これは餡入りか。

旨い旨い。

大本営と四大鎮守府は、揃って程なく白旗を上げた。

徹底抗戦するつもりだった厨房の艦娘たちの怒りを知って、歴戦の提督たちが皆おのいたという。

まあ、そうなるな。

次々に使者が訪れたけれども、私は不干渉を貫いた。

藪をつついて蛇が出てきても困るからな。

函館鎮守府は現在関東圏味覚祭になっていて、水沢うどんやら宇都宮餃子やらが乱舞する事態だ。

風の強い午後の執務室。

千葉の南京豆や埼玉のはにわさぶれを食べつつ、合間に焼きまんじゅうを頬張る。

焼きまんじゅうって、なんだか癖になりそうな味だな。

先輩たちはまだ函館にいて、今日はお好み焼きを作っているらしい。

後で食べさせてもらおう。

先輩の作るお好み焼きは、なまら旨いからな。

川越産の薩摩芋を使った芋けんぴを食べ、岡山県産の煎茶を飲んでから大淀が言った。

「厨房の艦娘たちが労務提供拒否したら、人間たちはことごとく白旗を掲げましたね。」

「意外な弱点でした。」

「あんな姿を全国に晒したんですから、艦娘たちが怒るのは当然です。」

『提督めしコンテンツ』の評判は悪く、審査員たちの傲慢さはネット上で炎上する程だった。

だから出たくなかったのに。

出場した提督たちの釈明に納得出来なかった厨房担当の艦娘たちが、ここにいるって訳だな。

「君たちには失望したよ。」と、平坦な調子で提督たちにのたもうた艦娘もいたそうなの。

「まだまだ追い込みますよ。」

キラキラリ、と眼鏡を光らせて大淀が宣言する。

彼女の周囲にいる妖精たちがオーツ！ と叫ぶ。

お手柔らかに願いたいものだ。

翌日。

四大鎮守府からどんどん艦娘がやって来てしまい、大変困った事態に陥った。

CCXXVIII：こんにちは、愛しい天龍

『努力よりほかにわれわれの未来をよくするものはなく、また努力よりほかにわれわれの過去を美しくするものはないのである』（幸田露伴）

僕は小学生にして、奈良鎮守府の提督になることが決まった。

前線配置ではなく、後方支援型鎮守府のお飾りの象徴らしい。

艦娘とはなんだろう？

よくわからないな。

僕の妻になる天龍は美しい。

だが、彼女はとても恥ずかしがり屋で、僕がちよつと触ると初々しく猛々しく反応する。

それすらも可愛いと思うのはここだけの話にしてもらいたい。

僕が男になる時は彼女の助けが必要だ。

僕はまだ童貞状態から脱していないのだから。

僕の伴侶たる天龍は恥ずかしがり屋だ。

僕が夫婦として触れ合おうとすると、即座に拒絶してしまう。

彼女は言うのだ。

「ガキが色気ついてんじゃねーよ。」

もちろん、なにも納得していない。

今だってそうだ。

妻に触らない夫などいないだろう。

そういうことだ。

僕はその時彼女に反論しなかった。

それは正しくなかったのかもしれない。

或いは正しい選択をしたかもしれない。

僕は酷く腹を空かせていることに気づいた。

これはあくまでも僕の考えだが、それは和食でも満たされるし、洋食や中華料理でも満たされる。

即席料理でも可能だけど、そういうことでないと言いたい。オーケー、認めよう、僕は天龍が作った手料理を食べたい。彼女はなにか手の込んだものを作ってくれるかもしれない。それとも、出来合いの惣菜を組み合わせるのかもしれない。フェルメール・ブルーのような、空の下。僕はぼんやりと彼女を想う。

少し暖かい日。

妻の天龍は日帰り出張とかで、京都の舞鶴鎮守府へと出掛けてしまった。

僕が渡した、我が手作りのシウマイ弁当をどのように食べるのだろうか？

冷めてもおいしいご飯からだろうか？

それとも意外にアンズからだろうか？

携帯型魔法瓶に入れた柳生茶は口に合っただろうか？

あの魅惑的な唇を可愛らしくもきゅもきゅ動かしながら、他所の天龍にからからわれるのだろうか。

それを思うと胸が高鳴る。

届け届けよ、この気持ち。

あれは正に我が渾身の愛妻向け弁当。
ハートが多すぎたかもしれないけど。

ちよつとしよんぼりする。

彼女は生真面目過ぎるし、元が男だったことにこだわり過ぎていように見える。

そんなことは気にしないのに。

今が、今こそが僕らの夫婦生活を推進する現実世界なのに。

僕は酷く虚しい気持ちになり、スーパーの雷栄でハムとレタスとチーズとトマトと一ダースに斬り刻まれた食パンと幾らかのおやつを買い、ひとりぼっちで建設中の後方支援型鎮守府へ戻った。

建築妖精たち全員に菓子を配る。

彼らは不思議な踊りをおどった。

気配り目配り心配りが大切だと妻は言う。

誠はその通りだと思う。

だから、僕の愛に応えて欲しいと切実に感じる。

チューチューくらい、させてくれたらいいのに。

下穿きのおいを嗅いだくらいで、拳骨を落とさなくてもいいだろうに。

あんなに真っ赤になっちゃって。

可愛いったらありやしないなあ。

がらんだの厨房にて極めてシンプルでプリンシパルなサンドウィッチを作り、和歌山県産の蜜柑果汁水でそれを胃袋へ流し込んだ。

さて、ポトフを作り始めるか。

例え艦娘が何者だろうと、好むと好まざるとにかかわらず、僕は、いや僕を含むすべての提督は彼女たちと付き合わなくてはならない。

いろいろなモノを剥いたり剥かれたりしつつ。

本音を言えば、大歓迎だ。

そして天龍は素晴らしい。

あらゆる天龍は実に魅力的だが、僕の天龍が中でも最高だ。

彼女に僕の初めてを注ぎ込みたい。

あの美しく整った顔を歪ませたい。

彼女は僕を熱烈に愛してくれるかもしれない。

それとも、僕を愛してくれないかもしれない。

わからないな。

彼女に無理矢理迫ることは許されたいし、だからと言って他の男に渡すくらいならばロミオとジュリエットになることさえいとわない。

彼女は僕のものだ。

誰にも渡すものか。

そして僕は、帰ってきた天龍に手製のポトフを振る舞い、パン・ド・カンパーニュのブルーチーズ添えと一緒に食べ、共に入浴して添い寝する。

何故、胸を掴んだくらいで怒られるのか？

僕にはよくわからないな。

風の吹く音を聞きながら、僕は彼女に交渉するもことごとく失敗した。

身持ちの固いところは僕の好むところにあるものだから、それを否定する気持ちにはなれない。

失敗はセイコウの元。

けっしてくじけてはならない。

奈良鎮守府だけに。

僕は、本当の意味で艦娘たちと心が通い合っているかどうか分からない。

わからないが、天龍を愛し抜いていこうと思う。

彼女は何故、僕が揉んだら怒るのだろうか？

こんなにも愛しているのに。

脳裏で『ホテル・カリフォルニア』を流しながら、彼女と夢を食った。
共に同じ道を歩めると信じながら。
共に同じ夢を見てると信じながら。

CCXXIX：大井つち、更に困惑する

私が大井という軽巡洋艦級艦娘にメタモルフオーゼして、一カ月半経過した。

おっさんが美少女になるという、この驚くべき展開を戦前誰が想像し得たか？

いや、いない。

原料が男の場合に建造すると艦娘乙種へと変化する訳だが、その乙種は九割以上が駆逐艦なのとか。

しかも、その駆逐艦たちは均質的な性能になるのではなく、まるで乱数で決められたかのような激しい個体差がしばしば発生するらしい。

口の悪い者は『どんぐりの背比べ』と評するようだが、それでも体力値に最大約八倍差が生じるのはある意味おそろしいとさえ思う。

乙種Ⅲ級、乙種Ⅱ級、乙種Ⅰ級と区分けされているなどという、口さがない噂まである程だ。

その細かく仕分けされた等級によって、所属先が決まるとかなんとか。

まさか、な。

でも、そう言えば私は先日熱烈に勧誘されたけれど、他の同期は……。
うくん。

私の時が特に酷く、まるでテーブルトークRPGでファンブルを繰り返したかのよう
に低性能な個体が量産された。

建造器の近くにいた役人や軍服連中などの小さな舌打ちが、何度も何度もかすかに聞
こえてきた。

知っているか、人間のヒトたち。

艦娘の聴力って人間以上なんだ。

みんなにあんたらの舌打ちが聴こえているんだよ。

そいつらを思わず建造器の中に突っ込みそうになったことが、何度あったらうか。

彼らというか彼女たち同期生はごくごく短期的な訓練の後に泣き喚きながら容赦な
く初陣を強制的に経験させられ、その殆どがまともに砲撃も出来ないままに沈んだとい
う。

生き残った彼女たちも、二、三発明後日の方に撃っては殆どが敵駆逐艦の的になつた
とか。

虚実入り乱れて、どこまで本当のことだかよくわからない。

デマゴギーだと信じたい。

あいつら、何発か撃つてもいいですよね？

執務室で秘書艦業務の傍ら。

そう言ったら、提督がひきつった顔をしていた。

ちなみに、先輩にあたる北上や駆逐艦たちも殺る気満々だった。

人間どもめ。

早急な広域海域の解放が必須項目なのは理解出来るが、だからと言ってそれが犠牲者を増やしてよい理屈にはならないだろう。

犠牲者を増やす連中が正義を唱えるのかと思うと、吐き気さえしてくる。

正義、つて一体なんだろう？

数多のシカバネの上に平然と立てる連中のハラワタを引き摺り出してヤリタイ。

オロカナ、オロカナモノたちめ。

あいつら、魚雷の的にしていいですよね？

提督に進言したら、真つ青な顔をされた。

過激なことにはしないで欲しいと、泣いて頼まれた。

むう、残念無念ナリ。

みんな殺る気満々だったのに。

提督を泣かせるつもりは無かったので、大丈夫ですよと微笑んでおく。

人間どもめ、と何の気なしに呟いたら何故か更に怯えられてしまった。

失敗、失敗。

近日に迫った函館へのお使い任務を頑張ろう。

楽しみだと言ったら、北上がすんごい目をして私を見つめた。

失敗、失敗。

だはは。

ゴメンね、北上さん、と言ったら途端にデレデレされた。

ふっ、チヨロい。

北上に抱きつかれながら、眠れない夜を過ごす。

あちらではなにを食べようかな？

李さんの中華粥に鳳翔さんのフレンチトーストに間宮さんの羊羹。

それから……それから……。

あちらの提督の手料理も密かな人気とか。

『提督めしコンテスト』で出された定食。

あれもおいしそだった。

大本営広報課が作った『北の国おいしい指南書』を、何度も何度も読み返してしまつた。

小樽市内のロシア料理店群や東欧諸国料理店群にも、一度は行つてみたい。

釧路のヒトたちはイクラをふりかけみたいに食べるそうだが、私もやつてみたい。

北上が行こう行こうと熱烈に誘つてきたので、行けたら行こう。

たまには誘いに乗らないと、ずっとずっと不機嫌になるからな。

女の子って難しい。

女の子に成り立ての自分では、わからないことだらけだ。

どういう下着がいいんですかね、と提督に相談したらあたふたされた。

函館の提督に相談してみようかな？

ぼんやり考えている内に、気づいたら明け方近くになっていた。

幼児のようにはだけた胸でチューチューする北上を叩き起こし、哨戒任務の用意を始める。

さて、今日も殺りますか。

ふふふ。

CCXXX : 天地を喰らうサトウルヌス

過去の歴史は事実しか存在しないが、解釈によつてその姿は千変万化の様相を見せる。

ネット上で個人が自由に語ることの出来る現代に於いて、過去の情報番組を放映することに意義を見出だせない人は多いかも知れない。

しかしながら、公共放送を自称し幹部の不正が絶えないと囁かれる放送局が再放送に踏み切った『歴史への招待』は比較的好意をもつて視聴者に受け入れられた。

不景気な話や不道德な話や不倫報道を延々聞かされるよりは、鈴木健二氏の名調子や故人となりし豪華なゲストたちの思惑を聞いた方が時間の活用に結びつくものと思われたみたいだ。

実際、二回目の『旗本八万騎』は興味深い内容だったし、次回の『実録鬼平犯科帳』も期待されているようだ。

映像をデジタルリマスター化したのも大変よかった。

こうした映像財産は大切にすべきだろう。

昔の見解と今の見解がどう違うかを知ることでも大事だ。

歴史を知ることの意味は無い、とする人もいるだろう。

だが、『温故知新』という言葉があるように、昔を知ってそれを今に活かすことが大切なのだと考える。

人は今も昔もそれほど変わらない生き物なのだから。

九州北部のとある鎮守府から間宮がやって来た。

つい先日、佐世保鎮守府とやんちゃなやり取りをしてなあなあのままあまで済ませた武闘派基地。

そのカフエーで連日研鑽に励む彼女は、函館の実力を知りたいと考えたらしい。

過去の名画の名を用いた菓子『マミヤ・ザ・スペシャルフェイバリット・シリーズ』を引つ提げ、彼女はやって来た。

お土産たるパウムクーヘンのラスクは鎮守府の面々に大好評で、早速彼女は胃袋を掴むと同時に我が基地の給糧艦たちへ宣戦布告したという訳だ。

さくつとして、食べた後もほんのりかぐわしい香りが残る。

これはうちの間宮と異なる方向で上手い。

彼女は満面の笑顔で厨房の面々に語った。

「おいしいお菓子、それは最高級の材料と適切な調理場と最高峰の調理法から生まれます。」

どうも、うちの間宮や他の間宮たちと雰囲気はかなり違う。

同じ姿の筈なのに、まるで別人だ。

気が強い、というのとは少々異なるようだけど。

私に密着したまま、彼女は歌うように発言する。

「歴史を知り、文化を知り、何故それが好まれるかを知る。日々の積み重ねがおいしいお菓子へと繋がるのです。」

彼女が提供しているケーキの値段は高い。

確かに今は輸出入がすんなりいっているとは言い難い状況だが、スペシャルなケーキとは言え一個三〇〇〇円前後とは如何なものか。

それでも食べる人買う人はいるそうなの。

まあ、そうでなければ潰れているわな。

九州から来た間宮は言った。

「最高の腕前と最高級の材料で作られた、いささかお高いケーキを皆さまにお見せしますわ。」

彼女の作るは、催事用超大型高級ケーキの『天地を喰らうサトウルヌス』。

それは五尺四方の正方形の大ききで、ゴヤの『我が子を喰らうサトウルヌス』が一部チョコレートで描かれており、芸術性も高いことから取材が殺到して大本営広報課の面々と共に彼らは静かに撮影している。

その中には、公共放送を自称する放送局の人々もいた。

生クリームをキャンバスの白に見立て、季節の果物やチョコレートなどが表面で乱舞し、ケーキ内部にも多数の果実が配置されている。

戦いは数だよ、兄貴。

古典的な手法から最新式のやり方まで網羅する、それはお菓子の匠。

にこにこ微笑みながらケーキを作る様は、熟達の職人芸を見ているかのようだ。

今回のケーキは二〇万円の仕様という。

幾つか等級があるらしく、こだわりの深化具合でお値段が跳ね上がるそうだ。

全国各地の間宮や鳳翔を始めとする給糧艦たちも固唾を飲んで、彼女の業を見守っている。

何故か手伝いを指名されたので道具の準備や片付けをしているが、うちの連中の視線がおとろしい。

不意に間宮が話しかけてきた。

「あのですね、提督。」

「はい、なんでしよう?」

「間宮が二名同じ鎮守府に在籍することは可能でしょうか?」

「ええと、同姿艦は在籍出来ないようになってる筈ですし、貴女は九州の要石でしょう。」

「石にだつて意思はありますよ。」

「貴女がいないと、中佐も悲しまれることでしょう。」

「……提督は私と彼の関係をご存知ないのですね。」

「えっ?」

「ふふふ、では提督の胃袋を掴むために、この『天地を喰らうサトウルヌス』を是非ともご賞味していただかないといけませんね。現在開発中の『快樂の園』や『ラス・メーナー』も、函館で完成させてみせましょう。」

「ほう、『マミヤ・ザ・スペシャルフェイバリット・シリーズ』はまだまだ開発されてゆくということですね。」

「ええ、提督の大切な彼女たちに比肩し得る……いいえ、凌駕する菓子作りの腕前を知っていたかもしれません。」

そう言つて、彼女は私の唇を人差し指でひと撫でした。

CCXXXI：レミントンM700

埼玉県では、アライグマの獣害が特に酷いらしい。

日本での銃器に関する法律はある種偏執的にすら感じる程で、あれダメこれダメのダメダメ尽くして超絶雁字絡めだ。

野生動物の肉は売れず、皮は二束三文。

ジビエ流行りも狩りガールも、どこまでが演出でどこまでが本当やら。

猟師がいないと大変困るのに、規則法律法令で激減高齢化待ったなし。

昨今の深海棲艦侵攻で人口ががた減りとなった状況でも、日本政府は規制をなかなか改めようとしない。

役場の若手が銃砲所持講習を受けるように進めているらしいが、実際に猟銃を持つと
とする人は少ない。

あまりにあんまりだからだ。

知れば知るほど、嫌になる。

それでも地域のためにと頑張る人もいて、そういう人たちが農家を守ろうとしてい

る。

獣害に全然対処出来ないのだが、それは政府と警察の悪辣な規制によるものであつて猟師たちの責任とは言い難い。

外国の猟師からしたら頭おかしいレベルの規制を普通にやってのけるのが日本政府のやり方で、これがどういう結果をもたらすかというと複数の野生動物が住宅街へ現れる事態が日常化し住民に被害が及ぶのだ。

某市では登校中の生徒たちに野獣が襲いかかる事態が発生し、与党は責任追究され、防弾チョッキ装備の警察官が配備される事態へと発展する。

それで、どこへ本格的に皺寄せが来るかという立場だ。

害獣対策が野生動物の知恵に苦戦続きで農家が苦しんでいるのを、コンクリートと鉄と硝子に包まれた生活をしている人々はちよつとも知ろうとしない。

自分には関係無い、との意識の高さで。

あいつらにもこの苦しみを分け与えればいいのに。

役場は猟師に出動要請するが、ガソリン代が高騰し弾代も勿論高騰している中で猟師たちの自己負担額は果てしなく大きい。

しかも、彼らに渡される金は雀の涙。

ふざけんなよやってらんねえよ、が実情である。

それでも、農作物被害に音を上げて銃砲所持講習に参加する農家の人々も存在する。現状に対応出来ない行政はいつも後手に回っており、野生動物による被害は拡大の傾向にある。

警察に陳情する人もいるが、彼らとて対応出来る訳でもない。

心ある少数の警察官たちは憂慮する。

実際、野生動物撃退のために警官が発砲する事件が発生し、その勇氣ある警官を罰した警察署に対して抗議集会が開かれた。

本当に大切なことはなにか？

面白がったド腐れマスゴミの記事に対して抗議が殺到し、代表が陳謝する事態も見られた。

埼玉県はおたんちんな政府の対応に激怒した。

必ず、この邪智暴虐な政体に一泡吹かせようと怒り狂った。

彼らに、あんぼんたんで頭でつかちな自己中心的政治家と官僚たちの腹の内は分からぬ。

だが、県民が困っている状況をどがんとせんといかんと奮い立った。

あまりにもアライグマなどの獣害が酷いので特例法的なことは出来ないかと陳情し

ただのだけでも、政府は出来ない出来ない出来ませんの一点張り。

県民を守るため、埼玉県の心ある役人衆は立ち上がった。

『埼玉県猟師特例法』の発令である。

洒落にならない現実問題に、やむ無く対応するための苦肉の策だ。

同じく獣害に激しく悩まされている群馬県と栃木県がこれに呼応し、上記特例法を更に強化した『北関東猟師特例法』が発令された。

これに怒った政府が埼玉県群馬県栃木県に発令撤回を求めるも、『県民を守る行為を阻止する悪法は許されない』として政府勧告を断固拒否した。

有志の埼玉拳使いたちが国会議事堂前で抗議を行い、実力行使せんとした機動隊と激突して難なく彼らを打ち破った。

現在進行形で、北関東の有志たちが続々と国会議事堂を包囲しているという。

それは遠き函館まで聞こえてきた。

テレビ画面では、群馬名物焼きまんじゅうを頬張りながら朗らかに笑う老戦士たちが意気軒昂な姿を見せていた。

で、私はアメリカ製の猟銃を持って埼玉県での狩りに参加することとなった。

ひなびた銃砲店で入手した名銃。

倒産してしまつた会社の傑作品。

埃をかぶつていたレミントン社製の銃だが、まだまだ実用性はすこぶる高い。

本来は散弾銃を所持し実績を積まないといけないのだが、野獣が跳梁跋扈する現実問題に対処するためには超法規的措置やらなんたらで乗り越えなくてはならないということだろう。

たぶん。

陸上自衛隊のトラックに揺られ、埼玉県を走る。

猟友会の面々に加えて自衛隊や埼玉県警の人たち、それに埼玉県庁の人もいた。

ただでさえ食べ物自給自足率をあげなくてはならないのに、法に厳密に従つていてはおまんまの食い上げだ。

今回の殺しが終われば、次は群馬県、その次は栃木県。

近々、茨城（いばらき）県や千葉県もこの連盟に加わる予定らしい。

長野県や山梨県からの打診もあるという。

『野生の王国』を国内に築かせてはならないのだ。

関東攻略戦が終わり次第、我らが北海道の獣害地域へ赴かねばならない。

その前に東北攻略戦に参加させられるらしいが。

……私は鎮守府の提督なのだ。

今は厳しい状況に置かれていないからか、本土の厳しい状況に対処することが義務付けられているみたいだ。

うちの艦娘たちは交代で私の支援に回っている。

今の隣は曙だ。

顔が強ばっている。

珍しい環境だからか、緊張しているのだろう。

「曙さん、大丈夫ですよ。無理はしませんから。」

「ふん、あんたがキチツと撃てるかどうか確かめてあげるわ!」

生暖かい視線が周囲から注がれる。

殺るぞ、弾丸の尽きるまで。

武骨な三〇口径の銃を撫でる。

すると、隣の駆逐艦は言った。

「銃ばかり撫でていないで、あたしも撫でなさいよ! 早くしなさいってば!」

我々はほっこりしながら、獣を仕留める場所へと向かう。

農家の人々の暮らしを守るために出向く。

それが、それこそが我らの使命と信じて。

新作の書き下ろし小説である、『四川料理店店主は異世界転移し王都や帝都にて無

双します』をぼちぼち携帯端末から打ち込む。

「民明書院の締め切りが、比較的緩やかでよかったと思う。

「エツチな話を書いているんじゃないでしょうね？」

「そういつたのは書いていませんよ。」

「どうだか。何人もの女の子に囲まれるのが男の夢なんですよ？」

「そういう人もおられるでしょうね。」

「あんだ、ハーレムの状況じゃない。」

「一応そのように見られていますね。」

「なによ、あたしたちだけじゃ足りないの？」

「なにをこわいことを言われているんです？」

「沢山やりたいんですよ？」

「そんなことはないです。」

「でも、これから大変よ。」

「臨機応変にやるしかないですね。」

「そ、そんなにやるつもりかしら？」

「え？」

「え？」

「そろそろ現場だ。」

老猟師の声がして、我々は狩人にメタモルフォーゼする。
さあ、ひと狩りしようぜ。

CCXXII：艦娘乙種慰労会

「生きる意味や価値を考え始めると、我々は気がおかしくなってしまう。生きる意味など、存在しないのだから。」

ジグメント・フロイト

艦娘乙種慰労会を函館でやろうと、島風から提案された。

そう言えば、彼女も艦娘乙種なんだよな。

おっさん同士の、胸襟広げての飲み会か。

悪くないな。

その慰労会開催前、私は呑気に考えていた。

貸し切り出来る馴染みの居酒屋の予約を取り、迂闊にも交流をはかれたらなあなどと
思っていた。

慰勞会は初っぱなから荒天だった。

好天ではない。

荒天波高し、である。

時化だ。

大時化だ。

どんな船でも転覆しそうな雰囲気。

激しい雨で呼吸困難になった夜を思い出す。

集まったのは、歴戦の戦士たちだ。

やさぐれた雰囲気は満ち満ちている。

中の人は皆おっさんだが荒んでいた。

二階の座敷は、おどろおどろしい気配に満ちている。

集まったのは駆逐艦が殆どで、軽巡洋艦重巡洋艦軽空母がそれぞれ数名という構成。

乾杯の音頭は島風が行い、それは無難に達成された。

流石に泥を塗る思惑は無いらしい。

だがしかし。

先ず、先輩が死んだ同期が死んだ後輩が死んだの死んだ死んだ大行列の愚痴が開幕雷撃する。

ちなみに、お互いの基地の艦娘とはあまりやり取りしないらしい。

胡座（あぐら）をかけた、吹雪っぽい駆逐艦に皮肉げに言われた。

「あんな、明日をも知れん状況でのんびりまったりあんなあんたてぴーちくぱーちくやつとる精神的余裕なんて、ちよぼつともある訳ないやろ。」

ごもつともですな。

今回は島風が仕切ったから、義理を感じてこの慰労会に応じてくれたらしい。

彼女……彼になるのか？ が艦娘乙種としては出世頭だからな。

海だから出世魚？

酒が入るとマジ酷い無礼講、みたいな雰囲気に変貌する。

脱ぎ出す駆逐艦たち。

走り出す駆逐艦たち。

歌い出す駆逐艦たち。

喚き出す駆逐艦たち。

げらげら笑う軽空母。

何故か踊り出す軽巡洋艦。

四股を踏み出す重巡洋艦。

君ら、なにしとんねんな。

階段を下りて、大将の元へ謝りに行く。

貸切状態なので、なにか壊したら弁償という流れでこらえてもらう。

たまに使わせてもらっている関係で、艦娘が酔うとどうなるかをお店の人たちは知っている。

艦娘が如何に日々精神的圧迫を受ける仕事かを知っているので、お店の人たちは皆やさしい。

ザンギ(鶏の唐揚げ北の国的名称)や天麩羅や焼き鳥やアジフライやコロツケなどを、うんめえうんめえと皆が食べてゆく。

サツポロのビールがばんばん消費されてゆく。

ニツカのウキスキーや日本酒や焼酎をがばがば呑む者さえいた。

酷い呑み方だ。

やけっぱちだ。

いつの間にか艦娘乙種たちの体験談を聞かされる場へ連れていかれ、初陣で死んだ僚艦たちの話を延々聞かされた。

これもひとつの供養になるのだろうか？

そう言えば、彼女たちの顔立ちが本来のそれと微妙に似通っていないように見える場

合も散見されて驚く。

例えば、白雪の筈なのに吹雪や磯波になんとなく似ているとか。

見分けのつかない提督もちらほら存在するという噂も聞くから……問題ないのか？

やたら絡んできている吹雪つぽい駆逐艦もなにやら深雪つぽい部分があつたり、初雪つぽい部分があつたりする。

艦娘乙種だけに見られる傾向らしいが、艦娘もどきもこういう風に見えることがあるらしいと聞き及んでいるからややこしい。

……全員、公式だよな？

「あくあ、帰ったらまた延々と長時間遠征だぜ。」

「遠征つつつたつてよ、俺たち、一撃喰らつちまったら火達磨になってお陀仏だよ。」

「神も仏も無い状況で、お陀仏とはこれ如何に。」

「提督と言えど、中間管理職未満と同じナリヨ。」

「『本物』がいりやあよ。ちーたー楽なんじゃがのう。」

「そげなことがある訳ねえが。」

「おえんのう。」

「ほんまじゃのう。」

戦斧だの戦棍（メイス）だのによる至近距離でのイ級ぶつ殺し談義とか、提督の●ん

こがどうしたとか、生えているとかいないとか、生理が無くてよかったとか、提督に迫られてついつい……とか、早いとかそうでないとか、ぶっちゃけまくった会話が繰り広げられている。

混沌だなあ。

ちよつとお手洗いに行つてくる、と伝えて狂騒の座敷を出て暗憚（あんたん）の扉たる障子を閉める。

渡り廊下はひんやりとしていた。

五月なのに底冷えする程である。

あれ？　こんなに寒かったっけ？

障子を通して、彼女たちの姿が影絵で見える。

シルエツト。

揺らめく陰。

なんだか異形っぽく見えるのは気のせいだな。

きつとそうだ。

そうに違いない。

イ級が何名も見えるなんて、そんな筈はない。
ないに決まっている。

酔ったかな？

まだ一滴も呑んじやいないが。

幻覚だ。

気の迷いだ。

きつとそうだ。

階段を下りる時、何故か足が少し震えていた。

C C X X X III : れんせん!

負の感情は時として
人を狂わせるほどの
甘美なる毒薬となる
その毒性知らぬまま
美酒の如く飲み干す
後悔する判断力すら
酩酊して忘れ去つて
千鳥足にて闇を歩む
本当に大切なものを
皆失つたとも知らず
愚かしきを分からず
小手先のみを信じて
暗い河に流されゆく

己は間違っていない
そのように誤認して

九州某県にある鎮守府。

武闘派の狂犬が揃っている軍事基地。

先日は四大鎮守府のひとつたる佐世保に喧嘩を売って、一部機能不全にまで追い込んだ。
だ。

その後、日本人大好きむにやむにやもによで曖昧にし、実戦を想定した演習だったと公式に発表した。

そうしたのだが、鎮守府関係者たちはみな実際になにが起こったのかを知っている。
狂犬的獵犬たちが高笑いしつつ、大型鎮守府の艦娘たちを駆逐したのを知っている。

春の夜半の、執務室に隣接する私室。

そこは女と男の匂いが充満していた。

ガスライターがシユボツと甘い火の息を吐き、眼鏡鬼畜系中間管理職のくわえた煙草の先端を赤く染める。

肺の奥まで煙を吸い込み、中年男は龍の息吹きのように煙を吐いた。

提督。

男はそう呼ばれる職務に就いている。

階級は中佐。

独身。

駆逐艦たちとすこぶる仲がよく、時折昼寝さえ共にしていた。

その中には将来ケツコンするつもりのある者さえ存在すると、某重巡洋艦系消息筋は伝えられている。

彼が関係した艦娘は複数に及び、今宵も二名と寝所を共にしていた。

爛（ただ）れた考え方を持ちながらも指揮能力はあるが故に、その男は提督の地位に踏みとどまれている。

国産並びに欧州経由の桃色映像作品を平然と部下たちの見ている前で購入する彼は、まさしくマスラオだ。

海外艦娘たちからの積極的誘惑に屈しないがためにその苛烈さは日毎にいや増しているが、今のところは首が物理的に繋がっている。

彼の首を狙う艦娘も存在するため、常に油断出来ない状況だ。

「本懐である。」

そう、彼は闇に向かって独り呟いた。

享樂的に刹那を楽しんでなにが悪い。

ツクリモノたちに囲まれた檻暮らし。

役得なくば、とてもやっつけていられぬ。

明石に頼んだオモチャも直入荷する。

江戸時代は同心がぶつちぎりて死亡率第一位の仕事だったけれども、今は提督がそれに該当する。

だから、なんだ。

匙加減を間違えてはかなくなってしまった奴らは、不幸と踊つちまったんだよ。

「ワシは死なん。死ぬものかよ。」

再び、彼は闇に向かって呟いた。

獰猛な表情で笑いながら。

「ねえ、提督。」

紫煙のたゆたう真つ暗な室内で、陽気な重巡洋艦が話しかけてくる。

「なんだ、鈴谷。」

「提督って普段は鬼畜で偉そうでエロくて自分勝手だけど、なんだかんだいってけつこうやさしいところがあるよね……あた。なんでオデコを叩くかなあ。」

「お前が随分と調子に乗っているからだな。」

「さつきまで提督に乗っかっていたけどね。」

「ふん、上手いことを言ったつもりか。」

「旨いものを食べに行くのは好きだよ。」

「じゃあ、これも好きなのか。」

「もう、しなびちやつてるね。」

「ちくわ大明神。」

「い、今聞こえたのは誰の声じゃ？」

「さ、さあ、あたしは知らないよ。」

「……仕切り直すか。」

「……そうしよつか。」

「お前が激しすぎるからじゃ。」

「提督だって激しかったよね。」

「なめるな。しかし舐めろよ。」

「アハハ、やっぱり提督だね。」

「夕張は失神したまんまじゃ。」

「提督が責めに責め立てたからじゃない？」

「ふん、実に弱つちいのう。」

「目が覚めない程責められたからでしょ。」

「こ奴はすぐいくからのう。」

禁煙だ健康だ、などと言っていた言論のために生産量が落ち込んでいた煙草だが、昨今の輸入不足もあつて国内生産量は増量の傾向にある。

紅茶が年々増産されている今の状況と似ていた。

提督になつたうま味のひとつが、物資の優先供給だ。

函館の提督は、市内の飲食店や食料品店などにも物資を回しているとか。

阿呆じやのう。

近頃は物資の供給が安定化の様相を見せている。

煙草などの嗜好品をロアナプラにある闇市で買わなくてよくなったと喜ぶべきか、それともうま味が減つたと嘆くべきか。

煙草の包装は現在簡素化していて、半世紀前のそれに近い。

印刷も安めだ。

まるで、昭和四〇年代のようにも思える。

今の人類は半世紀前に逆戻りか。

数年内に昭和五〇年代相当の社会にすると政府は宣伝しとるが、まあ、無理じゃろうな。

街中での喫煙者が白眼視されるのは以前からだが、筒井康隆の『最後の喫煙者』みたいな事態には陥らないだろう。

おそらく。

投石も無いし、腐った卵やトマトをぶつけられることも無い。

たぶん。

なにごこわいとゆうて、自分自身を普通だとか善人だとか思い込んどる連中じゃ。容易く煽動されて過激に叩きまくるのも、大概はそうだった『正義の味方』じゃ。

正義って、なんじやいな。

戦前まではふんだんに使われていたプラスチックも、今では高級素材になりつつあるらしい。

プラスチック軸の大量生産系ボールペンは供給量が格段に減り、元々一〇〇〇円の品が一時期一本一〇〇〇円くらいにまで高騰しとった。

今も鍵付きの硝子棚に入れて売つとる店がある。

当たり前にあちこちにあつたモノが、いつの間にか高嶺の花になってゆく。

『安物』と無知な奴らに馬鹿にされていた品々が、『高級品』化してゆく。

普通に独りふらふら夜歩き出来たセカイは終わりを告げ、ある意味世紀末的なセカイが顔を見せとる。

ひっそりたたずむ個人文具店が盛況になったと聞いて、まっこと驚いたもんじゃ。

化学製品であるボールペンの替芯も今や貴重品となり、経費節減のためか万年筆を使う者が増えたという。

変われば変わるものだ。

もしかしたら、この世の終わりがじわじわ近づいてくるのかもしれない。

有能極まる秘書艦の五月雨は、煙草のにおいを毛嫌いしておる。

このうまさかわからんのかのう。

街でも喫煙出来る場所は少ない。

戦前、大阪駅に行った時は駅舎前に吸い殻が沢山捨てられとって、こんなだから嫌われるんじゃないかと思うとったが人の意識なぞそうそう変わるものでも無い。

時代が変化したのに意識を変えられない、または変えようとしてない頑迷な連中の末路は哀れなものになるだろう。

歩き煙草をしていたり自転車に乗りながら煙草を吸っている人間が、バットのようないモノやボールのようなモノで襲われることもある。

喫煙者狩りとは実に物騒なことじゃ。

まあ、ワシなら返り討ちにするがの。

輸入があんまし出来なくなつて飼料ががた減りになつてしもうて食肉の供給がおえんくなつた結果、地域によつてはジビエな獣肉を推奨ようになった。

兎。

猪。

鹿。

熊。

ヌートリア。

その他。

獣肉はかなり癖があるから、他の肉と合挽き肉にしとるようじやな。

化学調味料で誤魔化すのは常套手段。

人間の舌は簡単に騙されるもんじや。

『僕は食べ物にこだわりがありません』と誇らしげにゆうとる輩が、平然と混ぜもんだらけの果汁飲料水とか缶珈琲とかを誉め称えたりするからこのう。

エスキモーが即席麺旨いと言うのとは、訳が違ふ。

別々に語らねばならぬもんを同列に並べるからおかしくなるのに、意図的かどうかはわからんがませこぜにする奴は存在する。

提灯持ちには気を付けんとう。

昨日まで怒鳴つとつた奴らが今日はこにこしとつたら、正直気持ち悪い。

猟師を残酷じやなんじやと非難しとつたもんたちが、手のひら返し。

呆れる程にくるりくるり。

鯨肉を食べるのは文化です、と言うもんが鎮守府に来た時は思わず苦笑いしてしまう。

佐世保を紹介したから、今頃はあちらさんに赴いて自説を熱心に述べとることじやろう。

迷惑をかける奴は自己主張がやたらと激しくて人の話に耳を貸さんから、実に往生する。

そんなに言いたいことがあるなら、本でも書けばいいのに。

狩りガールゆうんが、この頃の流行りだそうじや。

そんな、こないだの狩りの時にはおらんかった。

都市伝説？

都会だけ？

実質的には、役場の若いもんや警察官や自衛官やワシみたいなんがてっぽう持つてばんぱん殺つとる。

おっさんまみれのちよい若いもん添え。

まあ、じいさんだらけよりはマシじゃ。

昔は因縁付けの爺いが多かつたらしい。

いつの時代もどこにでも阿呆はいるな。

最近は『北関東猟師特例法』に倣（なら）つて、『北九州猟師特例法』を制定しようとの向きもある。

東京都の都知事が遺憾を表明しとるが、現状を全然理解しとらん。

獣害がだんだん深刻化しとるのに、ちよつとも分かつとしない。

時代の変化に対応出来ない政府なんぞ、地方にとつては害悪になりかねんからの。

ま、折り合いをつけて欲しいのが本音じゃが。

狸や狐や鴉は臭いが、食えんこともない。

香辛料を使い加工して、誤魔化すところがちらほらあるという。

どこまで本当かはわからんが。

函館の提督が都会の連中の非道さや狡猾さを怒つとつたが、えげつない連中がおるかこそ大きな社会が成立するんじや。

大会社や総合商社がエグイ商売をするからこそ、豊かな社会を形成出来るというに。そういや、どつかの時計製作会社が売上不振の時計店を切り捨てて騒がれとつたな。

日本の商社は世界的にえげつないのが知れ渡つとるけれども、外国では今まさに冷酷な程買い漁つとるという話を聞く。

あまりにも地元民を怒らせて、殺された商社員も複数おるらしい。

まあ、自業自得じゃな。

おおかた、公衆の面前で地元民を罵倒でもしたんじやろ。

経済的理由と政治的理由で踏み込めなかつた『聖域』が、最近崩壊しつつある。

やりたい放題であちこちと癒着しまくつていた総合商社。

会長や幹部が醜態を晒した、公共放送を自称する放送局。

芸能界で各種多量発信型情報媒体に圧力をかけ続けていた事務所。

そうした悪徳の伏魔殿へ颯爽と乗り込んでゆく、東京地検特捜部。

時代が変わりつつあるのかもしれない。

或いは矛先かわしの一環かもしれない。

政府批判軽減化の可能性もあるしな。

わからんのう。

やたらと文句を言うことが権利と思うとる連中はなんやかんや喚いていたけれども、慣れてくるとそれらは当たり前になつてくる。

人間はどんな異常にでも対応してしまうからの。

そしてどんどん過激化してゆく。

より強い刺激を求めて。

人間は簡単に麻痺する。

バブルの頃にはいい目を見た連中も時々あれやこれや喚いとるが、あんまり喚き過ぎてたまに闇討ちされとる。

阿呆じやのう。

この一年で、二〇万人以上が死亡或いは行方不明になっているという。

確認出来ているだけで、そのくらいの人々がいなくなっているという。

そんな話を、大本営にいる『知人』が話してくれた。

本当かどうかはわからん。

わからんから、せめて生きている内は楽しもう。

「おい、鈴谷、もう出んぞ。二桁なんて無理に決まっとうろが。痛い。痛い。今夜は打ち止めじゃ。止めろ。止めろ。そして寝ろ。」

「ねえ、提督。」

鈴谷が俺に向かって微笑む。

ゾクリとする程の妖艶さだ。

「リシユリユーやアイオワとやったって、ホント?」

「このアホウ。海外の連中には手を出しとらんわ。」

「ふーん、その割には、英国駆逐艦の子と随分仲良さげに見えるけど。何度も何度もチューされたんでしょ?」

「あつちがじゃれとるだけじゃ。」

「ホントに?」

「そうじゃ。」

「岡山県総社市?」

「訳のわからんネタは止めんか。」

「じゃあ、サービスしてあげる。」

「痛い痛い、流石にもう出んわ。」

「出してよ、性戦士なんでしょ。」

「どこでそんなやり方を覚えた?」

「ちよつとエツチな●●●イト。」

「●●●イト?」

「なんでそうなるのよ。」

「全員、明日から閲覧禁止じゃ。」

「なんでよ?」

「天使の浜風ちゃんや暁ちゃんに、酷い悪影響を及ぼしたらどげんすんじや。」

「あはは、女の子の会話の半分以上はエロ話よ。」

「それはお前ら一部のもんだけの話じやろうが。」

「駆逐艦の子たちだって、いろいろ知ってるって。香取先生が提督のやり方をあれこれ教えていたもの。」

「な? は? はあつ? おま、お前、鈴谷、そんな、そんなバカなことを……。」

「うっそピヨーン。」

「スネークバイト!」

「ぐはあつ!」

「あ、あのなあ、い、言っつていい冗談といかん冗談があるんじやぞ。か、香取先生ネタは絶対禁止じや! 絶対にすなよ! ネタ振りじやないぞ! 香取先生に彼氏がおるネタなども絶対絶対絶対禁止じや! やるなよ! やるなよ! やつたら、即時に●河問いじや!」

「うくく、効いた効いた。」

「艦娘の回復力は化物か。」

「提督の回復力も化物ね。」

「こ、こらっ、やめんか。」

「やめませーん、ふふふ。」

「テイトク、やりましようよ。」

「ゲエツ、夕張！ 復活したか！」

「逝くよ、夕張！」

「よくつてよ、鈴谷さん。」

「今！ 必殺の！ ツイン・キューティー・アタック！」

「ぐはあっ！」

翌朝、大幅に寝過ぎした中年男一名と艦娘二名は香取先生から正座説教を一時間受けた。

C C X X X I V : 松輪泊地

「おい、漣（さざなみ）。起きろ。おい。」

「むにやむにや、ご主人様、これ以上やられたら私は壊れちゃいます。むにやむにや。」

「なにすつとぼけたこと言つてやがる。お前はとつくに壊れているだろうが！」

「褒めてもエツチなことしかしませんよ！」

「そこで何故威張る。」

「提督の初物をいただいたからに決まっているでしょう。」

「初物ゆうな。」

「ドーテー？」

「茶番はいいから、早く離れてくれ。今日はここ松輪泊地司令官として、陸海空混成部隊たるマトウア基地のお偉いさんと話し合いだからな。」

「あの、それがですね。」

「なんだ、早くしろよ。」

「抜けなくてですなー。」

「はあつ？ 痙攣してんのか、そこ？」

「イヤー、まいっちんぐですね。」

「冗談こいてる場合じゃないぞ。」

「弛緩剤を打ってもらったら一発なんですけど。」

「ウソだろ？」

「ウソじゃないんだな、これが。」

「向こうの軍医に頼むって訳にもいかんしなあ。」

「ご主人様。」

「なんだ？」

「こういう時は、素数を数えたらいいんですよ。」

「サーザーナミー！」

「ご……ご主人……様、そ、そういう……プレイはまた……今度に……しましょう。」

「あーあ、えらい目に遭った。」

「死ななくてよかったですね。」

「まったくだ。」

「死んじやう人もいますし、死んじやうた提督の死因でも上位らしいですよ。」

「は？ 艦娘にやられたって話はそっちなのか？」

「どっちなんですかね。ご主人様はどっちがいいですか？」

「殺すなよ。」

「私は毎晩やられていますけどね。」

「しかし、ロシア人たちもよくこんな島に基地を作ったよな。」

「対地攻撃型ヘリコプターを惜しみなく投入していますしね。」

「ハインドだけじゃなく、ハヴオツクの最新型もあつたしな。」

「対深海棲艦攻撃能力が一定数、もしくはそれ以上あるんでしょう。おそらく。」

「ええつと、ロシア語で黒い鮫を意味するチョールナヤ・アクーラもあつたな。」

「単座ヘリで、北大西洋条約機構側の名称がホーカムでしたつけ。」

「戦闘ヘリの見本市って感じだ。」

「バレてもかまわないつとところが、実に太っ腹ですよね。」

「まさかスペツナズの連中とお前が仲良くなるとは思つてもみなかつたぞ、漣。」

「ムフー、もーつと誉めてもいいんですよ、ご主人様。」

「何人も相手にしていたのに、全員ノしてしまうんだからな。」

「ふっふーん、訓練されたとは言え、人間に後（おく）れを取るようでは到底深海棲艦と

は戦えませんかからね。」

「ところで、函館に頼んだ艦娘の件はどうなっている?」

「大本営が情報流出の可能性をごちゃごちゃ言っていて、大淀さんがバールのようなモノかエクスカリバーのようなモノでちよめちよめしてくれましたけど、その後艦娘乙種を送ろうとか言い出してまたどつかれていましたね。」

「アラスカ方面へは一向に進軍出来ていないしな。あそこまで行けたら、カナダを経由してメリケンに連絡が取れるのにな。」

「第五次気球作戦も失敗しましたしね。島の近海は敵駆逐艦級しか出てこないのになんとかやれていますけど、稀にメリケン艦娘の装備らしきちっちゃな残骸が漂着していますね。九割九分九厘は、ロシア軍が目の色を変えて回収していますが。」

「メリケン側も上手くいっていないんだろう。共同戦線が張れないのは痛いな。それと、敵さんに高高度迎撃機があるのにはびっくりしたなあ。」

「大淀さんによると、駆逐艦三名、軽巡洋艦一名、軽空母一名をなんとか振じ込んでくれるそうです。」

「おお、そいつはありがたい。で、いつ来れる?」

「時期未定です。」

「……まあ、そうなるな。で、ロシア艦娘の開発ってどうよ?」

「わかりませんねえ。明日の晩御飯はスペツナズの人たちと食べますから、その時にもそれとなく聞いてみます。」

「お、おう。」

「日露交流協定だからで泊地建設権をもぎ取ったまではよかったが、ロシア軍のマトウア基地側につってもらう破目に陥るとは思わなかった。しかも、やたらに手際がいいんですよ。」

「完全に手玉に取られていますよね。以前の泊地は更地になっていましたし、前任の提督や艦娘乙種たちはどうなったのやら。」

「流石に向こうから推挙された事務員は全員断つたがな。」

「可愛い子ばかりでしたね。」

「おう、日本人好みっぽい子を揃えていてびっくりした。」

「そういうところがおそロシア。」

「ウクライナの子もベラルーシの子も可愛かったなあ。」

「東西ロシア帝国が協同作戦しているってことなんでしょうねえ。」

「仕掛けられた盗聴器は発見出来たか？」

「執務室以外のは、全部処理しました。」

「よし、それでいい。」

「焼酎が大人気だったな。」

「ほんと、よく呑みますね、ロシア人って。」

「アルコールだったらなんでも喜ぶって聞いたけど、とうやら本当のようだ。」

「ロシア人の離婚原因の上位らしいですよ。」

「ほーん。」

「ロシア人って、三回結婚するそうですし。」

「ほええ。」

「二〇歳前後で初婚、四〇歳前後で再婚、六〇歳前後で再々婚が多いとか。」

「成程。」

「そう言えば、提督。モテていましたよね。」

「えっ?」

「やだやだ、このご主人様、鈍感主人公系?」

「おお、このイカれ駆逐艦。上官に向かつて鈍感野郎とは何事だ? アアン?」

「ちよ、ちよ、ご、ご主人様。そんなところを激しく掻き回したら痛いですよ!」

「オラオラオラオラオラ!」

「うわあつ！」

「一緒にお出かけ出来て嬉しいです、ご主人様。」

「ここは昔、豊原市って言われていたんだっけ？」

「樺太統治時代の話ですね。今はユジノサハリンスクと呼ばれるサハリン州州都ですよ。」

「へえ、稚内から定期連絡船が出ているのにも驚いた。」

「戦前は定期便として飛行機も飛んでいたそうですよ。」

「ふーん。」

「まあ、稚内からは港町のコルサコフまでなので、そこから豊原までは自動車での移動になります。大泊と呼ばれていたコルサコフからは車で北へ四〇分。そこが、豊原市と呼ばれていたユジノサハリンスクです。」

「漣、いつもと口調が違う。」

「ここ豊原市は札幌市をお手本とした街で、碁盤目状の街並みの特徴です。」

「平安京みたいなもんな。」

「平安京エイリアンは関係ないですよ！」

「おお、やっぱり漣だ。」

「街中心部の西端にはユジノサハリンスク駅があります。」

「そういや、函館の提督が一度乗ってみたいって言っていたな。」

「ご主人様も乗ってみたいですか？」

「そうだな、鉄道旅も面白そうだ。」

「では護衛が揃って休暇が取れてから乗車しましょう。」

「今は無理か。」

「日程的に合いませんし、誘拐されても困りますから。」

「まあ、そうなるか。」

「自由市場に寄ってから帰ろうぜ。」

「そうですね、ロシアの実情を知るにはいい場所です。」

「駅に近いのがいいよな。」

「それは大きな利点です。」

「函館の自由市場みたいに屋内型なんだな。」

「真冬に外ではやっていられないでしょう。」

「おつ、海産物に野菜や果物だけじゃなくて、日用品や衣類もあるんだな。」

「ここであるべくルーブルを使いきってしましましょう、ご主人様。」

「ソヴイエト時代じゃないんだから、外貨持ち出しとか言わないんじゃないか？」

「ルーブルが急落したら、大損ですよ。」

「よし、漣。あの店から寄ってみるぞ。」

「アイアイサー。」

「ピロシキを売っているぞ。」

「ピロシキって元々はウラル料理で、本来この辺の食べ物ではないみたいです。」

「長野のおやきみたいなものかな？」

「おお、この素朴な感じがいいですね。」

「これは……サハリン風餃子？」

「餃子系の食べ物は意外と多いですよ。」

「へえ。」

「挽き肉を使った肉団子系の食べ物も世界各地にありますし、おいしいものを食べたいのは万民共通の願いでしょう。」

「やだ、この漣とってもインテリゲンチャ。」

「インテリゲンチャってロシア語ですよ。」

「そうなの？」

「そうです。」

「この街ってゆったりした感じだよな。」

「都市設計に余裕があつたからでしょう。」

「理想の街作りってやつかな？」

「日本人向きではないかも知れませんね。」

「そうか？」

「日本にはこういう街並みが無いでしょう？」

「遠い街だから、素敵に見えるのかもしれないな。」

「そういうものかも知れませんが。戦前は函館の三分の二くらいの人口一八万人がいたそうですね、今はええと、七、八万人くらいらしいです。」

「なあ、漣。」

「なんです、ご主人様？」

「俺の勘違いでなければ、けっこうモテている気がする。」

「そりゃあ、身なりのいい日本人を見かけたら粉もかけたくなくなるでしょう。」

「そういうもんかな？」

「そういうもんです。」

「日本統治時代のものつて、建物以外はあんまり残っていない印象だな。」

「どちらかというと、旧ソヴィエト時代の残滓が濃いように見えますね。」

「街中に堂々と幾つも廃墟があるように見えて、ずいぶん驚いたよ。」

「たぶん、やたらと頑丈に作っているんでしょう。形さえあれば使えるっていうのがロシア人流なのかも知れませんか。」

「日本人とは正反対に見えるな。」

「日本人はきれいごと好き……間違えました、きれい好きですから。」

「今のはわざとだろ。」

「噛みました。」

「いいや、絶対わざとだろ。」

「神はいた。」

「いるんだろうな、人の心の中には。」

「ご、ご主人様がまともなことを言っているだと……。」

「お前は俺をなんだと思っっているんだ？」

「エロい人。」

「即答するなよ。否定はせんが。」

「大丈夫ですよ、ご主人様。」

「なにがだ。」

「帰ったら、いっぱいいいことをしてあげますから。」

「お、おう。だが、帰ったら一番にしなくてはならないことがある。」

「ロシア軍基地の人たちへの、付け届けですか？」

「その前に、盗聴器の確認だ。」

「夜の歌を聴かれるのは嬉しくありませんねえ。」

「お前はいつも通常運転だな。」

「もーっと誉めたっていいんですよ、ご主人様。」

「ではぐると回って泊地に戻るか。」

「イエッサー！」

C C X X X V : 松輪泊地の艦娘はなかなか揃わない

「ご主人様、このザンギ、めっちゃおいしいですよ。はい、あーん。」

「うん、おお！ めっちゃウマツ！ この鶏の唐揚げ、めっちゃウマツ！」

「鳳翔さんのおいしさと私のあーんとで、おいしさが三倍増ですね。」

「なんであんたが加わると、おいしさが三倍増しになっちゃうのよ。」

「おやおや、ぼのたん、それは嫉妬ですか。そいつあイケねえな。」

「イケてないのはあんたの方よ。」

「あんらまあ、こいつは厳しい。」

「ははは、一本取られたな、漣。」

「いやはやまさにまさにで御座るよ。」

「あははは。」

「そのボンクラ主従。」

「曙ちゃん、酷いー！」

「なんで、松輪泊地のあんたらが函館にいるのよ。」

「俺はこの提督に艦娘補充の件で相談しに来たんだ。あつちから連絡すると盗聴されるし。防諜措置つてとこだな。」

「私は愛するご主人様の性奴隷兼秘書艦兼護衛で。論理的に当然の帰結ですね。私のおけつはご主人様のモノですが。」

「なんで性奴隷なのよ。」

「あつれー、知らないの、ぼのたん。異世界に行った人見知り系主人公は、性奴隷を買うことでしか彼女を作れないことが多いんだよ。女の子と付き合つたことが無いから、隷属させて言うことを聞かせる。悲しい展開だよ。そういうやり方でしか、人間関係を構築出来ないんだから。」

「危ないネタは止めなさい。いろんな人から怒られるわよ。」

「誰に？」

「即席提督が関わっている民明書院の編集の人とか、言峰書店の愉悦社長とか。」

「ええ、なに、ライトノベルの編集者とかがここに押し掛けて来るっていうの？」

「鎮守府内には入れないわ。」

「脅かさないで、ぼのたん。」

「盗聴器を仕掛けている、という噂はあるのよね。」

「え？」

「なーんてね、冗談よ、冗談。で、何時までいる気なの？」

「松輪島って、今の時期もかなり寒くなったりするんだ。」

「五月の今頃でも氷点下になっちゃうことがありますし。」

「けっこう寒いよね。」

「二月なんて、めっちゃめっちゃ寒い日が普通に続いたりしてな。」

「そんな時に哨戒任務をしなきゃならないなんて大変ですよ。」

「だから、帰投してきたら甘酒を吞ませてやるんだ。」

「ご主人様とお風呂に入って、一緒に眠るんですよ。」

「はいはい、あんましのろけない方がいいわよ。ここは愛にさ迷う艦娘たちの、硝煙と火薬にまみれた吹きだまりなんだから。ほら、何名かあんたたちを睨んでいるでしょ。」

「ウドの街？」

「バトリングなんてしないわよ。」

「珈琲を飲んで苦いとか言うんでしょ、その可愛い顔で、その可愛い顔で！」

「瞳孔を開いたままで言わないでよね。」

「提督を喰う艦娘、提督に喰われる艦娘。そのおこぼれを狙う艦娘。牙を持たぬ艦娘は生きていかれぬこのセカイ。あらゆる欲望を有した艦娘が集う街、函館。ここは百年戦

争が生み出し……。」

「じゃあ、漣。俺は執務室に行くから。」

「お名残惜しゅう御座いますわ、ご主人様。」

「はいはい、小芝居はそこまでよ。」

「ぼのたんが冷たい。」

「ぼのたん言うな、あんたら。」

「ねえ、曙。」

「なに、漣。」

「松輪に來ない？」

「なに、その松戸に來ない、みたいな軽いノリ？」

「ピーなつつ最中にピーナッツサプレーにピーナッツバター、それと落花生のおおまきりを付けるから、ねえ？」

「確かに千葉県松戸市には落花生を使ったお菓子があるけど、それが松輪泊地に転属する理由にはならないわ。」

「今なら、第二夫人になれるよ！」

「なにそのハーレム推奨表現は。」

「提督は基本的に重婚しないよ。」

「日本の法律上、重婚はダメよ。」

「なに、法律を変えればいいの。」

「そんなの出来る訳ないでしょ。」

「ふふん、大淀さんに頼むもの。」

「え、大淀さんて、権力者なの？」

「パールのようなモノで、ねえ。」

「あんたなにさせる気なのよ!？」

「ちよつと、そのあんぼんたん主従。」

「「曙ちゃん、酷いー!」」

「なにこのチラシ。」

「勧誘用のチラシですがなにか？」

「うん、このチラシに問題ある？」

「函館でこういつた勧誘は禁止。」

「「えええっー、なしてさ!?!」」

「許可したらあちこちから煩(わづら)わしいのが大挙してやってくるでしょ。退去させ

るのに往生するんだから。」

「往生せいやああ!!」

「それなんて、俺に銃を撃たせろ的な巡查なのよ。兎に角、こういう勧誘は禁止。わかつたわね。駆逐艦三名、軽巡洋艦一名、軽空母一名の着任がおじやんになつたらとつても困るでしょ? いいわね。」

「うう、なんも言えねえ。」

「漣! 大変だ!」

「どうしましたご主人様、なにも着ていないじゃありませんか!」

「ここの艦娘たちは、提督が入浴していると乱入してくるんだ!」

「成程、それでそこが、そんなにも元気なんですネ。」

「信じてくれよ、漣。俺はお前が初めてだったんだ!」

「大丈夫ですよ、私のご主人様を襲ったんですから。」

「そののなにも着ていない変態提督。はよ服を着ろ。」

「曙ちゃんが冷たい。」

「ぼのたんがデレたら、そりやあもう可愛いですよ。」

「おお、そうか。」

「電撃ネットワークじゃないんだから、身を張ったギャグなんて早死にする要因になるわよ。」

「いや、流石に洗剤は飲めないよ、俺。」

「あそこに紐を付けるのはやりました。」

「暴露話はいいから、さっさと別の風呂に行きなさい。」

「ほいさっさー！」

「異世界で剣士として認められたいんなら、現世でも少しは剣術をたしんでおけよ！」

「なに怒ってんのよ、漣。」

「今まで剣を握ったことも無くして剣術をたしなんだことも無くして、それで異世界に転移したら剣の達人という展開に納得出来ないだけですうっ！」

「別にいいじゃない。虚構なんだから。」

「虚構だからなにやってもいいと違う！」

「ほら、怪談で実話だつて言いながら、僕には霊感がまったく無いけど幽霊やお化けに出会ってしまう話がいっぱいあるじゃない。本当だ本当だ、って強調しなかったらいいのに、頭がそこまで回らないのね。」

「ぼのたん、そういうのも読むんだ。」

「即席提督がね、隠し芸でいつも怪談をやるのよ。」

「へえ。」

「それが殆ど実体験でね。妙にすくと話が終わるから、余韻というかなんかゾクツとするところがあるのよ。『図書館』はこわかったわね。」

「ええと、眠れなくなると困るのでそろそろ失礼いたしますです、曙ちゃん。」

「丁度いいわ。即席提督に怪談をやってもらいましょう。」

「あ、あの……ちよ、ちよつと……。」

「おやー、どうしました、ご主人様。」

「あ、いや、ちよつと夢見が悪くて。」

「この漣の夢でもご覧になりました？」

「そうだな。」

「キタコレ！」

「お前は絶対に失わない。絶対絶対。」

「ああ、そういう方向性の夢ですか。」

「俺は、お前がいないとダメなんだ。」

「もーつとギユツとしていいですよ。」

「済まない漣。弱い俺を許してくれ。」

「はい、漣のすべてはご主人様の為。」

「漣……。」

「ご主人様……。」

「おうコラ、ぼんこつ主従！　そういうのは松輪島に帰ってからやりなさい！　みんなが集まる朝の食堂でやるな！」

「ぼのたん、厳しい！」

CCXXVI：白い手

戦前は学校給食というものがあつたらしい。

ぼくが入学した頃にはなくなつていたけど。

お昼はお弁当をみんなでわいわいと言いながら食べるのがふつうで、おかずをこうか
んしたりすることもよくある。

お弁当を持つてこれない子もいて、そういう子はパンを買つたりみんながおかずを分
けたりしてやりくりしている。

助け合いつてだいじだと思ふ。

お茶と牛乳は学校側が出してくれるので、ぼくたちはそれらをごきゅごきゅと飲みな
がらお昼ごはんを食べるのだ。

みそ汁やとん汁やボルシチやピロシキなどが出ることもたまにあり、ぼくたち男子は
おお！ とよろこんだりする。

昔はキレイなものが出てきても、ぜったいに食べなくてはいけなかつたらしい。

残そうとしたら、ずっとずっと先生が見張つて無理やり食べさせていたそうだ。

お父さんやお母さんに聞いたら、自分たちの学校ではそんな話を聞かなかつたけど、よその学校ではあつたらしいとのことだった。

近所に住んでいる島さんは大きな会社の社長をしていたけど、戦争のえいきょうで会社がつぶれてしまったそうだ。

家の畑で野菜を作つて、一人ひっそりとくらしている。

たまに女の人がやつてきて、大きな声がきこえてきたりする。

町内会長からときどきおこられていて、なんだかわいそう。

島さんは社内政治というものに負けちゃつたらしい。

会社の中でなかよしの人とそうでない人がいつもいつもケンカして、それでいろんな人がいなくなつてものが売れなくなつたとか。

島さんはたくさん女のとななかよしだったそうで、奥さんいがいの人ともいっしょに海外旅行したという。

外国旅行なんてゆめのまたゆめだなあ、と島さんはぼやいている。

この間、ドイツに行った時に買ったという高い万年筆を見せてくれた。

どこがいいのかよくわからないけど、昔はこういうものを持つていたといろんな人がほめてくれたのだそうだ。

ウラジオストクとかサハリンとか台湾とかはどうですか、ときいたら、海外旅行と言えばフランスとかドイツとかイギリスとかそういうところがいいと言われた。

じゃあシヴェリア鉄道ですね、と言ったらロシア人は信用出来ないといまいました。島さんが言った。

どうやら、ロシアやとなりの国などの商いでだまされたことが何度もあるらしい。それが会社がおかしくなった理由のひとつなんだ、ときみしそうに島さんは言った。戦争前まではコンビニエンスストアがまちのあちこちにあつて、夜中でも安心して買い物に行けたのだそう。

食べ物を買って帰ることも、それが社会もんだいになつていたんだよ、と島さんはみょうなにおつきで言った。

もつたないなあ。

そんなにして、どうしてみんなはそれを止めさせなかつたんだろう？

車を持つことは特別なことでもなくて、たくさんたくさんびゅんびゅんと日本各地を走っていたのだとか。

ガソリンスタンドがいくつもあつて、まちの外にはごはんを食べるお店やふくを売るお店やホームセンターやくすり屋さんやいろんなお店がいっぱいあつたんだと島さんは言う。

へえ。

早く昔のようになったらいいのに、と鳥さんは言っているのだけど、戦争が終わっても世界各地のしげんがどんだんへってきているし、石油もばかすか使えるようにはならないだろうって先生が言っていた。

海に近い原子力発電所は全部はいろになっていて、太陽エネルギーを一生けんめいけんきゆうしているそうさ。

それと、世界の人口がかなりへっていて、日本の人口もずいぶんへっていると先生が教えてくれた。

かんむすのお姉さんたちが一生けんめい平和のために戦ってくれているのだけど、しんかいせいかんがいなくなっても二〇年はふっこうにかかるだろうとせいふの人たちはしさんしているそうさ。

その話を鳥さんにしたら、なんだか青いかおをしていた。

だから、ぼくたちが大きくなったらもつともつとがんばらなきやいけないんだと思う。

最近、となりのせきのさやちゃんかぼくをぺたぺたとさわってくる。

さわると楽しいらしい。

ぼくもさわつていい？　ときいたら、えっちなのはダメと言われた。わからないな。

えっちなのはつてなに？　ときいたけど教えてあげないと言われた。先生にきいてみたら、えっちなのはいけないと思いますと言われた。

大人はみんなえっちなんだよ、と島さんは言っていたけど、どうやらちがうみたいだ。お母さんとお風呂に入ったときにその話をしたら、まだ早いわよと言われた。みんながちがうことを言つて、ぼくにはなにがなんだかよくわからないや。次の日、なぜか島さんが町内会長からまたおこられていた。

学校から家へ帰るとちゆうに、古くて大きなおうちがある。

ここに住んでいた人たちは、戦争が始まってからよそへ引っこしたそうだ。

この海に近いまちはこわいと言つて、山の中のまちへうつたという。

ぼんやり見ていたら、きれいな女の人**が**ぼくをまどから見つめていた。

白い手**が**ぼつそりとしていて目**が**ぼつちりとして、まるでお人形さんみたい。

ぼくをゆらりゆらりと手まねきしている。

「いらつしやいな。」

「いいんですか？」

「いこのよ。」

「おじやまします。」

おうちの中はりっぱな作りで、古いけどきれいなかんじだった。

ギユツとだきしめられたら、大きなおっぱいが当たってなんだかはずかしいけどうれ
しい。

さやちゃんにだきしめられても、こんなきもちになるのかな？

昔、お母さんにだきしめられた時を思い出す。

お姉さんはかみが長く、赤い目の美人だ。

お母さんよりきれいな女の人でどきどきする。

ふわふわした白いワンピースがよくあっている。

「ふふふ。」

女の人が笑った。きれいだ。

「やつと、手に入ったわ。」

なにが手に入ったのだろう？

「ずつと、いっしょですからね。」

ぼたりぼたりと、ぼくのほほになみだが落ちてくる。

どうしてないているの？

「お姉さん、かなしいの？」

「いいえ、うれしいのよ。」

女の人はそう言った。

「きつと、きつと、もつともつと楽しくなるわ。」

お母さんやさやちゃんどちがうにおいがする。

まるで、花のようなにおいだ。

少しだけしおのにおいがする。

ギユツとだきしめられながら、ぼくはお姉さんともつとなかよくなれたらいいな、と
考えた。

C C X X X V I I : 鉄底海峡解放戦余話

「出撃時は四隊、帰投時は一隊未満なんてザラだった。夜間の撤退戦は特に悲惨だった。仲間とはぐれた艦娘は漏れなく敵の餌食となった。訳がわからない内に敵の潜水艦から雷撃され、茫然自失となったまま沈んでゆく奴はまだ悪くない死に様だったんじゃないかな。昼間の出撃でも、こちとらの有効射程の遥か向こうから砲撃されたり明後日の方へ撃っていた弾幕をくぐってきた爆撃機から先制攻撃されたりした。実に虚しく初陣を飾ることなく、少女の姿をしたおっさんたちは絶望を顔に描いたまま何人も何人も波間に消えていった。」

淡々と話す島風。

熱なき焰の如く。

静まりかえった函館鎮守府の講堂。

満員御礼を遥かに超え、真剣な面持ちの鮪詰めの艦娘たちが構造物を満たしている。今ここにいる艦娘の中では、間違いなく語り手が最も戦闘経験のある武勲艦だった。

「火力の集中は駆逐艦にとって初歩的攻撃方法のひとつだったが、初陣のおっさん艦娘

にとつては一発撃つ間もなく棒立ちしたまま敵の的になるなんて、それは至極当たり前のことだった。悲鳴を上げるなんてこともなく、敵の攻撃を回避することもなく、日常風景のように朽ち果てていった。」

咳（しわぶき）ひとつさえ、聞こえてこない講演会。

気温がどんどん下がっているような錯覚さえ覚える。

「手に持った火器を放り投げて逃走に移る奴も少なくなかったが、背中ばかりやすい的となつて射的で倒される景品のように次々打ち倒されていった。督戦隊なんてもんは鉄底海峡解放戦初期に存在しなかったし、結局公式には存在しなかった。提督によつては私的にこさえたみたいだったが、督戦隊の艦娘共々行方不明になつたのが数件続いてその内誰もやらなくなった。」

彼女が身に付けているのは当時仕様の防弾防刃チョッキ。

一撃死を防ぐための品。

たやすく敵の弾を通し、素通しよりはマシと思われた品。

今とは段違いの性能差。

それでも、着ないよりは着た方がずっとマシと思われた。

死者を量産してさえも。

手には戦斧と円形の楯。

バイキングのような姿。

兎の如き飾りが震える。

「飯はとにかく不味かった。まともな旨い飯を作れるような奴はいなかった。温かい飯を喰えるなんて暇な時に限られたし、あの頃はやたらと出撃が多かったから、携帯糧食を加熱しないまま食べられたらまだマシな状況が多かった。喰おうとした矢先に出撃命令が下されることに、腹を立てる余裕さえ無い状況が多々あった。たまに基地に対する敵からの空爆はあったし、対空砲火でやり返すことさえしないでぼおつと空を見ている内に殺られる艦娘は意外といた。」

ため息をつく島風。

憂いさえも美しい。

「提督と関係すれば秘書艦になれて死ななくて済むと考えた奴もいたが、そんなことを考える奴の大半は自分勝手なろくでなしだった。だから、そんな奴は秘書艦になれても殆どが一週間立場を維持出来なかった。更に悪知恵に長けた奴は提督と関係したまま、後方支援隊だの連絡艦だの回収艦だのを志願した。巧妙に立ち回る奴はどこにでもいたが、小手先ばかり上手い奴で実力者なんていないし、口先ばかり上手い奴は卑怯なことを平然と行つた。讒言（ざんげん）告げ口密告は序の口、中には提督代理のように振る舞う阿呆さえいた。結果として、専横を行つた奴は同じ基地の艦娘に吊し上げられ

て敵への『餌』にさせられたりした。私刑だよ。艤装の推進装置を強制暴走させられて、悲鳴を上げたまま突撃を余儀なくされたそうだ。そういう『餌』がいた日の戦果は比較的よかつたから、提督たちも大抵は目をつむつた。余程の關係で無ければ。」

「あの頃、明石や夕張や熟練の整備士が一人でもいたら損耗率は多少変わつていたかも知れない。大淀すらもいなかった。ないない尽くしの状況だった。斥候がいまま、罨と魔物の溢れる迷宮攻略を命じられたようなものだった。必殺の砲弾を叩き込もうとして不発が発生し、逆襲されて沈む艦娘が何人いたか想像出来るか？ 整備をまともに出来ない奴が艤装の不具合で敵の攻撃を避けられなかつたなんて、笑い話にもなりやしない。不平不満を込めた陳情が泊地鎮守府から毎日ばんばん暗号文で大本營へ送られたが、それを狙つたかのような深海棲艦の動きは気味が悪い程だった。出撃した先には一隻もないのに、帰投時に待ち伏せしていたりしてな。偶然説やら間諜説やいろいろ出てきて、普段不真面目な連中もかなり気にしていたが、なんのことはない、その頃から暗号は敵に全部解読されて味方の情報は筒抜けだったんだ。補給品が届く訳無い。日程もバレバレだったんだからな。間抜けと罵られても、文句さえ言えん。防諜の専門家なんていなかったし、目の前の無謀な出撃計画や日々量の減つてゆく不味い飯をどうにかして欲しいと考えるくらいが関の山な残念無念連中ばかり基地に存在していた。俺たちはど素人戦闘集団だったのさ。或いは、マガツカミへの人身御供だったのか

もな。」

「そこそこ動き回って悪口を言いふらしたり、足を引つ張ったり、相手の嫌うことをする人間は古今東西どこにでもいる。相手が嘆いたり怒ったりするのを、理解出来ないのだからさ。理解してやっていたら幾らでも制裁を与えていいと思うが、自分は正しいと思いい込んでいるからまったく手に負えない。そいつが真顔で自分自身の理想的正義を語ったりしてちゃんちゃらおかしかつたが、案外そいつの中では本気だったのかも知れん。矛盾しているようにしか見えなかつたが、本人の中では整合性が取れていたのだから。複雑怪奇な欧州情勢みたいといふかなんというか。真つ正面からの正々堂々とした殴り合いが出来る奴も意外と少ない。なるべく安全な位置から相手を攻撃したいと思うのが、我々の真つ当且つ基本的な願いだ。進んで傷付きたい奴なんて、そんなにはいないしな。それが自分自身の安全安心を得るためだけの差別になるようでは、とてもよろしくないと思うがなあ。男から加工されて生まれた艦娘は、男と女双方の性質を持つていると言われる。嫉妬などの暗い感情も二倍かそれ以上という説もある。はんかくさい奴ほど暗躍するのが上手かつたりして、戦場以外でも面倒な戦闘を行う結果になつた。決闘なんて、もうこりこりだ。時代錯誤もいいところだよ。あいつはいろいろとこじらせていたんだらうなあ。」

水を飲んで、呼吸を整える語り手。

一挙手一投足を見逃すまいと、鵜の目鷹の目で『彼女』を見詰めるツクリモノたち。「砲撃戦の最中に、次の指示を出そうとして僚艦の首や半身が無いことに気付くことは日常茶飯事だった。初陣でなかなか引き金を引けなくて、引いたと思つたら仲間を撃つちまう奴もいた。誤射もまた日常茶飯事だった。そして、狙っていない筈の射撃ほどしばしば相手の命を素早く奪つた。」

「駆逐艦ばかりで出撃するのが、普通で当たり前だった。見回す限り、駆逐艦ばかりだったしな。他の艦種なんてなかなか見かけない、稀少な人材だった。戦艦級や空母級の敵がいても、提督たちの半分くらいは平然と新人駆逐艦の戦隊に交戦を命じた。命の価値なんて、無いも同然だった。だが、そんな命令を下した提督はあつという間に信用を失い、すぐに行方不明になるのが常だった。」

「軽巡洋艦ならば、誰であろうと着任を大歓迎された。あの狂乱めいた、着任に伴つたお祭り騒ぎを映像で見せたかつた程さ。それで、面倒見がよければ崇拜する奴まで続出した程だ。理解出来ないかも知れないが、当時のあいつらは大人気のアイドルみたいな感じだったよ。天龍も那珂もスーパーアイドル真つ青の人気だった。彼女らと同じ基地への配属が決まって、泣き出す駆逐艦さえいた。中の人が癖のあるおっさんと知つても、それは本当にせつない光景だった。」

「軽空母は格別の待遇が基本仕様だった。軽巡洋艦同様、面倒見がよければ圧倒的な人

氣を得られた。同じ戦隊にいた隼鷹なんて、ちやほやされまくっていた。あいつは呑兵衛だったが、いつもいい酒を呑んでいたよ。献上品だったのかねえ。航空戦力は我々にとつての虎の子だったからな。制空権を奪われつばなしにする訳にはいかんから、彼女たちの存在意義は大変重要だった。『本物』の正規空母が回される可能性は零だったし、提督たちは駆逐艦とそれ以外の艦種との扱いに天と地程の差を設けるのが普通だった。だが、曲者揃いの駆逐艦たちはあつさりそれを受け入れた。本来の艦娘がもしも一名でも配属されたらなにかしら違つたかもしれないが、おっさん駆逐艦が毎日何人も轟沈する戦線に正規兵が送られることは無かつた。『口減らし』だつたんだろう。」

「重巡洋艦は素人傭兵どもの中では最上等の艦娘として認識され、最上や足柄や青葉らの人気はあんたたちの想像を遥かに超える程のもんだつた。提督の命令を聞き流すような奴らも、重巡洋艦に命じられたら、嬉々として従つた。なんとも鬼気迫る風景だつたよ。たとえ、『彼女』が正規の艦娘にまるで歯が立たないと説明されても、駆逐艦たちの『信仰』は覆せなかつたと思う。それくらい、憧れだつたのさ。唯々諾々と従うくらいにな。彼女たちは間違いなく主力艦隊に配備され、そこに所属している駆逐艦たちは羨望の的だつた。」

「軽巡洋艦または軽空母のいる隊が危機に陥つた時、その一名を救援する作戦に於いて、四隊ほどの駆逐艦を失うことが当然のことだと考える提督は普通に何人もいた。また、

巡洋艦や空母のためなら何時でも沈めると豪語する馬鹿は何人もいて、実際、その通りになった。」

島風の端正な顔が歪む。

なにかを抑えるかのように。

「鉄底海峡解放戦後、銃後の平和地域では提督たちの戦略や現地艦娘たちの戦術を批難する向きもあるようだが、当時の生き残りの観点から言わせてもらうとお上品な参謀は泊地にも鎮守府にもいなかたし、補給線はしばしば寸断された。大本営はひつきりなしに督促の電報を打ってきたし、それに怯えて戦力の無駄遣いで無謀極まる作戦を立案する提督は何人もいた。サボる奴もいたが、よく痣（あざ）をこしらえていた。あんまり酷いとその内見なくなつたが、まあ、お察しの通りになにもかもが素人丸出しさ。屁理屈ばかり上手い奴がご高説を述べ、それを鵜呑みにした艦娘はことごとくあつさり海の底へ沈んでいった。失敗続きの提督は更迭される前に、大抵行方不明となつた。いつの間にか、情報漏れはいつものことになりつつあつた。深海棲艦側にあらゆる暗号が解読されていたのを知つたのは、本土に戻つてからのことだ。」

「俺が主にいたのは火消しの遊撃艦隊だつた。ほぼ毎日東奔西走していたよ。やれやれと寢床に入つた途端に出撃命令されることもしばしばだつた。宣伝用の張りぼて艦隊扱いされることもあつたが、あれこれうるさい奴には実力行使で存在を認めさせた。軽

巡洋艦や重巡洋艦、それと軽空母のいる隊だったから、打撃戦隊としてあちこちに行かされた。狂信的なまでに、僚艦たちは人氣があつたよ。あんたにはなかなか理解出来ないかも知れないが。俺自身は轟沈しかけたことなど何度もあつたし、率いた新兵隊が使い物にならなくて無様なまでに殆ど沈めてしまったことさえ何度もあつた。何人も隣の駆逐艦が沈んだ。朝は下手な笑い話をして周りを失笑させた陽気な奴が、昼前には轟沈していたこともあつた。哨戒任務の筈が遭遇戦になつて、装弾不良になつた砲に舌打ちしながら吹き飛ばされた奴もいた。装備した魚雷の誘爆で、下半身を丸ごと持つていかれた奴もいた。巡洋艦や空母を庇つて沈む奴もけっこういた。そういうことがあつた時、いつも僚艦たちは泣いていた。信任出来そうな新任艦ほど、勇敢ですぐに沈んだ。」

聴衆たちの表情は総じて青くなっている。

島風の頬は段々紅潮しているかのようだ。

彼女の影が揺らめき、なにかが蠢き廻る。

彫像のように動けなくなつてゆく正規兵。

「提督はよく死んだ。補充されてくるおっさん艦娘たちに混じつて何人も南方へ着任した。『日刊提督』と揶揄する仲間もいた。そして、なにがなんだかわからない内に空襲でくたばつたり、関係した艦娘が轟沈しておかしくなつたり、誰かに殺られたり、自分自

身でとどめをさしたりといろんな形であの世に逝っちまった。生き残れた提督は少数だったし、在任中の残虐行為や横領や汚職が見つかって逮捕された者もいる。たぶん、いろんな意味で実験場だったのさ、鉄底海峡は。あんたたちがキレイでいられる環境作りを、こちららが試行錯誤しながら作ったとも言えいいのかもな。知っていれば防げた、馬鹿馬鹿しい事故が幾つもあった。日常業務で、失われなくていい命が複数奪われた。『安全第一』なんて、理想論に過ぎなかった。敵の戦力がある程度削ぎ落とせたら万々歳だったのだろうよ、当時の大本営としては。」

「正規の教育を受けたもんなんて、艦娘にも、ましてや提督にもいなかった。なにもかもが手鎖付きの手探りだった。そんな無様な俺たちを尻目に、颯爽と現れた四大鎮守府の連中は最後の最後でおいしいところを平然とかっさらっていった。いや、あんたらは悪くない。それは知っている。知っているのと許せるのは別の話だが、気にしないでくれ。ただの生きた亡者の嘆きさ。しかしまあ、あれだけ戦力を充実させて万全の体勢で、過剰なまでの砲火を敵に浴びせられるなんてのは実に羨ましい限りだった。いつものちまちました豆鉄砲じゃない。戦艦級艦娘による苛烈な砲撃、空母級艦娘による猛烈な絨毯爆撃、水雷戦隊による鮮やかな一撃離脱の雷撃、と教科書通りの本当にキレイな戦闘だった。啞然としたもんさ。なんで今まで一度もこっちに来なかつたんだってね。血の気の多くて気概のある奴らが一度怒鳴り込みに行つたが、けちよんけ

ちよんに罵倒されて帰ってきてな。全員、悔し涙を流していたよ。それで降、俺たちは露払いか遠征か後方支援が基本任務になった。もうその頃にはこちららの戦力はガタガタのぼろぼろになって、まともな作戦が何度か出来たらいい方だった。輸出される牢人を鎖国政策で絶たれた、ルソンの侍衆みたいなもんさ。俺としては安堵した気持ちだった。無謀な突撃作戦を提案した阿呆提督と、それに乗っかるお馬鹿な生き残りたちが現れるまではな。あれはおそらく焦りのあまり、視野狭窄に陥っていたんだろなあ。当時の四大鎮守府の提督たちは、『掃除』の好機だと思つたのかも知れんね。杜撰(ずさん)な大攻勢計画に反対していた俺たちが横須賀の支援任務からようやく帰つてきた時に、おっさん艦娘たちによる最後の大規模な出撃が行われたのを初めて知つた。あんぼんたんな鎮守府泊地の仲間たちは、無理無茶無謀な戦闘でほぼ全滅。多大な犠牲の末に、キレイなキレイな正規の艦娘艦隊たちが敵本拠地を強襲して無事に海峡解放戦を完了させた。めでたしめでたしとこだ。俺たちが全貌を知つた時には、なにもかもが終わつていた。投入された内の一割に満たないおっさん艦娘だけが、鉄底海峡解放戦の生き残りさ。後はみんなおっちゃんじまつた。その後は身辺整理というか、書類作業に忙殺された。生き残れた提督で比較的良心的な奴らと組んで、膨大な死亡報告書の作成に取り掛かつたのさ。書類慣れしていそうな連中を何人も徴発した。何通書いたかなあ。微妙に内容を変えてな。地域差も一応考慮したが、宛先不明で遺品や死亡通知

書が戻ってくる事態なんて考える余裕は無かった。」

「皮肉なことに、最後の最後に正規の艦娘たちが来てから食事が滅法旨くなった。鳳翔間宮の味を知ったのは、彼女たちの作った飯を喰ってからだだった。とにかく喰えたらいいんだと言って怒ったのも、彼女たちが初めてだった。嗚呼、まともな奴らつてああいうのを言うんだなあつて、純情可憐で不器用なおっさんは感激したもんさ。なんせ、海千山千のおっさんに囲まれていたからな。最低野郎どもの吹きだまりだったのさ、あの基地とその周辺はな。今とは完全な別物だよ。」

「正規の艦娘たちは殆どがまともに見えた。下ネタを堂々と言う娘はごく一部にしかいなかった。見えるところでえげつない振る舞いをする娘はいなかったし、誇りは高そうに見えた。それと、あまりの損耗率の低さに驚いたもんさ。ニセモノの俺たちはホンモノに比べ、なんて防御力が弱っちいんだと改めて自覚させられたよ。」

「憲兵隊が基地へ乗り込んできた時に焦った奴は提督艦娘含めてけっこういた。なんせ、不正なことに関わっていない奴の方が珍しいくらいだったからな。俺は不正に興味など無かったが、他人のボールペンを勝手に拝借して自分自身のモノにすることをなんとも思わない奴は洋の東西関係なく存在するし、謝るならまだしも、知らぬ顔の半兵衛を決め込む奴も割りという。そんな感覚で食料やら嗜好品やらを勝手に持ち出す奴は後を絶たなかった。盗んでいるという自覚さえ無かったのかもな。後、指摘されると逆

ギレする奴もいた。『盗人猛々しい』は本当にそうだ。やったのにやつてない顔をするなんて、そいつにとつてはなんでもないことなのだろう。盗難行為をネットで自慢する馬鹿さえいるしな。で、そういった奴が常識とか良識とかをしたり顔で語り、黒を白と言いくるめるのさ。散々怒鳴りつけた後でほんの少しやさしくすれば、大抵の奴がころりと落ちる。洗脳なんて存外簡単なもんさ。相手の思考力を徹底的に奪つちまえばいいんだから。『あの人、意外とやさしいところもあるのよ。』なんて風に相手から言わせたら勝ちだな。だが、暴力を日常的に振るう奴がまともなもんか。暴力的な奴は顔を見ればある程度わかるが、そういうのに限つて妙に小器用だったりする。おっさん艦娘でも提督でもそういった輩は存在したし、奴らは実に厄介だった。口車の達者が揃つていたからな。あれは見事な話芸だったよ、確かに。ころりと騙されてコロツと死ぬ艦娘や提督もいた程だ。隠蔽の上手いのが基本仕様だったけれども、そんな勘定の上手いもんたちも、一切計算しない奴らには流石に勝てなかつた。」

「モラル（倫理）もモラル（士気）も最低な奴が基地にはごろごろいた。皮肉屋もあちこちにいたし、悲観論者や厭世家もそこかしこにいた。『厭世家の遠征屋』なんて呼ばれる奴もいて、当人はかなり嫌がつていたが周りは洒落た呼び名だと信じていた。あそこは地獄の一丁目だったが、妙に懐かしく感じる時もある。ただの感傷に過ぎないのだからうけど、たまに夢を見ることもある。出撃しなきゃいけないのに装備が錆だらけだった

り、飯を早く喰わなきやいけないのに何故かその時に限って献立が満漢全席しか無かつたりしてな。とつくに死んだ奴らがけらけら笑っているのを見て、嗚呼、これは夢なんだと知るのさ。」

ここで島風はニヤリと笑った。

「敵の指揮官は、味方の十把一絡げの指揮官に比べて遙かに有能で勇敢で機転が効いて柔軟性に富んでいたと思う。ごり押しの物量作戦でなんとか勝利を収めたが、戦略戦術双方で完敗していたし、情報や補給の重要性は敵の方がきちんとしていた。何故勝てたのか未だによくわからない作戦が幾つもあるし、生き残りの少なさから詳細な検証は困難だろう。まったく、天晴れな敵将だった。うちにいる戦艦棲姫と同型の深海棲艦だったらしいが、交戦する破目に陥らなくて幸いだった。彼女の副官や参謀や直属部隊も極めて優秀だったのだろう。あんな連中とは二度と戦いたくないな。これで、俺が関わった鉄底海峡解放戦の話は終わりだ。ご静聴に感謝する。」

C C X X X V I I I : 戦争は男の顔をしていない

どうも、恐縮です。

広報課の青葉です。

鉄底海峡解放戦で生き残られた艦娘の方々や司令官たちからお話を伺ったのですが、その様子を少しまとめてみました。

お聴きください。

「機雷除去をしていた時のことだけだね、ドカーンって音がして振り向いたら僚艦がいなかったの。とても困ったわ。仕事が二倍になって、あの時はとても大変だったのよ。」
「味方がどんどん沈んでゆく中、必死で敵へ斧を叩きつけました。刃は既にぼろぼろでしたが、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も叩きつけました。不意に後ろから『もう、いいよ。』と言われました。振り向くと、誰もいませんでした。そして殺り直そうと向きを変えたら、深海棲艦が虚ろな目で私を見ながら沈んでゆくところでした。私は思わず、ホッとしました。これでようやく帰投出来るからです。私は独り、基地へ

戻りました。」

「戦利品？ それは夫よ。彼、司令官をしていたの。」

「司令官がね、さみしいさみしいって泣いていたの。女の子に触れなくてさみしいってね。覚悟を決めようと思つて一旦別れて、再び工廠裏に行ったらどこにもいなかったのよ。酷いと思わない？」

「南方で戦い始めた頃は新しい駆逐艦が着任する度にいろいろ話を聞いたけど、その内止めたの。だって、初陣で死ぬ子が殆どだったから。」

「工廠前はよく臨時の野戦病院になった。どこかの小学校で使われていた古いテントに、下手な十字架が記されていた。いたずらする仲間がいて、それはいつの間にか島津の家紋みたいになっていた。負傷者で、泣いたり喚いたりうめき声を出せる仲間はまだまだよかつた。既に事切れている仲間になかなか気づかないこともよくあつた。」

『お前らなんて、幾らでも補充出来るんだ！』と怒鳴られ、訳がわからないまま艀装をなんとか装備し、ばらばらなまま陣形も調えないで、駆逐艦たちは戦場へ送り込まれました。そして、殆どの子は帰投出来ませんでした。」

「今日入った駆逐艦が夕方にはいなくなるなんて、当たり前でした。仲のよくなつた駆逐艦がいつの間にかいなくなるのが普通でした。何度も何度も心が潰れそうになりました。今でも、駆逐艦たちは私の夢の中に出てきます。」

「あれは何度目だったか、補給線が絶たれた時のことでした。腹が減ったなあと思って久々に基地の裏手の畑に行ったら、その隅っこで仲間たちがなにかを一心不乱に貪（むさぼ）っていたんです。骨を割る音がして、啜（すす）るような音も聞こえてきました。私は即座に回れ右して、その場からすぐに撤退しました。」

「その深海棲艦は泣いていました。私も泣きながら、バールを振り下ろしました。」

「昼も夜も関係なく、怯えながら引き金を引いたり斧や戦棍（メイス）やバールを振るったりしたわ。生き残るためだったもの。『ここ』に帰ってきてからと同じ。同じなのよ。だから、生き残れて『ここ』にいられるのはとっても安心感があるわ。今は本営に情状酌量でお願いしているの。」

「貴女、死にたくない死にたくないって鼻水を垂らしながら泣き叫ぶ相手にとどめを刺せる？ 重傷で連れ帰ることの出来ない仲間を、一撃でほふる殺り方に馴れてゆくことがどんなに辛いかわかる？ わからない癖に、わかったような顔をしないで。敵しか殺ったことの無い奴に、偉そうに説教される覚えなんてこれっぽっちもないわ。」

「先任の提督は、しばしば自分にこう言ってくれました。『艦娘に情をかけるな。あれらの中身は男だし、単なる兵器だ。モノだよ、モノ。』と。本当に面倒見のいい方でした。生き残られていたら、社会に大きく貢献出来ると信じられる方でした。」

「苦しみをやわらげるための薬品は、私たちを薬物依存性に変える成分が多く含まれて

いた。風邪用シロップを毎日飲む仲間もいた。ジュースとパンで酒もどきを作るなんてよくあることに過ぎなかつた。率先してそういうことをやる提督さえいた。」

「口数が減つて同じようなことしか喋らなくなつたら、それは危険信号だつた。そんな仲間は大概無謀な任務を淡々とこなし、何回目かでほぼ確実に沈んだ。」

「誰も彼も、心も体も強靱（きょうじん）でなかつた。みんな、なにかに震えたり怯えたりしながら戦つていた。ソレに負けた時が、大体は死に時だつた。司令官も仲間も関係なく。」

「あれは実に見事な待ち伏せでした。突然爆撃を受けて、半数の駆逐艦が瞬時に轟沈しました。血やオイルや皮膚の一部や艤装の欠片（かけら）が、曇天の暗い波間に浮かんでいました。ぼんやりしたり泣いたり喚いたり怯えたりする駆逐艦たちを叱咤激励しながら、私は対空砲火を敵機に浴びせかけました。そして、命からがらなんとか逃げきました。それが私の初陣です。」

「隣にいた司令官が目を覚ました時、こう言つたの。お前は火薬と油のにおいしかしないなつて。当然、そんな人とはすぐに別れたわ。彼、何人も取つ替え引つ替えした挙げ句、工廠裏へ呼び出されて酷い目に遇つたみたい。まあ、そんなことはどうでもいいわ。要領がやたらにいい人だつたから、今でもどこかで女の子を引つかけているんじゃないかしら？ 今度はホンモノを。」

「確かに中身はおっさんだけど、見た目は中学生くらいの子たちが大砲を撃つたり魚雷を発射したりするんだ。そりゃあ、最初は興奮したもんさ。こいつらは、きつとやってくれるに違いないってね。その気持ちは戦績と同じく日毎に下方修正されて、一カ月後には平然と艦娘たちを怒鳴れるような心境に至っていたよ。やつちやいけない、言っちゃいけない、なんて感情はどんどん麻痺していった。こちらに戻ってから、駅で怒鳴った相手に殴られて、嗚呼帰国したんだなあって初めて理解出来たのさ。刺されなくてよかつたよ。痴話喧嘩で刺された同僚もいたしな。えっ? どつちか? どつちもだ。」

「艦娘になるとね、支度金を貰えたんだ。その金で買った鞆一杯分の菓子を持って、おっかなびつくりで基地へ着任したんだ。似たことをする仲間は意外と多かつた。人間だった時は甘いもんなって苦手だったのに、艦娘になつてからは好物になつたんだ。今でも好きだよ。ひとつどうだい?」

「基地の近くに黄色い花が咲いていたんだ。えっ? なんの花か? そんなの知らないよ。知らないけど、髪に飾つたんだ。で、みんなに見せびらかした。キレイだろうって。中身を考えたら気持ち悪くなる筈だけど、誰も違和感を覚えなかつた。そしてわいわいやつていたら司令官に叱られて、三日間の艦装磨き当番を命じられた。」

「あたしたちはなんちゃって軍隊だつたから、軍隊ごつこのような集まりだつた。軍の

しきたりなんて、誰もよくわからなかった。提督なんてころいなくなるのが当たり前だったから、みんな当たり障りの無いように受け答えることにしていた。『スケコマシ』とか『自称ハンサム』とか『蒸気機関車』とか『ファッティ』とか『アル中』とか『たこちゆう』とか『スカルマン』とか『ぼんぼこ』とか、いろんなあだ名を付けていたもんさ。名前を知つても、すぐ消えたりしていたからな。朝着任したと思つたら、夕方には重態だったのもいたな。えっ？ 理由？ 知らねえよ。そのまま翌朝には事切れちまつたんだから。そんなの当たり前だったから、なんでもないことだったのさ。ところであんた、飯をおごつてくれよ。もう、一週間もオケラなんだ。そうだ、あたしに貸しなよ。来週までに、倍にしとくからさ。な、な、いいだろ。……なんでだよ。なんで、貸してくれないんだよ！ 返すつて言つてんだろ。ほら、出せよ。持つてんだろ。おい、なんで逃げるんだ。待て！ 待て！ ……待つてくれよ。なんで置いてくんだよ。あたしを独りにしないでよ。もうやだよ。こんなことになるんだつたら、最後の大攻勢に参加すりやよかつた。そうしたら、こんな生き恥さらさずに済んだのにさ。なあ、青葉。知つてるかい？ あんたと同じ姿の仲間がいてね、そりやあもう大人気だった。あたしも好きだった。そんなあんたに酷いことを言つちまつた。すまない。え？ いいのかい？ だつて、あたしは………そうかい、ありがとう。じゃあ、行こうか。いい店を知つているんだ。」

CCXXXIX・忍殺駆逐艦秘砲帖くチンチン・カモカモに至る道

シーサイドタウン。

ある温かい日の、晴れたアフタヌーン。

キキキツとサウンド弾けるブレーキ音。

ゴウランガ!

信じられない!

シヨツギョ・ムツジヨでマツポーめいた、このセカイ。

幼女を守ろうとしたオトナシ系オツサンに迫る、左ハンドルオーシユーカー。

ナムアミダブツ!

オツサンは、アナザーワールドヘテンセイテンイしてしまうのか?

またはハーレムドリームなセカンドライフを過ごしてしまうのか?

しかし!

「スーパーイナツマキーツク！ なのです！」

ハイパープリティーな掛け声と共に繰り出された蹴撃の一撃が、悪しきジャーマンカーのエンジンを容赦なくぶち抜く！

シャーマンタンクなアーマーより薄いのがから、そんなモノをぶち抜くなんて簡単なお仕事。

颯爽と現れる駆逐艦二名。

それは大人気のろくちく。

「ドーモ、コーキユーカーのオジサン。いなづまなのです。」

「ドーモ、コーキユーカーのオジサン。いかづちよ。かみなりじゃないわ。そこんところロシク。」

「アイエエエ！ カンムス!? なんて、カンムス!?」

「カイシヤクしてあげるわ！ さあ、ハイクを詠みなさい！」

「悪は滅びるべきなのです！」

「アバババ！」

SAN値がごりごり削られてゆく、権威主義者でバブリーなコーキユーカー男。

ジーザス！

既に逃げ場は無い。

「この暗黒運転行為。許せないのです。」

「そうね、この錨に怒りを込めましょ。」

「ナンデ！ ナンデ！ アクセルを踏み過ぎただけなのに！」

「インガオホー！ そこに慈悲は無い。」

「許してください！ 私には愛する青年たちも養っている少年たちもいるのです！」

「「ギルテイ！」」

「男の子が好きで、なにが悪い！」

「論点はそこじゃないのですよ。」

「取り敢えずイツチャいなさい！」

「私が死んだら悲しむ者が多い！」

「欺瞞なのです！」

「嘘だわっ！」

「助けてください！ そ、そうだ！ 金を出そう！ 幾ら欲しい？」

「今！ 必殺の！ ろくちくアタック！」

「ギャアアアッ！」

悪のコーキョーカー男は倒された。

エクセレントな展開。

カムムスはジャステイスのために忍殺する、このマッポーワールドのガーディアン。「助けていただきまして、ありがとうございます。ございました。」

礼を言うオツサン。

やさぐれた感じもあるアラフオーアングル。

幼女は手を振りながら去った。

尊い。

デイーブ・パープルなデイーブ・フリートが暴れまわる、デンジャラスゾーンなキルゾーン。

セイフティエリアに変えるべく、日夜カムムスたちはバトリングするのだ。

カムムスつばいドーターも、カムムスみたいなガールスカウトも、カムムス風の服を着たモストデンジャラスなオツサンも、皆等しく美しく散る。

ローズのように美しく散る。

それこそがカムムスの定め。

死してシカバネ拾う者なし。

オツサンの人生相談に乗っていたカムムスたちは、ピタリと寄り添っている。

決してランナウエイさせまいとでもシンキングしているかの如く。

そして、彼女たちはオトナシ系オツサンに言った。

『環境に文句を言う奴は一生晴れ舞台が来ない』、そう古事記にも書かれているわ。』

『平安時代の哲学剣士、ミヤモト・マサシもそういうことを言っているのです。』

『私になにか出来ることはあるでしょうか?』

『私たちと、チンチン・カモカモ関係になって欲しいのです。』

『そうね、チンチン・カモカモ関係になって、司令官になってくれたらそれだけでいいわ。』

『司令官?』

『大丈夫ですよ、司令官さん。私たちがいろいろ教えますから。』

『そうよ、暁や響が待っているから、さあ一緒に逝きましょう。』

カラムスめいた者たちに連れられ、中年男はその場を去った。

娘たちの行く先には廃屋しか無い。

うふふあははと楽しそうな娘たち。

やがて三つの影はひとつになった。

CCXL：こいほの

「愉悦に満ちた小説を読みたい。」

それが、言峰書店を起業した言峰綺礼氏の願いだったらしい。

この先が見えにくい社会に於いて彼の書店で出版した作品はいずれも一万の部数をほぼ確実に売り上げ、中にはアニメーション化された作品も何点が存在する。

設定がしっかりしていて、中世ヨーロッパにこだわっているとは限らない作品が多いことを特徴とする。

一見流行りでないものを強く支持し、それを人気作へと仕立てるのが言峰氏の得意とする方策。

『愉悦社長』が彼のあだ名だ。

兵庫県冬木市に住まいを有する間桐（まとう）一家が函館を訪れたのは、天候がころころ変わる五月のやや寒い日のことだった。

間桐家当主の雁夜（かりや）さんは私と同じく、『小説家になっちゃったりして』で作品を連載している小説家だ。

既に何作か出版されていて、熱烈な女性読者が多いのを特徴としている。彼の作品でのヒロインは常に一人で、しかも名前は必ず『アオイ』系だ。

葵

アオイ

葵衣

蒼依

その上、主人公とヒロインは絶対幼なじみで昔から宿縁で結ばれている設定。

嗚呼、黄金様式。

それが若い世代にウケているのだとか。

私にはよくわからないな。

『恋する娘は勇者隊を追放された中年男と共に、開拓村にてスローライフします』が今度映画化されるとか。

東北で主にロケーションを行うそうだ。

洋館の残る場所でも撮影するらしく、函館も候補地のひとつだそうだ。

間桐氏の妻自慢というか崇拜は約一時間に及び、流石にうんざりした。

間桐一家が観光地を堪能した翌々日の夜、私は言峰社長と夕食に臨んだ。場所はちよいと通っばい函館市内の店。

非常に赤い激辛麻婆豆腐を出す中華料理店で、そこが彼の指定先だった。辛い辛いとっても辛い豆腐料理を食べながら、新作の打ち合わせをする。

『恋は雨に打たれた闇夜のように』、略して『こいやみ』が五月末から全国各地で上映されるという。

外食産業が展開する、郊外型飲食店での恋物語だ。

雇われ店長の冴えない中年男に、臨時働きの女子高校生が惚れる話。

うくん、そんな話ってあり得るかなあ？

おっさん的にはなんともピンとこない。

だが、現実には人気作品である。

不思議なことではあるけれど。

一定の需要はあるみたいだな。

だからといって、中年男性陣へ急速に春が訪れる訳でもない。

世の中、お話みたいな展開なんてそうそうあり得ないからな。

原作の漫画はかなり売れているそうで、外食産業がかなり熱い眼差しを向けているの

だとか。

うちの駆逐艦たちには大人気で、『こいやみ』ごっこにたまに付き合わされる。

どさくさ紛れにおでこや頬つぺたにチューをしてこようとするので、阻止するのが意外と大変だ。

教官たちやメリケン艦たちもやってみたいと言っていたが、たぶん冗談だろう。

航空戦艦とイタリア戦艦がエイッと抱きついた時に身動きが取れなくて、あの時はずも困った。

ああいうのは止めて欲しい。

この間は大淀がトリコロールカラーなバールのようなモノを持つてうろろうしていたけれども、あれはなんだったのだろう？

大本营の広報が函館でのごっこ遊びに興味を示し、マスターオータムクラウドが脚本担当した小噺（こばなし）を撮影されたこともある。

吹雪や島風や叢雲や曙や霞や早霜などが体当たり演技を行い、物理的に彼女たちからぶちかまされた私は中破して一週間ほど病室から出られなくなってしまうた。

常に複数の艦娘が室内に詰めていたし、何処から来たのかよくわからない高速戦艦姉妹たちがお茶会を毎日開いてくれた。

比叡の焼いたスコーンは旨かったが、どこの所属なのだろう？

戦艦棲姫や深海棲艦勢がめっちゃあたふたしていて、とても印象的だった。

「ゼロクエバ、ゲンキニナル！」って誰が教えた？

「ズイウン、ズイウンクエ、テイトク！」と口に押し込んではいけないよ。

我が鎮守府も意外と謎が多い。

「函館が急襲されたと勘違いした大湊（おおみなと）勢が飛び込んできて、迷惑をかけたしまった。

いやはや。

間桐氏たちが函館へ来る前に治って、本当によかった。

「くくく。愉悦ですよ、愉悦。物語の基幹は愉悦であるべきなのですよ。」

大好物の激辛麻婆豆腐をむしゃむしゃ食べている言峰社長は、上機嫌にさえ見える。

私が連載を始めた、『恋は揺らめく炎のように』の版權を得たからかもしれない。

異世界に集団召喚された地球人たち。

その中の冴えない中年男を慕う、三人の女子小学生。

甘酸っぱい恋以前の物語が、何故か大受けしている。

うちの鎮守府では『こいほの』と略され、駆逐艦たちから『こいほの』ごっこを時折
せがまれる。

無邪気に抱きついてくる駆逐艦たち。

可愛いものだ。

打ち合わせは順調に進み、絵師の手配が済み次第書籍化へ順次着手する模様だ。

打ち合わせは順調に済み、言峰社長は函館市内の北方民族資料館へ行ったり八雲町の郷土資料館へ行ったりとアイヌの足跡を辿る予定だとか。

精力的な人だ。

ドイチェラント式の本格的な洋菓子店が、比較的鎮守府の近くに出来たという。

巴旦杏（ケルシー）のケーキやバウムクーヘンやビーネンシュティツヒなどのお菓子が店内で食べられるそうだ。

玉葱のパイも旨いという。

赤毛ののっぽさんと金髪碧眼の奥さんが経営しているとかで、若い夫婦の熱愛ぶりも堪能出来るとか。

今度、うちの艦娘たち用に発注してみようか。

書類仕事をしながら室内の第一秘書艦たる大淀及び第二第三第四第五秘書艦たちに話を振ってみたら、何故か全員ガタツと椅子から立ち上がった。

どうやってやるのかわからないが、大淀の眼鏡がピカツと光る。

「それで提督、どなたと食べに行かれるんですか？」
それは、少し低めの声だった。

CCXLI：なにも知らないことを、みんなは知らない

鴨皮書店の株価が急落している。

近來にないアニメーションの救世主『けものフレンチ・キス』。

通称、『けもキス』。

視聴率や動物園などのコラボレーションがことごとく好調で、不景氣にあえいでいた地方自治体からも喜ばれていた。

そこへ目を付けたのが、極悪非道で意識高い系で舶来礼讃で国産品を矢鱈批判する、スノツブで効率中毒で自分自身の考えに疑いを持たない自信家系幹部だった。

功績ある監督へ冤罪をかぶせ、厭らしい脅迫をネチネチと行って無理矢理降板させた。

そして、自身の息がかかったアニメーション制作会社と声優事務所で人員を固め、派手な宣伝をば行つた。

それはまさに強奪行為であり、国際的には正しいのかもしれないが、人間性に欠ける

盜賊的思考の産物だ。

幹部は取らぬ狸の皮算用をしていた。

社内派閥間抗争は会社の力を削ぐ愚かな行為だが、昔から人を蹴落とすのが大好きな彼にとっては日常的なことに過ぎない。

鴨皮が今一つ大きくなれない理由は其処にあるのだが、お偉いさんたちは政治ごっこに夢中だ。

意見すれば即左遷。

そんな雰囲気の中で勇氣ある人間を期待するのは難しい。

この不景気なご時世に於いて、椅子にしがみつくは当然。

自浄力の無いまま、鴨皮書店は負の連鎖に囚われている。

『おふねアニメーション』で失敗したり、多くの漫画家たちの恨みを買っている状況。

元アニメーション雑誌編集長で現社長の猪上氏が、必死の勢いで火消しに走り回った。

監督に問題があつた。

監督がいけないんだ。

そうのたまひ続けて。

『けもキス』の世界を楽しんできたファンたちは激怒した。

必ずや、邪智暴虐の鴨皮書店に鉄槌を下してみせようぞと。

ファンたちには社内政治がわからぬ。

ファンたちは純粹に『けもキス』を愛している。

主題歌を何度も何度も繰り返して聴き、作品内の羊や獣たちと妄想内で遊んで暮らしてきた。

けれども、邪悪に対しては人一倍敏感な体質だった。

そして。

アニメーションの業界関係者たちとファンたちが悔しい思いを共有する中、『けもキス』の二期が始まった。

蓋を開けて、幹部は驚愕した。

『けもキス』の二期の視聴率が酷すぎた。

一話も二話も、視聴率が一パーセントを大きく下回っている。

このままでは、強引に進めてきた幹部の進退さえ問われる事態に陥るだろう。

彼は真つ青になった。

そもそもトラブルを知った放送局が何局も放映を渋ったために、放映網が半減していた。

宣伝は派手に行つたが、その効果は殆ど表れていないかに見える。惨敗だった。

ネットでは批判の嵐が止まない。

北海道、大阪、東京の三動物園の公式サイトで批判されたのも痛かった。

そこへ某週刊誌が大型砲をぶっぱなした。

幹部と女優の密会を写真付きで暴露した。

売り出し中のその若手女優は、あちこちの幹部や社長へ躊躇なく枕営業するので同性には大変嫌われている。

異性からは、棒読み演技の案山子（かかし）女優の癖に漫画実写化作品主役が多いと滅茶苦茶恨まれていた。

炎上は更に酷くなって鴨皮書店代表取締役は公式に謝罪し、公明厳正な対応に努める旨を発表した。

が、これを素直に受け止めるのは鴨皮の暗部を知らない者だけだろう。いともたやすくえげつない行為を行えるのが、鴨皮書店の本領なのだから。

幹部は逃亡先の北海道稚内市で怒れる道民ファンから散々罵倒されて錯乱し、更に逃げ出した先の函館中央病院へ入院する羽目に陥った。

函館で静かに怒り狂う女がいる。

彼女は眼鏡を光らせ、標的を確認した。

人ではない艦娘。

だが、アニメーションを愛する心は人と同じであった。

艦娘は人間がわからぬ。

だが、熱い心はわかる。

故に、悪を討たなくてはならぬ。

彼女は集まった同志と共に討ち入りを決行しようとした。

愛用の頑丈なボールのようなものをぎゅつと握り締める。

艦娘の力にも耐えられる、それは日本の技術力の結晶だ。

敵は函館中央病院にあり！

いざ、聖戦を！

ジハード発動！

そこへ、提督が現れた。

「……あの、皆さん、何故新撰組の恰好をしているんですか？」

「え、ええと、そのですね。」

「ああ、隠し芸大会の準備ですか。」

「ええ、まあ、そんなところです。」

「今晚はハンバーグを作りますよ。」

提督手作りのハンバーグ。

帝国ホテルの古典的レシピを使った品で、絶品ではないが艦娘たちの心を揺るがすには充分な品だった。

本州の猪とエゾシカの挽き肉仕様な、ジビエの風味たっぷり系料理。

これは食わずにはいられまいて。

即時に討ち入りは中止となった。

彼女たちはその夜、提督手製のハンバーグを充分堪能したのだった。

幹部は提督のお陰で命拾いした。

双方共、なにも知らないままに。

C C X L II : とある泊地跡地にて

戦艦棲姫の朝は早い。

厨房に立つ彼女は凛々しい。

すっかり煤払いされた場所。

ぴかぴかに磨かれた調理場。

包丁を振るう音が聞こえる。

鍋の中からのにおい。

ご飯の炊けるにおい。

おみおつけのにおい。

魚の焼けゆくににおい。

彼女の着る服は肌の色に近い。

家事を執り行うための戦装束。

洗いざらしの所々染みある服。

三角巾を頭に巻いた割烹着姿。それはまるでお母さんの如く。皆をやさしく厳しくまとめる。皆の世話を焼く、しつかり者。まごうことなきオカンだった。とどめに玉子焼きを作り出す。そのおいしそうなにおい。それを嗅いで起きぬ者は無し。

離島棲姫はばりばり頭を掻きながら、食卓に座る。他に戦艦級、重巡洋艦級の仲間たちが座っていた。

すつかり餌付けされている。

ここは破棄された泊地跡地。

未だ奪還の目処が立たない。

大本営が手を出しきれぬ地。

南の島のハメハメハな土地。

ここにいた艦娘たちはどうやら急いで脱出したらしく、処分されなかったために生活

物資は充足していた。

ここへ最初によつて来たのは離島棲姫である。

彼女は大変のんびりした気質の持ち主だった。

独り、ひっそりのんびりと暮らす予定だった。

港湾棲姫などのように、戦闘を好まない故に。

そこへ転がりこんできたのが、各海域を転戦して傷だらけになった深海棲艦たちだ。

彼女たちは厭戦気分にはさえないでいて、戦争を希求して止まないのが深海棲艦という印象さえ薄れさせる程だった。

飽くなき闘争心に溢れた戦鬼たちが、大本営並びに四大鎮守府に所属する提督たちの喧伝する深海棲艦たちの様相。

しかしながら、島の彼女たちは穏やかな表情をしていた。

それは、函館に自称軟禁されている深海棲艦たちの如く。

まるで、普通の人間が普通に生活している様にさえ思える程の日常生活感溢れる姿を彼女たちは醸し出している。

少なくとも、人類の敵には見え難い。

朝食が出来上がった。

こいつら温かい飯を喰うのかよ、と函館の深海棲艦さえ知らない提督や艦娘たちならば目を剥くかも知れないが、島の彼女たちは平然と炊きたての白いご飯をむしやむしや食べて玉葱と馬鈴薯のおみおつけを啜った。

焼き魚をほぐした後には口中へ誘い込み、そして然る後に撃滅。

豊かな海の幸に思わずにつこり。

ご飯に丸美屋のふりかけをかける者さえいる。

普通の人間の女性が朝食を堪能するかの如く。

戦艦棲姫が毎日掻き混ぜている会心の糠漬けをぼりぼり食べる様子に、激戦を経てきた歴戦の戦士的な雰囲気は感じられない。

玉子焼きを食べて目を細めたり、うっとりする姿。

おいしいものを食べて、おいしいと意思表示する。

人類の敵対者と言える姿はそこに存在しなかった。

食後は緑茶。

上質のお茶。

この泊地の提督はどうやら口が奢っていたようで、なかなかよい質の物資が溜め込まれていた。

彼らはこれらを破棄したのだ。

勿体ない。実に勿体なかとね。

ならば我らが使つても委細問題あるまい。

そういう理屈で、彼女たちは積極的に物資の消費に励んでいる。

食後は会議。

今後に向けての方策を練るため。

弛緩した空気の中で現状維持の声が聞こえる。

姫級鬼級と呼ばれる他の深海棲艦ならばこの有り様を見て、怒髪天を突く勢いで怒鳴り付けるやも知れぬ。

しかし、ここにそういった者は一名もない。

ある意味、彼女たちは敵前逃亡した脱走兵だ。

もしどこかの艦隊に拾われても、尖兵として酷使され磨り潰されるのがオチだろう。

弾除けくらい存在と認識されて。

ならば備中鍬で田畑を耕し、島に生息する動物や鳥を時折狩り、魚を釣つて暮らせばよいのではないか。

それはある種、自己存在の否定に繋がる考え方に思えた。

だが、特に物欲なく日々を穏やかに暮らせたらいいかもと考え始めた彼女たちにとつ

ては自然の帰結だったのかも知れない。

離島棲姫は空を見上げる。

遙かな上空には、偵察機。

その機体の目と己を同調させる。

見渡す限り、周囲の海域にはなにも航海していない。

敵も、味方さえも。

海は凪ぎ、穏やか。

こんな日々が続けば、と思い始めて彼女は苦笑する。

やれやれ、なんだかいつの間にか人間ほくなつたわ。

こんな私たちを受け入れてくれる人間がもしもいたなら、と夢想しかける。

あり得ないわねと彼女は残された物資の中から回収した、光の円盤が入った樹脂製容器を見つめた。

今夜はこれを見ようかしら。

アニメーション映画の傑作。

どうも大人気の作品らしい。

日本人ならば誰もが知っているようだ。

何度も何度も繰り返して再生されただろう映像作品を収録した円盤の裏側は、スケートリンクのように傷だらけだった。

少しウキウキしながら、彼女は釣りをしようとして棧橋（さんばし）へ向かう。

使い込まれた釣竿と釣り道具持ち。

修繕痕が残る、素朴な古い橋へと。

今日もいい天気になりそうだわ、と思いつつ。

CCXLIII：みりめし試食会

「ご主人様、餛飩（うどん）や蕎麦には乾麺がありますよね。」

「唐突だな、おい。」

「外国の人がそれらをパキッと折って茹でたら、どう思われますか？」

「まあ、そういうやり方もあんだろ。」

「そのやり方を日本人たちが怒っていたら、どう思われますか？」

「ま、怒る奴もいるかもしれないな。」

「わざわざ折りがあって、と激怒する人が何人もいたらどう思われますか？」

「ほれ、なんだつけ、元々短い麺があるだろ、それを勧めりゃいいんじゃないか？」

「そうですよね、わざわざ折って食べる必要なんて無いんですよ。」

「今日はスパゲティなのか？」

「ええ、イタリヤの人たちからすると、なんでケチャップを使ってナポリの名まで使っているんだと眉をひそめられているアレです。」

「アレ、旨いよな。ハンバーグとかツナとかフライとか入れている巻き寿司を、ヨコス

カ・ロールっていうようなもんかね。」

「アボカドも入れたら更に旨いですよ。」

「で、とどめにマヨネーズをかけると。」

「普通においしいそうですね。機会があったら作ってみましょう。」

「()は譲れません。」

きりつとした表情で宣言する加賀。

それを彼女以外の艦娘と提督がえええ、という顔で見詰める。

彼女を膝の上に載せているのは、函館の提督。

彼の趣味ではないらしい。

周囲にいるのは何名もの鳳翔間宮、食通と名高い横須賀第一鎮守府の赤城、大本営で教官職にあるはずい……もとい瑞鶴、翔鶴のようなもの、金髪碧眼ツインテールマン
ト二挺拳銃絶対領域●宮ボイスと属性てんこ盛りなメリケン戦艦のネヴァダ、国産なん
ちやってイタリア戦艦のローマ、同じく国産なんちやってフランス戦艦のリシユ
リユ、そして食いしん坊万歳な函館鎮守府の艦娘たちなどだ。

広報課の課員は当たり前のように撮影しまくっている。

フィルム式写真機、ハミリ撮影機、ベータテープ式ビデオカメラ、デジタルなんちゃ

らとなんでもありで撮影に臨んでいた。

「先輩、流石にそれは引きます。」

おずおずと先輩の加賀に言う後輩の瑞鶴。

あの凜々しくて面倒見がよくて、颯爽とした元教官の姿はここに無い。

「上々だわ。」

ドングリクツキーを食べながら、彼女は幸せそうに微笑む。

えええ、と困惑する周囲の艦娘たち。

「いいですねえ、その表情。」

パチパチと古い西ドイツ製の写真機でどんどん撮影してゆく、大本営広報課所属の青葉。

ノリノリだ。

堅パンとか乾パンとか、全国各地から取り寄せた固い系食べ物を食べる面々。

以前似たようなことをしたが、四国は香川県の堅パンが特に固かったようだ。

粉々に砕いたり、お茶に浸けて食べる者さえいる。

自衛隊からも開発研究を頼まれているし、被災者向けの高栄養食品の開発も必要だ。

長期間保存可能な間宮羊羹、仮称『まみようかん』の開発も着々と進んでいる。

小倉、本練、抹茶の三種を鋭意開発中だ。

これさえ食べれば、もうなにも怖くない。

クラッカーも開発中だ。

乾パンでええんちやうかとの意見もあるが、国際規格に合わせることも大切だろう。

独自性と協調性との天秤の均衡は難しい。

ドングリ入りクラッカーの評判も悪くなかった。

問題があるとするならば、ドングリを如何に安定して収穫するかどうかだろう。

縄文式ドングリクッキーを食べながら、真剣に討議する面々なのである。

在日米軍経由で入手した戦闘糧食を皆が口にする。

M R E !

微妙な顔をする面々。

ちんもくのこうかはずつだいだ!

一方、ネヴァダや翔鶴のようなものは普通に食べている。

「ええと。」

意を決したかのように喋りだす赤城。

「その、このまんまるいチョコレートはおいしいですね。それと、このちよつとばかり甘過ぎるシリアルバーも悪くはないと思います。」

「昔のものより、ずつといい味よ。」

可愛い声でそうのたまうネヴァダ。

本人的には自国の食べ物に対する弁護のつもりであつたが、それは皮肉にも余計に引かせる結果となつてしまった。

製造されてからかなりの年数が経過しており、今は友軍でもあることから、評価は不能との政治的判断が為された。

個人輸入雑貨商の美濃柱氏經由で入手された、フランス軍及びイタリア軍並びにドイツ軍の戦闘糧食を食べる面々。

会話が広がる。

保存性は兎も角味を追求しまくるフランス軍。

長年の旨いもの追求が安定感あるイタリア軍。

肉肉肉ともかくにも肉だろがのドイツ軍。

「どれもおいしく食べられますね。」

赤城の舌も満足だ。

「フランス料理は世界一ね。」

無邪気に微笑むのはリシユリユ。

それを見て、ビキツとなるローマ。

「あらあら、イタリアからメデイチ家の妻を迎えるまでは手づかみで食事をしていた国の方が、ずいぶんと言うようになったものね。」

皮肉的且つ挑発的な笑みを擽猛に浮かべるローマ。

きよとんとした顔のリシユリユーに追撃をかける。

「伝統的なフランス料理つて、やたらにしよっぱかつたりやたらと甘かつたりするんでは。まあ、パリはニースやノルマンデイ辺りと違って内陸部にあるから、仕方ないわよね。食べ物を持ちま持ち持つてくるやり方はロシアから学んだり、と流石よね、フランスは。ヴァテールもかなり苦労したようだし。あんなに偉大な料理人をみすみす自裁させるなんて、理解に苦しむけど。」

血相を変えるリシユリユー。

「昔は昔、今は今よー！」

「そうね。確かにね。」

フランス戦艦の矛先が一瞬鈍る。

「世界一食べ物へ貪欲な姿勢を見せる日本人に対して、日常的に受け入れられているフランス料理つて一体どれくらいあるのかしら？　ちなみに、イタリアのピザやパスタはその日本人のみならず、アメリカでも受け入れられているわ。」

微妙な味付けのメリケンな戦闘糧食には、確かにスパゲティ・ミートソースが含まれていた。

大雑把な味付けだったわねえ、と奇妙に一致した意見で統一見解が生まれる彼女たちの周囲。

「なによ、パスタにケチャップを使われたくらいで怒っているなんてちゃんちゃらおかしいわー！」

「パスタにケチャップを使うなんて、料理への冒瀆（ぼうとく）行為よ！」

「そのパスタを茹でた後、冷水で引き締める行為は受け入れたじゃない！」

「それはそれ！ これはこれよ！」

「フランス料理は常に進化しているの！ 伝統ばかりではなにも生み出せないわ！」

「貴女、イタリアの伝統を侮辱するつもり？ そもそもフォークはイタリア経由でしよーうが！」

「そうよ、素手で食べていたのは認めるわ！ でも、食後に孔雀の羽根を口の中に突っ込むような食べ方は下品よ！」

「それは駄目貴族のやり方だから！ 散々葡萄農家で試飲して、まともな買い物しないようなケチケチした呑み助が多い癖に！ アルコール依存症大国がなにを！ 酒に強いなんて、なんの自慢にもならないわ！ 酔っぱらってふんぞり返るのは、愚か者の所

業よー！」

「なによ！ ピザの食べ過ぎで、健康診断に引つ掛かる人が続出しているんでしようが
！」

「なんですって！」

「受けて立つわ！」

互いに距離を取り、構え出す兩名。

「あの、そこまでにしたら？」

見かねて、ネヴァアダが仲裁に入る。

「ピッツアにタバスコをばんばんかける連中が口を出さないで！」

「ファストフードで食文化を壊した国の連中が口を出さないで！」

「うぐうっ！」

連撃による中破だった。

うすぐまるネヴァアダをすり抜け、加賀が無言で函館の鳳翔が作ったフレンチトーストを差し出す。

「イタリア艦娘にフランス料理を出すなんて……あら、意外にいけるじゃない。」

「明日のおやつはイタリア伝統のカンノーロの予定です。」

カンノーロは筒状になったパイヘクリームを注いだ伝統菓子。

その作り方は地域や店によって千差万別。

イタリア人でこの菓子を好まない者はいないとまで言われる。

「フランス艦娘にフランス料理を出すなんて……あら、おいしく食べられるわ。」

「今日の夕食には、枝豆のポターージュが出される予定です。」

微笑む加賀。

ネヴァアダもフレンチトーストで回復中の模様。

「その、悪かったわ、リシユリユ。それにネヴァアダ。悪気はなかったの。それは信じて。」

「ええ、わかるわ。私だって、自国の文化がけなされたなら腹が立ってしょうがないもの。」

「アメリカは様々な国の文化を受け入れて進化する国よ。言われ慣れているから、大丈夫。」

あれ、ローマとリシユリユはどちらも国産だよなあ、と提督は思ったが黙っていることにした。

口は災いの元。

それと、食べ物への恨みはおそろしい。

だから、兵隊にはよいものを供給する必要がある。

食べ物人は人を喜ばせる力があるけれども、反対に激怒させる働きもあるからだ。

戦闘糧食を食べる試食会が続行されゆく。

加熱しなくともそのまま食べられるもの。

加熱すると更においしく食べられるもの。

加熱しないとあんまりおいしくないもの。

作りやすいもの。

作りにくいもの。

次々と厳密且つ辛辣な評価がされてゆく。

クラッカーは味を付けすぎると主食に相応しくなくなるので、干し果実や木の実はシリアルバーなどに注力し、簡素簡潔な旨みを目指す方策が採決された。

ドングリ珈琲を飲みながら、加賀は微笑んだ。

一対多の演習が待ち受けていることを、彼女はまだ知らない。

あかいあくま率いる航空隊の本気度を、彼女はまだ知らない。

刹那の幸せ。

この時がすべてでもいいじゃない。

「どつちに付くの？」

背後から、不意に声がした。

瑞鶴は間を置かずに答える。

「決まっているわ。」

「そう。」

心配が消えた。

振り向くも、誰もいない。

一体、誰だったのかしら？

首をかしげる瑞鶴だった。

翔鶴のようなものは彼女の傍らで、ただ微笑む。

その後、突然食堂に大量のパイが現れたために、鎮守府の面々や宿泊・逗留している艦娘たちは「なあ、パイ喰わないか？」と言い合う破目に陥った。

毒気を抜かれた連合艦隊は演習延期を決めて、加賀教官をパイ責めにする決議を即時採択する。

「喰いねえ喰いねえ、もつと喰いねえ。」

加賀は間断無き波状攻撃を受け、そして大破した。

流石に食べ過ぎだ。

そんなに胃袋が大きい訳でも無いのに勧められるがままに口にしたのが、彼女の敗因だった。

結果、有給休暇を貰った元教官は自室でうんうん唸る結果となる。

これで溜飲を下げたのか、彼女を糾弾する声は聞かれなくなった。

だがしかしおかし。

原因を作った艦娘たちは執務室に呼ばれ、提督からさりげない注意を受ける。

とどめの一撃は、混浴添い寝禁止令を言い渡されかけた時だった。

そして。

滞在日数を数日延ばした瑞鶴が、献身的に先輩を看病したという。

CCXLIV：福は内

追儼（ついな）、という行事がある。

節分の元になったとかいう宮中行事。

戦前散々批判されていた恵方巻きという地域行事が、戦中の今では諸事情で派手に出
来ない昨今。

『追儼研究会』という団体が、何故だかわからないけれども函館で試験的に開催してみよ
うと言いつ出したのが先日。

歴史的に考えると、奈良か京都で行うのが筋なんじゃないかと思つてはいたのだ。

「沢山いるから作り甲斐があるわね。」

弁財天と名乗る女性を作るインド料理は艦娘たちに好評で、厨房は現在香辛料の匂い
で満たされている。

何故だか鳳翔間宮兩名も李さんも鹿ノ谷さんも、彼女がいて当然のような顔をしてい
た。

他に六名のお爺ちゃんやおじさんたちが艦娘たちになにやら手品めいたものを見せ、

それは大変喜ばれる要因となっている。

なんぞこれ。

あの追儺の再現会で『福は内!』と叫んだ時から、この異様な事態が継続していた。

鬼コスプレをした駆逐艦たちが無邪気に抱きついてくるようになってきていて、それはとても困った事態である。

同期と電話した際にその話をしたら、呪詛を喰らってしまった。

なにがいけなかったのだろうか?

あの子たちはまだまだ子供だよ?

それと、長門教官が虎縞ビキニを着た時は驚愕した。

「うち、ダーリンのことが大好きだっちゃー!」

教官に突撃された私は、妙高教官と鹿島と龍田に助けられなかったらおそらく大破着底していたことだろう。

レンズ豆のカレーをもりもり食べる面々を見ながら、野菜の炒めものを作つてゆく。弁財天と名乗る女性は、翌日向けと思われるカレー用の香辛料を組み合わせていた。彼女たちはいつまでここにいるつもりなのだろうか?

その美貌の女性がこちらにくるりと向いて微笑んだ。

「明後日には立川に向かっちゃうから、安心していいわ。」

「左様でございますか。いろいろとお世話になりました。」

「変わらなかつたわね、提督は。」

「えっ?」

「変わらない方がいいのかもね。」

「はあ。」

彼女たちが鎮守府を去った後、なにもなかったかのように日常が戻ってきた。

鬼コスプレをする駆逐艦は見かけなくなったし、長門教官が虎縞ビキニになることもなくなった。

弁財天と名乗る女性から貰ったカレー粉を使って猪肉のカレーを作ったところ、大好評であった。

「なんだかとってもインドっぽいカレーだね。この味は初めてだよ。」

自称カレー通という、九州のとある鎮守府所属の重巡洋艦がとても感激したような表情で言った。

彼女は休暇で函館にいるのだが、弁財天と名乗る女性を作るカレーを毎食完食してい

たのになあ。

厨房の片隅で、ひっそりとカレーを口にする。

やわらかな辛味と奥深い複数の香辛料が口中に広がり、やがて余韻を残しつつ彼方へと消えていった。

それは道南産の米にとてもよく合う味でもあった。

「なんやのん、しけたツラして。こないに旨いもん食うといてから。」
陽気な軽空母がいつの間にか隣にいて、同じカレーを食べていた。

そうだ。

試しに聞いてみようか。

彼女なら聞きやすいし。

「先週毎日作られていたカレーに比べて、如何ですか？」

「キミ、なに寝ぼけたことゆうとん。今日のは久々のカレーやんか。みんなハッスルして食うとるやろ。」

彼女は屈託の無い表情で、きっぱりと言った。

不意に、明日は私がドーナッツを揚げようかと思つた。

鳳翔間宮や厨房にいる料理人たちの腕前には程遠いが、婆ちゃんと昔一緒に作つたあ

の懐かしい味の揚げ菓子を。

ホットケーキミックスで作る、あのカリッとして素朴な味わいのお菓子。皆が皆喜ぶとは限らないけれども、何名かは喜んでくれるかもしれない。そうになったらいいな。

試しにその場で何個か揚げてみたら、瞬く間に駆逐艦たちが殺到してきて大変だった。

CCXLV：提督の捕まえ方

艦娘とは死狂いするモノたちである。

演習を見るとよくわかる。

一見女学生の如き、うら若き娘たちが嬉々として鬼気迫る様相で仮想敵たる相手へ突撃するのだ。

それは狂気。

狂喜を伴う狂気。

まごうかたなき狂気。

あどけなく饅頭やケーキなどを頬張る駆逐艦も。

放課後に走り回る陸上部女子のような巡洋艦も。

胸乳を震わせる一部の空母や戦艦も。

皆等しく戦場に於いては怪異である。

駄文書きだった私が提督になったのは偶然の産物といってよく、たまたま鎮守府開放

日に興味を示してのこのこと出かけたら幼い娘に捕まった。

父娘くらいに歳の離れた感じの娘は、私のことを司令官呼びする。

駆逐艦に属する艦種だと、彼女は自身をそう自己紹介してくれた。

勿論、それはカムムス、ジョークの類だと考えたから、祝祭日に相応しく彼女の指揮官のように振る舞おうと考えた。

まるで艦娘のように振る舞う娘が社会問題化している現実を、私自身が彼女にひしひしと感じ取ったからでもある。

それが、大きな誤りだった。

いや、いずれは間違える予定であったのかもしれない。

偶然、それが早まっただけなのかもしれない。

数名の中学生めいた女子に囲まれ、年甲斐もなく頭に血が上ってしまった。

女性経験の無い私に、女の子との付き合い方がわかってさう筈など無かった。

しごく生真面目そうな娘。

ほっぺのぷにぷにした娘。

面倒見のよさそうな少女。

そういった可愛らしい娘たちが、無邪気に私にまとわりつく。

こんなパツとしないおっさんの、一体どこがいいのだろうか？

やがて鎮守府関係者らしき人々の前に連れてゆかれ、妖精とやらのよく出来たぬいぐるみと会話した。

それが致命的な判断上の失策であったと、今ならば思う。

直ぐ様執務室へ連行され、提督になることを要請される。

いや、あれは要請ではない。

体のいい、強請だったのだ。

言葉遣いはやわからかだったが、有無を言わせない口調だった。

初めて見る提督は穏健な感じの中年で、私を気の毒そうに眺めている。

この開放日は結局のところ、提督候補生ホイホイであったのだと言う。

つまり、私は大間抜けなのだった。

ほんの一握りの救いのひとつは、その提督が私と同じ小説投稿サイトでの同志だったことだろう。

タヴァリーシチ！

提督候補生になって、関東圏の山奥で勉強しだして半年間の詰め込みを強要される。ガチヨウをフォアグラ化する時の如く、毎日毎日なんやかやを詰め込まれていった。二人の脱走者が発生した時は、まあそういうこともあるだろうさという感じだった。

半日後に無事確保されたと聞いた時は思いきり吹いたが。

とある小説投稿サイトで発表している作品に、熱心な読者が付いてくれるようになったことはとても嬉しいことだった。

しかも、複数。

話を投稿する度に感想をくれる。

実にありがたいことだ。

訓練期間の間毎日私を逆ナンパしてきた艦娘たちと、メールのやり取りをした。

同期の連中からは嫉妬され、実に大変なだった。

毎日見せろ見せろと、何度も何度も何度も言われたものだ。

到底、見せられるものか。

何時からか、あんな画像を何枚も送ってくるようになったりして。

お父さんは悲しい。

『横須賀待機衆』とかと揶揄される大本営勤務ではなく、即席教育後、すぐに基地が宛てがわれた。

そこは海辺にある民宿を改造した警備府だという。

このご時世でそういった建物を利用しようという人間は先ずもっていないし、増加中が懸念される住所不定の不逞な人間の数を抑制する意図もあるらしい。

あの日私を捕まえた娘たちと一緒に、その民宿改造型警備府へと向かう。

ひなびた感じの建築物には小さな表札が付いていて、警備府の名が明記されていた。何処か手慣れた感じで、娘たちは私を中へ引き込んだ。

彼女たちは皆にここにこしている。

そして何故か、その内の一名が警備府玄関を施錠してしまった。

あれ、と思っている内に手を引かれた私はどんだん奥へ連れてゆかれる。

少し薄暗い、なにやら鰻の寝床めいた建物の奥へと。

それは、意外と広く感じられた。

CCXLVI：やまとんちゆうニイマルイチハチノ異星の
姫騎士はおっさん提督の捕虜となる？

「技術班が組み込んだ試験型ゲシユタムジャンプを使つてみたが、『巨人』どもの打撃艦隊は振りきれたか？」

長距離侵攻系試験偵察機のザルツ人機長が、ジレル人の宇宙士に問いかける。

ジレル人自体稀少な存在の筈だが、新型電子探索装置試験運用のために彼女はこの機へ臨時的に配属されていた。

航宙士兼情報将校が彼女の立場である。

ガミラス人だったならば、既に佐官だったろうに。

灰色の肌と長い耳を持つ彼女は、緊張しながら問いに答える。

「はっ、その、振り切れた模様ではあるのですが……。」

「はつきり言え。……いや、はつきり言つてくれ。ここには一等市民などいないから、話し方に気を付けなくてよいのだぞ。」

試験的に装備されたゲシユタムジャンプ（宙間跳躍）可能な推進機関に無理をさせた

ためか、異常が発生しているようだ。

機の制御用に調整・配備された機械化兵のレイターは先程から速やかな修理を行うよう、乗員たちに何度も何度も訴えている。

『彼』は人工知能を備えた有機系自律型人造兵士の内の一体で、体組織は人工オルガネラ（細胞小器官）によって作られたナノマシンで構成されていて自己修復機能も所有する。先日行われた偵察任務で五体いた機械化兵の内の二体が完全損壊し、残る三体もそれぞれかなりの損傷を受けた。

その三体を元に母艦で再組み立てが行われ（艦長は勿体無い精神の持ち主だった）、その時に試験偵察機の制御機能も与えられている。

『無駄に高性能』が艦長の評だ。

見慣れない謎の艦隊の強行偵察。

それが彼女たちの主任務だった。

『巨人』と称される、巨大生命体たちの操る高火力系武装戦力。

見逃すことなど、出来はしない。

激しい砲撃をかくぐつて手近な駆逐艦らしき戦闘艦艇の電脳を乗っ取り、同士討ちに至らしめることさえ成功した。

それはまさに早業だ。

データリンクした母艦へと情報を電送した後、最大加速で遁走する。猛追撃してくる敵の戦闘ポッド。

座標を確定しないまま、宙間を跳躍したのは偵察機。

やがて、彼女たちは星々の煌めく世界へと到達する。

駆逐艦も哨戒機も無人偵察機も見当たらない星域に。

「見慣れない星系だな。」

「辺境星系の模様です。」

「一つだけ、水で覆われた惑星があるようだな。」

「『巨人』の電腦に情報がありました。テロンという星ではないでしょうか？」

「テロン？」

「はい、『巨人』の駆逐艦に電腦侵入した際にこの星系の情報がありました。」

「あの極めて短時間の間にそんな情報まで奪取したのか。流星は情報将校だ。」

「滅相ありません。」

「謙遜はいい。で、その星に知的生命体は生息しているのか？」

「可能性は高いものと思われませぬ。」

「よし、わかった。全員に告ぐ！ 傾聴せよ！ これより我々は辺境惑星のテロンに向

かうが、くれぐれも『義勇兵』としての誇りを忘れるな！ 以上！」

「はっ、かしこまりました！」

水の惑星に近づくと、長距離侵攻系試験偵察機。

「衛星軌道上にプロープを放ち、救難信号を日に一回発信するように設定しておけ。」

「はっ、プロープ三号と四号の射出準備を整えました。」

「既に射出した一号と二号の調子はどうであるか？」

「二号は残念ながら、大型惑星の重力圏に囚われて地表へ落下した模様です。二号の方は安定期に入った模様です。こちらは既に第一回目の信号発信を終了しています。」

「よろしい、副長。三号はテロンの衛星の軌道上に展開させ、四号はテロン自体の衛星軌道上に展開させよ。」

「はっ、プロープ射出手順を開始します。」

「念のため、全プロープには光学迷彩を掛けておくように。原始的な望遠鏡でも発見し得るからな。」

「はっ、すぐに展開させます。」

偵察機は細長い列島の北部へと向かい、そして無事に着水した。

「大気組成を調べてみましたが、肺呼吸に問題は無いようです。」

「それはなによりだ。副長、移動を開始するぞ。」
「かしこまりました。」

雨がちの函館の夏。

小樽の提督経由で入手した、戦闘ヘリのミル24西側名称ハインドの試験飛行を行っている。

シチリアの空の色した悪役めいた迫力の機体が、鈍色（にびいろ）の空を飛ぶ。私の傍らにいる男性がにこにこしていた。

「そんでよ、提督さんよ。俺たちもあいつに乗れるのか？」

「ええ、その時間は取ってあります。」

「聞いたかつ、野郎どもっ！ 大人しくしているんだぞ！」

「隊長が一番大人しくありませんよ。」

「「然り！ 然り！ 然り！」」

「おい、てめえら！ 後で懲罰房にまとめて叩き込むぞ！」

曇り空に明るい笑い声が響く。

空間騎兵隊に所属する猛者群。

習志野の空挺部隊を上回る錬度の陸戦隊。

今はタクティカル・アーマーと呼ばれる戦術甲冑の試験運用その他で、函館鎮守府に仮在籍している。

毎日毎回飯ウメッツ！ 飯ウメッツ！ と叫びつつ、曙や叢雲や霞たちにちよつかいをかけてはどつかれていた。

そう言えば一度、龍田から追いかけて回されて必死に逃げていたなあ。彼らの傍らには、杭打ち機を装備した二足歩行兵器が鎮座している。

それは人の姿を模した、人の倍以上の大きさの巨人。

四メートルくらいか？

「このデカブツは対戦車……じゃなくて対物型大口徑狙撃銃の二〇ミリを何発か喰らったら、お陀仏だからなあ。対戦車ロケット弾だったら、一発でお釈迦だぜ。運用をちゃんとしなけりゃ、只の動く棺桶に成りかねないってお荷物扱いの厄介な代物でさあ。」
足元に謎の三つ穴があって、杭打ち機が装備されている。

この穴はお洒落なのか？

意匠家のこだわりだそうで、『ブチ穴』と呼ばれていた。

二輪車のように変形させたいという、そんなお偉いさんの意見まで飛び出したそう
な。

「ただ浪漫思考やねんな。」

艦娘たちが興味深く訓練を見つめるさ中、一隻の連絡用舟艇めいた乗り物が近づいてくる。

「なんとなく地球製っぽくないな。」

「あちこちで、艦装の安全装置を外す音が聞こえてくる。」

「殺っちゃってもいいのかなあ、いいよね、いいよね、たまには思いつきり殺っちゃってもいいよね。普段、こんなに大人しく振る舞っているんだから。」

吹雪がなんだか物騒な内容を呟いている。

「なあ、提督さんよ。ありやあ、なんだ？ 深海棲艦の新型兵器か？」

「はて？ 戦艦棲姫さん、どうでしょう？」

「傍らの姫級深海棲艦に問いかける。」

「あんな兵器は見覚え無いわね。」

「提督、下がってください。第一種警戒体勢発令！ 提督は私がお守りします！」
大淀の声に皆が艦装を臨戦体勢に設定変更してゆく。

「これは演習ではない！ 繰り返す！ これは演習ではない！」

長門教官の声が凜と響く。

「ハインドが素早く引き返してきた。」

砲撃銃撃光学兵器噴進式誘導弾などの発射は見られない。

攻撃が目的ではないようだ。

ボールのようなものを持った大淀が、素早く私の眼前を防御する。

ファンタジーの女性騎士みたいな武装。

青いドレスに銀色の甲冑。

近接戦闘用の艤装なのか？

長門教官と加賀教官が同じく私の眼前を固め、妙高教官と足柄とネヴァアダとシカゴと航空戦艦とローマとが突進していった。

鳳翔龍驤雲龍翔鶴ヨークタウンといった航空母艦たちも迎撃体勢に入り、軽巡洋艦や駆逐艦たちが我々の外周を素早く防御する。

「偵察機の警戒網をくぐり抜けてやって来るとは、欺瞞（ぎまん）装備が余程優秀なのだな。」

島風がキリツとした顔で密着しながら言った。

彼女の他、曙と叢雲と吹雪と霞とが私に密着している。

正直重いのだけれど、思いを考えるとそうは言えない。

この状況でもにやにやしたりぷんすかしたりしていられる空間騎兵隊の面々は、まさに鎌倉武士級の精神力だな。

野戦服姿の隊長が、小銃に着剣しながらこちらへ笑いかける。

「おお、なんだかよくわからんがドンパチか？ 先鋒はそちらに譲るが、殺る時は一緒だぜ、長門さんよ。」

「勿論だ。殴りあいならば任せておけ。よし、やっぱり突撃するか。全艦、この長門に続け！」

「待ってください、長門教官。先ずは話し合いです。」

「悠長なことを。夫の身になにかあつたらどうするといふのだ！」

「私はまだ貴女の夫ではありませんよ、教官殿。」

「な、なんだと……。」

「ダメね。偵察機を飛ばしてみたけど、電子的妨害が掛けられて上手く機体を制御出来ないわ。」

「加賀教官、それほどの相手ですか？」

「ええ、科学技術的にはずつと上ね。」

海岸線に居並ぶ屈強の戦乙女たち。

何故か、大和級戦艦四隻がいつの間にか傍らにいた。

「面白そうじゃないか、提督？」

佐世保の武蔵がにやりと笑う。

不敵に笑うは、最強戦艦たち。
うわー、皆戦闘狂じゃないか。

鈍色の舟艇が海岸に着いた。

武装の展開など見られない。

緊張した面持ちの艦娘たち。

舟艇の側面にある出入口から、肌色が我々とさほど変わらぬ人間めいた存在が二名現れる。

ロボット兵ほいのもいるが、皆手ぶらだ。

肌色が灰色の娘もいた。

彼女の耳は尖っている。

「ダークエルフよ、ダークエルフ！」

「ダークエルフって、肌色が褐色ちやうんか？」

「作品によっては灰色の肌よ。だから、彼女はダークエルフ。決まりね。」

赤毛の女性士官がこちらへ向かってくる。

まるで勇猛果敢な姫騎士みたいに見える。

「私はガミラス特務作戦群第二八三中隊所属の、ラミー・オルフォイス大尉だ。基地司令

官と話がしたい。」

「日本語だ。」

「日本語ね。」

「なんだか洋画の吹き替えみたいだわ。」

「おそらく、翻訳機を持っているのよ。」

「ほんやくこんにゃく?」

「私がこの基地司令官で中佐を拝命しております、大尉殿。」

必死の形相で止める艦娘たちの間から、私はそう答える。

「女性兵士が殆どの軍基地か。なんとも珍しいな。」

「私もそう思いますが、現在このような形態の基地が惑星各地に幾つも存在していません。」

「ほう。我々はこの惑星の基本情報を知りたい。また、食料も分けてもらいたい。」

「先に我々の上層部に問い合わせてみますが、たぶん直に許可が下りるでしょう。」

「そうなるとありがたいな。」

「そうさせます。先ずは一緒に昼食でも如何ですか、大尉殿?」

「いいのか?」

「遠くの星からお越しくださったんです。もてなしは当然でしょう。」

「我々は侵略者かもしれないぞ。」

「まあ、その時はその時ですね。」

「案外肝が太いのだな、中佐殿。」

「いえいえ、私は臆病者ですよ。」

「ふふふ。」

「ははは。」

灰色の肌の少女はジレル人のアマーリエ・リルケというらしい。

階級は少尉。

機長のラミー・オルフォイス大尉に、寡黙な副機長のマルテ・ホーフマンスタール中

尉。それと機械化兵のレイター。

妖精たちが素早く彼女たちの回りを巡り、骨頭の妖精が特に問題なしとして杖をくる

くる回した。

ちなみに問題があつた場合、杖を天にかざすことになっている。

幸い、彼女たちは地球に害をもたらす微生物や菌などを保持していなかった。

爽やかな顔で微笑む妖精たちは、何故か悪魔めいて見えたが気のせいだろう。

なにか口に合うかわからなかったので、羊羹にフレンチトーストに月餅を食べてみて

もらう。

好評だったので安心した。

お礼に彼女たちの携帯糧食を一部分けてもらって皆で食べてみたが、ちよつとばかり微妙な味だった。

栄養価にすぐれるらしいが、味は兎も角長靴いっぱい食べたく……ならないなあ。

もてなしの酒宴が開かれた。

みんな、ドンチャン騒ぎがしたいだけではないのだろうか？

異星人に地球製の酒精は大丈夫なのかと思われたが、彼女たちの検査機で安全性は確認出来たようだ。

案外、祖先は同じだったりして。

……キャプテン・フューチャーみたいな展開は無いだろうな。

死屍累々になった戦場を、素面の艦娘たちと共に片付ける。

あくあ、こんなに服をはだけた状態で。

困ったものだ。

翌日。

ゲンコーガー、ゲンコーガー、と呻（うめ）いていたマスター・オータムクラウドが
ひよいと函館に現れ、ガミラスの女性兵士たちを見て目を輝かせる。

「よしっ！ 今回の薄い本の主題は決まった！」

「星間戦争にならないようにしてくださいよ。」

「大丈夫です！ 全年齢対象で描きますから！」

饅頭やらケーキやらをおいしそうに食べる異星の女性たちを見て、ウキキと笑うマス
ター・オータムクラウド。

とてつもなく不安だ。

CCXLVII：帰ってきたハッチーモッチーステーション

それは宵の時間から始まる艦娘ラヂオ。

「えーと、今夜もまた懲りずにお送りします『ハッチーモッチーステーション』です。進行役はハッチーこと初雪と。」

「モッチーこと望月でお送りします。」

ガサガサバリバリ。

「この固いお煎餅は歯応えがあつて、おいしいねえ。」

「香川県のくつわ堂つてとこの堅焼き煎餅だつてさ。」

バリバリバリバリ。

「あれ、今夜も制作統括が髪を振り乱しながら、ホワイトボードを振り回しているよ。」

「人気番組を担当しているんだから、もう少し落ち着けばいいのに。えっ？ 毎回懲りていないようだが、放送中にもものを食うな？ でも、某声優さんの番組では……。」

「なんか追記しているよ。いちいちカンペの文章を読むな？ あれ？ 頭を掻きむしっ

「ているね。」

「あ、そうだ、モッチー。今夜も素敵なお客さまがいるんだよ。」

「そうなんだ。じゃあ、呼ぼう。」

「某教育放送の児童向け番組で、瑞鳳さんと共に披露したずいずいダンスが人気沸騰中の瑞鶴さんです。どうぞ。」

「大本営で教官職を務めている筈なのに、最近頼まれごとが多いんですね。それではなかなか函館に行けない瑞鶴です。翔鶴姉、加賀先輩、みんな、聴いてる？」

「瑞鶴さん、ここでずいずいダンスを踊っても、聴かれている皆さんにはわかりませんよ。」

「それでも踊りを止めないその姿、そこに痺れる憧れる。」

「あはは、よろしくね。」

「モッチー、なにか質問して。」

「オツケー、あのずいずい……瑞鶴さんは大本営で艦娘たちを指導されていますが、特に大変な点はなんでしょうか？」

「そうですね、やっぱり死なないように教育するのが一番大変ね。基本を完全に覚えて、轟沈しないように戦う。口で言うのは簡単だけど、それを実行するのはけっこう困難よ。」

「その節は、大変お世話になりました。」

「いえいえ、どういたしまして。まさか、貴女たちがこのラジオ番組の進行役になるとはねえ。」

「あはは。」

「ねえ、あそこでホワイトボードを振っている人がいるわよ。」

「そろそろ一曲目に移れ？ あ、また頭を抱えてる。」

「ええと、那珂ちゃんが歌う『あんころもち姫』エンディングテーマの『ようかんトロイカ』です。お聴きください。」

「でね、ずいずいダンスはここで一度くるっと回って両手をずいずいと……。」

「教官、こうですか？」

「そうそう、筋がよくて上手いわよ。」

「じゃ、そろそろ終わりにしよつか。」

「そうだね、体もほぐれてきたしね。」

「えっ、まだ時間が残ってるって、統括さんが怒ってるわよ。」

「あっ、そっか。」

「相変わらずねえ。なにか雑談でもしてみたら？」

「じゃあ、教官のコイバナですね。」

「仕事が恋人って言えばいいかな。」

「あのう、そういうのはいいいで。」

「大本営や横須賀に、魅力的な方はいないんですか？」

「うーん、そういう目線で見ただことは無いかな。仮に可愛い男の子の提督でもいたら考えるかなー、なんてね。あはは。」

「えっ、教官、そういう趣味があつたんですか？」

「わー、引くわー。引くわー。」

「貴女たち、わざと言ってるでしょ。冗談よ、冗談。」

「バレテラ。」

「かすていらの方が好きね。」

「函館の提督なんてどうです？」

「あの人、普通のおじさんでしょ。」

「加賀さんは大好きみたいです。」

「そこそこがよくわかんないのよねえ。あたしたち自身、ピンとくる人が運命の人みたいって言われるけど、みんながみんなそうなっている訳じゃないし。」

「これって根幹的に難しい話ですよ。」

「千島の松輪島(まつわとう)の漣(さざなみ)は、提督といつもラブラブですよ。ほら。」

「うわー、これはちよつと……。」

「えつ、こんなの撮ってんの？」

「こういう相手が欲しいなあ。」

「おつ、モッチーの恋人欲しい発言。ご希望される方はどしどしご応募ください。」

「えつ、本気でやるの？」

「統括がやれやれ！　って乗り気だ。やるんだよ、モッチー。」

「よし、サーチ・アンド・デストロンだ。」

「秘密結社を一体どうするつもりなの。」

「おお、流石は教官。突っ込みも適切ですね。」

「あたりきしやりきのこんこんちきよ。」

「ではここで二曲目。野際陽子さんの『非情のライセンス』です。どうぞ。」

「この豆大福、とてもおいしいわね。」

「東京三大豆大福の一つだそうです。」

「翔鶴姉や加賀先輩にも、是非とも食べてみてもらいたいわ。」

「お便りを読み読めって制作統括がやんやん言うから、モッチー、その山からどれか抜いて読んでよ。」

「よし。えいや！ えーと、艦娘の皆さんは余暇にどんな読書をされるんですか、だってさ。教官は最近なにか読まれています?」

「そうねえ、時間があるようで無かったりするから、最近はネット小説でさつくり読めるものを時々かな。」

「色恋の話ですか?」

「日常系が気楽に読めていいわね。代償無しのチートってなんだか怪しげな感じがするし、普通の人の筈なのにゴ布林や盗賊を虐殺して平然としている姿は違和感があるし、中身が残念なのにモテモテってよくわかんないし、あんまり重い内容だと読む気が失せてくるし、やたら展開を引き延ばす系はうんざりするし、主人公の考え方が独善的過ぎてもう少し寛容になろうよと思うのもあるし、主人公たちが極めて優秀なのはいいけど、対比的な存在としての脇役たちが無能の塊とか二〇歳そこそこの若手が倍かそれ以上年上の相手を説教する展開はもやもやするわね。相手がいくら悪くても尖った対応をしていたら禍根が残るし、そんな人が年を取ったら円満になるかしら? そんな感じには見えないのよね。歳を取って余計に頑固になつたりするんじゃないかしら? 自分たちがいろいろ出来て賢くて勤勉だからといって他を排除するようじゃ、多様性のある社会は生まれえないわね。少なくとも、民主主義社会には程遠く見えるわ。無能な人間を動かさせてこそ、有能な人間よ。無能を糾弾するだけなら、誰にだって出来るわ。選

民思想が見え隠れして、やたらと説教くさい話は真つ平御免よ。あと、奴隷少女にやたらこだわる主人公がとってもこわい。差別的な要素に満ちている作品がちらほらあつて、もによもによすることもあるし。どろどろの追放系悪役令嬢ものは食傷気味だし、寝とられ系は食指が動かないし、復讐ものはエグいと読みにくいし、『中世ヨーロッパ』一辺倒は作品世界を狭める要因だからもつと多様性を持たせたらいいのに。それに、主人公が暗い過去を持っていたからといって、なにをしてもいい免罪符にはならない。なんてことを、つらつら考えながら読んでいるわ。」

「よ、よく読まれていますね。」

「第一話で読むのを断念する話も、ちよこちよこことあるけどね。」

「ちなみに、一番最近読まれたのはどんなお話ですか?」

「冴えないおじさんがいろいろ頑張った末に死んじやって、その後異世界に転生して狩猟生活する話かしら。なかなか更新しないのよね、あの話。」

「へえ。」

「ここで三曲目です。MIOさんの『みえるだろうバイストン・ウエル』。お聴きください。」

「お別れの時間になりました。最後の曲は 松本典子さんの『儀式(セレモニー)』です。」

「お聴きください。進行役はハッチーこと初雪と。」

「モッチーこと望月でした。本日のお客さ まは瑞鶴さんでした。ありがとうございます。」

「今日は面白かったわ。また呼んでね。」

「それではまた来週。」

人によつて函館鎮守府事務課に保護されました。

『彼女』の素性は判明していませんし、関係者も複数存在します。

一見してなにも問題無いように見えますが、激しい暴動の中で傷一つなく歩き回つていたことにこそ充分留意する必要があります

『彼女』は自身を北海道●●市出身と称しており、それは現地にて確認が可能でした。

両親、同級生、近所の人々などの、彼女に対する記憶が改竄（かいざん）された様子も見られません。

時折『彼女』は『実家』に帰省しており、監視もさせましたが特に危険な兆候は見られませんでした。

また、『彼女』は自身を元●●型駆逐艦の艦娘であると思ひ込んでおり、話に矛盾が生じると「それは禁則事項です。」と言つて誤魔化します。

一度過度の追求を意図的に行わせた結果、その当事者と命令者は行方不明になりました。

彼らの消息は今も不明です。

今後、『彼女』に対してやたら強気に出たり過度の追求を行うことは禁止されています。

『彼女』は普段、極めて友好的です。

艦娘に対しても仲間意識があるためか、大変親切に振る舞います。

『彼女』は誰かに直視されている間、快活で前向き且つ勤勉です。

決して、『彼女』から視線を逸らさないでください。

『彼女』は蝦夷鹿や羆（ひぐま）などを、頸部（けいぶ）の圧断や絞殺といった方法で攻撃した過去が報告されています。

地元では『熊殺し』と呼ばれてもいるようで、それへ言及した際に『彼女』は照れた様子を見せました。

ただ、それは擬態である可能性も高いので、慢心は禁物です。

『彼女』がもしも攻撃してきた場合、職員は準一級災厄系収容プロトコルに従うことが定められています。

事務室に彼女しかいなかった時、室内から石を擦っているような音が聞こえてきたと複数の職員が報告しています。

これは通常業務の範疇に入っており、如何なる『彼女』の態度の変化も事務長に報告すべきです。

尚、『彼女』の机周辺が汚れていることもありますけれども、それを『彼女』に指摘してはなりません。

職員は『彼女』の机ならびに周辺の汚れを視認出来次第、『彼女』が離席している間に

清掃作業を行ってください。

【補遺：二〇一〇年〇月〇日に於ける取材記録（閲覧権限は係長以上）】

（しばしジャリジャリした雑音が続く）

えっ、取材ですか？

『ピープス』ですか？

それとも、『ハコラク』ですか？

もしかして、『HO』？

あ、違うんですか。

えっと、私みたいな普通の女の子なんて取材しても面白いんでしょうか？

はい、私は元（ジャリジャリとする雑音）の艦娘で、今は退役していますが、ここ函館鎮守府事務課に奉職出来て嬉しく思っています。

この仕事はとも遣り甲斐があります。

地元の（ジャリジャリとする雑音）に戻った時もみんな羨ましがって、お土産の間宮羊羹や月餅はいつも大好評です。

えっ？

艦娘だった時ですか？

私がいいたのは南方の（ジャリジャリとする雑音）泊地で、あそこは毎日が激戦でした。あの、詳しくお話ししないといけないでしょうか？

……助かります、あの時のことは懐かしい面もありますけど、苦しい思い出もありますから。

それで退役した私が東京にいた頃、池袋騒乱に巻き込まれてとても大変でした。

その時にたまたま函館鎮守府関係の方に出会えまして、今はここにいます。

ええ、ちっちゃな頃はやんちゃでした。

蝦夷鹿をやつつけちやつたりして。

おいしいですよ、蝦夷鹿。

おいしくないって言っている人は、殺り方が悪いか、解体の仕方が悪いか、熟成の方法が悪いか、調理の方法になにか問題があるかのどれかだと思います。

そつと殺らなきゃいけないですよ、獣つて。

こう、頸をですね………アッスミマセン、モウスコシデヤツチャウトコロデシタ。

工エト……その、大変申し訳ありません。

あの、大丈夫ですか？

ちよこつと力が入り過ぎましたね。

そんなに皆さんに見つめられていると、なんだかとても恥ずかしいです。

ちよこつと目を逸らされてもいいんですよ、ふふふ。

(ジャリジャリした雑音が続き、これ以降のやり取りは聞き取れず)

CCXLIX：ちよつとエツチな九州悪魔提督キャンサー風味

我が鎮守府がなにかと世話になつとる有馬

財閥。

そことは、ズブズブのぐちよぐちよな関係じゃ。

で、跡取りのお嬢さんが鎮守府を是非とも見学したいと言つてきたとかで、小さな娘さんのたつての希望を断るだけの鬼畜力がワシには無かつた。

我ながら、甘いものよ。

平戸のカスドースよりも甘いのう。

蟹座を拜命しとる身としては心苦しいが、これも浮き世の定め。
積尸気を思う、今日この頃じゃな。

ふう。

九州の夏は暑く、予算削減のために窓を全開にした執務室。
なんでこんなあつつい時に、仕事をせにやならんのかのう。

蒸し暑い。

はよう、梅雨明けせんかのう。

なんか重要書類らしい紙束で自分自身をおおぎながら、やたら髪の毛の長い副官に問いかける。

「卿（けい）はどう思うかね、サミヒアイス。」

「五月雨です。有馬財閥の娘さんと、とつとと政略結婚してしまえばいいんじゃないですか。あ、でも、あの歳でお腹を大きくさせたらダメですよ。」

「カーツカツカツカ。言いおるわ、こやつめ。」

「はい、最新作の冷やし珈琲オレです。」

茶色というよりも白濁に近い色合いの液体に満ちた、水滴をその身にまとわせる硝子コップが机の上に置かれた。

「奄美産の黒糖を使った黒蜜と、地元牧場産の低温殺菌牛乳を使いました。はつきり言つて自信作です。」

「お前は夕張か。」

「夕張さんもおいしそうに飲みましたよ。口の端からたらりと白っぽい液体を垂らしながら。」

「ほう。」

おそるおそる口に含んでみる。

いつもならば途端に拡がる強烈な苦味や酸味やえげつないナニかに口内が浸食汚染されることもなく、黒蜜や牛乳によつて逆にまるやかさや芳醇さを増したかのような錯覚さえ感じた。

冷たさが心地よさを倍加している。

悪くない。

そうか、サミダリユーンの珈琲はこうして飲めばそれなりの味になるのか。

「そうそう、夕張さんは提督のアレを飲むより楽だと言われていました。」

ブハツと口中の液体を吐いてしもうた。

白濁した液体に汚染されてゆく駆逐艦。

「もう、なにやっているんですか。」

「それはこつちの台詞じゃ！いきなりなにゆうとんじや！」

「えっ？私、なにか変なことを言いましたか？青汁とかなんか、そんな感じの飲み物

じゃないんですか？」

「こやつめ、すつとぼけよる。」

そこへ鈴谷がやって来た。

「あつついねー、おつ、カフェオレがあるじゃん。いっただきー！」

なんの躊躇も無く、白濁した液体を口にする鈴谷。

「スネークバイト！」

必殺の掌底を無防備な腹にぶつける。

お前の弱点はすべて把握済みよ。

お前の体で、ワシが触れていない場所など無いからのう。

散々提督式エステティックの踏み台になりおった故にな。

あのバターのようにとろける快樂無しに、生きられるか？

のう、鈴谷？

くく。

ぶはあつ、と口中の液体を駆逐艦に吐きかける重巡洋艦。

筆頭駆逐艦は白濁した液体まみれになってしもうたわい。

鎮守府を訪れた有馬のお嬢さん、山風、早霜、ジャーヴィスと共に入浴した。

なんで、こがあなたになつちよるんじやろうか？

お嬢さんのたつての願い事らしい。

まあ、ワシは●リじやねえし、●学生になんとも感じんから問題は無いがの。

ガキどもがやたらとじやれてきて、北上の気持ち少しはわかった気もする。

早霜が、有馬のお嬢さんの面倒を見てくれるのありがたい。
これこれ、お嬢さん、ワシにぴったりくっつかれても困るわ。
これこれ、山風にジャーヴィス、M字で喧嘩をしてはイカン。
女の子がそんな恰好をしてはイカんと、提督は思うのである。
嗚呼、ワシの可愛い浜風ちゃんがここにおつてくれたらう。

「司令官。」

「なんじゃ、早霜。」

「以前浜風ちゃんに漫画のモデルになつてもらつた時の写真を、私は何枚も持っています。」

「ほう。」

「すつぽんぼんはありませんが、それ以外は大抵あります。」

「言い値で買おう。」

熊野が提督式エステティックなんちゃらをやって欲しいと言うので、終業後に私室へ呼ぶ。

勿論、鈴谷には内緒じゃ。

あやつはきちんと注意しなかつたら、毎晩でも普通にここへ平然と来るけえ。

なんのためらいも無く、ワシの目の前でバスタオル一枚に着替える重巡洋艦。
こいつもだいたいぶん慣れてきたのう。

恥じらいが無くなってきて、ちと残念な気もするが。

ふっ、ワシの秘術的施術を喰らうがいい。

喰らえ！

九州の父の力を！

揉み揉みして、第五スロットに最速スロットルで突撃する。

ハナの穴！

ドリルドリルドリル！

うねるうねるうねる！

ほんの数撃で呆気なく気を失う熊野。

ふっ、ワシの本領はこれからじゃわ。

夕張、明石、青葉と実験的に作られたサウナに入ってみる。

「どうですか？ はつきり言って自信作です！」

ムフウ、と鼻息の荒い夕張。

なにも囚われぬ双丘が揺れる。

「夕張さんにしては普通の作りですね。」

悪魔商人の明石が豊かな胸乳を震わせながら、あちこちを点検している。

「実用性は充分ということですね。それはよいことです。」

死んだ魚の目付きで青葉が微笑む。

サウナから出て汗ばんだ体を冷やした後、更に汗ばむような事態に陥った。

ハナの穴！

氷で作った棒が第五スロットにあんなに影響を及ぼそうとはな。

おそろしいものよ。

明石に頼んでいた桃色映像作品が届いたというので、受け取りに行く。

ロシア経由で輸入された、無審査モノがこの小さな段ボール箱にみつしりと詰まってる。

おお、見ているだけでワシのギャラクシアンがエクスプロージョンしそうじゃ。

そこへ暗黒商人の工作艦が話しかけてくる。

「ふとした疑問なんですけどね、提督。」

「なんじゃ。」

「提督って、何名もの艦娘と夜を共にしていますよね。時折、街の休憩所にも出掛けてい

ますし。今更、そういう円盤が必要なんですか？」

「甘い、甘い。平戸のカスドースよりも甘いぞ、明石。」

「はい？」

「和菓子ばかり食べると、洋菓子も食べとうなる。」

「はあ。」

「九州の菓子ばかりかき食べると、たまには中国地方や四国の菓子も食べとうなる。東京のどら焼きを食べたくなることさえある。」

「そういうものですか。」

「そういうものじゃよ。」

「私にはわかりませんね。」

「女にはわからんじやろ。」

「ところで、今夜は如何ですか？」

「おいおいおい、唐突じゃのう。」

「女だって、そういう時があるんですよ。」

「そういうものかの？」

「そういうものです。」

香取先生と業務上の打ち合わせ。

流石は先生じゃ。

なんともエレガントに満ちとる。

打ち合わせ後、耳元で囁かれる。

「大人のレッスンをしていきませんか？」

「はい、喜んで。」

それはまさに大人のレッスンじゃった。

小粋なワシらに相応しい時間じゃった。

ウオース。パイトな陛下に呼ばれる。

陛下は陸上部の部員みたいにスポーツブラっぽいモノとブルマっぽいモノを身につ

け、室内運動していた。

揺れる揺れる、ワシの心も揺れる。

ワシのワシが天元突破しそうじゃ。

色即是空色即是空、積尸気冥界波。

陛下がにこやかに、ワシに言った。

「提督式エステティックが素晴らしいと、クマノから聞きました。」

内心、冷や汗をかく。

熊野、てめえ、なんてことを陛下に言いやがった。

「陛下、先ずはこの私が受けてみたいと思います。」

残念クツコロ女騎士のアークロイヤルがそう言った。

お前はお呼びじゃねえ！

「大丈夫ですよ、アーク。私は提督に全幅の信頼を置いていますから。」

ぐつ、不味い！

陛下から自然と放射される覇気の影響を受けないようにするため、ワシは咄嗟に左の小指を折る。

ぐああああっ！

「よろしくお願ひいたしますね、提督。」

「は、はい。」

逆らえよう筈もない。

ワシの私室に招いた。

密室に二人きりじゃ。

国際問題にならんか？

唯々諾々と施術する。

ハナの穴！

陛下の第五スロットは国際問題になりかねないので、流石に自重した。ロイヤルなロイヤルがロイヤルして、思わずロイヤルになりそうじゃ。陛下の顔が赤いけれども、気にしない気にしないしちやあおえんちや。吐息が色つぼくて思わず暴発してしまつたが、これは致し方なからう。

嗚呼、刺激的な日々を過ごしたいものよ。

この平穩で起伏の無い日常も悪くはないが、やはり血と硝煙とオイルのにおいがワシは好きじゃ。

まあ、今夜は浜風ちゃんの写真があるからそれで充分か。

そう思っていたら、我が私室に艦娘たちがぞろぞろ入ってくる。

ふん、こやつら、ワシの小宇宙（コスモ）をおそれぬと見える。

よかろう、ならばかかつてこい！

我がひのきの棒の力をとくと知るがいい！

この初期装備、なめてかかると痛い目を見るぞ。

さあ、舐めるがいい！

ひいひい泣かせたる！

いざ、
真つ
向に
勝負！

CCL：光の戦士になりたくて

自分自身を艦娘だと思い込む子が、ここ数年増加中とのことだ。

そう言えば以前『前世はナントカ』というのが流行っていたし、木蓮で亜美ちゃんなナントカが流行していたようだ。

時代が変わっても、求められるモノは似ているということかな？

地方自治体が対応に困ってしまつて政府に問い合わせ、その政府にもそういった事態の専門家なんていないから大本営へたらい回しされ、そして我が函館鎮守府にお鉢が回ってきたらしい。

嗚呼、お役所仕事！

てかさあ。

どないせえゆうのよ、このおっさんに。

心理学は大学の時に少しばかりかじつたけど、詳しいことなど全然わからんぞい。空間騎兵隊の面々と彼女たちとで、男女間の過ちが起らないようにしないとな。

気のいい人たちなのだが、それとこれとは話が全然まったく違って違ふのだよ。

起こり得る不測の事態は、最小限に留めないとならないのである。

誰が誰を好きになるなんて、なかなかわかるもんじゃないからな。

荒くれ男どもの目附役として叢雲、曙、霞、吹雪、足柄、龍驤を特務班として任命する。

業務の合間に見張る感じで頼んでおく。

常時二、三名といったところだろうか。

彼女たちは揃って微妙な顔をしていた。

すまぬすまぬ。

手製のドングリクツキーを手渡しとく。

ま、私はおっさんだから員数外だろう。

冴えないアラフォーのおっさんが、女の子にモテる筈無いからな。

全国各地からおよそ六〇人ほどの、『己を艦娘と思い込む女の子たち』が講堂に集まっていた。

うわあ。

なんというか、彼女たちには独特の雰囲気を感じられる。

なんとも説明しにくいが、信念に燃えたとでも言うのか。
なんか、ヤバい。

少女十字軍ってこんな感じだったのか？

隣の大淀や島風に曙もひきつった顔をしていた。

血とオイルと硝煙にまみれていない女の子たち。

全員、きちんと整列している。

まるで少年兵みたいに見えた。

中高生が殆どだが、大学生らしい子も中に混じっている。

『彼女』たちを無事に『退役』させるのが我らの使命だ。

……出来るのかなあ。

『現役』でなければどうとでもなる、との理屈であった。

……大丈夫なのかな？

本人たちは自身を艦娘だと思い込んでいるのだけれど妖精が見えよう筈もないし、無論のことだが艦装の装備など出来よう筈も無い。

私の肩先で踊る妖精に、なにかしらの反応を見せる子は誰も見当たらない。

艦娘になれそうな子はいない。

なれてしまっても困るけどな。

男は艦娘に『加工』されたら妖精が見えるようになるけれども、女性はまた違う。

その理屈が今もってよくわからない。

わからないが、そういうものなのだ。

前にも確認したそうだが、改めてバツテンだ。

だが、それを今言う訳にもいかないのが辛い。

この世は不条理に満ちている。

心理学的に手探りの状況ナリ。

魔術師提督に倣（なら）って、短い言葉で話すにとどめた。

むっちや真剣な眼で私を見つめている。

ゾクリ、とした。

こわいで御座る。

ある意味騙しやすい子たちなのだろう。

或いは、洗脳しやすいとでも言うのか。

今ならなんでも言うことをききそうだ。

不味い、不味いよ。

取り敢えず、全員が再訓練の要ありとして小豆色のジャージ姿に統一する。

唯々諾々と従う彼女たち。

みんな、小豆になりたいかっ！

……なんか違う。

日々の合間に一人一人と面談を行い、各々の症状を知って個別対策を練る。念のため、妖精にも同席して貰う。

厳しくやっつけている内に、自分自身が艦娘ではないと実感するかも知れない。そうでないかもしれない。

どちらにせよ、全員不合格にしないといけないのだ。

期限は一応、半年以内だ。

バッドエンド確定の物語みたいで、個人的には厭也。

脱落して退役させるのも、それはそれでひとつの方策である。

あまり厳しくし過ぎてても問題になりかねないから、なんちやって陸軍式か？
実に悩ましい。

寄宿舎式の学校を参考にしてみる。

嗚呼っ、マリア様!! って感じ。

出たとこ任せっぽいが致し方ない。

彼女たちは二人一組として、常に一緒に行動させる。

訓練は陸上のみとし、模擬艦装を状況に応じて使用する。

これらは以前清霜用に作った武蔵型艦装を参考にして、全国各地の幾つかの町工場で作られた。

彼らはノリノリで引き受けたのだとか。

砲塔がモーターで回転したり、探照灯がLEDだったり、缶の部分に発煙筒が仕込んであったりとなかなか凝った作りだ。

将来的には艦娘博覧会を開催する予定だとかで、この夏の同人誌即売会では西館四階で幾つか展示して反応を探るのだとか。

武蔵型艦装は迫力満点だし、三連砲塔がきちんと動く様はある意味興奮させられる。

また、廃棄予定でも程度のよい六四式小銃を陸上自衛隊から八〇挺貸与してもらい、管理は鎮守府側で行う。

ちなみに撃つのは空砲だ。

実砲（じつぽう）は暴発その他の問題を防ぐため、一切使用しない。

有志と共に数発ずつ試射して、作動性に問題が無いことを確かめた。

丁寧扱わないとならん。

陸上自衛隊から有志を頼んで訓練教官になってもらおうとしたら、何故だか相当数の応募が殺到した。

結局絞りに絞って面談する。

その結果、凜とした感じで豪胆な雰囲気の女傑っぽい三等陸尉を含む、三人の女性自衛官に頼むこととした。

空間騎兵隊からも、女性隊員が一人参加することになった。
計、四人の人間教官。

特に三尉は目配り気配り心配りの出来そうな人なので、悪い方向には向かわないだろう。

お茶を濁すにせよ、誤魔化すにせよ、訓練はある程度本格的にやらないと不味いし。
ガミラスの女性軍人たちは、戦時特例法を盾にして観戦武官扱いとした。

最悪、妖精が見えないことと艤装が扱えないことを暴露……いや、この選択肢を選ぶと大変よろしくない気がする。

ううむ、如何するべきか。

予備役にする訳にもいかないし。

悩ましい。

ぐだぐだでてんやわんやの受け入れがなんとか終わって一区切りし、夜中の厨房で漬物の仕込みに入った。

用意された漬物石にはそれぞれ艦娘の名が彫ってあって、誰が運んできたのかよくわ

かるようになってる。

ちよつとばかり多いな。

君たち、自重したまえ。

沢山作つても朝食時にすぐなくなるのは、ありがたいやらこわいやら。五島列島の塩、児島の塩、多度津の塩を使い、三種類の漬物を作った。

長崎、岡山、香川の三県合同事業だべさ。

「あの、司令官。」

振り向くと、厨房入口には小豆色のジャージを着た女の子四人がいた。

ちなみに、彼女たちの運動着には白い上下の陸上部衣裳が用いられた。

ジャージの左胸に『駆逐』と書かれたワッペンが付けられており、彼女たちは駆逐艦扱いなのだとわかった。

確か、『駆逐』『軽巡』『軽空』『重巡』の四種の子がいるんだったかな？

だがしかしおかし。

既に就寝時間の筈。

「どうしました？」

やんわりと問いかける。

明らかかな否定はよろしくないため、やわらかく接するように言われている。

安易な全否定は、バッドエンド直行の選択肢に感じられるが故に。敵しくもやさしく、愛に満ちた母の如く。

言うは横山やすしだな。

やるは西川きよしだぞ。

小さなことからこつこつと。

いとむつかしきものよ。

「なにかお手伝い出来ることがあったら、と思ひまして。」

四人が微笑む。

普通の女の子。

普通の中学生。

可愛い娘たち。

やりきれない。

どうして、彼女たちは自分自身を艦娘と思ひ込んでいるのだろうか？

なしてさ？

英雄願望なのだろうか？

違う自分になりたいのか？

なんだか、もやもやする。

君たち、深海棲艦に向かって砲の引き金を引けるかい？

嵐の海や冷たい海や熱帯の海を渡ることが出来るかい？

吐かずに戦えるかい？

僚艦が次々に沈んでゆく中、砲撃出来るかい？

そうした思いをすべて飲み込んだ。

それらは、言うべき言葉じゃない。

「明日も早いのでしよう。こちらはもうじき終わります。気持ちだけありがたくいただきますよ。」

「は、はい。」

敬礼し、彼女たちは去っていった。

顔が赤かった気もするのだけれど。

うん、おっさんの気のせいである。

そんなことがある訳ないないない。

おっさんマニアな中学生はいない。

おそらく、いないんじゃないかな。

そんな稀な性癖の子はいないべき。

年頃の女の子は扱いがむづかしい。

さて、どうやって扱えばいいのか。教官たちと討議をせねばならない。どうしてこんな仕事が増えるのか。妙な仕事ばかりが増えてゆくぞい。個人的な時間がどんどん減りゆく。小説投稿サイトでの更新が遅れる。異世界よりも現実の方が手強いぞ。スローライフは遠きにあるものよ。致し方なし。

悩ましいな。

「流石、司令官。人間の女の子をも容易く落としてしまうのですね。」

振り向く。

いつの間にか、早霜が背後にいた。

「人聞きの悪いことを言わないでください。彼女たちとは今日会ったばかりですよ。」

「『一目会ったその日から、恋の花咲くこともある』、って言うじゃありませんか。ゲータだって、雷撃の恋をしていましたし。」

「そんなことは稀ですよ、稀。それと、爺さんの戯言を真に受けられないようにしなさいな。」

「艦娘になりたい女の子、艦娘たらんとする女の子、艦娘であると思じる女の子、そんな女の子たちが目を向ける対象は誰になると思われますか？」

「それは、教官や先任といった先輩艦娘たちでしょう。」

「司令官、ですよ。」

そう言つて、早霜は爽やかに笑つた。

梅雨の晴れ間のように。

その後風呂に行つたら、男の子向け漫画のようなラブコメ展開が発生して大変な事態に陥つた。

それなんてトラブル？

なしてさ!?

あれこれと見られてしまったが、致し方あるまい。

どうやら、わざと入ってきた雰囲気だ。

恥ずかしがらないとはどういうことだ？

エッチなのはいけないと、提督は思う。

おませな悪戯つ子たちには、なんとも困つたものだな。

私室に戻ろうとしたら、男の人と一緒にの方が安心して眠れるとのたまう娘さんたちに

遭遇する。

エンカウント！

逃げられない！

添い寝を懇願された。

私は『ライナスの毛布』ではないのだが。

無下には出来ないし、なんとも困るなあ。

伯父さんや叔父さんの立ち位置なのか、私は？

私室には、既に添い寝担当の艦娘たちが待ち受けている。

鉢合わせしてしまう訳にもいかないぞ。

こういう時、一体どうすればいいんだ？

どんな顔をすればいいかわからないの。

……つて違う！

結局、シャツを渡して身代わりとした。

まるで、仏教説話や日本昔話みたいだ。

となると、御札は後二枚つてどこかな。

これが、君たちの『ライナスの毛布』だ。

人において安心することがあるらしい。

なんだか、昔話みたいな展開にも思えた。

おっさんのおいは、加齢臭とかなんとかで嫌われるんじゃないか？
少女たちは嬉々として去ったから、結果的にはよかったのかもしれないが。

まさか、君たちは稀な属性なのか？

もしかして、フエチ？

いやいや、まさかな。

いあいあ、はすたあ。

複雑な気分だ。

さあ、寝よう。

私室に戻ったら、龍驤と叢雲に怒られた。

シャツを渡したのが逆鱗に触れたらしい。

かといって、私室に連れてくる訳にもいかないだろう。

なにかあったら、傷付くのは彼女たちだ。

「到頭、人間の女の子にまで手を出すんかいな、キミは。」

「そのシャツと同等のものを、こっちにも寄越しなさい。」

「君たちの発言が、いろいろな意味でおかしいんだけど。」

翌朝。

未明から雨模様の天気。

厨房へ行くと、私の手伝いをしたいという女の子が何人もいた。

アツチヨンプリケ！

んなアホな！

あり得へん！

なしてさ!?

そうだ、これは気の迷いだ。

環境が激変して、心の安寧を得るためにおっさんを頼りにする代償行為なのだ。

たぶん、そうだ。

そうだったらしいなあ。

その路線で話をするべ。

鳳翔間宮を始めとする艦娘たちが全員めっちゃこわい顔をしていて、李さんを始める国内外屈指の料理人たちはいずれも困惑した表情だ。

気持ちはありがたいが、ご飯をちゃんと食べなさいと説得して食堂へ向かわせる。

早急にうちの艦娘たちに言い含めないで。

険悪な雰囲気になったらもうたまらんど。

こわい笑顔の大淀と長門教官に緊急集会の開催を伝え、せつせと野菜炒めを作る。
浅漬けと野菜炒めは争奪戦になった。
梅雨明けはまだまだ遠いようである。

C C L I : キネマ・ウスケシとマンマユート隊

「あーあ、なんてやつだよ。みーんな殺しちまいがった。」

飄々としたトルメキア軍の参謀がスクリーンの中でぼやいた。

緊迫感溢れる場面の筈なのに、どこかとぼけて見える軍人だ。

出だしは好調。

『キネマ・ウスケシ』と急遽銘打った講堂にはみつしり艦娘やらそうでない者やらが詰め込まれていて、真剣に映画を鑑賞している。

ウスケシとはアイヌ語で『湾の端』を意味しており、それはかつて函館を指す言葉だった。

午前七時から始まった、今日一日限りのアニメーション映画大会。

やるぞやるぞやるぞ。

今日の開催に漕ぎ着けるまでの、大本営の抵抗はなんともかんともしぶとかった。文化庁はあっさりと許可をくれたのに。あちらさんは奨励までしてくれたのにな。

「いっそのこと、クーデターしちゃいなよ。助力するからさ。」などという、各方面からの様々な誘惑をはねのけるのは実に大変だった。

宇宙人や悪魔ってこわい。

大淀によるボールみたいなモノと青葉によるフィルム式カメラ並びにマイクロカセットテープ、そして鳳翔間宮李さんによるトリプラー。

硬軟織り交ぜてのセツトクがなんとか効いたようだ。

マンマユート隊隊長として、ちよちよいのちよいとやつたるでえ。

フレンチトーストと紅茶とヨーグルトとシリアルは、既に腹の中。

蜜柑の搾り汁もトマトの搾り汁も低温殺菌牛乳さえも飲み干した。

月餅とシベリアケーキを合間にかじりながら、頑張る所存ナリヨ。

売店の方から声が聞こえてくる。

「提督お手製のドングリクツッキーです。引換券一枚でクツキー一枚と交換します。名様一枚限り……ダメですよ、加賀教官、五枚とも出さないうでください。その子、二度目でしょ、その手は桑名の焼蛤（やきはまぐり）です。」

「えー、おせんにキャラメル、おせんにキャラメルはいかがですか。」

「本日限定のシベリアケーキです。間宮さんの作った羊羹と、鳳翔さんの作ったカステラ生地を使った一品です。」

「李さんの作った月餅の本日限定版です。残り僅かとなっております。」

「提督グッズの販売はこちらです。非合法的なモノは本日取り扱っておりませんので、ご注意ください。」

「群馬名物の焼きまんじゅうと秋田名物の豆腐カステラです。おひとつ如何ですか？」

「那珂ちゃんは絶対、絶対、ぜーったいに路線変更なんてしないだからねっ！」

「提督のラジオ番組編集編のCDです。NG編の未編集CDのオマケ付きです！」

「提督の書かれたライトノベルはこちらで販売しております。サインとオマケ付きで大変お買い得感があります。」

「提督ドラマDVDは残り僅かです。一名様一枚限りとさせていただきます。」

モギリのおっちゃんをしながらちらちらあちこち見ていたら、同じくモギリのおっちゃんをしているメトロン星人が興味津々の顔つきで言った。

「君は実に変わったことをするねえ。」

「いやー、あつはっは。」

お互い、冴えない中年男の姿だ。

マンマユート隊の隊長と副隊長。

彼もまた、酔狂だとは思っけど。

「まあ、悪くないとは思っよ。」

「お手伝いいただきまして、感謝感激雨霰で御座います。メトロンの科学力に感謝を。」
「やめてくれ、君からそんな風に言われるとなにやらむず痒くなってくるから。」

と、そこへ、ずいずいダンスが大人気の正規空母が我々の元へと近づいてきた。

「提督さん、翔鶴姉はこつちに来た？」

「佐世保の翔鶴さんなら来ましたよ。」

「そつかあ、ありがと。お姉、どつちに行つたのかなあ？」

キレのある動きにて、彼女は素早く去っていった。

今度、私のラジオ番組にも出演してもらおうかな？

しかし、本来の業務内容でない雑事や仕事が多い。

提督なのに。

昨日も随分写真を撮られた。

あの何枚も何枚も撮影していた、大井や古鷹や球磨や長良や多摩や五十鈴（いすず）や木曾や名取や北上や羽黒や利根や高雄や愛宕や川内や神通や扶桑山城たちは一体なんだったのだろうか。

手伝ってくれている、うちの事務室の元艦娘たちが激おこ状態だった。

しずまれー、しずまれー。

なにをそんなにあらぶっておられるのか。

積極的なおぜうさんたちには、ほとほと困つてしまふのだよ。

今日も今日とて、手をぎゅつと握られたり抱きつかれたり嘯かれたりしている。

ははは、みんな悪戯つ子だなあ。

小豆色のジャージを着た子たちまで、同じ真似をする子がいるじゃないか。

艦娘人間双方の教官が眉をひそめている。

線引きは難しい。

「今のは、教官をしている瑞鶴だよね。」

「ええ、相当気合いが入っていました。」

「彼女、まだあの子を翔鶴だと信じているようだね。」

「いいんじゃないですか、誰も不幸になりませんし。」

「そういうものかね。」

「そういうものです。」

あれ？

大和型戦艦の四名に艦娘たちが群がっているぞ。

あれは帰ってきてきてほしいと嘆願されているのか？

のらりくらりとかわしているようにさえ見えた。

出撃に出す訳にもいかないから演習を時折してもらっているが、先日は舞鶴の武蔵と

長門教官が本気の殴り合いを始めてとつても大変だった。

おいおい、誰が南海大決戦をやってくれと頼んだ。

ああいうのは資源的な意味でも心臓に悪いから、やらないで欲しい。

取り敢えず喧嘩両成敗で両名共一カ月減俸にした(舞鶴の許可は事前に取った)が、駆逐艦たちや巡洋艦たちが寛大な処分を嘆願してきたので軽めにしといた。

慕われているねえ。

竹竿に『直訴』の書状を付けるのは、やり過ぎだ。

思わず、受け取る時に笑ってしまったじゃないか。

「特務の青一才がつー！」

怒りの将軍が喚き散らす。

少年少女が活躍する王道物語。

モールス信号のくでりで、自ら解読している艦娘もいた。

盛り上がる、盛り上がる。

例の言葉の場面では全員立ち上がって隣りの子たちと手を握り合い、共にそれを唱和した。

気合いが入っているなあ。

昼食は幕の内弁当鶏の唐揚げ増量版。

弁当本体を上回る量の、鶏の唐揚げ。

弁当本体もみつしりと詰まっている。

ううむ、これは盛り過ぎで御座るよ。

空間騎兵隊仕様じゃないのか、これ。

迫力満点の弁当のご飯は麦も入っていて、栄養価重視だ。

山盛りじゃないか。

二合はありそうだ。

筑前煮や漬物やひじきの煮付けと一緒にがつがつ食べる。

惣菜もみつしり入っている。

おかずも充実し過ぎだべさ。

薬缶からお茶を注いで飲む。

メトロン星人は半ば呆れながら、わしわし食べてくれた。

ううむ、食べ過ぎで御座候。

キネマ・ウスケシの一日支配人として、モギリのおっちゃんとして、マンマユート隊

隊長として釈迦力に奮闘するぜ今日一日。

大本営も三日間くらい、開催させてくれたらよかったのに、ケチくさか。

まあ、一日取れただけでもよかったというべきかな。

これを機に、冬コミのように二日間開催に持ち込むんだべ。

あ、今は三日間開催か。

「……今ごろ、きつとどこかで泣いてるわ。どうしたらいいか、わからないの……。」
すすり泣いている子もいる。

森の妖精の物語。

エンディング・テーマは、観客席の子たちも大合唱だ。

何処かの那珂ちゃんが、皆の前で巧みに指揮していた。

どっかの衣笠がその様子を撮影している。

「ジャンク屋の野郎、サビ弾丸寄越しやがって。」

観客席から苦笑が漏れる。

誇り高き、飛行艇乗りたちの物語。

ちよつと大人向けっぽい戦士の話。

マンマユート団も大活躍なんだぜ。

マーレアドリア。

アドリア海万歳。

空母勢を中心に、航空機を扱う艦娘が勢揃いしていた。瑞鶴も翔鶴と一緒に観ていて、なんだか和んでしまう。

画面から一瞬、音が無くなる。

「飛べー」

飛翔するデッキブラシと魔女。

観客席からも歓声が上がった。

あの街は住んでみたいと思う。

あのパン屋に行ってみてみたいな。

夕食だ、夕食だ。

楽屋で中華定食。

烏賊団子に八宝菜、酢豚、玉子スープ、青椒肉絲、肉団子。

とどめは杏仁豆腐とマンゴープリン。

盛り付けさえも美しい。

ハオハオ。

わしわし食べる。

メトロン星人は此処でお役御免ナリ。

「まあ、無理し過ぎない程度に頑張りましたまえ。」

「ええ、モチのロンです。」

マンマユート隊は一人でもやるのだ。

「どつちに付く?」

「おんなあああ!」

軽快な音楽に乗って、黄色いファイアット・

チンクエチエントが画面狭しと疾走する。

手に汗握る怪盗の物語。

本日最後を飾るお話だ。

終わりよければすべてよし。

「いや、奴はとんでもないものを盗んでいきました。」

名台詞が練達の声優から放たれる。

瞬間、何名かが私を見つめてきた幻想に囚われた。
まさか。

いやいや、まさか。

ようやく、終わった。

嬉しそうに会話しながら帰る子たち。

一人なにか嘸み締めつつ帰る女の子。

明日への活力源にしようとする女子。

人も、人でないものも喜んでくれた。

開催に意味があつたのだと思いたい。

もう夜も更けてきた。

さて、さつさと片付けてとつと寝るべ。

客席へ行くと、自主的に手伝いをしようとする艦娘たちが待ち受けていた。

揃いの腕章。

戦いの序章。

我々の戦いはこれからだ。

霞の握ったおにぎりも、叢雲特製のおみおつけも、曙の焼いた玉子焼きもある。夜食の貯蔵は充分だがや。

「よし、マンマユート隊、揃ったな！」

「「「「「はい！」」」」」」

「ではこれより片付け作業を始めろぞ！」

終始黙って撮影していた大本営広報課の青葉が、私を見ながらニヤリと笑った。業務用ベーターテープ仕様の、重厚なビデオカメラを構え直して。

CCLII：しあわせは深海棲艦のにおい

島の暮らしは案外快適だ。

地元民の島民はそもそも深海棲艦を神様のようだと思っ
ているみたいで、彼らは毎日の貢ぎ物を欠かさない。

島の特産品は菓子作りに欠かせないので、実にありがたい。

俺のことはマレヒト的な扱いだ。

『白豚様』は止めて欲しいがな。

幸せは自分の手で掴み取るものだ
と教わってきたが、今の状況は
どう言えばいいのだろうか。

俺にはよくわからない。

島ではタロイモやバナナなどを昔から作っている。

それが彼らの伝統的な主食だ。

基本は葉に包んでの蒸し焼き。

バナナは加工して食べる方のやつだ。

砂糖黍や珈琲やそのまま食べるバナナなども栽培するようになったのは、自分たちの価値観に自信過剰な白人が支配してからのことらしい。

文明が彼らの生活を汚染したかということ、それは微妙だ。

それは飽くまでも付け焼き刃であって、今もつてきちんとは根付かないままだ。

地元民の生活は、昔ながらの時間で進んでゆく。

島内中央部の農園には蒸留所や製糖加工場が附随しており、ここでは黒糖やらラムやらが作られたり醸されたりだ。

それらはけっこう高品質であり、貰うと嬉しい品なのである。

ふふふつ、甘味の貯蓄は充分だ。

これでデザートが沢山作れるぞ。

魚を釣ったり、豚を水浴びさせたりしながらの暮らし。

スローライフ……なのか？

清潔好きな豚たちをぼんやり眺めながら、こんな暮らしも悪くないと考える。

闇に埋もれなかつただけ、ましなのかもしれない。

のっしのっしとワ級が近づいてきた。

なんだか最近、段々女性らしく進化してきているような気さえする。

ん？

気のせい……じゃない……だと？

彼女は赤いリボンを髪に付けていた。

風に揺れているそれが彼女の飾りだ。

いつの間に？

「提督、こんなところにいらっしやったのですね。」

可愛い声だ。

何故、彼女が部下の中で一番流暢に人間の言葉を喋るのだろうか？

「ブ、ブヒ……じゃない、す、少し考えごとをしていた。」

「夜伽の件ですか？」

「ブヒッ!？」

「ふふふ、冗談ですよ。ご飯が出来ましたので、お呼びに来ました。」

彼女はなんと、冗談が言えるのだ。

会話だけなら、既に艦娘級である。

彼女に手を引かれながら、我らの本拠へ向かう。

その手は、どんどん温かくなっている気がする。

出会った頃はあんなにも冷たかったのに。

やがて、我らの拠点が見えてきた。

最初の頃基地は丸太小屋に毛の生えた感じだったが、俺にくっついていた妖精たちが海ではぐれていた仲魔を引っ張ってきたのか、いつの間にか大所帯になって鎮守府みたいなものを建設した。

それは見事なまでの赤煉瓦。

島民たちは魔術だと驚いた。

ますます神様化が進む状況。

現在も増築中で、棟梁役の妖精曰く、これはまだ途中経過であつていずれは五大鎮守府を凌ぐ建築物にする腹積もりらしい。

いったい、なにと戦うつもりだ……。

嗚呼、人類か。

人類攻略拠点のひとつだもんな、此処。

この地は世界中から様々な物資が集まる集積地であり、此処から更に世界各地へ供給される物流拠点になっている。

倉庫が無駄なまでにでかい。

どうして、こうなった。

なにも欲しがらずに生きてゆくことは出来ない、とでもいうのか？

最近は開き直ったイムヤが以前所属していた潜水艦戦隊の艦娘たちを引き抜いて、はぐれ艦娘を勧誘したり物資収集したりしている。

沈んだ筈の五十鈴（いすず）がまっちょろけな姿で現れた時は大変驚いたが、この頃はかなり見慣れてきた。

艦娘なのかそうでないのか、どっちなのかは本人にもわからぬとか。

ま、俺の味方でいる限りは大丈夫かな？

但し、毎晩誘惑するのはやめて欲しい。

そんなに俺をブヒブヒ鳴かせたいのか。

みっともない程に鳴かされているけど。

艦娘の夜戦能力は、なんと激しいのか。

精強な艦娘と深海棲艦の混成艦隊が、七つの海を暴れまわる展開は目の前だ。

ヤバイヤバイヤバイ。

……いつそ、以前いた基地に今もいるだろう古参の艦娘たちを引き抜くか。

……いや、まだ大丈夫だ。

人間社会に戻る余地はある。

……あるよな？

……あるかな？

……ないかな。

……ないわな。

どないすつペ！

明くる日。

イムヤが、これ必要だよねと真顔でバイアグラを渡してきた時は甚だ困惑した。どこでこんなのを手に入れたんだ、と聞いたらタイのロアナプラだと返された。

ああ、あそこか。

ならば仕方ない。

ギラギラした目付きで、俺を見つめる部下たち。

混成艦隊。

我が軍団。

果てしなく青い空を見つめ、俺はため息をつく。

眩しい明日を夢見ながら、浅い眠りを毎夜過ごすしかないのか。

誰も泣かずに済む未来を模索しながら、指揮してゆくしかない。

抱きついてくる艦娘や深海棲艦たちの頭を撫でながら、そつとため息をついた。

何処かの艦娘たちがやって来た。
それっぽくない娘もいる艦隊か。

変なの。

珈琲や黒糖やバナナを引き渡す。

生活雑貨や保存食や戦闘糧食などが倉庫へ運ばれていった。

「ヤキガシ、オイテク。オチユーゲン。」

「お中元？ これはありがたい。提督に礼を言っておいてくれ。」

「ワカツタ。ヒシモチ、タベルカ？」

「お、おう。貰えるならいたたく。」

噂に聞く海防艦とやらか？

違和感はあるが。

ちっちゃな娘から大きな箱を手渡された。

「ジャア、カエル！」

「ああ、気を付けてな。」

彼女たちが去った後で開けてみたら、羊羹やら月餅やらパウンドケーキやらフィナンシェやらパウムクーヘンやらラムネ飴やらドングリクッキーやらが入っている。

箱の中身を見た部下たちは電光石火の勢いで手を伸ばし、次々に逸品だろう菓子を素

早く持ち去った。

残ったのは、ドンダグクツキーがたった一枚きり。

個包装をピリリと開け、素朴な作りの焼菓子を口に含む。

森の幸が口中に拡がった。

土の香り、樹の香り、大地の香り。

忘れてはならない、我らのセカイ。

素朴な味わい。

特別旨い訳でもないが、食べやすい味わいの品だ。

「提督、どうぞ。」

間髪を容れず、ワ級が珈琲を差し出した。

「ありがとう。」

微笑む彼女が眉をひそめないセカイこそ、なんとか目指したいものだ。

人間と深海棲艦が共存出来るセカイこそ、どうにか目指したいものだ。

やらまいか。

CCCLIII：小さなお菓子屋

元々大きな商いはしていなかったが、ここ何年も業界の売上げは不振気味であり、それは様々な業種でも同様の様相を見せている。

近くの商店街にある文房具屋でもそれは問題であり、半世紀以上営業していた同商店街のおもちや屋が店を畳んだ時は、地方都市へ疎開する老夫婦の送別会を賑々しく近所の中華料理店で開いた。

日本の首都として限らない繁栄を見せるかのように思われた東京も、今では五分の一ほどの人口を抱える地方都市に移り変わっていきこうとしていた。

そのことを認められない人たちも当然存在しており、彼らは過激な主張や否定を繰り返しては闇討ちに遭ったり仕事を失ったりしていた。

都内で猪や鹿の発見例があつた時は、かなりの扇情的報道合戦となつた。空間騎兵隊によつて捕まえられた野生動物は、かなりの紙面を賑わせる。

警視庁特車二課の第一第二の両小隊も、かなり振り回されたようだった。

地方に住む人たちの中には、その狂騒状態に対する批判がかなりあった。

戦前の山手線は一時間に何本も走っていたが、今では二本か三本走ればいい方だ。

地方を馬鹿にしていた人たちが、その地方に媚びる事態さえ見受けられた。

人とは浅ましい生き物だ。

私のご先祖様は江戸時代からこの辺りで小さな和菓子屋を営んでいたそうで、今も根強く愛されている。

戦争になつてから先代の祖父が張りきる姿を見せるようになり、今日も朝早くから館この仕込みに取りかかっていた。

うちの館を使つてくれるパン屋も複数存在しており、定期的に沢山買つてくれるお客さんもいる。

その穏やかそうな人物は、北海道の函館鎮守府で提督をしているそうだ。

軍人ぼく見えず、サフリーマンぼいが、うちの先代や当代と話がとても合うようで、豆かんなどを食べながら話に興じる姿もたまに見かける。

試食も時々頼まれるようで、何故かというと彼が太鼓判を捺した菓子はよく売れるようになるからだ。

特に若い女の子たちがそうした菓子を沢山買つてゆき、何故かお盆休みの頃と年末が特によく売れる。

早朝から並ぶ子が何人もいて、そうした時は急ぎ店を開けたり、茶を振る舞ったりしている。

京都や広島や長崎といった遠隔地からわざわざ訪れる子もいて、嬉しい限りだ。

つついとおまけを付けてしまうが、大量に買ってくれる子たちにはなにかしてあげたものだ。

突発的に注文が入ると先代や当代の負けず嫌いな魂が燃焼するようで、そういうところは私も割と好ましく思っている。

提督は若い子の好みがわかるのだろうな、たぶん。

小皿をいつも要求されるので不思議に思っていたら、彼に付いてくる妖精たちが食べるらしい。

面白い冗談だ。

祖父や父は信じているみたいだが。

確かに、小皿の中身はいつの間にか無くなっている。
よくわからないな。

函館か。

一度行つてみたいものだ。

提督からいつもいただく間宮羊羹や月餅やフィナンシェなどは常に近隣の菓子職人

連中の垂涎（すいぜん）の的であり、貰ったことをメールで報告すると和菓子洋菓子問わずに老若男女の職人たちが集（つど）って品評会が開催される。

提督手製のドングリクツキーも素朴で悪くなかった。

有名ホテルや大人気菓子店などから、品評会へ参加してもよいかとの打診があった時は心底驚いた。

函館鎮守府は参加枠があつて、倍率がとんでもないことになっているそう。

その辺りの判断は先代や当代に丸投げしている。

チャライ有名菓子職人が品評会に参加したいと懇願してきたのだが、先代と当代は彼を一目見るなり追い払った。

「けえりやがれ、このとんちきー」

「今すぐ、お引き取りください。」

にべもない感じだった。

マスメディアにかなり露出している系統の人々は殆ど直ぐ様はねられていて、祖父と父の直観力にいつも驚かされる。

「おい、あいつ、小さな菓子屋を散々馬鹿にしていただろ。片仮名名前の雑誌で読んだぞ。なんで平気な顔してここへ来れるんだ？」

「鳥頭なんですよ、きつと。」

「鶏のトサカは赤いだろ。あいつはキンキラキンだったぞ。」

「きつと、血の気が失せたんですよ。父さんに怒鳴られて。」

「金勘定は上手い癖にヤワな奴だな。」

和菓子をろくに食べたことの無い子供が増えているという。

館この嫌いな両親が子供に食べさせない事例もあるという。

それでも我々は毎日情熱を注いで、和菓子を作るしかない。

「なに、大平洋戦争の頃に比べたら格段に安全な状況だよ。」

大正生まれのハイカラ老人は、なんとも元気なことだ。

親爺は寡黙な職人気質で、じつくりと和生菓子を作っている。

これがまた旨くてお手頃価格なのだ。

今の物価を考えると採算は厳しいが。

廃棄品を極力出さないようにして、なんとか凌いでいる。

ネオ和菓子とかいう、なんだか得体の知れないモノが流行っているという。

祖父も親爺も興味を示さないが、何故かそのお先棒を担ぐ胡散臭い人間が度々やって来て、巧言令色少なきかな仁を自ら演じていた。

「絶対儲かる。」とか「この機を逃すともう二度と訪れません。」とか、まるで狡猾な詐欺

師みたいなことを彼らはべらべら話してうんざりする。

かなり粘られた後で丁寧にお断りしたら、「きつと後悔されますよ。」などと全員似た捨て台詞を述べて帰っていった。

彼らの余りの傍若無人ぶりに、娘は毎度塩を撒くようになった。

うはは。

「大平洋戦争が終わった後にも、ああいう輩はいた。」

先代が言った。

「バブルの時にもあんなのはいたよ。」

これは親爺だ。

祖母やお袋や妻は肩をすくめるだけだ。

儲け話を不意にしたのかもしれないが、人として失ってはならないものを失わなかっただけマシなのかもしれない。

大本営の広報課に所属しているとかいう娘さんがやって来て、店をドラマの撮影に使いたいと言いつ出した。

失われゆく東京のよきものを、映像を通して知らしめたいという趣旨だった。そうか。

東京はもうそんな事態にまで陥っているのか。

今まで地方の問題だったものが、現在進行形で東京に降りかかっているんだな。

渋い顔をする祖父と親爺。

そっくりだ。

血が繋がっているなあ、と妙に感心する。

妻や子供たちに言わせると私も同類だが。

ひなびた和菓子屋などを撮影して、なにか得になるのだろうか？

うちを選んだ理由を聞くと、函館鎮守府の提督がうちを鼻屑（ひいき）にしてくれているからだという。

提督の主演する映像作品は、艦娘たちにとって垂涎の的なのだとか。

東京の情緒ある場所を撮影した『東京おやつ探訪記』として、この夏有明の同人誌即売会で全国の人々に販売する所存なのだと言った。彼女は真剣に言った。

「あんたら艦娘が一所懸命やってくれているから、俺たちがこうして無事に生活出来ているのは知っている。」

先代が口を開く。

「まあ、無理を言われなかったら協力しましょうかね。」

当代が口を開く。

三人が私を見つめる。

「わかりました。ご協力しましょう。」

我が小さな和菓子屋内のちっちゃな茶屋。

ちよつと一息入れる場所として、昔からお客さんたちに利用されていた。

老若男女問わない憩いの場であることは、この小さな店の誇りでもある。

お客さんが途切れた午後の時間。

その合間を縫って撮影が始まる。

興味津々の御近所さんたちや、艦娘らしき娘さんたちで鈴なりになった店前。

娘や息子たちも、同じ学校の子たちと一緒に撮影したり、大興奮している。

そんなに興奮するほどのことかね？

娘や息子たちは彼に握手して貰ったり一緒に撮影したり、サインを貰って大喜びしたりしている。

イエーイ、と集団になって撮影していた。

艦娘らしき娘さんたちの不機嫌度が上がっているようにも見えるが、気のせいだろう。

提督があたふたした感じで娘さんたちへ手を振って、圧力は弱まっていくかに見える。

た。

近所の奥さん連中が提督の男振りについて論議しているが、概ね好意的だ。

男前という評価には至っていないようだが、若い世代にはなにか訴えかけるものがあるのかもしれない。

緊張した面持ちの提督が、茶屋で大変恐縮していた。

お偉いさんのなところが何処にも無い。

個人的に好感を覚える。

横須賀にある大本営へ行った時は、うちで買い物するようになしてくれているとか。

実にありがたいことだ。

大きなテープ式のビデオカメラを構えたり録音機器を向けたりと、撮影人員も準備万端の様様。

羊羹や夏向けの和生菓子や水羊羹。

干菓子里に寒天飴にシベリアケーキ。

ロシアケーキにアイスキャンデー。

定番のどら焼ききんつば団子大福。

こちらの用意はすべて調っている。

先ずは豆かんから行こうかな。

それとも葛きりから行こうか。
さあ、どんどこい。

C C L IV : ウルトラホーク復活作戦

半世紀の昔、地球は宇宙人たちに狙われていた。

それは、一種の高等遊戯だったのかもしれない。

その侵略者たちを、見事なくらい返り討ちにする恒星観測員がいた。

その頃は一種の乱戦状態で、正義の味方や悪の秘密結社も含めて日夜全国各地で彼らは戦っていた。

その『彼』の助力をした組織があった。

ウルトラ警務隊という組織が昔あった。

彼らは地球を守るために勇躍奮闘した。

そう聞いている。

私にどこことなく似た隊員がいたという。

今となつては古い話。

現代はそのことを知らない者さえいる。

平和とは、なにもかも失うことなのか。
今も幾らかは狙われているというのに。

たった半世紀昔の話だが、喉元過ぎれば熱さ忘れるのが人の常。
今は深海棲艦に四苦八苦している。

歴史は繰り返す。

人の判断は大して変わらない。

同じ過ちを繰り返すのが人間。

だがそれを認めないのも人間。

人間。

人間。

人間。

この愚かで罪作りな哺乳類は、何度も何度も同じ過ちを繰り返す。
自分自身の価値観を根拠なく不可侵のものと思ひ定め、邁進する。
借り物の考え方ということも自覚しないままに絶望の海へと逝く。

廃墟となった、二子山基地の探訪会に参加する。

ウルトラ警務隊の本拠地だ。

ニューヨークやパリなどにも基地はあったとか。

艦娘の随伴希望が殺到したけれども、参加枠が取れずに全員悔し涙を飲んだらしい。そうか。

そんなに基地跡を見たかったのか。

公式映像では物足りないのだろう。

ハンデイクラムを渡され、撮影してくることを約束させられた。

神奈川県足柄下郡箱根町。

其処に旧ウルトラ警務隊基地跡が今も存在する。

運転手のマーヤが軽快に走らせるのは、かつて警務隊で使われていた特殊車輛のポインター。

完全修復された鉄の猟犬。

函館鎮守府で甦った車輛。

基地跡前には駐車場など無いから町役場でシャトルバスに乗り替え、他の見学者たちと乗り合わせて基地跡内部へ入ってゆく。

旧ドイツ軍が作り上げたブンカーよりも強度の高い設備は、経年劣化でどんどん傷んできていた。

ヘルメットをかぶり、案内人に引率されながら安全地帯のみを歩いてゆく。

「フォース・ゲート、オープン。フォース・ゲート、オープン。クイッ………」
気分を高めるためか、実際に使われた放送が時折スピーカーから流れてくる。

探訪会最大の目玉は、大気圏離脱が可能な大型戦闘機。

宇宙人の技術力を用いて作られたウルトラホーク一号は、今もピカピカのままだった。

飽くまでも外見だけが。

現在、何人もの技術者たちが金属の翼持つ機体を甦らせようとしている。
戦闘機が生き返れば、宇宙ステーションの復活もまた可能になるだろう。

「これを再び飛べるように修復します。」

祖父や父を警務隊関係者に持つ航空技術者たちは誇りに胸を反らし、夢に瞳を輝かせてそう言った。

こんな骨董品を？

それが浪漫ですよ、とはにかみながら彼らは言った。

中年の人間に偽装したメトロン星人が、感慨無量の感じで周囲を見渡す。

「懐かしいねえ。」

「以前来たことがあるんですか？」

「ああ、ペガッサと一緒に来た。」

「へえ。」

「『彼』に追いかけて回されたものだよ。」

「彼、ですか。」

「ああ、潜入がバレてしまったのでね。」

「それはそれは、大変だったでしょう。」

「そりゃあそうさ。宇宙ブーメランは投げられるし、エメリウム光線は放たれるしで散々だったよ。」

「ははあ。」

「メトロンの科学力が無かったら、真つ二つになっていただろう。」

「指パッチン、つてな感じで？」

「そりゃ、ヨミさんの配下だ。」

「確か、鳥取砂丘にあるバベルの塔に住まわれているんでしたか？」
「砂の嵐に隠されているのさ。」

稀代の天才、成田博士が設計したウルトラホーク一号。

高山設計士の見事な立体観念が、この美しい機体を現実にした。

銀色の大型戦闘機。

大気圏からの離脱も可能な機体。

函館鎮守府の雪屋博士と紙屋博士も、この復活計画に参加してみたい意向を私に伝えてきた。

ポインターを復活させた両名の気持ちはわかる。

何処かの明石や夕張が都合を付けて仮着任してくれたならば、ここへ来てもらってもいいだろう。

そう言えば、現在大本営と自衛隊と篠原重工などが四脚戦車を開発中らしい。

その標準的な高さはおよそ一二メートル。

一二〇ミリ滑腔砲装備の基本仕様に、一四〇ミリ滑腔砲装備の戦闘強化仕様。

そして、対空用として三五ミリ対空機関砲を二門装備した『スカイシューター』と、二〇ミリ対空機関砲を四門装備した『フラック』の計四機種が開発研究中とか。

戦闘機や戦闘ヘリから発射される無線型噴進誘導弾のいいだとの意見が多く、『高いオモチャ』『SFかぶれ』『漫画やアニメじゃないんだぞ』などと酷評されている。

本体基幹部に各種土木工作機械を積載した『おつきな土精霊ノーム君』シリーズ（ノームⅠ～Ⅵ）が施設科へ試験的に配備され、近年の災害による被災地派遣で有能ぶりを示

しているようだ。

不整地走破性が高いという。

特徴的な大型前照灯が目玉みたいにも見えて、子供たちに人気があるとか。

半世紀の昔、地球は宇宙人たちに狙われていた。

メトロン星人を含む、彼らの地球侵略計画はことごとく失敗に終わった。

地球人同士の信頼感を利用しようとした彼らは、だが、人間同士の差別や不信感は今一つ理解出来なかった。

彼ら宇宙人たちはそれぞれ結束力が強く、同じ星の同胞を励ましあい、助け合うことがごくごく当たり前だ。

彼らは同じ地球に住む知的生命体同士がごく自然に罵り合いがみ合うことを知り、理解に苦しんだらしい。

我々人類はお互いを信頼していない。

明日滅びることになったとしても、それは変わらないだろう。
おそらく。

画 CCLV：コロスケーノー・フォーティーン～提督暗殺計画

国際的暗殺者の、コロスケーノー・フォーティーン。

その腕前はおそろしい程で、用心を重ねた筈の要人が用心棒共々射殺体と化することもしばしばである。

世界的な犯罪組織やならず者国家などが高額懸賞金を幾度も幾度も提示し賞金稼ぎたちが何度も何度も何度も討伐に向かっているにもかかわらず、今も彼はもうとうと殺人業務に従事している。

五〇年ほど昔に四〇代と言われてから、彼は今も四〇代の風貌だ。

それは実に奇妙な事実である。

二代目だ複製体だいや不老不死なんだと憶測が飛び交ってはいるものの、決定的な原因は誰も掴めていない。

カウント・塔ノ沢を名乗る、神出鬼没の謎の東洋人。

駆け出しの頃は、かなりお喋りだったとの説もある。

ある国の王家の血を引いているとも、伝説的軍人の息子とも。

本人曰く、ウサギのように臆病だとか。

目付きの鋭い彼は現在、依頼人と会って標的を確認していた。

依頼した男は立派な洋服を着ていて、とても偉そうな感じだ。

「……この男が標的か？」

「そうだ。こいつが将来厄介な疫病神になる前に、その息の根を断つ。任せたぞ、クロス

ケーノー・フォーティーン。」

写真に写っているのは四〇代と思われる、中庸な顔立ちの日本人男性。

「わかった、やってみよう……。」

カウント・塔ノ沢は仕事を行う前に、エッチなことを必ずする。

ねつとりぐつちよりぐつちよんちよんと、そうした行為を行う。

大いなる根つこと房中術を駆使し、女性をアヘアヘアヒハした。

誘ってくる美女は大抵拒まず、快樂の水底へ沈めてしまうのだ。

彼は美しい女以外、抱こうとしない。

今回絶頂に何度も至らしめた女性もその例外ではなく、美しい。

それがなんらかの矜持によるものなのか、或いは嗜好なのか一切わかっていない。そうした殺人前の儀式も無事に終わり、彼は港町へ渡つていく。

標的は常に、艦娘もしくは忍者か東欧や南米の有名な戦闘員と共にいる。護衛の専門家や同業者の存在は、作戦遂行を困難にさせる要因であった。

それは明らかに暗殺者を警戒した警備態勢であり、針の穴を通すがごとく精妙な射術の持ち主たる彼でも撃ち殺すのは困難な程に思えた。

しかも、目的の存在する鎮守府は常に空母系艦娘が数名航空機を飛ばしており、仮に全機無力化し空母系艦娘を全員殺害したとしても、護衛らしき駆逐艦や巡洋艦からの反撃をすべてかわせるとは限らない。

一見、難攻不落に思える基地。

ならば、そこから出せばいい。

標的の基地司令官は時折、無防備に街へ繰り出すらしい。

基地の近くにある個人店へ、こっそり立ち寄る癖もある。

それは塔ノ沢にとつて、大変都合な習慣に考えられた。

射線通るなら、殺せぬ者無し。

下見のつもりで、暗殺者はその標的お気に入りという店に入った。

焼きたてのパイのなんとも香ばしいにおいが、店内に満ちている。

店員は見当たらない。

さてどうやって殺そうかと思いを巡らせる彼は、カタリ、と背後の物音に反応して内懐に隠し持っていた円筒型弾倉式拳銃を素早く抜く。

三八口径の古い短銃身拳銃はかなり使い込まれており、何人もの命を奪ってきた歴戦の兵器だ。

背後のテーブルには切り分けられたパイが皿に載っていて、その傍らには珈琲に満たされたカップが置かれている。

ほんの数瞬前までは、あのテーブルの上にはなにも無かった。彼は罨を疑ったが、相変わらず人の気配は全然感じられない。死線を何度もくぐった彼にさえ、殺気もなにも感じられない。だが、本能的に危険を感じた彼はこの場からの逃走を試みる。しかし、それは上手いかなかった。

男は連絡を待っている。

相当の額を使ったのだ。

暗殺が上手いきませんでしたでは済まない。

この作戦には多くの人間が関わっている。
今更後戻りすることなど出来ない状況だ。

彼らが多数派になるための、謂わば必要事項。

国を正さねばならない。

不確定要素は徹底的に無くすべきだ。

あの冴えない中年提督を排除せねばいけない。

もしもあの一見全然モテない男が艦娘たちを本気で何名も落とすし、国に反旗を翻したなら……。

男は身震いする。

あの暗殺者が成功したら、あいつも始末しよう。

なに、殺し方は幾らでもある。

化け物みたいな奴の未来の標的になるなんぞは、真つ平御免だからな。

後顧の憂いは絶っておくべきだろう。

死ね。

死ね。

みんな、死んでしまえばいい。

生き残るのは我々なのだから。

扉を叩く音がした。

腹心の声が聞こえる。

許可を出すと、白いブラウスに紺のスカートを身に付けた少女が、巨体の腹心を片手で持ち上げながら入室してきた。

につこり笑う彼女は、巡洋艦級艦娘だったか。

彼女の眼鏡がピカリと光る、お前も死ぬかと瞳が語る。

ボールのようなものを右手に持ち、左手で腹心の体を掴んでいた。

ひいつ。

思わず、男の喉から恐怖の声が洩れる。

何時から、この暗殺計画が漏れていた？

反射的に彼は立ち上がる。

パリン！

ピシッ！

超強化型防弾硝子製窓を貫いた。338ラプア・マグナムが依頼人だった男の頭部へ到達し、その生命活動を永遠に停止させた。

カウント・塔ノ沢は騙した依頼人が倒れるのをツァイス製光学式望遠照準器越しに見

届けると、長々距離狙撃用に作られたアーマライトの特製小銃を分解してアタツシエケースに詰め込み、その場を静かに立ち去る。

今夜はどんな女性を抱こうかと考えつつ。

三人くらい同時に相手するのも悪くない。

この気持ちのたかぶりを鎮めねばならぬ。

既に彼は臨戦態勢準備完了覚悟完了状態。

どんな女性であろうと陥落させるだろう。

またひなびた製麺所で饅頭を食べようか。

以前仕事で立ち寄った、四国の地方都市。

業務前後に、何軒もの店で食べまくった。

あれはいい。

とてもいい。

香川で食べる讃岐うどんは本当に最高だ。

製麺所巡りをするのも悪くないであろう。

ニヒルに笑みを浮かべ、彼は闇の中に溶けていった。

コロスケノー・フォーティーン。

彼に狙われ、殺されなかった人間は殆ど存在しない。

C C L V I : 闘いの波間に泡と消えても

「スパークル・トーネード！」

朧月夜の採石場に蠢（うごめ）く、幾つもの異形。

死闘の舞台。

一対多の戦闘。

双方、息が荒い。

やがて、電気鰻と飛蝗（ばった）を掛け合わせし改造人間の必殺技が放たれた。

電磁波の嵐が改造人間の周囲にいた屈強の戦闘員たちや古参の怪人を巻き込み、激し

い怒号を周囲に響かせる。

或いは、それらは悲鳴。

逃亡中の改造人間の始末に動員された秘密結社の構成員たちは、焦げたにおいを放ち

ながら次々に倒れ伏した。

よろよろと、尚も闘志失わぬ瞳でシヨツカーの裏切者に制裁を加えようとする手練れ

の上級怪人。

一撃なりと、痛打を与えねばならぬ。

半ば折れし爪を振り上げた彼の胴体を、逃亡者の手刀が貫いた。

死した戦闘員たちは体内のナノマシンの判断により、次々とその肉体や戦闘服を溶解させていく。

怪人も程なく、同様の結末を迎えるだろう。

死して屍（しかばね）残す者無し。

倒れた怪人が逃亡者へ話しかける。

「ら、雷王。に……逃げてもいつかは、死ぬの……が定めぞ。」

「それでも、俺は闘い続ける。」

「愚か……者め。偉大なるシヨツカーの……理念すら、り……理解出来ぬ、か。」

「出来んな。俺はお前と違う。」

「な、な……らば、ぶ……無様に朽ち……果てるまで闘い続ける……がいい……。」

「ああ。そうするさ。」

ニヤリと笑い、かつての友は泡と消えた。

「雪屋や紙屋を頼る訳にもいかんか。」

彼らは函館鎮守府で博士として働いているという。

自分が訪ねてしまえば、迷惑がかかるに違いない。

茂城（もしろ）猛はため息を吐いた。

親友の隼人は生きているのだろうか？

あの逞しい胸板。

爽やかな笑顔。

きめ細やかな心遣い。

別れた時は元気そうだったが、無事でいて欲しいと思う。

先輩は息災らしいのだが、今もってその所在は掴めない。

シヨツカーの諜報力は侮れない故、油断禁物慢心禁止だ。

『大使』、『大佐』、『博士』、『少将』、『アストロ』。

シヨツカーの幹部たち。

いずれも異能強く、異彩溢れる異才たち。

彼らを全員撃破する道は果てしなく遠い。

シヨツカーの真の強さは、基幹戦力の戦闘員の育成を怠らないところにある。

合理化省力化少数精鋭化が最近の日本企業に於ける特徴だが、人材育成を怠った企業

に明るい未来は訪れない。

それは悪の秘密結社でも同様だ。

神奈川県川崎市の借家に拠点を置く某秘密結社は近所付き合いがよく、その責任者は人格者で配下たちに大変慕われているという。

また、鳥取県の鳥取砂丘内に本拠を有する組織の首領は部下思いで、配下たちは首領の為なら喜んで命を投げ出すそう。

思い悩んだ末、痕跡を残さないように気を付けながら猛は北へ向かうことに決めた。

愛用している強化服は傷だらけで、自己修復機能は既に破綻していた。

何処かで新しいモノを調達するか、この中古品を完全に直すしかない。

そうでなければ、以降の過酷な闘いを生き残れよう筈も無いのは明白。

苦渋の決断の末に彼は偽装した改造モーターサイクルを駆って、関東圏に点在するシヨツカーの詰所屯所工場直営酒場独身寮訓練施設芸能事務所カストリ雑誌編集部及びエツチな店を破壊しまくった。

その後大本営警察自衛隊に通報し、結果的に関東地区を大混乱へ陥れる。

那珂ちゃんがアイドルを辞めるという誤報も流れ、那珂ちゃんのファンが大混乱に陥るといふ一幕もあった。

その為、那珂ちゃんは急遽函館提督のラジオ番組に出演し、その噂が事実無根であることを伝える。

記者会見での毅然とした態度は新たなる那珂ちゃんファンを何人も生み出し、『那珂ちゃんのファン、やります！』という標語まで発生した。

この放送によって事態は急速に収束し、根も葉もない噂は終息する。

その代わりなのかどうかはわからないが、シヨツカー系芸能事務所所属のモデルたちが人気芸能人や政治家や有名社長などとお泊まりデートしていたことをすっぱ抜かれ、いろいろなところが炎上した。

騒乱を待ち望んで何時でも暴れまわることが準備完了な者たちは激しく吠え叫び、騒ぎを助長する。

騒動を煽るのが大好きな彼らは法的に規制されることも無いことから、まるで遊びに参加するかのような気軽さで他者を傷つけてゆく。

一方的に他者を叩きのめす快楽に汚染された彼らは、一種の中毒状態にあるとも言えた。

いずれ天罰を喰らうだろうが、神仏をおそれぬ者たちは己の正当性を疑いもせず凶暴な加害者と化し、言葉の刃で辺り構わず切り刻みながら電脳世界を暴れ回った。

そしてそれらは、異星人や悪魔たちの耳目を集める結果となる。

派手な動きをした者程、早期になにかしらの接触があるだろう。

破滅に至る道へのパスポートを、手渡されることになるだろう。

とある地方都市駅前にあるホテルの一室。

意外と充実した朝食を食べ終えた猛は、装備の点検に余念が無かった。

あのうどんは旨かったと考えつつ。

髪型を変え、服装も一新し、敬愛する隼人から別れの際に貰った真つ赤なスカーフは大切に傷多き旅行鞆へ仕舞い込む。

少しくたびれた感じの旧車へと新しく偽装したモーターサイクルは、とても何名もの戦闘員や怪人をほふった歴戦の鉄騎には見えないだろう。

愛車のシクローン。

早めに分解して点検修理した方がいい。

『彼』も自分も血まみれだな、と猛は自嘲する。

快晴の空の下、青森県と道南を結ぶ船が定刻通りに北進を開始した。

青函連絡船の船上で津軽海峡をぼおつと眺めながら、猛はこれまでの激闘に思いを馳せる。

一時期相棒だった滝とは乱戦の中ではぐれてしまったが、生きていてもらいたいと考えた。

最後に見かけた時は怪人たちを何名も育て上げたハリケーン・リツキーと死闘を演じていたけれども、果たしてどうなったのだろうか？

不意にあの拉致担当の女性陣からされた様々なことを思い出し、思わず彼は赤面する。

うぶな猛にとつて、それはあまりにも刺激的な経験だったからだ。

手を握られたり、肩を抱かれたり、それから……………。

あの女たちは今も生きているだろうか。

感傷的になりながら、彼は強い風に身を任せる。

船の中には人が多いようだ。

函館は丁度港まつりの時期。

深海棲艦との戦いが続いているとは言え、緊張ばかりの自粛ばかりでは生きにくい。

なにかでガス抜きする必要がある。

秋田や仙台や青森で夏祭りをそれなりに楽しんだ彼は、人が笑顔で生きていける世界を作りあげようと改めて誓った。

宿泊したホテルでたまたま見た、『変身駆逐艦嵐』という朝の子供向け特撮番組に思わず引き込まれた自分自身へ内心苦笑いしつつ。

女の子の下穿きがちらちら見えるのはどうかと思つたが、敵の幹部の下穿きも同じく

ちらちら見えていたのでそういう演出なのかもしれないと彼は考えた。

そろそろ函館だ。

港が視認出来る程の位置にある。

護衛の艦娘たちも、どことなく軽やかに海上を滑走しているかに見えた。

「あの、ちよつといいですか？」

数秒して、その声は自分に向けられたものだど理解した猛は振り向いた。

そこには見知らぬ少女たちがいる。

多分、中学生や高校生たちだろう。

どの子も美しくアイドルみたいだ。

観光と港まつりを兼ねて来たのか？

先頭にいる少女が猛を見て呟いた。

「やっぱり、なのです。」

やっぱり？

やっぱり、とはなんなのだろう？

少女たちに囲まれ、猛は戸惑う。

彼女たちに見覚えは無いし、シヨツカーの手先にも見えないからだ。

一体、彼女たちは何者だろうか？
そして、少女たちは一斉砲撃を浴びせるかの如くに彼へ話しかけた。

CCLVII：白桃とマスカット

世界最高峰の白桃とマスカット・オブ・アレキサンドリアを産する岡山県。

備前備中作州より成るその地域は大いなる果物王国であり、良質の小豆に白小豆にさげに米やお茶や和菓子や日本酒や備前刀や備前焼や学生服の名産地でもある。

デニムの品質の高さが世界的な繊維の国であり、近年は倉敷産マスキングテープが文房具好きや雑貨好きなどに着目されている。

日本三大名園のひとつ後楽園と複数の美術館博物館群が目白押したる大都会岡山を首都とし、日本初の西洋式美術館と推理小説の舞台に頻出する天領倉敷、戦国期の山城を有する古都高梁（たかはし）と、昔『燃える岡山！』などと標語を出して失敗した前例から現在は『晴れの国』を標榜している。

尚、地味に岡山市のパン購入額が全国有数級であることは、あまり知られていない。

友人の刀鍛冶である備前正兼が頑健なバールのようなモノや追加注文分の包丁を

打ってくれたので、呉鎮守府へ寄ったついでに立ち寄った。

土産はマルセイ・バターサンド、トラピスト・クッキー、函館メロン、富良野メロン、海産物各種に函館鎮守府甘味詰め合わせ。

既に彼の家へ郵送済みだ。

メロンはクール便でカチカチに固いモノ。

ここいらの気温ではすぐ熟してしまふからな。

友人宅の裏庭でボールのようなモノを素振りする大淀。

普段使いの品だから、使い心地を確かめるのは当然だ。

工場製も悪くはないそうだが、刀鍛冶の鍛えたモノは一味も二味も違うそうである。

私にはわからないな。

柳生宗矩の剣術を研究しているらしい友人が彼女の太刀筋を見て、ほう、とため息を吐いた。

元剣道部の彼が言う。

「ありゃあ、相当使うのう。」

確かに、動きが速すぎてよくわからん。

風魔とか夜叉とか甲賀伊賀の忍者たちの動きもよくわからないし。

あの夜の模擬戦には驚いた。

あの激戦が峰打ちだなんて。

「そうかね。」

「そうじゃ。動きが一切ぶれとらんじやろうが。」

「ああ、そうだな。」

「艦娘ゆうのは、太刀とか打ち刀なんてモンも使うんか？」

「そうだな、確かに一部の艦娘は刀や槍を装備している。」

「武士なんか？」

「そうかもな。」

瑞鶴の函館五稜郭決戦仕様みたいな恰好を初めて見た時は、思わず吹きそうになった。

噂ではフルクロス仕様があるとか無いとか。

そう言えば、うちの航空戦艦も刀を使うな。

叢雲や龍田は槍を使うし、小笠原のメリケン艦娘のオクラホマはトマホークを使う。

夕飯の時間。

待ってたぞい。

比較的近場にあるというビール工場限定生産版麦酒を友と呑み、地酒を艦娘たちとも酌み交わす。

よきかな、よきかな。

友人の奥方が白桃と葡萄を皿に載せて持ってきた。

相変わらずまっしろけだ。

鳳翔間宮や随伴艦たちが歓声を上げる。

嗚呼、こういった珠玉の果物を函館に持ち帰らねば。

無邪気に私の膝の上で喜ぶ二名の駆逐艦たち。

交代しながらその位置を他の艦種に譲らない。

大した連携力だ。

背中にのしかかる巡洋艦群。

空母群に戦艦たちが密着してきて、身動き取れぬ。

君たち、自重したまえ。

蒸し暑くてたまらないので、早くどいて欲しいものだ。

そんなに密着してどうするつもりだ？

酔ってはもうにもならぬので、客間で雑魚寝させてもらった。

だが、皆の寝相が思った以上に悪く、寝惚けたりなんたりで次々……まあ、その……

とても困つてしまう。

『瀬戸のべた風（なぎ）』によつて夜も蒸し暑く、結局あまり寝られなかつた。やはり道南とはまるで氣候が違うな。

翌朝、ご飯に味噌汁に焼き魚に玉子焼きという日本の朝食をいただいた。

そして、メリケンの古きデザートを参考にしたという白桃アレキサンドリアバナナスプリットが鳳翔問宮によつて作られた。

呉鎮守府の先輩から貰つた台湾バナナに岡山県産の清水白桃とマスカット・オブ・アレキサンドリア、そして生クリームやバニラアイスクリームや木の実やチョコレートソースを使つた実に贅沢な一品。

バナナスプリットとは、一本のバナナを縦に二つ割りして丸ごと使う甘味。

東京の某老舗ホテルが経営困難への対抗策として打ち出した、復刻献立祭にて見事蘇つた古典的甘味。

正に蘇る金狼。

それは昔を知る者知らぬ者双方に、強い影響と衝撃を与えたという。

駆逐艦の子たちのみならず、巡洋艦や空母や戦艦たちまで私へアーンしてくるものだから大変困つた。

もう少し自重したまえ。

私はガチョウではないのだぞ。

今回二艦隊もいるのだ。

一名一名の差し出す量が少なくても、合計するとその量はすこぶる多くなる。

太らせてどうする気だ。

お返しにそのスプーンでアーンしてくださいと言ってくるもの故に、とても困った。

結局、全員要望通りに匙を口中へ突っ込んだが。

友人と彼の奥方からとても生暖かい視線を貰ったので、余計に暑くなった気がする。

さて、北海道に帰ろう。

いざ帰らんいざ帰らん。

甘き夏よ、疾く来たれ。

CCLVIII：なついろこみけつと

老朽化がかなり進んでいる、東京は有明にたたずむビッグサイト。

その衰えゆく国際的催事場に集まった戦士たちがいる。

心までヲタク色に武装した勇者たちが聖地に集結する。

そう。

かつて三日間で五〇万とも六〇万とも言われる人々を集めた同人誌即売会が、この地にて今年の夏も開催されるのだ。

コミックマーケット。

コミケットともコミケとも呼ばれる、かつての民間開催としては世界最大規模の催し。

今は最盛期の頃ほど無茶苦茶で無い。

オイニーがゴイスーな人は、昔同様にちらほらおられるが。

中には、激しい威力の化学兵器めいたナニカを醸し出している人までいた。

本人は気にならないのだろうか？

彼らは秘密結社から派遣された怪人の如くに、独特な毒々しいスメルを周囲に放出している。

どうして彼らは入浴しないのか？

人口が激減し、流通網が潰滅し、物価高に毎日嘆息しようとも、空想作品愛好家たちの心の炎は止まらない。

水筒タオル保冷剤携帯糧食などを持ち歩き、年二回行われる祭りに参加する。

半世紀以上昔の作品を今も愛する人、新作ゲームの同人誌を楽しみにしている人、三世代参加する人。

様々な愛の形が許容される、地母神のような存在。

それがコミックマーケット。

勇気ひとつを友にして。

今回問題があるとするならば、何故私がまたも売り子としてサークル参加することになったのかだ。

しかも、大手ですがな。

艦娘とおぼしき、或いは地球人と思われるご婦人たちがずらりと並ぶ壁サークルで、私はにこにこしながら握手したり撫で撫でしたり一緒に女性と写真を撮って貰ったりしている。

聞こえてくる言語は多彩で、はるばる海外から訪れた人までいるようだ。

姫様っぽい子もいる。

通訳付きの人やお国の言語で話しかけてくる異国のお嬢さんたちに抱き締められ、チューされそうになったりしてちよつとした騒ぎになった。

君たちの需要が何処にあるのか、おじさんには全然わからないよ。

行列している年代は三〇年くらいの幅か、またはそれ以上かも知れない。

私が行っている行為は購入特典だ。

需要がある需要があると熱烈に口説かれて結局折れたが、成程現実に体感してみると実感がある。

こんな冴えないおっさんにさほどの価値があるとも思えないのだが、そう言うとは何故か皆から怒られた。

解せぬ。

同人誌やDVDや写真集や小物類を買った人や艦娘らしき女性たちの殆どが睦月型

駆逐艦たちに誘導されて私の元へ辿り着き、握手撫で撫で肩抱き一緒に撮影という一連の流れ作業を行っている。

人海戦術的偶像群よりは良心的かな？

中央もなにもあつたものではないが。

通りかかる男性群が奇異なモノを見るかのように、私を凝視しながら去つてゆく。

よくわかるよ、その気持ち。

渦中の私にだつてなにがなんやらだし。

試しに私でいいんですかと中学生らしき少女に聞いたら、貴方がいいんですと真顔で言われた。

おっさんは恥ずかしい。

ファンレターらしきものまで渡してくる女性は何人もいたのには驚いた。

あの、私は一般人なんです。

函館と違って有明は暑いが、近年酷暑地帯になりつつある地域ほどではないだろう。

昔は山形の天童が最高気温で知られていたが、それを上回る都市が幾つも現れてきている。

日本は亜熱帯地域になりつつあるのだろうか。

加賀教官や龍驤や龍田や鹿島や雲龍にも手伝ってもらっているが、肌色の多い同人誌

に彼女たちは困惑していた。

まあ、それがすべてではないが、それが目立つのは確かだ。

面白おかしくマスメディアが報道するのは止めて欲しいな。

今回のコミケットでの私を題材とした作品は健全方向に向かっているみたいだが、女性の欲望を侮つてはならない。

業の深さに性別は関係無い故に。

あの大きく薄い封筒はなにかな？

封かんまでしてある茶色い封筒。

見せて貰おうとしたら断固拒否される。

購入者全員がそれを貰っていた。

行列に並ぼうとした男性はことごとく拒否され、ごねる人はどこからともなく現れたニンジャっぽい人たちによって何処かへ連れ去られていった。

販売品目がこんなにあつても捌き切れなだらうとたかをくくっていたが、蓋を開けるとさにあらず。

大行列に乙女買い。

アホみたいに積まれていた段ボール箱が、みるみる内に数を減らしてゆく。

私のイラストが描かれた団扇（うちわ）やねんどろいどぼい人形もばんばん売れていった。

不景気とは一体……。

マスターオータムクラウドが一般参加者と握手しながら、和（なご）やかに会話している。

トラブルは殆ど無く、滑らかに商いは進んでいった。

難点を言えば、この日射しと休憩する間もないことくらいか。

購入者たちからの差し入れはけっこうあつて嬉しいのだが、原因が今一つよくわからない。

カリスマ性とやらは一切持ち合わせていないのに。

謎だ。

直衛の島風や吹雪からお握りやら鶏の唐揚げやらポテトサラダやら漬け物やらを口に入れてもらったりお茶を飲ませてもらったり保冷剤を当ててもらったりしながら、この耐久レースをどうにかこうにか戦つてゆく。

午後一時過ぎには旧作を含むすべての在庫が売り切れ、周囲の皆さんから盛大な拍手をいただく。

なんでこんなにいるのかな？

そしてポスターや掲示物などの争奪戦が始まり、じゃんけんに参加しようとする配下の艦娘たちを押し留めるのに苦戦した。

目と雰囲気がまるで歴戦の装甲擲弾兵だ。

今の彼女たちならば、装甲擲弾兵総監をも討ち果たせるかも知れない。

ようやく暇を貰い、非電源型ゲームのサークルや小物類の販売をしているサークルや文房具関連のサークルなどを覗く。

この辺はゆっくりじっくり見ることができるのでありがたい。

配下の艦娘たちには自由時間を与えたのだが、結局私にくつつくこととなった。

好きなものを見に行けばいいのに。

個性的な同人誌を何冊か購入する。

初雪が私に聞いてきた。

「提督、あつちのとてもエッチな本は買わないの？」

「買いませんよ。」

「欲しくないの？」

「そういう目的で来ているではありませんから。」

望月の追撃が来る。

「でもやっぱり、男の人の溜まった欲望の捌け口って大事だね。ホントは欲しいんじゃないの?」

「まあ、そこはそれなりに。」

「誰が特にいいのですか、誰を多く相手にしているのですか?」

「顔が近いです、加賀教官。」

「あら、私も興味あるわあ。」

「龍田さんまで。」

「キミはやっぱり浮気もんや。」

「風評被害です、龍驤さん。」

「何時でも受け入れるから。」

「勝手に覚悟完了しないでください、雲龍さん。」

「あの、その、気に入ったエツチな本くらい買った方がいいんじゃないですか?」

「錯乱しないでください、鹿島さん。」

「好きなだけでもあそんでくれていいぞ。」

「なにを言っているんだ、島風。」

「なにをされても我慢します!」

「吹雪、お口を閉じておきなさい。君たち、ここは公共の場なのだから自重しなさい。」
周囲の男性陣の視線が殺気に満ちてゆく。
勘弁してください死んでしまいますがな。

西館一階に出店していた画材店で幾つか面白い物して、混沌の魔空間から撤退した。
いやに積極的な屋台の娘さんからフランクフルトを購入し、食べているところを撮影してもいいかと言われて思わず許可する。

近場のアイスクャンデー売りの娘さんにも何故か食いつかれ、おっさんが食べているところを艦娘含むおぜうさんたちにパチパチ撮影された。

これって、なにか意味があるのか？
握手したり撫で撫でしたり一緒に撮影したりして、彼女たちと別れる。

さて、今夜はなにを食べようかな？
いつもの浅草の洋食屋に行こうか。

C C L IX : その諸島の価値は

アルヘンティーナのマルビナス諸島。

英語で言うところ、アルゼンチンのフォークランド諸島。

三〇年以上前に、その諸島を植民地支配する欧州の二枚舌的列強国と南米の独裁政治的小国とが紛争の争点とした場所。

『頭髪のない男たちが使わない櫛(くし)を取り合う状況』などと、ある小説家に評されたいさかい。

そこでは、三カ月半の戦役が行われた。

血を流し合った新兵器の実戦的実験場。

死の商人たちが歓喜し、夫や息子や父を失った遺族の涙を鑑(かんが)みない政治家たちが詭弁を弄(ろう)した。

帰還兵たちの苦しみを知らうとする者は、存外少ない。彼らの中は自ら命を絶つ者が存在し、それは両国間に於いて現在進行形の問題だ。

人気取りのために国民を戦争に駆り立てた女性が国際的批判に耳ふさぎ、トランプの女王のごとく兵士を送り込んだ場所。

戦争が始まるまでは批判していたのに、戦争が始まるとこれを肯定する者が続出した。

パブなどでサッカーの試合を見るかのように、人の死を観戦する者が多く現れた。

まるで狂っているかに見える行動だ。

そうした手のひら返しは世界的に見られ、これは人間の心的矛盾を浮き彫りにするが、それを理解出来ない人は意外と多い。

近年は海底油田の発見が両国間の緊張を再度高めていたが、深海棲艦の出現によって事態は新たな局面を迎えている。

諸島に四機駐留していた英軍の戦闘機たるユーロファイターの内二機は既に撃墜されており、海の怪異の出現初期に勇躍出撃したミサイル駆逐艦はとつくの前に轟沈していた。

乗員の殆どが救助されたのは不幸中の幸いか。

海へ投げ出された人員は別段襲われることもなく、自国民の乗る船やアルヘンティーナ側の漁船などに救助された。

遙か遠所の英国からの援助は深海棲艦による海域封鎖で一切届くことが無く、アルヘンティーナからの締め付けもあつて諸島に住む英国系住民の貧窮する窮状は日増しに酷くなる一方だった。

食糧の備蓄が心もとなくなった英国系住民たちからの訴えを聞いた英国駐留部隊司令官はアルヘンティーナ側へ交渉を持ちかけ、食糧援助と引き換えに彼らへの一時的投降に応じる。

彼は地元新聞紙の記者の取材に応え、こう答えたという。

「部下たちと住民たちの生活を守るのは、女王陛下の臣たる基地指揮官の責務であり義務でもある。」

司令官は英国紳士との評価を得て、アルヘンティーナの住民はこれを好意的に受け入れた。

これで特殊部隊を送り込まずに済んだ、と軍関係者たちは安堵する。

マルビナス諸島奪還作戦に向けての大規模な特別訓練は中断され、英軍基地には入れ替わりとしてアルヘンティーナ軍が駐留することになった。

それは遣り手の政府広報官の思惑以上に民族主義的気運を盛り上げ、アルヘンティーナの首都ブエノスアイレスではお祭り騒ぎが自然発生的に勃発する。

隣国のチリや近隣諸国でも歓迎的な空気が醸成され、それはマルビナス諸島に打ち上

げられた武装少女たちの救助によって一気に加熱した。

彼女たちは米国のフリートガール、日本風に言えばメリケン艦娘に当たる存在だ。日々大量生産され、場当たりの戦闘に駆り出されては毎日多数轟沈する彼女たち。それは南米諸国の怒りを呼び覚まし、人造戦闘系少女たちへの同情を多く誘った。政府広報官と新聞紙が巧みに世論を誘導して、フリートガール擁護論を構築する。

南米の民族主義運動と欧米の植民地支配への批判と人ならざる存在とは言え少女兵を使い捨てにする米国への人道的批判が魔術的合致によって渾然一体化し、『南アメリカ連盟』が発足される事態にまで発展した。

アルヘンティーナの隣国チリでもフリートガールが何名も救助され、同国内でも米国批判の高まる事態が発生した。

それは複数の海洋国家で同時多発的に発生し、南米諸国の結束力を高めるのだった。

マルビナス諸島最大の島たる東フォークランド島にあるは、首都スタンレー。

そのスタンレーの端つこの海沿いにとても小さな酒場がある。

スコッチウイスキーもバーボンウイスキーも置いていない店。

ラムやテキーラ、メスカルなど南米の地酒のみ置いてある店。

かつてマルビナス戦争に従軍した元兵士がこの店を経営しており、其処はアルヘン

ティーナ系住民や元兵士たちの溜まり場にもなっている。

その日、『アングル・サミュエル』と名付けられた店の周囲は大変陽気な空気に包まれていた。

その中核はフリートガールたち。

勇猛果敢に戦う人ならざる戦士。

貧しくも陽気な島民たちが店の外へテーブルを並べ椅子を並べ料理を並べ、ムハハと笑顔を浮かべる。

ご馳走が並べられた席で、人工少女たちは困惑していた。

彼女たちはアルヘンティーナ近海に出現する深海棲艦を駆逐し、それは新聞で華やかに報道され、少女たちは同国内に於いて国民的英雄の扱いを受けている。

島へ流れ着いた当初、娘たちは心を閉ざし生きる屍（しかばね）の状態だった。

やがて彼女たちはアルヘンティーナの人たちとの交流に馴れ親しみ、次第に心を開いてゆくようになる。

美しき花が咲いてゆく如く。

酒場の店主には息子がいる。

素直でやさしく、伊達男だ。

フリートガールたちは彼にとってもなついており、店主の男は嬉しく思う。

あの尊大なジョンブルやアングル・サムには今もムカツ腹立つことも多いが、少女たちには罪はない。

少女たちは息子を『提督』『司令官』と呼び、親しき雰囲気や常にか醸し出している。それで、いつの間にか周囲の島民たちも彼のことを『提督』『司令官』と呼ぶことが当たり前になっていた。

店から歩いて程ない場所にはいつの間にも煉瓦造りの建築物が出来ていて、これは妖精のお陰なのだとフリートガールの説明に素朴な人々はすんなり納得するのだった。

更なるフリートガールの説明によると、彼女たちは親和性の高い上官が存在するとその性能を十全に発揮出来るそうなの。

その為に、男の息子の協力が必要らしい。

男は、二カ月ほど前から息子とフリートガールのまとめ役との間に親密な関係が出来ていることに気づいていた。

いずれ息子は、娘たちとの生活を選択するのだろう。

それもまた人生。

風が強い。

あの短くも苛烈だった戦いを苦みと共に思い出しながら、息子と娘たちが上手に行く

ようにと男は願う。

この島が国に帰属するかどうかは難しいだろうし、平和になればまた違う戦いが始まる。

最愛の息子は勇敢な戦士として、しっかり鍛え上げた。

その力が今後活かされるといいなと思いつつ、男は夕食の仕込みに取り掛かる。

フリートガールたちは、男の料理が好みなのだ。

牛肉の炭火焼きなるアサード。

メンドサ州やアサド州の葡萄酒などを添えよう。

牛の臓物や鶏肉豚肉、腸詰めなどを炭火焼きしてたつぷり盛り合わせたパリジャー

ダ。

半円形のパイのエンパナーダは肉入り、ハムとチーズ入り、トウモロコシと玉ねぎな

どの野菜入りの三種。

ジャム入り菓子のアルフアホールも人気がある。

青くどこまでも澄みきった青空を見て、男は穏やかに微笑んだ。

CCLX：愛の花咲く命のように

スラマツシアン69。

インドネシアはジャカルタに本拠を置いて、国際的に活躍する人海戦術的偶像群である。

スラマツシアンとは現地の言葉で『こんにちは』を意味し、親衛隊含む愛好家たちと気軽に交流出来るアイドルを標榜しているのだという。

深海棲艦による侵攻が発生する直前頃、いとも容易くえげつないことを行う日本人たちと地元資本集団の合意によってそれは産声（うぶごえ）をあげた。

日本にも同様の人海戦術的偶像群は存在しており、その劣化型汎用品と位置付けているかに見えた。

ローカライゼーションと呼ばれる局地化。

日本での賞味期限が終了しきる前に二軍落ちした偶像を受け入れるための、なんとか下り先としてそれは考えられていたという。

或いは都落ち。

解雇を受け入れるか、はたまた支店へ行くのか。

偶像を会社員化する行為が推し進められてゆく。

たとえ業界内にて首班が毛嫌いされようとも、勝てば官軍なのである。

そして、偶像たちは益々短命化してゆく。

僅かな愛好家たちが有らん限りの情熱を向けようと、それは蠟螂の斧。

流された涙の重さは羽毛の如し。

本家に対する分家のごとき扱いはそれを当然と考える首班と周囲の首振り人形たちが平然と悪魔的に推進し、追従するしたたかな人々の電撃戦にインドネシア側が勝てよう筈も無かった。

見よ、人の悪意はここにある。

しかしながら最初期に選ばれた少女たちは美しく且つ意気軒昂であり、戦意に満ちて頑健でもあった。

それが、彼女たちとその周囲にとって吉と化してゆく。

戦局の不安を払拭すべく東南アジア各国で彼女たちは積極的に慰問し、その結果として熱狂的な人気を得るまでになる。

偶像としての旬が過ぎて『卒業』を余儀なくされた一期生たちは、大抵がスラマツシ

アン69の運営を手助けしたり補佐に回ったりした。

それが彼女たちの環境を好転させ、結束力の強さで難局に立ち向かう力を与える。協調性の高さが連帯感を生み、その連帯感が目標達成への意気込みへと繋がった。

当初、彼女たちに独自の楽曲が与えられる予定は無かった。えげつない日本人側が完全な支配体制を望んだからである。

自由？

なにそれおいしい？

本社が子会社に対する仕打ちの如く、彼らは彼女たちや現地の人々を軽んじた。

それは静かなる怒りや反発を生み出し、緩やかな離反さえ発生しそうになった。

戦局の激化に伴って、日本人側からの強力な制御は難しくなっていく。

そして、日本と三年間の断絶された期間を利用し、独自の楽曲を発表。

現地に残った日本人では、耐えがたきを耐えた人々に勝てよう筈無し。

念願の独自曲は熱狂的に地元へ受け入れられ、日本人側が再び彼女たちへ接触した頃には是正が困難な状況に陥っていた。

以前よりも狂犬的強権を発動しなくなった日本人側との交渉は存外上手くいき、共存共栄路線が選択される結果となった。

東南アジアの『顔』として彼女たちはインドネシアのみならず、複数の国家から段々

と期待されるようになる。

戦前は日本色がかなり濃かったのだが、混乱と動乱に満ちた時期を経て彼女たちはアジアの期待の星と化した。

意外と先進的な面もある岡山県との接触到に成功した彼女たちは、『おかやまフルーツ大使』として鮮烈に白桃とマスカット・オブ・アレキサンドリアを宣伝する。

売り上げは例年を遙かに上回ったとか。

岡山県産の白桃のジャムや罐詰、マスカット・オブ・アレキサンドリアの葡萄酒が広く東南アジアに知られる切っ掛けとなり、日本の地方自治体が彼女たちに着目する出発点ともなった。

彼女たちは艦娘たちとも交流し、提督たちについても知るようになる。

そして、次なる彼女たちの目指す場所は風都函館。

狙うは観光大使。

函館は欧州の雰囲気や冬の寒さが手軽に味わえ、しかも観光にそれほど時間がかからないのが利点。

欧州の雰囲気と富良野メロンと提督を堪能すべく、彼女たちは進撃を開始した。

那珂ちゃんとスラムツシアン69との共同音楽会が開かれることを知ったのは、やや

風の強い真夏の午前のことだった。

アジア各国は、日本の観光先として京都や奈良神戸大阪などと同様に函館を重視しているらしい。

折角なので、季節の果物を味わっていただく。

函館メロンも夕張メロンも時期的に終盤戦へ入っているため、富良野メロンの活躍に期待したいところだ。

日本のアルファベットな本家同様、二三人三群より成る彼女たちはA群B群C群で人海戦術を行うらしい。

一三歳から一八歳までの年齢の少女を中核的戦力として構成する偶像集団に於いて、所属後一年以内に成果を出せないとその新人偶像は強制的に『卒業』させられるという。なんとも過酷だなあ。

台湾、タイ、フィリピン、インド、ヴェトナムでも近年中に展開予定だとか。

特に前の三国に於いては既に実働可能であり、後の二国では数カ月で動かせるようになるそうだ。

斯くて効率的大金収集機構はアジアを席卷するのか。

看板商法の変形版というかなんというか。

看板を変えないままに中身の交換なのか。

偶像の使い捨てが加速化しないといいが、
使い捨てにされた子はどこへ向かうのか。
花の命は短くて。

人海戦術的制服必須型少女たちが、函館鎮守府へ表敬訪問に現れた。

この鎮守府は、なんだかどんと観光地化してきている気がする。

此処は一応軍事基地なんだがな。

艦娘も忍者もいるから大丈夫か？

私自身が軍属だから、やりやすいのか？

大本営が文句を言わないからいいのか？

今回地元インドネシアのみならずマレーシアや台湾やタイやフィリピンやインドや
ヴェトナムの放送局が共同取材を行い、国際的に報道されるそうなの。

正に多国籍で御座ります。

気さくな彼らと打ち合わせをしながらも、なんとなくの違和感はぬぐえない。

ギスギスしているよりは余程マシだが。

今回の訪日は、彼女たちの新曲『愛の花咲く命のために』の宣伝も兼ねているとか。
日本語版は那珂ちゃんが歌うのとか。

アカペラで伴奏なしに、彼女たちがその歌を鎮守府前の広場で唄う。
上手い。

美声だ。

皆がちやんと声に出して歌っている。

口パクも無く、誤魔化すことも無く。

見事ナリヨ。

その場の全員が拍手すると、彼女たちははにかみながらも誇らしい表情を見せた。

成程、これがアイドルなのか。

彼女たちと記念撮影。

異国情緒溢れる軍勢。

美しき狩人たちだな。

なんだか距離が近い。

私と握手しようとする娘がやたら多い気もするが、それはきつと気のせいだな。

七〇人ほどの娘さんを覚えきれぬ筈も御座りませぬ。

日本のAKE69やSAN69やKNK69やKYS69や比良坂69や伊佐坂6

9や有坂69とかだつて、なにがなにやらよくわからないのに。

おっさんは可愛い女の子に弱いと相場が決まっているから、勘違いは禁物ぜよ。

ははあ、距離を近いと誤認させて交渉を好条件でまとめる腹積もりなのだろう。ぺたぺた触られているようにも思えるが、彼女たちの宗教的に大丈夫なのかな？ あれ、違ったっけ？

チューとかじやなかったらよかった？

通訳の、出来るおんな感溢れる女性から話しかけられる。

少し肌がなまっちろい。

白人系なのかもしれぬ。

「テイトクさんは、ごケツコンされているのですか？　ワタシたちはそれが大変気になります。」

「はい？」

「テイトクさんがごケツコンされているかどうか知れることは、ワタシたちにとってとても重要な情報です。」

ええと。

変な質問だな。

周囲にいる異国の少女たちと艦娘たちと艦娘のつもりでいる『あんこちゃん』たちの熱視線がぎらぎらぎんぎんと、この冴えないアラフォーおっさんへざんざんばらばら降り注いでいる気さえする。

「私は現在独身です。ケツコンはしていません。」

阿蘭陀通詞のような眼鏡美人が少女たちへ素早く訳した言葉を伝え、室内の温度が何度か上昇したかに思えてくる。

ムワツとしてきた。

夏色のナンシーだ。

数秒ざわめきが発生し、それはすぐに沈静化した。

なんだかドラマの撮影みたいにも感じられるぞい。

「テイトクさん、誰か付き合っている女性はおられるのですか？」

「いません。」

艦娘たちがこわい目で私を見つめてくる。

えっ、という微かな声まで聴こえてきた。

「今後、ケツコンされるご予定はあるのですか？」

「あります。」

『あんこちゃん』たちが、何故か不安げな目で私を見つめてくる。

なんだ、この空気。

向こうの言葉に訳された途端、異国の美少女たちは嘆きの言葉らしい発言を行った。

……わかった！

これは、私が彼女たちにからかわれているのだな！

そういう演出だ。

放送局的演出だ。

私は詳しいんだ。

なんてな。

「貴女がたのような素敵なお嬢さんたちに先に出会えていたならば、心が動かされなかつたことは無いでしょう。」

誉めておかないとな。

サービス、サービス。

こんな冴えないおじさんが可愛い娘さんと結婚出来る訳などまったくないし、彼女たちもからかつているに違いない。

でもまあ、どうやら艦娘たちは私とケツコンしたがっているかに見えるし、それ自体に偽りは無いのだろう。

精神的精神的双方での維持は困難を極めるだろうから、破綻を如何に遅らせるかが大切だろう。

下手を打つたら細切れにされるかもしれないが、まあ、その時はその時だ。人間、何時かは死ぬのだから。

私の言葉を伝えられた彼女たちは私を取り囲んで口々に言ってきたが、なにを言われているのかちんぷんかんぷんだ。

通訳の女性を見るとニヤニヤしているし、放送局の撮影者たちも機材を下ろしている。

オフレコなのか？

何故か、部下たちや預かっているお嬢さんたちが私を睨んでいる。

やめたまえ、その鋭い視線は私に効く。

何故か大淀鳳翔間宮長門教官加賀教官妙高教官たちなどにリネン室へ連れ込まれ、かなり怒られてしまった。

解せぬ。

夕食の時間となる。

食堂はいつにも増して、大にぎわいだ。

私のこさえた大量の浅漬けは出すや否や即時になくなって、東南アジアの娘さんたちも食べてくれたみたいだ。

カレーと野菜炒めを担当したが、客人側の要望も多く、大和級戦艦四名の手助けあらばこそなんとかこなせた。

野菜のカレー、豆のカレー、魚介類のカレー、牛肉を使ったカレー、豚肉を使ったカレー、鶏肉のカレーは瞬く間に売れた。

スタチやカボスや広島檸檬を事前に仕入れておいた甲斐があったようで、異国の人々でそれらの絞汁を料理にばんばん振りかける人はけっこういる。

割りと多めに用意しておいたイタリヤ風檸檬水も好評で、それは短時間で容赦なく減っていった。

ラッシーも用意しておいてよかった。

放送局の人々にも好評だったようで安心した。

李さん無双で、中華料理は絶讃の嵐であった。

宗教的観点で肉は鶏肉のみにしてもらったが、判断に間違いはなかった。通訳の人によると、今まで食べた料理の中で最上等の部類に入るそうなの。

その夜、洗い物を終えた後で富良野メロンをいただいた。

何故かインドネシアのお嬢さんたちに囲まれる。

ひっそりいただくのを、慣例にしているのだが。

夜更けにバスを見送って、ほっとする。

翌早朝、再度の人海戦術的偶像群の攻勢を受けて驚く。
聞いてませんがな。

イエーイ、と笑顔の彼女たちに囲まれ再度の記念撮影。

ふと思つたのだが、此処が『聖地』にはならないよな？

なつちやつたらとても困るだよ。

焼きたての芳しい香りが食堂から伝わってくる。

テーブルを埋め尽くさんばかりの、大量のパイが発生していた。

なあ、パイ食わねえか？

嗚呼、東南アジアどうでしょう。

CCLXI：この一枚を、あなたに

自らを艦娘と思い込んでいる『あんこちゃん』たちからのクッキー大攻勢をなんとかしのいだが、第一秘書艦の大淀と本日の第二秘書艦の妙高先生にはくすくす笑われてしまった。

いい歳をしたおっさんが娘のような年齢の少女たちに振り回されているのを見て、滑稽な感じがあったのだろう。

本日の家庭科実習では、大切な人へあげるクッキーを作ったらしい。

大規模作戦に向かう決戦艦娘のごとき迫力が醸し出されていたとか。

私への分はそのお裾分けだろう。

そう言ったら、秘書艦兩名からダメ出しされてしまった。

そんなんだから、アカンらしい。

ついでだからというので、お茶の時間になる。

大量のクッキーを分けあって、おいしく食べよう。

雑談の中で、ネット小説の集結する『小説家になつちやつたりして』の話題になる。どの語り手がいいこの語り手がいいと、大淀も妙高先生もかなり読んでいるようだ。彼女たちは異世界ものやら現実世界的な恋愛ものやら、広範囲な作品を読んでいる。その中で、私の作品が出てきてドキドキ大パニックになつちやつたりしそうだった。全作読まれてますがな。

偶然だ。

そうに決まっているさ。

大丈夫。

認識障害も偽装も充分機能している。

その筈だ。

「あつけし先生の、島原や坂出（さかいで）などの地方都市を舞台にしたお話もいいんですよね。」

「異世界ものもいいんですけど、実際の街並みを舞台にしたお話も好きなんです。」

「実写ドラマが艦娘に大人気でしたね。」

「あれはドラマ用に脚本を書かれたそうですね。」

「あつけし先生って覆面作家みたいで、サイン会をされませんよね。」

「それがまた独自の魅力を引き出す要素になりますから、悩ましいところですよ。」

バレて……いないよな。

こちらをちらちら見てもいないし。

「ところで『リタとサリア』の主人公ですけど、村娘のリタと闇エルフのサリアのどっちを選ぶんでしょう?」

あー、あそこはけっこう悩んでいるんだよね。

ダブルヒロインの物語をどう締めようかなど。

「私は断然リタを推しますね。あのひたむきで健気な感じがいいじゃないですか。」

「私は……そうですね、サリアですか。あの報われないことを当たり前と思う彼女の考えが、主人公の命をかけた説得で変化してゆく様は名場面のひとつですよ。」

「確かに、あれは素晴らしい場面でした。」

「これで第三の女の子が出てきたら、興ざめですよね。」

「まさか、あつけし先生はそんなことをされませんよ。」

「それもそうですね。リタ派とサリア派とで論争しているみたいですから、結末はきつちりつけてもらいたいですね。」

「提督はネット小説を読めます?」

大淀が話を振ってくる。

「え、ええ、たまにたしなむ程に。」

「どんな作品を読まれるんですか？」

あまり有名でなく、特別人気作でもなく、書籍化もしていないが、でも我が琴線に触れた作品を四つ挙げる。

いずれも完結した話だ。

数日後。

メトロン謹製の秘匿回線で輪唱書店の編集女史と打ち合わせてをしていたら、『小説家になつちやったりして』発の四作品が書籍化される旨を聞かされた。

いずれもランキング圏外だったのに、先日来より急激に閲覧件数が激増したという。

馴染みの女性編集者は以前私が褒めていたことを覚えていて素早く連絡し、その内の一作品の書籍化に漕ぎ着けたそう。

同業者たちは激戦を繰り広げたそうで、いずれも既に予約者だけで一万部に届いている作品だらけだとか。

ど、どうしてかなあ？

お、おじさん、全然分らないや。

アニメーション化の打診がされた作品まであるという。

先輩の所属する奈良アニもその候補のひとつ。

普段ぼやきまくる彼もホツとすることだろう。

焼きたてのクッキーもいいが、数日経過してしっとりした味わいに変化したモノも趣深い。

それぞれ娘たちが一生懸命捏（こ）ねたであろう生地。

焼き加減は鳳翔か間宮かうちに来ている名人が監修したらしく、焼きムラは発生していないみたいだ。

少し濃いめの紅茶に牛の乳を混入し、じっくり食べさせていただくとしよう。

叢雲、曙、霞がたまたまやって来て、辛口の寸評をしまくった。

クッキーの方はかなり甘かったりほのかに甘かったりするのに。

「仕方がないわね。今度あんたのために、特別にクッキーを焼いてあげるわ。ありがとう食べなさい。」

「仕方がないから、鳳翔さん直伝のクッキーを今度焼いてあげるわ。よく味わって飲みみなさい。」

「ホント、手間がかかるわね。間宮さん直伝のクッキーを焼いてあげるから、ありがたく食べなさい。」

雨がぼつぼつ降りだした。
今夜は少し冷えそうだな。

CCLXII：本気の夏、秋田の夏

第一〇〇回全国高等学校野球選手権記念大会は、初出場である秋田県立のとある農業高校が優勝を飾る結果となった。

普段農業で鍛えている足腰と東北勢の期待を一身に背負った気迫が、彼らの原動力になつたらしい。

応援団の少女たちが懸命に短いスカートを振りつつ踊る様は多数の少年を興奮させ、少年の頃の魂を今も引き摺るおっさんたちも大いに興奮させた。

公共放送を自称する放送局の撮影者たちは相も変わらねつとりと少女たちを映し、涙する彼女たちを素早く見つけて映してはその手腕と執拗さを全国の高校生マニアたちに知らしめる。

撮影者たちの好みが丸わかりな素朴系少女たちは全国のお茶の間に晒され、即席の品評会を行う者どもも散見された。

二人の投手の活躍も目覚ましかつた。

主力の投手は安定した下半身と無駄の無い動きにて投げる豪腕系で、他の選手たちと連携しつつ次々と強打者を討ち取っていった。

一方の抑え役たる投手は、今大会から参加が認められた小柄な女の子。やさしい顔立ちの秋田おぼこ。

芯のしつかりした女の子。

左投げ左打ちのサウスポー。

憧れてきた女性投手のドリームボールを使えるようにと日々切磋琢磨し、そして県大会の時点で魔球を見事に開花させ、並み居る強き少年打者たちを続々中破大破轟沈に追い込んだ。

七色の魔球を操る、まさにちっちゃなハリケーン。

フオーク。

ナツクルボール。

シンカー。

スクリューボール。

多彩な球種を巧みに使って討ち取る姿は、敵を斬り倒す女騎士。

『ハリケーン・ハニー』と友達の名付けた渾名（あだな）は瞬く間に全国各地で知られるようになり、『蜂の一刻し』で倒される打者たちの映像は同世代の女の子たちを熱く燃や

し勇気付けるのであった。

そしてまたそれは歳上の働く女性たちにも好感を持って迎え入れられ、彼女は女性たちの圧倒的支持を受けるに至った。

彼女の活躍は女性たちの希望の星であり、その勢いは現在進行形で現役人気偶像群を遙かに凌ぐ程だ。

ヤっちゃやえ、ハリケーン・ハニー！

彼女は特に美少女という訳でないし、凹凸がどうという程でもない。

少年向けの物語ならば脇役に甘んじる存在かも知れないが、現実世界ではばったばったと敵を斬り伏せる女騎士。

ちっちゃな女騎士は柔よく剛を制すの勢いで、夏に燃えるのだった。

優勝した秋田県はしばしの戸惑いの後、爆発的な歓喜へと変化した。

激しく燃える秋田県がここに爆誕する。

県民一体となつて喜びを表し、観光客たちは秋田県側からのおもてなしを存分に受けることになる。

意気を感じた造り酒屋は蔵の酒を原価に近い価格で融通し、居酒屋は旨い秋田料理を観光客や地元民へ格安価格にて惜しみなく提供する。

きりたんぼや稲庭（いなにわ）うどんやさなづらや秋田かやきやしとぎ豆がきや金萬

などの乱れ打ちが県内各地で見られ、秋田県南部の郷土食たる豆腐カステラもふんだんに他県へと進出する。

秋田県とお付き合いのある山形県もその勢いに呼応し、ダブルライダーの如く街は賑やかにさんざめくのだった。

この機を逃してはならじと岩手県宮城県福島県も連携要望の意向を秋田県に伝え、懐広き秋田県はこれを快く了承した。

また、秋田県にとって最強最大の好敵手たる青森県でも、普段のあれやそれやを忘れて団結することが決定された。

林檎の愛、今ここに。

東北六県の合従連衡的な催しは近年勢いを増してきている京都大阪神戸岡山広島博多などでも行われ、やる時はやります的な東北的攻勢によつて賑々しく急拵(こしら)えの催しは日本の各地で行われた。

秋田県近隣の新潟県からも少し遅れて打診があり、一緒に喜びを分かち合おうという意識の秋田県は共にやりましょうと裏表なく手を握った。

したたかに二枚三枚の舌を使うことなく。

幾つもの手を使って陥れることすらなく。

今、全国で最も勢いのある県は間違ひなく秋田県だろう。

隣県の山形にある酒田鎮守府も提督から艦娘まで大喜びであり、近隣の日本海側鎮守府は華やかさに満ちている。

料理上手を送つて欲しいと秋田県知事直々の要望があり、大本営からの許可を即日取り付けた大淀は、やさしく微笑みながら許可証を私に見せた。

眼鏡の縁の小さな赤い斑点には気付かないふりをしておこう。

備前の刀工が鍛え上げた業物たるパールのようなモノは、彼女によると使いやすさが格段に違うのだとか。

わからんなあ。

それは兎も角。

どうやら、秋田市で大きな催しを開催するらしい。

夏祭りがあつたばかりなのに忙しいことであるよ。

さつそく奥州うまいもの祭りへの参加者を厨房で決め、間宮率いる『おいしいもの作り隊』が秋田県へ向かうことを決定した。

彼女たちがいない間は他の間宮が埋めることになり、その間宮が開けた穴は……どうなるのだろうか？

間宮が苦笑いしつつ言った。

「私と同姿艦だからといってどこでも重用されている訳ではありませんし、腕前が超絶的とは限りません。」

「そういうものなのですか？」

「そういうものなのですよ。」

大和型戦艦艦娘四名も参加してもらおう。

艦娘の宣伝にもなるし、丁度いいだろう。

舞鶴の武蔵が私に抱き付き少々駄々をこねて困ったけれども、他の三名からなにか耳打ちされて意見を翻（ひるがえ）した。

何故私を見てニヤリとするのだ？

船出した彼女たちを見送る。

艦娘と人間の目指すは秋田。

かつて、佐竹公が治めた街。

景気が少しでも上向くといいな、と思いつつ本日の第二秘書艦たる龍驤と共にぶんぶん手を振った。

「しっかし、今回は惜しかったなあ。」

「そうですねえ。」

「なんやキミ、秋田の高校が優勝して喜んどった癖に。」

「まあ、秋田県には親戚がいるんで。」

「ほしたら、大阪が負けても悔しゆうないやろ。」

「大阪にも親戚が住んでいるんです。」

「ホンマ？」

「ええ。」

「ふっふー、ええこと聞いたわ。ご挨拶する時は任せてや。」

「ご挨拶？」

「愛妻は親戚にも挨拶するもんやろ。」

「誰が愛妻やねん！」

「おお、ええツツコミや。ここにも突っ込んでええんやで。」

「子供たちの教育に悪いんで、下ネタはあまり……。」

「なにゆうとん。女の子はちっこくてもエロいことに興味津々やで。」

「まあ、その、ええと……。」

「式場が問題やな。人数の関係でおつきいところがええし、大阪城でやるのもおもしろいな。」

「名古屋城の方が大きいんじゃないですか？」

「大阪城でやったら、商工会が色付けてくれるで。」

「まさか、通じているんですか？」

「ははは、まさか。でもお城でケツコンゆうのもおもしろいやろ？」

「五稜郭でやってくれ、つて言われそうですね。」

「全国ツアーみたいに、あちこちでケツコン式しよか。」

「ライブイベントじゃないんですから。」

今日のお昼は彼女手製のお好み焼き定食の予定だ。

豚コマのお好み焼きに、かやくご飯とにゅうめん。

大本営から来た海防艦の子たちをおんぶしたり抱っこしたりしながら、執務室へ戻つてゆく。

チユーは駄目だよ、お嬢ちゃんたち。

私をお父さんと呼んでもいけないよ。

雲行きが悪い天気だが、またその内晴れるだろう。

晴れない明日は無いのだから。

【脚註】

《秋田篇》

きりたんぼ：郷土料理の一。新米を炊いて粗く潰し、棒に巻き付けて焼いたもの。比内地鶏のだし汁で煮込むと誠に旨い。

稲庭うどん：乾麺の一。滑らかな舌触りと細麺ながらもコシの強さが特長。旨い。

秋田かやき：郷土料理の一。季節の魚や野菜山菜などを味噌塩醤油塩魚汁（しよつつる）などで煮込む。旨い。

金萬：秋田県民の魂の菓子。白餡とカステラ状の皮との合体口撃が風味豊かに口内を蹂躪する。旨い。

しとぎ豆がき：黒豆入りおかき。止められない止まらない。旨い。

さなづら：山葡萄を用いた名菓。旨い。

豆腐カステラ：豆腐カステラとも。大豆と卵などで作る県南の郷土菓子。旨い。

《大阪篇》

豚コマ：豚の細切れ肉。旨い料理の元。

かやくご飯：加薬ご飯とも。薬味を入れた炊き込みご飯のこと。旨い。

ちなみに、火葉ご飯ではない。
にゆうめん：素麵を使った温かい汁物。旨い。

CCLXIII：惚れてはならぬ

日本の夏は、年々過酷になつてきている気さえする。

そんな酷暑の中、汗だらけになつて仕事をした。

一仕事終えて事務所へ行くと、鷹さんと社長が雑談をしている。

鷹さん。

俺の鷹さん。

尊敬する先輩は渋くて恰好いい男なのだ。

思わず、その姿をじつと見つめてしまう。

社長補佐役の香緒里ちゃんは帰つたみたいだな。

鷹さんが気さくに話しかけてくる。

「おう、ユーイチ。どうだった？」

「素人さんこわい、つて感じですね。」

「素人つても、一体なにしてきたのかわかんないからなあ。」

「検査結果は問題ないんですけど、いやあなんというのか。」

「そんなことを気にしていたら、仕事にならんぞ。鷹、ユーイチ。」
苦労人の社長が苦笑いする。

深海棲艦という存在が現れてからも、人がエロいことにかけての情熱は廃れることなどない。

俺たちは、そんな欲望をほんの少し叶える仕事に就いている。

鷹さんが俺に流し目を向けてきたので、ドキッドキツとした。

先輩のセクシーな口元が開く。

「そうそう、ユーイチ。俺、来月から千葉へ山籠りに行くから。」

……………は？

「え？ あの、断食とか修行とかするんですか？」

「ユーイチ、鷹はな、提督適性検査に受かったんだよ。」

「へ？」

「こういう仕事をしているから、検査は先延ばししてもらっていたんだけどな。適性検査を受けてみたら一発合格だぜ。笑えるよな。」

「鷹さん…………。」

「て訳で、俺は腰を振る仕事から、釣竿を振る仕事へと転職することになった。」

「竿を振るのは一緒なんですな。」

「鷹、艦娘のお嬢ちゃんたちには絶対手を出すなよ。タレコミ屋の 마사 によると、艦娘に迂闊に手を出した奴が続々と行方不明になっていゝらしい。しかも、あの狡猾でしぶとい 마사 と最近連絡がつかん。変だろ？ 常時提督を募集しているつても非常に胡散くさい話だし、いつも人手不足つてことは裏があるということだ。あそこは真つ黒な組織の常套手段の疑いさえある。常に心してかかれ。」

「気をつけますよ、ボス。」

「ユーイチもだ。お前、検査を受けていないだろう？」

「俺が受かる訳ないですつて、社長。」

「そういうのをフラグ、つて言うんだぜ、ユーイチ。」

「脅かさないでくださいよ、鷹さん。」

「兎に角だ、大本営なんて名前を今更持ち出していること自体が胡散くさい。提督なんて職業に半年の訓練でなれるなんて、学徒出陣みたいに見えるぞ。軍属だなんて言つてはいるが、お前たち、テレビか新聞雑誌でそいつらを見たことがあるか？」

「函館の冴えないおっさん提督と小樽のおつかない姉さん提督が、仲良く肩を組んでいゝ写真なら見たことがありますよ、ボス。」

「横須賀、呉、舞鶴、佐世保が四大鎮守府でしたっけ？ なんか提督料理対決つて番組はチラツと見たことがあります。あれ、正規の提督ばかりだったっけ？」

「軍属でまとも知られている提督が殆どいない、つてことは軍規もあるだろうが、怪しいと思つた方が安全に繋がると思え。鷹だけでなく、ユーチも気をつける。奴らの言うことを鵜呑みにするな。いざとなれば逃げてこい。生き抜く方が大切だ。」

「わかりましたよ、ボス。」

「気をつけますよ、社長。」

女優を三人募集したら、桁三つ違う応募数に戸惑つていたのは少し前までの話。今では、普通の企業と並行してこの業界の門を叩く女性が当たり前前に存在する。異様な感じさえするが、社長に言わせるとバブル崩壊後からこんな感じらしい。流石に、こんなにも女性の応募数が増えることはなかったらしいのだけれども。間違つて元艦娘が応募しないように、現存する艦娘の顔は把握させられている。ごく普通の家庭で育つて両親が健在で暴力とも借金取りとも薬物とも縁の無かつたような女の子が、男性の欲望を満たす仕事の募集に応じる。

あり得ない筈の話が、今では当たり前になりつつある。

不景気が悪いのか、倫理観が段々壊れてきているのか。

うちの如き零細でも年一〇〇〇〇人以上応募者が来る。

高校を卒業したばかりの子から、子供のいる人妻まで。

在学中の子は流石にお断りしている。
履歴書の誤魔化しが無いことを祈る。
悪いのは全部こつちになるんだよな。

東京で仕事をしていた同業者たちが、現在次々に西日本へ移動している。
東京じゃ飯が食えないってことで、桃色産業の連中も西へ移動している。
厳しいねえ。

横須賀は鎮守府とそれに付随する百貨店や複合型商業施設があるから景気もいいの
だけど、同じ神奈川県内の駅ビルでも長いこと『テナント募集中』の貼り紙がはっつけ
られたままのところがちらほらある。

一等地の筈の場所が更地のままってのも、ざらにあるのは悲しいぜ。
工事延期で鉄骨剥き出しの大きなマンションが、みなとみらい辺りにごろごろある。
疎開が増加傾向にあるってのは、横浜市民としては嬉しくない話だ。

馴染みの泌尿器科で検査を受けて、合格通知を受ける。
仕事前にこれを徹底しないと、場合によっては訴えられるからな。

医者も看護師も手慣れたもので、彼ら彼女らはどうやって欲望を満たしているのか気

になる。

まあ、聞いて変態だったら困るので聞かないが。

新人だった頃、若気の至りで元看護師の女優に話を振ったら酷い目にあつた。

社長が北海道ロケをやるぞと言つたので、函館小樽札幌旭川釧路辺りを候補地として話し合いする。

夕張炭鉱が復活してあの辺りも賑やかならしいのだが、治安の面で不安があるとして社長が渋い顔をしたことから行かないことになった。

気の荒い人間が増えていくらしくて、そいつらがしばしば問題を起こすという。

自警団もやり過ぎの方向が強くて、活気はあるが問題解決の糸口も見えないとか。

喧嘩は慣れているが、女優が傷付いたら困るからなあ。

その代わり、函館ロケは力を入れることが決定される。

函館は今や、東京以北で最も活発な街のひとつらしい。

仕込みの女優はどういう設定にするかとか、素人OL風にするのか女学生風にするのか若奥様風にするのかとか様々な意見が飛び交つた。

企画女優を何人使うかとか使い回しをするかとか、ドラマ風にするかとか、いつそ孤独な男が食べ物屋で女性と出会う話にするかとか。

男優は三人体勢だ。

俺とトニーとシマケン。

シマケンは制服マニアで、個人的にいろいろな学校の制服を持っている。

今回も何着か持ち込むのだからか。

それは兎も角。

女優に対して男優が少なすぎる。

女優のパーセントも満たない。

互助精神で他社作品とも遣り繰りしているが、体調管理出来ない男優は容赦なく脱落してゆく。

女優と付き合うこともご法度だ。

技巧派の鷹さんが業界から抜けるのは、まさに痛打だと思う。

俺たちは撮影に一般女性を使わない。

使うところもあるが、それは少数だ。

ナンパしてその場かぎりのつもりで使ったシロウトさんは後々こじれる可能性があるし、どんな性感感染症を持っているかわかったものではない。

つまりは不発弾なのだ、彼女たちは。

見た目はカワイコちゃんでも、病原体の百貨店である可能性は存在する。

ホンモノの素人なんて、とてもおそろしくて使えない。裸一貫で仕事をするからには、事前の対策が不可欠だ。そういつた訳で、素人ものでは本物の素人を使わない。そういう演出はするが。

旅行者ナンパものとか温泉ものとかススキノものとか、まあそんな感じにしようかとまとまる。

素人物専門の女優たちは別口で北海道入りするとか。

化粧を変えたり髪型を変えたり衣装を変えたりして、彼女たちは七変化する。女つて、けっこうこわい。

女優にストーキングされたことも、何度か経験がある。

社長に言わせると、女優は惚れられてナンボらしいが。

決して全否定するな、と忠告された。

付きまとう女性を全否定して、その結果刺された女優が何人かいたらしい。

函館で、ウクライナやベラルーシやポーランドなどから出稼ぎに来ている女優たちと合流だ。

まさに国際企画だぜ。

電力消費量や新幹線の本数が削減されている状況に対し、旧國鐵は在来線特急を増やす方策に打って出て、上野仙台間ではL特急ひばりが復活した。

一九六一年から一九八二年まで東北のEース特急として名を馳せた、往年の車輛の再生だ。

ご丁寧に、車輛は昔のボンネット型と鉄仮面型を再採用ときた。

また、L特急はつかりも同時に復活した。

上野発青森行きで、一九五八年から一九八二年まで走った列車だ。

L特急つばさは上野秋田間を走る特別急行として復活しており、これは一九六一年から一九九二年まで走った列車だ。

上野盛岡間は一九五九年から一九八二年まで走ったL特急やまびこが復活。

上野山形間は一九六四年から一九八五年まで走ったL特急やまぼとが復活。

特急あいづは一九六八年から一九九三年まで上野会津若松間を走っていた特別急行で、これも復活。

寝台特急では、一九六四年から二〇〇二年まで上野青森間を走ったはくつるが復活だ。

同じく、一九七〇年から一九九〇年まで上野秋田間を走った寝台特急あけぼのも復活。

上野発青森行きの寝台特急としては常磐線を経由するゆうづるやみちのく、札幌五輪記念のオリンピック号も復活。

マスメディアが停滞だ退化だなんだと散々批判していたけれども、赤字経営が常態化している旧国鉄がどうにもならなくなつては困るからか、何処からかなんらかの圧力があつたのか、糾弾する内容の報道は日々減少していった。

社長に男優に撮影照明化粧録音担当の人員を含めた俺たちは『津軽海峽冬景色』で知られる夜行列車の津軽に乗り込み、誰も彼もが無口な車輛でひっそり北の国へ向かうのだった。

今は夏だから、青森駅は雪の中じゃないけどな。

社長がぼつりぼつりと俺たちに話をする。

「昔は横長のでかいリュックサックを背負つた、カニ族と呼ばれる旅行者が沢山北海道へ来たもんさ。東京オリンピックの頃に知床が大人気になつてな。若者がわんさか北海道に押し寄せたんだよ。」

「で、帯広に住む伯父さんによると、金の無い若者がヒッチハイクをするためとかで国道にびつしり並んでいたそうだ。うっかり車を停めると、彼らはすぐに乗り込んできたらしい。そして非常識なことをする者が何人もいたから、ヒッチハイクは徐々に廃れるよ

うになった。時々思うんだが、そうした連中は今頃なにをやっているんだろうな。」

元女優の化粧担当の子も、元男優の照明担当も、興味深く社長の話を聞いている。

「その後、一般家庭へ宿泊や食事を求める酷い者も出てきた。セイコーマートなんて便利なもんは無い時代だったし、わからんでもないが、まあ、常識だわな。それが頻発して社会問題になり、北海道の市町村や旧国鉄は駅周辺や観光地に『カニの家』と呼ばれる簡易無料宿泊施設を設けた。ミツバチ族と呼ばれるモーターサイクル乗りが北海道へやって来るようになって、『カニの家』は『ハチの家』になった。だが、今ではすべて消えていった。帯広はカニ族の聖地だったが、それを現在知る者はあまりいないだろうな。函館にいる叔母によると、今でも夏場になるとモーターサイクル乗りがブオンブオンとエンジン音を鳴らして走り回っているそうだ。まだまだリッター五〇〇円ほどするのにな、ご苦労なことだ。まあたぶん、それが彼らの心意気なのだろうな。」

「やれ高速化だ、やれ快適化だ、と日本のみならず各国は鉄道を進化させてきたが、深海棲艦がゼーンぶち壊しちまったなあ。新幹線の本数はがた落ち、旧き懐かしきL特急や寝台特急や夜行列車が復活。時代の逆行現象だな。利便性を追求したくとも出来ない状況ってどこか。苦渋の選択なんだろう。今後二〇年以上は社会が停滞か発展しにくいらしいから、それに合わせた施策なのだろうさ。昔を知る人間から言わせると、こうした車輛を使えるのも贅沢に思えるがね。当たり前前に存在する、存在し続けると思っ

ていてもそれが実際に継続出来るとは限らん。半世紀後に新幹線がばんばん走れる状況とは、ワシには到底思えんね。未来予測は困難だから、今喋っていることは老人の与汰話と思ってくれ。」

「昔はよかつたなあ、つてのは年寄りの繰り言に聞こえるかも知れんが、昔の方が時間がゆつくり進んでいて、今みたいにせかせかして荒々しく過酷では無かつたよ。貧乏な人間は沢山いたが、それをバカにする奴はあまりいなかったなあ。」

「今は重箱の隅をつつく人間が、随分と増えたように思えるね。気にいらぬから全否定して悦に浸るなんて、ダメな人間のやり口だ。お前たち、そういう人間になるなよ。あれは墮落への道だ。そうした人間は、必ず何処かでしっぺ返しを喰らう。本人にいかなくても、本人が一番大切にしている人間に矛先が向かうこともある。それと、どんな人間にも大切にしているものがあるんだ。そういうものはつかないようにしろ。恨んだ人間は本当にこわいものだからな。因果は巡るんだ。因果応報と言うだろう。あれは本当のことだぞ。他人を平気で傷付ける奴は、何処かでその仕返しを喰らうんだ。逃げ切れることなど無い。何時かはツケを払う時が来る。そういうものなんだ。だから、後悔しない生き方をするようにしろ。それが大切なんだ。」

「青森駅を降りて、青函連絡船乗り場へと向かう。」

青函トンネル開通後に塞いだ場所が、再度開かれるとは時代の皮肉か。

或いは、ノスタルジアの復活か。

紅白幕と垂れ幕とが見えてきた。

秋田の農業高校が、夏の甲子園で優勝したことを祝うものだ。

秋田の物産を扱う出店が複数あり、そこには人が多く集まっていた。

我々も少し買い物をする。

きりたんぼ、旨し。

先つぽを化粧担当の子がかじっていて、なんだか少しドキツとした。

船着き場につくと、船の護衛に当たるのだろう、艦娘たちがおでんを食べながら雑談

している。

竹輪を頬張る艦娘に何故かドキツとした。

「あれは青森名物の味噌おでんだな。」

社長が言った。

「旨いんですか？」

「旨いぞ。濃いめの味噌をかけるのが特長でな。撮影が終わったらまた此処に来よう。

駅近くの店で旨いところを知っているんだ。あそこはいいぞ。焼き魚や握り飯も旨い

からな。」

風がびよおびよおと吹いている。

艦娘たちがじつと俺を見つめた。

その内の一人が、何故か俺を見つめながらこちらへ近づいてくる。

なにか用かな？

天気は曇りだ。

あちらは晴れるといいな。

CCLXIV : 小さな誘惑

大本営が広報の一環として、少女ファッション雑誌の『年上彼氏』特集号に協力することが決められた。

様々な『おじさん』たちが若い娘たちと腕を組んだりなんだりで、誌面の一面を飾るという。

読者の要望が強かったとか。

組織票らしきものもあつたらしい。

年上か……そんなにいいもんかね？

おっさんにはよくわからない話だ。

撮影場所は函館とその周辺が予定地。

私は提督の正装やらポロシャツにチノパンやら新撰組のダンダラ羽織（実際の彼らは着ていなかったという説もあるが）やらオサレな服を着用し、全国にこの冴えない面を晒さねばならないのだという。

それ、なんて罰ゲーム？

私の気分と反比例するかの如く、艦娘たちは何故か興奮しまくっていた。古い写真機や、八ミリフィルムのビデオカメラをも用意する者までいる。浮わつた雰囲気です、これではとても日常業務が出来そうには見えない。

大湊（おおみなと）に恥ずかしながら業務委託しようかと電話してみたら、あちらの筆頭秘書艦のあきつ丸に断られた。

あちらもなんと浮わつた雰囲気らしい。

ギリギリの業務しか出来ない状況だとか。

「この程度でヤワになるとは、実に嘆かわしき事態であります。愛だの恋だのへうつつを抜かす前に、やらねばならないことは山程あるというのに。艦娘の本分を忘れてはならないのであります。」

「え、ええ、そうですね。」

「提督殿も怒られる時は、ビシツとやらねばならないでありますよ。」
「は、はあ、心得ておきます。」

ケツコンカッコカリ済みの艦娘と言えど、甘くはないということか。

しかし、大湊はどうしてふにやふになつたのだろう？

冷静そうな妙高先生に選抜してもらった艦娘たちで、日常業務を回すことにしよう。

困ったものだ。

とぼとぼ本棟を歩いていると、背後から声をかけられる。

「あの、提督さん。」

振り向くと、艦娘になりたい娘群のあんこちゃんたちが勢揃いしていた。

皆何故か悲壮な顔つきだ。

なにかあつたのかなかな？

「はい、なんででしょうか？」

「結婚はされませんか？」

……はい？

「あの、一体、なんの話でしょうか？」

「モデルの女の子たちは可愛いから、提督さんがよろめいちやうんじやないかって現在噂が飛び交っているんです。」

「あのですね、おじさんは今のところそういうことをしませんから大丈夫です。それは根も葉もない噂です。ばらまいた張本人を捕らえた方に間宮羊羹をあげましょう。」

色めきたつて、彼女たちは走り始めた。

よかばいよかばい。

そもそも何故そんな心配をされるのか、心外であります。

皆、勘違いしているのであります。

噂をばらまいた娘は、駿河問いの刑に処した。

『鳥籠』も考えたが、それはやり過ぎだろう。

講堂で緊急集会を行い、虚報に惑わされないようにと嚴重注意した。

素早く逃走する犯人との体力差を人海戦術で補い捕縛したあんこちゃんたちに、褒美の間宮羊羹を皆の前で与える。

月餅やマドレーヌやどんぐりクツキーもおまけにつけた。

『普通の女の子』に戻ってもらわなくてはならないのに本末転倒かとも思われたが、それはそれこれはこれだろう。

彼女たちを力ずくで『普通の女の子』にするのではなく、知恵を用いてそうなって欲しいのは贅沢な悩みだろうか？

国内の『ニコライ』『ハイティーン』、上海つ子御用達の『飛燕(フエイエン)』、フランスに於ける新進気鋭的服飾誌の『アントレ』の三カ国合同企画だとかで、集められたモデルの女の子も小学六年生から中学三年生くらいまでの多感な思春期の女の子たちが函館の赤煉瓦倉庫群に集結する。

うわー。

ないわー。

これはないわー。

おっさん、浮いているけんね。

どがいせえと。

どぎやんもこぎやんもありもはん。

まつこと困ったきに。

世界の笑い者になるじゃんかよう。

モデルのおじさんたちは余裕綽々（しゃくしゃく）みたいだが、モデルに撮影関係者に雑誌関係者に護衛の艦娘たちでなんとまあ三桁の人員がごちやつとおるがね。

ちなみに艦娘の数が最も多い。

さりげなく私の傍で細々と用事を行っている大井北上や紅茶姉妹は、何処の所属艦なのだろう？

大淀が大本営の人々と雑誌関係者との折衝役をしている。

何処かの天龍とうちの龍田らしき兩名が、駆逐艦たちを捌いていた。

特別編成の糧食班を鳳翔間宮の指揮下で行わせ、函館駐屯地から野外炊具1号改と2号改を借りておさんどんに励んでもらう。

野外炊具には何故か貼り紙が為され、『技の一号』『力の二号』とそれぞれ墨痕（ぼつこん）鮮やかに書かれていた。

モデルの女の子たちは度胸があるようで、私のような冴えないおっさんにでもにこやかに対応してくれる。

ありがたやありがたや。

妙にペタペタ触られている気もするが、気のせいだろう。

モテているんですね、と感心していたからおもちやにされているだけですよと答えておく。

天気は台風の影響が心配されたけれども、その合間を縫って撮影撮影撮影。

私はダメ出しされまくる。

いや、ホンマすみません。

緊張しているのがイカンらしい。

遺憾ではあるが如何ともし難い。

若手の女性編集長の愚痴も何故か聞かされる。

私は編集者しか出来ないんだとか、撮影が面白いと思ったことはないんだとか、撮影の時はいつもお弁当で味気ないんだけど今回特設の炊事班の人が拵（こしら）えた麻婆

井やお粥やら点心やらはおいしかったとか、締め切りが近づくと編集部へ缶詰めになつて延々校正しているとかを撮影待ちの時に拝聴した。

気持ちはわかるが、暗い話ばかりだなあ。

その後、何故かモデルの女の子たちにつつまつて質問攻勢を受けた。

数カ国語のちゃんぽんで練り広げられる記者会見みたいだな。

ちよつと待て、何故BBCの特派員がいるんだ？

面白そうに撮影している衣笠と無言でせつせとなにやら帖面に記入している青葉には、後でお小言をあげよう。

ドイツや地中海で活躍している同胞の話も聞けたから、まあよかんべか。

しかし何故恋人の話になると、皆鼻の穴が広がるのだろうか？

こんなおっさんの恋の話なぞ聞いてもおもしろくないだろうに。

そもそも語るような話はありません。

私はすつからかんの人間なのだから。

ひなびた雰囲気の手沿いの倉庫を背景に、海外の少女モデルたちが私に密着する。

この子たち、ちよつとおっさんにくつき過ぎではなからうか。

君たち、この冴えないおっさんをからかっているだろう？

この後、外国人墓地近くでもピシバシ撮影するのだとか。

隠れ家的に好んでいるあのイタリア料理店も既に彼らに把握されていて、国際的熱烈攻勢を受けた店主は頑として撮影を断ったのだとか。

その代わりではなからうが、鎮守府の食堂での撮影は行いうらしい。

馴れぬナチュラルメイクを受け、眩しい照明を当てられ、多数のレンズに晒され、なんだかどんどん疲れてゆく。

私の分の撮影が終わり、李さんが鍋を振るっている近くの椅子へ腰掛けた。

よっこらせ、のよいよいいと。

机に頬杖を突き、ため息を吐く。

私の目の前にずい、とお茶が置かれる。

「提督さん、元氣出しなよ。」

ダンダラ羽織を着た瑞鶴だった。

「ありがとうございます。」

「提督さんのことは翔鶴姉の次の次の次くらい、大切に思っているからさ。ちなみに加賀先輩は殿堂入りの別格だけどね。」

「そう言っていただけですと、嬉しいですね。」

「卑しい女ずい。」

へ？

私と瑞鶴が声の方へ向くと、不機嫌そうな加賀教官が見えた。

「そうやって、弱った提督の心につけこみ忍び込んでやさしい言葉をかけ、いともえげつなく容易く落とすのね。」

「か、勘違いですよ、加賀先輩！ 私は翔鶴姉一筋ですから！ 先輩も大好きですし！」

「それが偽装だったと、今わかったわ。」

「落ち着いてください、教官。瑞鶴さんが翔鶴さんや教官を慕っているのは周知の事実でしょう。」

「私はいつも冷静よ。でもね。」

「でもね？」

「好きな男の前でうろちよろする娘がいたら、嫉妬の炭火焼きで焼き鳥屋が開けそうになるのよ。」

「嗚呼、教官の焼き鳥はとてもおいしいですからね。」

「そうなのよ、提督さん。塩もタレもおいしいのよ。」

「鶏肉の熟成加減が絶妙なんですよね。」

「わかつているじゃない、提督さんも。」

「何故、この期に及んで和氣藹々（あいあい）としていられるのかしら？」

ふっ、と加賀教官のセブセンシズな鬨気が弱まってゆく。

「まあ、私としては落ち込んで困りきつた提督を見たくないの。瑞鶴も程々にね。提督の妻の座に於ける競争率は、現在とんでもない方向に向かっているのだから。」

「お氣遣いに感謝します、教官。」

「流石は先輩！ 見事です！」

「貴女も早く相手を見つけないさい、瑞鶴。」

「うーん、今は興味ないですし、別にいいかなってところです。」

「提督はあげないわよ。」

「ええと、謹んで辞退します。」

「私の大好きな人へダメ出しをするなんて、これだから五航戦は。」

「今日は特に辛辣（しんらつ）ですね、先輩。でもそんなところも素敵です。今の、小町のポイントが高いですよ。」

風が強くなってきた。

上空の警戒に当たっている航空機が宙を舞う。

龍驤と雲龍とヨークタウンかな？

我々はしばし空を見る。

「強風時の同時制御をもう少し鍛えましょう。手の空いた空母系艦娘を招集し、合同教育するようにします。」

「戦闘中に強風が吹いて航空機が飛ばされたなんて、あつて欲しくない事態ですけどね。」

「函館を含む道南の渡島（おしま）地方はしばしば風が強いですから、そういった事態を想定するのも有意義でしょう。」

「テイトクサーン、サツエイサイカイヨー！」

モデルの連合戦隊に捕まり、そして華やかに撮影は続くのであった。

これこれ、そんなところを触ろうとしてはいけませんよ、お嬢さん。

CCLXV：悲しいハートは燃えているわ

大本営預りの、艦娘無き提督たちが函館にやって来た。

総勢五人。

五人揃ってゴ………まあ、それはいい。

彼らと艦娘たちを直接的に接触させてパチパチパンチでデートといふかなんとか紅鮭といふか、まあなんかそんな感じで一目会ったその日からを行うちゆう寸法だ。

鷹の目チエツクも必要かな？

出会いはハイウェイジャンクシヨ……でなく、鎮守府食堂の一角。

既に着任や転属を望む艦娘たちがお見合い大々作戦に臨むべく、緊張した面持ちで待機している。

QIIでない筈だが、なんだか遣り手婆さんにもなつたかのような気分だ。

「貴方たちを待っている艦娘たちは、あちらにわんさかいます。」

「「「オーッ！」」」

大変盛り上がる提督たち。

まあ、わからんでもない。

最初はこうなんだよなあ。

実際は艦娘が一方的に選ぶのだが。

ヘッドライナーとファティマの見合いに、なんとなく似ている気がしないでもない。

現在の提督二種の初期艦娘所有枠は公式発表で六名なのだが、実際着任するのは一名か二名がいいところ。

三名いたら御の字。

いやこれは酷いな。

相性というか、制御可能枠というか、許容範囲というか、なんだかよくわからない大ききさで決まるらしい。

お猪口一杯の人もいれば、コップや洗面器やプールのような人もいるとか。

提督一種の場合は、艦娘との相性がさほどでなくとも……おっとこれ以上は言えねえ言えねえ言えねえな。

地道に信頼度を高めることは大切だと考える。

駆逐艦は正直に思ったことをずけつと言う風潮がある者も散見されるので、提督によつては一撃大破もしくは一撃轟沈することもある。

たかが駆逐艦と思つて彼女たちを侮る提督は、さほど時を置かずに身分が失われることだろう。

艦娘の基幹戦力は駆逐艦であり、駆逐艦無くして鎮守府泊地警備府などは運営が成り立たない。

それがわからない提督は短命に終わるし、重々承知している提督は長生き出来るかもしれない。

うーん、今回の提督たちに艦娘たちはあまり乗り気で無いみたいだなあ。

提督たちは瞳孔を開き身振り手振りの大奮闘だが、結果が伴っていない。

詠唱する魔法のどれもが無効化されているみたいに見えるくも無い様相。

ワイルドカードを切るしかないか？

出戻り系のケツコンカッコカリ経験艦も加え、彼らに一当てさせるとするかな。

一名ずつならなんとか所属させられる権限を有しているし、試しにやってみようか。

彼らが上手くいくよう、そつと祈っておこう。

私は北斗七星が描かれた漆黒の軍配団扇を振るい、転属希望の第一陣を引き下げる。

続いて訳アリの第二陣を戦場へ投入した。

現役から宙ぶらりんの彼女たちへの変更。

仲間を失った娘。

提督を失った娘。

基地を失った娘。

大人しそうな顔なのに、とある事態に於いて激しすぎたために提督を何人も比良坂へ送り込んだ娘。

格闘技が好き過ぎて、むにやむにやな事態を引き起こした娘。
エトセトラ、エトセトラ。

言うなれば

運命共同体

互いに頼り

互いに庇い合い

互いに助け合う

一人が五人のために

五人が一人のために

それだからこそ

戦場で生きてゆける

嘘つきね！

猜疑（さいぎ）に歪んだ

暗い瞳が提督を魔貫光殺砲する

貴方も

貴方も

貴方も！

私の提督になんてなれないわ！

彼女たちは

なにを思い描いて

ここにいるのか

それはあまりにも圧倒的な戦場だった

艦娘の一方的狩り場ナリ

提督と呼ばれる男たちは

戦歴も無き戦場童貞に過ぎない

大手鎮守府の提督程には

艦娘を知らず

その血塗られた過去への理解も又低い
それでも男たちは切に願う

可愛い艦娘たちと共にあらんことをば

仮にその命が風前の灯だとしても

先へ進むことを諦めてはならない

誘蛾灯へと招かれるがごとく

今宵も男たちは火だるまになって

まっ逆さまに墜ちてしまつて

結果としてデザイアする

「私、格闘技がとてつもなく好きなんですよ。」

筋肉提督の分厚い密林系胸板の毛に指を探索者のようにくぐらせつつ、大人しそうな
軽巡洋艦が興奮した面持ちで格闘技愛を語る。

「どうやら、彼の筋肉は彼女の琴線に響いたようだ。」

「そ、そうですか。」

「や、夜戦だけは得意なんですよ、私。」

「その、や、夜戦がお得意なんですわね。」

「ええ、今度一緒に試してみませんか？」

「一緒に？ 夜戦は、深海棲艦相手のものではないのですか？」

「ふふつ、いいですね、そういう反応。」

「あつ、わかりました。私を深海棲艦に見立てて訓練するのですね。」

「いいですよ、いいですよ、それでいいんです。」

「私でよければお付き合いますしよ。」

「はい、私も力の限り頑張りますから。」

ここで男の腹が、きゅるると鳴る。

まるで出番を待っていたかのように。

おんなが間髪を容れずに小袋を出した。

「あ、あの、クツキーを焼いてみたんですが、如何でしょうか？」

「は、はい、ありがたくいただきます！」

むさぼるおとこ。

ほほえむおんな。

やがて両名は正中線とか陸奥圓明流がどうか甲賀流忍術や伊賀流忍術やなにか余人にわからぬような、武技の話になってゆくのだった。

関節技の説明では彼女の双丘がむぎゅつと男に押し当てられ、彼は赤面する。

それを気にせず、彼女は益々熱の籠った武技談義に花を咲かせるのであった。

ブレザーをきちつと着こなしたその駆逐艦は、傍目からも頑張り屋に見えた。

「お助け出来ることがありましたら、なんでもお気軽におっしゃってくださいね。私、出来る限り頑張りますから。」

「は、はい、こちらこそ、よろしくお願いします。」

緊張した提督につつと近づき、駆逐艦は彼のナニカ的位置を素早く修正する。

「提督の魚雷管の角度を直しますね。」

「え、あ、あの、え、その、あの、ちよ、す、すみません。こ、これからはそんなことをされなくても大丈夫ですよ。」

本音を隠し、男は紳士的に言葉をかけた。

「提督からはきちんと直すように指令を受けていたのですが……。」

「なんて羨ま……いえ、やはりこんなことはすべきではありません。」

「わかりました。」

「わかつていただけて幸いです。」

「それでどうでしょう？ 私のようなふつつかものでも、提督の元で戦えますでしょうか？」

「勿論です。伏してお願いたいくらいです。」

「ありがとうございます。では輪形陣を組んで、着任おめでとうございますとやった方がいいですか？」

「やめてください、それは自分の心に効きすぎますので。」

「では、お茶のお代わりは如何ですか？」

「いただきましょう。……ほう、これはお世辞抜きでおいしい。」

「私、お茶とお味噌汁とおむすびには自信があるんです。」

「いい奥さんになれるでしょうね。」

「そ、その、それはまだ早いです。」

「え、あ。あれ？ あ、はは、少し気が早すぎましたか。」

「おいしいご飯はお任せください。」

「期待していますよ。」

「イワシのつみれ汁にとろろを掛けた麦飯もいいですね。」

そして、両名はにつこりとした。

元気で生真面目で頑張り屋ほい駆逐艦が、力強く挨拶する。

「叢雲ちゃんを含む、ここにいる特型駆逐艦姉妹の監督役をしております！ よろしく

「お願いします!」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

先ずは丁寧なやり取りが繰り広げられる。

そしてそれはいとも容易く変化してゆく。

「下穿きを含めて準備完了です、司令官!」

「え? 一体なんの話ですか?」

「下穿きには見せ方があるんです。ちらりと見えるか見えないかが大切であつて、わざと見せるのは下の下ですね。」

「はあ。」

「興味ありませんか、私の下穿き?」

「えっと、いろいろな意味で問題になりそうですから答えは保留とさせていただきます。」

「ちなみに今日は勝負下着です。」

「あの、着任についての験担ぎですよね?」

「勿論です! それ以外にも意味があります。お知りになりたいですか?」

「ええと、また今度でお願いします。」

「わかりました。それですね、私は和食と蕎麦と蕎麦饅頭作りが得意です!」

「ほう、それはいいですね。」

「毎日お味噌汁を作ります！」

「期待していますよ。」

「お任せください！　ところで、司令官の夢はなんですか？」

「平和な世界を築くことです。」

「それは素敵な夢ですね。私と同じです。ところで。」

「はい。」

「司令官、今度夜の羽根突きをしませんか？」

「はい？」

駆逐艦は素早く提督の傍に寄って、手を握り締めた。

ひっそり花咲く娘の如き駆逐艦。

何故か、彼女はキヤノンの大型写真機を装備している。

レンズは高性能の金属製単焦点。

昔の製品だが描写力にすぐれる。

はにかみながら、彼女は提督との距離を狭めてゆく。

「あ、あの、恥ずかしいです。」

「は、はい、俺も恥ずかしい。」

真っ赤な顔。

提督も同様。

「ここは、私も頑張る時なのです。一枚撮りますね。」

「撮るのか？」

「撮りません。」

パチリ。

彼女は撮影が趣味なのだろうと、提督は考える。

「ふふふ、なんだか緊張しちゃいます。それではもう一枚撮りますね。」

「また撮るのか？」

「また撮りません。」

パチリ。

撮影は彼女の意志疎通の方策なのかも知れないと、提督は再考する。

何枚か撮影し、彼女が提督に問いかけた。

「あの、提督って彼女はいますか？」

「い、いや、いない。誰ともしていません。新品だよ、俺は。」

「……あつ、そうなんですか。ふふふ、成程。うふふ。」

「変かな？」

「いいえ、全然。そうだ、今夜、一緒に星を見に行きませんか？」

「そうだな、それもいいな。」

爽やかに両名は笑った。

ちよつとのんびり屋ほい感じの駆逐艦が、提督の脇腹を揉む。

揉む揉む揉む。

提督は何故かそれに興奮した。

女の子にそんなことをされたことなど今まで無かつたし、今後も無いだろう。

「司令官はゲーム好き？」

唐突に彼女が聞いてきた。

「昔、スーパーファミコンやセガ・サターンやPCエンジンで遊んだくらいかな。今はさっぱりだよ。」

「レトロゲーだね。お勧めは？」

『フロントミッション』や『デビルサマナー ソウルハッカーズ』や『ジアンソルブド』や『サクラ大戦』はよく遊んだ。」

「ふーん。全部やってみたいかな。それらが手に入ったら、一緒にやってくれませんか？」

「いいぞ、勤務時間外ならな。」

「今の司令官の趣味はなに？」

「そうだなあ。提督になる前は殆ど毎日仕事漬けだったから、休日は釣りでもしようかな。」

「司令官、ネットでそういうことをするのはよくないよ。」

「そつちじゃない。」

「そつか。」

「そうだ。」

「私は読書と漫画とラジオを聴くことが特に好き。星新一のSFはマジお勧め。『魔法使いの嫁』もなかなかいい。それと、同姿艦の子が望月とやつてる『ハッチーモッチーステーション』は毎回聴いてる。あれはいい。マジ感激する。最近は、あつけし先生の本を特によく読むよ。」

「へえ。」

「ごろごろ寝ていたら過ごせたら最高だね。」

「それはまあ……でも無為に過ごすと虚しくならないか？」

「司令官との夜に備えないといけない。」

「夜？」

「夜。やれば、本当に出来るし。今夜確かめてみる?」

「なにをやるのかな?」

「大丈夫。痛くしないから。」

「なんだか不安になつてくるよ。」

「そうだ、一緒にひきこもろう。」

「なんで?」

「そうすればいつでも一緒だし。」

「先ずは仕事しろよ。」

「仕事漬けの人生は虚しくなる。」

「よし、先ずはお前がきちんと仕事をするように仕込むところから始めよう。」

「えええ!」

「勤務時間外でごろすればいいさ。」

「うくん、やってみる。」

「よし、その意気だ。」

困った顔の駆逐艦が提督の腰をべちべち叩く。

そしてそれは撫で撫でになり、やがて……。

すっかり者の雰囲気たずさえた駆逐艦が無常を見てきたかのように、静かな笑みを浮かべながら提督に相対する。

「大手鎮守府の各司令官の元には必ず同僚艦が配属されるんですけど、ずっと所属し続けられるとは限らないんです。」

「え、あ、その、そうなんですか。」

「そうなんです。その程度の扱いの女なんですよ、私は。」

「あまりご自身を卑下されるのは、よくないと思います。」

「あまりものの艦娘の駆逐艦。そんな女でいいんですか？」

「貴女は素敵に見えます。私はその直観を信じたいです。」

「お人好しなんですネ。」

「よく言われます。」

「わかりました。雨の日も雪の日もご一緒しましょう。」

「こちらこそ、よろしく願います。」

「吹雪ちゃんと共に夜の羽根突きを一緒にしませんか？ ……なーんちゃって。」

「ははは、お手柔らかに。」

「うふふ、特型駆逐艦の夜の力、後でお見せしますね。」

「ほう、それは楽しみですネ。」

わかっていないような顔の提督に慈愛の笑みを見せる駆逐艦。
愛は深くやさしく限りなく。

さっぱりした感じの短髪の駆逐艦。

お目めぐりくりりで、いたずらっ子ぽい感じがそこかしこに漂う。

「よう。よろしくな。」

「こちらこそ頼むぞ。」

「ふっふっふっ、このスキンシップはどうかな？」

「おいおい、お前はやんちゃなんだな。」

「いつけるいけるう！ 早く夜戦したいぜ！」

「そいつは頼もしい。」

「明日の朝は一緒に乾布摩擦しようぜ。」

「え？ あ、まあ、そりやかまわんが。」

「夜は深雪スベシャルを喰らわすから。」

「なんだそれ？」

「夜のお楽しみってことさ。」

「へえ。じゃあそうしとく。」

「吹雪、白雪、初雪と一緒に組めるのはとっても嬉しいねえ。艦娘冥利に尽きるよ。」
ボーイッシュな駆逐艦は、そして花が開くように微笑んだ。

「ふうん。あんた、あたしの提督になりたいの？」

「は、はい、そうです。」

「そんなにかしこまらなくても大丈夫よ。別に取って喰ったりなんてしないから。」

微笑むは歴戦の駆逐艦。

上がりっぱなしの提督。

青白き眼鏡男の声は完全に裏返っていた。

だが、それを指摘する野暮な者はいない。

足を頻繁に組み換える駆逐艦。

そのワンピースの裾はとても短い。

男は魅惑の秘奥的三角地帯を努めて見ないようにするも、偶然見えてしまつて赤面する。

ニヤリとひそかに笑いながら、駆逐艦は圧倒的優位の元で男と対話する。

「あんた、女の子と付き合つた経験が無いみたいだけど大丈夫？」

「は、はい、大丈夫です！ 一生面倒を見させていただきます！」

「なにどさくさに紛れて求婚しているのよ。」

「あ、あの、緊張してしまして、誠に申し訳ありません。」

「あのさ。そう思っているのなら。」

駆逐艦はどこもかしこもガチガチになった男の膝に指を這わせ、耳元でそつとなにかを囁いた。

男は一撃大破し、硬直してしまった。

その軽空母の胸元から、ちらりちらりと膨らみが僅かに見える。

きちつと着込まれている筈の赤いシャツの釦（ボタン）が何故か一つ外れていて、豊かな双丘と布地の一端を男に知らしめていた。

彼女は実に気さくに振る舞っている。

女の子に密着された経験など過去に存在しない強面（こわもて）男は緊張と興奮のあまり、己が下着に汗染みとそうでないものを倍加してゆく。

「へえ、女の子と今まで付き合ったことがないのかい。あんたはいい男だから、てつきり何人もの子と付き合ったことがあるのかなんて思ったよ。」

「い、いえ、私はそんな経験なんて無いんです。」

「勿体ないねえ。じゃあ、そのご立派な主砲も宝の持ち腐れじゃないか。」

「え？ え？」

「なんだい。焦っちゃって。可愛いじゃないか。」

「は？ あの、ええと？」

元客船は、男をどう調理しようかと微笑みかける。

男はそれを純粹な好意と捉え、真つ赤な顔をした。

彼女はむくつけき大男へなにかを囁く。

会心の一撃で男の視線がさ迷い始める。

初めて言われた言葉に動揺が隠せない。

「大丈夫。夜は長いからね。」

軽空母はやさしくやさしく男の背中を撫でた。

おんなの吐息におとこは濡れる。

おとこはおんなに絡め取られた。

「私の単装砲、きつと気に入るわよ。」

提督の真正面で親しげに話しかける軽巡洋艦。

逃がさへんで彼女の瞳は語るが、おそろしく判断力の低下している男には彼女の短
いスカートがふわりふわりとうごめく様しか見えてこない。

なにかが、彼女が動く度に見えたり見えなかったり。

それは誤誘導。

既に青年は彼女の手のひらの中。

経験無き彼にはわからない世界。

「単装砲、ですか。」

「て言つても、私に単装砲が生えている訳じゃないからね。」

「は、ははは。そ、そういうのもアリかも知れませんねえ。」

「あら、そういう子がいいの？」

「え、あの、べ、別にそういう訳でもないんですが、そ、その、あ、貴女が魅力的過ぎて焦ってしまいます。」

「お上手ね。そうやって、何人もの女の子を泣かせたんでしょ？」

「ち、違います！ お、俺は童貞です！」

「ふうん。じゃあさ。」

「え？」

彼女が、背の高いものの容姿に今一つすぐれない男の耳元でなにやら囁く。

男は茹で蛸のように赤くなり、かくんかくんと首を振る頷き人形と化したのだった。

「ふふふ、可愛いわね。」

「お、俺は可愛くなんてないです。そんなことは生きてきてこのかた、親にだって一度も言われたことなんて無いです。」

「私が可愛い、って決めたから提督さんは当然可愛いのよ。だから、提督さんは私の価値観を信じたらいいの。でしょ?」

こてん、と首を可愛くかしげる軽巡洋艦。

びりびりと痺れるが如くに硬直する提督。

瞬時に距離を詰めた軽巡洋艦にギョツと抱きつかれ、ウツと一言漏らしつつ男は一撃大破した。

そんなこんなで日も暮れて。

なんとか二名ずつで、提督たちへの所属を成立させる。

無所属から転属まで、いろいろな背景を持つ艦娘たち。

上手くいくかどうかは、彼ら次第だぞい。

五人ともデレデレしているが大丈夫かな?

小樽の提督が、「腑抜けどもめっ!」と怒りそうな感じだが。

今夜早速夜戦を仕掛けられる提督もいるみたいだが、それはそれであちらの事情だ。

そこまで面倒は見てもらえない。

まあ、ワセリンくらいは提供しておこうかな。

後、傷薬のキツパイロールとか絆創膏とか包帯とか消毒液とか。

夜間背中に刻まれた爪痕は、けっこうじわじわと痛むものらしい。

呉第六の先輩がしみじみと語っていた。

そうか。

あちらの鳳翔は……ええと、情熱家なのだろう。

ケツコンしたら、毎晩傷だらけになるのだろうか？

あんなことやこんなことをされて。

痛いのは好きじゃないんだけどな。

ケツコンカッコカリ経験艦も今回数名移籍出来たので、良しとしよう。

にこにこしている軽巡洋艦たちがどう豹変するのか、彼らは知らないんだろうな。

ヤバイ子もいるんだけどな。

富田（とだ）流の『煉獄』なんておそるべき連続技を、目の前で見せられるとは。

長門教官の武技言語とか影技とか覚悟完了とか、妙高型重巡洋艦姉妹及び大淀島風吹雪の連携技も見事なもので、クンフー映画もびつくりの展開であった。

彼らは雑居鎮守府に配属されるらしいので近海哨戒から遠征艦隊及びそれなりの作

戦までこなせる二艦隊という感じでまとめてみたが、長持ちして欲しいものだな。

民家改造型の派出所的な基地に、全員まとめて着任することだ。

海沿いの廃旅館で共同生活するのだとか。

せめて来年まで無事でいて欲しきものよ。

彼らも重々気を引き締めねばなるまいて。

なにしろ、これから戦争になるのだから。

彼らと艦娘たちに幸多からんことを。

あの時。

燃え尽きた筈の私たち。

枯れ果ててゆくのが当然だと思い込んでいた私たち。

戦場で灼け、身も心も焦がしてしまった。

最後と思った、提督との夜。

余所行きの声さえ忘れた夜。

サヨナラを平坦に言った夜。

翌朝の水平線は美しかった。

季節で変わる所屬基地。

違和感ばかり加速する。

本命など、とつくに何処にも存在しない。

海岸線を走つても空虚さは満たされない。

かつての避暑地をさ迷つてもなにもない。

沈みゆく夏。

暑い季節が終わり、私たちは新しい伴侶を迎える。

それが正しいことだと、あの冴えないながらもやさしい提督は言ってくれた。

彼の本命にはなれない。

層が分厚過ぎる。

それ故に、別の本命を見つけるしかない。

傍らにいる彼は本命になれるのだろうか？

頬を少年のように紅潮させた提督の彼が？

わからない。

わからない。

だけど、前に進むしかない。

細い細い、蜘蛛の糸の如くに細い道を辿って進むしかない。
希望の光が彼方にあると信じながら。

CCLXVI：カンムスもつらいナリ

嗚呼。

また、テイトクがダメになった。

昨晩まではちゃんと動いたのに。

三名がかりがよくなかったのか？

首席に怒られる。

函館の魔王が動き出したらどうするつもりかと。

事務の田中が怒ると大変らしい。

メトロン星人が連動すると更に滅茶苦茶になる。

アレは確信犯だからナ。

引っ掻き回すのが大好きだし。

ワタシたちだってコロすつもりじゃなかったよ。

ニンゲンは脆すぎて、扱いが大変困難でコマル。

イツソのこと、函館に移籍してしまおうかしら？

首席にテイアンしたら、余計に怒られた。

艦娘として活動するのは楽であるとも言えるケド、同士討ちはしたくない。

難しいところヨ。

テイトクっぽい男が連れてこられた。

チャラチャラしていて好きくないナ。

今度はどれくらい動いてくれるかな。

二晩でテイトクっぽい男を仲間がダメにしてしまい、またもや首席に怒られる。

ワタシは壊していないヨ。

連帯責任と言われちゃう。

アア、函館に行つちやおうかなかな。

松輪泊地の男はまだ提督をしているらしい。

でも、あんなむさいのはちよつとイヤだな。

近くの警備府の手伝いに行く。

嗚呼、この子もニセモノ艦娘。

おっさんなんちやつて艦娘だ。

ずいぶん女の子っぽい仕草だ。

提督も偽者、艦娘も偽者ナリ。

ホンモノなんてあまりいない。

ニセモノ流行りの世の中に相応しいといふかなんといふか。

うそ。

ウソ。

嘘。

嘘まみれの世の中。

騙すことが正当化され、騙される者が悪いとされる世の中。

苛める外道どもが正当化され、いじめられる者に原因があるのだとする世の中。

苛める外道どもは世渡りが上手く反省することも無いまま生きる故に、世の中がよく

なる訳なんてないヨナ。

ブラック企業やブラック鎮守府が無くなる訳なんてないじゃん。

まあ、そいつらの変なところは潰してやるけどネ。

イツコでもぐしやぐしやにされたら泣き喚くし、ニコ共ぐしやぐしやにしたら悶絶案件ネ。

くくく。

ま、それは兎も角。

偽者が本物ばい業務に従事するなんて、チャンチャラおかしいワ。

あまり人のことは言えないケド。

へー、一緒の布団で寝てるんだ。

混ぜて、と言ったら嫌がられた。

解せぬ。

本隊はまたもや太平洋攻略に失敗したらしい。

提督と艦娘との間の信頼関係を、ちつともそつとも考慮しないからなんじゃないかしら？

こないだ要塞攻略戦に失敗したばかりなのに。

前回のことを反省出来ないのは駄目な証拠ヨ。

ホントに海域開放をやる気があるのかしらね。

呉第六の提督を異端児にしているからダメネ。

懲りない連中だこと。

トラック諸島に戦力を集結させているけど、情報はあつちに筒抜けよ。

アア、オバカサン。

そんなことすらわからないから、失敗続きなのに。

新入りがまた杖を持っていきそうになつていたので、チュウイする。

アナタが持つていくのは巻物ヨ。

それと操るのは航空機。

間違えないでよね。

慣れない子たちの指導は大変だ。

寝技ばかり覚えて、どうする気？

日本海での防衛戦に参加。

撃たれたので撃ち返し、適当に追い払う。

あの壊れた国は壊れても迷惑行為をする。

統一されていないが故の適当さかしらね？

なんとかならないかしら。

連中、人海戦術で使い捨てにしているワ。

酷いものネ。

女の子の涙なんて見ないふり。

六対一でもこちらに勝てないし、技術的に全然追いついていない。

彼女たちは貧しい暮らしからの脱却を願って改造され、初戦で殆どが沈んでゆく。

なるべく沈めたくないケド、あの男連中は別。

男の軍人は最優先目標にしている。

男なんて、もいじゃえばなんにも出来ないノ。

某海域にて護衛任務。

高高度迎撃を初めて見る。

超高空からよその大陸へ向かう機体を、ロケットブースター付きの機体で迎撃するのだ。

ロシア式で大量の使い捨てロケットをずらりと付けた機体がすつ飛んで、迎撃するのだ。

離れ業めいた曲芸にも思える。

暗号が解析されているとか、無電が傍受されているとか、運用している連中はちつと

もちよつとも考えないのかなかな？

高出力レーザーも案としては出たらしいが、超長距離狙撃は難しいとのことで見送られたとか。

エナジーの減衰が半端ないらしい。

リアル版●シマ作戦は無理か。

●マトの反射衛星砲みたいなのはどうかと提案したら、首席からお前は馬鹿かと怒られた。

解せぬ。

函館へ行って、温泉朝飯温泉昼食温泉おやつ温泉夕食焼きたてのパイを堪能する。

これ、下手な温泉旅館やそここのリゾートホテルとかを上回るんじゃないかな。

朝は中華粥にしてみたが、あれはまさに絶品。

マジ旨い。

あの料理人を持ち帰りたいくらいだ。

函館提督の定番なのもよくわかるワ。

しかし、あの焼きたてパイが出てくる理屈は理解出来ない。

いつの間にか食堂の机に並んでいるのだから。

どんな魔法を使っているのカナ？

お土産に幾つか貰う。

アズキ色のジャージ娘たちは、艦娘でもなんでもないニンゲン。

それなのに艦娘であろうとして、時折提督にじやれついでいる。

理解不能だ。

吹雪が近づいてきた。

「貴女からは、私と似たにおいが漂ってきます。」

だからナンだというんだ？

脅迫でもする気なのかな？

そんなことはムダなのニ。

彼女はにっこり微笑んでから、すつと立ち去った。

帰る途中で提督に出会ったので、どさくさに紛れてケツをつるりと撫でる。

ナゼかドキドキする雰囲気のもの。

平凡で、冴えない顔の筈なのに。

ケハイというかニオイというか。

むつちりした肉置（ししお）き。

ふむ、この手触りは悪くないナ。

鼻血がちつとばかり出そうダワ。

海防艦たちに手を取られ気を取られていた提督は、まるで無防備だった。周囲の艦娘たちが固まっている内に、すたこらさつさととんずらするべ。

なかなかいい感触だつタ。

これで当分の間楽しめる。

さあ、我が巢へ戻ろうカ。

C C L X VII : キッスは目にして

函館鎮守府の講堂。

『公開キッス試験会』と墨痕(ぼっこん)鮮やかに書かれた垂れ幕が飾られている中、舞台上に立たされた私はギラギラしたカリギュラたちにも似た視線を無数に浴びている。

これ、公開処刑じゃね？

満員御礼を上回る堂内。

熱気が暑さを助長する。

小豆色のジャージを着た女の子たちや深海棲艦たちもぞろつといた。

幾つもの探照灯に照らされて。

幾つもの熱い視線を注がれて。

決戦仕様の艦娘たちが私へ期待と欲望との入り混じった目を向けた。

こわいで御座るこわいで御座るバザールでござーる。

いやまあ、それはさておき。

既にそのかんばせを真つ赤に染め上げた鳳翔が、私の目の前にいる。彼女によつて見出だされたことから、我が提督生活は始まったのだ。なんちやつて提督なんだけど。

その華奢な両肩をそつと掴む。

彼女は、初夜を迎えんとする新妻のように震えていた。

息が荒い。

目の焦点がボヤけてきている。

大丈夫かな？

声をかける。

「鳳翔さん？」

「は、はい！」

いつもは添い寝や混浴を甘えるようにせがむ彼女が、今は大規模作戦に参加するかの如くに緊張している。

唇が赤く赤く濡れていた。

いかん、ムラムラしてくる。

トランスフォームしてしまいそうになる。

いかん、いかん、このままではいかんぞ。

私はやさしく彼女の頬を撫で、そつと素早く額（ひたい）に接吻（せつぷん）する。この方が損害は少ないだろう。

そう思つて。

だが。

「あつー！」

仰（の）け反る胸元。

汗ばむ彼女のおい。

ぎゅつとしがみついてきた彼女の体が、びくんびくと跳ねる。

はあはあと息が荒い。

「いよいよ、終わりの来ない夜が始まるのですね……。」

え？

「貴方のために壊れてゆくのも、おんなとして本望です。」

そして彼女はぶるぶると体を何度も痙攣（けいれん）させ、吐息を何度も漏らしながら、おんなを色濃く感じさせる顔で失神した。

涎（よだれ）が垂れている。

彼女の袴に染みが広がった。

オイル漏れが発生したのだ。

……いかん、見惚れて興奮してしまった。

司会進行役の大淀がこれを見て叫んだ。

「……メデイーック！　メデイーック！　衛生兵！　担架をすぐ此処へ！　直ぐ様入渠を！」

待機していた駆逐艦たちが青ざめた顔で鳳翔を担架に乗せ、素早く工廠へと向かう。ざわつく講堂。

私の次の相手として準備していた間宮の顔が、真っ青になったり真っ赤になったりしている。

いや、間宮だけではない。

何名もの艦娘たちが、緊迫した表情でこちらを窺っていた。

大本営から来た青葉衣笠姉妹も、想定外の事態に困惑しているみたいだ。

間宮の顔が、熟成したトマトのようになっている。

不味いな。

大淀が戸惑いながら、彼女を促した。

はあはあ言いながら、彼女が近づく。

抱き締めた体はぶるぶる震えていた。

額に接吻。

一撃大破。

症状は鳳翔に同じ。

鼻血涎オイル漏れ。

不味いぞ、これは。

司会進行役をほつぽり投げ、大淀が青いドレスに早着替えして私の眼前に現れる。いつものバールのようなモノではなく、なんだか立派そうな剣を腰にはいていた。

「私は剣に生き、剣に死す者。」

「なんだかいつもとノリが違いますね。」

「提督。」

「はい。」

「なにがあるうとも、私は提督の剣であり楯であります。」

鼻血がぼたぼた垂れ初めている。

理性で相当制御しているようだ。

「テイトク、ハヤクキスシロ！」

新たに司会進行役となったロシア艦の子が私を催促する。

彼女は手に持ったゼロを振り回している。

致し方あるまい。

おでこにチュー。

彼女も一撃大破。

急遽舞台の床掃除が行われ、艦娘やらそうでないモノやらと私がナニをする辺りには大量のバスマットが敷かれるのだった。

続く長門教官や戦艦棲姫も双方大層意気込んでいたのだが、兩名も甲斐無くそれまでの面々同様一撃大破の憂き目に遭う。

鼻血涎オイル漏れ。

もうこれヤダなあ。

艦種は関係無いの？

駆逐艦の一撃轟沈なんてヤダよ。

様子を見に来た提督代理の妙高先生は、この惨事に呆然としていた。加賀教官とひそひそ話をしていたが、一体なにを話していたのかな？

最前列に座る教官がなにやら問いたげな視線を私に向けるが、生憎と勘働きはよくないのだ。

彼女の隣にいるツインテール艦がその隣にいる姉艦みたいな存在になにやら耳打ち

しているが、その姉めいたものは非常に困惑した視線を私に投げかけている。

言わなくてもわかるよね、ってことは全然ありません。

言われんとわからんけん。

この公開処刑的茶番を中止しよう。

私はこの試験会の中止を宣言した。

このまま継続すれば、ろくなことになるまい。

待機していた雲龍龍驤春日丸龍田足柄島風吹雪叢雲曙霞の一〇名はかなりの抵抗を示したが、一撃大破並びに轟沈などあつてはならないことから頭を撫で撫でしてほつぺをぶにぶにして顎をつるりと撫でて抱っこしてどうにかこうにか全員を説得し納得させた。

どさくさ紛れに胸部へ我が手を誘導する子もいたが、お痛はあきまへんで。

その手は桑名の焼きハマグリよ。

さて。

終わりにしようか。

こんな状況になるだなんて、誰にも想像が付かなかつたに違いない。

厭な意味で『最終兵器』扱いはされるだなんて、真つ平御免こうむる。

これ以上はイヤだべ。

と思つていたその時。

「ここはあたしの出番ね！」

勢いよく椅子から立ち上がる艦娘。

ツインテールが揺れる、教導艦娘。

彼女は幸運艦として知られた教官。

実戦経験深く男性経験は皆無だ。

情報通の青葉がそう言つていた。

キミが何故ここで立ち上がるのか、私には全然理解出来ないよ。

両隣の艦娘と艦娘モドキが慌てて、彼女を説得しようと試みる。

「瑞鶴！ 貴女、なにを言い出すの！」

「ズイカク、ヤメタホウガイイワヨ！」

「なーに、大丈夫、大丈夫ですつて。」

心配する先輩艦娘と姉役のナニカにひらひら手を振つて、にやにや笑う彼女。

ホントに大丈夫か？

自信満々の五航戦。

「へっへーん、このあたしには提督さんの神通力だか飯綱（いづな）の力だかなんて、これっぽっちも効かないわよ！ ズバリ！ 提督さんに恋愛感情を持つ相手にだけ、おで

ここにチューは効力があるのよ！　つまり、提督さんのことをなんとも思っていない相手には効かぬ道理！　どうよ！」

「瑞鶴、悪いことは言わないからやめておきなさい。」

「ソウヨ、ズイカク。ソレハトテモアブナイコトヨ。」

「ふっふふーん、先輩もお姉も心配し過ぎなのよ。この瑞鶴にお任せあれ！」

彼女の披露するすいずいダンスが冴え渡った。

とおーっ、と彼女は舞台に飛び上がる。

いいのかなー。

一応、話しかけてみる。

「その、止めておいた方がいいと思いますよ。」

「おでこにチューでしょ。ノーカンノーカン。経験の内に入らないわ。そんなの気にせ

ず、ちゃっちゃんとやりましょ。」

「わかりました。では。」

抱き締めて、チュッ。

しんと静まった講堂。

世紀の一瞬……ではないな。

衣笠の構えた撮影機器が、静かに瑞鶴を映している。

震えだす瑞鶴。

「…………あれ？ やだ、なんで涙が出てくるのかな？ あら？ 鼻血が出て…………あれ、なんだか変なキモチに…………あれ、こんなの絶対おかしいよ！ あ、あたしは…………。」
ぽたりぽたりと透明な液体と紅い液体とが、何滴も何滴も床に敷かれたバスマットへ落下する。

オイル漏れも発生したらしく、彼女の袴にその痕跡を容赦なく発生させた。

彼女の頬がみるみる内に紅潮し茹で蛸状態化し、お目々ぐるぐるになって、結果、歴戦の正規空母は一撃大破した。

仮面の暗殺者ならば、「他愛なし。」とでも言うのだろうか。

絶対有り得ないと思われていた事態が現実化し、講堂は大混乱に陥る。

私は即時に閉会宣言し、他言無用と守秘義務を徹底させるべくすべての報道関係者を拘束させた。

記録用の媒体はすべて焼却処分だ。

報道関係者に対し、厳しい身体検査が行われる。

今回のコレは外部に知られたら滅茶苦茶不味い。

抗議されたが、緊急措置であることを理解して欲しい。

灯油缶に放り込まれたテープやらシリコンやらが、素早く燃やされる。

物理的証拠を一切残しておく訳にはいかない。

後程彼女たちを『説得』しなくてはならない。

こんなことがよそに知られたらどんな事態を引き起こすのか、想像するだにおとろしい。

この後、舞鶴の武蔵が立候補して他の大和型三名に止められたり、ケツコン経験艦が何名も自薦してきたりと、なんだか事態は混沌としてくるのだった。

舞鶴の武蔵があまりにも自薦するので、ぎゅつと抱き締め耳に息を吹きかけてみる。

彼女は程なく呆気なく失神した。

涎とオイル漏れを発生させつつ。

どうやら提督成分の瞬間的大量摂取が原因らしいが、じゃああんなことやこんなことをしてみたらどうなるのだろうか？

今回のコレは急性アルコール中毒に近いのか？

妙高先生と加賀教官に腕を掴まれ、おでこにチューを懇願されたが断った。

その日は戒厳令を発動させ、すべての関係者に沈黙を誓わせる。

気分はゴッドファーザーだ。

瑞鶴はその後、大本營のお偉いさんにメチャメチャ怒られた。

演習で無茶苦茶をしたという筋書きに基づいて、彼女はそう言ったのだ。同じく演習に参加したことになった舞鶴の武蔵も、相当怒られたらしい。私もついではかりに複数のお偉いさんからメチャメチャお説教された。

懲りない青葉が間接キツスはどうかというので、彼女を被験者としてみる。

ギラつく視線が交差する食堂の中。

私から渡された檸檬水を受け取り、ストローでちゅちゅつと飲み干す重巡洋艦。

「なーんだ、なんともありません……あれ？　体がなんだか熱く……あれ？　あれ？」

鼻血涙涎オイル漏れが発生した。

事前に敷いたバスマットがすべての液体を受け入れる。

その夜。

私に関する封印指定的ななにかが、幾つか制定された。

C C L X V I I I : 渡島おもてなし隊

場末の酒場。

薄暗い照明。

男と女がぼそぼそと会話している。

男は黒く、女は白い。

イジメを行った奴らは犯罪者だとか、会社員になつてもそれを続ける奴らは全員吊るせばいいとか、物騒なことを男は言い続けていた。

女は微笑みながら聞いている。

男は分厚い書類を女に渡した。

これが俺たちの復讐だと言いながら。

女は慈愛あふれるまなざしで男を見つめ、そしてやさしくバカねと言った。
紅い瞳を少し細めながら。

「あんた、私たちを枕にしたり、蒲団にしたりしなさいよ。」

函館鎮守府の名物となった中華粥定食（粥が絶品の上に内容は日替わりだ）の朝飯を食べていたら、目の前にいる本日の秘書艦殿がそうのたまった。

彼女の朝食も中華粥定食。

しかしまあ、ほんにまあ。

キミ、なにゆうとんねん。

「なにを朝から錯乱しておられるのですか、叢雲さん。」

「あんたも言うようになったわね。別に言葉通りよ。陽炎型駆逐艦のお腹を枕にした提督がいるって話を聞いたから、それもよさそうだと思ったの。」

唇を舌で湿しつつ、勝ち気な駆逐艦はにやりとして言った。

「そういうのって、男の浪漫なんですよ？」

「違います。私には生憎と、そういった特殊性癖は御座いません。」

「別に隠さなくたっていいじゃない。」

「隠してなどいません。」

「あんたがどんなに特殊な性癖を持っていても、すべて受け止めてあげるわよ。あんた

が望むなら、なんだってしてあげるし。」

ざわつく食堂。

ギラギラベギラマした幾つもの熱視線が、レーザー砲のように我が紙装甲を容易く貫いてゆく。

やめてください死んでしまいます。

「朝からなにをゆうとるですか。」

「気づいたのよ。」

「なにをですか?」

「あんたみたいに艦娘を尊重し過ぎて自己評価が低すぎて引つ込み思案で内気で女の子に積極的な態度を取れない男には、こちらが積極攻勢に出ないと進展なんて一切無いってね。童貞だとか、恋愛経験値がゼロハリバートンだとか、精力絶倫でないとか、夜戦の満足度がどうかは、別に気にしないから。」

ガタリガタリ、と周囲の椅子から次々艦娘たちの立ち上がる音が聞こえてくる。

「ねえ?」

「はい?」

「やらないか?」

「えっ?」

あつと思う間もなく、丸められた白い布を口の中に突っ込まれた。
それはほの温かい。

えっ？

いつの間にキャストオフしたのか、なにも装備していない艦娘たちが一斉にこちらへ
ルパンダイビングしてきて……アーツ！

……ゆ、夢か。

寝汗が酷いことになっていた。

背中がぐつちよぐちよだがや。

いやあ、危ないところだった。

寝相の悪い駆逐艦のあんよが口の中に入っていたので、すつと引き出す。

唾液がツーツと口とあんよの間で糸を引き、それは薄闇に一瞬光をきらめかせつつ呆
気なくぷつぷつ切れた。

ちり紙であんよを丁寧に拭き拭きして、明け始めた空を窓越しに眺める。

枕元に置いてある、八雲町産カルシウム名水を水筒よりらっぱ飲みした。

眠気は失せたし、むくむくさんが起動している。

ぎんぎらぎん状態。

これでは阿寒湖だ。
ひとつ走りするか。

今日の朝食だが、李さんには悪いけれどもフレンチトースト定食を注文する。

えっ？ という気配の厨房に、私は定番化したことを曲げない性格だと思われるのかもしれないと考えた。

頑固に見られているのかも知れない。

艦娘に手を出していないことが、そうした考えを助長しているやもしれぬ。

でも、簡単に艦娘へ手を出すなんて理解し難い考えだ。

部下に手を出さだなんて。

駆逐艦は幼いし、海防艦なんていろいろな意味で不味いだろう。

海防艦二名と三角関係になった提督もいるらしいが、何故そうなったのかまるでわからない。

………人生、わからないことだらけだ。

朝食に集中しよう。

先ずは食べるべし。

素晴らしい品々だ。

フレンチトーストは鳳翔版と間宮版との二皿仕様で、ヨーグルトをかけたグラノーラと低温殺菌牛乳と李さんの野菜スープが付いてくる。

厨房から私を見つめている彼女たちは、どことなくうきうきわくわくそわそわしているように見えた。

李さんがなんとなくがっかりしているように見えるので、後で一言ゆうとこう。

「珍しいわね、あんたが朝食で中華粥を食べないなんて。」
目の前にいる本日の秘書艦殿がそうのたまった。

彼女の朝食は夢と同じ中華粥定食。

素早く手の甲をつねって現実かどうかを確認しておく。

よかった。

痛みは生きているゲンノシヨウコよ。

「ええまあ、たまにはこういうのもいいかと思ひましてね。」
じつと彼女が私を見る。

数秒経つて、まっ、いつかという顔になった。

時折、彼女はこうしたことをする。

中学二年生時の委員長を思い出す。

あの子も美少女だった。

やさしい目の娘だった。

ポプラ通りの小さな家。

そこが彼女の育った家。

彼女も既に大人の恋をして、私のことなど忘れてしまっただろう。

あの日のことは……いや、今更なに言わんやだな。

思わずうつむく。

食堂がシンンとしていたので顔を上げたら、ざわめきが戻ってきた。

多数の視線があつたように思ったのだけれど、気のせいなのかな？

やさしい視線を、眼前の駆逐艦が私へと向けていた。

「……ふうん。まあ……いいわ。今日は『渡島（おしま）おもてなし隊』の出陣式がある

日よ。わかつているわね？」

「ええ、わかつていますとも。」

唇を舌で湿しつつ、勝ち気な駆逐艦は憮然としながら言った。

「で、なんであんたが雑兵（ぞうひよう）役なのよ。」

「大変似合っているでしょう？」

「バカね。そんなことを言っているから、艦娘たちとさして相性もよくない癖に威張るおたんちんどもが吠えるのよ。謙虚を美德だなんて思っているから、四大鎮守府の選良

意識丸出しであんぼんたんな連中になめられるのよ。」

「は、はあ。」

「いい、あんたは私たちが認めた男なの。自らの価値を下げるような物言いや態度や振舞いなんてやめなさい。それは自らを貶（おとし）める、不恰好なことよ。」

「お、おそれいます。」

「あんたのことがきちつと理解出来る程の解析能力を持つてちゃんと接することの出来る人間なんて、ごく少数なの。そういった人はレアなの。遠くから石を投げて喜ぶダメ野郎どもに、愛しく大切なあんたを蹂躪（じゅうりん）されたくないの。」

「お氣遣いいただきまして、ありがとうございます。」

「悪いのはすべて他人。自分自身に落ち度があるだなんて、省（かえり）みようとすらない。そんな考えだから反省なんて出来ないし、ろくに心の成長も出来ない。世の中、小器用で自分自身すら騙せるろくでなしが地位も金も得られる仕組みなんだから。誠実で不器用な人間は損ばつかり。それにそうした自虐行為は、あんたを好きなおんが厭がることなの。わかってちようだい。」

「え、ええ、肝に銘じます。」

みんな目を丸くしている。

吾が輩もでーれー驚いた。

私の顎をつるつと撫でて、叢雲はふふふと笑った。

四大鎮守府の提督でも立派な人はいるんだけどな。

まあ、言わぬが華か。

「例えばの話だけどね。」

「はい。」

「今、私がこの指をあんたの口に突っ込んだらどうなるかしら？」

……は？

キミ、なにゆうとんねん。

さつきまでええ話しとったのに。

ぜーんぶ、ぶち壊しやん。

「どうなるんですかね？」

「試してみようかしら？」

「やめた方がいいと思いますよ。」

「一撃大破かしら？ 一撃轟沈かしら？」

「嬉しそうに言わないでください。」

「あら、好きなおとこのために死ねるのはおんなの本望よ。」

「それでもダメです。」

「ケチね。」

「気に入った相手は、出来得る限り長く健やかであつて欲しいんです。」

「あら、気に入つてくれてるの?」

「当たり前じゃないですか。」

「ここにいる全員?」

「決まつているじゃないですか。」

「ふふつ、ならいいわ。」

……あれ?

失言したか?

常々冷静沈着と見える駆逐艦に抱きつかれる。

その後、様々な艦種の娘たちに抱きつかれた。

餡ことか違うモノが出そうになる。

ニントモカントモで御座るナリヨ。

大和級艦娘四名が、ようやくそれぞれの鎮守府へ帰つてくれた。

待遇面での不満を訴え続けていた彼女たちの要求が、やっと受け入れられたからである。

私にしがみついていた舞鶴武蔵は、他の大和級艦娘三名並びに長門戦艦棲姫ネヴァダローマ航空戦艦加賀ヨークタウンシヨウカク瑞鶴キエフ清霜らの尽力によつて帰投を渋々受け入れた。

制服が一着ダメになったので、舞鶴へ請求書を出しておく。破棄しようとしたら、欲しいと言われたのでタダで与えた。

北海道の旧国名は渡島国という。

蝦夷地（えぞち）はやたらと有名だが、渡島国の名は函館に来てから知った。人生、知らないことだらけだな。

北海道の観光強化策として、今秋から『渡島おもてなし隊』が打ち出される。

どこぞのうつけ者の観光誘致策みたいだが、北海道では艦娘たちが積極的に協力すると決められた。

東京辺りが文句を言っているらしいけれども、知らんがな。

ちなみに隣の青森では『南部』と『津軽』とで大論争が日々繰り広げられていたけれども、結局『青森おもてなし隊』に落ち着いた。

無難な線でまとめた模様。

こちらは大湊（おおみなと）が全面的に協力することになっている。

青森県は広島県同様早くから艦娘を広く深く受け入れている地域なので、一旦動き始めたら大丈夫だろう。

『呉越同舟』が合言葉になったとか。

根の深い対立は他国を利用する要因だ。

『漁夫の利』をさせてはならぬのだ。

都会の介入は極力避けるべきだろう。

商社とかは滅茶苦茶なことをするし。

インチキな人間はどこにでもいるし。

そうした人間は己の過ちに気づかぬ。

過ちなき人間など存在せぬというに。

あなおそろしきかな。

函館駅前の広場で、『渡島おもてなし隊』の出陣式が行われる。

気分は常に初陣で御座るナリ。

雑兵役の私も火縄銃を構えた。

鈴鳴りの人々が撮影を始める。

パチパチパチパチパチと。

土方歳三役は、役者の卵でせいたかのつぽなイケメンが担当している。

まさに、ザ・爽やか！

ちよつと違うような……でも今時はあんな風な若者がいいのかな。

死に場所を得た彼は、今も北の国の有名人。

箱館戦争といえど土方、土方といえど箱館。

箱館戦争には他にもいろいろな人物が関わっているのだけれども、知名度では断然彼が上だ。

北海道を舞台にした明治ハイカラバイオレンスチチタブ活劇的漫画でも、老齢版の土方が出演している程である。

石川啄木役は愛嬌たっぷりな雰囲気男性。

彼も役者の卵だとか。またもやイケメンだ。

アイヌ姿の男女も数名いる。いずれも美形。

屯田兵までいた。

ごたまぜだがね。

リアルなヒグマの着ぐるみまでいる。

よく出来ているなあと感服する程だ。

「役者やモデルの卵及びアイドルっぽい子やらの美形が主演陣で、癖のある感じの人らが雑兵役ってとこか。」

私は出陣式限定のエキストラとして出演を承諾した。

どこに需要があるのかちつともわからないけれども、それなりに頑張ろうか。

何故か、女子中学生や小学生らしき女の子たちに囲まれる。

A B C D 包围網ナリヨ。

どうやら、少女雑誌に掲載された写真の影響らしい。

なめていた。これ程までとは思ってもよらなかったな。

土方や啄木といった美形の周りには男女問わぬ年期の入った愛好家たちが集（つど）

い、びかびかの高級写真機などで重厚に記念撮影をしている。

昭和だ。

昭和があそこにあるぞい。

私の周りでは若すぎる女の子たちがなにやらおじさんにわからぬ謎めく片仮名言葉を用いながら、携帯端末などでお手軽にパチパチ撮影している。

新世紀がここにこそある。

ようやく出陣式その壺が終了した。

これから五稜郭へ移動し、そこでもまた式の続きを行う。
そこだとこんなことはもう起こらないだろう。

気軽におじさんと腕を組んだり抱きついてくる女の子たちに戸惑いながら、これが若
さかと感じ入った。

たぶん、これは少女特有の気紛れ蜜柑街道だ。

握手したり、抱っこやおんぶしたりと大忙し。

これこれ、胸を押し当ててくるのはやめなさい。

君たちはなんともかんと悪戯好きなようだね。

あれ？

あんこちゃんに似た子たちもいたような気が……髪型が違うし、雰囲気もちやうから
別人だろ。たぶん。

あんなにぐいぐい来る子はいないし、違う子だと思う。

第七(だいしち) 師団仕様の屯田兵の男性がこちらをちらちら見ていたけれども、ど
うしようもない。

男前なのだが、彼の周りは今一つ集まりが悪い。

がつしりした体型で、でも少し気が弱そうで受けか攻めかと聞かれたら受けと
うな風に見える。

彼の本領は旭川だろう。

私は本日限定のモブだ。

気にしないでくれ給え。

これが終わったら休みを貰い、道南いさりび鉄道に乗ろうかな。

渡島当別駅からてくてく歩いてトラピスト修道院まで行き、駐車場そばの売店で素晴

らしきソフトクリームを堪能するのだ。

あれにはあそこまで行く価値がある。

あれこそが特別なソフトクリームだ。

そうしよう、それがいい。

ふっと空を見上げる。

空は果てしなく青い。

ふと地上に目を戻すと出陣式限定出演の決戦仕様瑞鶴がこちらを見ていて、私の視線を受けて彼女はにんまり笑った。

CCLXIX : 貴方といられて、私も少し嬉しいわ

私はローマ。

イタリアの首都の名を冠する艦娘。

旧き帝政国家の名を持つ高速戦艦。

そして、愛の虜囚たるタオヤメ。

提督という薔薇に包まれた百合。

凜とした生き方で寄り添いたい。

私のマリートがまとまった休暇を取れることは、瞬く間に知られたらしい。

私が食堂へ着いた時、そのメンツァはとても剣呑な雰囲気にも包まれていた。

これから、『狂王の試練場』でマリートの直衛艦隊を決める戦いが開催される。

体中に闘志が湧き出てきた。

ばんばんみなぎってくるわ。

我は無敵なり、我が影技にかなうものなし、我が一撃は無敵なり。

武技言語を高速詠唱した。

自分自身のオイルが沸騰し、心のタービンが高速回転してゆくのを感じる。
殺れる。

今の私なら、フリッツXだって余裕を持って素手で弾き返せるわ。

昨晩はマリートと一緒に寝たからテイトクニウムの貯蔵量は充分だし、いろいろ見たから気分だって高揚している。

負ける気がしないわ。

歴戦の戦艦群では、先日マリートからのおでこにチューで一撃大破したナガトやセンカンセイキも発奮して見えた。

汚名返上といったところかしら。

ふふ、イタリアの高速戦艦の本気を見せてあげるわ！

ローマ、突撃する！

激戦の結果、戦艦枠は私のものになる。

ふふ……当然の結果ね。

後で入渠しないといけないけど、それは些細なことだわ。

瓶に封入され、水薬状に薄められた高速修復材を飲んだ。

少しばかり回復率が上がる代物。

気休め以上の効果がある飲み物。

艦娘の生存力を向上させる物品。

この苦みこそが生きている証ね。

マリートのことを考えていたら、じわじわとオイル漏れしてきた。

困ったものだわ。

空母枠はカガとリユージュオーとウンリユーとズイカクの四つ巴決戦の末、ウンリユーに決定した。

巡洋艦枠はオーヨドとアシガラとタツタの頂上決戦の末、僅差でタツタが勝利を勝ち取る。

敗者も勝者も関係なく、皆等しく担架で運ばれていった。

私はこの戦いを見届ける義務がある。

担架を拒否した。

駆逐艦たちが説得してくるけれども。

ゴメンね、と頭を撫でながら謝った。

オイルや破片などの飛び散った戦場。

これからまた、地獄の蓋が開かれる。

駆逐艦枠が最大規模の決戦となった。

血で血を洗う、シチリアマフィアの抗争みたいに。

艦娘ではない少女まで多数参戦し、混沌とした状況で争いが繰り広げられた。

深海棲艦に対しても躊躇なく突撃出来る彼女たちはシマカゼやフブキといった強力無比な勇者たちが優勝候補だったものの、ハヤシモ、ハツユキ、モチツキによる頭脳戦と合体攻撃が彼女たちの勝利を確定させる。

これで本決まり。

私は安心してその場に崩れ落ち、担架を運んでくる駆逐艦たちに微笑みながら失神した。

不器用な自分が言うのもなんだけど、私以外の五名はなにを考えているのかよくわからない面々になった気がする。

まさにオリエンタル・ミステリね。

全員修復後に講堂で緊急集会が開かれて、マリートからかなり怒られた。

怒鳴ったりせず、淡々と話しかける彼。

悲しみの波動砲が私たちを撃ち抜いた。

嗚呼、アンドロメダ。

光の奔流が拡散し言葉が無限の光弾化。

拡散波動砲によつて私たちは穴だらけ。

一隻で艦隊をも相手にし得る光学兵器。

タキオン粒子を阻む術はなく、対衝撃及び対閃光防御するためのゴーグルVが無かつ

た私たちは、七面鳥撃ちされるが如くに至極あつさりと甲板貫通される。

その威力は戦艦でさえも一撃中破。

流石は私のマリートね。

艦隊戦でその砲撃は非常に効果的だわ。

そういうやり方は私にとても効くのよ。

先程まで意気軒昂だった勇猛な艦娘たちも、皆一様にしておれてゆく。

散会后、次はもつと密やかに穏やかに殺りあおうと皆で話し合った。

私たちは艦娘。

シグルイするモノ。

如何に生き、如何に死すか。

それが問題ね。

マリートを誘い、食堂でおやつを食べる。

今日のお菓子はシチリアの伝統菓子のカンノーロ。

筒状に揚げた生地の中にクリームを注いだモノだ。

クリームの中には、リコッタチーズや干し果実などが入っている。

サクツとした軽い食感と共に広がるのはイタリアの豊饒なる大地。

イタリアンアンローストなエスプレッソと共に食べれば、気分はアドリア海。

私たちが生地で、彼はクリームね。

何時でもたっぷり注いで欲しいわ。

彼を見ていたら、自分自身が食べられてゆく姿を妄想してしまった。

夏の日差しに晒された、バターみたいに溶けそうよ。

マリートの左隣の席で密着し、直衛艦隊の話をする。

彼は少し戸惑っていたが、すぐに受け入れてくれた。

それでこそ、私のマリートね。

マリートはトージという行為をなすため、オカヤマへ行くという。

トージってなに？

それは温泉に浸かってのんびりすることによって、心身の疲労感を癒やす行為だそう
だ。

オカヤマのオニコベ村に存在する小さな温泉宿へ行くべく、私たちは勇ましく抜錨した。

湯治でもしたいものだと言われ、岡山県で刀鍛冶をしている友人に言ったら、じゃあ鬼首村（おにこべむら）はどうかと言われた。

それはどこかと尋ねたら、県内の山奥にあるひなびた村で温泉と『仁礼（にれ）わいん』と山葡萄の果実を寒天で固めた山幸飴が名物らしい。

その山幸飴は日持ちよく、最近登山者の携行糧食として人気が上昇中だそう。村自体は岡山県と兵庫県の県境にあつて、温泉は秘湯みたいな感じがするとか。

ふうん。

友人夫婦もついでに泊まると言った。

それなら、安全率も上がりそうだな。

ハメを外した彼女たちは項羽を凌ぐ。

劉邦のように逃げ回るのも疲れるから、安全策は一つでも多くしておきたい。一緒に行く艦娘は六名。

ローマ、雲龍、龍田、早霜、初雪、望月。

備前刀剣博物館で友人の手伝いをした後、鬼首村にある亀の湯で湯治予定だ。

………大丈夫かなあ？

寝台列車に乗って皆でオカヤマへ向かう。

初めての旅行に大興奮している子もいた。

わかりにくいけど、目の輝きが違うのだ。

キラキラとアイドルみたいに輝いている。

ハコダテにいる時よりも皆、マリートに遠慮呵責なく密着していた。

苦笑する彼。

愛しているのなら、もう少し考えたら？　とも考えるけどそれじゃ他の艦娘に弾き飛ば

されるわよとタツタが言う。

私の考えを読むとは、タツタ、おそろしい子！

ウンリユーが静かに豊かな存在をマリートの背中へ知らしめ、ハヤシモ、ハツユキ、モ

チヅキがトリプラーなジェットストリームアタックで彼の動きを封じていた。

あの、ムラクモ、アケボノ、カスミさえも倒した技を仕掛けている。

だけどね。

甘いわね、ヒラトのカスドースよりも甘いわ。

マリートは難攻不落。

その程度で陥落するなら、とつくに私が落としているわよ。

『鷺の巣』よりも難物なんだから。

オカヤマに到着し、うどんと呼ばれる麺類を食べた。

駅舎の乗降場に設置された小さな店舗。

そこはキオスク程の大きき位しかない。

魚介類のダシが効いていて、悪くない味わいがする。

日本式パスタの麺は独特のもちもち感があって弾力性があり、喉越しもいい。

マリートに言わせると、これが旅情なのだとか。

わからないでもないわ。

オカヤマの駅舎裏手には鉄道貨物の社員食堂があつて、そこは社員以外も利用可能だそうだ。

彼に言わせるとそこは国有鉄道時代のおいに満ちた場所であり、消えゆくシヨウワ時代を伝える重要な食堂らしい。

オカヤマ名物のデミグラスソースを掛けたカツドンも、そこで食べられるという。

マリートって、鉄道マニアなのかしら？

アコウ行きの汽車に乗り換える途中で、オカヤマ名物の白桃やマスカット・オブ・ア

レキシサンドリアを使ったタルトレットの売り子と遭遇する。

艦娘にしか見えないのに、マリートは普通に彼女からお菓子やお茶を購入していた。売り子の顔は紅潮している。

あの娘、きつとオイル漏れしているわね。

駅舎のあちこちに艦娘がいてマリートを見つめているのに、彼はそれらに全然気づいていない。

直衛艦隊の皆はおいしそうなお菓子に大はしゃぎで、売り子へ注意を向ける艦がいな
いみたいにも思える。

しかもどさくさ紛れに、私のマリートに何度も何度も何度もくつついていた。

……許してあげるわ。

マリートがやさしいのは知っているし、彼のようにならなくちゃいけないのだから。
滅法素敵極まる私のマリートの傍にいらつて浮かれ過ぎじゃない、貴女たちは？

汽車が走り始める。

車内では、地元中学生や高校生に扮した艦娘らしき存在がちらちらマリートを見てい
る。

あまり気にしないことにした。

別に『敵』じゃないし、いざとなれば自慢の高速性を活かしてエクソダスよ。

幸い、全員足の速い艦ばかり。

何時でもかかってきなさいな。

愛の力で打ち倒してみせるわ。

車窓に目を向けると、きらめくセトナイカイが見える。

朝の光がマリートを照らし、その光景に内心興奮してしまいそうになった。

だって、尊いんだもの。

隠し撮りする子も複数いたけど、致し方ないわね。

タルトレットは大変おいしかった。

やがて汽車は小さな駅舎に着き、改札口を抜けたらマリートの友人と奥さんがそこで待っていた。

……え？

この人が奥さん？

白い肌に微笑む顔の存在。

人間にはとても見えない。

「ローマさん、どうしたんです？」

「緊張しとるようじゃのう。」

「ハジメマシテ、ミナサン。」

マリート、彼の友人、そして奥さんを自称するモノがそれぞれ口を開いた。他の艦娘たちは皆平然としている。

私以外の全員が、マリートの友人の妻を名乗るモノと普通に会話していた。

なんなの、これ？

私がおかしいの？

私を氣遣つてくれるそのおんなのことは、一旦判断保留にする。

どうして、みんなそんな目で私へ微笑みかけるの？

慣れない環境だから異国だからと、みんながやさしい目で私を見つめた。

やめて、その視線は私に効くの。

借り受けたミニバスに乗り、ビゼンオサフネの刀剣博物館へ行く。

そこは日本の刀が沢山ある場所で、マリートの友人はそこで今日作刀を実演するとう。

博物館は多くの女性で賑わい、彼女たちは興奮の面持ちで刀剣をパチパチ撮影していた。

伝統的な技術に敬意を持つのはいいことだけど、どうしてこんなに熱心なのかしら？ 勿論男性も少なからずいたのだけど、女性の圧倒的迫力に気圧（けお）されている。

彼女たちも鍛冶を行うのかしら？

作刀の実演は人気の行事らしい。

年若い女性たちがこういったことに注意を多く向けるのは、極めて興味深く思えた。

「ゲームのエイキョウなのヨ、コレ。」

いつの間にか隣にいたおんなが、私に微笑みながら説明する。

「カタナをギジンカ、ええと、カッコいいオトコやカワイイオトコノコにするゲームが、イマトつてもニンキのあるコンテンツなの。」

刀剣博物館の前に大きなイラストの看板があつたのは、その為か。

女性たちがその前でパチパチ撮影していたから、何事かと思つた。

オカヤマは全国に名だたる刀剣王国なのだ、彼女から教えてもらう。

刀と焼き物で名を馳せたということは、火の制御技術にすぐれた証拠。

おそらくは、技術者の多い国だったのね。

今日来る筈のモデルが一名来れないからというので、マリートがローニンの姿になつた。

何故こんなにもよく似合うのだろうか？

そのままその刀で斬り刻んで欲しい。

貴方に斬られるなら、それは本望よ。

駆逐艦たちが勢いよく彼を撮影する。
ウンリニューやタツタも彼を撮影した。

全員の目の色が変わっていた。

それはもうおそろしいくらい。

全艦、大興奮しながら撮影している。

他のモデルたちは眼中に無いらしい。

周りの女性たちも負けじと撮影する。

マリートの周りが女性一色となった。

マリートが最近、あちこちのおんなにモテているみたいなきもして心が痛む。

私のマリートなのに。

撮影は当然するけど。

オーヨドに画像を添付してメールを送ったら、兎に角ありつたけ撮影してくださいとの返信が来た。

モチのロンよ。

カタナを持って構える彼を皆が激写する。

男前の老剣士がマリートに触りながら剣の指導をしていて、その姿を熱心に撮影する人間の女性も多かった。

尊い、と眩きながら撮影する人間もいる。

隙が見当たらない。

相当の剣士みたい。

私も撮りまくった。

撮らいでか。

ちなみに老人は奈良の方から来たらしい。

マリートを撮影しまくる私たち艦娘の影響か、作刀に負けず劣らず人気があったので

博物館の面々は面目を施したようだ。

マリート、人間の女性と恋人繋ぎとか抱っこはやり過ぎよ。

私にも同じことをしなさい。

少し遅めのお昼ご飯は、カキフライ定食。

近くのヒナセはカキの養殖で知られた場所だとかで、その海産物を使った洋食を食べた。

大きなカキフライが無造作にどきどきと皿に載せられ、オタバenseエオタバenseとおばあちゃんかにこにこ笑う。

ミルクもたっぷりなカキフライ。

マガキという牡蠣の種類だとか。

添えられたミニマーボーナズやギリシャ風サラダもおいしい。私たちは小さな食堂でオカヤマの海の幸を堪能するのだった。

夕暮れが段々と近付き始めている。

ミニバスは小さな村へと向かった。

夕暮れが深まり始めた村。

カメノユという旅館に到着した。

村特産の葡萄酒を全面的に使った葡萄酒は、品質の高さから全国的に人気の品だとか。

今夜はその葡萄酒が呑めるそうなので、楽しみにしている。

地元の野菜を持ってきたおばあちゃんがなにか歌っていた。

方言がキツくて、なにを歌っているのかよくわからないわ。

テマリウタ、という唄だとか。

トノサマが女の子好きでどうかという内容らしく、マリートが苦笑いしている。

大丈夫よ、私は全員許すから。

決しておとしめたり暴力を振るったりあれやこれやなんてしないから。

殺めたいくらいに貴方を愛しているから。

常に真つ向勝負。

それが私の矜持。

だから私をしつかり見ていてね、あなた。

昔警察官をしていたというご主人とキレイな奥さんが、かいがいしく私たちの世話をしてくれている。

「ひなびとるけど、ここ、ええ旅館でしょうが。」

「ええ、とてもいい旅館ですわ。」

マリートとご主人とが和やかに会話していた。

ヤマサチアメという村の名物菓子をいただく。

山葡萄と寒天を使った菓子で添加物は入っておらず、素朴な甘みが口中に広がった。

オカヤマの駅舎でも販売されていて、キビダンゴやユベシやムラスズメやタカセブネ

ヨーカンなどと並ぶ人気菓子だという。

郷土色の豊かさこそが国の豊かさだと思います、と私のマリートは言った。

そうね、私もそう考えるわ。

歴史を感じさせる、木造の旅館。

古い柱時計に置物にビゼンヤキ。

居心地のよい空間を感じるわね。

マリートが私に微笑む。

心がドキドキしてくる。

貴方の運命に寄り添ってみたい。

マリート。

私の提督。

貴方といられて、私も少し嬉しいわ。

CCLXX：異世界と使い魔

あー、極楽、極楽。

ここは岡山県の鬼首村（おにこべむら）にある、ひなびた温泉宿の亀の湯。

外はまだ夜の香りを残し、ゆるやかな日差しが山々の稜線にようよう出始めている。

事件もなにもなく、平和なセカイだ。

鐘の中に入れられた女性もおらず、湖で逆さまになった男性などもない。

この調子で地球が平和になるといいなあ。

……無理か。

メールが訳わからないくらい大量にくるのは難点であるものの、おおむね状況は良好だ。

払曉の温泉の成分がじんわりと体に染み込んで、日常の疲れを解きほぐしてゆく。

このままこの湯を、鎮守府へ持ち帰りたいくらいだ。

函館に帰ったら、温泉巡りしようかな？

定山溪（じょうざんけい）もいいかな？

青森にも温泉があちこちにあるし、たまにはこういうのもいいだろう。そう言えば昔、深夜番組で温泉巡りする女の子の企画があったらしい。

今はそういうことをしないのかねえ。

五能線でゆるりと海岸線を走るのもよさそうだ。

太宰治のセカイに触れるのも悪くないな。

薄暗い天井を見上げ、そして目をつむる。

ん？

違和感を覚え、目を開けると多数の学生が私を見つめていた。

あれ？

ここはどこ？

高級そうな洋風建築物の中庭みたいなどころにいる。

白いシャツやブラウスに黒いズボンやスカートを装備した、ええとこに住んでいそうなお坊っちゃんお嬢ちゃんたちに取り囲まれていた。

ここはなにかしらの教育機関のように思われる。

中学生から高校生くらいに見える周囲の男女混合の集団ではなにやら騒ぎになっているが、生憎と彼らがなにを喋っているのか皆目見当もつかない。

ラテン語でも無さそうだ。

教員らしき中年の男性が近づいてきて、なにやら私に話しかけてきた。

なにを言っているのか、全然わからない。

首を横に振ると、残念そうな顔をされる。

どこことなく、親近感のわいてくる人物だ。

足元では円形の魔方陣らしきものが点滅していて、どうやら私は召喚されたようにも思える。

困ったなあ。

金髪碧眼ツインテール仕様で気の強そうな女の子がつかつかと私に近づいてきて、なにやら叫んでいる。

ネヴァアダになんとかなく似た姿と声だが、性格はあまり似ていない模様だ。

胸の大きさはまるで違うが、別に大きいか慎ましいかは気にしない方だ。

第一、女性に面と向かってそういうことは言えないだろう。

わざわざ口に出す人間はいない筈だし、露骨にわかるような表情は無礼極まるという
か無作法だ。

某小説投稿サイトではそうした描写のある作品が散見されるので、少々気になるところではある。

彼女を見てみると、何故か叢雲曙霞満潮らを連想した。

微笑むと彼女は顔を真っ赤にして、更になにか叫んだ。

微笑ましいじゃないか。

どうしてだか、周囲の女学生たちの顔も赤い。

こちらをちらちら見ている女子たちに困惑してしまう。

ああ、そうか。

衣類を装着していない状態なのだ、私は。

野外露出する性癖は無いので困るんだな。

寒くはないが、やはりなにか着たいのだ。

しばらくすると校長らしき初老の人物がやって来て、抱えていた道具をこちらに向け
た。

それは四角い箱にアンテナ状のモノが付いていて、そのモノからなにやら光線らしき
ものが飛ばされたので思わず避けた。

困った顔の男性に、なにやら再度叫んでいる女学生。

彼女ははずかすかと歩いてきて私の背後に回り、我が肉体をがしつと押さえた。

なにやら後ろから喚いている。

つまり、逃げてはいけならしい。

そして、再度浴びせられる怪光線。

なにか繋がったような感じがする。

背後から甲高い声が聞こえてきた。

「コレでアンタもワタシたちのコトバがワカルでしょ！」

「ええ、わかります。」

「アンタ、ナマツテいるワネ。」

私からすると彼女の発音の方が訛（なま）って聞こえるのだが、それは言わないようにしておこう。

「アンタはワタシのツカイマ！ アンタはワタシのイウことをゼーンブきくノヨ！」

「使い魔？」

「ソウヨ！」

「それはなんらかの契約に基づく行為なのでしょうか？ 私は契約した覚えなど無いのですけれど。」

「ツベコベウルサイわね。アンタはワタシのイウことにハイハイとシタガエバいいのよ。ワカツタ？」

「わかりません。」

「ナンデスツテ！」

いきり立つ彼女へ教員と校長がなにやら話しかけて、深刻な表情で論争し始める。ぼんやりとしていたら、栗毛色の髪を長く伸ばした少女から突然話しかけられた。やや目元がキツイ雰囲気令嬢だ。

悪役っぽい立ち位置が似合う感じ。

その青い瞳がきらきら輝いている。

ぺたぺたと遠慮なく体を触られた。

豊かな双丘が自然に背中に当たる。

おじさんは困ってしまうのじゃよ。

「アナタ、イイカラダをシテイルわね。」

それなりに鍛えてはいるが、そんなにいい体でもないと思うけどな。

「お褒めいただきまして、ありがとうございます。それよりも服が欲しいです。」

「アラ、コノママでイイジャンナイ。メノホヨウになるわ。」

「ご婦人の前で衣類を身に付けないのもどうかと思われまます。」

「ウマはフクをキナイデショウ。」

「着ませんね。」

「ツカイマとはソウイウモノよ。」

使い魔は馬とかそんな感じの存在らしい。

私を召喚した少女が、栗色の髪の少女になにやら食つてかかり出した。

仲が悪いのだろうか？

仲裁する。

あつさり引き下がる青い瞳の娘。

駆け引きの緩急を、よくよく心得ている。

碧い目の娘はそれが入らないようだ。

「アンタ、オンナタラシねー」

酷いことを言われた。

なにも着ていなくとも快適に過ごせるのは、なんらかの保護機能が働いているからだ
ろうか？

私を召喚した少女の名はウルスラというそうで、彼女の着替えから湯浴みの手伝いま
で世話をさせられている。

そういうのは、侍女が行うのではないのか？

使い魔が人の姿をしている場合、身の回りの世話をさせるのは普通らしい。

興味深くはあるが、はやいとこ元のセカイへ戻りたい。

チートだハーレムだ成り上がりだとそんなことには一切興味が無い。

提督稼業に戻らなかつたら、なにが起こるのか皆目見当もつかない。なんとしても戻らねば。

栗毛色の髪の娘はアマールエという名前の伯爵令嬢で、先日隣国の第三王子との婚約を破棄されてしまったらしい。

友人たちとの雑談に向かったウルスラを見送つて中庭の長椅子に座っていたら、彼女が近づいてきて私の隣に座り、いろいろ語りだしたのだ。

秘め事つて話せる相手が限定されるよな。

他人事ではない気がしてしんみりとする。

石造りの城塞都市にも慣れ始めてきたが、このままでは不味い。

「戻りたいのですか？」

「それはまあ、そうです。」

「帰らなくてもいいじゃありませんか。」

「そういう訳にもいきません。」

「お堅いのですね。」

「石頭ですから。」

「あら、頭だけですの？」

私の顔を覗き込む美少女。

最近、ようやく互いの意思疎通が普通に出来るようになってきた。

アマリーエは聡明な子だ。

ウルスラも悪くないのだが、両名の方向性はかなり異なるようだ。

ウルスラの使い魔としてこの学校の登校に同行しているが、女学生たちからなんやかやと話しかけられて困っている。

決闘騒ぎにまでなり、向かってきた男子学生の魔法とやらを無効化してからは注目度が急上昇したかに思われる程だ。

そんなことより服が欲しいのだけれども、誰に言っても服など要らないだろうと口を揃えたかの如くに言う。

なんてこつたい。

「やあ、遅くなつてすまんね。」

「なにも問題はありませんか?」

「ええ、私はこの通り大丈夫です。使い魔ということでは服は着させてもらえませんが。」

異世界生活を始めておよそ一カ月ほど経った頃、唐突にメトロン星人と魔王の田中さんが迎えに来てくれた。

ありがてえ、ありがてえ。

私の姿をじつと見た中年日本人的外装のメトロンが、ぽつりと言った。

「露出調教？」

「ちやうわ。」

メトロンのボケに突っ込んでおく。

さて、ウルスラとアマリーエに別れを告げてこのセカイを去るとするか。

そのことを伝えた。

「もう二人も、女の子に手を出したんですか？」

「人聞きの悪い。手なんて出していませんよ。」

田中さんも酷いことを言う。

「連れて帰らないのかい？」

「しないってば。」

「洗脳は数秒あれば出来るよ。部分パーマ……じゃなくて、部分洗脳もお茶の子さいさ

こや。」

「やらんでいいー！」

メトロンも酷いことを言う。

お茶の時間。

校内の庭園の離れにある開放型喫茶室。

二人へ元のセカイに戻ることを告げる。

何時かは別れが来るものだ。

だが。

彼女たちにとって、それは青天の霹靂（へきれき）の事態だったようだ。

茫然とした顔でウルスラが私に叫んだ。

「あんた、私のことが嫌いなものっ!？」

「好きとか嫌いとかではなく、私には待っているヒトたちが大勢いるのです。」

「おんなね！ あんた、おんなたらしだから、いっぱい女の子を引っかけているんでしょ

！ きつと奥さんだって何人もいるんだわ。騙したのね！」

「騙すも騙さないもありません。そもそもそういう話はしていませんし、元のセカイ

に帰りたい旨は何度も申し上げた筈です。」

「そんなことを言つて！ 私のことはどう思っているのよ!？」

「こんな冴えないおっさんとどうこうではなく、婚約者の方と素直に結婚されるのが一

番よいことだと思います。」

そう、彼女には婚約者がいる。

彼と結ばれるのが最善の道だ。

「アマリーエはどうするのよ!？」

「彼女もこちらのセカイで新たな男性と結婚されるのが最もよいことだと考えます。」

「あんたは冷たい男ね!　冷血漢よ!」

アマリーエはポロポロ泣いている。

ウルスラも何故か泣き声を上げた。

そこまで親身に思われていたのか。

干し葡萄を使ったパウンドケーキと蕎麦茶で、時を分かち合う。

しみりとした空気の中で別れた。

向こうとこちらの時間の流れは異なるらしく、こちらは消えた当日の夕方だった。

村は蜂の巣をつついたような喧騒に包まれている。

ハインド二機が村外れの空き地に駐機していて、ものものしい警戒態勢が敷かれていた。

函館の子を含む艦娘が沢山いて、まるで村人よりも艦娘の方が多いのではないかと感じられる程である。

先遣隊の彼女たちは特別捜査本部を設置していて、慌ただしく動き回る駆逐艦や走り回る巡洋艦などごった返していた。

やあ、ただいま、と本部に詰めている子たちへ声を掛けたら一瞬時が止まり、そして私は彼女たちから揉みくちやにされて質問責めにあつた。

本部に詰めていてくれた豪放磊落（らいらく）な花山提督はガハハと笑いこけ、少し痩せたかに見える獄門島鎮守府の提督はほっとした顔をこちらに見せた。

花山提督のお婆さんが作ったというおはぎをありがたくいただく。

うむ、この素朴な風味がたまらぬ。

なんとなく、富山の岩瀬浜で買った三角どら焼きを思い出す。

あのお店のお婆さんは今も元気だろうか？

明日には連合艦隊がこの鬼首村に到着するという。

微妙な顔で、先遣隊旗艦の軽巡洋艦たる高梁（たかはし）がそう言った。

岡山三川艦全員がここにいるのは、索敵能力の高さもあつたかららしい。

結果的に空振りとなつたが、先遣隊全員を労（ねぎら）つておいた。

訓練になつたと思えば、無駄ではないとも言えるんじゃないのかな？

ローマたちも慰めておく。

ぼんやりしていたら、春日丸が蕎麦茶とパウンドケーキを差し出してきた。

彼女は雲龍と共に必死で私を探してくれた艦娘であり、提督たちによるといずれの艦娘も鬼気迫る雰囲気醸し出していたらしい。

ありがたいことだ。

申し訳なくもある。

彼女は近々、大鷹（たいよう）という名に改名する。

艦娘たちの変化は日々じわりじわりと行われている。

私はその変化に対応しきれぬだろうか？

………。

今はこの菓子をいただくことにしよう。

それは干し葡萄を使った、大人の味わいの品だった。

不意に春日丸が私のすぐ傍に近づいてきて、すんすんとおいをかいでくる。

？

なんだ？

「あまいにおいがします。」

そう言って、彼女は菩薩のように微笑んだ。

CCLXXI : 愛を込めて、あなたたちの敵より

第二次世界大戦当時、東京ローズという女性放送員群が存在した。

彼女たちは連合国側への謀略放送を担い、その魅惑的且つ流暢な美声で敵国兵士たちをメロメロにした。

謎に満ちた彼女たちは複数の秘密を宿したまま、今も歴史の狭間で微笑み続けている。

『東京シユティーフミュッターヒエン』なる放送員群が結成されたのは、つい先日のことだ。

それは大本営主導の『三色すみれ作戦』の一環であり、シユティーフミュッターヒエンとは三色すみれのドイツ語訳に当たる。

函館鎮守府では提督並びに初雪望月の番組を放送するための施設が建設され（近場の公共放送を自称する放送局に大きな貸しを作ることは大本営にとって望ましくないこ

ととされた。また、機密保持の観点からも民間施設の利用は好ましくないとされた、そこを利用して深海棲艦の戦意低下番組を放送するのだ。

そのラジオ番組の名は『ヌル・アワー』。

深夜零時から放送される毒の花。

その放送は深海棲艦たちを釘付けにし得るだろうか。

発信源は北海道函館市にある函館鎮守府。

某紅茶戦艦の四女が熱烈に所属を希望したけれども、それは敢えなく却下されたという噂まである。

『ウスケシ放送局』と名付けられた鎮守府放送部門では、現在三つのラジオ番組が放送されている。

番組は以下の通り。

提督が放送員を務め、適当なお喋りが行われるも女性聴取者たちから圧倒的支持を受けており、時には怪談も聴ける『クロスマカニトテン』。

初雪と望月と特別出演者の軽妙な会話と独特の雰囲気好評の『ハッチーモッチーステーション』。

音楽と報道番組と軽快毒舌なお喋りを含む

対深海棲艦番組の『ヌル・アワー』。

ある晴れた、風の冷たい日。

秋の深まり始めたそんな日。

『三色すみれ作戦』という可愛らしい名前の調略の発動について協議すべく、大本営からお偉いさんが来ることになった。

気分は蜀の簡雍（かんよう）である。

その上官殿は私に目をかけてくれている稀少な人物であり、以前は内閣情報調査室に勤務していたらしい。

見た目は普通ののこにおおじさんなのだけれども。

彼の祖父は陸軍中野学校で鍛えられたそうだし、ご先祖の中にはかの柳生但馬守宗矩に師事していた人さえいるという。

上官自身、稀少な柳生宗矩直伝系の新陰流を使うのだ。

武芸全般をそつなくこなし、語学に堪能。

世界の各地を飛び回っていたのだそう。

つまり、我が上官殿はリアルな〇〇七号？

目の前で間宮羊羹と月餅とパウンドケーキをぺろりと平らける姿は、どうにもこうにもそんな姿を想像しにくい。

或いは、この姿さえもが擬態なのかも知れない。

「いやあ、函館へ来る前は舞鶴へ出張に行つていたのでね。ついつい寝台特急の『日本海』に乗りたくなつてき。新潟山形秋田を經由して、青森まで向かつたのだよ。上野発の夜行列車も風情がありそうだったけれども、こちらにしてみただ。」

「そう言えば、復活しているのですね。」

「ああ、我々は京都駅から乗り込んだんだ。車内販売があつたから、すごぶるよかつた。京都駅舎内の弁当屋が、丁度全部売り切れだったからね。思わず翌朝の駅弁を五名分頼んだよ。」

「どこの駅弁でした？」

「秋田の牛めしだったよ。」

「それはおいしそうです。」

「ああ、あれはなかなかよかつたね。」

お昼前の食堂。

軽くお茶を飲みながら、上官殿と私は雑談する。

今回の彼の護衛は全員艦娘で、軽空母の神鷹（しんよう）並びに駆逐艦の浦波と岸波の運用試験も兼ねているそうなの。

彼女たちに新規建造された大淀を加えて計四名の艦娘。

彼女たちは私に向かって挨拶してくれた。

「あの、せ、先週建造されたばかりの大淀です。ふつつかものではございますが、何卒宜しくお引き回しの程お願い申し上げます。」

初々しいなあ。

痛い痛い止めてけれ大淀。

「元ドイツ製貨客船のシャルンホ……もとい、軽空母の神鷹です。ドイツ料理と神戸流洋食には自信があります。ちなみにこの熊の縫いぐるみはシャルンホルストという名前です。」

ふうん。

痛い痛い止めてけれ春日丸。

「特型駆逐艦の浦波です。どうぞ宜しくお願い致します。このカメラは balan といいます。」

ほう。

痛い痛い止めてけれ吹雪。

「夕雲型駆逐艦の岸波です。貴方が提督？ まあ、いいけど。この万年筆の名は朝ちやんです。」

あの跳ねている毛はどうなっているのだろうか？

痛い痛い止めてくれ曙。

……なんとも個性派揃いだな。

大淀は普通っぽい。

何故みんなぎらぎらした視線を私に向けるのだね？

うちの淀が大本営の淀に剣術を教え始めたので、止めなさいと言った。

女騎士強化計画、つてなんじゃらほい？

すると、上官殿はにこやかに言った。

「大丈夫だよ。彼女には新陰流の基礎を教えるから。」

「えっ？　　そうなのですか？」

「ここに来ている、あの三名にも教えている最中なんだ。」

そう言つて、上司殿は自由行動を許可された艦娘たちへ慈愛の表情を向けた。

浦波は古そうなフィルム式写真機でパチパチあちこち撮影しているし、神鷹は厨房に入つて李さん鳳翔間宮春日丸といった面々となにやら熱く語っている。

岸波は曙に『ぼの先輩』と話しかけ、「あんのエ口漣（さざなみ）がーっ！」と怒りを露（あらわ）にされながらもほほんとして見える。

けっこうフリーダムだな、この子たちは。

あ、大淀が大淀を連れて道場へ向かった。

どうしよう。

昼食はそのまま食堂で摂ることに相成った。

我が上官殿は庶民派故に。

本日はドイツ料理中心だ。

ザワークラウト。

羊や豚や牛などの腸詰め。

李さん特製火腿（かたい）。

これは中華式ハムのことだ。

酸味の強いパンを中心にした焼きたて。

ドイツ人は焼きたてのパンが大好きだ。

きのこのスープ。

南瓜のスープ。

きのこのオムレツ。

豚ヒレ肉ときのこのクリーム煮。

豚バラ肉とキャベツの煮込み。

玉ねぎとマカロニとチーズのオーブン焼き。

ドイツ流カツレットのシュニッツェル。
スズキのバター焼き。

巴旦杏（ケルシー）のケーキ。

これはスモモを使ったケーキ。

玉ねぎのケーキはドイツの秋の風物詩。

甘くないので、辛党にも対応可能な品。

洋梨のちっちゃめのパンケーキ。

焼くことで甘みも向上している。

昼食後、小会議室で『三色すみれ作戦』についての打ち合わせを行う。

『ヌル・アワー』の放送員を誰にするかで侃々諤々（かんかんがくがく）する。

声に色気と艶があつて尚且つ知性的に聴こえるのが基本条件にはなつたものの、誰に担当してもらうかで困つてしまう。

上官殿は二階堂有希子さんとか増山江威子さんとかを推し、私は田中敦子さんや大原さやかさんを推した。

……なんか違う。

少しばかり過熱した後、蕎麦茶で脳味噌を冷却する。

上官殿が口を開く。

「姉妹のいない数名の霧島が立候補しているね。」

「最前線の子ばかりじゃないんですか？」

「まさにその通りだ。」

「それは駄目ですね。」

「そうだなあ。じゃあ、元艦娘たちを鍛えるか。」

「適性のありそうな子にやってもらうとしましょう。」

諜報、防諜の話も行う。

「函館市内に間諜が来たら、浣腸の刑……うむ、駄洒落を言っている場合ではないな。」

近隣の北斗市や七飯町も人口が増えつつあるそうだし、そうした人々に紛れて練達の『草』がやって来るのだろう。

いや。

既にかなり侵入してきているのかも知れない。

用心、用心。

私はそれなりの要人らしいし。

深夜零時。

今宵もあの声が聴こえる。

昨日から今日にかけては贅沢な時間だ。

あの男の放送に加え、情報番組も聴けるのだから。

傾聴に値する番組が聴けるのはとてもありがたい。

我々の数少ない娯楽と言えよう。

「深海棲艦の皆さん、今晩は。ヌル・アワーの時間です。暗い海の中で過ごしている皆さんへ、今夜も素敵な北海道の話と日本各地の話をしますね。投降の際は、函館鎮守府までどうぞ。では今宵もお聴きください。先ずは一曲目、李紅蘭の『東京的休日』です。」

夜は毒の花咲く素晴らしき時間。

艶のある声が夜開く。

古い記憶が闇の淵からそろりそろりと顔を覗かせる。

ふむ、日本攻略が完遂した暁には、この東京シユティーフミユッターヒエンの面々に会いたいものだ。

「姫級、鬼級の深海棲艦の皆さん、気を付けてください。この世界であなたたちが強者だと思つているようですが、日本のすぐれた科学者群があなたたちに打ち勝つ秘密兵器を続々と開発しています。世界一優秀な日本製の武器を。」

「西方前線泊地に所属する深海棲艦の皆さん、地獄へようこそ。あなたたちの期待している増援なんて来ないわ。お仲間さんたちの船はみんな海の藻屑になってしまったの。可哀想に、あなたたちは完全に孤立して、波間に漂う椰子の実になっちゃったのよ。」

「可哀想なお嬢さんたち。あなたたちが狐の穴よりも居心地の悪いねぐらで眠っている間に、あなたたちの大切な資源や資材は焼き尽くされて灰になってしまっているのよ。」

ほほう、なかなか言うじやないか。

こういうのも悪くない。

懐かしい曲が流れてきた。

ふと口ずさむ。

明日は強襲作戦の予定だ。

高速戦艦主体の機動作戦。

小賢しい泊地に打撃を与えてやる。

これを聴き終えたら寝るとしよう。

そう思った時。

曲が終わり、女の声が響き始める。

「明日行われる高速戦艦主体の強襲作戦はきつと失敗するわ。だから、そんな作戦に意味は無いのよ。」

CCLXXII：いとも容易く繰り返される侵略行為

【危険であることを忘れないうちは安全である】

(競技用紙雷管の注意書より)

「テイトクー、ゴハンタベニキタヨー！」

にこやかに笑う、美しき異形。

彼女の背後に複数の仲魔たち。

気分は女神転生か魔界転生か。

場所は函館鎮守府食堂の厨房。

時間帯は深夜を回ったくらい。

つまり夜戦ならぬ夜食の時間。

わくわくそわそわするは異形。

仕方ありませんねえ、とばかりに提督は鍋に水を入れて沸かし始め、讃岐うどんの乾

麵をどさどさ用意し出す。

手早く茄子を斬り刻んで塩水に浸けてあく抜きし、その間にお汁（つゆ）を作り始める。

魚のアゴを使った天然素材系出汁の素と醤油味酢ザラメで、簡単系お汁の出来上がり也。

長葱を刻んで茄子を炒め、乾麵を茹でて丼に入れ、お汁を注いで具材を載せたら完成だ。

彼女たちが来る前に仕込んでいたキャベツと胡瓜の浅漬けも添えて、さあ、召し上げれ。

七味や一味や新潟名物たる唐辛子の発酵辛味調味料『かんずり』なども、卓上に載せる。

『提督の夜食』と呼ばれる、まかないにも似た簡単料理。

小さな幸せを噛み締めつつ、彼女たちは食事を堪能した。

福岡県北九州市八幡東区にあつた遊園地。

その名はスペースワールド。

そこに飾られていた実物大模型のスペースシャトルが欲しいのだと、地球人の中年日
本人仕様なメトロン星人が言った。

解体するのは勿体ないとのことらしい。

彼は私を口説き落とそうと考えている。

気配がそうしたものに満たされていた。

「函館鎮守府前にそれを陳列する訳にはいかないよ。」

「そこをなんとか頼みたい。君と私の仲じゃないか。」

「どうしてそんなに欲しがるんだい？」

「君たちだつて、縄文式土器や弥生式土器が出土したら喜ぶだろう。或いは、ヒツタイト
やらシュメールやらの痕跡を示す品が出土した場合でもいい。」

「それはまあ、喜ぶだろうね。」

「我々地球外生命体にとつても、ああした原初的且つ粗削りな宇宙船を見ると胸がとき
めくのだよ。」

「そういうものかな。」

「縄文時代の船を見たら、君たちだつて感心するだろう？ それに君自身が縄文式ド
ングリクッキーを焼くじゃないか。」

「そうだね。」

「だから、実物大のスペースシャトルを買おう。」

「そんな、物置を買うみたいに。」

「金ならある。問題ない。」

「悪さをした結果で得た金じゃ……ないよね？」

「まさか。以前デイトレーダーで稼いだ分さ。」

「そんなこともしていたのか。」

「昔は黒ダイヤとか赤ダイヤをよく利用したんだけどね。メタンフェタミンもよく売れたし、人工甘味料で合成甘味料のチクロにズルチンやサツカリンもよく売れたなあ。」

「チクロ、ねえ。」

「チクロは旨みを感じる成分があるという説があつてね、砂糖よりもおいしいと断言する人さえいる程だ。キミは製菓業界に於ける製品の八割が砂糖なのは知っているかい？　ズルチンは口内に後味が残るのだけどね、チクロは後味がさっぱりするんだ。そのチクロが昭和四四年に使用禁止とされた時、そりやあもう酷い騒ぎになつてね。缶詰製造会社が幾つも倒産したんだけど、こつそり販売する会社もあつたんだ。サイクラミン酸ナトリウム表記にしたりしてね。つまり、羊頭狗肉は永遠に無くならないのさ。人が人である限りはね。」

「人の敵は人、みたいですね。」

「今の地球人の科学では、合成甘味料が人間の代謝機能にどう影響を与えるのか、実は明確に分かっている訳でもない。そのことに留意したまえ。」

「摂取しない方がいいんでしょね。」

「それは経済的な問題を取るか、従来品を重視するかで変わるのではないかね？　合成甘味料をどう位置付けるかで考え方も変わるだろうし。」

「ううん。合成甘味料の薬つぼさが苦手なんですよ。」

「世の中にはそうしたモノを感じる人間とそうでない人間とが存在する。また、感じるから厭だとする人間ばかりではない。そこに合成甘味料の入り込む隙間がある。」

「成程。」

「で、ズルチン同様に発ガン性があるとされて使用禁止になったチクロなんだけどね、そんなことは無いという結果が出て、欧州や隣の国……ああ、あそこは現在三國志状態だが、まあいい。おそらくは食品業界も減茶苦茶になっているだろうがね。それらの国々ではチクロが今も普通に使われている。皮肉なものさ。日本に於いては凋落の一途を辿って、復活することすら出来ないというのにね。」

「あ、ああ。まあ、その、難しい問題だね。……そう言えば、福岡県に黒ダイヤというお菓子があつよ。」

「ほう。一度食べてみたいものだね。」

この頃、蒸発する人や行方不明になる人が増えているという。職業は公務員やら会社員やら自営業やらと多岐に渡っている。メトロンに聞いてみたら、私はやっていないとの証言を得た。社会的に成功している人や、友人知人の多い人が殆どらしい。なにかしら共通項があるとしたら、学生時代になにかやらかしていたようだがよくわからない。

学校側が隠蔽していたり、状況を把握していなかったり。

教員で行方不明になった人物もいるとか。

ある日、ドロンと消え去ってしまったとか。

海沿いの街に限らず、街中でも発生する。

おそろしい話があるものだ。

事務局の田中さんと愉快な仲間たちが、血まみれで夜更けの執務室にやって来た。清浄魔法によって直にいろいろなおいが消え去ったものの、激戦だったようだ。

彼は現職の魔王であり、異世界で防衛戦やらなにやらを行って暴れてきたらしい。

彼らの背後には貴族令嬢やら村娘みたいな女性が複数いて、彼女たちに対して田中さんは私のことをこの港町の方面軍司令だと説明した。

おずおずと頭を下げる彼女たち。

視線がもう狙っている感じを受けるのだけど、気のせいだろう、たぶん。

彼女たちは追放されたり婚約破棄されたり牢獄に入れられたり処刑寸前だったり略奪の末に暴力を振るわれそうだったのだと、魔王は語った。

彼女たちは全員肉体を地球仕様化されており、料理技能も与えられて、地球の言語を八カ国語理解し会話し筆記することが可能となっている。

勿論、日本語にも対応だ。

うむ、大盤振る舞いだな。

彼女たちは厨房勤めを基本とし、『異世界おもてなし隊』として異世界カフェを展開する予定にしているとか。

メトロンも協力体勢にあり、パスポートやマイナンバーカードや住民票も既に用意していた。

写真はあのエロいエロい写真家の火野山鬼神が担当したそうなの。

……彼女たち、大丈夫だったのかな？

意気揚々と説明するおっさんメトロン。

世帯主が私で、彼女たちは同居人？

おう、後でじっくり話し合おうか。

ねえ、お二人さん？

魔王とメトロンの顔が引きつっていたように見えるが、それも気のせいだろう。

『提督の私室見ちゃいますマル秘作戦』とやらで、さほど広くない我が城は代わる代わる入室と退室を繰り返す人間の少女たちに満たされていた。

小豆色のジャージ娘たちがはあはあ言いつつ、あれこれ見ている。

三名が毎晩むにやむにやしてもなんともない、頑健で大きな寝具。

衣類を収納した家具。

典籍を詰め込んだ本棚。

SF小説推理小説ファンタジー小説歴史小説時代小説百科事典辞書各種資料。

カセットテープとCDとMDに対応した音楽鑑賞用音響装置。

八〇年代九〇年代の名曲を収めた楽盤群。

ちなみに呉第六の先輩はアナログレコードを沢山持っていて、真空管に一家言（いつかげん）ある。今の時代、稀少な音源にもなっているという。

手洗い場と風呂場の一体型空間。

机と椅子。

スイス製のアナログ式壁掛け時計。

実用性を重視した照明器具。

小型冷蔵庫。

ごく大雑把に言うと、ビジネスホテルの一室みたいな感じだ。

出張から帰って来ると、不定期に改装されていることがある。

設計図は自前で引けちゃうし、ネジや勲章は要らないらしい。

現在、改三甲だとか。

防御力が極めて高いとは、複数の明石や夕張や北上らの弁だ。

見学する娘たちの頬は紅潮し、きやあきやあと高ぶっている。

おじさんにはついていけないよ。

これは、一種の侵略行為なのではなからうか？

これこれ、おじさんに抱きついたりしがみついたりしてはいけないよ。

どうも、その辺りの線引きが上手くいかない。

エッチな本は無いんですか？ と聞かれたが、そんなものは有りません。

覆いを使つての偽装なんてやっていませんし、本をくりぬいたりもしていません。

隠し部屋も戸棚もありませんよ。

江戸川乱歩じゃあるまいし。

これこれ、寝具の下や中にそのようなものが置かれてなんていませんよ。

何故不服そうな顔をしているのだろう？

解せぬ。

その翌日。

講堂で『提督接触禁止令』を発布しようとしたら驚く程の批難にさらされてしまい、撤回せざるを得なかった。

異世界の娘たちもそれに同調していた。

ほんと、もうどうしよう。

年頃の娘たちの扱いは難しい。

CC LXXIII：フロイライン・ウント・ランツェンレイ ター、勝利なき名譽

「自分の正しさを確信するなど、まさに狂気以外のなにものでもない。僕は良く知っている。たまに、僕は正しいと思うことがあるからね。だからこそ自分自身が信用出来ない。」

(新城直衛)

北関東のとある港町には、『おんな騎兵道(きへいみち)』と呼ばれし騎兵科を学ばせる女子高が存在する。

騎兵科に所属する女学生たちは『ランツェンレイター』と呼ばれ、将来的には皇室騎兵隊や陸上自衛隊所属の典礼騎兵隊や騎馬警官や乗合馬車の馭者や活劇女優や馬牧場のお姉さんなどになるべく、日々研鑽を積んでいる。

騎兵道は基本的に連携力を競い合う競技で、戦術理論や実際の用兵などを通常の学問と共に学ぶことが要求される。

その町の名物は以下の三つ。

蜜団子。

鮫鱈。

馬刺し。

その町の特産物で品質がよいとされるもの三つ。

馬油。

馬革。

馬具。

沿岸の地方都市では、今日も騎兵を目指す少女たちの声が高らかに聞こえてくる。

軍令部……もとい大本営から、北関東沿岸部に存在する小型鎮守府や警備府への『指導』を行いつつ、ある女学校の騎兵科に所属する少女たちと艦娘の模擬戦を行うようにとの通達が届いた。

人間と人間でない存在を闘わせることに論理的理由が見出だせないけれども、そんな

理屈は賢い賢いお偉いさんたちに届かない。

彼らの耳は驢馬の耳。

戦後七〇年以上を經ていながら、未だ我々はあのむごたらしい結果から殆ど学ぶことが出来ていない。

艦娘が一名か二名いるのが基本仕様な民家改造型基地を訪れるのはある意味家庭訪問に似ていて、気分は熱中時代である。

昭和の残像めいた引き戸をくぐると、きちんと並べられた男物の靴と女物の靴。

玄関からは二階へ続く階段と台所へ向かう廊下が見えて、大抵すぐにこじんまりとした応接間へ通される。

こちらが大所帯で訪れると向こうも負担大となるので、大淀とだけ訪問するのが常日頃のやり方だ。

帳簿を見せてもらい、『提督』との何気ない会話を、庭や物置小屋を含む『おうち』を見せてもらう。

生活感に満ち溢れた台所。

執務室という名の元書齋。

艦娘たちが普段寝起きする、二階の元子供部屋。

仲睦まじい親子のような関係の基地も存在する。

中には提督の免状を持たない民間人もいるのだけれども、そこら辺は日本人お得意の先送りのなあなあで済ませておく。

石部金吉的判断がすべて正しいとは限らない故。

また、彼らは部下たちによって自分自身が提督だと思いつまみされているのであって、彼ら自身に罪はない。

そういつた民家では大体提督と艦娘や艦娘めいたナニカが一緒に寝起きしており、激しき夜を過ごした痕跡さえ見えてしまうことすらある。

見て見ないふりをするのが賢明だろう、こうした場合。

最近マンネリ化してきてといった相談には答えられないのに、時折真顔で打ち明けられる。

ええい、童貞に訊くでないわ。

官能小説でも参考にされたらどうかと示唆しているが、勘弁して欲しいわい。

短期現役提督の中でも比較的まじと思える人間が基本的に小型基地へ配属されているけれども、たまに既に限界を迎えていたり行方不明になっていたりする。

目に光が無かったり虚ろな表情をしている場合は要注意だ。

艦娘や艦娘めいたナニカが必死にしがみついている場合は、更に要注意だ。

仮に彼らが行方不明になったとしてもすぐ次の提督が着任するとは限らないし、基本

業務は艦娘一名でも回せるようにしてあるからわざわざ報告までもないとする横着者な艦娘も稀にいますので油断出来ない。

老練な艦娘からすると彼らの一部は、『何年か経てば大手を振って退役し、呑み屋や小料理屋などで艦娘とののろけ話を自慢気に語る生活』を目指しているように見えているのではなからうか。

だが、そうした覚悟不完了で『すらんこ』な提督は大抵が途中でおかしくなったり蒸発したりすることもしばしばあるから、補充のことも視野に置きながら上手にやりくりしなくてはならない。

和洋折衷的な、職人技が光る校舎へ到着する。

生徒たちは折り目正しく、校風がしのばれる。

案内係の快活な雰囲気少女は上官を敬愛しているみたいで、信頼している様子が言葉の端々から感じられた。

騎兵隊長は二〇代後半の背高な女性で、相当出来る雰囲気漂わせていた。彼女は練達のおんな騎兵道の教官であり、空挺部隊出身の猛者でもあるのだ。会談とも言えぬ話し合いはすぐに終わり、腹の探り合いめいた会話を行った。

騎兵隊長がにやりと笑う。

習志野出身の彼女は言った。

彼女の背後には揺らめく陰。

「マスメディアの連中で、不思議な人々が存在します。」

「不思議な人々、ですか？」

「自身の『正義』を疑う判断力すら存在しない、何故あかもチンピラやゴロツキめいた小悪党が多いのでしょうか？」

「はい？」

「自分たちで勝手に我々のことをなんとか女子だのなんとかガールだのと騒いでおいて、その対象たる女性たちが自分たちの思惑通りにならないとなると愚鈍な無知蒙昧の如くに荒れ狂う度しがたき連中をなんと表現すべきか判りますか？」

「ええと、まあ、情報をきちんと取り扱えない人々が少なからず存在するのは確かですね。」

「ダイオウグソクムシというんですよ。」

くくく。

喉を鳴らす音が聞こえた。

彼女は口元を奇妙な形にねじ曲げている。

陰が形を変えた。

笑っているのだ。

鯨の如く寧猛に。

現代では時代錯誤なる兵科たる騎兵などという骨董品に属しているだけあって、彼女は我々がとうに忘却してしまったなにかを生物学的に所有しているのかも知れない。

のらりくらりと彼女の矛先をかわしつつ、対戦時間までしばし別れることと相成った。

あれはなかなかの喰わせ者だ。

昼行灯（あんどん）なものか。

提督をそう評価する歴戦騎兵。

歳経た廊下をずんずん歩いてゆく。

戦中戦後をくぐり抜けた木造校舎。

伝統的な建築物と言えば聞こえはいいが、所々劣化が見え隠れしている。

老朽化が進む故に予算が必要不可欠。

なんとかしなくてはならない状況だ。

背後からの声に彼女は振り向いた。

騎兵隊長に話しかける少女。
案内係を任せた知略溢れる娘。
美穂か。

やさしく微笑みかけるは隊長。
対照的に緊迫した顔つきの娘。
思い詰めたかのような表情で。
それは覚悟を決めた女の顔だ。

「私は突撃が好きです！ 毎日突撃したい程です！」

「そうか。頼りにしているぞ。」

「ありがとうございます！」

娘は頬を真っ赤に染め上げる。

嗚呼、到頭、言ってしまった。

自分は騎兵に憧れる唯の娘で、凜々しい隊長についてゆくしか無いのに。

気分が高揚している。

皆にご武運あれかし。

優秀な生徒と別れた後、私はひび割れた天井を見上げる。

それはまた長くなっていた。
思わず、ため息が出てくる。

……………。

少し思考を方向転換しよう。

いいことばかりは無いが、悪いことばかりでもない。

そうとも。

騎兵道に憧れるような娘は、こちらが募集をかけるまでも無い。
そういった少女ならば、自主的に必ず連絡してくるものだから。

突撃の号令が聞こえてくる。

甲高い、気迫に満ちた声だ。

やがて、馬の駆ける音が響いてきた。

そう。

それでいい。

流鏑馬（やぶさめ）の日程も近づいている。

今年こそは、雪辱を果たさねばならない。

予算をなんとしてももぎ取らねばならぬ。

見ているよ、ダイオウグソクムシどもめ。

艦娘たちとの模擬戦の時間がやっと来た。

戦場は平原。

馬の鍛錬場。

関東草千里。

騎馬隊の威力を最大限に発揮し得る場所。

東京の廃校となった小学校から譲られた帆布製天幕が、陣幕のようにも見える。

かつては四〇〇〇万を超えた人口の関東圏も、今では大幅に減っていた。

一旦失われたら、なかなか取り戻せない。

なのに、あの老人どもからは危機感がさほど感じ取れなかった。

葡萄酒の搾り残しならばグラツパやマールを醸し出せるが、あいつらはそれ以下だ。

中身の無い雑談が此処にまで聞こえてきそうだ。

俗物どもめ。

今すぐ蹴散らしてやりたいものだが、反逆罪になつてはこちらも困る。

気分を変えよう。

さあ、これから戦争だ。

楽しい楽しいいくさだ。

騎兵隊副隊長以下、我が女子高の精鋭たちが微笑みながらシグルイの時間を待っている。

対するは函館鎮守府の駆逐隊。

精強を持つて鳴る生体兵器群。

「アハトウング！ 総員、傾聴せよ！」

騎兵服のよく似合う副隊長の号令。

彼女の眼鏡が陽光に反射した。

私は気合いを入れて、声を張り上げる。

「我が勇敢なるランツエンレイターたちよ！ 我らを喰らわんと、今あちらに百戦錬磨の戦鬼たちが待ち受けている！ だが！ おそれることは無い！ お前たちは一騎当千！ 私の誇り！ 各位、我らは来たり！ そして見たり！ 誓って勝ち、そしてまた共に学ばん！ 総員、突撃用意！ ランツエンレイター・フォー！」

CCLXXIV：サライメシ～北の国から

皆さん、こんばんは。

蕎麦とパスタと海老フライと牛丼とメロンとブルガリアジャムとヨーグルトと国産プルーンが大好きな、あなたの中市喜一郎です。

人の食を見たなら、人の深淵見えてくる。

食は人の基本にして、基幹成すモノなり。

ココロの交錯点追いかけるはサライメシ。

働くみんなのオアシスになるサライメシ。

我ら協会は今日もメシテロしまくります。

今回はご要望の多かった、函館鎮守府の提督さんに三日間密着取材しました。

名付けて、『サライメシ～北の国から』！

函館鎮守府の厨房と云えば、日本各地のみならず、世界各地から料理上手が集う場所

として有名ですね。

最近は『食は函館にあり』とも言いますし、なんだかわくわくしてきました。

ご要望いただきました皆様に朗報です。

特典のオマケ八時間DVD付き本編四時間特別限定版DVDは、来月末に発売予定です。

更にこのDVDは、提督さんの真面目な直筆メッセージが付いてきます。

全部異なる内容と文面だそうですから、お楽しみにしてくださいね。

初日の朝五時です。

提督さんが起きました。

何名もの艦娘たちが室内に入ってきて、手伝いをし始めます。

朝礼が六時からだそうです、手渡されたコップから水を飲んで提督さんの着替えタイムマシーン三号！

おっと、ここは見せられません。

さあ、講堂にきました。

沢山の艦娘がいますね。

函館鎮守府は哨戒任務や輸送護衛任務や後方支援などを主に担当していて、各地の基

地から艦娘がやって来て講習や研修などを受ける重要拠点でもあります。

朝礼が無事に終わって、いよいよアサメシです。

おつ、今朝の提督さんの食事は中華粥定食です。

この中華粥定食は提督さんの朝食の定番で、同じ定食を食べる艦娘も多いことから人氣の献立となっています。

今日のお粥は鶏出汁だそうで、うわあ、なんともおいしそうですね。

書類の決裁をしてゆく提督さん。

執務室には他に六名の艦娘がいて、大量の書類作業を手伝っています。

どうやら、今日のヒルメシは執務室で摂るようです。

四段お重二つに寸胴鍋にポットなどが、部屋に運ばれて来ました。

おや、提督さんに誰が配膳するかで少々揉めているみたいですね。

提督さんは苦笑しています。

高速じゃんけんの激しい応酬の末、ようやく決定しました。

まさに目にも止まらぬ早業。

提督さん、モテモテですね。

ツインテールの艦娘が配膳してゆきます。

提督さんを囲んで、手間暇かかったヒルメシを食べました。

あ、そうそう、台詞が多いからってギャラが増える訳じゃないですよ。
イアイアハスター。

……少し間違えました、いやいや、じつと手を見る足を見るで御座います。

とある女性服飾系雑誌編集部との合同企画で、提督さんによる撮影で女性の背中を撮ってゆく企画が提案されました。

提督さんの趣味の撮影が認められたので喜ばれるかと思われたのですが、肝心の提督さんは微妙な顔をしていますね。

沢山の女の子や女性を思いきり撮影出来るというのに……なんて言うのはちよつと不謹慎でしょうか。

撮影企画は『キレイナセナカ』と題し、三桁の女性の背中を撮影する予定だそうです。

ユウメシの時間になりました。

今度は食堂へ向かう提督さん。

さあ、食事の時間が来ました。

……おや？

厨房に入りましたね。

野菜炒めを作り始める提督さん。

ジャツジャツと中華鍋の中を野菜が飛んでいます。

大量に野菜炒めを作る提督さん。

作り方は実に簡潔な感じですね。

艦娘たちが野菜炒めをわしわし食べてゆきます。

大人気の品の一つだとかで、作っても作っても追いつかない感じですよ。

私も一度食べてみたいですよ。

私は祖母の料理で育ったので、素朴な雰囲気料理は興味深いですね。

夜、仕事をすべて終えられてから厨房に向かう提督さん。

なにをされるつもりなんでしょう？

野菜を切り始めました。

いい手付きですね。

私も料理をするので、ちよっこし気になります。

浅漬けを作り始めた提督さん。

艦娘たちの喜ぶ姿を思い浮かべながら作っているそうです。

本来和食派の私もおいしく食べられそうな感じがしますね。

二日目の朝が来ました。

今日は札幌で、小樽と稚内と釧路と松輪泊地の提督並びに北海道の官公庁の方々を交えた会議があるそうです。

朝一番のスーパ―北斗に乗って、函館から一路札幌へ向かいます。

なんだか女性客の多い車輛ですね。

提督さんの朝食は手作りのお弁当。

思いが籠った、気合い十分の品ですね。

まるで、愛さ……え？ 言っちゃダメ？

なにか問だ……は、はい、わかりました。

ええと、それでは提督さんにおいしく食べていただきますよう！

さてさて、札幌に到着しました。

えっ？

提督さん、この辺でお昼を食べるですって？

駅周辺の、どこへ食べに行くのでしょうか？

道庁？

役所？

それとも……。

はい、ここはとある民間放送局の食堂です。

名前を言っつてはいけない、どうでしょう的な放送局ですね。

提督さんは、ミックスフライ定食と名物のビーフシチューを頼みました。

さて、どんなお味なのかな？

会議が始まりました。

残念ながら、これは撮影出来ません。

撮影班は別室待機になります。

薙刀を持った艦娘と一緒にです。

会議の小休憩。

提督さんはサヴァランとババロアと紅茶で英気を養いながら、書類を熱心に眺めています。

隣の小樽の提督さんは、副官から注いでもらった紅茶にロシア版パンケーキのブリヌイを口に入っています。

稚内と釧路の提督さんたちは間宮羊羹にお茶の組み合わせ、松輪泊地の提督さんは秘書艦にアーンされながらクッキーを食べさせてもらっています。

夕張名物のシナモンドーナッツが差し入れられて、みんなでおいしく食べました。私も食べてみたい！

午後七時。

会議が終了し、札幌駅へ向かう提督さん。

これから終電の特別急行列車に乗って、函館鎮守府へ戻ります。

提督さんの傍に女の子がやって来て、お弁当を買いませんかと話しかけています。どうやら、最後の品みたいですね。

三日目。

最終日。

前日夜遅くまで仕事をしていたとしても、翌日朝早くから次の仕事をしなくてはなりません。

艦娘たちが次から次へとやって来て、提督さんのお世話をせっせこしています。

素晴らしい連携力ですね。

今朝はフレンチトースト定食。

艦娘六名の力作が皿に籠められているそうで、提督さんの食べる姿をちらちら見る艦娘が何名もいますね。

書類仕事をバリバリこなす提督さん。

働く男の本領って感じがしてきます。

ヒルメシは食堂。

本日提督さんが食べるのは提督専用中華定食だとかで、日頃の練習の成果を見てもらうため、艦娘二〇名が提督さんを囲んでいます。

午後からの提督さんは、艦娘たちからの相談を聞く役です。

機密に属するので取材許可は出ませんでした。廊下はご覧の通り、沢山の艦娘で溢れています。

映画の企画書を読む提督さん。

微笑されていますね。

え？

読んでみていいんですか？

どれどれ？

『アミラル・アラフォーにて提督になった男の話』

……えーと、何処かで見た気もする題名ですね。

ユウメシの時間になりました。

今夜はパスタとピッツアが中心のイタリア料理です。

茹でたて焼きたての皿が次から次へと艦娘たちの元へ運ばれます。

私もパスタは得意料理でしばしば作るのですが、これは食べてみたいですね。

如何でしたか？

今回は函館鎮守府の提督さんに密着してみました、毎日変化があつて充実しているように見えました。

おいしいものもいっぱいあつて、思わず函館に行きたくなりますね。

御馳走様でした。
今日も、お相手は中市喜一郎でした。

CCLXXV : 悠久の闇と航空駆逐艦

それはいつもの、ウシミツ・アワー。

いつもの蒲団にて開幕される夜の戦。

短くも激しい交戦の末、男は果てた。

荒い息を吐く男からぬるりと抜け、女は汚れた服を見てため息を吐く。

「キミ、ヨゴシスギ。」

「す、すまん、龍驤。」

「キミガタイヘンナヘンタイナノハシツトツタツモリヤケドナ、ココマデトハチツトモシランカッタ。」

「面目ない。」

濃厚なおおいに満ちた六畳間。

小柄な駆逐艦めいた体格の女。

汗まみれのぼってり腹なる男。

ぐしやぐしやになった衣類が部屋中に散乱している。

朝潮型、吹雪型、夕雲型、陽炎型。

球磨型軽巡洋艦姉妹用の、深緑色した制服も蒲団近くに転がっていた。念のいったことに、いろいろな色彩のカツラまで周辺に置かれている。強力わかもとやハブ酒や垂鉛の錠剤の空瓶が、机上に並べられていた。スライムから抽出されたという噂の潤滑油の消費量も洒落にならない。

つまり、男は女に夢中なのだった。

「センタクスルンハ、ケツコウテマヒマカカルンヤデ。」

「本当にすまん。」

「ナンドモナンドモユウトルヤロ。ホカノキチデモ、ナンドモナンドモツカウンヤツテ。」

「おっしやる通りです。」

襖（ふすま）が三センチほど開いていて、駆逐艦二名がじつと彼らを見つめている。

彼らと違い、彼女たちはきつちりと白い身体にパジャマを装着していた。

男は彼女たちと会話を交わした記憶がちつとも無かった。

一緒に入浴した記憶も無い。

無口極まる娘たちで、紹介も答弁も代弁も龍驤が行っている状態だ。

報告すらも。

そんなにも嫌われているのだろうか？

もつと信用してもらえないだろうか？と男は思うが、龍驤によるとまだまだ先は遠いようだ。

島風コスが不味かったのか、或いは時雨夕立コスが不味かったのか。

戦艦を上回る視線が最近心地よくなってきたいて、少々ヤバイかも。

愛想も言葉も無い彼女たちだが、任務は着実にこなしているらしい。

毎回毎回覗くのは止めて欲しいな、と男は思う。

カサブランカ級航空母艦の衣装が入手出来なかったのは残念だが、まあ、また機会はあろう。

青いシャツに白いホットパンツの姿。

赤から青に変化させるのも悪くない。

メリケンには沢山存在するのだろうか。

日本では稀少な艦娘に属するのだが。

四大鎮守府の何処かにはいるらしい。

龍驤を着せ替えさせたがる者は実際のところ、かなり多い。

ナース服やメイド服に着せ替えたがる者までいる程だとか。

函館の提督にそういった嗜好が無いことは非常に残念なことだと、男はつくづく考える。

先日大淀と共に現れた彼に自慢の押入れこれくしよんを見せたのだが、なんだか両者の表情が引きつっていたような気もする。

予備衣装の貸し借りなんて、ごく当たり前のことだろうに。

関係の停滞はやがて問題を引き起こす契機となるのだから。

「なあ、龍驤。」

「ナンヤノン？」

「今度ツインテールな金髪のカツラをかぶって、ベーイ！ とか無理無理無理！ って鳴いてみてくれないか？」

「ティツ！」

「はうっ！」

「キミ、ナニユウトンネン！ コノタワケモン！」

「正拳突きは止めてくれたまえ。」

眼前で火花が飛んだけれども、男はなんとか耐えた。

なんと素晴らしいツツコミなのか。

これぞどつき漫才且つ夫婦（めおと）漫才の基本だ。

塵紙で乱雑に鼻血をぬぐってもらいつつ、男は自分自身を幸せだと感じる。

こんなに突っ込んでくれる愛しき存在が、いつも傍にいてくれるのだから。

夜のツツコミはこちらが先手だがな。

男がニヤニヤするのを見て、小柄な身体を濡れた手拭いでぬぐっていた娘が冷たい目付きで眺める。

「キモチワル。コノ、ヘンタイ。」

「うむ、俺自身に自覚はあるぞ。」

白い小柄な女を男はぎゅっと抱き締める。

満更でもない顔で、女は男を受け入れた。

夜の明ける時間まではまだ少しだけある。

悠久の闇をたたえた瞳六つが男を捉えるけれども、男はそれに気づく気配もない。

そして、塵紙がまた再び多く消費された。

CCLXXVI：ネルソン・タッチ

「ふっ……成程な。いいだろう。見せてもらおうか、深海棲艦の姫級の実力とやらを！」
肌寒い、灰色空の下の海原。

英国の誇るビッグセブンが海域で吼える。

その後ろには、猛威練達の艦娘が勢揃い。

対するは戦艦棲姫、ほっぽちゃん、港湾棲姫、ヲ級改、レ級、離島棲姫。

緊迫を孕（はら）んだ重い空気が、一触即発の流れを生まんとしていた。

「各々が責務を果たし、死力を尽くさば強大な敵とおそるるに足らん！ さあ、深海の姫君たちよ、とくと喰らうがいい！ これがネルソン・タッチだつ！ 主砲、一番！

二番！ 行くぞ、もう一撃だ！」

戦艦級艦娘の艤装が、彼女自身を挟む強襲形態に移行した。

ビッグセブンに随伴する陸下系三番艦と紅茶系五番艦が英国戦艦に呼応し、その主砲から強烈な砲弾を敵に向けてぶちかます。

痛打を浴び、苦悶する深海棲艦たち。

跪（ひざまず）く者さえいたほどだ。

「イケるぞ。ウォースパイト、金剛、もう一度ネルソン・タッチだ！ ……………ふつ、かかったな！ ネルソン・タッチはここ一番の大技！ 二度は出来ぬが、余たちの連撃自体は可能！ さあ、余からの会心の一撃を堪能するがいい！ 逃さんぞ！ シュート！」

絶望的な表情の彼女たちへ追撃をかけるは英国艦娘。

猛将の面影を見せる戦闘艦。

同じ艦隊の瑞鶴とアークロイヤルが高錬度の航空機隊を発艦させ、ラッキー・ジャーヴィスが雷撃し始める。

猛り、吼え出すは深海棲艦。

と、そこへ掛けられる言葉。

「OKです！」

とある重巡洋艦の終了を告げる声が、函館近海へ爽やかに響いた。

広報向けの撮影が終了したのだ。

迫力ある映像が撮れたとほくほく顔の娘。

これからの編集作業を楽しみにしていた。

艦娘特集雑誌への提供写真もよいものが多数撮れた。

万々歳の結果。

SSS勝利だ。

実際の艦娘と深海棲艦との激戦の様はなかなか撮影し辛いものだが、函館鎮守府ならば様々な再現映像をじっくり撮ることが出来る。

特に艦娘愛好家や深海棲艦愛好家たちからは、多くの要望が大本営広報課に連日連夜届けられていた。

数多のエロい要望を知って、エッチなのはいけないと思います！ と大本営所属の大淀が言ったとか言わなかったとか。

艦娘と深海棲艦との双方に弛緩した空気が流れる。

おつかれー、お疲れ様といった声が聞こえてきた。

先程までのおそろしげな雰囲気は、既に雲散霧消している。

やれやれと背伸びしたり、艦娘たちに話しかけたり、おやつのことを考えたり、提督のことを考えたりする深海棲艦たち。

瑞鶴が、姉と思って水魚の交わりの如くに親しんでいる存在へ話しかけた。

「お姉、ヲ級改のコスプレがとっても似合っているね。」

「アリガトウ、ズイカク。フンソウシタカイガアルワ。」

微笑みあうは五航戦の姉妹艦。

今日も津軽海峡は平和である。

「なんだ、アドミラル。甘いな！ そんな踏み込みでは余を倒すに至らんど。その壁に手をつけて臀部（でんぶ）をこちらに突き出すのだ。そう、それでいい。では存分に味わうがいい！ これが、ネルソン・タッチだ！」

鎮守府内にある訓練施設。

熱心に提督をタツチする英国戦艦。

床がどんどんと赤く染まってゆく。

鼻血も相応にどぼどぼ流れている。

彼女の真似をして、同様に鼻血を流す艦娘までいた。

程なく、彼女たちは担架で医務室へと運ばれるのだった。

その後、提督を含めた全員が大淀から滅茶苦茶叱られた。

「ナガート！ ビッグセブンの一員として、卿（けい）に会えたことを嬉しく思うぞ。では早速、演習しよう。日本のカムスはシグルイとやらをするのだろうか？ 楽しみなこ
とだ。」

函館鎮守府を代表する艦娘の長門へ親しげに話しかけるネルソン。

その姿はまさに威風堂々たる大貴族。

あらゆる敵を薙ぎ払わんとする強い意思持つ瞳が、北海道に駐留する最強艦娘へ注がれた。

「よかろう、ネルソン。それは私も望んでいることだ。」

ビッグセブン二名に挟まれるは提督。

時間をきちんと外した筈だったのに。

ここは提督私室にある個人用の風呂。

三名入っても十分な大きさある温泉。

密着する弩級的存在に困惑していた。

そして、三名共のぼせたのであった。

大淀に叱られ、全員しゅんとなった。

「アドミラル、貴様の手料理を余に食べさせるがよい。アイリツシユ・ウイスキーと共に
楽しませてもらうとしよう。」

夜更け。

厨房でせつせと浅漬けの仕込みをしている提督へ、にこやかに話しかける余様。

その手には、信州産の英国林檎。

離島棲姫が持ち込んだ美味林檎。

日本に根付いた欧州の果物ナリ。

何箱も持ち込まれたために、いっぱいいる艦娘や深海棲艦たちも大満足な程だ。

提督は考える。

英国と言えばフィッシュアンドチップスだったか、それとも鰻のゼリー寄せか。

それともスコーンかサンドウィッチか。

エルマーの冒険では、ピーナッツバターとゼリーを挟んだサンドウィッチだったか。

結局、玉子サンドとわかめスープを提供する提督。

何故かどこかの軽空母が現れ、それはそれは見事な玉子焼きを作り上げ、両者を感嘆せしめるのであった。

「海軍の酒と言えば、ラムだ。これは取って置ききの二〇年もの。さあ、アドミラルよ、共に呑もうぞ。砂糖黍から醸し出される、このふくいくたる香り。これこそが、船乗りの呑む酒なのだよ。」

深夜。

提督の私室で酒を呑む戦艦級艦娘。

やがて函館所属の艦娘たちや深海棲艦たちが乱入し、ちやかぼこちやかぼこな宴会へと突入するのだった。

「アドミラル・イズ・イン・サイト。では各々方、始めるとしようか。よろしい、今宵は余がアドミラルの傍にいてやろう。明日の朝は熱い紅茶を共に飲もう。キユーカンバー……：日本語ではキユーリといるのか、そのキユーリのサンドウィッチを沢山用意するのだ。船乗りは沢山食べるものだからな。」

それが当たり前のことのように話すは、日本生まれの英国艦娘。

そんなものかなあ、と当惑しつつ受け入れるは、函館の艦娘たち。

函館所属の深海棲艦たちと共に、彼女たちは痛飲するのだった。

そしてまたまた全員、大淀からむちゃんこ叱られるのであった。

CCLXXVII：横須賀の赤鬼

四大鎮守府。

横須賀、呉、舞鶴、佐世保の各鎮守府はそれぞれ九人の提督と彼らを補佐する提督予備軍（副官、参謀、副提督、提督補、補佐官）が基地の多頭群として機能しており、お互いに切磋琢磨したり殉職したりいつの間にか行方不明となったりしながら厳しい戦局へ立ち向かっている。

そうした中、歴戦の艦娘たる横須賀第二鎮守府の赤城は『横須賀の赤鬼』と呼ばれている。

彼女はすべての赤城に於いて最優秀個体であり、戦争初期から戦い続けている同姿艦の最高峰でもあった。

何故そのように優秀な彼女が第一に所属していないのかというと、ひとえにその自由奔放な性格が災いしている。

今、彼女は函館鎮守府の食堂で舌鼓を打ち鳴らしていた。

赤城は函館提督からの御中元や御歳暮などで貰った焼菓子詰め合わせに夢中となり、それが高じてここまで来てしまったのだ。

はるばる来たぜ、函館。

ちなみに、わざわざ函館まで来る艦娘は彼女以外にもけっこうな数が存在する。

「この中華粥はとてもおいしいですね、吹雪ちゃん、霞ちゃん。」

両隣にいる、自らの護衛艦たちへ微笑みかける赤城。

思わず真つ赤になる吹雪と、対照的に冷ややかな霞。

「そ、そうですね。これはとてもおいしいと思います。」

「ええ、そうね。その意見には、全面的に賛成するわ。」

「あの、提督。」

横須賀鎮守府の誇る最強級正規空母は、近くを通りかかった提督に話しかける。

「はい、なんででしょう?」

「李さんをください。」

函館鎮守府の誇る名料理人が欲しい、と彼女は躊躇なく言った。

そこに痺れる、憧れる。

提督は即座に対応する。

「ダメです。」

「えーっ！」

「あの、赤城さん。それは大変無茶な要求じゃないでしょうか。」

「ムダよ、吹雪。こうなつた赤城さんはどうにもならないから。」

「わかりました、提督。」

「わかつてくれましたか。」

「では、鳳翔さんと間宮さんをください。」

「それもダメです。」

それを聞いた吹雪は、びつくらこいた顔をする。

「赤城さんが悪化してる?」

「くだらない戯れね。」

一言で斬り捨てる霞。

「仕方ありませんね。」

「そちらにも、全国的に名だたる料理上手が何人もおられるでしょう。」

「私、函館鎮守府に転属します!」

「更に酷くなつた!?!」

「まさに処置なしね。」

驚愕する吹雪とため息をつく霞。

「無理難題を仰らないでください、赤城さん。」

流石に函館提督が眉に皺を寄せる。

「うちでは赤城さんの食費を賄いきれませんから。」

「それは風評被害ですー！ 私、量的にはそんなに食べませんからー！
ぷっぷくぷーと、頬を膨らませる一航戦の片割れ。

可愛い。

そこへ元同僚の加賀が通りかかる。

彼女は以前、『横須賀の青鬼』と呼ばれた猛者だ。

「加賀さん、私が函館にいられるように助力してください。」

「くまりん。」

何故か、重巡洋艦である三隈の口真似をする函館最強級正規空母。

一瞬、周囲の時間が停止した。

相変わらず無表情だが、周囲の艦娘たちは思わずぷつと吹き出す。

「やりました。」

どこか誇らしげな彼女。

「そこをなんとかー！」

直ぐ様食い下がる赤城。

「わかりました。」

「わかつてくれましたか！」

「函館の航空母艦群と同時対決して、全員に見事打ち勝てたらいいでしよう。」

「えええ、それは幾らなんでも無理ですよ。」

「教官、勝手に口約束しないでください。」

親友とケツコン予定の相手から同時に責められ、彼女の頬が赤く染まってゆく。

「気分が高揚してきました。」

それを見ていた霞が、吹雪にひそひそと話しかける。

「加賀さんも赤城さん程じゃないけど、そうとう変わっているわね。」

「えーと、あの、そのまあ、あはは。どちらも個性的だと思います。」

「あんた、もつとちやんと自己主張しないとその内大火傷するわよ。」

「既に火だるまですから。」

「恋の炎で？」

「そ、そげなことはありません！」

「なんで急に九州弁になるのよ。」

「なんやかやで赤城の実力を見たいとの話に変わり、赤城対加賀龍驤雲龍ヨークタウンという無茶ぶりで演習が行われることになった。」

「なんでこんなことに……。」

ぼやきながらも月餅とジャスミン茶を堪能する赤城。

ここまで来ても、彼女は通常運転である。

「けっこう余裕そうに見えますよ、赤城さん。勝算があるんですか？」

どこかわくわくした顔で問いかける吹雪。

「単に食い意地が張っているだけじゃないの？」

にべもない霞。

「ふふふ、どうでしょう？」

身支度を調える赤城。

その表情に憂いなし。

戦鬼の片鱗とも言うべき波動が、その身体から漏れ始める。

「殺れない、じゃなくて殺らなくてはならないんですよ。」

彼女は既に、戦闘機械的な言動に移行しつつある。

苦境にあつて尚輝く艦娘の鑑だ。

何年も最前線で戦い続けているだけの実力者の矜持が、そこに見てとれた。

「吹雪ちゃん。」

「はい。」

なにを言うつもりなのだろう。

知らず知らずの内に胸が高鳴る吹雪。

頬が紅潮してゆく。

まさか……まさか……。

「晩御飯は餡掛け焼きそばや雲吞（ワンタン）や焼売や春巻きなどがいいですね！」

爽やかに微笑みながら、赤城は演習場へと飛び出していった。

やがて、その笑みは素早く獰猛なものへと切り替わってゆく。

さあ、私を存分に楽しませなさい。

まるでそう描いているかのように。

そして、苛烈なる演習が始まった。

CCLXXVIII：奈良アニとあかんキネマ

「円盤が売れねえんだよ、コンチクチョーメッ！」

奈良アニメーションに勤めている先輩の口は悪い。

今も電話口で散々喚いている。

呉の先輩も口が悪いし、私はそういう星の元に産まれたのかも知れない。

通称奈良アニと呼ばれる先輩の所属せし会社は、業界内に於いて比較的健全な経営方針で知られている。

健全でない会社の内情を描いた漫画やアニメーション作品はちらほらあるが……うん、あれは無いよなあと思うことが時折ある。

『白い函』を、いつかはきちんと観たいものだ。

「型通りの異世界転移・転生でチート且つハーレムな展開なんて、みんなもう飽き飽きしてんだよ！　そしてとどめに主人公が他の登場人物たちに覚悟しろ勇気を示せだとか言う終盤なんて、定型過ぎて泣けてくる状況だ！　がっかりだよ。失望するよ。残念だ

よー！」

「はあ。」

「『こんそめちきん』が潰れてなんとか移籍出来たのはよかつたし、『奈良アニ』が続けて三本それなりに売れる作品を作れたまではよかつたんだ。」

「『らきすら』は今も人気ありますよね。」

流されるのも悪くないが、流されないことも悪くない。

ずっとずっと長く変わらず好きだっっていいじゃないか。

人間だもの。

熱い思いはきつと伝わるから。

「おう、今も聖地巡礼してくれるファンがいるしよ。だがな、問題はそこじゃないんだ。例の『ノケモノ・シヨック』は知っているか？」

「監督を降板させた結果、それを不安視した投資家投機家が株を売り払って鴨皮書店の株価が暴落した話ですよね。」

「折角アニメ業界の風向きが少しずつよくなってきたのによ、鴨皮のア……。」

愚痴る先輩から危ない話を散々聞かされた。

邦画の駄作がどうしたとかこうしたとか。

洋画に於けるあんなんとかこんなとか。

以前鑑賞した数々の酷い映画を思い出す。

気分がどんどん損耗してゆく感じだった。

気分屋な監督、破綻した脚本、思い込みの激しい演出。

棒読みの役者、顔だけの役者。

主演のゴリ押しだけが目的と化した映画。

やたらに暗いだけで救いの一切ない映画。

中身がぺらっぺらで原作を侮辱する映画。

そうだ。

現在あかんキネマ鑑賞の苦行をしている友人へ、鑑賞した作品とそうでないものを織り混ぜて勧めておこうか。

あの彼ならば、きつと人生の糧にしてくれることだろう。

必ずやシンボルを見つけ、霧の道をシヴエリア鉄道で抜けてゆくことだろう。

人気作品の漫画はアニメ化や実写化を言われやすいらしいが、落とし穴があちこちに
あるので要注意だ。

小説投稿サイトで人気作品となって書籍化されたって、危地はあちこちにある。

表紙絵が作品に合わなくて、うぎやーな感じになることだってよくある話。

それは絵師の責任というよりも、作品との相性を無視した出版社側の怠慢。

第三巻が出なかつたりなんて当たり前だ。

先日某小説がアニメ化寸前でコケたし。

それと鴨皮の関連会社による某監督への給与未払金問題もあるし、作り手は受け手が思っている以上に雇用側から蔑視されているし扱いが酷い。

悪循環がいつかどこかで断ち切られることを望んでいる。

業務を終えて、創作活動に当てられる時間は案外少ない。

提督稼業は多忙なのだ。

朝食昼食夕食の時間も艦娘の誰かと一緒だし、入浴時もなんやかやと話しかけられて集中しきれない。

上の空で返事したら、後が大変だ。

寝る時も必ず二名の艦娘が添い寝状態になるので、結局僅かな時間を利用して携帯端末に話を書き込むくらいしか出来ない。

それと、単身出張時を利用するくらいか。

それでも支持してくれる読者が存在する。

それは本当にありがたいことだ。

創作活動していることは、これからも艦娘たちに内緒にしとかないとな。

先日あかんキネマをいろいろ勧めた友人から、これは観るべき酷い映画だよんとかばかにいろんな迷作のDVD群が送られてきた。

急遽（きゆうきよ）『あかんキネマ祭』を開催してみたが、殆どの艦娘が途中で脱落してしまい、最後まで観たのは地球の文化吸収に意外と貪欲なメトロン星人と初雪と望月と妖精たちくらいだった。

CCLXXIX：ハロウィンとローマと朝潮

ハロウィンという欧米系行事がある。

異国に於けるお盆なのかも知れない。

死者や魔物が跳梁跋扈する百鬼夜行。

死霊の盆踊りは関係無いと思われる。

神々入り乱れる日本では、近年仮装行列を行う日であるとの認識が広がりつつあるようだ。

海域開放が順次行われている感はあるものの、不況感の拭えない不透明な日常を非日常で埋め尽くしたい願望でもあるのかも知れない。

暴力で満たそうという心持ちよりは、ずっとずっとましである。

日本の国は、周辺のどの国よりも恵まれた環境にあるのだから。

無政府状態のまま、人権もなく暴力が渦巻く地域は少くない。

ちよつとしたことで暴力的な気質を剥き出しにする人間は世界的にある程度かそれ以上生息しており、それは抑える存在がいなくなった途端に本性を表に噴出させる。

切つ掛けなくば『普通』の振りをし続ける人間も、ゴーストの囁きで悪の性質が表面化するのだ。

『新宿騒乱』のような事例は二度と起こってならないこととして、今も警察による残党狩りが続けられている。

海洋上での戦力として不十分な位置にあるなんちゃって艦娘。

その『彼女』たちを海外派遣する試みが、現在進行形で行われている。

派兵ではなく、復興支援としての派遣名目だ。

行政が生きている地域ではそれなりに機能しているものの、世紀末的地域では防戦一方だったりする。

陸戦型に改装されたなんちゃって艦娘は派遣先で不正規戦部隊や犯罪組織などと接触しても、対人戦闘に秀でた訳でもない為に次第にその数を減らしていた。

武装することと人を撃てることとの間には深い溝がある。

それを易々と超えられる人間は、数多くない。その筈だ。

人材及び物資双方の補充が不十分で壊滅する部隊も複数あり、大本営と日本政府が撤退の時期を窺っている場所は日を追うごとに増している。

大本営発表で一定以上の戦果が上がっていることにはなっているものの、実情はそんな感じだった。

海外派遣に賛成した政治家や官僚は、よほど綱渡りが上手くない限りは将来的に左遷されたり行方不明になったりするだろう。

戦前はオサレな若者の街と謳われた渋谷。

『新宿騒乱』の余波で大破した街並みの復興は遅々として一向に進まず、今も空き店舗を示す貼り紙がそこかしこに変色しつつも存在している。

部分的に現在も廃墟の雰囲気を残すその街で、艦娘による催しが行われた。

その中心にいるのは、函館鎮守府所属のローマと横須賀鎮守府所属の朝潮。彼女たちの衣装は既に魔女仕様で、それはまさにハロウィン仕様と言える。

先のとんがった黒いつば広の帽子。

黒いマントと黒い服装に魔法の杖。

様式化された魔女の姿に彼女たちは変化する。

百貨店では北海道物産展が同時開催され、北の国の旨いもんを作る屋台がハチ公付近から歩行者天国にかけて軒を連ねている。

他にもどこかの航空駆逐艦のたこ焼き屋や、どこかの罵倒系駆逐艦のおにぎり屋などが賑わっていた。

様々な地方の物産展も屋台群に隣接して行われており、米や野菜や林檎などがよく売

れている。

それは全国に於ける求心力を失いつつある旧帝都へ侵食せんと欲（ほつ）する、蝦夷地などを含む地方からの逆襲。

人口が戦前よりも格段に減つたとは言え、今も札幌のそれよりは多い東京圏。利用する理由は充分にある。

さあ、蹂躪を始めようか。

私の名はローマ。

イタリヤの戦艦の魂を有した、誇り高き艦娘。

今日はシブヤという街で、魔女の仮装をして艦娘の宣伝に明け暮れる。

補佐役はアサシオという名の艦娘。

頼れる忠犬って感じで持ち帰りたいくらいの子。

彼女も私みたいな扮装をしている。

人間の女性たちも似た姿で愛想を振りまいていた。

リユージョーとカスミからの差し入れもあつたし、ふふふ、充分だわ。

シブヤは今も所々焼け跡が残っている。

それでも人はたくましく生きてゆくのだろう。

ハロウィンという異国の行事を平然と行えるこの国は、とても柔軟性が高いのだと思う。

私のアドミラルによると、洋菓子屋とかお洒落な店の宣伝材料らしいけど。

必死の顔立ちをした男性陣が高そうな撮影機具で、私たちを撮影してゆく。

その形相は鬼気迫るものが多く、何故彼らはここまでシグルイ的な表情なのかと考えてしまう。

あまりにも接近しようとする人間や態度の怪しい人間は憲兵によって連れ去られ、少なくとも私の認識している限りでは撮影の戦列に復帰していない。

撮影の催しが終わり、私は私のアドミラル及び仲よくなつたアサシオと共に食事へと出掛ける。

以前は人気ラーメン屋や回転寿司屋や薬局が沢山あつたとか、センター街は若者がいつもたむろしていたとか、空き店舗の目立つ寂れた街並みをとことこ歩く。

戦争が終結した後、この街が復興することはあるのだろうか？
復興したとして、それは往時の姿を取り戻せたものだろうか？

硝子窓が割れたままの建物、鈍器を叩きつけたり火炎瓶を投げつけたりしたような痕が残る壁。

割れたり焼けたり。

弾痕が今尚ある壁。

市街戦の爪痕は今もあちこちに残っていて、完全撤去には程遠い。

てくてく歩くと、中心街から少し離れた場所にその店は存在していた。

北イタリアの料理を提供する店だという。

ピッツアの無い店は日本で珍しい部類だ。

青く塗られた枠の硝子窓から見える店内は落ち着いた雰囲気だ。

白い壁に黒板が無造作に掲げられていて、肉料理や魚料理の名前や本日のオススメな

どが書かれていた。

焦げ茶色の扉をくぐり、店内に入る。

「いらっしゃいませ。」

穏やかな日本語が聞こえてきた。

アドミラルよりも年嵩（としかさ）と思える人物が、洗いざらしの白いエプロンを着

たまま現れる。

イタリア人だ。

直感的にそう思う。

奥さんらしき人も現れた。

彼女は日本人だ。

アサシオと目が合う。

同時にこくりと頷き合つた。

彼女と背中合わせになつた。

左手側にこの店の主がいる。

私は左手に杖を持ちて構えた。

アサシオは右手に杖を構える。

我々は口を揃えて言い放つ。

信仰の異なる国で言い放つ。

平和の素晴らしさを噛み締めつつ。

アドミラルと共にいられる喜びを胸に秘めつつ。

「トリツク・オア・トリート！」

店の主人から貰つた帝政ローマ軍仕様の軍用糧食的ビスケットのヴィスコツティは、素朴な風味がして歯触りよくおいしかった。

勿論、本題である北イタリアの家庭料理は思つた以上の味わいで、とどめのティラミスもマスカルポーネの風味豊かで遙かな故国を感じさせた。

CCLXXX : 最強霞ママ決定戦

先ずは横須賀第二鎮守府の霞が登場する。

彼女は戦闘がたまらなく好きな駆逐艦だ。

同じく戦闘大好きな赤城と組んで普通っぽい吹雪を巻き込み、三人体制で状況に応じて軽巡洋艦だの軽空母だの駆逐艦ズを足している。

作れる料理はおにぎりのみで、大抵赤城の腹に収まる。

最近是新開発された二〇・三センチ低反動単装砲を愛用。

次に函館鎮守府の霞が登場する。

彼女は他の艦娘たちと共に解体寸前になる予定だったところを、出来立てほやほやの大淀によつて書類改竄されて函館へ転属した。

料理は提督の影響でいろいろと作れる。

最も得意な料理はシヤケ入りおにぎり。

最期に登場するのは北信在住の元霞。

現役の『駆逐艦愛好会』会長である。

信州在住の元艦娘たちの元締めであり、中身はおっさんだが性格はかなり霞になりつつある。

定食屋の元息子で現在看板娘のため、料理はかなり上手。

あまったご飯はおにぎりよ！

三名の霞が函館に集結した。

『最強霞ママ決定戦』という催しのためである。

ちなみに、他の霞は全員参加を拒否した。

霞まみれを期待していた者は老若男女艦娘を問わず、がっかりする結果であった。

参加した三名とも異口同音に「くだらないわね！」と言い放ったが、横須賀の霞は特に負けん気が強いので挑発に対し「ふん、あんたの挑発に仕方なく乗ってあげるわ。感謝しなさい。あたしが最強の霞であることを証明してあげるわ！」とのたまった。

函館の霞は同姿艦の中でも比較的慎重で穏健な方だが、やはり挑発に対して「そこまです言うなら、見ていなさい。あたしが最強の霞であることを教えてあげるわ！」とのたまった。

信州の霞は金にならないことが特に嫌いなので、賭けをしている胴元にねじ込んだ。

「あたしはどの霞が勝とうと興味ないけど、無駄足になるとか損になるとかは特に嫌いな。わかるわよね？ ね？ ね？」

そして、『最強霞ママ決定戦』が開始された。

どこぞよりか『駆逐艦愛好会』の面々に艦娘マニアに美少女大好き大好きおっちゃんだのがわんさか集まってきて、函館鎮守府前の広場は鈴鳴りの人々で溢れんばかりになった。

霞ママ三名はお互いへの挑発と罵倒から戦いを始め、やがてそれは実際に手足を使った行動へと移り変わる。

艦娘の艦種的に最も血の気が多く、武闘派が揃っているとされる駆逐艦。

外面のあどけなさは内面に於いてもそうだと見えるが、一旦戦闘になれば勇猛果敢な闘士となる彼女たちに対して興奮する艦娘が続出する。

やがて、興奮した彼女たちは霞ママたちへの胸キョンの要素を秘めつつ参戦するようになった。

居合わせた提督たちや憲兵たちはそれを阻止しようと試みたが、地力がまるで異なることからそれは上手くいかなかった。

結局、大淀や足柄や夕雲型駆逐艦などの彼女を好き過ぎる艦娘たちの乱入で大会はしつちやかめつつちやかとなり、誰が最強の霞なのかわからなくなった。

仕方がないので、みんなで林檎のパイを食べて解散と相成った。
とっぺんぱらり。

CCLXXXI : 見合い、その遠き道

私が見合い結婚をするつもりだと艦娘たちに言ったら、何故か会議室は阿鼻叫喚の渦に包まれた。

もしかして、この警備府の経営方針が大幅に変化するとも思っているのだろうか？
「なんだよ！ 提督は俺たちをなんだと思っていやがるんだ！」

普段冷静沈着な軽巡洋艦がカンカンになっている。

何故だ？

「お前たちは私にとってかけがえのない部下だ。例え結婚したとて粗略にはせぬ。」

「ちげーよ！ バツカじゃねえのか！ そういうことを言ってんじやねえんだよ！」
一体、なんなんだ。

「仮に結婚した後もこの警備府は私が提督として管轄するし、家庭に多少時間は取られるだろうが、君たちの待遇はこれまでのものと同様かそれに近い水準を保てるように最大限留意しよう。」

「違う！ 違う！ あんた、全然わかつてねえよ！」

吼える軽巡洋艦。

「なんだ？ 要望でもあるのか？ それなら要望書を提出してくれ。吟味させてもらうから。」

「誰かこの天然ボケに思いきり突っ込んでやれ！」

「なんだか今日は特別に失敬だ。」

「いつもはあんなに頼れるのに。」

「天龍。」

「なんだ。」

「あなた、疲れているのよ。」

「俺はモルダーじゃねえぞ！」

「提督。」

「なんだ、時雨。」

しっかり者の駆逐艦が口を開く。

「提督の見合い相手はどこに住んでいるのかな？ それを今すぐ教えて欲しいな。それと即時に携行小火器の臨時持ち出し許可が欲しい。」

「なんだか不穏な感じがするので却下だ。冗談を言っている場合じゃないぞ。」

「冗談はあんたの顔よ、司令官。」

「酷いな、叢雲（むらくも）。」

「簡単な解決方法があるわ。」

「ほう、聞こうか。」

「今夜、皆と一緒に寝ましょう。」

「却下だ。」

「ケチね。」

警備府の面々を見渡す。

何故か全員不機嫌な顔をしている。

八名の駆逐艦。

三名の軽巡洋艦。

一名の軽空母。

「全員、不機嫌のようだな。」

「当たり前ですよ、司令官。」

吹雪までがそんなことを言う。

「私が結婚することに不安を感じているようだが、お前たちは私の大切な家族だ。無理無駄無謀な作戦などは絶対参加させないし、これからも函館鎮守府と連携を密にして

安全海域の拡大に努める所存だ。」

「司令官は誤解されています。」

「なんだ、不知火。お前から話しかけてくるとは珍しいな。」

「迂遠な表現は好みませんので、単刀直入に申し上げます。」

「うむ、忌憚のない意見を頼む。」

「……せてください。」

あの不知火がボソボソと喋った。

珍しい。

「……すまん、なにを言いたいのかわからない。」

「あー、もうめんどくせえ！ 搦め手はなしだ！ 実力行使に移ろうぜ！」

「ダメです！ 無理矢理なんて、情緒がありません！」

怒る軽巡洋艦に宥める駆逐艦。

さつきから、彼女たちはなにが言いたいのだろうか？

最も信頼している軽空母へ目を向ける。

演習時は肌脱ぎになる彼女だが、普段はきつちり着物を着ていて端然としている。

彼女ならば、この混沌をなんとか鎮めてくれることだろう。

「提督。」

「うむ。」

「これから、大本營に突撃します。」

「ん？ な、なにを言い出すんだ？」

「提督を失うくらいならば、いつそのこと一花咲かせて参ります。」

「な、なにを言っているんだ！ お前がいなくなったら、大変困るじゃないか！」

ピタリ、と彼女たちの動きが止まり、室内は静けさに包まれた。

なんだ？

「あ、あのよ、提督。」

「なんだ、天龍。」

「その、な、なあ、オレが突然いなくなったら、どう思う？」

「バカなことを言うな。お前がいなくなったら大変困るぞ。」

「そ、そうか！ そうだよな！ 提督はオレがいなくなったら困るんだよな！」

その後は艦娘たちから似たようなことを聞かれた。

一体、なんなんだ？

情緒不安定なのか？

翌朝函館の提督に電話したら、もう少し触れ合った方がいいと言われた。

その日の午後に見合いを勧めてきた人から連絡があつて、話は無かつたことにしてく

れと言われた。

都合が悪いのだろう。

もしかしたら、相手のお嬢さんに好きな人がいたのかも知れない。

まあ、今回ご縁が無かつたのだ。

ご縁談、というくらいだからな。

午後、業務が一段落した後で艦娘たちと交流の時間を設けた。

やたらと艦娘たちがペタペタ触ってきたので、少し困惑する。

貰い物の林檎を使ったパイが焼かれ、皆からお食べとばかりにフォークを突き出された。

ちよつと胸焼けしそうになる。

夜、寝ようとしたら駆逐艦たちが私の寢床にいた。

このオマセさんたちめ。

どこでそんなエツチな寝間着を買った？

即時に追い出す。

函館の提督は、毎晩とつかえひつかえで艦娘たちと添い寝している？

それがどうした。

しかし、彼はよく耐えられるものだ。

私だったら、美人の彼女たちに毎晩迫られたら直に陥落してしまうかも知れない。

彼女たちが何故無愛想でご面相のよくない私に好意を持っているのかよくわからないけれども、出来得る限りは親切にしよう。

その夜、何名もの艦娘とケツコンする夢を見た。

その話を朝食時に艦娘たちへ話したら、何故か全員上機嫌になった。

嗚呼、彼女たちは謎がいっぱいだ。

CCLXXXII : お歌をうたつて通う道

提督はなにで出来ている？

提督はなにで出来ている？

努力と汗と思いやり

それに仔犬のしっぽ

そういったもので出来ている

艦娘はなにで出来ている？

艦娘はなにで出来ている？

砂糖に香辛料

それに素敵なものばかり

そういったもので出来ている

ビタン、ビタン、ビタン、ビタン、ビタン、ビタン、ビタン。

なにか重たいものを、何度も何度も何度も床に叩きつけるような音が聞こえてきた。しばらくしてその音は止み、ふうつと一仕事終えたような吐息が駆逐艦から漏れる。「これでまた、司令官は普通に動けるようになるんでしょっか?」

やさしい声が、ひっそりとした家屋で紡がれた。

執務室兼居間の畳に転がる人間もどき。

長い手足が妙な方向にねじくれていた。

それをバキバキと直してゆくは駆逐艦。

パチパチとあちこちで小さな火花が飛んでいる。

黄色いT字型頭部をゴキツゴキツと捻り回している内、彼女の心を震わせる低い声が

聞こえてきた。

それは愉悦。

暗い奥底のなにかを輝かせるヒカリ。

「なにかあったのかな? 私は気を失っていたようだが。」

「大丈夫ですよ、司令官。なにもありませんでしたから。」

「そうかい?」

「そうです。」

「私はなにか大事なことを忘れてしまったような……。」

「気のせいですよ、司令官。今夜のおかずは真つ赤な麻婆豆腐にしますからね、楽しみに
しててくださいい！」

「あ、ああ、楽しみにしているよ。」

白い少女は、そしてとても嬉しそうに微笑んだ。

そろそろ夜の帳（とぼり）が下りてくる。

辺りは真つ暗、闇の中。

ぼつんと灯り、ひとつだけ。

だけど、二名の心は温かい。

ほっかほっかとなつている。

古い発電機が音を立てていた。

ブーンブーンとうるさそうに。

静かな静かな海のそば。

壊れた壊れた海のそば。

他には、ザパーンザパーンと波が寄せては帰す音するだけ。

それでも二名はにつこにつこ。

ずつとずつと、につこにつこ。

提督と艦娘、と祇園精舎の鐘が鳴るよ

いつケツコンしてくれるの、と艦娘が泣くよ

戦争が終わったらな、と提督が囁くよ

それ、いつなんですか、と艦娘が嘆くよ

それはわからない、と提督がため息つくよ

提督をベッドに案内する探照灯が来たぞ

提督の首をどうにかする大本営の役人が来たぞ

「俺は駄目な提督なんだ！ もうやってらんねえ！」

酔っぱらった提督が民家改造型警備府でくだを巻く。

彼はやさしく、艦娘に怒鳴ることもない。

人のよい男はアルコール依存症で、玉や馬や自転車やボートがとっても好きなのだ。

赤鉛筆や新聞を手放せないだけ。

負けても負けても懲りないだけ。

持ち金を全部突っ込んで、あつという間に無くすだけ。

「大丈夫よ、司令官。もーっと頼ってくれていいのよ！」

漆黒のフード付きの上着を着た少女が、やさぐれて少しばかり豊満な提督を強く抱き

締める。

慈母のような微笑みで、白い少女はいつまでもいつまでも彼をギュツと抱いて離さなかつた。

ずっとずっと愛しているからね、と失神したむっちり男の頬を彼女はいとおしそうに撫でた。

白く白く美しきモノたちがうごめいている。

黄色い肌のモノの周囲にてうごめいている。

とろけた顔のおっさんの回りで泳いでいる。

水魚の交わりの如く。

白く白く美しきモノたちは微笑みを絶やさない。

廃屋に見える建物の中で、みんな仲良しこよし。

一〇人の提督

居酒屋へ食事に出た

一人が鳳翔に誘われ

そして一行は

九人になつた

九人の提督

全員寝坊する

一人がとうとう

眠りから覚めず

そして一行は

八人になつた

八人の提督

タウイタウイへ旅行

一人がそこに居残つて

そして一行は

七人になつた

七人の提督

刀を試し斬り

一人が自分を

ぶつた斬り

そして一行は

六人になった

六人の提督

蜂蜜を取る

一人が失敗

蜂に刺され

そして一行は

五人になった

五人の提督

法律を学ぶ

一人が逮捕され

そして一行は

四人になった

四人の提督

海へ出る

一人が姫級に拐われ

そして一行は

三人になった

三人の提督

動物園に行った

一人が球磨に誘われ

そして一行は

二人になった

二人の提督

日向ぼっこ

一人が日向に誘われ

そして一行は

一人になった

一人の提督

一人で海辺に

住んでいた

しかし

彼が艦娘たちと

ケツコンすると

そして誰もいなくなつた

CC LXX XIII : 冬期コミケツトに於ける小冊子の附録 について

「いいじゃないですか、提督。」

陽炎型に属してはいるものの、夕雲型にも属しているかに見える駆逐艦が話しかけてきた。

外は雪景色。

冷える函館。

寒波の影響。

師走の午後。

明け方の雪掻きは盛況だった。

吹雪く中ではつやーい、と島風が吹雪と競争して負けず嫌いの艦娘たちと合戦じみた戦いを繰り広げていた。

作業後に飲んだ甘酒は、生姜の風味が程よく効いていてなかなかよかった。

執務室では古いイタリアのオイルヒーターがほんのりと室内を温めている。

あまり温かいと眠くなるし、これくらいがいいのだろう。

問題は目の前の秋雲だ。

大本営に於いて広報活動を積極的に行っている彼女が、くりくりした目をぴかぴか光らせながら私に迫っている。

別名、マスター・オータムクラウド。

数々の提督を煙に巻きながら、薄い本を描き続けている。

大和の声色を真似るのが得意な彼女は、時にラチオで代役を行うことさえ有るとい
う。

「ちよこつと映像作品の主役になるだけのことじゃないですか。」

「役者でもないのに、有名になんてなりたくありませんからね。」

「ちえーつ、ケチですね、提督は。」

「ケチでけっこう。私は提督です。」

「提督たるには、艦娘たちの願望を叶える義務もあるんじゃないですか？」

「それなんて聖杯ですか。アンリ・マンユになつてしまいかも知れない。」

「いいですね、衣裳を用意しましょう。」

「やりませんからね。」

「ケルトの英雄なんて如何でしょうか？」

「青タイツはちよつと……。」

「提督、やりましょう！ 剣の英霊役は私がやりますから！」

「落ち着きなさい、大淀さん。」

傍らに控えていた軽巡洋艦が何故か興奮し始める。

「ほら、大淀さんも乗り気じゃないですか。」

「下手に煽らないでください。」

「まあ、それは次善策として。」

液晶ペンタブレットを小脇に抱えつつ、闇色めいた瞳で私を覗き込んでくる。

私が彼女を見つめる時、彼女もまた私を見つめているのだ。

瞳の中のアクトレス。

その左手には、飲料水のマツスルドリンコやモロナミンGやカロリーメンバーや美肌青汁や活性青汁や温泉青汁の入った紙袋を持っている。

「本命はこれです！ 異世界転移したおっさんがチートなスキルに目覚めて、ハイパーなステータスを基に最強で無双で奴隷ハーレムを築きつつ成り上がるお話ですよ！

絶対受けますって！ それに、奴隷役になりたい艦娘がこんなにもいますし！ 婚約破棄された悪役令嬢とツンデレな妹を加味したら、更にウハウハです！」

その手に企画書と書類の束を持ちつつ、熱弁し肉薄してくる少女。

君、瞳孔が開いているよ。

「冬期コミケットで販売する小冊子の、附録になる特典映像作品なんですよね？」

「ええ、毎回力を入れていきますから。」

「もう脱ぐのは厭ですよ。」

「ええ！ いいじゃないですか！ 私も脱ぎますから！」

「そう言つて、いつも人が入浴していると乱入してくるじやありませんか。」

「別に、いいじゃないですか！ 今のところは、どこも触っていませんし！」

「お触りはあきまへんえ。」

「ねえ、お願いしますよ。」

「君はホントに物怖じしませんねえ。」

「戦艦にも重巡にも出来ないことをするのが、この秋雲の本領ですから。」

そう言つて、彼女は誇らしげに微笑んだ。

業務があると、返事を保留にしつつ迎えた夕食。

さあて、今日も鍋を振るうか。

ん？

何故か食堂の雰囲気はピリピリしている。

片時も離れなかったマスター・オータムクラウドが何気なくさりげなく、やわらかな
声音で私に問いかけてきた。

「ところで提督は結局、どの子が一番好きなの？」

CCLXXXIV：清霜戦艦化計画

試行錯誤の続く『駆逐艦火力強化計画』は現在、大湊（おおみなと）と函館の共同計画として小樽や釧路や稚内などを巻き込みながらぼちぼち展開されている。

駆逐艦はけっこういるものの、他の艦種が少ない関係から火力の強化は必須事項と思われていた。

基幹戦力の底上げが為されることで、見えてくる局面が変わるらしい。

艦娘の中でも特に計画に対して積極的なのが大湊の清霜で、うちの霞や早霜や大淀や足柄、それと横須賀の朝霜を巻き込みながら元気に今日も走り回っている。

駆逐艦がわんさか参加しているため、女学校のような趣さえ感じた。

たつぷり用意した筈のお汁粉がどんどん減ってゆく。

味噌おでんや芋汁もその量をばんばん減らしていた。

食べ盛りの娘たちへ食わせているみたいにも思える。

お代わりをする娘さえいた。

さあ、どんどん食べたまえ。

N型艦装、通称『なんちやって戦艦型艦装』は長門型艦装を模した形となっており、一見すると四一センチ連装砲四門を備えているかのようだ。

アサルトライフルを拳銃弾仕様化するような方向ではどうかと言ってみたら、それが何故か普通に通ったからである。

つまり、八つの砲身はそれぞれ二〇・三センチの砲弾を放つモノであつて、外見こそゴツイ砲台も中身は相応に簡略化されている。

それでも駆逐艦を圧倒する火力が得られるのだから、制御さえ出来れば強力な存在になれるだろう。

駆逐艦三名分の経費と重巡洋艦二名分の資材が飛ぶことから、ある程度の艦娘を抱える規模の基地でないとともに運用出来ない。

駆逐艦決戦仕様という、皮肉及び揶揄をされているのは当然かも。
駆逐艦一名でひっそりやっている警備府は蚊帳の外、という訳だ。

そうした一名きりの警備府用に反動低減装置組み込み型の二〇・三センチ砲を開発中だが、今のところ扱える駆逐艦には限りがある。

何故か大淀がロケットランチャーを推しまくるのだけれども、同意する艦娘の少なさ

を嘆くのはなんだか違う気がしてしょうがない。

N型艦装自体の制御は駆逐艦が行えるように簡素化されていて、反動低減化機構も組み込まれている。

陽炎型や夕雲型の駆逐艦ならば、なんとか制御出来ないでもない仕様だ。

島風は興味が無いようでふーんという顔をしていたが、吹雪は面白がつて動かしていた。

彼女は戦艦級艦装を難なく扱えるようだ。

まあ、元はレ級だしな。

これに触発された叢雲曙霞が起動に挑戦し、霞はなんとか扱えたものの、叢雲と曙は制御出来ないようだ。

そして何故か、私がいよいよのやいのと怒られる破目に陥った。

理不尽ナリヨ。

吹雪型や睦月型の子たちからもやいのやいの言われ、辟易（へきえき）する。

どこぞの改式仕様な時雨や夕立は動かさせたから、そうした艦娘は相性がよいのかも知れない。

どこからともなく現れた早霜が艦装を動かし、私へ手を振った。

それを見た駆逐艦たちが、次々とその艦装の起動に挑んでゆく。

初雪が挑戦して動かせず、吹雪へなんやかやと話しかけていた。うちの吹雪は動かせるが、よその吹雪は動かせないだろうなあ。初雪とかなり親しい望月が試してみるも動かず、お冠であった。その後、ハッチモツチステーションにて彼女たちからいたぶられることが確定した。知らんがな。

大本営から宣伝用の撮影をするために青葉衣笠磯波がやって来て、何故か磯波は私をばちばち撮影するのだった。

それを見た吹雪がムツとした顔で近づいてくる。

「磯波ちゃん、私の司令官になにやってんの？」

「吹雪ちゃん、大丈夫だよ。これは宣伝用の撮影。ただ、それだけのことだから。」

「撮影だけなら、司令官に腕を絡ませる必要なんて無いでしょ。そろそろ離れて。」

「私にはテイトクニウムが必要な。補充出来たら離れるわ。」

「いい加減にして！ 私の司令官に触るには許可が必要なの！」

やんやんやり出す駆逐艦たち。

仕方ないなあ。

「君たち。」

語りかけると、びくんとする駆逐艦たち。

「私は現在誰とも付き合っていないせん。」

えええ、という顔の彼女たち。

と、そこへ。

「ねーねー、司令官。私の勇姿を見てくれた？」

清霜が無邪気に抱きついてくるのだった。

そして、皆がゲキオコ状態へと変化する。

解せぬ。

雪降る津軽海峡で宣伝用の撮影が始まる。

ぼんぼん丸に乗った我々は、大戦艦清霜の姿を眺めた。

それはまさに勇壮なる威容。

いつの間にか現れた武蔵が、やさしい目で彼女を見つめている。

佐世保からわざわざ激励に来たのだとか。

九州の艦娘たちも興味津々の表情をしていた。

その目はいずれも武人のもの。

戦う乙女たちの本領そのもの。

両腕を胸元で組み、胸を張った清霜が高らかに叫んだ。
「戦艦清霜、抜錨する！」

CCLXXXV : クリスマスの前の日に

カンムスたちはテイトクサンと

ヒトツになりたくて

シカタありません

しかし

テイトクサンとヒトツになったら

そのヒから

クルシミはハツセイします

ナンメイもナンメイも

オクサンになるユエに

テイトクサン

テイトクサン

ツリーを

ツリーを

おおきくして

テイトクサン

テイトクサン

ひっそりと

テイトクサン

テイトクサン

いつも

いつも

ナンコウフラク

クリスマス、という訳でいつもの浅漬けを大量に仕込んだ。

独り身の艦娘が大挙するからである。

鶏のカレー煮も沢山作らないとなあ。

茨城産の落花生をぽりぽりぽりりんきーとただきつつ、秋田のマガギな林檎ジュースをちびちび飲んで、書類の決裁をしたり、何故か百足（むかで）の絵の旗指物を背に差した伝令たちから報告を受けたり指示を飛ばしたりしながら、庄内米や奥出雲の米や魚

沼の米で作られた餅の個数を確かめてゆく。

小豆は七飯町（ななえちよう）のものが手に入ったし、岡山のササゲも入手出来たのでお汁粉は沢山作れるだろう。

食糧の貯蔵は充分にしておきたい。

バビロンの宝物庫のように。

鳳翔と間宮がクリスマスケーキやブツシュ・ド・ノエルやシュトレンなシュトレンやビスケットなヴィスコッテイやクツキーやお饅頭などを作り、ミニスカサンタ仕様の艦娘たちが鎮守府内を駆け回る。

自分自身を艦娘だと思いついでいる娘たちが、きらきらした眼で屋内の飾り付けをしていた。

来年には、彼女たちを普通の女の子にしなくてはならない。

『小豆ちゃん』とも呼称される彼女たちの代表者から話しかけられ、なるべく冷静に聞こえるように答える。

どうにかならないか。

なんとかならないか。

そんなことを考えながら。

雪がはらはら降っている。

俗に言う、ホワイトクリスマスになりそうだ。

風が冷たい。

北の国の寒さは、底冷えする程だからなあ。

さくさくざくざくと凍った道を歩いてゆく。

びゅううといきなり突風が吹いてきて、ついついよろけそうになってきた。

しかし、倒れそうになった私は大変やわらかいモノたちに支えられている。

それは艦娘。

戦のためにこの世へ顕現した、戦闘艦艇の魂を持つ娘たちだ。

「なによろけてんのよ。あんたが怪我したら、この鎮守府の機能は停止するんだからもつともつと自分自身の重要性を認識しなさい。」

「そうよ、なんちやつて提督。あたしの夫になる男が注意散漫だなんて笑い話にもならないわ。怪我なく事故なく安全第一が大切よ。」

「叢雲（むらくも）と曙の言う通りよ。私の旦那がおつちよこちよいだなんて笑い話にもならないんだし、ガンガン攻める姿勢くらいで丁度いいの。艦娘に気遣い過ぎるとダメになっちゃうわよ。」

駆逐艦三名と共に、光の輪の中へ入ってゆく。

やさしい音のする、輪の中に。
笑顔に満ちた、戦鬪娘の中に。

CCLXXXVI：なりきりサーキュレーション

雪降る海。

あと一撃。

その瞬間、大本営から新しい派遣の指示が来しました。

『椿姫ジュリアーナ』の着信音からその情報が届いたことを知った私は、瀕死の深海棲艦にとどめの魚雷を喰らわせます。

今の私は心身共に練達熟練の軽巡洋艦。

俯瞰（ふかん）的な視点と主観的視点。

二つの視点で自分自身を眺めるのです。

心身共になりきった今ならば、目の輝きが異なる強力な相手だろうと必殺の技を叩き込めます。

徐々に心が駆逐艦へ戻ってゆき、私は漣（さざなみ）ちゃんに指示があったことを伝えました。

愕然とした表情の彼女。

気持はよくわかります。

この海域には、常時駆逐艦一名しかいないのですから。

毎度毎度突発的に指示が来ることには閉口しますけれども、これでようやくと寝不足の日々から開放されます。

流石に毎日仲良きことを見せつけられるのはうんざりしてくる状況ですから、正直なところ、ホツとしました。

名残惜しそうな彼女に敬礼し、吹雪く海を独り巡航速度で進みます。

気分は、はっやーい駆逐艦です。

南へ、南へ。

はぐれらしき深海の駆逐艦を道々撃破しつつ、暗い海を進みました。

気分は、戦闘妖精な駆逐艦です。

なりきったり、戻ったり。

誰ともわからぬ、駆逐艦。

誰にもなりうる、駆逐艦。

それが、私。

壊れた、私。

いつ駄目になるかわからないまま、様々な場所を巡ります。

途中の夕暮れ、深海棲艦の艦隊に遭遇しました。

通常ならば逃げの一手しかないところですが、幸い私には特殊能力があります。

気持ちを急速に戦艦へと切り替えて、大口径砲の重い攻撃を敵にぶつけました。

私は幻想の巨人に抱き抱えられながら、幻覚の砲弾を敵対者群へ叩きつけます。

驚きの表情で固まったまま、ほとんど無抵抗のまま吹き飛ばされるは白い娘たち。

彼女たちの幻視する姿はおそらく仲間の上位者故に、逆らえる道理がありません。

不憫（ふびん）ではありませんが、これも浮き世の定め。

ならば、沈んでいただきますよう。

あの暗い海の底へ。

なにか起こったのかよくわからないであろうままに、倒されてゆく深海の娘たち。

泡をぶくぶく吐きながら、静かに波間へ消えてゆきました。

私の得たものは呆気ない完全勝利。

それははかない淡雪のようでした。

ダイヤルを動かすように、気持ちを変更してゆきます。

今は合計六チャンネル。

戦時中に民間の商船が多数徴用され、奮闘の挙げ句殆ど沈んだことはなかなか語られませんが。

この静かな海の底には、何隻も何隻も多くの人に知られないまま撃沈された船が存在します。

敵味方関係無く。

しかも、現在進行形でまた船が何隻も何隻も沈んでゆきます。

負の連鎖は断ち切られるのでしょうか？

仮に深海棲艦との戦いに決着がついたとしても、それから人間は互いに手を取り合って生きてゆけるのでしょうか？

壊れた私には、まるでわかりませんが。

やがて、気温が格段に違ってきました。

寒さが薄らいで、暖かく感じられます。

そして、海の色も段々変わってきます。

あの寒々しく、せつなく美しい色から。

海のおいもどんどん違ってきました。

漁業船団と護衛の艦娘たちが見えてきたので、防水仕様の写真機でパチリパチリと撮影します。

気分はとある重巡洋艦です。

広報用の写真に使うのです。

二名の駆逐艦に守られた、日本の漁船群。

近隣の国々の漁船は其々の国の海軍が護衛しているそうですけれども、沈没率も高いのだとか。

艦娘の派遣を要請する声もありますが、現状ではとても無理だと思います。

今の日本に於いてさえ、四大鎮守府と大湊（おおみなと）と函館以外は艦娘の確保に苦心しているのですから。

艦娘のような武装少女を試験運用している国もあるようですが、あまり上手くいってないみたいです。

漣ちゃんや海上でたまに艦装らしきモノの残骸を拾うことがあるそうで、金髪や赤毛やブルネットなどが絡みついていることもあるとか。

処分が面倒なので、発見次第おろしあ軍に提供しているそうです。

そのお陰やらなんやらでおろしあ軍関係者は友好的に振る舞ってくれると、漣ちゃ

んの提督が言っていました。

船上で新鮮な刺身をいただき、津軽海峡冬景色を越えて日本海に面した警備府へ到着します。

駆逐艦一名、提督一人の小さな基地。

民家をほんの少しだけ改造した基地。

日本にはそんな基地が幾つも幾つもあります。

広報用の写真を撮らせてもらいつつ、お手伝いに励（はげ）みます。

お手伝い。

お手伝い。

ちよっこしじれったい感じだったので、秘技を駆使してくつつけちゃいました。

このクピドの矢は誰をも外しません。

一仕事終え、雪降る海を北上します。

そう。

函館鎮守府でちよっこし休暇を取るためです。

谷地頭（やちがしら）温泉に行くのもいいですね。

鎮守府発着の観光バスもありますし、なによりおいしい食事は明日への活力です。誰ともわからぬ私をあたたかく迎えてくれる提督。

貴方に名前を呼ばれるだけで、私の気持はふわふわしてきます。

嗚呼。

貴方が私の提督だったらよかったのに。

温泉で肌艶もよくなり、おいしい食事で気合いも十分高まりました。

大本営からの指示に従って、また新しい派遣先へ向かわねばなりません。それがほんのり残念です。

出立する日の朝。

鈍色（にびいろ）の空が周囲を覆う朝。

さあ、今日も張り切って参りましょう。

気持を塗り替え。

思惑を塗り潰し。

宛の無い今日を、明るくさ迷いながら。

果ての無い明日へなにかを求めながら。

CCLXXXVII：島の提督

「テイトクー！ 南米沿岸はあらかたオチタヨー！ 次はテイトクをオトスヨー！」

「ソコはユズリマセン！」

「シズメ。」

「テイトクはモーツトたよつてくれてイイノヨ！」

「マア、ソウナルナ。」

百戦錬磨の部下たちが特撮さながらの空中戦を始め、辺りは騒然とし始めた。

またか。

どうして、こうなった。

俺は頭を抱える。

あの時、船は沈んだ。

大本営の策略によって。

不要品と断じられたのだ、この俺は。

そして、その時に死ぬ筈だったのだ。

だが、実際はこうして生き恥を思いきりさらしている。

なんとも難儀なことだ。

いや、滑稽なことかな？

部下たちは何故だか白い肌の姿で俺の元に再集結し、今では戦術群を率いる長として自分は祭り上げられている。

もしかして、お飾りじゃないのかな？

「ナニよ、ナンデ、コツチをミナイの？」

「そ、その、ろ、ろ、露出が多すぎて、ですな。」

「チンジュフではヘンタイじみていたジャナイ。」

「な、泣いてもいいですか？」

「ブヒブヒって？」

「信用度第一位だった部下が、いつの間にか大変辛辣になっていた件。」

「フン、コノママじやマケソウだから、イマノウちにチヨウキヨウよ。」

「せ、拙者、鞭とか、三角木馬などは嫌で御座る。」

「ナレルとダンダンカイカンにナルってイウワよ。」

部下たちが、徐々にきつくなってきたている気がする。

気のせいなのかな？

どうにも彼女たちの真意がわかりにくい。

そこへのつしのつしと現れる異形。

通称ワ級と呼ばれる補給艦である。

彼女は統括艦でハイパーエリート。

俺が会った頃は普通の艦だったが。

いつの間にやらどんどん変化していることに当惑する。

彼女は大きなワゴンで旨そうなものを沢山運んできた。

南洋の果実にタルトに珈琲の茶器。

異形はにやりと獰猛そうに笑った。

当人に言わせると、快活な笑みだそうではあるのだが。

赤いリボンを装備した彼女は、可愛い声で話し始めた。

最近、その姿に段々と違和感を覚えなくなりつつある。

「果実盛り合わせにハバナのラム酒とエクアドルのバナナを使ったタルト、日本風プリン、ババロア、間宮羊羹、サヴァラン、それにエルサルバドルの珈琲をどうぞ。ルイボステイラーに自家製レモネードもあります。」

俺の可愛い部下たちがワゴンに群がる。

まるで……いや、止めておこう。

俺とて命は惜しい。

「この中で、補給艦が一番流暢に人間の言葉を喋る件。」

「タワーブリッジ！」

「ノー！ ノー！ ギブアップ！ ギブアップ！ ヘルプミー！」

「テイトクがイチバンヘタレな件。」

その場にいた異形全員が頷いた。

解せぬ。

CCLXXXVIII：オークは多くを語らない

提督たる者

眉目秀麗

成績優秀

弾に中（あた）らぬ処女童貞

ブヒ。

この異世界での潜伏期間が随分長くなったブヒ。

認識障害及び好感度強化のスキルがよく効いているので心配はないブヒが、なんだか微妙な気がする時もあるブヒ。

テイトクとやらに任命された時はどうしようかとも思ったブヒが、案外やれているよ
うな気がしないでもないブヒ。

なんとなく、ボクはこのままでもいいのかと思つてしまふ今日この頃だブヒ。

「おい、提督。今日は演習があるんだから早く服を着ろ。」

一緒に寝ていた娘がバスタオル姿でどついてきて、痛いブヒ。

思わず色っぽい声が出そうになるブヒ。

もぞもぞとベッドの中から他の娘たちが起き上がつてきて、みんなで風呂に入つてゆくブヒ。

「つたく、今日は演習があるつて言つといたのに、なんで昨晚あんなに激しくやるのかなこの提督は。」

ガシガシと激しく頭を掻き回されるブヒ。

やめて、ボクの毛根のライフは低いブヒ。

愛情がこもっているのは感じるブヒが、かなり痛いブヒ。

「お前らも早く上がれよ。」

「「はーい！」」

「提督はファブリーズで充分だな。」

シュツシュツつとぶっかけられたブヒ。

「本当にかけるだなんて酷いブヒ。」

「なに言つてんだ、夜毎散々あんなものをオレたちにかけている癖してよ。」

「そんな風に言われると、とっても恥ずかしいブヒ。」

「照れるな。恥じるな。おったてるな。」

ガシガシ蹴られて、痛い痛い痛い痛い痛い痛い……あつ。

「……てめえ、なに考えてやがる。」

「魅力的だなあ、つて思うブヒよ。」

「さつさと着替えろ！」

演習は完全敗北ブヒ。

しかも一方的だブヒ。

向こうは一名なのに。

ハコダテは強いブヒ。

「まあた、完敗のぼろ負けかよ。」

「見事なくらいの負けっぷりブヒ。」

「ちったあ、気概を持ってよ気概を。」

「この気合いなら常に準備万端ブヒ。」

「バカッ、ぼろりと出すんじゃねえぞ！」

「出すのは、夜だけに決めているブヒ。」

「そういうことを言ってるじゃねえよ！」

「おやー？　なんだかお顔が赤いブヒ。」

「あらあら、楽しそうね、天龍ちゃん。」

「おう、龍田か。今日は負けたが、今度は負けねえからな。」

「わかったわ。ところで、そのたるんだ肉塊を斬り刻む時は教えてね。中華料理の具材にしてもらうから。」

「おう、今すぐやってもいいぞ。」

「ボクの扱いが非常に酷いブヒ！」

「へっ、カンムス・ジョークさ。」

「そうよ、ちよつとした冗談よ。」

「その割には殺気が迸（ほとばし）っていたブヒ。」

「なんせ、こちとらは龍だからな。」

「ドラゴンはコシヨンを食べちゃうのよ。」

「確かに毎晩食べられているブヒ。」

「て、てめえ、なに言ってるやがる！」

「あらあら、仲良しさんのねえ。」

こんなキレイな娘たちを何名も抱えているハコダテのテイトクは、きっと絶倫に違いないブヒ。

へトへトにならない秘訣をちよつと聞いてみるブヒ。

……童貞？

そんなバカな話はないブヒ。

きつと誤魔化しているブヒ。

調べてみる価値はあるブヒ。

異世界のニンゲンの秘密を探るブヒ。

それが、ボクが魔王に至る道だブヒ！

なんちてブヒ。

CCLXXXIX：退役式と三万両

その昔、函館は箱館と称されていた。

明治間もない頃に共和国を樹立しようとした旧幕軍と反乱軍との間で苛烈な戦闘が道南各地にて繰り広げられ、死者を連日生み出した。

五稜郭が反政府勢力……もとい官軍によって陥落した後、敗残兵もしくは落武者が道内各地へ逃亡していった。

そして、榎本武揚の密命を受けた人間たちが彼らに紛れて五稜郭から脱出し、軍資金の三万両を道内のいずこかに運んで埋めたという。

いわゆる、『箱館三万両伝説』である。

これの派生形みたいなものとして、アイヌの黄金伝説とか日本へ亡命したロシア貴族が財産をどこかに埋めたとかなどがある。

まあ、与汰話の一種だろう。

風見鶏の彼は戦後新政府に上手く取り入ったのだし、話に矛盾がある。

小栗上野介による、徳川埋蔵金の如き感じなのだろう。などと思っていたら、大本営から調査役に任ぜられた。どうやら、我らの本陣は余程予算不足らしい。

調査に於ける随伴艦を一体誰にしようかと思っていたら、どこから情報が漏れたのか秘書艦の叢雲（むらくも）から話を振られて講堂へ連行された。

堂内はさほど暖房を入れていない筈なのに何故だか相当な熱気がこもっていて、真冬の道南だというのにけっこうな暑さを覚える程だった。

艦娘やそうでない娘たちに囲まれる。

大規模作戦にでも出撃するかの如し。

なしてさ。

「で、当然、私は一緒なのよね。」

叢雲が口火を切った。

「ええと、まだ思案中なんです。」

「考える程のこともないでしょ。」

「そこはやはり公平性と妥当性と……。」

「なによ、私じゃ不満足なのかしら？」

困ったなあ。

すると。

すい、と輪の中から駆逐艦が現れる。

「ちよつと叢雲。」

「なによ、曙。」

「なんであんたが一緒にイクって決まっているの？」

「夫と一緒にイクのは、妻の当然の役目だからよ。」

「なに言ってるんよ。いつから即席提督があんたの旦那になっているの。」

「添い寝は何度もしているし、体も隅々まで見られているわ。既に妻よ。」

いや、その理屈はおかしい。

すると。

ひよい、と新たな駆逐艦が輪の中から現れる。

「その理論でいくと、私たち全員がなんちゃって司令官の妻よね。」

「霞？」

「つまり、全員が司令官とイクってことになるのかしら？」

索敵なら空母系だろうとかいざという時の火力ならば戦艦系だろうとか、小回りの効く駆逐艦は必須とか巡洋艦も忘れないでくださいとか意見百出して一向にまとまる気

配を見せない。

うーん。

結局、道内の放送局や雑誌社を巻き込んでのやや大掛かりな調査隊が編成されることと相成った。

気分は遠足である。

結果から先に言うと、調査は失敗に終わった。

文献や古老の話や言い伝えや曖昧極まる伝承などに基づいて、事前調査は出来得る限り詳しく行つた。

元深海棲艦を含む空母系艦娘たちの全面的な協力もあつたし、皆丹念且つ精力的に調べ回つてくれた。

だがしかし。

第五次調査隊まで組んで鎮守府所属の各員と順々に出かけたのだが、それらはすべて空振りになつてしまった。

……………。

まあ、現実はこのものだろう。

自分自身を艦娘だと思ひ込んでいる女の子たちに対する最後の任務がこれだったの

は微妙かもしれないけど、全員でなにかを行う意義はわかってくれたんじゃないかと考
える。

この半年間で海洋訓練を含む様々な取り組みに積極的だった彼女たち。

擦り傷軽傷は日常茶飯事だったが、死者も重傷も重体もなく過ごせた。

それは実に稀有（けう）な僥倖（ぎようこう）だったのだと思われた。

『艦娘』から『普通の女の子』に戻るための、長い長い儀式だったな。

『解体』を経て『退役』し、社会へ出る彼女たちに幸多からんことを。

卒業式……もとい、退役式に彼女たちへ直接証書を授与し、そして、『艦娘』でなくなっ
た少女たちは親元へ帰っていった。

C C X C : 提督、東洋一のマンモス港へ

半世紀ほど昔、東洋一のマンモス港で巨大化した恒点観測員と巨大人型決戦兵器たる大型ロボットが死闘を演じた。

地元の新聞社と放送局が決死の思いで撮影した写真や映像資料及び丹念緻密に書かれた記事により、その苦戦と激闘の様が今の世に伝えられている。

どちらにも相当の数寄者がいたらしく、呆れる程に詳細な記録が残されていた。

或いは、執念か。

それとも執着か。

地球から発射した観測用ロケットを、発見した異星人側から侵略の一環と勘違いされたことがそもそもの端緒だった。

三宮駅からさほど離れていない場所での戦いは市街地を非常に震わせたが、神戸市民たちによる応援が赤い巨人を大いに勇気づけたという。

女性科学者の作り出した超電磁破壊弾と直後に恒点観測員の繰り出した宇宙ブーメランがとどめとなって、戦闘ロボットは見事撃破された。

ロボット工学の権威たる彼女が生み出したのは、電子制御を狂わせる電磁波放射型兵器。

摩耶埠頭から名狙撃手が過（あやま）たず射ち放ったのは、敵対者を打ち砕く必殺の弾。

内部が自壊してゆく中でそれでも破壊活動を継続しようとした人型兵器に対し、宇宙ブーメランを手に持ち何度も何度も叩きつけた真紅の超人。

宇宙人と地球人との連携攻撃により、銀色のロボットは神戸の海へ沈んでいった。

轟沈してゆく弩級戦艦のように。

それはまさに、夕日の中の決闘。

彼の勇姿は、新聞の号外と翌日朝刊並びに当日夕方のニュースと翌朝の報道番組で大きく取り上げられた。

また、地味に活躍した警務隊も取材された結果としての囲み記事があり、それらは大変貴重な資料である。

ちなみに巨大兵器の沈没地点だが、新港東埠頭とポートアイランドとの中間付近だといふ。

当時の貴重な記録映像と関係者の証言を元に、研究者が場所を特定したのだそう。

新設する博物館で常設展示するため、かの巨人の残骸を引き上げることが兵庫県議

会で可決された。

メトロン星人に聞いてみたところ、その破壊兵器を送った星の方では特に問題になっていないようだ。

本当かなあ？

かつてウルトラ警務隊で使われていたポインターの複製品であろう車に乗り、私たちは函館から神戸へ向かう。

それは時折滑空したり海を飛んだりしながら、目的地へとひた走る。

よく出来ているなあ。

ウルトラ警務隊の制服の複製品もよく出来ていて、運転を担当する少女によく似合っていた。

メトロン星人が何気にいろいろな手助けしてくれるのも、大変ありがたい。目立たないからという理由で、彼は冴えないおっさん仕様な姿であった。

メトロン印の船で移動する艦娘たちは、なんだか不機嫌に見える感じだ。

まあ、お仕事だからな。

貧乏クジだが仕方ない。

我慢や、我慢。

潜水艦系艦娘たちが、回収業務のために神戸の海へと次々に潜ってゆく。空は青色。

なにもものにも囚われない、そんな青。

風は強く、函館ほどではないが寒い。

海上自衛隊や民間船の協力を得ながら、部品をどんどん拾い集めてゆく。

埠頭付近に建てた屋台では霞がおにぎりを握り、龍驤がたこ焼きを作り、大鷹が豚汁をこさえ、見物客や観光客にどんどん売っている。

メトロン星人はというと、ホルモンを焼いてはばんばん売っていた。

ねじり鉢巻がよく似合う。

私は灘の造り酒屋から貰った酒粕を用い、甘酒作りに勤（いそ）しんだ。疲弊した艦娘たちへのねぎらいとして。

なんちやって提督の出来る、ほんの小さなこととして。

地元新聞社や放送局の取材を受けつつ、炊き出しめいたことをしてゆく。但馬牛の低温殺菌牛乳を飲みつつ、じっくりと甘酒作りに邁進してゆく。

稀少な潜水艦系艦娘は海域解放に向けての重要な戦力だと思っただけで、こうした文

化活動や地域振興のために尽力することこそ民意の安定化の必須事項なのだと大本營のお偉いさんはのたまったのだ。

彼らは変なことばかり力説するものだ。

寄附金の期待も大きいように見えるが。

なんとも気軽におっしゃってくださる。

自身の手は一切汚そうともしない癖に。

手を汚すのは他者で充分というところか。

重すぎて引き上げられないモノは断念してもらおうとしたが、ここで政府の高官やら大企業のなんちゃらやらがいきつたことを言い出して少し面倒なことになった。

余計な嘴（くちばし）を挟んできて、大変困るなあ。

そんなに引き上げたかったら、自分たちでやんなよ。

ところで大淀さんや。

先程出掛けたようですがのう。

眼鏡のフレームに赤黒い点が幾つか付いているのだけど、それはなんじゃらほい？

潜水艦系艦娘たちが休憩を終え、真冬の海へ飛び込んでゆく。

幸い、甘酒が好評でよかった。

特別純米酒の酒粕と奄美大島のザラメと高知の生姜と赤穂の塩の組み合わせは、彼女たちに力を与えたようだ。

無邪気に抱きついてこられると少し困るのだけれど、あまり気にしないようにするのが肝心だ。

手伝ってくれる重巡姉妹が気軽にべたべた触ってくるのも、ちよつこし気になる点ではあるな。

うちの子たちの安全装置は案外外れやすいし。

「ちよつとした提案があるんだ。」

そろそろ本日の作業も終わりに近づいた時刻。

メトロン星人が、にこやかに話しかけてきた。

「どうせそれは、ろくでもない内容なんですよ。」

「酷いな、君は。私のことをなんだと思っているんだい？」

「かつて地球を侵略しようとした、悪い宇宙人ですよ。」

「それは昔の話だし、倒されたのは私と異なる存在だよ。」

「本当に？」

「本当さ。」

「で、なにを私にさせたいんです?」

「なに、とても簡単なことだ。」

色濃い夕暮れの中、彼はなんでもないことのように気軽に言った。

「君が二代目にならないかい? この地球を守る守護者として。」

CCXCI：厄介な捕虜

夕陽を受けた波間に沈みゆくのは深海棲艦たち。

呪詛（じゅそ）、もしくはは怨み悲しみ嘆き哄笑（こうしよう）を吐き散らしながら彼女たちは海の底へと没してゆく。

駆逐級も、鬼級も、姫級さえも。

皆等しくミナモトへ帰ってゆく。

苦闘は終わりを告げたのだ。

この海域は完全解放された。

横須賀呉舞鶴佐世保の合同作戦による連合艦隊の苦労が、結果としてようやく結実したのだ。

海上自衛隊の艦艇に回収され、人心地つく戦士たち。

艦装を外して傷だらけの身体。

それは誉れ。

勇気の証だ。

満身創痍な者さえ存在していて、そういった娘は入渠設備で身体を癒していた。また、函館や大湊（おおみなと）などの艦娘が艦艇群の周辺で警戒態勢にある。後は帰るだけ。

あの人の待つ、箱庭に戻るだけ。

それぞれの船内の大広間では、艦娘百景が出現していた。

男子禁制の女の園。

ジャージやパジャマなどに着替えた娘もちらほらという。

お喋りに興じる娘。

だらだらとする娘。

トランプで遊ぶ娘。

おやつを食べる娘。

仲間に密着する娘。

提督を罵倒する娘。

それをなだめる娘。

ツンデレ無双な娘。

エッチな話に花を咲かせる娘。

何故か鼻からオイル漏れしている娘。

提督に思いを馳せる娘。

湿った恋文は思い悩んだ気持ちの表れ。

提督との夜を思い出す娘。

こつそりと手洗い場に向かう娘。

提督になにかを期待する娘。

ひたすらぐーすか眠る娘。

戦闘日報を詳細に書いている娘。

ちっこい妖精たちは、彼女たちより更に自由奔放にその周辺を駆け回ったり跳ねたり

遊んだりしていた。

その中に一名、白い娘がいる。

あきつ丸ではない。

伯爵でもない。

捕虜だった。

厄介極まる。

そんな存在。

投降した敵。

降伏したからには、処刑する訳にもいかない。

騙し討ちなど言語道断。

苦々しい気持ちになりながらも、受け入れねばならなかった。

ちらちらと彼女を見る娘もいれば、敢えて無視する娘もいる。

憎しみの目で睨み付ける娘もいた。

そんな少女の周辺でも、お構い無しに妖精たちがはしゃいでいる。

そして、夜は更けてゆく。

投降したのは、艦娘にどことなく似通った深海棲艦。

駆逐艦めいた姫級。

無傷の状態で彼女は白旗を上げ、彼女以外は逃亡するか海の藻屑と化した。

作戦終了前に虜囚になることを選んだ彼女は、或いは殿軍（しんがり）だったのかも
しれない。

彼女への対応を慎重にしたことが、結果的に深海棲艦が逃げてゆく状況を生み出した
のだから。

追撃や殲滅（せんめつ）の機会を失ったとも言える。

美しき捕虜と共に熱い素うどんをすすりながら、艦娘たちは複雑な思いに囚われるの

であつた。

差し入れられた函館間宮謹製の羊羹に舌鼓を打ち鳴らし、艦娘たちは惑いの夜を過ごしてゆく。

今度の休暇は北の港町で取ろうと、ウルトラの星に誓う艦娘が続出したのは当然かもしれない。

呉にいる先輩が作戦終了に伴つて配下や配下でない艦娘たちを連れて函館へやつて来たのは、吹雪の激しい朝のことだった。

あ、吹雪といつても自然現象の方である。

お間違えなきよう。

先日の作戦に参加した艦娘の多くがここへやつて来たかに見える。全員に自作の甘酒と富山は氷見（ひみ）産のはと麦茶を振る舞う。ホツと一息する一行。

今の寒い時期は、最高気温が氷点下のことも少なくなからなあ。最低気温マイナス八度、最高気温マイナス三度、という日もある。

見慣れない艦娘がいた。

新規に建造された子か？

それとも、海域回収（ドロップ）した子かな？

主に駆逐艦たちにまとわりつかれながら、甘酒を振る舞ってゆく。

キミたちがギユツと抱きついてきたら非常に苦しいから、程々にしてくんなまし。

さつきから、あばら骨がミシミシ鳴っているザンス。

武蔵さんや。

おじさんを背中から抱き締めるもんじやありません。

「可愛い後輩に頼みがあるんじや。」

隣に鳳翔を伴った先輩が話しかけてきた。

ニタニタしている。

これは無茶振りの予兆だ。

「いつもの無茶苦茶なアレでなかったら、喜んで。」

「なんも無理じゃねえけえ、心配はいらんのじや。」

本当かなあ？

「あそこの娘を函館で預かってくれるだけでええんじや。」

肌の白い娘が一名、ぼつんと立ち尽くしたままこちらをじつと見つめている。

どうも、悪い子ではなさそうだ。

「いいですよ。」

「そうか。これでワシの肩の荷も降りるゆうもんじゃわ。」

「そんな、大袈裟な。」

「ある意味、函館に向いとる娘じゃろうな。のう、鳳翔。」

「はい、あなた。」

兩名とも、ニコニコしている。

彼女、最新艦娘じゃないのか？

なにかが心の中で引つ掛かる。

………まつ、いつか。

半世紀ほど昔、恒点観測員が地球に於いて死闘を何度も何度も繰り返した。

その迫力ある姿を撮影した人たちが何人もいた。

重傷者や時には死者も出たそうだが、はかなくなっても彼らは写真機やビデオカメラを強く抱き締めていたという。

そんな彼の度重なる戦いを撮影した映像の集大成たる、大容量光記録媒体を先日入手した。

そしてその鑑賞会を、鎮守府の講堂で催すことになった。

実録映像には淡々とした進行的語り付き。

分厚い資料集や写真集まで附録にあつた。

このご時世に豪気なことだ。

映像の初っぱなは神戸に於ける激戦で、当時を知る人たちへの取材と実録映像が交互に画面へ現れる。

その後も鬼気迫る戦いが映し出された。

侵略者を倒すために奮闘する赤い巨人。

傷つきながらも、けして戦うことを止めない真の闘士。

額のカラーランプから放たれるは、緑色の光線。

敵対者を必ず討ち果たすための宇宙ブーメラン。

そうした超兵器を幾つも駆使しつつ、彼は警務隊や自衛隊などと共に地球の平和のため尽力する。

それが、宇宙から訪れた勇者。

不屈の闘志を備えた光の戦士。

彼自身が戦えない時に代役として獅子奮迅の戦いを繰り広げた、使役怪獣も忘れてはいけない。

野牛の戦士。

金属の戦士。

俊足の戦士。

倒れても倒れても、何度も立ち上がって戦う光の戦士。
傷つき、苦しみながらも敵と戦い続けるのを諦めない。

自然と沸き起こる拍手。

万雷の拍手。

鳴り止まぬまま、やがて鑑賞会は盛況の内に幕を閉じた。

夜更け。

明日に向けての仕込みに入ろうとしたら、厨房に灯りがともっていた。

誰もいない筈なのに。

出入口の下を見やる。

張っておいた糸は切れていた。

少なくともうちの子じゃない。

念のため、腰に装備した半自動式拳銃の撃鉄をハーフコックにし、素早く射てるように準備した。

高速型九ミリパラベラムなら、そこそこの防弾チョッキも貫けるだろう。

弾頭の先端に超硬質合金の被膜と呪印が施されている、対魔戦闘武器だ。

めっちゃ高い弾丸なんで、なるべく使うなって言われているんだけどな。擬似オリハルコンとかヒイロカネなどと言っているが、眉唾物な感じ。賊でないことを祈るばかりだ。射撃はあまり得意じゃないし。と。

煮炊きの匂いが鼻をくすぐる。

どうやら、夜食を作っているみたいだ。

作業員とかそういう類ではないようだ。

鼻歌が聞こえてくる。

イエイシヤンか。

懐かしの曲だな。

厨房に入ると、振り向いた娘が一瞬の驚きの後に満面の笑みを浮かべる。拳銃を構えたまま入らなくてよかった。

菜っ葉のおむすび及び大根と菜っ葉のおみおつけが眼前に運び込まれた。

葡萄酒色のセーターに辛子色の洋風前掛けといった姿の、白い新着艦娘。

髪は栗色、長い二房のお下げ。

震える胸は豊穡のアヴァロン。

なんてな。

「ぎこちない敬礼をしながら、肌のやたら白い娘ははにかむように言った。

「ワタシ、さつきまでテイトクさんのヤシヨクを作っていました。」

「それはありがたいことです。」

「アサシオ型駆逐艦のミネグモ、粉骨碎身のカクゴでテイトクさんのリヨウリを作つていきますね。」

料理好きというだけあって、彼女の手料理はなかなか旨かった。

C C X C II : 暗黒少年丸山式

丸山君は函館在住の中学三年生。

今春には高校一年生になります。

たまに自称暗黒少年になります。

妹と共に世界征服を夢見ました。

最近妹はオシヤレに邁進中です。

兄妹の仲も変化しつつあります。

団地で父母妹と一緒の生活です。

団地妻に大興奮する男の子です。

丸山克弥君は近所のエロエロな鍛蜜お姉さんと大人の階段を昇りかけては、いつもい

つも失敗しています。

なんとか一緒にお風呂に入るのは出来るのですけれども、そこから先がなかなか思

うようにいきません。

少年の夢は、今も提督になって沢山の艦娘たちとケツコンすることです。函館鎮守府に行つてから、更に提督になりたくてたまらなくなりました。たまにあることですね。

がんばれ、丸山克弥君。

妄想するのは、誰でも自由に出来得る行為だし。

丸山君が入学するのは元女子高だった学校です。

今年から、男子も入学出来ることになりました。

比率はおよそ九対一。

ハーレムだなんて、彼は思いもしません。

だって、ハーレムを構築するのは提督になつてからと決めていますから。

女の子たちから頻繁に話かけられ、どつきんばくばくする未来が発生するだなんて

彼は想像すらしていないでしょう。

風の強いある日。

雪がちらつく程度の、最高気温が氷点下二度か摂氏零度くらいの午後。

函館市役所では、北海道主催の妖精検査が行われています。

やや薄暗い屋内で、丸山君は他の受診者を素早く見つめました。

スカウター・オン!

マルヤマ・アイの発動です。

すべての悪を見通せる力があると、何故だか丸山君が信じている眼力。信じる者は救われる。

丸山君がじーっと見たところ、悪い人はいないみたいです。見た目だけだったら、悪い人はわかりにくいですけどね。本当に悪い人は、やさしい顔をしてけっして怒鳴りません。嘘つきや悪党変態は、ちよつと見にはわからないものです。気をつけてね、丸山君。

後方防御も大切ですよ。

さあ、いよいよ丸山君の番が来ました。

どきどきばくばくと心臓が轟きました。

「おいは恥ずかしか。」

何故か、チエストな感じで彼は眩きます。

まだ、誤チエストにはなっていないですよ。

「あちらは最強、四大鎮守府艦娘赤備え。相手にとって不足なし。命捨てがまるは今

ぞ。」

独り呟いて、彼は扉を睨み付けます。

さあ、ここが丸山君の正念場ですね。

「こゝいは合戦ぞ。首の掻き合いに道理なぞあらんど。使える手えば何でん叩つ込まねば、相手に申し訳ばなかど。」

何故か薩摩言葉を独りごちながら、少年は重厚な扉に手をかけます。

はてさて、その先にはいつたいなにが待ち受けているのでしようか。

「くくく、この右手に封印されし暗黒の呪法が解放を求めてうずいているぞ。左目の邪眼が開かないように第三までの封印を強化しないと。テクマクマヤコン、テクマクマヤコン。」

かちやり。

かくて運命の扉は開かれました。

C C X C III : 早春のローマ

私の名はローマ。

誇り高きイタリアの戦艦の名を冠した艦娘。

今は隣で眠る私のアドミラルの顔をじっと眺めながら、朝が訪れるのを待っている。私同様に反対側で添い寝する航空戦艦が、マリートを観察するように見つめていた。両手に花なのに、手を出さないだなんて勿体ないわ。

ハコダテの戦力強化のために配属された私たちだが、実戦の機会はさほど多くない。普段はナガトやセンカンセイキなどと手合わせするくらいが関の山。

先日の大型作戦でも、四大鎮守府に所属する子たちの打ち漏らした深海棲艦を幾らか討ち果たしたくらいだ。

投降したモノもいて、それはオオヨドが引き受けていた。

我々が撃った砲弾はそんなにない。

本来の能力が活かしきれていない。

しかしながら。

オタルにいた頃よりは戦えている。

そうなんだけど、不満はくすぶる。

もどかしい思いが常に燃えていた。

マリートが私の炎を消してくれたらいいのだけど、そうはしてくれない。

もつとパツシヨーンに生きてもいいのに。

アモーレ、マーシヤルアーツ、ガンダム。

……間違えたわ。

アモーレ、マンジャール、カンターレ。

この世は愛し、食べ、歌うことが大切。

今宵もまた愛の歌をうたうしかないわ。

百万本のバラを今夜も鮮やかに咲かせましょうか。

この声がいつかこのボクネンジンに届くと信じて。

起床時間にはまだ間がある。

彼女と共に、彼を眺めよう。

投降という形を取ったり、ロシア艦という形を取ったりした深海棲艦たちがハコダテ

に何名も所属している。

艦娘に偽装する子さえた。

彼女たちが、あの人を裏切るだなんてことは考えにくい。

彼をお持ち帰りしそうな子は、ちらほら見かけるけれど。

彼女たちはアドミラルに引っ付いてはべたべた触り、時折鼻とかそうでないところからオイル漏れしている。

床を拭く身にもなつて欲しいわね。

ただまあ、直接触っちゃいけない部分に関しては淑女協定をきちんと守っているみたいだ。

それが救いと言えば、そうなのかもしれない。

まあ、艦娘でもオイル漏れることはしばしばあるし、アドミラル自らひっそり拭き掃除しているので大きな問題には至っていない。

彼はこのことをどう思っているのかしら？

あと、アドミラルの私室の手洗い場にちよつとばかり籠る子がたまにいる。困ったものだ。

風が冷たい。

ソウシユンフという曲を何日か前にアドミラルが歌っていたけれども、この北の国では春の訪れがまだまだだという感じだ。

プリマヴェエーラ。

祖国での春の名。

それはまだ遠い。

ヒサメが容赦なく、冷たく肌に吹きつけてくる。

ハコダテは風の強い街だ。

この街に負けないように、彼ヘテンペスタを巻き起こさないかね。

強い、なにもものにも負けないそれを。

マリートを狙っている子は結構多い。

だけど、負けたり譲ったりするつもりなんてみじんもないわ。

戦争が終わった後、彼と愛の巣で毎日一緒にうたうんだから。

逃がさないわよ。

C C X C V : 深海棲艦は提督とのケツコンカツコカリを
夢見るか

「キメタワ。」

元仲魔の残せしウスイホンを読んでいた彼女は決心した。

必ず、かのエロくて暴虐なまでにむにやむにやな提督と結ばねばならぬと決意した。

「ワタシ、テイトクとケツコンカツコカリスルワ。」

彼女には艦娘がわからぬ。

彼女は深海の戦士である。

敵対者に砲弾を放ち、イ級と遊んで暮らしてきた。

けれども異性に対しては、人一倍に敏感であった。

「サア、ステキなテイトクがワタシをマツテイルワ。」

本日未明に彼女は拠点を進発し、波濤（はとう）を越え海域越え、遠く離れたこの函館市にやって来た。

彼女には父のような相手も、母のように思う相手もない。
ちなみに、旦那もない。

内気な人型深海棲艦と二名で辺境の拠点を守ってきた。

この娘は既に拠点を離れ、或る律儀なテイトクを陥落せしめて既にケツコンしているという。

彼女には竹馬の友があつた。

今は函館に住む戦艦棲姫だ。

その友に、彼女はよさそうなテイトクを紹介してもらうつもりなのだ。

「残念だけど、私の提督を含めて誰も紹介出来ないわ。」

戦艦棲姫は冷静な声でそう言った。

「なぜ、シヨウカイデキナイノ？」

「貴女は、深海棲艦としての癖が強すぎるからよ。」

「エツ？」

「提督とエロい関係になることだけを考える子に、あの人を紹介なんて出来ないわ。ましてや、薄い本だけの知識で動くような子にはね。」

それを聞いて、彼女は激怒した。

「ナンテコト！ ワタシはタダ、テイトクとケツコンシタイダケナノニ！」

彼女は、ケツコンカツコカリを単純に考えていた。

結局、海沿いで提督を探すべく飛び出していった。

より艦娘つぼく見せかける姿にでもらった後で。

礼を言つて勇んで発進した彼女は、程なく巡視していた大湊（おおみなと）の艦娘に捕まつてしまった。

たちまち手早く調べられ、彼女の懐中からはウスイホンが出てきたので、騒ぎが大きくなつてしまった。

彼女は、大湊の提督の前に引き出された。

「君はこの薄い本で、一体なにをするつもりだったのかね？」

やや背が低く小太りで眼鏡をかけた彼は、静かにされど威厳をもつて問いただした。

「テイトクとケツコンカツコカリスルノ。」

彼女はなんら悪びれもせず、そう答えた。

「君がかね？」

提督は苦笑いした。

「君には、提督の孤独がわかるまい。」

「ソナナコト、イツチャダメナノヨ！」

彼女はいきり立つて反駁（はんぱく）した。

「オンナのコイゴコロをウタガウノハ、モットモハズベキアクトクヨ！」

「恋心？ 君が？」

「ナニカモンクデモアルノ？」

「人の心とは、あまり当てにならないものだよ。人間は元々私欲の塊さ。」

提督は落ち着いて呟き、そしてにやりと嗤（わら）った。

「ソレデモ、ワタシはテイトクとケツコンカツコカリスルノ。」

その異様な気配に内心怯えつつも、彼女はキリッとした顔で言った。

それを聞いて、提督はそつと微笑む。

「では、行つてみるといい。君を受け入れてくれる男がいるといいのだがね。」

「キット、イルワヨ。」

「では、この通行手形カツコカリを発行してあげよう。但し、こいつは三日間限定だから

気をつけたまえ。」

「オンニキルワ。」

彼女は推進機を吹かし、すぐに出発した。

早春、満天の星の中。

彼女は一睡もせず、沿岸部を急ぎに急いで駆け抜け、提督を見つげんと欲（ほつ）し

た。

陽は既に高く昇っているが、海沿いの人家は大抵人の気配すらないか、どこかしら崩れているか、窓ガラスが割れたままになっている。

男は、一切見えない。

提督はどこにいるの？

漁港のある場所には必ず一名かそれ以上の艦娘がいて、彼女を容赦なく追い払った。中には、「私の司令官は絶対、絶対にあげないんだからね！」と怒鳴る娘さえいた。

彼女がかつての仲間である深海棲艦の元に辿り着いた時、その元仲間の娘は疲労困憊（ひろうちこんぱい）した彼女の姿を見て驚いた。

そうして、彼女に質問を幾つも浴びせた。

「ナンデモナイワ。」

彼女は無理に笑おうと努めた。

「なんでもなくは見えないわ。」

カラムスになんともなく見えないでもない元仲間は、すぐにやり返した。

「ワタシのテイトクをサガシニキタノ。ジカンがナイカラ、マタスグニシユツパツシナクテハナラナイノヨ。」

そう言いつつも彼女は間もなく民家改造型基地の応接間の床に倒れ伏し、深い深い眠りに落ちてしまった。

目覚めたのは夜更けだった。

彼女は起きてすぐ、そばにいた元仲間の夫へ話しかけて未婚の提督を紹介して欲しいと頼んだ。

その提督は驚き、それはいけない、こちらには未だなんの支度も出来ていない、春の人事異動の季節まで待つてくれと答えた。

彼女は待つことなど出来ぬ、どうかすぐに教えて欲しいと懇願した。

律儀な提督も頑強であった。

なかなか承諾してくれない。

夜明けまで議論を続け、やっと、どうにか彼をなだめすかして説き伏せた。

彼女はひた走る。

明けゆく海原を。

紹介された基地の近くへ着いた頃、黒雲が空を覆ってぽつりぽつりと雨が降りだした。

やがてそれは大雨となったので、彼女はなにやら不吉なものを感じないでもなかった。

それでも気持ちを引き締めて、小声で歌をうたいながらその基地前へと進んでいった。

呼び鈴を鳴らす。

間もなく、寝起きらしい中年男が彼女の眼前に現れた。

炊きたてのご飯のにおいがする。

おみおつけのかおりもしてきた。

それは生活の証。

生きている証だ。

その男からは酷く不器用な感じを受けた。

背はさほど高くなく、ぶっちゃけ男前な感じでもない。

腹は出ていないが、体が引き締まっている訳でもない。

民間出身の提督であることは明らかだ。

平々凡々な雰囲気の中年男性であった。

だが出会った瞬間、彼女は心臓をズッキューンと撃ち抜かれたかに思えた。

一生、このままここにいたいときえ思い込んだ。

このよき人と生涯暮らしていきたいと願う程だ。

ずぶ濡れになった彼女は、ケツコンを決意する。

と、その時。

家の奥からなにやらかそけき音が聞こえてきた。

C C X C V : 北の海から

先端がいびつに欠けて中程からぐにやりと曲がった戦鎚（メイス）には、敵さんの肉片やら血痕やら装甲の破片などが幾つもこびりついていてる。

遭遇戦の可能性がある以上、こうした状態の武器であろうと捨てる訳にはいかない。細い細い命綱だ。

壊れかけの駆逐艦が倒せるのは、同格の駆逐艦くらいだろうけど。

俺らの装備する豆鉄砲じゃ、奴らには大して効かないんだよなあ。

もし不意を突かれたら、マジやばい。

砲も魚雷も既になく、服はぼろぼろ。

帰巢本能なんて便利な能力もないままに、ひたすら母港を目指す。

必ず警備府に辿り着けるさ、と根拠なき自信にもたれかかりつつ。

空は暗く、雪が舞い散っていた。

孤独感の溢れる帰り道だからか、余計に寒さを感じる。

志願して艦娘になった俺を、凍気が蝕んでいくようだ。

艦装との連携によって体を保護する電磁力だかオーラなんたらみたいな防護膜だかなん다가発生し、海上での寒さ暑さはかなり軽減される筈なのにな。

艦装の力か、妖精の力が衰えているのか？

単装砲は撃つてもなかなか当たらず、当たっても当たり処が悪いのか弾かれることも多く、撃つた隙を突かれて撃破される僚艦さえ何名もいた。

白い悪魔に立ち向かう、緑の量産型みたいにも感じられる。

魚雷も意外と当たらず、近接戦闘で奴らの艦装の隙間に捻（ねじ）り込んでようやく致命打を与えることが出来た程度だ。

発射管の手入れが悪かったのか、魚雷が不発となったために敵さんの砲撃で発射管ごと爆破されて沈んだ僚艦さえいた。

左手に構えていた複合素材製の楯は、先程の敵駆逐艦との戦闘時に半壊したのをぶつけて互いに海の底へ沈んでいった。

行きは四艦隊だったが、乱戦の結果、今の周囲には俺しかいないみたいだ。

戦闘時に周りに気を配る余裕なんて、まったくちつとも有りはしなかった。

あいつらとはどこかではぐれているのかもしれないが、電探が壊れてしまった現状で探す手立ては存在しない。

にわか編成の即席艦隊だったが、それなりに連携は取れていたんじゃないかと思つてみたりする。

駆逐艦ばかりだったのは残念だったが。

運がよければ、また出会えるだろうさ。

おそらく。

暗い海面をひたすら進んだ。

陸地の一部すらも見えない。

ここはどこら辺なんだろう？

太陽が見えたら、まだよかつたのに。

所持していた方位磁石も防水地図も、何処かへ吹き飛ばされたらしい。

艦装の一部が乱戦時に破壊され、燃料はまだなんとか大丈夫だけど戦闘糧食を含むこまごまとした物品が海の藻屑と消えていった。

これは何気にきつい。

嗚呼、腹減つたなあ。

函館で中華粥を食べたいなあ。

間宮羊羹、フレンチトースト。

絶品の料理の数々を思い出す。

帰ったら絶対食べに行くんだ！

絶対！

絶対にだ！

海上自衛隊の艦船が見えない。

友軍も欠片もなにも見えない。

こつちじやなかったのか？

集合場所を間違えたのか？

……。

俺が間違えただけなのか？

ほんとは………いや、そんなことは考えないようにしよう。

周りを見渡すが、なにも見えない。

今、俺は一体どこにいるんだ？

閉塞感だらけの社会にうんざりして艦娘になつてはみたものの、俺同様の境遇の司令官が上司で苦笑いする羽目に陥つた。

そして、互いの自己紹介では思わず一緒に笑つてしまった。

童貞、独身、おっさん、旅好き。

共通項は他にあるかもしれない。

あいつは実際、いい奴だ。

あんまし賢くないけどな。

俺もさほど賢くはないな。

賢くない同士でやってかないと。

ぼろっつい民家改造型基地でもう一名の駆逐艦と合わせて三名で、どうにかこうにか遣り繰りしている。

帰るんだ。

帰るんだ。

俺は絶対、あの微妙に傷を舐め合うぬるま湯めいた空気のセカイへ戻るんだ。

先のこととはみんな先送りだ。

今出来ることを精一杯やる。

それしか出来る訳ないんだ。

ちっ！

敵か！

殺つてやるぜ！

敵駆逐艦を苦戦の末にどうにか撃破する。

結果、手が右側しかなくなつてしまつた。

足回りがやられていないのでまだ大丈夫。

戦意がみなぎっているうちはまだ大丈夫。

入渠すれば治るんだが、司令官はこの姿を見てまた泣くんだらうな。

あいつ、すぐに泣くんだ。

泣き虫め。

いい年のおっさんの癖に。

提督稼業をやるんだつたら、もつとどつしりと構えろよな。

正規の艦娘だつたら、俺が喰らつたような攻撃なんぞ平氣の平左なんだと思う。

いいよなー、あいつらは。

しつかし、敵を倒したら稀に艦娘がその沈没場所から浮き上がってくるって聞くけど

よ、そんなん見たことないぞ。

都市伝説なんじゃねえの、それ？

ええと、確か、海域回収（ドロップ）って言うんだっけか。

そんなんが今ここにいたら、こちとらを護衛してもらうつてのによ。

相方がいつもの哨戒任務でよかったのかもしれないと思う。

こんなにハードな状況には耐えられないだろうさ、あの引つ込み思案な性格のものにはな。

この作戦に参加したなんちゃって艦娘は、ほぼいなくなっちゃったみたいだし。

露払いが本来の機能を發揮出来てねえ。

俺たちや、ほんと、使い捨ての存在だ。

ガラの悪い奴から順に、最前線送りに行っているという噂まである。

案外、ほんとのことかもしれないな。

派遣を先遣隊で使い潰して正規がその後満を持して颯爽と登場し、守りが薄くなった敵さんを押し潰すつて寸法か。

ま、真実なんて戦後かなり経ってからわかるんだろうさ。

ところで、四大鎮守府の連中は戦場のどこにいるのかね？

一度たりとて会ったことなんてないぞ。

一度くらいはお会いしたいもんだがな。

ん？

ちつ、またまた駆逐艦か。

殺つてやろうじゃないか！

なめんなよ！

往生せいや！

ふっ、ふははは！

俺は！

俺は！

死んでいないぞ！

くくく。

帰るぞ！

帰るぞ！

絶対、絶対に基地へ帰るぞ！

よし、あつちだ！

あつちへ向かえば、帰れるに違いない！

戻るぞ！

戻るぞ！

死ぬもんか！

そうさ！

死んでたまるもんか！

CCXCVI：猫のなかのカナリア

深海棲艦とは一体なんだろう？

見目麗しき異形の美女美少女。

そうでない駆逐艦もいるけど。

人類を脅かす存在と言われているが、我々を滅するつもりならば何故原子力発電所を攻撃しない？

海洋汚染をおそれているのだろうか？

何故、各国大都市へ空爆を行わない？

人類を滅ぼすことが主目的ではない？

なんとも不可解な出来事が多すぎる。

彼女たちにも様々な派閥があるらしく、函館鎮守府へ投降した個体が幾名もいるようにどうやら一枚岩ではないみたいだ。

しかし、函館の翔鶴がヲ級の扮装をした時の姿には驚いた。

彼女はまるで、深海棲艦そのものみたいに見えてしまった。

海防艦みたいになっちゃなロシア艦のアリョーシャの扮装は北方棲姫みたいに見え
たし、空母のキエフの扮装は空母棲姫そっくりに見えた。

世の中、なんとも不思議なことがあるものだ。

広報の撮影した宣伝映像は迫力満点だったが、確かにあした扮装が出来るのならば
如何様なものでも撮れるから便利だろう。

大本営発表も容易だろうし。

……まさか……いやいや……考えすぎか。

先の作戦に於いて呉の提督群に欠員が出たとかで、大本営で書類作業と後方支援など
に従事していた私は繰り上げ当選みたいな感じで呉鎮守府への着任が決定した。

担当していた艦娘乙種たちに送別会をしてもらい、乱痴気騒ぎで生まれたままの姿に
なつて暴れ回る彼らを生暖かく見つめる。

中身がおっさんだとわかっているから落ち着いていられるが、この店は今後出入り禁
止になるだろうな。

料理が旨い店なのに残念だ。

明らかに彼らは呑み過ぎだとは思ったが、出陣前の高揚感をわざわざ損ねることもな

いと思つた。

向こうでは酒もなかなか入手出来なからうて。

饑別に秘蔵の蒸留酒でも渡しておこう。

こうしておけば気分も高揚するだろう。

一名でも多く、作戦海域から戻ってきてもらいたいものだな。

あまりにも低すぎる生還率を、少しでも上げないといけない。

ドリルや杭打ち機や籠手を利用したアームパンチやヒートロッドなどの近接戦闘用兵装がもう少して充実するところだったのに、中途半端なまま引き継ぎをせざるを得ないのはなんと口惜しい。

これも宮仕えの悲しさよ。

広島県は呉線呉駅。

蒸気機関車から見えるご立派な鎮守府は、駅舎からすると南側に位置する建物。

実際、呉鎮守府は徒歩圏内だ。

艦娘マニアが周囲でひしめく。

提督の追っかけまで存在する。

なんだかよくわからん行為だ。

我々はスターでもないのにな。

ここは軍事基地と民間のショッピングモールが混成された、特殊な場所。

佐世保や舞鶴や近隣の警備府などからも、艦娘たちが買い物にと訪れる。

艦娘の人気はそろそろ恐ろしいほどで、アルバイトの店員募集に応募者が全国から殺到するとか。

憲兵と公安による厳密極まる本人並びに背後関係調査を経て、ようやく彼女ら彼らは働くことが可能になる。

このように、艦娘に会えることを切望する人が後を絶たないとか。

人間の女性に興味を持たず、ひたすら艦娘を崇める男性が現在進行形で増えているらしい。

文月教とか五月雨教とか時雨教などというものがあるとの噂も聞く程だ。

女性でも、艦娘大好きという人が増加傾向にある。

時代は新たな変容に向かっていっているのかも知れない。

年一回の基地開放日には、一般人で多く賑わうという。

地方百貨店としては地元広島のものや大都会岡山のものがモール内に出張所を展開しており、負けじと都市型百貨店二軒も出張所をこさえている。

品質のよいものを厳選して置いていたためか、少なくとも利益を上げているとか。各鎮守府警備府による北海道東北展が開催されることもあり、特に函館鎮守府から出品された間宮羊羹や月餅やフィナンシェなどはすぐに売り切れるそう。

秘書艦もいままに単身広島県までやって来たが、どんな艦娘が私の部下になるのだろうか？

女の子と付き合った経験が無いので、少し不安になる。

提督は童貞推奨とあるのだが、正直意味がわからない。

女性慣れしていない者が、美女美少女ばかりの職場で十全な働きを示せるだろうか？
彼女たちは、気に入らない上官には従わない傾向があると聞く。

妖精が見えない者は論外とも聞く。

軍隊ならばそれは許されぬことだが、生憎と日本には今もそれは存在しないことになつてゐる。

この期に及んでなにを言っているのかと思わないでもないが、現状を理解出来ずに大声を上げて糾弾する人というのは一定数存在するので困つたものだ。

しかも、そうした人々が徒党を組むと限りなく面倒になつてくる。

過激過ぎる場合は拘置所につつまむらしいが、彼らとは会話そのものが成立しないの

で逮捕した官憲たちもほとほと困ってしまうのだとか。

……考えが脱線した。

まあ、それはともかく、今は我が艦娘たちと挨拶を交わし任務に取り掛からなくてはならない。

壁紙や調度品がやけに真新しくなっている執務室で、彼女たちと対面する。

戦艦、正規空母、重巡洋艦が各一名。

軽空母、軽巡洋艦が各二名。

駆逐艦が一一名。

海外艦も数名おり、メリケン艦とロシア艦の駆逐艦はとても親しげに振る舞って
る。

彼女たちは、私の緊張を解こうとしてくれているのかも知れないな。

こうして、計一八名、三個艦隊分の艦娘たちを我が指揮下に置いた。

美しい娘ばかりで大変緊張する。

やはり、慣れぬものは慣れない。

幸い、皆私に好意的で助かった。

少し馴れ馴れしい気がしないでもないけれど、気にしないでおう。

私の前任者はどんな男だったのだろうか？

彼女たちは彼へも同様の振る舞いを行ったのか？

そう言えば、函館の提督が呉に来て艦娘たちの転属願いを多発せしめたとの噂を聞いたけれども、ホンマかいな。

彼女たちが自重を覚えたとか、他の提督にも目を向けたという噂もある。

情報が錯綜し過ぎて迷走のきらいさえあることから、あまり真に受けない方が賢明かもな。

先ずは書類仕事。

提督の仕事の大半は紙との格闘に費やされる。

防諜がどうたらこうたらと言われたけれども、手間隙ばかりが増えるわ！

大淀や書類作業に堪能な艦娘たちに手伝ってもらい、なんとかこなした。

何時でも手伝いをしてくれると言われたので、本当に助かる。

気軽な感じでペタペタ触られたので、少し困った。

一人執務室のソファに座って提督指南書を読んでいたら、先程とは異なる艦娘が室内に入ってきたようだった。

カチャリ。

扉を施錠する音が聞こえ、顔を上げると随分近くに美少女の顔が存在していた。好奇心旺盛な顔立ちの美しき重巡洋艦。

思わず、見とれる。

「どうしたの、提督。辛気くさい顔しちゃってさ。」

けらけらと笑いながら、鈴谷が私の傍へ密着するように座った。

何故、彼女はこうも無防備なのだ？

そして、躊躇なくある箇所をもどもぞしてゆく。

何故、彼女はこうも積極的なのか？

妖精を視認出来て意志疎通出来る人間は、艦娘から好意を寄せられやすいらしい。

それでも、これは度を越しているかに思われた。

紫色のレースが隙間からちらりと見える。

不味い。

不味い。

不味い。

色即是空空即是色色即是空空即是色色即是空。

「止めるんだ、鈴谷。」

「こんなになっっているのにな？」

「我々が知り合ってから、そんな日にちは経っていないだろう。」

「こうすれば、お互いに早く感じ合えるじゃない。」

「なにを言っているんだ、君は。」

「提督つてさ、女の子と付き合っただことがないの？」

「ないよ。」

「そっか。」

「だから、こういうことをされると誤解しそうになる。」

「誤解じゃないよ。」

「えっ？」

「楽しみが増えるっていいことだね。」

「君はなにを言っているんだ？」

「提督は誰を選ぶのかなって話だよ。」

ふふふ、と笑いながら彼女はようやく密着状態を解除する。

じゃあまたね、と軽い感じで彼女は部屋から去っていった。

あの小悪魔め。

……早くこの状態から通常形態にトランスフォームさせないと不味い。

ん？

扉の陰から、ぬっと和風美人が現れた。
扶桑だ。

第九鎮守府最大戦力の戦艦である。

彼女は私の右腕に絡みついてきた。

白いレースが隙間から見えてくる。

不味い。

不味い。

不味い。

色即是空色即是空空即是色色即是空。

何故、彼女たちは私にこれ程の好意を向けてくるんだ？

扶桑は、鈴谷と私のアレを見ていたのか？

見た上で近接戦闘を試みようとするのか？

「ちよっとお話しましょう。」

美貌の戦艦はやさしく笑った。

新任の提督が惚れ惚れとするような笑顔を彼女は見せる。

ぼおっとなつた彼の手をすつと引いて、彼女は向かつた。
淀みない動きで、邪魔の来ない場所へ。
少し暗い、滅多に人の来ない場所へと。

CXC VII : 泊地の大佐

諸業務がようやく落ち着いた、昼下がりの執務室。

南の島の、ちっちゃな基地のど真ん中。

大佐がチン、と机上の壺を指で弾いた。

殺風景な部屋に於ける、唯一の美術品。

「北宋の青磁だ。大変よい音色だろう。」

「はあ。」

「くくく、君は中尉と同じ反応をする。」

なにか可笑しいのか、大佐は機嫌がよさそうな顔つきで笑う。

相変わらず、どこか変な人だ。

『中尉』って誰のことだろう？

女の人だとしたら、イヤだな。

私は秘書艦として志願したけど、どうして大淀さんはあんなに司令官にくつついてい

るのかな？

何故、司令官はあんなに平然としていられるのかな？

私は駆逐艦。

この小さな泊地で日々の業務に追われる、ちっぽけな存在。

補給に悩まされつつ、深海棲艦との戦いに明け暮れている。

戦艦、正規空母、重巡洋艦、軽空母が一名ずついてくれるので、それがせめてものありがたさなのかも知れない。

深海棲艦の戦術は神出鬼没なものもあり、まるで向こうにも司令官がいるかのように思えるほど。

兵員と神経と物資を毎日毎日すり減らし、破壊された周辺基地の艦娘を吸収・統合しながらやつつけ仕事のように戦い続けている。

いつかは勝てると信じて。

たまに大型作戦が発令され、その時の私たちは十分な補給を受けられる代わりにしつちやかめつつやかの日々を過ごすことになる。

傲岸不遜で尊大な大企業と下請けの中小企業の関係みたいに。

コンビニエンスストアの本社と、雇われ店長の関係みたいに。

大本營の幹部や政治家や官僚が口出しすると、ろくなことはない。要領を得ない、冗長な喋り方しか出来ない人間は大抵面倒くさい。自分自身と身内ばかりに気をを使う人なんてのも大体面倒くさい。

ああ、やだやだ。

お偉いさんに流れ弾が当たってしまうことはないこともない。

名譽の戦死を遂げられたのだから、本望なんじゃないのかな。

二階級特進もあるのだし。

一発で素早く仕留めるのだから、相当な腕の暗殺者だと思う。

美談にまとめるのが常套手段なマスメディアの人たちに、後のことは任せておこう。鵜呑みにする人が多いのなら、それに合わせた内容にしまえば問題ないのだし。戦場へ取材に行った記者が戦闘中に行方不明になることは、よくあることなんだし。

泊地の司令官がたまたま殉職してしまい、私たちは途方に暮れていた。

そこへ現れたのが、今この執務室で仕事をしている『大佐』だ。

異世界の軍隊にて基地司令をしていたという。

渡りに船とばかりに彼に司令官を引き継いでもらった結果、新司令官のやり方は非常に効率的なことが判明した。

どうやら、本当に大佐だったみたいだ。

あの日、この元無人島から逃げ出そうとした敗北主義者の旧司令官が、攻撃機から投下された爆弾によって爆散した。

その後、迎撃に辛くも成功した私たちはことごとく傷だらけで、身にまとった衣類などぼろ切れ同然でしかなかった。

だから。

突然林から現れた『無傷』の男性に対し、警戒心をあらわにした我々は当然の行為をおこなった。

即ち、どこかの国の間諜かと思つて縛つた上に逆さ吊りの刑に処したのだ。

裸に剥いて駿河問いをしようという意見もあつたが、やらなくてよかつた。

先輩たちがなんだか興奮していたように見えたけど、あれはきつと見間違いだったの
だろう。

しかし何故、司令官は壺を持っていたのかな？

それが謎だ。

諜報員との疑いが解けた後、私たちは大佐に深く謝罪した。

大佐は意外と鷹揚な人柄だったのか、それをあつさり受け入れてくれた。

ありがたいことだ。

「年端もいかない少女たちばかりを最前線で酷使するだと？ 君たちの国の総司令部は無能揃いかね？」

冷やかな目付きの大佐の辛辣な台詞が、防衛戦直後でぼろぼろの私たちに突き刺さる。

執務室を含む建築物は旧ドイツ軍のブンカーを参考にして作られた防空施設だったので、さいわいにもやられていなかった。

それ自体はよかった。ただ。

私たちが身に付けているのは、服の端切れと毛羽立っていて所々穴の開いた使い古しのバスタオルだけ。

司令官は紳士なのか、私たちを直接見ないようにしていた。じろじろ見る見る輩も多いのに立派なことだ。

壊れた艦装の修理にも時間がかかるし、高速修復材など非常用に備えた少数しかない関係で、私たちには短時間で自らを癒やすことなど日常的に出来よう筈もない。

もし今攻められたら、おしまいだ。

司令官の顔が赤らんでいるかに見える。

バスタオルを体に巻いてうろろうろすることは、私たちにとってはいつものことだ。それはちよつと自粛しよう。

男性がいない状況ならば、マップの時さえあるのは悪癖かも知れない。

男性が近場にいるとなつた時に女として自覚するのは、人間も艦娘も同じだ。

ここには、明石さんも夕張さんもいない。

当然だが、間宮さんも鳳翔さんもいない。

嗚呼、函館でもう一度ご飯を食べたいな。

生きて、生きて再びあそこで食べるんだ。

絶対。

絶対だ。

少し壊れ気味だけど、有能な大淀さんがいてくれるから、なんとか書類業務が回っている。

被害の大きかつた子から入渠施設に入れてはいるが、狭い上に二つしかないからまだまだ時間ばかりそうだ。

「人間大の敵が殆どだからといって、君たち以外を用いる対抗手段が皆無な訳でもないだろう？ 本国の軍隊はなにをしているのだね？ 核は使わなかつたのか？」

彼から発せられた質問に、少し赤い顔の大淀さんが彼の耳元で囁くように答える。

私は、それを補うように喋った。

先輩たちや同僚たちもそれに続いた。

私たちの説明を聞き、青汁を飲んだかのように苦い顔となる司令官。

「国として比較的まともに機能しているのは、本国を含む先進国が幾らかとその保護を受けられている周辺の新興国くらいか。実に酷い有り様だな。本国の人口もかなり減っていて、首都がトーキョーでなくなってしまうようなのか。」

少しさみしげな感じで、司令官はそう言った。

「なんだ、このあまりにも非効率的な運用方法は。これで作戦が上手くいく訳がないだろう。」

臨時司令官になることを渋々承諾してくれた大佐は、泊地の過去の資料を読みながら噴飯状態に陥った。

執務室に集合した私たちは、司令官から叱責を受けている。

今度はちゃんとした恰好をしていたのに、何故司令官から破廉恥な服装だなどと言われたのかよくわからない。

大淀さんは、司令官に密着しながら資料の説明をしていた。

「君たちも君たちだ。無能な司令官の言うことに唯々諾々と従うのは、いつそ害悪な行為だぞ。君たちにも非がある。」

劍呑な表情の部下に対し、平然と批判を行う新司令官。

意外と剛胆なのかな？

最初はいい人だったんだけどな、あの旧司令官も。

怒って、氣遣いしてくれて、上申書を何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何ども軍令部に提出してくれて、絶望して、それから……それから……あんな……

……。

結局、前任の二人と同じことになっちゃった。

「ふむ、致し方ない。私が君たちの臨時司令官になってやろう。」

執務室に集まった全員の前で、四人目の司令官はそう宣言した。

カチリ。

なにかの歯車がきちつと噛み合わさった音色を聞いた。

確かにそれは、私の耳に届いた。

C C X C VIII : 宵の海に司令官を想い

風の激しい夜。

荒れる海、黒く辛い液体。

波しぶきが体を濡らした。

冷たい、冷たい、命の源。

私たちの源。

敵が見える。

波の向こうからやって来る。

私だったモノたちのよすが。

えにしを切った後の敵対者。

私は境界線上の存在。

司令官が私のくびき。

司令官あつての私だ。

さてと、奴らを殲滅せしめようか。
夜戦の時間だ。

私たち、駆逐艦の本領発揮の時間。

私は、厳密には駆逐艦じゃない。

外装は駆逐艦だけど、中身は別物。

故に、この程度の敵は鎧袖一触だ。

あの正規空母の口癖を思い出した。

嗚呼、あの空母は豊かな胸をしばしば司令官に押し付けている。

何気なく。

恰好いいことをよく言うけど、それは司令官に近づく為の方策。

わかっているんだから！

元教官だからって、負けないから！

後、あの戦艦と重巡洋艦も油断出来ない。

前者は正々堂々とタカラヅカみたいに司令官へ突撃しているし、後者はさりげなく良妻風に振る舞っている。

あの軽空母と給糧艦も司令官の胃袋を掴むべく、私の司令官にちよくちよく差し入れをしている。

他にも沢山の狩人が存在している。

油断大敵、慢心禁物。

李さんは………ま、それはないか。

みんな、ギラギラしている。

えーい、この気持ち敵にぶつけてやる！

担いだ長物を背負い直す。

遭遇した偵察隊らしき艦艇群に、突撃を敢行した。

僚艦の島風が、敵駆逐艦の顎に鋭い蹴りを入れる。

呆気なく宙に浮いたその腹に、彼女は容赦なく追撃の戦矛を叩きつけ轟沈させた。

私は無傷の駆逐艦に飛びかかって激しく手刀で突き、そ奴の生命活動を停止させる。

どちらも、一発も撃たない。

だって、この程度の連中に弾を使うだなんて勿体なさ過ぎるもの。

やるなら人の姿をした連中。

小口径の弾だって、当たりどころによっては中身へと入り込める。

弾頭が装甲の隙間から入り込んで奴らの体内を掻き回すだろうと考えたら、ぞくぞく

しちゃう。

早く会えないかな？

みんな、私がヤっちゃうんだから。

よし、残敵掃討開始します！

現在の津軽海峡周辺は平和そのもので、私たちはオホーツク海方面での哨戒活動に励
(はげ)む。

たまにキリル文字やら漢字やらの描かれた金属や樹脂などの破片が浮かんでいたり、
ぶかぶか浮かんだ蛋白質を鳥が突っついていている場面に出くわしたりした。

証拠としての撮影だけを行い、それらは放置の方向にしておく。

下手に突っつけば私の司令官が国際的な騒動に巻き込まれてしまう危険性を孕(は
ら)んでいるし、邪魔者をすべて排除すればいいとは思うけど、それらは司令官の望む
ところの行為ではない。

夫を悲しませるのは、妻としてよくない。

今のところは認知されていないんだけど。

早く名実共に女房として活動したいなあ。

見るだけじゃ、ちよつとモヤモヤするよ。

艦種関係なくみんなガン見しているけど。

たぶん、みんなムラムラしていると思う。

恥じらう司令官の初々しさがたまらない。

あの全てを蹂躪出来る日が待ち遠しいわ。

まだ『安全装置』の解除は出来ていない。

お触り厳禁はキツイ。

頬つぺにチューもダメだなんて。

舐めることも出来ないだなんて。

チュートリアルで足踏み状態だ。

司令官が童貞を失った時点から、側室戦争が始まる。

次の戦争のための準備を怠らないようにしなくちや。

島風は元々男性だ。

『彼女』は志願して艦娘になり、南方での激戦を生き残った。

そして、今も函館鎮守府に所属しながら戦い続けている戦士。

まさに歴戦の戦鬼。

函館最強級駆逐艦として、私の僚艦をよく務めてくれている。

『彼女』は司令官の話をよくしてくる。

あくまでも男同士の友情と言い張って。

私の司令官にべたべたしているのを見ると複雑な気持ちになるけど。男同士だからって、なにをしてもいい理由にはならないと思うけど。

今は男じゃなくなっているんだから、きちんと自覚して貰わないと。

まあ、アンドロギュヌス的存在なのは、島風自身もやつとする部分なのだろうけどね。

入浴時にその島風の下腹部をじつとり見つめる艦娘が複数いて、業の深さを感じさせる。

司令官は一見、冴えないおっさんにしか見えない。

だが、そこがいい。

まあ、つまらない上役だったら、即座に（自粛）して（自粛）でギョツポンギョツポンのウインウインさせちゃうなあ。

で、その後は（自粛）。

そして座薬とイチジク浣腸を突っ込んでアヘアヘさせるつもりだったけど、意外と好みだったからやらなくて正解だった。

大本営を潰そうかとも思ったけど、大淀がたまに暴れているし、彼女に随伴して（自粛）をやっているからまあいいかな。

あ、また敵が現れた。

よし、大湊（おおみなと）から預かった試製ハルコンネンをぶっぱなしまくっちゃ
うんだから！

吹雪、やります！

C C X C IX : 山城、その愛

残弾、零。

但し、お腹に一発。

味方は乱戦で散り散りになってしまった。

折角、西村艦隊ぼく編成したのに。

不幸だわ……。

でも、みんなが無事だといいわね。

先程の戦いは熾烈で、激戦と呼べる程だ。

孤軍奮闘、まさに猛将の勢いで敢闘した。

敵軍へ突撃し、獅子奮迅の勢いで戦った。

敵の緊張した顔が見える程の近距離にて。

鬼の山城の本領発揮よ。

最後の最後まで砲撃を続ける所存で戦う。

これこそが私の心意気。

目の前の敵はすべて必ず打ち払ってゆく。
見敵必殺。

満潮から借りた漫画にあった、シグルイみたいに。

全砲門を解放して、ただただ撃ち続けた。

なんとか全力砲撃で打ち倒したのだった。

最後は氣迫勝ちのようにも思えたほどだ。

満身創痍の状態でも航行はなんとか可能。

舵やスクリューをやられなくてよかった。

私は姉様の元へ向かうべく、現在壊れかけの機関部と推進機をだましましたましかして
いる。

嗚呼、空がこんなに遠いわ。

髪が海水まみれになって、どんどん重くなってゆく。

まるで、深海が私を呼んでいるみたいに。

風が冷たい。

体を凍らせでもしようとしているが如く。

でも、私の姉様への忠義は揺るぎないわ。

必ず、生きて戻りますから。

姉様。

姉様。

私の姉様。

山城は、必ず戻りますから。

待っていてくださいね。

きつと、きつと、戻ります。

それまで、それまで、どうぞどうぞお待ちになっけていてください。

今生（こんじよう）では、ずっとずっと一緒にいますからね。

そうですね、姉様。

気がつくとも無意識で航行していたらしい。

うとうととしていたようだ。

ぎよつとしたけれども方角は合っている。

索敵機を飛ばし、再度位置確認を行った。

深海棲艦は近場にいないようによかった。

敵襲も受けていないので本当によかった。

星を見ながら防水性磁石と防水紙の星図と海図を一応見直し、辺りをどこかの哨戒艦隊か海上自衛隊か海上保安庁でも通らないかしらと考えつつ、不調を訴え続ける機関部と推進機をなだめなだめ動かす。

不幸だわ……。

敵は見えない。

いつ現れるかはわからない。

護身用の斧は持っているけど、こんな得物は戦場で使ったことなんて無い。

薪割りには何度も何度も使ったけど。

これはホームセンターでドイツ製のモノを見つけた時に試し買いして、妖精に改修を要請した品だ。

あそこで売っていたモノとしては最大級。

実戦で使えるのかな？

鉦（なた）の方がよかったかな？

バールのようなモノの方がよかったかな？

ううん。

不意に、あの小太りの提督を思い出した。

先日何気に姉様に手を出そうとした不埒（ふらち）な提督には四の字固めと卍固めと

パロ・スペシャルを喰らわせたけど、個人的にはそんなちよつとした関節技を使うのが関の山だ。

深海棲艦相手に使えたらいいのだけれど。

ロビン・スペシャルやキン肉バスターを、提督で試しておけばよかった。

あれだけ頑丈極まるのだから、実験台にはもってこいだし。

姉様に手を出そうだなんて一万年早いわ。

あんなのが指揮官だなんて実に不幸だわ。

意外と斧が使えた。

刃も欠けていない。

十八は伊達じゃないわね。

気分は上々だわ。

霧の中で深海棲艦の哨戒艦隊と思われる集団に遭遇したけど、反射的に投擲（とうてき）した斧が真つ先に空母を貫いてくれてよかった。

航空戦にならなくてよかったわ。

残機が少ないし、霧中で戦わせられる程錬度が高くない。

その後は突進して近接戦闘の格闘戦に移行したけど、敵にそういった事態に対応する

武装がなくてよかった。

ユニコーン・ギャロップで先制攻撃出来たのがよかった。アルゼンチン・バックブリーカーもきれいに決まったし。初挑戦のキン肉バスターが、上手く決まってよかったわ。ありがたい、最上。

以前時雨から借りたヴァイキング漫画に出てくるヨークム戦士団みたいに暴れたけど、気分はなんとなくトルケルだった。なんてね。

泊地に無事帰投する。

安堵して、涙が出てきた。

駆けて来る姉様も美しい。

やはり姉様は最高だ。

姉様に抱きつかれるだなんて、私は本当に幸せ者だ。

思わず、鼻からオイル漏れしてしまった。

艦隊の他の面々も生き残っていたので、大変嬉しい。

時雨と最上がなかなか泣き止まなくて、なだめるのに大変だった。

私も姉様と共に嬉し泣きました。

提督が生きていて、とつても残念だった。

不幸だわ……。

なんとなくムカついたので、ロビン・スペシャルを試してみる。

上手く出来てよかった。

何故、提督はこんなに頑丈なのかしら？

不幸だわ……。

姉様からすぐに入渠するようにと、注意されてしまった。

その、いろいろ見えているらしい。

いやらしい提督がなんだか喜んでるように見えたのは、これが理由ね。

不幸だわ……。

入浴した際、叢雲（むらくも）や曙や霞や満潮と共に提督を罵倒した。

でも、あの子たちはなにゆえに途中から提督をかばいだしたのかしら？

やっぱり、不幸だわ……。

姉様はどうしてあんな男がいいのだろうか？

グズでノロマで、いつもエロエロしいのに。

姉様は酔狂な方なところがあるわ。

慈愛の精神が強いところもあるわ。

ああいうダメ男に好意を向けるだなんて。

そんなの……そんなの……許せない。

仕方ないわ。

駿河問いと三角木馬の組み合わせでやつちやいましょうか。

あんな、駆逐艦にまでいやらしい目を向ける男なんて天誅を加えたらいいのよ。

嗚呼、あんなダメな提督と一緒に空気を吸わなきゃいけないだなんて不幸だわ。

姉様？

……なんだ、提督か。

取り敢えず、地獄の断頭台を喰らいなさい！

嗚呼、不幸だわ……。

久々に海域回収（ドロップ）があつて、その艦娘が重巡洋艦の愛宕だったので泊地は
かなり賑わった。

戦力の充実はありがたいものだから。

しかし、どうしてこの子は私にべったりくっついてくるのかしら？

不思議だわ。

姉様、旅行の計画ですか？

いいと思います。

この山城、姉様と一緒にならばどこへでも参る所存です。

函館ですか？

いいですね。

鎮守府内の宿泊棟に泊まって、温泉に入つて、市場へ行つておいしいものを食べて、観光バスに乗つて、また温泉に入つて、一緒に眠るんですね。

楽しみにしています！

姉様。

姉様。

私の姉様。

山城は、姉様のために存在しています。
すべては、姉様のために。

CCC：穿いていないのは、いけないと思います

執務室の水槽にて呑気に泳ぐエレキング。

皆からはエレちゃんなどと呼ばれている。

体長二〇センチメートル、体重五〇〇グラム。

これはメトロン星人から貰った宇宙怪獣の幼体で、目の部分にレーダー状の回転する角を持ち、機嫌がいい時はそれをぐるぐる回している。

白い体に黒いまだら模様が特徴だ。

人懐っこい個体のようで、うちの艦娘にもよく慣れている。

成長すると、けっこう強くなるらしい。

口の部分は半透明で、半月状の高圧的放電光線を吐けるのだとか。

物騒だが、今のところはそんな振り舞いをする事などない。

尻尾で相手を締め上げて、放電攻撃することも出来るそう。

現在の私は鹿島と吹雪に抱きつかれて、締め上げられているようなものだが。

鼻息が荒く、目付きが怪しい。

鼻からオイル漏れもしている。

書類作業が進まないのも、もう少し離れてくれたらありがたいのだけど。

穿いていないから大丈夫ですとかのたまっているけれども、そういうのはとつてもいけないと思うのであります。

大淀は新しい下穿きを買ったとかで私にちらちらとその黒い一部を見せてくるし、君たち、いい加減にしなさい。

おっさんの自家発電が見たいだなんて、そんなの絶対おかしいよ。

ようやく雪が降らなくなったと思っていたら、松輪島から来た主従が延々と寒さについて語るのを聞かされた。

「あの島は、今の時期でも氷点下になったりするんだよ。通年、暖房が必要なんだ。それと、何故だかロシア軍基地はどんどん女性兵士が増えてんだよな。」

「そうなんですよ、川崎さん。」

「漣（さざなみ）、ネタが古いぞ。」

「わっかんないかな?」

「わっかんないだろうなあ。」

「なに、昭和のコントをやっているんですか、お二方。」

「いやあ、あんだだけ寒いとやるのが無くてさ。ついつい、昭和に傾倒してしまうんだよ。ところで、今回も補充の艦娘はいないのかな？」

「募集はかけているんですけどね。」

「ご主人様と私がラブラブだから、そこに食い込めないってみんなが断念しちゃうんですよ、きつと。」

「そいつあ、だんねんだなあ。」

「とつても、だんねんですね。」

結局、主従は今回も増員無しで島へ帰った。

しおしおのパーとか言いつつ。

様々な分野の買い物を行って。

哨戒艦隊を増やしてあげるか。

乙種だと着任即轟沈だろうし。

誰を送り込むかが高難易度だ。

艦選って、けっこう難しいな。

業務終了後、初雪や望月とセガ・サターンのテレビゲームで遊ぶ。

アトランティス社のテロメアサマナーは難易度が高いのだけど、ハマると癖になる味
わいがあるのだ。

仲魔と呼ばれる悪魔たちと彼女たちを従える召喚師との、艱難辛苦を乗り越えて紡が
れる成長物語だ。

それは、提督と艦娘との付き合い方にもなにかしら通じる部分があるのではないだろ
うか？

最近ではテルミナシリーズが人気のようだけれど、こうした作品の続編が出てくれたら
個人的に嬉しい。

両名がファミコンで『狂王の試練塔』に挑戦する姿を眺めた。

さりげなく触ってこようとしたので、おいたはダメだとやんわり注意する。

おいちゃんへのケツなんて触り心地がさほどよくないだろうに。

それに穿いていないのはよろしくないぞ。

その後、ハッチーモッチーステーションの打ち合わせをした。

けっこう苦戦する。

二名はかなりフリーダムなので、調整がなかなか難しいのだ。

でも、聴衆からは割りと高い評価を得ているらしい。解せぬ。

大湊（おおみなと）の提督から電話がかかり、その流れから戦後元艦娘によるプロ野球球団を設立するという与汰話で盛り上がった。

本拠地は青森にしたいと言われたのでそれを快諾し、盗墨王は島風で決定する。球団名だが、青森ワルキューレなんてどうじやろか？

とある提督が憲兵隊に逮捕されたという。

部下の艦娘たちに手を出したからという。

嵌められたのか、或いはハメたのか。

いつかはやるだろうと思っていたが。

菊門専門だと思っていたが、どうやら異なるみたいだ。

呉の先輩から身元保証人を頼まれる。

大淀や島風や吹雪らを引き連れ、大本営に乗り込むか。

やっぱ、最後は肉体言語が必要となるのだな。

私は武闘派じゃないのに。

……是非も無し、か。

ええっと、ボールのようなもの、ボールのようなもの。

本日は雲龍が第二秘書艦として、書類業務を手伝ってくれている。

ちなみに第一秘書艦の大淀は、大本営でのアレの後始末であちらに居残っていた。

しかし、その、なんだ。

性欲に負ける提督が続出しているのも、わからないでもない。

もし中学生や高校生で提督になってしまったら、溢れる欲望の制御に大変困難をきたすものと思われる。

無邪気に美人の艦娘に抱きつかれたら、どの程度正気を保てるだろうか。

個人的にもめがつさヤバイ。

駆逐艦は、まあ、妹的な感じで耐えられるけれども。

混浴やら添い寝やると、SAN値を削られる日々だ。

それ故に欲望の発散は秘して行わねばならないのだ。

難しいものである。

と。

美しき秘書艦が不意に目の前に近づいて来た。

「提督。」

「なんでしようっ?..」

「吸う?..」

「……あの、雲龍さん、いきなりポロリをやらないでください。」

「困っていたようだから。」

「それは否定しませんが。」

「それとも、私が吸おうかしら。」

「それも困りますね。」

「だって、苦しそうに見えるわ。」

「それを耐えてこそその提督です。」

「耐えなくてもいいんじゃないかしら？」

「一度戦端を開いてしまつたら、もう後戻りは出来ません。そして内ゲバに至り、鎮守府は崩壊です。」

「私は側室でかまわないわ。」

「好意はありがたいですよ。」

「かまってくれないと、エロい実力行使をしちゃうわよ。」

「間宮さんのところで、苺パフェなど如何でしょうかね？」

「それはいいわね。」

「そういうことになった。」

夜中。

外した時間に入浴したつもりだったが、三教官のジェットストリームアタックでトリプラーなアテナエクスクラメーションを喰らう。

密着すれすれというのは大変困るぞい。

長門教官、加賀教官、妙高教官。

にこやかに微笑みながら、包囲網を狭めてくる。

いずれも魅力溢れる方なので、むっちゃやるぞ。

剥き出しのたわわな豊潤が、お湯にぶかぶか浮かんでいる。

おう、モーレッツ。

好意はわかるのだが、現状では非接触を貫かざるを得ない。

むむむ。

今日の補佐役の艦娘たちは曙と霞。

大淀は大湊へ打ち合わせに行った。

朝の作業が一通り終わった頃、何故か彼女たちは執務室の鍵を掛けた。

曙と霞が真つ赤な顔で私に近づく。

「と、ところで、即席提督。そ、その、提督の、じ、自家発電の手伝いをしてあげてもい

いのよ。」

「なにを言っているんですか、曙さん。」

「な、なんちやって司令官の、じ、自家発電を手伝う子がいたっていいじゃない。こ、こちらからだつたら不味いけど、そちらからなら合法よ、合法。曙や叢雲（むらくも）と一緒に、三名で手伝ってあげるわよ。今、む、叢雲を呼び出すから。」

「やめてください、霞さん。しんでしまいます。」

龍驤と龍田と島風が執務室に雪崩れ込んできたので、どうにかこうにか危機は脱した。

朝食で李さんの中華粥を食べようと思ったら、何故か鳳翔間宮のフレンチトースト対決に巻き込まれた。

何度めになるのか、もうわからない程である。

右に鳳翔、左に間宮。

密着する両名の吐息が荒木又右衛門じやわい。

紅茶の入ったカップを持って既に臨戦態勢だ。

その勢い、まさに最終決戦仕様。

命捨てがまるは今ぞ、という雰囲気醸し出している。

……勘弁して欲しい。

その上、大鷹や大本營の瑞鶴などが乱入してきてめっちゃめっちゃになった。そんなに食べられんわいな。

ローマやネヴァダなどの海外艦や投降系深海棲艦勢が面白がって掻き回してきたので、混乱は更に激しくなった。

君たち、当分添い寝はなしやで。

そんな状況でも、料理上手たちは平然としている。

鳳翔間宮は通常運転なのだった。

小さく切り分けられた黄金色の食べものが美しく皿に並べられている。

一口大なので、素手でどうぞと言われた。

口に入れると、ふわりと広がる慈味深さ。

甘過ぎず、くどすぎず、丁度よい塩梅だ。

どちらも味わいがよく、奥深く余韻も感じられる。

甲乙付けがたい。

代わる代わる紅茶を飲ませてもらいつつ、絶品のフレンチトーストを食べてゆく。

真剣極まる周りの眼が、ガリガリと我が理性を削っていった。

完食したが、私の感性では判定出来ない。

むむむ。

指が汚れましたね、と兩名に唾えられる。

あつ、その手があつたか、と誰かの声が聞こえてきた。

広報の青葉が興奮しながらパチパチ撮影するので、メツとしておく。

彼女たちに自重を覚えさせないと……。

何故か翌朝、大量のパイが食堂を満たしたのだった。

一体、誰が作っているのだろうか？

……まつ、いつか。

食いねえ、食いねえ、パイ食いねえ。

あまりに多かったので、函館に寄港した艦娘全員に漏れなく進呈した。陸海双方の自衛隊や海上保安庁の人々にもお裾分けし好評を得られた。

本日の第二秘書艦は龍田。

先日は助けてもらえてよかった。

でも、なんだか少し変な様子だ。

私を見つめる目付きがとてもエロい。

休憩時間から、更に変になってきた。

上目遣いで私を色っぽく見つめてくる。

豊かなバルジを使って、えへへと嗤う。

「提督さん、挟みますか？　こんな感じで。」

「筆箱で遊んではいけませんよ、龍田さん。」

「あら、ムラムラして大変なんじゃないですか？」

「それとこれとは別です。」

「誰にも言いませんから。」

「言う言わないの問題じゃないんです。」

「ではこんなのはどうなんでしょうか？」

「そういう手つきはしないでください。」

「こつちの方がいいですか？」

「具体的な仕草をされると困りますよ。」

「むしろ誰かとヤつちやつて黙っていた方が、効率的じゃないですか？」

「そういう問題じゃないです。」

「今穿いていないんですけど、見ます？」

「エツチなのは、いけないと思います。」

嗚呼、鼻から牛乳が出てきそうだ。

結局他所の天龍たちがやって来て、事なきを得た。

龍驤と休憩時間中に馬鹿話をする。

「あんな、提督。」

「はい、なんででしょう?」

「ウチが提督とここで添い寝するやろ。」

「そういう時もありますね。」

「においをかぐのは、問題ないわな。」

「その辺を言い出したら、きりがないですからね。」

「寝ぼけてつい触ってまうのも、しゃあないわな。」

「場所によりけりです。」

「あの一パーセントんところはダメか。」

「一パーセントのところはダメですね。」

「こつちがムラムラしてどないしようもなくなったら、触ってもええんか?」

「そういう時は、波しぶきを浴びつつ海に向かって吠えたらいいんですよ。」

「出したい時はいつでも手伝うたるから、安心してな。」

「爽やかな顔で、下品な動きをしないでくれませんか。」

「今穿いとらんのやけど、どう思う?」

「とてもよろしくないと思いますね。」

「見たくはないんか?」

「そうではないです。」

「ほな、見せよか。」

「それはダメです。」

「ええやん、減るもんでもないし。」

「私の理性値が確実に減りますよ。」

「いつでもなんでもしたるから、ムラムラしたら遠慮なしにゆうてな。」

1919プロダクションという芸能事務所に所属するセクシーな女の子たちが、道南紹介番組の件で我が鎮守府にやって来た。

その人数、八人。

昭和の深夜放送の湯けむり旅情的うさぎちゃん的なノリで、温泉を紹介もしたりする
そうな。

マニアックやね。

湯の川温泉での混浴を要求されて困惑するも、放送コード的理由から水着着用必須で

安心ですと、密着してきた美人プロデューサーに熱く激しく説得されて渋々了承する。

大本営が何故許可を出したのかが、よくわからない。

浴室に入つて、やられたのを知つた。

……謀つたな、シヤア。

めつさ面積の小さな布切れのみを装着した女の子たち及びプロデューサーにびつたりくつつかれ、ファイター形態からガウオーク形態を経てバトロイド形態に素早く変形した。

柿崎ーっ！

……いろいろとあやういところだつた。

何故か周囲で静かに観察しつつギラギラする艦娘たちの視線に、とつてもまいっちんぐだつた。

かぶりつくように

あの重々しき

視線で提督を見つめる

艦娘たち

故国を守る誇りを

厚い装甲に包んだ

鋼鉄乙女たちの

ここは鎮守府

無数の娘たちの

ギラつく欲望に

晒されて

混浴温泉に引き出される

函館の街の提督

魂なき戦乙女たちが

ただ己の生存を賭けて

激突する

開催されるはバトリング

回る砲塔から、おっさん提督に熱い視線が突き刺さる

C C C I : 艦娘たちとの接し方

◎好感度の高い艦娘は、非常によくなつている親戚の女の子のようなものです。紳士的にやさしく接しましょう。

◎艦娘たちが入浴時に乱入しても、騒いだり動揺してはいけません。『ああ、混浴しに来たんだな。』と軽く考えましょう。

◎添い寝は好感度の為せる行動です。親戚の女の子になつかけているくらいに思いましょう。

◎ドキツとするようなことを言ったり、大胆不敵な行動を取る艦娘は確かに存在します。ただ、ここで『据え膳喰わぬは男の恥』などと古い価値観を持ち出してはいけません。相手が戦前戦中の艦艇の魂を持っているからといって、それを悪用するような行為は憲兵隊の天誅対象になります。ご注意ください。

◎からかってくる艦娘に対し、本気で怒ってはいけません。彼女たちからすると、それはなんでもないことなのですから。

◎目覚めた時になにも着ていない艦娘が隣にいても、不用意に大声を上げてはいけません。相手の思うつぼです。枕そばの使用済み避妊具の中に片栗粉を練ったモノが入っていたとしても、先ずはそのにおいをおかぐことが重要です。

◎いきなり唇を奪われた場合、すぐさま感情的に叱責するのは愚策です。相手が駆逐艦や潜水艦や海防艦といった艦種の場合は特に要注意です。落ち着いて話し合います。

◎函館の提督は特殊例です。参考にはなりません。

◎艦娘が下着を見せびらかしてきた場合、よく似合っているとかよい品だとか言ってみましょう。決して写真機を向けてはいけません。

◎艦娘から無邪気に抱きつかれても、不用意に抱き返してはいけません。下手をする、他の艦娘によって背骨をへし折られます。

◎バレンタインデーは、趙子龍並の繊細さと大胆さとで乗りきってください。

◎ホワイトデーは、地雷の密集地帯を進むような心持ちで頑張ってください。

◎艦娘にモテない？ なにかやらかしていませんか？

◎艦娘が妊娠したと告白しても、決して動揺してはいけません。現在までに、艦娘が妊娠した事例は一例も存在していないからです。

◎性的にからかわれたからといって、同じようからかい返すのは危険です。場合に

よつては、艦娘たちから責め立てられる結果となるでしょう。

◎ケツコンカツコカリの時にセリフを間違えると、酷い目に遭わないとも限りません。

◎艦娘に体験人数を聞くのは、子連れの高グマに対してなにも考えずに近づくような行為です。

◎熊と球磨は別物です。口調は関係ありません。猫と多摩も同様です。

◎艦娘を口車で騙してはいけません。後々大変危険な報復を受けるかもしれないからです。

◎もしも軟禁された場合、辛抱強く交渉しましょう。

◎艦娘は、提督の憂さ晴らしの対象ではありません。行方不明になりたくなかったら、公明正大な扱いを心がけましょう。

◎艦娘に生理はありません。気を使ったつもりでそういったことを言うと、大きな問題が発生する可能性もあります。気をつけてください。尚、本当に生理がある場合、その子は艦娘ではありません。すぐに大本営へご連絡ください。

◎あきつ丸などのようにとても色白な艦娘が複数種存在しますけれど、なんだか違う気がする場合は大本営か函館までご連絡ください。

◎提督に休日が殆どなくとも、艦娘には休日を与えるようにしてください。

◎ 艦娘を盗撮した場合、最悪、刑務所が待ち受けています。

◎ 捨て艦戦法は禁止行為です。行方不明になりたくなくなったら、即刻止めてください。

◎ 特定の艦娘たちから罵倒されても、程よくいなしましょう。彼女たちは仲間思いで提督に不信感を持っているだけなのですから。扱い方に苦慮する場合は、函館の提督にお問い合わせください。それで少しは状況が好転するかもしれません。

◎ 酒の勢いで、という言い訳は一切通用しません。但し一杯目で完全に昏睡した場合は、大本営までご連絡ください。

◎ 艦娘たちの前で、不用意に「自分は婚活している。」などと言ってはいけません。

◎ 仲がいいからといって、艦娘たちに下ネタをばんばん言っではいけません。

◎ 艦娘たちには、自家発電の現場を見られないようにしましょう。尚、わざと見せつけるのは言語道断です。

◎ 無敵超人系の提督は、薄い本辺りにしか存在しない妄想の産物です。ましてや、海上を走ったり、素手でモビルスーツを撃破出来るような提督は実在しません。

◎ ア●スに固執する提督がいても、彼が必ずしも同性愛者とは限りません。貞操帯を装備しなくても大丈夫の筈です。おそらくは。

◎ 刀術の訓練を行っている艦娘に対し、時代遅れだとか時代錯誤だとか言っではいけ

ません。下手をすると、槍を持った艦娘に追いかけて回される結果となります。

◎公共の場を下着姿でうろうろするような艦娘は、注意しなくてはなりません。ただし、酔っぱらっている場合、近づく時は最大限注意しましょう。場合によっては骨折します。

◎艦娘と腕相撲をして勝てる可能性は、一片たりとも存在しません。駆逐艦や潜水艦や海防艦が相手だとしても、それは同様です。もしも勝てた場合、それは勝ちを譲ってもらった結果です。慢心ダメ絶対。

◎艦娘の体力と人間の体力とでは、雲泥の差があります。そのことをよくよく念頭に置きながら行動してください。

◎横須賀、呉、舞鶴、佐世保の提督に指名されたからといって浮かれていると、痛い目に逢わないとも限りません。

◎キレルなら、その相手は無機物にすることをおすすめします。但し、艦装や魚雷、ましてや工廠などを対象として怒りを爆発させてはいけません。もしも破壊した場合は、全額弁償していただきます。

◎執務室にこもることはかまいませんが、そこで生活しないようにしてください。室内に寝袋を持ち込むことは禁止されています。

◎執務室は職場であって、居住空間ではありません。

◎ 執務室に監視カメラを設置してはいけません。

◎ 執務室と隣接する私室だけを往還する生活は、好ましいと言えるものではありません。なるべく艦娘とも交流するように心がけましょう。

◎ 憲兵と仲がよいことをからかわれても、本気で怒ってはいけません。余計に誤解が酷くなるからです。

◎ 大淀はすべての基地に存在する訳でもありません。事務能力を高めましょう。

◎ 「し、司令官さんは、ど、童貞じゃないのです！」などと駆逐艦に言わせるのは禁止です。また、姉妹丼の意味を教えるてはいけません。

◎ ご主人様呼びをする艦娘は現在わずかに存在しますが、この呼称を広めてはいけません。

◎ 基地全体が一触即発の雰囲気なのに、特定の艦娘と『ダーリン』及び『ハニー』呼びをし合ってはいけません。

◎ 艦娘の胸部装甲について話すのは、人間相手のみにとどまってください。艦娘に対して直接大小を述べることはセクシャルハラスメントにあたり、それらは厳禁行為です。違反した場合、原稿用紙一〇〇枚の反省文を書いていただきます。ちなみに、とある軽空母がその反省文の精査にあたります。

◎ 艦娘から童貞ですか？ と聞かれたついでに相手が未経験かどうかを聞くのは、火

薬庫で火遊びをするような行為です。

◎地下牢に入れられた場合、よくよく反省してください。座敷牢の場合、貞操の危険を案じてください。

◎鳳翔、間宮、伊良湖、といった料理上手の艦娘を敵に回してはいけません。絶対にです。これは、いわゆるフリではありません。

◎間宮羊羹は稀少な品です。函館の提督に嘆願書を何度も何度も送り付けたり、脅迫紛いの交渉をしてはいけません。

◎『処女の生き血を飲みたい』という理由で、艦娘を私的に検査してはいけません。

◎自分自身を宇宙人だと思いつくことは自由ですが、艦娘たちを混乱させる原因にしてはいけません。

◎軽空母と駆逐艦を間違えてはいけません。

◎胸の大きな艦娘に対し、「胸が大きいねえ。」などと言ってはいけません。

◎改装によって、艦娘の雰囲気や体格や顔立ちまでも変化する場合があります。その際、「お前、誰？」は最も言ってはならない言葉のひとつです。

◎正規空母や戦艦の艦娘がおしなべて大食というのは、根も葉もない噂です。彼女たちの食べる量は人間の女性と大差ありません。また、大量に食事を用意して艦娘の完全を期待する行為は禁じられています。

◎ 艦娘を本気で怒らせた提督の末路は、添付資料の写真をご覧ください。食後にご利用になった方が賢明でしょう。

◎ 通常の青葉は、パラッチではありませんし、秋雲はエツちな薄い本の専門家ではありません。妙な依頼をしないようにしてください。

◎ 不良提督が以前南方で大量粛正されたという噂は、根も葉もないものです。そうした虚報に惑わされないようにしてください。

◎ 自虐的な艦娘を追い詰めてはいけません。それに乗じていたぶるなど論外です。

◎ 艦娘たちから信用を得られないならば、それには必ず理由があります。

◎ 艦娘たちを自己の都合に合わせるべく洗脳してはいけません。

◎ 退役後の仕事を考える前に、本来の業務に邁進してください。

◎ 艦娘たちの信用を逆手に取って、悪事を働いてはいけません。

◎ 艦娘相手に金銭を伴う賭け事は禁止されています。

◎ 艦娘の心の隙間を利用して悪事を働いた場合、憲兵隊による天誅対象となります。

◎ 艦娘に刺されないようにしましょう。

◎ 曖昧なことばかり言っているなら、そのうち痛い目に遭います。

◎ 複数の艦娘と同時に付き合った場合、命の保証は出来かねます。

◎ 感情論はあらゆる局面に於いて、負の結果しか生み出しません。

◎青いドレスを着た金髪の大淀が眼前に現れた場合、即座に全面降伏してください。
生き延びる方策はそれのみです。

◎行方不明になる提督は意外に多く、補充が大変です。そうならないように、提督たる自覚を持って鎮守府警備府泊地の運営に力を注いでください。

CCCⅡ：古鷹と祥鳳と村雨

函館の提督は日々迫りくる艦娘たちの大攻勢に対して難攻不落を誇るナヴァロンの要塞やセヴァーストポリ要塞の如く、今もって尚堅牢極まる墨守を貫いているという。

なかなか出来ることではない。

大抵は、既に何名もの艦娘と関係を持ってしまっただろうに。

もしくは、関係性に失敗してオサラバしてしまうだろうに。

秘匿されてはいるが、複数の部下と関係を持つ上司などマスメディアの恰好の餌食になる未来しか思い浮かばない。

彼らに倫理観など期待する方が間違っているし、一旦食らいつかれたら骨の髄までしゃぶられることは間違いない。

えげつないからな、彼らは。

特にアレとかアレとか、あそこもしつこいなあ。

一度カストリ雑誌みたいな三流週刊誌の記者に三カ月ほどまとわりつかれて実にまいったが、いつの間にかいなくなっていた。

あの脂ぎったおっさんがねちこく絡んでくる姿には時折殺意を覚えた程だったけれども、だからといってどうなつてもいい話にはならない。

ムカつくことはムカついたが。

たぶん、どこぞのアイドルか俳優か歌舞伎役者が不倫だか二股だか三股だかなにかをやらかしたのだろう。

そうした輩を取材しに行つたんだと思いたい。

後、めんどくさい感じできゃんきゃん喚く女性記者に取材という名のしつこい業務妨害をされたことも何度かあつたが、彼女も程なく見えなくなつた。

……………。

たぶん、よそのもつと金になりそうなところへ取材に行つたのだろう。

そうに違いないさ。

マスメディアの人間が多数行方不明になつているとの不確定情報を函館の提督から聞き、なんとなくゾツとした。

まさか……いやいや、まさか。

ロシアのとある大統領が就任した時のアレじゃあるまいし。

ガセネタだ、ガセネタ。

私はダメな提督だ。

重巡洋艦と軽空母の魅力に抗（あらが）えず、出会って半年であんなことをしてしまった。

世界の平和を守るために戦う彼女たちに対し、あんなことを何度もしってしまった。国防のこと、世界平和のこと、それらの達成に全力を注がなくてはならないのに。最近、巨乳駆逐艦の子も私を意味ありげにちらちら見ていることが増えている。

「雨の名前の駆逐艦群ってお洒落よね。」

無造作に抱きつかれたことも何度かある。

幼いのか、無邪気なのか。

やめてくれ、そのやり方は私によく効く。

不味い。

非常に不味い。

こんなに意思の弱い私が、あの子の魅力に抗しきれぬだろうか？

いやいや、ここはなんとか最終防衛線を堅守すべく頑張らねば。

ちらちら見えてくるものに内心興奮している場合ではないのだ。

「提督、お茶です。」

「ありがとう。」

古鷹がやさしく微笑む。

彼女は今日の秘書艦だ。

祥鳳と村雨は他所の助っ人として、本日は出払っていた。

駆逐艦が一名二名、或いは軽巡洋艦が精々の沿岸屯所まみれな近隣。

私の屯所の艦娘はまさに引つ張りだこなのである。

この民家改造型のなんちゃって基地が村雨だけになりやすい状況ではあるのだけども、古鷹と祥鳳がそれを極力阻止しようとしているみたいにも思える時すらある。

まさかな。

彼女たちがそんなことをする筈などない。

……疲れているのかな？

私の左手の甲をなめらかに撫で回す古鷹。

それは合図だ。

何度も何度もふんわりと撫でる重巡洋艦。

大天使の、とろけてしまいそうな微笑み。

幾つも重ねた夜を思い出し、私の単装砲がトランスフォーマーしてゆく。
いかん。

これではいかん。

過ちを何度も何度も繰り返してはいかんだ。

我が頬を撫で回す古鷹。

顎の古傷を愛おしそうに撫でる少女。

につこり微笑み、すつと離れる彼女。

思わず、あつとなつてしまう。

「提督……。」

せつなそうに潤んだ瞳で見つめてくる重巡洋艦。

致し方なし。

ここまでされてやらないは、彼女を辱しめてしまう行為だ。

やるとするか。

帰投した祥鳳にはすぐにバレてしまった。

何故だろう？

私にわかりやす過ぎるのか？

彼女に激しく求められ、女の子慣れしていない中年提督たる私の城は呆気なく陥落した。

……我ながら情けない。

「私の居住性は上々なんですよ。」

ああ、知っているよ。

『剣埼（つるぎざき）ホテル』の実力をお見せしましょう。」

君の肉じゃがやカレーは絶品だよ、祥鳳。

皆で彼女の作る料理に舌鼓を打った。

これ程のものが食べられるなんて幸せだ。

その後、彼女と眠れぬ夜を過ごした。

ある休みの日。

私たちは駄作と言われる映画群の鑑賞に突入した。

彼女たちと何度も何度も眠れぬ夜を過ごした原因。

何故か何作も何作も続けて見てしまう。

魅入られたかのように複数見てしまう。

監督脚本演出主演助演エキストラなどに悪態をつきながら。

それはある意味、業の如く。

中毒症状に陥ったのように。

薄暗い部屋で固まりながら。

四名でじっくり見てしまう。

画面の向こうで美人の絶叫がほとばしる。

彼女の最大の魅力を引き出せる死に際だ。

情緒なく冗長な演技力が嘘みたいな迫力。

ようやく、この作品も終わりに近づいた。

これ、まだまだ絶叫し続けるんだっけか。

もう少しの我慢、我慢ナリ。

そう思っていたら、私は不意を突かれた。

ぎゅっと腕を掴まれたのだ。

やわらかな膨らみが腕に押し付けられる。

すぐ隣の彼女が耳許で囁く。

なんでもないことのように。

「今、穿いていないんですよ。」

CCCⅢ：叢雲の槍に貫かれたくて

俺の初期艦にして腹心たる叢雲（むらくも）は、この三つ目の鎮守府への転属に付き合ってくれたよき片翼だ。

誠によく出来た世話女房だと思う。

彼女にはまったくもって頭が上がらない。

別の頭は上がるのだが、勘弁して欲しい。

今後とも、俺を支え続けて欲しいものだ。

ちなみに、彼女以外の艦娘で俺の転属に付き合おうとした者は誰もいない。

寒い時代だとは思わんかね。

「起きなさい、朝よ。」

「おはよう、叢雲。今日もきれいだな。」

「ありがとう。さ、早く顔を洗って着替えて身だしなみを整えなさい。」

「わかったよ、母さん。」

「あんた、母親相手にここをこんな風にしちゃうの?」

「あ、そこはやめて。」

「他の子にちよつかいを出せないようにしておこうかしら。」

「ちよ、む、叢雲さん、叢雲さん、あ、ちよ、ちよと……。」

「これが今日の書類。うちの子たちがあんたの方針に大人しく従って演習したら、倍未満で終了予定ね。そうでなかったら、三倍か或いは……。」

「お、おう。ま、まあ、ヤバいことしなきゃいいんだけどな。」

「演習相手が四大鎮守府とか函館辺りだったら大丈夫かもしれないけど、普通の鎮守府相手だったらなにをするかわからないわね。正直なところ、未知数よ。」

「なんで俺、ここの提督なんだろう。」

「しつかりしなさい。あんたがへっぴり腰だと、出来るものも出来なくなるわ。」

「わかったよ、母さん。」

「なんでもう、こんな風になっているのかしらね。あんた、変態なの?」

「ちよ、叢雲さん、叢雲さん、アーツ!」

「演習が無事に済んだな。」

「ええ、目潰しも金的もなかったし、火も吐かなかったし、クリンチも引つ掻きも嘯みつきもなかったわ。その上、トンカチも栓抜きも暗器も使わなかったし。上々ね。まとも
に勝ててよかったわ。」

「俺の堅実な方針のお陰だ。」

「はいはい。そういうことにしときましょ。」

「取り敢えず、反則しなかった全員を誉めてやらないとな。」

「ふざけた発言をした挙げ句、刺されないようにしなさい。」

「わかっている、わかっている。」

「じろじろ見ないようにね。」

「それって、当たり前だろ。」

「どうだか。いつもいつもエロい目で見られて困るって駆逐艦の子たちが言っていたわ
よ。」

「事実無根だ！」

「あんた、顔や存在そのものがセクハラなんだからもっと気をつけなさい。」

「ひでえ！」

「転属を現在進行形で検討中の艦娘だっているのよ。もっと自覚しなさい。」

「え、マジ？」

「ホントよ。」

「あの、その、訴訟沙汰にはなりませんよね、叢雲さん。」

「私たちには戸籍も人権もないのに、訴訟なんて出来る訳ないでしょ。」

「そ、それもそうだよな。」

「ま、単に行方不明の司令官が一人増えるだけよ。」

「ちよ、叢雲様！ 叢雲様！ 叢雲様！」

この鎮守府に着いて驚いたのは、ここの艦娘が普段から非常に好戦的なことだ。

発言が過激な傾向にあり、並の感覚の人間では対応しきれないんじゃないかな？

全員戦闘狂と言っても過言ではない。

よそ様の戦艦や空母をトンカチで殴る駆逐艦がいるのは、うちくらいだと思う。

うち以外にいたら滅茶苦茶こわいが。

なににせよ、無茶苦茶な少女たちだ。

深海棲艦相手に近接戦闘を平気でかますのが通常運転とか、それなんてノルドの戦

士。

提督は既に五人行方不明になっているが、今もって彼らの消息が掴めていない。

物的証拠もなんらかの形跡も残されておらず、一切の手掛かりが見当たらない。彼らは一体、どうなつてしまつたのだろうか？

誰も、その答を教えてくれようとしなない。

「めっちゃ忙しいのに、なんで俺が炊事当番なんだ？」

「たぶん、あんたがカレー名人だからじゃないの。」

「よせよ、部下が見ている。」

「ほら、手伝つてあげるからさっさと作りなさい。」

「イエス、マム！」

「いつもこんな風にきびきびしていたらいいのに。」

「あー、やっと仕事が終わつた。」

「そうね。」

「仕事後の風呂は生き返るぜよ。」

「ちよつと、あんまり動かないでよ。ここ、狭いんだから。」

「わりー、わりー。」

「なに、じろじろ見ているのよ。」

「いやー、大変魅力的だと思って。」

「そういうのは、後にしなさい。」

「甘えたつていいじゃん。ウヒヒ。」

「ま、ちよつとくらいならいいわ。」

「バブー、バブー。」

仕事が終われば、後は叢雲に甘える時間。

彼女はなんだかんだで、世話好きなのだ。

嫁艦に甘えまくることが明日への活力源。

さあ、今宵も彼女を堪能してしまおうぞ。

「……備蓄は既に空であります!」

「ガンガン行くわよ! ついてらっしゃい!」

「それ、別の子の台詞!」

「細かいことはいいじゃない。ほら、早く再装填しなさい。」

「そんな、薄い本みたいにはいかないよ。」

「あら、口答えする気?」

「いえ、滅相ありません！」

そして、一日がようやく終わる。

「じゃあ、寝るか。」

「電気を消すわよ。」

「ああ、おやすみ、我が秘書艦殿。」

「ええ、おやすみなさい。あんた。」

CCCIV : ラインの悪魔

ライン戦線は、本当に、本当に地獄でした。

あの、不条理極まる戦場。

呆気なく失われてゆく命。

先任将校も練達の下士官も新兵も敵も味方も関係なく、次々にばたばたと死んでゆくのです。

人はなんともろいのでしよう。

そうした中、千載一遇の機会がありました。

敵対する共和国の主要な人員へ、『とどめの一撃（クーデグラ）』を与えることの出来る状況があつたのです。

私は欣喜雀躍しました。

これが、戦争を終わらせる好機だと。

ライヒのためだと。

帝国のためだと。

私の渴望を満たすネクターなのだ。

提案は、驚くほどにあっさりとなんと全否定されました。

思わず、目の前が真っ暗になります。

今すぐにもやらねばならないのに。

時間こそが、一秒が金一粒なのです。

咄嗟に上官へ反論してしまいました。

司令官に作戦を拒絶され、反射的に抗弁したところまでは覚えています。

そこから後の記憶が、一切ありません。

あの後、部下たちはどうなったのでしょうか。

あの、有能且つ勇猛果敢な部下たちは。

すべてを任せられるいとも素晴らしき副官のヴァイス中尉は、あのやや頼りないなが

らも不屈な帝国軍人の片鱗を見せ始めている新人のグランツは。

私の陽気な戦争狂たちは無事でしょうか。

もしも、願わくは、穏便な扱いになればよろしいのですが。

私のなにもかもを理解しておられるゼートウアー閣下ならば、悪いようにはされない

でしょう。

いつの間にか、私は真つ白な部屋にいました。

あのろくでなしの存在Xが管理している場所でしょうか。

よくわかりません。

気がつくのと、私は辞令書を手にしていました。

ご丁寧にも、帝国軍の正式な書式で転属命令が書かれています。

誰の仕業かは知りませんが、今度は海軍に所属するみたいです。

やれやれ、死ぬことも叶わないとは。

ああ、失礼しました。

状況を確認することばかりに気が急いでいて、ご挨拶が遅れてしまいました。

誠に、誠に申し訳なく思います。

申し遅れました。

帝国軍第二〇三遊撃航空魔導大隊を率いる、ターニャ・デグレチャフ魔導少佐であります。

突然、意識がふつと失われました。

少し船酔いに似た感覚が訪れます。

まるでテレビジョンの無線遠隔操作機器を弄ったかの如く、私は白い部屋から煉瓦造りの建造物前に移動していました。

やや散漫な夢を見るかの如く。

ふわふわした感覚を覚えます。

これはまさに奇々怪々。

何者の仕業でしょうか？

目の前に見えるのはどうやら、戦争用の建物みたいです。

昔見た、どこぞの鎮守府みたいにも思えました。

どうも記憶が曖昧ですけれど。

まさか、秋津島皇国にいるのでしょうか？

もしや、あの場所からここへ飛ばされた？

なんだか、違う気がしました。

ここは、どこなのでしょう？

そこへ、女の子が現れました。

セーラー服を着た少女が、軍服姿の私を見て驚愕していました。

彼女は少年兵ならぬ、少女兵なのかもしれません。

人のことは言えませぬね。

私自身が幼い姿ですから。

はてきて、彼女は敵なのか味方なのか。頬をだんだんと赤く染めてゆきました。

この子は、過度の緊張感に捕らわれているのかもしれない。微笑んでみたら、少女はますます頬に朱が増してゆきました。初々しい感じがして、自分自身の昔を思い出してしまいます。その娘は口を開きました。

「し、司令官？」

「えっ？」

彼女の上官は私のように若年者なのでしょうか？

妙なことを言いますね。

「あ、あの、すみません、どちら様でしょうか？」

「自分は、帝国軍第二〇三遊撃航空魔導大隊を預かるターニャ・デグレチャフ魔導少佐だ。」

「しよ、少佐殿?! し、失礼しました！」

反射的に敬礼する少女。

最低限の躰はされているようです。

私は帝国軍方式で返礼をしました。

娘の敬礼は海軍式なので、どうやらここは海軍基地の模様です。

潮のにおいが今更のように鼻腔をくすぐりました。

見渡せば、海が見えます。

紺碧の海が。

しかし、だがしかし。

斯様に素朴な少女の学徒兵まで用いているとは、この世界は末期戦みたいですね。

吹雪という名の少女兵に案内され、私は彼女の上官たちに会うこととなりました。

幸いというか、不幸というべきか、手元の忌々しくも呪われたエレニウム工廠製九五

式試作演算宝珠は『生きて』います。

術式が『此処』でも使えることの証左です。

いざとなればどうとでも出来得るでしょう。

精神汚染は厭なものです、場合によっては緊急措置が必要不可欠です。

普通に使えるエレニウム工廠製九七式演算宝珠もありますから、防殻術式すら展開出

来ない連中相手ならばこちらでも十分な火力を生み出せます。

魔導師がいなければ、の話ですが。

汚い花火を見るのは好みでないのですが、状況によつては致し方ないことになりま

しよう。

そうならないことを、仏様に祈るばかりです。

幼女、と言った方が近いような軍服を身にまとった子供が少佐と名乗った時、大本營のお偉方は大変困惑した。

最初は悪い冗談かと思われたが、その幼女はあまりにも自然に軍服を着こなしていたし、発言が厳しい訓練と実戦なくして語れないような代物だ。

つまり、彼女は『本物』だ。

異様な娘を見て、彼らは思った。

『また』異常事態か、と。

異常事態を引き受ける専門としての函館鎮守府送りにしようかとその場にいる全員が思った時、見計らったかのように大淀が書類を配った。

彼女の帝国軍に於ける勤務評定だという。

どこからこんなものが、と更なる困惑に包まれつつおっさんたちは書類に目を通す。曰く。

【士官学校】

野戦将校として必要水準を満たすと認む

【陸軍大学】

望みうる将校としての水準を満たす

【北方方面軍】

指揮権に対する明確な異議申し立てがあつたために配置転換を実施

【西部方面軍】

功罪相反するために評価しがたい（抗命未遂あり）

【戦技研所技術廠】

成果は認めるが計画の採算性は最悪

一読したお偉方は揃って悩ましてげな表情になる。

何者なのだ、この幼女は？

この息苦しい時代を切り開く鍵なのか？

それとも、邪神に忠実なる尖兵なのか？

彼女を連れてきた吹雪の反応も気になる。

熱狂的な表情で幼い少佐を見つめていた。

熱情に浮かされたみたいに。

初恋に燃える乙女みたいに。

あれはなんだ？
なんなのだ？

彼女はおそらく、大変有能な野戦将校。
ならば、艦娘を率いる提督にもなれる。
なれる筈だ。

いや、すぐになつてもらわねばならない。
妖精を興味津々で見つめているのだから。

大湊（おおみなと）や小樽や函館の提督なども不安材料だが、彼女も彼ら同様或いはそれ以上の危険分子に見えなくもない。

まさかな。

おっさんたちは無意識的に、同じ仕草を行う首振り人形と化した。
客観的には気持ち悪いこと、この上ない。

結局、絶え間ない目配せとちっちゃなメモ用紙を学生のように回した末に彼女が新任提督となることは決定された。

老害……もとい、老人の一人が幼女へ命令する。

「君には艦娘を率いて戦ってもらおうこととなる。これに否やはなからうな。」

「拝命いたしました。」

「やれるのだろうか？」

沈黙する少女。

重ねて老人が問いかける。

「答えよ、少佐。」

「お言葉ではありますが、小官は答えようの無い問いに返答する手間を省いたに過ぎません。」

「なんだと？」

「小官は軍人であつて、口舌の徒ではありません。口先を用いた戦働きの証明は致しかねます。」

そこへ、函館の提督をよく世話しているまともな将官が話しかけた。

「少佐は、成果を出せるのだね。」

「結果をご覧ください。そのために、私は『此処』にいるのでしようから。」

幼女は日本の防衛を担っている筈の重鎮たちに問いかける。

最前線へ出向いた経験すら怪しげな老人たちに問いかけた。

「失礼ですが、編成期限は如何程いただけるのでしょうか？ それは何週間貰えるのですか？」

「五日だ。」

スラブ式の冗談をまともに喰らったかのような顔をするゲルマン系ローティーン。呆けた顔すら、美しい。

連邦のとある少女大好きな男ならば、喜び勇んで写真撮影に興じることであろう。彼女は眉をひそめた。

理解出来ない。

理解したくもない。

理解する気も起こらない。

それでも、敢えて重ねて問いかける。

「今、なんとおっしゃいました？」

「五日だと言ったのだ、少佐。現在、大規模作戦の発動中でね。有能な指揮官は一人でも最前線に送り込みたいのだ。艦娘部隊を直ぐに編成し、一〇日以内に東部戦区へ移動せよ。戦線投入は、遅くとも今日より三週間後となる。」

その傲慢な言い種にデグレチャフは即時に爆裂術式を展開しようかとも考えたが、居並ぶ面々の頭のネジが緩かろうと吹き飛んでいようと愚鈍だろうと、今はこの劣悪な拡声器をくりつけたような屑鉄どもが彼女の上官に当たるのだ。

極一部は違うようだが。

いや、屑鉄に失礼だな。

塵芥（じんかい）と言った方が正しいのかもしれない。

これはもう、ちりあくたー。

その程度の連中だ。

彼女はそう思った。

誰しもが驚き、すべての提督が同じ反応をするだろう命令をいとも簡単に行う連中。

こいつらは無事に戦後を迎えることなど無いだろうと思いつつ、ターニャ・デグレ
チャフはそれでも一矢報いようとする。

「ご命令とあらば、全力を尽くす所存ではありますが……。」

『多少』は大目に見る。手段は問わずに、やってのける。」

「……了解しました。」

実戦経験の乏しい参謀や将官が多すぎる。

心中の深い嘆きを飲み込みつつ、歴戦の野戦指揮官は意識を切り替える。
お偉方の後ろで、バールのようなモノを持った大淀がやさしく微笑んだ。

聖女の如く、無垢な表情で。

社会人と同じく、軍人やいは軍属という存在は、訓練されていなければ制服を着てい

ようとも到底使い物にはならないのです。

人的資本とは、まさにこのことを言い得た表現なのでしょう。

まったくもつて、ここはとんだ世界です。

一部の艦娘を資源とも見なさずに使い捨てるだなんて。

せめて賢く使い捨てるならば議論くらいは出来得るのですが、ここでは無作為に無分別に為されてゆきます。

愚かな。

なんとも愚かな。

それは許しがたい浪費でしょう。

おまけに、再利用という資源の効率的運用についても未発達。

不可解極まります。

資本投資に一体幾らかかっているのか、運用している者たちは理解しているのでしょうか？

艦娘の育成費用と期間を思えば、ぼんぼんと轟沈される訳にはいかないというのに。

副官、嗚呼、副官。

有能極まるヴァイス中尉がいなくて、とても残念だ。

もし彼がいてくれたならば、すべて丸投げしたのに。

この世界で新しい有能な副官を得なくてはならない。

あの函館鎮守府の大淀が副官候補としてよきそうだったけれど、既に上官に忠誠を尽くしているのは見ればわかる。

残念だ。

一度会つてみたいものだな、その男に。

取り敢えずは、兵卒を集めなくてはならない。

都合のよいことには、ここ大本営には未所属の艦娘が何名もいる。

出戻りだろうが、問題児だろうが、関係ない。

使えそうな兵隊を引き抜けばよからうなのだ。

ターニヤ・デグレチャフは以前募兵する時に使った文言を少し弄り、彼女へ宛がわれた部屋の前に紙を貼り付けた。

曰く。

『常に彼を導き、常に彼を見捨てず、常に道なき道を往き、常に屈さず、常に戦場にある。すべては暁の水平線に勝利を刻むために。求む艦娘、至難の戦場、僅かな報酬、剣林弾雨の暗い日々、絶えざる危険、生還の保証なし。生還の暁には名誉と称賛を得る。』

一時間もかからずに、驚くほどの応募者がやって来た。

対応に困る程に。

いの一番にやつて来た吹雪を臨時副官として、ターニヤは次々に訪れる艦娘たちを捌いてゆく。

様子を見に来た大本営所属の大淀を捕まえ、彼女の意見を取り入れつつ、簡潔無比な面接を続けた。

癖が有りすぎて制御しにくいだろう古参兵や戦場を経験していない新兵含め、様々な艦娘が美しき幼女の前に集結する。

炎に群がる蝶の如く。

大本営で任命を待つ未所属提督が複数いる中、あつさりと彼らを抜き去った金髪碧眼の美少女が、勇猛果敢な戦闘団を形成するに至った。

彼女をなめきつて突っかかる愚鈍蒙昧な者は何人かいたが、彼らはその日の内によくて退任悪くて殉職した。

自室で一酸化炭素中毒になった者すらいたという。

幼女に従う艦娘たちへの訓練は実に猛烈苛烈で、たまたまそれを見かねて意見した横須賀の提督が一週間入院する『事件』まで発生した。

目撃者が殆どいなかったことから『事件』は嚴重に秘匿され、提督は熱射病と熱中症との合併症によって入院したのだと公式に発表された。

ははは。

楽しい。

なかなか楽しいじゃないか。

この風、この匂い。

これこそが戦場よ。

「擬似シマーツ・モード、展開。釣り野伏せを行うぞ。」

「「「「はっ！」「」」」」

深海棲艦の哨戒部隊とやらに一当てしてみたが、薩摩隼人方式は通じるようだ。六個部隊のいずれも、今は相応に機能している。

まだぎこちなさは取れきっていないものの、これから次第だろう。戦争処女を砲弾や魚雷で失うがいい。

生き残れば、お前らには古兵（ふるつわもの）の称号を得る権利が与えられる。

さてと、再びお仕事の時間だ。

新しいお客さんのお出ましだ。

ターニヤが笑顔になる。

紅い薔薇が花開くかの如く。

白すぎる体に金髪と碧眼の、造形美に溢れたビスクドールの如く。

それは、変態極まるロリヤならば有無を言わさず連邦全土の収容所から一個中隊どころか大隊程度でも随喜の涙流しつつ悦楽の表情で即時に送ってくれるだろう代物。

敵対する深海棲艦たちは不可解な敵対者へ怯えのような感情を発露しつつ、それでも懸命に砲撃する。

きつと倒さねばならぬと決意して。

悲壮な決意の元、彼女たちは敵に向かって突撃を敢行した。

平和、平和、平和。

私たちの希求するモノ。

あつて欲しいモノ。

さあ、私たちの戦争を始めようじゃないか。

平和のために。

我らの愛してやまない平和のために。

……。

それにつけても、身長と珈琲の欲しさよ。

嗚呼、もつと背が高くなりたい。

嗚呼、旨い珈琲が飲みたい。

そう。

私が望むのは平和。

珈琲が静かに楽しめる平和。

私は熱狂的な平和主義者だ。

さあ、諸君。

平和のために戦争をしようじゃないか。

CCCV：赤い浮き輪さんたちはいつも白い娘に寄り添っている

天使のきざしが見える極地。

氷上を舞う、二名の深海棲艦。

急遽あつらえられた特設会場。

人型の異形がひしめいている。

殆どのモノが嬉しそうな表情をしていた。

絢爛豪華な雰囲気と衣装で二名が魅せる。

一幅（いっぷく）の絵画のごときセカイ。

吹雪の止んだ、天然の舞台で美しき異形が優雅に踊る。

その麗しき様子に、幹部たちはただただため息を吐く。

そんな有り様に、護衛棲水姫は苦々しい表情となった。

（マルデ、ニンゲンミタイジャナイカ）

そう、思う。

なんの余興のつもりかわからぬが、深海水祭と題して上司の趣味を見せつけられる部下の気持ちも考えて欲しい。

水翔王女と水上棲姫とによる華麗な四回転とイナバウアーが圧倒的技術で行われ、それに魅せられた姫鬼級の割れんばかりの拍手で舞台は幕を閉じた。

武闘派として知られる戦艦級の娘たちが喜悦の表情を浮かべる様子に、護衛棲水姫は呆れ返ってしまう。

北方棲姫は別にいい。

彼女は別枠なのだし。

びよんびよん跳ね回る様は実に可愛い。

あんなに可愛い存在をいじめる艦娘滅ぶべし、慈悲はない。

(マツタク、オメデタイヨ)

周囲が大興奮し、まだまだ万雷の拍手が聞こえる中、冷めた彼女は内心嘆息する。

あまりにもニンゲンくさい。

なんだこの茶番劇はと思う。

それでも一応、拍手はした。

なんとか、顔を取り繕って。

早く終わらないかなー、と考へつつ。

「貴女。」

興奮冷めやらぬ中、氷翔王女が洗練された所作で護衛棲水姫を指差した。

複数の視線が一斉に彼女へ殺到した。

不意を突かれた彼女はどぎまぎする。

「ワ、ワタシデスカ？」

「そうよ。」

ゆつくりと、生きる伝説が首肯した。

百花繚乱の笑みを浮かべて指示する。

「人間のいる鎮守府か泊地に行つて、潜入任務をしていらつしやいな。」

「エツ？ エエエツ!？」

嫌も応もない。

続けての一撃。

「じゃ、早速いきなさい。」

「エ、アツ、ハ、ハイッ！」

それがとどめとなつた。

指名された彼女はなにがなんだかよくわからないままに今一つ目的不明な密命を帯

びて、人間の待つ基地へと単独航行するのだった。

ベーイ、ベーイと時折ぼやきながら。

ムリムリムリと呪詛（じゅそ）のように嘆きの言葉を吐きながら。

浮き輪さんたちにやさしく慰められつつ。

「ケイクウボノ『ガンビア・ベイ』デス。ヨロシクオネガイシマス。」

肌も服もツインテール状の髪も真っ白けなメリケンの軽空母が、とある泊地に着任した。

気づいたら洋上に浮かんでいたと、彼女はそう主張した。

艦載機を飛ばしていたらこの基地を見つけたので、それでここへ来たのだと言った。

別段矛盾点は見当たらなかったもので、泊地の面々はその話にすんなり納得した。

彼女は腰回りのベルトに、三つの浮き輪を付けている。

あれはなにかの装備なのだろうか？

泊地は現在、初めてのメリケン艦娘着任に沸いていた。

なんせ、現在着任が確認されているのは函館と小笠原だけなのだから。

空母系艦娘が少ない関係もあり、彼女は熱烈歓迎を受けたのであった。

この泊地では正規空母一名、軽空母二名、航空駆逐艦一名となっているが、これで戦術的選択肢が増えると。

駆逐艦の安全性がより高められると、提督も大喜びであった。

(チヨロイナ、コイツラ)

彼女はにやりと嗤う。

『ガンビア・ベイ』に偽装しているつもりがさほどでもないように見えて、意外と擬態が上手くいつているかに見える護衛棲水姫だった。

手に持ったベニヤ板は飛行甲板を模したもので本来の性能など望むべくもないが、飾りなので一切問題ない。

割れたら木工ボンドで直せばいいし、壊れたら適当なものにペンキを塗ればいいさね。

ぎこちない日本語も、メリケン艦娘だからという理由で疑念すら持たれなかった。

ちよろい。

なんともちよろい。

護衛棲水姫は泊地の面々が少し可哀想に思えてきた。

その娘を見た時、提督は心臓がどきどきばつくんするのを止められなかった。

護衛棲水姫改め『ガンビア・ベイ』もどきにズキーンと心を撃ち抜かれ、そして童貞提督の初恋が始まる。

艦娘に感じるのとは異なるときめき。

何故彼女を見たら、心がこんなに震えるのだろうか？

『ガンビア・ベイ』をもてなすための酒宴が始まった。

どんちゃん騒ぎをしたくてもなかなか出来ない状況故に、こうした正当な理由があるとそりゃあもう本気で楽しむのだ。

酒の大好きな軽空母と重巡洋艦が音頭を取り、賑やかに宴が開催される。

料理上手の軽空母が函館の同姿艦から直伝された業を振るい、次々においしい料理を作り上げてゆく。

手伝う駆逐艦たちも手慣れたもので、下ごしらえをしたり、料理を運んだり、洗い物をしたり、とお手のものだ。

その去就が目目されている提督は、新任の軽空母にデレデレだった。

何名かの艦娘が怪しく目を光らせている。

重婚になるのか、ならないのか。

取材記者魂溢れる重巡洋艦はどきどきしながら、事態の推移を見守っている。

防水機能を施された写真機で提督を激写しながら、特ダネを狙ってさえた。オイル漏れる鼻腔を時々拭い、愛する彼の魅力を切り取らねばと奮闘する。

あの提督はいい男だ。

特に美形という訳でもないが、気配り目配り心配りの三拍子が揃った提督は稀少な存在である。

彼を慕って幕下（ばっか）に加わった艦娘も少なくない。

そのため、新しい娘はぎらつく艦娘たちの視線にさらされ、時折武者震いのように震えるのだった。

そんな彼女をやさしく撫で、浮き輪さんたちはつぶらな瞳で白い異形を見つめた。

『ガンビア・ベイ』が着任して以来、交戦した深海棲艦の逃亡率が格段に上昇した。それに比例して、艦娘たちの被弾率が低下している。

彼女がいると、戦闘に至った敵さんが早々に撤退するのだ。

仕留めきれないという問題が発生してはいるものの、安全海域が拡大されることは好ましいとされた。

敵駆逐艦群の撃沈数に於いては彼女が開幕雷撃でぶちかましまくっているので、現在

はトンカツ大好き系重巡洋艦や戦闘機械系空母と戦績争いを繰り広げている。

提督に誉められた彼女が、頬を染める場面も増えている。

頭を撫でられ、うっとりする潜入者。

浮き輪さんたちは、生暖かい視線を姫級深海棲艦へ投げかけるのだった。

密やかに逢瀬を楽しむ二名。

女と男。

ほんの僅かな時間。

一秒さえもいと美しい。

ほんの数秒二つの影が接触し、またすぐに離れる。

物理的な距離はなかなか近づけなくとも、心の距離は近づきつつある。

浮き輪さんたちは、茂みに隠れて写真機を向ける艦娘にウィンクした。

翌日。

壁新聞に密会の記事は掲載されなかった。

ほの暗い提督私室。

二つの影が激しく揺らめいた。
ぎこちない動きで。

それは何度も何度も形を変え、影絵のように壁へ模様を描いてゆく。

「イクノ？　ワタシヲノコシテ、サキニスソデシマウノ？」

提督に寄り添いながら、彼女はそう言った。

なんとか再装填しようと試みる彼は、ひたすら白い娘に溺れる。

彼らを静かに見守りながら、浮き輪さんたちはやさしくやさしく微笑んだ。

C C C V I : 斟酌と忖度と

「次のニュースです。盛登学園校舎用地の誘致問題で東京地検特捜部に任意同行し本日保釈された太平民主党の阿江晋太郎氏ですが、夕方行われた後援会主催の講演で大阪城の昇降機は大失敗だとする発言があり、政界内外で大きな波紋が広がっています。この阿江氏の発言に対し、岡山城、熱海城、名古屋城の各関係者からの厳しい批判が太平民主党本部に寄せられました。今月末に行われる参議院選挙の動向にも、深刻な影響があるものと予想されます。これに対し、藤村官房長官は阿江氏の発言が一政治家の個人的見解であるとした上で、社会的弱者への配慮に著しく欠けた発言だったと陳謝しました。大泉首相が夏の参議院選挙に向け、阿江氏を切り離すのか否かが注目されています。……ただいま、速報が入りました。大阪府の府知事及び大阪市の市長の連名で、阿江氏の発言に対する撤回要請が太平民主党本部へ行われました。これに対し、阿江氏は、あれは城郭の復元様式への言及であって、年配の方などの社会的弱者をないがしろにする発言ではなかったと釈明しました。当面、阿江氏は発言の是非について問われ続

ける日々が継続する模様です。月末の選挙への影響が懸念されるとして、太平民主党内では阿江氏の内容なき軽率さへの反発まで発生しており、今後の動向が注目されます。」

政治家は言葉が攻防一体の武器であり防具でもあると思うのだが、忖度(そんたく)などという奇妙な言葉が流行って勇み足な政治家まで続出するほどの事態が相次いでいる。

現在、高度成長期以前の生活水準から先に進むのが困難だからだろうか。

無神経、というか、ユーモアにすらなっていない無神経な発言が時折政治家から放たれると、虚しい気分にならないでもない。

なにを言っているのか今一つわかりにくくすつからかんな言葉の羅列は、気をつけるべきだろう。

それは政治家に限らず、会社のお偉いさんなどにも共通する問題だと思う。

思うのだが、それはなかなか叶わない問題だ。

発言者がそれを大きな問題だと認識出来ない限り、事態は改善されないからだ。

自分自身の過ちを認めようとしていない人間など、幾らでもいる。

私にだって、そうした気持ちは存在する。

そこを冷静に見つめ、よりよくするのが大切ではなからうか。

嗚呼、函館に早く帰りたい。

あの風吹く街へ。

函館メロンや夕張メロンや富良野メロンを食べたいものだ。

仁木のさくらんぼもいいな。

夕張メロンがそんなにお好きなんですかと偉く食いついてきた子もいたけれど、あれはなんだったんだ？

おおつと、意識を会議に向けよう。

しかしまあ、だらだらと会議などしている場合じゃないだろうに。

ホワイトボードを前に、偉そうなおおつさんが延々と話をしていた。

同じような話を繰り返す。

カセットテープみたいに。

……。

今は、カセットテープすらも知らない世代が増えているんだろう。

昔は電子計算機の外部記憶装置として使っていたんだよ、と言ったら艦娘の恰好をした女の子たちがびっくりしていたものな。

六〇分しか録音出来ないんですか、とか言われたし。

私自身は六〇分が使いやすいかった。

録音時間をやりくりするのがコツだったんだが、それは今風じゃないんだよなあ。

一二〇分のテープはわりかし切れやすいから使わなかったし、今も売られているんだけど、どうやって使うんですかと聞かれた時はちよっこし驚いた。

難しいことはないんだよ、とやり方を説明したら妙に感心されたのはよい思い出だ。

艦娘の場合は逆に、カセットテープ自体に驚いていた。

艦娘なのか否かは、カセットテープの話をしたらわかるんじゃないかな？

「……であるからして、今後の海域解放についての横須賀呉舞鶴佐世保の各大型鎮守府の重要性は言うまでもないものだが、中型小型の各鎮守府は、大型鎮守府の動向に斟酌（しんしゃく）し忖度することが非常に大切である。」

なんだよ、斟酌とか忖度って。

訳わからん。

意味不明だ。

太平民主党では問題が頻発して既に使用禁止になった言葉だが、他所では今も使われている。

大本営での会議や説明会には無駄が多い。

こんなことをしている場合じゃないのに。

小田原評定やウイーン会議じゃないのに。

会議は踊る、されど回らぬ、か。

人類の存亡の危機にもかかわらず。

なんともやりきれないものよな。

人は滅亡するまで内ゲバをやめられない、悲しい生き物なのかもしれない。

フーシエがいたら……いや、あんな妖怪がいたら大変なことになる。

もち豚……間違えた、持ち札だけでなんとかしなくちやいけないのがツライよな。

ちよつと離れた席に、ちよこんと座った金髪の幼女が見える。

新しく加わった幼い少佐、いや、今回の大型作戦で功績を上げて昇進したから今は中

佐か。

幼すぎると思うのだが、彼女自身はなかなかのやり手らしい。

中身がおっさんなんじゃないか、との冗談まで聞こえてくる。

英国海軍中佐だったらあの秘密諜報部員だが、現在国内に相当数の諜報員が跳梁跋扈

していると聞き及んでいる。

防諜が機能していない可能性も少なくないから、気をつけないとな。

小樽は間諜天国だと、自嘲気味にあの提督が言っていたな。

彼女だったら、逆にそういった連中を利用していそうだが。

ターニヤ・デグレチャフ中佐か。

名前からするとロシア系なのか？

タチアナかタチアーナが正式か？

ドイツ語と日本語の双方を滑らかに喋ったらしいが、大変興味深い。艦娘を大切に扱ってくれるならば、なおいいな。

長々と続く会議の休憩時間。

貴重な筈の精神を休める時。

それを堪能するは能わない。

広報の富竹中尉に広報誌の取材と撮影をされる。

周囲の提督たちがニヤニヤしたり、嫉妬や侮蔑の視線を向けてきた。

「富竹フラッシュュー！」

妙な掛け声と共に写真をパチパチ撮る眼鏡男子。

トミーと呼んでくださいとのたまう、筋肉男だ。

こういうのが最近は流行っているのだろうかね？

美人看護士と付き合っているとの噂もある人物。

駆逐艦たちが好奇心満載で噂していた。

エグくて過激な下ネタはやめさせよう。

脱いで欲しいと言われたが、丁重にお断りした。

どこに需要があんねん。

何故だか興奮しているように見える提督もいた。

……気のせい、だよな。

ああ、やっと終わった。

長い長い中身の無い会議が、ようやく終わった。

後北条氏もびっくりだ。

阿江氏の物言いは長いと今一つなにを言っているのかよくわからないが、会議でだら話される内容も似たり寄ったりだ。

鎮守府の業務が大変なんだから、頻繁に呼び出さないでいただきたい。

まあ、それはそれとして。

付き合いのある提督たちと共に、横須賀の旨い店巡りに向かおうじゃないか。

このご時世では、手頃な価格でうまい店という存在はまさに稀少品だ。

流通が復活しつつあるけれど、東京は未だに問題多発地域の汚名返上が出来ない。

大規模な暴動は鎮圧されたものの、小規模な暴動は最近も断続的に発生している。全国津々浦々から様々な品が集まってきたきらびやかな時代は、既に過去のものになりつつあった。

経済の中心はとつくに西日本に移行しているし、仮に戦後東京中心の復興計画が発表されたとしても、反発は根強いものとなるであろう。

都庁があつた辺りはまだ修復しきれていないし、鉄道網もガタガタだ。

汽車の本数は往時に比べ激減しているし、遅延も多発化の傾向にある。

戦後の復興に三〇年はかかるとする試算もあるし、五年ほどで決着がついたとしても完全な復興にはこれから三五年もかかる寸法になる。

三五年後の日本や世界はどうなっているのだろうか？

私は死んでいるかも知れないから別段かまわれないが、残された艦娘はどうなるんだろうな？

そういう話をしたら、艦娘の皆が怒った。

泣き出す艦娘までいるので自重するようにはしているが、希望のある時代が来たらいいなと思う。

コンビニエンスストアは業態そのものの維持が難しく、今や全国各地にそのむくろを

さらしている。

不法占拠者や不法使用が目下の問題だ。

うちの初雪や望月によると、何故かやたらと流行っているゾンビ映画やドラマの撮影でしばしば使われているらしい。

石油由来の製品は今や安く使われる品でなくなっており、これからも安価に使われることは難しいと考えられている。

ひびだらけの高速道路。
サビだらけのトラック。

まだまだ高いガソリン。

全然高くない給与。

全然集まらない運転手。

遠ざかり続ける利便性。

大本営も本音ではそろそろ都内に本部を移転したいらしいが、基本的社会基盤のあまりの酷さに断念している。

欧州も一部の大都市を除くと酷いものらしいし、戦争が終わっても復興にべらぼうな時間と金がかかるだろう。

夜。

座敷を借りての宴会。

これでえんかい。

なんてな。

いつの間にか幼女中佐が私の隣に座っており、彼女が有能な副官を熱望している旨聞かされるのだった。

副官か。

私も欲しいな。

そう言ったら、大淀がお冠になりそうだが。

彼女曰く、彼女自身は平和主義者だそうだな。

ロシアンジョークか？

それとも、ジャーマンジョークか？

阿江氏の発言よりは、遙かに冗談として洗練されているかに思える。

艦娘と共に深海棲艦へ突撃するような幼女将校が、平和主義者だと？

思わず笑ってしまったら、彼女は頬を膨らませつつ睨み付けてきた。

可愛
い。

CCC VII：東京都台東区山谷のトンかつライス

新しく開設するための屯所候補地として南三原や千歳の駅舎辺りに格安のよい物件があるというので下見に行ったが、それは予想を遥かに上回るボロさであった。

人間による改修も、妖精による改修も、あれでは上手くいかまいて。

海の潮に手酷くやられたのか屋内はかなり湿気っていて、錆びやカビが酷い。まったくの無駄骨で無駄足だった。

しかも、追い打ちをかけるように雨が降り出す。

泣きつ面に蜂だ。

行きに外房線を使った私は、帰りは内房線を使って帝都に向かった。

関東圏も社会的な復興に向けて力を尽くしているとは思うのだが、まだまだ環境は厳しいようだ。

平日の昼前だからか車内はがらんとしていて、私の乗る車輛では老人が数名見えるくらいである。

車輛内の吊り広告も、二枚あるきり。

二枚ともに旧國鐵の関連。

なんともわびしい風景だ。

雨に濡れる街を汽車が走る。

警笛鳴らしてひたすら走る。

西船橋から新木場と八丁堀を經由して日比谷線に乗り、南千住へと向かった。昔、その辺りの定食屋で食べた料理が旨かったという記憶に従って向かった。

今日の昼食はそこで摂ろう。

なに、大本営には夕方着けばいいだろう。

南千住駅を降りて、ぶらぶら歩き始める。

人々が小走りで雨の街を走り去ってゆく。

その流れに逆らうが如く、のんびり歩く。

腹が、減ってきた。

てくてく歩いている内、ようやく目的地の定食屋が見えてくる。

ここだ。

ここで食べるぞ。

大和がアイロンを当ててくれたハンカチーフで髪や服など拭きつつ入ると、帽子をかぶった中年男性や初老の男性で店内は混雑していた。

眼鏡をかけ、真つ昼間から麦ジュースをうはうはとのむ男性もいる。

オムライスにナポリタンに、とんかつ。

壁に書かれている献立が私を迷わせる。

……焦るんじゃない。

私は腹が減っているだけなんだ。

はてさて、今日の昼はどれにしようか？

ふと周りを見渡すと、客の多くがとんかつをわしわし食べている。

ならば、その流れに乗るも一興。

「さあーて、張り切っていつちやいますか。てい……お客さん、なに食べる？」

元気いっぱいな感じの女給が注文を取りに来た。

どこかで見たような娘だが、深入りしない方が無難だろう。

愛想がよくって、元気で可愛らしい。

それ以上、なにを求めるといふのか。

さあ、注文しよう。

「とんかつとライスとおしんこをください。」

「おつけー。おしんこはなににする?」

「そうですね、なにがあります?」

「えーと、茄子と胡瓜があるわ。」

「では両方とも。それととん汁。」

「わつかりました。あつ、そうだ。てい……お客さん、お芋食べる? 少しならわけたげるよ。」

「ではそれも。」

「まっかせなさいー!」

店にいる男性客たちが全員にこにこしながら彼女を見ている。

彼らからすると、娘か孫のように見えているのかもしれない。

何故だか、北信の定食屋で元気に働く元霞を思い出した。

「いらつしやい。食べてくの?」

店に新たに入つて来た初老の男性へ、少女がにこやかに話しかけた。

「持ち帰りでライスととん汁。」

「まっかせなさいー!」

持ち帰り!

そういうのもあるのか。

注文を素早く捌（さば）く少女。

その姿はてきぱきしていて、実に小気味いい程だ。

「はーい、お待ちどうさま。」

そして。

飯が、来た。

【提督 s セレクション】

〈茄子のおしんこと胡瓜のおしんこ〉

それぞれほとんどまるまるひとつ分

〈麦茶〉

ジョッキにたつぷり

〈とん汁〉

豆腐と豚肉の具沢山

汁はたつぷり

〈とんかつ〉

揚げたてのとんかつと横に多量のキャベツの千切り

練りがらしを乗せて召し上がれ

〈ライス〉

麦入りで量多し

〈お芋〉

ほつくほくのふかしたもの

おいしいよ

うーん、とんかつととん汁とで豚がかぶってしまった。

ああ、この定食屋ではとん汁とライスで十分だったな。

久々だったから、量を間違えた。

まっ、いつか。

うん、旨い。

やはり、この店、正解。

さくさくした衣のとんかつは、肉汁がじわりと口中に広がって心地よい。

とん汁も豊かな慈味を感じる。

麦飯との相性はどちらもバツチリだ。

このおしんが絶妙な漬かり具合と思う。
豚尽くしの中でとつても爽やかな存在だ。

このお芋もほくほくしていて甘くて旨い。

店内の客のほとんどが、日中から酒をかつくらっているようだ。

赤ら顔のおっさんまみれで、女性には彼女しかいない。

女給の少女は、おっさんたちを程よくいなしていた。

すすいと男の海を泳ぐかの如くに、注文を取ったり皿を器用に下げたりしていた。

ふう、旨かった。

支払いを済ませると、くりくりとした眼を輝かせながら少女が至近距離で話しかけてきた。

「梅雨があければ、夏だよ。海開きでは、いっちばんに泳ぎたいな。ね？」

「泳げるといいですね。」

「あつ、なんか他人行儀だ。」

「そもそも、他人でしょう。」

「袖すり合うも多生の縁、って言うじゃない。」

「若いのによくご存知で。」

「いっちばーんになるためには、教養も必要なのよ。」

「成る程。」

海開き、か。

栃木、群馬、埼玉の各県からは要望が相次いでいるという。

不定期解放ではなく、夏場は常時解放して欲しいのやもしれぬ。

景気回復策というほどではないにせよ、安全性が確保されているならば泳ぎたい人もちらほら出てくるのかもしれない。

人が動けば、景気も動く。

政治家たちも暗躍していることだろう。

私たちはただただ海を安全にしてゆくだけだ。

それが我らの使命。

それこそが、我らの生きる道。

外に出ると、雨が止んでいる。

「止まない雨はないのよ。なんちて。」

いつの間にかすぐ後ろにいた娘が、はにかみながらそう言った。

「まいどありー♪ また来てねー！」

少女は店先まで出て来て、ぶんぶんと手を振ってくれた。

ありがたい。

また来よう。

そう思った。

さて、横須賀に向かうか。

ようやく明治通りに出た。

タクシーが来れば乗ろう。

来なければ、歩いて地下鉄日比谷線の三ノ輪駅に出ればいい。

私は得体の知れない奇妙な満足感を味わいつつ、新たな屯所候補地に思いを馳せた。

CCCⅧ：夏の駆逐艦

提督という、今のこのご時世ではけっこうな人気職業に就いて半年。

それは、私にとつてとても長く続けられるような仕事ではなかった。

それでもやらねばならないのが辛いところだ。

艦娘と呼ばれる戦闘系少女たちとの距離感はさっぱりわからないし、昭和感溢れる民家を改造した屯所で雑魚寝する生活は緊張する一方だ。

幸いだったのは、その肝心の艦娘たちからさほど嫌われなかったことか。

いや、彼女たちは私に対してなにかを飲み込んでいたのかもしれないが。

函館鎮守府の提督はこちらが恐縮するほど親身になってくれる人物で、だからこそ彼は大本営から非常に煙たく思われているらしい。

提督がいるからこそ、艦娘は十全に動けるのだと彼は言う。

そんなものかねえ。

促成栽培される提督の一部が退役したり行方不明になっている話は、訓練校で散々耳

にした。

訓練校で貰える金を貯金し、提督になって三年働き、その後退役して適当に暮らすとの目標を持つ者もちらほらいたが、そうした手合いは大抵訓練途中で行方不明になるか大本営での業務に耐えられなくてそのまま辞めたりしていた。

訓練二日目で逐電した奴もいたな。

たまに大本営直属のツインテール系空母の教官が訓練校へふらりとやって来て、艦娘との付き合い方を教えてくれた。

彼女が時折大本営への愚痴を漏らしたり気分転換に函館鎮守府へ行くのを何度も見ていたので、艦娘とは意外と自由な存在なのだなあの認識を得た。

他の空母系教官や戦艦系教官並びに重巡洋艦系教官からは、彼女は自由枠だと言われた。

成る程。

提督の死因の二割程が、職場内での誤射や誤爆と聞く。
物騒なことだ。

稀に、外部の人間が誤射や誤爆に巻き込まれるという。

悲しいことだ。

その外部の人間の職種は様々で総合商社や製薬会社や建築会社に所属する会社員

だったり、市や府や都や県の議員だったりで、たまに国会議員がやられたこともあるそうな。

おそろしいことには例外なく全員即死なのに、事件性が皆無だと警察や検察が断言することだ。

ほんまかいな。

事件性は皆無とされたが、先日とある関係者のすっぱ抜きで政治家数名と彼らの秘書及び建設業者が次々芋づる式に逮捕された某学園問題もあるから、その内誰かがなにかをすっぱ抜くかもしれない。

私が管轄する屯所には駆逐艦二名が配属され、それは一名きりの屯所よりも難易度が高く思われた。

一対一で気まずい思いをするのも厭だが、二対一で無視される方がよりキツイかもしれない。

人間ではない彼女たちをこう評価するのは間違っているのかもしれないが、彼女たちの方が私の周りにいた人間たちよりもよほど人柄が練れていて人間味に満ちているかに見える。

まあ、これは私の偏見かもしれないが。

彼女たちは彼女たちなりに、私との距離感を見定めようとしているのだ。そうに違いない。

ピーマンと玉ねぎと挽肉のカレーを作って彼女たちに提供する。

まあまあね、という評価をもらった。

麻婆茄子を作ってみた。

評価はぼちぼちだった。

少し固くなった食パンを入手したので、フレンチトーストをこしらえてみる。鳳翔間宮の作る品と比較されてしまったけれども、味は概ね及第点を貰えた。

豚のしょうが焼きを作ったら、うちに来ていた他所の子たちにも好評だった。何故か、うちの子たちがお冠になる。

猪の肉をけっこう貰えたので、角煮とチャーシューとカツレットとを作ってみる。娘たちは旨そうに食べてくれた。

鹿肉を大量にいただいたので、ハンバーグにしたり餃子にしたり筑前煮にしたりカレーにしたりしてわしわし食べた。

他所の子たちもわいわい賑やかに食べた。

駆逐艦や軽巡洋艦が密集して食べる様はまるで学校給食だ。

なんせ二艦隊以上の艦娘の胃袋を満たさなくてはならない。

大量に作るため、何名かの艦娘に手伝ってもらう。

うちの子たちもおにぎりを作ってくれた。

屋内ではとても空間が足りないので、廃校になった学校の椅子や机を供与してもらい、それらを外で使っている。

お代わりしまくる彼女たちの勢いは、大量に作った筈のおかずをあっという間に駆逐してしまった。

間宮羊羹をいただく。

大変においしかった。

水羊羹を試作してみたら、そこそこの評価を得られた。

うちに寄った他所の子たちが旨そうに食べるのを見た彼女たちは、何故か激しい剣幕で私をなじった。

若いねえ。

やや理不尽にも思えたが、以前武田観柳齋みたいな上司からねちねちいじめられた経験があるので実に可愛いものだ。

執務室兼居間兼茶の間で仕事をしながら、お茶を飲む。

自家製ながら、そんなに味は悪くないと思う。

近場にコンビニエンスストアでもあればもう少し楽なのだが、そういった便利な店舗は徒歩圏内に存在しない。

あつたとしても、場合によっては道の駅というか地産地消的な物産を置いた販売店に変貌していたりする。

空き店舗になったままの存在が幾つもある事実を鑑（かんが）みれば、変貌を遂げた姿だとしても『活きている』だけマシなのかもしれない。

当たり前だったモノがどんどん消え、やがて風化してゆく。

今後のコンビニエンスストアは、もしかしたらそういう存在になってゆくのもかもしれない。

久しぶりにスーパーマーケットへ行く。

うちの子たちの機嫌も地味にいい感じ。

物流は近隣諸藩限定であるものの、そこそこの量がある。

内装が古びてはいるが、まだまだ踏ん張って欲しい所だ。

「ガンガン行くわよ！　ついてらっしゃい！」

「私も本気で行くから、即席提督、行くよ！」

若い子たちは元気で可愛いな。

近海での哨戒任務がうちの子たちの通常任務だ。

出撃の時間がやって来る。

今もって慣れない時間だ。

でも、平和を勝ち取るためには彼女たちへ命じなければならぬ。

この令呪……もとい、提督としての命令権をもって。

「今日も無事に帰ってきてくださいね。」

私は心を込めて、彼女たちに言った。

途端、少女たちは私に言葉を放った。

「そんなの当たり前でしょ。あんたはあたしがいなかったらなんにも出来ない即席提督なんだから。」

「そうよ、あんたは黙ってあたしたちのご飯を作ってればいいの。勿論、それはなににもまして優先されるべきことよ。わかる？ 即席司令官？」

近々開催される予定の夏祭りを密かに楽しみとしている彼女たちは、きりつとした顔で凜々しく出撃する。

浴衣も帯も下駄も用意した。

試着はしたようだが、まだ見せてくれない。

当日のお楽しみ、ということか。

今夜は冷麺にしようかな。

マヨネーズはかけるべきか、かけざるべきか。

それが問題だ。

CCCIX : マンチエスタータルト

仏蘭西菓子店の『フロランたん』が函館鎮守府の近くに出来た。

店主は欧州の民間伝承が好きで、おとぎ話を特に好むと聞いた。

仏蘭西のアルザス地方で修行した彼女はシヴェリア鉄道を使って本邦へ戻っており、開拓者魂に満ちているかに見える。

彼女はたくみな挿絵を描き、ブログに投稿されたその絵師としての腕は私の書いた小説の表紙絵も頼みたい程であった。

店主は林檎を使った菓子に一家言あるらしい。

独逸の冬は林檎が大人気であるけれども、仏蘭西だつて負けてはいない。

我らが北の国も七飯町や余市や旭川などは林檎の産地として知られているし、お隣の青森県は日本最強の林檎生産地だ。

最近は道内でも林檎の生産に力を入れているので、おいしい林檎を手に入れやすくなるのはよいことだと思う。

以前は岩手県並みの生産量を誇ったそうなので、往時の様相がその内甦るのかもしれない。

『フロランタン』には小さな果樹園が隣接していて、いつもではないが時折夜中に変わった林檎の樹が現れ実を生らせるといふ。

それらは何故か写真や映像に残せないらしいが、“あなたの秘密を教えて”という文句が筆記体で印刷物の如く林檎の表面に表れているそう。

はて、面妖な。

その林檎を持って、秘密を表明した時。

それは小さなお菓子に変容するという。

サブレとかタルトレットとか洋生菓子。

そうした変化が何故だか起こるといふ。

しかも、素早く食べないとすぐに悪くなるそう。

お菓子を食べた後、周辺には茸が幾つも発生して光るらしい。

……。

なに、そのファンタジー。

うーん、一応調査した方がいいのかな？

事務の田中さんにその話をしたら、微妙な顔で「まあ、提督だったら大丈夫でしょう。」

と言われた。

うちの艦娘たちは連れていかない方が無難かもしれない。

単独行動しようと思うと言ってみたら、教官たちを含むうちの艦娘たちから連れてけ連れてけの大合唱になってえらく騒がしくなった。

それを他所の艦娘たちがやんややんやと応援するので、実に困る。

結局、猛烈な柳生剣……間違えた、野球拳の末に吹雪がついてくることと相成った。

叢雲（むらくも）曙霞の三者による激戦は手に汗握る勢いだったし、長門妙高先生加賀対鳳翔間宮大鷹の連合対決は峻烈を極めて苛烈激烈大激突だった。

島風含む出張艦隊の面々が戻ってきたらまたやいのやいのと責められるだろうが、それは致し方ない。

まあ、レ級並みかそれ以上の戦闘力を持つ彼女が護衛ならば、大抵の危険は乗り切れるだろうと思う。

風の強い夜半。

『フロランたん』に到着して、店主と話をしてから果樹園へと向かう。

うつすら光る林檎の樹がその中であつた。

ははあ、これが例の樹だな。

店主が無造作に樹へ近づき、手近の林檎を手早くもいで我々に手渡す。じつくり見てみた。

確かに、林檎の表面には「あなたの秘密を教えて」と筆記体で記されている。まるで印刷したみたい。

これも一興と、林檎にごくごく小さな声でささやいてみた。

「私は艦娘たちから日々熱烈攻勢を受けていますが、恋愛がなにか未だによくわかりません。それ故に、彼女たちの折角の好意を台無しにしているのではないかとの不安があります。」

ぱっかん、と林檎が二つに割れ、マンチエスタータルトに変化した。

手のひら大の大きさである。

はて、けつたいな。

仏蘭西菓子店の果樹園なのに英国の菓子が出現するとはこれ如何に。

……まっ、いつか。

パイ生地にはラズベリーの砂糖煮が広げられていて、その上はカスタードクリームが覆っている。

表面には砕かれたココナッツが振りかけられていて、その頂上にはさくらんぼの砂糖漬けが載せられていた。

まごうことなきマンチェスタータルトだ。

写真でしか見たことはないのだけれども。

“eat me.”と流麗な筆致にて書かれた板状のチョコレートが、ちよこんときくらんぼの近くに鎮座している。

ホワイトチョコレートで書かれた優美なイタリック体の文言は、非常に魅惑的な雰囲気醸し出していた。

ほう、面白いじゃないか。

食べてやろうじゃないか。

口に含むと、カスタードクリームの中には檸檬の香りが加えられていて爽やかに口を旨みで蹂躪してゆく。

む、これはたまらぬ。

ラズベリーの酸味と甘味がそれへ素早く加勢し、ココナッツと共に夏色のナンシーが私のそばを駆け抜けていった。

吹雪は小さな声でなにかを呟いていたが、彼女の林檎も二つに割れてこちらはフィナンシエに変化する。

なんらかの法則性は存在するようだが、それがわかる程実験は出来るだろうか。下手なことをして火だるまも困るぞ。

怪しげな菓子を躊躇なく食べる吹雪。
勇者だな。

「これはとてもおいしいフィナンシェですね。」

吹雪はにっこり微笑んだ。

少し茶目っ気含んだ顔で。

何故だか、このうつすら光る樹が嗤っているかの錯覚を覚える。

それはささやかなイタズラのように。

CCCX : おっさん提督、検査入院す

寝台特急を下車して到着した地方都市は、思っていた以上の賑わいを見せていた。

はるばる函館から船や汽車を乗り継いで行くほどのことがあるのかとも思えたが、提督の拉致や暗殺を防ぐにはこうした方がいいとの大本營の見解により、えんやこらと思えば遠くへ来たもんだ。

意外と死亡率の高い仕事だからなあ。

安全対策は嚴重にしないといけないのだろうさ。

駅舎前からは様々な方向へ向かう乗合自動車が発着しており、その内の大学病院行きに乗る。

今もなんとか営業を続けているような大型商業施設の近くを通り過ぎ、目的地の病院の敷地内に車輛は入ってゆくのだった。

下車してからは事前に貰っていた『入院のしおり』に記載されていたように、入退院

センターへと向かう。

廊下の通り沿いに並ぶ珈琲店や食堂などを眺めつつ、てくてく歩いた。

入退院センターは銀行の窓口みたいな場所で、その女性に用意した書類や金銭を出してゆく。

入院申込書。

入院保証書。

大本営経由で発行してもらった診察券。

保険証。

入院預り金一〇万円。

手続きを終え、今度は昇降機で上層階へ向かった。

そのスタッフステーションでも書類を複数看護師に渡す。

患者基本情報。

入院についての同意書。

などなど。

必要書類に印鑑で捺印（なついでん）し、私の仮住まいは大部屋になる旨を淡々と告げられた。

大部屋に着くと中は存外広い。

圧迫感がないのはいいことだ。

荷物を可動式の戸棚に入れ、私室で着ているような衣類に着替えてほっとする。書類仕事に追われないのは、精神的に安心感さえもたらしてくれる。

いやー、楽でいい。

えーと、帰ったら頑張ろう。

今日は昼食から食事が出ると聞いた。

どんな飯なのかな？

少し楽しみだ。

程なく若い看護師がやって来て、この階の設備を案内してくれることになった。

胸がけっこう大きい。

何故か、加賀教官を思い出した。

長門教官や妙高先生も大きいな。

……いかんいかん。

そういうことではいかんだ。

洗濯機・乾燥機やシャワー室の場所を教えてもらい、次いで食堂を案内してもらおう。

ふむふむ。

入院は三日間の予定なので、洗濯物はそのまま持ち帰りかな。

何故か私の洗濯物を艦娘が洗いたがるので正直困惑している。先日は洗濯担当の曙と霞がおかしくなって非常に困ったのだ。

なんでだろう、なんでだろう。

……まあ、考え過ぎるのもアレかな。

それにしても、腹が、減った。

と、その時。

「ご昼食の用意が整いました。患者の皆様は箸とコップを持って、食堂までお越しください。」

放送が流れる。

よし、行こう。

食堂には車輪付きの金属の箱が置かれていて、女の人がある前にいた。

箱は冷蔵と保温の双方が出来るみたいだ。

凝っているなあ。

彼女に病室番号と名前を言って、樹脂製のお盆に載せられた料理を受け取る。

さてさて、献立は如何に？

◎とうもろこしのクロケツト

◎ご飯

◎ワカメと玉ねぎの味噌汁

◎かぼちやの煮付け

ふむふむ、野菜成分の多い献立だ。

ほうじ茶が魔法瓶に入っていて、それを持ち込んだ樹脂製のコップに注いだ。では、いただきます。

クロケツトはつまりフランス語でいうところのクロツケで、さくさく食べられる。悪くない。

ご飯はお年寄りにもやさしいやわらか仕上げで、まあ、こんなものだろう。

味噌汁は煮立った感じもなく、少し塩辛いが飲めなくもない仕上がり。

かぼちやの煮付けは口の中でほろりと崩れるようになっていて、甘みがじわりじわりと広がってゆく。

食事を終え、上にある図書室へ向かった。

小さな町の小さな図書室という風情のそこで、『空飛ぶ広報室』『県庁おもてなし課』『ありがとうごさいません』を借りる。

病室に戻り、熱を計ってもらう。

なんとなく五十鈴はい看護師だが、気のせいだろう。

髪は黒いし、ツインテールでもない。

「困ったことがあつたらすぐに言つてくださいね、て……。」

「あ、いいえ、なんでもありません。うふふ。ゼーんぶ、頼つてくれていいのよ。」

「はあ。」

「ふふふ、すべて私にお任せよ。」

……個性的な看護師だなあ。

シャワー室に行くと言つたら、付いてくるといふ。案内しますと張り切っているの、断るのもどうかと思つた。段差の説明や、シャワーの使い方説明を熱心にしてくれる。

ありがたいのだな、きっと。

お手伝いしますと言われたが、流石にそれは断つた。

夕食は炊き込みご飯に肉じゃが。

具沢山で食べ応えのある献立だ。

旨し。

夕食後、食後の運動を行うために昇降機に乗る。

館内はかなり乾燥しており、ほこりっぽいのが難点だ。

一階の方が風通しもいいし、兎に角歩いて運動しよう。

駆逐艦たちがいないので、少しさみしい。

うちの子たちはみんな元気かな？

一階に到着し、売店に入る。

いろいろなモノが販売されていた。

少し高めだが、日本の輸入や流通が回復傾向にあるというのはどうやら本当のように思えてくる。

珈琲店に行くと、台湾やヴェトナムなどの珈琲を推していた。

印象商法が効を奏しているのか、売れ行きはよさそうだった。

コンビニエンス・ストアまで行き、中をぐるりと簡単に見て帰途につく。

途中で緑の公衆電話を見かけたので、鎮守府へ電話する。

次々にうちの子たちが話しかけてきて、気分がほっこりした。

テレホンカードの残高がみるみる内に減ってゆき、うちに来ていた瑞鶴と話を終えた時点で弾切れになる。

『県庁おもてなし課』で高知の魅力に触れている内、消灯時間が近づいてきた。

歯を磨き、主人公と多紀ちゃんがこれからどうなるのだろうと考えながら床に就く。

仕事を離れ、はるばるイスカ……間違えた、はるばる地方都市だな。

明日はリハビリテーションの先生と共に運動する予定だし、採血に心電図にレントゲンもやらねばならない。

さて、明日に備えて寝るとしよう。

天井の電気や間接照明が消され、この階層は静けさに満たされてゆく。
平和だ。

ここにいると、本当に自分が戦争に関わっているのかわからなくなる。
まるで、函館での日々の暮らしの方が………：らちもない、寝よう。

「起こしちやつてすみません。お熱を計りましょう。」

「えっ？ ああ、はい。」

ふと目覚めたら、ナースキャップをかぶった看護師がすぐ近くにいた。

あれ？

心配を感じなかった？

平和ボケしたのかな？

看護師はズボンでなく、スカートを穿いている。

電子式体温計でなく、水銀式体温計を渡された。

頭が活性化していないせいかな、彼女がややぼんやりして見える。まあ、寝ぼけているのだろう。

三分経過した後、彼女に体温計を渡す。

手をぎゅつと握られたが、少し冷たい。

氷のうでも触っていたのかな？

「お熱は大丈夫みたいですね。」

「それはよかった。」

体温計を振って、表示を戻す古典的衣装の看護師。

何故か鳳翔を思い出す。

変だな。

鎮守府をこんなに離れたのに、艦娘に囚われているみたいだ。

「ゆっくりお休みください。」

「はい、おやすみなさい。」

言外に提督と言われた気がした。

疲れているのかな？

翌朝。

ナースキャップをかぶることもなく、動きやすそうなズボンを装備した看護師が大部屋にやって来た。

夜中の話をしてみる。

彼女は胸を振るわせながら言った。

「当病院には、ナースキャップにスカートの看護師はいませんよ。」

えっ？

すると、彼女は一体なんだったのだろうか？

CCCXI : おっさん提督、退院す

検査入院は順調だ。

暗殺者は来ないし。

変質者も来ないし。

部下たちが突撃してこないことに一抹のさみしさを感じつつ、のんびり大部屋で過ごす。

すっかり彼女たちに慣れ親しんでいることをひしひし感じた。

それは家族に対する感情なのか。

身内に対する親愛なのか。

それとも……。

頭を振った。

折角のご縁だから彼女たちを大切にしよう。

大切にしない輩の好きにさせてなるものか。

あいつらめ。

人間じゃないモノを夜間に見たようだが、やはり生きている人間の方が数段おそろしい。

刺客に注意せよとのお達しがお達しが冗談だったらしいのに。

撲殺絞殺刺殺毒殺。

どれも厭で御座る。

この病院でもナースコール絡みの怪談があったり、感じる患者や看護師はいるのかなんとか言うらしい。

そういう話をちらりと聞いたが、そんなに頻繁には発生しないようだ。

ただまあ、痛みはありますかあったらすぐに薬をお持ちしますよ、と看護師が事ある毎に当たり前のように言ってくるのにはほとほと参った。

薬に依存させるつもりなのだろうか。

薬漬け生活も厭で御座る。

とある地方都市には、阿漕（あこぎ）な眼科医の親子がいるらしい。

患者が訪れる度に同じ検査を繰り返し、不安感をあれこれ煽っては何度も何度も来院させるといふ。

しかも検査の前にきちんと言明がされることは無く、同意を得る手間さえ省いてしまっているのだ。

説明と同意、つて重要じゃないのかな？

信頼感を損なったり失ったりすることは、なんでもないことなのかな？

インフォームドコンセントとやらは、何処へ行ったのだろうか？

つまり、了承も合意もなしに医療行為を行っていることになる。

ホントかよ、そいつら最低だな。

同じ部屋の人が、そこへ何度も行く破目になったと怒っていた。

おかしいおかしいとはうつすら思っていたそうだが、普通、看護師が変で医師も変だとはなかなか思わないことだろう。

四度目の時にとつくによくなくなっていたことを看護師へ言ったそうだが、念のために検査しようと言うばかりで全然取り合ってもらえなかったそうだ。

医師は処方した目薬が切れたらまた来てくださいと言ったそうだけど、彼はそれ以降別の病院を見つけてそちらへ通っているそう。

ジェネリック医薬品という先発医薬品のパチもんの薬が危ないやらうさんくさいやらとの話も散々聞かされ、あんなものを認可する厚生労働省はよほど献金されているのだろうか（いきどお）つてさえた。

実際、後発医薬品を服用して体調がおかしくなった経験さえあるという。薬品は気を付けないとなあ。

とある薬局では、その女の子がしつこくジェネリック医薬品を勧めてきたそうだ。後発医薬品は厭だ厭だと言ったにもかかわらず、くどいくらいに口説いてきたらしい。

人の話を聞かないのはなあ。

相手の事情の斟酌（しんしやく）くらいはして欲しいものだ。

複数の薬局に於いて国から指導が入っているのか、他人に聞かれたくない個人情報も毎度毎度根掘り葉掘り聞かれるという。

他の客がいても平気の平左だとか。

うっとうしくしつこいそうだけど、それを聞く彼らは国の方針に従っているだけとの思考停止に陥っているのかもしれない。

ああ、やだやだ。

不快感と不信感が激増するぞよ。

どことなくなんとなくとある軽巡洋艦に似た看護師がそれを聞いて、ひっそりと苦笑いしていた。

先生が明日で退院にしましょうか、と言った。

わかりました、と受諾し退院準備を開始する。

看護師がやって来て、聞いていないと言った。

報連相があんまり出来ていないみたいだ。

どうしてすぐに退院するの、と言われる。

どうしてもなにも、仕事に差し支えるからだ。

病院内をうろつこうとしたら、重巡洋艦ほい看護師に止められた。

今日一日は安静にしてください、と言われる。

別に病気でもなんでもないのでないのに理不尽だ。

次から次へと看護師がやって来ては、体温を計ったり菊門に座薬を挿入しようとした

り全身くまなく拭こうとしたりした。

入れ替わり立ち替わり彼女たちが病室に来るので、見舞いに来た友人と奥方は目を丸

くしていた。

しかし、看護師たちは何故友人の奥方を見て緊張していたのだろうか？

食事は強制的に病室で摂ることになり、あーん攻勢をしのぐので精一杯となった。

今晚はきのこご飯と肉じゃが。

鶏肉や豆も入っている具沢山のご飯はなかなかおいしく、馬鈴薯と玉葱と人参が殆どの肉じやがも味付けが上手だ。

旨し。

消灯時間のニイニイマルマル。

ようやく、騒動が沈静化する。

やれやれだ。

深夜。

添い寝を懇願（こんがん）するナースキャップの看護師に手こずり、なんとか帰っていただく。

あれ？

ナースキャップにスカートの看護師って……ま、いつか。

ロクマルマル。

朝駆けするは水雷戦隊……じゃなくて看護師たち。

早速、体温計を脇の下に突っ込まれる。

朝食でもあーん攻勢にさらされた。

その内容は、やわらかご飯と玉葱及び馬鈴薯の味噌汁とふりかけと牛の乳。

やっぱり、この病院にナースキャップとスカートを標準装備した看護師はいないそう
な。

一階の入退院センターで入院費を払い、てくてく通路を歩く。
なんだか視線をあちこちから感じるが、多分気のせいだろう。

熱心に看護してくれた看護師が、隣にいるせいかもしれない。

どことなくなんとなくどこぞの軽巡洋艦級艦娘。ほい彼女は私との別れを惜しみ、な
なか手を離してくれなかった。

「もう、大丈夫よ。」

彼女はやさしく微笑みながら、別れ際にそう言った。

乗合自動車に乗って駅舎へ到着し、横浜行きの特別急行列車に搭乘する。

新幹線が走らない時間の隙間を補填する形で走行しており、車内はけっこう混雑して
いた。

指定席が取れてよかったと思う。

今から向かうと横須賀は夕方か。

大本営に顔を出し、今宵は西洋旅籠（はたご）に投宿しよう。

翌朝は帝都から新潟方面行きの特別急行列車に乗車し、そこからは寝台特急の日本海に乗って青森に向かおうか。

関東圏から北海道へ向かうためには東北本線か新幹線を使うのが基本的だが、少し迂遠な進路を取ろう。

事前に想定していた経路ではなく無作為に行動せよとお達しがあったので、趣味に走らせてもらおう。

ほんの少しばかり。

切符は一度目の変更に関し、手数料が一円もかからないのもいい。青函連絡船に乗れば、我が鎮守府の艦娘の付き添いで函館入りだ。

駅舎の中のパン屋にて購入した、餡パンとクリームパンを食べる。

少しパサついている感じもするが、甘さに薬くささが無いのはありがたい。

それらは段々戦前に近い味へと戻ってきているように感じられた。

もつと菓子パンや惣菜パンの種類が増えるようになるといいなあ。

車内販売の売り子はどこことなくなく艦娘ほい感じがしたけれども、気のせいだろう。

代用珈琲を頼んだ。

少し焦げくさい味。

深煎りし過ぎぜよ。

大船駅から在来線の鈍行に乗り換え、本店のある横須賀へと向かう。駅舎に着くと何故か瑞鶴がいて、私に随伴してくれることになった。

彼女曰く、丁度時間の都合がついたとか。

大本営での手続きはあっさりしたもので、今回は誰も殺られなかったそう。まあ、前々々回や前々々回みたいになつたらしつちやかめつちやかになるしな。提督の適性者が次から次へといなくなつたら流石に大本営も困ると思われ。悪党がはびこるのも厭だし、そいつらが幅を利かせるのは更によろしくない。良心的な提督が成果を出せているかという点、そうとも言い切れぬのが現状。痛し痒しで御座るよ。

敵は国内にあり、か。

世知辛いものだすな。

瑞鶴と喫茶室でお茶。

女性で賑わう場所だ。

国産紅茶で喉を潤す。

丸子（まりこ）の紅茶かな？

彼女の愚痴を聞いた。

話は延々と終わらぬ。

休暇が欲しいわと嘆く彼女。

また函館にいらつしやいと言っておく。

口説いても駄目よ、と正規空母は笑いながら言った。

あちこちから視線を感じるのだが、瑞鶴は感じないのだろうか？

ええと、ケーキに集中しよう。

このショートケーキにはサツカリンやアステルパームのような人工甘味料を使っていないみたいで、薬くさい甘さが無くてすこぶるうれしい。

間宮かな？

伊良湖かな？

もしかして鳳翔？

うちの子たちはいつもいいものを作っているんだとしみじみ思う。

世話好きの正規空母と別れる。

駅舎まで歩いてく歩いた。

監視はされていないようだ。

停車場は割かし混雑している。

無事に乗れたのでよかった。

車窓から見る風景は悪くない。

復興支援は充分機能している。

北の国にも同様にして欲しい。

少しばかりもやもやする。

汽車は順調に横浜駅に着いた。

それにしても、腹が、減ってきた。

よし、駅弁を買おう。

幟（のぼり）が見えている。

風雲告げるは我が胃袋ナリ。

パンジャンドラムの響きあり。

いざ参らん、この抑えきれない欲望を満たすために。

スパゲティモンスター教の加護があらんことを。

関東うまいものフェアとやらがこの近くで開催されているらしく、売り子が元気に客

へ声をかけている。

よきかなよきかな。

では行ってみよう。

さて、私の胃袋はなにを求めているのか？

魅力的な駅弁が幾つも並び、どれにしようかと迷ってしまう。

「て……旦那さん、これらがいいよー」

若々しい娘がぐいぐいそばにやってきて、三つの弁当箱を渡してきた。

ちよつと多いんじゃないかな？

どれ。

いざ拝見させてもらいまする。

先ずは、神奈川県は大船軒が販売している『大船軒サンドウヰツチ』。

日本初の駅弁サンドウヰツチで、鎌倉ハムのボンレスハムを挟んだ品が四切れ。

スライスチーズを挟んだ品が二切れ。

ハムにからむ粒マスタードが味の相乗効果を醸し出し、幅広い層から長らく愛され続けている傑作だ。

明治三二年からずっと販売されていることは、激動するが如くに変わり続ける社会にあつて一服の清涼剤にも思えてくる。

続いては、千葉県は万葉軒が販売している『トンかつ弁当』。

このご時世に低価格を貫く、素晴らしい駅弁当。

掛け紙はレトロな黄色い紙で、料理人姿の豚がフライパンを動かしている。

大きめのロースカツにタケノコの煮付け、胡麻昆布、しば漬けが入っていて白飯に寄り添っている。

豚カツにはソースが染み込んでおり、添付されたソースを追加するもよし、かけぬもよし。

昭和四〇年代から売られ続けている、至れり尽くせりの傑作だ。

最後は我が崎陽軒（きようけん）のシウマイ弁当。

この地に来たなら、これを買わねばな。

横濱ならではの幕の内弁当、それがシウマイ弁当だ。

六〇年あまりの時代を駆け抜けている、傑作弁当だ。

干し帆立の貝柱、玉葱入り焼売、鶏の唐揚げ、玉子焼き、鮪（まぐろ）の漬け焼き、タケノコの煮付け、そしてとどめに杏（あんず）。

この弁当には小宇宙（コスモ）を感じる。

いずれも私好みの弁当だ。

私の嗜好は基本的に保守的で、老舗を好む傾向にある。

ほほう、いいじゃないか。

それを迷いなく渡す彼女。

ただ者ではない。

「て……旦那さん、お茶は土佐のおいしいのがあるよ！」

「それももらおうか。」

高知はお茶の名産地なのだ。

むむむ、この娘、やりおる。

よいものが買えてよかった。

さて、明日は浅草だ。

なにを食べようかな。

CCCXII：ちよつと熱のあつた日

朝起きたら熱が三八度三分あつた。

少し気だるい。

まあ、なんとかなるだろう。

三八度五分や六分くらいまでならそれなりに動ける。

なりなりてなりあまれるものが荒ぶっていたが、こんな時でも元気なものだ。

毎朝の現象だが、じつと見られていなくてよかつた。

理路整然と現象について説明するのは気恥ずかしいものだ。

駆逐艦たちに男の生理現象のことを口頭で説明した時は大変恥ずかしかつた。

トランスフォーマーする様を実際に見せてくださいと言われた時は閉口した。

図で誤魔化したのが、実地に見せる提督などいないだろう。

……いないよな。

いないと思いたい。

それにつけても独りの時間が欲しい。合間を見てガス抜きしないといかん。他の提督も非常に困っているだろう。

自撮りの写真を渡されても困惑する。

ケツコンしている提督だとこんなことにはならないと思うが、人気者の場合は修羅場になりやすいそうで、時折刃傷沙汰になつてしていると聞く。

先日もある大型鎮守府で騒動があつたらしい。

敢えて艦娘に関心を持たれないようにしている同僚もいるが、そうした鎮守府の艦娘たちから相談を受けることも少なくない。

痛し痒（かゆ）しだ。

童貞を殺す服とやらについて聞かれることも多々あるが、唇を奪つた方が早いんじゃないかと言いかけたことも度々ある。

童貞にそういうことを聞かないで欲しいのが本音だけでも、彼女たちからすると童貞だから聞きやすいのかもしれないな。

無邪気な駆逐艦の攻勢に敢えなく撃沈轟沈している提督がけっこういるので、実例集を作つたらいいんじゃないのかなと秋雲辺りに提案したが、新妻力が強すぎて近寄れませんと涙ながらに言われてしまった。

なんだよ、新妻力つて。

海防艦に傾倒している提督もいるが、事案を発生させないで欲しいものだ。

モテる提督はイケメンと限らないのが悩ましい。

イケメンフツメンブサメンは特に関係無いと、大抵の艦娘がきつぱり言っている。

故に、モテた経験の無い提督がモテた時に喜劇が起こりやすいと言えなくもない。

いや、悲劇かも。

やれやれである。

添い寝していた島風と吹雪を起こさないようにそつと起きようとするも、胴回りがつしり掴まれているので身動きが取れない。

少しほわほわした脳味噌のまま、兩名の頭を撫でる。

うちの最強系駆逐艦たちが、むにゅーとした顔で寝ぼけたまま抱きついてきた。

これこれ島風さんや、君は元おっさんだろうに。

だんだん女の子化してきているような気がする。

ほわほわした頭のまま着替えを手伝ってもらい、下着を彼女たちに渡した。

下着を渡さないと皆機嫌が悪くなるのだ。

洗い場を持つていくくらい出来るのにな。

曙と霞の組み合わせで添い寝だった時に下着を自分自身で洗う旨伝えたら、彼女たち

に思いきり怒られた。

それくらいさせろ、と。

しかし、返ってくる下着がいつも新品同様か新品なのは変だと思う。

そう思つて大淀や鳳翔や間宮などにも言つてみたが、話をはぐらかされてしまった。

カッターシャツを洗濯に出してもそうなるし、ある提督にその話を振つたら何故かめ

ちやくちやうらやましがられた。

よくわからない。

ぼわわとしてるので兩名から酷く心配されたのだが、大丈夫だと頭を撫でる。

そうそう、君たちは今すぐ服を着なさい。

朝礼をほわほわした頭でなんとか切り抜けたものの、食事はちよつこし難しい。

食欲が明らかに減退している。

大湊（おおみなと）からいただいた林檎でも食べるとするか。

朝四分の一、昼半分、夜四分の一。

これでいいのだ。

講堂を歩きながらほんの少しぼんやりしていたら、大淀が至近距離で私を見つめていた。

「提督、お熱があるのですか？」

「微熱が少々。」

「何度ですか？」

「三八度三分。」

「第三級緊急事態発令！」

大淀の発言に、がやがやしていた周囲の艦娘たちが即座に私の周りで輪形陣を築いた。

なんで大和と武蔵がここにいるんだろう。

戦艦級艦娘六名による豪勢な陣形だった。

ネヴァアダや戦艦棲姫やとある航空戦艦も凜とした顔つきで私の周りを取り囲んでいく。

この面々で演習したら、資源が激減する。

そんなことをついつい思ってしまう。

長門教官がキリツとした顔をして言った。

「提督！ この長門が朝晩問わず看病してやる！ 安心して休むがいい！」

「()は譲れません。」

そこに加賀教官が割り込んできた。

「提督は空母系艦娘による二四時間三交代制で看病します。勿論索敵も怠りませんし、きめ細やかな対応を行います。」

「巡洋艦を忘れてもらつては困ります。」

普段冷静沈着な妙高先生まで参戦してきた。

「室内に常時二名配置し、無論、部屋の外にも充分な数の巡洋艦を配置します。索敵の航空機は常に飛ばしますし、雷撃戦も夜戦も十二分に対応可能です。対応の多彩さではひけを取りません。」

「数の多さなら、駆逐艦よ！」

曙が参戦してきて、收拾がつかなくなる。

メリケン艦やら深海勢やらが議論に加わつてはちやめちやだ。

わいわいがやがやする艦娘たち。

ぼおつと眺めていたら、ひよいと担ぎ上げられた。

おや、誰かな？

「ほんま、キミはモテモテやね。」

龍驤か。

「さ、部屋まで行くか。」

軽やかに俵担ぎされ、ドナドナされる。

途中で雲龍や早霜も加わり、担ぎ手を順繰りに交代しつつ私室まで送られた。

結局、『厳選』された艦娘二名ずつに看病させることで落ち着いたらしい。

何故か艦娘が交代する度に着替えをさせられた。

まあ、明日くらいには熱も下がるだろう。

座薬を誰が挿入するかでかなり揉めたらしいけれど、それくらい自分でやるわい。

そんなに私の菊門に指を突っ込みたいのだろうか？

よくわからない。

加賀教官の順番の時、何故だか瑞鶴も一緒だった。

土産の鳩サプレーを無表情に我が口元へ差し出す教官と、それをにやにや顔で見る幸

運艦。

早く治らねば、とかたく心に誓った。

CCCXIII：白き血にて海を染め

提督がまた一人、行方不明になったらしい。

艦娘と逃避行しているとか某国に拉致されたとか、深海棲艦やUFOにさらわれたとかの噂まである。

カストリ系週刊誌がなんやかんやと騒いでいるみたいだが、じきに鎮静化するだろう。

大本営の広報は有能なのだから。

未登録の屯所（とんしょ）はないかと、函館鎮守府から問い合わせがきた。当基地に所属している艦娘たちに聞いてはみたが、全員知らないと答えた。ならば、知らないのだろう。

艦娘は嘘がつけないらしいから。

最初は潔癖な女学生みたいな存在じゃないかと危惧していたが、研修の時に会った艦

娘や今の部下たちを見ていたらそれは単なる思い込みだったみたいだ。

だいぶ姿が違うように見えるのだけれど、何事にも誤差は生じるものだ。仲よく出来ているのだから、そこにわざわざヒビを入れる必要性は無い。

基地によつては司令官が好かれていないようだけど、好き嫌いで戦争は出来ないと思う。

あまりに艦娘から嫌われる提督（エロ過ぎる人とか暗黒系とか威張りんぼとかエロ過ぎる人とか）はたまに事切れた姿で発見されたり行方知れずになることもあるようだが、それは自業自得じゃなからうか。

誰がやったのか、皆目見当はつかないが。

今回、行方不明になった提督は一体どのような指揮をしていたのだろうか？
どのように彼女たちと接し、どういった言葉を投げかけていたのだろうか？

私が入浴する時間に、艦娘たちは一緒に入ろうとする。

流石にそれはよろしくないんじゃないかとも思うのだが、函館の提督は現在進行形で数多の艦娘と混浴しているのだから一切問題ないとの認識を部下たちから示された。

おまんら、示し合わせたな。

まあ、艦娘は女学生みたいな存在。

私は子供に興奮することなど無い。

ならば、一緒に入浴することに問題など無い。

つまりは、そういうことだ。

戦艦とか正規空母とかだとちよつと怪しいが。

後ろから無邪気に抱きついてくる艦娘の意外にふくよかなバルジが私の理性をガリ

ガリ削つてゆくけれど、明鏡止水の心持ちで乗り切るべし。

これこれ、そんなに動いてはいけないよ。

デイメンション・トランスフォームしてゆくではないか。

私自身中学生や高校生に一切興味ないが、接触によつて肉体が反応するのは当然の帰結である故に。

我が屯所に独立した執務室は望むべくもない。

それに艦娘の員数は片手で足りるほどだし、重巡洋艦や軽空母が所属する可能性は極めて低い。

ましてや、戦艦や正規空母だなんて。

嗚呼、なんとこの世は世知辛いのか。

私室と仕事部屋の混ざつたような四畳半の書斎だかなんだかで仕事を行い、可愛い部

下たちから抱きつかれたりもみもみされたりしながらあどけない誘惑と戦い続ける。
色即是空空即是色色即是空空即是色。

うむ、必要は一切ないが、念のために唱えておこう。

休憩時間は紅茶とお茶うけが必需品だ。

全力回転する脳味噌にそれはよく効く。

戦前は珈琲党だったが、現在は紅茶党に鞍替えしている。

国産紅茶もかなり品質が向上しているし。

代用珈琲には今もって慣れることがない。

もつと安くなったら、珈琲党に戻るかもしれない。

艦珈琲……間違えた、缶珈琲は復活するのだろうか？

お茶うけも人工甘味料くさくさなくなつて喜ばしい。

これこれ、おじさんの手をもみもみしてはいかん。

勘違いしちゃうじゃないか。

地球温暖化問題だが、戦前と現在とではかなりの差があるらしい。

世界各国では港湾施設や海沿いの工場が軒並み閉鎖か開店休業状態のもの多数だつたり、旅客機が世界の空を飛びまわることもなかつたりする。

そうした経済的大打撃を受けた結果、温暖化現象が軽減されているとか。実に皮肉な状況だ。

深海棲艦が地球の平和を守るために活動しているのだと述べて迫害されている学者までいるけど、なにが本当でなにが間違っているのかよくわからない。

以前超大型台風によって浜へ打ち上げられた艦娘たちを拾って戦力にしたものの、気になって函館や大本営の大淀に問い合わせを試みたが、芳（かんば）しい返事は来なかった。

奇妙なことに、どの鎮守府や警備府や泊地や屯所にも彼女たちは存在していないという。

変だなあ。

未登録艦娘なんて存在するのか？

現実に彼女たちは存在している。

その間隙がどこに起因するのか？

もしかして、彼女たちは海域発見艦（ドロップ艦）なのか？

それは複数出現するものなのか？

私にはわからないな。

馴れ馴れしいのが玉に瑕だが、戦闘力は高いみたいなのでまあいいだろう。艦娘がいない状態で民家改造型基地に着任という状況こそ、変なのだから中途採用だからといって、杜撰（ずさん）な扱いをされるのは気分が悪い。バンザイ・アタックを強要されただけまだましなのかもしれないけれど。私の癒しは同居している艦娘たちだけだ。

「テイトク、シヨーカーニンムガオワツタヨ！」

「シレイカーン、サクセンシユウリヨウシタワ！」

艦娘たちが抱きついてくる。

私は彼女たちの頭を撫でた。

まあ、今はこれでいいかな。

白い肌の少女たちが微笑む。

それが、私の活力源なのだ。

さて、夕飯を作るとするか。

今夜はカレーにしようかな。

CCCXIV：殺し屋に、狙われてます

あいつは！

あいつは！

俺の正義を理解しようとしな！

俺の言葉を受け入れることもない！

あいつは愚か者だ！

俺が！

俺が！

俺の考え方こそが！

俺の言うことこそが！

それこそが、正しいことなのに！

何故！

何故！

何故、それが理解出来ないんだ？

……………。

そうだ！

奴を滅するべきだ！

生かしておけない！

あんな奴を生かしておく理由はない！

そうだ！

あいつが生きているから、俺の理想が遠のくばかりなんだ！

許せない！

絶対！

絶対！

絶対に許せない！

ちよつと太めの男は夜に吠える。

己の信念こそが、真実と信じて。

「私が殺してもらいたいのは、この人物です。」

時間帯は夜更けに該当する、都内にある不動産屋。

仕立てのよい服を着た主は、来客たる細身の中年男性が手渡してきた写真をしげしげと見る。

目立たない感じの、四〇代の男性。

艦娘たちと並んで撮影されていた。

対象の人物は、函館鎮守府の提督を拝命しているという。

「対象の調査には、現地到着後から一週間いただきます。調査終了後に殺し屋が対象を殺すかどうか判断し、受注するかしないかを回答させていただきます。」

「殺せない場合もある、ということですか？」

「例えば、対象が函館鎮守府に所属していないとか、まったくの別人だったりした場合ですな。」

「そういった点は大丈夫です。」

「それと、隙が全然無くて純粹に殺せない場合です。」

「彼はたまに一人で歩くことがありますから、そういつた時を狙えば必ず殺れることでしょう。」

「その判断は、殺し屋が十分調査した上で行います。」

「……わかりました、殺し屋にすべて任せます。情報は随時提供させていただきますので、よろしくお願いします。」

「かしこまりました。」

東急東横線綱島駅からおよそ徒歩五分の場所。

少しひなびた、ボクたちのアンティーク・ショップがそこにある。

その店はボクら兄弟が経営しており、兄が仕入れと接客を担当し、ボクはインターネット関係と接客を担当している。

「また、やるのかい？」

業務終了後、先日たまたま入手した本物の珈琲の香りを楽しみつつ、鳩サブレをかじったボクは兄に問いかけた。

「さつき塚本君が来ていただろう。彼が日向殿から連絡を受けてね、僕に仕事を持ってきたのさ。」

「相手は？」

「この人。」

兄が日向殿に直接連絡することは一切ない。

兄は『日向殿』と名乗る人物のことをなにも知らないし、当の日向殿もボクたちのことをちつとも知らない。

依頼人と日向殿、日向殿と塚本さん。

連絡係を二人にして間に人を挟むことで、殺人後に殺し屋が依頼人を脅迫することが無くなる。

この殺人依頼三段階方式が、結局は関係者全員の安全性を高める方策となっている。だからこそ、安心して人を殺せるという寸法だ。

日向殿はどんな人なのだろうか？

もしかして、瑞雲が好きだったりして。

もしもそうだったなら、それはとつてもいいな。

兄が対象の写真を見せてくれた。

人畜無害な感じの中年男が写っている。

見覚えがあるどころか、今現在も会いたい人だ。

別に好きって訳じゃないんだけど。

「函館鎮守府の提督じゃないか。」

「知っているのかい？」

「知っているものなにも、以前彼の世話になったことがある。」

ボクは元艦娘なのだ。

元々は普通の男だったけど諸般の理由で戦場に赴き、そして生き残った。生き残って得られたのはこの体。

決して男に戻ることも能わない体。

仕草が男らしくないと兄は言うけど、器に中身が引き寄せられるのは当然のことだ。故に、女の子っぽい感じが抜けないのも致し方ない。

提督のあの背中やその他の箇所を思い出してしまうのも、それはそれで仕方ないことだ。

ボクは思い出す。

帰国してから、この国で生活するために必要な書類が膨大だったことを。

今尚も古びた港北区役所での手続きは煩雑を極め、ほとほと閉口したのは記憶に新しい。

「悪いけど、これは仕事だからね。殺せそうなら殺す。それだけさ。」

「ふーん。」

「イヤなのかい？」

「提督は常時艦娘に守られているし、鎮守府から離れることはあまり無いよ。」

「対象はたまに単独で鎮守府を抜け出すことがあると、先程塚本から聞いた。」

「ふーん。」

「お前がイヤなら受けないけど。」

「提督を兄さんが殺れるかなあ。」

そう言った瞬間。

ほんのかすかだが、兄の頬がぴくりと動いた。

「それは、挑発しているのかな。」

「提督、いつも嚴重に守られていたから。」

「まあ、僕もうぬぼれるつもりはないし、駄目なら駄目で断るよ。」

「お土産は函館の間宮が作った間宮羊羹でよろしく。」

「それ、買えるの?」

「運がよければね。」

「それ以外は?」

「マルセイバターサンドで。」

調査のため、函館へ向かうことにする。

ただでさえ本数の少ない東北新幹線はどうやっても指定席が取れなかったのだけど、近年復活した特急はつかりの指定席はなんとかおさえられた。

これで上野から青森駅まで行き、青函連絡船で函館へ上陸する。

骨董品や雑貨の仕入れを隠れ蓑にして、調査を行う。

殺れそうだったら、そのまま殺す。

それだけだ。

弟がネットで五稜郭近くのウィークリー・マンションを押さえてくれたから、そこを拠点にして活動だ。

有能なので、とても助かっている。

ありがたい。

弟は元艦娘故に魅力的な外見をしており、その外見に騙されがちだが力や素早さや耐久力などは人間をはるかに上回る。

その弟と言いつ争いになったことが一度あるのだけれど、鍛えていた体が弟の攻撃に対してまるで有効活用出来なかった。

つまり、艦娘を相手にしたら僕なんて瞬殺だ。

相手をしないで済むようにしないといけない。

兎に角、調査だ。

調査に一週間、殺しの期間は二週間を使える。

その期間で殺れるかどうか判断しよう。

新作DVDの撮影をしたり、雪掻きをしたり、有明の同人誌即売会で売り子の手伝いをしたり、書類仕事をしたり、函館市主催の行事に参加したり、大手鎮守府の作戦支援中継地として艦娘たちの世話をしたり、と忙しい。

その中で、私は変な噂を聞いた。

大本営の過激派の一部の暴走と、なにかをこじらせた人物の電腦上に於ける過激な発言について、である。

囀（おとり）がどうか、釣り野伏せがどうか、返り討ちにするとか、そんな会話が漏れ聞こえてくる。

物騒なのは厭だなあ。

提督が一人で動く日時の情報入手する。

よし、この時にやろう。

逃走経路を確保し、確実に仕事が出来るように準備しなくちゃ。
終わったら、ラッキーピエロでチャイニーズチキンバーガーだ。

しんしんと雪の降る夜半。

提督が一人で歩いてゆく。

護衛の姿はどこにも無い。

雪を踏む音だけ聞こえる。

人の気配が殆ど無い通り。

薄暗くてやりやすい感じ。

好機到来だ。

よし殺ろう。

そつと忍び寄ってナイフを懐から取り出した。

「死ねっ！ お前がいなければ！」

あつ。

横合いから飛び出してきた太めな男が僕と提督の間をふさぐ形となって、ナイフの軌道上にその首をさらした。

思わず、頸動脈をすっぱり斬り裂いてしまう。

しまった。

失敗だ。

僕は即座にナイフを捨て、逃走に移った。

後方で提督がなにか言っているけど、走っているからよく聞こえない。

そもそも聞いている場合じゃない。

一瞬だったし暗がりだったから、顔は覚えられていない筈だ。

リバーシブルのブルゾンを着ていてよかった。

辺りに人の気配がないのを確認し、それを裏返しにする。

ふう。

取り敢えず駅前に向かおう。

途中のうらさびれた居酒屋で時間を潰し、あとは知らん顔だ。

あんな不測の事態が起こるだなんて、予想出来る訳ないじゃないか。

あーあ。

明日は失敗したことを塚本に話し、違約金を払う話になるな。

仕方ないか。

明後日くらいから観光したり、仕入れと観光を兼ねて江差や松前に行ってみるか。

札幌辺りに足を伸ばすのもいい。

帰りは青森で味噌おでんを食べたり、秋田で湯沢の林檎を買ったりしてみようか。

奇妙な殺人事件は、函館鎮守府と函館警察署、それに陸上自衛隊函館駐屯地の三者を巻き込む大がかりな事態に発展した。

『函館提督暗殺未遂事件』としてそれは全国報道され、多数のマスゴミ、もといマスメディアが来函する状況を生み出す。

当初函館の提督に返り討ちにあったと報道された暗殺者は住所不定の無職四〇代男性と判明し、陸幕僚監部調査部調査第二課別室によって背後関係が詳しく調べられた。

結果、特定の考え方に固執し、ネット上で複数の人間に嫌がらせをしてやわらかく注意されると猛々しく怒り狂い、自身の考え方にそわない人物を一方的に責め立てるということくらいしか判明しなかった。

なにかの組織に属しているかと思われ、各種暴力系団体や反社会的団体に搜索の手が伸びたものの、はつきりした証拠は一切見つからなかった。

この後半年ばかり調査や捜査は行われるのだが、さしたる成果も出ないままにそれらはあつてなく打ち切られることになる。

少し呑み過ぎたか。

この時世でも良質な料理と酒を提供する店は存在する。

我々みたいな選良のために用意された店舗が実在する。

程よく呑んで程よく食って、経費は大本営持ちである。

こうしたことをするために、今まで切磋琢磨してきた。この生活を継続するためには、不要な輩を排除せねば。あやつらの勢力を絶対に削ぎ落とさねばならないのだ。そのためには、函館の提督を排除しなければならぬ。アレがいなくなったら、あやつらの発言力も低下する。くくく。

料亭を出ると、まぶしいくらいに美しい月が見えた。

先行きがいいじゃないか。

護衛を遠ざけ、一人で帰ることにした。

無粋な男たちがなんやかんやと言ってきたら非常にわずらわしい。

こんなに治安のいい場所でないが起きるといふのだ。

馬鹿馬鹿しい。

ふらふらと暗い路地を歩く。

酔いが心地よい。

くく、早く吉報が欲しいものだ。

ん？

不意に首筋が熱くなり、力が急速に抜けていった。

あ？

鮮血がコンクリートの壁に吹き付けられているのが見える。
は？

これは、私の血なのか？

何故？

どうして？

視点が下がる。

足に力が入らなくなったためだ。

声も出ない。

体内からどんだん力が抜けてゆくのをを感じる。

嫌だ。

私はもっと出世して力をつけるつもりだったのに。

冷たい目で私を見つめる女がいた。

四〇歳くらいか。

彼女はポイと凶器のナイフを捨て、すたすたと歩き去ってゆく。

謀られたか。

寒い。

とても寒い。

意識が遠くなってゆく中、雇った殺し屋が上手くいくことを私は切に願った。

兄から、函館の間宮特製の羊羹とマルセイバターサンドが送られてきた。

パーフェクトだ。

あの仕事は失敗したけど、仕入れはそこそこ上手くいつているみたいで段ボール箱が時折届く。

湯沢の林檎も届いたし、北海道と東北諸県を堪能しているみたいだ。

新聞に函館の提督暗殺未遂事件が大々的に報道された後、塚本さんがうちに来た。

日向殿から依頼人が殺されたことを伝えられ、ボクは大変困惑してみせると同時に提督が殺されなかったことに安堵する。

いろいろな意味でよかったと、ボクはそう思った。

大本営のいけ好かない高官が丁度黄泉路へと向かったことだし。

あいつには随分恨みがあったから、いなくなつてさっぱりした。

ふふふ。

CCCXV：冬のコミケット～霞たちの饗宴

「スカル・リーダーより、各艦・各機へ。聞いての通りだ。『お客さん』たちにお帰りいただくべく、各艦・各機奮闘せよ。」

「「「「了解！」「」」」」

フォッカー少将の指示に従い、佐世保鎮守府の正規空母や軽空母から放たれた艦載機群が敵対する深海棲艦側の艦載機群とぶつかり合う。

雪の舞い散る中、激しい攻防が始まった。

青葉の回すカメラがそれらを確実に捉える。

「いやー、迫力ありますねえ。」

「まあ、そうなるな。」

傍らにいる航空戦艦がそれに答えた。

「でも、奇妙な気分よね。あれが『敵』じゃないってのは。」

大本営から青葉と共に来ている五十鈴がそう言う。

確かに。

戦意高揚とかなんとかで宣伝用映像を撮るため、この辺が使われること自体に文句を言うつもりは全然ない。

深海棲艦の扮装をしている面々がノリノリなものも、まあ致し方ないだろう。

年末のコミックマーケットで販売すべく、本日撮影してそのまま編集に取りかかって突貫作業を行うそう。

佐世保の提督もここまで来て大変だ。

せめて、李さんの中華や北の国の食材でもてなそう。

松井老舗の五三焼(ごさんやき)やら長崎特産のじゃがいもやら、長崎県の名物をけっこうもらったしな。

間宮がポテトグラタンを作ると言っていたし、鳳翔はポテトコロッケを作ると言っていた。

彼女たちが作るのだから旨いに違いない。

今から楽しみだ。

おつ、戦艦棲姫が大和や武蔵と近接戦闘を始めたな。

回し蹴りを始めとする、けれん味ある立ち回り。

魅せ方がわかってるじゃないか。

撮影が終わったなら、全員ご馳走でねぎらっておこう。

あたしは駆逐艦の霞。

信州に住む元艦娘よ。

元はおっさんだったけど志願者として艦娘に生まれ変わり、あの過酷な戦場からなるとか帰ってきた。

もう二度と男に戻れない体と共に。

そんなあたしを地元は受け入れてくれた。

変な舎弟が激増する結果にもなったけど。

両親が当然のように娘扱いするのだけど。

定食を作ったりおにぎりを作ったりしながら、平和な毎日を過ごしている。

雪が舞い始めたある日の朝、県知事などのお偉いさんたちが市長と一緒にあたしの働く定食屋へ来た。

天候の関係でお米や林檎などの生産量が落ち込み、この県全体の景気がすこぶる悪化しているという。

そんなことはとづくにわかっている。

それでも地味に足掻くしかないのに。

そういう訳で、有明で行われる冬のまんが祭に参加して欲しいと言われた。はい？

ちよつと意味がわからない。

今では地方都市化しつつある東京のアンテナショップで売り子をするなら、まだ話はわかる。

あんまりしたくないけれど。

なんであたしがまたコミケットに行かないといけないのよ。

確かに、その昔よく行ってたのは確かだけども。

モテたらいいなあ、と純粹に考えられたあの頃が懐かしい。

信州のお米を宣伝して欲しいというのが、彼らの言い分だ。

そんなの、アンテナショップで散々やっているじゃないの。

結局、お偉いさんたちの薄い頭を見ながら承諾するしか選択肢がなかった。やれやれだわ。

コミックマーケット。

夏と冬に行われるまんが祭。

同人誌即売会。

通称はコミケツトやコミケ。

現在は、東京復興策に於ける重要催事のひとつとして位置付けられている。

かつて魔女狩りの様に迫害を受けていた頃とは大違いだ。

殴つたことを忘れたかのように振る舞う様は気持ち悪いほどだけ。

二次元愛好家たちの集まりを悪の温床扱いしていた人々は、今頃なにをしているのだろうか。

案外、何事もなかったかのように日々過ごしているのかもしれない。

それはそれで腹立たしくなる話だが。

馬鹿にしている人は今も一定数かそれ以上存在するけれども、表向きは『文化』とされているから昔と雲泥の差だ。

カジノ法案が上手くいかなかった影響かもしれない。

現職の大臣が海外の会社との現金授受の件で逮捕された事実は、与党にとつてまさに痛恨の極みだろう。

現役の閣僚を含めて、何人も国会議員が逮捕されたからなあ。

そもそも確実に金儲け出来る存在は、ちやほやされるものだ。

思ってもいないことを言える人間は意外と多い。
そういう人間のしがあがるのだ。

不器用な人間ほど、損をしやすい。

同人誌の世界に於いても、自己の世界観を貫こうとすることは売り上げにつながる結果に繋がりやすい。

流行に乗ったものか、独自性が受け入れられたものか。

売れるとするならばそのどちらかだろうし、双方含むのが理想的ではあるだろう。

むつかしいことだが。

大本営広報課の面々による出張要請を聞きながら、私はとりとめのない考えに身を置いてゆく。

しやあないなあ。

青葉とマスターオータムクラウドの泣き落とし的要請に従い、おっさんたる私は出陣を決めた。

決めたら決めたで、呉から電話がかかってくる。

相手は先輩だ。

「広島県民のために一肌脱いでくれえ。」

「またですか。」

「そうじゃ。」

「総社は岡山県ですね。」

「双蛇になると天地無用じゃな。」

つまり、私は先輩の要請に逆らえないのであった。

撮影、トーン貼り、寄稿するための原稿、料理、と様々な手伝いをしてる内に日は過ぎて年末がやって来る。

直衛艦隊選抜の件に於いて、熊本県人吉市辺りで行われているという球磨拳（くまけん）が採用されたらしい。

今年も呉第六鎮守府の提督たる先輩の手伝いで、広島県応援冊子販売のお手伝いだ。

有明のホテルワトスンで待ち合わせ。

代用珈琲を飲みつつ、歩く人々を窓から眺める。

黒いものがうごめいていた。

日が昇るのには時間がある。

先輩が現れ、そして言った。

「あと二時間で日が昇るんじゃ。」

「日が昇ると、どうなるんです。」

「知らんのか。」

「えっ？」

「あちこちからまんがを求め、愛好家たちがわらわらとやって来る。」

既に三々五々歩いてますがな。

先輩と与汰話をしながら、サークル入場口へと向かう。

懐かしい気配がしてきた。

このにおい、この雰囲気。

これこそがコミケットよ。

先輩の手伝いを行い、それなりに在庫がはけてゆく。

冊子がどどつと売れることなぞない。

まったくない。

東京にある広島県のアンテナショップの方が、よほど賑わうんじゃないかな。

それでもひたすら頑張るしかなかね。

檸檬やお好み焼きや牡蠣(かき)や日本酒や蜜柑やもみじ饅頭の話も盛り込んだ、最

新情報満載の総天然色冊子。

広島愛に満ちた品。

おまけはお好み焼き煎餅。

さあ、買っておくれやす。

休憩時間になったので、ちよいと外へ出ようと思いついた。

複数の霞が外の屋台でおにぎり対決をしているらしいので、それを見物に行こう。護衛の艦娘たちはどこかで私を見つめているだろうから、問題は全然無いだろう。

おお、やってる、やってる。

信州の霞は上水内（かみみのち）産の米を使ったおにぎり。

函館の霞は七飯町（ななえちよう）産の米を使った握り飯。

大本営の霞は平塚市産の米を用いたおむすびを作っている。

ビッグサイトの外にある屋台でせっせと握る彼女たちの周辺は、撮影する人々や行列する人々で混雑している。

大本営の満潮にうちの叢雲と曙も手伝っているので、問題は無いだろう。

よかばいよかばい。

おにぎりせっせと作っていたら、函館の提督が見えた。

彼を使うことにしよう。

何故か函館の駆逐艦たちは彼を呼ぶのに躊躇しているし。

呼んで使つていたら、おそろしくにらまれた。文句があるなら、はつきり言いなさいよ。

あ、函館の叢雲が来た。

「あんた、なに、よその霞を手伝っているのよ。」

「え、まあ、要請があつたので。」

「それなら、今からあたしたちを手伝いなさい。」

「え、ええ、はい。」

こちらとしては手伝ってもらっているのだから、横からかつさらわれるのは気にいらない。

「ちよつと、提督。」

「はい。」

「なんであつちにあつさり行こうとしているのよ。」

「え……まあ……私は元々あちらの提督ですし。」

「今は私の提督じゃない。」

「え？」

「え？」

直後、館内からどつと人がやってきて大わらわになつたのでいろいろと有耶無耶に

なつた。

信州から林檎やおやきを売りに来た人も、割合に売上があつたらしい。明日は浅草にあるという、提督おすすめの洋食屋にでも行こうかしら。そして、あずさ二号に乗ってふるさとに帰る。

あの寒い寒いふるさとへ。

島原で焼かれた五三焼を土産に持つて。

CCCXVI：おいしきは幸せのあかし

「私たちが欲しいのは、なんといっても先ずはヴルストよ。」

開口一番、日本生まれのドイツ戦艦はそうのたまった。

随伴する他のドイツ艦艇も即座にその意見を首肯する。

場所は執務室。

外は冬の景色。

雪の舞う午後。

外気は氷点下。

ここ数日、北の国の天候は荒れるらしい。

吹雪く中をやって来た面々は、期待に溢れた顔で私を見つめていた。

全員が決意のみなぎった表情をしている。

それは決死の覚悟さえ思わせる程だった。

ヴルスト。

つまり、ドイツ語で言うところの腸詰めだ。

それらを彼女たちは切実に欲したのである。

何故、ドイツ艦艇はここ函館までそれを要求しに来たのだろうか？

軽井沢や鎌倉といった場所に於いても、それらを入手出来るのではなからうか？

何故、彼女たちのそばに大本営の赤城と瑞鶴が当然のようにいる？

謎だらけだ。

今日の秘書艦の大鷹（たいよう）も困惑している。

彼女が作ったおやつのパウムクーヘンを、ドイツ艦や日本の正規空母たちは旨そうに食べていた。

しつとりしていて甘くやさしく口内を満たしてゆく、ドイツの菓子である。

焼き加減が絶妙だ。

ドイツ国内では一般的な菓子でないらしいが、日本ではよく知られている。

日本を訪れて初めて食べたと、旧東ドイツ出身の料理人が先日話していた。

なんとも不思議な気持ちになってくる。

「あと、純粋なビールと新鮮なじゃが芋とザウアークラウトも必要よ。これらは譲れない。そう、ドイツの艦艇として譲れない条件なの。パンは焼きたてで、みっしりずっしりが基本原則。フランスパンやイギリスパンみたいに、中身がすすかなのは駄目ね。

基本的な要求はそれくらいかしら。」

連撃的第二撃が届いた。

成程、それならば北の国を選ぶ気持ちに分からなくてもない。

長崎もじゃが芋の生産量は全国第二位と多い筈だが、そういう話ではないのだろう。

「ビールは勿論、サツポロね。丁寧に醸された地ビールもいいと思うわ。」

北の国で呑むビールならば、やはりサツポロだろう。

地ビールも旨いがある。

わかっているじゃないか。

函館で生ビールを呑む快感は実に素晴らしいほどだ。

すつと溶け込むように喉から胃に流れ込んでゆく、黄金の液体。

嗚呼、羊の肉と共に食べたくなってきた。

私の顔を見て微笑むはドイツの戦艦。

まるで慈母の如くに笑みを浮かべて、彼女は至極論理的に結論を述べ去っていった。

そういう訳で、羊と豚と馬鈴薯とビールとキャベツの調達を行うことになった。

東奔西走してゆく部下たち。

私も指示のために動き回る。

拘束具で全身覆われた小太りの人物を引き摺る海防艦たちに、私は話しかけた。

彼女たちは『T. S. F.』の腕章を左腕に附けた猛者であり、陸上に於いて無類の強さを發揮する。

ちつこい勇者たちだな、まるで。

……君たち、その人はなんだね？

えっ、豚？

豚と呼ばれた人？

早く返してきなさい。

彼をどこかで見た気もするが……気のせいだな、きつと。

食文化に関して言えば、日本人ほど多彩な国々のそれを食欲に吸収しようとする国民は殆どいないんじゃないだろうか？

米国にもほんのり近い感覚はあるけれど、庶民にも異国情緒溢れる食べ物を受け入れ浸透していく素地があるという点では世界随一じゃないかと考える。

我が鎮守府に限っても、鳳翔間宮を中心とする料理上手の艦娘が日々のぎを削っている。

『食は函館にあり』とのことで日本各地並びに外国からも料理名人たちが続々集結して

いて、旧東ドイツのパン作りを学んだ料理人やフランス各地の郷土菓子を作る菓子職人やイタリア料理に魅せられた料理人やらも日々研鑽している。

また、李さんは素朴な外見ながらも料理の腕は全体の中でも突出しており、彼の作り出す中華料理は至極の逸品と言っても過言でないだろう。

実際、函館鎮守府の料理上手が要人接待で使われることもたまにある。

うちは料理店じゃないんだけどな。

ホテルや料亭や料理店の料理人がここで修行に來たいと、そうした要望が現在も殺到しているらしい。

うちは一応軍事基地なんだけどな。

日本人はなんと食への飽くなき追及にひたむきなのだろうか。

たぶん、我々は世界に冠たる食いしん坊なのだろう。

幸い、ドイツ娘たちの胃袋は我々の提供した料理を無事に受け入れてくれた。

飛び交うジョッキ。

山盛りのヴルスト。

山盛りのじゃが芋。

山盛りのキャベツ。

他の鎮守府から来た艦娘も加わり、状況は宴会の様相を呈してゆく。

ヴルストをちやっちやっつと備前刀的鍛造的ペティナイフにて斬り刻んでフライパンで炒め、少量の醤油が加えられた溶き卵を投入してさつと焼く。

軽く焼いてちやっちやと形を整えたら、簡単オムレツの完成。

オムレツの上には、イタリアの料理人が作ったトマトソース。

まっこと旨いぜよ。

そういう一品料理を作ったら、ひたすら作らされる羽目に陥った。

むう。

広島大阪好み焼き対決が行われ、賑わう声が厨房に届いている。

焼売や焼き餃子や水餃子も平行して大量に作られ、それを狙う酒好きの艦娘が厨房に乱入して来る。

困ったものだ。

だが、そうした闖入者（ちんにゆうしゃ）たちは海防艦によって編成された『とうこうしえんかんたい』に随時無力化されていく。

ちっちな艦隊は『T・S・F』の腕章をきらめかせつつ、大型艦を次々撃破していった。

圧倒的じゃないか、彼女たちは。

歴然の武勲艦があっけなく轟沈してゆく。
やってくれた喃（のう）、やってくれた喃。

ようじよ、つおい。

ああ、君たち、油性マジックは止めてあげなさい。

出来立ての潰しじやが芋や揚げじやが芋を口に入れてもらいながら（何故か順繰りで彼女たちは私の口に食べ物を詰め込んでゆくのだ）、オムレツを幾つも作った。

翡翠色の水餃子を李さんから貰って食べると（流石に彼からは『あーん』がない）、皮のもちもち感と中身の海老のぷりぷり感とでまことに旨い。

八戸（はちのへ）の特別純米酒と五島列島のあら塩で下ごしらえされた海老のうまみが、じんわりと口の中へ染み込んでいった。

それが、気持ちいを幸せで満たしてゆく。

うまいぞおっ！

目からビームが飛ばせそうな気もする。

鳳翔と間宮が焼き餃子をあーんしてくるので、作業をしながら食べさせてもらった。

行儀が悪いんじゃない。

こちらも出来立てのオムレツを提供する。

我があーん返しを喰らうがいい！

なんてな。

大淀が書類作業の督促（とくそく）に来るまで延々と玉子料理を作ったら、彼女から微妙な顔で注意されてしまった。

反省しよう。

夜。

鎮守府の大半が寝静まった時間。

あの天敵たる、とうこうしえんかんたいもぐつすり眠る夜更け。

書類作業を終えた提督がひっそりと執務室から出て来て、厨房へ向かい始めました。

索敵機から送られてくる映像を確認し、私は瑞鶴と一緒に厨房へと向かい始めます。

さて、今宵の提督はなにを作られるのでしょうか。

わくわくしてきました。

ずいずいダンスを踊りながら、瑞鶴は軽やかに厨房へと向かいます。

私も見よう見まねでずいずいダンスを踊りつつ、提督を追いしました。

提督が厨房に入った後、私たちは時間を見計らって顔出ししました。

苦笑する彼。

でも無問題。

やさしい提督は、私たちの分も作ってくれらることになりました。

ふふふ。

昆布だしのおつゆ。

斬り刻まれるネギ。

ばらばらとお湯に投入される乾麺。

さつと作られた品が、私たちの眼前に提供されます。

うどん。

拉麺（ラーメン）と蕎麦が圧倒的に強い函館ではあまり勢力を伸ばせていないようですけど、関東圏や西国では割と食べられている麺類です。

添えられるのは京都の七味唐辛子。

ではさつそくいただきましょうか。

先ずは、おつゆを飲んでみました。

やさしい風味が口内に拡がります。

昆布だしになにか足していますね。

魚のあごみみたいな感じがしました。

ふむふむ。

麵をすすると、おつゆやネギの香りを伴った風味がおいしく舌に伝わります。

ちゆるんとした喉ごしを楽しみ、更におつゆを飲みました。

とてもいいじゃないですか。

こういうのがいいんですよ。

提督と夜食を楽しんでいたら、ドイツの皆さんがやって来てなにやらドイツ語で騒ぎだしました。

苦笑しながらも、再度うどん作りのために腰を上げる提督。

異国の艦艇は、提督の料理をどのように評価するのでしょうか。

彼女たちは麵をきちんとすることが出来るのでしょうか。

最後の一滴までおつゆを飲み干した私は、興味津々の瑞鶴と共にその様子を見つめることにします。

さて、どうなることやら。

CCCXVII：ツエアシユネーターラー・テークリヒ

駆逐艦。

戦闘艦艇に於ける基幹戦力であり、随伴護衛先鋒殿軍（しんがり）水雷戦隊秘密戦隊防空対潜輸送その他と多岐多様に渡る活躍が期待される艦種だ。

艦娘としてこの世に顕現した者の中でも駆逐艦は群を抜いて数多く存在し、今日もどこかの大海原を駆けていることだろう。

提督の役目の大切なひとつはこの駆逐艦を如何に適切に運用するかであり、それは断じて暴言や威圧などによって行われるべきでない。

まあ、そのようなことを平然と行う輩は、例え提督になれたとしてもさっさとこの世から退場するであろう。

小柄な子といえども、艦娘の力は人間のそれを凌駕するのだから。

勇猛果敢にして意気軒昂を旨とする。

そは駆逐艦。

戦意に溢れて、倒れる時は前のめり。

カチコミ上等で、近接戦闘も辞さぬ。

重巡空母戦艦をおそれぬ鉄火娘たち。

吹雪。

吹雪型駆逐艦一番艦。

彼女は漣（さざなみ）や叢雲（むらくも）や電（いなずま）や五月雨（さみだれ）と同様に、成り立ての提督を補佐し得る能力が多大にある駆逐艦だ。

上記五名は、『初期艦』と呼ばれる任務につくことも多い。

『初期艦』は新人提督或いは司令官と十全なやり取りが出来得る存在であり、彼もしくは彼女または異なる者を支え、時には叱咤激励（しつたげきれい）し、共に歩むことを是とする。

彼女たちは他の艦娘との交流活動にも力を発揮し、管理職としての能力も高い。

人の多様性に合わせて上記五名が提督向けに基本的に『用意』されており、その他に『名譽初期艦』が存在するという都市伝説も稀に聞こえてくるけれど、確実な確認はいまだになされていない。

北の国の函館鎮守府にも、吹雪は着任している。

島風と並ぶ最強系武闘派駆逐艦として、全国の艦娘に知られていた。

甘いものを食べている時と提督に甘えている時及び姉妹艦と戯れている時はあどけない少女の顔を見せるが、戦闘時の迫力は阿修羅もかくやであり、駆逐艦の戦果と思えぬほどの活躍をしている。

演習でも実質的に負け知らず。

だが。

彼女には奇妙な噂が付随した。

旗艦に随伴する艦艇のように。

曰く、砲撃戦での破壊力が戦艦級だとか、彼女といると敵方の戦闘機や爆撃機が頻繁に同士討ちするとか、戦棍で重巡洋艦や空母を撃破したとか、そんな荒唐無稽（こうとうむけい）なものだ。

島風にも戦棍で戦艦級の敵さえ蹂躪（じゅうりん）したとの噂はあるが、なにかを間違えたのだろうか。

たぶん。

敵の血潮で濡れた肩

地獄の娘と人の言う

道南の街に太平洋戦争の亡霊が蘇る

占守島（しむしゅとう）、沖ノ島海域に

無敵と謳われた装甲特殊駆逐艦小隊

情無用、命無用の駆逐艦

この命、三〇億ドル也

最も高価なワンマンネービー

吹雪、危険に向かうが本能か

今日は司令官手製のチーズケーキが食べられる！

吹雪は内心歓喜に満ち、思わずにんまりしてしまう。

あの時の経験を反芻（はんすう）しているかの如く。

彼女は食いしん坊万歳なのだ。

芋や羊羹を始め、色々食べる。

ほんのりと口からよだれをたらす吹雪に、姉妹艦の叢雲が呆れた表情を見せた。

叢雲の頭部にある二つの浮遊艦装も明滅しているのだから、人のことはあまり言えない気もする。

ちなみに龍田の頭部浮遊艦装もぎゅんぎゅん回転していて、よその天龍たちが酷く心配している。

素朴な作りのケーキはまだまだ修行が必要に思われるけれど、その価値は金で計れるものでない。

そう、吹雪は考えた。

そのように思った駆逐艦は多いようで、数多い彼女たちは無言のうちに鉄の結束力をもつて戦場へ臨んだ。

ひたむきな駆逐艦群に抗し得る艦種はほとんど存在しないとまで言われる程。

その彼女たちが今、激戦の地へと向かう。

あそこだ。

あそこがはらいそだ。

洋菓子のおいが少女たちの鼻腔に届く。

あまくせつなくやさしくつよくひとしく。

それは食堂をまんべんなく満たして外へと漏れてゆき、続々と集結してゆく艦娘たちの戦意を高めてゆくことにもつながった。

無数の艦娘たちの

ざらつく欲望にさらされて

厨房へと引き出される

函館の街の提督

魂無き艦娘たちが

ただ己の甘味を賭けて激突する

バトリング

回る砲塔から

提督に熱い視線が突き刺さる

厨房の中から、クッキーを叩き潰す音が聞こえてくる。

見えた！

そこっ！

普通極まる感じの目立たぬ中年男性がエプロンを装備し、せっせと菓子作りに励んで

いた。

司令官。

そう、男性は彼女たちの指揮官だ。

時に料理を作つて部下に振る舞う。

そんな軍属の人物だ。

特に器用でなく、特段不器用でもなく。

いや、どこか不器用なのかも知れない。

それでも、なにかをしようという気持ちはあるように思われる。

部下たちと柔術を行つては容易に寝技に持ち込まれ、キャッチ・アズ・キャッチ・キャ

ンでも連戦連敗更新中だ。

それなのに練習後は士気が高まる不思議。

そんな彼によつて、沢山のクツキーが粉々にされてゆく。

頑健な深海棲艦の艦装が、砲撃や雷撃によつて破碎されゆくように。

司令官の手が、砕けたクツキーとバターと砂糖を混ぜてこねてゆく。

幾つも用意された丸い型にそれは敷き詰められてゆき、次は練られたクリームチーズと卵黄が混ぜられ、砂糖を加えたそれが型の中へ注ぎ込まれていった。

そして、オーブンへ。

やがて、いいにおいが漂ってくる。

それはまさに生きている証に見えた。

生きているからこそ、食べられる喜びだ。

過去を、重力井戸をこえ、魂は飛翔する。

メレンゲのように、口に入れるや否やふわりと溶けてもうなにも残らない。

やわらかな甘みも、ささやかな楽しみも。

刹那のやさしさ、泡のように消えてゆく。

司令官が卵白を泡立て始めた。

息を止めるがごとくに見つめる幾つもの視線に困惑しつつ。

チーズケーキが焼き上がってくる。

ふくれ、ふくれ、そしてしぼんで。

とうとう一触即発の危機が訪れた。

あら熱を取る間もない程の勢いだ。

あらあら。

数百の娘たちが雄叫び上げんとす。

だが、提督がそこへ一石を投じる。

「騒いだり揉めたりしたら、ケーキをあげませんからね。」

場のざわめきが一瞬で消え去った。

素早く冷まされ斬り刻まれた甘味が鳳翔や間宮たちによって皿へてきぱきと載せられ、待ち構える艦娘たちにどんどん配られてゆく。

共にいただくのは、チコリの珈琲や和紅茶など。

では、いただきます。

提督手製の試製チーズケーキは今後の鍛錬が必要とされる作りながらも好評のうち艦娘たちの胃袋へとおさめられ、次はいつ食べられるのかと期待する声も複数あるという。

取材記者たる大本営の青葉は、名残惜しそうに空の皿を見つめる艦娘が複数いたと証言する。

また、提督手製の試製焼きメレンゲは一粒一粒ちっこいながらも好評を得て、焼き上がったそばから飛ぶように求められたという。

『図書館』

『押し入れ』

『廃医院』

『夏の民宿』

『親切な隣の奥さん』

『雪山の夜』

『貴子ちゃん』

それぞれの語りが終わり、司令官のこわい話も終盤に近づいた。

歴戦の吹雪はこわいながらも聞き入っていたので、話の合間にオイル漏れしていないことをそつと確認してほつとする。

同様の艦娘は多いみたいで、彼女はほんのりと苦笑いした。

外は吹雪。

自身の名の元になった気象状況をそれとなく窓から眺めながら、武勲艦は司令官の話の聞き逃すまいと身構えた。

暖房で温められている筈の講堂は妙に肌寒く、鍛えられた肉体を持つ艦娘でさえもその影響から逃れ得ている者は数少ない。

おそれを知らぬかに見える彼女たちにも、こわいものはあるらしい。

こわいものについて聞いてしまう。

聞いてしまえば後戻りは出来ない。

それが提督の怪談。

こわい話。

「夜も更けてきましたので、次のお話で終わりにしましょう。『河原の夜』」

提督がゆつくり淡々と話してゆく。

しんと静まりかえった屋内。

「あれは提督になる前、先輩と夏に川へ行つた時のことです。山の中を延々と運転させられたのが妙に懐かしいのですけど、それはさておき、キャンプ予定地の駐車場に着くといつもは複数の車が止まっているらしい場所の筈なのに、我々の車以外は一台も止まっていませんでした。変じやのう、変ですねぇと言いながら私たちは河原にテントを張り、カレーを作り、酒を呑んでのんびりしていました。で、夜になって、さあ寝ようとした頃のことです。」

屋内の気温がまた下がってゆくように、艦娘たちは感じた。

吹雪は窓の外を見つめる。

雪はまだ止む気配が無い。

CCCXVIII：扶桑姉様と新任提督

扶桑はその日、桜と雪の舞う中、春の函館鎮守府に到着した。

休暇を消化するためである。

行き先はどこでもいいような気もしたが、折角山城が手を回してくれたのだ。

あのひたむきな妹。

姉のために奮闘し、姉のために尽くす娘。

いつもいつも感心し感服するほどの働き。

なんとも素晴らしいことではなからうか。

妹の好意には感謝しないとイケないし、おいしい食事を楽しむのも悪くない。

それで、彼女は函館に来た。

扶桑は大変気疲れしている。

就職活動が失敗続き故にだ。

金剛型戦艦や伊勢型戦艦などに比べて需要がやや低めにあたる扶桑型戦艦の彼女はいたく残念なことに今もって提督を得ること能(あた)わず、はつきりいつて宙ぶらりんの状態であつた。

同姿艦の中には第一線で活躍している者もいる(ケツコンしている者まで存在する!)が、最近とある激戦海域で戦闘後に発見された彼女はしばらく研究機関でなんやかやと実験された挙げ句に成果が伴わないとしてそこを放逐された。

世間を知らないまま。

世界を知らないまま。

解放後に就職活動を行った彼女だが、そもそも戦艦級艦娘を欲する提督の元にはケツコンするため日々切磋琢磨する戦艦が目白押しだったし、戦艦級艦娘がいない基地は資金資材共にかつかつのところ、が殆どだった。

とどのつまり、彼女は予備役艦娘としてひっそりと暮らすしか取り敢えずの選択肢がなかったのだ。

横須賀鎮守府に所属はしているものの、無所属に近い感じの予備的な扱いである。

本来ならば戦力不足にあえぐよその基地に配属すべきだろうが、戦艦級艦娘の彼女は正規空母級艦娘同様に維持すること自体が金喰い虫で出撃となれば更に資材も大量に必要とする。

駆逐艦数名をやつと扱えるような屯所に所属させるなどもつての外（ほか）だし、水雷戦隊を二つ三つ持っている規模の基地でも扱うのは難しいだろう。

中には彼女を希望する基地も複数存在したが、概算的日常経費及び戦闘経費の目録を手渡された提督たちは一様に形容し難い顔で泣く泣く彼女の着任を諦めた。

函館鎮守府は今尚着任希望の艦娘が殺到する激戦地だし、引く手あまたの駆逐艦に比べて大型艦の着任先は意外と厳しい。

戦闘を旨とする艦娘としてはもどかしい気持ちになるが、世の中、そうそう思い通りになるものではない。

世界中で最も『戦前への回復』に近いとされる日本だって、ようやく昭和後期を目指している状況なのだ。

艦娘さえいない国や国際的流通に依存していた国などの状況はお察しの段階である。メリケンでさえも多数の捨て艦時代を経てようやく人権的なナニカに目覚めつつある環境だし、人間を艦娘的なナニカに仕立てて日々使い捨てる国もある。

国際的協調など、望むべくもない。

扶桑を取り巻く状況は、世界的に見ると随分ましな方だった。

旅装を解き、宿泊棟の一室に少ない手荷物を置いた彼女は鎮守府近くの砂浜を歩く。空は曇っていて、風が強い。

函館は風都とでも言うべき、風がよく吹く街なのだ。

今は雪交じりの風が扶桑を濡らしている。

関東とは氣候がまるで違うし、なにもかも違う。

誰もいない海。

荒ぶる海。

灰色の冷たい海。

なんだかもの悲しい気持ちに胸を満たしてゆく。

『不幸だわ。』

彼女は内心、そう呟いた。

山城定番の台詞と言われる言葉だ。

しかして、彼女はさほど内向的でない。

海域発見（ドロップ）されたからだろうか。

『どこかに提督が落ちていないかしら？』

同姿艦の中でもかなり樂觀的な方に属する彼女は、存外のほほんとしていた。

「あら、ホントに落ちていたわ。」

思わずそう口にする彼女の視線の先。

緑色の軍服っぽいジャンパーをまとった若い男性が倒れている。

彼の上にはまだそんなに雪が積もっていない。

ならば、そんなに時間は経っていないものと考えられる。

背が高く、ひよろつとしてはいるが鍛えているのか割合がっしりした体であった。

あちこち触つてみて、すぐにそれはわかった。

東洋系の顔立ちも整つていて、地味だがいい。

性癖をこじらせてさえいなければ、おそらく優良物件だろう。

たぶん。

「抱きしめられたら、どんなに素敵なことかしら？」

扶桑はオイル漏れを起こしそうになりながら、男の頬をやさしく撫でる。

初めての熱情が彼女を翻弄した。

下腹部が熱をはらみ、搔きむしられるような感情が体中を暴走してゆく。

逃してはならない。

決して。決してだ。

彼女のおんなの部分が、そう囁いてきた。

それは、艦娘の本能に近い部分からかもしれない。

彼に提督の資質があることは、一目で見取れた。

それは艦娘ならば誰でも持つてゐる能力。

そこから自分に最適な提督を探するのは一苦勞なのだが、幸い彼女と彼の相性はよさそうだ。

ちくわ大明神のお陰かしら？

扶桑はうっとり男を眺める。

ぺたぺたあちこち触つて、彼が生きていることも確認した。

艦娘にとって、己に合った提督を見つけられることはとても幸運なことだ。

提督のために生き、提督のために死す。

それが艦娘の心意気だ。

勿論、地球の平和のために戦うことを第一義として忘れてはいない。

だが、艦娘が乙女の姿をしているのは何故だ。

それは、提督との愛を育（はぐく）むためだ。

そうに決まつてゐるじゃないか。

故に艦娘は提督に愛を囁き、陥落させることに喜びを覚える。

戦いで勝利することと、提督を落城させること。

それは大抵の艦娘の中に於いて等価値の存在だ。

姉妹愛を最優先させる者もいるが、それはそれ。

キラキラッと扶桑の瞳が輝いた。

千載一遇の好機が到来したのだ。

こんな機会は二度と来ないぞな。

よからう、ならばすぐに行動だ。

瞬時に鷹の目となった彼女は軽々と提督をお姫様抱っこするや否や、その体温とにおいと弾力を堪能しながら大淀の元へと向かう。

提督を見つけちゃったら、電撃結婚……もとい電撃作戦が基本。

全身全霊をもって、すぐさま総力戦を行わなくてはならない。

彼女は基本作戦要項に従い、元締めの艦娘の働く場所へと疾走する。

恋心。

初めて芽生えた恋心。

脳内を幸福物質が駆け巡る。

キラキラッと輝きつつ、扶桑は通常の三倍の速さでウキウキルンルンと執務室へ突撃した。

オイルの何滴かを緑色のジャンパーに染み込ませた扶桑は、無事に執務室に着いた。心荒ぶる彼女は情動うごめくままに扉を何度も叩き、入室許可を得るや否や素早く室内に潜り込む。

輝くばかりの笑顔を随伴して。

その動きは歴戦のくノ一の如くで、それを見た函館の提督は彼女の姿に瞠目した。

ぬ、あの動きは西江水（せいごうすい）。

柳生流か？

提督が男を見て最初に考えたのはあーあ到頭やつちやった、であり、だがすぐに思い直す。

幾らなんでも、さらってくることはないだろう。

……だよね？

提督は少し不安に思った。

そもそもこの扶桑は建造艦でないし、ちよつと天然成分が多めのように思われなくもない。

そして、暴走状態でお目々ぐるぐる状態の扶桑姉様は無敵だ。

赤い配管工もかくやの勢いである。

彼女は勢いこんで言った。

「私の提督を見つけましたっ！ ケツコンするので指輪をください！」
「なんぼなんでも、はしやぎ過ぎで尚且つはしより過ぎです、姉様。」

たまたま提督の仕事を手伝っていた無所属系山城が、冷静に姉様へ突っ込む。

彼女は姉にすいと近づいて鼻の下にハンカチーフをやさしく当て、拭い取ったオイルのついたそれを丁寧な懐へ仕舞い込んだ。

それは非常に自然で流れるような行為だったので誰も不自然に感じなかった。

この山城こそが、扶桑を函館鎮守府へ来るように手配した張本人なのだった。

眼鏡をくいっと上げる仕草が、どことなくなんとなく霧島っぽい。

その上、やたらと多い年度始めの書類業務を片付けるため、室内には事務系装備の艦娘がみつしり詰まっていた。

何故か眼鏡率が高い。

提督の趣味だろうか？

そこかしこで眼鏡をくいっと上げる仕草が見られた。

それは、流行りなのだろうか？

よくわからない。

ほぼ全員が目丸くしている。

まあ、それは当然だろう。

大半は函館鎮守府所属だが、中には無所属の艦娘もいる。

彼女たちは、扶桑が雄々しくお姫様抱っこする優男をじつと見つめた。

逆だよ、と思いつつ、それもアリかなと思考を巡らし。

彼女たちは、なんらかの理由で無所属となっている戦乙女たちだ。

戦機を逃すような者は誰もいない。

獲物を見つけた猛禽のような表情で、彼女たちは扶桑とこれから提督になるらしい男を凝視した。

雑念妄念執念疑念懸念などを、その瞳に浮かべながら。

再び眼鏡をくいと上げながら。

その様子を見た妖精たちはニヤニヤと笑った。

北信の小さな町から訪れた元駆逐艦たる講師は開口一番、こう断言した。

「男を捕まえておくには、胃袋を掴むのが一番よ。」

「()ですか?」

「きゃあっ!」

天然の姉様は、ついつい隣の艦娘にストマッククローを繰り出した。

会心の一撃！

山城は悶絶している。

その表情は恍惚（こうこつ）としていて、治療の必要はなさそうだ。

「ホントに胃袋を握り締めてどうするの。それは最後の手段なんだから、今は殺らないように。そうじゃなくて、要は旨い料理で提督を餌付けして逃げられないようにしなさいってこと。一時期に逃亡しても、提督が帰ってきたらこっちの勝ちだから。わかった？」

元駆逐艦はそれを見てさえ通常運転だ。

冷静沈着な様子で淡々と話をしてゆく。

「あの、先生？」

「なに、扶桑。」

「逃げられそうになったら、どうするんですか？ 追撃するんですか？」

備前の刀工が鍛え上げた包丁を握ったまま問いかける戦艦級艦娘。

それはキラキラ輝いて、よく斬れそうだ。

にこやかに話す彼女の姿からは、病んだ様子は一切うかがえない。

聴講する艦娘たちは真剣な顔で講師と彼女のやり取りを見つめた。

だががしおかし。

それにこたえる講師の反応は素っ気ない。

「下手な追撃戦を仕掛けても、反転攻勢を受けて壊滅するのがオチよ。」

「ええ……。」

「つまり、一旦逃げられても相手が帰ってくるようにしとけばいいの。」

「どうやって?」

「日々の旨い料理とたまの甘やかすと『教育』で相手を完全にこちらへ慣れさせて、じわりじわりと調教していけばいつも一緒にいるのが当たり前になってくる。くさびさえ打ち込んでおけば、こつちのものよ。葉なんていらぬわ。葉はダメよ。副作用が制御出来ないから。不能になったら困るでしょ? 例え美人で床上手だったとしても、料理の下手な女は男を逃がしやすいわ。わかる? 飯マズ女は男を逃しやすいんだから、気をつけなさい。じゃあ先ずは、おにぎり味噌汁の必須アミノ酸コンビをこしらえることから始めましょ。これらは基本の必殺コンビよ。自分で作った味を、相手の舌に家庭の味として認識・記憶させなさい。それが第一段階の『教育』。それから、鶏の唐揚げや豚カツや肉じゃがやカレー、筑前煮や漬け物などもきりきり仕込んでいくから覚悟してね。これらが第二段階。煮物などはその後で教えるから、ガンガン行くわよ。ついてきなさい!」

その後、聴講生たちは容赦なくガンガン仕込まれた。

急遽決まった新任提督の研修だが、それは函館鎮守府で行われることになった。

戸惑う彼へ、教官たちは初め嬉々として鬼気迫る勢いで新人教育に臨んだ。

当初白兵戦技術などで劣る彼に教官たちは忸怩（じくじ）たる思いを抱いたようだ。

しかし戦術理論になると評価は一変した。

試しに行われた演習では、負け知らず。

さして錬度の高くない無所属系駆逐艦たちによる水雷戦隊が彼の指揮によつて水を得た魚の勢いを有し、よその鎮守府からやつて来た第一線級艦隊を撃滅する。

まさに知将。

彼はそう評価されるようになった。

急速に評価がうなぎ登りしてゆく彼を狙う艦娘は日々増殖してゆく。

扶桑と山城を金剛力士のように従えつつ、いささか頼りなげに見える提督候補生は彼なりにそこそこ真面目に受講した。

日常生活的技術はどん底みたいだが。

彼を見て庇護欲や母性本能がくすぐられる艦娘もいるようだ。

そうした日々の中、変化は訪れる。

横須賀鎮守府はつい先頃空席となつた艦隊指揮官の席を暖める存在にしようと、彼を積極的に求めるようになった。

それを怒つたのは呉舞鶴佐世保の各鎮守府である。

有能な提督を切望するのはどの基地も同じだった。

日常生活的な技術その他で壊滅的という状況は、大型基地で提督業務を行う際にはあまり問題視されない。

基本的に提督補佐官（副提督、提督補など）が提督の不足を補うようになっていし、私室は大抵いつの間にか片付いているのだから。

熾烈な擬似体験型艦隊戦闘による交戦やら複雑怪奇な根回しやら政治的なんやらが幾つも行われた結果、最終的に彼の所属は横須賀鎮守府に確定する。

そのことを漏れ聞いた提督候補生は、深くため息をついてこう言つたという。

「借金の期日だつて延期出来るのに、どうして提督就任は延期出来ないんだ。」

明日は彼が横須賀へ出立する日。

華やかな壮行会が日中催された。

苦笑する新人提督に群がる艦娘。

とても賑やかな催し物になった。

夕食が終わって業務を手伝ってもらった後で私は新しく提督になる彼を誘い、厨房内にある小さな机でささやかな第二次壮行会を催した。

李さんや鳳翔間宮がこしらえてくれた酒の肴（さかな）に、若き提督は舌鼓を打つ。二人きりの方がいいだろうと思って、他の人員は寄せ付けないようにしてある。

これから横須賀へ着任する新しき提督が、会話の口火を切った。

「やれやれ、世界の平和と我が年金生活のために少しは提督業務を頑張りますか。」

「年金生活……はは、実にあなたらしい。」

「私のような、身元不明の人間が提督にならざるを得ない世界。つまりはかなり追い詰められているのですね、人類は。」

「まあ、そういうことになります。」

「そして貴方だけでなく、提督は比較的全般的に恩賞を与えられた存在だ。」

「そうやって、目をそらしているのでしょうか。」

「同感です。やたらと恩賞を与えるのは窮迫している証拠だと、古代の兵書にあります。敗北から目をそらせる必要があるからだそうです。」

「まさにおっしゃる通りですね、提督。ところで、ここに一五年ものコニヤックがあるので、どうでしょうか？」

「それは是非とも、この舌と胃袋を喜びに震わせたいですね。」

我々は乾杯した。

民主主義万歳、と言いつつ。

彼はきつといい提督になるだろう。

私はそう思った。

横須賀鎮守府の近くには、『鉄の森』という名の旨いドイツ風家庭料理店が最近出来た。

横須賀に行くことがあったら、一緒に食事を食べるのもいいだろう。

あそこの若い女性料理人、金髪のフロイラインだったか、相当の腕利きときく。

時にはねぎらいも必要不可欠だ。

あそこは問題だらけの部署だし。

横須賀鎮守府も彼が着任することで少しは安定するといいなあ。

気まぐれが本領の函館の天候ではあるけれど、本日は晴れ模様。

空は快晴。

出立日和。

にこやかな扶桑と複雑な表情をした山城と正規空母軽空母重巡洋艦軽巡洋艦駆逐艦群とが、密集陣形で新任提督を包み込んでいる。

妖精たちも沢山提督にしがみついていた。

扶桑は津軽海峡を眺める。

波は穏やか。

まるで私と提督の門出を祝ってくれているみたい。

彼女はそう考えた。

自分をおんなにしてくれた提督のためにも力戦奮闘しよう。

扶桑は決意し、提督の手を握りしめた。

やさしく提督を見つめた姉様は、ぎゅっと彼の手を握りしめた。

もやもやするが、仕方ない。

姉様のために頑張ろう。

嗚呼、空はこんなに晴れているのに。

……。

姉様を不幸にしたら承知しないわよ。

覚えておきなさい、ヤン提督。

CCCXIX：夜より他に聴くものもなし

函館鎮守府は北方に於ける大型作戦時の補給基地と中継基地を兼務すると共に、艦娘が休暇で滞在するための保養地としての側面を有している。

戦闘狂と一部から称されおそれられる艦娘だが、彼女たちは多感な少女の面を有していて不安定な時もある。

少女や幼女などの容姿をしているからだろうか。

函館鎮守府はある種の癒し系空間の役割を果たしており、私なんらかの担い手であることは誇りと思っている。

この春、新たな人員が我らの函館鎮守府へ送られて来た。

新たな楔（くさび）だと考えられる。

人間艦娘そうでないモノの精神的安寧をもたらすため、欧州発大本営経由で一人の有名な精神科医が派遣されたのだ。

そういうお題目となっており、断ることすら出来ない。

おとろしい。

彼は一言でいうと男前だ。

イケメンでなおかつ洒落た中年男性である。

金髪碧眼で、シユツとした感じの白人男性。

……。

日本国籍の人でええやん、日本国籍の人で。

そうは思うのだが、深海棲艦との戦いに一定の目処（めど）がついたと思いついて入るごく一部の人類にとっては、戦後のあれこれこれそれが気になるのだろう。

つまりは欧州に対する政治的配慮やらなんやらかんやらの結果が、こうした事態にながったのだと考えられる。

ようわからんが、非常にめんどくさい。

なんで函館鎮守府に押し付けるのかね。

『博士』と呼ばれることになった欧州系イケメン中年男性は、料理上手でもあった。

その調理風景は実に優雅。

それは見事なものだった。

エゾシカ料理を振る舞ってくれたのだが、変な臭みもなく野生の風味はあるもののきちんとおいしく食べられる味わいだ。

倒し方・血抜き・冷蔵・熟成のすべてに於いて、高い技術が使われたのだろう。

手慣れた感じがする。

つまりは、旨いのだ。

彼が作ったハンバーグを堪能していると、博士はととてもやさしげな目付きで私を見つめていた。

ちよっぴし、ゾクツとする。

なんやろな。

理不尽且つ散々な叱責（しっせき）を浴びせた後、嗜虐（しぎやく）的な笑みを浮かべたまま大本営直属の老年期的査閲将校殿はようやく去っていった。

やれやれ。

肩がゴルゴンゾ……もとい、凝るわい。

《彼は極めて下品だ。その存在など、大した価値もなさそうなのに。なにを勘違いしているのやら。》

「失礼、博士。なんとおっしやいました?」

イタリア語かな?

よくわからない。

「ああ、彼みたいな上官を持つと苦労するねと言ったんだよ。」

「そうですか。まあ、ああいう人ばかりではありませんから。」

「君はやさしいね。《彼が言っているのは、あなたの机の引き出しから拳銃が見つかったので、あなたの家を跡形もなく燃やしておきました、と述べるのと殆ど同様の屁理屈だ。実に嘆かわしい。》」

「博士、後半、なんとおつしやいました？」

「君は君の不運を嘆く必要がない、といった意味合いの言葉さ。」

「お氣遣いくださいまして、本当にありがとうございます。」

すると、博士ははかなげに微笑んだ。

五日後、大本営から憲兵隊がやって来た。

査閲将校殿が行方不明になってしまったという。

変だな。

憲兵隊を率いる隊長はどうも粘着質的性質の持ち主らしく、無実の私へしつこくねちこく質問を重ねてきた。

《論理的ではないし、それに知性的ではない。感情に振り回されるなど、捜査官としては下の下だな。》

博士がなにか発言したけれども、我々の誰も彼の発言内容を理解出来る者はいなかった。

隊長は割れやすそうな高級磁器でも見たかのような目付きで、おそろおそろ博士に目を向けている。

おそらく、博士の言葉は彼に対して批判的な内容なのだろう。

憲兵隊も複雑怪奇な欧州と揉めたくないであろうし、日本語で批判された訳でなし、つまりは日本人的日和見（ひよりみ）的思考に基づいて黙殺するに至ったようだ。

粘着質な隊長も冷ややかな博士の態度に勢いを削がれたような表情で、程なく隊の撤回を命令した。

震えているようにも見えたが、たぶん気のせいだろう。

立会人的な立場を要求し認められた博士が見つめる中で、二日間憲兵隊によるくどくしつこい尋問的質問が何度も何度も重ねられた（休憩を挟みつつ、朝から晩まで）。

嗚呼、仕事が滞る。

大淀の機嫌が加速度的に悪化の一途を辿ってゆく。

尋問に同席出来ない秘書艦たちのうつぶんがたまってゆく。

事務局の魔王様たる田中さんの機嫌が悪くなり、配下の事務員たる魔族たちや元艦娘たちやナニカの機嫌も同様に下降線を描いてゆく。

また、うちの艦娘たちや深海棲艦たちの不満指数がうなぎ登りになってゆく。

特に駆逐艦群を抑えるのが大変だ。

なでなでして、なんとかおさめた。

憲兵隊の隊員たちは全員びくびくしていたが、隊長は不遜な態度を隠そうとすらしなかつた。

次の日、ある意味勇者的な憲兵隊隊長が行方不明になった。

函館市内の宿泊施設に滞在していた彼は五稜郭近辺か駅近くの飲み屋に出かけると言つて夜間外出したまま、翌朝になつても帰つて来なかつたのだ。

当然騒ぎとなり、疑惑はこちらへ向かう。

やだやだ。

だが生憎と尋問終了後に地方テレビ局と雑誌の合同取材を受けていた私には鉄壁の他所存在証明があり、どこかへ出かける暇さえなかつた。

それが憲兵隊にとつては不服だったようだけど、しつこい隊長のいない彼らは精彩に欠けていて艦娘たちの厳しい視線にさらされながらの捜査は第三者から見てもおざりな感じが否（いな）めなかつた。

結局特務作戦小隊たる庶務三課の出勤となりそうになり、最終的に憲兵隊は私服による捜査と函館市警との連携を行うことに相成った。

一週間ほど表面的な捜査をした彼らは、結局まともな手がかりすら掴めぬままに横須賀へ帰投した。

えらく上機嫌になった艦娘たちや博士を見ながら、私は複雑な気持ちになる。

今はこれで済んでいるが、もしも戦争が終結してなにかあつたら……。

……うむ、考え過ぎだろう。

まあ、その時はその時だ。

博士が気合いを入れて作ってくれたザツハートルテは、貴重なカカオがふんだんに使われていて大変旨かった。

添えられた生クリームを刻んだケーキにちよこんと載せ、ぱくつと口に含むと幸せが口内に拡がってゆくのだ。

イタリアンローストで焙煎されて深みのある味わいのキリマンジャロの珈琲と併せ、共においしくいただいた。

鳳翔間宮李さんを含む我が函館鎮守府の厨房の面々は料理魂に火が点いたようで、燃え盛る炎の如くにより一層料理道へと邁進する結果となった。

最近、他所の提督が函館へちらほら訪れるようになってきた。

以前よりも増加傾向にある。

目標は博士。

目的は相談。

彼らはなにやら懺悔（ぎんげ）みたいな感じで博士に話しかけ、博士は神父だか牧師みたいな感じで告解（こっかい）のようななんやらかんやらを聞いているみたいだ。

博士に相談した提督たちは一様にすつきりした顔で、自信をもって自身の基地へと帰ってゆく。

博士は大変有能な精神科医のようだ。

博士の焼いたカトルカールを食べる。

四分の一の意味を持つ、パウンドケーキのことだ。

ぼそぼそしておらず、コニヤックに浸けた干し果実がよく利いていて実に旨い。

本好きの女の子が活躍する異世界小説に出てくるお菓子ってこんな感じの味わいなのだろうか、と思いつつ堪能した。

私の膝の上にいる鳳翔も満足する味わいのようだ。

ちぎって口の中へ入れて欲しいとの要求に応えているが、おつちゃんの指まで口の中に入れないで欲しいものだと思うぞよ。

もごもごしてはいけません。

私の膝の上に乗る気満々の間宮や大淀や戦艦や空母や巡洋艦や駆逐艦群が、全員目をギラギラさせている。

落ち着け、キミたち。

博士の生暖かい視線がちとつらい。

心から労（いたわ）ってくれているのはよくわかるのだが、その根拠が全然ちつともわからない。

《君は実に興味深い。生きていて本当によかった。毎日が驚愕の連続だよ。》

博士が爽やかな笑顔のまま、なにやら呟く。

本日もペイズリーのネクタイを締めている。

ホント、お洒落な紳士だと感じる。

言葉の意味を考えてみた。

彼は今のところ、我々の不利益になるようなことを一切行っていない。

つまり、先程の発言はどうやら悪い意味でなさそうだと想像がついた。

ならば、彼と手をたずさえて共に歩もう。

窓からの日射しが暖かい。

外は冷たいのだけれども。

穏やかに暮らしたいものだと思ふ。

「私の全身全霊を傾けて、君のために持てる全てを尽くすと約束するよ。《君はなにも心配しなくていいからね。そう、なにも案ずる必要は無いんだ。》」

博士は天真爛漫に見える笑顔で、にこやかにそう言った。

CCCXX : ニコラエフ

春なお寒い今日この頃、雪のちらつく中、函館鎮守府に小樽の提督が来訪した。

業務の合間を縫って、彼女とひそひそ話をする。

メトロンの技術が用いられた防諜設備のある会議室にて、我々は日露秘密会談を行った。

なんちて。

「これが祖国の戦術的切り札と称される、サヴァロフAG9ニコラエフの写真だ。見たまえ、タヴァリーシチ（同志）。なかなか笑えるだろう？ 発明家が国中に溢れ、シャーロック・ホームズと純文学とSFとを好むロマンティックな国民性が特徴の我が国らしい。」

そう言って、小樽鎮守府と同地に住むロシア人の元締めたる女性提督は私に数葉の写真を手渡した。

なんだこれ。

戦闘ヘリのローターと後ろをぶったぎったような上半身に二足歩行用の下半身付きの兵器が、飛んだり跳ねたりしている。

一見不安定に見える体格だが、存外安定した均衡性を保っているようだ。

両の脚にはそれぞれ六連装の噴進弾発射装置があり、右肩には大型砲が設置されている。

軽快な動きからすると機動性は高そうだ。

併せてこの奇妙な巨人がびよんびよん跳ねる動画も見せてもらったが、ロシア軍は本気でこの変わった兵器を戦場に投入するのだろうか？

そういや、日本でも四脚型の多脚戦車を開発しているって呉の先輩が言っていた。

写真をこの間見せてもらったが、まさに脚付きの戦車といった感じの兵器だった。

世界的な流行？

世界的な潮流？

ドイツやメリケン辺りでもなんか作っていたりして。

「この奇妙な二足歩行型兵器を、軍部は対深海棲艦戦闘に於ける決定的且つ強力な対抗存在とする腹積もりだそうだな。まあ、一種のファンタジーだな。一応のお題目としては、暴徒鎮圧と対空戦闘が主体という話になっている。そんな偽装をせずとも、他国はそれほど気にしないと思うがな。ま、なんでも複製してしまつてそれを自国で独自開発

したとのたまう国家もあるから、斜め上の行動を取る相手には油断をせぬことだ。」

「ハインドみたいな既存の戦闘ヘリを重武装化した方が、より建設的なんじゃないですかね。」

「ミグやスホーイ辺りも現在進行形で頑張つて兵器を開発しているらしいが、この国の艦娘のような戦果は未だに生み出せていないのが現状だ。チシマにあるマトウア島の対深海棲艦打撃艦隊も苦戦しているらしいな。日本の駆逐艦系艦娘に負けているようでは、たかが知れている。それから、あそこにはあと何名か艦娘を入れた方がいいぞ。」

「最優先課題のひとつとして、こちらも提言はしているんですがね。それで、ロシアの艦娘はどうなんです?」

「軍部曰く、第二次世界大戦の頃じゃあるまいし少女に鉄砲を持たせても国家の威信には繋がらないとのことだ。お飾りとしての有用性は検討中のようだがな。」

「はあ。」

「このニコラエフが開発された時の標語だが、『戦車以上の不整地走破性を持ち、戦車や戦闘ヘリ以上の火力を持ち、戦闘ヘリ以上の稼働時間が特長』だったそうだ。」

「ほう。」

「最初期に作られたニコラエフは操縦席と火器管制席とから成る複座型で、それは現在

練習機として使われている。その初任務は、カリーニングラードで発生した暴徒に対し、速やかな鎮圧を行うことだった。上半身下部に設置された二門のチェーガンは、事態を収束させるのに大変効果を發揮したそうだ。今も広報の連中はそう強調している。人型だったことは暴徒へ恐怖感と威圧感を与えることに繋がり、軍部は結果に一応満足した。」

「『暴徒』の鎮圧ですか。」

「痛ましい話だが、早急に対処しないと国中に暴動が広がる恐れはあった。それ故の投入だ。暴動を起こす者は国民でないとする認識の高官も複数いることだしな。理想論では、我が国は経営出来んよ。」

「戦うのは戦場だけであつて欲しいものです。」

「まったくその通りだ、タヴァリーシチ。カリーニングラードで一定以上の成果を挙げたニコラエフだが、ここから苦戦が始まる。情報統制をしていた筈だが、情報漏れした西側諸国から痛烈な批判をされたこともあり、事態は軍部の予想外の方向へ向かったとも言える。」

「二足歩行型兵器への対抗手段が、速やかに構築されたのですか？」

彼女の瞳がキラリと光る。

「くくく、勘のいいタヴァリーシチは嫌いじゃないぞ。知つての通り、深海棲艦による沿

岸地域破壊活動はクレムリンへ経済的大打撃をもたらした。即座に派遣された戦闘部隊は瞬く間に壊滅した。五次に渡つて討伐部隊が深海棲艦群へと送り込まれたけれども、結果は惨憺(さんたん)たるものになった。これによつて彼らは弱体化した訳だが、それに伴つて複数生まれた反政府組織や抵抗組織は、鎮圧に向かつたニコラエフの脚部と操縦席を徹底的に狙つた。情報が漏洩していたと考えるべきだろう。何人もの将校が肅清されたけれども、無実の者を吊るした結果は軍部の更なる弱体化に繋がつた。無残だ。そして複雑怪奇な西側諸国が徒党を組んでロケットランチャーや対空ミサイルや対物ライフルなどを反政府組織へ供与したことも、我が祖国へ甚大な被害を与えた。連中、なにをやつたのかそれすらも理解出来ないようだ。団結すべき時に分裂するなど、愚の骨頂にしか思えん。ウクライナでも小賢しいことをしているようだ。人はなかなか賢くなれないみたいだ。悲しいとは思わんかね、タヴァリーシチ。」

「クラークの小説みたいにはいきませぬね。」

「その通りだ。」

小樽の提督は、少し悲しそうな顔をした。

「数々の愚行の結果、『親欧米的』と見なされ疑われた政治局員は次々に吊るされるかシヴェリア送りとなつた。実に馬鹿馬鹿しい行為だ。で、ロケットランチャーや対物ライフルなどは実行現場に何挺もあつたそうだから、『政策的に好ましくない』とされる国々

の紐付きな武器商人が暗躍したのは間違いない。ただまあ、英国製の兵器だとしらばしば発射出来なかつたり装弾不良になったり、時折信管がきちんと働かないこともあったみたいだ。」

「英国製はアカンですか。」

「武器と食事に関しては厳しいな。物語や服飾や紅茶や菓子や酒などは優秀だが。」

「そういうものですか。」

「そういうものだ。それで、だ。激化する状況の中、肉片となる前にニコラエフを撃破した猛者も複数いる。二週間で合わせて五機のニコラエフを失った軍部は、報復措置として空爆部隊と戦闘ヘリを敵の複数ある拠点に投入。結果として敵対的不正規戦闘部隊の大半を行動不能に至らしめたが、都市機能も併せて大いに麻痺させてしまった。クレムリンは今もその後遺症で悩まされている最中だ。」

「うわあ。」

「で、どうだ?」

「どうだ、とはなんでしよう?」

「鈍い奴だな。何機買ってくれる?」

「……は?」

「このような兵器が深海棲艦との戦闘に役立つ筈は無かろう。軍部からオタルへの配備

を打診されたが、断っておいた。オタルは勇猛なる艦娘と我が優秀なる兵士たちと頑丈なハインドなどで十分だからな。ただ、沿岸警備用の張りぼてとしてならば多少は使い物になるだろう。そう思わないか？」

「いえ、全然。」

「取り敢えず、二機でいいんだ。」

「あの、お隣の国はどうですか？」

「他国の商船向けとされた出来かけ空母を騙して入手し、自国で独自開発したとして完成させ、しかもそれをいけしやあしやあと艦隊旗艦にするような国だぞ。おまけにその空母の艦載機まで蜂蜜作戦で情報を盗んだ結果だし、息を吐くがごとくにちよつとでも都合の悪いことをすべて隠蔽する。しかも、今は三国に別れているじゃないか。あんな奴ら、信用なんかこれっぽっちも出来ん。多数の国民の期待を背負って生まれた割にコケまくる、ドジっ子な我が国の方がまだ数段ました。ルールは国際的に信用が無いけれども、あの国の通貨はそもそも……まあ、そんな話はどうでもいい。」

「はあ。」

「実は、ニコラエフは既に量産態勢に入っているんだ。」

「えっ？」

「クレムリンは月産五〇機を目標にしているらしいが、生産工場ではそんな数を作れる

状況から果てしなく遠い。必死に作つて月産五機出来るかどうかだな。操縦士の育成も順調とは言い難い状況と聞いた。前途多難だよ。」

「えええ。」

「二機を即決で購入してくれたら、私の権限で更に練習機と先行量産機を一機ずつ無料で進呈しようじゃないか。タヴァリーシチの顔を立てて、私がなんとかしよう。」

「私の一存では決められませんし、とても予算は下りそうにないですよ。」

話し合ひは二時間続いた。

小樽の提督はやがて、イタズラを思いついたような顔で私に言った。

「わかった。では、慈悲深い私は練習機と先行量産機をタヴァリーシチに与えよう。各種部品も特別なオマケで付けてやる。さあ、喜ぶがいい。」

「こんな時、どんな顔をしていいのかわかりません。」

「笑えばいい。ほら、こうしてみろ。」

「あはは。」

函館鎮守府に新しい名物が生まれた。

名前はニコラエフ。

ロシア驚異のメカニズム。

弾を装填していない、大きな案山子。

練習機先行量産機強行偵察機の三機。

さつそく全国各地の明石や夕張や物好きの技術者などが大挙して函館を訪れ、国内のマスメディアからも取材依頼が殺到した。

カストリ雑誌系の取材は大本営がすべて断つたそうだが、現在もなんとか生き残っている彼らは大変執拗である。

今後もねちこく絡んでくるだろう。

行方不明者が増えないことを望む。

「ねえ、提督、この子を分解していいですか？　ちよこつとでいいんですよ。分解したらちゃんと組み立てますから。」

キラキラした笑顔でスパナをブンブン振り回すどこかの明石。

鼻からオイルを漏らして瞳孔が開いた状態で私に詰め寄る彼女は程なく、警備にあたっていたにゆうこうしえんかんたいの海防艦たちに捕まった。

私に近づき過ぎた彼女は、やがてどこかへ連れ去られてゆく。

広報の青葉や富竹中尉などが、ニコラエフをばちばち撮影している。

青葉も鼻からオイルを漏らしていた。

爽やかに笑う富竹中尉は相変わらず、「富竹フラッシュユ！」と叫びながら撮影している。

稼働時のニコラエフのようにびよんぴよん跳ねながら。

先日ゾンビ映画への出演を打診されたのを、不意に思い出す。

貧乏ながらも映画監督を続けている先輩が熱心に勧誘するのだ。

先輩曰く、役者が足りないという。

気に入った役者という意味だろう。

美人のポロリが随所にあるらしい。

可愛くて若いけれども仕事が多くに無いセクシー系の女優を掻き集め、それを売りにするという。

普段ポロリをしているし、されてもいる。

あまり興味はないな。

今宵は鎮守府内の『ウスケシ放送局』で、初雪望月とラジオ放送しなくてはならない。『ハッチーモッチーステーション』だ。

両名はニコラエフをネタにする気満々。

問い合わせがわんさか来るだろうなあ。

風が冷たい。

雪花が舞う。

北の国に春はまだ遠い。

最低気温が氷点下になることもしばしばである。

鍋にしようかな？

冷える夜にはやはり鍋だ。

大洗経由でもらったアンコウもある。

さてさて、頑張つて料理をするぞい。

CCCXXI : 舟は異なる支流をつたって

此処は横須賀鎮守府。

大本営に隣接する、人類の最終防衛拠点のひとつ。

工廠にある艦娘生成器を見学した私はそこから出た後、なにかを間違えた気がした。

なんだろう？

よくわからないな。

おそらくは気のせいだろう。

妖精たちからの要請に従って短期集中養成機関で即席提督になった私だが、着任予定基地は今のところ未定だ。

着任出来る艦娘がまだ少なめらしいし、養成機関での教官たちはすこぶる親切だったが、戦艦級、正規空母級、重巡洋艦級の彼女たちがもし私の配下になったとしても新人提督であるからして運用そのものに支障をきたすことは間違いない。

着任する基地次第だが、実際は難しいものとなるであろう。

元帥の訓示が始まる。

型通りの言葉ばかり。

定型表現が滑るのみ。

人類は本当に……いや、艦娘は本当に深海棲艦を打破出来るのだろうか？

そもそも、我々提督は艦娘をきちんと導けるのだろうか？

元帥の訓示が終わった。

後は大本營のあるこの横須賀で使いつぱしりをしながら、どこかの基地に着任可能かどうかをうかがう日々が到来する。

私のような即席提督では、四大鎮守府に着任するなど夢のまた夢。

小さな屯所（とんしょ）で、一名の駆逐艦と膝突き合わせてやってゆくの関の山。

まあ、それはそれで悪くないかもな。

大湊（おおみなと）の提督が颯爽と目の前を通り過ぎてゆく。

眼鏡をかけた司令官は、存外小柄で豊かな肉付きだ。

彼のそばにいるあの艦娘は、あきつ丸とかいったか？

提督と恋人繋ぎをしながら、るるんと歩いている。

なんだか、もやもやしてきた。

もう一度、工場に行ってみようかな。
忘れ物があるように思えてならない。
なんだ、この気持ちは？

ん？

工場の隅から何名かの声が聞こえてくる。
誰だ？

すると、暗がりから女の子たちが現れた。

「ちよつと、あんた。提督でしょ？」

「え？」

可愛らしくてしつかり者みたいな娘が話しかけてきた。
駆逐艦の子だ。

声が震えている。

よく見れば、足も同様だ。

なんだか限界にさえ見える。

彼女が着用しているのは確か朝潮型の制服だったっけ？

かなり酷い状態になっているのだけど。

「ええ、先程正式に提督となりました。」

「私の名は霞。朝潮型の駆逐艦よ。あんた、私たちを助けなさい。」

「はい？」

「鈍いわね。私たちの姿を見て、どう思う？」

物陰から現れた数名の艦娘は、いずれもぼろぼろな姿だ。

「これは……どういことだ？」

「とても……ぼろぼろです。……もしかして、大破手前？」

「そうよ。それにね、私たちは勝手に高速修復材を使う訳にいかないの。」

「高速修復材？」

「妖精たちが今、提督の足元に三つバケツを置いたでしょ。それを私たちにぎゅとぶっかけるの。わかったわね。あんたのソレを早く私たちにかけて。今すぐいっぱいかけて。」

「あ、はい。」

私はバケツの中に入っている緑色の液体を勢いよく、深く傷ついて見える彼女へぶっかけた。

シユウシユウと音を立てながら、損傷が目に見えて癒されゆく。

まるで魔法だ。

次々に液体を少女たちにつっかけて、当座の問題は解決された。

私は三名の艦娘と共に、頼れる先輩の元へと向かう。

所用で横須賀に来ていた呉第六鎮守府の提督の元へ。

工廠にいた艦娘たちは一様に青白い顔をしており、全員が不安に満ちた表情をしていた。

抱きつかれたままで歩くのは少しやりにくかったが、どうにかこうにか目的地まで歩く。

先輩は手早く秘書艦の鳳翔に新人提督との臨時会議を開くという名目で第七会議室を押しえさせ、我々はその部屋で引率してきた艦娘たちの訴えを聞くことにした。

彼女たちは、完全に消耗品扱いを受けながらも生き残った猛者たちだった。

仲間たちのためにと、とある提督を人間性から戦術に至るあらゆる面について叱咤激励していたらそれがまるまる逆効果となってしまう、逆ギレされて激務へと追いやられた駆逐艦の霞。

とある提督の艦隊運用について意見を具申し、彼のつたない戦術を論破したら、激怒

した意識高い系の彼によって激務へと追いやられた軽空母の龍驤（りゆうじょう）。

とある提督の駆逐艦への性的嫌がらせをいさめたり、彼の指揮能力の低さを指摘したら、ぶちギレた提督によって激務へと追いやられた駆逐艦の曙。

複数回の命懸けな状況で戦って瀬戸際ながらも勝利した彼女たちは大破しつつ、幸運にも先程ぎりぎりですぐに帰投したらしい。

生還出来たこと自体はよかったのだが、とある提督の指示によって彼女たちは絶賛放置中だったという。

よく死ななかつたものだ。

「そのとある提督って、もしかすると同じ人ですか？」

私の問いに対し、気まずそうにする三名の艦娘たち。

確定か。

うーん。

と、その時、先輩が口を開いた。

「鳳翔。」

「はい、提督。」

「すぐに書類の改竄（かいざん）（じゃ）。」

「わかりました。少々お待ちください。」

先輩と鳳翔の阿吽（あうん）の呼吸。

流石、ケツコンしているだけのことはある。

彼女は素早く、会議室を出ていった。

書類の改竄。

そういうのもあるのか。

少し時間が出来たので、目の前の艦娘たちと交流すべく会話を試みた。

途切れ途切れのぎこちないやり取りが延々と続いてお互いに少々気まづくなつてきた頃、鳳翔が戻ってきた。

先輩の目がなんだかとてもやさしく見えたけど、気のせい気のせいきつと気のせい。よかった。

女の子と付き合つたことのないおっさんには、今はこれで精一杯だ。

先輩と鳳翔が上手く立ち振舞つてくれたお陰で、三名の艦娘たちと私は無事にとある海岸沿いの屯所（とんしょ）へ着任することと相成つた。

その陰でとある提督が閑職へと追いやられたみたいだが、まあ、我々には全然ちつとも関係ないな。

さて、と。

新しい海へ行こう。

戦いの海へ行こう。

明日からは、この私も一国一城の主だ。

それがたとえ、民家改造型の小型基地だとしても。

築三〇年超えの古びた建物だとしても。

周囲に住んでいる人が誰もいなくとも。

向こうへ行く前に、横須賀鎮守府の近くにあるドイツ料理店へ行こう。

名店の『鉄の森』。

今晚の予約をしなくっちゃ。

彼女の作るケルシーのケーキは是非とも食べないといけない。

すももの爽やかな酸味と甘味。

屯所に詰めることになっても、時折は行きたいものだと思う。

こうして、私たちは新たな時を生きるための一步を踏み出した。

さあ、行こう。

きつと明日はよい一日になると信じて。

CCCXXII : 「あら、来たのね。」とその子は言った

人類が深海棲艦とやらと戦い出して、既に何年も経過した。

最初はある程度楽観的だった政府やマスメディアも年を追うごとに表現が猫の目の如くに変化してゆき、新宿や池袋などで暴れまわる連中が出てきたり、様々な意見が電脳上や紙面を今も荒々しく駆け巡っていて落ち着くにはまだまだ時間がかかりそうだ。

ここ最近はやうやく原油高騰の傾向が落ち着きを取り戻しつつあるらしく、私のような貧乏人でも車をそれなりに動かせるくらいにはなってきた。

現在住んでいる古い集合住宅の一室は敷地の取り方が昭和の高度経済成長期頃のまま、洒落てはいないけどゆとりがある。

建物は二棟あり、周辺はことごとくが露地で庭仕事のはかどりそうな雰囲気さえ醸し出していた。

そこに野草を植えたり、近くに自生している野草を摘んだりして加工し食卓の彩りに

加えている。

食べられる野草は意外に多いものだ。

それに、食卓の豊かさは生活の豊かさに繋がるからな。

あーあ、それについても、可愛い彼女が欲しいものだ。

世の中に金と女はかたきなり

どうぞかたきに巡りあいたし

今日は休日。

働く日よりも休みの日が多い生活になっていようとも、休日は休日である。

たまには出かけないと、息が詰まってくる。

押し込められるような生活にはうんざりだ。

すっかり古ぼけてきた愛車を走らせてしばらくすると、海が見えてくる。

青い海。

きれいな、きれいな、とてもきれいな海。

空は悲しいくらいに晴天で、辺りの朽ちてゆく建築物のもの悲しさをより引き立てている。

人の住まない建物は驚く程に早く劣化してゆくのだと、改めて実感した。

政府や大企業基準で重要と思ひ定めた都市部の再生を優先し過ぎるあまり、その再生の恩恵はこうした地方へ訪れることなど一切ない。

のんびりするには最適なのだが。

変なチンピラやごろつきもやって来ないから、海岸を散策するにはもってこいだ。

さて、休日を堪能しよう。

てくてく砂浜を歩く。

誰もいない海。

ささくれだった気持ちがいやわらかくなってゆく。

何故、誰もここには来ないのだろうか？

こんなに気持ちがよくなる場所なのに。

地域によっては屯所（とんしょ）と呼ばれる派出所めいたモノがあるらしいのだけども、この辺にそういった存在は見当たらない。

ま、いつか。

この贅沢な空間を独り占め出来るのだから悪いことはない。

ん？

あれはなんだ？

遠目に白く見えたものは、女の子だった。
なにも着ていないとはなんと無用心だ。

「あら、来たのね。」

近づくと私を見て、彼女はそう言った。

どういう意味なのかな？

体を隠そうともしないまま、その子は更に言葉を重ねる。

「お腹が空いたわ。」

自由奔放な子だな。

二つの桃が揺れる度に、私自身の気持ちも揺れていった。

嗚呼、若草の萌えいづる草原よ！

サバンナよ！

「おにぎりならあるけど。」

「それでいいわよ。」

今朝握ったおにぎりを手渡す。

ぶきつちよに握られたそれを。

ちよつこし奮発したお米様を。

麦の一切入っていない握り飯。

「不恰好なものね。」

「不器用なんでね。」

はぐはぐと食べる彼女。

可愛い。

中に入れておいた自家製梅干しも、ペろりと食べたようだ。

「悪くはないわね。」

「そりゃあどうも。」

「もつとお越し。」

「はいはい、姫様。」

自分で食べるつもりだったモノも手渡す。

娘はそれもはぐはぐやって食べ尽くし、手渡したお茶もごくごく飲み、自家製漬け物もポリポリ食べて、それでもまだ足りないような顔をした。

「これで全部なの?」

「打ち止めですな。」

「致し方ないわね。」

彼女は優雅に立ち上がった。

そして、うーんと背伸びする。

やめて！

その姿は私に効きすぎるから！

無表情な美神がいるみたいだ。

美しい娘はじつと私を見つめた。

「じゃあ、帰りましょ。」

「ああ、送っていくよ。」

「なにを言っているの?」

「えっ?」

「あたしたちの住処へ帰るんでしょ。」

「あの、その、君、家出してきたの?」

「家出ねえ……まあ、そんなところかしら。泊めてくれるわよね。」

赤黒い瞳が私を捉えて放さない。

一瞬、金色に光って見えた。

最新のカラーコンタクトなのか?

「わかった。取り敢えず今夜は君を泊めてあげるよ。」

「それでいいわ。」

「その前に。」

「なにかしら?」

「服を着て欲しい。」

「そんなものは無いわ。」

水着は海流に流されてしまったのかな?

私は着ていたTシャツを脱いで、彼女に着せる。

これでようやく、危険な存在は見えなくなった。

後程、服を買いに行かなきゃな。

くんくんと服のにおいを嗅いで、彼女は言った。

「コンゴトモヨロシクネ、テイトク。」

CCCXXIII：縞模様の青い制服とアイソワライ

艦娘は残らず武闘派だ。

ほにやっとした娘や素朴な娘、はわわな娘やおちよこちよいな娘などでそれを感じない者も少なからず存在するが、それはまったくき真実だった。

私の名はローマ。

偉大なる大サトー……間違えたわ、偉大なる帝政国家の名を冠したイタリア艦娘。

荒ぶる魂持ちて戦場を駆け抜ける、アンミラーリオの剣にして楯。

可愛らしい戦乙女たちと一緒に勝利を得んがため、戦い続けるわ。

それは初夏の少し暑い日のこと。

業務を終え、八戸酒造の特別純米酒を呑んでほっこりしていた夜。

酒のお供は自作したカプレーゼ。

ほろ酔い気分でたゆたっていた。
そんな時。

私は執務室に呼ばれたのだった。

私のアンミラーリオは、なにをさせるつもりなのだろうか？

まさか……いやいや、まさか。

顔がだんだん火照ってくる。

もう、私はいつでも覚悟完了よ。

いつでも、かかってらっしゃい。

うふふ。

「コンビニエンス・ストアの店員？」

「そうです。ローマさんにはその仕事をしていただきたい。」

「……もしかして、大本営からの依頼？」

「ええ、広報の一環だとか。一カ月限定なのでなんとか………なるでしょう。」

ちよつとだけがつかりした。

そう、ちよつとだけ。

なーんだ。

ちえっ！

ところで接客業をしたこともない私に、大本営は一体なにを求めているのだろうか？
「他に加賀教官、龍田さん、鹿島さんに島風及びネヴァアダが担当することになっていま
す。他所から天龍さんや潮さんが手伝いに来ることも確定です。他に必要性があれば、
要請に従ってこの鎮守府の艦娘を出すことも可能です。」

「ふうん。」

男つて、ホントにもう。

ぎらぎらした欲望渦巻く視線に容赦なく晒（さら）され、二四時間経営系小型商業店
舗で働くのね。

私をじろじろ見ていいのはアンミラーリオだけなのに。

「私もたまに手伝いますから。」

「それならやらせてもらおうわ。」

つまり、そういうことになった。

青と白から成る、半袖の縦縞模様系制服。

これが、コンビニエンス・ストアの衣装。

これじゃ、ひよろひよろ弾すら弾けない。

タツタ、胸部装甲を揉むのは止めなさい。

我々の、多店舗的の小型よろず屋系商店での労働がそうして開始された。気分はやれやれ、である。

鋼鉄の巨人で店舗へ到着した時には、とつくに長蛇の列が出来ていた。ぱちぱちと撮影する音が辺りを満たす。

好奇心に溢れた視線が我々に集中した。

シマカゼ、おふざけでセクシーな仕草をしないようにしなさい。

ほら、撮影音が一層激しくなってきたじゃないの。

見張りの人たちに巨人を任せ、我々は店舗へ駆けていった。

素早く着替え、業務への従事を開始する。

限定商品は完売済みで、吠え猛る人間がちらほら存在していた。

そんなに暴れなきやいけないようなことかしら？

カルシウム不足なのかもしれないわね。

あまりに吠える人間は、警察官たちによって連れ去られてゆく。

叫んで。

喚いて。

抵抗して。

押さえつけられ。

何人もの警察官に拘束されて縛られ、護送車へと押し込められる。しんと静まり返るコンビニエンス・ストアの前。

暴走する人間は、その事件以降は幸いにも一人も発生しなかった。

翌日。

店に到着した時、長蛇の列は更に長くなっていた。

店内はおそろしく混雑していて、すぐに商品が品薄になってゆく。提督や本部の人たちが補充を急いでいるけど、攻勢は実に激しい。

まるで陥落間近の砦のようね。

カツシ……カシマやウシオは既に涙目だ。

彼女たちを叱咤激励し、慣れぬ業務に邁進する。

私たちは前進するしかないのだから。

日中限定で手伝ってくれる駆逐艦たちが、懸命に行列を整理している。

他所の基地のカムスもいるようだ。

近所の自衛隊や警察の人たちが時折巡回に来ていた。

彼らのお陰で、怪しげな振る舞いをする存在は少なくなることだろう。

カスミの握ってくれたライスボウルを僅かな合間に食べて、我々は客に笑顔を振りまいた。

大雑把に言うと、客の割合は女性が一割ほどで残るは男性だ。

奇妙なことに、店にて買い物をした後で再度行列に並ぶ人が存在する。

何故、彼らはそんな面倒なことをするのだろうか？

若い女の子たちと店の前で記念撮影をしながら、私はアイソワライを浮かべる。

赤くなった女の子たちは、とても可愛らしいものに思えた。

アンミラーリオに教えてもらって、本当によかったわ。

休憩時間をろくに取れないまま、私たちは接客業務に勤（いそ）しむ。

時折マスメディアの人間が我々を勝手に撮影してゆくので、業務妨害に近い場合さえ時たま発生した。

勿論、彼らがそれに留意することはない。

注意されても無視するか、食ってかかる。

報道の自由という御旗を振り回しては、はた迷惑な行為を重ねた。

たまにまともな取材も入るが、それに便乗しようとする者もいる。

そうした人間が大手新聞社や放送局に所属しているのを知ると、ついつい微妙な気持ちになってしまう。

きちんと手順を踏めばいいのに。

あんまりうるさい人間は、大本営の人間に連れ去られていった。

あんまり大声で怒鳴る人間は、警察車輛で連れ去られていった。

既に日は暮れた。

辺りはどんどん暗くなってゆく。

それでも店外に見える行列は途切れることすら感じられそうにない程、長く長く続いていった。

マスメディアの人々が探照灯のような明かりで周りを照らしてくれるため、悪さをする人に対する抑止力になっていると思う。

やがて、ようやく本日の業務終了時間がやってくる。

ようやく、仕事から解放される時間が到来したのだ。

正直、嬉しい。

未知の義務は疲労を溜めるものだから。

一カ月もこんなことをやらされるくらいなら、厳しい海上任務に従事した方がいい気もする。

カガ、タツタ、カシマ、シマカゼ、ネヴァアダ、テンリユー、ウシオが私のアンミラーリオに近づいてはなにやら楽しそうに話しかけていた。

周りにいた男連中の羨望（せんぼう）と嫉妬となにやらどす黒い感情のこもった視線が、彼らに降り注いでいるのを感じる。

致し方ないわね。

アイソワライをしながら、男性陣に手を振った。

すると彼らは浮わついていた表情と化し、頬を染めて去ってゆく。

上々だわ。

駐車場に駐機させていた複座型ニコラエフに乗り込む。

日中見張つてくれていた自衛隊と警察の人たちへ感謝することを忘れてはいけない。

私はアイソワライを発動させた。

周囲の男女双方に笑顔が広がる。

行為判定は見事に成功ね。

挨拶は大事だと、ニホンのコジキという古代の書物にも書かれているとハツユキから

聞いた。

流石は礼節の国ね。

強固な防弾ガラスが組み合わされた風防を閉め、鉄の巨人を動かすための作業に取りかかる。

機体の内燃機関に火を入れた。

独特の起動音を立て、巨人が目覚める。

外で撮影している人たちの光が時折見え、なんだかはかなささえ感じさせた。

ヘルメットをかぶり、収納されている情報投影装置を起動させてきちんと使えるかどうか確認する。

電装系統はシノハラの技術者たちが嬉々としていじっていたから、おそらく大丈夫だと思う。

薄い半透明の板に、次々と情報が投影されていく。

眼下の撮影者たちを標的として計上してくるが、それらの提案をすべて却下した。

二門ある三〇ミリチェーガンは残弾数ゼロと警告表示してきた。

それもわざわざ、情報投影装置にでかでかと赤く表示をしてくる。

……問題なし、と。

いちいち相手にしてられないわ。

アンミラーリオが後部座席に乗り込んできた。

他のカムスタたちも彼の席の隙間に乗り込んでくる。

後ろはぎゆうぎゆう詰めだ。

操縦席の空調を強めにする。

マスメディアが変なことを書き立てないといいのだけど。

なにをやっているのかと言いたくなるが、明日は私があちら側だ。

アンミラーリオのモーリエとして、嫉妬はいけない。

度量を広く保たなくてはね。

あちらの席の電源は入っていないから、レバーを押そうが引こうが一切問題ないわ。

アンミラーリオのレバーを動かそうとするなら話は違うけど。

帰ったら、『米好きの下剋上』の新刊を読もう。

農業系幻想小説の傑作だわ、あれは。

あの、米への情熱に溢れる女の子のお話を読まねば。

腕のない巨人を立たせる。

機体前面にある探照灯を二基とも点灯させた。

前の席はともかく、後ろの席は機能していないが致し方ない。

ニコラエフの運用形態は本来の使い方とまるで異なるけれど。

使いどころの難しい存在なのだ、これは。

さあ、帰ろう。

私とアンミラーリオの住まう場所へ。

闇を通して、波の音が聞こえてくる。

なにかいざなってくるような、そんな音が。

予着想地点を確認しながら、前を見据える。

私はニコラエフを高く高く跳躍させた。

きれいなきれいなお月様を上に見つつ。

CCCXXIV : ハルナとアカツキ

何年か前に行われた、鉄底海峡攻略戦。

その最終決戦に於いて深海棲艦側も艦娘側も総力戦を行うべく、その最大戦力をもつて海戦に臨んだ。

疲弊しきつた深海棲艦側は駆逐艦に至るまで死兵となつて戦闘に臨んだが衆寡敵せず、戦力は徐々に確実に減らされていった。

巧妙精緻な用兵によつて緒戦から敵軍を翻弄し続け消耗戦へ持ち込んだ司令官の戦艦棲姫も、とうとう最前線で敵兵と直接干戈（かんか）を交えるに至る。

それまで戦つてきた相手とまるで異なる戦乙女たち。

艶然と微笑みながら、彼女は殺意渦巻く集団へ襲いかかった。

吹き飛ぶ砲塔

千切れる艤装

燃える装甲板

踏みしめる船体から

戦乱の鼓動が伝わってくる

敵主力のいる本隊は未だ遠く

戦闘は続く

運命は彼女を波乱へと導いてゆく

実際、戦艦棲姫は鬼神の如くに海原で荒れ狂い、その猛威を存分に振るった。

だが、敵兵を何名も中破や大破に至らしめようと、入れ替わり立ち替わり新手がやってきては彼女を攻め立てる。

弾が尽きた後は肉弾戦。

背後の巨兵と共にその拳を振るいまくる。

彼女は自身を暴風域と化して暴れ回った。

長坂橋を守る張飛のような心意気持ちて。

近くで闘う側近たちを次々失いながらも。

知将も勇将も猛将もおしなべて、大海原のあぎとに飲み込まれてゆく。

狂乱の戦場

吠える大砲

うなる戦闘機

叫ぶ風

遙かなる理想郷を求め

獅子の血が燃え上がる

最後に残ったのは、彼女と副官たる青い瞳に黒髪のル級と北方棲姫試製一號。

満身創痍となつてまともに動けなくなつた彼女たちに対して複数の戦艦が気合いたつぷりの主砲を放ち、精鋭妖精の搭乗した何機もの爆撃機が急降下爆撃を行い、複数の水雷戦隊が多数の魚雷を放つ。

それはまさに包囲殲滅戦。

必殺を期した攻撃が容赦なく人類の敵へと襲いかかり、勇敢な戦士たちは激しい炎の中に沈んだ。

何年も経過した海域。

既に解放された海域。

船舶が普通に航行する海。

時折、哨戒任務の水雷戦隊がうろつく程度の海。

そして、今。

月明かりの輝く夜。

泡立つ海面。

二つの塊がせり上がってくる。

やがて、美しき存在がその姿を月光にさらした。

一つは青い瞳に黒髪の高速戦艦。

ピシツとした感じの凛々しい娘。

「ワタシはハルナ。」

一つは帽子をかぶった白い上着の駆逐艦。

パチパチパチと放電している感じの少女。

「アタシはアカツキ。」

二名は互いに顔を見合せ、頷きあう。

「行くはハコダテ、混沌の地。」

そして、白い娘たちは北へ北へと向かう。

そこに希望があると信じて。

最近は大規模作戦に伴う海域解放が進んでいるためか、我が函館鎮守府の哨戒任務や護衛任務や後方支援任務が増加傾向にある。

また、全国各地の鎮守府並びに海外泊地に於ける作戦遂行はそこに所属する艦娘たちの精神的圧迫や疲労を増大させ、つまりそれはここ函館鎮守府の宿泊棟が連日満室になることを示していた。

厨房の中で私は中華鍋を振るい、野菜炒めをどんどん作ってゆく。

作っても作っても果てしなく要望は続き、李さん鳳翔間宮を始めとする練達の料理人たちの負担はかなり大きくなってゆく。

料理人や菓子職人などが何人もここに詰めているけど、彼らの仕事は非常に多い。

よその料理上手な艦娘たちにも手伝ってもらってはいるのだが、厨房は絶讚激務継続中である。

料理を運ぶ駆逐艦がひっきりなしに動いており、手慣れた彼女たちも目が回る程かと

思われた。

ええい、やらまいか！

開戦当初から比べると、この一年で生活はかなり向上してきた。

戦前とは比べるべくもないけれど。

漏れ聞こえてくる程度であるが相変わらず複雑怪奇な欧州情勢にはため息が出るし、未だによくわからないメリケン辺りの情勢は大変気になる。

気にはなるが、一介のなんちゃって提督に出来ることなど些少なことしかない。

それが現実だ。

国内経済が安定方向に向かっているとと思われるこの頃は利権狙いの政治闘争が激化しており、横須賀呉舞鶴佐世保の四大鎮守府の内外に於ける政治的駆け引きがより一層酷くなってきた。

今後を見据えて云々のお題目が大々的に唱えられ、官僚向けの積極的甘言によつて穏健派がやや押され気味らしい。

政治家や官僚や大企業の紐付き提督連中が正直うざったい。

艦娘の所属員数だけが多い函館だが、大湊（おおみなと）と並んで所属艦娘の削減が

今尚言われ続けている。

戦争中なのに戦力削減とはこれいかに。

かてて加えて戦後の協力がどうたらとか言われているのを、かの地の提督と連携しつつのらりくらりとかわしている。

呉の先輩がいろいろと裏から手を回しているらしいけれど、勘弁して欲しい。

下手に言質（げんち）を取られると、なにをされるかわかつたもんじやない。

戦争がいつ終結するかなんて、誰にもわからないのに。

制服組やら議員やら商社員やらがこっそり函館へやって来ているのを広報の青葉や富竹二尉などに証拠として撮影してもらってはいるけど、懲りない人々はそれが正しい行為だと思っているのかもしれないから困ったものだ。

そんなある日の夜のこと。

那珂ちゃんが慰安のための演奏会を開いてくれるというので、講堂へ聴きにゆく。

聴衆はみつしりと座席を埋め、立ち見客も少なくない。

流石是那珂ちゃんだ。

新曲に加えて『Alternate』、『深愛』、『悲しい夜は燃えているわ』、『サマーナイトタウン』及び『二億四千万の瞳』などのカバー曲も引つ提げ、歌姫が夜に向

かつて熱唱する。

沸きにわく会場。

ヒトも、そうでないモノも、等しく那珂ちゃんを熱烈に応援する。

彼女が最後に歌うは『Face of Fact』。

最高潮に達したセカイで彼女は踊る。

まるで、この夢が解けなくなる魔法をかけてゆくかのように。

余韻に身を浸しながら、静まりかえった鎮守府の厨房で翌朝のための仕込みを行う。

浅漬けも作った。

おいしくなーれ、おいしくなーれ。

私なりの魔法を食材にかけてゆく。

仕込みが終わってほっとする一時。

不意に、なにかを感じた。

なにかがこちらへ近づいてくる？

幽霊……じゃないな。

時々感じるアレではない。

悪魔かそれに類する存在ならば事務局の田中さんもしくは彼の配下の上級魔族が

すつ飛んでくるだろうし、敵対系宇宙人ならばメトロンがすつ飛んでくるだろう。なにも問題は無い。

ないのだが、自衛くらいは必要だ。

先日メトロンからもらった、不思議金属製腕輪に目をやる。

千変万化の思念制御系兵装だとか。

武器として大変高性能な品という。

大抵の敵対系宇宙人を障壁ごとスパッと斬り裂けるらしいが、これ、対深海棲艦戦闘の装備に出来ないものかな？

素材的に無理らしいが、近接兵器として艦娘に手斧＋3とか＋4とかを持たせるとノルド的雰囲気になりかねない。

ううん。

田中さんからもらった護符に反応がないから、悪魔的な存在ではないみたいだ。

オレサマオマエマルカジリ、的な相手でないといいなあ。

交渉出来たら、悪魔相手なら御の字だ。

口八丁手八丁がどこまで通じるかだな。

厨房から出て食堂の通路辺りに陣取る。

腕輪をすぐ投げつけられるようにして。

クトウルフ系は相手にしたくないなあ。

ニヤ……ん？

足音が近づいてくる。

気配が近づいてきた。

二人？

何者？

すると、見慣れない艦娘二名が現れた。

彼女たちの肌はあきつ丸みたいに白い。

個体差かな？

もしかして、新型……？

「コウソクセンカンのハルナ、チャクニンしました。テイトク、よろしくオネガイいたします。」

ます。」

「アカツキよ。一人前のレディとしてアツカッテね、シレイカン。」

敬礼されたので答礼する。

黒髪の戦艦と帽子をかぶった駆逐艦か。

ああ、なんだ、艦娘か。

びつくりしたじゃないか。

と、お腹の鳴る可愛い音がした。

二名ともお腹がペコちゃんらしい。

「簡単なものでよければ作りますよ。」

「ハイ、ヨロコンデ。」

ホットケーキを焼いて出したが、両名に喜んでもらえてよかった。

彼女たちはまるで初めてそういうものを食べたかのような反応を示しつつ、旨そうに平らげてくれた。

さて、明日に備えて寝るとするか。

明日はよりよい日になるといいな。

h. Not even justice, I hope to get to trust

CCCXXV：提督たちは宇宙世紀の夢を駆け抜ける

機動戦士の作品の擬似現実的電腦遊戲が開発されたとかで、我々提督は公国軍と連邦軍とに分かれ、業務の合間を縫って戦うことと相成った。

どうやら、こうした娯楽作品で政府への批判的矛先をそらす方針らしい。

我々は被験者として採用されたようだ。

ぶっちゃけ、モルモットか。

お題目としては、各産業経済分野での技術的応用範囲がすこぶる広いのだとか。
ふーん。

業務終了後の休息时间。

自室に電腦遊戲用ヘルメットを持ち込んだ私は、五感を電腦空間で変化させてゆく。今夜の艦娘たちが密着してくるけれども、致し方ない。

私は公国側で戦うことを選択し、先ずはルウム戦役へ参加することになった。

乗機はザクI。

旧ザクとも呼ばれる機体。

相棒はシーマ・ガラハウ。

彼女は無作為抽出方式で選ばれた副官だ。

勇猛果敢な戦乙女らしい。

青地に白線を入れた機体で旧式重巡洋艦のチベから出撃し、同様に出撃する先輩同僚後輩NPC（ノン・プレイヤー・キャラクター）たちと共に宇宙（そら）を駆ける。

シーマ機は暗い紅に白線。

ちなみに我が機は『弐號機』と右肩に備え付けられた楯へ白文字で入れ、シーマ機は『弐號機』と入れている。

二八〇ミリ噴進砲と一二〇ミリ機関砲と白熱的戦斧とを駆使し、巡洋艦二隻と突撃艇五機、並びにガンキャノンの初期型と思われる機体を二機撃破した。

シーマ機も巡洋艦一隻と複数の兵器を撃破し、順調に戦果をあげていた。

ジャブロー戦では可愛らしいアツガイに搭乗し、潜入任務に従事することになった。

この機体は我が鎮守府の駆逐艦たちから圧倒的な支持を集め、他の艦種からも人気を

得ている。

おそるべし、公国水泳部。

塗装は通常通りで、シーマはゴッグに乗って後方支援任務となる。

量産型モビルスーツの生産工場を予定通りに爆破したのはよかったものの、白い悪魔に追いかけて回される破目に陥った。

悪魔が赤色のズゴックと激戦を繰り広げている間に、すたこらさつさと逃走した。

ゾックが果敢に光学兵器で支援してくれはしたものの、白い悪魔は幾つもの光芒を平然とぐり抜け、ビームサーベルをゾックの操縦席へあつさり突き刺した。

連邦のモビルスーツは化物か！

右腕を失ったもののそれでもなんとかアマゾン川へと逃げ込め、途中でシーマのゴッグに回収されたのでなんとか基地へ帰投出来た。

オデッサ戦には不参加することにした。

書類仕事が大変だったので、それどころではなかったのだ。

初雪望月などにぶーぶー言われたが、自作のべっこう飴で黙らせておいた。

戦局の推移は録画されたものを見る。

公国勢は奮闘したものの、白い悪魔やジム陸戦型を含む精鋭部隊が無茶苦茶に戦場で

暴れまわって結局は負けていた。

むう。

マ・クベ司令はギャンに搭乗して獅子奮迅の活躍を見せ、最終的には連邦軍艦隊に突撃して壊滅的打撃を与えていた。

ソロモン戦が始まった。

試験的運用はこの一戦でおしまい。

それ故に、気合いを入れて戦おう。

事前打ち合わせで担当部署を再確認する。

連邦軍はどうかかなりの戦力を投入しているようだ。

人海戦術というか、米帝様式というか。

物量ではどうにもならないのが残念だ。

公国軍は意気盛んだが、連邦軍はじわりじわりとこちらを追い込んでくる。

まあ、やるだけやるさ。

私用に調整されたギャン・マリーネへ搭乗する。

巨大なビームランスが頼もしく心強い。

シーマはゲルググ・マリーネに乗った。

宇宙の戦場は音も無く、資源や人命を光球或いは残骸へと呑応なしに変化させる。幾つも、幾つも。

ザクレロとビグロの混成部隊が戦艦や巡洋艦の群れに突撃する。ブラウ・ブロが有線攻撃で、量産型モビルスーツ群を駆逐する。旧ザクがおそれることなく敵のモビルスーツに肉薄し撃破する。

司令がモビルアーマーに乗って出撃するとかしないとかの、混乱した情報が飛び交っている。

敵のモビルアーマーが大砲をぶっぱなしながら、隊列を作って攻撃してくる。串刺しにしては破壊し、ダブルスコアはトリプルスコアへと容易く変化する。

まだまだ新手がやってみてきそうな気配さえ、この戦場でひしひしと感じられた。まだだ、まだ充分やれる。

シーマの無事を確認しながら、新しい獲物を探すため、バーニアを吹かした。

要塞方面から巨大な光芒が放たれ、それは敵艦隊が含まれた多くのモノを呑み込んでゆく。

あれは……あれは……もしかして、トールハンマーか？

それとも……ガイエスハーケン？

木馬を途中で見かけたけど、弾幕が激しすぎて近寄ることすら出来なかった。

代わりに、近くにいるマゼラン級戦艦を撃沈することにしよう。

ビームランスはあっさりと言艦の艦底を貫き、スパツと斬り裂いた。シーマの放つ光の線が艦橋に穴を開け、そうして戦艦は大爆発した。そういう感じで、戦艦五隻と巡洋艦八隻を撃沈する。

だが、砲撃は依然として激しい。

いや、ますます激しさを増してさえている。

モビルスーツやモビルアーマーや突撃艇も二桁破壊。

それでも、敵はうじゃうじゃやって来る。

斬り裂いても斬り裂いてもどんどん来る。

まるで無限の軍団を抱えているかの様に。

物量差を嘲笑うかの如くに、迫って来る。

倒しても倒しても、追加の連中が訪れる。

深海棲艦がこんなじゃないといいなあ。

ま、目の前に迫る奴らは倒してしまおう。

別に全機を撃墜してかまわないのだろう？

他の部隊に戦列維持を任せ、機体を後退させた。

一旦要塞に戻り、補給する。

連邦軍主力艦隊を周辺からちまちま削ることが、次なる目標として提示された。要塞から出撃した全機が奮闘していたけれど、多勢に無勢なのは明らかだった。司令は既にモビルアーマーで出撃し、トリプルスコアを易々と達成したという。青いゲルググや赤いゲルググなど、親衛隊の機体も全力で護衛しているようなよし、右肩も赤く塗ったことだし、それでは有終の美を飾りに行くのでしょうか。最終出撃が通達され、我々は気合いをより一層入れて発進した。もうこれで終わりなのだ、なんとなくセンチメンタルになりながら。

あれは、G3か？

ザクIIやリックドムを次々に撃破しながらこちらに迫ってくる、灰色のモビルスーツを見据えた。

速い。

だが。

こちらも機動性を高めた機体だ。

早々墜とされはしないさ。

ブラウ・ブロが有線型光学兵器を用いて、敵機へ猛烈な全周攻撃を仕掛ける。

熟練者が乗ったような灰色の機体はとんでもない機動性を見せつつ、有線型光学兵器

を順次無力化してゆく。

なんだ、あの動きは。

化物じみた回避能力。

あれに私は勝てるか？

ブラウ・ブロの支援に乗り出すが、動きが速すぎて当てることすらかなわなかった。

背中に目の玉でも付いているのか？

弾除けの魔法でも使っているのか？

シーマ機と連携して弾幕を張ってはみたものの、我々の攻撃は至極あっさりとかかわされる。

再度狙いをつけた瞬間。

奮戦していたモビルアーマーは数条の光の線によって貫かれ巨大な火球と化し、その

影響で我々は瞬時敵機を見失う。

ん？

どこだ？

見えた！

そこっ！

偶然か否か、僅かな動きから相手の存在を確認する。

先輩か？

あの動き、覚えがある。

ビームライフルがこちらを向いた。

見える！

避ける。

ビームランス最大展開！

全火器の安全装置解除！

ははは！

この気配、この雰囲気！

これこそが戦場よ！

全力でぶちかますぞ！

先輩、お覚悟！

CCCXXVI : 洗濯板

滲み出す混濁の紋章

不遜なる狂気の器

湧き上がり

否定し

痺れ

瞬き

眠りを妨げる

爬行（はこう）する鉄の王女

絶えず自壊する泥の人形

結合せよ

反発せよ

地に満ち

己の無力を知れ

破道の九十

黒棺

ん？

夢、か。

悪い夢を見た気がする。

黒い重力でなにかを圧砕し押し潰した気がするけど、なにもないからただの気のせい
だろう。

ところで、ここはどこかな？

真っ白い空間が広がっているんだけど。

……寝よう。

寝れば、解決するから。

たぶん。

その昔、洗濯板なる菓子があつたという。
軍人さんたちに大人気の品だったそう。

間宮羊羹にも謎の部分があるけれど、洗濯板はそれを上回る謎菓子だ。
以前調べたこともあつたが、今もってよくわからない。

嗚呼、謎学の旅。

洗濯板の如くにかくて極太。

それが、かの菓子の特徴とか。

間宮羊羹の別称がよく唱えられる意見だけど、『駄菓子のようなもの』『パン菓子』『駄菓子』と記載する文献もあつてよくわからない。

予想としては『ラスク』『堅パン』『シベリアサンド』『羊羹パン』『カルメ焼き』『ワッフル』など意見百出したが、結論は未だに出していない。

調べているとこんな話もあつた。

広く薄くのぼして焼いたワッフルだかどら焼きだかの生地をこれまた薄く塗り、それをくるくる巻いた和風ロールケーキのようなものが洗濯板の正体だという。

ロールケーキの巻きが解けないように型箱を使って冷ますのだけど、その型箱の内側には凸凹があつて、型箱から取り出した姿が洗濯板みたいな板状のものになる。

そうやって、洗濯板は出来たらしい。

この話が、一番説得力を感じるかな。

洗濯板状になった餡巻き菓子、と考えればいいのかもしれない。

餡巻き菓子、と言えば、軍用艦艇より上陸した軍人たちが羊羹と並んで食べたものを指すとの話もある。

えっ？

間宮だけで作っていたのではないのか？

戦時中はあちこちで作られていたのか？

或いは、間宮の洗濯板を知った菓子職人たちがこぞって作っていたのか？

もしかしたら洗濯板と称する菓子は複数あって、それが謎の原因になっているのかもしれない。

誤認、誤解、勘違い。

間宮から供給される本家、他の艦艇で作られる分家、みたいなことがあったかもしれない。

一時期は洗濯板と称されていたが、その後呼称が変化したとか。

洗濯板みたいな菓子をすべてそう言っていたとか。

うーん、よくわからないな。

間宮に直接聞いてみたり、他の艦娘に聞き取り調査をしてみたが、統一された答は返ってこなかった。

公式記録が無ければ、そういうものかも。

ならば、作ってみよう。

間宮にそう提案してみた。

函館鎮守府にいる料理上手たちが動き始めた。

それを聞いた他所の料理上手たちも動きを見せる。

やがて、複数のケーブルテレビや公共放送を自称する放送局、それと虎ノ門にある放

送局、あと食文化関係の取材を含めて段々大掛かりな話になってきた。

女子大学の先生や生徒たちも来るといふ。

うわあ、なんだか大変なことになってきちゃったぞ。

料理上手の艦娘を集め、洗濯板の再現に挑む取り組みが函館鎮守府前の広場で開催された。

陸上自衛隊の音楽隊が、マーラーの交響曲第三番第一楽章を奏でる。

壮大且つ雄大な曲だ。

……ところで間宮が八名もいるのだが、ずいぶん集まってきたものである。ちよつとむにやむにやでお茶目なことを仕掛けてくる間宮は他所の娘だな。

うちの間宮はそーゆーことをしないのだ。

もつと違うことはしてくるのだけれどな。

伊良湖も複数いるし、鳳翔もかなりいる。

人妻感の強い鳳翔もいた。

彼女は、先輩のとこの鳳翔だと思われる。

同じ艦娘でも個体差があつて、肌が大変白い系、娘系、妹系、姉系、お母さん系、若奥さん系、人妻系、など多種多様な雰囲気醸し出していた。

不思議な気さえしてくる。

川内や足柄といった軽重双方の巡洋艦も割といて、うちの足柄が仕切っている。

他所の基地の嫁艦的な艦娘や、料理担当艦的な娘もちらほらいるみたいである。

天龍や龍田の数も多い。

皆研究熱心で感心する。

小中学生の子みたいに吾が輩のおむねにタッチして逃げ出す子もいるが、こんな時はどんな顔をしたらいのかまつたくもつてよくわからない。

おっさんの乳を触つて、なにが楽しいの？

先日のことだが、覆面小説家として書いているライトノベル系雑誌での挿し絵に関する案が、幾つか出版社から送られてきた。

異世界の婚約破棄系悪役令嬢が罪を着せられ死んだ後、転生した先の現代日本社会で県立高校を怠惰に満喫し堪能するお話だ。

彼女は前世に於いて高貴な生まれから醸し出される雰囲気満載の上級貴族系令嬢であつたが、この世に於いての外見は眼鏡つ子委員長系文化的地味女子なのだ。

主人公の中身の絢爛豪華さと外見の質実剛健さの落差が、この作品の特徴である。

彼女が描かれた可愛い素描を業務終了後に眺めていたのだけど（描いてくれたのはむつちや有名な人気絵師らしく、手描きの描線が非常に美しくて丁寧だ）、こういう眼鏡つ子もいかなと呟いたのをたまたま近くにいた大淀とローマに聞かれてしまったのだ。

しかも、表紙候補の端麗な素描を見ていた時に。

やっぱーい。

それからが大変だった。

覆面小説家である私が今更正体を明かすのはどうかと思つてあたふたしている内に、函館鎮守府所属の艦娘は全員漏れなく眼鏡を装着するようになっていた。

なんてこつたい。

他所の娘にもそうした子がいる。

先ほど述べた艦娘たちにも、眼鏡をかけた娘が散見された。

うちの深海棲艦勢も皆眼鏡をかけている。

おふぎけなのか、冗談なのか。

「付けたままがいいの？」という質問は、卿（けい）の目論見が那邊にあるのかよーわかりまへん。

あそこに見えるダイヤモンドシスターズが全員霧島つぼいのは、なにかの催しに合わせているのだろうか？

ま、まあ、その内下火になるだろうさ。

たぶん。

あー、そこのお嬢さん。

おじさんのおけつを触るのは止めなさい。

十字砲火や急降下爆撃を喰らうけんのおう。

わたあめや射的や輪投げや型抜きやお面などの屋台が設置され、浴衣姿の艦娘がけっこういることから周囲は縁日めいた雰囲気になっている。

伊達眼鏡の島風が超電磁ヨーヨーを再現しようとしていて、眼鏡つ子暁が放電現象を

起こしながら再現していた。

君たちはなにをやっているのかね。

眼鏡装着系の戦艦棲姫がふざけて後ろからあすなろアタックだかなんだかを仕掛けてきたけど、金髪ツインテールにマントなネヴァアダと浴衣姿のローマと陸上競技的衣装的長門教官の三位一体的攻撃を喰らってどこぞへ連行されていた。

ちなみに三名とも、眼鏡を当たり前のようにかけている。

ローマは以前から普通にかけているが。

洗濯板と思われる菓子の再現実験が開始された。

鎮守府前の広場で公開講座、って感じだ。

昨晩水に浸けておいた大量の地元産小豆が大鍋でぐらぐら茹でられてゆき、やがて餡と化してゆく。

ドヴォルザークの、交響曲第九番第四楽章が演奏され始めた。

生地がどんだん作られ、出来上がった餡を載せ巻かれてゆく。

それは非常に手際よく行われた。

焼かれ。

巻かれ。

挟まれ。

斬り刻まれ。

洗濯板と思われる菓子が幾つも産声をあげてゆく。

どこぞのチャラチャラしたイケメン寄りの芸能人が、なんだかよくわからない屁理屈をぺらぺら喋っている。

声の甲高い芸能人たちがうわーとかおーつとかヤバイヤバイとか、内容の無さそうな言葉を次々放っていた。

意識高い系文化人風のパブリー的中高年男性がわかったようなわからないようなことをぺらぺら喋っている。

どうしてあーゆー人たちを連れてきたのだろうか？

大淀の機嫌がかなり悪くなってゆく。

髪が金色になって、大剣を振り回しそうなほどに。

放送局からやって来た人たちは至極当然であるかのような表情をしているが、大本営広報部の人々は反対に顔色が悪い。

なにか悪いものでも食べたのかな？

お、ワーグナーの『ワルキューレの騎行』か。

幅広い楽曲を演奏してくれるなあ。

ヴィヴァルディの『春』が聴こえてきた。

ひたすら、うどん作りに従事する。

ここは屋台。

簡易な台所。

うどんだ、饅頭だ、ウドンだ。

グルテンの輝きを、今ここに！

函館を含む北の国は蕎麦文化だから、讃岐風うどんを作っていこう。
善通寺の製麺所で作られたうどんを使い、出汁はいりこで作るのだ。

ネギをざくざく斬ってゆく。

地元産のワカメも用意する。

これでいいのだ。

透き通った黄金のおつゆの中に浮かぶ、白い麺と緑色のネギ。

擦った生姜（しょうが）も添えておこう。

これぞまさしく、素うどん。

いいじゃないか。

竹輪や野菜や掻き揚げをひたすら揚げるのは大鷹。

野菜の掻き揚げは貝柱、玉ねぎ、じゃこ、とうもろこしが入っていて、口の中に入れてもらったがこりやあまつこと旨いぜよ。

当たり前のように指まで口の中へ入れてきたのには参ったが。

彼女はさりげなさを装いつつちよくちよく触ってきて、その度にすみませんと謝る。あちこちからぎらぎらした視線を浴びるのでわきまえて欲しいかな。

時と場所をわきまえても、お触りはあきまへんえ。

なんで皆、おっさんを触りたがるのかね？

どこかからなにか粉でも出ているのかね？

いつも疑問に思うのだが、誰も明確な解答をくれない。

まあ、それはどうでもいい。

さあ、素うどんでもたぬきうどんでもワカメうどんでも天麩羅うどんでも好きな食べ方を選ぶがいい野田醤油。

モーツアルトの交響曲第二五番第一楽章が演奏されだした。

手伝いの艦娘に手をがっしと握られるくらいはなんともないのだが、君たちが赤い顔ではあはあ言ううと放送事故になっっちゃうから気をつけてね。

鼻からオイルを漏らしている子にはちり紙を渡しておく。

加賀教官と鹿島がこちらを手伝おうとしてくれようとする度、大鷹に迎撃されてい

た。

そげんじゃけんにせんでもよかろうもん。

妙高先生や龍田は間宮や鳳翔の手伝いだ。

皆当然至極のように眼鏡っ子になって、私に笑顔を向けてくる。

いつの間にか、幾切れものパイがすぐ食べられる状態で傍らに置かれていた。

これ、不思議現象だよな。

旨いし、害は無いからいいけど。

しかし。

何故、眼鏡みたいな形状なのだ？

不可思議である。

……まっ、いつか。

君たち、パイ食わないか？

白い娘たちが屋台裏手でうどんをすすっている姿は、なんとなく平和を想起させる。

……何故、赤城を含む空母勢が多数一緒にたむろしているのだろうか？

赤城がいつぱいいるのも不思議な光景だ。

なんらかの情報交換をしているみたいだが、時折こちらを見つめる目付きが少々不穏に見えてこわい。

ええと……さあ、たんとお食べ。

妖精たちにもうどんを振る舞う。

皆、讃岐うどんの虜になるのだ！

ラヴェルの『ボレロ』が聴こえる。

空はまるで、フェルメールの青色。

夕雲型駆逐艦群が一糸乱れぬ動きで洗濯板を配ってゆく。

全員が眼鏡っ子仕様である。

どこかの提督のケツコンカッコカリの相手らしき人妻感強き夕雲が危うげな色気を振りまく中、早霜や清霜や岸波や長波様が私に手を振った。

振り返しておく。

何故か近場にいたうちの子たちに腹の肉をつままれた。

アウチツ！

たまにどこの所属かはわからぬ駆逐艦がよろめいてきてぶつかつたりはするものの、おおむね問題なく事態は推移してゆく。

胸の大きな艦娘がよろめいてきた時は、足柄や妙高先生や榛名やローマやネヴァダや

シカゴやヨークタウンや加賀教官や長門教官などがどこからともなく現れては彼女たちを私からひっぺがしていた。

抱きついてきてすうはあすうはあするのは大抵うちの子たちだから、そういう意味ではわかりやすい。

おっさんのおいをかいでどうするんだと思ってしまうが、彼女たちから独自理論を熱弁されると訳がわからないので触らぬ神に祟りなしとばかりにほつとこう。

昔は日本も貧しく、病気になると「卵でも食べて精をつけてください。」とお医者さんに言われたという。

卵は上等のおかずだったそうだ。

兄弟二人で一個の卵を分けあって食べなければならぬ人もいたという。

今はなんと贅沢なのか。

群がってくる駆逐艦たちや人間たちにごんを振る舞う。

少しもやもやとしたが、今はこれが普通なのであろう。

宇宙人や悪魔が舌鼓を打つのを、不思議な気持ちで見る。

少し間をおいて、シヨスタコーヴィチの交響曲第五番第四楽章が聴こえてきた。

司令官の作ったうどんを食べる。

おいしい。

心地よい。

心がほかほかしてくる。

嗚呼、これが私たちの繋がりなんですね。

司令官が私の中に染み渡ってゆくようだ。

司令官色に、私がどんどん染まってゆく。

嗚呼、私がいろいろとろけてゆくみたい。

むふふ。

今日は洗濯板というお菓子を再現してみようとしており、鎮守府前広場は大層な賑わいを見せている。

本日は眼鏡をかけた子が多い。

当然、私も眼鏡をかけている。

司令官は眼鏡つ子委員長系の女の子が好きらしいからだ。

そっかー。

こないだその情報が流れてきた時、情報源の大淀さんとローマさんがなんだか勝ち

誇った表情で拳を強く握りしめていた。

司令官の高性能過ぎる防衛陣地が徐々に落とされてゆく感じだけど、なんとも手強いのでみんなで一致団結しなくっちゃ。

ネヴァダさんはその話を聞くや否や、島風ちゃんと共に素早く外出許可を取得し、すぐ眼鏡を作ってもらいに出かけていった。

はっやーい。

一時的、鎮守府はてんやわんやだった。

約束された勝者の表情をしていた望月ちゃんはちよつと違うと思う。
初雪ちゃんはジユワツ！　と言いながら変わった眼鏡をかけていた。

眼鏡つ子龍驤さんが屋台でたこ焼きを焼いていて、外はカリツとしており、中はふんわりしていておいしい。

隠し味に昆布出汁を使っているそうだ。

霞ちゃんは何故か三名いて、屋台でおにぎりを作らせと作っていた。
みんな眼鏡をかけている。

こちらもおいしい。

口が悪いのは難点だけど、やさしいんだよね霞ちゃんは。

上水内（かみみのち）の米がどうか、つや姫がどうか、七飯（ななえ）の米がどうか言われてもよくわからないよ。

どれもおいしいよね、と言ったら、みんな青汁を飲んだみたいな顔になっていた。

お手伝いしているのが叢雲（むらくも）ちゃんと曙ちゃんと満潮ちゃんなので、なんとなく人選に難がある感じもする。

ま、いつか。

おいしいんだもの。

みんな眼鏡をかけているのが、なんとなく微笑ましい。

普段キツイ部分を緩和したいのかな？

口にしたら不味いので黙っておこう。

叢雲ちゃんに「なによ。言いたいことがあつたら早く言いなさい。」と言われたので可愛いねと言ったら、真っ赤になっていた。

食べ終わったら、司令官のお手伝い。

うどんの注文を聞いて手早く運ぶ役。

よーし、みんなやつつけちやうんだから！

眼鏡を掛けた磯波ちゃんが司令官の近くで井洗いしていたのは少し気になったけど、うん気のせいだね。

加賀さんや鹿島さんとも一緒に、せつせとうどんを運ぶ。

どっちも眼鏡をかけていて、特に加賀さんはよその赤城さんや同姿艦や瑞鶴さんなどに突っ込まれていた。

そう言えば、大本営の瑞鶴さんも眼鏡をかけていたっけ。お姉とおそろよ、と自慢された。

確か大本営には翔鶴さんがいないので、函館の翔鶴さんだよな。

うちの翔鶴さんは肌がずいぶん白いけど、あれは美白効果なの？

うどんが全部売れた後で司令官をお持ち帰りしたいと冗談で言ったら、眼鏡つ子大鷹さんからデコピンを喰らっちゃった。

てへ。

加賀さんと鹿島さんが特別授業ですね、と呟いていた。

嗚呼っ、教官殿っ！

いろいろな洗濯板を食べてみる。
どれもおいしい。

ワツフル生地のもどら焼き生地のも、どちらも何度でも食べたい味だ。

司令官と一緒に食べることが出来たら、よりよいのに。

チャラチャラした人たちは内容があるんだかわからないようなことを
ずつとずつとぺらぺら喋っていて、真面目な研究者らしき人たちに苦笑されたり無視さ
れたりしていた。

みんなさつきはうどんやおにぎりやたこ焼きをおいしいおいしい、って無心に食べて
いたのに。

なんだか、とつてもおかしくなってくる。

ふふふ。

あつ、司令官お手製の芋羊羹が出てきた。

あれは絶対絶対食べなくっちゃ！

みんなの目が大規模作戦の時みたいになっている。

眼鏡が、ぴかぴかと光っていた。

あれって、どう光らせているの？

今度、夕張さんに聞いてみよう。

会場で見かけた明石さんや夕張さんも眼鏡をかけていたけど、あれは作業用の品なのかな？

さてさて、気合いを入れるよっ！

気合い充填率一二〇パーセント！

よーし、取りに行かなくっちゃ！

ブラームスのピアノ小曲が聴こえてきた。

『ロマンス』だったかな。

ロマンティックな状況じゃないのがちよつと残念だけど、乙女には、戦わなくてはならない時がある！

それは今、この時！

吹雪、抜描します！

CCCXXVII：異世界から帰ってきた男

異世界には、記憶の限りでは八年ばかりいた。

赤ん坊の頃から人生をやり直す系統ではなく、そのまま異世界に行く転移ともまた違った。

ある日、気づいたら貧乏辺境貴族の幼い娘になっていたのだ。

それも、嫡子ではなく庶子であった。

記憶が復活したのか、融合したのか。

その辺りがわからない。

前世の私は死んだのか？

死因はなんだったのか？

わからない。

わからないまま、生きてゆくしかない。

前世の記憶もすべて揃っている感じではなく、どこまでどう作られたのやら。

なにが本当で、なにが本当ではないのか。

そんなことすら、今の私にはわからない。

幸いというかなんというか、言葉には不自由しなかったし、食べ物に好き嫌いはない方だったので米が無い味噌が無い醤油が無いと騒がずに済んだ。

米が無ければ麦を食べたらいいじゃない。

生卵かけ麦飯を食べようとしたらむっちゃくちゃ怒られたけど。

子爵たる親爺殿は割とおおらかな人に見えたし、嫡子の長男次男三男いずれもそれなりにまともな人たちのように思えた。

奥様は……最後までお会いしたことがなかったので、どんな人かよくわからない。

親子揃って追い出されることもなく、毎日お仕着せを着て母親共々早朝から夜遅くまでせつせと働く程度で済んだ。

家令のおっさんの指示の下（もと）。

休み？

なにそれ、おいしいの？

母親は時折こそこそと夜勤をこなしていたみたいだが、よくもあんなに体力があるものだ。

ひ弱な私では、ああはいかない。
そもそもやりたくもないことだ。

時折子爵家当主に色つばい流し目を向けていて、それが一種の合図なのだとして理解している。

目と目で通じ合う関係みたいだ。

髭まみれのおつさんがニヤニヤそわそわして見えるのは、正直いつて気持ち悪い。
私を見つめる視線も気持ち悪い時がある。

そんな目付きでこつちを見んな。

ボロい小屋住まいだったが夜露は充分しのげたし、かちかちのパンばかりだったがほとんどカビていなかったのよかったです。

森にて野草ばいものを摘んで持ち帰っては母親がため息をつき、当たり前（味がよい）が出たらもう一回という感じで食べた。

キノコは当たる（ストマックヘダイレクトアタック―胃袋へ直撃―）と即日か数日で神様の下に召されるので勘弁な。

森で三羽鳥を捕れば、一羽の三分の一は確実に貰えた。
内臓旨い。

鹿を罠で捕まえた時は、お褒めの言葉までいただいた。

内臓旨い。

遭遇戦で猪を殺った時は、皆挙動不審な態度であつた。

内臓旨い。

投げてよし、どついてよし。

棍棒は最高だぜ！

ある日、森の中でなんだかよくわからない鳥みたいな生き物の雛を見つけたので飼つてみることにした。

名前はケイコにする。

元氣でお転婆な子だ。

野草や木の実などをやったりしてこつそり飼つていたのだが、半年ほどしてあつさり見つかり、彼女は子爵家の人々に食べられた。

鳴かなかつたら、見つからなかつたのかもかもしれない。

時折ぼつぼつと小さな火をはくのが可愛かつたのに。

空をぱたぱたとほんのり飛ぶ様が、可愛かつたのに。

そんな希望のあまりない日々をなんとか乗り越え、胸はあまり膨らまないが、背はだいぶ伸びてきた頃。

ヨトギを命じられて断つたら、追放されることが決定してしまった。だって、男とむにやむにやするだなんて私にはとても耐えられない。

普段無気力系おつとり美人の母親が般若も真つ青のおつとろしい表情になってバカだよお前は、と追放される前に散々なじつてきたが、残念ながら私はそういう気質なのだから致し方ない。

今から謝りに行つてとつととお情けを受けてきな、と言われたが、むさ苦しい人にやられるなんて真つ平御免で御座ります。

子爵家の男性陣は髭ダルマ揃いで、全員むさ苦しい感じだし。

それにくさい。

足もなにもかもくさい。

まっ、縛り首にならなかつただけマシか。

村外れに吊るす場所があるのだけど、たまに実刑があつたりしておそろしい。以前捕まえた盗賊が身ぐるみ剥がされぶらぶら揺れていた時はびっくりした。

おつきいなあ。

元騎士と聞いて、更に驚いた。

確かに大きikutくましい体に傷が何カ所もあり、歴戦の戦士の雰囲気はある。

こいつには苦戦したからなあ。

結果として愛用の棍棒が折れ、今は棍棒君マークIIを使っている。

それほどの腕前を有していた。

それなのに。

人間、落ちれば落ちるものだ。

対象は野盗や盗賊に限らない。

村人から出てくることもある。

時折意味不明の罪状で罰せられた人がいたりして、異世界こわいと思つてしまった。

知った人間がぶら下がっていると、ぎよつとする。

見せしめつてこわい。

貴族が作る法は、徹底的に彼らのために存在する。

まっ、そんなもんか。

家令のおっさんが興味津々で私を見つめていたのには参つたけど。

雪の吹雪く暗い闇の中へ、着の身着のまま追いつかれる。

ひ弱なのに足は素足。

手にも、なにもなし。

家令のおっさんから、木の枝一本すら持つてはいけなと言われた。

声が震えているように思えたのは、気のせいかな。

枯れ葉一枚さえ、私に持つ権利は一切無いそうなの。

古びて接ぎ当てだらけの古着は温情とか。

お話だとチートななんとかとかご都合主義的お助け的登場人物のお陰でどうにかなるのかもしれないが、現実はこのものだ。

試作品の棍棒君マークⅢを屋敷近くの廃屋にある隠し場所から回収してスカートの内側に隠し、私は闇の中に身をおどらせた。

なんのために異世界へ来たのだろうかと考えながら雪道を歩いて森の中へ入り、他の街にでも行こうと思ったところで既に周辺では撲滅した筈の盗賊たちに襲われてしまった。

新手か？

生き残りか？

盗賊の中に見覚えのある人々がいた気もするけれど、よくわからない。

吹雪の中、乱戦になった。

夢中で下つ端らしき男から棍棒を奪い、力任せに棍棒二刀流を振るう。

ひ弱な女の子一人に対して、こんなに多くの追っ手を差し向けるだなんて。

信じられない！

二桁の人間に後遺症が出そうな手傷を負わせて五人は確実に仕留めたが、背中から斬

られて倒れたところを次々に刺された。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いと思っっている内に意識が薄れていったので、たぶんその後死んだのだろう。

そんなこんなで、私の異世界人生は意義も感じずなにごとをなす間もないままに至極あっけなく終了した。

気づいたら、元の世界に近いセカイにいた。

しばし、混乱する。

ここはどこ、私は誰？

数時間して、ようやく落ちついた。

なにが起きた？

生活感のある一人部屋が用意されていた。

風呂場の鏡を見ると女顔がそこにあった。

ナニがあるので、真正正銘の男だけだな。

美人的要素がほんのりあるようでもある。

異世界にいた頃の容貌が加味されているのかも。

……違うか。

これが異世界補正？

……んな訳ないか。

あつちでは割かし可愛かった気もするが、特になんの役にも立たなかった。

美貌とか可愛いとかは、しかるべき時場所場合に於いて真価を發揮するのだろう。

部屋を漁ってみる。

一通りの生活用品が揃っていた。

通帳まである。

私名義の郵貯銀行の通帳には、半年くらい暮らせそうな金額が入っていた。

長財布にもそこそこの金が入っている。

なんだこれは。

どうやら私は翻訳者として生計を立てているようであり、外国語の小説や新聞記事や雑誌情報などを日本語に変換する仕事が生業（なりわい）のようだった。

辞書やら文献やらが机の上にある。

全部わかるのが非常に気持ち悪い。

だが、生きてゆくには、働かなくては。

神の仕業かもしれないし、或いは悪魔や邪神の仕業かもしれない。

よくわからないけど、彼または彼女の手の平の上で踊るしかない。

森の中で暮らすよりはマシなのかな？

棍棒が台所にあつたのには苦笑した。

血曇りが無いので、それは嬉しいな。

報道とある政治家と総合商社との癒着を報じたけれども、すぐにうやむやになる。

圧力でもあつたのかな？

政治家が作る法は、徹底的に彼らのためにある。

そのことを痛感させられた。

そうしている内、戦争になった。

因みに近隣の国々相手ではない。

近隣諸国との全面戦争の方が、まだ現実的な気がしないでもない。

深海棲艦という未知の存在が相手だとか。

近隣諸国の沿岸地域は既に壊滅的打撃を受けている模様。

内乱が起きている国さえあるらしい。

衛星放送は無用の長物と化し、海底ケーブルやインターネットなどによる海外とのや

り取りは過去の話になった。

航空機はことごとく撃墜され、船舶はよくて物資を奪われ、悪いと行方不明になる。軍船は残らず襲われる模様。

陸海空の自衛隊は国に超法規的措置を発動してもらい（それをも反対する人たちが一定数いたそうな）、アジア圏では比較的善戦しているようだ。

ご自慢の艦隊をことごとく失った国もあるという。

海外との連絡が一気に絶たれ、私の仕事はパタリと無くなった。困った。

どこからともなく通帳に一定額が振り込まれるのでそれなりにしのげていたけど、時折ロアナプラから来た命知らずの人たちの通訳をしたり、ロシアから来た軍人ぼい人たちの通訳をしたりした。

ドイツから来た人はえらく高揚していて、東北や北海道を気に入ったようだった。

たまに銃撃戦が起こるのは少し難点だし、しくじると命が無くなるようなので困ったけれども、どうにかこうにか生き延びることが出来た。

嗚呼、棍棒って素晴らしい。

想定していた人生となんだか違う。

私はひ弱なのに。

棍棒くらいしか使えないのに。

まあ、いざとなったら山の中で暮らすか。

野草と野生動物でなんとかなるだろうさ。

取り敢えず、鶏を飼ってみることにした。

名前はケイコにする。

元気でお転婆な子だ。

残念ながら、火は吐かない。

国内でその筋の人たちがロシアから来た人たちと揉め、その筋の人たちの事務所が幾つもの襲撃され壊滅した。

その後、通訳の仕事が激減する。
うぐう。

某出版社の仕事は給金が雀の涙だけど、なんとか頑張るか。

あそこは支払い方もよろしくないし、すぐばつさり切るんだよな。

下請けに対する態度は高圧的なことが大半だし、締め切りは無茶苦茶だし、会社は杜撰（ずさん）な人が複数いるし、よくあそこは潰れないものだ。

致し方なく、行ってみた。

チャラチャラした意識高い系社員からあまりにも仕事に見合わない低賃金と短すぎる期限を提示されたので、流石に嫌気がさして断る。

すると、そいつから厭らしい捨て台詞を言われた。

そんなに仕事が無いなら、ホストでもやればいいんじゃないですかとかアホか。やれたらとつくにやつとるわい。

こんにやろめ。

もう少しで、私の黄金の右腕が唸るところだった。

まったくもう。

前世の子爵家にいた下っ端を思い出す。

あいつは驚愕した表情でくたばったな。

あの棍棒は実にいい仕事をしてくれた。

アレはあいつと同じ目に……いやいや、文化的に殺らねば……いやいや……。

喫茶店で代用珈琲を飲む。

あんまり旨く淹れてない。

豆を沢山買つとけばよかった。

今更ながらに後悔してしまう。

困っていたら、外務省から連絡が来た。

外国語に堪能な人を集めているという。

なんだなんだと訪ねてみたら、大本営に勤務してみないかとの打診を受けた。

えっ？

大本営って、戦時中の代物じゃないの？

話をよく聞いてみたら、そういうのと違った。

深海棲艦に立ち向かえる存在として、艦娘という存在が最近顕現したのだとか。

ふむふむ。

その艦娘たちからの要望で、大本営が暫定的擬似的に復活したのだと言われた。

なにそれ？

人間と変わらない姿をしながらも、人間と比べ物にならない戦闘力を持つ存在。

それが艦娘という。

訳がわからないよ。

つまり神様みたいな存在ですかと聞いたら滅茶苦茶な勢いで否定された。

首をぶんぶん横に振っている。

一神教を信奉する人なのかな？

ハードロックが好きなのかも。

現人神（あらひとがみ）的存在なのかなと呟いたら、無茶苦茶睨まれた。人間ではなく人間以上の力を振るう存在と言え、大層な方々でないか？半神半人が英雄か英霊か。

奉（たてまつ）らないといけないのでは？

そうだ、神社作ろう。

担当者と、少しばかり言い争いになった。

艦娘について、神やそれに近い存在が顕現したとは認めない方針らしい。なんでさ。

大切に思いつつ、共生したらいいじゃん。

論破しまくったら、わやくちやになった。

おかしいことばかり、言うようになった。

船長、それは非論理的です。

エリートな人が髪を振り乱し叫ぶなんて。

徹底的に言い負かされたからといって、涙目になって内線で事務次官殿を呼ぶのはちよつと残念です。

呼ばれて来る方も大概に思えてくるけど。

事務次官殿が家令のおっさんに似ていて、思わず吹いた。

失礼な態度だと思うが、瓜二つの顔を見れば似たような反応になるんじゃないかな？
どうかしましたか？ と聞かれたので、親戚のおじさんに似ていたのでびつくりしました、と答えた。

完全なる嘘ではない。

怪訝（げげん）な顔をしながらも、事務次官殿は状況を説明してくれた。

大本営へいろんな省庁から人員を送出させることで、政治的均衡が保たれるらしい。その内の一人が艦娘を特別扱いしたら、それは政治的に非常によろしくないらしい。よくわからないな。

場合によっては面子の問題になり、他の省庁と関係がこじれてしまうとも言われた。面子なんてどうでもいい気がするけれど、それでは政治的に困ってしまうのだとか。政治的に、という言葉は魔法の言葉じゃないと思うんだけど。

思わず船頭多くして……と言いかけたら、事務次官殿に苦笑された。

私はトカゲのしつぽみたいなものですね、と言ったら担当者がまたも怒ってしまった。え、違うの？

結局、大本営勤務になった。

いいの？

私みたいな者は初めてとか。

だろうねえ。

私には気骨があるみたいだ。

よくわからないな。

発言に充分注意するようにとの嚴重注意を担当者から受ける。

お給金がよければ黙りますよ、と言ったら複雑な顔をされた。

安い金額でこき使っていると、離反者が出やすくなると思う。

そんな訳のわからない生活を支えてくれるケイコはお転婆で活発だ。

卵を早速産んでくれたのでありがたい。なんともケツコーなことだ。

少しばかり、前世の記憶でたゆたった。

汽車に乗って移動する。

お供のひとつは文庫本の小説。

刑務所で作られた、帆布製の頑丈な文庫カバーを付けている。

著者は元の世界のようなこのセカイに住み出してから知った人で、独特の価値観が好みに合致していた。

著者は何作品も書いていて、私はそのすべてに目を通して
いる。作風が多彩な人だ。

時折活動報告で仕事が忙しいと愚痴っているが、そうした時は愛読者たちによる気遣いに溢れたコメントが膨大に寄せられてびっくりする程だ。

愛されているんだなあ。

書籍化も複数されているが、読者目線を忘れないのが大変よい。

熱烈な読者が何人もついているようで、特に女性読者からの評価が非常に高いよう
だ。

ふざけて著者を茶化したり全否定する不埒な輩は行方不明になるといふ都市伝説が
あるらしいけど、悪い冗談の類であろう。

話を盛るのが好きな人って、どこにでもいるからなあ。

今読んでいるのは、とある小説投稿サイトにて連載中の作品に大幅加筆し刊行された
第一巻である。

著者は多忙な業務の合間を縫って、小説を書いているとか。

えらいものだ。

端麗な筆致の眼鏡っ子委員長系美少女が、名画的に表紙を飾っていた。

有名な絵師が気合いを入れて描いたとか。

これこれ、こういうのがいいんだよ。
色気過剰且つ扇情的な表紙は苦手だ。

異世界の貴族令嬢が現代日本に転生して暮らす話だけど、私もこういう生活をした
かった。

うらやましい。

ケイコは籠の中でじつとしてる。

手回り品として持ち込めてよかったぞい。

なんとはなしに以前の暮らしを思い出す。

崎陽軒のシウマイ弁当を食べながら、異世界に思いを馳せた。

シウマイ旨い。

ケイコは外出の時おとなしいのでありがたい。

籠から出すと、けたたましくくらいに活性化するのだが。

一度、あちらのケイコとこちらのケイコの二羽が賑やかに庭で遊ぶ夢を見た。

どちらも火を吐き、空を舞い、元気な感じだった。

横須賀の大本営では軍属の少尉待遇が与えられ、翻訳さんと呼ばれるようになった。

本官さんではない、念のため。

シヴェリア鉄道や南方などを經由して、情報が少しずつ本邦に伝わってくる。

我々はそれを極力有効活用しなくてはならない。

海外から届いた文章をとにかく訳すのが仕事で、文学的表現を使っていたら嚴重注意された。

解せぬ。

外務省の人がわざわざ横須賀までやって来て注意してくるのは、やり過ぎではないかしらん。

仕事部屋には先輩同僚合わせて他に三人いて、密やかに業務開始し業務終了する毎日である。

その筈である。

そうした穏やかな日々の筈なのに、少し違った方向性が付与されているようだ。

何事にも初挑戦の時がある。

あるのだが、こんな私でもなんとかやっていけるのだろうか。

少し不安ナリ。

大本営第式食堂のお姉さんの一人が異世界での母親に似ていて、ぎよつとする。

べ、別人だよな？

ホク口の位置まで一緒なのは驚愕した。

で、でも、やつぱり、別人でしょ。

私を見ても特に反応しなかったので、やはり別人だろう。

そうに決まっている。

あの色っぽい流し目は気になるけど。

横須賀鎮守府は大本営に隣接しており、所属する艦娘は双方併せるとかなりの数にのぼる。

すべての艦娘が忙しい訳でなく、比較的手持ち無沙汰な子も複数いるという。

業務に関わるようになって慣れてきた頃、そうした仕事の少ない艦娘で好奇心旺盛な子たちが仕事部屋へ来るようになった。

そして私にちよっかいを出すのだ。

なにか楽しいのか皆目わからんが。

お神酒と盛り塩と御幣（ごへい）を用意して出迎えたら、何故か怒られた。

解せぬ。

水干（すいかん）と鳥居と注連縄（しめなわ）と狛犬が足りなかったからかと思ったのだが、違うそうじゃないと言われた。

ならば、茅の輪かな？

若い子は難しいなー。

お神酒は軽空母の子に甘露じや甘露じやと持ち帰られた。

特に頻繁に来るのが駆逐艦と呼ばれる艦種の子たちで、年齢的には中学生くらいに見える。

同じ職場の人たちは、私が来るまでこんなことはなかったと珍しそうに言った。

ふーん。

私から見ると、無防備且つ無邪気な彼女たちはどうにも危うい。

いろいろな見えるんだよな。

平気で抱きついてきたり、膝の上ののっかってきたりするのだ。

肩車を要求されることもある。

おんぶお化けな子さえもいた。

親愛の表現と思っておこうか。

無邪気なのが、どうにも困る。

中にはオマセな子もいて、隙あらばチューをしてこようとする。

舌でも入れたらおとなしくなるのかもしれないが、事案になるのでそんなことは出来ない。

力比べになることもあるが、以前戦った騎士崩れの盗賊並みの子もいる。軽巡洋艦の子がお色氣的にやり過ぎてきた時は、たまりかねて説教した。

穿いていないとは何事ですか、嫁入り前の娘さんなんだから、もつと体を大事にしない、と。

大本営で提督予備軍として働いている人たちと話をしていた時に、それらのことを話してみる。

えらく食いつきがよかった。

駆逐艦の子たちが私を呼びに来た時、血涙を流している人物が数人いた。

やはり靴下やストッキングはちゃんと穿かないとな。

休みの日は艦娘と出かけることが大半だ。

そうでない時はケイコの世話をしている。

私の勤務時は働いている棟近くの中庭で運動にいそむ彼女だが、ちよつかいを出す輩には遠慮なく制裁するらしい。

彼女もトサカにくることがあるのか。

高い運動能力と機動性と跳躍力で相手を翻弄し、くちばしと爪による攻撃で素早く無力化するのだからか。

ケイコはきちんと撫でてやらないと不機嫌になりやすいので、その辺は要注意だ。

私と出かけた理由を、当の艦娘たちに聞いてみた。

艦娘たちは単独で外出許可を求めるより、人間と一緒に許可を求める方が格段に楽なのだとか。

もつと自由を与えたらいいのに。

他の事務方の人はそういうお呼びが一切かからないようだが、チョロいと思われてるのかな？

ある時、空母の子たちと横須賀三級食通紀行を開催したら駆逐艦の子たちから随分なじられた。

解せぬ。

何故そんなに血相を変えて怒られるのか、小官には理解し難いことですな。彼女たち用に購入していたプリンを進呈したら、なんとか許してもらえた。

プリン旨い。

財布、軽い。

艦娘との相性がいい提督は多数派でないとか。

すべての艦種に好かれる提督ばかりではない。

そんな話を、駆逐艦の子たちから聞かされる。

また、たまに鎮守府や泊地の提督がいなくなるそうなの。

原因は多種多様で、傾向もよくわかっていないようだ。

ホラーかな？

人の寢床でごろごろする艦娘にはほとんど困る。

後、メガドライブやセガ・サターンや三国志の漫画などを持ち込むのもやめて欲しい。

お泊まりに来たのー、と無邪気に言う子の将来が心配であります。

時々ケイコにつつかれて退散する子がいる。

相手の動きを見切っているように見えるのは気のせいかな。

お手柔らかにしてあげてね、とお願いしたらコケーツとつつかれた。

解せぬ。

ある日、提督代行として呉に行つて欲しいと言われた。

一介の軍属少尉に一体なにをゆうとりますんかいのう。

人材不足、ここに極まれり。

なついている艦娘を連れていつてかまわないとのこと。

彼女たちは扱いが極めて難しいので、重々気をつけるようにとも言われた。えーっ、そうかなー。

とつても素直でいい子たちに見えるけど。

出張手当はどれくらい付くんですか、と聞いたら教えてもらえたけど、これはちよつと渋い。

汚職や癒着の報道があれだけ世間を賑わせているのに、こちらに回せる金額はぺっこしかないうそな。

なんともはや。

出向な出港の日が来た。

『ぼんぼん丸マークツヴェルフ』と書かれた汽船に乗り込む。

『フェンリル搭載につき要注意！』とはなんのことだろうか？

よくわからない冗談だ。

……冗談だよね？

汽船の舳（へさき）にはケイコがいて、きりつと前方を見ていた。

頭の上に載せられた紺色の小型帽子が、とてもよく似合っている。

「行きますよ、提督。」

代表の子がはにかみつつそう言う。
深緑の制服が紺碧の空によく合う。
空は輝くばかりに青く美しかった。
異世界で見た、あの日の空の如く。

CCCXXVIII：炎暑の中のコミケツト～とうこうしえんかんたい、かくたたかえり

とうこうしえんかんたい。

最近噂の原稿督促艦隊か。

逃亡中に彼女たちの噂を、タヴァリーシチな同志から教えてもらう。

教えてくれたタヴァリーシチは、港北区新吉田町に住むケンスケ氏。

艦娘のことになるとやたらと早口になる彼は今どこにいるのだろうか？

俺は素早くじわじわと減ってゆくタヴァリーシチたちへ最後の電文を送り、壮健たれと願いつつ携帯端末の電源を落とす。

果たして、何人生き残れることやら。

三頭犬の紋章を肩につけた猟犬たち。

とうこうしえんかんたいの猛者たち。

猟犬たちは逃走に長けたワザマエ級絵師たちを次々追い込み、各種の催しに無事新刊を刊行させるといふ。

俺の男の子がキユツと縮んでしまう。

たまらん。

忍者狩り得意とした軒猿もびつくりだな。

しかし、ここで俺が捕まる訳にはいかない。

タヴァリーシチたちの熱い思いを無駄にしてはいけないからだ。

それに外は暑い。

ホテルの部屋は空調がきいているから、出たくないで御座る。

コンコン。

部屋の戸を叩く音がした。

夜も遅い、こんな時間に？

まさか！

様々な欺瞞（ぎまん）行為によって、俺の行方はわからなくなっている筈なのに。携帯端末は電源を二日前から切ったままだし、仲間の誰とも連絡なぞしていない。

このホテルの部屋だつて、偶然見つけた。
そうだ。

幾ら優秀な猟犬といえど、容易に見つかる筈などなからうて。

コンコン。

再度叩かれる。

窓を見た。

ここは七階だ。

飛び降りる訳にもいくまい。

嗚呼、ラペリングな降下の練習をもつとやっておけば。

……是非もなし。

押し通るまでか。

素早く荷物をかき集め、戸のそばまで行く。

どなた？

問うた。

フロントです、と相手は答えた。

男の声だ。

とうこうしえんかんたいには、男はいないという。

ならば。

いや。

物盗りの可能性もある。

何用です？

再度、問うた。

お休みのところを申し訳ありませんが、身分確認を再度お願いします。

そう、言った。

身分確認？

ええ、機械にエラーが出まして。

他に気配は感じない。

開けるか。

開けた。

すると。

閃光が俺の目を貫き、「目がっ！ 目がっ！」とお約束をやっている内にバチバチッと腹の辺りで音がして痺れ、俺はあっけなく意識を失いそうになる。

ドサリ。

自分自身の倒れる音が聞こえた。

まだだ。

まだ、やらせはせんよ。

立ち上がれ。

立ち上がれ、俺。

不死鳥の如くに。

燃え上がれ、俺のコスモポート種子島！

…間違えた、俺の小宇宙（コスモ）よ、燃え上がれ！

うおおっ！

立ち上がるために力を込めた。

だが。

バチバチ！

おおおっ！

今度は首の辺りに痺れ。

この小娘たち、容赦が無い。

むごいぜ。

「二三二五、目標、確保。」

幼い女の子の声が聞こえる。

嗚呼、俺は籠の中の小鳥か。
無念。

そうして、俺は氣を失った。

氣がついたら、リノリウムの床に転がっていた。

知らない天井が見える。

複数の短機関銃の銃口が俺に油断なく向けられていた。

非致死性樹脂製弾頭で痛い目に遭うのも厭だし、このまま缶詰めで描くか。

ずらりと並んだは扉。

その中が俺の監獄か。

トホホ。

しかし、俺のような中堅的ウスイーホン系絵師にまで手が伸びてくるとは。

女の子たちから酷く蔑（さげす）む様な視線を浴び、俺は新作の構想が心身を貫く氣
持ちでいっぱいになった。

こうなったら、やってやる！

俺はとことんやってやるぜ！

ここ近年猛暑的危険領域を超えて酷暑となり、更に狂暑と一部で囁かれる事態となっているらしい。

日本は地域によって元々多様な気候が特徴となっているが、ここ近年の夏は訳のわからないくらい気温となってきた。

嗚呼、日本は亜熱帯気候になりつつあるのか。

地球は終わりに近いのだろうか？

深海棲艦たちのしでかしたアレコレで、地球温暖化問題は緩和しつつあったのではないのか？

「もう、やっていられないくらい暑いわね。函館だから、他よりはまだマシなんでしょうけど。ほら、サーヴェイス、サーヴェイス。」

昭和中期のあだっぼい姉さんのような恰好をした戦艦棲姫が、投げやりっぽい調子ではしたない真似をし出した。

興奮するので、やめて欲しい。

私の理性がどんどん削られてゆく。

口に出すとより酷い事態になるので言えないが。

函館はつきり言って、真夏でもそんなに暑くないと思う。

風がけつこう吹くし、天候もころろ変わったりする。

地元の人に言わせると二五度で活動に問題が発生しだし、三〇度で動けなくなるとのことだ。

知人のいる岡山県だと、とある小さな城下町が全国一位から三位の常連となりやすいらしい。

先日は三九・三度を記録したとか。

あなおそろしや、あなおそろしや。

私は北の国がさほど暑いとも思わないし、避暑を求めてやって来た関東以南の艦娘たちもそのようだが、納涼会を開いて欲しいとの要望が複数あった。

致し方ない。

いつもの怪談でもやるか。

【ちっちゃな女の子】

【出張先の古い旅館】

【いつも湿った部屋】

【山の中の廃墟旅館】

【お姉ちゃんと彼氏】

【三人の撮影者・壺】

【三人の撮影者・式】

【行つてはいけない】

【海の家と少年たち】

【夜中の駅舎】

【妹の日記帖】

淡々と話していたら途中で周りに立てていた蠟燭の一本の火が突然消え、悲鳴が複数あがった。

団扇（うちわ）片手にせっせと執務に励んでいたら、大本営広報部から有明の漫画祭への参加要請が来た。

要請とは即ち参加せえよ、ということである。

拒否権はにやーだよ。

致し方ない。

いつもの撮影に被写体として参加する。

毎度毎度、こんな撮影を行う意味がわからない。

鼻からオイルを流している娘たちは爽やかな笑顔で売れます売れます絶対売れますと連呼するが、どうにももうさんくさい。

それでも仕事に従事せざるを得ない、宮仕えの悲しさよ。

陸上競技部の衣装で跳んだり跳ねたりする。

こんな映像、どこに需要があるんだ。

トランクスの水着姿で海岸を走ったり、泳いだりする。

ちなみにプーマランは拒否した。

あんなん穿けるかいな。

絶対に、イヤだ。

西日本にいる、とある提督はいつもそんなんを穿いているらしいが。

めちやくちや早口で穿いて欲しいとオータムクラウド先生や広報の艦娘たちが説得してきたけれども、ちよつと気持ち悪いまでの言い方だったので断固として穿かない旨を宣言する。

だが、断る、と。

お約束のシャワーや温泉部分を撮影し、なんとか映像を撮り終えた。

精神的にぐったりする。

円盤加工して今回の漫画祭で販売するそうだが、これ売れるのかね？

毎回疑問に思うのだが、不可思議なことに毎度即日完売するそうなの。

解せぬ。

汗まみれの着用済み衣類は高く売れると言われたが、躊躇なく洗濯機に投入する。洗濯しても確実に売れますと悔しげな顔をした艦娘に、アイアンクローをかけた。

近頃、初雪望月の意欲が天元突破している。

最近の『ハッチーモツチーステーション』も、ノリノリのキレッキレだとか。哨戒や遠征や護衛にも、いつもあれくらいの気迫で取り組んでくれたらなあ。

二名は燃えている。

普段と格段に違う勢いで描いていた。

上手いじゃないか。

修行を重ねて、上達したのだと言う。

ほほう、やるじゃないか。

絵日記系の同人誌を作っているのだ。

二名ともおそろしい程に真剣だった。

ピコピコをやっている時と同等な程。

劉封×孟達の三國志系薄い本を販売している時と、同じ輝きを放つ程。

「函館鎮守府の日々を描いた同人誌はいつも人気だよ。そう、売り切れる程にね。」

「そうなんですか、川崎さん。」

「そうなんですよ、山本さん。」

合作的同人誌は、鎮守府内にあるメトロン膳写（とうしや）室でバンバン印刷されるところか。

なにそれ、聞いてない。

その膳写室とやらに行ったら、おっさん姿のメトロンとか手の空いた整備員やら事務員やらの男連中がせっせと同人誌の印刷に励（はげ）んでいた。

おまんら、いつの間にも！

無言で見つめていたら、彼らから絶望的な視線を向けられる。

これこれ皆さん、捨てられた仔犬みたいな顔をするんじゃないやありません。

全員から気持ち悪いくらいの早口で説得され、しぶしぶ了承した。

この鎮守府はなんだかどどん変な方向に向かっている気がする。

……今さらか。

タヴァリーシチたちが殆ど捕縛されたという。

とうこうしえんかんたいの勢いは止められぬ。

猟犬となっている彼女たちは元々海防艦という艦種で、自称事情通によると沿岸防衛や近海哨戒がそこそこ出来るくらいの力しか無いらしい。

それでも隣国が独自開発したと虚言を吐く艦娘もどきよりはずっと高性能のようだ。とうこうしえんかんたいが発足した原因には、どうやら函館鎮守府の提督が関わっているみたいだ。

彼が艦娘による陸戦部隊的なモノや特殊部隊的なモノを提案した結果、現在の強襲部隊的なモノになったそうなの。

海上で深海棲艦と相対するには厳しい能力だろうと、陸上に於いては普通の人間の兵士で彼女たちに叶う存在などいない。

つまり、そこに需要があった。

立場的には微妙なモノを含むが、おおむね警察の特殊部隊に近い立ち位置のようだ。ふむ。

かなり近づいてきたな。

このナツクル、地球上で牙を抜かれたなどと言われてはいるが、まだまだ地球人もや人造生命体などには後れを取らぬ。

ましてや、艦娘などという新参者に負けてたまるか。
ふはは、我に追いつけるものなら追いついてみせよ！

地球人に扮して同人誌作りに邁進しているナツクル星人がどうこうしえんかんたいと熾烈な戦いを繰り広げ、結果としてメトロン星人の科学力に負けたそうなの。

彼は男性向けの（自粛）な同人誌を作る人気絵師だから、今夏のコミケツトで新刊が出るのと知ったら彼の愛好家たちはむっっちゃ喜ぶことだろう。

老朽化するビッグサイトは年々問題が増加する傾向にあるけれど、人々の夢を上手く紡ぎたいものだ。

五能線を経由して東京入りするか、東北本線を使って東京入りするか。

ううむ、悩ましい。

よし、こんな時はあみだだべ。

えいやっ！

八戸（はちのへ）經由に決まる。

さーて、移動だ移動だ移動だべ。

早朝、ビッグサイトに着いた。

サークル参加の面々が続々と会場入りしているのを目にする。

この風、このにおいて、この雰囲気、これこそがコミケットよ。

どこからともなく艦娘たちがわらわら集まってきた、整列する。

とうこうしえんかんたいも後方できちんと整列していた。

傍らにいた大淀が指示してゆく。

とうこうしえんかんたいは会場警備。

屋台を営業する艦娘はいざという時、各種支援行動をとること。

サークル参加の艦娘に対しては節度ある活動をしているか随時確認し、問題点があれば適宜報告すること。

一般参加、企業参加の艦娘は常時節度ある行動を心がけ、他の参加者に迷惑をかけないこと。

そうした注意が行われた。

「アハトウソク！ 傾聴せよ！」

ドイツ艦娘が全体に言い、そして私に向かって頷く。

この娘、どこの鎮守府の子だろう？

よし、二秒で済ませてやる。

「それでは皆さん、よい一日を。解散。」

えっ、という彼女を後にしてコミケット仕様の艦娘たちはすぐさま行動を開始した。

さて今日から三日間。

漫画祭が開催される。

暑い日々となりそうだ。

ま、なんとかなるだろ。

CCCXXIX : 生シャケとニラ玉とフリカツセ

新設の要望があつた屯所（とんしよ）について、東京都側からの要請に基づいて折衝することになった。

東京都は複数の島を有しているから、らしい。

既に、小笠原と沿岸に基地があるじゃないか。

足りない？

なにか？

防衛線のすみやかなる構築？

能登提督の苦笑いが見えてきそうだ。

会議の場所は東京都庁。

未だ完全な復旧には程遠い状態の、ラスボスの威圧的現代建築物。

新宿は今もあちこち壊れたままだ。

あの憤懣（ふんまん）を地獄の壁にぶつけたような激しい騒動は情報操作され、伝えられる規模と実際の傷痕にはかなりの差異が見られた。

幽霊騒ぎも記憶に新しい。

復旧の目処さえろくすっぽ立っていないという、口さがない噂は北の国まで聞こえてくる程である。

我々に貸し与えられたのは、暴動でやられていない中層の狭い会議室。

一時は暴徒たちがこの辺りの階層まで登ってきたという。

ひび割れた壁面。

ふさいだ跡のある天井。

そうか。

攻防戦はここらでも繰り広げられたのか。

床の隅には未だに残るシミ。

赤黒いシミ。

拭いても拭いても落ちない、暴力の爪痕。

少しもやつとした。

交渉の相手は中年男性。

ぎらぎらした感じでないのは助かるが、たぶんやり手なのだろう。

お高そうな腕時計。

仕立てのよい背広。

ぴかぴか光る眼鏡。

磨き上げられた靴。

落ち目の状況から這い上がるために、優秀な人材の投入は不可欠。

口舌の徒でないといいのだけど。

話し合いが始まった。

やはり、最初からぎくしゃくした感じのやり取りになる。

お互いの目指す先があまりに違い過ぎて、めまいがしそうだ。

某外資系遊園地と少々関連しつつ組み込みたい意向をさりげなく示されたが、きつぱりと拒絶しておく。

それ、お隣の県ですよん。

羽田舞浜木更津横須賀防衛線、てなんですよん。

略して『ハネマキヨコ』、て略せばええもんちやいまっせ。

なんだかなあ。

喧嘩腰にならないように注意しながら、のらりくらりと話し合う。

コンスタンティノポリスで絨毯（じゅうたん）を仕入れた時も、こんな風にのらりと丸一日話をしたつけ。

あつちのあきんどは愛嬌があつたし、商談の後はチャイハネで賑やかに相手と旨い飯を喰つたものだが。

ここでは茶の一杯も出てこない。

……有為転変だなあ。

前哨戦で総力戦を行つてはならない。

向こうも切り札を何枚も隠している。

なんとか先に切らせたいものである。

さてさて、どんな交渉術を使うかな？

たまに交渉でなく圧力をかけてくる相手もいるから困つたものだ。

脅迫されたら反撃されるつてことが、わからない人もいるらしい。

ろくな説明も無しに高圧的にかくやればいいんだよ的な押しつけ。

明確な論理に至らず、不条理を突くと感情的な論調でのみ言い立てる。

話にならない。

いつか焦げつくんじゃないかな。

反省しないから修正案も改善策もない。

困ったものだ。

ともかくにも、観光名所と関連性を持たせたがる自治体が多すぎる。

土産物を置かせて欲しいという要望を某所で聞かされた時は、我が耳を疑った。

意味がわからない。

観光案内所と勘違いしているんじゃないか？

まったく、『冷たい鼻のラクダ』は御免だ。

川とか湖とかと組み合わせたがる地域もけっこうあるのだ。

屯所は見世物小屋でないぞ。

艦娘は船頭でも観光船でもない。

痩せても枯れても、軍事基地なのだ。

見た目は果てしなくゆるいとしても。

一見するとか弱い女の子があんちゃんとかおっさんと、小さな箱庭で暮らしているか

に見えたとしても。

油断大敵、常在戦場。

言質（げんち）をなんとか取ろうとする小手先芸にはうんざりする。

討論するつもりは最初から無く、自身の意見を受け入れろとの論調。

意に沿わないとみるや、自分たちが絶対に正しいと主張するばかり。

その癖、説明は稚拙で矛盾だらけだ。

そこを突くと浪花節全開でゴリ押し。

彼らの主張を断る勇氣、胸に秘めつつ会話する。

空手形はノーサンキューで御座る。

貴殿にその権限は無いでしょうに。

嗚呼、早く函館鎮守府に帰りたい。

関東圏の人口が関西圏の人口を下回っていることはこれでわかるでしょうと、二つの

円グラフを見せられてもなあ。

それがなんだっつーの。

屯所の新規開設とはまるで関係ないよね。

……関係あると思ひ込んでいるのか？

各県別の人口推移が示された棒グラフも同様に見せてくれるのだけれど、彼が一体なにをしたいのかよくわからん。

東京都は人口三〇〇万を目指しているそうだが、だからどうしたって話だ。

それと屯所の関連性が今一つわからない。

屯所一軒が一〇〇万の人口を増やす契機になる訳ないと思うんだけどなあ。

地方に於ける鎮守府の新規開設は紆余曲折の末に地方自治体を割る事例が複数あったためか、日本全国の地方自治体は複数の屯所設立へ向けて積極的に運動するようになつてきた。

鎮守府一軒より、屯所を三軒みたいな。

今ある鎮守府一軒に、更に屯所三軒足そうという意見を出す自治体もあるが。

雑誌に付けるオマケ感覚で言われても、実に困る。

戦後に大変こじれそうなことをいけしやあしやあと言っている人たちは、一体全体なんなのだろう？

責任を取るつもりなどさらさら無いから、軽やかな口から幾らでも虚言が排出されるのであろうか？

こうした人たちは自分たちの都合が悪くなつてきた場合、平気で手のひら返すものと思われる。

こちらに全責任をおつかぶせるのかね。

ほんと、もー、どないせーゆーんじや。

屯所は漁港じゃないし、玩具でもない。

えーかげんにして欲しい。

難易度がまるで違うといつても、提督と艦娘と場所を用意し、民家を基地へ改装し、書類を整えるのにどれだけ手間暇がかかるかわかっているのだろうか？

それがお仕事でしょう、と当然のごとくに言ってくるあんちゃんへパイルバンカーかアームパンチでもぶちかましたい。

色即是空空即是色色即是空空即是色。

落ち着け、我が心。

震えるぞ、ハート。

燃え尽きるほど、ヒート。

油をたっぷり染み込ませたらしい相手の舌が、滑らかに薄っぺらな言葉を次々吐き出してゆく。

全然こちらには響いてきません。

一つ一つに理性的に反論してゆく内、相手のこめかみに青筋が浮き出してくる。知らんがな。

開設したらしたで問題山積である。

箱ものは作ったら維持費がかかる。

数年やってみただけ、お金がかかるからやっぱりやーめた、では困るんだよね。

予算的に都合が悪くなってきたので残念ながら閉鎖します、でも困っちゃうぞ。

海の安全性を確立するためのお題目が頻繁に唱えられているけれども、彼らを人寄せパンダにしようとする気配が多大に感じられる。

屯所はていのいい遊園地じゃないんだぞ。

経済を再活性化させるための商業施設でもない。

ほいほいと作って、ぽいぽい捨てる訳にはいかないのだ。

本当にわかつているのかね。

矢面（やおもて）に立たされる身としてはなんとなくもやもやする。

勝手に民家に住み着いてなんとなくそれっぽい仕事をしている者たちもいるが、それはそれあれはあれである。

これ、一介の地方鎮守府の代表がやる仕事じゃないぞ。

大本営に詰めている、お偉いさんの仕事じゃないのか？

大本営からやれと言われている時点でやれやれだがな。

金の亡者と化した人々を論理的に説得することは、先ずもって不可能に近い。

理屈はどうにでもなる代物だしな。

独自のよくわからない理屈でゴリ押ししようとする人間にはため息ばかり出てくる。大金が動くとわかって、退く人間など先ずもっていない。

非論理的な屁理屈を論破されると、彼らは気色ばんで更に言い募る。

彼らが折れることは先ず無い。

いびつな正統性を声高に主張するし、整合性の無さを指摘すると逆上する。

しまいには滅茶苦茶な感情論を幾つもぶつけまくって、取り付く島もなくなる。

訳がわからないよ。

必死になり過ぎて、鬼の形相になっている人も数人どころではない。

話がそもそも噛み合わない上にこちらの話をはなから否定するのだから、合意に達する筈もない。

彼らは彼らで自分自身を間違っていると思っていないようだし、もし正確な結論に至っているにしても両方に益のある考えは出さないから、最終的に決裂に至る道筋しか選べない。

理路整然と話を進めたいのだが、自身の正義しか受け入れようとしなから手に負えない。

筋の通らない点をすべて指摘すると、これだからあなたたち即席提督は的論調を持

ち出されることもある。

あの時はすぐさま席を立て、函館へ即時に帰った。

偉そうにものを言っていた担当者は、直後に山奥の事務所へ飛ばされたらしい。

彼は言い訳しまくったそうだし、こちらが悪いという論調だったそうだし、何故かやたらと責め立てられたが、録音した音声を聞かせたらようやく沈黙した。

ここでは一応、そんなこともないけれど。

論議が斜め上に向かうと、会話そのものが成り立たなくなってしまう。

もーほんと、どうしたらいいのか。

あなおそろしや、あなおそろシア。

駆逐艦一名から二名が基本仕様と言われる屯所ならば、適性者はそこそこ存在する。事後報告的な追認もあるし、艦娘かどうか怪しいお嬢さんも各地で確認されていた。だが、海に浮かぶことが出来ない娘を艦娘と呼ぶのは勘弁して欲しい。

そんな事例はごく僅かだが。

ま、お国のために働いてくれるなら、出自をとやかく言わなくていいんじゃないか？ 他国から逃げてきたつばい娘をかくまっているのは、どうかと思われなくてもないが。ただたどしい日本語を喋っている時点でお察しなのだが、砲撃能力と航行能力の二つがそれなりだったら合格カツコカリを出している。

がばがばだが致し方ない。
うちの大淀に期待しよう。

バレなければいいとの考え方を示す人もいるが、下手を打つと大火事になつちやう。
幼児のいる屯所もあるからなあ。

仲よくし過ぎるのも考えものだ。

オムツやガラガラなどを差し入れすることもある。

自重して欲しいものだ。

所属している娘がお腹を大きくしている事態に対し、責任者はかのご婦人をあくまで
も艦娘だと思ひ込んでいる状況がたまにある。

情報統制の良し悪しというか弊害というかなんというか。

産婦人科との連携が意外と重要だ。

避妊具の手配は屯所に欠かせない。

ときばきと処理する大淀には、いたく感心するばかりである。

人の業（カルマ）は、深いものだ。

それにしても、腹が、減ってきた。

担当者との折衝を無難に終え、私は街へ繰り出した。

今の私は何腹だ？

落ち着け。

私は腹が減っているだけなんだ。

そうだ、京葉線に乗って出よう。

千葉県へ。

千葉市へ。

旧都心部としばしば揶揄されるかつての地域に比べ、この辺はまだまだ豊かさが感じられる。

新宿、池袋、銀座、渋谷といった繁華街が昔日（せきじつ）の勢いを取り戻す日は、いつか訪れるのだろうか？

銀座は巨大商業施設を作る計画があつたようだが、未だに白紙のまま。

渋谷駅の改造工事計画は宙に浮いたまま。

池袋の乙女ロードは健在のようだが、絶対に行かないで欲しいと懇願されているので行けない。

何故だろう？

……まっ、いつか。

ここら辺は平和だ。

多数の暴徒によつて焼き討ちされた跡もないし、不審人物が辺りにうようよいる訳でもない。

安心して歩けることは重要だ。

装甲服を着た特務警察官が、街中で銃撃戦を頻繁に行う事態は再来して欲しくない。どこの国みたいに内戦で国が割れる事態は避けたいものだ。

ん？

おや、洋食屋か。

いいじゃないか。

こういうのがいいんだよ。

入つてみると、懐かしい雰囲気とする店内はけっこう広い。

葡萄酒が何本もあるから、呑兵衛にとっては嬉しいだろう。

馴染み客がかなりいるようで、店のお姉さんと客とが何度も親しげに会話していた。

生シヤケのバター焼き、蟹ピラフ、茄子とピーマンの味噌炒め、とどめに代用珈琲と

自家製プリンを注文する。

そして、来た。

うむ、旨そうだ。

生シャケのバター焼きは肉厚のシャケに小麦粉を付けてバターで焼き、その上に特製タルタルソースをかけたものだ。

これを選んだ私、正解。

タルタリストも絶賛だ。

お出かけよそゆきの味わいがして、なかなか旨い。

付け合わせの人参のグラッセや馬鈴薯のフレンチフライも、ほどよい感じである。

蟹ピラフ、これは大好きな味だ。

ちよい焼き飯寄りかな、という感じで、むしやむしやと際限なく食べられそうだ。

茄子とピーマンの味噌炒めだが、この味噌がやさしい甘みと深みに彩られていて、大

地の恵みが我が舌と胃袋を蹂躪（じゅうりん）する。

旨し。

自家製プリン。

お母さんの手作りって雰囲気。

堅めで懐かしい味のプリンだ。

ちまちま、ちまちまと惜しみつついただく。

翌日も東京都庁で折衝。

殺生な話で御座ります。

摂政関白右大臣。

なんてな。

早朝からあーだのこーだのと腹の探りあい。

何故だか、担当者の顔色が非常に悪い。

その屁理屈的弁舌も本日は滑りが悪い。

なにか悪いものでも食べたのかね？

緊張の度合いが酷いようにさえ見える。

あちらの内輪の話し合いで揉めたかな？

ま、露骨な誘導がないのはありがたい。

お昼前になんとか今回の話は妥結に至った。

ふんわりした部分だけではあるが。

もう、あとは知らん。

後は大本営と好きなかだけやってくださいな。

あー、終わった、終わった、終わった。

飯喰つたら、旅籠（はたご）に投宿だ。

舌戦を繰り広げた担当者に昼食でもご一緒にどうですかと何気なく誘われたけれど、もうこちらは精神的にお腹一杯です。

余計な言葉で気まづくなりたくないのであります。

丁重にお断りした。

それなのにやたらと粘ってきたのは、昼食予定場所に誰かいるのかな？

都のお偉いさんとか衆議院議員とか参議院議員などの方々とのサプライズの会食は、こちらとしてはノーサンキューなのであります。

前に他所でやられたからな。

飯の時間をなんだと思っているんだ。

脅迫しても無駄無駄無駄なのであります。

彼らが手配した洋式旅籠には泊まらない。

変な陳情者たちに来られても困るからな。

蜂蜜作戦を行われたら大変なことになる。

あちらの無茶苦茶に巻き込まれたくない。

それにしても、腹が、減った。

よし、昼食にしよう。

ここから離れた場所で食べたい。

汽車に乗ってここから離れよう。

幾つか欺瞞（ぎまん）行動をしながら、私は八丁堀駅で下車した。

なんとなく、ティンときたからだ。

追跡者はいないみたいだ。

二人ほどこいたようだが、どうやら無事にまいたな。

さてさて、店を探そうか。

ふらふら歩いていると、なにかを炒めているようなにおいがしてきた。

ふむふむ、こちらか。

てくてく歩いていると、中華料理店が現れた。

ほほう、いいじゃないか。

こういう店だよ、私が求めているのは。

店内に入ると、中はがらがらであった。

昼時の盛況が一段落したところなのか？

まあ、それはいい。

なにを食べようか。

ええつと。

迷うなあ。

常連らしき帽子とヒゲの人が入ってきて、麦ジュースとトマトキムチともやしラーメ
ンを頼んでいた。

トマトキムチ！

そういうのもあるのか。

お品書きには掲載されていないけど。

旨そうに麦ジュースを呑み、トマトキムチを頬張る男性。

むう、あれはたまらぬ。

結局、トマトキムチと海老トーストとニラ玉とご飯とエビチリを頼んだ。

改めて店内を見渡す。

教科書通りの街の中華料理店である。

トマトキムチと海老トーストが来た。

トマトトマトしたキムチの意外な相性のよさを楽しみつつ、海老トーストを口内に投

入する。

旨い。

サクツとした歯ごたえに加え、丁寧に行われたであろう海老のすり身がぷちぷちと幸せ感度を高めてゆく。

そうしている内、ニラ玉とご飯が来た。

中華スープ付きだ。

ニラが沢山入っていて、このご時世にありがたいことだ。

玉子炒めは別口で行われて、ニラの上に載っかっていた。

成る程、そういったやり方もあるのか。

やわらかな味わいの中華スープを間に挟み、ニラ玉とご飯とトマトキムチと海老トーストをわしわしいただく。

エビチリが、来た。

街の中華の実力者。

ぷりぷりの海老に、甘辛餡と生姜（しょうが）の風味が程よく効いている。

とどめはニラ玉丼だ。

といつても、ニラ玉をご飯の上に載せたただけだが。

ああ、口福だ。

お腹一杯になった。

堪能した。

不意に、昔の漫談師を思い出す。

こんな風だったかな。

私がマハラグライダイナだった頃、悪魔超人はサンシャインで、異世界ロボットはダンバインだった。

ぺんてるのブランドはアインで、サイボーグはゼロゼロナインだった。

わっかかるかなあ、わっかんねえだろうなあ。

時間が取れたなら、あのドイツ料理店に行つてフリカッセを堪能したい。

ドイツ系のお店なのに、フランス発祥の伝統料理が旨いとはこれ如何に。

まあ、旨ければ、それでよからうなのだ。

マッシュルームやシメジや玉ねぎを用いた鶏の生クリーム煮。

あの巨体の料理人が生み出す繊細な料理は通うだけの価値があるからな。

生ビール、ソーセージ、玉ねぎのパイ、ザウアークラウト、馬鈴薯のサラダ。

デザートはケルシーのケーキがいいかな。

明日は浅草へ行こうか。
友人の洋食屋でなにを食べようかな。

CCCXXX : 南の島のひみつ

突然、上官殿から休暇をもらった。

溜まりに溜まった有給休暇をこの機会に消化しろと言われたのだ。

南の島へでも行つてのんびりしてみたらどうだね、とも言われた。

なんだか怪しい。

東京との折衝でなにかあったのかもしれないが、海千山千の上官殿がそういったことを教えてくれる訳でもない。

上官殿は用件だけ伝えて飯を食べて去ってしまったので、情報を掴めなかった。

八丈オリエンタルリゾートを妖精技術で復活させ、艦娘用の慰安施設にするという話を聞いたことがある。

八丈島再開発計画。

一応秘密だったか？

日本のハワイ、か。

かつてそこで中心的役割を担っていた最高級西洋式旅籠（はたご）だったロイヤルホテルは、フレンチ・バロック様式と近代のブルータリズムの混成したような造りだそう
だ。

にっちもさっちもいかずに風化を待つばかりの建造物だから、陽の目を浴びるには今回が絶好の機会なのかもしれない。

誰が交渉役だったのか？

存外、そちらが本命だったのか？

私と哀れなエリート氏は道化だった可能性がある。

誰の目をくらますつもりだったのかね？

よくわからないが、囿役にはなれたということか。

違うのかもしれないが。

案外、交渉は大詰めを迎えているのかも。

ならば、私はいない方がよからうて。

先日の襲撃は、なにかしらこれらに関係があるのかもしれない。

取り敢えずは、南の島へ向かおうか。

うちの娘つこたちがむつちや怒っているけれども、代理提督に丸投げだ。

生きていたら、また会おう。

東京及び関東圏で待ち伏せがあるかもしれないよ、とメトロンから警告を受ける。敵がいたら躊躇なくその特製プレスレットで排除するのだよ、と真顔で言われた。物騒なことをさらりと言うなあ。

苦小牧（とまこまい）まで汽車で行って港から大阪まで船で行き、大阪から那覇、那覇から島という航路を使うか。

大阪でかき氷やホルモン焼きもいいな。

那覇ではハンバーガーとかき氷を食べ、南の島ではピッツアや地元料理やかき氷を堪能しようか。

読みかけの『ルシタニア戦記』も持っていこう。

ギスカール公がタハミーネのぷるるんアタックに散々翻弄される展開だが、彼のことだからどうにか切り抜けることだろう。

田中さんから白い御札を三枚もらおう。

魔王様謹製のかなり強力な品だとか。

代理提督は誰が来るのかと思ったら、黒髪黒目の東洋系青年だった。

横須賀で新人提督をしているという。

うちの娘つこたちが軍人将棋やろうぜと代理提督を誘い、全員完敗した。三次元チエスで挑んだ娘もいたが、彼女もまた敗北を喫したのであった。

ほほう、やるじゃないか。

申し送り事項を確認し、既に二輪式旅行鞆を用意していた大淀に居残り頑張つてねと伝える。

怒られた。

鳳翔間宮などの部下たちにも嚴重に釘を刺す。

怒られた。

だって、見目麗しい娘つ子を連れて島へ行つたら目立つてしょうがない。

そんな感じで説得する。

そんなに我々は提督から見て見目麗しく魅力的で嫁にしたい程なのか、と尋ねられた。

嫁は兎も角、見目麗しく魅力的だと答える。

皆、くねくねしながらもそれで引き下がってくれた。

やれやれだぜ。

代理提督は誰言うとなく、客員提督（ゲスト・アドミラル）と呼ばれるようになる。

ほほう、やるじゃないか。

そいでは、任せたぞいつ！

提督、行きますっ！

ポインターで駅舎まで送ってもらった。

地元民らしき人たちが観光客などがぼちぼち見える。

少しずつ復興しているようだ。

汽車に乗って、函館を離れた。

函館本線は気動車を使用する。

ゆっくりゆっくり走ってゆく。

車内に人はちらほらいる感じ。

ガタンゴトンと北上する車輛。

ガタンゴトンと揺れる旧國鐵。

森で少し停まり、それから更に北上してゆくと長万部（おしやまんべ）だ。

そこから特別急行に乗り換えだが、八雲で牛乳を飲むのいいな。

あそこのキオスクは今も健在だろうか？

よし、途中下車しよう。

大沼公園で何人も降りてゆく。

公園そばを汽車が走ってゆく。

美しい景色を見ながら、平和に思いを馳せた。

森が近くなってきた頃には海沿いを走る。

停車時間を利用し、海を眺めたり予定を確認した。

そしてまた汽車は走り始める。

汽車が八雲に停車した。

さて、ちよつと遊ぶか。

改札口を出ると、すぐそこにあるキオスクへ立ち寄った。

硝子瓶に入った牛乳と珈琲牛乳を一本ずつ購入する。

ここですぐに飲むぜよ。

ぐびぐびと飲むんだぜ。

喉に豊穡を注ぎ込んだ。

低温殺菌された牛の乳。

深みのあるバターやカラメル系の旨味が、じわりじわりと肉体に染み込んでゆく。

珈琲牛乳も混ぜ物が無く、直球勝負。

これ、代用珈琲じゃないぞ！

やるじゃないか。

よくこの値段で販売出来るものだと感心する。
ううむ。

こだわりが喉から胃の腑へと溶け込んでゆく。
旨し。

駅舎から少し歩いて、八雲町郷土資料館に入った。

剥製やらアイヌの衣装やら昔の生活情報について学んでゆく。

嗚呼、ミスリルカムイ。

親切にも、アイヌの恰好をした女の子が案内してくれる。

彼女は研究者のようだ。

ふむふむと見ていった。

艦娘ほいが気のせいだろう。

洋菓子店に寄り、日持ちしそうな菓子を購入する。

これこれ、こういうのがいいんだよ。

八雲から苫小牧までは、特別急行列車を使う。

この時間帯は鈍行が走らないのだ。

名品の牛乳と珈琲牛乳を再度購入し、ぐびぐび飲んだ。

ばりうまか！

まばらな乗客しかいない車内。

車内放送で数カ国語が流れる。

複数の国から人が来ているの？

二時間ほどして、苦小牧駅に着いた。

それにしても、腹が、減った。

ランチタイムは過ぎたが致し方ない。

おっ、回転寿司の店が見える。

あそこにしようか。

入ったら、客が割といた。

うちの厨房にいたような感じの店員が握っている。

全員マスクをしていたのでよくわからないが、旨ければよからうなのだ。

今日はマグロ解体ショーがあつたようで、稀少な部位をお得感ある値段でいただく。和服姿の美少女がずんばらりとマグロを斬り裂く姿はアニメーション作品みたいだ。

鳳翔に見えなくもないが、彼女がここにいる筈もない。

気のせいだろう。

今はネタに集中すべし。

気分はマグロ祭でわっしょいしょいだ。

マグロ盛り合わせを頼む。

単品の皿も魅力的である。

海の幸を堪能しよう。

玉子焼きの味が鳳翔ほいけれど、気のせいに違いない。
旨し。

食後、苫小牧駅に程近い船着き場に向かう。

乗船する船は大型だ。

乗り込んで、雑魚寝の場所にたどり着いた。

まばらにいる人々。

旅情が心に満ちてくる。

夜になって、船内食堂で味噌ラーメンをすすった。

まあまあかな。人はあまりいない。

このぼつんとした感じも悪くない。

船内に於いて『北嶺の拳』という映画を上映するというので、鑑賞することにした。
無料とは太っ腹だな。

よく知らない美男美女が出演するのは不安材料であるし、配られたチラシには美辞麗句ばかり書かれている。

監督脚本演出も知らない人ばかり。

安心出来る要素がどこにも見えぬ。

むう。

上映場所にはそこそこの人がいた。

上映が始まると、気分は急降下爆撃機よりも下方へ向かう。

台詞の棒読み、ぎこちない動き、支離滅裂な脚本、大根的役者群、顔だけ俳優、派手さだけが目立つ演出、監督がまとめきれしていない感じを随所で受けた。

とどめは安っぽい合成映像。

これはアカン。

上映の途中なのに、何人もの人が席を離れてゆく。

……うーん。

まあ、この。

一応最後まで観るが、この作品は続編が予定されているらしい。実に半端な終わり方をしていた。

えーと……続編は難しいんじゃないかな？

他に誰もいない空間から、私は即座に撤退する。

さーて、書きかけの小説の続きを書くとしよう。

朝が来た。

荷物を確認すると、御札が一枚真つ黒けになつて焦げていた。

……マジかよ。

周囲に怪しげな人物は、誰も見当たらないのだけど。

むう。

兎に角、無事に大阪へ着いた。

テレフォンカードを使って、函館鎮守府に連絡する。

最近の若い子でテレフォンカードを知らない子も増えているらしいが、そういえば出先でも使っている人を殆ど見かけないな。

次々にうちの面々が受話器に取り付いて話しかけてくるけれど、度数が途中で切れて

強制終了と相成った。

もう何枚かあるけど、用件は伝えたからよかろうて。

さあ、移動しよう。

駅舎近くで素うどんをすすり、散策する。

人がけっこう歩いていた。

こちらは東京よりも賑やかな感じがする。

さて、昼飯はどうしよう。

うまそうなにおいがした。

肉を焼くにおいだ。

いいな。肉を食べようか。

ホルモン焼きの店に行く。

龍驤や黒潮つぼい子たちがいた。

あれれ？

気のせいだな、うん、気のせいに違いない。

サービスの自家製キムチをいただきながらおいしい昼食を存分に味わった。

阪急百貨店うめだ本店へ行く。

地下で食べ物を買っていきこう。
混雑する中、買い物してゆく。

レトロな雰囲気のお店に立ち寄る。

ここはかき氷が絶品の店なのだ。

暑さのためもあるう、店内はかなり混雑していた。

職人気質のご主人が経営していて、このご時世なのに随分勉強した価格で踏ん張って
くれている。

ありがたいことだ。

氷宇治小豆プリンソフトを頼む。

濃いめの本物の宇治抹茶と北海道産の小豆を使った漬し餡がかかった氷の中に、ソフト
トクリームとプリンがひっそりと隠れた仕様。

一皿で四つの味が楽しめる贅沢。

ありがたや、ありがたや。

この四者の絶妙な相性のよさが、食べる者を天魔降伏へと導く。
旨し。

帰りにソフトクリームとアイス最中のどちらを買おうかと悩み、結局、アイス最中を

買つて途中で食べる。
旨し。

大型書店に寄ると、先日書き上げたばかりの小説が平積みになっていた。
仕事が早いなあ。

布面積の少ない未成年女子が溢れる表紙群の中では、かなり違う雰囲気醸し出している。

彼女たちにもう少しなにか着せてあげればいいのと思うが、市場の需要はこれが今
尚主流らしい。

少年から老年に至る男性客が何人も真剣に品選びをしていた。彼らの鼻息は荒い。
鬼気迫る程の気配さえある。

目が血走っている人もいた。

店内でもこれらの新作周辺がおそらくは激戦区。
オススメ作品には漏れなくポップがつけられていた。

いずれも人称や視点が不明なことなく、難読文字や滅多に見かけないような箴言（しんげん）を乱発することなく、魔法の説明で何頁も浪費することなく、地に足のついた文体で魅せる作者ばかりだ。

主人公は屑でも外道でもなく、ましてや小悪党でもない。

酒を無理強いすることなく、大量に呑む輩を讃えることなく、呑まない人を馬鹿にすることもない。

小説投稿サイトでは現在進行形で屑主人公や外道主人公などが幅をきかせ人気ランキング上位に食い込んだりしているものの、仮に出版されても続刊に至る作者は殆どいない。

無料だと読む読者と有料でも読む読者との間には、どうやら隔たりがあるようだ。

ちなみに表紙に薄着の女の子が多いのは、編集部が強く推すからという説もある。

私は勧められなかったが。

売れなかつたら一巻で終了なのだ。

それこそ、一巻の終わりであろう。

二巻で打ち切られることさえあるし、何巻も出せているのは腕っこきの証だ。

腕っこきを書いたからといって、その作品の理屈に納得するとは限らないが。

出来うるなら、独自の世界観を生み出す作者に生き残ってもらいたいものだ。

題名は、というと。

『私、婚約破棄されちゃったからお菓子屋さんになっちゃいます!』

『スライムテイマーは無敵への道をひたすら歩む』

『劣等生勇者は王都を追放されても、聖都に返り咲く』
『転生した悪役姫は異世界を満喫中』

『勇者のふりも楽とは言えねえ〜本当のオレは魔王様』

『お話の端役に転生しましたⅧ』

『おっさんは異世界スローライフの真っ最中』

『北の国に魔物のわく時』

『ねこねこオンラインⅩⅢ』

『本気のオレは異世界ハレムを構築する』

『シヨタ戦記Ⅹ〜アレクシア解放戦』

『異世界勇者しているオレ、またなんかやっちゃいましたか?』

『異世界食通紀行Ⅳ』

『そもそもアンタ、あたしを嫌っていたよね。なのに今更惚れたって、なにさ〜帝国国立
高校一年生冬』

『女体化したオレは、周りのみんなから告白される』

『ミサイルは異世界攻略のために』

『姫様は今宵も少年を慈しむ』

『提督のオレ様はまたもや配下から告白される』

『斬つて候々奥州七本槍篇』

『オレ、諸葛亮になりました参々孔明の嫁取り』

『迷宮ミストレスVII〜火焰迷宮対決篇』

『おっさんは超長距離射程弓兵』

『転生提督は東方無双〜ソロモン戦式』

『魔王様、異世界転生してモテモテになる』

異世界ものは相変わらず賑わっているみたいだ。

文芸批評家たちからしたら認めがたい風潮かもしれないけど、全否定ばかりではなにも進展しないんじゃないかな？

もしもこういった作品をきちんと批評出来ない人たちがばかりのさばっているなら、それこそ業界的に悲劇だな。

新陳代謝が出来ない業界は弱っていく一方なのに……ま、なるようにしかならないか。

私の作品にも、気合いの入ったポップがつけられていた。

よかことじゃ。

丸っこい手書きで書かれたポップの文章を熱心に読んでくれた、中学生らしき女の子が実際に買ってくれたのを直接見る。

こんなに嬉しいことはない。

もしかしたら、意外と売れているのかもしれない。

そう思ってしまった。

ずっと見ていると心臓に悪いので、二冊売れたのを見て撤収する。

次に買ってくれたのは妙齢の女性だった。

女性読者が多いというのも本当らしいな。

あつ、『ミスリルカムイ』の新刊もある。

何人もの女性が手に取って購入していた。

最新刊の『異星生活日記Ⅲ』と『ウルトラ警務隊の誇りと死闘』を購入する。

小腹が空いてきたため、駅ビルに程近い店でお好み焼きと加菜ごはんの組み合わせ的な定食を食べる。

場所は何気ない大衆食堂。

ほっとする雰囲気のお店だ。

人々が賑やかに食べる料理店。

豚コマのお好み焼きに、さっぱり系の加菜ごはんがよく合う。

一緒についてきた味噌汁と自家製漬け物も味わいを深くした。

旨し。

道を歩いていると、同年代くらいと思われる男性から声をかけられた。

「あんた、ようなんともないなあ。」

なんの話だ？

「はよ、なんとかした方がええで。」

そう言つて、男性は雑踏に消えた。

夜、大阪から那覇へ向かう船に乗る。

船内の料理店では中華料理特集が開催されていて、どことなくなんとなく李さんに似た料理人が大人気となっていた。

似ているけど、他人の空似だよなあ。

この中華粥は馴染みのある味だけど。

うーん、気のせいだろうなあ。

ま、旨ければよかろうなのだ。

雑魚寝していると、学生姿の女の子たちに見つめられているのを感じる。

はて？

朝食も船内で食べる。

この中華粥は絶品だ。

薬味が実に旨いぜよ。

やっぱり李さんじゃないのか？

怪しい。

あの手捌き。

……まあ、追及しないでおこう。

那覇港に無事着いた。

この風、この雰囲気。

これこそ琉球王国よ。

先ず是那覇空港へ乗合自動車で向かおう。

空港からは各地へ行けるな。

ゆいレールに乗るか。

那覇空港に到着。

A & Wに向かう。

地元民からはエンダーと呼ばれる、多店舗経営型ハンバーガー店だ。

第一牧志（まきし）公設市場にも行きたい。

あそこには大変おいしい珈琲店があるのだ。

少し早めの昼食にする。

沖繩はハンバーガー天国ゆえ、それを楽しむべし。

ならば、ここを先鋒とするのも悪くない。

いったただきまーす。

ルートビアをぐくぐく飲みながら、ハンバーガーをわしわし食べる。

旨し。

『おじやったもんせ』と墨痕（ぼっこん）鮮やかに記された幟（のぼり）を空港内の広場で見かける。

あれはなんだ？

あの幟に書かれた言葉は鹿児島言葉で『ようこそいらつしやいました』という意味だったと思っただが、なにかやっっているのか？

幟の近くに行くと、行列が見えた。

白熊の実演販売をしているとのこと、ここで食べることも出来るとか。

それは食べねばなるまいて。

並んだ。

間宮が見えた気もするけど、気のせいだろう。
白熊。

それは、果実をどっさり載せた練乳まみれのかき氷のことだ。
是非とも注文せねば！

プリン白熊が、目の前に来た。

おお。

直径一五センチメートル、高さ二五センチメートルの大型かき氷の、これぞ偉容。

昔風のカスタードプリンがぷるんと頂上に載っかっており、沢山の彩りよい果実に色鮮やかな寒天。

むう、これはたまらぬ。

練乳味なのにさっぱり系風味のミルクシロップが匏（かんな）削り製法で削られた氷に絡み、薄くふわふわした氷が食べる者を幾らでも食べられると錯覚させる程の旨みをもたらず。

これぞ、口福。

第一牧志公設市場で珈琲を堪能する。

旨い安い遅いの三拍子が揃った名店。

こういう店は、長続きして欲しいな。

二杯飲んだ。

よし、移動だ。

車に乗って、どこまでも。

沖縄では、かき氷のことを『ぜんざい』と呼ぶ。

そのぜんざいに使われる煮豆は本来メリケン産の金時豆が主流だけでも、現在は日本の穀倉地帯たる北の国のもを使っているという。

その金時豆を使った冷たい氷、ぜんざい。

黒糖と水だけでふつくらと煮るは金時豆。

何気ない昭和的食堂でぜんざいを食べる。

素朴で旨い。

日陰で潮風を浴びながら、店頭野外席でソーキそばと茄子味噌炒めを食べる。

とどめはぜんざいだ。

今日はコーヒーミルクぜんざいにしよう。

台湾産の本物の珈琲を使っているそう。

珈琲と金時豆が絶妙な絡み合いを見せ、口の中でやさしく溶け合うのだった。

沖縄本島から更に島へ向かう。

ぱらぱらと人が乗った船。

青い空。

青い海。

白い雲。

平和な場所が増えてゆき、復興が進んでいるのを肌で感じる。

哨戒任務中らしき、白い肌の水雷戦隊が近くの海上を駆けていった。

島に着いた。

さて、どこに行こうか。

船着き場の近くにある観光案内所へ行き、どことなくなるとなく巡洋艦ぼい子に話しかけてみた。

島には黒糖を作る工場や泡盛を作る蒸留所や農場があるそうので、移動手段として主に牛車を使っているという。

牛車による観光を勧められた。

水牛が牽く牛車に乗って、移動する。

のんびりと歩む車。

のんびりした人々。

いいなあ。

観光案内所に戻り、自転車を借りる。

よし、これで機動力が高まったぞい。

小さな農場に着いた。

飼われている牛と戯れる。

うしうし。

えらく人懐っこい。

うしうしうしうし。

ソフトクリームを食べる。

濃厚にして豊潤な香りだ。

旨し。

沖繩の天ぷらは衣が厚く、もちもちふわふわ。

『さしみや』と記された看板がある店では刺し身と天ぷらを売るといふ。

ふらふらと立ち寄った店で説明を受け、小腹を満たすことにした。

烏賊の刺し身と白身魚の天ぷらと生のオリオンビールをいただく。

昼酒はよくきくなあ。

食後は自転車を押しながら、徒歩で歩く。

夕陽を浴びて、一人海岸線を歩く。

昼と夜との境界線。

この雰囲気がいい。

『まるすかつふえ』という店を見つけた。

木々の中に埋もれるように建っている店。

いいじゃないか。

風が心地よい。

入ってみよう。

店内は少し暗い。

入ってみた。

若い女性が多い。

店員と常連かな？

全員私を見て、目を丸くしていた。

何故だ。

そんなに私は強面（こわもて）なのか？

まさか、そんなことはあるまい。

「ウル……馬鹿な、そんな筈はない！」

「また……また、あんなことが起きてしまうの!？」

「コウナツタラ、シナバモロトモ……。」

「やらせん、やらせはせんぞ！」

「やはり、地球破壊爆……。」

「ふふふ、おいしそう……。」

店内の人々は何故か混乱している。

困惑した。

私は彼女たちの知る誰かに似ているのか？

わからない。

わからないが、この事態を打破しなくてはならない。

「あの、食事をしたのですが……。」

ピタリ、と動きを止める人々。

ピカピカしたオモチャを持っている人までいた。

よほど混乱しているみたいだ。

「しよ、食事ですな、こ、こちらへどうぞ。」

「キヨ、キヨウハ、チーズアボカドハンバーガーガオスメダ、ウル……イ、イヤ、ナンデモナイ。」

チーズアボカドハンバーガーとバナナシエイクとぜんざいを注文する。

ハンバーガーはパテの大きさが選べるそうなので、一番大きいのにしてみました。

店内からの視線が私に集中している。

肌のえらく白い娘さんたちだな。

一挙一動を見つめられている感じだ。

お、ここは民宿も経営しているのか。

食べて旨かったら、聞いてみようか。

水槽の中では、細長く白い体表に黒のまだら模様を有した生き物が気持ちよさそうに泳いでいる。

目の辺りにレーダーみたいな角を持ち、それはくるくる回っていた。
可愛い。

知らない生き物だが、名前はなにかな？

「そいつは、エレキ……エレちゃんよ。」

ほう、可愛い名前だな。

キューキュー、と鳴いて可愛い。

頼んだものが来た。

デカイハンバーガーを載せた皿には、フレンチフライがどっさりとのっかっている。いいねえ。

さつそくいただいてみよう。

うむ、奥深い味わいだ。

肉肉肉って感じの味だ。

チーズは地元の農場で仕入れているという。

あの昼間に牛と戯れた農場らしい。

あそこにはまた行ってみよう。

フレンチフライも程よい感じに揚げられていて、つつい手が伸びる。

バナナシエイクは濃厚で、滋養たっぷりな感じだ。

島バナナを使っているという。

爽やかな旨みのぜんざいをしゃくしゃく食べながら、ここの民宿で宿泊出来るかどうか聞いてみる。

何故か動揺する人たち。

どうして動揺するのか？

よくわからないな。

『監視』とか『見張り』とかの妙な言葉が複数聞こえてきたけど、余所者だから気になるのは仕方ないのだろう。

取り敢えず、五泊で話がまとまる。

その後、エレちゃんを愛でた。

角がくるくる回って可愛いな。

明け方、不意に目覚める。

御札が一枚、黒く変色しぼろぼろになっていた。

……うわあ。

辺りには誰もいない。

心配さえ感じられない。

念のために部屋の外を見たり窓から外を見たりしたが、誰もいなかった。

ゆし豆腐。

豆乳ににがりを入れゆるく固めたものを、温かいうちにいただく沖縄独特の豆腐。

さとうきび畑の真ん中にある店でそれを食べることが出来る。
いいじゃないか。

朝早くからやっているというので、早めに出かけた。

現地に着くと、既に行列が出来ている。

私も並んだ。

風を感じる席に座って注文し、やがて頼んだものが手元に届く。

熱々の汁にふわりと浮かぶゆし豆腐。

ふりかけご飯。

自家製漬物。

出来立ての豆乳。

焼きたての玉子焼き。

おから。

汁には塩味がついているので、そのままどうぞと言われた。

どれ。

おお。

ふわふわの食感に濃厚な大豆の味と香り。

これ、正解。

夏の島。

青い空。

心地よい風。

道路を歩く。

移動屋台を見つけた。

人懐っこい山羊と戯れながら、おじいさんが販売せしハンバーガーを食べる。

素朴で旨い。

昔からやっているのだと言われた。

搾りたてのマンゴージュースを飲み飲み、山羊を撫でる。

濃厚なアイスもいただくが、この独特な味わいはこの山羊の乳を使っているからだそ

うな。

ゆし豆腐の朝食を食べ、牛や山羊やエレちゃんやと戯れ、ソフトクリームを食べ、昼はパン屋に寄ったりハンバーガーとぜんざいを食べたりして、夜はピッツェリアや商店街にある居酒屋に立ち寄って島の恵みをいただく。

ああ、実に旨い。

今日も心地よい朝を迎える。

海が聞こえてきた。

波の音が函館とは違い、それはまた興味深いことだ。
はてさて、今日はなにを食べようかな。

ハンバーグカレーもいいな。

今朝もゆし豆腐を食べに行こう。

荷物を点検する。

最後の御札が黒い粉状になって、役目を終えていた。
プレスレットが何故か、部屋の片隅に転がっている。
それは少し欠けていた。

昼過ぎ。

轟音が聞こえてきた。

なにか飛んでくるぞ。

あれはアントノフか？

輸送機のようなものである。

おや？

沢山の娘さんたちが、海の向こうからやって来る。輸送機から落下傘で降下してくる少女たちもいた。

おお、そうだ。

彼女たちと一緒に食事をするのもよさそうだ。

きつと、我が艦隊の娘たちも喜ぶことだろう。

私は手を振る。

彼女たちもぶんぶん手を振っていた。

今日もおいしい一日になるといいな。

CCCXXXI : ウルトラ警務隊・科捜隊・AMAT展

あの南の島での夏の休暇を終え、秋の涼しさが寒ささえ伴って北の国を覆いつつある今日この頃。

『ウルトラ警務隊・科捜隊・AMAT展』数多の脅威に立ち向かった勇敢な隊員たちの奮闘とその足跡』の巡回展が北海道立函館美術館で行われることになった。

最初副題は『勇敢な戦士たち』とする予定だったが、政治的配慮だか忖度（そんたく）で『勇敢な隊員たち』に変更されたそう。

どうも日本に戦士はいらないみたいだ。企業戦士という言い方はしている癖に。

我が鎮守府から、展覧会警備のために艦娘を何名か派遣している。

政府と大本営の肝煎りでこの展覧会が実現出来たこともあり、開催地に合わせてご当地艦娘が警備するのも話題になっていた。

なにがなんでも客を動員しようという気構えは、ひしひしと感じられる。私とメトロンは警備員姿の彼女たちに手を振り、展示品を觀賞してゆく。

「なにもかも皆懐かしい。」としみじみ言う彼の言葉を耳にしながら。

「嗚呼、よく殺したものだ。」との言葉は聞かなかったことにしよう。

およそ半世紀ほど昔。

地球が異星人や怪獣などの脅威に脅かされていた時代。

三つの防衛組織がそれらに敢然と立ち向かっていった。

防衛隊は四つか五つあったとする資料もあるが、公的肯定は一切なされていない。認められない組織はなにかしらの事情があったのか、或いは都合上のことなのか。

それとも、主張自体に誤りがあるのか。

どこかしらに事実誤認が存在するのか。

忖度されたのか。

よくわからない。

最初の組織は科捜隊。

パリに本部があったという。

怪異を科学的に捜査・調査する隊として設立された。

超常現象に対する捜査力がけっこう高かったらしい。

彼らは友好的な宇宙戦士の力を借り、超科学兵器で敵を次々に打ち倒した。

ウルトラ警務隊設立後に基地は解体され、現在は跡地に痕跡が少々残る程度である。

続いてはウルトラ警務隊。

防衛隊の中では一番知名度の高い組織だ。

地球防衛軍の日本支部的立ち位置だった。

科捜隊隊員の一人が名前を変えてこの警務隊に在籍していたことは、あまり知られていない。

科捜隊基地に所属していた人員が複数警務隊基地で働くことになったらしい。

その結果、熟練者が比較的揃う好条件で彼らは業務を開始することが出来た。

隊員は最も熾烈苛烈な試練を課せられた。

メトロイ……もといメトロンによると、当時様々な宇宙人の間では地球侵略が一種の娯楽として大流行していたそう。

トロフィー・ハンターみたいな感覚か？

はた迷惑な話だ。

数々の侵略者たちに狙われた地球を守るため、科捜隊よりも遥かに強力な超兵器を複数用いて猛烈に戦った。

酔狂な宇宙戦士や仮面戦士や宇宙人の力を時折借りながら。

宇宙船の破壊率が防衛隊の中でも特に目覚ましく、宇宙戦士の手助けを見事になし遂げたとと言えるだろう。

神戸港での活躍は、今でも語り種（ぐさ）だ。

ペダン星人の送り込んだスーパーロボットの動きを超電磁兵器によって止めた活躍。それが無ければ、神戸の被害は甚大だったものと思われる。

サンテレビジョンに保管されている貴重な記録映像が最新技術によって鮮明化され、迫力あるそれを来場者に提供することは今回の展示会に於ける目玉のひとつである。

ウルトラホーク一号が発進する様子を捉えた貴重な映像も同時に公開されていて、興奮する来場者は少なくない。

獅子奮迅の活躍を見せたウルトラ警務隊にも、やがて最期の時が訪れる。

史上最大の侵略と呼ばれる決戦に於いて、侵入した敵宇宙人たちによって世界中の基地は殆どの機能を破壊されたのだ。

だが、マスクヴァ基地が開発せしN2地雷を搭載した無人のマグマライザーが敵本拠

地に特攻し見事に撃滅した。

N2地雷は近年でも東方ロシアによる対深海棲艦戦闘でも何度か用いられ、それは一定の効果をもたらしていると当局は発表してはばからない。

某国との紛争でも数発使われたらしいが、詳細は一切わかっていない。

鉄底海峡解放戦では四大鎮守府が決戦時の露払いとしてN2爆雷を数発用い、多数の敵を海の藻屑にしたという。

とどめはAMAT。

エイリアン・モンスター・アタック・チームの略称だ。

地球防衛軍が史上最大の侵略によって壊滅的打撃を受けた後の世界。

疑心暗鬼が渦巻く世界情勢の中、新たな侵略者群を迎撃するための防衛隊が結成された。

AMATは諸外国からの外的圧力によって前二者よりも弱体化した組織であり（日本のウルトラ警務隊が活躍し過ぎたとも言える）。外敵に対処すべく一旦は結束した地球人だったが、残念ながらこの頃から分裂の傾向を示していたらしい、兵器の性能も隊員の錬度も前二者に比べ幾分かは劣っていたが、それでも勇猛果敢に彼らは戦った。

伊達と酔狂からなる宇宙人の助けを借りながら。

彼らは攻防一体型の宇宙ステーション基地（ウルトラ警務隊でもV3と称する宇宙ステーションがあつたけれど、これはそれ以上の性能だったらしい）まで造り上げたが、残念ながら宇宙生物に食べられてしまい、中にいた人間は隊長も含めて全員その時に死亡したものとみられている。

基地に敵宇宙人が何度も何度も侵入し、人員が度々殺害された結果、AMATは戦力的にどんどん弱体化していった。

それでも隊員たちはなんとかやりくりしながら果敢に戦った。

ある時、敵宇宙人の捨て身の特攻によつて海底にあつたAMATの本拠地は完全に破壊されてしまった。

その報復として敵宇宙人に対する攻撃は熾烈を極め、見事に撃滅したのだった。これによつてAMATは継戦能力を失い、その活動は停止せざるを得なかつた。

三つの防衛隊が解散した後、それに代わる組織は作られなくなつた。

表向き、侵略者はいなくなつたことにされたからである。

予算の関係から防衛隊を構成するための人員育成が出来ない状況となり、また、楽観論が横行したことも新規防衛隊設立に否定的な動きを加速させた。

ウルトラ警務隊の頃にあつた世界各国の協調姿勢は、冷戦や内戦や独裁などから発生

する分断によってバラバラになった。

そして、宇宙人や秘密結社などに単独で立ち向かう孤高の戦士たちの時代が到来した。

組織戦でなく、個人戦の。

ATACという自警団めいた防衛隊もあつたそうだが、それについての詳しい情報は残されていない。

多彩な光線技を使い分ける宇宙戦士がいたとかいないとかいう未確認情報も散見されるけれど、彼が本当に存在したかどうかは今もって不明だ。

エースキラーと呼ばれる残忍無比な宇宙賞金稼ぎを倒したのが、その宇宙戦士ではないかと推測されている。

副官の残虐なバラバを含め、何名ものおそるべき手練れを揃えた傭兵隊のごとき組織は戦闘慣れたエースキラーに率いられたが、徒党を組んだ有志の戦士たちによって全滅したとの話だ。

三つの防衛隊はいずれも政府によって重要事項が秘匿（ひとく）された今尚謎多き組織であり、今回の展覧会は報道された記事や数少ない証言及び資料から浮かび上がってくる彼らを改めて取り上げたものだ。

政府による国民の不满そらしの一策かもしれないが、こうした展覧会が開催にこぎ着けたことは実に運がよかったと思う。

存命の関係者の口はいずれも堅く、僅かに得られた複数の情報と映像資料などから今回の展覧会は補強されている。

いつか、彼らの全貌が明らかにされることはあるのだろうか？

展覧会ではサロメ星人が造り上げた偽の宇宙戦士用巨大宇宙ブーメランの実物を屋外展示し、今も錆一つ無いそれは非常に目立つ品となっていた。

函館鎮守府で日常的に用いられている複製品的ポインタ一の一号と二号も、同時に屋外展示されている。

まるで本物のようだ、大変好評だ。

いつも運転と整備をしてくれる少女がウルトラ警務隊の扮装でにつこり微笑む姿は、特に殿方の心を驚掴みにするようだ。

無邪気に私に抱きつくのはやめて欲しいと思う。

何名もの艦娘が強い視線をこちらに向けていた。

後で全員をナデナデしてあげないとな。

おじさんは困ってしまうのであります。

AMATで使われていたアマツトビハイクルの復元車輛は屋内展示されていて、そこらも人々の関心を集めていた。

ウルトラ警務隊や科捜隊やAMATの隊員服を模した意匠の衣装の女性たちが、展覧会に華を添えている。

彼女たちは非常に美しく、妖精のようだった。

人ではないような感じもあり、不思議な雰囲気を出してさえいる。

来場者たちとの記念撮影も盛況で、並び直している人までいた。

その他の展示品の目玉は、三つの基地の精密復元模型だ。

かなり作り込まれていて、迫力ある雰囲気を出していた。

売店では充実した品揃えで来場者の財布を狙った商品が幾つも並んでおり、それを買
い求めようとする人たちでずいぶん賑わっている。

よかことじゃ。

宇宙人の実物大模型もある。

私は隣のメトロロンに言った。

「貴方の模型まであるね。」

「あれは友人のものだよ。」

「違うの？」

「違うよ。」

彼によると、違いがあるのは地球人だけの話でないとか。ほらこの辺りが違うだろうと言われてもよくわからない。宇宙ブーメランで真つ二つにされた彼の友人の話聞く。

そして、彼は言った。

「私は悪い宇宙人じゃないからねえ。」

「どの口でそんなことを言うのかな。」

ケムール、バルタン、ガッツ、ナツクル。

他にも沢山の宇宙人の模型がずらりと存在する。

様々な宇宙人の模型が沈黙したまま並んでいた。

剥製でなくてよかつたと思う。

本物っぽいのか、ほんの少し動いているように見える星人もいるが、おそらく気のせいだろう。

過去に於いて超科学力を誇っていた人類が現在深海棲艦の脅威に対抗しきれない状況は、実に皮肉なことだ。

まあ、やるしかないか。

と思った、その時。

腕に装着した試製ビデオシーバーが震え、蓋を開けると大淀が映し出されていた。

「提督、そろそろ鎮守府へお戻りになる時間です。」

「わかりました。」

さあ帰ろう。

我が基地へ。

人類を守るための防波堤へ。

かつての防波堤の痕跡たちへ一礼し、現在の防波堤の一部である私たちは鎮守府へと帰還した。

青く美しい

光をたたえ

人は愚かしくも

愛にあふれている……

それ以外には

取るに足らぬ

この星を

私は誰にも渡さない

私はメトロン

本名は内緒である

こう見えて

地球を狙う

悪の侵略星人だ

CCCXXXII：赤い服の男

………イタタ。

ん？

なんだ？

ここはどこだ？

暗いし、霧が濃過ぎて、周りが全然見えない。

俺は……俺は誰なんだ？

頭がずきずきしやがる。

なにかの機械をいじって……敵対しているアイツと丁々発止の掛け合いをして……
そして相棒と……。

相棒？

相棒って誰だ？

くっ、思い出せん。

水晶……火星……メタル……なんなんだ、記憶がごちゃごちゃしてやがる。

「おう、おっさん。金を出しな。」

霧の中から、ガラの悪いガキどもがそろそろ現れた。

鉄パイプやナイフなどを手にしている。

「おーおーおー、いきがっっちゃってまあ。」

「シスターに頼まれて寄付金でも集めているのかい、坊やたち。」

「そうさ、オレたちに愛の寄付金を寄越しな。それと、坊や扱いするんじゃねえ！」

「おーおー、悪かったねえ。じゃあ、君たちは少年聖歌隊かな？」

「なんだと！ おい、やっちまえ！」

「「アラホラサッサー！」」

数回やり合ったら、ガキどもは霧の中へ逃げ出した。

今時の若いもんは根性が無いねえ。

「いたの！」

ん？

霧の中から、今度は女の子が現れたぞ。

「もう！ プロデューサー！ 美希から目を離したらダメなの！」

おわっ！

誰だ、この金髪娘は？

いきなり抱きついてきたぞ。

えらく馴れ馴れしいな。

俺は……この娘とどういう関係なんだ？

ん？

もう一人、霧の中からやって来た。

「美希！」

「あつ、千早さん。見つけたよ、プロデューサー。」

「ダメじゃないですか、プロデューサー。私たちから離れて、こんな暗い場所でふらふら歩き回るだなんて。」

「あ、ああ。その、お嬢さんたち。ちよつと聞いてもいいかな？」

「お嬢さん、なんてよそよそしい呼び方はプロデューサーらしくないわ。いつものあの軽薄さはどうしたの？」

「どうしたんですか、プロデューサー。変ですよ。いつものあのへらへらした軽妙さはどうされたんですか？」

「あー、いやー。どうやらオレは頭を打ったらしく、自分自身の名前を忘れちゃってね。いやー、面目ない。」

ガハハ、と笑つてみる。

クスクス笑つた彼女たちは、同時にオレに言った。

「プロデューサーの名前は、ジョー・ギリアン。前々から、そう決まっているじゃないですか。」

「ヒューツ。ここは乙女の花園だねえ。提督さんもモテモテで大変だ、こりや。」

「いえいえ、ギリアンさんもプロデューサーとして可愛いお嬢さんたちと日々一緒に過ごされているじゃないですか。」

「思春期の女の子たちのお守りは大変さ。個人的にはもつとバーンと出るところが出て、引つ込むところがキュツとしている子が好みだねえ。」

「確かに、思春期の女の子は扱いが難しいですね。おじさんからしたらよくわからないことだらけですし。」

『ケロケロキッチン〜北の国編壺』で二つの事務所に所属するアイドルたちと艦娘の鳳翔間宮とが対決するという、そんな企画が大本営に承認された。

なんだかなあ。

我が鎮守府は一体どこへ向かっているのだろうか？

765プロ所属の美少女アイドルたちを引き連れ、金髪で葉巻を啣（くわ）えた赤い服のプロデューサーが函館にやって来た。

筋肉の付き具合から、相当ヤるものと思われる。

数名の艦娘は、あのキュツと引き締まった臀部（でんぶ）に関心を持ったようだ。体にびったりな服からうかがえる腹筋に加え、あれは相当鍛えている証拠らしい。

おそらく、プロデューサーは大変過酷な職業なのだろう。

現在、アイドルたちはうちの艦娘たちと交流の真つ最中。

カエルの着ぐるみを身にまもっている子がいたり、男前な感じの子がいたりする。

765プロは人材が多様な模様。

私は彼と共に鎮守府をぶらぶら歩いているという寸法だ。ところで、彼は意外と瞳がキラキラして見える。

「プロデューサーさんの目にはウソが無いようですね。」

そう言ってみた。

「そおかい？ オレはよくこの目で女の子を誤魔化すんだ。」
「またまた。」

「男前なのがツライところさ。」

「プロデューサーさんは、以前どこかで見かけたような気がするのですけど……。」
「そおかい。よくクラーク・ゲートルに似ているって言われるんだ。」

食堂に着いた。

なにか飲むか。

「ギリアンさん、なにか飲まれますか？」

「アイスマルクをダブルで。」

「では私もそれで。」

軽空母の大鷹（たいよう）から硝子のコップを二つ受け取り、ギリアン氏と共に白濁した液体をごくごく飲む。

嗚呼、牛乳が旨い。

北の国万歳。

低温殺菌牛乳万歳。

ん？

島風が勢いよく近づいてきて、ギリアンさんに話しかけた。

「聞いたよ、おじさん。一〇〇メートルを五秒フラットで走れるんだって？」

あ、対外モードの島風のようにだ。

喋り方がいつもと異なっている。

とつても女の子っぽい。

いや、対決モードかもしれない。

それとも、対戦モードなのかも。

横須賀の島風だったりして。

……まさかな。

「ああ、そうだよ。実際、金メダルだって夢じゃないぜ。」

「私とかけっこしようよ。」

「この俺とかけっこかい？」

外は吹雪いている。

時折、風が窓を叩いてさえた。

こんな日はおこたで丸くなりたいたいものだ。

「ははーん、おじさん、島風に負けるのがこわいんだね。」

「こわかないさ。俺にこわいもんなんてなんにも無いぜ。」

「よし、勝負だよ！」

「おーし、負けんぞ！」

そして、赤いプロデューサーと最速駆逐艦は吹雪の中を駆け出していった。風がどんどん強くなっている。

甘酒でも作っておくでしょう。

勝負は僅差（きんさ）で島風の勝ち。

もしかしたら、ギリアン氏が勝ちを譲ってくれたのかもしれない。

そうだとしたら、非常に出来た人だ。

氏は引率してきたアイドルたちからかなりいじられている。

なんだか楽しそうだな。

甘酒も飲んでもらえてなによりである。

生姜と黒糖とザラメを入れた特別仕様。

とくと味わうがいいさ。

対決当日。

アイドルたちの休憩室に割り振られた場。

チャラ男っぽいマネージャーが、赤い服の男に話を持ちかける。

「今回の勝ちほうちに譲ってよ。今後のことを考えたら、765プロさんにも悪い話じゃないと思うよ。」

歪んだ笑み。

崩れた笑み。

チャラ男は八百長することになんの問題も感じていないようだ。

業界大手なのに、姑息な手を使うことに疑問すらないみたいだ。

「あいにくと俺は、男の誘惑には乗らない主義でね。」

「……あんたら、痛い目に遇うぜ。」

「おやおや、俺たちを脅す気かい。そいつあ、よくないことだ。やめときな。」

「弱小プロダクションごときがなにを！」

「おーつと。へへへ。こいつを見てみる。これらの写真はなにかな？ あんた、立場を

利用してかなりやらかしたようだね。」

「き、貴様……いつの間になんか!?!」

「へへへ。これらをばらまかれると困るのは誰かな?」

「くっ、殺せ!」

「あんたなんぞに殺す価値なんてないさ。美人にベッドでそう言われたなら、話は別だがね。なーに、こちらとしては簡単な要求しかしないさ。清く正しく美しく正々堂々と戦いましょう、ってそれだけのことしか要求しない。アイドルたちは学生だし、そういう風にするのが俺たち大人の役割じゃないかね?」

「なん……だと……?」

「あんたも昔幼稚園で習っただろう? あの純粹だった頃を思い出しな。それとも、この棒を突っ込んで思い出せるようにしてやろうか?」

「い、いや、思い出せた。あ、ああ、今思い出せたよ。だから、そ、その棒を突っ込まないでくれ。」

「なあ。」

「ん?」

「ヴラド・ツエペシュって知っているか?」

「なんで串刺し公の名前を今出したんだ?」

「へへへ。」

「笑うな!」

「そうカツカするなよ。アイスマルクをダブルで飲めば、少しはよくなるぜ。それともママのおっぱいの方がいいのか?」

「誰のせいでこうなったと……まあいい、ところで、そ、その写真なんだが……。」

「ん? これか? いるのかい?」

「ネガの速やかな引き渡しをお願いすると共に、ネット上での流出は無しにしてもらいたい。」

「ああ、かまわないぜ。」

赤い服の男はニヤリと笑って、チャラ男の耳元でなにやら囁いた。

途端。

崩れ落ちるは若い男。

やらかしまくった男。

彼は気絶したようだ。

料理対決が始まった。

アイドルたち側が四人一組。

事務所が二つだから計八人。

函館からは鳳翔間宮。

三つ巴の戦いが今ここに開幕する。

赤い服の男がやさしい目付きで見守る中、アイドルたちはすべての力を振り絞るべく駆け出した。

きつと勝ってみせるぞ、と全員が闘志を激しく燃やして。

C C C X X X III : クリスマス決戦く戦う者の掟

作戦遂行のためには

目の前の味方を時には倒すのも

仁義なき戦いの鉄則

肥大化する愛情が

戦士の心を暴走させる

愛とはなんだ

恋とはなんだ

硝煙の彼方に

理想がかすむ

提督の思惑が見えなくなってきた

『戦う者の掟』

h. Not even justice, I hope to get to truth

眞実の灯りは見えるか

艦娘。

それは、戦乙女。

深海棲艦との戦いへ果敢にその身を投じる存在。

中でも駆逐艦と呼ばれる艦種は、最も勇敢だと言われることが多々ある。どんな相手にでも、おそれを知らぬかのように立ち向かってゆくからだ。あらゆる局面に対し、その武装を多様に換装しては千変万化に対応する。

それが、駆逐艦。

艦娘の基幹戦力。

デストロイヤー。

遠征

初詣

演習

セッツブーン

護衛

ヴァレンタイン

演習

遠征

ひな祭り

支援艦隊

大型作戦

運動会

演習

夏祭り

大型作戦

水泳大会

演習

秋祭り

芋煮会

演習

遠征

護衛

大型作戦

などなど

この一年を通し、数々の熾烈な戦いに於いて戦果をあげてきた駆逐艦たち。彼女たちの今回の目的は、司令官または司令或いは提督と夜を過ごすこと。一緒にいられる。

ただ、それだけでいい。

孫子曰く、『心を攻めるが上策』であると。

彼の心の扉を開かねばならない。

開くためには逃げ道を塞がなければならない。
すべてはそれからだ。

そして迎えるは耶蘇教の祭の前日。

旧き敵方の祝祭日の前夜祭開催日。

様々な神を寛容に受け入れてきた多神教系日本人（嗚呼、女神転生）の多くは、欧米人的神様系行事を祭の部分だけ引っこ抜いて楽しんでる。

なに、この行事だって元をたどれば……まあそれはいい。

ここ函館鎮守府に於いて、駆逐艦たちの戦意は最高潮に達していた。

時刻は夕刻。

駆逐艦たちの集結場所ではかがり火が焚かれ、大いに盛り上がっている。

吹きすさぶ風に舞う雪もなんのその、意気軒昂な彼女たちは突撃準備に余念がない。

四大鎮守府では既に戦いの火蓋が切って落とされており、先日横須賀に着任した新人提督も当たり前のように巻き込まれているという。

正々堂々と戦いに臨んだ駆逐艦群は慢心した他の艦種を圧倒的に駆逐し、現在も優勢に戦局を進めている。

遠征護衛先鋒など常になにかしらの戦陣に加わっている駆逐艦は、いわばサツマニアな精兵。

直情径行の傾向が見られなくもない彼女たちは自分自身の心に対し、比較的忠実に行動する節が見られる。

そして、一旦こうと決めたら真っ直ぐ、どこまでも真っ直ぐ突き進む武辺の傾向があった。

目標達成のための習練は日々怠らず、実戦経験も豊富。時には絶望的な戦場から無事に生還している。

そんな彼女たちを侮ることは、戦闘する前から戦いに負けることを意味した。

函館に集結した数多の駆逐艦たちは念のために分厚い鎧通しの目釘を湿し、自己の装備を再確認し始めた。

夜の戦いは駆逐艦たちの本領。

夜戦上等の他艦種の娘もいるが、それはさておき。

これからの時間は駆逐艦にとって勝機。

自分たちの上司に堂々と近づける好機。

気分が高揚してゆく。

もうなにもこわくない。

ぎらぎらと輝く複数の瞳が一点を見つめる。

あそこだ。

あそこが、はらいそだ。

まるで討ち入りでもするような武装の駆逐艦群は、最初から他艦種とは気迫がまるで違った。

試合と死合いの違い、とでも言おうか。

彼女たちの武装は以下の通り。

戦鎧（せんつい、メイスのこと）+2

棒手裏剣数本（痺れ薬を先端に塗布）

パイルバンカー（電磁式、六発）

ローラーダッシュ（不整地仕様）

ターンプック

ロケットブースター

鎖帷子（くさりかたびら）+2

防弾チョッキ+3

勝負下着（日本製、ちよつと大胆）

媚薬（上級悪魔の保証付き）

ワセリン

指輪型光線銃（麻痺光線仕様、メトロン提供）

鉢金

手甲

脚甲

小型の楯+2（リアクティブアーマー採用型）

指錠数個

閃光弾

煙幕弾

まきびし（手作り）

チャフ（アルミニウムの手作り）

催涙弾（手作り）

投網

真田紐

捕縛紐

鎖分銅

電探

スタンガン改式

鉄扇

などなど

識別用の赤いバンダナを右肩に巻き、駆逐艦たちは出陣する。
熱き思いを胸に秘め。

敵の血潮で濡れた肩

幼い戦鬼と人の言う

函館の街に大戦期の艦艇が蘇る

きじひき高原、アイアンボトムサウンドに

無敵と謳われた最速駆逐艦

情無用、命無用の鉄騎兵

我らの命、三〇億両ナリ

最も高価な人型戦闘艦艇

島風、危険に向かうが本能か

戦いが、始まった。

ロケットブースターを吹かしながら、ローラーダッシュで提督のいる厨房へ向かう駆逐艦群。

迎撃に向かってきた戦闘機や爆撃機に対し、駆逐艦たちは投網を投げる。

急旋回でなんとか避ける機体もあったが、捕まる機体も多数あった。

屋内戦に於いて本来の性能を發揮出来ない航空機隊の生き残りは、やがて全機撤退する。

駆逐艦は常に六名パーティかそれに近い形で動いており、強敵に対しては日頃の敬意もなんのその、戦鎚や鎖分銅を遠慮なく振り回し倒していった。

包囲殲滅戦を効率よくこなしてゆく。

その姿は正にジャイアントキリング。

うっぶん晴らしではない。

たぶん。

装甲の薄さを装備と人数で補い、格上の軽巡洋艦や重巡洋艦を素早く撃破してゆく。

慣れない屋内での航空機運用で奮闘する軽空母正規空母を、駆逐艦たちは接近戦で果断に討ち果たしていった。

他の艦種も参戦しているが、駆逐艦の猛攻に耐えきれずにどんどん脱落してゆく。

戦鎚や鉄扇や十手や鉄刀などが欠けたり曲がったりして使えなくなろうと、激戦の末に徒手空拳になろうと、幼い荒武者たちはひたすらに目的地を目指した。

小破はやがて中破となり、それでも彼女たちは突き進む。

そこに希望があると信じて。

吹き飛ぶ甲板

千切れる艀装

燃える装甲板

踏みしめる廊下から

動乱の鼓動が伝わってくる

提督のいる厨房は未だ遠く

進撃は続く

運命は駆逐艦たちを戦場へといざなう

動く要塞の戦艦が現れた。

攻撃力と装甲の厚さと継戦能力の高さに於いては、艦娘の艦種中最高峰の彼女たち。
だが、ここは陸上。

しかも屋内。

厚い装甲があっても、大砲は使えない。

鎖分銅の直撃を幾度も喰らい、麻痺光線を何発も喰らい、六名がかりの一撃離脱戦法に歴戦の戦艦さえもが翻弄されてゆく。

素早い駆逐艦たちの動きに対し、充分以上に対応出来る戦艦は少ない。

勇猛果敢な戦艦はその拳で駆逐艦を止めようとするも、事前に対策済みの彼女たちにはことごとく技を封じられる。

戦場の女王たる豪勇な戦乙女たちが、呆気なく次々に大破していった。

一部の戦艦が激しい大立ち回りで孤軍奮闘するものの、入れ替わり立ち替わりしてゆく駆逐艦たちの波状攻撃にさらされ、やがて各個撃破されてゆく。

事前に入念な訓練をしていた者とそうでない者との差が、ここで明白となった。

猛将たる軍船が獅子奮迅の激闘の末にようやく倒れ、駆逐艦たちは愁眉を開く。

あと少し。

あとちよつとで目的地だ。

最後の砦（とりで）は銀色の鎧をまとった青い服の女騎士。

金髪碧眼の美女。

エクスカリバーを構えた最強の戦鬼。

どことなくなんとなく、眼鏡っ子な第一秘書艦に似ている。
気迫はまるで異なるが。

まともに戦えば、駆逐艦全員が血の海に沈むことであろう。

油断も隙もない。

難攻不落の要塞。

今までの戦法はすべて通用しないだろう。

そう思わせる迫力が女騎士には存在する。

「ここは通しません。通りたいなら、私を倒してから行きなさい。」

全身これ覇気。

輝けるオーラが彼女を包んでいる。

だが、しかし。

駆逐艦たちに緊迫感はまるで無い。

ぼろぼろの彼女たちは陽気だった。

「やっぱり……。」

「……だよね？」

「大……あんな……。」

「……淀さん……普段のストレ……。」

なにかこそそこそ囁きあつてさえいる。

「そちらからこないのなら、こちらからいきます！」

女騎士はエクスカリバーを大上段に構え、殺さない程度に駆逐艦全員を吹き飛ばそうとした。

気合いは充分。

戦意も豊か。

真つ正面からやりあえば、負けることなど万にひとつもなし。

だが、油断はしない。

彼女は気を練つてゆく。

周辺の大気がうねりをあげて、剣にまわりついてゆく。

この一撃で決める！

彼女が技を繰り出そうとした、その瞬間。

間髪入れず、駆逐艦たちの愛らしい唇から戦いの矢が放たれた。

それは褒め言葉。

べたべたの褒め言葉。

善意から放たれる気遣いの発露。

駆逐艦たちは彼女を誉め殺しにしようと、その口舌を最大限に活用する。

心遣いに充ちた、ふんわりしつとりしたかすていらの如き言霊を用いて。

罵倒系駆逐艦も、口下手系駆逐艦も、内気系駆逐艦も、武闘派駆逐艦も、こぞつて思いやりの言葉を紡いでゆく。

心を侵食する糸のごとくに。

数分後。

赤い顔の女剣士は膝を屈した。

「くっ、殺せ。」

そう言った彼女を置き去りにしつつ、駆逐艦たちは駆けてゆく。

愛と欲望を行動の燃料にして。

厨房。

女たちの最終目標地点。

そう、彼女たちは到着したのだ。

中破か大破に近い状態の駆逐艦たちは、実に晴れ晴れしい表情をしていた。

無傷には程遠い様子の彼女たちだが、どの娘も誇らしげな顔でそこにいる。

ようやくここまで来た。

今宵は甘いにおいに満ちている。

そこは殆ど男たちの戦場だった。

女性料理人や菓子職人もいるが。

弩級クリスマスケーキの姿が見える。

竜田揚げや豚カツを揚げるにおいも漂ってきた。

おいしい時間は、すぐそこに近づいてきている。

「ああ、丁度いいところへ。」

満面の笑みを浮かべ、少女たちの提督が現れた。

それだけで、駆逐艦たちはここまで戦ってきた甲斐があつたのだと、なにかもがと

ろけてゆく。

オイル漏れしている娘さえいた。

息の荒い少女が少なからずいる。

そろそろなにかが危険領域に突入しようとしていた。

いろいろなモノが見えてさえいる。

提督は素知らぬ顔をして、彼女たちに微笑みかけた。

「baumクーヘンが先程焼き上がったんですよ。」

神戸に本社を置くドイツ菓子の店舗から購入した、baumクーヘン製造機の運用が始

まっていたのだ。

街のお菓子屋さんでも本格的なバウムクーヘンが作れるようにと、心血を注いで開発された品である。

不味いことなどあろう筈がない。

老練なる達人のマイスターがお墨付きを与えた機械である故に。

その導入は嚴重に秘匿されていたので、情報通の彼女たちでさえなにも知らなかった。

「さあ、どうぞ。」

そして彼女たちは提督の手から聖なる焼きたてバウムクーヘンの断片を受け取り、やさしさに包まれながら甘い菓子を堪能するのだった。

勝負はこれからよ、と思いながら。

肝心の勝者が多すぎることに、駆逐艦たちはその時点でまだ気づいていなかった。

血みどろの同士討ちが回避されたのは、提督が食後にお風呂でも一緒に行きますかと提案したからである。

そうして、夕食が始まった。

駆逐艦たちはでれでれな顔をしつつ、提督のそばで旨いご馳走を食べまくった。

他艦種の娘たちだが、来年こそは、とウルトラの星に雪辱戦を誓うのであった。

この夜、一皮剥けた提督または司令官或いは司令が何人も発生したという。
 ちなみに函館の提督はいつも通りの朝を迎え、雪かきに邁進したと伝わる。

雪が溶ければなんになる？

雪が溶けたら春になる

たわいない謎かけに秘められた

平和と愛への祈り

戦いを経ずして勝ち取れる提督はいないものか

艦娘たちは己の胸に問いつつも

寒風吹きすさぶ戦場へと向かう

h.
 Not even justice, I hope to get to trust

真実の灯りは見えるか

CCCXXXIV : インスマス基地と白い娘たち

マサチューセッツ州にある古びた港町、インスマス。

周囲を湿地帯と無数の小川で取り囲まれている土地。

私はその沿岸にある小さな基地で、フリート・ガールと呼ばれる武装娘たちを取りまとめている。

強力な武器をたずさえ、海上もしくは海中を縦横無尽に駆け巡り、敵対者を殲滅する勇敢な女戦士。

それが、フリート・ガールだ。

この基地に所属して武装娘から成る戦闘集団はインスマス隊と呼ばれ、私は連邦政府から隊長を拝命している。

沿岸警備隊とどう違うの、といった意見は全面的に却下する。

目的が違うのだよ、目的が。

我々は、深きものども（ディーブ・ワズ）もしくはその近縁種と戦うために組織さ

れているのだから。

ここインスマスは一九二七年から二八年にかけての冬、FBI（連邦捜査局）やNSA（国家安全保障局）や海軍の連中がなにやら探索だか調査だかをしたらしい。

当時は悪名高き禁酒法の時代。

こつそりと悪いことをする連中も多かったのだろう。

ひっそりと悪いことを行うには好条件の立地だしな。

シチリアマフィアだか地元系ギャングだかがこの地に根城を築いていて、それへの大規模な搜索と摘発と逮捕が行われたみたいだ。

そういう話を聞いている。

根城は主に海辺の地域に築かれていたそうで、そこら一带はダイナマイトでボカんと爆破された。

派手な銃撃は夜を通して行われ、一晩中断続的に発砲音が聞こえたと取材された地元民は証言している。

連邦政府の役人たちは地元住民やマスメディアに対し、密造酒の製造販売に関わっていた反社会的勢力への大がかりな取り締まりを行ったと説明した。

マサチューセッツの州軍まで投入された大規模作戦は、大量の逮捕者を生み出した。その後の囚人たちの処分が非公開だったこともあって、執拗極まるマスメディアは熱烈に騒ぎ立てたものの、政府は一貫して沈黙し続けた。

不正確と誇張、煽情主義と偏執に満ち溢れた彼らの容赦なき追及は、幾人ものタブロイド紙記者の行方不明をもって終結する。

一説には、各紙編集長宅を黒服の男たちが訪れたからやむ無く自粛したとの流言さえ飛び交った。

全米の注目を浴びたインスマスは一時期マスメディアのしぶとい（自粛）たちや物見遊山の観光客によってしつちやかめつちやかになつたものの、数年も経てば噂は段々と風化していった。

数年前にサンフランシスコで起きた暴動が動乱になつて更には内戦へと至つたらしいけれども、郊外にある欧州様式の華麗な廃ホテルを中心に城塞都市が出来て王国となつたとかいふ荒唐無稽（こうとうむけい）な噂まで聞こえてくる。

ちなみに廃ホテルは様変わりして、美しい往時の偉容を取り戻したとか。

サマコナ爺さんは所要で西海岸方面へ行つた時、その話を聞いたそうなの。

爺さんは好奇心を掻き立てられ、わざわざ城塞都市まで行ったのだとか。ようやるもんだ。

●イズ ●ーラ ●ドみたいじゃったと言っていたが、本当にあるとはなあ。

王様らしき人物とにこやかに肩を組んで写真に写っている姿は、誠に我が国の国民性をあらわしている気がする。

近場に於ける私自身の交流関係について言うと、例えば南に隣接するロードアイランド州にあるニューポート基地の隊長と私は親しくしている。

彼はでっぷりと太った男で、ファッツィと部下たちから呼ばれ慕われている。

ファッツィとはマサチューセッツ州アーカムのハイスクールで知り合い、現在でも腐れ縁が継続している。

彼はアーカム・ファッツとも呼ばれ、フリート・ガールにその大きな太鼓腹をしばしば触られているとか。

あのお腹は非常に触り心地がいいからなあ。
ぶるんぶるんとした弾力が実にたまらない。

インスマスはマノメット川の河口に位置しており、その昔、米英戦争の前まではほとんど市と言つてもいい規模だったそうだ。

しかしながら、ボストン&メイン鉄道はそもそも通つていなかったし、ローリーから延びていた支線もとつくの前に廃止されていた。

釣りやロブスター漁以外はろくな商いも出来ないのです、この辺りに住んでいる人々は同じマサチューセッツ州のニューベリーポートやアーカム、さもなければ隣町のイプスウィッチで働かざるを得ない。

私自身の出身地はアーカムで、ハイスクールも同地だった。

インスマスは基地の隊長になつてから初めて訪れた場所だ。

アーカムのミスカトニック大学卒業後にロードアイランド州のプロヴィデンスで働いていたら、例の深きものどもが合衆国東西双方の沿岸を攻撃し始めた報道に出くわした。

そして奴らは、国外に出る飛行機や戦闘機や爆撃機や偵察機などをことごとく撃墜した。

非常事態宣言がなされた我が国では国内全域に渡つて暴動が多発し、どこぞのカルト教団が州軍を圧倒したとの噂も流れた。

ダ……なんだつたかな？

南部は今でも酷いようで、こじれた状況が現在進行形だ。

迎撃に出たステーツの軍用艦艇が深きものどもまたはその近縁種によつて次々と轟沈してゆく中、フリート・ガールと呼ばれる武装娘たちが顕現し、奴らをどんどん駆逐していった。

だが、人間の中にはどこまでも愚かしい連中がけつこうな割合で存在している。

彼らは彼ら自身の価値観が絶対に正しいとの見解に固執し（その見解がなにによつてもたらされたかを考えることすらなく）、是正する気もなく、深きものどもなどに対抗するための存在への誹謗中傷を馬鹿馬鹿しい程に繰り返した。

異教徒狩りを嬉々として行ふ輩の如くに。

あんな連中、厳しく規制したらいいのに。

どこぞの大富豪が彼女たちに対する誹謗中傷を止めないものだから、それは一時おぞましいまでに悪化した。

彼女たちを、悪魔の手先と呼ぶだなんて！

人間でない癖に人間のふりをしてしていると、キリスト教的に認められないとか、とにかく言いたい放題だ。

それを鵜呑みにする人間が沢山出てきた。

感化された人間のなんと情けないことか。

まるで魔女狩りである。

何故、彼らは考えようとしなのだろうか？

結局、その大富豪は国家侮辱罪を含む複数の罪状で逮捕されて、現在も裁判中だ。

本来我々は歩調を合わせるべきなのに、幾つもの悪意によつて酷く分断されてしまった。

なんとかしたいものだ。

あくまでも噂だが、問題を起こした暴言の大富豪の収集品の中には一五世紀にラテン語で翻訳されたとある写本があるという。

その写本を読んだが故に、その大富豪はおかしくなったのだと主張する人間が多数存在する。

実際はどうだかわからないが、金持ちが妙なモノを集めるのは事実だと思う。

我が国は、今も混迷を続けている。

太平洋方面に向けて何回も敢行された大規模作戦は失敗続きだし、大西洋方面に展開された大型作戦も同様である。

フリート・ガールを擁（よう）する基地でも彼女たちへの待遇は千差万別で、他者へ

の劣悪な環境を是とする人間が複数存在することは実に恥ずかしく愚かなことだ。

彼女たちを使い捨てにするなど、後の歴史に於ける我々の汚点になるだろう。

人的被害を最小限に食い止めることが、我が国の軍隊に於ける最大の美点ではないのか？

迫害を加えられた一部のフリート・ガールは、カナダや南米に逃亡したと聞く。

浅ましくもそれらを含む複数の事実を隠蔽（いんぺい）したとして、幾人もの指揮官が解任されたり逮捕されたり行方不明になったりした。

我々は、未だに一致団結とは程遠い。

差別的な大金持ちが自重しない状況をなんとかしなくてはならない。

あんな奴がもしも大統領にでもなってしまったら、それこそ悪夢だ。

まあ、米国民がそんなとてつもなく馬鹿な選択をする筈もないか。

この地について、少しばかり語ってみよう。

インスマスの最大の事業所は金の精錬所だ。

経営者のマーシユ家はインスマスに於ける一番の資産家で、昔は莫大な程に儲けていたそうな。

今はそこそこの儲けのようだが、それでも金持ちには違いない。

マーシユ家が悪魔と取り引きして儲けただけの、埠頭（ふとう）の近くで悪魔崇拜やら人身御供があつただの、古い噂話は複数残されている。

トマス爺さんはその手の噂話に詳しく、彼の経営するダイナースで南米産の珈琲を飲みつつ話を聞くことは存外興味深い。

インスマスの岸から一マイル以上離れたところに『悪魔の暗礁』と呼ばれる海域があり、それはフリート・ガールたちにとつての目印にもなっている。

そこは海岸の沖にある黒々とした暗礁で、島とは呼べないほどのものだ。

おびただしい数の悪魔の群れが暗礁の上にいたのを目撃したと、過去に複数の人間が証言している。

辺りを這いまわったり、てっぺん近くにある洞窟かなにかを出入りしているとのことだ。

マーシユ家の人間がそこをうろうろしていたとの話も聞かれる。

ほんまかいな。

私自身がそのことを試してみようとしたら、部下たちにくっぴどく叱られてしまった。

一九世紀末にはとんでもない疫病が流行り、インスマスの住民の半数以上があゝの世に召されたという。

暴動やありとあらゆる禍々しい行為が繰り広げられ、すっかり酷い場所になってしまったと言われる。

現地に住んでいるとそんな感じも受けませんが、相次ぐ噂が事実を酷く改竄していったのだろう。

たぶん。

私が小さな頃、祖母がよく話をしてくれた。

古い神話や物語の数々を。

彼女は美しきユダヤ系ロシア人移民で、ニューヨークの服飾業界で働くキャリアウーマンであった。

別れた祖父同様に祖母は小説を愛し、また彼女は女手ひとつで父を育て上げ、その明るく活発な気質はその後の我が一族に大きな影響を及ぼした。

父は母親と共に移り住んだオハイオ州でのびのびと育ち、やがて仕事で訪れたアーカムにて私の母になる少女と巡り会った。

そうして、私が産まれた。

そして祖母を含む我が家の面々は、その街に住むこととなった。

我が家のご先祖様は酷い魔女狩りが行われたマサチューセッツ州セイラムの出身で、魔女の嫌疑を受けそうになったから他の同様な人々と共にアーカムへ移住したのとこのだ。

他には、同州のダンウィッチやロードアイランド州のプロヴィデンスに移住した人々もいると聞く。

インスマスを出入りするには、徒歩か自転車か自家用車かひどくおんぼろでくすんだ灰色の乗合自動車のどれかを選択することになる。

ニューベリーポート、インスマス、アーカムの間をこの乗合自動車はゆったりと走るのだ。

実際、インスマスへ行くバスはこれしかなく、インスマス基地への着任時にもアーカムからこのおんぼろ自動車に渋々乗って現地に辿り着いた。

乗り心地が悪いわ、とろいわ、やたら揺れるわの三重苦を味わった。

しかも一日に一本。

やつとられんわい。

着任後に得た初めての休みの日に私はファッティのツテで日本製中古車を購入しよ

うとし（程々の品がそこそこの値段で手に入る筈だった）、紆余曲折の挙げ句に何故か廃車となった通学バスを改造することとなった。

私の車輛購入計画を知った部下たちの陳情に屈した形であり、技術力の高い娘が主導したことによってスクラップが公道を走れる存在と化したのだった。

オリーブドラブに塗ろうとの意見は却下した。

これは軍用車輛じゃないのだ。

黄色くたつていいじゃないか。

街へ買い出しに行く時はこの車を使っているが、たまにインスマス在住の老人も乗せている。

彼らは車を持っていないのだ。

アーカムのショッピングモールへ繰り出す時、この車は重宝している。

インスマスには宿泊施設としてモーターもキリスト教青年会施設（Y・M・C・A.）もなく、ギルマン・ハウスと呼ばれる古びたホテルが一軒あるのみだ。

そこは乗合自動車の発着所前にあり、ホテル前には広場があつて町の中心部を形成している。

中心部では十数軒の店舗が営業中で、その内の一軒は食料雑貨店だ。

他にはそれなりのレストラン、ドラッグストア、魚の卸売業者の事務所などが軒を連ねている。

広場の東端の川が流れている辺りには、この町唯一の企業たるマーシユ精錬所の事務所が鎮座している。

インスマスに住むごく一部の住民は、風土病かもしくはなにかの皮膚病らしきものによつて名状しがたき容貌を有している。

まるで幻想世界の住人だ。

その大半は老人で、一種の遺伝病ではないかとの説もある。

その特異な容貌の人々は普段人目に触れないような生活をしており、日常的に彼らを見かけることは殆どない。

そうした彼らを指して、侮蔑的に『インスマス・ルック』と呼ぶ輩もいるようだ。

嘆かわしい。

確かに彼らを見かけるとどうにも奇妙な心情にとらわれがちだが、だからといって差別することは人としてよろしくないと考ええる。

我々は、もつと開かれた考えを持たなくてはならないからだ。

魚や蛙じみた容貌がなんだというのだ。

少しばかりこわいが、それがどうした。名状しがたき感情がなんだというのだ。

人間が恐竜から進化した存在ならば、先祖返りだってあるだろうに。

リザードマンや竜人などの電脳遊戯的意匠に慣れ親しんだ現代人ならば、案外彼らを受け入れやすい気がしないでもない。

休憩時間にチーズ・クラッカーと生姜入りウエハースを食べる度、いろんなことを私は考える。

食事は大切だ。

インスマス基地での調理担当者は何故か私になることが多く、部下たちの腕前を鍛えるべく日々奮闘している。

干しタラと潰し馬鈴薯を卵で練り合わせて揚げたコッド・フィッシュ・ケイク。

ロブスターを使った各種料理。

日本人から教えてもらった、コロツケとカラアゲとジャパニーズ・ネイビー・カレー。

二枚貝（クラム）を使ったクリームスープのニューイングランド・クラムチャウダー。郷土料理を基本とする食生活。

これが大事なのだ。

これらを充実すべく、私はこれからも頑張る所存である。メシを旨く食べずして、戦うことなぞ出来よう筈もない。

インスマスは一時荒廃の危機に瀕した。

疫病で人口が大量に減ったからである。

その頃、ポーランド人やポルトガル人がやって来てこの地の南部に住み着いた。中国人の美しい少女たちがどこからともなく連れてこられて地元民と結婚した。たまにハツとするような美人に出会おうが、何故か部下から怒られる破目になる。別に色目を使った訳でもないのに。

解せぬ。

インスマスには名物爺さんがいて、酔っぱらうと昔の与太話を延々してくれる。そのアレン翁は時に言う。

ダゴン、アシユトレト、ベリアル、ベルゼブブといった異教の神々の名を出す。

『数えたり、数えたり、量りたり、分かたれたり』と唱える。

彼の話をも二度聞いたが、なんともぞつとする内容ではあった。

私の部下たちはいずれも肌がずいぶん白い。

白人と呼ばれる我々よりも尚白い。

彼女たちは人間と異なる存在なのだから、そうした肌色も当然なのだろう。

一見すると人間にしか見えないが。

近場の基地の彼女たちは大抵白人みたいに見えるのだが、なにか法則性でもあるのだろうか？

よくわからないな。

勇猛果敢なフリート・ガールは、どこか茶目つ気さえある。

彼女たちと仕事を始めて以来、敵駆逐艦以外はこの辺りに出なくなつたようにさえ感じられる。

少なくとも、人の似姿をしたモノは出現していないようだ。

だが、油断してはならない。

敵が戦力を温存しているのかもしれないからな。

これからも用心しながら、周辺の基地と連携してゆきたい。

こちらを時折じつと見つめる地元民の視線は気になるが、田舎はそんなものだろう。

魚や蛙ぼい瞳で見つめられると、なんだか落ち着かない気持ちにさえなってくるが。

仕事が終わったら、シャトー・フオウスフラームの葡萄酒を開けよう。

馴染みのギリシャ料理店でムサカやタコのオリーブ揚げなどと一緒に。

うん、それがいい。

酒を持ち込める店だし、店主は海産物の扱いに長けた料理上手だしな。

うちの吞兵衛どもに気づかれぬように、そつと呑むことにするべし。

さて、仕事仕事。

CCCXXV : 蔭洲升へ行こう

東北のとある地方にある小さな漁村の蔭洲升（いんすます）。

その詳細な調査を極秘に行うよう、大本営から指示された。

秘密裡に送り込まれた調査員がことごとく帰ってこないとか。

おい、ちよつと待て。

下手したら死ぬやん。

東北本線を使って途中で地方交通線に乗り継ぎ、壇宇市（だんういつち）の次の赤牟（あーかむ）で下車して蔭洲升行き路線バスに乗ればいいようだ。

すったもんだの末、一緒に行くのは島風と吹雪と戦艦棲姫と翔鶴の四名に決まった。

いずれも継戦能力が高いので、不透明且つ困難な状況でも柔軟に対応出来るだろう。

「五航戦ですか、そうですか。そういう考えなんですか。」と、加賀教官が耳元で囁いて

きたのには参ったけど。

「あそこでのグーは痛恨の極みでした。」と追撃で囁くのもやめて欲しいで御座る。

先日導入したバウムクーヘン製造機を全力稼働させて、他の面々をなだめまくった。ええいつ、我輩の作った素朴なプディングも是非とも食べてみやがれで御座います。まったくもう。

函館駅から青森駅に向かつて青函連絡船が進んでゆく。

艦娘の護衛付きで。

手を振る乗客たち。

それにこたえる娘たち。

和やかな雰囲気で、本州最北の県庁所在地に到着した。

青森駅から新青森駅まで奥羽本線を走る汽車にちよこつと乗り、本数は少ないものちやんと走っている東北新幹線に乗車した。

勿論、新青森駅構内で買物するのは忘れない。

八戸の特別純米酒を見つめる六つの瞳。

ツمامミも買ったから、後はわかるだろ？

東北新幹線の通常座席は幅が狭い。

狭軌だから致し方ないのだけれど。

秋田新幹線や山形新幹線も同様だ。

やれやれ、車内販売も無いときた。

盛岡駅に到着し、我々は乗り換える。

今度は東北本線に乗るぜよ。

乗り場が少しわかりにくい。

バター餅はどうしようかな？

仙台駅に到着。

乗り換え時間がまだあるので、少し駅舎近くを散策しよう。

商店街をぶらぶら歩き、老舗の料理店で中華そばを食べた。

仙台駅から乗り換え、王都（きんぐすぼーと）行きの汽車に乗る。

蔭洲升へ直通で行ける汽車は無いのだ。

旧國鐵では赤牟からの延伸計画もあったようだが、採算の試算結果が芳（かんば）しくなかったために断念されたとか。

ことごとと汽車は走る。

壇宇市の町並みを眺めながら、なんとはなしに郷愁じみたモノを感じた。

まるで懐かしの……いやいや、そんなことはない。

ない筈だ。

部下たちは全員文庫本を読んでいて、その内の一名は『少年騎士教育役』を読んでいる。

布の覆いをかぶせてあったが、挿絵でわかった。

熱心に読むのはいいけど、他の人には内容がわからないようにして欲しい。

他は『シグルイ』、『エロイカより愛をこめて』、『辺境警備』と多彩だ。

私は音楽端末を靴から取り出し、劇伴音楽を聴くことにした。

M | 3、11、16、81、71と勇壮な音曲が耳元に流れる。

赤牟はそれなりの町並みで、駅舎前にはバス停もある。

停留所の時刻表を見たら、なんと一日一本しか蔭洲升行きの路線バスは走っていない。
い。

しかも、車はとつくの前に出発した後だ。

なんてこった。

タクシーでも走っていないかと周囲を見渡すが、なにも見えない。

無人駅には人っ子一人見えず、どうしようかと思つた矢先。

「ねえ、あんたたち、どこへ行くつもり？ もしかして、蔭洲升？」

個人配達業らしき、ワンボックスに乗つた女性に声をかけられた。

これぞ渡りに船、か。

勿論乗せてもらつた。

彼女の名は秦野珠美さん。

とても活発そうな女性だ。

珠美さんは軽やかに●イ●ースを運転し、とところどころヒビの入つたアスファルトを削るように走り抜けてゆく。

我々が蔭洲升へ観光に向かっていることを話すと、ずいぶんと物好きねえと呆れられた。

蔭洲升はそんなになにも無いところなのか、それとも……。

昭和二年から三年にかけて、この漁村に対して憲兵隊と陸軍と海軍との混成部隊による大がかりな調査が入ったという。

海岸沿いにあつたおんぼろの廃屋群はダイナマイトでボカンと破壊され、逮捕者が続出したらしい。

駆逐艦までもがこの調査に加わり、地上を砲撃したり、海底を雷撃したりと派手に攻撃したという。

伝染病の防疫を行うとして、彼らは怪しげな建物を次々打ち壊していった。

民間人が軍隊に逆らうなど思いもよらない時代だからこそか、抵抗は殆ど無かつたそうな。

海神の陀権（だごん）様を祀る陀権神社も危ないところだったが、地元民の大半が団結して陳情したためになんとか破壊をまぬがれる。

一時は豊かになったものの徐々に没落してゆき、今では寒村となった漁村。

それが歴史から見た蔭洲升かと思われる。
日本の歴史的にはおかしくない気がする。
一体、なにをどう探せというのだろうか？

蔭洲升が見えてきた。

ひなびた漁村の風景。

車から降りて、辺りを見回す。

「わー、懐かしいなあ。」

？

今、吹雪はなんと言った？

「私、以前この蔭洲升に来たことがあるんですよ、艦艇時代に。」

「へえ。」

「ほう。」

「ホウ。」

「大砲を撃つたり、魚雷を放つたりして活躍したんですよ、私。」

「へえ。」

「ほう。」

「ホウ。」

ガタガタする道はやがて広場へと繋がり、我々は無事に蔭洲升中心部へ辿り着いた。広場にあるのは錆びたバス停と郵便も扱うちっちゃな食料雑貨店、ひなびた飲食店。それと数軒の店が昭和のにおいをふんだんにまきながらなんとか存続している感じ。朽ち果てた店舗が幾つもあり、往時の輝きを取り戻せそうな気配は感じられないな。周囲を見渡したら、年配の人たちがじつとこつちを見ている。

なんとも言えない、魚っぽい顔立ちの人たちに見られている。

異相、と言え方がいいのだろうか？

なにかしら遺伝的なものかもな。

部下たちが落ち着かない感じだ。

さっさと移動しよう。

蔭洲升唯一の飲食店たる黒い牡牛亭に立ち寄ると、店内がなんだか生ぐさい。

何故だか名状しがたき雰囲気もあり、食欲がどんどん減退してゆく。

これでは食事をする気にもなれない。

店内には数人の地元民らしき人々がいて、こちらをじろじろと無遠慮に見ながらもそ

もそと食事をしていた。

彼らもどことなく魚っぽい。

不衛生な様子にうんざりする。

そそくさと店を出た。

「ちよつとこれじゃ、食べたくなくなつてくるわね。」

「然り、然り、然り。」

「ヲ腹ガ減リマシタ。ナニカ食べタイ。」

戦艦棲姫と島風と翔鶴がぼやいた。

「コンビニエンスストアも見当たらないですし、バス停近くにあつた食料雑貨店へ行つてみませんか？」

吹雪が提案する。

皆が頷いた。

では、そうしようか。

幸い、その食料雑貨店ではそこそこの食料品を置いていて、我々は食品の入手に成功したのだつた。

店員はよそから通っているそうで、彼の口は潤滑油でも塗つてあるかのごとく軽快に言葉を紡いだ。

「いや、まあ、ここの人たちはなんだか陰気な感じがするし、この店へ買物に来るのはここら辺でも比較的若い人たちだけなんすよ。てゆうか、お客さんたち、ずいぶん酔狂ですわ。こんなとこまで観光に来るだなんて。」

「ええ、まあ。」

「見るとこなんて殆ど無いすよ、ここは。せいぜい、郷土資料館と陀権神社くらいすかね。」

「観光客は来ないんですか？」

「あー、前になんか目付きの鋭い人とか明らかに他所の人って感じの人が何人か来ましたけど、じきに見えなくなりましたよ。よほどつまらなかつたんでしようね。アルバイトとしては楽なんですけど、時々なんか妙に気持ち悪くなるんすよ、ここは。」

廃業しているのではないかと思えそうな、ボロい藤宮旅館に投宿する。

我々以外に宿泊する者はなく、なんとなく陰気な雰囲気や屋内に漂っていた。

やる気の無さそうな受付の人に話を振ってみるも、宿に泊まる人間はあまりいないらしい。

役場関係の人がたまさか泊まるそうなので、それで致し方なく開けているそうなの。

彼自身はなんだか沈鬱な表情をしていて、どうにもこうにも会話が続かない。

宿泊台帳を見せてもらいたかったが、身分を明かす訳にもいかないので出来ない。歯がゆい限りだ。

探偵だと詐称する訳にもいかないし、探偵だからといってなんでも見せてはもらえないだろう。

推理小説みたいにはいかんわな。

調査に手詰まり感がある。

にっちもさっちもいかない。

郷土資料館へ向かう。

ここでは蔭洲升の歴史を知ることが出来るからだ。

建物は洋館で、多少の補修は加えているみたいだ。

入館料は無料だった。

受付に人は存在せず。

藤宮伊右衛門という御仁が蔭洲升を繁栄に導いた人物のようで、彼については詳細な資料と記述が用意されていた。

静まりかえった屋内。

足音しか聞こえない。

軍部などによる調査については、一切の記述が見当たらなかった。

伊右衛門が愛用したというドイツ製の写真機やそれで撮影した写真を眺める。かなりの腕前だったようだ。

ふらふら歩いている内、陀権神社に到着。

海底から来た神様の陀権様を祀るという。

色褪せた奉納絵にはタコのようなナニカが描かれていて、なんとも言えない雰囲気醸し出していた。

がらんとした境内は名状しがたい雰囲気醸し出していて、早くここから出たい気持ちになつてくる。

薄気味悪い場所だったので、早々に退散した。

村外れでキャンプしている人たちがいた。

天幕と大型のキャンピングカーがあつた。

今流行りのゆるキ……まあ、それはいい。

五、六人ほどの白人がぶらぶらしている。あちらからこちらへ軽く話しかけてきた。

彼らは英国の諜報員だといきなり明かしてきたので、大変驚いた。我々が鎮守府の者と知っている。

彼らはニヤリとしてそう言った。

代表はやり手っぽい女性だ。

「英国諜報部？」

「ええ、そう。」

「ブリティッシュ・ジョークですか？」

「残念だけど、冗談じゃないのよね。」

「はあ。」

歴戦っぽい男性が代表の女性を指して言った。

「彼女は、殺人担当のヴィクトリア。」

「失礼。今なんとおっしゃいました？」

「殺人担当、なんだよ。」

「私、殺しが得意なの。」

「それもブリティッシュ・ジョーク？」

「そうだったら、とても面白いわね。」

殺しの許可証を得ているってことか？

荒事が得意な破壊工員的な人員を送り込むなんて、なにを考えているんだ英国は？
シヴェリア鉄道經由かもしれないが、そこまでして蔭洲升に調べる価値があるのか？
よくわからないな。

「本国はね、既に戦後を見据えた戦略で動いているの。私たちだけじゃない。かなりの規模の人員を投入しているのよ、とつくの前にね。あなた方日本人のように、場当たり且つ適当に動いたりしないわ。」

「そりゃ、どうも。」

「ここは非常に危険な村よ。即刻すべて破壊すべきだと考えるわ。」

なにを言っているんだ？

言っていることが滅茶苦茶だ。

「それは幾らなんでも無茶苦茶です。」

「あなたはまるで危機感が無いわね。」

「すぐ破壊活動に移りそうな方々とは違いますよ。」

「ふん、言うじゃない。我々は人類の危機に立ち向かおうとしているの。」

「人類の危機？」

「旧支配者よ。」

「おとぎ話ですか？」

「違う。あなた方が言うところのシンカイセイカンよりもずっと危険な存在よ。」

「はあ。」

結局、我々はなんら合意に達することなく別れた。

地元民への聞き取り調査は難しいようだ。

珠美さん及び食料雑貨店の店員の話に郷土資料館の情報を加え、考察してゆくか。

うーん。

情報が少な過ぎる。

翌日。

英国人ご一行は天幕を畳んで、どこかへ移動したようだ。

影も形も見当たらない。

彼らのいた跡は、何故か腐った魚のようなにおいがした。

黒い斑点がそこかしこにある。

血痕は全然見当たらなかった。

三日蔭洲升に滞在したが、収穫は殆ど無し。

素泊まりだったので、食事は食料雑貨店で仕入れたものを食べることにした。魚くさい村をてくてく歩いて、調査員たちの足跡を辿ろうと試みるが失敗する。

ちつとも上手くいかない。

地球の危機がうんたらと演説した彼女の姿はどこにも見えない。

彼女の仲間たちも。

配達していた珠美さんに出会ったので聞いてみるが、我々以外に外部の人間は見かけないと言われた。

変だな。

夜間移動したのか？

今夜もエニグマ暗号機で報告する。

送信ばかりする作業だ。

島風に呼ばれ、窓の外を見た。

何故だか、人が多く外に出ている。

なんぞこれ？

地元の祭でもあるのか？

こんなに遅い時間なのに。

ざわざわとざわめきが聞こえてくる。

陰鬱な気配が強まってきた。

もう寝るか。

いそいそと蒲団を敷く彼女たちに苦笑いする。

熾烈なじゃんけんをしている彼女たちには悪いが、眠たくて仕方がない。

気づいたら、朝だった。

晴天。

抜けるような青空。

蔭洲升もなんとなく明るく見える。

素人で調べられることはとにかくやってみた。

よくわからない、がその答だ。

調査員たちの足取りは全然掴めなかった。

天幕を引き払った後の英国人たちの行方もわからない。

そもそも、探偵でも密偵でも斥候でもない私に期待する方が間違っていると思う。

私たちなりに調べた事項に関する詳細な報告は、既に暗号機で送信済みだ。

一応、手書きの報告書も用意した。

役に立つとは到底思えないけれど。

さて、帰ろうか。

赤牟まで送ってもらえるように、珠美さんと交渉する。

タクシーは蔭洲升まで来てくれないそうだし、仮に分乗して赤牟まで行くとしたら相当な金額になってしまう。

車を借りて、ここまで来た方がよかつたかもしれない。

そうして、わからない尽くしの調査は終了した。

喉に小骨が引っかかるがごときの違和感を多数含みながら。

赤牟辺りで、なにか旨いものを食べたいものだ。

それにしても、腹が減った。

中華だ。

中華がいい。

焼き餃子に炒飯に、雲吞麵。

嗚呼、早く食べたいものだ。

皆の目も野獣になっている。

いあ、いあ、なんとか、と軽やかに歌う珠美さんの運転で蔭洲升を離れてゆく。
空は突き抜けるように青く輝いていた。

CCCXXXVI : ひみつのユリキュアショー

放送開始から既に一〇年を遥かにこえているユリキュアシリーズ。

『明日のナージャ』という、隠れた傑作の後番組として放映されている長寿番組だ。

初雪と望月がその作品のことを、とても熱く語っていた。

私にはよくわからないが、どんな作品であれ、愛されることは大事だと思う。

愛され続けているからこそ、ユリキュアは現在も新作が作られ続けていると考える。

その最新作の『ひみつのユリキュア』の舞台がここ函館で開催される運びとなった。

華麗なる戦闘はもとより、日常描写が際立つて素晴らしいという目の肥えた艦娘た

ちが絶賛している作品だ。

怪盗ムチャクチャ党と熾烈な戦いを繰り広げる、愉快痛快な漢女たちの物語である。

毎週日曜日にユリキュアを欠かさず見ている初雪や望月も、きつと喜ぶことだろう。

破裏拳流を使う主役のちせが特に人気という。

彼女のキレのある動きを再現出来ると、女の子たちも喜ぶものと思われる。

夢を与え、幸せを与える作品になってこそ真のユリキュアなのだろうから。

そう、そうなる……筈であった。

猛吹雪が道南で停滞するまでは。

シヴェリア方面から南下してきた冬将軍が猛威を振るい、尚且つ一向に動こうとはしない。

オーマイガー。

そのお陰で海は時化（しけ）しており、鎮守府からまともに出撃出来ない程だ。

暴風が吹きすさび、荒れ模様の海。

時に高波まで発生している。

いやはや。

函館アリーナで行われる予定のショーは機材や裏方や司会のお姉さんや敵役のヒトなどが揃っているものの、肝心たる戦隊の中の人たちがこちらに来ていない。

青函連絡船は動かない。

飛行機は勿論飛ばない。

明日開催する予定なのに、どうするんだ？

で。

我が鎮守府に所属する艦娘で中の人を補いたいとする考え方が、先程ショーの関係者から提示された。

場所は講堂。

時間は午前。

朝食後のひととき。

すし詰め艦娘たちはそれを知った途端、次々に自分が演じたいと立候補し始めた。

阿鼻叫喚の喧騒が起こり、彼女たちはそれぞれの熱い思いを言葉に託してゆく。

マイクを使つては青年の主張の如く、戦乙女たちは言葉を紡(つむ)いでいく。

彼女たちにこんな情熱があつただなんて驚きだ。

いずれも譲らぬ感じである。

取捨のつかない事態となる。

どうすんの、これ。

取り敢えず放置か。

ぎりぎりじゃーん。

それはさておき、雪搔き、雪搔き。
積もった雪をはらわねばならない。

小声でエーデルヴァイスを歌いながら作業していたら、歌詞が違ふと離れた場所にいた筈の妙高先生から指摘された。

えっ？

今は違ふの？

その後、とべない深海魚を白い娘たちと合唱しながら雪搔きに邁進した。

矢継ぎ早の立候補と侃々諤々（かんかんがくがく）の議論と激しい選抜の末、出演者が昼前には確定した。

さつそく、函館アリーナへ向かうは我々。

……え、私も行くの？

ジャージ姿で舞台の練習をする艦娘たち。

外はまだ少し吹雪いているが、アリーナの中は非常にあつい。

全員、やたらと気合が入っている。

何故、私はここにいるのだろうか？

ここにいて欲しいと艦娘及び舞台関係者から乞われ、致し方なくここにいた。厨房にて急いで作ったおにぎりと玉子焼きとたこさんウインナーと鶏の唐揚げとワカメと椎茸のおみおつけと浅漬けを引つ提げ、おさんどんな業務に従事する。

気分は給食のおばちゃんだ。

……ま、まあ、みんなが喜んでくれるからいつか。

作ったものはすべて関係者全員の腹におさまり、幸いにも好評を得た。

競技……もとい、ユリキュアの舞台が行われるのはメインアリーナ。

因みに函館アリーナの固定観客席数は二二〇だが、既に全席完売している。

床荷重五トン／㎡に耐える弾性床システムの採用により、駆逐艦たちの激しい動きにも充分耐えることが出来ていた。

立候補しただけあって、それぞれの役になりきった彼女たちの動きは見事だ。

破裏拳流の殺陣（たて）もキレがよく、まるで長年修練を積んだかに見える。

舞台狭しと跳び跳ねてゆく艦娘たちが、どんどん魔法少女の如く見えてきた。

「ユリキュア・フォーメーション！」

一糸乱れぬ動きで必殺技を放とうとする彼女たち。

そして、それは確実になされた。

うむ、これなら大丈夫だろうな。

敵役のヒトの動きもよく、艦娘の動きにも十分対応出来ている。

流星はスタントマン。

やるなあ。

白い彼女は艦娘の反射神経に完全に対応しており、なんらかの武術に長けているであろうことがうかがえた。

私にも役を演じて欲しいとの要望が来たけれども、それはきっぱり断る。

彼女たちの情熱にはとてもかなわない。

それにあんな動きなど、出来やしない。

皆がなんだかがっかりしていたけれども、その辺は理解して欲しい。

私のせいでケチがついたら、悔やんでも悔やみきれないじゃないか。

あと、不思議なことには、演出にどうしてだか初雪と望月が自然に交ざっていた。

……ま、まあ、熱心なのはよいことかな。

稽古は続く。

「失敗しても大丈夫！ やり直せばいいんだよ、何度でも！」

「私の大切な友達を笑わないで！」

「寄り道！ 脇道！ 回り道！ しかしそれらもすべて道！」

熱い言葉が次々に語られてゆく。

嗚呼、きっとこの舞台は成功するだろう。

だって、みんながこんなに光っているのだから。

外を眺めると、空に晴れ間が少し見え始めていた。

CCCXXVII：チルソナイトハチマルハチ

地球は狙われている

昔も

今も

これからも

『ソレ』にとつて、他の星へ侵略することは当たり前である。

地球上の植物とて、様々な手口でその存在を増やそうとするではないか。『ソレ』は時期が来たら、他の星へと向かうのが普通のこと。

当たり前で普通のことをするのだから、それは『ソレ』にとつての日常。今日も『ソレ』の母星から鉱石が打ち出される。

遥かな大宇宙の彼方に向かって。

果てなき先へと本能で向かつて。

春まだ少し遠き季節。

北の国はまだ雪の中。

残雪ある中、未明の鎮守府前に出たら鉛色のデカイ鉱石が鎮座していた。

なんぞこれ？

大型の鉄槌でぶっ叩いてみようか。

うちの戦艦たちにやってもらうのもいいかな？

皆喜んでやってくれることだろう。

気がついたら、おっさん形態のメトロンが傍（かたわ）らに立っている。

そして彼は言った。

「ふむ。これはワイアール星産の鉱石であるところの、チルソナイトハチマルハチだな。

隕石に似せて落とすとは小賢しい。」

「チルソナイトハチマルハチ？」

「ああ。これはね、ワイアール星人が惑星侵略の際に用いる鉱石なんだよ。大丈夫だ。

既にメトロンの科学力で無力化してあるから。君たちにはなんの被害も無いことを保

証しよう。」

私同様におっさん姿のメトロン星人がフフフと微笑む。

今朝未明に函館鎮守府前に落下した宇宙鉱石は、こうしてあっさり無害化された。

「チルソナイトハチマルハチは非常に高い温度で熔解された珪酸アルミニウムの一種で、硝子状結晶体なんだ。」

「ほう。」

「とても軽いんだが、超硬質だからグラインダー程度じゃ歯が立たない。艦娘用の工作機械ならば、なんとかなる感じかな。」

「よし、さっそく壊そう。戦艦たちに鉄槌でガンガン叩いてもらったら丁度いいだろう。」

「まあまあ、待ちたまえ。そんなに結論を急ぐんじゃない。これは私が責任をもって預かろう。……なんだね、その視線は。」

「いや、ちよつと……。」

「大丈夫だよ。私が君たちに危害の及ぶモノを、そのまましておく筈などないじゃないか。」

「本当に?」

「信用が無いなあ。悲しいよ。」

「本当にそう思っている？」

「今日はえらく絡むね。大丈夫さ。無力化した上で、安全な場所に保管するから。」

「そこまで言うなら、任せる。」

「君と私の仲だ。任せたまえ。」

メトロンはニヤリと笑う。

「この程度の攻勢で地球を陥落出来ると考えてもらっては困るね。」

「君の方こそ、昔いろいろやっていただろう。」

「あれは私と同じ星の別人がやらかしたとき。若気の至りだろうね。」

「ところで、メトロン星人の寿命ってどれくらいなんだ？」

「それは宇宙の神秘さ。」

誤魔化しやがった。

まったく、もう。

函館鎮守府の中にあるメトロンの部屋。

ちやぶ台でひじをつきながら、宇宙人はしばし空想にふける。

そういえば、『彼』は美人に弱かった。

私も美人に化ければ、もっと楽な世渡りが出来たのだろうか？
異端は徹底的に排除。

厭な時代だ。

昔はよかつたな。

『彼』との対話に思いを馳せる宇宙人。

艦娘や魔族と過ごす今の生活も悪くないと考えつつ、届けられた宇宙人用回覧板に目を通すのだった。

夜になり、食事に行こうかと食堂へ向かうメトロン。

おっさん形態な宇宙人の前にふらりと現れしは吹雪。

最強級駆逐艦。

凍てつく微笑みでメトロンの見つめ、彼女は言った。

「こんばんは、今夜は月がきれいですね。」

「え、ええと、こんばんは、今夜は……。」

曇りだ。

空には星ひとつ瞬（またた）いていない。

惑（まど） うメトロン。

「鉄の心と鋼の規律。それが艦娘流。」

語り始めるは少女の姿をしたモノ。

「その中心にいるのが、私の司令官。」

「はあ。」

「私の司令官を裏切りませんよね。ね、そうですね？」

視線は彼女だけじゃない。

何名もこちらを見ている。

宇宙人はそう知って、数の多さにゾツとした。

「え、ええ……大丈夫です、ええ、大丈夫です。それは間違いないですから。ただ。」

「ただ？」

「レアって言葉が好きなんですよ。」

「ふふふ、欲張りさんなんですネ。」

「ま、ま、まあ、そんな感じですよ。」

深く濃い闇を漂わせつつ、下から見上げるように吹雪はメトロンを見つめた。

複数の気配がうごめくを感じ、それは歴戦の彼すらも緊張する程だ。

危害を加える気は毛頭無いようだが、慢心は禁物だろう。

駆逐艦を名乗る少女は、はかなく微笑む。

「なるべく信じるように心がけますね。」

「なるべく、ですか。」

「はい、司令官の敵はすべて素早く排除しないといけませんから。」

「ははは、大丈夫ですよ。私は根っからの安心安全平和主義です。」

「本当に？」

「はい。」

「司令官と一緒に風呂に入りに、司令官と一緒におねんねして、司令官にアーンしてあげて、司令官と……ふふふ、後は言わなくてもわかりますよね？ 私は司令官と仲よくしたいだけです。」

「は、はあ。」

「司令官を堪能する時はですね、誰にも邪魔されず、豊かで救われなきやダメなんです。静かで心がぼかぼかして満たされ……。」

「はあ。」

「頸（くび）を斬られていないからって、安心しちやいけませんよ。」

吹雪は、雪に舞う蝶のように嗤（わら）った。

CCCXXXVII：掃海艇あくりようとう

最新鋭の掃海艇あくりようとうは開発の時点で問題が多発し、その名のもとになった島での記念行事の際には殺人事件さえ発生してしまった。

紆余曲折を経てこの世に生まれた彼女について、これから語ってみたいと思う。

深海棲艦が地球の海で暴れ始めた頃、海上自衛隊では次世代型掃海艇に関する議論が活発に行われるようになった。

あくりようとうが就役するに至るまでには幾つもの問題が発生し、また、就役日に殺人事件が発生したために悪い意味で有名になってしまった。

殺人事件の方は幸いにも自称名探偵の活躍によってなんとか早期解決に至った。解決までに何人もの命が失われてしまったが。

掃海艇は機雷の掃海を任務とする軍艦である。

艦船の航行に於いて重大な脅威たる機雷を除去するための艦艇。

磁気反応する感應機雷に対抗すべく艇体は非磁性化されており、無人遠隔作業機などの特殊な装備も有している。

あくりようとうのそれについてはあわじやえのしまで採用された繊維強化樹脂（FRP）が用いられることとなり、艇体そのものの強度向上が図られた。

武装は他の掃海艇に使われている二〇ミリ多銃身機銃（ガトリング砲とかバルカン砲と言った方が通じやすいかもしれない）ではなく、アンノウンに対応するための火力向上と仮想敵国の戦闘爆撃機への対空戦闘力の向上を図るため、ちくご型護衛艦などに装備されていたボフォース四〇ミリ連装機関砲を採用することとした。

一門当たり一分間に最大一六〇発を放ち、最大射程はおよそ一〇キロメートルの頼もしい武器である。

戦闘は火力！

近隣諸国の情勢が不安定なもの、装備の強化に対する考えを後押しした。

他国の戦闘艦艇と遭遇戦になることは避けたいところだが、相手側が大人しくひいてくれるとは限らない。

一触即発の事態は現実に頻発していたし、あわや戦闘に至る寸前になったことも数回どころではなかった。

侵略してくるのは宇宙人や深海棲艦ばかりでないし、人間同士の醜い争いはこれからもずっと続くだろう。

四〇ミリならば充分抑止力になると期待したい。

だがこれが一部の人権団体及び野党、そしてカストリ雑誌系チンピラ記者の逆鱗に触れ、あくりようとうの受難が始まったのだった。

彼らは何故か揃って鉄球を握り締めつつ、益体（やくたい）もない言葉を散々喚き散らした。

当然！ 鉄球だツ！

後に彼らは鉄球派と称されるようになる。

鉄球派の追及は陰険且つ執拗なもので、彼らが大抵口にするのは非論理的な感情論だった。

しかも現状に則していないというおまけつき。

何故だっ!?

とてもやっていられない。

彼らは「それが流儀イイツ！」と、謎の定番発言をすることも忘れない。

「冬のナマズみたいにおとなしくさせるんだ！」とイキつて連呼することから、フユナマ派と呼称されることもあったという。

あくりようとうは進水日を普通に迎えられた。

内々のこととして行われたからだ。

だがこれが再度鉄球派の逆鱗に触れ、正式構成員の過半数は国会議事堂前に集結した。

彼らと機動隊との間で睨み合いが発生し、

いつなかが起きてもおかしくなくなる。

都内各地で鉄球派を自称する暴徒による焼き討ちが群発し、東京都は深海棲艦侵攻のために定番化しつつある何度目かの戒厳令を発動した。

三頭犬の紋章を掲げた特殊部隊まで現場に投入され、都内は一時騒然となる。

新設された部隊に実戦経験を積ませたいという警視庁の意向のもと、過剰なまでの戦力が暴徒たちに襲いかかった。

開発中だった多脚戦闘車輜までが暴徒対策用として投入され、一定以上の効果はあったものの、こちらも後々批判の種となる。

ばらばらになつてしまつて元に戻せない暴徒が続出したからだ。

そこまでするとは思つてもいなかつた鳥合の衆は算を乱して現場から逃亡しつつもことごとくそれに失敗し、次々にこの世から旅立つていった。

後の公式発表では過激な暴徒と化した人間が機動隊と衝突した結果、多数が逮捕されたのだと一貫して述べることになる。

逮捕後の彼らはまるで冬のナマズのように大人しくなつたと、関係者は語つた。

いや、騙つたの方が正しいかもしれない。

新聞記者や雑誌記者は大半が沈黙か散華かの運命をたどり、発表までこぎ着けたものの販売差し止めを喰らつた挙げ句に行方不明となつてしまふ者まで発生した。

横領窃盗違法薬物異性同性へのナニなど身に覚えの無い犯罪で続々と検挙された鉄球派は全員示し合わせたかのように途中で逃亡をはかり、その後皆行方知れずとなる。

実に不可解だ。

鉄球派は政界経済界その筋の人などからじわりじわりと圧力をかけられるようになつてゆき、次第に勢力を減退させることになる。

それでもここそそと活動する者もいたが、ちよつとしたことでどんどん検挙されていった。

留置場から脱走をはかつた彼らはいずれも行方知れずとなつて搜索自体は続けられ

たものの、未だに誰も見つかっていない。

搜索の過程で過激派や爆弾魔や通り魔などが逮捕されたり討ち果たされたりしたが、それはあくまでも偶然の産物と思われる。

その名のもとになった島であくりようとうの記念行事を行った際、殺人事件が発生した。

おそるべき偶然である。

ゲスな発言を繰り返す自称探偵によって現場は何度も何度も引つ掻きまわされたが、警察が解決に向かって尽力したため被害者は三八人でおさまった。

犯人のおそるべき計画は第三段階でなんとか食い止められたが、探偵が捜査の足を引つ張らなければ第二段階で止められた可能性すら存在したという。

苦難続きのあくりようとうが次に向かう先は函館鎮守府。

そこで式典を行い、悪運を取り払うのだ。

阿玖陵島。

その名を冠した彼女は、北へ向かって海を軽やかに走ってゆく。
新たな時代を斬り開く一員たらんとして。

CCCXXXIX：駆逐艦とユリキュアと夏のコミックマーケット

「そのような戯言（たわごと）は、今年の霜と同じく春先に消えてしまったと思っていたが、そうではなかったらしいな。貴様も夏に雪を降らせて喜ぶ輩（やから）か！」

長門教官の声が高らかに響き渡る。

大本営から来た三名の大淀がすっかり萎縮していた。

うちの大淀は平然としている。

我々を管轄する組織から命じられた任務はどちらかというところ、あまり好ましいと思えるようなものではなかった。

長門教官がカンカンに怒るのも無理は無い。

我々が大本営は二〇年近く放映され続けている人気魔法少女アニメーション作品のユリキュアと協同作業的なことをするようになったのだけれど、我々函館鎮守府の面々は魔法少女の扮装をすることが既に決定づけられていた。

事前の連絡は一切無いままに。

そりゃ怒るわな。

「我々はそれぞれが好きなき登場人物の扮装をさせてもらう。そちらからの一方的な指図は受けん！ わかったな！」

……え？

あれ？

そこが怒るところ？

扮装自体はいいの？

脅えた顔の大淀たちは領き人形と化している。

これでいいのだ？

その夜。

決起大会を行おうと言って、いつもと違って血気盛んな初雪と望月とマスター・オータムクラウドに引きずられ講堂へ赴く。

講堂の中は熱気むんむんで、おそらく魔法少女と考えられるものの実際はよくわからない扮装をした艦娘たちで溢れかえっていた。

なんなんこれ？

あまりの熱量に戸惑っていると、早着替えしてきた初雪と望月が戻ってくる。どこやらの学生服らしき扮装の二名を見ていたら、美智瑠と加穂留だという。そう言われて、そんな子たちを昔テレビジョンでちらと見たなと思いついた。

二名ともウィッグまでつけていて、なんとも本格的だ。

そして彼女たちはいきなり、『ふたりはユリキュア マキシマムハート』という曲を歌い出す。

盛り上がる艦娘たち。

なんだかよくわからないが、とにかく勢いがあることだけはわかった。

同人誌即売会。

まんが祭。

混沌を呑み込む魔女の鍋。

幾つもの苦難を乗り越え、この夏もコミックマーケットが開催される。

函館から来ると蒸し暑いが、西日本の暑さはこんなものじゃないぜよ。

部下たちからなんとかの扮装をしてくれと再三頼まれたが、断ってよかった。

まさか、衣装まで用意しているだなんて。

あんな貴族みたいな恰好、出来るものか。

とても皆のようにノリノリではいられん。

参加者たちが着ているTシャツに印刷されているモノも様々だ。

漢字四文字の熟語のような必殺技のようなモノ。

『働いたら負け鴨長明』とあるモノ。

推している艦娘の名前が入ったモノ。

『仏の顔も三度まで』と『あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と記されたモノ。

七言律詩的なモノもあるが、あれは杜甫（とほ）かな？

西館四階に上がる自動階段は常々盛況だ。

多種多様な人々が夢を求めて上へと昇る。

横濱かをり並びに新横浜カオリの対決的コンサートが、会場近くに設営された野外音楽堂的な場所で開催されるらしい。

どちら様？

アイドル決戦？

よくわからないな。

遠目に練習する姿を見たが、どちらも気合い十分な感じだ。

会場外で出展する食べ物屋。

我が鎮守府は今年も強力な布陣で臨んでいる。

うちの霞に信州から来た元艦娘の霞、そして他の鎮守府などから来た四名の霞、合計六名の霞によるおにぎり屋の霞亭。

龍驤によるお好み焼き屋の昇龍軒。

足柄と龍田によるコロツケ屋のくろけつと。

李さんによる焼売（しゅうまい）屋の李下飲茶。

余所の鎮守府や警備府や人気店には絶対負けないと、ほぼ全員が息巻いていた。

今回はコミケツト初出店となる人気店が多いから大変だ。

洋菓子屋のキラキラコンフェクショナリーやラッキーフォーク、パン屋の日向屋、和菓子屋の菓子舗胡万智に春野屋、弁当屋のおおもり屋本店、お好み焼き屋の朱音、洋食

屋のこしよね亭。

いずれも強力な店だ。

それでも負けないくじけないあきらめないが信条の艦娘たちだ。

きつと、よい結果を得ると思う。

駆逐艦たちは、思い思いの魔法少女の扮装でこの即売会に臨んでいる。業務終了後の時間や休日を利用して、服を手縫いして作り上げたような。ようやるのう。

駆逐艦以外の艦種の娘も扮装しているようだが、数がまったく違うみたいだ。既製品も売られているらしいが、金具や魔法の小道具も手作りだとか。器用じやのう。

早速会場のあちこちで激写されている。

スカートが短すぎないかと言ったら、見られてもいいやつを穿いているから問題ないと言われた。

おじさん的にはよくわからない感覚だ。

私を写したいという奇特な女性まで複数現れたのには、思わず笑ってしまふ。中学生らしき元気な女の子たちを何人も見かけると、平和の到来を強く願う。もっと往来がしやすいセカイにするため、私たちはより一層踏ん張らねばな。

女の子たちが部下の艦娘たちに劣らぬ美少女揃いだっただので、つつい遠くから眺めていたら、たまたま通りすがったらしい紫キュアな曙に怒鳴られた。

解せぬ。

深海棲艦たちもそれぞれ、思い思いの扮装をしている。

ユリキュアに出てくる悪の幹部とかそんな感じらしい。
なるほどなー。

屋外でびよんぴよん飛び回るユリキュア姿の駆逐艦たち。

島風や吹雪あたりの駆逐艦の動きはまさしく立体機動というか、よくあんな動きが出るものだと感心してしまう。

彼女たちの運動能力ならば、ユリキュアみたいに振る舞えるだろう。
たぶん。

光線的なナニカは流石に出せないが（出せないと思いたい）、初代の格闘技だとか空手的な技ならば使えるだろう。

おそらくは。

「あんだ、ここにいたのね。丁度よかったわ。」

振り向くと、叢雲（むらくも）がいた。

紫キュアの扮装をしている。

彼女は私の手をガシツと取るなり、すたすた歩き始めた。

「どこへ行くのですか？」

「みんなのやる気を高めるためには、あんたの力がなんとしても必要なのよ。そう、キラキラするように。」

「キラキラキル？」

「キラキラル。」

「やる気、ねえ。」

「そう、やる気。」

私なんぞが関与しなくとも、艦娘たちのやる気は十二分にあると思うのだけれど。

「いるんですか？」

「当たり前じゃない。」

彼女の曇りなき瞳が私を見据える。

「あんたはそれほどの存在なの。もっと自覚しなさい。みんなのソウルをギューーンとシャウトさせるためにもね。」

「はあ。」

ユリキュアっぽい艦娘たちが遠くに何名も見えてきた。

こちらへ向かって走ってくる娘さえいる。

と、その時。

いきなり叢雲が私の眼前で見栄をきった。

「やる気全開！ 伝説の戦士、ユリキュアに変身よっ！」

「ほう、それがユリキュアですか。大したものですね。」

「当然よ。」

積乱雲が広がる青空を背景にして、歴戦の少女はにっこりと笑った。

CCCXL：提督の料理ショー

マスターオータムクラウドが石炭ストーブよりも熱く語っている。

場所は函館、軍事基地。

我らの艦娘、集う場所。

「これが3Dプリンターと呼ばれる付加製造装置な立体印刷機です。」

「ほう、これが。」

「これさえあれば、提督の姿を忠実に模した樹脂製彫像も軍団単位で製造可能です。兄

貴、戦いは数だよ！」

「その……私の姿を模した樹脂製彫像などに需要はあるんですか？」

「あります！ めっちゃあります！」

戦争に関係ないことを語り合えるのは、ある意味平和なのかもしれない。

そう思うことにしよう。

外は吹雪。

雪がじゃんじゃん降っている。

後で雪かきしないとな。

窓の外。

ナニカが影絵のようになごめいていた。

ヒトのような、そうでないような。

目をこすつて見直すとなにもいなかった。

気のせいかな。

雪はまだまだ止みそうにない。

提督の映画を作るので、函館鎮守府を撮影場所として提供するようにとの通達が大本営から届いた。

プロパガンダか。

ま、致し方あるまいて。

大淀が配役とか監督脚本家演出家の名前を見て、眉をひそめている。

彼女はぼつりと言った。

「何故、提督が主演ではないのでしょうか？」

「えっ、ほら、ここに提督が主演と書いてあるじゃないか。」

「違います。何故、貴方が主演ではないのかと言っているんです。」

「ははは、私のようなおっさんが主演じゃ観客を動員出来ないよ。」

「出来ませう。百万の軍勢をもってこのセカイを駆逐出来るほどに。」

「ははは、魔王様じゃないんだからさ。」

それでもって撮影当日。

主演という若いイケメン俳優がにこやかに艦娘たちへ挨拶したのだけど、部下たちの反応が鈍くて戸惑ったようだ。

最初、艦娘役は本人たちが行う予定だったけれども、台本を最後まで読んだ彼女たちは全員出演辞退してしまった。

大本営からはなんとかしろと言われたが、こうなった彼女たちはここで動かない。

特に駆逐艦たちの拒否反応が酷く、ツクリモノだからと言って説得しようとしてつとめたものの、挙げ句の果てに泣かれてしまつて最終的に断念した。

結局、複数の幻想的崇拜偶像群から若手を起用して撮影に臨むこととしてみたみたいだ。

大本営からは無茶苦茶怒られたが、大淀を含む複数の艦娘が突……もとい、話し合い

に出向いて事なきを得た。

ぼんやりと撮影風景を眺めていたら、駆逐艦役の可愛い女の子がとことこと私のそばまで歩いてきて言った。

「ふふーん、可愛いボクが来たからには、提督さんもメロメロですよ。」

「あなたのように可愛いお嬢さんが演じてくれるのでありがたいです。」

「そうでしょう、そうでしょう。ボクにぜんぶまつかせてください。」

「どことなくなんとなく大和の声真似が上手そうな子と会話していたら、うちの子たちによって引き離されてしまった。」

後程、彼女とうちの子たちは仲よくおやつを食べていたのでよしとしよう。

【提督の料理ショー】を開催しようとの要望書が部下たちから提出された。

ふむ、ならば料理だ。

撮影するのは何故か大本営の広報艦娘たちだけど、特に問題は無いようだ。

加賀教官と大本営の瑞鶴が両隣にいて少しやりにくいけれど、まあ、よからうて。

「()は譲れません。」

「加賀先輩、やっちゃってくださいー！」

「君たちはなにを言っているのかね。」

ちよつとふざけながらやるのがいいらしい。

よくわからないな。

二名には野菜を切ってもらつたりしようか。

今回作るのは、クリニイ・スープ・ス・ダマシユニイ・ラプシヨイ。

訳すと、ラプシヤの入つた鶏肉のスープ。

ロシアでは風邪をひいた時によく食べるらしい。

まずはスープを作ろうか。

鶏のもも肉を冷水でよく洗い、鍋に入れて水を注ぐ。

強火にかけ浮いてきた灰汁（あく）を取り、蓋（ふた）をして弱火にしてから一〇分

ほど茹でる。

薄切りにした玉ねぎ、薄い半月切りにした人参を鍋に投入。

本来はセロリやいんげん豆や月桂樹の葉も入れるらしいが、量的に入手出来なかつた

ので省略。

で、鍋の中身が沸いたら蓋をして二〇分ほど煮る。

塩や黒胡椒を更に鍋へ投入し、じっくり煮る。

さて、その間にラプシヤを作ろう。

ロシアの手打ちパスタであるラプシヤは簡単に作れるのでスープに入れてよし、茹でてソースに絡めてもよしの一品。

最初にボウルへ準強力粉たる小麦粉と卵と塩を入れ、匙（さじ）で掻き混ぜ、その後手で軽くこねる。

ひとまとまりにしてまな板に載せ、しっかりとこねる。

表面がなめらかになったら、五分ほど生地を休ませる。

スープはどうか？

ふむふむ。

すつきりした味わいだな。

これこれ君たち、何杯も味わってはいけないよ。

麺棒で生地を厚さ一ミリほどにのぼし、包丁で幅二〜三ミリほどに切り分ける。

ほぐして少しのぼし、少し乾かす。

よし、あとはこの二つを合体だな。

きらめくヌードル・エモーション！

おいしくなーれ、おいしくなーれ！

なんちて。

……君たち、私をじっと見つめるのは止めなさい。

実際に食べてみると、あっさりしていて食べやすい。

幸い、艦娘たちは作ったスープをおいしそうに食べてくれた。
ありがたいことだ。

さてさて、張り切っていきまっしょい。

CCCXLI：黒糖寒天と急行筑紫

北の国は広い。

それはもう、冗談抜きで広い。

例えば二泊三日で函館小樽札幌富良野に行きたいだなんて聞いたらなにに挑戦しているんですかという感じだし、函館にいるのにすすきのにいるからこつちまでおいでよと言われてもちよっと止めてくれだし、道民で道内にあんまり詳しくない人がちよこちよこいることもわかつて欲しい。

北大構内も広い。

冬になるとホワイトアウト状態の構内で遭難しかける事態が時々発生するし、札幌駅近くのだけでもその敷地は非常に広大で東京ドーム三八個分もある。

また、札大は高台にある関係上、普通の降雪日でも猛吹雪になりやすい。

それらに比べると道南はまだましなので、他の道内の鎮守府よりは楽………なのかな？

氷点下三八度になるなんてことは無いし、ホワイトアウトになる可能性も低い。

千島列島にある松輪屯所（とんしよ）は五月でもストーブがいるというし、真夏でも寒い日があるそう。

マトウア島（松輪島のロシア語読み）の基地に駐屯するロシア海軍の兵士ですらも、えらく寒いとぼやくことがあるという。

真冬の北大に行く時は気をつけよう。

菱沼さんの話は他人事じゃないのだ。

雪のちらつく午後。

夕方前のひととき。

厨房にて私は料理作りにいそしんでいた。

本日の夕食に於いて私が担当するのは二品。

ひとつはきんぴらごぼう。

もうひとつは黒糖寒天。

李さんは鶏ガラをことごと煮込んでいる。

彼の手から生み出される料理は名品揃い。

とてもあの領域には届かないが、出来ることをやっていこう。

お隣の青森県産牛蒡（ごぼう）が入手出来た上、地元産の人参も数がある。ならば、きんぴらごぼうだ。

ささがきだ、ささがきだ。

漢字だと笹掻きか。

大量に笹掻きされたごぼうを作り出した。

おっと、人参も斬り刻んでやるぜ！

なんちて。

ごぼうは油との相性がよく、加熱することで旨みが引き出される。

人参と共に炒め、味醂（みりん）と醤油で味付けたら出来上がり。

よし、一品出来た。

日本一の生産量を誇る青森県の牛蒡を堪能するといい。

どんどんきんぴらごぼうを作ってゆく。

きんぴらごぼう作りが終わると、今度は黒糖寒天作りだ。

水で戻しておいた寒天は、信州伊那（いな）の品。

呉の先輩によると、伊那の寒天は最高だそうな。

それと、肥後天草は佐伊津（さいず）の黒糖を使って甘味作りだ。

寒天を鍋に入れ加熱して溶かし、別口で溶かしておいた黒糖と混ぜ合わせる。程よく混ぜたら器に流し入れ、しばれる外に置いておく。

外は氷点下なので、さほど時間もかからずに固まるだろう。

李さんに食べてもらったら「好吃（ハオチー）、好吃。」と言ってくれたので、とつても嬉しい。

夕食は全員、完食してくれた。

それはとつても嬉しいなつて。

黒糖寒天は特に好評を博し、幾つもの連合艦隊が厨房に突撃してきたほどだ。

あら、びつくり。

ところで、君たちは何故全員シリコーンの匙（さじ）を装備しているのかね？

我が函館鎮守府の面々のみならず、艦娘たちの食べることへの情熱は非常に熱量が高い。

そのことを改めて実感した。

ああそうそう、私の指にはなにも付着していないよ、と言っておこう。

首都機能をなんとか維持しているらしい東京都が、『新第二山手線構想』を打ち出した。

第二山手線……昔、そういった構想があつたことは聞き及んでいるけれど、今さらそれを打ち出してなんとかなるのだろうか？

バビロンプロジェクトも失敗したのに。

あちらは船舶の往来やら漁業やら海洋汚染やら管理する自治体の区分問題やらで頓挫したらしいが、こちらは上手くいくのかね？

なんでも『新』を付けりやいってもんでもないだろうに。

奈良アニメーションに勤めている先輩が、これ関係の映像作品に関わっていると云っていた。

CGですかと聞いたら、手描きでやるという。

相変わらず、浪漫街道を突っ走っているなあ。

近年は『脱首都圏』を志向する企業が増えており、首都圏から地方へと転出するそれは去年で一九九〇年以降最多となっている。

例えば、宮城県や大都会岡山や兵庫県や広島県などへもその移転する動きは広がって

おり、我らの北の国が最大の受け入れ先というのは、『試される大地』とも称されるこの地方自治体としてはありがたいことなのだろう。

おそらく。

二〇〇万都市を未だに達成出来ない東京都としては、大風呂敷を広げることも必要なのかもしれない。

急行筑紫が復活した。

併せて食堂車や車内販売も復活させるといふ。

現在も本数を増やしていく新幹線の補完的存在にする思惑があるみたいだ。

それに合わせて、様々な催しをするとか。

配給券の不要な社会に向けて、いろいろ動いているのだろう。

長距離的切符の利用限定も一時的に解除されるのだから、歓迎するべきことだ。

道内の駅舎にダルマストープを設置しようとの動きもあるそう。

青森県は意外と乗り気との話も聞く。

状況次第では、乗降場での弁当の立ち売りを行う駅舎も出てくる予定もあるらしい。

『戦後』を見据えた動きは今後、より一層活発化してゆくことだろう。

政府は物価抑制策を次々打ち出しているけれども、どこまで効果があることやら。ただし、人の動きも昨年よりはずっと活発化しているみたいに見える。

そうした中で、横須賀舞鶴呉佐世保と大手鎮守府へ次々出張させられるのは正直嬉しくない。

どうして私のような、なんちゃって提督があちこち行かねばならないのだ。

まあ、上がやれと言ったらやらねばならないのは民間もそうでないところも同じだから致し方ないのだけでも。

先ずは横須賀だ。

ここへは行き方はまあ、シンプルだ。

海上自衛隊の船に相乗りさせてもらえることになったので、それで横浜港まで行く。艦娘の護衛が付くので、問題ないだろう。

これぞ一挙兩得……違うか？

夜更けの横浜から大垣までは、『大垣急行』の別名を持つ『ムーンライトながら』に乗る。

シウマイ弁当を買って乗り込むか。

早朝の大垣からは米原まで快速に乗り、米原から舞鶴へ向かう。

北陸本線に乗って敦賀（つるが）まで行き、そこからは小浜線に乗り換えて東舞鶴駅へ。

舞鶴鎮守府での仕事が終われば、次は呉。

東舞鶴から福知山まで舞鶴線で行き、福知山からは福知山線に乗って尼崎（あまがさき）へ。

尼崎からは山陽本線で元町へ向かう。

元町では老舗の中華料理店で焼きビーフンやら雲吞（わんたん）などをいただき、腕利きの菓子職人が縦横無尽にその技を披露する神戸屈指の洋菓子店で喫茶と洒落込もう。

元町からは隣の神戸駅まで行き、そこから新快速で姫路まで行く。

姫路から岡山へ行く途中で友人宅に寄って宿泊し、翌朝岡山に到着したら三原行きの汽車で終点まで。

三原からは呉線に乗って呉鎮守府へ。

呉線はのんびりするのに丁度いい路線なのだろうけれど、急ぎの時はちよつと厳しい。

鎮守府専用列車もあるらしいし、先輩もそれを出すから乗ればいいとは言ってくれたが、普通の汽車で行くでしょう。

広島へは呉線で行けばいい。

広島駅からはいよいよ急行筑紫に乗る。

広島発一五時四八分の急行筑紫に乗って博多発二二時四〇分、鳥栖発二三時一五分と続き、鳥栖駅で乗り換えて更に肥前山口で佐世保線に乗って佐世保鎮守府へ。

筑紫では食堂車を楽しもう。

鐵道好きでないとちよつとキツイかな。

まあ、なんとかなるだろう。

仕事が終わったら、長崎に寄りたいな。

時間があれば島原にも行きたい。

江戸まで戻ってきたら、浅草の洋食店へ行くべし行くべし。

さて、なにを食べようかな。

CCCXLII : 李さんのお粥

最近某小説投稿サイトで地道に書いていた『魔王陛下の王配』が書籍化及び漫画化を同時に成立させ、担当の編集者がかなり意気込んでいる。

嗚呼、いろいろ修正して加筆もしないといけない。

特典の掌編も書かないとならない。

宰相観点にするか、黒騎士観点にするか。

漫画化を担当してくれる描き手は丁寧な描写を旨とする人なので、安心感が大きい。

そういった人に丹念に描いてもらえることは実にありがたいものだ。

出版社の公式サイトでは時期限定型特設区画をもうけてくれるそうで、そこでは魔王陛下による語りを映像として流してくれるそうだ。

陛下役はとある終末世界的作品や某魔法少女的作品などで巧みに演じてきた人だから、こちらの方も安心感が大きい。

函館駅に近い紅茶専門店を担当編集者と打ち合わせをしながら、艦娘たちにこのこと

が露見したら不味いなど考えた。

彼女たちには私が覆面小説家であることをまだ話していない。

前もって大淀や教官たち辺りに話を通しておいた方がよさそうにも思えるけれど、時期尚早かなと考えているうちにあれよあれよと日時が過ぎ去ってしまった。

どないしようか。

……まあ、そのうちに話せばいいか。

小説投稿サイトの活動報告で漫画化並びに書籍化のことを発表したら（もちろん発表していい範囲内のことに限るが）、いつも熱心に読んでくれる読者たちから熱烈歓迎的内容のコメントを多くいただいた。

小説家冥利に尽きる。

函館を含む道内在住の読者も複数存在するらしく、現住所的な場所の人々にも応援してもらえているのだ。

それはとつても嬉しいなって。

担当の女性から函館市内にある大型書店でのサイン会はどうかと提案されたけれど、万が一でも身元が露呈するのは困ってしまう。

いつそのこと骸骨の覆面をかぶってみてはどうかとも提案されたが、ちよつとそれは違うんじゃないかな。

高笑いなんてやれませんかわいな。

李さんのお粥は旨い。

滋味があつて奥深い。

日によつて出汁（だし）を少しずつ変えているのだろう、風味が毎日違つて食べ飽きない。

私の朝は殆ど中華粥。

彼が休みの日以外、それにしている。

演習やら視察目的で同業者や上司などが時折函館鎮守府にやつて来ては、旨い旨いと舌鼓を打っている。

彼らは粥を食べ、点心を食べ、彼の作り出す絶妙なる料理を食べてうなるのだ。

たまにクレクレタコラが発生するのだけど、勘弁してください。

鎮守府での火災を想定した、消火訓練並びに防火設備の点検及び遠隔操作出来る放水銃八基の点検を実施した。

駆逐艦たちが勇ましく走って消火栓からホースを引き出し、建築物に放水してゆく。水圧の計測、訓練にかかった時間、設備がきちんと機能するかどうか。

そうしたことも記録された。

問題はさほど無いように見えたが長門教官や加賀教官は厳しい声を何度もあげていました。妙高先生はにこやかに何度も繰り返し艦娘たちを走らせていた。

ちなみに一番よく走っていたのは島風である。

大阪の商人的知人から、李さんの中華粥を是非とも食べたい人々がいたのでなんとし
ても連れてきて欲しいとの打診があった。

またかいな。

大本営の許可がおりれば、と返答していたのだが、なんとも用意周到なことに既にそ
れは為されていたのだった。

関西圏の食通たちからすると、函館鎮守府の食堂は彼らが万難を排して訪れたい程の
場所だそう。

うちの料理人の強みは、名人が李さんだけじゃないところにあると個人的に思ってい
る。

別に一般公開はしていないんだけど、いつも旨いものを食べてズルいズルいと同僚たちからしばしば言われるので、折に触れて焼菓子詰め合わせを発送している程だ。

大本営がやれやれゆうーから、来函した政府とか大企業の偉いさんたちに李さんの料理を作ってもらったことも何度かある。

妙な交渉をしてくる訳のわからない人も何人かいたが、すべて丁重にお断りさせていだいた。

こういう人って一人二人じゃないし、時々発生するんだよな。
むう。

たまにうちの厨房で働きたい料理人の選考会を李さんと私と幾名かの艦娘とでやっており、艦娘たちの食べる様子によっては彼らの働く期間が激変する。

隣の魏呉蜀の三國やら台湾やら東方ロシアの首都たるハバロフスクやら近所のヴラディ・ヴォストーク（ウラジオストク、浦塩）などからも、たまさか料理人の派遣が大本営を通して要請される。

間諜もいるみたいだが、彼らの中で料理の下手な人間はいないのでまあ致し方あるまいと一応受け入れている。

ウラル料理やら台湾料理やら上海料理やら四川料理やら広東料理やらが入り乱れる献立も悪くない。

大阪行きに於ける護衛を誰にするかで揉めに揉めた。

時折単独で出張するのだから特に問題は無かろうと思つただけけれど、艦娘たちからすると大問題らしい。

料理対決での苛烈な戦いの末、鳳翔と間宮が我々の旅路に随伴することと相成つた。

『みたらしへブンボンバー』と『みたらしヘルボンバー』の連続技は、可愛らしくもおそろしいものだった。

大阪の知人からの要望の中に彼女たちも出来たら参加して欲しいとあつたので、結果的によかつたと言える。

このことは全員に内緒にしておこう。

大本営にいる間宮を一名廻してもらふことになつたので、彼女に料理を任せれば函館は大丈夫だろう。

星間連絡船……間違えた、青函連絡船の随伴艦は随分豪勢な陣容となり、乗船した人たちはなにかのイヴェント（催し）だと思つたようだ。

戦艦級や正規空母級の艦娘が航行する姿は普段見かけるものでないし、そのためか熱心に撮影する人が続出している。

深海棲艦と艦娘が当たり前のように戦列を組むのは、おそらく函館だけだろうしな。ところで、何故あの中に大和や武蔵がいるのだろうか？

いつのまに？

……………ま、いつか。

夕暮れ時の青森駅に到着し、汽車の乗降場へ向かう。

走ってゆく人が何人もいた。

おそらくは、特急の自由席に乗るためだろう。

栈橋（さんばし）をてくてく歩くと、やがて線路が見えてきた。

どんだん辺りは暗くなってゆく。

たそかれ時だな。

発車の三〇分前には日本海が到着するという。

それまでになにか買っていこうかなかな。

李さん及び鳳翔と間宮とでキオスクに立ち寄り、あれこれ覗く。

どことなくなんとなく艦娘ばい売り子から帆立釜めしを購入し、日本海に乗り込む。

よし、後はこのまま大阪だ。

四名で釜めしをむしやむしや食べる。

旨し。

秋田までは座席車扱いが可能なことを利用した乗客もちよこちよこいるようで、軽装の人をちらほら見かける。

秋田駅では少し停車時間があるためか、売り子が何人かいた。

どことなくなんとなくどこかの駆逐艦ほい売り子から翌朝用の握り飯を購入。

早朝、金沢駅到着。

どことなくなんとなく空母つぼい熱心な売り子から野菜の煮物を購入。

車内販売の白いお姉さんから代用珈琲や菓子を購入。

李さんはお湯をもらい、私たちのためにお茶を淹れてくれた。

朝食をいただく。

旨し。

敦賀駅では二〇分停車。

ここで機関車の交代だ。

特急のしらすぎやら雷鳥やらが通過するのを眺め、どことなくなんとなく巡洋艦ほい

ツインテールの売り子から手作りらしき団子を購入。
無論、おいしくいただいた。

青森から乗り続けて半日とちよつと。

ようやく大阪駅に到着だ。

今日は洋式旅籠（はたご）に宿泊し、明日はとあるホテル内にある中華料理店の厨房を借りての料理作りである。

李さんの絶品なお粥を堪能してもらおう。

準備は既に出てくる。

鳳翔間宮の力も加われれば百人力なのだよ。

とりあえず今は自由ナリ。

李さんたちと話をし、先ずは三宮や元町へ遠征しようという話になった。
ならば、新快速だ。

元町駅近くにある老舗の中華料理店で昼食を食べて、てくてく歩いて神戸屈指の洋菓子店でサヴァランをいただくでしょう。

勿論、土産用に焼菓子を多く注文しなくてはならない。

夜は大阪でお好み焼きを食べようか。

仕事が終わったら、かやくご飯やにゅうめんのおいしい定食屋へ行くのも悪くない。

そして私たちは旧國鐵現JRで神戸へ向かうべく、構内を歩き始めた。

行き交う人々には活気が見られる。

明るい声がある中に確実にあった。

世の中、まだまだ厳しい面はある。

だが、人々や艦娘の努力によってこれからはどんどんよくなってゆくだろう。

そうだ。

そうなるためにも、ますます頑張らないとな。

人類に栄光あれ。

CCCXLⅢ：メフィラスと町中華

東京の銀座に巨大な花が出現し、『マンモスフラワー』と名付けられたそれは東京の人々を大いに困らせた。

宇宙の人メトロンとまた別の宇宙の人メフィラスとが協力してくれたお陰で、我々人類は官民宇宙の人合同の総力戦にて『マンモスフラワー』の駆除を成功させたのだった。

函館市内にある芽富伊良洲（めふいらす）大社では、秋になると祭がある。

秋大祭だったか。

そこでは異形の神を祀（まつ）っていて、実に興味深い。

元々、芽富伊良洲神は神奈川県平崎市で祀られていた。

子供の頃に夢で神を見たらしい土方歳三がそこへ参詣（さんけい）に行き、それから彼は芽富伊良洲神を信仰するようになったという。

箱館では彼のみならず、他にも芽富伊良洲神を信仰する者が複数いたという。

箱館戦争で彼が死んでから、芽富伊良洲大社を建立（こんりゆう）しようとする動きと阻止しようとする動きとであれやこれやがあつたとか。

ふーん。

今年の暑さ対策の一環として、こわい話を話して欲しいと部下たちに言われた。

いいのかなー。

まっ、いつか。

講堂には沢山の艦娘が集まった。

暑いんじゃないかな。

いいのかな。

かなかな。

「戦争前の話なんですけどね。ある時、現在呉で提督をしている先輩と山登りに行くことになりました。私は山登りが好きじゃないもんですから、やだなーと思つたんですよ。だけど、なんやかんやで行くことになりました。山道具は先輩が用意するつて言うから私は登山靴とか服とかを用意しましてね、中国山地のとある山へ登つた訳です。」

しんと静まる講堂。

皆がこちらをじつと見ている。

「山登りをしていく内、どんどん霧が出てきましたね、うわー、やだなーと思って先輩に帰りましょう帰りましょうと何度も言うんですが聞いちゃくれない。おかしいなーと思いつながら、こつちは山のことなんて殆ど知りませんから黙ってついてゆくしかない。先輩は喋らないままずっと進んでゆく。私もわからないままついてゆく。で、そのうちもつとおかしなことに気づきましてね。」

結局、三つ話した。

反応はよかったから、責務は果たしたと言えるだろう。

メトロン地球人形態と私の外見は冴えない中年男性だが、メフィラス地球人形態は随分と男前である。

しかも、名刺まで渡された。

なんとも日本人の社会に詳しいようだ。

「この状況、まさに『呉越同舟』。私の好きな言葉です。」

胡散くさい笑顔と共にそう言い添えて。
なんだこのイケメン。

宇宙人たちと一緒に、函館市内の居酒屋で飲み会を開催する。

海鮮系でおいしい店がいいと皆から言われたので、そういう場所にした。
海に近いその店を貸し切りにして、わいわいと騒ぐのだ。

本当の姿を見られると騒ぎになるし。

ラジウム・ハイボールを呑みたいと言いつ出す者もいたが、全員一致で却下した。

お前はオットーか。

店主は肝の据わった人なので問題無い。

たまには、はちやめちやなのもいいさね。

今回初参加のメフィラスは、現代日本の呑み屋に於けるあれこれにえらく手慣れてい
る。

慣れた仕草で旭川の特別純米酒を呑み、流れるように八戸産の特別純米酒を女給に頼
む。

おまいは日本人か、と言いたくなるほどの自然さだった。

まあ、ここにいる宇宙の人たちは皆やけに手慣れてはいるのだけど。あんたたち、現代の日本社会が好き過ぎやろ。

翌日は河岸（かし）を変えて、函館市内の町中華に繰り出す。

ポインターに乗って、住宅街の中にある中華料理店へ行った。

ここは定食を頼むと、何故か拉麺の丼鉢にたつぷり入った玉子スープが付いてくるのだ。

全員唐揚げ定食を頼み、それに五目焼きそばや餃子を追加注文する。

さて、喰うべし喰うべし。

揚げたての大きな唐揚げをわしわし食べてゆく。

メトロンもメフィラスも旨そうに食べている。

よかばいよかばい。

『町中華』。私の好きな言葉です。」

メフィラスはむしろむしろ食べつつ、無垢な笑顔でそう言った。

CCCXLIV：美しき国家公務員と冬の夜に

最近には気になるアニメーション作品が割と多い。

新作では『鎖鋸男（くさりのこおとこ）』、『秋津洲（あきつしま）冥王戦争』、『水星たぬき日記』。

二期では『諜報員アーニャ』。

再放送作品では『魔王のお嫁さん』。

実写化作品だと『独り甘味男』や『菱沼さんは眠りたい』も見なくっちゃ。

原作をずっと読んできた『スイの異世界放浪飯』のアニメーション作品化も気になる作品だ。

個人的には六期くらいやって欲しい。

ちなみに那珂ちゃんが今期歌っている主題歌は、『水星たぬき日記』の〈君に幸あれ〉と『秋津洲冥王戦争』の〈はかなさとせつなさとさみしさと〉になる。

歌姫、絶好調だな。

新しく艦娘を主題としたドラマ化の話が進められているという。

撮影場所のひとつとして我が函館鎮守府が予定されており、敵役として戦艦棲姫を始めとする居候的深海棲艦の面々も出演するそう。

今回のドラマの主役は時雨。

佐世保鎮守府からやって来た駆逐艦。

彼女は先週からここ北の地で役作りに入っている。

呉の雪風も既にこの函館にて役作りの真っ最中であり、話の中では彼女の好敵手として火花を散らすのだろう。

うちからは今のところ、大淀、足柄、曙、霞が出演となっている。

それとこのドラマに関しては、これから大変な交渉が待っている。

姉様が如何に魅力的かを語る姉様第一主義的な航空戦艦に対し、これからいろいろとお話せねばならない。

あと、これから行わなくてはならない雑多で多様且つ様々な調整………不幸だわ。

撮影の様子を見に、顔を出した。

駆逐艦は割と自由に飛び回っている。

巡洋艦や戦艦の艦娘たちは比較的落ち着いて見えた。

撮影は今のところ順調のようだ。

海防艦の子たちに声掛けし、緊張をほぐしていった。

ふと気づくと、双眼鏡を首からさげた駆逐艦が私のそばにいる。

上目遣いで彼女は呟いた。

「幸運のキスの場面で舌をちよろつと入れたら、ダメかな？」

「駄目です。」

いたずらっ子な雰囲気駆逐艦が、生真面目そうな駆逐艦を遠目に見ながらフフと

嗤（わら）う。

もう、勘弁して欲しい。

収録のため、横須賀呉舞鶴佐世保に在籍する艦娘が集結する。

その中には、写真や画像や映像でしか知らない艦娘もいた。

映像的には口元から下しか映らない艦娘も存在するみたいだが、それでも出演出来ることを純粹に喜べる娘は幸せなのだと思う。

同姿艦を利用してエラーリー・クイーンみたいな感じでの二名一役もあり、例えば大淀

がそれに当たる。

函館鎮守府所屬の歴戦たる我が片腕と、大本營直屬のこの世にまだ不慣れな艦娘と。雰囲氣が違い過ぎないかな。

適材適所だと監督はのたまっていたが、そうそう上手くいくものかね。

また、翔鶴や希望する娘らに特殊な化粧を施し、深海棲艦の数合わせを図るという。

ドイツ、イタリア、フランス、ブリテン、メリケン、ソヴィエトの艦娘も使つて連合艦隊の場面も撮るそうだが、凝りすぎて竜頭蛇尾にならないことを祈つておこう。

満潮、曙、霞の三名を折角出演させるのだから、三連罵倒の場面でもやるのかとてつきり思つていたらやらないという。

……なんだ、やらないのか。

ま、あれはちよつちキツいからなあ。

キツいといえば。

「提督は有給多いし、福利厚生もかなりいいんだよ。」と言つた国家公務員がいるそうだが、提督の仕事は多岐に渡つていて書類仕事もやたらに多いし、有給なにそれおいしいの状態が解除されることは……あつたらいいなあ。

殆どの艦娘たちが好意的なので、それが救いといえばそうか。

函館も雪がちらちら降るようになり、時折強い風と共に六花が舞い散る。

最高気温が氷点下の日も出始め、冬本番がやって来た。

ついこの間までは暑かったような気がするのに。

ドラマの収録が一段落し、提督としての私の仕事も一定の目処（めど）がたった。

たまには外へ食事に行こうか。

大淀と長門に後を任せ、街へ繰り出した。

乗り込んだ満員の路面電車がチリンチリンと冬の街を走ってゆく。

派手な服装の人は誰もいない。

灯火規制はまだまだ時々あるが、街の賑わいはそこかしこで感じられた。

ただ、防衛費を増額するとか世論誘導するとかの話も聞こえてきて、ゲツベルスみた

いなことを言ったりやったりする奴が現れないといいなと思う。

味噌ラーメンは下品だとあるグラフィックデザイナーが某テレビ番組で言ったのだ

けど、その理由は番組内で語られなかった。

否定だけして理由を語らない点がいやらしい。

影響力というものを、まるで考慮していない。

味噌ラーメンはあんなにおいしいのに。

あんな物言いをしないようにせねばな。

いろいろあつて、いろいろいい。

そうじゃないかな？

札幌辺りに行くことがあつたら、是非とも味噌ラーメンを食べよう。

函館だと塩ラーメンが旨いし、個人的には館掛け焼きそばがオススメだ。

博多ラーメンもいい。

バリカタとか替え玉とか、魅惑の麺類だ。

麺類といえば讃岐うどんもいいな。

函館市内や近隣地域だと蕎麦が優勢というかめっちゃ圧倒的でそれはそれで勿論い

いのだけど、高松や坂出（さかいで）や善通寺で食べたうどんも旨かった。

あちら方面に行くことがあつたら、食べに行く。

どれかは食べる。

日が完全に落ちた後はとても寒い。

函館は風の街なので、余計にそう感じる。

寒いと温泉に行きたくなってくる。

そうだ、今度時間が出来たら谷地頭（やちがしら）温泉に行ってみようかな。

あそこは食事も割といいし、のんびり出来るのがよいところだ。

おっと、ここで降りなきや。

ぽつんと明かりの中に浮かぶ停留所で降車し、冷たい風に間々あおられながら歩いて歩く。

着いた。

函館の繁華街から少しばかり離れた場所にある洋食店。

ここは生ビールもなかなか旨い。

北の大地で醸されるビールは、やはり地元で呑むのが一番美味だと個人的に思う。

すつと呑めてコクがあり、後味もいい。

がばがば呑まなくていいから、おいしいビールが欲しい。

ただ、それだけだ。

店内は混雑しているが、無事に座れた。

さて、今の私は何腹だ。

……よし、注文だ。

唐揚げと刺身とラビオリを着（さかな）にして生ビールを呑んでいると、顔馴染みの

従業員の子が話しかけてきた。

初めて見た時はやたらにおどおどした女の子だったが、最近ようやく慣れてきた感じがする。

「あ、あ、あの、す、すみませんけど、相席してもらっていいですか？」

「ええ、いいですよ。」

すると、こちらに赤い髪の美しい女性が近づいてくる。

「おやおや、私のようなおじさんと相席でいいのかねえ。」

「すいません、生一つをお願いします。」

店員に注文するやさしい声が聞こえてきた。

「お邪魔します。」

「どうぞどうぞ。」

すらりとした彼女は洗練された所作で献立表を開き、手慣れた様子で注文してゆく。

生ビールを大きなジョッキでいくい呑む美女。

豪快だ。

酒豪なのかな？

しかも健啖家だ。

豚とマッシュルームの生姜焼きをむしやむしや食べてゆく。

大ジョッキの生ビールもどんどん呑んでゆく。

いやはや、やるなあ。

「すみません……生もう一つ……あと、グラスを片付けてもらっていいですか？」

その次に頼んだ唐揚げと刺身とラビオリも次々に口の中。

あの華奢な体の一体どこに詰め込まれているのだろうか。

謎だ。

さて、こちらもそろそろソテーを頼むか。

「すみません。」

「は、はいっ！」

「この塩わさびの豚ロース厚切りソテーのセットをください。」

「私も同じものをお願いします。」

「わっ、わかりました！」

おや、相席の美人さんも同じものを食べるつもりか。

緊張しながらも彼女は注文を繰り返し、厨房へ向かった。

頑張れ、女の子。

茸のポタージュが来た。

茸もりもり。

ポタージュ自体が濃厚であり、茸の香りも強い。
これは旨い。

塩わさびの豚ロース厚切りソテー、野菜添えが来た。
なんじゃあ、こりやあ！

山葵、わさび、ワサビ。

たつぷりと載っている。

これは衝撃的だ。

どれどれ、食べてみよう。

うん、脂がいい。甘いぞ。

旨い。

豚の甘みがわさびのツンとした面を緩和している。

添えてある野菜も凝ったものだ。

ゴボウの胡麻和え。

気が利いているな。

しやしやしき感と胡麻の香りが巧みに調和していて、ソテーの濃さを中和する。

カレー味のポテトサラダ。

これもいい。

マッシュルームたっぷりの野菜サラダに檸檬を振ってみると……さっぱりとした酸味が加わって爽やかだ。

ふと、美人さんが私に微笑んでいたのに気づく。

共感したのかなかな？

彼女が話しかけてきた。

「おいしいご飯を食べると幸せを感じます。」

「本当にそうですね。」

「ご飯もおいしいし、この肉には料理人の魂がこもっていると考えます。」

「まさにそうですね。」

嗚呼、旨かった。

……うーん、もう一品いくか。

料理人が見えた。

聞いてみよう。

「すみません。」

「はい。」

「あの、このミルクケーキは卵から作るんですか？」

「ええ、半世紀程前から卵を使って作っております。」

「じゃあ、それをください。」

「では私もミルクセーキを。」

「かしこまりました。」

彼女も同じ品を頼んだ。

ほう、やるじゃないか。

嗜好が意外と似通っているのかな？

シエーカーを振る料理人。

味があるなあ。

すつとテーブルに置かれる古典的飲料。

では坂崎出羽守。

うん、これはおいしい。

甘い、懐かしい、おいしい！

さて、食べ終わったし会計に向かおう。

赤毛の美人さんに会釈してすれ違おうとした時、彼女は私に囁いてきた。

「公安はあなたたち提督に期待しています。」

「え？」

「艦娘に気をつけてください。彼女たちは人間じゃありませんから。」

「みんな、いい子たちですよ。」

「必要な存在というものは、常に国家が首輪を付けて支配しているものです。」

「みんな、実によくやってくれています。そのことは提督として保証します。」

「艦娘が人間の味方であるうちは見逃します。だから、頑張ってくださいね。」

「……わかりました。」

店を出ると、先ほどよりもずっと寒くなってきたような気がする。

……気のせいだ。

そうに違いない。

さ、帰ろうか。

大切な娘たちのいる鎮守府へ。

CCCXLV : 雪はそんなに早く溶けない

冬のとある時期。

吹雪激しい時期。

呉、舞鶴、佐世保の大手鎮守府から冬季攻勢のために北上してきた各連合艦隊は、ここの函館鎮守府で補給を済ませた後順次出撃していった。

そして雪が酷くなくなってきた今、帰投してきた彼女たちの修復・修理・食事・その他に振り回されている。

雪はまだ時折降ってきていた。

大和や武蔵を始めとする主要演技者陣が作戦より帰投してから、ドラマの最終回の収録が始まった。

稀少な艦娘を出せるだけ出すという監督の意向のもと、数多の艦娘が津軽海峡や周辺

機器海域で模擬戦闘を繰り広げてゆく。

敵旗艦役の戦艦棲姫の暴れっぷりは実に激しく、大和や武蔵を含む連合艦隊をたつた一名で引き受け鬼神の如くに激闘してゆく姿は非常に印象的だった。

深海棲艦仕様の艦娘たちも役に没頭し、特に翔鶴及び加賀教官の演ずるヲ級と瑞鶴及び赤城との戦いは手に汗握る展開であった。

厨房。

人間では李さんを含む歴戦の料理人たち、艦娘では鳳翔間宮を筆頭とする腕っこきの料理の名手たちが日々奮闘する場所。

函館に属する駆逐艦は全員配膳や皿洗いや下ごしらえや調理で目まぐるしく動いており、料理上手を自認する艦娘は皆なにかしらおかず作りに邁進（まいしん）している。私は昨晩漬けた浅漬けの様子を見て、これを切り分けて小鉢に入れ配膳するよう水雷戦隊に指示した。

野菜炒めをまだまだ作らねばならない。

それが終わったら、明日のおやつの時間向けにかんたん甘味の準備だ。

一旦厨房を出て、複数名の大淀が持ってきた書類に次々署名する。

一見同じように見える彼女たちだが細かい差異は多く、それぞれカチューシャや眼鏡などで違いを出しているようだ。

中でもうちの大淀には一番気迫を感じるし、最も安心感がある。

まるで、騎士の王が仕えてくれていているみたいに。

通称『大淀艦隊』を率いているのは彼女だしな。

調理応援の艦娘は、明日には函館にやって来る。

それまで戦線の維持につとめなければ。

ニンゲンも、ニンゲン以外も旨いモノには目が無い。

味方だろうが元敵だろうが宇宙人だろうが悪魔だろうが、そんなことは関係ない。

やはり、愛だな。

それを先日皆の前で言ったら、何故かおもいつきり笑われた。

ひ、酷い。

大本営及び他所の鎮守府の間宮や鳳翔や元艦娘などが来てくれたため、私は執務室に戻ることが出来るようになった。

やれやれ。

手伝いに来てくれた大淀だが、それぞれに錬度の違いがあり、それはとても興味深い。

慣れない他所の大淀を見ていたら、うちの大淀に注意された。解せぬ。

艦娘は皆数字に強いし、秘書艦も含めて多数の艦娘がここ執務室に詰めている。

……処理しなければならぬ書類が多過ぎないか？

本日の秘書艦たる戦艦棲姫から渡された書類に目を通しながら、なんともうんざりした気持ちになった。

欧風異世界で、とっても可愛いスライムとかめしい魔狼と料理上手な男とがおいしい食事を堪能するアニメーション番組。

これが最近の夜の大きな楽しみだ。

一人でひっそり視聴するつもりが、何故か駆逐艦たちに包まれながら見る羽目に陥った。

男の調理場面に思わずうなる。

「司令官はああいう風に出来ますか？」

「無理。」

問いに即答する。

あれ、男にはかなり技術があるぞ。
私ではとてもあんな風に作れない。

料理酒を使っている場合にやや疑問はあるものの、包丁さばきは実に見事だ。
みんなでおいしそうと言いつつ見終えた。

今日も今日とて、書類仕事と厨房での調理の二刀流ナリ。
本日の昼食は要望多数に基づき、唐揚げ定食と相成った。

豚カツは調達の面で断念。
入荷したら、足柄に頑張ってもらおう。

明日には、最後まで戦線に踏みとどまっていた横須賀の艦隊が函館に入港する。
あつちに直帰するんじゃないんかいと思っただが、戦艦級艦娘たちを含む全艦娘の
強い要望によってここ函館へ一旦やって来ることが決定したそうな。

けつてーい！ てか。

よーし、ならばこの旨いもんをたんと馳走してやろうではないか。

浅漬はたんまり作ったし、牛乳寒天もたつぷり作った。

私の料理を食べたいと思う艦娘が多いことはまさに誉（ほま）れだけれど、そんなに

嬉しいものかね？

執務室で書類作業をしていると艦娘たちの嘆願が直接来るし、それなりに需要があるのだろう。

たぶん。

さ、風呂に入つて早く寝よう。

乱入されないように気をつけなくつちや。

今夜の添い寝は誰だったかな？

倒れないよう、おかしくならないよう、大本営からも厳命されている。

大げさ過ぎんかねえ。

夜。

雪がちらついている。

まだ寒さの底が残っているようだ。

それでも、鎮守府で雪かきする必要性がだいぶ減ってきた。

もうちよつとで雪も解けるだろう。

嗚呼。

深海棲艦との戦いが、こんな風に少しでも早く雪解けになるといいなあ。
雪はそんなに早く溶けないけれど。

さてと、今夜は『ブルース・ブラザーズ』を観ようかな。

CCCXVI：虚数駆逐艦内界く紙の月に想いを

気がつくと、何故だか未来都市っぽいところにいる。

●塚治虫っぽいとか、●ノ森章太郎っぽいとか。

一体、いつの間にかここへ連れてこられたのだろうか。

もしかして……夢？

夢にしては現実感が強い。

謎だ。

携帯端末は使えない。

装備は鎖分銅と棒手裏剣四本に耐刃チョッキと耐刃手袋か。

拳銃が無いのはちよつと痛い。

遠距離攻撃手段が棒手裏剣だけはちよつとなあ。

当てられないにしても牽制くらいにはなるのに。

その辺に小石でも転がっているかと思っただが、そんなものはどこにも見当たらない。

キレイな街だ。

駆逐艦たちほど使える訳でもないが、鎖分銅があれば大抵のことはなんとかなるか？
ん？

ふと右隣を見ると、武装した小柄な仮面の娘がいる。

セーラー服美少女戦士……じゃなくて、どこか見覚えのある子だ。

確か、第六……。

と。

彼女が口を開いた。

「タケミカツチです。司令官……いえ、マスター、よろしくお願いします。」

仮面を着けた駆逐艦ほい娘が話しかけてきた。

マスター？

マスターとはなんだ？

提督の別称なのかな？

「マスターとはなんですか、電ちゃん？」

「電ちゃんではないのです！ タケミカツチはイナツマの英霊です！」

「英霊？」

「そうなのです！」

なんなんだ、英霊とは。

ここはなにもかも謎だらけだな。

「ちなみにマスターは特異点です。」

「●ーガスの主人公みたいなの？」

「ええと、それはよくわからないです。」

「ここはどこなの？」

「紙の月なのです。」

紙の月……なんだそれは？

空が白い線で碁盤の目のように区切られているのは、ここが紙の月だからか？

もうちんぷんかんぷんだ。

「紙の月？」

「ええ、安定したセカイにして、実数の存在と虚数の存在とが共存出来る素晴らしき場所なのです。」

「概念的なの？」

「ここではこれが『現実』です。」

「はあ。」

「そしてここは現在、提督戦争が行われる場所。」

「はあ？」

「……………よくわからないな。」

とにかく、周囲を偵察してみよう。

そのおよそ一時間後、我々は複数の不定形な魔物に襲われた。

その姿、まさにクリーチャーだ。

名状しがたきモノが我々を襲う。

「はわわわ……………びっくりしたのです。」

パンチやキックで敵対者に攻撃しつつ、駆逐艦娘らしき存在はそう言った。

かなり余裕があるなあ。

彼女は私に向かって言った。

「さあ、令呪を使って命じるのです。」

「令呪？」

「右手の甲にある模様が令呪なのです。それに対して強く念じればいいのです。」

ささやき、いのり、えいしよう、ねんじろ、ってことか？

違う？

ぼやぼやしている内に、戦闘は終わってしまった。

「なるべくなら、戦いたくはないですね。」

とどめをさされた不定形の魔物が次々に消滅してゆく。

戦いたくはない、か。

その割に、彼女は生き生きしていたように見えたけど。

まあ、突つ込まない方がいいだろう。

しかしこの駆逐艦、戦闘力が高いな。

じつと見ていたら、タケミカツチと自称する娘が困惑した顔で告げてくる。

「司……マスター、その……タケミカツチと誰かとを勘違いされていますか？」

もしかして……ここは仮想現実的なセカイ……或いはなにかその虚構的な……虚構船団とは違うが……概念的に保たれるセカイなのか？

違うことばかり考えているとブレてしまう？

……まさかな。

どうやればここから脱出出来るのか？

それを探っているうち、いつの間にか現れた、褐色の巨人を伴った小さな白い娘がこ

ちららに向かって叫ぶ。

「テイトク置いてけー！」

「司令官さんは渡さないのです！」

「なにおー、よーし、やっちゃえ、バーサーカー！」

「グアアツ！」

「えっ、なにこの巨人？」

「あのバーサーカーは、直接的物理攻撃において最強格の英霊なのです！」

「こんなのが敵対者だなんて、勝てんわー！」

「いたしかたありません。タケミカツチの本気を見るのです！ とおっ！ スーパーイ

ナツマキーツク！」

飛び上がった電が、鋭い蹴りを与える体勢で回転しながら英霊に突っ込んでいった。

まさに必殺技という感じだ。

派手な電撃及び爆発音と共に、屈強な存在のバーサーカーが倒れてゆく。

なんとまあ。

「倒した敵対者も、出来れば助けたかったです。……まあ、無理なものは無理ですが。

……あれ？」

むくりと起き上がるバーサーカー。

嘘やん。

あの強烈な一撃を喰らって普通に立ち上がれるだと？

「ははは、バーサーカーがその程度の攻撃で死ぬ訳無いでしょ。」

「即時蘇生系？ 残機的に命が複数ある系？」

「さーてね。では、そちらの英霊は死ぬがいい！ 殺れ、バーサーカー！」

「逃げるが勝ち！」

何故かいつの間にか手に持っていたスモークグレネードのピンを抜いて相手に叩きつけ、駆逐艦の手を引いてすたこらさっさと逃げ出した。

三十六計逃げるに如（し）かず！

「仕方がないのです。これは戦略的撤退なのです。」

「黙って逃げる！」

走っている内、前方に仮面を着けた娘が現れた。

隣の娘と同系統のセーラー服を着ている。

なんだか既視感ありありだ。

「じゃーん！ アカツキ参上！ 助けに来たわよ、司令官！ イナツマ！」

「アカツキちゃん、違うのです。アカツキちゃんはアカツキの英霊たるエオスなのです。」

それにタケミカツチはイナヅマじゃありません。イナヅマの英霊なのです！」

「し、知っていたわよ、そのくらいい！ アカツキの英霊、エオス！ 義により、あなたたちに助力しましょう。ちゃんと、一人前のレイとして扱ってよね。」

えーと。

なんとなく混沌が拡がってゆくような感じさえしてくる。

もうぐだぐだだ。

ん？

撒いた筈のバーサーカーが、白い娘と共に接近してきた。

ばりはやか！

「いくわよ！ いいわね！」

「わかっているのですよ！」

駆逐艦娘の片方が飛び上がり、片方は地を駆ける。

そして放たれるは各々の必殺技。

「イナヅマキーツク！」

「アカツキパーンチ！」

二名の合体攻撃がバーサーカーに炸裂する。

「ガギャギャギャア！」

よし、今のうちに逃げるぞ。
スタコラサツサ！

逃亡の途中、タケミカツチに話しかけられる。

「提督戦争に勝ちたいけど敵対者の命は助けたいって、おかしいことですか？」

「そうだなあ……ま、根切りにすることが当たり前な考え方よりはずつといいと思いますよ。」

うーん、難しい話題だなあ。

提督戦争での勝利条件がよくわからないし、彼女たちは教えてもくれない。

もしかして、やはりこれは夢なのだろうか？

逃げて逃げて逃げて逃げて。

どこまで逃げればいいのか。

今は兎に角逃げてゆくのみ。

うわ、もう追いつかれたか。

バーサーカーが迫ってくる。

かなりピンチって感じだな。

ん？

突然体の奥から、なにかよくわからない力がわいてくるように思えてきた。

「なんとなく、今だと英霊召喚出来る気がします。」

「では、やってみるといいのです！」

「すぐにやってみてよ、マスター！」

「されば、連環のコトワリに応じてこたえよ！ 天秤の守り手よ、ここに来たれ！ 英霊

召喚！」

青いドレスに胸甲やごつつい籠手とかをつけた金髪碧眼の娘が出現した。

どことなくなんとなく大淀に似ていなくもない、勇猛果敢な雰囲気娘。

「エクスカリバー！」

カッと目を見開いた彼女はそう叫ぶと、バーサーカーに向かっていきなり剣を振り下ろした。

「イナヅマキーツク！」

「アカツキパーンチ！」

二名の駆逐艦的英霊による攻撃も続いて繰り出される。

「ガアアアアアッ！」

「まだ倒れない？」

「あとちよつとなのに！」

「では援軍を呼ぶのです！」

「援軍？」

タケミカツチは、どこからともなく取り出した笛を吹く。

ピョロロロロ。

すると、上空から二名の小さな女の子たちが降ってきた。

「親方、女の子たちがっ！」

「あれが援軍なのですっ！」

「ヒビキの英霊エコーだよ。」

「カミナリの英霊ツールよ。」

「我らがいれば百人力！」

もうお腹いっぱいなのであります。

ええいもう、流れに任せてしまえ！

「よし！ みんな、今こそ合体攻撃だ！」

「」「」「イェス、マスタァー！」「」「」

「スーパーイナヅマキークク！」

「スペシャルアカツキパーンチ！」

「オーロラサンダーアタック！」

「トールハンマー！」

満を持して、剣の英霊がその秘技を振るう。

「滅せよ、バーサーカー！　今！　必殺の！　エクスカリバー！」

「ウガガガガッ！」

「もうっ！　おぼえていなさい！　取り敢えず、戦略的撤退よ！」

小さな白い娘は逃げてゆく。

そうして、戦いは終わった。

なんとなく、もうじき元のセカイに戻れそうな気がする。

そうしたら、彼女たちとも会えなくなってしまうのだろうか。

それもまた運命。

平和な雰囲気のある街中にある広場で娘たちと共に休憩する。

「こういうなにもない時も、平和な感じがしてとっても好きなのです。」

「そうだねえ。元のセカイに帰ったら、ゲームで遊ぶとしますよ。」
「どんなゲームで遊ぶのです?」

『たーぼのなつけいば』という傑作ゲームだね。ちよつと昔のものですが、よく出来ているんですよ。」

その時、携帯端末の着信音が周囲に流れ始めた。

王者基多拉（キングギドラ）の鳴き声のような。

或いは、名古屋市地下鉄鶴舞線の旧型車輛の発車ベルのような。

CCCXLVII：ちよつと熱のあつた日

うちの艦娘たちに人気が高い、現在放映中のアニメーション作品『装甲のリヒトホーフェン』。

先日放映された『七色のアウロラ』編はそれぞれの登場人物たちが敵味方入り交じる死闘を繰り広げていて、実に見応えがあつた。

対ライアー戦での敵味方双方一步も引かぬ見事な魔法戦。

対リーネア戦での、可愛い悪魔たるリーネアが放つ素晴らしき技の数々。

アウロラ様とリヒトホーフェンとが丁々発止の駆け引きを行った心理戦。

いずれもなかなかよかつた。

原作の『行間』を膨らませる技法が、実に素敵な仕上がりとなつて視聴者に届く。

よきかな、よきかな。

リヒトホーフェンの旅の仲間たちが踊る場面も大変よかつた。

あの場面はすべて手描きだったという。

パーフェクトだ、ウォルター。

朝起きたら熱が三八度四分あった。

少し気だるい。

まあ、なんとかなるだろう。

三八度六分や七分くらいまでなら、それなりに動ける。

なんとか提督としての業務を果たす。

それだけのことだ。

なに、以前所属していた会社の仕事よりも格段に楽だ。

夜討ち朝駆けが日常的常態化していた業務に比べれば、なんてことはない。

それにつけても独りの時間が欲しい。

合間を見てガス抜きしないといかん。

同様の状況にある他の提督も非常に困っていると聞く。

提督が人氣者の場合、鎮守府や基地などが修羅場になりやすいらしくて時折刃傷沙汰になつていると聞く。

提督が物理的に減つてしまうと、戦力的にも後始末的にも困る。

先日も横須賀鎮守府でしつちやかめつちやかな騒動があつたらしい。

どうにかこうにか揉み消したそうだが。

敢えて艦娘に関心を持たないようにしている同僚もいるが、そうした鎮守府の艦娘たちから相談を受けることも少なくない。

痛し痒（かゆ）しだ。

無邪気な駆逐艦の攻勢に敢えなく撃沈轟沈する提督がけっこういるそうなので、実例集を作つたらいいんじゃないのかなとマスターオータムクラウド辺りに提案したが、新妻力が強すぎて現場に近寄れませんと涙ながらに言われてしまった。

なんだよ、新妻力つて。

冬の同人誌即売会向けの原稿を必死に描いている場合じゃないぞ。

まったく、もう。

海防艦に傾倒している提督もいるらしい。

事案を発生させないで欲しいと切に願う。

モテる提督はイケメンと限らないのが悩ましい。

イケメンフツメンブサメンは特に関係無いと、大抵の艦娘がきつぱり言っている。

故に、モテた経験の無い提督がモテた時に悲劇が起こりやすいと言えなくもない。

やれやれである。

添い寝していた島風と吹雪を起こさないようにそつと起きようとすも、胴回りがつしり掴まれているので身動きが取れない。

今のうちに熱を測っておこう。

体温計を腋に挟んだ。

少しほわほわした脳味噌のまま、兩名の頭を撫でる。

うちの最強系駆逐艦たちが、むにゅーとした顔で寝ぼけたまま抱きついてきた。

これこれ島風さんや、君は元おっさんだろうに。

だんだん女の子化してきているような気がする。

どれどれ、体温はどうだ？

三八度七分か。

まだちよつと熱があるな。

体温計をそつと元に戻す。

ほわほわした頭のまま着替えを手伝ってもらい、下着を彼女たちに渡した。

下着を渡さないと皆機嫌が悪くなるのだ。

洗い場に持っていくくらい出来るのにな。

曙と霞の組み合わせで添い寝だった時に下着を自分自身で洗う旨伝えたら、彼女たちに思いきり怒られた。

それくらいさせろ、と。

しかし、返つてくる下着がいつも新品同様か新品なのは変だと思う。

そう思つて大淀や鳳翔や間宮などにも言つてみたが、話をはぐらかされてしまった。

カッターシャツを洗濯に出してもそうなるし、ある提督にその話を振つたら何故かめちやくちやうらやましがられた。

よくわからない。

頭がぼわわとしていたので兩名から酷く心配されたのだけれども、大丈夫だと頭を撫でておく。

そうそう、君たちは今すぐ服を着なさい。

朝礼をほわほわした頭でなんとか切り抜けたものの、食事はちよつこし難しい。

食欲が明らかに減退している。

大湊（おおみなと）からいたいたいた林檎を執務室で食べるとするか。

朝四分の一、昼半分、夜四分の一。

これでいいのだ。

講堂を出てほんの少しぼんやりしていたら、いつの間にか大淀が至近距離で私を見つめていた。

目がこわい。

まるで歴戦の王を相手にしているようだ。

何故か彼女の背後に、金髪碧眼の剣士がいるような幻覚を見た。

疲れているのかな？

「提督、お熱があるのですか？」

「微熱が少々。」

「何度ですか？」

「三八度七分。」

「第三級緊急事態発令！」

大淀の突然の発言に、がやがやしていた周囲の艦娘たちが即座に私の周りで輪形陣を築いた。

なんで大和と武蔵がここにいるんだろう。

休暇か？

戦艦級艦娘六名を中心とする豪勢な陣形だった。

ネヴァダや戦艦棲姫やとある航空戦艦も凜とした顔つきで私の周りを取り囲んでいる。

この面々で演習したら資源が激減だ。

実戦だったら、真っ青になると思う。

そんなことをついつい考えてしまう。

長門教官がキリッとした顔をして言った。

「提督！ この長門が朝晩問わず看病してやる！ 安心して休むがいい！」

「ここは譲れません。」

そこに加賀教官が割り込んできた。

「提督は空母系艦娘による二四時間三交替制で看病します。勿論索敵も怠りませぬし、きめ細やかな対応も怠りませぬ。」

「巡洋艦を忘れてもらっては困ります。」

普段冷静沈着な妙高先生まで参戦してきた。

「室内に常時二名配置し、無論、部屋の外にも充分な数の巡洋艦を配置します。索敵の航空機は常に飛ばしますし、雷撃戦も夜戦も十二分に対応可能です。対応の多彩さではひけを取りません。」

「数の多さなら、駆逐艦よ！ 多様な戦場に対して千変万化に対応出来る幅の広さでは

他の艦種にひけを取らないし、人海戦術ならば駆逐艦の本領を示すことが容易に可能なんだから。」

霞が参戦してきて、収拾がつかなくなる。

メリケン艦やら深海勢やらが議論に加わってはちやめちやだ。

わいわいがやがやする艦娘たち。

陣は既に崩壊している。

掴み合いをしちやあいけないじゃないか。

止めたくとも体がまともに動かない。

ぼおつと彼女たちを眺めていたら、ひよいと抱き上げられた。

おや、誰かな？

「ほんま、キミはモテモテやね。」

龍驤か。

「さ、部屋まで行こか。」

軽やかにお姫様抱っこされ、ドナドナされる。

途中で雲龍や早霜らも加わり、担ぎ手を順繰りに交代しつつわっしょいわっしょいされながら私室まで送られた。

外は吹雪いている。

雪が徐々に積もり始めていた。

明日からは雪かきをしないと。

そう言つたら、周囲の艦娘たちにむちやくちや怒られた。

嗚呼、もどかしい。

結局、『厳選』された艦娘二名ずつに私を看病させることで落ち着いたらしい。

何故か艦娘が交代する度に、着替えをさせられた。

そんな必要があるのかと問い質したら、勿論です当たり前ですと切り返される。

普段世話になっているし、大目に見るか。

まあ、明日くらいには熱も下がるだろう。

座薬を誰が挿入するかでかなり揉めたらしいけれど、それくらい自分でやるわい。

子供扱いはやめてくれたまえ。

加賀教官の順番の時、何故だか瑞鶴も一緒だった。

土産だという鳩サブレを無表情に我が口元へ差し出す教官と、それをにやにや顔で

見る幸運艦。

気まずい。

なんたるちあ、サントルチア。
早く治らねば、とかたく心に誓った。